@　クソゲエリミックス！　@

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
@　クソゲヱリミックス！　@

【Ｎコード】
Ｎ３３４９Ｉ

【作者名】
キラワケ

【あらすじ】
――さあ主人公、思うままにやり直せ――　主人公は至って普通で、もし特徴があるとすればオタク趣味をもつぐらいの、現代にありふれた平凡系主人公に一石を投じることなく凡。そんな主人公が買ったとある一つのギャルゲーから始まるおかしな日常「開始早々ヒロイン死亡」「ヒロインによる主人公殺人未遂」「生徒会拉致事件」「クラスメイトは義妹」「癒し系神との遭遇」「出会いはセクハラ」ｅｔｃ……そんな事が巻き起りながらも、時の流れに身を任せてヒロインを攻略していく巻き込まれ型ラブコメ！？　だけど起

きる事象はファンタジー、そんな狂い始めたハイブリッドなセカイのモノガタリ。　――そうこの物語は、誰かの掌の上なんだ――

第００１話　１－１　プロローグのプロローグ（前書き）

１２月２７日リニューアル！
０４月０２日序盤リニューアル～

※以降の記事に存在する「ＧＡＹＭ版クソゲヱ」のリンクは現在全て切れています。ご注意ください。

１１０９１０
プロローグのプロローグから進む日常、始まりの時。までの「1から7のダイジェスト。」第１００部に追加しました。
√1に飛びたい方や、どんな話だったか思いだしたい時にオススメですー

第００１話　１－１　プロローグのプロローグ

それはギャルゲーの主人公になったかのような世界で、それでも今までの”俺”の世界でもある。
合わさる世界は時にカオスで、時にファンタジーで、時にラブコメディ。
何度も何度も正解を見つけるまで繰り返され、様々な要素の混ざり合う――それはきっとこんなモノガタリ。

＊　＊

とあるゲームを俺は買った。

「八〇〇円だから買ってはみたものの」

確実にスペックから見てクソゲーだった。　絵が良くても買わないでおけばよかったと心から思うね。
ほぼ新品の中古品のＰＣゲームとしては破格とはいえ、八〇〇円は貧乏な学生にとって後々影響が出てくるかもしれない

ということでそのゲームを簡単に紹介。
パソコンゲーム（全年齢対象）で一年ほど前に出たものだ。

『タイトル　Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～』

この見て驚きの地雷臭プンプンなタイトル。
知る人は知っているかなり危ういタイトルが混じっていたりとヒ

ヤヒヤ。とりあえずは言葉の組み合わせ方にセンスの欠片がないぞ。

『ジャンル　恋愛・泣き・アクション・ファンタジー・ＲＰＧ・パズル』

制作者浮気し過ぎだろう、で何がしたいんだ。明らかにジャンルを詰め込みまくっている。

その中でかなり浮いてるのがパズルで――恋愛やらアクションのどこにパズルの要素があるのか、疑問でならない。

更にソフト重いだろ、これ！　古いノートパソコンなら即死亡レベルじゃねえか！

こんなクソゲーに数ギガバイトも使われるとなると……一通りやったら速攻消そう。とりあえずパソコンにディスクを入れてっと。

「！？」

思わず驚いてしまった。

かなりの速さでダイアログが何重にも表示され画面を埋め尽くして行くのだ。

一言で言おう。

「バグりやがった……」

ダイアログには「環境のスキャン」という謎の言葉が無数のダイアログに表示された。

「なんだよ……」

そうするとダイアログの言葉が一斉に書き換えられていった。

『スキャンが完了しました、このまま作業を続行する場合”ＯＫ”をクリックしてください』

隣にある「キャンセル」を押しても反応しないという……というか更にダイアログが１０個ほど増えたのだが。

喧嘩売ってるだろ、このゲーム。

結局ＯＫ押すしか選択肢ないじゃん。しかしまぁこのままダイアログばっかだと色々嫌だなぁ……仕方ない押すか。

「ほいっと」

ＯＫを押した途端にダイアログが消えてゆく。

「おお」

次第にかつてのデスクトップの壁紙の色が見え始め、最後の一つを残して消えた。

しかしその最後のダイアログは今までとは全く別の言葉が表示されていたのだった。

『世界浸透化の準備が整いました、よろしければ”スタート”をクリックしてください』

「前振りにしては長すぎだろ」

世界浸透化というのは何かこのゲームのキーワードだろう。

流石クソゲー。ゲームスタートまでのその瞬間までヒヤヒヤさせやがって！

こうなったら徹底的にゲーム攻略してやる！

俺は迷わず”スタート”をマウスのカーソルでクリックした。その時だ。

「うわっ」

パソコンから突然発せられた白い光、それに俺含む部屋全体が包まれていた。

眩しすぎて辺りの状況を把握できない、しばらくすると光は弱くなっていくが――

俺に見える風景はかつてと違っていた。

「え？」

自分の部屋がいつの間にか消えていた。

さっきまであった家具も時計もテレビゲーム機も、光を発したマイパソコンも消えた。

今はどこが壁でどこが天井か、どこからが床ががわからない永延と純白に染められた空間が支配している。

「どうなってんだ……」

そう呟くと。　それに答えるように。

「世界の浸透化が完了、これより具現化します」

白い世界の壁も何もない場所に表示された文字。
しばらくして文字が左から順に消えていき最後の文字が消えたその瞬間――

また眩しい光が俺に襲いかかり、俺は思わず眼を瞑ってしまった。
しばらくして、視界の外から光が弱まっているのが分かった。そして恐る恐るながら目をゆっくりと開いてみると……

「？」

そこには見慣れた景色が、部屋があった。家具もテレビゲーム機もパソコンも平然と置いてある。

「今のはなんだったんだ？」

呟く、なんだ何も変わって無いじゃんと。現時点では、そう思っていたのだが……

「ユウジー遅刻するよー」

「え」

聞いたことのない女子の声が、俺の名前を呼んでいたのだ。

第００１話　１－１　プロローグのプロローグ（後書き）

１０月１８日現在８０回程更新分は出来上がっているので、じわじわアップロードして行きます。
パロディ及び自虐・内輪ネタが含まれますのでご注意下さい。

第００２話　１－２　プロローグのプロローグ（前書き）

８１９更新＜修正済み３＞

第００２話　１―２　プロローグのプロローグ

「ユウジー」

まて、落ち着くんだ俺！　俺の交友関係にこんな声の持ち主はいない。

いや、もしかしたらこの人生のどこかに伏線が！？　検索開始――お、遅いっ！　なんで未だにＡ○ＳＬなんだよ俺の脳内回路、はやくに光に切り替えてくれよ。

結果――該当なし。もしかして”ウジ”の間違いではないですか？　やかましいっ！　その間違われ方は素晴らしく傷つくわ！

で……ないよな。

地味に過ごし地味に生き抜くことにプロ並みの自信を持つ俺が、こんな女子から声をかけられるわけが――

いや、まてよ。俺はそこでふと考える。

「……というかどんな人なんだ？」

声はかわいい、まるで透き通るウンタラウンタラ。歌なんて歌わせたらアニソン紅白出場間違いなしの美声。

しかし……だ。実際に中の人はというと果てしなく美少女からは遠かる容姿のパターンが多い（※過去知り得た声優の検索結果より）

ようするに声と容姿は、天は二物を与えないと言わんばかりに一致しない可能性が高いからな。

「……とりあえず百聞は一見にしかず、見てみるか」

窓を覆うカーテンを引き、窓ガラスを介して下の方を覗く――ササー……俺は即効でカーテンをきっちりと閉じた。

なぜかって？

その女子がかわいいからさっ！

いやあれは超がつく美少女だ（参考、過去十六年間の脳内メモリー）

黒髪ポニーテールとか反則だろう！　媚びすぎだろう（？）　ふうむ……これはドストライクだ。

でも今は朝、さらに既に玄関で待たせているので余韻に浸っている余裕はない、

急いで行けなければ――

「（いやまて落ち着け、よおく思い出せ）」

あの女子が友人に居た記憶はない、まして声さえ聞いたことのない――

フラグを立てた覚えはもっとない。

ならなぜ、この玄関前からモーニングコールが？

「（……ん？）」

そういやあの顔に……似た顔を……最近に見た気がするんだよな。

それもごく最近だ。これが思い出させなければ老化ボケ確定の判子が押されること確実……思い出せ、思い出すんだ、下之ユウジこと俺！

これは重要な事だ。本当に見覚えがあるのなら――

「まあいいや」

そんなことどうでもいいっす。さっきまでと言ってること考えて

ることが違うだろと言われたら申し開きが出来ないが、なんにせよ俺は待たせてしまっているのだ！

あと、こんなカワイコと登校出来るなら構わないぜ！　ああ、夢なら長く続いておくれよ。

パジャマ姿の俺はとりあえず制服に着替えることにした。

制服である学ラン一式はベッド側のクローゼットにあるためパソコン机から少し歩く。

その時のこと――

「痛っ」

カツ、と何か固いものに足がぶつかり足先にちょっとした痛みが走る。そしてぶつかったものはといえば、物は地面を滑っていったような気がする。

それで痛みのある足元を見下してみれば――なんともゴチャゴチャと絵が描かれているソフトケースがそこにはあった。

「……基本片づけないからな、俺」

頭をポリポリとかきながら、全く誇れないことをほざきながらケースを手に取る。

しかしそのケースのパッケージを見て頭に電流が走ったかのような衝撃が走る。

「っ！」

そのパッケージに描かれていたのは、透き通る大きな目に、ゴム

でまとめた黒髪のポニーテール。
いかにもなどういう構造と、機能性はあるんだろうかと疑問が浮き出るようなギャルゲー的な制服を着ている、その絵の中の女の子は――

窓の外に居た、俺の名前を呼ぶ女子と瓜二つの容姿だったのだ。

「……え？」

第００３話　１－３　プロローグのプロローグ（前書き）

１１１００６

第００３話　１－３　プロローグのプロローグ

「い」

一体、何が起こったというんだ。

ゲームのパッケージに描かれたキャラクターと同じ容姿の女の子が俺の部屋の窓から外には居る。

これなんてギャルゲ？

……まさにこれは男の夢の実現だが、どうしてこうなったんだ？

もしやこれは夢の延長線上なのか？　それとも愛に飢えた俺が見た幻か……そもそも今までのが本当に現実と言えるのか、断言出来るのか、否出来ない。

もしかしたら俺は空想世界の住民で、今まではあまりに平凡であまりに並みの生活を送っていたのも自分がゲームやマンガで言う主人公ではなく友人Ａ的立ち位置で――

「まあ……いいか」

短絡的な俺は（本来自分では言わない）

そんな細かいことは放り投げ、素早く制服を着、焼けていない食パンを口にくわえながら玄関へと辿りついて靴を履き替えると玄関戸を勢いよく開けた。

「あー、遅いよユウジー」

そこには天使がいた。
そんな彼女は一瞬花開くかのようなぱぁっとした笑顔を見せるが、すぐにムスっとしてそう言った。

「ユウジ、何でユキの顔じろじろ見てるの？　何か付いてる？」

顔をぺたぺたと不安げに触り始める彼女。
ユキというのか……いい名前だ。
全女子高生が羨むような白い肌と、身長も程良く俺の顔分ほど小さく、それでいて出るところが出て引き締まるところは引きしまる俺の眼から見れるスタイルは抜群で、大きくくりっとした茶色の瞳のある小さな顔に、長い黒髪をキュッと束ねたポニーテールが表情豊かで活発な彼女にはよく似合う。
でもって、首を傾げる描写まで花がある……正直たまらんね、うえぃ！

「いや、なんでもない（棒）」

し、しまったかなりの棒演技だ！　イカンイカン、イメージはそうだな……主人公ボイス！　よし主人公っぽく行くぞ。

「待たせて悪かったなユキ、いやぁ目覚ましがストライキしててさ」
「単にセットし忘れてただけだよね、二つなかったっけ？」
「さらに一つは電池切れだった」
「もー、ちゃんと確認しといてよ？」
「へぇーい」

す、スバラシイエークセレントォ！　この楽しい女子との会話！
本当今の今まで生きててよかったわぁ。

「あっこんな時間」

ユキは取り出した携帯に表示された時計機能を確認して言う。

「急ごうっユウジ」

「あ、ああ」

女子、と、かける、通学路。

前には、フリフリ揺れる、ポニーテール。

人生、で、一番、幸せな時、かもしれない。

しかし、そんな時間は長くは続かなかったのじゃ。

「ユキっ早いから」

「ユウジが遅いんだよー♪」

こちらを向いてべぇーと指を目もとに宛てて言う彼女。

まさに「まって～、捕まえてごらんなさ～い」という構図……だっ！？

「！　ユキ前っ前！」

「え」

鈍く耳をつんざく様なタイヤのゴムがアスファルトで滑って削れ擦れる音。

けたたましく鳴り続けるクラクションと聞き辛いブレーキ音。

「……」

何が今起こったのか、理解するのには数十秒かかったと思う。
それはあまりにも衝撃で、あまりに突然で、あまりに残酷だった。

「っ！」

余所見をしながら俺に目を向かわせながら走っていたユキは交差点へと差し掛かった。
しかしその同じ交差点へは車が向かっていたのだ。車道側にミラーの設置が無く見通しの悪い場所。

そして次の瞬間。ユキがはねられた。

傍から見ればユキが飛び出して行った、車もそれほど速度は出ていなかった。だがそれはあくまでも法を犯さない制限速度で、きっと時速四、五十キロ出ていたのだろう。
それで人と車が接触したらどうなるか。その車にユキは弾き飛ばされ、その華奢な体は宙を舞う――

かたいざらざらとしたアスファルトの地面へと衝撃とともに叩きつけられたユキの体は大きく歪む。
白いセーラー服が皮肉にも染み出る血の多さ示しアスファルトに着実に流れ出す鮮血。口元からも垂れ溢れる鮮血。

「ユキ！」

俺は思わず名前を呼んでユキへと駆け寄っていた。細い体でなくともその衝撃に耐えることが出来なかったのは当然のことと思う。

「ユウジ……ユキばかだね」

「何も話すなっ！」
「ユウジともっと……話したかった。ごめん……ね」
眼は閉じ、俺の顔に近づけようとした左手は地面へ落ちた。
それがユキの力尽きる瞬間だった。
「ユキっ！　ユキ！」
名前を呼んでも、答えは返らない。
次第に生気の抜けていくユキの体に触れながら俺の意識は堕ちていった――

「！？」
目が覚めるとそこは見慣れた自室で、俺はベッドに寝ていた。
汗をびっしょりとかき、目元には涙と思われるものが線を描いていた。それは悪い夢から起きた直後のような感覚。
「今のは夢……だったのか？」
あまりにもリアルで、とても恐ろしく怖い夢。最高に気分が悪い。
記憶は鮮明に残り、今でも思い出すだけでユキの死に絶えて行く姿や血を溢れさせるユキの姿を思い出すと寒気と吐き気が同時に襲いかかって来る。

「ぅお……」

必死で吐き気をこらえながらベッドの下へと目を落とすと、

『Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ』

そんなタイトルのソフトが落ちていた。

「（嫌な夢……だったな）」

きっとあの幼馴染キャラのユキが出たのも夢の話なのだろう。

少し残念に思う反面、あんな最期を遂げるというなら出てきてほしくない気もする――気分の悪さもあるが、彼女の扱いが残酷すぎる。

「ああ……」

いつまで過ぎ去った夢を思っていても仕方ない。俺はベッドから足を下ろし腰を上げる――

「！！」

窓の外から声が聞こえた。

「ユウジー遅刻するよー」

「！？」

さっきのは夢、じゃないのか！？　でもユキは――

お主よ。その訳を知りたいか？

「え？」

ふいに部屋へと響く声。それは小学生の女の子のような高い声だが、喋り方が少し変だった。

まるでイタズラに老婆のマネをする少女のような――

「誰かいるのか！」

わしじゃ。ほら、すぐ近くにおるじゃろう？

「え」

声の主へと目を向けると、パソコン机の前にその声の持ち主がいる。そして明らかに女子小学生な容姿がそこにいたのだ。

「おはよう、主人公」

喋り方だけがなぜか古めかしい女の子がそこに居た。

第００４話　１－４　プロローグのプロローグ（前書き）

２０１０年１２月２９日
挿絵リンクを試しに貼ってみる、着色が終わっていないけども一応
ユキのイメージ

第００４話　１－４　プロローグのプロローグ

「っ！」

小学生女子の低学年並みの体格を持つ、その子は俺を主人公と呼んだ。

「……いつからここに、お前は居たんだ？」

小学生な容姿の少女に問う。普通なら優しい言葉で接するべきなのだが
なんというか古めかしい喋り方をする時点でかなり怪しかった。
それで警戒の意をこめて接している。

「貴様がそのゲームを起動してからずっといたぞ」

「まぁいつからか、なんて聞いても不法侵入に違いないけどな」

「断じて違うっ！　わしは貴様の妹という設定で入ったのじゃ」

「へぇー妹かぁ……え？　どういうこと？」

「主人公も見たじゃろ、ヒロインの一人が車にはねられるのを」

「！　……なんで、お前がそんなことを知ってんだ？」

「あの時ナレーションしたのはわしだからな」

「は？　なれーしょん？」

……思い出せ。なんか俺とユキの会話以外の何かが混じっていたはずだ。

『しかし、そんな時間は長くは続かなかったのじゃ』

「これか？」

「うむ、なかなか迫真の演技じゃったじゃろう」

「いやナレーションに迫真の演技は必要ないし、実際なかったぞ」

「まぁ必要はないがノリとしてな」

あっさり認め軽く返された。

「話を戻して、お前がナレーションしているということはあの場にお前が居たのか」

「ああ、電柱の陰から実況させてもらった」

「あ、本当に近くにいたんだな……」

いつのまにかナレーションが実況になってることはあえて触れない。

というか陰でぶつぶつ実況してたのか……その容姿でも”将来が心配な小学生”だが、高校生辺りだったら”ただの危ない女”だな。通報されかねない。

「大体は知っているが、どうやら選択を間違えるとヒロインが死ん

でしまうエンドのようじゃ」

「選択とかなかったぞ」

「それはゲームと世界の融合の関係で仕方ないじゃろう」

……なんという酷いミスだ。選択することが出来ないなんてなぁ……ん？

ゲームと世界の融合？

「今、ゲームと世界の融合とか言わなかった？」

「言ったぞ、どうやらゲーム色が強いみたいじゃがな」

「えぇっ！　この世界ってゲームなのか！？」

「今頃その話題が来るかっ！　……いや、正確には違うな。お主が存在する現実世界にお主の起動したゲームのシナリオやキャラクターをスライドさせた形になっておるのじゃ」

「へぇー……」

いや、意味は分からないでもない。

「なぜそんなことに？」

「貴様のせいじゃ主人公！　あのゲームを起動したのがそもそもの始まりだったのじゃ！」

「は？」

「ゲームの起動によってお主の居る世界は書き換えられてしまったのじゃ！」

「書き換え……？」

「そのゲームのヒロインのシナリオがこの世界にスライドされたがために、ヒロインの死ぬルートが現れ、それを攻略しないと未来が存在しない世界になってしまったのじゃ！」

「み、未来が存在しないってのはどういうことだよ！」

「シナリオがバッドエンドで終わってしまう以上ゲームはシナリオの振り出しに戻されてしまう、それはシナリオのスライドされたこの世界にも言えることじゃ！」

「ってことは――」

「シナリオを攻略しなければ永遠にヒロインの死までの数分間を彷徨う未来の存在しない世界となってしまうのじゃ」

！　……そんなことが起っていいのか。俺がただ単にゲームを買って起動させただけで……こんな深刻な――

「……でも選択はねぇんだぞ、どうすりゃいいんだよ」

「考えても分かることじゃが、選択なんてあるわけないじゃろ」

そうして、こいつは続ける。常人なら理解しようがないことを淡

々と。
　俺はこういうミステリー系のラノベやらコミックで耐性とは行かないまでも分かるが、一般人ならパニックだろう。
　しかし、こんな事態が起るなど予測しようがない。それも中古屋で買ったクソゲーを起動させただけなのだから――

「ゲームでは画面があるが、この世界は実際にヒロインと向き合って会話しておる。その時点で選択は継承されないのはわかりきった事実じゃ」

「じゃあ……どうすればいんだよ」

「……とある事情で事細かには言う事は出来んのじゃ。じゃがヒントを言うならば”選択はお主によって作られる”ということじゃ」

「……意味がわからないぞ？　それに何でそこまでお前はこの状況を理解出来てるんだよ」

「わしは貴様の攻略対象である上、何故か一回目のリセット時の記憶も保有している。それに何故かはわからんが今後のわし含めた各ヒロインの攻略情報がわしの頭に入っておるな」

「え、お前ヒロインの一人なの？」

「そのようじゃな、説明書でも読んでおくといい」

　説明書はと……あった。キャラクター紹介ページを開くと、なんとも個性豊かな顔と髪の女の子がそこにいた。
　その中には――

「……」

こいつがいた。桐（きり）というらしい。確かに”主人公の妹、懐っこく無邪気で明るい”と説明書きされているが。

今は古めかしい言葉のせいか”邪気”しか感じないのだが、俺の感覚は間違ってはいないだろう。

そしてこいつを攻略ってなんの冗談だよ……制作者にロリコンでも混じってるのか！？

「あったじゃろ？」

「ああ……まあな」

「どうやらわしは貴様に”惚れてまう”そうだ」

今の告白を俺なりに要約して言うと”わたしはお前を好きになるっ”と似たようなものである。

いや……そんなこと言っていいのかよ、仮にもヒロインの一人だろ。

「貴様、これからの攻略情報を知りたくないか」

「ああ、そりゃ知りたいよ」

「そうか、ならば……わしに接吻をしろ」

「はい？」

接吻。せっぷん、口づけ、キス（ｋｉｓｓ）チュウとも言い、愛情表現のひとつ。
人が自分の親愛の情その他を示すために唇を相手の額や頬、唇などに接触させる行為。

「はぁ？　なんでお前なんぞにキスをしなきゃいけないんだよ！」

「そうすれば色々な過程ぶっ飛ばして、妹ルートに入れるぞ」

「俺には犯罪まっしぐらルートにしかみえねぇな……」

こいつには常識の一つである”近親相姦”という事を知らないのだろうか。
そりゃダメだって、それに立場的に白い目で見られるのは年上かつ兄の俺じゃん。
ムリムリムリ！　キツイとかいうレベルじゃなくて、無理だからソレ。

「ほれ、早く」

「断る」

「唇にな」

「Ｎｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　！」

「つまらない男じゃな……」

「今の行為をエンターテイメント感覚でやろうとしたのか……」

し、思春期の男子高校生をなめるなよ！　お前みたいなロリキャラじゃなかったら少しは喜べたのに！

「まぁ早く行ってこい、貴様は学校じゃ」

「え？　おおっ！？　いけねえぇっ！」

そういえばユキを待たせっぱなしだった！

「い、行ってくる」

「リセットされぬようにな」

「ああ」

俺は思いだしていた。あの桐の言葉を。

『選択は貴様によって作られる』

家の二階にある俺の部屋から下りる階段でそんなことを考えていた。

そうだ、俺はあの時と違うんだ。あの時は、なにも知らずにユキと登校し、ユキは交通事故にあって死んだ。

今なら予防できるはずだ。

『選択は貴様によって作られる』

選択は俺によって作られる……俺が作る……俺が作りだす……！

そういうことか……あいつの言った意味が分かって来たぞ。

「あー、遅いよユウジー」

目の前で死んだはずのユキがここにいる。
それは振り出しに戻されたからなのだが、彼女の死の光景を目の当たりした俺にはかなり複雑な心境だったりする。

「ユウジー何でユキの顔じろじろ見てるのー？」

意識はしてなくても俺はユイをじろじろ見ていたようだ。

「いや、なんでもない。待たせて悪かったなユキ、いやぁ家の目覚ましがストライキしててさ」

ここからはあの時と同じ会話をした。それでも、ユイと話すという楽しさは変わっていない。

「あっこんな時間だ！　急ごうっユウジ」

「あ、ああ」

ここから変えなければならない。

「待てっ」

俺はおもいきりユキの手首を掴み、そしてユキの直ぐ近くに俺は寄った。

「ユウジーっ！　手首なんて掴んでどうしたの？　遅刻しちゃうよ？」

さてどうするか……よし。かなり恥ずかしいことだが、意見を押し通すにはこんな方法ぐらいしか無いと思う。

「わわっ!?　な、なにするの、ユウジっ」

ユキの手に俺の手を重ねるように手をつないだ。

「こういうのもたまにはいいだろ？」

「へっ？　で、でも高校生だよ？　こんなことして――」

少しユキの顔が紅潮していた。

「いいじゃんっ……それとも俺がこんなことして気持ち悪いか？」

この質問は正直汗ダラダラだぜ……断れたらある意味バッドエンドだし、心が折れる。

だが、幼馴染的ポジションで家まで迎いにまで来てくれる。

そこまでで主人公としての親密度を考えてみると……断ってはこないはず。

そして、その返答は。

「ううん！　別にいいの！　いいんだよっ！　うん、じゃあ手繋ご！」

分かっていた答えとはいえなんとも嬉しかった。……でも事前に分かってるて言うのもなんかユキに申し訳ないな。

そしてユキが優しく手を絡めてきた……表現が聞きようによっては卑猥だが気にしないでくれ。これで目的は達成したはずだ。

タクシーが通るタイミングとユキの通るタイミングをずらすという目的が。

後に目の前の交差点をタクシーが通り過ぎて行き、よく車が来ないか確認してからその交差点を超える。

その時……世界は未来を取り戻した。

両方とも照れてか口数の少ない俺とユキの手と手は繋がったまま。

通学路を歩き続け、こうして俺とユキは学校に着くのだった。

「ふふふ……あの女、ユウジ様にあんなに近くで」

女は不敵な笑みを浮かべながら二人の歩く姿を目視する。

「そろそろ行動を起こさないといけませんね……待っててください、ユウジ様っ」

どこからか聞こえる女の声がそう呟いた。

第００５話　１－５　プロローグのプロローグ（前書き）

１０月１０日修正

第００５話　１－５　プロローグのプロローグ

周囲の目線を感じて昇降口では流石に手を離す。
ユキも何故かは分からないが、惜しむよう俺の手から自分の手を離した……のだが。

「！？」

さ、殺気っ！？この明らかに憎しみのこもった視線……複数居るだとっ！
この暑苦しさも感じる視線は女子のものではない……おそらく大半は男子によるものだろう。

「（じと～～～～）」

……いや待て！　その中でも一際深い呪いのようなものをドロドロに込めている奴がこの中に居るっ！？
怒り？　悲しみ？　羨望？　嫉妬？　……全てが闇鍋のごとくぐっちゃぐっちゃに混ぜられた奇妙な視線。

「（誰だ……！）」

振りかえると全くもって意外な人物がそこには居て、ドスの効いた雰囲気を醸し出していた。

「おにぃーちゃん☆」

……あ、あれ？　今の意外な人物の発言で男子のものと思われる殺気が深く強くなった気が。

「さがしたんだよー？」

この猫かぶりっぷりからは想像出来ないがどうみても、見かけは完全に俺の妹になったらしい桐だった。

そんな桐が無垢な笑顔を形作ってそこに立っている。小柄で愛らしいその姿は男にとっての理想の妹を鏡に写したようにも見える。

……たださっきの数々の呪いのような不純なものを込めていなければ良かったと心から思う。それで大方台無しでプラマイゼロどころかマイナス要素が強い。

「ねー、おにいちゃん。聞いてるー？」

……それでいて何故にこいつがここにいるんだ？

「おにぃちゃん私ね、聞きたいことがあるのー」

……み、見えるぞっ私にも見えるっ！　桐を覆う殺気という名の深い闇の黒がっ！

なんか喋るたびに強く濃く深くなってませんかあなたのダークオーラ。

更に発せられるのは圧倒的な威圧感。こいつは俺と話したいようだし、おそらく人前では猫かぶりを解かない、そうなれば――

「わりぃ、ユキ先行っててくれ」

とりあえず桐との長期戦を覚悟してユキを教室へ行くよう促す。

「あ……うん。じゃあ待ってるからー」

少し驚いたように答え、ユキは教室に方へ駆けて行く。これでいい、これでいいんだ。

「ちょっと来て、おにーちゃん」

「っ！」

その時だ。油断はしていない。しかし桐が俺を呼んだ途端に俺の体は石像のごとく硬直した。

か、金縛りかっ！？　思うよう……てか体がまったく動かないぞ！？　桐は俺に何をしやがったんだ！？

喋ることもままならず、俺はただ桐の思うままに連れていかれた（ようするに拉致）

「許さぬぞ、ユウジ」

一階から下へ続く階段の下で桐は言い放った。

この学校に地下階というのは存在しなく、半地下にあるような用具倉庫が1階から下に続く階段の先にはある。

しかしこの用具入れの使用頻度は低く、用具入れと階段までにある踊り場に似た少しのスペースに俺と桐は居た。

「は？」

もはや猫かぶりが嘘のよう、てか面影は微塵になく老婆喋りを全力で披露していた。

「わしは貴様に幼なじみルートに入れなど言っていないぞっ！」

は？　である。いきなり呼びつけて何を言っているんだ、と。
ルート……ユキの？　そうかゲームだもんな。それで俺はユキと手つなぎ登校して――

「でも入るなとも聞いてねぇな」

そうだ。あの時の桐の言ったヒントは少なかった。少なかっただけで、大きなヒントではあったが。
その中に「ルートについて」一切聞いていない。

「黙れ」

ドスを効かせて圧制しようとする桐だが、既に慣れた。

「断る」

漢字・平仮名合わせ2文字での反論は桐と同じ。文字数的には桐の方が少ないが。

「拒否。ユウジ、貴様は何故わしのルートを選ばない！」

それを聞いて、俺は嘲笑するように言い返す。

「普通選ばねぇよ、まずはベーシックに幼なじみだろが」

「言い訳などいらぬし、その理屈はよくわからん！」

……じゃあ聞くな、と。そして桐、お前の俺を選ばせる理由はまったくわからん。ということは俺も桐の意見を汲む必要性はないな
……だがここまでわざわざ来たようだし、一応聞いておくとするか。

「なんでそんなにお前のルートに俺が入って欲しいんだ」

「それはな……お、おにいちゃんが大好きだからっ！」（CV．田村ゆ●り）

「あー無理に頬染めないでいいぞ」

ここで恥ずかしそうに頬を赤く染めた桐を、こんな状況でなければ少しばかりは可愛いと思えたかもしれない。

「ちっ」（CV．般若）

「その声で成りきってるつもりか？　至る所から邪気が漏れてるぞ……どうせ他に理由があんだろ？　お前のルートに入らなければならない理由が」

俺にルートに入ってほしいがだけに学校に攻め込んでくるものなのか？

ヒロインの一人と考えても、まだ出会ってから1時間も経っていない。

「それは……あるぞ」

「で、ぶっちゃけると？」

「貴様はわしのものだからじゃあっ！」

何が来ると思えば。

「……本当にぶっちゃけたな」

ほぼ予想通りというか。面白見が無いというか……朝の行動から大体想像出来るな

「だって……私にとっては本当に大切なおにいちゃんなんだもんっ』（ＣＶ．釘●理恵）

「釘●信者に焼き殺されるかもな、俺」

主に嫉妬の炎で……あいつらは恐ろしいものだ。購買力は無いが声の大きさはピカイチ！

「おにいちゃんがいないと私……だめなの』（ＣＶ．榊●ゆい）

「こりゃまたマニアックな声優が……ってもういいから」

「えー、まだあるというのに」

いつまで続けるつもりだったのだろうか。

「「「どれが良かった？」」」ＣＶ．田村ゆ●り、釘宮●恵、榊原●い）

「重ねるな……だが、器用だなお前」

誰も出来ないというか、マネしないだろうに。

「惚れたか？」

「すごいとは思った、感想終わり」

これで惚れたらいくらなんでもギャルゲーの主人公が色々と可哀想すぎる。

「つまらぬのう」

「っていうか帰れよ。お前高校生じゃないだろ」

中学生でさえない。

「大丈夫じゃ」

「なぜ」

その自信はどこから？

「貴様の隠し子として」

「余計ややこしい上に俺が大丈夫じゃないわっ！　童貞歴１５年とちょっとの俺をなめるなよっ」

「……貴様、今墓穴を掘らなかったか？」

うるせえ！　チェリーボーイでどーもすみませんねぇ！

で、閑話休題。

「で、なんで来たんだ？」

「もちろんおにいちゃんに会いにきたの」

「本音は？」

「貴様を落として、わしのルートにいれる！　どんな手段を使ってもな！」

「わー、あぶなかったな……よし家に帰れ。送りはしないから勝手に帰れ」

「えぇー」

「露骨に残念そうな顔するな……俺はノーマルな学校生活を維持したいんだ。そうなればお前には帰ってもらわないと困る」

「うー……仕方ないのう。貴様そこまで言うなら渋々帰ってやるか」

素晴らしいぐらい偉そうだな。

「ただし約束じゃ、他の女子に手を出すなよ」

この時こいつの言う女子は”おなご”と読む。

「帰ったら……頼むぞ」

「頼むな」

横目で何かちらりと何かを求めてきたが即効で断る。

「じゃあねー、おにーちゃん☆」

☆を散らして階段を駆けていった、猫かぶりな妹。

「さて……と」

しかしこれで胸をなでおろすことは出来ない。そう、戦いはこれからだ。

さきほどのユキとの手つなぎシーンやかわいい妹（猫かぶりヴァージョン）を持つ俺を見た男子生徒は怒りに身を狂わせている。

そうリア充シネ。お前の妹がこんなに可愛いわけがない。羨ましい、どちらもよこせ。

……俺への嫉妬に燃え狂う男子の刃から身を守りながら、我が教室に向かわなければならないのだ。

「……これはちょっとしたアトラクションだぜ」

そう一人呟いて、一気に勢いをつけて階段を駆け上がる。

「とりゃあああああああっ！」

そこではカッターやらハサミやら”取り扱いに注意してください”と書かれた外部に出たら確実に危ない薬品の入ったビンが飛び交っていた。

そして俺とユウジは帰宅部ながらも豹のごとく足の速さで阿鼻叫喚の廊下を駆けていく。そう、廊下は俺一人が敵地に投げ込まれた戦場だった。

第００６話　１－６　プロローグのプロローグ

「はぁ……」

俺は教室に着いた途端机にうな垂れ、盛大にため息をついた。

「死ぬかと思った」

阿鼻叫喚の地獄海図。トラップ満載当たれば即バッドエンド行き、その中を潜り抜けてきたのだが――

どうやらすべてカットされたようだ（描写的に）

やってくれたよスタッフ！　力量が無いからってそんなところで手を抜くなんて！

……今なら俺がその戦闘シーンを躍動感溢れる文章で原稿用紙３枚は書ける自信がある。

「ようーユウジ」

軽っぽい男の声が聞こえる。

「よー……」

「どうしたユウジ死にそうだぞ？」

いや、本当に死にそうだったからさ……よしいきなりだけども話振るか。

「俺のこの体はあまり長くは持たない……何かあったら後は頼むぞマサヒロ」

「なんだとっ！　ほれこの薬草（手近な雑草）を飲むんだ！」

「既に手遅れじゃ……すまぬ」
「ユウジ、死ぬな！　生きるんだぁっ！　まってろ今”げんきのかけら”を」
「……ああ、もう一度……あのカレーパンが食べたかった」（ガクッ）
「ユウジィィィ！　ああ俺が今持ってたのがハッシュドビーフパンだったが為にユウジは……ちくしょおおおおおっ！」
「さて安っぽい話もここまでにして」
以上、ユウジこと俺がいきなりおっぱじめた安っぽい喜劇終了。
「前回の”いきなり活劇”よりクオリティあがったんじゃないか？　ユウジ」
そういえばお気づきだろうか、俺が妙に専門用語や声優の名前を知っていたりとオタク気質なのを、まぁ俺は正真正銘オタクなのである。
でもモノゴコロついてすぐに「長門かわええw」とか言ってる訳ではない、当たり前だが。その原因は直ぐ近くに二つ。
まぁと言っても二人に比べればまだ片足を突っ込んだぐらいのもので。
「そういえばさーユウジ、最近新しいアニメ会社が出来てな――」
こいつ、高橋政弘（タカハシマサヒロ）

中学時代からの付き合いで、完全なるオタクのこいつに俺は毒されたといっても過言ではない。

まぁ俺はアニメにまったく興味がなかった訳じゃないので、完全な被害者とは言い難いけど。

そんでもう一人はというと。

「むむ、今日もお勤めお疲れであります」

独特というか何とも言えない喋り方をする彼女。……彼女で合っている。女子生徒なのには違いないのだが……その容姿や性格を見ても色気の欠片もない。

巳原（みはら）　柚衣（ゆい）

「昨日の”ＮＥＥＤＬ○ＳＳ”みたかな？　韓国に投げてるのに作監が――」

ボーイッシュという訳ではない。オタク色に染まりすぎて女性というものを見失った感じだろうか。

女子生徒の着るオーソドックスな白に紺のラインが入ったブレザーに、スレンダーなスタイルにセミショートの茶髪。足は長く肌も白い。

そこまで聞いたらのならそれなりの良いスタイルの持ち主にも見えるが、そうは問屋が卸さない訳でして。

「コンタクトは好かん」と言ってメガネをかけているのだが、それが糞ダサイ。

その眼鏡はというと見事なまでに丸メガネで、さらにグルグル模様まで入っている。どこでそんなもん買ってくるんだよ、と思うシ

ロモノを身につけ、更に――

「マサヒロは昨日の”ＮＥＥＤ○ＥＳＳ”見たか？」
「おー、なんかスタッフロールで原画スタッフが殆ど韓国なのは思わずふいてしまったよ、ハハハァッ」
「でも”イマ○ン”は日本人スタッフがいいからね、作監修正のおかげで保ったね」
「しかしあまり動かない場面がいくつか――」

こいつら何言ってるの？　まず俺には分からない。

”ＮＥＥ○ＬＥＳＳ”というアニメのタイトルまではついていけたが、それ以降はさっぱりだ。というかこいつらの話の内容が理解できるようになったら、ある意味負けだと思う。

「そういえばお前はまたユキさんと登校したのか」

あ、いきなし話題が変わった。

「あ、まあな」
「むむ、なんというギャルゲの序盤展開」

いやギャルゲだから。

さっき”中学生時代からの付き合い”といったのをお覚えだろうか。その通りの話なのだが、考えてみてほしい。
この世界はギャルゲーの内容で書き換えられたはず、今までの日常の要素がここまで残り、こいつらといつも通り話せているか。
桐が言っていたことなのだが。

『この現実世界にあのゲームのシナリオやキャラクターをスライドさせた形になっておる』

つまり今まであった日常にゲームのキャラやシナリオを繋ぎ合せた。その結果としてヒロインは登場するも、今までの人間関係に変更は出ていないということらしい。

「本当お前ユキさんと中学時代から仲いいよな」

……ただ、辻褄合わせのために周囲の人物の記憶が書き変えられているようだ。勿論ユキは世界の書き換えによって生まれた存在で、中学時代から仲が良いというのはありえない。

ゲームの設定が影響しているのだろう。そのせいでかなりややこしいことになっている訳だけど……そんな違和感を持つのは”今までの世界”を知る俺ぐらいなのだろう。

「そのユキさんはいずこへ？」

「あっ、ごめんユウジー」

教室の扉付近から聞こえるユキの声。

「噂をすればなんとやら」

ユキが話している俺たちの方へパタパタと駆けてくる。

「ごめーん、トイレ混んでてね」

「そっかー、なら仕方ないな」

人は生理現象には抗えないからな。

「そういえばさ、さっきの……い、いきなりあの手を繋いだのにはどんな意味が……あったのかな？」

「ユウジ貴様、抜け駆けったな」

「なんと！　既にルートは確定しているのかっ、裏山」

案の定ややこしくなったな……とりあえず。

「いやたまには手、繋ぎたくなることあるじゃん」

ぶっちゃけ自分では”ねえよ”と思っているのだが。

「一理ある」

ねえよ。

「あの繋がった時に感じる相手の汗！　たまらねぇ」

……それはお前が汗ファチなだけじゃないか？

「う、うんまぁあるっちゃあるけど……」

え……あるんだ

まあそんな他愛のない話題で盛り上がり、そうしてＨＲ（ホームルーム）の始まりのチャイムが鳴る。

おっとここで俺の紹介を少しだけ。

下之祐二（シモノユウジ）

容姿普通、学力普通、性格普通を決め込む……はずだったが、見事にオタクの道へまっしぐら、ちくしょい。マサヒロやユイとつるんでいることが多し。

そして最近になって、何故か俺はゲームの主人公になってしまったようで。

第007話　1－7　プロローグのプロローグ

なんだかんだで、ユキがこの世界に現れてもそれほど違和感はなかった。
シナリオと現実の整合性がとれているようで、不自然に思う節は今のところは無い。
でも”なかった”というのは過去形の話で――

「（誰かに……）」

見られている。そう誰かに。でもそれは先程の男子勢が発していた殺気が練り込まれた視線ではない。なんというか……とても不思議な、それでいて粘っこい視線を感じるのだ。

「ユウジー食堂行こうー」
「！？」

あ、あれ？　今までに感じなかった殺気がその視線に出始めたぞ？

「どしたのー？」
「行くぞユウジ」
「参ろうかっ」
「あ、ああ」

その妙な視線（殺気含有開始）を気にしながらも俺らは食堂に向かった。

「（まだ……）」

食堂に来てもその視線はあった訳で、少し挙動不審気味。辺りを見回してその視線の主を探すのだが……

「どうしたユウジ、何かあったのか？」

「え？」

やはりその見回していたのが彼らに不審がられたようだ。ユキとユイ、ついでにマサヒロが俺を覗き込んでくる。

「いやなんでもないんだぜ？」

なぜか疑問形に返しながら、俺の平静さをアピール。

「そっかーならいいけどな」

言うものなら「見られてる？　自意識過剰すぎだろ」「アニメの見過ぎだなぁ、そりは」でもって皆から冷めた目で見られそうだし、喋るのは自重しておこう。

「飯にしようぞ皆の衆」

「うん」

「おうよ」

「ああ」

各自食堂で購入した昼飯を一心不乱に食らい始める。俺はリーズナブルで汁物で腹に溜まる温かいお揚げ付きうどんなのだが……

「（まだ見てくる……か）」

さっきの殺気（ギャグのつもりは断じてない）は薄れてきたし、恨みとかじゃなそうなんだよなぁ……
一体俺が何したっていうんだよ、視線が気になって食が進まないぜ！　どうしてくれる！

「おにいちゃんおうどん食べさせて」

「あ、ああ」

その声を聞いて自分のうどんを箸で数本挟んで……ん？

「（のわっ！？）」

思わず驚いてしまった。その中学生にしては高く幼児にしては通る声、なんとも小さく発展途上な体。小学生相応の声や容姿を持つこの子は紛れもなく先程帰らせたばかりの桐であった。
そう、まぁ今の猫かぶり状態では分かりにくいが、桐がこの食堂の俺の元に居たわけだ。

「（大きい声を出すでない、鼓膜が破れる）」
「（悪い……ってなんでお前がここにいんだよ、帰ったはずだろ）」
「（ふふふ、おとなしく帰ると思ったか）」

あ、クソガキの発想だ……メンドクセー。

「（いや、帰れよ）」
「（ところで最近変わったことはないか）」
「（不都合なことはスルーするスキルは健在すね……最近ってさっきまでお前も居たじゃねえか、というか変わったこと、というか迷

惑なのはお前が未だここにいることだ）」
「（揚げ足を取るな……それで？）」
俺の言った迷惑発言もスルーですか、そうですか。
「（……まぁ、あるっちゃあるけど）」
「（それはなんじゃ？）」
「（いやなんか妙な視線を感じんだよ）」

「（自意識過剰が）」

すごい、桐に言われるのが一番納得いかない！　ということで一蹴された、結局は言われるのかよ……

「（それは冗談じゃが）」

冗談かよ！　こっちは冗談じゃねえぞっ！

「（うむ、ヒロインの一人だと思われるな）」
「（え？　ヒロイン？）」
「（ストーカー気質のようじゃ）」

なんという新感覚ヒロイン。ストーカーしてくるヒロインだなんて斬新すぎる、これは余り例がないに違いない！
……と見せかけて、結構ありそうだな。うん、主にギャルゲーではなくラブコメ漫画方面では有りそうな鉄板ネタだったな。
まぁ、でもそれをギャルゲーでやっろうってのは……そんな新感覚いらねえよって話だが。

「（厄介そうなのが来たな）」
「（そうでもないぞ、一度会えばルートに入る）」
「（はええ！？　どんなやつだ？）」

「（しかし残念じゃったな、貴様はルートには入らない）」

自信あり気に胸を張って言う桐に嫌な予感をひしひしと感じつつ聞いてみることとする。

「（なんでだよ）」

「（それはな、妹ルート以外、このわしが許さぬからだっ！）」

……酷い横暴だった。

「（正確にはそのヒロインは性格に難ありなのじゃ）」

「（お前が言えた柄じゃないな）」

「（まあな）」

そこはスルーせずに認めちゃうのかよ。

「（（しかしあちらの方が何枚も上手じゃ、一度選択を間違えるとバッドエンドじゃからな）」

「（……ムズすぎだろ）」

隠しヒロインの方がまだ希望を見いだせるわ。ギャルゲーって言ったら選択肢が無数にあるわけだろ？　そんな中で正しいものを選び続けるとか……セーブ&ロード出来るゲーム媒体ならいざ知らず、これは現実だ。まさにムリゲーじゃないか。

「（ということだ、ようこそ妹ルートへ）」

「（すまない、どういうことで妹ルートに入るはめになるのかさっぱり分からない……ということで俺は幼馴染らぶらぶルートに入る）」

「（ならば、妹いちゃいちゃらぶらぶルートへ）」

「（妹といちゃいちゃは兄妹としてはじゃれあってる的表現でギリギリセーフとしても、らぶらぶは人として駄目だろ……）」

誰だよ、こんな犯罪寸前シナリオぶちこんだのは！

「なにしてんだユウジ……ってそこにいるまさに妹キャラな人は？」

「いや、キャラとかじゃなくて俺の妹だから、なんか家抜け出してきたみたいでな」

とりあえずごまかした。いや……なんかマサヒロの言ったことは合ってるけども。見かけだけは妹キャラで合ってるからなあ。

「え！　ユウジの妹さん？」

ユキが目を丸くして再度聞く。

「下之桐ですっ、よろしくおねがいしますです」

どうやら妹という設定なので俺の苗字を名乗っているようだ。

「家で寂しかったからきちゃいましたー」

それにしても。

「おにいちゃんに会えてうれしいです！」

なんという猫かぶり、むしろ清々しいね。というかその演技力は真面目にすげえ……使いどころ大いに間違ってるけど。

「桐ちゃんかわええ……っていうかユウジに全く似てないな」

こいつに素の桐を見せたら卒倒しそうだ……いやこいつの事だから「むむ、ギャップ萌えか！？　これはこれでいい」とむしろ喜びそうで怖い。
そしてもう一人うっとり（眼鏡でよく見えないので推測）している者が――

「妹……かわええ、あたしシスコンだからどストライクだわぁ」

女でシスコン。更にそれを普通にさらけ出している時点でユイは半端じゃねえな。

「ユウジの妹さんかぁ」
「ああ、なんか来ちまってな、迷惑かけてすまん」
「「大歓迎！」」

満場一致の歓迎ムード……まあ、今の桐は当たり障りないからな。

「構わないよー……でも妹さんどうする？」
「先生に事情話して職員室で預かってもらうしかないな」

「えぇっ！」

今度は桐（猫かぶり）が反応した。

「私おにいちゃんといっしょにいたいですっ」
「でも授業があるからな」
「静かにしてるからっ、サイレントモード付いてるから！」

……最後のサイレント云々を無しとみても、現在の妹なら普通に

良い。だからつい甘くなってしまうわけでして……ねぇ？

「……まぁ授業担任に相談してみる」

「えっ！　居てもいいの！　ありがとうおにいちゃんっ！」

この妹なら悪い気はしないなぁ……

「（ぬふふ、計画通りじゃ）」

……これが聞こえなかったら素直に喜べたんだがな、ちくしょう。

「とりあえず早く飯食っちゃおうぜ」

と、マサヒロがけしかけ。

「いいねぇ、いいねぇ」

「うんー」

女子二人は乗ってしまったのだが、俺に関してだが思ったより汁モノは時間がかかり、案の定急いだのが仇となり舌を軽く火傷した。

桐の登場により、さっきの視線をすっかり忘れていた。ただその時間が楽しかったというのが理由ではなく、ただただ慌ただしかったのだ。……本当だぜ？

そんなこんなで桐のプラスされた午後の授業が始まるのだった。

第００８話　１－８　プロローグのプロローグ

「はいっ！ありがとうございますっ」

キラッ☆　キラキラ幼女スマイルで先生にお礼を言う桐。

なんという可愛らしい光景。一般男子や大勢の女子が保護欲に苛まれるのだが、俺に限っちゃ何とも全く心が動かない。

「（大人なんてちょろいもんです）」

ほらこれだよ……この見下す黒さ満点の言い方。っていうか古い喋り方消えてるし、どっちかはっきりしろよ。

「じゃあ、静かにおにいちゃんの近くにいるですっ」

たったと駆けて俺の隣に立つ。

「いい妹さんだな、大切にしろよ」

担任からのちっとも有り難くないお言葉ありがとう。大切にする必要なんてない。こいつは自力であらゆる敵に邪気で対抗出来るから放っておいてもノープロブレムだよ。

「よろしくね、おにいちゃん！」（ニヤリ）

断じて妹ルートに入らねえ。というかこいつは既にもう妹じゃない腹黒い何かだな。どうやったら無邪気な妹キャラが邪気臭全開の変態になるのだろうか。

「はぁ」

妹のドス黒さに溜息をつきつつ。

「あそこが俺の席な」

「はいっ！　先に行ってるです」

思えばこの”～です”っていう語尾が本来ならば少し背伸びした小学生みたいで微笑ましいのになぜだろう？　桐のは聞いててイラするイラする。

そうして桐はひょこひょこと俺の机目がけて走って行った……俺にしか見えない邪気を振り撒きながら。

遅れて俺が席に着いた。桐にはどこから出したかわからない小さめの丸イスが置かれていて、そこにちょこんと座っていた。

「ところで、桐」

「なんですか？　おにいちゃん」

「無理しなくていいぞ」

「え？　なんのことですか、おにいちゃん？」

「猫かぶり」

「（猫かぶりゆうな！　世渡りの良い妹と言え）」

ほうら本性でた。

「（で、なにか用か？）」

「（いやさ、さっき言ってたストーカー女ってどんな人なんだ？）」

桐は攻略情報が頭に入っていると言っていたのを俺は明確に記憶

している。それならそのストーカーについての詳細を知っている可能性がある訳だ。

「（うっ……）」

明らかに居心地悪そうに目を背ける桐。

「（ぶ、とんでもないブサイクじゃ！　学力も低くて落ちこぼれ！じゃ！）」

そうなのかー。

「（なら顔を背けずにもう一度）」

「（うぅっ……おにいちゃんのいじわる）」

「（ごめんなこの底意地悪い性格が俺の地だから）」

妥協してくれな？

「（ま、まあ……奴に近づくのは止めておいたほうがいい、貴様の可愛いくぁいい妹のありがたいお告げじゃ）」

「（けっ）」

自分のことを可愛いなんて言うやつにロクなもんはいねえよ。何か傍目からみればコソコソと妹と密談というシュールかつ犯罪チックな光景が広がっていたので即刻止め、俺は自分の席に座り直し黒板に向き直る。

桐は人懐っこく（※演技）俺の右腕にがしぃっと掴まっていた。

その光景を見て続々と増える敵（おもに男子）の「もう殺ってもいいよね♪」的な視線と先程から続く”あの視線”に俺は悩まされたのだった。

帰り、今日の学校の授業がすべて終了した。アニメで言えば終わったのはＡパート、ＣＭ開けてまだ先は長い。

「帰ろうぅー」とマサヒロ。

「皆の者！　家へと撤収だっ！　今すぐ自宅警備という仕事に復帰するんだっ」以上ユイ。

自宅警備って言っても自分の部屋のパソコン周囲限定だろよ。

「帰ろー」とユキさん。

そうして集団でぞろぞろと教室を出るために二つしかない出入り口の一つを目指して間隔の狭い机群の間を歩いてゆくのだが……その時。

ガシャン何かが床へと落ちる音。

ただでさえ狭い机間で、更にノートが飛び出していたようで。俺の学生カバンがぶつかり、ノートを伝って筆箱も床に転げ落ちた。

「あ、すまんっ」

と謝りながら、すぐさまこぼれた筆箱本体と筆箱の中身やノートを拾う上げ机に置く。……どうやら筆箱やノートを見る限り女物のようだ。

ノートの表紙文字や可愛らしいピンクのソフトタイプの筆箱から分かる。

「い、いえ」
「ごめんな、ぶつかっちまったわ」
「ええと、大丈夫ですよ」
妙に落ち着き美麗なその声。ものを拾い上げて顔を見上げると。
「！」
そこには非常に整った顔立ち。清楚な佇まい。少し香る甘い匂い。
長く綺麗な黒髪を放らせたかなりの美少女女子生徒がそこには居た。
「……ユウジ様ですよね？」
「え……？」
思わぬ言葉に驚いてしまう。
「なんで俺の名を？」
「一ノ二のクラスメイトの一人ですから、名前は覚えていますよ？」
そうきっぱり答える彼女が続けて。
「私は姫城（ひめき）　舞（まい）です」
「え、ああ！　覚えておくよ」
「ありがとうございます、では以後よろしくお願いします」
「あーこちらこそ」
その頃背景では――
「能登●美子ヴォイスキタコレ！」
「のとぉぉぉぉぉぉ……いや、これはよく聞くと――G●の能戸

松だあああああああ」
「（っち）」舌打ちする桐と。
「すぐ仲よくなったなー」と関心するユキがいた。

「よろしくな、じゃ」

と言って名残惜しいながらもその姫城さんから離れ帰路に着く俺。
この時だったのだろう。桐の舌打ちや姫城さんの「以後よろしく」の意味に気づいていれば……

あんな事態にはならなかったのかもしれない。

第００９話　１－９　プロローグのプロローグ（前書き）

追記

……修正したら、なんかユウジが変な性格になってるな

第009話　1－9　プロローグのプロローグ

一日の授業が終わり、足早に教室を後にして帰路に着く俺ら。
俺、桐、マサヒロ、ユイ、ユキのいつものメンバープラス桐の五人で通学路を歩いていく、そしていつものことだが歩いて数分経たずに――

「ではワタクシは失礼サセテモライマショウ」と謎のカタコト喋りを展開するユイが去り。
「さらば」とさっくりマサヒロも消え失せる。
そうして順に俺と桐とユキの三人で日が落ちる中を歩いてゆくのだが……

「――――」

桐は俺の手を握って一緒に歩いている。傍から見れば兄妹どうしが手を繋ぐ仲睦まじく、大変微笑ましい光景なのだが、しかし……

「（ゴゴゴ）」

こいつは無言だったが、俺の第六感が何かを感じた。今までと雰囲気が違う……どこかが違う。
桐は無表情に近く、微妙に笑顔が見える程度で不気味だった。更にはドス黒く言葉では表現できない奇怪なオーラを醸し出す桐は、俺から見るに明らかに不機嫌だった。今までのこいつの性格を考えるに今は怒ってることになるだろう。
ええと、なんか言ったほうがいいのか？

「桐、学校はどうだったか？」

「とても楽しかったです（棒）」

まずいな、ご自慢の演技力が事務所ゴリ押し新人声優のごとく棒演技になってらっしゃる。これはかなりキレとるな。

「おにいちゃんってほかの女の子と仲いいんですね、女の子と」

強調して言った。今回に限っては大事なことは二度も言わなくていいですから。

ああ……絶対その”俺と女の子との中の良さ”が不機嫌な原因だろうな。まったく、こいつの独占欲の強さには呆れるぜ……ヤレヤレ。

と、ため息をついていると、隣を歩くユキが呟く。

「あのさ」

「ん？」

桐がいるのに気をつかってくれたのか、今までだんまりだったユキが――

「なんか妹さんを中心に挟むと、子連れみたいだよね」

「……え？」

まさかの爆弾発言。思わず声が漏れてしまった。というかその発言は――

俺とユキさんが夫婦ってことになってしまうのでは？

「？」

俺、若干照れ気味である。ベッタベタだけど、そこがいい。……ユキに言われるとか本望だわあ。でもそれは相当に恥ずかしいことでもあるわけでして。

一方で最初は首を傾げていたユキ。しかし、ゆっくりと、自分の呟いた言葉の意味を考え出して――

「あっ！？」

どうやら気づいたようで。

……やっぱ意図してなかったかー、少し残念に思うけども仕方ない。

「な、なんでもないっ！　今の忘れてっ！　消去してっ」

「え、あ？　わ、わかった」

消去は出来ないというか、出来ればしたくないな。これこそ脳内メモリーに保存して夜、布団に入りながらニヤニヤ気持ち悪い笑みを浮かべながら思いだしたいわけで。

まあ、でも意味を既に理解していた俺としても恥ずかしいことこの上ない。だから眠りに就く時だけにしか思いださないつもりだ。

それと、桐さんや、次第に握る力が増してますぞ。さらになんか手じゃなくて手首に掴み変えたね？

血ぃ、止まる。いや、マジで。なんか手が黒く成り始めてるから。壊死するって、本当に。

そんなこんなで痛みをこらえている頃。

「じゃ、じゃあねっユウジ！　また明日っ」

と言って駆けていった。照れた表情のユキは至高だった。そしてユキの背中が見えなくなるのを確認してから、今かと言わんばかりに桐が動く。

「ぅん？」

桐はヤクザ顔負けの睨みを俺に向ける。睨みで人を殺せそうな勢いだな。もうどっかの組長になれよ、ロリヤクザって斬新だぜ？

なんか凄い一部の層に大受けしそうだな……主に大きな子供の入組希望者続出？

「このクソ主人公がっ」

イン通学路、古い喋り方第一声は俺への罵倒の言葉でしたとさ。

「個性豊かな女の子といちゃいちゃいちゃいちゃ（以下二分に渡って続く）……しおって！　この女ったらしが」

……ひどい言われようだ。俺がそんなにベタベタしていたか、それはないね。分別は弁えてるさ。

それに女子って言ってもユキ一人じゃないか……あ、一応ユイもか。だから桐の俺へ向ける怒りは納得がいかない、それは極めて理不尽だと俺は思うね。

だからこんなことでは折れるわけない……一番の有効策は相手にしないこと、とりあえずスルーしとけばいいだろう。

「……」

「あんだけ幼馴染ルートに入るなと言っているのに、もう入りかかっておる」

「え、マジで？」

いぃぃよっしゃぁとりあえず幼馴染から攻略だぁっ！　ユキはめっちゃタイプだし、やったっ！

さっきまでの冷静な自分グッバイ、ハイテンションな俺こんにちは。もう嬉しいね、ユキと付き合えるチャンスだって。もう素晴らし痛っ！？

ガシガシガシ……気付けば俺の足は桐の小さいけれどなんともパンチの効いた力で足踏み式空気入れのごとく踏みつけられていた。

「足を集中して踏むなっ」

「黙れ、クズ」

俺はエムじゃあないですよ。だからこんな老人喋りの出来そこないみたいな奴に言われても嬉しくもなんともないわけよ！

というかクズまで言われて嬉しいのはある特殊性癖を持った一部の人々だ！　そこまで卑下されて引き下がるものか、俺も反論だ。

「うるせぇ！　なんといわれようと俺は幼馴染街道を突き進んでやるぜっ」↑全力でダッシュ

反論と反抗。逃げるが勝ちだ、言い逃げすればこちらのもの！

はは、高校生の脚力と小学生の身軽さ、果たしてどっちが早いかな？

「あ、待てっごふ！？」↑全力で転倒

ばーかばーか転んでやんのー、誰が待つかばーか↑クソガキの典型。

「許さぬぞっ！　なにがなんでも妹ルートに入れてやるからなあああ」

逃げ切った。思わずガッツポーズを取ってしまうぐらいに勝利の気に満ちている。なんとか家にたどり着き俺の部屋に入れた……どうなることかと思ったぜえ。

「どうなること、とは？」

「わっ！？」

桐がそこには居た。神出鬼没とはこのことを言うのだろう。俺を追い抜かすってどんな技使ったんだよ、瞬間移動かなんかか？

あれか、ワープポイントとかが俺のタンスやら机の引き出しに入ればあるってのか？　……それは流石にないか。

「さぁ観念して妹ルートに入れ」

なんだろう。既にこの会話の時点で「妹」とコイツを認識出来ない、したくない。本当の妹ならそんな”妹ルート”なんてメタなこと言わねえよ！

「ふざけるなよ」

「な、なんじゃ」

「妹がルートとか言わねえよっ」

「今頃いうか！？　一部には需要があるのじゃ！」

「一部の存在は認めるけど、俺にとって需要は全くないな。他を当たってくれ」

「う、うるさいっ！　わしもす、好きでお前なんぞの嫁にされとう

ないわ」

なんと嫁とは、いきなり飛んだな……ああ、勿論俺はお断り。

「俺の嫁にする気はさらさらねぇ」

「なら婿がいいか」

性別なんて些細な事ですか、そうですか……って、そういう問題じゃねえし！

「べ、べつに貴様のために婿になってあげるんじゃないんだからねっ☆」

無茶苦茶だ……もう突っ込みきれねえ、せめて嫁には戻せ。

「いいかげん同じ展開は飽きてくるぞ」

桐、私の嫁になれっ。俺、断るっ。桐、黙ってわしの婿になれっ。俺、全力でＮｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！。……の以上無限ループのこと。

「むむう……ならそこに寝ろ」

「はい？」

何を言ってるんだこいつは。てか、ここは俺の部屋だってーの、指図すんじゃねえ。

「わしが押し倒――」

「アウトォォォォォォォォ！」

「なら深い接吻でも、ディー」

「あうとぉぉぉぉぉぉぉぉ！　このゲームの対象年齢一五歳以上だから！　それやるとＲ－１８指定が入るからっ、絶対に」

今日ぐらい動転せずに冷静に事を対処したかったというのに、このエセ妹は……っ！

「なら、どうしろと」
「まずそこに座れ」
「こ、こうか？」
「それで待機」
「分かった」

さてと……俺はパソコンでも立ち上げるか。

「で、俺がパソコン机に座る」
「それで？」
「俺がネットサーフィン」
「で」
「待機」
「わかった」

さてとー。とりあえずこのギャルゲの攻略サイト見つけんとな。先をある程度知っておかないとショックで気か理性を失うかもしれん。

「……」カチッ、とマウスのクリック音。
「なぁ」
「……」カチッ。
「わしは……」
「待機」カチッ。

「し、承知した」

変なとこ従順なのな……一応桐は自分の益の為だから利には叶っているんだろうけど。

「……」カカ――、とスクロール。

「……」

「……」カチッ。

「わしはどうすれば」

「待――　へぶっ！？」と、桐の拳が顔に入る。

「っ、いってぇな！」

「馬鹿にするのもたいがいにしろ貴様！　この動作に一体何の意味があるのというのだっ」

「意味ならある」

そう、重大な意味だ。

俺が今まで無意味なことを言ったか？　……前例が少ないから何とも言えない？　だとしても、これは俺も満たし、桐も満たす。メリットに溢れた動作なのだ。

俺は休息を、桐も気を紛らわす。そう、それは――

「言ってみよ」

「これもプレイの一つだ」

「……」

「放置というプレイの――　ぐあっ！？」桐の足が俺の顔へめり込んだ。

第０１０話　１－１０　プロローグのプロローグ（前書き）

＜修正済み１＞は２０１０年１０月ぐらいの一期更新＜修正済み２＞は２０１１年３月頃の二期更新ですー

第０１０話　１－１０　プロローグのプロローグ

「それで貴様はパソコンで何をしているのじゃ？　ま、まさか青少年的ないかがわしい画像を……っ！」
「妹（仮）の視線の中でそんなことを平然とできる奴なんていねえよ」

それは何の罰ゲームだ、素晴らしいほどの恥辱だな。どんな突飛した発想だよ。某役員共のメンバーと同じ酒が飲める勢いだなあ、オイ。
というかさ、だんだん桐のノリがエロ方面におかしくなってきてねえか？　犬の発情期の如くムラムラしてんのか？

「いや……既に上級者となりて羞恥プレイとしてやってるかもしれん」

こいつの思考が全く読めねえ、というか読めたらそれは一生後悔するな。読んだら人生敗北のお知らせだ。

「でユウジ、貴様は一体ナニをしているのじゃ？」
「”ナニ”を強調したのは何かの狙いがあってのことか？」
「の？　ぬふ、お主は一体なにを想像したのかの？　なにか、えろすなことか？　ほっほっほ、男故仕方ないのう！」

あー、うぜえ。今明らかにその部分だけ強く言ってたってのに、しらばっくれて俺弄り。
楽しいですか？　楽しいですよねえ！　……本当に攻略情報も寄こさない、日常生活に浸食してきて面倒、ウザ可愛くない――の三拍子揃っての使えない要素がそのそれなりの容姿と相殺どころか打

ち勝ってしまっているというね。
……ああ、そういえば俺がパソコンで何をしてたかだっけ？
「このゲームの攻略情報の検索、妹（偽）は全く全然完全に役に立たないのでその代用として、人類文明史上最高情報伝達器具、パーソナルコンピューターのインターネットブラウザを介して検索エンジンｇｏｏｇｌｅで攻略情報の探査をしてんだよ」
「……長ったらしくして誤魔化してるかもしれんが、はっきりとわしの悪口を言ったじゃろ」
はっきりと言いましたがなにか？　まあ、聞こえないなら聞こえないで「耳鼻科を紹介しようか？」と声をかけるつもりだったが。反応する義務は発生しないのでスルー、と。
「とりあえず公式ページの情報は確認しとかないとな」
「さりげなくスルーしおったな貴様！」
手に入れた情報の文字をマウスでドラッグしメモ機能に貼り付けて行く。
「コピー＆ペーストっと」
「……」
「……」
「ううん、無視するなんてひどいよおにいちゃんっ」
「ごめんな俺は厳しく育てる派だから非情なんだ、理解してくれ」
「理解出来るかっ、ただのイジメじゃろうが！」
「ごめんな俺は虐待で育てる派だから非道なんだ、理解してくれ」
「なぜに悪化させとるのじゃ！　わ、わしにはマゾ属性などないぞ！」
「誰も期待してねーよ」

いやいや、虐待とマゾ属性とかある種のＳＭプレイじゃん。なにその需要と供給二つ叶え、桐にも益があるから俺はなんもしない。という選択を取るとしよう。

「だから俺は桐を諦める。時に兄は鬼にならなければならないのだ、妹（古）よ」

「（古）言うな、それじゃわしの貞操が既に奪われ――」

「おうい、その発言はグレーでなくブラックだ。打ち切りされたくなくれば、即刻中止しろ」

聞き覚えのある方々が”ガラッ”と戸を引いて登場しそうなので自重願う。

「……ちっ、この田村ゆかりヴォイスで大抵のロリコンならイチコロだというのに」

「残念ながら男すべてがロリコンではないからな、というかその発言で煽ってどうする」

重度の萌えオタなら半数占めそうな勢いだが、それ故に”ロリコン”と決めつけるのは偏見だ。

「そうか……わかったぞ、それほどまでに攻略情報が欲しいなら”妹ルート”へ来るがよい」

「間に合ってるので結構です」

丁寧に頭を下げてお断り。この驚くべき謙虚さに紳士の仲間入り確定だ。

「……保険の勧誘に酷似した断り方はやめろ」

「なら”来るがよい”なんてお○ゃる丸と仲間扱いされそうな腐った喋りを失くした上で”来てくださいだろ”？」

そんなことを言う俺は絶賛ドヤ顔中、ほうらほうら言ってみなよ？　人に頼むんだろう？　来てくださいーって？

「ぬう、なぜに立場が逆転しておるのか……甚だ疑問じゃ」

「いや、俺がスルー決め込んだ時から俺ずっと大勝利だから」

関係ないけどインターネットを発明した人はすごいね。インターネットの創始者を、あとでウィキで調べてみるか。

「で、調べられたのかの？　攻略情報」

「ああ、調べられた……と、見せかけて殆ど無理だった。しかし聞こえる評判は酷すぎる」

「それはそうじゃ！　クソゲーじゃからな」

そのゲームのヒロインこと当人が言うと皮肉にしか聞こえないぞ。

某巨大掲示板を覗くと「これ今年のワースト決定だな」「もうワーストだろルリキャベ（Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～　の　Ｒｕｒｉとキャベ　の略）「ワーストワースト言ってるアンチは帰れ」「具体的に脚本がバラバラ、キャラ崩壊はしょっちゅうだしそもそもジャンルの時点で地雷」「絵が綺麗なだけに話の粗が目立つんだよな」「でもあの　ルートだけはよかった気がする」「確かあの　ルートは外部制作だろ」「でも売れてんだろ」「擁護乙、酷すぎる評判と絵の綺麗さで買ったやつがほぼ全員だろ」

「絵で買った人涙目ｗ」「そして中古店には大量のルリキャベの姿が……」「ｗｗｗ」「実際たくさんあったぞ、一〇〇〇円で初回限定が買える」「一　〇　〇　〇　円　だと……マジで絵で買った人

涙目じゃねえか」

以上、棒掲示板のコメント群だったとさ。（※なお「作者草民かよ」という批判意見は受け付けません、あしからず）

「……八〇〇円で売られてる理由がわかった」

ちなみに俺の購入したのはＲｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～（通常版）なので初回よりも安い。

ペットボトル約５本で買えるギャルゲとは日本ハジマッタなとか思っていたが、低価格の裏に潜む罠に思いっきり釣られた。

でもよく考えたら公式で無料ダウンロード出来るエロゲがある時代だから、案外そう凄いものではないのかもしれない。

それで。ユキは「篠文　由紀」（しのふみ　ゆき）というらしい（掲示板で知った）あとのヒロインを調べようと公式に行ったのだが……公式そのもののページが消えていたのでどうしょうもない。

とりあえず本ヒロインと隠しヒロインの二種、計十人前後が居ると言う（これも掲示板より）

ヒロインは「篠文　由紀」ユキ、と「下之　桐」妹の二人の他に約８人いるという解釈でいいのだろう……やはり近くにいるのだろうか？

「……今、他の女のことを考えていたな」

「ああ、攻略ヒロインは何人いるのかなと」

「何人もいない、わし一人じゃ」

すごい！　パッケージ通りなら十人全員桐！　どこのシスターズ……あっ、桐もシスターには違いないじゃねえか。

桐が一杯……？　……かなりうるさそうだな。

「……ユキを見た俺には苦しい言い訳にしか聞こえないな」
「ユキ……じゃと？」
「ユキ」

あの幼馴染なユキですヨ。ポニテがデフォなすごい可愛い娘ですヨ。個人的にはお近づきになりたいナンバーワンな方ですヨ。

「名前で呼ぶなどなんてふしだらなっ！」
「ユキちゃん」
「かわいい！　なんか羨ましいのう！」

いつかそんな呼べる日が来ると良いのだがなあ。

「実際、冒頭のお前の”ふしだら”という発言はそれに含まれないのか？」
「わしはよい、ロリだからな」
「余計まずいわ」

ロリで威張る妹をこの世で見たことがない。そして今後も見ることはないだろう。いや、みたくないですはい。

「かわゆい妹からの大事な助言じゃ、明日は気をつけるのじゃぞ」
「自分でかわいいというお前は置いておいて、いきなりなんだ？」
「第三のヒロインのイベントが発生する」

さっきヒロインはわし一人とか言ってたくせに。まあ、情報くれてんだから何も言わないけども。

「前言ってたストーカー女のことか」

「ああ、まあ顔は……あまりよくない」

少しの間があるな。ああ……なるほど桐のことだからこれは逆に考えればいいのか。

よくない⇔イイ！　へぇー。

「それは楽しみだ」

「き、貴様ブスフェチか！」

ブ、ブスフェチ！？　いややややややや、いや居るんだろうなあ、そんな人！

でも、ちょっと、いやすごく俺にはまだ理解できない層だな。うん、否定する訳じゃない。ただ俺には縁がないフェチなだけで――と俺はなぜか特殊な性癖な方々への弁護をしておく。

「ねえよっ！　そんなこと言ったらお前も対象外だヴァーカヴァーカ！」

「さ、さりげなくフラグを立てる台詞を……どきどきしてしまうではないか」

「お前のことだからどうせ逆のことを言ってんだろ」

「え、わしのデレスルー？」

何かにショックを受けていた表情を形作っていた桐だが、一息おいて。

「！　……間違っていた。とんでもない美少女じゃ、わしのようにな！」

「それは本当と捉えておこう」

なーる、美少女か……というか女子高生だから美女と表現した方がいいのか？　いや、そもそも美少女の括りってどれぐらいだろう……奥さまは魔法少女だったりするからなあ。

「し、しまったわしとしたことが誘導されたじゃと！？　それとまたさりげなくわしの美少女であることが否定されないじゃと！」

「まぁ明日は楽しみにしておくとするか」

さて次のヒロインの姿がどんなものか朝まで脳内生議論だ。個人的には長髪で……そうだな、ストレートに黒色ってのはどうだろう？　同い年な感じのおさななじみぃーなユキもいいけど、少し大人っぽい人も案外よさげ。とにかく楽しみだなー

「絶対に他のおなごには手を出すなよ、美少女のわしがおるじゃろ」

「断る、女子高生万歳」

「くぅ……さらっとわしを攻略範囲から否定しおって、美少女でも女子高生限定とは――なんという孔明の罠」

「俺が高校生でよかったと思う、この瞬間」

ああ、幸せ。ほぼ同い年の女性を好きになれた、そんな俺がノーマルであることに乾杯。

「わしがグラマラスならよかったのか！　ペタだから駄目なのか！　ロリきょぬうならル○ンダイブレッツゴーじゃったのか！」

「はい終了、てか微妙にネタ古いからなソレ」

ということで本当に一日終了のお知らせ。「第三のヒロイン」が気になるっちゃ気になるが桐にこのまま居座られると睡眠時間を大幅に削られてしまうので、さっさと追い出した。

そうして、濃い一日は終わって行く――

第０１１話　１－１１　プロローグのプロローグ（終）（前書き）

３月７日、第一話部分の修正がほぼ完了しましたー
０４．１１　１－１エプローグ部分を移植

第０１１話　１－１１　プロローグのプロローグ（終）

四月二二日

いきなり日付が表示されるのは、やはりクソゲークオリティ、制作者の計画性の無さと作りの粗さが全開だ。ということで翌日になった訳で、俺はゲームと現実の融合した世界の二日目を迎える。

とある家の一室、電気が消され、薄暗さが占めるその部屋に一筋の眩い日の光が射している。　一室に備え付けられた網戸のすぐ近くには、装飾のない厚めの水色カーテンが、ゆらゆらと風に吹かれていた。
網戸を伝って舞い込んでくる心地よい春風が、部屋を包むように静かに舞い踊る。
そんな温かい朝の中、布団の中でゆっくりと俺の意識は覚醒していく。　寝ぼけた頭で見えるのは、何の変哲もないうす汚れた自室の天井。　あまりにも見慣れた景色に、少し嫌気が指して、天井から意識を逸らした。

「ん？」

意識を逸らした途端にその違和感へと気付く。自分の体の上に何か不自然な重みを感じた。いや現在進行形で感じている真っ只中である。
その重さの要因が俺の愛用している冬と春には大層お世話になる布団ではないだろうし、かといって本やゲームのケース・コントローラーなどの固いものが紛れこんだ訳ではないだろう。そう、なにか温かみを持っていて、それでいて魅惑的にやわらかくて小さく精巧に布で編まれた人形のような……

「（人形？）」

視線を動かし、自分の体の上へと焦点を合わせると――

「起きたか」

「！？」

あまりの衝撃に眠気が一気に吹っ飛んだ。そこに居るのは、実際居てはいけないもので……いけないヤツで、なぜにここに？　なぜお前……という疑問に関してはお前しかいないか、と少し納得せざるを得ないが。

だとしてもなんでお前が居るんだよ、と。というか何処から入りやがったんだ！？

「ちょ、おまっ！」

その衝撃による焦りによって、体に乗る”コイツ”にしどろもどろになりながらも言い放つ……いや、しどろもどろにもなるでしょ。朝起きたらいきなり体の上にコイツが居るんだぜ？　冷静に対処できる方がどうかしてるね。

「男の体とは大きいものじゃな、わしの体はすっぽりと収まってしまったぞ」

「……まて、その言い方は別の意味に捉えられかねない」

その発言はマズイ。俺の指す別の意味は言わないけどマズイ。というかわざとかっ！　昨日のように釣りなのかっ！　こんなのに釣られクマー！？

「よいではないか、よいではないか」

……ここまでの展開で皆さま方もお察しの通り、じじくさい物言いの小柄な少女が体の上に乗っかっていた。ちょうど俺の胸辺りにその少女の体、見上げれば幼い顔がある。その小柄な少女は自分を俺の妹と言い「桐」という名前を持っているのだ。

「ここは……とても温かいな」

なにその人生に疲れて行きついた先がここだったみたいな表情。

「この上は非常に和む」

人の体の上で和むなんてどうかしてる。人を電気座布団と同列にしか考えてないんだろうか？

「……人の体の上で和むな、はやく下りろ」

そう冷たく言い放つと、即効で手のひらを返し。

「ちぃ、つまらない男だ。これだから今まで彼女歴零年なんじゃ」

と、理不尽に罵られた。

「つまらなくていい、寝起きに楽しさやスリルやらを求めたことは金輪際、一度も思ったこと、考えたことすらない、だから離れろ――と冷静に返したいところだが、まてや。彼女歴〇年だと何故決めつけるのは早計と偏見に塗れているからな！」

「ふぅん……じゃあ実際のところどうなのじゃ？」

すると突然桐の表情が険しくなる、アレだ。冗談を言い合っている途中に話相手が途中で真顔・真面目になりあの面倒臭さな感じだ。

その俺の彼女歴なんて知っても何の得もないだろうし……いや、後々ネタにされる可能性というデメリットが俺にはあるじゃねえか！

言ってやるものか、だからここでの選択はスルーだ。

「はっ、お前に言って何に――」

「どうなのじゃ？」

「だからさ、お前に言っても――」

「どうなんだ？」

「お前なんかに――」

「答えろ」

「ありません」

「……そうかそうか、ならば良いじゃろう」

うおーい負けたぞ？　桐の発する謎の圧力に俺は打ち負かされてしまったんだが！　というかなんだよその容姿以上の貫禄は。

……正直に答えただけで、今は「やっぱりそうじゃろうな、わしが初めてに決まっておるものな」とニヤニヤと呟いているのだからそのギャップにはあの桃色髪姉妹のモ○も驚きのことだろう。

「いや……もうその話題どうでもいいんで、どいてくれねぇかな？」

「だめじゃ。このすーぱーぼでぃで、貴様を悩殺してからだ」

と言ってその年相応で未来に溢れた体を持つ少女は起き上がり、俺に馬乗りした……先程も似たようなものだったのだが今回ばかりはグレーな腰部でのその姿勢だ。

「……色々とまずいし悲しくなってくるから、さっさと落ちろ」

悲しげにも平らで曲線の無い体を見て彼はそう言う。いくら未来に溢れていても現状は貧しい。悩殺という言葉はお前にとって程遠く譲っても十数年近くも早いという虚しさ？

それでも言わずもがなこの体勢この状況は芳しくないので、俺は自ら体を起こし強引に桐を振り落とした。

どすっ。

フローリング床と桐頭蓋のぶつかり合いによって生まれた鈍い音が部屋に響いた。俺が起き上がったことによって桐は体勢を崩して地面に転げ落ち、軽く打った頭を押さえながら涙目で怒鳴りつける。

「いたっ！　貴様、大事な妹に何をするっ！」

なんとも自意識過剰な発言を向けられた。大事っていう表現は第二者や第三者がするものであって本人が言ったらただ痛いだけだと思う。

「何をするっ！　っていうのはこっちの台詞だろ……」

ちなみに昨日の内にゲームの設定上作られたのか、かつての数々のガラクタが埃を被っていた空き部屋兼我が家の物置スペースは、ポップなぬいぐるみやら本やらが埋め尽くす桐の部屋に変わっていた。

……まぁどうせぬいぐるみも本も隠れ蓑で、桐の性格を暗喩した「妹らしくない代物」が出てくるに違いないことは大抵予想出来たが。

「自分の部屋で寝ろって言っただろ」

「そんな一方的な主張に従うつもりなど、聞いた当初からさらさら

ないわっ」
「はぁ……」
かなりの我儘ぶりかつ幼稚な思考に俺は言葉も出ず、ただ深いため息をついた。見かけは子供、中身も子供、喋りだけババア！
「じゃあ……今度から鍵締める」
そう言うと桐は、顔色と声色を変えて。
「おにいちゃんを抱いて寝ないとよくねむれないの！」
老人喋りなら「俺を抱き枕にするな」とツッコむところだが、この猫被りヴォイスだ。
「とりあえず、その喋りでセクハラ発言は止めてくれ」
「ムラっときたか？」
「いや……」
色々と残念に思う。こんな容姿の少女にそんなことを言われる今の状況って一体？　っと考えざるを得ない。それだけ俺には出会いやらウキウキイベントが不足し、こんな犯罪直前の展開になっているのだろうかと思ってしまう。
「まぁ、どうでもいいや」
「よくないわっ、今すぐムラろ」
ムラろって何なのか、その新しい動詞についてニ時間に渡って問い詰めたいところだが自棄しておく。なにせ面倒臭いし意図する意味が分かるから困る、俺が問い詰めたいのは”なぜお前からその言

葉”ということである。
　こいつが発言をする度に気が遠くなり、ツッコミをする度に俺の体力が奪われていく。何回つっこめばいいのかと。実はこのツッコミをする度に精気が吸われていて――この俺の疲労感は新手の吸血鬼故なのだろうか。

「とりあえず部屋を出ろ」
「何故じゃ、訳を申せ」
「着替え――」
「ならば断るっ！」

　「着替える」という非常に簡潔かつ全うな理由を言おうとしたのに途中で切られ、バッサリ断られた。
というかお前が断る権利はないだろよ。そして俺の発言の自由を奪う権利もないだろよ……仕方なし、強行手段に出るしか道は無さそうだ。

「はい、でてけー」
「貴様っ、首根っこを掴むな！　……そしてドアを閉めるな開け――」

　バタンッ。扉を閉め、カギをかけることによって、やっと安息の時間がやってきた。

「ふぅ」

　やっと一人の時間が出来たと一息をつく。決して賢者タイムでないことを予め弁護しておく、欲情などは俺の発言から察するに皆無であろう。そして実際のところはほぼ呆れ状態である。

「なぜこんなことに……」

”こんなこと”とは今までの通りだ。俺の買ったゲームをパソコンで起動したところバグのようなことが起こり、あるダイアログに表示された。

『世界浸透化の準備が整いました、よろしければ”スタート”をクリックしてください』

それでスタートをクリックした結果がこれだよ。世界が真っ白に染まって次に景色が戻った頃には世界は変化していた。朝、表では幼馴染の呼ぶ声が聞こえる日常、その幼馴染が数分後には交通事故に合ってしまうという決められた日常。それは異常であり今までの現実とは全く異なるものだった。自分で道を開かなければ前へ進めない、それは現実と同じだろう。

しかしその道の途中に居るはずのない”架空”の人物が存在していること、そしてその道さえも”架空の人物”の都合で作りかえられている。

流れに身を任せれば簡単だろうが、それは大きな間違い。それはゲームの”シナリオ”という固定された道に過ぎないわけで。

その道を進んだ結果、あの事故が起こった

そうして世界は逆戻りし、また最初の朝、自分の体を起こす場面からやり直される。その事故の記憶を俺は残したままで。

そして、事故の二の舞を踏まないように自分はその固定されていた道を自分の行動によって捻じ曲げ変えた。これから先も同じようなことがあるのだろうと思う。しかしそれを乗り越えなければ前へは進めない。

俺はすっかり着なれた学ランの袖に腕を通し、第一ボタンを残して全てのボタンを留める。そして教科書やノートがぎっしり入ったカバンを持ち上げて肩にかけて、その自分の部屋の扉を開ける。

「貴様っ！　よくもわしを締め出しおったな！　許さぬぞっ！」
「はいはい、ごめんごめん」
「流したおったな！　明らかに流したじゃろ！？」
「飯、飯～」
「女より飯をとるのかっ！」
「飯」
「即答！？」
「※ただし桐以外の女子を除く」
「何故わしをそこまでして、弾くのじゃあっ！」
「自分の胸に手を当てて考えてみましょう」
「……誰が薄い胸じゃと？」
「言ってねぇ、それは確かだが」
「！　ないすばでぃになればお主は振り向くのかっ！」
「性格にもよる――おっともうこんなじかんだ」
「いきなし棒セリフになりおった！　面倒臭いのか！　わしの相手は面倒か！」
「五分五分……かな？」
「何と五分なのかがわからぬっ！」
「その答えは、いつまでも心の中に」
「あるわけなかろうがっ！」

まだまだ未知数で、行き先不明の不思議な世界を、俺は歩き出している。

突然だけれども、ゲームの世界に入ってみたい――そんな願望を持つ人は居ないだろうか？

そのゲームのジャンルもスポーツ・バトル・ＲＰＧ・ギャルゲなどなど……プレイしてみて「ああ自分が主人公だったらなぁ」と思ったことがないだろうか？

え、ない……それを言われてしまってはこの話は終わってしまうのだけども。もし……もしもの話だが、ゲームの世界に本当に入れたらどう思う？

いや、だからゲームそのものに興味ないとか嘘でも言わないでくれよ。そりゃ自分が主人公かつヒーローになれるんだからそりゃ楽しいだろうと。

……ノリ悪いなぁ、主人公もヒーローもどうでもいい？　あんたはどれだけ無関心でいたいんだよ……

でもゲームの世界に入れたからってそう楽しいだけではないんだぜ？

え、経験者は語るみたいでウザい？　……いやいや経験者ですぅ、主人公になったことがあるんですぅ！

信じられないのも当たり前だよな……逆にそんなことを即刻信じられる奴は頭が沸いてるとしか思えないね。

だからといって、言う側の俺が頭が沸いてる訳ではないぞ？　それはない……長々ろうるさいか、そうだよな、ちょっとばかし長いよな、悪い悪い、まぁ纏めるよそろそろ。

俺はギャルゲーの世界に入った…いや、ギャルゲーの世界の主人公になりながらも普通の学生としても暮らしていた。

正確というか、実際には俺がギャルゲーの世界には入っていないな。ギャルゲーの世界が自分の日常にやってきた……という感じか。

ギャルゲーの世界と今までの日常がミックスされて、もう訳がわからなくなるような日々を過ごしてきた訳だ。

……おっと言い忘れていた、ギャルゲーはギャルゲーでも――シナリオやキャラクターやシステム……がボロボロに崩壊した「クソゲー」というちょっとばかし厄介な代物だった。

おかげで散々な目にもあったし、役得もあれば、時には教えられることもあった。

まぁ前段もここまでして、忙しくなければ俺の話す……ちょっとファンタジー風味も感じる実体験を聞いてほしい――

第０１１話　１－１１　プロローグのプロローグ（終）（後書き）

（終）と書いてありますがまだまだ続きます。

１１０９１０

プロローグのプロローグから進む日常、始まりの時。までの「1から7のダイジェスト。」第１００部に追加しました。

√1に飛びたい方や、どんな話だったか思いだしたい時にオススメですー

キャラクター紹介（随時更新）　※２０１１年１２月３１日更新（前書き）

上野桜追加

（１２月２９日　挿絵挿入てす）

キャラクター紹介（随時更新）　※２０１１年１２月３１日更新

キャラクター（本更新版では半分以上が埋まっています）

＞ｉ１６３５０―５７６＜（タイトルコール風の下書き）

※注意

●は「主に人物達の関係及び所属の枠組み」を指します。

▽は［リアル人物］の［男性］を指します。
▼は［ゲーム人物］の［男性］を指します。
△は［リアル人物］の［女性］を指します。
▲は［ゲーム人物］の［女性］を指します。
◇は良く分からない人物を指し、次いで性別として男性を指す▽又は女性を指す△が付いています。

■特徴Ａは主に「客観的で表面的な特徴」を指します。
□特徴Ｂは主に「主観的で内面的な特徴」を指します。

立ち位置は「その登場人物の置かれている状況」を指します。
一人称はそのままで「自分を称す際のものです」
ユ呼は「ユウジの呼び方」

「髪」は髪色と長さ、髪型を指します。
「体」はその人物のスタイルや身体的特徴を指します。当たり前ですが女性のみ存在。
「特徴」はＡとＢの総括したその人物の印象のようなものです。

●下之家

主人公こと下之ユウジの家族です。
ゲーム起動前は母親・長男・長、次女。起動後は母親・義父・長男・長、次、三女・義妹（長女と次女の間）居候。で構成されます。

▽下之（シモノ）　祐二（ユウジ）

立ち位置［主人公A］
一人称［俺］

□特徴A

一般人を目指したが友人二人のせいでオタク色に染まてしまった残念な男子高校生。
適当に絵に釣られて購入した安物のＰＣゲームを起動するとバグのようなものでパソコンが浸食される事態が起こり。なすがままに作業を進めて「スタート」をクリックしたところ――
世界は何故かギャルゲーの世界に変わっていた。そして主人公は何故か彼。

■特徴B

楽天的な性格に見えて、過去のことが影響してネガティブ思考。
桐やミナを鬱陶しいように煙たがるが、実際のところは照れてるだけで結構好きなんじゃ――
ユキとホニＬＯＶＥで、心の内を吐露している場面は少し気持ちが悪い。姫城もなんだかんだ
ユウジの心を開いて皆に晒したらその秘めたる変態性に十中八苦ひかれること請けあいだろう（？）

と、いうことでスク水フェチ↓√Ｚ－５０など

▲下之（シモノ）　桐（キリ）

立ち位置［妹１、妹ヒロイン、主人公Ｂ］
一人称［私／わし］
ユ呼［ユウジ・お主］

□特徴Ａ
見た目に幼さが残るけど、それが魅力なヒロイン。人懐っこく、兄が大好き。

■特徴Ｂ
主人公が二番目に遭遇したヒロイン。設定上は妹。
主人公と話すときのみ、古い喋り方になる。
唯一リセット後に記憶が残り、さらに攻略情報を持っている。
更に桐曰く「２０もの特殊能力」があるとかないとか……役に立つ日が来るんですか、ソレは。

ユウジに向かって幾度となく猛烈アタックをしかけるが一切相手にされてない。
ユウジにとってはギャグみたいなものになっている。

趣味はユウジを弄ぶこと。

＞ｉ２７３９１―５７６＜※リニューアル予定

△下之（シモノ）　美奈（ミナ）

立ち位置［姉、●●●］
一人称［私］
ユ呼［ユウくん］
髪［茶ロング］体［スタイル良好、胸は大きめ］特徴［重度のブラコン］

□特徴Ａ
ユウジの姉、ということからユウジからは姉貴と呼ばれている。
根っからのユウジラヴで、一線を越えてしまいかねない勢い。ユウジ事以外は基本的に人格者であり、しっかりとしたお姉ちゃんである。
√2でお酒に弱いという特性……ならぬお約束が発覚した。

■特徴Ｂ
超ブラコン。学校だろうが商店街だろうが姉弟を超えたスキンシップにユウジさんも引き気味。
ユウジに幼少期の写真を集めたアルバムを愛用。

好きなモノ、ユウジ。

＞ｉ２７２９６―５７６＜

△下之（シモノ）　美優（ミユ）

立ち位置［妹、●●●●、〇〇〇〇］
一人称［私］

ユ呼［ユウ兄］
髪［黒超ロング］体［普通］特徴［ヒッキー］

□特徴Ａ
引き籠りのユウジの妹。根暗気味で暗い部屋に一人ずっと籠っている。

■特徴Ｂ
ブラコン気質あり。

［？？？］
（？？？）

●藍浜高等学校一年二組クラスメイト
藍浜高等学校の一年二組に所属するクラスメイトの中での登場人物です。
ゲーム起動前の”既存の関係”と起動後の”追加された関係”の二種類の登場人物が存在します。

▲篠文（シノフミ）　由紀（ユキ）挿絵有り

立ち位置［幼馴染、学校アイドル］
一人称［ユキ（初期）→私］
ユ呼［ユウジ］
髪［黒色ポニー］体［スタイル良し、胸はそれなり］特徴［幼馴

染］

□特徴Ａ
小さい頃から主人公の傍に居る幼馴染。
明るく環境に溶け込み易い上、男子からの人気は高い。
主人公の時々されることにドキっとすることがあるとかないとか。

■特徴Ｂ
開始３分で交通事故に会うというトラウマを主人公に植え付けた。
それと結構な辛い物好き、あと怪談及び怖い話には滅法強い。
√２では姫城と早くに仲が良くなり、ホニさん対抗共同戦線を張っているような張っていないような。

最近スパイス関連でネタキャラにされる。でも可愛いからいいんじゃないかな？

（１２月２７日　挿絵みてみん対応てす）

ユキ　キャラデザ案
＞ｉ２７２９３―５７６＜
※後日スキャンし直し

＞ｉ２７４０１―５７６＜
※リニューアル前

ユキ　テスト
＞ｉ８６１６―５７６＜
※リニューアル予定

＞ｉ２７３９８―５７６＜

※リニューアル前

カラーイラスト修正版
＞ｉ１６１９４―５７６＜

▲姫城（ヒメキ）　舞（マイ）

立ち位置［ヤンデレヒロイン、学校アイドル］
一人称［私］
ユ呼［ユウジ様］
髪［黒色ストレート］体［スレンダーながらも出ること出るなグラマラス、胸は大きい］特徴［ヤンデレ］

□特徴Ａ
容姿端麗、学力優秀の言葉が似合う。
欠点の無さそうな彼女だが、あることになると性格が急変して……

■特徴Ｂ
ヤンデレだけど根は一般人。なぜか宝刀を何本も持っている。
√１ヒロイン、後半には大分ヤミ要素が緩和されて普通に可愛い気がする。
√２でははやくにユキと仲良くなり、ホニさん対抗の為の共同戦線を張っているとか張っていないとか。

好きなものは、ユウジ。元ユウジファンクラブゼロナンバー

マイ　キャラデザ案
＞ｉ８６１４―５７６＜※リニューアル予定

＞ｉ２７２９４―５７６＜

▲福島（フクシマ）　戸夏（コナツ）

立ち位置［生徒会会計、体育会系］
一人称［私］
ユ呼［下之→ユウジ］
髪［］体［］特徴［］

■特徴Ｂ

同じクラスの生徒なのに何故かユウジと遭遇しない、はっきり言って空気。
というか生徒会の場面が少なくて、本当にヤバイ……出番完全糸冬了のお知らせ（√２）

シナリオカットの噂が出るほどに存在が希薄。

▲愛坂（アイサカ）　ひだまり

立ち位置［保健委員］
一人称［自分、私］
ユ呼［下之君］
髪［］体［スレンダーで作中で珍しくツルペタ］特徴［エロ委員］

■特徴Ｂ

保健委員で手当が得意……というか傷や怪我の手当てをさせたら学校の保健医をも凌ぐとか凌がないとか。
しかし、成長期で興味津津なお年頃。　最近男の体に興味を持っ

ており、事あるごとにユウジを脱がせようとする。
√1の中盤からレギュラーに、ちなみにひだまりのルートはありません（キリッ）
√2は話の都合上今後出てくる機会はほぼ無いと言っていいでしょうね（キリッ）

福島より出番が多い。

▲金沢（カネサワ）　文子（フミコ）

立ち位置［読書家］
一［］
髪［］体［］特徴［］

■特徴B
読書家で√3では読書しながら短距離走一位の快挙をなしとげる。

▲笹川（ササガワ）　初華（ウイカ）

立ち位置［風紀委員］
一［］
髪［］体［］特徴［］

△巳原（ミハラ）　柚衣（ユイ）

立ち位置［オタク、友人女］
一人称［不定（通常時はアタシ）］

ユ呼［ユウジ］
髪［茶色セミショート］体［平均値は超えるスタイルの良さ］特徴［グルグル眼鏡で台無し］

■特徴Ｂ
ユウジの中学時代からの友人で女子なのに、根っからのオタク。
腐女子とは違い、どちらかというと美少女モノを好む。
オタクキャラを通す理由が実はあり……攻めるのは得意だが、攻められるのには弱い。実は照れ屋。

ユイかわいいよユイ。

＞ｉ２７２９７―５７６＜

立ち位置［オタク、友人男］
一人称［俺］

オタクな男。
猟奇かつミステリーマニア（オタクと言わないのが優しさ）
キャラが薄い、というか登場回数は減少の一途を辿っている。
最近存在しているのに台詞が露骨にカットされがち。

△上野（ウエノ）　桜（サクラ）

立ち位置［？？？］

▽高橋（タカハシ）　政弘（マサヒロ）

一人称［？］
ユ呼［？］
髪［］体［］特徴［毒舌］

□特徴Ａ
↓※ネタバレにつき後述する「ネタバレなキャラ設定√3」にて。

△嵩鳥（タカトリ）　真菜香（マナカ）

立ち位置［委員長］
一人称［私］
ユ呼［下之くん］
髪［濃茶ロング］体［悪くない］特徴［眼鏡］

□特徴Ａ
かなりおとなしめで自己主張が少ない。クラスの仕事をかなり引き受けてしまう、断るのが苦手。

■特徴Ｂ
ユウジと同じ中学で更に今回合わせて４年連続同じクラス……最近見ないね。
体育祭での競技決めでノリの良さが伺い知れる。特徴Ａの設定意味ない？

◇▽？？？

立ち位置［？？？］

↓［スピンオフ　アル死ニ神トノ平和ナル日常］

△［クラスメイトＡペア］高坂（コウサカ）　美殊（ミコト）・霧島（キリシマ）　愛美（アユミ）

立ち位置［百合］

↓［スピンオフ　親友以上のアブノーマル。～ｃｒａｚｙ　ｌｏｖｅ～＜Ｒ－１５＞＜ガールズラブ＞］

△クラスメイトＢペア

立ち位置［普通］

▽クラスメイトＣペア

立ち位置［熱血野郎］

▽△クラスメイトＤペア

立ち位置［忍者］

●藍浜高等学校所属者（一年二組以外）

藍浜高等学校の一年二組所属者を除いた登場人物です。

同学年や上級生などを指します。

▲オルリス＝クランナ

一人称［私／わたくし］
ユ呼（した）［下］
髪［金ストレート］体［良い］特徴［］

□特徴Ａ
金髪でかなりお嬢様気質なヒロイン。

■特徴Ｂ
ＧＡＹＭ版（以前クソゲヱの投稿されていたサイト、現在は消滅）から性格が改変……されたのか？
√２では名前さえも登場しない、ヒロインの一人なのにこの不遇さはなんだろう。

√３でやっとヒロイン！　だが完全にアレのオマージュ（笑）
好きなモノは日本的なこと。方向オンチで意地っぱり。

▲雨澄（アマスミ）　和（ヨリ）

立ち位置［※ネタバレ］
一人称［私］
ユ呼［］
髪［深緑色ロングサイド］体［］特徴［瞳に宿る明確な拒絶］

□特徴Ａ
ユウジがすれ違いざまに気になった女子生徒。ユウジ曰く美しく上品な印象、そんな中での異質な空気感にユウジも戸惑いを隠せない。

■特徴Ｂ
→※ネタバレにつき後述する「ネタバレなキャラ設定」にて。

◇△井口（イグチ）??

立ち位置［文化祭実行委員］
一人称［私］
ユ呼［ユウジさん］
髪［］体［］特徴［おとなしめ］

□特徴Ａ
口数が少なく、前髪で表情が隠れがち。
文化祭実行委員にさせられるも、そこで生徒会仕事に奔走するユウジと出会う。
ユウジとは中学校時代に面識があるようだが――

■特徴Ｂ

◇▽杉谷（スギタニ）

□特徴Ａ
非公式新聞こと「アイパマ新聞」の新聞部部長。かなり危ういところまで情報収集している。
決してダ・●ーポの杉●ではない。
まだはっちゃけてないだけで学園祭侵略みたいなことを計画しているとかは断じてない。

■特徴Ｂ
しちゃった。

◇▽○○↑一応「○○」これが名前

□特徴Ａ
体育祭委員の一人でユウジと同じ学年。しかし謎のハイスペックを誇っている。

●藍浜高等学校生徒会
藍浜高等学校に設けられた生徒会の所属メンバーです。
クソゲヱリスタート！にてアスカとチサのヒロイン昇格が決定しています。

▲葉桜（ハザクラ）　飛鳥（アスカ）

立ち位置［生徒会生徒会長代行］
一人称［私］
ユ呼［シモノ］
髪［赤ショート］体［少女体型］特徴［ロリ会長］

■特徴Ｂ
ロリな会長、しかし序盤は空気。
完全にラジオ以外出番無し、もう生徒会とはなんだったのか状態だよね。
ラジオも完全になし、√2ではフラグ完全終了でもはやなんで出てきたの？

▲紅（アカツキ）　知沙（チサ）

立ち位置［生徒会書記］
一人称［私］
ユ呼［ユウ］
髪［深青ロング］体［スレンダーでグラマラス］特徴［腹黒］

■特徴Ｂ
腹黒書記。数回で出たのみでイマイチキャラが掴めない……と思ったら、普通に腹黒だった。
生徒会フラグどころか転校生フラグもへし折ったので今後（√２では）出番はないと思われる。

福島　戸夏
下之　ユウジ
下之　美奈
巳原　ユィ

●その他
下之家の正式な親族でなく、藍浜高等学校に生徒として所属もしていない人物が挙げられます。

▲ホニ様（サマ）

立ち位置［作物を司る神、主人公Ｄ］
一人称［我］
髪［超黒ロング］体［背は女子中学生、出るところは成長］特徴

［昼ドラ好き］

■特徴Ｂ

肝試し的な話　終盤から登場。

「我」という一人称以外はさながら（見た目）普通の女子中学生である。

何百年も生きていて、知識こそ多いものの現代知識は変な方向に偏っている。

自分の体を”仮初めの肉体”（√２－１９参照）と言いう意味深な発言を残している。

好きなものは「煎餅と昼ドラ」なんとも奥様風というか……なんというか。

↓時　陽子（√２ネタバレ）は後述「ネタバレなキャラ設定」にて。

＞ｉ２７２９５－５７６＜

◇ユミジ（旧・夢の中の女子生徒）

立ち位置［電波さん？］

一人称［私］

ユ呼［下之ユウジ］

髪［前髪隠れの緑ロング］体［不明］特徴［不明］

■特徴Ｂ

ユウジの夢の中にて登場する女子生徒。緑髪だが前述の「深緑髪の女」とは別人である、それは確実に。

この齟齬はスタッフの容姿設定の粗さが露呈した結果だが、今後

の展開に響くので無理やりにでも納得してください。
こちらの女性は青を基調とした深緑。前述の雨澄和は緑を基調とした抹茶に近い。
分かりにくいですね。

▽店長（テンチョー）

立ち位置［ゲームショップキッド店長］

√1にて登場、面倒見がよくアニメやギャルゲへの熱意に満ちている。
ムチムチマッチョ。

◇△ナレーター（仮）

立ち位置［（都合の良い時に召喚される）ナレーション］

一［私］

■特徴B
たまに話に横やりを入れる誰かさん、イメージ的には天声●吾の天の声風。
初期に比べ中盤から仕事意識が無くなり、終盤ではほぼ消失。
ナレーターの存在意義が、説明役なユウジが暴走した時だけという……

◇△創造神（ソウゾウシン）

立ち位置［元ＧＡＹＭ版作者（降板）］

一［自分］

■特徴Ｂ

本作には出てこないが情けで載せた。

●ＧＡＹＭ時代クソゲヱリスタート！ヒロイン募集企画（２０１０?年?５?月?２０?日）

文字通りＧＡＹＭという小説サイト（現、消滅）でヒロイン募集を行って集まったヒロインの設定です。

クソゲヱリミックス！完結後の続編としてクソゲヱリスタート！を連載予定、その追加ヒロインとなります。

△咲夜（サクヤ）

立ち位置［藍浜中学校三年?組］

一人称［?］

髪［銀ロング］体［普通］特徴［美術部、おとなしめ、絵が崩壊的に下手］

■特徴Ｂ

物静かだが信頼した相手に対しては積極的に接する。

腰まで伸びる銀色の髪。髪型はストレートヘアー。スタイルは一般的。

絵が崩壊的に下手。

特記［マーボー豆腐星人さん考案・クソゲヱリスタート！追加予定ヒロイン］

△零（レイ）

立ち位置［藍浜中学校三年?組］

一人称［?］

髪［茶ショート黒混じり］体［スレンダー］特徴［ソフトボール部、ピッチャー］

■特徴B

勉強はさっぱり。成績簿にはあひるが並んでいることだろう。喧嘩はほとんどしないが、握力と腕ずもうはクラスの女子一。

女子とは普通に会話をするが、小学校四年生の頃から男子と話していない為男子との会話はしどろもどろ。ほとんど喋ることはない。筋力はもしかしたらクラス一かも……。

特記［ＪＡＭさん考案・クソゲヱリスタート!追加予定ヒロイン］

●以降ネタバレなキャラ設定

主に√1以降でキーパーソンとなり話しのネタバレを含む登場人物の設定です。

各√ごとの登場人物設定によるネタバレにご注意ください。

√1

▲佐藤（サトウ）　ハナ

■特徴B

姫城舞の母方の祖母に当たる人物、√1終盤で登場。
両親が亡くなった後にマイを育てたのは他ならぬ佐藤夫妻である。
なんでも言う事を聞く利口な子だけど、自分の感情を表に出さないマイに少なからず不安を感じていた

√2

●アロンツ

異（コトナリ）と呼ばれるこの世の異を消す者達。
神も悪魔も天使でさえも、この世にとって存在するはずのないモノがいれば消しに行く。
それぞれ［神］に授けられた異能力を持つ（例：装填不要の弓矢）

▲雨澄（アマスミ）　和（ヨリ）

立ち位置［異能力者”弓使い”］
一人称［私］
髪［深緑色ロングサイド］体［］特徴［瞳に宿る明確な拒絶］

■特徴B

正体はホニ様などの”異（コトナリ）”と呼ばれるこの世での異端を消す為に存在する異能力者。

神様から悪魔まで、人と圧倒的に異なる要素があれば消すのが使命。

しかし√2では返り討ちにされ情報を吐かされた上に記憶を消され、仲間曰く夏の終わりに力尽きた。

▲銃使い

銃使い、二丁拳銃を有する。ユウジを打ち負かすもホニ様に敗北。

▲剣使い

剣使い、背負い体格以上にある大剣を有する。ユウジとホニ様を一度殺すものの［ユウジの記憶残存］していた二度目ではユウジの手によって殺された。

●その他

▲時（トキ）　陽子（ヨーコ）

立ち位置［ホニ様の中の人］

一人称［私］

ユ呼［ユウジ→ユウ］

髪［栗色ショート（現在は黒髪超ロング）］体［ホニ様に同じ］
特徴［さっぱりとした性格］

■特徴Ｂ

ホニ様の中の人。詳しく言えばホニ様が憑いていた体の本来の持ち主。

転校の為に引っ越して来た直後に両親を失くし、その他誰も引き取り手がいないが為に施設に預けられようとしたところを逃走し力尽きる。

飢え死ぬ直前にホニさんに憑かれることでなんとか一命を取り留め、ユウジと出会うまでは［存在を維持する力］を最小限に留めて力の消耗を抑えた。

ホニ様から見える景色を全てみてきており、殺された場面も（二度目では覚えていない）ユウジの行動も全て把握している。

ホニ様との意思疎通も出来ることもあって、たまに脳内会議をしていた模様。

√2終了以降はどのような扱いなのかは不明。

▲ホニ様（サマ）

時陽子の体を使って存在していた神様。

√2－99で記憶を維持したまま次の物語を迎えることになった。

√a

√3

△上野（ウエノ）　桜（サクラ）

お□特徴Ａ

ユウジの現実での幼馴染。

現在は藍浜町にいないらしく、ユウジの初恋の相手。

√予告

√3＝√6

『いいかげんにしてほしいですわ！』

ごめんなさい

『まったく、あなたはなぜそこまで……』

そりゃさ、放っとけるわけねーだろよ

√b

『私はずっと傍にいたんだよ？』

おい……どういうことだよ

『うれしい、ふふっ』

そりゃよござんした

√4＝√2

まて、桐

『――誰も私を救わない、誰も私を救えない』

俺は、強欲にも全部守ってやる……！

『――これで、いいのか？』

√c

『真打ち登場ですね』

いやいやいや、なんでそんなことになってるんだよ！

『流石主人公なだけはありますね』

……お前が――だったんだな

√5

『聞いていて面白いことばかりです』

……っと

『この言葉（てがみ）を交わすのが私は楽しいんですよ？』

俺はやり直すぞ

√？

そろそろ忘れるべきなんだろうな。
そもそも俺は――何も言わずに去られるほどには嫌われてしまったのだから・

あー……告白なんてするんじゃなかった。

√7＝√1

『私はずっとユウジが好きだったよ。それでこれからも好き。そしてみんな私は知ってる。ユウジがどれだけ――だからもう無理しないで、少しは私も頼ってよ』

A軸

２００９年　クソゲヱリメンバー！（クソリミ内に組み込み予定）

２０１０年　クソゲヱリミックス！・アル死ニ神
２０１１年　クソゲヱリスタート！（クソゲヱ終了後連載予定）
２０２１年　ぜにそせ［ファーストプラス（現実投影ソフトウェア）・セカンドデイズ（仮想投影ソフトウェア）］

仮想を現実へ

現実を仮想へ

Real&2D

第０１２話　２－１　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

３．１３　今回の更新で男女別「」方式を全て修正出来たはずです

第012話　2－1　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

「さてと」

そう少し疲れ気味に呟きながら家の玄関を出た。

「（フラグ立て……好感度を上げる為に早めに家の前で待っているか）」

桐の忌々しい妨害がありながらも朝食と登校の支度がスムーズに進み、結果的にユキの来る時間よりも早く家を出れた。そんでもって現在は自宅の門前にてユキを待っている。

「（それにしても第三のヒロインってどんな人なんだろうな）」

『第三のヒロインのイベントが発生する』

桐の昨日言ったことだ。第三というと桐自身とユキから数えて第三という解釈で合っているだろう。出来ればイベント発生前にそのキャラクターの容姿や性格（桐曰く難ありだが宛てにしてはいけない）を知りたかったのだが。

前日のネットサーフィンで調べていたものの、公式ページどころか掲示板でさえユキの本名以外のキャラクター情報を得ることは出来なかった。

というか、公式については、すでにページが消滅していたのだ。

表示されているのは真っ白の画面に「ＮｏｔＦｏｕｎｄ」という文字が淡々と並んでいるのみだった。

それに『でもあの　ルートだけはよかった気がする」「確かあの　ルートは外部の人だろ』　掲示板の書き込みの二文字で、改めて確認するとなにやら文字が抜けている部分がある。それは俺のコピペミスではなく、元からその文字は消えていた。”〇〇ルート”ということからおそらく二文字名のキャラクターの名前が入るのだろう。

不可解過ぎる二つの事象。”調べることができないキャラクター”に”不自然な抜け字の書き込み”それはまるで俺に情報を与えないように知られないように意図的に隠しているようにも見えた。

「ユウジー！」

そんなことを考えていると俺が心待ちにしていた幼馴染ことユキが手を振りって俺の名前呼びながら可愛らしい走り方で、美しい黒髪を揺らして駆けてきた。

「――――なんだよー！」
「まじで！　そうだったんか！」

そんな他愛もない会話をしていた反面、俺はさっきの問題を引きずっていた。情報が手に入らないことから、ユキのことをよく知れていない。そりゃまぁ俺にとっては昨日会ったばかり。しかしゲームの設定上は俺の”幼馴染”という位置づけとなっている。

その設定上は俺がそのユキの記憶に合わせる必要があるのだが、肝心の攻略情報が手に入らないのが結構な痛手だ。記憶の齟齬による”関係の崩壊”も恐れていたりする。主人公とのヒロインの関係の崩壊がどういうものを示すか――それは俺のゲームプレイの経験

から言えば、そのまま改善せずにいればバッドエンドへと直通だ。
それ故に、ユキがどんな性格をしてるか――は読みとるとして、その彼女の詳細を「幼馴染」という立場上知っておくべきである。なので早めに情報を知りたかったのだが……

公式や掲示板もアウト。説明書は何故か見つからない。今のところは完全に打つ手なし、お手上げ状態だ。さてさてどうしたものだろう……ユキとの会話を止めないまま、頭の片隅にそんなことを考えながら
いると、そんなこんなで学校へと着いた。
ちなみに今日は桐の妨害がないのでそのまま教室に直行できた、というか日常茶飯事エブリデイ来られてもこまる。来るというより俺への人的被害を鑑みて襲来と称すのが全うだろうけども――

「（!?）」

突然に何かの視線を感じた。昨日と同じノリなのだが、昨日の桐襲来後の男共以上に殺気だってるようにも感じる。その視線の存在を俺の触角が捉えた瞬間に鳥肌がブァァァと気持ちの悪いほどの早さで立ったことからその殺気の強さが分かる。

なんというか、気を抜いた瞬間何か金属製の鋭い物で背中辺りを刺されそうな気までしてくる。実際にそうなったら俺の人生がバッドエンドだが。
こう言っては不謹慎だがユキが交通事故に遭った場合はリセットされるけども、主人公という位置づけの俺が死んだらどうなるのだろう――と考えてしまったが、ダメだ。
もうあの光景は見たくない思い出したくない、こうしてユキと学校まで会話しながら来れるのがなによりも良い、というかユキを二度も三度も殺したくない。

それが俺が直接的な原因でなくとも、ゲーム故にやり直しが出来ても――生理的、本能的にそれは俺にとっては拒絶する。
だから俺はこれから間違いを犯さないよう、周囲の変動やユキ達の挙動や行動に細心の注意を払っていこうと思う。

来たのがまだ早い為か教室には思ったほど人はいなく。いるのは”あのメンバ”……つまりはユイとマサヒロと律儀にも早く来て復習しておこうという数人の真面目な生徒達だけ。
一応釘を刺しておくが、ユイとマサヒロは決して真面目などではない。一般人から見たらくだらなぁ～くきも～い軽蔑されるであろうであろうギャルゲやアニメ話をする為だけに早く来ている。
まぁ俺も今までは、そのくだらなぁ～くきも～いギャルゲアニメ談の輪に加わって話していたので、人のことは一切言えない。、
……で、視線について教室を見渡すも何かを見つめているような不審な人物はいない。しかし感じるのは三種のチーズも驚きな濃厚な視線。

なにこれこわい。このストーカーまさかのプロの方なんですかい？
……冗談はさておき、いや冗談じゃないかもしんないけど。実際その視線は存外に怖いもので、それから逃げるようにユキを連れてユイとマサヒロの話の輪に加わった。

第013話　2－2　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

休み時間。
美術授業での移動教室で美術室への階段へと急ぐ俺とユキの二人。
ちなみに俺らの教室である一年三組は、一階に位置するが美術室は四階に存在する。
階段を伝ってしか上階には上がれない、公立でこんな地方の町の高校では果てしなく妥当な階段設備のみの移動手段故に三階分の階段を上り切るしか上階へと行く手段はないのだ。

「急いでユウジっ」
「ああ、わかってる！」

そんでもって俺らは、片手に筆箱と美術の教科書を持ちながら階段を二段飛ばしで上っていた。

「ユウジが教科書ちゃんと用意しておかないからだよー」
「いや、すまんかったー」

そうなのだ。ユキの言う通り俺に非があった。

種類問わず押し込まれたブラックホール、否、異次元空間（要すれば整理されてない）と化した机の中には、様々なプリントや教科書ノート資料集が入り混じていて。美術の授業は週二しかないために頻度が低く必然的に基本教科が上へ、その使用頻度の違いによって下へ追いやられていた。そのせいあって教科書をその机から抜き出すのに時間を要したという次第。
それに加えてさきほどのストーカー視線問題を引きずり、今まで

の記憶の中で恨みを買うような事柄を洗いざらい思い出していた。
案の定一切思い当たりは無くただ無駄な時間を過ごすことになったのだが。
　そうして次が移動教室なのも忘れ、ぼーっと机に頬杖をかいていたのが遅れた原因だった。ユキに呼びかけられなかったら完全に忘れていただろう。

　まぁそんな階段ダッシュの賜物か、チャイムが鳴る１０秒前に美術室に滑り込めた。うーん、危ない危ない。隣に居る、走ってきたせいで息を荒くするユキに「ごめんっ」と手を合わせて俺は謝った。
　で、美術の授業も卒なくこなし、終了のチャイムとともに授業は終わりを迎えたのだが――

「ユウジはやく！」
「わかってる、わかってる」

　準備が遅い人は片付けも遅い、案外多いパターンだろう。自己擁護してんじゃねぇ？　……反省してます。

「よしおわったっ」
「うんっ！　じゃあダッシュ」

　ユキは足踏みしながら待っている。なんとも準備は万端だ。行きもそうだが帰りもユイとマサヒロは「じゃあ僕らは先に行く」「我は描きたいのだオニャノコをっ！」とか言って無情にも世の中は冷たいなあと思いつつも先に行っている。
　帰りも「僕らは先に行かせてもらおう」「今度は文章体の何かを読みたい衝動に駆られているっ！　さらばだっ」と言ってチャイムが鳴れば予め十分な授業内容を行った後に速やかな片付けを実行の

後に教室に撤収していった。
もう二人には休み時間に対しての謎の行動力を見せつけられている。どれだけ自分の時間が欲しいのかと。

結局片付けのかなり遅い俺はユキを待たせ、いつのまにか残っているのは俺とユキの二人のみになっていた。
あれは授業に熱中し過ぎて授業内に片付けを遂行出来なかったのが主な要因なんだよな……次回から時計の時間を気にしよう。

「あと一分半かっ」

気付くと次の授業まで1分半を切っていた。しかしまだ階段を1階分さえ降り切れていない……これは微妙にある脚力を発揮せねば！

「あっ、ユウジはやいっ！」

くそお遅れてたまるか！　ちなみに遅れた分は”遅刻”としてカウントされる。遅刻二回で欠席一つ分というなので単位を取るためにはかなりに侮れない。
ユキが若干遅れているがやむを得ない……いや、後で頭を下げて謝ろう。じゃあ待ってやれよ？　遅刻ごときで欠席半回分も使っちまったら……普通にズル休み出来ないだろ！
というヘタレ主人公もびっくりな外道振りを披露している俺は、更に付け加えて――

「俺のせいだが、急ぐぞっ」

スーパーなゲス野郎である。思えばなんてサイテー野郎だろうか、こんな奴は馬に蹴られて●ねばいいよ……あとで●んできます。

なんて遅刻と最悪な主人公行動の思考板挟みによって混乱している最中、後ろで何か声が聞こえる――

「下りでそんなはやく走れな――あ」

その時、ユキの言葉が途絶えたのには理由があった。最後に付いた言葉の「あ」を不審に思い恐る恐る後ろを振り返ると――

「――――っ！」

なんと表現をすればいいだろうか……ユキが浮いていた。と、でも言えばいいのだろうか。人は空中飛行を成す技術を手に入れたのか？

……冗談を考えても仕方ないので階段を踏み外したか、階段の滑り止め用ゴムシートの僅かな段差に躓いたのだろう。そしてユキの影は俺に向い――

「危なっ」

ドガッ――という音こそなかったが、結構な衝撃。いくら女の子は羽のような重さとは言いそうだが、人が衝突するのだから、案外クルものがある。

「……」

気づくと俺はユキを地面へ落とさぬようにユキを抱きかかえながら宙で放物線を描いてから、地面へとぶつかる鈍い音と共に俺は地面に腰で着地した。

「つっっっ」

俺は腰を思いきりタイルの床にぶつけている訳で言い知れない鈍痛が俺を襲う。しかし大事には至ってはいないようで痛みは直ぐに癒えてゆく。

ユキが（失礼かもしれないが）思いのほか軽かったのが俺にとって良かったのかもしれない。

「～～～～っ」

ユキが目を瞑りながら唸っている。

「ユキ大丈夫かっ？」

もしかしてどこかに体をぶつけたのだろうか？　そんな不安に駆られる中。

「……へ？　ユウジ？　え？　えっ？』

何か辺りを見回しながら混乱していた。俺はどうしたものかと周りを見渡すと。

「！」

そして今状況を理解する。座っているとはいえユキが俺に抱きつくような体制になっていたのだ。それは俺にも言えることで、俺がユキに抱きついているようにも見える。

ベタだ。ベタ通り過ぎてヴェタだ。昔にビデオ戦争で敗北したのはベータマッ●スだ。でもそれがユキの神経を刺激したようで……

「あわわわわわっ！　えええ、えととと！」

ユキの言語機能が壊れてしまった。ユキは顔を真っ赤にして――

「ごめ、ごめんねっユユユウジ！　け、けけけけがしてない？　だ、だいじょぶ？」

その余りのあわてぶりに俺もつられてしまい――

「いやっ！　大丈夫っ！　元気！　生きてる！　うん！」

こう冷静に考察してても、実は相当俺もパニくっている。抱きつくという行為自体初めての童貞野郎には刺激が強いもので、なにか女の子のいい香りが……はっ！？

までや、この状況を生徒どころか教師に見られたら！？　というかそれ以前に――

「す、すまんっ」

と謝りユキから直ぐに離れる

「こちらこそごめんっ！　た、助けてくれたんだよね！？」

「い、いやっ！　うん！　まあ、なりゆきだけども！」

思わず肯定しちゃったよ。自然にユキを抱きかかえちゃっただけなのに。

「……そっか、ありがと」

「あ、ああ」

「……」

「……」

あ、あれ？　いきなし？　なにこの微妙にもどかしい空気、凄いこそばゆいんだが。ええと、さぁどうすればいい！

『キーンコーン』

チャイムの音で、俺は平静を取り戻した。

「つ、次って数学Ⅰじゃねっ？」

「あ、うん急ごうっ！　ユウジ！」

と言って残りの階段を駆けていく俺とユキ。そしてチャイムが鳴り終わった三十秒後。教室に滑り込みするが数学担任の姿はなく。

「やぁー、ごめんごめん」

と、爽やか新米教師がその一分後に遅れてやってきたのだった。その爽やかさに俺の急いだことによって消費されたカロリー返せよと心の中で静かに呟いた。

階段を下りる際のユキの横顔は、少し赤く見えたが……「気のせいだな」の一言で俺は片づけ、授業の道具をそそくさと机（異次元空間）から放り出した。

この時までには、おそらく”あの”視線が消えていた。さきほどの事件が衝撃的で、思考する余裕など無かったのだが、確実に今”第三ヒロイン”のフラグが立っていたと思う。

しかしそのことに気づくのは少し先で、それはもう手遅れだった。

第０１４話　２－３　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

……さて状況を説明しようか。

その説明と言ってもそこまで細かく状況を伝えられそうもない、この思考をする余裕さえも惜しいほどだ。

それで、じゃあお前は今どんな状況なのかと――そうだな、言うなれば。

現在俺は殺される一歩手前まで来ている。

なんかアブナイ薬とか毒を盛られてジワジワとじっくり体の中から殺されるとかではない。

喉元には鋭さを強調する眩いほどの金属光沢を放つ小型の折りたたみ式ナイフが突きつけられている。　ようするに頸動脈がピンチ、大量出血の危機到来だ。

「殺される」という表現から分かると思うだろうが、他者にナイフを付きつけられていて――

「あなたを殺せば……うふふふ」

これこそが、狂乱と言うのだろう。狂気に蝕まれた女生徒がナイフを右手に持ちながら妖艶に笑う。

なぜこんな事態になったか経緯というか、ちょっとした回想を入れたいと思う。

＊　＊

「むむぅ……」

いやぁ……あんなことでビビってたらこの先マズイ気がするんだよな。　あぁ……でも、女の子ってあんなに柔らかくて、いい匂いがするんだぁなぁ――っ！　げふんげふん！　まずい変な意味に聞こえるっ！　け、決してある特定の場所をさしているのではないぞ！　ユキ全体をだな！　……あぁ、墓穴掘ってるよなぁ。

……違うことを考えよう、うん。

「第三のヒロイン」のイベント。はてさていつイベントが発生するような事件があったのだろうか。イベントはたいてい何かが伏線となり、その伏線が活きてこそイベントが成立する（のはあくまで俺の独断と偏見）

例えばＲＰＧモノで、あるアイテムを初期に手に入れたはものの、その時点では全く役たたず。　最後のほうになってそのアイテムの真価が発揮されて物語が左右される。そんな例えで合っていると俺は思う。ようするに後々になって分かることなのだ。

で、そのような事件に遭遇していただろうか……まぁストーカーはされているけども。それによって突然その第三ヒロインに行動を起こさせることは無いだろうし。

なにか起爆剤のような事件が先にあるはず。しかし、そのヒロインとの接触が出来ていない。いや知らないだけでしてるのかもしれないが……やっぱりそんな事件は無かったはずだ。

「まぁ、大丈夫だろ」

気楽に考えときゃいいか、実際はギャルゲのキャラクター。そんなプレイヤーからの人気を落とすような性格設定はしないだろう。

「気晴らしに……トイレ行くか」

少し歩いたら気も晴れるだろ……あと数分しか休み時間はないし行ってくるかな。

「……さてと」

もう時間も残り少ないし教室に戻るか。男子トイレを抜け廊下に足を踏み出した瞬間だった。

バスッ――

「あ」

何かが首に入った、多分人の手だろう。首を強く打たれると、意識を失っていくのをドラマとかで見たことがある。それが今で、俺の意識は次第に――――

「はっ！？」

こ、ここはどこだっ！？　薄暗く明かりが点いていない。何か近くには段差のようなものと人影が見える。目が慣れ始めて視界がひらけると段々今の状況を理解出来始めた。

ここはどうにも見覚えが有り、すぐに思い出せば。昨日桐に連れていかれた一階から下へ続く階部分だ。

そしてその影の主がそこには居た――その主とは全く意外な人物

だった。

「姫城さん……？」

そこには清楚で長い黒髪を纏った。ユキとは違った大人しめで、違う綺麗さ可愛さを持った姫城さんがいた。

そんな風に評価しているのも、以前に筆箱を拾った時だけの印象のみで。あの一瞬で彼女は相当な美人だと俺は認識していた。

「な、なんで俺はここに？」

「……大丈夫ですか？」

階段に腰を抜かしたように座り込む姫城さんは心配してくれる。きっと、主に昨日のことで恨みを買った男子に襲撃されたのを姫城さんが助けてくれたのだろう。ああ、なんて優しい人なんだ――

「綺麗に首に入ったのでびっくりしました」

……へ？　何を言っているんだろうこの人は。助けてくれたという解釈でいいんだよな？　いやいや、こんな心配してくれた訳だし、きっと何か聞き間違いだろう。

「えと、姫城さん助けてくれたんだよな？」

「なんのことですか？」

なるほど気を使わしているのか。いやほんと姫城さんは優しいな――

「私が眠らせたんですよ？　……かわいい寝顔でした」

……あなたかっ！　あなただったのかよっ！

「あ、そういえば。ユウジ様を呼び出した理由があるんです』

「……なんでしょうか」

思わず低姿勢になり、恐る恐る聞いた。というか呼び出しの為に眠らせるって……なんというか強引な人だな。

「その理由はですね……」

次に出るであろう言葉は、平常な神経をしていれば言っていないであろう言葉で――

「あなたを殺すためです」

「は！？」

そういって姫城さんは女子のブレザーのポケットから折りたたみ式ナイフを取り出し、流れるように手慣れた仕草で刃を広げ俺の喉に突き当てた。

その間僅か五秒。殺しのプロだ。まさかこの学校に暗殺者が紛れているとは突飛な想像力を持つ変人以外予想すらしないだろう。

＊　＊

……で回想を終わり。そんで冒頭へ――

「な、なんでこんなことするんだよ！？　俺が何かしたのかっ！」

若干声が震えているのが自分でもわかる。そりゃ、死の淵を彷徨ってる訳だ。生死の境が近すぎるからさ……俺の命と寿命は、姫城さんが握っていると言っても過言ではない。

「あなたは罪作りな人ですね」

「え」

やっぱ、俺、何かしたのか！？　しかし記憶をひっくり返す余裕はない。

「私をこんなに虜にしてしまうなんて」

……イミガワカラナイデス。何故、虜にされたイコール殺すに繋がるのだろうか？

「ええと、言いそびれていました。ユウジ様私こと、姫城舞はあなたのことが好きです」

「えっ」

思わずドキッとしてしまう。女の子に、それも容姿端麗な娘に告白されるなんて……喉にナイフが突きつけられてなかったらどんなに心から喜べたことか。

なにこの最悪なタイミングの告白。素直に喜べないんですけど！

というか言い忘れるほどに軽いんですか、それは！

この崖っぷちの三途の川岸に立っている展開を覆す為にも……そうだ、弱気になっちゃいけない。反論してやればいい。

「なんで虜されたのが俺を殺すに理由に繋がるんだ？」

少し落ち着いてから強気に出てみた。というか当然の反論だけどね！　さぁその真意を聞こうじゃないか！

「それは簡単なことです。私はあなたに一目惚れして胸が切なくて切り裂かれるほどの苦しさを経験しました。すぐにあなたの傍に行きたい、と思っていた矢先」

一呼吸おいてから、彼女は言う。

「ユウジ様の彼女かと思われるものが現れたのです」

えっ、俺に彼女なんて居たの？　それは驚きだなぁ。

「それは……誰が？」

「しらばっくれても無駄です……篠文由紀さんのことですよ」

まじで！　そうなの！　やったー！　……って喜べるかっ！　そんな事実はねえから！　いや、本当にそうだったら俺はどれだけ嬉しいのかと、まあゲーム開始早々にもう惚れられるシナリオ展開もどうなんだ、と思われそうだが。ユキなら一向に構わん！　……だとしてもそんな事実は悲しきかな、ない訳で。なぜか姫城さんは誤解をしているようだ。

「いや、まて俺は付き合っていない」

「嘘です、私はあなたをずっと見ていました。そうですね、表現するとしたら熱い視線で舐めまわすように」

表現の部分は要らないです……っていうかこいつがストーカー女かっ！　そうか、合点がいった！

「そして今日の美術の授業帰りには……お互い抱きしめ合って……ッ！」

そ、それがこのイベント発生の起爆剤かっ！

「いや誤解なんだよ、あれはユキが階段で躓いて――」

「ゆ、ユキ！？　……うふふふ、あなたと篠文さんは名前で呼ぶ仲なのですね。　篠文さんもあなたを呼び捨てで呼んでいましたし……」

しまった、恐らく墓穴をさらに掘った。

「でもそれがなんで俺を殺す理由になるんだよ！」

「なります。本当なら篠文さんを闇討ちすればよいのですが」

……え、今なんて言いました？　闇討ちだとしたら……いつの時代の話？　……恐ろしいこと考えてるな、この人。

「でもユウジ様はとても魅力的です。きっとまたあなたの虜にされる者が現れると私は思うのです」

「……」

いや、どう反応すればいいんだよ「そ、そう？」なんて気軽に答えるほどに俺は自分の身を評価しないどころか、自分は正直コンプレックスの塊だから。こんな童貞男に付いてくる女子なんて、俺自身が行動起こさない限り天地が引っくり返ってもさらにもう一度回

転しても無理だろう……って、俺が何か告白すれば誰かは付いてきそうな言い方だな、それはないぞ、俺。幼馴染が居るだけでナルシスト入るとかどれだけ調子いいんだろうな俺は。

「なら虜にさせないように私のものにしてしまえばいいと私は考えました。殺して愛しいユウジ様の生首だけを持って私は生きて行くのです。決して邪魔されることのない、永遠の二人の時間が続くのです」

はい、それはおかしいと思いますがどうでしょう？　その思考的にも、常識的にも。生首って、おいおい……絶対この人病んでる。

「俺はそんな事の為に死にたくはないな」

死んでたまるかっ！　生首とか腐るだけだし！

「そうですか……なら方法を変えましょう」

あれ、意外とあっさり変えるんだな。

「私が自殺しますから、私の生首を持ってユウジ様と共に生きさせてください」

「だから、なんで結局どちらかの生首しか残らないんだよ！」

何故に生首オンリーなんだ……

「それがいいですね、そうすれば私の生首を気味悪がって他の女は

寄り付かないでしょうし。　それを構わない、という方がいたら呪い殺します」

手遅れでした。というか生首ＯＫなんて言う人はあなたぐらいかと思いますよ！　……でもここで殺される、殺させる訳にはいかない。俺は彼女を止めるんだ。

「では、ちゃんと事後処理を……」
「……まてよ」
「なんですか？　ユウジ様が死を選ぶのですか？」
「……」

一息を入れて。俺は思いっきり言ってやった、俺が言いたいことを。

彼女が言っていた自分理論と、この世界を少しも身ていない狭い視界。そしてあまりにひどい自分の扱いを――色々と俺は籠めて言い放つ。

「お前に、本当に死ぬ覚悟があるのか？」

第０１５話　２－４　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

６月２８日修正～

第０１５話　２－４　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

「お前に本当に死ぬ覚悟があるのか？」

確かめる。今までの言葉に嘘偽りなく本気だったのかを。

「……ありますよ。好きな人が他人に取られる痛みに比べれば、死ぬ痛みなんてマシなんです」

自分の首にナイフを付きたて芯の通った真っすぐな瞳で彼女は言う。その眼に迷いなど無く俺一人に見据えてくれていた。

そうか。ここまで本気で、そこまで俺を好いてくれてるのか……

それならお礼を言わなくちゃな。

「ありがとな」

「え」

姫城はその言葉の予想外さに驚き、一瞬呆然とする。そして再沸騰するようにして早口で。

「な、何故お礼を言われたのですか！？」

「気にしないでくれ」

「気にしますっ！」

その時の突き詰めてきた彼女はまさに生き生きしていた、生に満ちていた。ほら、話しているだけで現れた。

その表情はとても良いものじゃないか。

「……多少悔みたいこともありますが私はここで死のうと思います」

ナイフの刃先が首の皮に触れぷつりと弾け。血の玉が出来それが下へ流れて小さな深い赤色の一線を作る。彼女の覚悟は本当だった、俺はそう再認識する。だからこそ、俺は――

「今のお礼の理由を教えようと思ったのに、もう死ぬのか。残念だなあ」

そう、友人と話すようなノリで呟く。

「え？」

その言葉を聞いて、彼女は首からナイフを数センチ離した。効果はテキメンで、意識を外させた。

「死ぬんだったら、別にいいよな？」

もはや独り言にも聞こえるその言葉。しかしそれが姫城には気になって仕方なかったのだろう。

「よくないですっ！　教えてください！」

……やっぱりな。小さな釣り餌に大きな反応。おお、食いついてきた。

食いついてきた彼女の眼には、覚悟などではなく探究心や好奇心

に満ちている。

そして、俺は更に予想外なことを言い放ってやった。

「……馬鹿じゃねーの？」

「！」

実際言われた姫城はナイフを構えたまま呆気にとられている。

「え、えと、ユウジ様から言われるのはよいのですが」

いや、いいのかよ。

「それは一体どのような意味で？」

意味ねぇ……。

「姫城さんが俺のことを好きだと仮定して」

我ながら自意識過剰であろうとは思う。話の流れ上仮定しなければならないのだが。しかし返答はというと――

「確定してもらって結構です、っていうかしてください。よろしくお願いします」

「え　ああ、うん」

「あっ、ありがとうございます！」

おもいきしテンポ崩されたんだぜ。話が進まねえなあ……とにかく進行させないと。

「他人にとられる痛みに比べれば、死ぬ痛みなんてマシなんです……って言ったよな」

「はい、すごいですね！　一語一句合ってます！　流石ですユウジ様」

いや、だから、そんなツッコミいらんからな。そして顔を引き締めて俺は言う。

「それはただ痛みから逃げてるだけだ」

～思う、などと誤魔化すことなく。確固たる断定で。

「……いいえっ！　私はこうして死の痛みを選んで――」

「言い訳だな。死ぬ選択ならその痛みは一瞬だ。自分の妄想した思い通りの記憶と共に散れるのかもしれない。でもな――」

死の痛みを俺は知らない。そしてこれからも知ることがないのかもしれない。でもこれだけは言える――

「自分の妄想だけで、生きて、死んでいくのは本当に本望か？」

「っ！」

「思い出がなくていいのか？　それは、余りに悲しいんじゃないか？」

「……今の私を全否定するんですか」

彼女は途端にナイフを突き付けるポージングさえ崩さないものの俯いて、声をわざと低くするようにして呟いた。

「ああ、否定してやるねっ！　死んで一人楽になろうなんて考えてるお前みたいな大馬鹿者なんて全否定だよ！」

「な……」

「チャンスを探そうともせず、あーだからこーだからと勝手に理由付けして、諦めて死のうとしてる奴なんてただの負け組だ、今のお前はそうなんだよ！」

「そ、そこまで言うなんて……酷いです！」

酷い？　そりゃ酷く言い散らしてるからな。そうだ、いくら罵ってたとしても、俺がそして言いたいのはな――たった一つのことだ。

「だから、生きてみろよ」

「っ」

また驚きの表情を形作る……思ったよりも表情性豊かじゃないか。

「自分を否定されて、大馬鹿者とか負け組とか罵られて悔しかったら生きてみろよ」

「……」

「俺はお前を知らない。多分お前も俺を知らない」

「し、知ってます！　私は、この学校に来たあの日から――」

「それは俺のほんの一部だ。本来の俺は別人かもしれないぞ」

「！？」

「今の俺、お前を罵っている俺を想像出来たか？」
「い、いえ……」
「だからだよ。お前は俺を知らない、殆ど全くな」
知るはずがない。ただストーカーして外面だけの俺を見たって俺の本質が見える訳じゃない。
「……し、知りたいです」
「ん？」
「……知りたいですっ！　ユウジ様のことを！　教えてください！　ユウジ様のことをっ！」
彼女はかつてないほどの強い感情を露わにした。それは興味に溢れた感情。そう、それでいいんだ。
「それなら、同じ道を歩いて貰わないとな。一緒に話したり、飯したり、帰ったり。関係を持てば別のこともっと」
「べ、別のこと……？」
「それが知りたいならさ……生きていくしかないよな？」
そう問う。彼女は瞳を閉じて数秒にも満たないほどに思考するように。そして返ってきた言葉を聞く。
「はい……覚悟しました。これから生きていく覚悟をしました！」
「ああ、それで俺は良いと思うぞ」
姫城は首に付きたてていたナイフを腕ごと下ろし、更にナイフは手を離れて床に金属音を響かせて落ちた。

「……わかりました。ユウジ様の言う通りかもしれません。いえ、そうですね」

続けて彼女は言う。それを俺は黙って聞く。

「私にも傍にいたいという気持ちがありながら、奪われないために……独占欲が強すぎました、でも」

独占欲ねぇ……まぁ桐で慣れてるからなぁ。断然こっちの方が強いけど。

「――怖かったんです。一度手にしたものが、欲しかったものが、他の人に取られることが！　他人の手に渡ったらもう二度と返ってこない気がして」

……そういうことか。

「でも、私はやっと遅過ぎるぐらいに解りました」

独占欲もその恐怖への怯えから来たものだったんだな。

「ごめんなさい――」

顔を下げて涙声でしっかりとそう言った。隠された顔から一粒の水晶のように輝く透明の雫が、地面へ落ちていったのを俺は見逃さなかった。

「それと……ですね」

「ん？」

「ごめんなさい」

「？」

二度目の謝罪に思い当たる節がない俺は首を傾げる。

「私の告白は撤回します」

「え？」

……撤回？　あれぇ？　俺何か悪いこと言ったか？　……言いまくったな！　マジで言いまくったな！　ＯＨ……仕方ないか。

まあ、死なないで生きてくれるだけで。俺はそれでいいや。

「まだ私にはユウジ様を独占する権利はありませんでした……だから告白は撤回します」

「……まぁ姫城が、そう言うなら構わないぞ」

少し残念だったけどな！　そうして黒髪を揺らしながら姫城さんは階段を上って行く。　すると階段の半分ほどで立ち止まって彼女は振り返った。

そういえば、今「まだ」って……？

「でも私はまだ諦めません。いつかユウジ様が私に惹かれる日を待ち、いいえ……私が好きにさせてみせますから。私が魅力的な女性になった時は覚悟しておいてください」

そう笑顔で言い、姫城は駆けて行った。
その去り際に見せた彼女の笑顔が、今までで一番に魅力的だったことは今は黙っておこう。

「おーい、首の血止めておけよー」
「えっ……あ！　忘れてましたっ」

衝撃の事実……案外彼女は天然なのかもしれない。天然で自殺とかマジで止めてほしいぞ。

第０１６話　２－５　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

7月9日修正

第０１６話　２－５　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

俺の部屋にて。

姫城事件後は何も変わらないいつも通りのいたって普通の授業。
視線はもちろんはといえば消えていた。
諦めてくれたからだろうか？　……今思えば惜しいことをしたと思う。ゲームヒロインだからもちろんの美少女で学校の一二位を争うアイドル的存在なのだから。
もしかするとこれはゲームで言うフラグ折りなのか、もしかするとゲームオーバーという扱いなのかもしれない。
その後昼休みを迎え放課後になるものの姫城とは一切話すことも顔を合わせることもなく、彼女は直ぐに帰っていった。

そうして家に着き、ホッと胸を撫で下ろす瞬間が来るはずだったが……まぁお決まりだ。　俺の部屋にコイツだよ。
わかるよな？　そう、コイツ。
コイツは、不法侵入に罪悪感を一切感じないような堂々たる面持ちで、開口一番意味不明な事を呟いた。

「シリアスパートはウケが悪いな」

「は？」

家に着いた途端にコレだよ。

「よくあるものじゃ。ギャグ調で進めていたのはいいものの物語の

締めに入る為にシリアスを挿入する。未だ制作は勘違いしている、視聴者はそんなシリアス求めていないとなっ」

……その気持ちは分からないでもないが、それを言ったら深夜一クールアニメの大半を敵に回すから覚えておいた方がいい。

「というか、この話まだ序盤さえ抜け出せていないと思うんだが……」

もちろんゲームオーバーを迎えていなければの話だが。

「そりゃ”クソゲエ”じゃからな！」

だから嘘でも、お前がゆーなよ。登場人物からスタッフがそんな感想述べられたらどうする？

ショックのあまりに五年間原作を出さなく――ここのスタッフなら喜びそうだな。考えた俺が馬鹿でしたよ、ええ。

……桐という登場人物の発言を差し引いても、確かに俗に言われるクソゲー的な印象が垣間見られるのは確かだ。

まずはシナリオがおかしい事だな。

ゲーム開始数分で主人公に看取られながらヒロイン死亡バッドエンド。

タチが悪いぞスタッフ。。いや、ヒロインが死ぬって展開は王道だけどさ……開始早々死んだら感情移入どころじゃないじゃんか！

というか胸糞悪いわ！

更には、好きすぎて殺しにかかる。それを拒否すれば自殺しようとするヒロイン……いや、ヤンデレとか流行してるとはいえさぁ。人の死を軽く見過ぎだろうよ。

ご都合主義のゲームだから出来るけど、ダ○ーポの桜の奇跡とかH○○の精霊会議とかで人が生き返ったりなーんてこと現実にはないんだからな？

人が死んだら感動するなんておかしい話だぜ。

何故ならそういう死ぬ役目のキャラは”シナリオ”に殺されているんだからな。

まぁそれは大分譲歩して、割引いたとして。制作にとってはあくまで物語での演出の一材料で、例えその展開を使ったとしても終盤での使用が効果的で、その演出意図も分かる。

序盤に使う当たりただ単にこの作品スタッフのストーリー構成能力が無いのか、それともスタッフがそういうシュミなのか（ヒロイン死亡バッドエンドを指す）

後者だったら本当にタチが悪い、マジキ●だろ。

それにイベント発生前に他のヒロインを出さなかったのは軽い失敗だと思うぞ。姫城さんのインパクトが大きすぎて他のキャラが薄れて―

「長いわっ！」

「！？」

「いつまでも一般人が分からないネタ引っ張りおって」

心読まれたっ！？

「……まぁいいじゃろ、事実には違いないからの」

いいんだ、心読むほどなのに。

「まず貴様。わしに謝ることは？」

「え？」

そんなことあったか？　日本のスーパーコンピュータこと……げふんげふん……日本の七世代前ぐらいのＯＳこと俺の頭脳内を、サーチだ！

……一分ほど思考を巡らせた後。キッパリと言ってやった。

「ないな」

「”スターライトブ●イカー”」

「うおっ！？」

なにか撃った！？　桐の手から何か光線みたいの飛び出たぞ今っ！

「あっぶねーなっ！」

「少し頭冷やそうか（ＣＶ：田村ゆかり）」

「徹底しなくていいぞ」

「あれほど他の女に手を出すなといったじゃろうに！　それも幼馴染と……ほ、抱擁などっ！」

まあ確かにね、あのときは結構むふふんでしたけども。あくまで不可抗力であって、そのせいで姫城さんがあんなことまで発展した起爆剤ではあるんだろうけども。

いや……まてよ？　こいつはそういえば少し前に俺に警告してきたな。

「……いや前『第三のヒロインのイベントが発生する』とか言ってただろ？」
「それの何処に関係がある！」
「そのイベントの発生にはどこかしら伏線があったはずだ」
「っ！　そうじゃ……な」

イベントの伏線もとい姫城の行動の起爆剤となった出来事――

「その幼馴染との抱擁がその伏線だ」
「……が？」
「つまり桐はイベント発生の予告をした、イコールその伏線となるヒロインのイベントの認識があったはずだ」

桐は攻略情報を知っている。そう考えれば遠まわしに桐がヒロインの抱擁を進めたということにもなる……いやそれは言い過ぎか。まるでその事実を初めて知って驚き俺に謝罪を求める、ということは無いはずだ。それにイベントがその第三のヒロインとの遭遇に関して不可避の事象ならば。

「――っち、バレたか」

やっぱりな。

「このまま脅し通して貴様を妹ルートに入れようとしたのに！」

あ、あぶねぇ……っていうか相変わらずの黒さだな、コイツは。

「し、しかしヒロインの抱擁は確かにイベント発生の途中にあったのは認識しておった。貴様も役得だったじゃろうに」

「……ま、まぁな」

うん、なんというかすっげぇドキドキした。女の子ってこんなにも柔らかくていい匂いなんだなぁとか、色々な感想が――

「フフフ、引っかかったな貴様！　貴様の返答次第で行動する、しないを決めるはずじゃった……しかし決まってしまったようじゃな」

「はて、その行動とは？」

「貴様を襲ってヒロインの出方を見る」

某アサシンが言ってそうな台詞だこと。

「襲うってのは」

次に出る言葉を今までの桐の挙動を考えておおよそ予測がついた。

「もちろん――性的な意味じゃ」

「ダッ（ダッシュ）」

俺はその言葉を聞き終わるや否や無心に走り出していた。

「ガッ（キャッチ）」

しかし律儀に聞いていたのが不幸と出た。瞬時に跳躍を繰り出した桐のほっそりとして小さな体を全て使うようにして俺の脚に絡みついた。

重点を不意に掴まれたことで俺はバランスを崩し、まさに自分の部屋の扉の直前で大きく前のめりに倒れて顔面を軽くぶつけた。とっさに右手が出ていなかったら顔のどこかの折れていたかもしれない――ほどの勢いがついていたので手がビリビリと痺れている。

「あがっ!?」

「今夜は逃がさぬぞ、貴様……あんなことやこんなことをなぁ」※桐です。

「足捕まえんなっ、顔打っただろ!」

「さぁ一線を越えようじゃないか、はぁはぁ」※これでも妹設定です。

「なんかキモイ！　色々な理由をこめて断るっ」

そういって足を掴む手を振り払って、俺はダッシュを決め込んだ。

「ま、まて　へぶっ」

振り払われた衝撃で、顔を地面にぶつけてしまった様子。後ろから聞こえるごつんという鈍い音……今なら言えるそうだぜ。

「床グッジョブッ！」

床いい仕事したなあ。

「こら、待――」

後ろを全く振り返らないまま、俺は二階の部屋から階段を雪崩のように駆け下りて玄関で靴を履き替え。そうして、外の世界へ――

第０１７話　２－６　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

7月9日修正

第０１７話　２－６　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

外に出たのはいいものの、

「もう暗くなってきてるし」

真上へと広がる空の色は朱になり、そして青に変わっていく。それは家からの道を歩くたった僅かの時間のことだった。

「さてと、どうするかな」

正直なんの予定も計画もない。とりあえず生存本能的に危機感を覚え桐の触手こと社会的消滅も考慮すべき展開から逃れたかっただけという感がある。

今から部屋に戻っても挙動的にも展開的にもおかしいし……というかプライド的に戻りたくはないな、うん。

というかさっきの『少し頭冷やそうか（ＣＶ：田村ゆかり）』はそっくり桐に返すぞ？

まずはその発情し切ってオーバーヒートした頭を冷やせ、冷凍庫で、いやドライアイスでいいや。

と、今本人が居ないところで、ぶつくさ言っても仕方ないので後の文句は心の中に留めておくとしよう。

じゃあ……一通り時間を潰せるであろう商店街をぶらつくとするか。

舞台説明しないなんてどんなクソゲーだよ。こんなクソゲーです

から。ほんと、どうしょうもない……クソゲエは諦めて、俺が代わって、ここの”舞台説明”をしようと思う。

え、なぜ今頃するかって？　完全にする機会を失っていただけなので深い意味はない。

藍浜町、”浜”という名前から察せられるがここは海に面した町である。

海には砂浜が多く残り、それなりに都市からのアクセスも良いので海水浴場を設け夏は観光客で賑わっている。

駅が海に近く、徒歩で十分行ける距離というのも大きい利点だろう。

この町は大きく二つに分けられ前述の「海側」ともう一つの「山側」が存在する。　双方は丁度鉄道の路線で区切られ、線路がその海側と山側の境界となっている。

山側はというと、主に商店街のアーケードや学校があるのはこちらで、そのほか住宅も主にこちらに密集していたり。

そして山側ということで、その町から少々離れた場所には、山がそびえ立っている。　細長い町に沿うように、継ぎ目なく山々が連なるので、海側から見ると鬱蒼と茂る緑が真っ先に目に入るだろう。

その山を越えると、また別の町があるのだが、完全に山に遮られこの町から望むことは出来ない。

で、その”山側”に存在する高等学校に俺とヒロインは通学している。

その名も”藍浜高等学校”なんの遊びもない地名が由来の平凡な名前の高校だ。

アクセスがいいのと住宅地に近いことから、ここの生徒数はそれなりに多く、一・二・三年合わせて六〇〇人を超える、クラスも一学年は５クラスほどあり、俺とユキ、その他は一年二組に在籍して

いる。

ということで簡単な舞台説明は終了ということで。

それで俺はというと、山側にある商店街に来た。いつも通り、夕方のこの時間は主婦やら学校帰りの高校生やらで、結構賑わっていて身近に活気を感じる。そんな中をなーんの目的もなしに歩いていると、

「……あれ？　下之君？」

誰かが声を掛けてきた。そしてその声の主をすぐさま認識して反応する。

「おお、奇遇だな。委員長」

＊　＊

一方の下之家では。

「！？　……やつめ、女と遭遇したな」

この場合でも”おなご”と読むのを忘れずに。

桐の能力に”ＯＮＡＧＯセンサー”が加わった瞬間だった。いや……女の勘の強化版と思っていればいいと思う。

「しかしゲームヒロインではないな……まぁ、大丈夫じゃろう。現

実（三次元）の女にモテる訳がないじゃろ」

そうして整った幼き顔でケラケラと笑う桐。さりげに酷く言われているユウジ。ちなみに、これも”おなご”と読――

第０１８話　２－７　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

7月9日

第０１８話　２－７　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

「こんばんは、下之くん」

そこにはクラスの委員長こと……名前はえと、すぐそこまでは出てるんだけどなー

「委員長は、買い物か？」

「うん、そうだよ」

と言って、右手に持つ食材の入ったレジ袋を持ち上げて見せる委員長。

「それじゃあ、まだ買い物頼まれてるから。またね」

少し振り返って委員長は手を振ると、近くのスーパーに入っていった。

……委員長が、行ったところで俺の残念脳は凄まじいラグが有ってから思い出してきたぞ。

本名は「嵩鳥　真菜香」（タカトリ　マナカ）だったな。

一応言っておくが、ゲームのキャラではない。もちろん現実の人間である。

委員長を務めているのであだ名が「委員長」それも今年だけでなく、同じ中学時代も委員長になっていた。

しかし接点は”中学でのクラスと高校のクラスが同じ”というだけのもので、名前も少し特徴的だったのと委員長ということで覚えていたに過ぎない。

委員長も『クラスメイトの名前は覚えておく』という中学時代の委員長に課される決まりによって高校では覚えていたようだ。

「さてどうっすかなー」

と、投げやりに呟きながら、また商店街をぶらつく。それほど大きな町でもないのにこの商店街は活気が有りそれぞれの店舗にそれなりの客が入っている。

ぼんやりとふらついていると俺はある人物が目に入り「げ」と声に出して感情を表出す。そしてこちらにもその人物はすぐさまに気付き、

「あっ、ユウくーん」

「……ああ」

うわぁ……来た、来たよ。その人物は探し探して色々な店を巡った後にやっとこさ目的の商品が見つかった時の女の子のようなきらきらとした瞳で両手に買い物袋を提げながら早歩きでこちらへと駆けよると、

「会いたかったよっ、ユウくーん！」

「どわっ」

思いきりに背中に手を回されると俺の拒絶も間に合わずに抱きしめられた。背中に何かひんやりとした買い物袋を感じて、その人物

の行動とその感触にひやっとする。
悪い気は……まあする。その人物は必要以上に整った顔とスタイルを持っているのだが、俺との関係性が問題で。
そしてそのシュチェーションが問題でもある。考えてほしい夕方の活気だつ商店街の道の中心なのだ。道幅がそれほど狭くは無いので邪魔にはなっていないのだが……主婦とかが凝視してくる、そりゃそうだよな。

「ちょっと姉貴……」
「なに？　ユウくん」

［下之　美奈］俺の血のつながったまさしく正真正銘の姉……のはずなのだが、この溺愛ぶりや俺との似ていなさから「もしや」とも思っている。
似ていなさといっても良い方向に、正直我が姉ながらかなりの美人である……だから俺に抱きつくと、なお目立つわけで。
いや、抱きつく事事体が普通にすごく目立つんだが。

「姉貴、抱きつくなよ」
「ふふ、ユウくんったら！　照れ屋さんねー」
「……」
「本当は今すぐ抱き返したいんでしょ、わかってるよ。ユウくんのお姉ちゃんだもん！　以心伝心だよ！」
「姉貴……殴るけど姉弟同士だし婦女暴行にはならないよな？」
「ごめんねユウくんっ、調子に乗りすぎました」

と言って手を合わせて謝ってくる。早いっすね謝るの。しかし今までの行動で周りの主婦たちはひそひそと話し始めている。

さっきまでは釣り合わない一年差ほどのカップルが、俺が姉と呼んだことで一体どうしたことなのかと色々と思考を巡らしたり会議を始めていることだろう。

「本当だよ……こんなところで勘弁してくれ」

一応謝ったことだし……右拳がスタンバイしていたのだが、押さえておこう

「じゃあ家に帰ったらスキンシップし放題ということだね！」

「……」

「え、駄目!?　じゃあ肩を抱くのは――」

ガツッと自分の拳と姉貴の頭のぶつかる鈍い音がした。

「あうう……」

姉貴の頭を軽く殴ったものの思ったより返りが来て右手が痛い。

姉貴はと言えば頭を買い物袋こそ手放さないものの抑えて涙目で唸った。

だが殴られて当然だ……どこまでこの姉の一般常識というのがズレてるのかと。

「殴るなんてひどいよぉ……」

「……その上目遣いは、もしもの時に使うのがいいと思うぞ」

学校の男子生徒が見たら悶死するレベル……俺もちょっと、いや、ないか。

「もしもの時だもん、今もしもだもん！」

姉は涙目で訴える。あんたは駄々っ子か。
なぁ……これこそギャルゲキャラに見えるだろ？　違うんだぜ。
信じられるか？　これ……俺の姉なんだぜ？

だからなダ○ーポ２の姉ルートやると、すごい親近感沸くんだよな。

「で、姉貴はこんな時間まで何を？」
「嬉しい！　私のこと心配してくれるなんてっ」
「……答えないならどうでもいいけど」
「答える！　答えるよっ」

姉貴は俺の関心をもみ消す寸前だったのでぱたぱたと手を振って、
「生徒会の仕事で残業して、それから夕食の買い物に来たんだよ！」
「へぇー……そりゃお疲れさまでした」
「嬉しい！　お姉ちゃんのこと心配してくれるなん――」
「姉貴……似たようなネタは使わない方がいいぜ」

台詞の使い回しに見えるから。

「ごめんね、ユウくん」

この姉は何回謝っているのだろう。そして俺は、何回謝らせているのだろう。
……この言い方じゃ、俺が悪いみたいだな。全部自業自得で自分が招いた結果なのに。
姉貴の謝った回数を、次から数えておこう。

「じゃあ、帰るとするか。姉貴はどうする？」
「なにか用事があって来たんじゃないの？」
「いや、特に……帰ろうとしてたとこだし」
すると姉貴は、何かはっと気付いたような表情になり。
「はっ……もう照れ屋さんなんだから」
なんとも色っぽいお姉さん調で、そんなことを言ってきた。しかしそのノリは俺を逆撫でしかしない。ああ、殴る気力もさえも失っちまったよ。
「先行くぞ」
「あ、待ってユウくーんっ」
そうして歩きだそうとしたところで、俺は「あ」と気付き。
「片方持つから、くれ」
後ろを歩く姉貴の方へと振り返って右手をくいくいと引き寄せるようにして。
困った表情で姉貴は、
「え、でも……」
「いいから」
そうは言うが、しかし姉貴の意見なんて関係ない。ただ姉貴が早く家に戻れるよう身軽にして料理が早く食べられるのようしたい身勝手な理由で、だ。

「えっと……じゃあ」

しぶしぶと俺にそれなりに重量のある牛乳やら野菜の入った買い物袋を手渡す。姉貴の持っている方には見るからに重そうな葉物のキャベツやらファミリーサイズのペットボトル飲料が入っていて明らかに渡さない方が重そうだ。

これ以上困らせても仕方ないので、それは言わないでおく。

「よしっ、帰るか」

「ありがとね……ユウくん」

さっきまでのテンションはどこへやらな、小さな声で。

「……ほら行くぞ」

「えへへ」

後ろで心の底から嬉しそうな小さく呟いた声が聞こえたが、俺は気にしない。

第０１９話　２－８　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

7月9日

第０１９話　２－８　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

それで家だ。帰る頃にはすっかり暗くなっていて門をくぐる頃には澄んだ空に星が輝いている。

「たっだいまー」

「ただいまー」

姉弟揃って玄関に入ると。

「おかえりーお兄ちゃん、お姉ちゃん☆」

キラッ☆　……と言ったような”猫かぶり”フェイスをかます妹（桐）がお出迎え。

「ユウくん、ということで今日は腕によりをかけて夕食を作るよ？」

「え？」

「（ぴき）」

おお姉貴が見事に桐をスルーした！　なんか音したぞ、今桐のこめかみから。

「いや、生徒会で疲れてるだろ。姉貴の作れる簡単なものでいいよ」

「はぅっ！　うれしいなぁっユウくん……お姉ちゃんのこと心配してくれるんだねっ」

……なんだかんだ俺って、姉貴には甘いからな。それに――

「まぁな。家事ほぼ全般に学校では生徒会副会長だもんな……疲れ

ないはずがないだろ」
「（ぴき）」

照れを隠しながら姉貴の1日にやっていることの具体例を羅列する。
そう彼女は、俺の姉貴でもあるが学校の生徒会の会長を補佐する立場にある副生徒会長なのだ。

しかし生徒会そのものがあまり明確なもののでなく。一体何をしているのかイマイチ分からない感じがある。
生徒会のある日は遅く、六、七時に帰ってくることが一番多いが、遅いと九時前後にもなる。帰ってきた瞬間に見れる姉貴の顔には疲れが出ていて決して楽ではないことが分かる。

そんな生徒会終わりに夕食も作ってくれる訳だ。何故倒れずに出来るのか逆に不安になる……というかさりげに桐が不機嫌になってる？

「う～んっ！　その心配してくれるユウくんの言葉が、私の元気の素なんだよ！　さぁがんばるぞ！」
「（イラッ）」

……心配をかけまいと投げかけた言葉が、逆手に取られて姉貴を張りきらせてしまった。

「ユウくん、今すぐ作るからねっ♪　あっ、桐ちゃんも待っててね」
「（プチッ）」

というか桐スルーだったんだが、姉貴気づいてたんだ

「じ、じゃあおにいさん、部屋でできるまでまっていましょうぞ」

おーい、あんた誰だよ。桐、しゃべり方が大変なことになってるから。

なんというか姉貴は俺がいると、俺にしか目が行かなくなっちゃうんだよなあ……これもどうしたものか。

で、マイルームに戻ると不機嫌オーラを放つ桐ももれなく付いてきました……ああ、いらねえ。

「姉ルートまでも……それもいつでも結婚できそうな勢いじゃとッ!?」

「いや出来ないから、家族内通話みたいに軽く出来るもんじゃねえよ」

「”タダカゾでいましょう”」

「……某携帯会社のキャッチフレーズをもじったんだろうが、果てしなく言いにくいぞ」

「で、貴様いつのまに姉ルートを？　昨日の時点ではあまりその片鱗を見せてはいなかったが」

「いや、ずっとあんな調子なんだが……今日は学校帰りかつ買い物帰りの姉貴と商店街で会って一緒に帰ったからか？」

「一緒に帰ったじゃとッ！　そして買い物袋を二人それぞれ片手ずつじゃとッ……！　羨ましい、なんという新婚さん！」

「言ってねぇよ」

この子妄想癖強い……まあ常にだけど。

「……わしの本当の敵は家族にあったらしい――ターミネートスル」

キュイーン。

「効果音付き!?」

「……姉は近親相姦狙いと見た」

「見れねえよ！　どういう方角から見たらそうなるんだよっ！」

「このキリ・アイさえあればそんなこと見透かせるわっ！」

「そのキリ・アイとやらは、腐ってるとしか思えないな」

とりあえずそうして新米お笑い芸人も鼻で笑いそうな低俗な会話を繰り広げているのもあくまで時間潰しであり、姉の夕食を待つ俺と桐。

「兄上」

「……そんな呼び方だっけか」

「今までは特に決まってなかったからのう。これにしておいたぞ」

「名前でいいよ」

「名前でよいのか？　ふふ……これは妹ルートに入りかけたな。これは良い傾向じゃ」

「俺目線だと、片足さえ入ってないな」

「しかしお主も惜しいことをしたな、あの委員長ルートの分岐が先ほどあったと言うのに」※前回参照

「な、なんだってー！　いや、考えてみたら委員長ヒロインじゃないぞ」

「いやなんかスタッフが作ってたんじゃと』

「なんでだよ」

「途中まで書いてたら”あれこれカップルじゃね？”と急きょ書き直したそうな」

「スタッフ、いいのに」
「貴様にとっては良いかもしれんが、スタッフにとってはシナリオが破綻しそうなので止めたそうじゃ」
「そ、そうなのか……というかこんな直前までシナリオ作ってんのかよ！　シナリオよりもスケジュールが破綻してるじゃねえか！」
「こまけえこたぁいいんだよ（ＡＡ略」
「略も何もここに載せられないだろう（批判的な意味で）」

そう呆れているとずびしと人差し指をぴっと伸ばしながら右手を前へと出すと、

「コーナー、今日のおさらい」

「……いきなしフリーダムだな」
「コメディが中途半端な男じゃのう」
「いや、どうしろと」
「生徒○の一存まではっちゃけてなく、ギャルゲ○の世界よ、ようこそまで固くない」
「読者の九割九分が理解出来ないネタを」
「ならの○太」
「一○○%が”ああーそんなキャラかー”ってなるけど実際違うだろ俺と！？」
「優柔不断なら灼○のシャナの主人公、スク○ルデイズの主人公並みじゃな」
「謝れ伊○誠と一緒にされたことを、坂○悠二に謝れ！　今すぐにいっ！」
「確実に知ってる者から見たら”なんだとこの野郎！　誠○ね”でコメント欄が荒さられること確実」

「ブログ炎上ならぬ、板炎上かよ。冗談じゃねえ、あってたまるか」
「悟空」
「手から何か撃てそうだな」
「違う、ドラマ西●記の方じゃ」
「まぎらわしいわっ！　というか遂に二次元から出ちまったよ！」
「……たくっ、グダグダになったではないか」
「俺のせいかっ！？　どうみてもお前が戦犯じゃねえかっ！」
「とりあえずお前は中途半端だ、スタッフは使いにくい（苦笑）してておるぞ」
「えー……スタッフから使いにくい扱いされる主人公ってどうよ」

ぶっちゃけどうすりゃいいんだよ。

「それは簡単なことじゃよ」
「拒否」

さりげに心読まれたし。なぜ拒否ったかというと――

「どうせ”なら妹ルートに入ればキャラが確定するぞ”とかだろ」
「なに、心を読まれたし！？　貴様、わしの力をコピーする”ゼロのフラグメントが有るというのかっ！」

容易に想像出来たんだが。更にその桐の言う確定キャラは完全に”ロリコン”という残念な人種だから。
それに後半のネタはガチで誰も分からないから。

「たまにはロリコンもいいよね！」
「よくねえよ”たまには”ってなんだよ」
「週五ロリコン、土日シスコン」

結局毎日残念な人……って！

「結局お前には週七日分あるじゃねえかっ！」
「ちなみにハルケギニアだとフリーな日が一日あるぞ」
「んなこと聞いてねえよ」
「ロリと妹の二属性を有するのがわしのチャームポイントじゃな」

チャームポイントとか言う人にろくな人はいないってばっちゃが言ってた（言ってないけど）そんなこんなで話してるうちに時間は経ち。

「出来たよ～ユウくん」

どうやら夕食ができたようで。

「――と桐ちゃん」

「（ＰＩＫＩ，ＰＩＫＩ）」

明らかに桐と俺の言い方が違う。桐はついでみたいに言っているし……そりゃイラっとくるだろうよ、と今回ばかりは桐に同情。

――天然なだけだよな？

計算だったら……桐を怒らせるよう誘導するのは神レベルかもしれん。後者でないことを祈りつつ、姉を追うように、不機嫌モードの桐と共にダイニングへ向かった。

第０２０話　２－９　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書き

7月9日修正

第０２０話　２－９　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

「今日は肉じゃがかー」

立ち込める醤油の香ばしい匂いと、食卓に並べられて料理を見てから呟く。

「えへへー、今日は自信あるんだー」

エプロン姿でお玉を持ち、胸を張って姉がそう言う。

「うまそーだな」
「おいしそうですっ☆」

六人がけのダイニングテーブルに座り、俺と姉、桐が座ったところで俺は気がつく。

「あれ？　今日も母さん仕事？」

「さっきメールが来たから、そうみたい。今日も外で済ませてくるんじゃないかな？」
「そっかー」

ウチの母は仕事がある日は帰りが遅い。大体外のファミレスとかで済ませてくるらしい。

というか、実を言えば帰ってくる日は殆どない。フェミレスで寝過ごすこともあれば、終電に行かれて近くのカプセルホテルに止ま

ってきたりエトセトラ。

「”あいつ”は？」

「うーん……今日も夕食、後でいいって言ってたの」

「ふーん」

”あいつ”に関して、今は何も分からない、それほど興味もない……興味がないというのには語弊があるな。諦めた、の方が適切なのかもしれない。

そう俺はもうあいつには関われない。あいつに俺は嫌われてしまっているのだから。

「じゃあ頂いちゃいましょうか！」

「そうだな」

「はいですっ」

律儀に食卓に揃って手を合わせて、

「頂きます」

「いただきます」

「いただきまーす☆」

そうして夕食が始まる——まずは、メインディッシュの肉じゃがをパクリ。

「お、旨い」

肉じゃがを口に運んで一言。崩れていないながらもしっかり醤油の味とダシが、染み込んでいる。

そこに人参の甘みも加わって旨みが引き立っていて美味しい。

「ありがとう～、お姉ちゃんその言葉が嬉しいよ～」

肉じゃがに……おお。

「それに今日は炊き込みご飯か」

「うん、サバの水煮をいれてみました」

「どれどれ……おお」

炊き込みご飯の主張の少ない風味に、サバの水煮がアクセントを加えていた。

サバの水煮と言っても、普通に食べれれるよう塩で味付けされているもので、その塩っぽさが炊き込みごはんに、ちょうどよく馴染んでいる。

それでいてもとが脂身がすくないのでくどくなく、鳥の皮を使うよりもさっぱりしていた。それにきっと安くすんでいることだろう。

「合うな、これ」

「でしょでしょー！」

「おいしいですっ☆」

食事時には、つい水分を多く飲んでしまう。コップの中はもうカラッポだ。

「ちょっとお茶お代わりするわ」

「あ、ユウくん私がやるよ」

「大丈夫、姉貴は座っていいから」

「うん、わかったよ」

お茶ぐらい自分でやるさ。流石に全部任せきりじゃ駄目だし……

夕食作って貰ってる時点で任せっきりだけども。
果てしなく申し訳ない気持ちになりながら、冷蔵庫を開いた。すぐ真正面の棚には――

ラップのかけられた肉じゃがの入った器に、茶碗に入った炊き込みご飯、お椀に入った味噌汁が置かれている。
更に姉が書いたと思われる二つ折りにされたメモ用紙があった。そしてメモには大きく”あいつ”の名前が書かれている。

「ええと、お茶は……これか」

冷蔵庫からお茶のボトルを取り出し自分のコップにつぐとボトルを戻し冷蔵庫を閉めた。

夕食も終わり自室のパソコン机のイスに座る。俺が起きている間に関しては、パソコン机の席に座っているのがデフォなのだ。

「姉の料理は……美味いのが悔しい」

昨日はちなみに昨日は電磁レンジでチンした冷凍食品パレード。美味しいことには変わりないが、手作りには劣る。

「これでは……わしに勝ち目はないではないかっ！　貴様はオールドシスコン。またはアネコンだし、あっちはブラコン……相思相愛かっ！」
「いやオールドシスターって姉って意味だけどさ……て、俺はアネコンじゃねえよ」
「アネコン否定前に真っ先に姉を擁護するとはっ！　わしは、例え

お主がアネコンだとしても諦めないぞ……例えアネコンでも」
「絶対人として諦め始めてる！？　いや、まぁ妹ルートは諦めてくれ」
「敵が強ければ強いほど、愛の炎は燃え上がるのじゃ」
「……今すぐにでも鎮火して欲しいな」

閑話休題。

「……ということで、明日もイベントが発生する』
「へぇー、また」
「……なんじゃその、飽きムードは』
「いや飽きてはない、ただダルイなーと」
「……貴様の言った言葉の方が、女子の好感度は落ちるじゃろうな」
「よし、落ちたか。よっしゃ！　さっさと妹ルートは諦めろ」
「わかってるもん！　おにいちゃんがツンデレだってことは」
「ツンデレじゃねえ、俺にはツンしかねえ」
「いいもんいいもん」
「いや、よくないだろ」
「そうか、わしがツンになればツン同士で科学反応が起きて……」
「それで面倒くさくなった俺は桐を完全無視する”無”に突入するんだな」
「いや！　それすごく嫌じゃ！　というかハイテンションなわしにとっては、かなり恐ろしいぞ、それは……」
「で、イベントってなんだ」
「話変えられた！？　すんなりとっ！」

いつまでもネタ引っ張ってもね。そして桐は技とらしく咳払いすると。

「イベント内容については……秘密だ」

「Ｗｈｙ？　なぜ」
「なんとなく」
「適当っ！？」

さてと……相変わらず役立たずな桐は放置しておこう。いつまでも付き合っても仕方ない。

「相変わらずとはなんだ！　常に役に立っておるじゃろうっ！？」
「それなら主に、どんな役に立ってるんだ？」
「わしの存在が貴様の心を癒しているではないか」
「……少なくともお前は疲労の元だ」

どうも桐が来てからストレスが鰻登りに経験値上昇中です。

「このロリボディの魅力がわからないとはな。とんだ未熟な男じゃのう」
「そんな変態になるぐらいなら、未熟でいいや。ロリボディだけならロリコンにとってはいいかもしれんけど、時代遅れな古臭い喋り方と変態脳が付いてくるからな」
「……初めて貴様に殺意が湧いた」

こいつやっぱり面倒くさいな。

「面倒だと！？　ツンデレ娘をデレさせるよりは面倒ではない！」
「いや、そっちの方がまだやる気がでるわ。というかさっきからスルーしてたが、心読むな」
「別にいいじゃろう、わしの持つ二十もの能力の一つや二つ使ってもよかろう」

二十もあんのかよ……どんな邪気眼設定だ。

「今最近使っているのは人の心を読む”心詠”じゃ」
「聞いてねえよ」

どーでもいい。

「他には時をかけたり、世界を思うままに変えたり、カエル系宇宙人と話したり」

某書籍会社限定ネタだな！

「似たような内容なソフトを複数販売して儲けたり」

曲芸商法……？

「終わる終わる言っといて結局終わらない某ジャンプマンガのアニメ」

銀○ェ……というか既に能力じゃねえなコレ！

「とりあえずは、ダ○ーポ2のヒロインの特殊能力全部は使えるな」

すげえ！　それは、すげえ！　それは俺も欲しい。

「”雪○流暗記術”の分売は出来ますか？」

「三時間一四○○円」

レンタル式かよ！　更にボッタ……ではないか。

「まぁ昨日見た“予知夢”で今後のネタバレをしてやろう」

予知も出来るのか、しかし次の展開が分かるというなら聞きたいぞ。

「一応は聞く」

「――ネタバレ：ラスボスは幼馴染」

「ラスボスってなんだよ！」

こんなユルユル学園ゲームにラスボスなんていないだろ……いや、まてよ。このゲームのジャンルは――

ジャンルはというと……恋愛・泣き・アクション・ファンタジー・RPG・パズルだったな。

「あ、ありそうだな……」

悔しいがなんかこのゲームならありえそうだ。

「今のは嘘じゃがな」

「え、信じそうになったんだがっ！？」

俺、きっとマルチ商法に引っかかり易いだろうな……俺はこういう理由こじつけて納得しようとするタイプだ。

「ネタバレ：全ヒロインルートの最後は必ず妹エンド」

すごい嫌なネタバレっ！

「ネタバレ：ホ○ルートがある」

嘘だっ！

「ネタバレ：アクションバトルがある」

ないなっ！

「ネタバレ：妙にリアルなルートがある。」

どのへんが！？

「ネタバレ：明日天気雨がある」

明日傘持っていこう！　初めて役立った！

「ネタバレ：　　」

いや、何か言えよ！

「ネタバレ：収拾付かないので、終了」

えー……終わりだそうな。

第０２０．５話　２－９．５　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始

前書き　ＧＡＹＭ版最新話（番外編）を挿入しますー

第０２０．５話　２－９．５　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始

四月ニ六日

なんということでしょう、あまり寝れていません。
部屋着兼パジャマのTシャツ&半ズボン姿で階段を下り、洗面所で鏡を覗けば……そこには目の下にクマがある男子高校生が――

「あー、ねみぃ」

ふぁぁぁぁ、と目に少量の涙を溜めながら大あくび……なんとも間抜けな光景だ。

「さてと」

ばしゃばしゃ顔を洗ってタオルでふけば――

「（キリッ）」

なんということでしょう、あの眠気全開の残念青年の顔がキリッと引き締まったではあーりませんか。
もともとそんなに出来ていない顔立ちが寝起きで完全崩壊を起こしていたのに対し、洗顔によるリフレッシュ効果で大幅に改善されています。
リフレッシュもされるはずでしょう、そう青年の使う洗顔用石鹸は、竹炭を練りこまれているのです。
敏感なお肌にも優しい天然仕様、それでいて顔に付着した汚れを流しさり、かつ引き締まります。

まさに竹炭石鹸という「石鹸の匠」が青年のたるんだ顔を引き締めてくれたのです――

さーて”竹炭石鹸販売促進運動”もここまでして……朝飯行くかー

「姉貴おはー」

「おはーゆうくん」

洗顔後は姉貴が居間でお出迎え。

「ごめんねっゆうくん！　学校に早く行かなきゃいけないから、先いくね！」

そんな姉貴は既に着替えていて食パンを銜えながら黒いニーソックスを履いている最中だった。

「じゃあ、ご飯とお弁当置いておいたから――行ってくる！」

「ああ、行ってらっしゃいー」

姉貴を見送り、今の卓袱台周りに座る。　台上にはマーガリンの塗られた食パン二枚と卵焼き一つに味噌汁一杯がそこにはあった。

「……まだ温かい」

そう遠くには行っていないはずッ――って、姉貴出たばっかだけどさ、直前まで朝飯作っていたことが分かるなぁ。

「むしゃむしゃ」

ほーむっ、このトーストの絶妙な焼き加減がたまらないねェ！

食後の余韻ならぬ、食パンの余韻（？）を感じていると……

「むにゃむにゃ、ふわぁ」
「お、桐、おはよーさん」
「ぐっどもーにんぐじゃ」

何故エェングリッシュ？　まぁいいや、俺もたまに言ってるしな。

「桐、顔を洗って出直してきな」
「なんじゃと貴様、上等じゃ、洗って来てやろう」

なんだこの会話、そうして桐は顔を洗いに洗面所に向かって行った。

「むしゃむしゃばくばく」

ふぅむぅ、朝食に目玉焼きが定番だと誰が決めたか！　卵焼きもいいものだ、おおう、醤油が効いてるなァ。深い味わいに舌鼓を打っていると。

「なんということじゃろう！　みよ、この美女を予感させる整った顔立ちをッ！　幼女の時点でこれなら、二十歳になった暁には……イケる、イケるぞおおお！」

「わぁー、なんてすばらしいもぐもぐ」
「おにいちゃん！　ご飯食べながら喋るのは行儀が悪いよぐしゃぐしゃ」
「食事中に頭を掻くなふごふご」
「だからお兄ちゃん食事中はもぐもぐウマー」
「喋る暇も惜しいぐらいに美味しいからだよっ！」

「ふむふむ……これなら仕方ないのうまぐまぐ」
「ごっそさーん」
「こらこら、北斗七星の方向に向かってお辞儀をしなさい」
「わかるか、んなもん！　ごっそうさまでしたー」
「わしも、ごちそうになった」
「早っ！　お前早食いだな」
「……これで本気かと思うか？」
「思わないからがんばれ、じゃあ着替えてくる」
「なんとも適当な返しにが不服にゃが着替えてくるがよい」

「着替えてきた」

「早っ！　お主早着替え達人じゃと！」
「……これで本気と思ったら大正解だ」
「これが本気なのか！　だとしても凄いのう」

「まぁ、わしがあくびしている間に着替え終わるとわな」

「いや、その表現では桐のあくびが長かった可能性も出てくる」
「ふむ、それじゃ……」

「皿を一枚重ね終わる前に着替え終わるとはな」

「いや、それじゃ”何枚も割ってしまって最終的に一枚重ねられた”という解釈だと時間がかかったことにもなるぞ」
「そこまでこだわらん、とにかくお主の着替えは早い」

「まぁ、部屋着の内側に着ていたからな」

「……学ランをか？　先程のTシャツ内は四次元空間でも広がっておったのか？」
「俺……着やせするからさ」
「……布面積を無視するということは、錯覚でも利用しておるのじゃろうな」
「まぁ、そんなことより学校に行ってくる」
「おお、もうそんな時間か」
「いや、あと一時間はある」
「なぜ早くでるのじゃ？」
「まぁそれは……な」
「残念じゃが、目では伝わってこないのう」
「ユキとウキウキ登校して、教室でフツトークしたいだけさ」
「なるほど拒否」
「わかった、桐が拒否したのはこんな理由だろう？　”私のダーリンを横取りするなんてこの泥棒猫が”」
「うぅむ、内容は大体あっているが反応にとてつもなく困るな」
「じゃあ行ってくる」
「おう、気をつけてな」

こうして俺は玄関で靴を履き、鞄をブランブラン揺らしながら玄関の扉を開いた。
そうして俺は家の門前で待っていた――

「おっはよ～」

おう、なんという天使……そう皆さんご存じのユキさんです。
なんと雪のように白く透き通った肌……俺が本気出したら三時間は見惚れるね。

「おはー」

と返す俺。

「いやー、春だね」

「いや、もう終わるぞ、春」

春という定義が微妙だが、もう4月も終わる……桜も散りはじめているしな。

「春と言えば、桜だよね」

「もう殆ど散っちゃったからなぁ」

「でもね、ユウジ」

「なんだ？」

「桜は私たちの心の中に咲き続けているんだよ」

「……桜は死んだ訳じゃないと思うんだ、来年になればまた元気に顔をみせてくれると俺は思うんだ」

ユキさん、それは死んだ仲間を想う台詞でっせ。

「うんうん、わかってる、楽しみだな～」

ユキさん、ちょっと天然入ってるけどGJですよっ。

「ところでユウジ」

「なんだい？」

「夏もいいよね～」

え。

「いや、いいと思うけど、さっき春の話してなかった？」
「季節は移り変わるもの……私のマイシーズンも移り変わるそんな時なんだよ」
「……夏ねぇ、俺は暑いから嫌いだな」
「えぇー、そんな暑さを無視して冷房のガンガンに効いた部屋でアイスクリームを食べながらバラエティをみるのがいいんじゃないー」
「うん、なんとなくわかるけど思い切り環境破壊だ、それー」

しかし夏のユキ……だとッ！　……イイかもしれないなぁ。

「でもね、でもね！」
「どうしたんだいユキさん」
「気温を下げる為に打ち水はしたよ？」
「おお、地球温暖化を防ぐ身近な第一歩だな」

「家の中にだけど」

「ええとユキさん、その後家はどうなりましたか？」
「水浸しになりました」

でしょうねー

「お母さんに怒られた……トホホ」

可愛いっ、トホホ、可愛いっ！

「でもそう考えると」

「？　考えたのか？」
「秋がいいよね～」

「うん、ユキさん。春夏秋冬一周するおつもりですか？」
「春夏秋冬一蹴？」
「蹴っちゃだめだろ」
「でもね、秋はいいよね」
「まぁ、そうだな……過ごし易いし」
「なにより食欲オンリーな秋だよね」
「芸術とかスポーツとか何処行ったと言いたいとこだが、そうだな」
「夕暮れの通学路を歩いていたそんな時、少し遠くから聞こえる焼き芋屋さんの声はそそられるよね」
「あ、わかるわ」
「そして横を通り過ぎる焼き芋屋さんの車」
「ああ、買いたくなるね」
「それで買っちゃう訳ですよ」
「そりゃ仕方ない」

「ダースで」

「ユキさんや、それはちょっとばかし食い意地というか、欲張りすぎなんじゃないですかい？」
「大丈夫、スタッフも美味しく頂いたから」
「スタッフそんなもん貰ってたのか！」

うらやま、ユキからの手渡しだと……俺、スタッフになろうかな。

「本当はスタッフじゃなくてお家のお母さんとかにだけどね」
「あー、やっぱり」

「余ったものは――」
「スパイスをかけて」
「ユキさん、それ台無し」
「え？　スイカに塩の要領で、焼き芋に胡椒だけど？」
「惜しい、サツマイモじゃなく普通のダンシャクイモとかならセーフだったのに」
「ミスマッチ感が癖になるよね！」
「食べてないから分からないよね！」
ユキさん、それは自分にはわかりたくないです。
「いやぁ、ユウジと話していると楽しいね」
「俺ユキと話してると楽しいわ」
ああ、楽しい。なんだかんだで楽しいなぁ、ユキとの会話。
「そろそろ学校だね」
「だなー」
そうして俺たちは学校の昇降口へと足を向かわせるのだった。

第０２１話　２－１０　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月9日修正

第０２１話　２－１０　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

四月ニ六日

「なんだこのクソアニメ共はっ！」

ユイがいきなしそんなことを、開口一番に叫んだ。

「なんだあれは！　視聴者舐めてんのかアァンッ！？」

なんでヤンキー口調なんだ……

「かわいけりゃ正義だと思うなよ！　可愛くたって脚本が駄目なら台無しなんだよっ！　あんな締めじゃ視聴者は納得しないんだよおおお！」

以上ユイの熱弁でした。え？　何を言ってるかって？

残念ながら、俺には殆どワカランです。教室にいつも通りユキと登校したらユイとマサヒロがアニメ談義してたというわけで。

「あのボールはなんだ！　絶対野菜じゃねぇよ、アレ！　切った断面図が、理科の教科書に出てきそうな地球みたいだったぞっ！」

……アレです。あの作品です。なんかもう一回視たんだろうね。

「そうだよな！　遠近感とか色々残念なことにもなってるよな」

「まったくだよ。一年に二作も作るからそういうことになるんだぜよ！」

……ユイは、大変熱くなっております。扱いに十分ご注意の上、お召し上がりください。いや、食わねえけども。

「でも同じ年に作ったアレはよかったぁなぁ」

「たしかにベタだけど、手堅く王道で良かったよな」

「四文字アニメは名作、の法則だぬ」

……。

「そういえばなんだっけ？　同じ、絵が残念な奴で……ほら２４話だけ絵が良かった……アレ」

「なんか日本の歴史上の人物の名前を、ローマ字読みしたタイトルだったよな」

……駄目だついていけねえ。と、思ったところでＨＲのチャイムが鳴った。

いろいろすっ飛ばして昼食。つまらない漢文とか世界史の話を書いても何の意味もないだろ？

今日は珍しく弁当があった。昨日俺が気配りしたおかげか、機嫌を良くした姉貴が――

「べ、べつにユウくんの為に作ったんじゃないからね！　ただ余り物を入れただけなんだからっ」

と、言われました。俺の反応はというと。

「……」

と、するしかありませんでした。

「ねぇユウくん！　お姉ちゃんの”つんでれ”どうだった！？」

「すごいよかったよ」

もろ棒演技でそう答えた。

「ほんとう！？　じゃ、じゃっ、次はヤンデレを――」

「あ、それはやめてください」

蘇る記憶。暗い階段。折りたたみ式ナイフ。頸動脈。生首。ｎｉｃｅ　ｂｏｒｔ.

浮かぶのは、見るからに危ない単語のオンパレード。

……絶対に、ヤンデレなんかにさせてたまるか。いや、増やしてたまるかっ！

それに”つんでれ”の発音が微妙な時点の姉にやられてたら、プライド的にもたまったもんじゃない。

「あの……今日はお弁当なのですか？」

姫城さん（さん付けで呼ぶことにした）が、話しかけてきた。

「あ、うん」

何気なく答える。うーん相変わらず、どう見ても美人だよなぁ…

…本当に、あの行動が無ければ。清楚で美人なクラスメイトの一人

だったんだがなぁ……

「あ、あの……」

姫城さんがもどかしそうに、言い淀んでいる。どうしたんだろう。

「？」

「ユウジ様とお昼。ご一緒してもよろしいですか？」

「あっ、い――」

はっ！　蘇る記憶。暗い階――大丈夫。姫城さんは、もうヤンデレじゃないはずだ。

昨日のことで、悔い改めてくれたはずだ。いや、俺はそう信じたい、というか信じるぜ！

「ああ、いいよ」

「じゃあ、こちらに机に持ってきますから」

「悪いな」

「いえいえ、私からお誘いさせて頂いたので……こちらの机を拝借して」

ということで俺の後ろの学食組の開いている席を使って、姫城さんと向かい合わせで食べることにした。

ちなみにユイ、ユキ、マサヒロは学食組なので居ません。なんというタイミング。

俺は机に、所々擦れて傷がついた、平たいアルミの弁当箱を側の鞄から取り出す。

そして向いの姫城さんはというと。机に、二段重ねの子ぶりなピンクのプラスチックの弁当を、持ってきた巾着袋から取り出した。

「お弁当はユウジ様が作っているのですか？」

なんとも普通な質問。良かった、彼女はもう普通の女の子のようだ。

「いや……姉に作ってもらってるんだ」

姉貴が、毎朝早起きして作ってくれる弁当を頂いている。そんな姉貴に改めて感謝。

「そうだったのですか……」

すると何故か姫城さんは考え込み始めた。……なんか「チャンスです」とか聞こえたが、気にせず弁当を俺は、開ける――

「ぶぶっ！？」

俺の開いたその平たい弁当箱のご飯部分には驚きの展開が――

『ユウくんＬＯＶＥ』

〝はぁと〟という効果音がピッタリな、ハートが桜でんぶで描かれ、そのハート下には〝ユウくんＬＯＶＥ〟と文字で書かれていた。もちろん女性が書いたような綺麗な丸っこい字で。

「（汗）」

あれ、おかしいな。暑くもないのに汗がダラダラ出てくるぞ。まるで洪水だ。これが後のノアの大洪水か。ああ、なるほどな。

……汗が出ている理由なんてほぼ分かってるさ。ああ、大体わか

るさ！　だってさ――

姫城さんが、俺の弁当と俺の顔を交互に見ながら、怪しい笑いを受かべてるんですよ？

「ふふふふ」

とかいう、低い笑い声が漏れてるんですもの。

「ユウジ様、嘘はいけません」

「な、なんのことだいっ？」

「このお弁当……ユウジ様のお姉さまが、作ったものじゃないでしょう？」

めっさ笑顔。笑顔が殺気を放っている、正直俺鳥肌立ってます。ブァアアアアアってね。凄い勢いですよ。

「いや、姉貴が作ったんだ」

声が震えている気がする。そんな勇気をこめて言った言葉は――

「嘘ですっ」

某レナもびっくりの迫力で、掻き消されましたとさ。いや、声そのものは小さいんだけど、威圧感が凄まじいんだよ、コレが。実際やられてみ？

「……今なら間に合います、でないとユウジ様が大変なことに」

「間に合うって何が！　大変ってどんな風に！？」
「……目を覚ますと、ユウジ様は”舞、舞、舞”と私の名前を連呼しているでしょう」
「何が起こった！　寝ている間の俺に何が起こった！？」

色々怖すぎる！

「または、ユウジ様のお姉さんが、いつの間にか私に変わっています」

いくらなんでも気付くぞそれは！

「その後、ユウジ様のお姉さんを見た者は、誰も居ません……」
「ホラー！？」

……全くと言っていいほどヤンデレは改善していなかった。というか増強されてません？　だめだこいつ……早くなんとかしないと。

「いえ、待ってください」

待ちますとも！　ちゃんと理解してくれるまで待ちましょうとも！

「整理すると……ユウジ様が嘘を付いて、姉に仕立て上げようとした可能性が高い。ということです」
「信用無いんだね！　俺！？」

なんて疑い深さ……探偵になってください。そんで迷探偵とか呼ばれててください。

「それなら……姫城さんは、誰が作ったように見えるんだ？」

「おそらく……一番近しい人として、篠文さんですね」

そうきたか！　やっぱ昨日のこと引きずってるじゃねぇか！　……いや、まてよ。

「それはおかしいだろ、あいつは俺を呼び捨てで”ユウジ”と呼ぶんだぜ？　なら飯に書いてある”ユウくん”はおかしいはずだ」

流石にこの言い訳は苦しいかな……

「確かに……そうですね」

わぁい奇跡！　納得しちゃったよ。

「それでは……ですね」

「そう、だから、俺の姉貴――」

「別の女ですかっ！

違いますから、絶対違いますから。

「そうですよね……ユウジ様はとても魅力的ですから」

「だから違う！　姉貴が作ってきたんだって」

「まだ言うのですか……」

「いや、なんで俺呆れられてんの……？」

なんだかんだで、俺、ピーンチ。このままじゃ”舞・舞・舞”を連呼するどっかの宗教の崇拝者みたいになってしまう！

どうするか――そんな時だ。

「あ、ユウくーん！」

その時の俺には女神。女神の声が聞こえた。後々考えて……全ての要因はあいつなのだが、今の俺にはそんなの関係ねぇ！

「おお、姉貴」

そう姉貴を呼ぶと向かいの姫城が驚きの表情を示す

「え？　あなたが……ユウジ様のお姉さまなのですか？」

すると姉貴は途端に。

「こんにちは、ユウジが常日頃お世話になっています』

丁寧口調で言うと、姉が姫城さんに頭を下げた。

「どうも、ユウく……ユウジの姉の下之ミナです」

簡単な自己紹介を姫城に。するとその雰囲気に押され。

「え、あ、はいユウジ君の友人の姫城です」

様付けがいつの間にかなくなってる！　新鮮！

「食事中にごめんなさい……ほんの少しユウジをお借りしてもよろしいですか？」

「え……は、はいどうぞ。お構いなく（もしかして本当にお姉さま

がユウジ様のお弁当を……？　ユウくんと言っていましたし）」

姉貴に呼び出され、昼休みの喧騒にまみれた廊下。助かった……いや。

「姉貴……」

のせいなんですけどね。全て。

「ねぇ、ねぇ！　どうだった？　お姉ちゃんのお弁当っ！」

「……一発殴らせて貰ってもいいか」

「え！　なんで？　なんでお姉ちゃんを殴――」

ガツッ、となんとも鈍い音。

「あうぅ……痛い」

「なんで……なんで」と姉貴が、涙目で頭を押さえながら、呟いているが気にしない。当然の制裁だ。

「で……なんで俺を呼んだんだ？」

「ふぇ？　ええと……あ、そうだ』

……一瞬忘れてただろ、姉貴。

「放課後にね、ユウくん少し教室の前で待っててくれる？」

「え、何か放課後にあるのか？」

「う……うんまぁねっ！」

「……」

姉貴は目を背けて言った。ああ……ろくなことに遭わないな、一瞬で悟った俺は大分毒されているのだろう。

「絶対待ってて」

「！」

今度は真剣に向き合ってそう言った。

「お願い」

「……」

はぁ……姉貴のお願いには弱いんだよなぁ。

「……わかったよ」

相変わらず、俺は姉に甘いんだよな。　……直さないと。

「ありがとう！　じゃ、放課後にねっ！」

と言って去って行った……というか、それだけだったんだ。

「……」

約束しちまったし。仕方ない、放課後は教室前で待ってるか……はい、これ伏線だから覚えておいてな。

第０２２話　２－１１　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月9日

第０２２話　２－１１　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

放課後だ。クラスの皆が、鞄をもって帰り始める中。

「ユウジー帰ろ」

ユキが、声を掛けてきた。しかし……

「あっ、すまん。今日は一緒に帰れないや」

「え？」

「実は姉貴に待ってろって言われてるんだよな」

「ユウジ何かしたの？」

「……いや」

姉貴はあんなでも生徒会役員。それも副会長。姉モードと副会長モードをきちんと使い分け出来ている訳で。

以前廊下で生徒会関係の仕事の打ち合わせをしていたその時の姉貴は的確に指示し打ち合わせをスムーズに進行させていた。

普段俺の見る姉貴からは想像できないが、この学校内では姉貴は頼れるしっかり者の副生徒会長なのだ。

「……まぁ副会長のお達しなら仕方ないよね！　うん、わかった！　じゃあ、先に帰ることにするよ！』

「ああ、ほんとすまんな。また明日」

「じゃあねーユウジー」

「じゃあなーユキー」

……さてと。教室前で待っていればいいのか？

しばらく経った。二〇分前後は待っているだろう。既に生徒で溢れた廊下は静まりかえっている。
時々通る体操服姿の運動部員が用具を取りに走り通り過ぎるだけ。
そうして壁にもたれながら姉貴を待つ。

「ごめんねー！」

息を切らしながら駆けてくる姉……走らなくても良かったのに。

「ＨＲで、遅れちゃったんだ……ごめんね！」
「いや別に構わないぞ。で、用件はなんなんだ？」

姉に問う。まぁ、出来るだけ早く終わって欲しいのだけど

「えっと……ね」

急に姉貴は俯いた。

「ユウくんに……伝えたいことがあるの」

「！」

……なんだ、この姉貴の雰囲気。いつもの姉貴じゃない！？　なんというか、別人だ。
なんなんだこのしんみりムード。まず浮かんだのはギャルゲの告白シーン。なんでだよ！　おかしいだろ俺の脳内回路！
なんか凄い「神曲」とか、後に呼ばれそうなＢＧＭが流れてる感じもしてきたぞ！？　廊下の窓からは夕焼けの朱が眩しい……ここまでシュチエーションがそれっぽいなんて！

告白……？

んなぁことなぁいはずだ。姉弟だぜ？　そんな告白じゃないとすると……

私ユウくんの本当のお姉さんじゃないの。

まさかの義姉宣言！？　そっちの告白の方がはっきり言って驚きだ！

いや、落ち着け俺。このしんみり空間に頭をやられてギャルゲ発想しかできなくなってるぞ。これじゃまるでユイみたいじゃあないか。

「あのね……」

何が来る……どきどきどき。心臓の鼓動が速くなってきた。やべぇなんかハズカシイ！

「私……」

さぁ来い！　どんと来い！

「私の……私の入ってる生徒会に入って！」

……へ？　まさに拍子抜けだった。ああ、なんだ生徒会か。

そうかそうか、うんうん――生徒会？

「皆の者かかれぇっー！」

『イエッサァー！』

すると突然近くで聞こえる怒声。それは姉の声ではない、少し男勝りな女子と男達の声。その次の瞬間だった。

「なんだ！？　一体なんなんだ！？」

知り合い以前に見たこともない生徒に囲まれた俺。

「ていやぁっ！」

「ぶっ！？」

ま、また首を狙って……チョップを――ああ……また拉致られた（桐の金縛りの時から3回目）その思考を最後に、俺の意識は落ちて行った――

第０２３話　２－１２　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月9日

第０２３話　２－１２　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

よう、ユウジだ。

どうやら首への衝撃から記憶が途絶えていることから察するにやはり俺は拉致られてしまったようだ。

そして現在、暗闇の中に居る。ついでに身動きが一切とれず何かに座っているようだ。仕舞いには手足に縄が巻きつけられている上口には布が巻かれている。

なんとも分かりやすい最悪の状態だ。

何故こんなことにって？　こっちが聞きたいぐらいだ。全然身に覚えがないぞ。

そんな困惑に塗れていた頃、突然俺の視界に光が飛び込んできた。

「（うお、まぶしっ）」

いきなり目の前が明るくなった。その突然さに目を瞑ってしまう。しかしいつまでも眼を瞑っていても仕方ないので、ゆっくりと恐る恐る目を開け辺りを見渡すと――

「（教室では……無さそうだな）」

長いテーブルとパイプイスが何台も壁に立て掛けられ、窓には白いブラインド。学校には違いないと思う……というか信じたい！普通の教室とは雰囲気が多少異なった印象がある。

そう、ここは何処か思考していると。

「こんにちは、下之ユウジ君」

かつて無音だった空間に響く、女性の高い声。そして、その声の主は目の前に居た。

「ようこそ」

「……え？」

ご、ごほん。状況説明を開始する。

学校内の謎の部屋。そこの中心辺りにパイプイスが置かれ、そのパイプイスに俺は座り手と足を縛られ縄で口当たりを布で覆われている。

ここまでは今までの状況だ。今度は新情報だ。

目の前に居るのは大層な美少女だった。

しかし本当の”少女”だ。少女は深紅のごとし赤く短い髪を纏い。その赤髪からチョンと出るアホ毛。　そしてなにより目立つのは

座っていてもわかる背の小ささ。というか全体的に幼い感じがするその容姿や醸し出す空気。声も凄い高いし。

「下之君にはあるテストを受けてもらうよ」

文章体でみたらかなり迫力があるようにも思えるが、声を聞くとあら不思議。高い声のせいでいまいち迫力が出ていない。

「では第一問」

っ！　問題！？　というか、口塞がれてるんですけどっ！

「ほい！　わへ！　ひっはいほうひうほほはよ！（おい！　待て！　一体どういうことだよ！）

「え？　今なんて言ったの？」

布のせいで素で聞こえないようだ。

「ほひはへす、ほへはすせ（とりあえず、これ外せ！）」

「あー……ごめん。戸夏頼むよ」

「おう！」

コナツと呼ばれ答えたのは、先程怒号をかけた女子の声だった。

そしてその女子が俺の口に巻かれた布を取る。

「さて、第一問です」

「いや、まてその前に聞きたいことが――」

「問おう、あなたが私のマスターか」

「それを問うのか！？」

「それは冗談として」

「Q．１　あなたの名前は？」

「A．ええ、Q&A方式？　……下之ユウジ」

「Q．２　趣味は？　正直に答えてね」

「A．　……アニメ鑑賞」

「Q．３　好きなアニメは？」
「A．　うたわれ●もの。」

「Q．４　あれいいよね！　そこでドラゴ○ボールとか言わないことに感動だね！」
「A．　いや、何の話だよ」

「Q．５　私はＴｏ○ｅａｒｔ２　ｏｖａ　が好きっ！」
「A．　聞いてないし、もうＱ＆Ａの意味成してないぞー！」

「Q．６　ごほん、生徒会の●存って知ってる？」
「A．　一応はわかるけども、何の意味で今聞いたしっ！？」

「Q．７　この学校の良いところ」
「A．　いきなりそれっぽくなったな、スイッチの切り替えはええ……明るくて、団結力があることか？」

「Q．８　知沙『ふふ、一年の癖によく知った口が叩けるもの』」
「A．　ねぇ！　なんで聞いた！？　というか誰！？」

「Q．９　私たち生徒会の役員志望理由は？」
「A．　せいとかい？」

「Q．１０　うん、生徒会」
「A．　生徒会……」

生徒会……ねぇ。

『私の入ってる生徒会に入って！』（姉貴発言）

「（姉貴かっ！？）」

「A．　いや、志望してないんだけど。」
「Q．１１　美奈から推薦があったから、大丈夫！」
「姉貴いいいいいいいっ！」
「Q．１２　はわっ！？　ビックリしたぁ」
「A．　ホントに俺、生徒会に入る気全くないんだけどっ！」

「安心して下之君」
「（あ、Q&A終わった）いや、何がですか」

「役員試験には見事合格よ！」

「へ？」
「合格っ！」
「えええええええええええ！？　話聞いてます！？」

意味不明な、謎展開。ええ？　生徒会？

第０２４話　２－１３　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月19日更新

第０２４話　２－１３　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

藍浜高等学校生徒会。

基本的に三年が会長の座に就き、二年が副会長の二人書記一人、1年が副会長補佐一人会計一人雑務複数名で構成されている。

……はずなのだが三年の会長が就任後病欠で学校そのものを欠席しており事実上二年の副会長一人が会長代行として昇進し就いている。

ということで現在は二年から会長一人副会長一人書記一人、一年から会計一人となっているらしい。

副会長補佐が欠員しているのは今期の生徒会役員が成績的に優秀だったが為に省略され副会長二人体制で不足なしと判断された。

ちなみに雑務は、各学年の生徒委員会所属委員（要するに、クラス委員長を数名呼ぶ）から出張してもらう方式で人員の削減を徹底している。

しかし副会長補佐を設定しなかったのが裏目に出た。

会長の欠員によって副会長一人に格上げが実施され副会長は一人で補佐無しという現状になった。

現在副会長が一人しかおらず、更に補佐も居ないことから深刻な役員不足が問題視されている。

そこで部活や他役員に無所属な者を生徒会役員全員が自ら推薦して任意同行し書類調査を行い役員試験を受けさせた――

「ちょっとまて、任意同行？　拉致の大きな間違いだろ？　いくらなんでもそれには語弊があるぞ」

「……細かいことを気にする男は嫌われるわよ？」

と上級生の女子生徒。机の手作り感満載の段ボール製紙立てに”書記”と書いてある紙が挟まれている。

「細かいですか！？　これって！」

そう上級生に抗議し、すべての根源であろう姉貴を睨みつける。

「ゴメンネ☆」

と、反省気まるでなしの言い方で謝られた……もちろん俺にとって逆効果なのは言うまでもない。

「会長はなんでこんな奴を？」

男勝りな声な女子生徒が顎で指す……こんな奴とはいきなり扱いがひどいな。

「戸夏は何か知っているの？」

とチビッ子と純粋無垢そうに舌足らずで高い声で問いかける。

「同じクラスだから知っているのだが……色々な女子をはべらせているんだ」

「！？」

はべらせている……だって？　ハッ、いきなり何をいうかと思えばそんなあり得ないことを。

俺の周りには友人しかいないぞ？　いくならあギャルゲーの主人

公っぽい物になったとはえいな、そんなには――
ユキがいるじゃん。そんでもって最近は姫城さんも……そっか学園のヒロインを大げさに言えば独り占めしてることになるのか？
……いやいや、いくらなんでも自意識過剰すぎだろう。ユキとは友人止まりでショボーンだぞ姫城さんには告白されて撤回されて無かったことにされて友人だしなあ。

「戸夏……それはどういうこと？」

童顔にに似つかわしくなく眉間にしわを寄せてチビッ子が聞く。

「こいつ数人の女子と妙に親密で……登校時に手を繋ぐ程の関係のある女子と別に、違う女子と地下倉庫前で密談関係のある女子を差し置いて違う女子と昼食してたりな！」

くっ……表現の仕方に多少誤差があるも、だいたいあってる。
まぁあんな暗い地下倉庫前で話してたら怪しむのも当然か……実際は俺と姫城さんが命の危機に瀕していた訳だけど。

「ユ、ユウくん！　それはどういうことっ！？」
「うわぁ、なんか食いついてきた！」

身を乗り出して興奮気味に食いついてきたのは他ならぬまた姉貴。
いや……まぁ今のこいつ（コナツ）の発言は取り方によっては俺が不健全な交友をしているようにも聞こえてくることからあくまで姉として注意するのは理解できるとしても。
……問題はなぜにそれほどまでに目が血走っているのか、だ。今、食いついてきたのは姉貴の私情が大半だろうな……とおおよそ予測がついてしまう。

「いや、一人はユキだよ。ほら家の前まで迎えに来てくれる」
「ああユキちゃんね……で、もう1人は？」

あれ、姉貴が恐いぞ？
なんというか、姫城が怒っていた時の雰囲気に似てる……？

「ただのクラスメイトだよ。ユイやマサヒロやユキが学食に行ったから一緒に飯食うことになって……」
「密談は？」

むごいぐらいにガシガシ攻めてくるな。

「彼女は何か悩んでいたらしくて人の多い場所じゃなんだから、と俺に相談を地下倉庫前で」

殺すことに悩んでたから、完全に嘘ではない……はず。

「なんでユウくんなの？」

もう、もうひと押しだ！

「友人としてだぞ？　友人である俺に相談してきたんだろ。彼女……姫城さんはあまり話す相手がいないらしくてさ」
「……そうなの」
「あ、ああ」

……。

「そうなんだ！　よかったぁ！」

……ふぅ、とりあえず急場は凌げたぜ。すると先程コナツとやらに聞いていたチビッ子は。

「なるほどね、うんうん！　そういう事情なら仕方ないね。コナツ、いきなり決めつけりゅことはよくないよ！」

名も知らぬ少チビッ子、擁護ありがとう！　でも素晴らしいほどに舌足らずだぞ……

「ということで、この話題は置いておいて」

「完結させないの！？」

チビッ子あと少しじゃないか！　頑張ってくれよ！

「ということで、我が生徒会の主なメンバー紹介をするよ」

するとチビッ子は立ち上がった……擁護してくれたとはいえ、なんだこの会長気取り。というか同じ学年にこんな少さい子いたっけか？

「私は……葉桜（はざくら）　飛鳥（あすか）　二年生徒会長代行っ！」

「えっ」

少女さんが会長代行？　ということは……上級生！？

「……」

「なんで突然黙るのかな！　しもの！？」

こんな人の名前を平仮名調で言う人が上級生な訳あるもんか。

「じゃあ次は私ね」

先程俺が任意同行に語弊がある！　と、言った際に「細かい男」云々を呟いた書記。

「私は紅（あかつき）　知沙（ちさ）　二年書記」

説明を受けたその数秒後。初っ端毒舌を吐かれて困ったものだ。

「Q&Aの発言も私よ」

「え？」

そういえば知沙……何かあったような？

『Q．８　知沙「ふふ、一年の癖によく知った口が叩けるものね』

これかっ！？　というか、さりげなく心読まれた！？

「で……あたしか」

先程何か俺への当てつけのように「こいつはべらせてるよ」的発言をしてきた奴だ。

「あたしは福島（ふくしま）　戸夏（こなつ）一年会計」

やっぱ1年か……会計は1年だからな。更にさっきさりげなく同

じクラスとか言ってたな――
ちょっとまて、同級生に罵られてた上になぜに好感度がストップ安なんだ!?

「私は下之美――」
「姉貴はいいよ」
「（しゅん）」

何に落ち込む姉貴。いや、いらないからさ……もちろん知ってるし。

「というか、なぜ俺なんです？」
「美奈から推薦されたから」
「いや、そうじゃなくて……生徒会役員全員が推薦したってことは姉貴以外が推薦した別の人がいるはずじゃないですか」

俺以外の姿は見当たらない。俺が一番最初なら仕方ないのだが。

「ああ、それなら」

するとチビ――会長代行は。

「美奈の副会長権限によって全却下されちゃったんだよねー」

……。

「……姉貴、あとで……わかるよな？」
「やだ！　ユウくん告白なんて！」

「今までの会話の何処に告白の要素があるのか、よく考えてみようか」

それを聞いて会長代行はというと顔を真っ赤にして。

「告白なんてふしだらだよ！　十八歳にならないと」

いや歳関係なく姉弟同士は駄目だと思います。

「流石ね」

……なにが流石なんですか、書記さん！

「……これだから、男は」

俺のせいで男子全員が否定された！？

「……」

え、えと入ってそうそうイジられ始めています。今居ない会長はこのストレスで病にかかったに違いない。

「で、シモノは副会長補佐代行ってことでよろしくね」

「！？　ちょっと待ってください！　だから俺は生徒会に入るとは言ってな――」

「ようこそ！　わが生徒会へっ！」

「いや、だから――」

「可愛がってあげる（イジリ甲斐がありそう）」

「結構です！」
「人と見ずに……まぁ荷物運びに、一人居てもギリギリ許容範囲だな」
既に人外の扱い。というかこいつはどれだけ俺のこと嫌いなんだよ……
「ユウくんと一緒に働けるなんてお姉ちゃんすごく楽しみ！　ワクワク」
「ああ、姉貴と一緒に働くなんて不安で心が折れそうで、今は心臓バクバクだよ……」
とりあえず拝啓名前も存じていない会長さま。早めの復帰を心から願います。

第０２５話　２－１４　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

七月二十日

第025話　2－14　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

「と、いうことで！　新たな生徒会役員が入ったところので、この私こと会長指揮の生徒会コンセプトを発表します！」

いきなりこの都条例に引っ掛かるフェイク的な容姿の合法ロリ会長は何を言い出すんだ、と少しばかり先程までの展開を思い起こして嫌な予感を感じつつも耳を傾けていると――

「コンセプト”自由”！」

は？　まさに今までの治外法権もいいところな拉致監禁強制的に役員に放り込む時点で悪い意味での自由が行使されているんではないかと一瞬にして脳裏を駆け巡る。

「仕事さえ全うすれば後はフリーダム！　生徒会権限をちょびっと使って学校を変えてしまうのもアリ！」

「いや、ナシだろ」

俺は迷わず反論した……職権乱用甚だしいな。仮にも生徒を統べたりする組織だろうに。

「反論は後日ね」

「今日中に出来ない！？」

まさかのアフターアンサーを要求されてしまった。

「と、いうことで……雑談でもしますかぁ」
「いやいやいや」

更に俺は迷いなく反論。迷った時点で人としての理性と常識が欠如しているといっても過言でないので俺の思考は正しい。
てか、仕事さえ全うしてないからな！

「反論は一クール経ってからならいいよ」
「長え！　三ヶ月長え！」

その頃には”次期のアニメ楽しみだなー”と言うように完全に忘却していること確定だ。

「えーだってー、このルートのジャンルは”ゆるゆる生徒会コメディ”なんだよ？」
「ルート言っていいのかよ！」

そうだ、桐の言ってたイベントってこれか……なんというか凄いメタ臭がするぞ。

「他に希望したいジャンルがあれば、内容次第で採用するから！　ドンドン言っていいんだよ！」

会長さんにジャンルを変える、そんなチートみたいな能力があるんですね、すごい（棒）
……すると会長に次ぐようになんともサドステッィクな笑みで書記の紅さんが口を開いた。

「私は”血みどろ生徒会虐殺劇”の方がいいわ」
「猟奇！？」

間髪入れずに会計の福島はといえば――

「あたしは”ソードマスター生徒会”の方が」

「なにその打ち切りフラグ！」

最終話でラスボスが現れそれが親族で何コマかで倒して「ふふ、私をは四天王の中で最弱……！　魔王様が貴様を消し去ってくれよう」というような捨て台詞を吐いた上で主人公が「俺たちの闘いはこれからだ！」ご愛読ありがとうございました、〇〇先生の次回作にご期待くださいといって締めくくられる明らかに人気の無さから編集部から切られた――作品を指すのがソードマスターだった気がする。

「じゃ、じゃあ、私は”ユウくんかわいい”」

「おい、そこ。既にそれはジャンルじゃなくて感想だから」

私情に塗れた、な。

……ツッコミに徹するせいで俺はいつもよりテンションが高い気がする。いやツッコミ所満載なのはわかるけどよ。

「しものも何かある？」

「いや、特に……っ！」

ええと、なにこの空気。「何か言いいなさいよ」「空気が読めないのかしら」「これだから男は」「ユウくんかわいいよユウくん」というのが視線から伝わってくるんですけど。

なんで俺、追い詰められてるんですか。なぜにそんなに言わなきゃいけないですか。大事なことですかね？　こんな議題とも言えないような議題が。

すると――突然思い浮かんだ、あるゲーム。そのゲームのキャッチコピーを数珠繋ぎで思い出した。

「”生徒会的スローライフ”」

今速効で考えた。なんとも適当だなと、思う。なにせ思い出したゲームのキャッチコピーと生徒会という単語を組み合わせただけだからな。

こんなの何言ってるのよと怒られるに違いないな。まあいいか、一応意見はだしたんだし――

「……いいね！」

いいんだ。

「ルート名これにしましょ」

いやだから、ルートとか言わないでください。

「五八点だな」

意外に厳しい！　赤点ギリギリじゃねえかよ。

「”ユウくん的スローライフ”……」

姉貴……（哀れみの目をして）

ということで、このルート（本来は言いのはナシだけど）は”生

徒会的スローライフ”に決まりました……正直どうでもいいな、うん。

「（そういえば）」

なんかこの”生徒会的スローライフ”的な物語を読んだ気がする。デジャブというか……なんというか。

「（ふふ、何気ないところに伏線が張られていたのね）」

「（伏線？……というか勝手に人の心読まないでください）」

「（以前のあなたの妹の発言を思い出してご覧なさい）」

「（……いや、なんであなたが俺の妹を知ってるんですか）」

「（私はなんでも知っているの）」

「（……）」

まぁいいや、思い出してみるか。妹ってのは……桐の発言だよな。

『コメディが中途半端な男じゃのう』

『生徒●の一存まではっちゃけてなく、ギャルゲ●の世界よ、ようこそまで固くない』

これか？　……あっ！　そうだよ！　生●会の一存だ！

「（確かにこの展開やノリは生徒会の●存のモロパクリだ！）」

「（……もともとパロディだけで構成されたような小説をパクってなんの意味があるのかしら……あらこんな時間に誰か来たみたい）」

「（扉を開けてはダメですよっ！　開けたら最後、富士〇書房の人間に消されます！）」

「（大丈夫よ”あちらの私”とは連携がとれてるから心配はないわ）」

「（平行世界扱い！？）」

紅さんは謎は多いが、かなりの美人だったりする。制服以外の場所から露出する白く透き通った肌。腰まで届くかのような長い深い青色の髪。

スラリとした手足に精悍かつ女性の色気も醸し出す顔。スレンダーながらも出るところは出ているという抜群のプロポーションである。

「うーん、次の話はどうしようかなー」

頬杖を付いて考える会長。会長も前述の通り”美少女”だ（少女を強調）その体型のちまっこさが庇護欲を刺激してくるが、桐で耐性が付いたので特に何もしない。

そういえば……

「福島」

「ん？　なんだ」

なんとも若干嫌そうに答えてきた。

「さっき、俺と同じクラスって言ってたよな？」

「ああ」

「クラスで福島を見かけることがないんだが、どうしたんだ？」

というか居たことさえ本人が言って初めて気付いた。意識していないからかもしれないが見たことがない。

「ああー、最近は生徒会で忙しかったからな。下之よりは早く生徒会に入ってるからもあるだろ。最近は殆どこの生徒会室で飯は食べてるんだよなー」

むむぅ、以外と忙しいのか生徒会。同級生だったという衝撃とまでは行かないとはいえ驚きの事実を聞いた。
ちなみに会計の福島は男勝りの喋りとはミスマッチにもかなりの美少女である。
左右を黒いリボンでまとめたツインテールの黄色い髪。こちらもスタイルよく、非常にバランスが取れている。
黄色いってのはそのまんまで浮いてもおかしくないはずなんだが……この生徒会ではそれほど目立たない。

というか姉も含めてバランスのとれた美少女で構成されている気がする。

「そういえばさっき俺のこと目の敵のように言ってたけど……俺が何かしたか？」

気になる。俺がやっぱり何かしたのだろうか。

「いや……なんというか、悪い。勘違いとは言えお前が女たらしに見えたからな。警戒しておこうと思って」
「ああ、そうなのか。誤解させるような行動をする俺も悪いからな……こちらこそスマンかった」
「いや、アタシの勝手な解釈がいけなかったからさ……お前は謝らなくていいよ」

そうか、そういうことか。なら良かった。

「そういえば……シモノユウジだっけか？」
「ああ」
「これからは、副会長と区別が付きにくいから〝ユウジ〟で呼ぶぞ」
「構わないぞ」

「じゃあユウジ。こちらから聞かせてもらうが……副会長とはどんな関係が？」

あー、そっちの誤解は解けてなかったかっ！

「姉弟だよ。なんか姉貴は俺のことすごい気にかけてくれてるみたいだけど、どうも度が過ぎた溺愛ぶりというか……ここだけの話、俺も少しウンザリしてる

姉貴に聞かれないように、小声で福島に耳打ちする。

「ああ、そういうことか。いや、また誤解してたみたいだな……ユウジ、スマン」

また謝られる。どういう風に誤解しているのか第三者から意見を聞きたいが恐いので止めておこう。

「アタシも妹が居て結構可愛がってるからな……まぁ一種の甘やかしで、少しねじ曲がっちまったけど」

「ねじ曲がった……？」

「いや、なんというかな……言葉で言い表せないんだよな」

「……？　それじゃ、ねじ曲がったと分かる象徴的なエピソードとかないのか？」

「うーんそうだな。　純情ロマ〇チカとかアンテ〇ークとかはよくアタシに見せてきたな』

「……」

「男、男の同姓同士の場面がスゲェ多かった」

「腐ってる！？」

「あたしにはどうも、受け付けなかったけどな」

……ある意味安心した。

「そういや福島はどうなんだ？」

「マンガ関連でか？　マンガはあまり読まないが、アニメは見てたな」

「へぇ、そうなのか」

「ナ●トとかブ●ーチとか――」

おお、見事なまでにジャ●プ系

「フタコ●オルタナティブとかグレ●ラガンとかさ』

すげえ。前者はマニアックすぎてほとんどが知らないだろうな。

「まぁ熱血モノなら大歓迎だな！」

今までの作品群からそれについては凄い納得出来た。

生徒会総評。

各それぞれ個性的だと俺は思う……いい意味でも悪い意味でも。

でもまぁ、思ったよりは、やっていけそうだな――と思ったのが大きな間違いだったことを以下略。

第０２６話　２－１５　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月２０日修正

第026話　2－15　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

生徒会後、俺は昨日と同じように姉貴と下校した。隣を歩く姉貴の姿は笑顔でいつもよりも一段と嬉しそうにも見える。
そうして帰宅。玄関には桐の姿はなく、自分の部屋にでも居るであろうと考え何気なく自分の部屋を目指した。

そして愛すべきかどうかはわからない、マイハウスのマイルームにて。

「来たか」

俺が扉を開けたのを見計らい、パソコン机に付けられているオフィスで使っていそうな回転するイスに机に対面で座っていた。
すると、そこからぐるりと一八〇度回転して俺のところに向きなおったところでグゥと拳を前に突き出して片目瞑ってキメポーズをしてくる桐。

当然、俺は何のリアクションもしない。

「（キリッ）」

いや、かっこつけてるけどさ。体の小ささから足浮いてる、地に足付いてないぞ。

「イベントはどうじゃった？」
「いや、お前既に知ってるだろ」
「こういうことは本人から聞くのが一番おも……その状況描写が分かりやすい」

「”面白い”って言おうとしただろ。ソウナンダロソウナンダロ？」
「”おもち”って言うつもりじゃった」
「脈略一切ねぇっ！」

すると桐はいきなり妖艶――幼艶に笑った。てかいきなりどうした。

「ふふ……かかったな」
「いや、なにが？」
「今までは、ただの前置きに過ぎない」
「何の前置きなのかさっぱりわからないな」
「ツッコミじゃ」
「ツッコミ？　……が、どうした？」

コイツは一体、何を言っているんだ？　――というような行動は今までにも数多にあったのでそれほど驚きはしないが、なんだろう遠まわしの言い方がイラっとくる。

「お主にとって以前と何か違った様子は無いか？」
「ツッコミでか……？」

……俺のツッコミはいつもキレが良くて、相手のボケを抉るようにしていたことは確かだが。

「少し前とお主自身のテンションが違う気がしないのか？」
「そういや――」

基本冷静に切り返している俺が、生徒会では結構熱くなってしまっていた気がする。
ありゃなんというか全員が俺視点でボケに回っていて、それでい

て俺が不利になる展開へと向かわせようとされていたので仕方なく――

「これは”シナリオの矯正”が、働いている証拠じゃ」

「シナリオの矯正？　いやいやそんな大それたものなんかじゃないだろう」

意味はわからんけども。

「この元のゲーム内でも今日お主の体験した生徒会ルートは特殊でな」

まぁ一目というより一聞きで特殊なのはわかるけども……どちらかといえば掛け合いが重視されたシナリオかと。

「もともと別のソフトで企画していたシナリオを、このゲームのルートに整合性考えずぶちこんでいるのじゃ」

「は？　別のゲーム」

「そうじゃ。だから主人公のキャラが若干異なっておる、テンションの上昇もそれが原因じゃろ」

……なるほど、そんな理由だったのか。生徒会だけでゲームを作るとすると若干内容が薄くなるような気もする。または資金の問題でそうせざるを得なかったとかスタッフのやる気とかでその方針なのだろうか？

「そうしてその生徒会シナリオの性格が、ユウジのキャラを少しじゃが変えてしまった。それが、シナリオから来る矯正じゃ」

そうか。

ゲームの設定が現実に反映される以上、主人公である俺にそのシナリオの主人公の性格が反映された――という解釈でよさそうだ。
それにしても性格が変わったという自覚があまりないな。何も知らず気付かずに水面下で変わっていたのだとしたら……それはもう恐怖だな。

「……それで、お前が何でそんな話を俺に？」
「スタッフに言われたからな、説明しとかないと読者がわからないと」
「また出たよスタッフ……って読者って何の話だ？」
「なんと今までの会話や、展開はすでにノベル化しておるのじゃ！」
「！！」
「ＷＥＢ小説でな。二つのサイトで連載してアクセス数をガッポガッポ稼いでるそうじゃ」
「止めろ！　内輪ネタを出したら、その媒体はお終いだ！」
「まさかの打ち切りか？」
「……いや、まぁ。ノベル版が終了しようと、俺らは関係ないけども」
「関係はあるぞ！」
「どこが？」
「スタッフのモチベーションが――」
「いや、だからこういう内輪ネタは寒いだけだって！」
「内輪ネタほど、見ていて痛々しいものはないからのう」
「……本当にこれ、終わるんじゃないか？」
「まだ、妹ルートにも入っていないのにのう……」
「同意を求めるな！　俺に入るつもりはないからな！」
「むむぅ！　わしは諦めんからな、貴様はわしが貰う！」
「それなら、俺は逃げる！」
「それを、捕まえ、縄で縛る！」
「……甘いな、桐。覚醒した俺にとってこんな縄などただの貧弱な

糸にすぎ――」

以上の下らない争いが十数分に渡って繰り広げられたが、本当に下らないので省略。

まぁ、なんだ。

生徒会が別ゲームのシナリオを挿入しただけ、と考えるとまだまだ別のルートが沢山ある訳で。

少なからず……いや、多いか。姫城シナリオの時点で色々危なげだっただけに、膨大な不安が俺の中を渦巻いていくのであった。

そして、その不安は残念ながら見事に的中し、かつ、別の面でも問題が浮上。

そうしてその出来事達は、俺の体力を大きく削っていくのだが……まだ、それは先の話で。

第０２７話　２－１６　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月２２日更新

第027話　2－16　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

メインヒロイン的立ち位置なのに、次第にユキが空気化してる気がしてならない。
いや、まぁ……他のキャラが濃すぎるってのはあるんだけどさ。
個人的にそんな展開望んでいないと、ふつふつ怒りが――

四月二七日

今日は晴れてもいないし曇りとも言えない。なんとも微妙な空の下、ユキを待つ俺。
ちなみに姉貴に関しては生徒会の仕事かなんちゃらで早めに出ている。まぁ、それはいつも通りなんだが。

「おはよーユウジー！」

家の塀に寄り掛かりながら待っていると、爽やかな挨拶と共に黒髪のポニーテールを元気に揺らしながら颯爽と駆けてくるユキの姿だった。

「おお！　よし、行こうぜー」
「うんー」

と、二人並んで歩き始めそうしていつも通りの他愛のない会話を繰り出されていく――

「ねぇねぇ、おいしいカレーの作り方知ってる？」

「ん？」

こんな普遍的で大きな変化の無い展開が日常会話の一コマだ。

「りんごを入れると味がまろやかになるんだよ」

ほう。今日は、料理会話か。

「なんか聞いたことはあるな」

「他にもカレーにチョコレート入れると、コクが出ていいんだって！」

「まぁ、入れても合いそうではあるなー」

「辛口カレーにココナッツミルクを入れるとなんとインド風に」

「ほぉ」

「カレーの水の代わりに鶏がらスープを入れても美味しいらしいよ」

「へぇ……」

「市販のカレールーだけじゃ辛さや風味が物足りなかったら――ガラムマサラ・レッドペッパー・クミンシード・胡椒・七味・タバスコを入れても合うんだよ！」

「……」

これなんて雑学王？　ユキのキャラ設定した人か、今のシナリオ書いた人。料理大好きだろ！　っていうかカレーだけで一時間語れる勢いじゃねえか！

「ユキは料理得意なのか？」

「ううん、あんまり」

戦犯シナリオの執筆者かよっ！　性格と合ってないじゃん！

「で、でもね！　お菓子は得意なんだよー！　甘いものは大好きだからね！」

おお、女の子っぽい。うーん可愛いなぁ。

「甘いもの好きなのか？　辛い物は？」

「あんまり」

……さっき思いっきり香辛料の話をしてたのは誰でしょうか？　あなたですよね！　というかシナリオライター！　矛盾発生してるから！

「でもね！　ジョロキアまでならイケるよ！」

はい、ええと。それ世界一辛い唐辛子だから。量とか関係しなければそれ以上はないと思うぞ。

「タバスコをさ、パスタについかけ過ぎちゃうんだよねー！　いつの間にかパスタの色地が見えなく――」

ぎゃあああああ、パスタの小麦色が真っ赤のタバスコの海にいいいい！？

「や、やめろ！　これ以上は致死量だっ！」

想像しただけで目が痛い……ああ、口の中がヒリヒリしてきそうだよ。

というかタバスコか……タバスコの付着した指で、目を擦ってしまった時の激痛を思い出した。

あれは、トラウマだ……鏡で見たら目がもう、充血して大変なこ

とに。リアルギ●ス状態で……何か命令を繰り出せるかと言わんばかりに真っ赤に染まっていた。

「とにかく……甘いものはいいよね！」

話が一切まとめられてない！？　その過程が一八〇度ちがうぞ！　なんだこれ。久しぶりのユキ回が、まさかの激辛談で終わるのかよ！

「あ、話している間に学校ついたね」

シナリオライタァァァァ！

……そんなこんなで、また一日が始まります（無理やりなメ）

第０２８話　２－１７　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（前書

7月２４日修正

第０２８話　２－１７　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。

「第三八六九回アニメ談議。ひゅーぱふぱふー」

何故かユイがヴォイスでサウンドエフェクトをかまして……なんというか虚しさを覚える光景だな。　というか初回では無いにしろ四ケタはねぇよ。どこぞの現代視覚文化研究会のく●アン談義でもそこまでしないだろよ。

「深夜アニメかた全日帯アニメまで、語ってしまおうじゃないかっ……という企画なりさっ！」

突如始まったアニメ談議。ラブストーリーではなくオタストーリーはいつも突然だからしょーがない。

今日は今日とてユイは平常運行には違いないのだ。

「おおー！」

そんな”アニメオタク”にも分類されるマサヒロも、自分の意見を大ぴらに出来る喜びか期待か、ノッてきたようで、

「ひゅーひゅー！」

……それでユキさん、なにゆえあなた様も参加しておられるのでしょうか？　というか口笛でやるなんて斬新ですね。擦（かす）れてるっすよ。

「おおー……」

と、一番テンションの低い俺。アニメは好きだけど語るほどしっかり見れてないからなあ。

ということで、いつものメンバー集合で二つの机を占拠し、ユイ主導でアニメについての感想を述べ合うそうだ。

「おお、考えたら四人揃っている!?　麻雀できるぞ!」

「みんなルール知らないだろ」

「空想マージャン」

「無理だろ!　そういうのは完璧に覚えた上級者がギリギリ許されそうな高度なざわ……技だろ!」

「いやでも卓と牌を使わないからエコロジーだ!　まさに今空想マージャンの優位性が証明されたな」

「苦しい!」

「で、話は戻ってーの。このワタクシがお勧めするの”ＣＡ●ＶＡＳ２”だぁ!」

見事に返しはスルーされた。一応さっきの謎のマージャンの件（くだり）は本当にノリで言っただけで深い意味はないのだろう。まぁ話を進めた方が賢明だ。

「で、それはどんなアニメなんだ?」

「最終回で視聴者が裏切られるアニメだ!」

「それは、良い意味で?　悪い意味で?」

「悪い意味でだな!」

「ダメじゃねーか!」

なんなんだ、最終話でヒロインでも主人公でもなく”視聴者”が裏切られるって。あれか「俺はお前の敵と思いきや友人でもなんでもないただの通りすがりだ!」……みたいなものはないとして。

そういえば同名のギャルゲーがあったことを思い出してきた。本

当に名前だけだが、最終話で考えられないような超展開でも起こしたのだろう。

……やべえ、逆にみてみたい。

それに続くようにマサヒロは語り始め、

「他には……”N●Kにようこそ”とかだの。見ていると鬱になれる！」

「アニメでトラウマつくってどうすんだよ！」

アニメとは、本来娯楽要素……鬱になったら本末転倒じゃないか。

「面白いんだけどさ……まぁ人の堕落していく姿やニートの生き様を、リアルかつブラックに描いたコメディアニメだよ」

「いや、説明された中に一切コメディ要素が見つからないんだが」

「しかもＤＶＤ価格はお馴染みの角●価格！　もちろんさっきのもね！」

「最悪だ！」

●川価格とは一クール約十三話構成や二クール約二十六話構成にも関わらず”二話”収録な上に諭吉さんに近い金額を一枚のディスクで要求される、元々市場の小さめなオタクの購買力を低下させる、誰も得をしない価格商法だ――というのが以前ユイに話して貰った受け売り。

「まぁ、見て見るといいぞ。ハマるから」

ちなみに後日、長い休みの日に一気に見たら面白かった。いやぁ騙されてみるもんだね……ＣＡＮ●ＡＳ２は聞かないでください。

「……マサヒロは、どんなのがいいんだ？」

「あー……かみ●ゅだな。あれはいい。」
「当時ブレインズ・●ースなんてまるで無名だったのに、あの作画は凄かった。〇五年アニメでは群を抜いてるね。まさに神アニメだった」
……どうやらとにかく凄いらしい。ふむ、いつか見て見よう。
「他には……流星のロッ●マンだな。アニメ版は、完全な萌えアニメだった」
思い切り朝にやってるアニメになったが……守備範囲広いのな。ゲームの印象しかないけど、そうなのか。
そして俺もにわか臭全開で話題に入って行くとする。
「へぇ、そんなに面白いものがあるのか。俺は”うた●れるもの”とか”バッ●ーノ”に”ハレの●グゥ”とかが、好きだな」
実は俺の好きなアニメ三銃士。うた●れは記憶を失くした主人公が村を救ったところから始まるファンタジーストーリー、最後の方の展開は驚いたけど面白かった。
バッ●ーノはバトルと推理モノで展開があっちこっち行って分かりにくいけど、少なくとも全話みると全部わかる良作な作品だった。
ハレのち●ゥはもう普通に腹抱えて笑うほどのギャグアニメだった。
ユイによると結構マニアックらしい。特に全日帯アニメを選ぶところがツウだね！　だそうで。
すると、マサヒロが口を開いた。
「”うた●れるもの”に”バッカ●ノ”……二つには制作会社も監督もキャラデザも被っていない。しかし……共通点が一つ存在する」

せ、制作会社？　監督？　俺、そんなこと知らないからさ……というか”ハ●のちグゥ”スルーしてやがる。

「それは……」

いや、聞いてないけどな。

「血が、沢山出るんだよなぁ……ふふふ、あはは！」

いきなり発狂し始めたマサヒロ。

「血を、血を、俺が求めてるぅ！　ほ、他にグロイアニメとかないかユウジィ？」

何故こんなどうでもいいアニメ企画なんてやったかというと。マサヒロのキャラ立ての為であったりするのかもしれない。

「ふふ、血から漂う鉄臭い臭い！　地面を赤く染める鮮血！　うふふ」

マサヒロはアニメオタクであろう以前に、相当のグロマニアだったりする。ちなみにグロ以外にもミステリーやホラーも大好物らしい。

「血……体液……体……内臓……抉りだし……手始め……体を麻痺……電気……スタンガンっ！　そういえば、秋●原でスタ●ガンが売ってたなぁ。　今度貯金引き出して買いに行くか」

「なにその危ない一人連想ゲーム」

今の表現がマサヒロの言う内容が危ないのか、マサヒロが1人で連想ゲームをしているのが危ないのかがわかりにくい。日本語って難しいですね。……で、

「マサヒロ……スタ●ガンなんて何に使うんだ？」

「護身だよ、護身用……いつ、”奴ら”に襲われるかわからないからな」

「見事なまでに中二病だ！」

誰だよ、その奴らって……まあ深い追及は止めておいた方が確実に無難なのでツッコまない。まぁキャラとしてはこんな感じだろう。ユイは変態かつ、マニアックなアニメ好き。マサヒロはグロマニア。そしてユキはというと――

「私は”夏目●人帳””宙のまに●に”とかかな」

ユキも何気深夜アニメを見ている。マニアックだけども、何処か癒しアニメが多い模様。

「少し前の作品だけど”カレイド●ター”も面白かった！」

癒し……？　話では、スポ根モノらしいけど。ユイが「こやつ、なかなか……！？」とか呟いてるし。

と、まぁ。一応こういう話題でも会話出来るのは嬉しいもので（実は俺は結構に置いてけぼり）　ユキはちょっとしたアニメ好き、でもあるということだ。そしてかわいい！

そんなこんなで、当り前のように四人の時を過ごすのでしたとさ――

第０２９話　２－１８　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（終）

7月２４日修正

第０２９話　２－１８　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（終）

「なぁなぁ」

先程、グロ系の話題で発狂しユイ並みの変態振りを披露していたマサヒロが話しかけてきた。

「なんだ」

なんか馴れ馴れしいぞ？

「あのさー、この学校の裏に山あるじゃん？」

「ああ、まぁあるな」

この学校のある場所は町の”山側”に位置し、この学校と駅の反対方向には山がそびえている……しかし、そんなことを何故、今俺に聞くんだ？

「でさ、そこって墓地があるんだよ」

「へぇ」

いや、だからどうしたよ。

状況説明が微妙に長ったらしくて回りくどいのはラノベの典型だぞ。さっさと要約でも三行でもいいから言えや。

「だからさ……肝試しに行こうぜ！」

「……は？　今なんて」

思わず聞き返した……肝試し？

「肝試し。引きずり出すと血に塗れてる肝と書いて肝に、お試しの試し」

「……いや、わかるから」

先程の影響あって、グロマニアの本領発揮？　なんと気持ちの悪い例えをするんだろうか。

そしてグロに転化できない試しの説明は至ってテキトーという。

「で……この春に肝試しなんかを？」

そう、見事なまでに春だ。

桜こそ散ってしまったものの、まだ春陽気。とても肝試しというイベントを連想出来ない。

「夏より涼しいだろ」

いやいや。肝試しって冷やかなイメージがあるから、あえて暑い夏にやるものだろう。

「墓地を抜けた先には古い神社があってな。そこには神様が祭ってあるらしい」

「神様ねぇ……」

多神教のこの国で、俺は特に崇めようという神も宗教もなく。それでいて信じないわけでもない、八百万（やおよろず）とも言うしなー

「で、肝試しは墓地の初めからその神社の”神石”までの往復だ。行ったか行っていないかは、予め置いておく”神石”前のボードの上の貢物の有無で決める」

そこまで決まってんのかよ……妙に用意周到だな。

「というか”神石”ってなんだ？」

「分からないか……そうかそうか。分からないかぁ！」

なぜに突然にエラソーになったし。

もしやその祭ってある神はかなりに有名なものだとか……？

「”神を祭ってある石”の略だ」

わかるかっ！　なんだよその略、”祭る”の要素が完全に消滅してんじゃねえか！

「で、貢物ってなんなんだ？　なんかの王様にでも送るのか？」

まぁ、もちろん冗談だが。

「その神様へだ。貢物は適当でいい、自分が良いと思う物を持ってけばいいだろ」

「そこは適当でいいんだな？」

神に貢ぐ物なのに、そこだけ適当なのはどうよ……

「三日後やるぞ」

はやっ！？

「はええ！　なんて強行スケジュール……っていうか、俺も参加する流れになってねぇか！？」
「はぁ？」
なんだよ。そのさぞ当たり前だろ、的な顔は。
「当たり前だ。ユイもユキも姫城さんも呼んでな」
いや、なんでだよ。しかも俺が誘うのかよ……
「人を巻きこむなよ……」
「いいではないか、ついでに祭ってある神に会えるかもしれん」
「ねーよ」
そんなのが出てきてたまるか。てか神様が”ついで”とか微妙どころか普通に失礼だろ。学業の神だったら滑らされるぞ。
「とにかく俺は他の奴にこのグッドニュースを伝えてくるからな！　さらばだ！」
俺含めみんなにとってそれは”バッドニュース”なのだが。本当にこの流れだと参加するハメになるな……まぁヒマだからよいのだけど。
しかし、あれ？　デジャブ？
「グッドニュースだぜぃ！」

と思っていると、ユイが全力疾走で机に滑り込んできた。机や椅子を巻きこんでガタガタガシャーン。

「勢いを付け過ぎたか……」

「付け過ぎだ！　机二、三個倒してるじゃねえか」

周囲の生徒が引いている。みんな、それは正しい適切な反応だ。この俺が心の中だが保障する。

「で、グッドニュースってなんだ？」

確実に地雷臭がするが、一応聞いておく。

「よくぞ、きいて、くれ、まし、た」

変な区切り方をするな。

「転校生が来るんだってサ！」

「ナ、ナんだってー……って、しかし入学式シーズンも過ぎて中途半端な時期だな」

「これは超能力が使える機関所属の男子高校生が来るに違いない」

三年間続きが出ていないスニー〇ー文庫の某作品の登場人物みたいだな（※当時）

「いや、超能力なんてあるわけないだろ」

「じゃあ、凄いS気が強い超絶お嬢様」

「なんだよ、その二択！　転校生のハードル上げんな！」

で、転校生が普通だったら落胆するんだろ？　……転校生が不潤

過ぎるぞ。

「五日後に来るらしいぜぇ」

またマサヒロと同じように具体的な……

「……どうやったらその五日後の情報が手に入るんだよ」

「それは知ってはいけないことなのだよ、ナオトくん」

「誰っ!?　ナオトって誰」

「見ればわかるっ！」

「何をっ!?」

「M&――おっと追手が来たようだ、さらばだ！　ユウジ！」

「追手ってなんだ！　お前どの危ない組織から、その情報手に入れてきた!?」

……まずい一気にツッコミすぎた。疲れる……心の中でもツッコんでるもんな。とりあえず次の授業まで体を休めておこう。と、机に項垂れるが――

キーンコーンカーンコーンと非情にも、授業の始まりのチャイムが鳴る。

この休みを奪われたイラつきと突然に俺の意見もお構いなしにスケジュールが埋められた鬱憤を何処にぶつけてみればいい？

ガツッと、とりあえず拳に怒りを込めて机を殴るが。ただ拳の骨に痛みが響くだけで、虚しさだけが残った。

はぁ。

午前授業も無事終えて今日は学食だ。いつも通りの四人に――

「ご一緒してもいいですか？」

と、姫城が言ってきたので――

「もちろんいいぞよ」

ユイ。

「大歓迎だぜぇ」

テンション高くマサヒロ。

「うん！」

そしてユキ。

「ユウジ様は？」

と、俺に不安そうな顔で聞いてくる。まあ、それには即刻答えた。

「聞くまでもなくだ。じゃあ姫城、ユキ他二人行こうぜ～」

それを聞いた途端に姫城は顔一杯に笑顔を広げ。

「じゃあご一緒させていただきますっ！」

と、嬉しそうに教室を出て歩き出す。

「他二人とはなんぞや！？」

「呼ぶのが面倒なだけだー」
「あたしゃサブキャラなのか！　サブ止まりなのか！？」
「ユイ……諦めろよ、俺らサブは主人公を盛り上げることに徹すればいいのさ」
「くぅ……某も主人公になりとうございます！　オンニャノコフラグを立てたいです！」
「いや、ユキとりあえずキャラ固定しような」

とそんな下らない雑談をしていた――その時のこと。

『――――』

「！」

一瞬時が止まったかのような錯覚。ちょうど見えた女生徒に俺が心奪われたからだろうか。

人形のような白い肌にスレンダーな体格。整った顔立ちに伸びる深緑のストレート、頭の両方横からチョンと毛が出ている。

その女生徒には身から発せられる清楚さ、上品さがある。しかし彼女は他人を拒絶するような、冷たく沈んだ瞳を持っていた。

言葉で表せない不思議で、異質な人。そんな彼女が何故か俺の目には止まったのだ。

喧騒にざわめく廊下でただ一人。彼女は遠く前だけを見つめ、深く長い緑の髪を揺らしながら、俺らの横を通り過ぎて行った。

「……」

それで俺は振り返ることも、彼女を追うこともしなかった。理由は学食に早く行きたかったと単純明快。

それに俺が、彼女にいくら興味があっても学年色も見忘れ、クラスも名前も分からないとあっては今後関わることはないだろうと思ったからでもある。

こうして俺達五人は駄弁りながら学食に歩を進めた――

＊　＊

全てが揃うまでは行かなかったですが、しかし全てが集まる前に物語は始まります。

現実と架空が混ざり合うこの物語、そんな物語のプロローグは終わりを迎えました。

そして、全ての始まりの時。

それが今、この時、この瞬間。

第０２９話　２－１８　俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に開始。（終）

でも、まだ続いてしまいます。

第０３０話　３－１　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前書

7月25日修正

第０３０話　３－１　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

キーンコーンカーンコーンと授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

その後一分経たぬ間に担任が教壇へ滑り込み、僅かな伝達事項を伝えた後に起立・礼を終えると颯爽と教室を去った。

何か用事でもあったのだろうか？（※伏線ではありません、多分）

そんな思考を巡らせていると、俺の席の近くにユキはやってきた。

「ユウジ帰ろー」

「おお、帰る――」

帰るか、と言い終わるその前に。

ピーンポーンパーンポーンと会話をブチ切る呼び出しチャイム。

なんだ、ただのアナウンスか。そう他人事で構えていると――

『副生徒会長補佐代行、下之ユウジ。今すぐ生徒会室に集合』

……副生徒会長補佐代行って長え名称だな。そんな自分で言うのも恥ずかしいぐらいの長い名前の役職なんて、居るかよ――

っておい！　副生徒会長ｈ（ｒｙ　ってのは俺のことかっ！

「えっ！　ユウジ生徒会の人だったの!?　初耳だよっ！」

「ああ……そうらしいな」

「え、えと……なんか曖昧だね？」

「いやぁ昨日の放課後、何故か俺、拉致られてな」

軽い暴行を受けた後、気絶させられて生徒会に拉致られた……昨

日の事なのに忘れようとしていた俺が居ましたよ。
すげえ文章にしただけで完全に犯罪だな。

「ねぇユウジに何があったの！　昨日の放課後という時間に一体何が起こっていたの!?」
「拉致されて、そのまま副会長補佐の代行に就かされたな……」
「一年なのに副会長の補佐!?」

考えたらそうだよなー……というか生徒会役員総合的に少なすぎだろ。人員削減とかする必要があるのか微妙だし……不景気は生徒会でさえ食らうのかと。
というかなぜ『でも……思ったよりは、やっていけそうだな』などと、血迷ったことを抜かしたのだろうあの頃の俺は。
タイムトラベル出来るならば、あの頃の俺と事の発端の姉貴をフルボッコにしてやりたい気分だけど、タイムトラベル出来ないので後で姉貴を殴っておこう。

畜生め……これがシナリオの矯正ってやつか。

「……よし、行ってくる」

この強行を抗議する為にもな！

「ごめんなユキ……悪いが、先に帰っていてくれ」

これはユキフラグ折れたな……ああ（泣）

「うん……ユウジ。もしかしてこれから忙しくなる?」
「どうだろうな……まぁ今日行ったら分かるさ」
「そっか、わかった……じゃあねユウジ、また明日ね」

ユキの言葉から、そして表情から分かる”寂しい”という感情に俺は胸を締め付けられながら、無言でユキの背中を見つめ続けた。

……。

ちょっと生徒会室に行ってくる。

え？　手に持ってる鋭いものはなんだって？

ただの鉈だよ、鉈。

なぁにちょっくら役員のいる中で素振りの練習をしてくるだけさ。心配はしなくていいぞ―

まぁ、死なせはしない。

ええ……なんか主人公が病み始めたんですけど、大丈夫なんですか！？

え、私ですか？　ユウジじゃないですよ？

誰だよって？　……それは後ほどにでもね。

よう、みんな。俺だ。

今から生徒会室に乗り込んで、鉈でちょっと素振りをする予定なのだが……さてと。

「（どうやって生徒会室に入ろうか）」

なんというか普通に入ったら負けな気がしてきた。昨日の鬱憤を晴らす為にも、少々練った入り方をしなければ。

1、ドアを蹴り飛ばしながら入るか。
2、何か叫びながら入るか。
3、普通にドアを開けて入るか。
4、扉かと思ったか？　残念ながらそれはフェイクだ！

の中ならば……よし――無難に「2」だな。

「さてと」

息を吸い込み、目を見開いて――

「どっせーいっ！」

生徒会の扉を開いた。

「……」

扉を開けるとそこには――誰も居なかった。

「あらユウ、来てたの？」

後ろから書記こと紅さんの声が聞こえた……誰も居ないなんて。
チクショウ……チクショウ……うわあああああああああああ！

「ねぇユウ、なんで泣いてるの？」
「ちょっと……虚しくなっただけです」

一人でただ熱くなっただけという……傍からみれば寒いノリ。ああ、なんと果てしなく虚しいものだろう。

「……わかったわ、ごめんなさい。今は心を読まないから」
「なんですか！　その哀れみが、たっぷりこもった言葉は！？　今ってことは、またいつか読むつもりがあるんですね！」
「もちろんよ」
なんと見事にも即答だった。
「それで……来たのは紅さんだけですか？」
「チサでいいわよ」
「じゃあチサさん」
「それで、なに？」
「さっき俺が聞いたこと無視しましたね！？」
「ごめんなさい……私にとって無利益なことは耳に入りにくいの」
「……」
はいそーですね。無利益ですもんねー。
「拗ねちゃだめよ」
あ、心読まれてる。いくら即答したからってここまで早く読むことないじゃないですかあああああああああああ！
「私とユウだけ。アスちゃんもコナっちゃんもミナもまだ来てないわ」
というか聞いてたんですね。そういえば――
「……というか、いつの間にか俺の呼び方決まってたんですね」

ユウ、って呼ばれてるのな。

「他のがいいの？」

「候補があるんですか？」

「ユウを和訳して――」

「ちょっと待ってください、ユウジです。俺の名前はユウジです！」

「――あなたクンなんてどうかしら！」

「なんか……それは、嫌です」

「あなたはこれから、あなたクン」

「あなたが被ってますよ！」

ちなみにチサさんの中では”アスちゃん”は飛鳥の（あすか）から。”コナっちゃん”は戸夏の（こなつ）。”ミナ”は姉貴の名前そのまま、となっているらしい。

「噂をしてると来たみたいよ」

「どっせーいっ！」

福島が勢いよく扉を開き、大声で叫んだ……というか、俺のネタ。俺は成功すらしなかったのに――

「おはようございます、チサさん！　ってユウジ、何泣いてんだ？」

「いや古傷を抉られたというか……成功してるし」

「は？　意味が分からないぞ？」

わからなくていいんです。自分の持ちギャグがパクられて成功している芸人を見ているようなのが俺の心境ですよ。

「要訳すると”ドーント・タッチ・ミー”みたいよ」

え。

「そういう風に要約するのは、エキサ○ト翻訳だけで間に合ってます！」

あの日本語が崩壊したような訳し方はあんなフリーソフトは結構だ！

「”私に触れるな”か、いい度胸だな……ユウジ」
「ちょ！　お前も真に受けんな！」
「そろそろ手を垂直にして誰かの首を殴りたかったところだ」
「えらくピンポイントですね！？」
「覚悟しろ、ユウジ」
「そんな覚悟出来ないから！」
「どっせーいっ！」
「ぐぼぉっ！？」

意識が落ちていく。ああ……この表現、何度目だろうか。

「今日は――やるよ！」

チビッ子生徒会長の声が、俺の耳が捉えた最後の音だった。

「――――」
「あれ？　シモノは、どうかしたの？」

……ゆっくりと意識が戻ってきた。会長の声が頭に響く。

「死んでるみたい、土葬か埋葬それとも火葬か……迷うわ」

まてまて！　俺死んでないから！　というか葬式吹っ飛ばしていきなり葬るの！？

体が動かないだけ……って本当に動けねぇ！　……まあいっか。面倒臭いし、このの会話は流しておいて俺は寝ていることとしよう。

「私は土葬がいいな、土に還ってエコロジー！」

還り始めるのには、一体どのぐらいかかるんでしょうね。

「アスちゃんの意見もいいけど……私個人的には、コンクリート詰めにして東京湾に沈するのがいいと思うのだけど」

どこのヤクザだ！　ってか発想が一々恐ろしい！

「あたしは、親指を上に突き出しながら焼却炉に沈んでいくのがいいと思うぞ！」

某映画を侮辱しているとしか思えない。そう脳内でツッコミをしている頃。

「ごめんみんな遅くなったー　ってあれ？　ユウくんなんで寝てるの？」

姉貴が来たのか。寝てるんじゃないです。また下手したら骨髄損傷する攻撃を同級生の女子から受けた訳ですよ。

「違うわ美奈、これは死んでいるの……たった今、私が皇居のお堀から引きずり出して来た所なのよ」

俺、水死体の設定かよ。てかなんでそんな場所で溺れてたんだよ俺。本当だったら色々国際問題になりそうな場所だな……

みんな遊び感覚でやってそうだし、こんな超設定信じるわけないよな、姉貴もバカじゃない――

「ユウくんが死ん……今すぐ人工呼吸をしなきゃ！」

残念ながら超設定を信じる。どうしようもないバカだったようです。ああもう！　というか死んでたら、人口呼吸全く効果ないから！

……なんとか、この状況を打破せねば。姉が人口呼吸を始める前に俺は起きなければ――

「俺死んでないからっ！」

起き上がり必死の抗議をした。その瞬間だった。

「死になさい、ザ●」

チサの攻撃。●キ、だれかひとり、いきたえた。

「がっ！？」

ザ●キじゃなくてザ●かよ！　バト●ンの中だと上級な魔法を使うのも憚られますか……そうですか。というか、その前に技の効力が若干違うぞ！？

「わかった」

薄れゆく意識の中でも突っ込みざるを得なかった。で姉貴は、何がわかったのだろう。多分分かって欲しくないことが分かったに違

いない。

「……お姉ちゃんの人工呼吸が”べほ〇み”になるんだね！」

言えてない言えてない。何そのノリの良さ、そして発想が突飛過ぎて俺には到底理解出来ないよ！

「ジンコウコキュウチャーンスだね！」

何言っちゃってるんですか。なぜ、生徒会長も乗ってきたし！

「美奈さんが誇る最強の肺活量で、ユウジの肺を破裂させてやってください！」

なぁなぁなぁ福島さん。こんなの読者は求めてないんだよ。グロなんか求めちゃいないんだよ。
俺がこんなの全く求めちゃいないんだよ！

「……まかせて」

任されちゃった！　マズイ。これはさりげに命の危機に瀕し始めてるぞ。

「お姉ちゃんが助けてあげるから」

肺活量で例え破裂しなくても、弟を社会的に死においやるつもりですか！

「行くよ！」

来るな！　っていうか体動かねぇ、チサさん……何かやりやがったな！

「着陸まで残り……9…8…」

そんな、実況要りません。

「イッキ、イッキ、イッキ」

もはや宴会のノリになってないかい！？　そんな空気をぶち壊す、刺客がやってきた。

「おにいちゃーん☆」

「（なんかきたー！？）」

明らかに少女な声、しかしどこか取り繕ったその高い声は――紛れもなく桐。キャラセレクトが予想外すぎる！

「おにいちゃん探したよ？」

あーもう。面倒な事態になりそうな臭いしかしないぜ。しばらく出てなかったからって、ここで出ることないだろ！

「おにいちゃんおきてー」

――――っ！？　体の縛りが無くなっていく。なんだ、これ……今なら言える、起き上がれる！

「お前ら良い加減にしろっ！」

「「！？」」

なんとか体を起こせたぜ――

「あら……どうして、ユウ。動けるのかしら？　へぇ――もしかして、あなたが？」

誰もいないとこで喋ってるぞチサさん。大丈夫か……いや、そうか誰かの心を読んでるのか。あなたが、ってことは――

「すごいですね、おねーさん」

こいつかー。

「私の魔法を解くなんてね。大したものだわ」

魔法だったんだ！　ここに来てまさかのジャンル内にあったファンタジー！？

「まほう？　私は、おにいちゃんの背中に触っただけだよお？」

それだよ。その魔法（仮）を解くとしたら桐が俺の背中に触ったからだ。というか初めて桐の能力が役に立ってるな。

「（はじめてではないわっ！）」

って、俺の思考にいつもの桐が乱入してきた。

「（ふふ、面白い妹さんを持ってるのね）」

なんでチサさんも乱入してくるんですか！　チャット広場ですか、ここは！

「（あなたみたいな娘。是非、我が家に5人は欲しいわ）」

その「一家に何台あっても困らないの」的ってどうです！？

「（値段の交渉次第じゃな）」

出来るのかよ、自分を五人複製！　よく考えたら人身売買だ！

「（ではお金を用意しておくわ……ユウをつかって）」

俺に何させる気ですか！？

「（ちょっと……ね？）」

黙った、発言的に危ないこと言っても大丈夫なチサさんが黙った。

そして同意を求めてきた。

いやいや知りませんから。

というかチサさんの押し黙る、お金の稼ぎ方って一体何だ！？

「（しかしコイツは著作権で保護されておるからの、そう安くは出来ないのう）」

なんでだよ。誰か権利者が居るみたいな言い草するなよ。という

か売るつもりはあるんだな！　この鬼め！

「（使用料を払えばいいのね？　いくらかしら）」

「（プライスレス）」

お金で買えない価値がある以前の問題だよ。

「（わかったわ、お金を貯めておくわね……あなたくんを使って）」

呼び方変えてるだけー、ってさっきのまだ続いてるのかよっ！

ああ、オチがねぇな！　とりあえずは強制終了だ！

第０３１話　３－２　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前書

7月25日簡易

第031話　3－2　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

「ついにアイツが目を覚ました？」
「ああ、僕が実際に見てきたからな」
「そうか……ならば我々も動かなければな」
「野放しにしておいたら……」
「早急に確保しようか」
「じゃあ向かうと、しますか」

＊　＊

「なんだ、この意味深な冒頭は」

今までのノリはぶち壊す謎過ぎる会話。なに？　野放しって？　退治モノ？

「これは未来を見ることができる”予知夢”を使って、わしが声マネをしたものじゃ」

え、桐が今喋ってたのか？　……明るめな声域の高い男子と、冷たく真意の見えない女子の声があったんだが。ああ、これこそ才能の無駄遣いって言うんだろうな。

「お前の能力の一つ……とか言うんじゃないだろうな？」

心を読む力とか、あったけど。まさかな――

「よくわかったな」
「……わかったつもりはなかったな」

また、えらいファンタジーな能力だな。　未来予知って。

「ということで。　今の声マネは、今後の伏線じゃ」

え！？

「フクセェン！？　こんな展開が、この先あるってのかよ！」
「ああ、楽しみにしておれ」

……正直、声マネ内容から察するにロクな展開じゃなさそうなんだが。

「そして二期へ繋がっていくのじゃ」

二期って何だ！？　このゲームがか？　それは二期とは言わんだろっ！

「クソゲエRとして来春すたーとじゃ☆」
「爆死臭しかしないな、そのタイトルだと」

アマ●ンのＤＶＤランキングが、一万ケタで発売中止になったあのアニメを思い出すな。

「それにしても厄介そうだな……なぁ、回避できないのか？」
「諦めるんじゃな。一回は通らぬといけない道じゃ」

渋い言い方すんな。

「なにせ、お主に寄生するからな」
「えっ！　俺は一体どうなるんだ!?」
寄生とか、もう只事じゃないじゃん。下手したら命さえ、落としかねないルートな気もしてきたぞ。
それにしても……なんだろうか。そのシナリオは……出来れば関わりたくないのだが。
まぁ無理だろうな。
「とりあえず……前回の続き辺りに戻るぞ」
前回の続き？　……ああ、生徒会でテレパシーチャットしてたっけか。
「え？　じゃあ、ここどこだよ」
生徒会ではないし。他の生徒会役員の姿もないし……一体ここは何処だ？
「それはな、閉鎖空――」
そこで、一旦意識は途絶えた。
「……」
とりあえず辺りを見渡す。うん……生徒会だな。
で、先程の冒頭は伏線らしいな……まぁその伏線が生かされる頃

には、俺は忘れてるだろうけど。

「で、ユウジくんその娘は誰？」

と、生徒会長が聞いてくる「妹です」そう答えようとした時だった――

「隠し子らしいわ」

そう、書記のチサさんが――！？

「隠し子ォ！？」

骨髄反射のごとく、即刻反応してくる福島。

「お姉ちゃんそんなこと知らないよ？　どういうことユウくん？」

副生徒会長こと姉貴は、またまた笑顔で聞いてくる。

へぇ、俺に隠し子が。まさか、あの時あんなことになるなんて、俺はなんて取り返しの――いるわけねーだろっ！　どこにそんな伏線があったんだよ！　少なくとも、今までの人生の中で、その伏線となるべきである出来事は心当たりがないわ！

「チサさん何言ってるんですかっ！」

「あら、ごめんなさい……隠しておくべきだったわね？」

また誤解を生む言い方を！

「そんな事実は存在しませんから！」

「この年でユウジ、オマエ……人として軸がぶれてんな！」

俺の軸がぶれてるんじゃない、この生徒会役員らの軸がぶれてるんだ！？

「ユウくんのはじめてが……」

……なに言っちゃってるんですか、この人。ああ、姉貴です。言ったのは姉貴です。でもこんなのが姉貴と認めたら、色々秩序が崩れると思うので認めません。

「はれんちだよ！　それは大人になってからだよ！」

大人になっても、隠し子はいけないと思いますよ？

「ふふ、このリアクションがたまらないわ」

……意図的過ぎて感動した。狙ったんですか。そうですか！　狙ったんですね！　いや、そうですよね！

「お前を、さっき信じたあたしが馬鹿だった……」

「いや！　さっきのは嘘偽りないから！」

「ねぇ……ユウくん」

おい、なんか話しかけてきたぞ。無視するか？　無視するか？

……一応は聞いておくか？

「なんだ……姉貴？」

「お姉ちゃんは……お姉ちゃんは二番目でもいいからっ！　ねぇユ

ウくん！　私と子作」
「あああああああああああっ！」
「急患だっ！　この人は、重症なんだ！　医者はいないのかっ！　誰か、姉貴を助けてくれぇぇぇ！」

病院が来て！　もう手遅れなぐらいなんです！　だからこんなに血迷ったような、弟にかける言葉として不適切なことを言っているんだよ！　先生、誰か来てー！

「もう！　ユウくんったらぁ」
「……」
「いくらなんでも、産婦人科に行くのは早すぎるわよ……？」
「精神科に行く必要は十二分にあるけどな！」

なにこの酷い有様。俺はプレイするゲームのジャンルを間違えたようだ。俺のやりたかったのは”ハートフルストーリー”なんだ。”ハートフルボッコストーリー”じゃねえんだよ！

さっきから俺に集中放火。
チサさんが爆弾を中心に投下し、生徒会長が誤解して、誤情報を流して周囲を混乱させ、更に福島がその誤情報を鵜呑みにし、姉貴が更に爆弾で燃え盛る炎にガソリンを投入した。
現実にそんな事があったらが大惨事だな。しかし、ええ。生徒会と、俺の印象は大惨事ですね。
どんだけ精神的に抉れば気が済むの！？　一人もう姉貴とは呼べない、重度の変態になっちゃってるし！　流れを変えるんだ……とりあえずは本当のことを話さなければ。

「……コイツは俺の妹の桐です」
「よろしくですっ☆」

猫かぶりに拍車がかかってるな。そして内心、俺の集中砲火を見て笑ってるんだろ！　凄い嬉しそうだもんな！

そしてかつての火種ことチサさんが、口を開く。

「イモウトってのは”義妹”と書く方で合ってるわよね？」

「どこからそんな選択肢持ってきたんですか……」

どうやってもイモウトとは読めませんね。ギャルゲーとかラノベで強引にフリガナ振って、は見たことあるけどよ。

「義理なら……別にやっても、大丈夫なのよね。羨ましいわ」

何を!?　という単純な突っ込みで返そうとしたら感づく。これはチサさんが地面いっぱいに仕込んだ地雷であると。

踏んだ（聞いた）瞬間”ハート（ドクロマーク）フルボッコストーリー”が再開されること間違いなし。意味さえ聞かなければ被害を被らずに済むんだ。なぁに簡単なこと――

「ねぇチサ、やっても構わないって……何を？」

ダークホォォォス!?　まさかの生徒会長の追撃。無垢な子供による純粋素朴な疑問だとぉ!?　うわぁ、チサさんがニヤリって笑い始めたよ。本当、この時のチサさんは生き生きしてますね！

「それはね……ユウジ。ね？」

アイコンタクトで、同意を求めないでください。意味を聞き出そうとしないでください！

しかし、こんな時に限って。ロリ生徒会長の勘の良さが発動……
先程のアイコンタクトで、生徒会長は理解（誤解）したようで、

「シモノ、不潔だよ！」

全くもって俺の意思なんかじゃない！

「っ！　信じなければ……傷つくことも、なかったんだろうな」

諦め始められてる！？

「それなら……姉弟でもいいんだよね？」

もう、アンタ黙ってて。

「……ぅん！　わかったよ！　会長こと私の判断で、とりあえず今日は解散にする！」

何に頷いたんだろ。何がわかったんだろ。ああ、誤解だって――

と、いうことで、今日の生徒会活動は終了……ただ駄弁ってただけじゃねえか。

しかも俺フルボッコで、チサさん以外に誤解を植え付けたまま。

このノリが続くとなると、先が思いやられるな……

第０３２話　３－３　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
センデン。

超展開です。

第032話　3－3　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

自分の部屋に、プラス桐。
……なんか既に、この部分を通過しないと次に進めない勢いだな。

「なぁ、ユウジ」

「ん？」

「姉はダークホースじゃったわ……」

「ダークホースというと？」

「変態的な意味でじゃ」

「ああ……」

少し前の、俺なら「お前が言えた口じゃねぇだろ」と罵声を浴びせるところなのだが……
今日の姉貴はどうもな……なんちゅーか、酷い。

もう一度、思い出してみる……「お姉ちゃんは……お姉ちゃんは二番目でもいい――」

うわぁ……思い出さない方が良かったわ。　それ以降の姉貴は変態的な方面で壊れっぱなしである。
姉貴が明らかにおかしな方向の溺愛に変わってる訳で。　それは

もう俺大ピンチな訳でして。　下手したら高校生命終わるぞこれ。

「わしがその変態キャラの立ち位置だったのじゃがな……姉妹で揃ってしまうとは……」

自覚あった上で今までやってきたのか。　しかし姉貴の変貌振りには桐でさえ驚いているようだ。　にしても、変態仕姉妹を持つ長男はどうすれば宜しいのでしょうかね。

「……あの天然姉貴の性格矯正は、かなり難しそうだしな」

実際あの変態振りは、おそらく天然モノ。　天然を治すほど難しいものはないんだよな。　……いや、意図はもっとタチが悪いけども。

「仕方ないな……わしがキャラを変えるか」

「え？」

キャラ変えるとか、自分で言うのどうよ。　まぁ正直、桐の性格が俺にとって無害な方面に変わってくれればこしたことはないな。

「今無いキャラとしてツンデレはどうかのう？」

ふーむ、確かに。　幼馴染　（ユキ）・ヤンデレ　（姫城さん）・ババア喋りのロリ　（桐）・黒　（チサさん）・ロリ会長　（会長）・男勝り（福島）

王道かつテンプレ的なツンデレがないのは、逆に不自然ではあるな。　そうなると――

「いや、まだキャラが控えてたりするだろ？」

「うーむ、まぁな」

「どんな名前だったっけ？」

「それはな……って、貴様はまだ知っていないじゃろ！？」

ちっ、さりげなく今後の攻略情報を入手するチャンスだったのに、妙なトコで気付きやがって。

「わしを騙そうとした罪じゃ……罰として、お主を襲わせてもらおう！」

……またかよ。

「どっちの襲うの意味なんだ？」

まぁ一応聞いておく。ちなみに、俺は既に逃げる準備を整え、いつでもダッシュＯＫ状態だ。

「もちろん……な？」

目で解れってか？　……結局変態キャラで行くのかよ……そうはさせるか、姉貴だけでも対処が大変なのに、また桐が変態キャラを通すなんて……

……！　そうだよ。何で俺がご丁寧にツッコミ役をやっていなければならないんだ？　俺だって、気を抜きたい時がある。常にツッコんでる身としては、少しうんざりだ。

今までの桐の行いと、今日の生徒会のフルボッコの腹いせに――

ツッコミをせず、今度は逆に、俺がボケてやる。

「よかろう、ならこちらは鉈で応戦しよう」

先ほど、生徒会室まで運ぼうとしてユキに抑えられた鉈を取り出す。　生徒会に行く前に鉈持ってたのに、着くと無くなってたのは、忘れてたんじゃないんだからね！

俺が、生徒会に行こうと鉈を背負いながら、廊下を歩いていると、ユキが教室に忘れ物を取りに来て、その時止められた物だ。

鉈は幸運にも折りたたみ式だったが為に、鞄に折りたたんでしまい。　生徒会室で素振りの練習をすることは叶わなかった。

家に帰って、桐の来る直前にベッドの下という”男の秘密基地”に隠しておいたのさ！

「え？　鉈じゃと？　どこにそんなものが……」

「細かいことは気にしちゃいけないぞ？　……さてと、ちょうど素振りの練習をしたかったんだよな」

「ちょっとお主、襲うの意味を一体どっちで捉えたのじゃ！？」

「もちろん……だろ？」

「目、目で伝えるな！」

「おお、ちょうど赤の絵の具が切れてるんだった」

「血は時間が経つと茶色になるんじゃぞっ！　というか、お前に絵

を描くような設定なぞ無かったじゃろう！」

「細かいことを気にしちゃいけないぜ」

「少し言い方変えただけで、使いまわしするでない！」

「さて、その茶色とやらをたっぷり頂こう」

「ま、まて。　落ち着け、ユウジ。　鉈の先をこちらに向けるんじゃないぞ。　や、だから、あっ、きゃあっ――」

あはは。

しゅじんこう　が　はじめて　はんげきした　！
しゅじんこう　の　やみか　が　しんこうした　！
へや　が　とまとそうすいろ　に　そまった　！

「はぁはぁ……ま、まさか反撃されるとはな……血のり片付けておくんじゃぞ」

「はっはっは、いや、それは本物の血だぞ？」

「！？」

なんかカッーとやったらスッキリしたぜ

「ちょっとお主、今なんと言ったのじゃ！　そうすれば、この血は

誰のものなのじゃ！」

ふぁぁ……なんだか眠くなってきたな。　今日は色々あったからな。　今日の自分、よく頑張った。　明日の自分、頑張れ。

「さてと寝るか」

「待てスルーするな……いや寝るならわしも一緒に」

「出てけー」

「その適当振りはなんなんじゃ！？　おい、摘みあげるでない！　そして扉の外に出して高速で扉を閉めるんじゃないぞ、それで明日は――」

バタン

俺は、聞く耳持たず、桐を廊下へ放り出し扉を閉めた。

「ふぅ……」

なんというかグダグダだな。　ボケとツッコミがワンパターンだったから、それを打破するために俺がボケに回ったというのに。

先程、桐が置いて行った言葉『それで明日は――』……ふぅむ、もしや明日の予告をしようとしてくれたのか？　……わざわざ、また扉開けて、桐に聞くと、面倒になりそうだからなぁ。

俺の推測だと、きっとまたイベントだろうな。

「（さてさて次はどんなイベント来るんだろうな）」

一時は面倒だったが、一応は主人公だからな。　気にしておかないと。　そう自分に言い聞かせてる内に、ベッドに横たわって居たために、数分経たぬ間に俺は眠りについた。

四月ニ八日

相変わらずの、春。　始業式から3週間以上経っている、暖かいというか、温い感じの日々が続く中。

「こういう春の日には、桜の奇跡を見てみたいね」

「何言ってんだ？　ユイ」

教室にて。　いつも突飛押しもないこと言いだすユイが、そう俺に呟いた。

「桜、もう咲いてないだろ」

既に4月の最後。　桜は散り、花を失くした桜は緑色の葉を付け始めている頃だ。

「ユウジ……お前はそこまで堕ちたか」

「どこから落ちたのかを、まずは教えて欲しいな」

少なくとも、お前は既に日本海溝の深さぐらいは落ちているだろうな。

「願いを叶える桜だよ！　この世界にもあるはずだ」

「ねえよ」

一刀両断する。　二次元と三次元を混同すんなよ。

「じゃあ、願いを叶える紅葉の木とかならいいんじゃないか！」

「今の季節をよおく見直せ」

春だぞ？　桜が咲いてないにしても、未だ春だ。

「願いを叶える……梅の木？」

「なんで疑問形なんだよ」

梅も、もう時期じゃないだろ。

「それじゃあ、願いを叶えるスギの木」

「……季節関係ない上地味だな」

「花粉を撒き散らしてる時点で十分派手なのだよ！　謝れっ！　全国の杉の木花粉に悩まされる人に謝れ！」

「花粉症は俺のせいじゃねえだろよ！」

絶対、お前花粉症の怖さ知らないだろ。　俺の親が一時期大変だったぞ！

というか、なんだこのやりとり。　どんだけネタ枯渇してんだ！

「ところで、ユイ」

「なんぞよ」

「昨日言ってた転校生とやらは、本当に来るのか？」

「ミサカネットワークを経由した、確かな情報だ」

「ソースは」

「私は目玉焼きは醤油派だ」

「ああ、俺も醤油派だな……って違うから！　情報元は、何だって聞いてんだよ！」

「そのノリツッコミＧＪ！　さあさ、夏コミのネタにさせてもらいますよっ」

今のネタを使うって……どんな同人誌が描けるんだよ。

「転校生は女らしいぜぇ」

あら、キチンと答えてくれるんだ。

「ほぉ」

これはイベント確定だな。

「あっ、そういえばユウジに伝えたいことが有るんだったぞ。　言い忘れてしまうところだった」

「ん？　なんだ？」

ユキはらしくなく、一息おいてから。　しっかりとした真面目な口調で、俺に言った。

「これからアタシら家族になるらしいからな、よろしく頼むぞ」

「へ？　いま、なんて？」

「だから」

聞き取れなかった訳ではない。

はい？

「ウチの父が、ユウジの母と再婚するからな」

「アタシとユウジは、これから家族だ」

え？

どゆことよ？

はい？

第０３３話　３－４　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
自分で読み返しても、メタなネタばっかです。　なお、コチラのサイトでは、シナリオが一部カットされます。

第033話　3－4　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

父は、俺がモノゴコロ付く前に亡くなった。

父という存在を殆ど知らない。　だから俺は、いつも母の背中を見てきた。

しかし、最近は母と顔を合わせる機会は思うより少ない。

何故なら、母は会う機会も無いほど仕事に没頭しているのだ。

まるで何かから逃げるように、黙々と。

と、シリアス気味に言っても1月に一回は帰ってくる訳で、その度にかなりの溺愛を受けることになるのだが……

度合で言うと姉貴の当社比1．5倍ぐらい。　姉貴には、確かに母の血が流れていることが分かる（溺愛的意味で）

で、その母が再婚する。　父という背中に興味はある。

でも、その前にその再婚する父の「娘」に問題があるのだ。

「えええええええええ」

「うおっ！？　ビックリしたな、もう」

「ビックリしたのは俺だ！　再婚！？　俺の母とユイの父がかっ！

？」

「聞いていないのか？」

はい、一切全く金輪際承知致しておりません。　驚かない訳がないっちゅーの！　なんだよ再婚って、聞いてねぇぞ！

……こんなディープな話をしていても外部からツッコミが入ってこないのは、今が昼食時で、たまたま姫城とユキが弁当を忘れ、食堂に行っている為である。　ちなみにマサヒロも同じく。

更に食堂は、今日限定で全品1割引きキャンペーン中。　食堂は今頃大混雑。　それか、今日の教室は閑散としていて、クラスメイトが数えるほどにしかいない。

そんな大混雑の日に弁当を忘れた姫城&ユキは大変だな。　マサヒロに関しては同情する気はさらさらないので「ざまぁw」と内心思っている。　「ご愁傷様マサヒロくんw」

にしても、飯を食いながら話しているっていうのに、聞く内容が衝撃過ぎて全く箸が進まないんだぜ！　ホントに、どういうことなんだよ。

「ありゃあ……そうなのかい。　ようし……その経緯を説明しようかの」

なんでお前は知ってるんだ……？　で、話によると――

ユイ父は最近転職して、たまたま俺の母と同じ職場に就き、出会う。

（中略）

そしてケコーン。

「むごいぐらいに過程すっ飛ばしたな」

出会って、何も過程無しに結婚とか何事だよ。

「というかその程度しか知らないんじゃないのか？」

だと、思うが。　そんな詳細ユイが知る必要無いもんな。

「いやぁ……詳しく話すと、警察が絡んでくるからちょっとね」

母一体何をしたーっ！

「じ、じゃあ家とかどうすんだ？」

どうなるんだ？　どっちが引っ越すとかあるのか？

「家なら、ユウジの隣に住むっ！」

「は？」

「もともとユウジの隣の家はアタイらの持ち物でな、物置として放置してたのでさ」

飛んだご都合設定ですね。　そんな情報初耳だよ。　そりゃまぁ、誰が住んでいるのかは知らなかったし、というか人が住んでいるかも分んなかったけども。

「人気はなかっただろう？」

「まぁ……そうだな」

確かにひっそりはしていたが……まさかユイ家の物置とは。

「あ、でも我はお主の家に住むぞ」

「……はい？」

「いや、なんでだよ。　お前、隣の家があるんだろ？　なんで、俺の家に住む必要があるんだよ？」

「拙者の父は仕事に追われていて、殆ど家に帰って来ないのでござる。　それして、どうせ隣だし、部屋も空いているとお聞きしたので、いっそ住んでしまえと思った次第でござる」

「空いていたからって住んでいい事にはならねーよ！　下宿屋じゃねぇんだぞ！」

「しかぁし、既にユアマザーは承諾済みだ」

俺は承諾してないんだけど。　関知さえしてなかったんすけど。

「ユアマザー曰く”細かいことは気にしなくていいのよ！”だそうだ」

細かくねーぞ、母！

「み、苗字とかは！？」

「変えて欲しいか？」

「い、いや結構デス」

変えるつもりはなかったのか。　もし俺が「巳原」に、又はユイが「下之」に変えたら色々目立つ（クラスで）アンド騒ぎが起きる。

「今日からよろしく頼もうっ！」

「……ちょっと待って」

なんてことをしやがった母。　ちくしょうめ、俺の知らないところで、独断で決めやがって！　抗議のメール送り付けてやる！

……と、送ろうと携帯を取り出した、その時。　ベストタイミングで――

ピロピロピロピロリーン

携帯のバイブレーターと共に、平凡な着信音が鳴り響く。

「（んん？　母からだな……？）」

タイミングがばっちぐー過ぎだろ（おそらく死語）　しかし、母からメールなんて久しぶりだな。　何かあったのか？

ピッ

メールの文章を読んみることにする。

『おはよう、ユウくん』

ちなみに家庭での呼び方は、ほぼ「ユウくん」統一されている。
そこに俺の意見が反映されてるかは、微妙であるが。

『突然だけどね』

ん？　突然、なんだ？
携帯の受信メール画面を下にスクロールすると、驚きの文面が並んでいた。

『ちょっと新婚旅行に行ってきまぁーす』

「えええええええええ！？」

今年、過去最大の驚きだ。　辺りを見回すと、その叫び声にクラス中の視線が集まっていた。

「悪い、悪い！　なんでもないから、気にしないでくれ！」

と一応弁解しておく。　で、もう一回携帯に視線を移すと――

『ナオトさん……あっ、紹介してなかったね。　ナオトさん、ユイちゃんのお父さんで私のＮＥＷダーリン（ハァトマーク）』

……あぶねえ。　ダーリンの文字で携帯を床に叩きつけるところ

だったぜ。　よくやった、俺の右手と理性。
ちなみに、急いでいるので読み飛ばし。　結構分を飛ばして――

『仕事に関しては、大丈夫！　有給使ってるから！　というわけで、10日間行ってくるよー！　有給使い切ってくるからねー』

有給ェ……使い切っちゃ駄目だろ。　まだ4月だってーのに。

『ユウくんに会えないのは寂しいし、ユウくんも寂しいだろうけど』

……と、言われましても。　この躍動感溢れるメール文章なんで、寂しさなんて感じないのですが。　まぁ、よくあることだし。

『じゃあまたねー！　お土産、あえて藍浜町名物買ってくるから』

なんて嫌がらせ！　というか、ここのお土産って言ったら、かまぼこじゃねーか！　いらねーよ！　なんだかんだ、月に1度は食ってるよ！

『あ、今から電話しても繋がらないから気を付けてねー』

おい、ちょっと待てよ！　今すぐ事情を聞き出さないとマズいってのに！

ピッピピッピ
プルルルル
プルルルル
ガチャ

『おかけになった電話は電波の届かないところにあるか、電源』

ブチ

「……」

色々ショック過ぎて、うまく言葉に出来ません。

「一つ屋根の下……ということだな」

最後のユイの言葉に、俺はトドメを刺された訳でして。

第０３４話　３－５　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（並

@　クソゲヱリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
メタ展開目白押し！　最近暑くてたまらないなーというアナタに！
寒い展開の続く「クソゲヱ」はいかがでしょうかっ！

第０３４話　３－５　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

ええ……現状を、三行でまとめるとするならば……

「ユイ」
「母再婚」
「同居」

……全然纏められてないぜ！　ふ、自分の文章力の無さに物哀しさを覚えるぜ。

以下ユウジとユイのテレパシー会話でお送りします。

「（おいユイ）」

「（なんじゃっぺな？）」

「（……）」

「（何かようかっぺな？）」

「（……その語尾はなんだよ）」

「（きっと流行るっぺなよ）」

「（流行るかんなもんっ！　第一汎用性無さ過ぎじゃねえか！）」

「（時代を先取りする私が言うのだから、流行るに決まってるじゃないかっぺなよ！）」

そんな時代、いつになっても来ないだろうな。　というか来たら世界が終わりだろ、この語尾が流行るなんて感性が狂い始めてる。

「（で、なんだ）」

「（あ、終わったんだ）」

「（なんか飽きた、寝る）」

「（いや、寝るなよ。　話聞けよ）」

文章に直したら何行も、時間とともに無駄にしてるな。　そしてツッコミを入れる度に、俺の労力も浪費されとる。　帰宅部の体力の無さをなめるなよ！

「（いいか、ユイ。　今した話は、みんなには内緒だぞ？）」

「（ほう、それは……プルトニウム取引の話か？　いいだろう、確かに表沙汰にはしたくは無いからな）」

「（いつのまにか物騒な世の中になりましたね！）」

プルトニウムとか学生間で取引されている時点でこの国も終わりだな。

「（さっきの再婚話だろう？）」

「（ああ）」

一応聞いていたんだな。　それならそうと、早く話始めてくれよ。

「（それは残念、色々脚色してゲーム化する予定だったのに）」

「色々脚色」のところが非常なまでに気になるが――まぁ、阻止いたし関係無いだろう。

「（それは、ご愁傷様だ――）」

「（それでは夏コミの実話ネタにそのまま）」

「（変わらねえよっ！　世間に公表してる時点で変わんねぇよ！）」

昨日のノリツッコミと、この再婚話をどう構成すれば、夏コミ本が出来るのか不思議でならない。　それはもう斬新な同人本が出来るだろうな……需要は一切無いだろうけど。

「（それに……お前は親の事情に振り回されていいのか？　嫌なら自分の意見を言えばいいだろ？）」

何故反論しない？　仮にも同じクラスメイトが家族になるなんて、心境的に良いものではないだろ。

「（旅行行ったじゃん、ユウジの母と主に。　それに電話は繋がらない、っていうか父持ってない）」

「（う……）」

確かにそうだった。　新婚旅行に行ったんだよなぁ……まったく、あの母は。

今、ユイ父は、仕事をしているのに携帯という連絡手段を持っていないという驚愕の事実を聞いたが……色々ややこしそうだからな。

ユイの父だし。　一応触れないでおこう。

「（それに……別に嫌ではないからな）」

「（何が？）」

「（ユウジと同じ家に住むことだぞ？）」

その、ユイの思いもよらぬ言葉に驚いてしまう。　俺と同じ家に住んで、嫌じゃない？

「（ユウジと話していると楽しいしな……それに）」

……そう思ってくれていたのか。　何気に嬉しい、ユイが言っているとはいえ……て、照れる。　で、それに……？

「（同じ家なら、ユウジが襲ってくるかもしれない！）」

「ぶふっ！？」

さっきの和やかな俺の気分、ぶち壊し。

「（カモン、ユウジ！　や、優しくしてね……一応拙者も乙女なのだから……ね？）」

一人称が拙者で、お前が言っていなかったらどれだけ嬉しかったことか。

「（何がカモンだ！　その言葉で、後に来る言葉殺してるじゃねぇーか！　というか俺に一体何を期待してんだよ！　ちくそう！　結局、俺の周りには変態しかいないのかぁぁぁぁっ！）」

「（その通りだ）」

その変態の一人に公認されてしまった。

「（確かに変態は多いな！　なんだこの変態率！）」

ユキは唯一無二の癒しの存在として、姫城はアレだし、姉貴は絶賛理性崩壊中。　桐はもう根本から残念だとして、生徒会メンバーはなんか俺をイジることに定評が出始めてる。

「（そ、そなたは変態を惹きつけるフェロモンを放出しているのか！？）」

なにそのピンポイントフェロモン。　ハタ迷惑にも程がある。

「（その変態フェロモンにアタイは惹きつけられた訳か。　よし、望むところだ）」

その呼び方だと、俺が変態みたいじゃねえか！

「（ユウジ（変態フェロモン含有よ）」

なんかの成分みたいだな、オイ。

「（という訳で今日は共に帰るぞ！）」

相変わらず、話の境界が分からないヤツだ。　切り替えが唐突過ぎる。

「（え？　いや、引っ越しとかどうしたんだ？　俺の家に住むんだろ？）」

今帰ってから、引っ越すのなら別だが……今までユイは途中で別れ、マサヒロと同じ方角だったはず。

「（ユウジの母君には了承を取って、既に引っ越し作業は終わらせておいた！）」

！？

「（な、なんだと……）」

「（今から帰るユウジの家、それが私の新しい家だっ！）」

「（根回しはえーよ！　というかさりげにお前、俺の母と連絡結構とってんな！）」

「（かつては、トランスシーバーでお互いを助けあった仲だからな……）」

「（もう、お前誰だよ）」

ああ……精神的ダメージを滅茶苦茶食らった気がするぞ。　心の準備もさせてもらえないとは、神様め……バーカバーカッ！

それに……頭に浮かぶ二つの地雷。　ああ、ユイとはいえ女子だ。れっきとした女子。　性格と容姿を除けば……って女子の要素が無い！？

に、してもだ。　俺の姉妹二人（どちらも天性の変態）が、それを聞いたら、どんな反応をするか、今から気が気ではないだよなぁ……

あー気が重い。

第０３５話　３－６　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
ゆっくり連載中。

第035話　3－6　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

放課後だ。

ゲームではルート分岐があったりする、放課後。
しかし現在の状況、ルート分岐などと悠長なことを言える余裕はない。

「ユウジ帰るぞっ！」

と、ユイは机に座る俺に向って言い。

「ユウジ帰ろー」

と、ユキが言う……2人称が被ってわかりづらい気がするが、声が全然違うんだぜ。

「帰るぞー」とマサヒロ。

「それでは私も」と姫城さん。

今日は生徒会活動がない。　それは朝に口頭で伝えられていた。
そりゃあもう心の中で、狂喜乱舞しましたよ。　あんだけ、好き勝手にイジってきたんですから……
でも……もしかして、俺ってもう飽きられた……？　……なんだろうこの寂しい気持ちは。　っ！　違うんだからね！　Mじゃないんだからね！

でも、1年だけとか言ってたな……てーことは、姉貴は生徒会活

動があるんかな？
……というか、生徒会活動ってどんなことしているんだ？　昨日も一昨日もアレだし……方針がよくわからん。
そんな複雑な心境と、疑問を抱えたまま。
「あ、ああ」
二人を交互に見ながら返し、椅子から立ち上がって、鞄を持つと。
「行くかー」
それが合図のように、皆が歩きだす。　ユキ、ユイ、姫城さん、マサヒロの四人で昇降口に向う。
春の夕暮れはまだ遠く、まだ空は青い。　そんな下を、鞄を手に持ちながら、ちょっとした談笑を交えて歩く俺ら。
1、2分歩くと、1人が道から外れた。
「では、私はこれで』
別方向の姫城さんは、律儀にもお辞儀をし、手を振ってきた。
「ユウジ様、それではまた明日学校で」
この後姿だけを見ていれば、清楚で可憐かつ容姿端麗なのだがなぁ……
「ユウジ様……信じてますから」

一瞬振り返って、黒さ満点の笑顔でそう言い帰っていった。　ほんとヤンデレじゃなければ……ねぇ？

そうして姫城さんと別れた後、しばらくして交差点に差し掛かる。

本来ならユイとマサヒロと別れる場面なのだが……

「じゃなーユウジ。　ユイ、行くか」

マサヒロがユイを連れて帰ろうとする。　そう、これが日常の場面。　しかしそこに変化が現れた訳で。

「すまねえな、兄貴。　実は昨日オイラ引っ越したんだぜ！」

「え？」

「そうなの？」

マサヒロとユキが驚きの表情を見せたが、俺は平静を装ったまま無反応。

……まぁ事前に知っているサプライズなんて嬉しくもない、そしてそのサプライズは俺にも関連しているからタチが悪い。

「と、いってもすぐ近くだ。　なぁにユウジの家方面になっただけだにょ』

変な語尾が付いているのにはツッコまないとして、一応秘密は守ってくれるようでなにより。

「そうか……なら、俺は一人下校か」

としょぼくれるマサヒロ。

「違うぞ、マサヒロ」

「え？」

「登校も一人だ」

「追い打ちをかけた！？　もういいよ家帰ったらふて寝だ！　ふて寝だっ！」

お前はか弱い乙女か。

「まぁ……納得はいかんが、さらばだ！　みんな！」

落胆１０秒、復活３秒の記録はダテじゃなかった（自己計測）にしてもキャラがユイ以上に安定しないよな……マサヒロって。

そうして残されたのは、ユイとユキと俺で。　そしてまた分かれ道。

「じゃあまたね！　ユウジ、ユイ！」

と、俺の癒し的存在のユキが、幼馴染スマイルで手を振りながら、道を駆けて行った。　……どうやら、ユイが一緒の方向なことに不審感は抱いていないようだ。

それを見送ったところで、ユイが口を開いた。

「では行くかー」

「……ああ」

姉妹の存在に気が重くなりながらも、家に着いた。

「おお！　感動！　ここが新しい　ワタクシ　ユイ　ノ　イエ　ナノデスネ！』

「なんでいきなり片言になってんだよ」

「アマリ　ノ　カンドウ　デ　シコウ　カイロ　ガ　プッツン」

「ダメじゃねーかっ！」

思考回路切れたらマズいって……ユイを横目に見ながら家の鍵を開け、扉を開いた。

「ただいまー」

このまま自分の部屋に逃げ込むか、それとも……迎え撃つか。しかし装備は殆どない……鞄の外ポケットに入ってる鉈ぐらししかないな。

「あっ！　おかえりユウくん」

……早速の姉貴登場。　ボスが出たぞボス。　というか生徒会無かったのかよ。　帰るの早！

回復アイテムとか強力武器とか全く持ち合わせてないんですが。

やはり、この日本●販で買った鉈で――

さぁ……姉貴からどんな反応が来る？　実際姉貴の顔は俺の顔を

少し見た後、ユイの顔へ視線を固定していた。

「それに、ええと……あ、ユイちゃんね！」

あ、あれ？　既に知ってる系？

「はい、巳原ユイです。　これからよろしくお願いします』

え、あれ？　いつものユイじゃないぞ？

「まぁ、ご丁寧にどうも」

そう姉貴も、自然に返す。

「ユイちゃんは先に自分の部屋見てきたら？」

……そうだ、ユイは以前にもここに遊びに来ていたんだった。

と、言っても中学時代だが。　結構頻繁だったからなぁ、姉貴ともよく顔を合わせていたのか。

「はい、わかりました。　では失礼します」

と靴を脱ぎ、靴を揃えて二階に上がって行く。　ちなみに桐とユイと俺の部屋は二階にあり、母と姉貴と”あいつ”の部屋は一階にある。

そして兄貴はユイの上がって行った階段を見つめ、少しして俺が靴を脱ぎ玄関のマットレッスに足を踏み込んだ瞬間だった。

「ちょっと、ユウくん話」

言葉使いが丁寧な姉貴では、滅多なことが無い限りにしないであろう、接続詞をほとんど使用しないでの呼び出し。
それは姉貴がキレる寸前のところだ、圧倒的な威圧感と言葉で表さないプレッシャー。

今の彼女に逆らえるものは誰もいない。

「ユウくん、これどういうこと!?」

「母のメールの通りだ」

「ううん、他に何かあるね!」

ちなみに、先ほどは省略していたが。

『ナオトさん……あっ、紹介してなかったね。　ナオトさん、ユイちゃんのお父さんで私のＮＥＷダーリン（ハァトマーク）』

から――

『仕事に関しては、大丈夫！　有給使ってるから！　というわけで、１０日間行ってくるよー！　有給使い切ってくるからねー』

の、間にもまた文章があった。

『そこには私のマイダーリンの娘のユイちゃんが来るから！　そういえばユウくんのクラスメイトだっけ？　良かったねー！　知り合いでっ！

この同居という場合、見識があったほうが厄介である。　身近に居る人は特にね！

『マイダーリンは家を開けることが多くてさ、いっそ一緒に住んじゃいなＹＯ　みたいなことになってね（笑）』

ぜんっぜん笑えないんですが、というかユイの言っていること本当だったんだ。

『まぁ大丈夫、大丈夫なんとかなるって』

なりませんから、絶対なりませんから！　というか完全に人任せじゃないいっすか！

「俺もメール見る直前にユイに教えられたからな……姉貴と大抵情報は変わらないよ」

「うーんそっか……もう決まっちゃたからね。　でもユイちゃんだもん、私は礼儀正しくて良い娘だと思うし」

礼儀正しい……という印象は、俺には微塵もないな。

「ああ、まぁな」

「うん、わかった！　これからユイちゃんは私たちの家族ってことで！」

「あ、ああ」

何か、わかってくれてみたいでなにより。

「でも、不純異性交遊は禁止！」

「しないからっ！」

「流石ユウくん！　わかってるぅ！」

してたまるかよ。　しかもユイになんて。

「でもその代わり……お姉ちゃんとデートしようね？」

「それも一種の不純異性交遊だと思うが」

姉弟同士のデート自体が不純だろよ。　通常とは勝手が違う。

「じゃあ、買い物と名ばかりのデート」

即刻名ばかりって言っちゃ駄目だろ。　まぁいいやツッコんでたら日が暮れる……ってもう暮れ始めてるし。

「まぁ、俺は上に上がるわ」

「またご飯の時下りてきてね！」

「へぇーい」

「……そして、デートのこと忘れないでね」

そう言って階段を上る。　最後の方に不吉なことが聞こえたがス

ルーで、俺は何も聞こえてない聞いてない。　そうに違いない。
しかし、肝心のラスボスの存在を忘れていたのは俺の誤算だった。

第０３６話　３－７　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
「小説を読もう」連載版でカットされた残念描写多し！　悪い意味でのディレクターズカット版、連載中！

ユニークアクセス人数が３２００人超えました。　ありがとうございます。

第036話　3－7　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

「おかえりじゃ」

「あ、ああ」

部屋に入ると、桐がお出迎え。　……どうやらこの様子を見ると、ユイのことは聞いていないようで一安心。

「昨日”明日は一切イベントがない”と言うつもりじゃったのだが、貴様が摘まみだしたせいで……」

そうだったのか……紛らわしい言い方するな！　と、いつもならキレてるところだが、状況が状況だ。

「ああ、悪かったな」

「”悪かった”？　いつもなら”お前が摘まみだされるようなことをしたからだ”と反論しているはずじゃが。　お主、様子が変じゃぞ？』

「う」

ぬかった。　ついユイ入居騒動で焦っていたか、いつもと違う態度を取ってしまった。　……というかその意識あったのだ。

「……わしに何か隠しておるな」

「ねーよ」

平静を装いながら言うが、内心ヒヤヒヤである。

「ほぉ？」

「疑うのか？」

「ああ、もちろんじゃ」

即答かよ。　少しは俺のことも信じて欲しいもんだね……今回は、まるっきり嘘だけど。

「いつものお主ならあの場面で罵っていたはず」

「いつ俺が罵ったよ」

「常にっ！」

「殴るぞ。　主人公でも殴るぞ！」

逆に罵られる場面が多いんだよ！

「半分冗談じゃ」

「あと半分もねぇよ……」

あー疲れる。　今日だけで驚愕の事実を知り、驚愕の展開になったというのに。　少しは休ませてくれよ……

「……寝る」

「じゃあ、わしも」

「いいぞ、もちろん」

「や、やっぱり変じゃ！」

「お前の部屋に限るがな、ホラさっさと寝れ」

「い、いつものお主じゃっ！」

それで見分けられる俺ってなんなんだ。……本当に疲れていたのでベッドにうつ伏せに突っ込む。このまま睡魔が現れ、次第に虚ろ虚ろして来た頃。

「……わしも空気ぐらい読める。おやすみじゃ」

そう言って扉の開かれる音を聞いた……しかしその直後。

ばたぁんっ！

開きかかっていた扉一気に全開になった。

「ユウジ殿ぉ！　川やはどこでござるかーっ！」

ご存じの滅茶苦茶な喋り方、超絶的なＫＹであるユイが登場。

ユイは俺の部屋の近くの扉（ユイの部屋）を蹴飛ばす勢いで開け、そう言い放った訳だ。

「なっ……」

桐の驚きの声。　それに反応するように俺はベッドから顔を上げて状況を確認すると――

桐が俺の扉付近で固まり、その近くからユイが桐を可愛いものを見る目で見下ろしていた。

はっきり言って異様だった。

「こ、これはっ！　超　テンプレ　妹キャラ　が　私　の　目の前に　！」

先陣を切ったのはユイだった。

「はううう！　お持ち帰りぃぃぃっ！」

「う……は、離せ！」

ユイの異常なテンションに圧倒されている桐は、ユイに抱きあげられ、逃げよう逃げようと足をバタバタさせている。

うーん、桐が気圧されているなんて新鮮だ。

「貴様！　こ、これはどういう事だっ！」

貴様、とは俺のことだろう。

「色々あったんだ」

「まずは状況を話せっ！」

「うぅおっほん、あたしが説明しよう！」

「うるさい！　わしはこいつに聞いているのだ！　お前などには聞いておらんわっ！』

「イイ……ロリに罵れるのイィ……罵って！　もっと罵って！」

「変態じゃ！　変態がいるぞぉっ！」

「お前が言える立場ではないな」

俺目線だと変態が変態に抱きついてる風にしか見えないな。　類は友を呼ぶとはこういう事なのだろうか。

それにしても……なんだろうなこの状況。　収拾がとんどん付かなくなってゆく……まぁ、訳を話すとするか。

「こいつ……ユイが住むことになった」

「な、なんじゃとっ！？」

「どうも初めまして、この下之荘に住ませて貰うことになった巳原ユイと申します！」

「いつからここはアパートになったんだ……」

どっかの漫画家の集まりそうなアパートじゃあるまいし。

「あたしの父とユアマザーが結婚し、その都合でここに島流しされてしまった」

「源頼朝かよ」

冷静に返すと、いきなしユイは「考えてるよ、アタシは今考え中だよ！」と言わんばかりに考え始めた。

「うーん……考えたら、ユウジ。　兄か弟は居るか？』

いきなり何を言い出すかと思えば……この家族で唯一の男子ですよ。　はい。

「いや、いないけど？」

父は、とっくの昔に死んでるからな。

「母……美人の姉……ロリ妹……アタイ……良かったなユウジ！男の夢が叶ったじゃまいか！　見事なハーレムだぞ！』

「こんな家族ハーレム嬉しくねえよっ！」

なんだよ、ただ家族の女性率が異常に高いだけじゃねえか。

「贅沢な話だな……アタシならエンジョイするのに」

「……それはもうハーレムなのか？」

ただの女性しか居ないだけジャン。　あとユイのエンジョイの仕方が半端じゃないことだけは想像出来た。　ユイが男だったらセク

ハラでお縄頂戴だな。

「まぁロリさん、宜しく頼むっすよ」

桐の方を向いてユイは言った。　ん、名前か？

「ロリ言うな」

そういえばブラック桐が普通に出てるな。　基本人前では出さないってのに……もしやユイが気に入ったのか？

「わしは桐じゃ」

「キロリだな！」

「繋げるなっ！」

うがぁぁぁ！　と桐が吠えているが気にしない。　でも……ユイが部屋に戻ってからが怖いな。　桐からどんな罵詈雑言、手段が下されるか。

「それでは！　ユウジにキロリ！」

「あ、ああ」

「つ、繋げるな言うておろうがっ！」

バタン

あ、嵐が去った……桐も俺もユイには振りまわされっぱなしだっ

たぜ。　さて、そろそろ眠くなってきたことだし――

「で、話を聞こうかユウジ」

一難去ってまた一難。　嵐が一つではないことを忘れていた。
寝かせてはくれないのですね。　神様のオオバカヤロー！

で、１０分後だ。

「……ということでした」

「ふむ、なるほどな……しかしゲームシナリオ以外の現実でギャルゲ的イベントが発生するとはな」

「俺も予想外の展開に唖然だよ」

本当、ゲームだけで超展開目白押しで、疲労困憊してるってのに。
現実で、こんなビッグサプライズなイベントが起っちゃたまらねぇぜ。

「……ゲームシナリオのスライドのせいで、何かこの世界に異常が出てるのかもしれん」

急に桐が真面目な口調で話しだす。

「……異常が出るとどうなるんだ？」

しかし、桐が真面目に見えていたのは、どうやら俺の目が節穴だ

ったことを証明する結果となる。

「異世界人が出る」

「まぁ”異”の文字はあるがな……」

「それで……さて明日はイベントじゃ」

「異常の下り終わり！？」

一体なんの為だったんだ。　まぁ、にしても――

「なんだかんだお前優しいよな」

こうやって、前日か当日朝にには予告をしてくれるからな。　結構心づもりが出来るって訳だ。

「ふふん、惚れたか」

「いや、ありがたくは有るけど」

そう、俺が言った途端。　桐は不機嫌になった。

「……寝る」

「ああ、おやすみ」

「引き留めないのか？」

不機嫌顔ながら、こちらを振り向く桐。

「いや、別に……」

明日の情報は惜しいけど。　惚れたとかウソでも言いたくないからな。

すると、今度は怒り始め――

「この薄情者がっ！　もういい貴様を寝取るっ」

やっぱ、そういう展開か。　飽きるって。　俺は呆れてるって。

「そして光の速さで断る」

「今日は諦めないのじゃ！」

はぁ……なんだかなぁ。

「……いや疲れてるから。　どうか空気読んでくれ」

「読めたっ！？」

おお、流石に読んでくれたか？

「今この空間で既成事実を作る空気になりつつある」

「なるわけねぇだろ！　っていうか、その容姿で既成事実とか言うな！」

「なら英語3文字の方がいいか？」

「……児童ポルノ法はこういう変態限定でかけろよ！」

「わしがその児童じゃがなっ」

……もう本気で寝よう。　疲れた。　忙しいことが続き過ぎた。　もう明日のイベントとかどうでもいい。　とりあえず寝よう……

「おい、ユウジわしの話を――」

桐の声を最後に意識は落ちていく――

「ユウジ！　ところで川やは」

……寸前だったのに。

「階段下りて右１０歩っ！」

「サンクスゥ！」

……しかしそう休めてはくれないのが、このゲームのシナリオの構成ようだ。

第０３７話　３－８　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（並

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
なんとなく連載中！

第037話　3－8　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

丁度ユウジがベッドに倒れている頃、一方一階の台所では。

「今日の夕食は何にしようかしら」

と、1人呟きながら冷蔵庫を開くユウジ姉ことミナの姿があった。

「……はぁ、見事に何もない」

冷蔵庫は殆ど空っぽだったようです。
ですが――

「これは……以前、買っておいたお稲荷揚の皮ね。　ご飯は残ってるし……後は……」

何かないか、戸棚を探していると取り出された”ちらしずしの素”と書いてある大きな袋を見る。
そして、少し思考を働かした後、パンと手を叩いた。

「今日はお稲荷さんと冷凍庫にある枝豆とから揚げに……味噌汁にしましょう！」

大体夕食の献立が決まったらしい。

「でも食べるれるか一応ユイちゃんに聞いておかなくちゃ」

と言って台所をユウジ姉は離れ、階段近くまで行った。

「ユイちゃーん」

よく通るその声はすぐに届き。

「はーい」

すぐに答えてくれた。

「今日はお稲荷さんと枝豆と鳥のから揚げなんだけどいいかしらー？」

「はい！　もちろん！　喜んで頂きますー！」

「わかったわー！　ユイちゃんありがとー」

階段近くから台所にまた戻り、炊飯器からご飯の入った飯釜を取り出して、大きなボウルに空けその”ちらし寿司の素”を入れ――……というかこんな作り方書いても意味ないですよね。　袋の裏にデカデカと書かれているでしょうし。

ということで、その夕食を作ってる最中のユウジ姉の呟きのみ抜擢します。

「ユイちゃんがこの家にかぁ……お母さんいつも急だから困るなぁ……」

確かに突然ですからね。　メールが着たのも今日ですし。

「そういえばユイちゃん、ユウくんが中学校の頃、よく遊びにきてたなぁ……マサヒロ君とも仲が良かったよね」

そう懐かしむように、思い出し呟くユウジ姉。

「まさか一緒の家族になるなんてね。　まだ実感がないなぁ……」

お姉さん……いや、お母さんのような包容力のある雰囲気に癒されます。

「でも」

でも？

「だんだん私だけのユウくんで無くなっていく……」

……さっきのお姉さん、お母さんの下り撤回です。　やっぱりただのユウくんラブのブラコンでした！

ええと、そんなこんなありましたけど、夕食が出来上がりました。

「ユウくんー、ユイちゃーん、キリちゃーん！　夕食の準備出来たよー」

それに答えたのは――

「はーいです☆」

桐に。

「今行きますー」

ユイが答える。　二人は、階段を降りて居間に集いました。
居間のテーブルに夕食を運び終え、テーブルに備え付けのイスに座りかけたその時。　ユウジ姉は、気づいたのです。

「あれ？　ユウくんは？」

「お兄ちゃん寝ちゃったみたい……」

どこか寂しそうな表情を見せる桐。

「あたしが見た頃には眠そうでしたね」

らしくない、ユウジ姉だけには丁寧口調で通すユイ。

「うーん……私、起こして来るから。　ちょっと待っててくれる？」

『はい（です）！』

「じゃあ、行ってきます」

と、座りかけたイスを立ち上がり、ユウジの居る二階へ続く階段へ向かいました。

トントン

「ユウくん、ご飯だよー」

トントン

「今日はお稲荷さんだよー」

トントン

「ユウくん寝てるのー？」

トントン

「ユウくん大好きー、結婚してー」

しかし答えはなく――

「……やっぱり、寝てるみたいね」

……最後のラブコールで判断しましたよ、ユウジ姉さん。　自虐ネタなんですか！　それは自虐ネタなのですか！？

「ユウくーん入るよー」

ガチャガチャガチャン

鍵のかかっていないユウジの部屋の扉を、迷いなくユウジ姉は開けました。

「まぁ」

ユウジは制服のブレザーを放り捨てたのみで、ワイシャツと制服ズ

ボンの姿でベッドに突っ込んでうつ伏せで眠りについていた。

「寝顔も可愛い（はぁと）」

いやいや！　文で言った通りうつ伏せで顔は見えませんから！　というかミナさん何を見てその反応とれたんです!?

「昔に比べて大きくなったなぁ……ある一部含めても」

……よくは分かりませんが下ネタに走った気がします、　ユウジ姉、家だからってフルスロットル過ぎですよ。

「きっと疲れていたのね……このまま寝かせてあげようかな……」

そう小声で呟きながら部屋を出ると――

「おやすみ、ユウくん」

小さく一言、それだけを残してユウジ姉は階段を降り。

「じゃあ夕食にしましょうか」

そういって、かつて座りかけた自分の椅子に座るのでした。

第０３８話　３－９　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（前）

更新頻度落ちて来ました。

第038話　3－9　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

四月三〇日

清々しい朝。　目覚ましの騒音に叩き起こされるも、温かい太陽の光が迎えてくれる。　うーん、爽やか。

「ん……」

俺はバサリ布団を払い除け、起き上がると、まず時計に視線を移した。　時計は……と。

「……7時ちょうどか」

久し振りにぐっすり眠っていたせいか、今日は思いのほか体が軽い。　よっしゃ、今日の俺はイケる！

「あー……制服のまま寝てたのか」

よっぽど疲れていたんだな、と昨日の自分を思い出す。　これで、ゆっくりと起床すれば――

「ユウジー朝だぞー！　起きろー！」

……聞き慣れた友人の声。　ああ――

「ユ……イ？　あっ」

そうだったよ。　ユイが昨日引っ越してきたんだったな……

「おはようユウジ氏、清々しい朝だぞ！　起きるんだ！」

イライラ……朝っぱらから叫んでんじゃねぇよ……頭に響くぞ。

「さぁ早く！　今日楽しい一日が始まるそ！」

あ、そうだね……でも、その楽しいかもしれない一日の始まりで、不快になりつつあるんだけど。　一日のスタートを見事に失敗してる気がするぞ。

「なぁなぁユウジ殿ユウジ殿』

温厚に定評がある、俺も流石にカッとなってしまった。　いや、仕方ないよね！　だって寝起きにぎゃあぎゃあ騒がれちゃ、俺も怒っちまう訳ですよ！

「うるさいっ！　とっくに起きてるわ」

ったく……ユイのせいで、俺の爽やかモーニングが台無しだよ！

「おお、起きていたか」

「昨日はゆっくり眠れたかい？　凄い疲れていた様子だったからのう」

「ああ、おかげ様で」

寝る直前、ブッ倒れる前に出来れば川やの位置を聞きに来なけれ

ば、言うこと無しなんだったんだがな。　寝起きに騒がれなければ尚更良かった。

「降りようぞ、ユウジ殿」

「はいはい」

……まぁ、制服のまま寝たせいで、着替える手間が無くて助かったな。　制服ヨレヨレだけども、ウチの学校はそこんところあまり厳しくないし。

鞄と学ランだけを持ってユイと共に一階の居間に向おうとした時――

「お兄ちゃーん☆　おはよー」

「ああ……おはよう」

朝からハイテンション猫かぶり……もう既に恒例だな。

「昨日はよく眠れたか？」

猫かぶり終了。　……というかユイと同じこと聞いてきたなぁ。

「まぁな、なんとか」

「そうだ、ユウジ耳を貸せ」

「え？」

と、言って背の低い桐に合わせて身をかがめ、俺は耳を貸す。

ん？　なんだなんだ？

「（今日はイベントがあるんじゃぞ）」

「（おお、そうか。　いつも情報ありがとうな、桐）」

それは素直な気持ちだったりする。　だから、俺の表情も自然と笑顔になっているかもしれない。　なんだかんだ言ってその予告のおかげで心の準備をある程度出来るしな……

「（ば、ばかもんっ。　こんな時だけ優しい顔を見せおって……卑怯じゃ）」

そう赤くなって呟いていた。　熱でもあるのか？　――そう聞こうとしたが、俺のフラグセンサーが警告し始めたので止めた。

下手すると桐のフラグを……あ、折ってもいいか。　まぁ機嫌が良いのはいいことだし、その質問は胸の中にしまっておこう。

「みんなー！　朝ご飯出来たよー！」

下から聞こえる姉の声……おお、飯か！

「では、ユウジのお姉さんの朝食を頂きますか」

そうユイが言った……たまに入るシャッキリ一般人応対モードのユイだな。

「ああ、そうだな」

「（ほ、ほれてまうやろー？）」

桐が何か呟いていたが気にしない。　下手にフラグを乱立するのもよくないんだぜ！　こうして俺らは階段を下りていくのだった。

で、だ。　朝食を食べ終えて。

「はいユウくん、ユイちゃん、桐ちゃんお弁当」

と、言って姉貴が俺らに巾着入りの弁当を手渡し。　あらかた準備を終えると、玄関に移動して靴を各自履き始めた。

「行ってらっしゃーい☆」

そして桐は、遅れながらも玄関まで見送りに来ていた。

「行ってくる」

桐の見送りに答える、俺。

「よーしパパ、行ってくるぞー！」

と、ユイ……随分若いパパですね。　って、突っ込みどころソコじゃねぇ！

「行ってくるねー、桐ちゃん」

で、姉貴だ。　久し振りの姉貴との登校……下校は最近一緒だが、昨日だけは姉貴が早く帰ってたな。　いつもなら、生徒会の仕事でいつも早めに出ているからな。

まぁ、更にユイも一緒になった訳だけど。

「……」

「どうしたユウジ？　私の顔なんてジロジロ見て」

「いや……常にその眼鏡なんだな、と」

なんで、そう眼が隠れるような眼鏡をずっとしているのだろうなーと。　中学時代、それも一番最初に会った時からそうだ……ユイの素顔って見たことないんだよなぁ。

「ああ、デフォルトだー！」

相変わらず何処で売ってるのやらなグルグル眼鏡、売ってたとしてもパーティグッズだろうな。

そんなパーティグッズを日常生活で使う奴が現れるとは、製造会社も夢にも思わないだろう。

「そういえばユウジ」

「ん？　なんだ？」

「キロリはずっと家に居るのか？」

桐＋ロリ＝キロリで定着してしまったらしい。

「いや、少し遅れて小学校に通ってるんだ」

話で話題になってなかったので言わなかったが、桐も立派な小学

生で、俺らが登校した約１０分後に自らも学校に向う。
登校直前にしっかり鍵も締めて行くことや、学校での行いの良さから、学校では”しっかり者の桐ちゃん”で通っているらしい（噂だが）

ごくたまに学校を抜けだしているが、それも理由をしっかり付けているらしい（桐供述）
まぁ今後、桐の小学校の話題は出ないと思うので、念の為に補足しておいた。

「そうなのかー　……いつか小学校に行ってみるかな」

「いや駄目だから！　それ下手すりゃ警察沙汰だから！　大体の小学校は「関係者以外立ち入り禁止」の看板があるだろ？」

「親族だからいいはずだ！」

「”親族だからで”下心が許されると思うなよ！」

「ちぃ、バレたか」

大体想像着くわ。

「それにしてもユイちゃん」

姉貴がユイに話かけた。

「ホント大きくなったよねぇ……」

「ミナさん、中学生頃は色々お世話になりました」

「いいえいいえ！　ユウくんと、遊んでくれてありがとう」

「いえいえ！　あと、昨日からずっと謝りたいことがありまして……ええと、親の都合とは言え突然押し掛ける形になり、ごめんなさい」

「ううん、ユイちゃんが謝る事じゃないよー？　私のお母さんも、結構唐突というか……なりふり構わずというか……ユイちゃんも色々大変だったでしょ？」

「そんなことはないです！　それで、ええと……お世話になります！」

「こちらこそ、よろしくお願いしますねー」

うーん……なんとも不思議だな。

「話変えちゃうけど、ユウくんは学校でどう？』

「ユウジにはすごくお世話に――――」

あれ？　俺空気？　……別にいいけどさ。

それにしてもユイのしゃっきりモードってなんなんだろな。　いつものユイとどっちが本当のユイなのだろうかと時々思う。

そんなことを、考えていると――

「ユウジおはよー！」

黒髪ポニーテールをピョコピョコ跳ねさせてユキが駆けて来るのだった。

第０３９話　３－１０　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（終）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
しつこくセンデン中。

１月１７日追記：誤字脱字を訂正しました……それに、この話でとりあえず一区切りだったのに気づく……ｏｒｚ

第０３９話　３－１０　ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。（終）

「ユウジおはよー！」

「よぉーユキ」

「篠文さん、おはよう」

「副会長、おはようございます。　あっ、巳原さんも一緒なんだねー』

「うむ」

「ああ、偶然一緒になってな」

偶然をさりげなく、違和感がないように言った。

「あれ？　そういえばユウジ、今日は来るの早いね？」

「ああ今日はな、姉貴と一緒に出た方が効率いいんだよ」

実際いつもより3分ばかし家を出たのが早い。

「そっかー、迎えに行く手間が省けちゃったね……』

残念そうに顔を沈めさせるユキ。　しかし表情はコロっと変わり、何かに気付いたようなハッとした表情を形作る。

「あっ！　え、えと省けたって意味は！　迎えに行くことが嫌じゃ

あないんだよ！　逆に残念というか、なんというか！　ね！』

何かを伝えようとして失敗してるユキかわええなぁ……でも俺には伝わって来てない訳で……どういう意味なんだろうか？

「いや、気にしてないからさー、とりあえず行こうぜー！」

『『うん』』姉貴＆ユキ

「うむぅ！」まぁ、聞いて分かる通りのユイが答えると、４人揃い踏みで後は駄弁りながら学校に向うのだった。

「じゃあねー！　ユウくーん」

手をブルンブルン振りながらそんなことを大声で言う。　仮にも副会長だろうに、まるで小学生だな……

「あ、ああ」

苦笑スマイルを浮かべながら俺も答える。　ああ……そんでもって周囲の視線が痛い、主に男子からの。

姉貴も人気あるからなー……そのせいで、常に黙殺の危険（主に男子勢からの）と隣り合わせなのでなんとも複雑だ。

「じゃあ行こっか」

ユキがそう言い、俺は頷いた。ユイユキユウジの「〝ユ〟カルテット」は教室を目指したのだったー

「そろそろ倦怠期だな」

「は？」

思わず聞き返した。　こいつは開口一番主語を差し置いて、唐突に話題を切り出すから困る。

「そろそろこの学校生活がマンネリ化している気がする。　どうも思うか皆の衆！」

「……どこ向いて話してんだ？」

ユイの言い放つ先は壁だ。　なんとも不気味かつ、危なげな光景だ……壁に話しかけるって何事よ。

「わかりやすく言えば、読者のみんな！」

「っ！　お、お前どこまで知ってんだ」

「この世界の真理までしか知らんなぁ」

「十分だから！　っていうか逆にすげーよ」

ラノベ作家でさえも苦笑しそうな、厨二及びメタ臭全開の会話をしていた。

「そろそろ来てもいいと思うんだ」

「主語を言え主語を」

言葉がいつも足りな過ぎるぞ！

「新キャラだよ、新キャラ！」

「キャラ言うな」

まぁ、こいつはどうせ「転校生でも来て、更にエキサイティングな日々にならないかなー」とでも思っているのだろう。

「キャラ？　ゲームじゃあるまいし」

※ゲームです。

マサヒロがそう突っ込んだ。　というか居たんだ、マサヒロ。かつての俺ならかねがね同意見だが……案の定だからな。

「そういえばユウジ&ユキ、今日は肝試しだからな」

「あ、そういえばそうだったな」

完全に忘却の彼方へ葬っていた。　そうか、そんなこともほざいてたな。

「ユウジ……忘れていたな、その罪は重いぞ……きっとユウジには神々の呪いが降りかかるだろう」

「墓場で肝試し企画するやつこそ真っ先に神々に呪われるべきだがな」

好奇心で、墓荒らしなんてよかないよ。

「一応ユウジを伝って他の人も呼んでみてくれ」

スルーされたが気にしていると埒があかないからな……不潤なもんだ。

しかし、まぁ友人の頼みとあっちゃ断れ……るけども。　特に面倒でもないので――あ、面倒か。

「ああ、出来たらな」

曖昧に流すことにした。　俺の機転の良さは誇れるものがあるね！

「ユウジの周りには、不思議と女子が集まってくるからな……ギャルゲの主人公かってーの」

※これでも一応ギャルゲの主人公です。

悪かったな、ギャルゲの主人公で。　でもいざなってみると大変だぞ？　……しかしまだまだ序盤の序盤なんだろうな。

「あと貢ぎものを忘れずにな」

「みつぎもの？」

聞き返す。　貢物ってなによ、清の始皇帝じゃあるまいし。

「神様への尊敬と、媚をこめてな」

媚はあったとしても、口に出すなよ。

「ああ、わかった」

「ああ」ばっか言ってるが口癖ではないぞ。　今回の場合は、さっさと話題を終局させたいが為の表れだ。

まぁそんな駄弁ってる内に束の間の休み時間は終わり、喧騒の中に少し経つと担任がやってくるのだった。

昼休みだ。

一気にワープした感があるが、そんなことはない。

……で、マサヒロに肝試しに知り合いを誘えと頼まれたのだが。

まぁ忠実にそれを行う理由など、どこにもない訳だ。

適当で良いんだよ。　だから、一回誘って断られたら諦める方針で話しかけてみる――

「姫城さん」

「ユウジ様！　えっと、なんでしょうか？」

手始めに、姫城さん。　授業が終わった直前ということもあり机には、ノートが広げられている。

……おお、なんて綺麗な字！　それにノートの取り方そのものも上手いなぁ……いつか見せてもらえないだろうかね。　是非我が社で参考にしたい。

に、しても……常日頃思ってるけどやっぱり美人だなぁ。　才色

兼備でスタイル抜群、本当あの性格じゃなかったらな……

「マサヒロが肝試しするとか言っててな。　よかったら来るか？　これが概要な」

と、言って一枚の紙きれを渡す。　説明しよう！　先ほど、マサヒロと話している時の話だ。

以下回想。

「ふふふ、俺が昨日徹夜して作ったプリントだ！」

なにその無駄な努力、別の方へその意欲を向けてください。

「開催時刻・開催地、交通手段や持ち物を”ポップ”にまとめておいた」

”ポップ”？　ビールの原料か？　……いや、男がポップなんて言う機会ないからな。　で、それを見せて貰うと――

「プリントキモっ！」

ハートとか♪とか☆とかを色鉛筆やペンをふんだんに使用してポップに仕上げてあった。

いやナニコレ……キモ。　というか男が作んなよ、こんなポップに。

「気づいたのか？　肝（内臓）がプリントの端に描かれていること

を！　流石ユウジだ」

それはそれでキモい！　……ポップの中で異彩を放つ、肝臓らしき絵が――

「いや、お前キモいなーって意味だけど」

「そっち!?」

そのリアクションは俺が取るべきかと。

「ユウジには誘った者にも渡しておいて欲しい」

と、分厚いプリント束を受け取った。　ずっしりとした重さ、枚数は……ッ！

「そんな呼べるかっ！」

ひ、１００枚はあるぞ。

「いや、お前の美少女誘導フェロモンならな」

「お前もフェロモン言うか！　出てねぇからそんなもん！」

ふざけやがって！　それならコッチはコッチで、ふざけてやるぜ！

「あー……わかった。　隣の手〇さんとか藤〇さんとか石〇森さんとか呼んでおくよ」

「おお！」

「中年のおじさんだけど、いい人だからさ」

「……ごめん、やっぱ6枚でいいや」

「結構な著名漫画家らしいぞ？　それでも駄目か？」

「ユウジがなんでそんな有名人と知り合いなんだ！？」

そして、よくされるスルー返し。

「ワガママな奴だな。　このゆとりが」

「同い年だぞ！？」

「で、一応希望は聞いておいてやるか。　俺は下民に優しいかつ、対等な目線で話しているからな」

「もろ上から見せんで迫害されてる気がするぞ！？　まぁいい……で、6人は美少女でお願いする！」

「またまた無茶な注文だな」

「そこをなんとか、複製したり、今からでも作ってもらっても――」

「さりげなく下ネタ入れんな！　まぁ……6人以下は集めるよ」

「おお、頼むぜ！」

実はこの時「6人以下」と言っているので、誰もこない可能性が出てくるのだが、興奮状態のマサヒロが気づくことは残念ながらなかった。

以上回想終わり。

「”美桜山”ですか……」

ちなみにプリントの中身はこうだ。

『ドキッドキの肝試し第一回（はぁと）』

ちなみに、この時点で吐き気を催しました。

『開催地：美桜山』（補足　裏山の本当の名前）

『時間：夜7時』

まずこのプリントを見て汲み取ったことは――第一回の番付からして第二回の可能性があるということだ。

今回失敗すればいいなー。　それなら次回はないだろう。

「え、ええと……ユウジ様は行かれるのですか？」

俺？　そういえば、話の流れで行くことになってるからな。

「あー、行かなかったら怒られそうだし。　行くつも――」

「行きます！」

即答とはこの事を言う。　言いきる前に声を上げて答えてきたぞ……更には目をキラキラと輝かせていた。

「あ、ああ。　じゃあよろしく」

若干姫城の醸し出す「今私は幸せです」オーラに押されながら、その場を離れた。

「さてと……」

あと誘えるのは……あっ。　……居るじゃないか。　俺にとってのオアシス・癒しの存在の――

「ユキー」

「ん、ユウジ？

呼ぶと、なんとまぁ嬉しいことに、すぐに俺の元にやってきた。

「あのさ　かくかくしかじか」

説明中……でも面倒なので省略。

「うん、うん、行く！」

ということで、姫城＆ユキの誘いを完了。　あと４人か……

「生徒会メンバーを誘えば丁度か……」

でも会ってから少しで、そんなに親しくもないし。
いきなり「ヘイ！　生徒会の諸君！　ボクと一緒にＫＩＭＯ☆ＤＡＭＥＳＨＩに行かないかい？」なんて、ナンパ野郎的な台詞を吐ける訳がない。

……家に帰って姉貴を誘えばいいか。　桐は……どうしようか、なんか来たら来たでややこしそうだしな……まぁバレなければいいか。

ということで昼休み終了。

第０３９話　３－１０　ルート分岐は、気付かぬ内に。超展開、目前に。（終）

残念ながら続きます。

第０４０話　４－１　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
はたまたセンデン中。

第０４０話　４－１　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

現在夜６時半、藍浜高校の裏山こと美桜山の墓地にて。

日は落ち、夕焼けが僅かに残る程度で、空は深い青に変わりつつありました。

普段なら人気のない、既に沈黙が支配し始めているその場所には、この時間帯関係なく只でさえ見慣れない姿が――

数人の高校生が、ひと固まりになって各自それぞれ一枚のプリントを手に持ちつつ、何かを待っているのでした。

そのプリントには――＜ドキッドキの肝試し第一回　（はぁと）＞というタイトルで様々な絵文字などで彩られています。

……耳を澄ますと、数人の高校生達の会話が聞こえてきました。

「……ったく、マサヒロはまだなのか」

若干の苛立ち交えて、誰かの名前を呟きながら待つ青年が居ました。

「まぁ、私たちが早いからだけどね」

宥めるように、青年に答える長い黒髪を可愛らしいヘアゴムでとめた女子が、青年の隣で後ろ手にして待っていました。

「わぁ！　肝試し楽しみー☆」

きゃぴきゃぴ、という効果音がピッタリかもしれない、おそらく小学生と思われる容姿を持つ少女は嬉しそうに呟きます。

「うむぅ、楽しみだぁ」

少女に同調するのは、パーティグッズのグルグル眼鏡を付けた……女子？　口調が独特ですね。

「ユウくん虫よけスプレーした？」

ユウくん……というのは青年のことを指していて、何処か嬉しそうに聞いている、長い茶髪を持つ女性。

というか、高校生らしき集団の中に小学生が1人という状況は一体……？

すると、更なる来客が――

「ユウジ様、こんばんは」

黒く長い髪を自由に放らせて。　どこか不思議な感じのする女性が青年の名前を「様」付けで呼びました。

「こんばんはー。　というか姫城さん、俺らより先に居たよね？　ええと、いつから居たの？」

「いえ、来たばかりですよ？　……あれ、もう3時間も経ってますね？」

彼女は携帯電話の待ち受け画面右上にある、時間表示を見て疑問に思っていました。

「……3時間っ！？」

と、いうことは学校終わって直ぐに来てたのか……すごいな、俺らでも開始30分前の、ちょうど今来たばかりなのに。

まさか、そんなに肝試し楽しみだっただなんて！

そんなにマサヒロの肝試しのプリントに惹きつけられる魅力があるんかな？

とりえあず、それ程まで早くから待ってるなんて……姫城さんたら恐ろしい子っ！

『「（ユウジ様との付き合ってからのシチュエーションを想像していたら、もう3時間……時というのは経つのが早いものですね……）」

それは想像というより妄想というのでは？　というかどれだけシチュエーション考えたら3時間も消費出来るのか気になります。

「ユウくん、はい虫よけスプレー」

「ありがと、姉貴」

「お兄ちゃん私にもやってー☆」

さてさて何故この小学生が居るのか、この小学生が来ているその理由はというと。

ちょうど姫城さんがこの山に到着している頃、3時間前の下之家

まで戻ってみるか――

以下回想です。

「ただいまー」

ちなみに今日も生徒会はなかったらしい……と、いっても一部のみで俺含む1年の福島も今日は召集がなかったらしい。

ということで今日、姉貴は未だ学校の生徒会室かと思われる、1年が出席する必要がないのはどういうことだ……？

そう生徒会の活動基準がイマイチ分からずに困惑する中――

「帰ってきたアタイリーターンズッ！」

「帰って来たアタイ、リターンズ」なのか「帰って来た、アタイリターンズ」なのか。

９０年代の全日帯アニメのタイトルっぽいな……区切りを一切しないせいで前者なのか後者なのかイマイチ分からないぞ。

微妙に気になるところだが、しかし適当とマンガの典型的サブキャラを具現化したようなユイの言うことだ。

いい加減でもあるし、中二臭くもある……深入りするのが良くないことに気付き、すぐさま自棄することに、おそらく賢明な判断かと思う。

ということで、今日はユイとユキ（とついでにマサヒロ）と帰ってきた訳だが。

ユイが、俺に家に住んでいるという事実を知られてしまうとダメなので――

ユイとは家の塀前で別れて、少し先の交差点まで行ってもらい、ユキがこちらに来ないことを俺が確認した上で門の中に入ってもらった。

かなり非効率だが、俺の平穏を守るためだ……ユイにも事情説明の上で渋々分かってくれた、俺ではなく、姉貴のことを考えたらしく――

『か、かんちがいしないでよね！　別にユウジの為に協力したんじゃないからね！　ユウジのお姉さんへの日々の感謝も考慮した上での協力なんだからね！』

と、イマドキどうよ、的なツンデレの代名詞を、そのグルグル眼鏡姿で言っていた。　テンプレな上にユイのその姿でそんなことを言われたので、若干イラっときたのは紛れもない事実だ。

「おかえりじゃー」

いつも通り、素の桐がお出迎え。

すると、ユイが目を輝かせながら――

「キ、キロリじゃないか……なんという相変わらずの可愛さ！　だ、だっ抱きしめてよろしいか!?」

「断固拒否じゃ！　それに、繋げるなと言うておろう！」

「えー　じゃあ、ロリで妥協するよ」

「そっちを選ぶな！　それに妥協とな！？」

なるほど、いつもの俺と桐の会話も第三者目線だとこう見えてるわけか――うん、すごい面白い。

この二人いいコンビしてるなぁ……そう思いながら俺は傍観視していると。

「そういえばロリキ」

「もう原型がないぞ！？」

桐が必死にツッコミする姿なんて滅多に見れるもんじゃない、この眼にしかと焼きつけたおこう。

と、凝視していたその時だ――

「今日実は裏山で……ふぐっ！？」

まぁわかりにくいけど、俺がユイを塞ぎました。　もちろん手で、かつグーで。

「（何をするユウジ）」

「（〝あの件〟は桐には秘密の予定だったんだ）」

おそらく伝わるであろう、なにしろ数時間前の話題だからな。

「（〝あの件〟か……懐かしいな、あれからどれぐらい経っただろう）」

「（懐かしむな！　そんな経ってねぇよ！　ほら……肝試しのこと）」

「（あー、あの女子の故意による抱きつきイベントか）」

場合によっては間違っていないから困るよね。　おそらく今回は一切ないだろうけど！　話が進まないしスルーを決め込むことした。

「（まぁ桐誘うと面倒だからさ……頼むよ）」

「（わかった……ユウジの頼みだしな）」

分かってくれたか。　それは良かった良かった。　これで一安心――

「（だが断るっ！）」

「（なぜ!?）」

俺の頼みごとだから断ったということか！　俺への当てつけ、嫌がらせなのか！　そうなのか!?

「（いいか、ユウジ。　肝試しには……肝試しにはな……ただでさえ乏しいロリ要員が必要なのだよ！）」

「（まったくその必要性が俺には感じないのだが……）」

いや、いらないだろう。　常識的に考えて……

「（ロリといえば無邪気な笑顔、その笑顔さえあれば……暗い夜道もへっちゃらさ！）」

サンタクロースのトナカイ的なノリだろうな……上手いことを言ったつもりなのだろうか。

「（それ以前に夜道では暗くて顔が見えないから笑顔でも意味ないかと思いますが、どうでしょう）」

それに暗い夜中の懐中電灯で照らされた先に笑顔があったら逆に怖い、というか不気味さ満載だ。　表情によっては俺含め誰か気絶するぞ。

「（絶望した！　遊び心の分からないユウジに絶望した！）」

「（果たしてそれは遊び心なのか！？）」

言いあいしている二人ですが、肝心の桐に肝試しを教える云々は――少女の”心詠”（ようするに他人の心を読む能力）使用により丸聞こえだったそうです。

めでたしめでたし。

第０４１話　４－２　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
地味ーに連載中

第０４１話　４－２　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

「ほほぉ……肝試しとな」

げ、また心読みやがったな。

「まぁ、わしは既に知っていたのじゃがな」

「え？」

桐が知ってる……？　まさか遠距離での”心詠み”も可能だと言うのか！

「流石にそれは出来ぬ、半径１００ｍ四方のみじゃ」

「普通に広範囲じゃねぇか！」

便利だな、その能力。　というかもはやチートだ。

「肝試し、これもイベントの一つじゃからな、ある程度は承知しておる」

「イベント……ああ、朝言ってたのは肝試しのことか。　でもマサヒロ……ほら学食に居た俺の友人が肝試しの話を持ち出してきたのだが――」

マサヒロと言っても通じないのでそう表現するが、どうやら学食に居た”もう一人”の友人を考えてしまったようで。

「して、お主の名前は？」

俺の近くで神妙そうに俺と桐の会話を聞いていたユイに問いかける

「いや、桐そっちじゃなくてな――」

「私は頂の座へ〇テー。　得意技はエクセリオ〇バスターなの」

うわ、なんか乗ってきた。

「というか嘘付く上に混ぜんな……こいつは巳原ユイだ」

「キロリちゃん、どぞよろしく」

「それでお主は……ユイと呼べばいいかの？　というかキロリ言うな」

「大歓迎だぞ。　しかし〝キロリ〟に愛着が沸いてきたので変えるつもりは無い！」

「本人意見断固無視じゃと！？」

「女には譲れないものがある。　ゲーム購入の為の朝並びの順番などな」

「女というか、それはオタクとしてだと思うぞ」

「……まぁいい、でユウジ。　コイツが肝試しを提案したのか？」

「いや、コイツじゃない。　男の方だ、居ただろ？」

「ああ……居たかもしれん、そう言えば」

「思い浮かんだ男で合っているはずだ」

「たくましい体を持ちながらも、あの鈍器で抉られたかのような深い傷はいったい……」

「お前は一体誰を想像してんだ！？」

誰だ！？　そんなアクション物の登場人物みたいのが高校に居る訳ねぇだろ！

「冗談じゃ、冗談じゃ。」

「……で、そいつが企画したはずなんだがな。　だが肝試しもシナリオの一部なんだろ？」

途端に桐は、考え込み始めて「うーむうーむ」と唸り始める。
何か思い当たる節でもあったのだろうか？

「……ッ！　ユウジ耳を貸せ」

……どうやら、ヒソヒソ喋らなければならない事態のようだ。
それに桐の顔も何時になく真剣だ。

「わかった（で？）」

桐の身長に合わせる為に、立膝をして桐の口辺りに耳を傾ける。

「（今までの世界に”ルリキャベ”のゲームシナリオをスライドさせたのが、現在の世界なのは覚えておるな？）」

「（ああ）」

現実は、思いのほか変化がない。　俺の友人関係や家族関係、クラスメイトまで基本的に今まで通りさ。

でも強いて言うとしたら”存在しなかった”少し前に現れたばかりのゲームのキャラ設定が、世界に深く浸透していることだ。

「（そのゲームのシナリオを実行する際には、矛盾や相違が発生しないよう、ゲーム側からの矯正が発生するのじゃ）」

「（前にも言っていたな）」

俺の性格が少し変化したのは、シナリオ側からの矯正であると。

どうやらゲームシナリオが優先的に実行される傾向にあるようだ。

「（その矯正の働いた結果”そいつ”がシナリオの企画者という設定になったのじゃろう」

辻褄合わせの為、シナリオを動かす為のサブキャラとしてマサヒロが選ばれた。

「（ゲーム内でも肝試しを企画する友人男Ａがおる、その男Ａに”そいつ”を当てはめたことになるのじゃ）」

「（なるほど）」

「（お主の口ぶりから察するに、そいつの言うことに違和感はなど感じなかったのじゃろう？）」

「（ああ、考えてみればそうだったな）」

マサヒロはグロマニアだ。　それにやはり肝試しを話題にする場面では、かなり興奮していたと言える。

しかしそれは”マサヒロ”らしく、このような話題にはどこか鼻息を荒くしていたようにも思えた。

「（お主自身も含め、お主の友人の周りにはシナリオの矯正がより強く働いているようじゃの）」

「（……）」

確かに……矯正が現在進行形で働いているのは、俺の周りだけだ。

ゲームの展開時に大方の矯正が終わっているのだろう。

しかし主人公となった、俺がかき回すことによって矯正が働かざるを得ない状況になっている、とも考えられる。

「（今のところは何も無いが、ユイが引っ越して来るというのは、現実の世界にもそうじゃが、シナリオにも多少の影響が出ておるのじゃ）」

「（シナリオへの影響？）」

「（いくらユイに見たところ女っ気がないにしろ、同じクラスメイ

トが同じ家に住むことになった訳じゃ。　その事実を聞いたらユキやマイはどういう反応をするかの……？）」

「（！）」

そういうことか、嫉妬というか妬みというか……同じか。　複雑な心境になることに違いない、するとユキやマイのシナリオが若干変化してしまうだろう。

「（このような出来事が何回も続けば、いずれそれが大きな歪となり、このシナリオが崩壊を起こし、最悪の場合、世界が壊れ始めるかもしれぬ）」

冷や汗が出た、いつもの俺なら軽く受け流しているところだ。

この世界が壊れる？　どのように壊れるのか分からない、非常に曖昧な表現とは言え、恐ろしく感じた。

実際のところ現実に無理にファンタジーな世界を押し込んだようなこの今の世界。　居もしない人を生み出し、現実の世界を捻じ曲げる。

無理が生じ、なんら異変が起きてもおかしくはない。

前にも言っていたが「ゲームシナリオのスライドのせいで何かこの世界に異常が出てるのかもしれん」

もしかしたら俺の知らない間に世界は壊れ始めているのかもしれない、そんな言い知れない恐怖が俺を襲った。

確かにそれは「最悪」の事態だ。　しかし「最悪」の事態にならないという確証は勿論のことない。

だからこそ、このゲームを完結させなければならないと思う。
俺がこのゲームを何気なくプレイしたことに一端があるのだ。
生み出してしまったヒロイン達にも、この世界の人々にも行動しなければ申し訳が立たない。

「（そんな出来事なんて、そうは起らないとは思うのじゃがな……）」

「（まぁ……な）」

答えには確固たる自信など持てるはずもなく、曖昧に頷くだけだった。

「ということで、わしも行くぞ！」

「大☆歓☆迎」

今度の使い方はユイにとって合っているのだろう　（ロリコン的意味で）

「ユイ」

「なんだろうか？」

「肝試しの貢物はどうする？」

「おお、そうだったなー！　うーん……コンプ○ィーク2月号でい

っか」

「まてや」

「マサヒロは適当でいいと言ってたじゃまいか」

「適当にも程がある」

「らき○たや生徒会の○存が載っているのだぞ！」

「前者はまだしも後者は殆どがわからないだろうねぇ！」

「じゃあドラゴンエ○ジ」

「分厚いわっ！　というかコミック誌を貢物にする時点の根本から間違っている。」

「……仕方ないじゃあとっておきの――みずの○こと版涼宮ハ○ヒの憂鬱１巻」

「……角川に消されるぞ」

「そしたら、こちらは電●で対戦だ――」

「あうとおおおおお！」

部屋を出て、階段を下りて１階に着いた……ツッコミはおもったよりも疲れるな。　そして、しの疲れに興奮も冷めて――

「まぁ、いいや」

面倒になってきた。　本当にコミック誌とか持ってくるはずがないだろ、人として。　大丈夫だろう。

……あれ、自信が全く持てないやどうしよう。

「……少しの間記憶から消しておこう」

さて……と。

「（神様とやらには何を貢げばいいのだろうか……神様だからなぁ）」

彼は微妙に真面目なようです。

貢物ねぇ……一応食べ物の方が良さそうだな。　腐っても土に還るだろうし↑何故か投げやりになった

ええと冷蔵庫の中身は……と。

「（冷蔵庫に何かあったっけか？）……！（なんにもねぇっ！）」

見事にカラに近いぞ。　ん？　予想外に……何か……

「あっ」

ほぼ空っぽな冷蔵庫の中、麦茶みたいな色の液に浸った”それ”の入った小さなタッパーを見つける。

「……」

まぁいいや、これにしよう。

……真面目にみせかかて、最後は適当なユウジでした。　いらないですよね、この描写！

第042話　4－3　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

貢物確保を終えると、姉貴が帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえり姉貴ー」

「ただいまーユウくん！』

貢物、冷蔵庫にあったものだから一応念の為に、姉貴に貢物使用許可を貰うとするか。

「姉貴ー、これ貰っていい？」

「え、別にいいけど……何に使うの？』

「あっ、そういえば姉貴には話してなかったな――」

肝試しの件を話し、姉貴は聞き終えるのと同時に。

「行く！　お姉ちゃん行く！」

と、眼を燦々と輝かせながら言った。

「それは良かった」

俺が誘っているのだが、よくよく考えてみると……
夜遅くに外に出て遊ぶ、という俗に言う”夜遊び”を一応、藍浜高校副生徒会会長である姉貴が即了承するのも問題がある気がしてきた……

――したけれども、面倒なので言うのは止めておこう。

「ユウくんの誘いでもあるしっ、私はお姉ちゃんだもんっ！　暗いし夜遅いし保護者的立場の人が居た方がいいよ！」

一応論理付けしている姉貴、だが顔が嬉しさのあまりニヤけてるぞ。
まぁ、とりあえず、かなり嬉しそうだった　（おおかた予測はついていたが）

「貢物ねぇ……ユウくんのそれは貢物だよね？」

「ああ」

冷蔵庫に残っていた物がコレぐらいしか目に入らなかった。

「んー……どんなものがいいのかな」

「適当でいいらしいぞ」

「適当？」

「本とか本でもいいの？」

姉の中の選択肢は1つだった。　というかこの人も本なのか……

「……神様に捧げる物だし、食べ物の方が俺はいいと思う。　冷蔵庫の中の何か持っておけばいいんじゃない？」

「うーん……あっ」

そう言って姉は駆けて行き、そして手にして来たのは……

「みかんっ！」

「はい、みかんですね……」

なんか一部分が、白く変色しているのですが。　更にへたに近い部分に緑地が出来てますよ？

「大丈夫！　神様なら腐ったみかんを冷凍みかんに変えることも十分可能だよ！」

冷やしてどうする。

「神様がちょんと触れただけで、なんと中〇産の新鮮なみかんに！」

「〇国ネタは色々と……いやなんでもない」

姉の天然に降参寸前の俺がここに、中●から送られてきた時点で新鮮ではないとか、そもそも中●産は色々とダメすぎる。

「とりあえず腐ってる物はいくらなんでも神様が魔法使いじゃある

まいし、無理だろ」

「じゃあねぇ……」

姉貴が何を持ってきたかというと……

その詳細は「ＷＥＢ」で！

「というかこの会話がノベル化されているのはＷＥＢ上じゃぞ？」

「初耳だな」

俺らを元にした小説ってＷＥＢ小説だったのか。　うん、媒体とかどうでもいい。

「わしは……適当に用意しておくとして、さてその時を待つとするかの」

「ああ、そうだな」

まだ、約束の時間まで2時間近くある。　家で適当にテレビでも見て待っているとするか。

ということで回想が終了です。
さて肝試しに参加するのは各種様々な貢物を持った「ユウジ・ユイ・桐・姫城・ユキ・ユウジ姉……とマサヒロ」です。

と、言っても予定時刻寸前になっても当事者のマサヒロが来ていないようでした。
そう考えた直後に――

「待たせたー」

大声でそう叫びながら、マサヒロが何かを抱えながら走ってきました。

第０４３話　４－４　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
０１／２２　最新話更新！

第０４３話　４－４　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

そうして大きな袋を抱えたマサヒロが俺らに向って駆けてきたのだが――

「微妙なのよ～バ～ランス」

歌いながらで、それも謎過ぎる歌詞だ。

「くじび・きアンバ～ランス……ということで皆くじを引け」

「前振りが長えよ」

……肝試しかつ自主企画イベントで興奮気味のマサヒロ。　というかなんだよその歌は。

マサヒロは抱えている大きな袋をゴソゴソと探り、お目当ての物が見つかったようで中からその物を取り出した。

「割り箸……だよな？」

マサヒロが持っているのは１リットル近く入りそうなペットボトルで、コーヒーのボトルとかで良く見るタイプだな。

ペットボトル下部がには布が巻かれていて中身が見えないようになっている。　更に上部が切り取られていて手を少し入れることが出来るように加工されていた。

そして中には既に２分割された割り箸が数本入っていた。

「ああ、国産杉１００％使用の高級割りばしだ！　おかげで財布の

野口英夫が召されたんだぜ……」

そんなもので野口さんは無駄遣い過ぎる。

「で、割り箸とくじ引きの関係は？」

まぁ、大体はわかっているが一応聞いてみた。

「割り箸には恋人が居た……しかし、一方の割り箸は同じ容姿の割り箸に嫌気が差して……くじ引きと駆け落ちしちまったんだっ！」

「……”関係”という言葉でここまで話を変な方向に発展させるお前には完敗だわ」

典型的な昼ドラかよ、というか　同じ容姿なのは一つの割り箸を割ったんだから仕方ないだろ。

「割り箸の下の方には1、2、3が各2本、4が1本、その番号が書かれてあってな、それを1人1本ずつに引いてもらい、同じ番号同士でペアを作り、肝試しルートを歩いてもらうのさ」

普通なくじ引きだな……ん？

「同じ番号ってことは、4のペアがいないはずじゃ……？」

「その通り”余り物には福はない、世の中そんなに甘かねぇ”と言うことわざがあるだろ？」

そんな突き放すような冷たいことわざは無かったと思います。

「4は余り物で、引いた人は1人で肝試し」

奇数人数が集まった悲劇がここにッ！　余り物って表現が惨すぎる。

「じゃあ引いとくれ、まずユウジ」

「え」

先に余り物になっちゃえよ的な宣告に聞こえたのは俺の気のせいではないだろう……7本中1本か、なら楽勝――

はっ、楽勝とか今の時点で言っちゃうと確実に負けるパターンだッ！　……油断はするな、俺。

「お、おう」

それで、俺は思いきり力の限り精神を集中して心を虚無にして念力を使いながら月の光を吸収しながら（省略）割り箸を引き抜いた。

すると――

「1……か」

よかった、4引かなくて。　これで女子とのデートイベントかぁ……ユキがいいな――

はっ、この時にそんなこと言ったら女子と組めずにマサヒロと組んでしまう最悪の展開になりかねんっ！　……油断をしてはいけな

い今こそ祈る時だ、神よ我にお恵み下さいっ！

神への信仰心が都合よく、向上したユウジの一方。

ピリィッ！　と、周囲に電撃が走りました……ちなみに女子間で、です。　それに紛れて「ちっ」と、マサヒロは舌打ちをしました…

…きっと４が当たることを祈っていたのでしょう

「１を取れれば……（ユウジと一緒かぁ）」

「１を取ることが出来たら（ユウジ様との公認デートですね！　…

…この甘い蜜のようなチャンスを逃すわけにはいけない）

「アイアムナンバーワン！（ユウジと一緒だとっ……これは面白くなるに違いない！）」

「ユウくんと……（ユウくんユウくんユウくんユウくんユウくん）」

各自想像・妄想している女子の間で緊張した空気が流れます。

……そんな緊張を破る能天気な声が響きました。

「アタシが引く！」

一番最初に名乗りを上げたのはユイでした。　その行動には――

「う、うん」「……わかりました」「ユウくん……」

一応みんな了承したようですね。

「ミハラ行っきまーす！」

シュバッ、と謎の空気を切り裂く音が響き、ユイの手には1本の割り箸が。

「ナンバーツゥッ！？」

2だそうです。
それを聞いた途端に、周辺で安堵のため息が相次ぎます。

「（よかった）」「（……私が引いて見せます）」「（ユウくん……）」

まだユウジのペアは出ていませんね……ということでユウジの知らない水面下の女の争いは続いていきます。

第０４４話　４－５　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
勢い落ちて連載中！

ナレーター無双？

第０４４話　４－５　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

某国、某県、某市、某町、某山……の麓付近にあり、神社の敷地内に存在する墓地の入口には、数人の人影がありました。
そして、某男子高校生が手にペットボトルを加工したくじ引きをケースを持ち、某女子高校生数人が某状の物に視線を集めていました。
……そんなに某を使って何か意味があったのでしょうか？

「……じゃあ、私が引いてみます」

ユイに次いで、恐る恐る名乗りを上げたのはユキでした。

「……」

ユキは数秒割り箸を見つめて、一気に一本の割り箸を引き抜きました。

「これっ」

ちなみにユウジは「1」をユイが「2」を引いています。　そうなると1・2と元々一つしかない4、各1つと3が二つが残っていることになりますね。
うーん、これは運次第ですねぇ……そうしてユイの引き当てた数字は――

「うぅー……残念」

表情を落として、悲しそうに呟きます。　ユウジは何を残念がっているか分からないまま、自分のペアの可能性を信じて、聞き出します。

「何番だったんだ？」

「……2番。　ええと篠文さんと、一緒だね……」

表情は暗く、心の底から残念そうです。

「そ、そうか……」

その数字を聞いたユウジの表情も沈んで行きました

「おおぅ！　ユイさんか！　お互い楽しもうじゃあないかっ！」

はっはっはと、笑うユイがユキと対照的ですね。　その笑い声でユキも――

「うん……そうだね！」

少しばかりですが表情が明るくなりました。

「せっかくだから楽しもうかなー」

そうポジティブに考え始めている頃。

「レズフラグだと！？」

「見、見えるぞ！　私にも見えるぅ！　キャッキャウフフのＲ１８が！」

マサヒロがそう呟きましたが……彼は何を言っているのでしょう、私にはよくわかりません。

こんなキャラじゃなかった気がします……おそらく。

きっと肝試しというイベントに興奮しているのでしょうね。

ところで”レズ”ってなんなのでしょうか？　何かの名称なのですかね……？　うーん……そのうち調べてみますー

そんな番号が決まった名前の頭が共通して「ユ」を頭文字に持つ３人以外、２人の女は何かを思考していました。

……あれ？　桐がそう言えば黙ったままですね。　どうしたんでしょう？　どこか落ち着いて、余裕さえ感じさせますね。

「（ユウジ様と共に行くには１を、しかし一人肝試しの４も、他の女とペアになってしまう３も残っていますね……確率は１／２……先に引くべきか、お姉さんの引くのを待つか……ですね）」

今のは姫城さんの脳内会議です。　一方ユウジ姉の脳内は……

「（ユウくんとデートユウくんとデートユウくんとデートユウくんとデートユウくんとデートユウくんとデートユウくんとデート――）」

……見てはいけないものを見てしまったようです。　私は入ってはいけない禁断の領域に足の先を突っ込んでしまいました。

怖いです、とても怖いです。　暗示をかけているようにしか聞こえません。　というかユウジ姉の顔がッ！？　……怖いです、トラウ

マです。

……恐怖に怯えながらもお伝えします。
どちらが先制を仕掛けるのか、これは長い攻防戦が展開されそうな予感です――

「わ、わたしが引く！」

ユウジ姉の即決でした。　思いのほか、というか予想外の短さでしたね。

「え？　はい、どうぞ……」

姫城さんも直ぐに先制を譲りました、きっと表情に圧倒されたに間違いありません、はい。　ということでユウジ姉は引きます――

「どれだろ……じゃあ……こっちで！」

選択時間およそ2秒、思いきりのよい人間は好まれますよね。
サッ、という割り箸とペットボトルが擦れる音と共に、くじが引かれました

「……ッ！」

……？　どっちなのでしょう？

「……ぅぅ」

ああ……そうですか。　まさにショボーン状態ですね、私の見た”あの”表情とは打って変わって非常に悲しそうです。

ということは――残り3人ですね。

「3番……」

そう言うと地面に座り込みました

「……ユウくん、ぐすっ」

泣きじゃくり始めるユウジ姉。　……ユウジの事となると姉の尊厳は、遥か太陽系の彼方へ吹き飛びますね。

「じゃあ残ったのは……」

姫城が状況を確認……えっと1と3と4、各1本ずつですね。

「（このタイミングで引いた方が……いえ、ここは踏み留まって……どうすればよいのでしょうかっ！）」

いや、私に聞かれても……ってそもそも私の声は届いている訳ではないですし、聞いてませんか。

「じゃーあ！　私ひきますー☆」

姫城が悩んでいる間に、桐が動きました。　相変わらずの猫かぶり振りです。

「えーっとねぇー」

まるで小学生の女子のように、くじを見つめます……小学生でしたね、失礼。

「（聞こえておるぞ、ナレーター）」

ひっ、聞こえてたんですか！？

「えーと、コレッ！」

……通常の桐は怖いですね。　で、桐は思い切り割り箸を引きました。

「あーっ、3番ですねー、残念ですー」

……残念そうに見えないのは私だけでしょうか、残念言っている割に笑顔なんですよね。

「（ホッ）」

そんな傍ら、胸を撫で下ろす姫城。　助かりましたね。

ですが、これからが本当の戦いだと私は思いますね！　だって、ユウジか1人肝試しですよ！？

「あーちくしょー先に引いとけば良かったーこれじゃーどちらにしろ俺不幸じゃねぇーかー」

……悔しそうな割に、棒演技ですね。　……すごく怪しいです。

桐も変でしたし、各自何か企みがあるのでしょうか？

「（あと2本……孤独の肝試しか、ユウジ様との夢のような途中で息絶えて死んでもいいくらいデートかのどちらか……まるで天国と大地獄ですね）」

死んだら結局は孤独だと私は思います。　そうまた思案している内に――

「それじゃー俺がひくぜー」

「あっ」

「……駄目か？　姫城サン？」

「え、えっと……はい、どうぞ」

「おお、ありがとなー」

「はい……」

運命の分かれ目です、さぁマサヒロは孤独地獄か、女子も居るのにユウジとデート地獄か……ですね。
姫城の表情も何処か焦っています……

そんな時、ユウジ自ら手に持っていたペットボトル製割り箸ケースを「ちょいと持っててくれ」とユウジに手渡し「ああ、いいぞ」とユウジが受け取ります、確かにこれじゃあ引けませんもんね。
するとマサヒロは二本の割り箸をくるくると回し始めました……これは単なる気まぐれか、又はインチキか……ですね。

？　でもここでインチキをしても地獄には変わりないような――

「えいよっと」

マサヒロが迷いなく引いた割り箸、それは……「4」という数字が刻まれていました。

「4かぁーうわーさみしー1人肝試しかよー」

悔しそうな言葉と裏腹に、どこか余裕が見えます……どうしたんでしょうね？

ということで、ユウジペアなのは――

「え、ということは……？」

ユウジの持つペットボトル製割り箸ケースから、1本だけ残された割り箸を引きます……そこに刻まれた数字は――

「1……ですよね？」

姫城は思わず見返します。

「やったーっ！　1番ですっ！」

かなり嬉しそうで、物凄い笑顔です。　いつもは礼儀正しい彼女も、この結果にははしゃいでいます。　よかったですねー

「1番ってことは俺とペア……か、よろしくな」

ユイと姉貴や桐とマサヒロなんて比じゃないくらいに良かった、本命はユキだったけど、これはこれで……

「で、では！　こちらこそ、よ、よよよよろしくお願いします！」

比較的影の薄くなりつつあった、彼女こと姫城が久し振りに脚光を浴びた瞬間でした。

少し経って――

「じゃあ1組ペア、行ってらっしゃい」

そう言ってマサヒロが送り出します。

「ああ」

「はい」

そう一つ返事をすると、ユウジと姫城は闇に消えていきました――

墓地の中を二人は進みます。　街頭など一切なく自然の漆黒が包む夜では、マサヒロに手渡されたユウジの持つ懐中電灯一本から発せられるものが唯一の灯りです。

地面は石畳が敷かれ居るみたいですが、割れてたり、そのものが消えてたりします。　更に小さいながらも石がゴロゴロと転がっていたりと、視界の悪い夜には結構危ないですね。

「しかし暗いな」

そうユウジは呟くと、その声に驚いて姫城は肩をビクリと震わせます。

「え！？　ええ……」

彼女、私が見ているだけで心臓バクバクです。　しかしこの暗い墓地に恐怖しているのではなく……察せますよね？
隣に好きな人が居て更に他には誰もいない二人きりなのですから、それは緊張するでしょう。

え、なんで好きか分かるって？　……あなたは今まで姫城の何を見てきたんですか。
え、ユキ一筋？　周りの女に興味はない？　……もう帰ってください。

「……（どう話しかければいいのでしょう……どんな言葉をユウジ様にかければいいのでしょうか、分かりません、覚えてません。
あんなに想像出来たのに、いざ実際に隣に立つのとでは……）」

彼女は困惑します。　好きな気持ちをどう表現すればいいのか、わからずに迷っているのですね。
うんうん青春だなぁ……って私も十分若いですけど！

「姫城さん」

「は、はいぃ！？」

「……どうした？」

「いぃえ！　なんでもありません」

姫城さーん、声裏返ってますよー！　緊張を解そうと気を使ったか、

ユウジはある話題を振りかけます。

「なら構わないけど……それで今回は何持ってきたんだ？」

「え？　あっ貢物とおっしゃっていた物なら」

そうするとポケットから、……そういえば全員分かりやすく制服で来てます。

スタッフが描写面倒だから、そうした。　……などではないのでご注意を、本当ですよ？　台本通りに読んでる訳じゃないんですよ？

そして姫城はポケットから細長い何かを取り出します――

「これです」

「え」

取り出したのは布に包まれた小刀でした……！？

それもかなり質の良いもののようで、暗い闇夜に懐中電灯の光を浴びて刃先は銀色に輝きます。

柄の部分の艶を見ると時間をかけて磨いてあることがわかりますねー

「我が家に伝わる宝刀＜紅之血＞です」

名前からして危ない臭いがします。

「これで多くの命が奪われてきました」

「！」

！

「血を求め、主の手を介して暴れ、多くの血を浴びます」

「……！」

っ！

「これこそ……我が家に伝わる……」

恐ろしいです、主の手を介して暴れるなんて……そうして血を浴びる！？　怖いですね……恐ろし――

「魚類切り落とし用小刀です」

そんなオチですか。

「どうしても魚を切ると血を抜かないといけないので刃にかかってしまうですよね、身を崩さない上で切れるよう鋭く造ってあるんです。　その鋭さは天下一品、こんなところにあるこんにゃくもほらこの通りです！」

なんで姫城はテンションが上がってるのでしょう。

ちなみに切ったこんにゃくは、なんでこんなところにこんにゃくが……という件ですが、マサヒロが肝試し演出用に付けたものらしいです。

いくら幼稚かつ時代遅れな手段とは言え、この扱いは流石に準備してきたマサヒロが可哀想に思えてきました。

更に今までこんにゃく以外もトラップ仕掛けてありましたが、この二人は完全スルーだったそうで酷い話です。

……どこからか、しくしく声が聞こえますが気のせいですね。

「ちなみにあと17本在庫があります。　限定20セットご用意致しました、なんと今回の各小刀にはシリアルナンバー付きなんです！」

「……在庫とかあるんだ……なんかの通販番組みたいだな、というか3セットは売れたんだ」

というか20本も同じ刀があってそれを宝刀というには苦しいような。

数分後――

謎の通販番組風貢物紹介が終わる頃には姫城さんも落ち着いていました。

「それで、ユウジ様はどんな貢物を？」

「いや……自分から聞いたとは言え、こちらはかなり悲しいものがあるが――」

そう言って密封式のジッ○ロックかどうかは分かりませんが小さいタッパーを取り出しました。
そのタッパーには茶色の液体が揺れているようにも見えますが……？

「これは……？」

「お揚げ。　ほら、うどんととかに乗ってる甘いお揚げ」

「はい……ほかにもお稲荷さんでも見ますよね」

「貢ぐとしたら食べ物が良いかなと」

いやいや、食べ物には違いないですけどそれ単体で食べるものではないですよ！？

「確かに、そうですよね……私も食べ物にしてくれれば良かったです』

「いや、宝刀でも俺は良いと思うけどな」

一応宝刀ですもんね。

「そろそろ見えて……あれか」

懐中電灯で照らす先、小さな神社がちらりと見え。　その姿を露わにし始めました。

第０４５話　４－６　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
１月２５日　最新話更新！　こちらでは、遂に序章が最終章に突入……ってアレ？

第０４５話　４－６　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

目の前にあるのは、小さな神社。
奥行きはわからないが、横の長さを見ても３ｍちょいで、本殿そのものが非常に小さい。

「えっと……マサヒロが言うには”本殿を前に右へ進む、突き当りに神石でゴール”……結構肝試し簡単だったな」

肝が全く試せなかったな……ただ姫城とデートしただけか。

『確かにそうかもしれんが……お主らときたら』

「いやあ、逆に何もなくて驚いたぜ」

本当にマサヒロのことだから何か仕掛けてくるとばかり思ってたぜ。

「……あの、ユウジ様？　一体誰と話してらっしゃるのですか？」

「え？」

『いや、仕掛けてあったぞ？』

「え……？」

「！？」

『ん？　わしの顔に何か付いてるかの？』

「なっ……ななななんで桐が居るんだよ！？」

え、なに、どゆこと？　いや、後ろに気配は感じなかったし……なにがどうなって（ｒｙ

「ユ、ユユユユユウジ様っ！　この小さい子はなんですか！？」

『ふふ、その反応を見ると成功じゃな。　はじめましてお兄ちゃんの妹の桐です☆　よろしくお願いします』

「その反応ってどういうことだよ！　というか姫城さん、さっきから桐は居ましたよ！？」

「え、妹なんですか！？　そんな訳ありませんっ！　ユウジ様、聞いてませんよ！」

「こっちの言い分聞いてねぇ！」

『ふふふ、さきほど使った新たな特殊能力はな』

「うるせぇ！　お前の特殊能力なんぞに興味ないわ！」

「あの！　ユウジ様答えて下さいっ！　ユウジ様にこんな彼女が」

「いや、だから聞いてませんよね。　俺の話聞いてませんよね！」

『うるさいのう……さらに特殊能力発動。　閉鎖空』

桐がそう言うと姫城の姿が消え、辺りの様子が一瞬にして変わりました。

「え……どこだここ!?」

辺りを軽く見渡すと、アイボリー色の世界がには広がっていました。
夜の暗さで辺りの様子が把握出来ませんでしたが、こんな風景だったのですね。

景色は色変えてでもあるのに、姫城の姿はない。　目の前には淡く茶色の神社の本殿、振り返れば墓石が無尽蔵に建っている。
多くの墓石の中心に綺麗に統べられているのが今歩いてきた肝試しコースで、夜であった空や周りはアイボリーがかる、例えば墓石なら少し黒がかったベージュに。

その色あいからか自然と時間がゆっくり進んでいる錯覚さえ感じ始める。

「驚いたかわしの第１４の能力、閉鎖空」

「……もう何を聞いても驚かねぇよ」

でも、だ――

「そう言うつもりだったがな……肝試しに行く時には一緒にいなかったろ!?　途中で合流した感もないし、どうやってここまで来れたんだ!?」

クソゲヱか！　クソゲヱだからかっ！　だから適当な展開でも許されるのかっ！？

『何を言う、お主らが肝試しを始めた頃からずっとおるぞ？　なにせ更に使ったわしの能力は――第３の能力、ステルスじゃからなっ！』

「ステルス……？」

あれですか、透明にでもなってたというんですか？

『ステルス桐の独壇場っすよ』

「某美少女麻雀アニメの台詞だった気がする……」

もう古く感じてくるな。

『まぁ、簡単に言うと透明人間になれるのじゃ』

「……」

『驚いたか？』

「いや……」

『ビックリしたか？』

「言い方の問題じゃないから。　……なんというか”あー桐だし出来てもおかしくはないな”で自己完結してしまったな、と」

『失礼な！　わしにも出来ぬことはある』

「例えば？」

『貴様のハートをいつになっても射落とせぬ！』

「……あー、はいそうですか」

とにかく嫌われそうな行動ばかりとっておいて何をほざく。

「とりあえずこの閉鎖なんちゃらを解いてくれ」

『っ……むぅ、その余りにも適当な返答に即喝を入れたいところじゃが、そろそろ限界のようじゃな』

「ん？　何が限界なんだ？」

『わしの維持する力もそうじゃが、まずは尺を使い過――』

桐の言葉は途切れ、景色は闇色を取り戻していきます。

「はっ！　戻った」

「……何が戻ったのですか？」

「え、あ……いや、なんでもない」

「？」

ちなみに桐いわく「空間構成から空間解除まで実質2秒じゃ」だそうで、感じだけでなく本当に時間がゆっくり進んでいたというね。

「ところでユウジ様、この子についての説明を求めますよ?」

あれ姫城さん。　何故手に貢物の小刀を握っているのでしょうか。それは貢物であって、実際に……いやないと思いますが人は刺しちゃいけないはずですよ?

何かその小刀と、姫城さん自身の背後から強烈な殺意を感じますよ?　あと刃先が向いてるのは俺ですよ?　もうやだなぁ、姫城さん冗談はよしてくださいよ。

あはははは。

「場合によっては、お許し出来ずに手が動いてしまうかもしれません」

「……とりあえず、落ち着いてください。　今から説明させて頂きます」

会話及び説明以下略……です。

「……そうでしたか。　それは、とんだ失礼を」

そう言って小刀を布で包みだす。　危なかった……本当また命の灯が揺らいだわ。

「桐です、よろしくお願いします☆」

「あ、ご丁寧に……こちらこそよろしくお願いしますね？」

そういえばさっき黒桐見せてるのにまた猫被ってるけどいいのか？

「ユウジ様」

「ん？」

よし、その話題が来るか！　読めた……”ユウジ様、桐ちゃんは素直ないい子ですね”　さっきとは完全に印象変わってるじゃねえか！　とか言うオチだろ。

わかってるさ、それぐらい予想出来る――

「ふふ……ユウジ様、この子がいずれ私の義妹になるのですね……（ポッ）」

ああ、そんなオチね。　またありきたりな……え？

義妹ぃぃぃぃぃ！？

「え、姫城さんどういうことっ！？」

「あ、つい本音が漏れてしまいました……まだ気が早いですよね、テヘ☆」

テヘ……テヘねぇ……そんな軽く済みそうな話題じゃねえ！　っていうかキャラ思い切り間違えとる！？

なにさ、桐が義妹になる展開ってなによ！　……いやわかってるけどさ、口には出したくない。

前に『私が好きにさせてみせますから。　私が魅力的な女性になった時は、覚悟しておいてください」って言ったじゃないですかー！

なんでそう付き合っていそうな設定になってるのさ……ああ、そうか、わかったぞ。

このゲームでは、ヒロインやサブキャラ（現実の人間も含む）が崩壊していくシナリオが特徴なのか。

ええー……

「ユウジ様どうしました？」

色々今後の展開を予想して絶望しかけていたが……

「いや、なんでもない」

でも……おかしいな、目から透明の塩分濃い目な水が――きっと辛くなんてないはず、元はギャルゲだぞ？　ギャルゲなんだから……と言っても、プレイ開始数分でヒロインの死亡するクソゲーでもあるんだよな……

なんでだろう、目から赤色の鉄臭い液体が――

「ユウジ様着きましたね」

「え、ああ」

そう、着いたのマサヒロの言っていた神石の前、目前には全長１

m程の大きな石がどすんと木々を除けて居座っていた。
懐中電灯で照らしてみると、その石の上部に太い縄が巻かれている。　おお、神石っぽい！

「これが台か」

……これウケ狙いか？　なんか”みかん”って書いてあるダンボールに、ベニヤの板が載せられているのだが……”みかん”ねぇ……

「まぁいいや、早く貢物置いておこう」

「えと、そうですね」

そう答えると姫城は布から小刀を取り出し、俺はお揚げの入った汁入りタッパーのフタを開けた。
そして置かれていた即席の台に二人の貢物を乗せる、これで踵を返してリターンして肝試しは終わり……のはずだったのだが。

その時だったのだ。

『わ、好物のお揚げだ♪』

何処からか、闇空の下、ミスマッチな声域高めの少女の声が耳に響いてきた。

第０４６話　４－７　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
１月２９日　最新話更新！

後半直し切れなかったので、後程再修正します。（１月３１日修正済み）

第０４６話　４－７　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

『わ、好物のお揚げだ♪』

漆黒の闇の中どこからか聞こえる高めの少女の声。
しかし……この声に聞き覚えはなく、桐の猫かぶり声でもない。

「ユウジ様どうかしたのですか？　そんな高い少女のような声を出して……？」

「いや、なんで今この状況で俺が高い声を出す必要性があるんだ…
…まぁとういうことで俺ではないぞ？」

「そうですか……じゃあ桐さんは？」

「なぜ桐を先に疑わない！？」

桐、すぐ近くに居たんですけど！
なにこのゲームの主人公って高い声を出せる設定なの！？

「私じゃないですよー？☆」

？と☆って続けていいんだっけ？

「お兄ちゃんじゃないんですかー？」

「だからなぜ俺に行きつく！？」

ゲームの主人公何者だ

『あ！　聞こえてた？　うん、我は我だよ！？』

「！？」

また聞こえた。
やはり聞きなおしても桐とは声質が異なった声だ。
なんというか……猫かぶり桐よりも僅かに低く、大人びているというか――

うーんどう表現したらいいか。　ああ、俺の表現力の無さに失望した！

『じゃあそっちに行くねー！』

「来るの！？　って、うわ――」

一瞬にして岩が発光し始めた、なんだこのゲームみたいなノリ…
…ゲームか。
その突然の出来事に、俺は反射的に目を瞑ってしまった。

その時深い黒に染まる夜を、その光はそれを打ち消したのだ。

「よっこいしょー」

高い女子の声が聞こえる。　目蓋の外の光が直感で弱くなったことを理解し、ゆっくり慣らすように目を開いた。

「！」

目の前には少女が立っている。
床に引きずるまでに長い黒色の髪を持ち、大きな緑の瞳が特徴的な美少女に分類されるであろう顔つき。
背は中学生程あり桐とは大分印象が異なり、服は何故かセーラー服を着用していた。

少女は今僅かに残る光を背にしている。　そのせいもあって彼女をスレンダーな体格や表情が引き立ち、何故か神々しい……

「なんで我の好物を知ってるの？」

「え？　これか？」

「そう！　あなたの持ってるそれ！」

好物って……お揚げ？　俺の持ってきたものはお揚げの入ったタッパー。
冷蔵庫を見たら本当にお揚げの入ったタッパーしか残されていなかったのだ……で、持ってきた訳だが。
前にお揚げは食べるものには入らないだろう、と言われているの

で半分投げやりだった。

まさか、このお揚げに食いつくとは……

ちなみに左隣に居る姫城はまだ目を瞑っている。　無理もない…で、右隣の桐は目を見開いて硬直。

桐はどうしたんだろうね、驚いてるには違いないけども、何故固まってるんだ？

「我の好物はお揚げなんだよー」

この子の、好物はお揚げらしい。　……ええと、一応答えた方が良いのだろうか？

「はぁ……そうなんですか」

「うーん……その印象を見ると偶然持ってきたのかな？」

なんというビンゴ。

「ああ……そうらしいな」

いまどきお揚げが大好物とは珍しい。　というか自分でも思うけど、単体で食べるものじゃありません。

「……まぁいいや！　持ってきてくれたのには変わりないし！」

そういって、じゅるりと涎を手で拭きながら……キタネェ。　キラキラ目を輝かせて、お揚げの入ったタッパーをガン見。

「……食うか？」

「え、いいの！？　わぁ、ありがとー！　じゃあ遠慮なくいただくねっ！』

タッパーを開けた状態で渡すと、すぐにタッパーに手を突っ込んで口に放り込んだ。

……まぁオンナノコとしてはしたない！

「うぅぅん、おいしい！　やっぱこれだね！」

「……」

あー。　そういえば神様に貢ぐ物あげちゃったよ。　どーしよー

「それで……君はこんなところで何を？」

神石の前で一体何をしていたのだろう？

「えーと……眠ってたの」

「……こんなところで？」

この石を指す……寝てたら骨痛めそうだな。

「こんなとは失礼なっ！　我が祭ってあった神聖な石だよ！」

「神聖な石ねぇ……」

……え？

「今”我が祭ってあった”って言ったよね？」

「うん！　我こそ美桜山の農作物を護る神！」

……

「……えーと、とにかくあなたは神様なんですか？」

「うん！　そうだよっ」

「うん！　そうだよっ」凄く軽く返された気が……

「そして我の名前は”ホニ”だよ！」

ホニ……ほに……なんとも間のびした名前だな。

「でも……我の姿が見えたということは……」

さっきまで笑顔を絶やさなかった少女は、今になって突然に寂しそうな表情を見せた。

……？　表情がコロコロ変わるな。

「決めた！　我は、あなたたちについて行く！」

っ！？　一体どういうことなの……

「はい！？　それはどういう経緯で決まったんだ？」

勝手に決められちゃ困るっ！

「あなたたちが私の元に来る→あなたがお揚げを持っていた→頂く→恩返し」

「絶対テキトーに考えただろ……で、本音は？」

「下山して現代を見てみたい！」

素直な子、俺好きだぜ？　……でもな。

「じゃあ勝手に下りてくれよ……」

すると、首を横に振り。

「我、土地神だから……何かに憑かないとここを離れられないんだよね！　だから守護神に昇格して下山するんだ！」

農作物司る神様に守られてもな……

「ねぇ、お願いお願い！」

どうしたものか……姉貴も、ユイの意見も聞かなくちゃらんよなぁ……すると黙っていた桐が、突飛おしもなく口を開く。

「お主、こやつを連れて行った方がいいぞ」

「……はい？　お前、熱でもあるのか？　体と主に頭大丈夫か？」

普段なら「こんな女子　（おなごと読みｍ）放っておけ！」と切り捨てられるのがパターンだ。

「何故そうなる！　こやつはゲームのキャラクターじゃっ！」

まぁそうだわな……大体予想は付いてたさ。

「隠しキャラ以外のキャラが揃わないとシナリオが進行せぬのだよ」

「……ひょっとしてそれはギャグで言っているのか」

「違う」

「……」

というか、ホニさん一応レギュラーなんだ。神（？）がレギュラーとか前代未聞？

「で、そのホニさんは下山して何処に住むんだ？」

「あなたの家」

「なんでそうなるっ！」

「お揚げを持ってきてくれた」

「それじゃ恩を仇で返すことになるな！」

「いいじゃんー、神の一人や二人！」

「一人それっぽいの居る時点で厄介なのに二人も居たらもうどうしようもないね！」

「お主、わしは神ではないぞ」

「じゃあ疫病神」

「……怒るのは止めておくから、早くシナリオ進めてくれんか？」

「……自称神様さん、俺の家に来るか？」

「いいんですか！」

「いや、よくない」

「ええっ！？　連れて行ってー」

ぐいぐいと、俺の服を引っ張る少女。

「大体神と認識出来るものがないしなぁ……なんか神と分かるような印とかないのか？」

「うーん……あっ！　ええと、ね！　すーはーすーはー……よし！　ふぬぬぬ……」

深呼吸したかと思えば少女が力み始めた……どうしたというのだろう？

「ふぬぬぬ……えいっ！」

ぽんっ、という何か空気の抜けるような間抜けな音が響いた。

「……何か変わったか？」

……少女に変わった様子を一見しては分からない、周辺にも影響はない。　なぜ力む意味があったのだろうか……

「変わったよ！　ほら頭見てあ・た・ま！」

若干興奮気味に、自分の頭を指す少女。

「え？　……なになに」

そう言って、少女の頭を見ると――

「……耳？」

耳だった、それも獣耳だ。

人の顔の両端に付いている耳ではなく、頭の髪の毛の中に溶け込んで一体化したような、ケモノの耳。

「……なんの耳なんだ？」

「狼だよ！」

「……」

狼ねぇ……少女の全貌を改めて見ても、狼の獰猛さは皆無だった。

いや、妥協しても犬だろ。

「というか、これ本物なのか？」

ぐいぐい、と少女の頭に付いたネコミミを引っ張っている。

「いたっ！　いたいぃっ！？」

「本物か……」

「いたいぃよぉ……」

「す、すまん……どうも信じられなくてな」

涙目で自分のケモノ耳を押さえてる。　なにこれ可愛い！

少女をよおく見てみれば、見なくても分かるけど相当な美少女だった。

やはり、狼の精悍さは伝わってこないけど……可愛いので良いと俺は思うね！

「ひどいよー！　でも……お揚げくれた人だから許しちゃう！」

おお、お揚げ万歳！

「ということは、君は狼を母体とした農作物を司る神……ってこと？」

「うん！　今は人の体をしているけど、れっきとした狼の体も持っているんだよ！」

「じゃあ、なんで狼の体じゃないんだ？　そっちの方が威厳あるだろ？」

「さりげなく、今の我がバカにだれた気がするけど……狼の体は今の我には維持するのが難しくて、あまり持たないの、それと人の中に溶け込む為かな！」

「へぇ……まぁ君が神様ってことは仮定するか」

「確定してよ！」

桐が言ったことだからな……神様に違いない以上、連れて帰った方がよさそうだ。

というか、本人がそれを望んでいるし俺も実のところ別にいいかなとも思っている。

聞いたところ、悪い子じゃなさそうだしとにかく可愛いからな、うん。

「……じゃあ戻るか、姫城、桐、と神様」

「あっ！　えっ、はいユウジ様」

いきなり呼びかけ、呆気にとられる姫城。

「うむ」

本当に妹とは思えない力強い返事をありがとう。

「え、うん！　……でも我のことはホニでいいよ！」

ホニ……ね、神様だからな。　神様と仮定するまで失礼極まりないことばっか抜かしてたとは言え、気が引ける。

「あーじゃあホニさんで」

「〝さん〟はいいってば～」

すごくフレンドリーな神様で、接しやすくていいなぁ……どこぞのエセ妹なんてもう目も当てられないね。

「ええと、ユウジ様！　これは一体……なにがどうなっているのです！？　妹さんのほかに居るその子は誰なんです！？」

え、今頃っ！？

「……見てなかったのか？」

「はい……何故か光の辺りから記憶が曖昧で、更に今の今まで目を瞑って妄想に耽っ……あの光はなんなんですか？」

何を妄想してたのだろうか。

「……まぁ見てない、知らないなら気にしなくていいんじゃない？」

説明すると面倒だからな……知らないなら知らないでいいだろう。

「ど、どういうことですかっ！　あの、ユウジ様！」

混乱し始めている姫城に、ユウジは答えます。

「……色々あったんだ、最近」

そう懐かしむように（演技）答えるユウジ、わざとらしすぎです。

「意味深すぎます！　本当に何があったんですか！？　その子とユウジ様との関係はっ！？」

……関係がやはり気になるのですね。

「いや、そこで出会った」

と、ユウジは懐中電灯を神石に向け、その場を指しました。

「その石の前で、ですか！？」

驚愕する姫城、まぁそうですよね、目を瞑っている間に一人女子が追加されてれば……

まぁ、それ以前に姫城にとっては女子であることが問題のようですが。

「ちじょうっ、ちじょう、ちじょうぅっ♪」

神様は嬉しそうに連呼します。　本当に嬉しそうですねー

「はぁ……真夜中なのに本当賑やかじゃな」

暗くなったというのに賑やかな神石前の墓地の敷地で、一人少し前まで黙りこくっていた桐が、そう呆れながら呟いたのでした。

第０４７話　４－８　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
２月１日　最新話更新！

第０４７話　４－８　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

ええと、申し遅れました。

「プロローグのプロローグ」のラストからナレーションをしているナレーターと申します。
本格的なナレーションは当「肝試しとお揚げの意外すぎる関係。」からさせて貰っています。
今後も私ことナレーターがナレーションしていくので宜しくお願いします。

ナレーターという立場ながら、かなりフリーダムにナレーションしていく……と、説明書には書かれてますね。
これは、私情も挟んでい良いということでしょうかよくわかりません。
ええと……ちょっと待ってください、よう……つべ？　にこにこ？
……”ようつべ”や”にこにこ”のような実況動画の実況者のようなノリでやればいい？
……うーん、わかりません。　ようつべは動画サイト書いてあるにしても実況動画とは何なのでしょう……？
スポーツの実況のことなのでしょうか……うーん、どうも私はネットには疎いものですから。

フリーダムということは……とりあえず固っ苦しく考えずに、ナレーションすればいいのでしょうか？
……貰った説明書が雑過ぎて良く分からないですね、とりあえずは実践してみます――

ユウジが神石前で「ホニ」と名乗る自称農作物の神様と遭遇する少し前、肝試しに行ったユウジと姫城を待つ人々の居る墓地の入口では――

「うぅ……ユウくん」

……かなり落ち込んだユウジ姉の姿が、どれだけユウジと行きたかったんですか。

「久しぶりに、手……繋げるのかと思ったのに」

それは残念でしたね……弟思いの良いお姉さんですねー

「どさくさ紛れに抱きつけるチャンスだったのに……」

……え？　それは姉としては違う気が――

「良い雰囲気になって、キスシーンに持っていける私の構想がぁ……」

駄目だこの姉、はやくなんとかしないと。

なんですかっ、キスシーンって！　そう簡単に良い雰囲気になるとでも思ってるんですか！

いや、それ以前におかしいでしょう、色々とっ！　弟思い過ぎて、溺愛とかいうレベルを超越してると思いますよ！

涙目になってそんなことを呟くユウジ姉から近く、数メートルないであろうところに居るマサヒロが、いきなり――

「……ここで怖い話を一つ」

すると、話の流れを無視してマサヒロが口を開きました。　空気読めないんですか、というかものすごく唐突ですね！
そういえば、数メートルしか離れてなかったら今の呟き聞こえてましたよね？　そしてユウジ姉はハッと気付き。

「あっ、ごめんなさい！　マサヒロくんが居たのに、こんなハズカシイ話を……」

ハズカシイ自覚があるなら声に出して言わないでください！
幸い、ユイとユキは別のところで何か話してたので聞こえていなかったようですが。

「イエ、ボクハナニモキイテマセン」

……？　どうしたのでしょうか、マサヒロ肩が震えてますよ？
え……っと、よく耳を澄ませば「ボクは何も聞いてない、副生徒会長がそんな人な訳がない、これは幻聴だ、そして幻想だ、その幻想をぶち殺す！　ボクは――」以下続きますが省略。
……ショックだったのでしょうか、こんなユウジ姉の一面を見て。

「……ここで怖い話を一つ」

……無理やり取り繕いましたね、でもその顔を流れる冷や汗はなん

ですか？

「い、いきなりだねマサヒロくん」

すると、ユウジ姉が反応。

「一応肝試しですからね……怖い話の一つ二つはしておかないと……みんなーマサヒロの怪談教室はじめるよー！」

と、そこらで話していたユイとユキを呼びかけます。

「なになに、怪談？　面白そー！」

ユキには好感触です。

「階段と、言えば階と階を結ぶ段差のはずだ……」

そんなこと分かってますってユイさん、それに字が違います。

「みんなが揃った……ん？　あの妹さんは？」

「なんか”あ、あの……ト、トイレに行ってきます！”て言って行ってしまった……そこらで用をたしているのなら是非見に行きたいが、おそらく山の途中のトイレだろうな……」

なんで、ユイさん残念そうなんでしょう。

「トイレへは一本道だし、街頭もあるし、大丈夫だろう……さて怪談と行きますか」

ええと、じゃあ私が代わりに――

ちょっと昔、墓地には男子高校生2人と女子高校生が居ました。
よくある冷やかし的な肝試しです。
そのうちの一方の男子と女子、その二人は付き合ってました。　ちなみにもう一人の男子はただ面白がって付いてきただけです。

そして、少し話は戻って。

かつて男はモテていて、まだ二人が結ばれる前には、男子の直ぐ隣に今付き合っていた女子Aとまた別の女子Bが居ました（以下女子Aと女子B）
また二人の女子は、その男子一人が好きだったのです。　しかし…優柔不断な男子は二人のどちらかと付き合うことはせずに、グダグダした日々が続いてました。

それに業を煮やした一人の女子Bは思い切って男子に告白したのです。　しかし優柔不断な彼は答えを先送りにしてしまいました。
それがもしかしたら、ある未来の分岐点だったのかもしれません。

翌日、とある交差点で交通事故がありました。
それはもう車の方に非が有り、赤信号を突っ切り歩道信号が青になったことを確認してから渡り始めたとある女子高生が頭を強く打って亡くなりました。

そして、彼がそれを女子Bと知るのは翌日でした。
優柔不断な癖して責任感があるという矛盾があるものの、以前の女子Bへの告白の答えを直ぐに出さなかったことを後悔しました。

もしかしてあの時付き合って、未来が変わって居れば事故は無かったかもしれないという、もしも。
その可能性を考えてしまった彼は落ち込んでいき、それに胸を痛めます。

そんな沈む彼を見て少女Ａは、これでライバルはもういない。　そう思ってしまったのです。
それに少女Ａは知っていたのです。　少女Ｂが男子に告白したことを、そして彼が未だ答えを出していないことを――

案の定、少女Ａは男子に告白しました。　男子はまたもや少女Ａのことを考えてまた先送りにしようとしました。
しかし、また少女Ｂと同じ未来も見たくは無かった。　失いたくない、自分の選択の失敗で失いたくない。

そうして男子は、告白の１０分後了承したのです。

でも考えてほしいのです。
結果的に男子と女子Ａは、男子に告白した女子Ｂを裏切ったことを。
答えを出さなかった男子も、女子Ｂが告白したことを知っていた女子Ａも。

そして話は戻って肝試し。

墓の間の道を中を二人は歩いていました。
すると、です。

え？

彼が呟きました。

どうしたの？

と、少女Ａが首を傾げて聞きます。

なんか左腕が、妙に重いんだ。

彼はそう答えました。　しかし、です。

……？　左腕には、何もないじゃない。

そうなのです。　少女Ａが抱いているのは彼の右腕、本来なら彼が左腕に重みを感じるはずがないのです。　もちろん左手には何も持っていません。　そしてある地点で折り返し、スタートに戻り始めます。

あ、ああ

今度はなに？

腕に何かが巻きついている気がするんだ

え、気味が悪い

そう二人が話していると、スタート地点に近づいてきます。
女子Aが入口で待つ面白半分に来たもう一人の男子向って手を振っています、しかしその待つ男の顔は懐中電灯の明かりで分かるほどに青ざめていました。
そして入口の直前に着くと――

おい、〇〇

ん？　なんだよ？

そ、その右の女誰だよ……二人で行ったはずだよな？

ああ。

じゃあ、なんで――

――なんで三人居るんだ？

え？

こちら側から見ると左になるであろう、そこには誰もいないはずで、
少女Ａが居るのはこちらから見て右側。
じゃあもう一人の男の言う左側には――

〇〇くん。
わたし告白したのに。
〇〇ちゃん。
わたしが先なのに。

なんで

〇〇くんと〇〇ちゃんは付き合っているの？

ひどいよ、二人とも。
わたしに言わないで、そんなことするなんて。

〇〇くんに私は告白して答えも貰ってないのに。
〇〇ちゃんは私が〇〇くんに告白したこと知ってるはずなのに。

そんな二人をわたし――

わたし許さないから。

右の女。　彼女はそう呟きました。　この墓地には少女Ｂの墓が偶然にもあったのです。
そう、右の女は交通事故で死んだ少女Ｂの亡霊。　二人はそれを理解した瞬間、女子Ａは地面に座り込み、男子は立ち尽くしました。
まるで魂を抜かれたように呆然と。
そうしていつの間にか、少女Ｂの霊は姿を消していました。

そうして肝試しの後のこと。

またあの交差点で事故があったそうです。　それもまた女子高生だったそうで――

彼はまた人を失いました。
前には友人を今は恋人を。

それへの罪悪感、そして恐怖から。
その男子高校生は――

翌日学校のグラウンドで冷たい体となって、体を大きく変形させながら横たわっていました。
その学校の屋上には……女子二人への謝罪が書かれた二枚の手紙が、脱いだ上履きと共に置かれていました――

「どうよ？」

「あうぅ」

ユウジ姉が完全に怯えきってますね……先程から更に涙目です。

「うぉう、冷や汗掻いたぜ」

流石のユイも額の汗を拭います。

「面白いね！　もっと聞きたいっ！」

ユキ一人が、その怖い話を聞いて興奮していました。　また変な人物設定が増えてしまったような気がするのですが……

「……ん、そろそろ二人が帰ってくる頃合いだな」

それで、一方のユウジ一行はというとですね。

「もうすぐだな」

「はい」

「岩から離れたのは８００年振りだなー」

「！？　え、今何歳なんだ？」

「８０３歳っ！」

「……」

「どう若く見えるかな？」

「若く見えるとかそれ以前の問題だと思う」

「そんなに私の顔駄目なの！？」

「いいえ、滅相もない。　その美顔に惚れてしまいそうになりました」

「そ、そう？　そこまで言ってくれると嬉しいなー」

「……ユウジ様、今のは」

「ジョーク」

「……納得しました」

ジョークじゃないけどね。

「うむぅ……そんなに長寿だとは！」

流石の桐も驚いてるな……そりゃそうか。

「お、今明かりが見えた！　おーい！」

戻って、先程まで怪談をしていた人たちの居るスタート地点です。

「来たな」

「ユウくん！」

「おぉ帰って来たか」

「ねぇねぇ、他の話は？」

しかしユウジ一行が着いたとき……辺りには衝撃が走りました。

「たっだいまー」

「おかえりー……って桐ちゃんも居たの！？」

「実は付いて行ったんですー☆」

「驚いたよ……行きは二人なのに四人になってんだもの……四人？」

ユウジ姉は、ユウジと共に帰ってきた人数を数え直します。

「ひいふうみい……四人！？」

バタンッ、と音を立ててユウジ姉は倒れ――！？

「ああ、こいつは……って姉貴！？」

訳を話そうとしたところで、ユウジ姉は目を回して倒れてしまいました

「きゅうぅ……」

「ユウジ様のお姉さましっかりーっ！」

「ユウジのお姉さん！」

「福生徒会長ぉぉぉぉぉ」

「ミナ姉えええええええ！」

そのとき、墓地の入口は喧騒にまみれたカオスな空間になっていました。

そんな中でケモノミミを持つ神は――

「楽しい人たちだなー♪」

と、自分が原因にも関わらず無邪気に笑っていました。

第０４７．５話　４－８．１　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

どうも、ストックはあったのに修正してなかったので投稿出来ませんでした。
「．１」はＧＹＡＭ版で省略してしまった番外編みたいなものです、飛ばしても特に問題はないと思いますが……一応補完として。

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
ＧＡＹＭで好評かどうかはわからないけど連載中。

第０４７．５話　４－８．１　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

ええと、先程ユウジ姉が倒れてしまった訳ですが……完全にスルーされていたマサヒロについて語ろうかと思います。
と、いうことで回想入りまーす――

「げへへへへ」

草むらの中から聞こえる怪しげな声……不審者？

「……俺の構想２年、制作２ヵ月のトラップで女子勢を驚かせてやるぜ」

構想と制作長っ！？　というか女子限定なんですね……心読んでみますか。

「（驚く姿という女子達の違う一面をこの脳内記憶倉庫に焼き付けてやるぜ！）」

……趣味悪っ！　女子を驚かせて喜ぶなんて男として最低です！

「（特に副会長とユウジのロリ妹のコンビはそりゃあもう酒池肉林の百合天国に違いない）」

改めて趣味悪っ！　色々表現の意味が分かりませんが、この男は最低だと真っ先に感じますね。

「（このこんにゃくを吊るして、当ててやろう）」

なんとも原始的なトラップですね、でも暗い中でいきなりしっとりとした物体に触れたら私でも驚いちゃうかも……やはり最低です。

「（落とし穴風に仕立てた地面に）」

”風”じゃ意味ないじゃないですか！

「（前後１０センチ可動式の墓石）」

バチ当たりにも程があります、でも案外地味ですね！

「（左右に１０センチ可動式の墓石）」

シリーズ！？

「（通り過ぎると香りだす、香ばしい蕎麦つゆ）」

……？

「（通り過ぎると流れ出す、ラジオ体操第二）」

最初は驚きますけど、雰囲気ブチ壊しですね！

「（墓石からミラーボールが上ってくる）」

どんな演出してるんですか……

「（首が１８０度回転する洋風人形）」

う……それは怖いかもですね。

「（突然ドミノ倒しに倒れ出す墓石）」

呪われます！　確実に呪われますっ！

「（特殊メイクによって作り上げた水死体人形が墓石の上に）」

いやぁあああああ！？

「（青白く光る骸骨）」

地味に怖いっ！？

「（その他多数をセットしておいたぜ……）」

なんてものを用意したんですか……これらは後のユウジ姉が見たら失神どころか昇天しかねませんよ！

「（しかし……電気を引けなかったので、殆どが稼働しないぜ）」

意味無いじゃないですかぁっ！

「（しかぁし、この懐中電灯で照らしておけばアラ不思議、不思議と不気味に）」

暗い中で異物を懐中電灯で照らしたらどれも不気味になりますって！

「（そろそろユウジと姫城さんか）」

あ、来るんですね。

「（リア充化し始めたユウジに天誅ぅぅぅっ！）」

天誅ってなんでー！？

「（まずはこんにゃくだな……）」

それはですね――

「（何か鋭い物で切られた！？）」

宝刀＜紅之血＞ですね。

「（……気を取り直して水死体、懐中電灯オン）」カチッ。

ですが……

「（あ、あれ……？　なんで気付かない？）」

やはり二人は気付きません、というか周り見えてません。

「（よ、よし次はドミノ倒し……って電気引いてねー！）」

……ご愁傷様です。

そして数々のトラップはことごとくスルーされましたとさ。

「うぅ、何故だぁ……もうユウジらは寺前に着いちまったし……シクシク」

構想長かったですもんね……まぁでも諦めて下さい。

ええと、回想終了です……なんというかどうでもいい話でしたね。全部聞いてしまった人は心の奥底に沈めておくか、忘却の彼方へ記憶を消し去ってしまえばいいと思います。

ということで、戻って……下之家です？　あれ、肝試しは……？

第０４８話　４－９　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
スロースピードで連載中！

今回もほぼ新規で書きました、ナレーターのセリフ量が異常です。

第０４８話　４－９　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

同日家にて……です。

と、今すぐにでも話を進めたいところですが「肝試しにユウジ姉が倒れて一体どうなったんだ」という疑問がお有りかと思います。

……え、ない？

……そうですか。　でもまぁ、一応は辻褄合わせしておきたいので聞いてくださいね……というか聞いて。

描写が面倒というスタッフの文句から肝試しでユウジ姉が倒れたところから家に着くまでは、私ことナレーターが説明させていただきます・

補足としてユウジ一行が戻る前、肝試しのトラップを準備していたであろうマサヒロが何故肝試しのスタート地点に居たかというと――

トラップが立て続けに失敗（スルー）されたのでへこんで戻ってきたというあまりにも情けない理由です。

行きで失敗したなら、帰りで巻き返せよ――というツッコミはナシで、マサヒロもへこんでましたから仕方ないと渋々擁護しておきます。

……本当なら最低の男としてナレーションという仕事を濫用して多くの批判を言い連ねたいところですが、留めておくとします。

で、戻ったマサヒロはトラップだけでは飽き足らず怪談を始めることにしたそうで……そのままへこんでいれば良かったのに。

ちなみにスタッフ曰く「もともと怪談はユイが話すことでシナリオを構成していた為に、色々おかしな展開になってしまった」

更に「マサヒロは肝試し企画者なら分かるけども、ユイがいきなり怪談話始めたらおかしいだろ。　という根本的な事に気付き、マサヒロに急きょ変更したんですよ」
と弁護していましたが、最終的には「クソゲー（ヱ）だからいいじゃん、別に」と開き直っています……このスタッフもマサヒロと同じく人として最低です。

怪談を聞いたユウジ姉は、その怖さに精神的に追い詰められる訳ですが。　失神する決め手はユウジが帰ってきた際に、人が増えていた怪談とのシンクロによるものです。
そりゃさっき聞いた現象が、実際に起こったらそれはまずいですって。

そうして見事に肝試しは中止となりました、ここ重要……なのに説明を一切せずにブツ切ろうとしたスタッフは頭が逝っちゃってます。
中止後は、ユウジがユウジ姉を背負って家へと帰路に着くわけですが、山を下りた丁度その時にユウジ姉は目を覚まし「あ、ユウくんごめんね……後は歩くね……」
おそらくこれ以上ユウジに負担をかけまいと遠慮したのでしょう、それで名残惜しそうにユウジの背中を下りてからみんなに「ごめんなさい」と自分のせいで肝試しが中止になっとことをひたすら謝りますが。
「別に構わないぞ」とユウジ「いや、怪談が駄目だと思わなかったので……こちらこそ、すみません」とマサヒロ「いいですよ、別に」とユイ「とりあえず大事がなくてよかったです」とユキ「気にしないでください！」と桐
それを聞くと「みんな……ありがとね」とお礼を言っていますが、マサヒロ以外特に残念そうにしていなかったのは秘密です。
歩き始める訳ですが……やはりユウジ姉の意識が向くのは突然現れ

た中学生程の少女。
それにはユイもユキも姫城も興味というか、何か疑問があるようで「どういうことなんです!?」と姫城が聞いてきますが「俺もまだ良く分かってないから明日学校で、さ?」
「でも……」と姫城は続けますが「いや、俺も少し混乱してるからさ……明日になったら落ち着いてると思うし、頼むよ」と頭を下げて頼まれた為
「頭を上げてください！　……わかりました、それでは明日お願いしますね」頭を下げられた事にビックリして、ユウジに言い分を理解してくれたようで。
そうして道が違うので、姫城は違う方向に歩き始めるのですが「それではまた明日……」とユウジやその他に言い「ああ、ありがとな」とユウジが答えました。

ユキに関しては「うん、わかった。　じゃあ明日聞かせてね?」と姫城とユウジの会話を聞いて理解してユウジにそう言いました、いい子ですね。
「ああ、すまんな、明日話すから」とユウジは謝りつつも約束し「じゃあね、ユウジ！　ユイさんも、ユウジのお姉さんも、桐ちゃんも！」
「またな」「また明日会えることを自分は望むぅっ」「気をつけてねー」「ありがとうですー☆」と皆がユキを見送ります。
そんな中で「ええー……」一人だけ触れられなかったマサヒロは涙目で呟きます。

それまでの会話の間、ホニさんはというと……辺りを見回して目を輝かせていました。

そうして残りはユウジ宅組となった訳でして、そのまま家に直行です。

ちなみに、マサヒロは皆に向って「じゃあな」と言ったのですが近くを通りかかったタクシーの走行音でかき消され、諦めてとぼとぼ帰っていったので既にマサヒロはいません。
家に着いて玄関で靴を脱げば、そのまま「とりあえず居間で話すから」とその他の人たちをユウジが誘導します。
そして、居間に集合して「じゃあホニさん」とユウジが軽く背中を押すと「あっ、はい！」と立ち上がり――

「ホニです、これからお世話になりますっ！」

それで少女は深く頭を下げました。

「ああ、ということだそうだ」

座るユウジが無理やり締めようとします。

『……』辺りがしばらく沈黙します。　それに冷や汗を掻き始めるユウジと、未だ頭を下げ続けるホニさん……あの、いつまで下げてるんですか。

「……レッツミーティングタイム」

と、ユイが開口しました。

第０４９話　４－１０　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
２月１０日最新話更新！

第０４９話　４－１０　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

「ユウジ殿、これはどういうことなんだい！？」

「そうよユウくん！　１から１００まで丁寧かつ速やかに説明して！」

「とりあえず御二方落ち着いて」

ユウジが自分の表現でユイとユウジ姉に説明しますが、省略。
ということで……ごほん、ではナレーションことナレーターが説明しますね。

え？　なんですか筆者さん……結局は文章量は変わらない？　スタッフが面倒臭がってるんですから諦めてください。
ちなみにこの作品での定義は、主なシナリオ制作「スタッフ」文章執筆「筆者」となっています……統一しろとか言わないで。

それで本題です。

ユウジが肝試し中の神石前で遭遇したのが、前述の神様です……どうやら農作物を司ることからおそらくは恵みの神なのでしょうね。
容姿はというと女子中学生そのもので、何故かセーラー服を装備しているんですね……何故神様がセーラー服を着ているのかは私には分かりません、どうせスタッフの趣味です。

床まで付くぐらいに伸びる身長以上もあるであろう長い黒髪が特徴で、私から見ても凄く可愛いです。
好物のお揚げを持ってきてくれたので同居させて貰うという、桃太郎的な話で恩で更に恩を作るという謎の展開に。
そうしてですね……桐にシナリオ進行上同居しないとバッドエンドということを聞いたので――

「このホニ様が住むことになった」

『ほに！？』

だ、そうです、住むことになったそうです。　え？　なんかナレーションが投げやりだって？
そんなことありませんよ、あはは

「住むところがなく困ってるんだって……で、拾って来たというか、ついてきた」

「なんで拾って来たの！？　子猫じゃないのよ、ニシキヘビでもないのよ！　なんでよりにもよってお、女の子拾ってくるのっ！？」

「いや、だからついてきたんだって」

「なんで着いてきたの！？」

「俺に聞かれても！？」

ユウジに向いて問いました、それは答えようがないですって。　そうして今度はホニさん方面に向いて――

「それもそうよね……ねぇなんで着いて来たの？」

「あなたがお揚げをくれたんだっ！」

ホニさんは、俺の方を向いて言った。

「……ユウくん、それは餌で少女を釣ったってこと？」

「釣ってねぇっ！　俺が神様へお供え物をしたら、この子が頂いてくれた訳でして……それでこの子は少女に見えがちだけど自称神なんだよ」

「我は自称じゃなくて純粋に本当の神なの！　純度の高い神様なのっ！　ほ、ほら頭みてよー』

頭には、ぴくぴくと動く何かが……そうなのだ。

「……ミミ？」首をかしげるユウジ姉

「ケモノミミだとぐはぁ」とユキが吐血しながら倒れた。

「ほら引っ張ってもこの通り」ぐいぐい

「いたいっいたーいっ！？」

……ええと、すみませんホニさん、涙目でミミを押さえるホニさ

んかなり可愛いです。
　さっきからずっと思ってたけど、ホニさんは小動物的な可愛さに溢れていて抱きしめてもふもふしたい衝動に駆られてきたけど、それを俺がやったらなんとも犯罪者チックなので。
　今まで、あまり表に出してないですけど、ユキとかホニさんとかいう天然系女子大好物です、はい。
　姉貴も天然ですが、おまけに病みと濃すぎる溺愛が付いてくるので対象外となっております。

「……そうみたいね、ユウくんわかったわ、神様なのよね……なら仕方ない事よね」

　あれ、思った以上にずんなり了承したぞ？　あれだけ女の子を拾ってきたことを言ってきたのに……？

「ケモノミミセーラー中学生だとぐぶぅ！？　なんて破壊力！モトから可愛いのに卑怯だうぼぅらっ！』

　あー、いつものユイだなーとしか、というか結構血液出てるぞー

「よろしくね、えーと……」

「ホニで良いですっ！」

「えーとじゃあホニちゃん」

「はいっ！　突然の押しかけ申し訳ないです、これから宜しくお願いします！」

「これが現実に舞い降りた”かみ〇ゅ”だと言うのかがはぁっ」

「後で吐いた血拭いておけよ、シミになると落ちないんだから……どっちも信じて貰えたようでなによりだ。　で、部屋はどうする？」

この家は何気に広い、見取り図を説明しようと思ったが長くなるので止めておく、とりあえず部屋数だけは有るということだ。

すると姉貴はひらめいたようで――

「あっ……それなら、この家の」

部屋は沢山あるからな、荷物をどかして掃除さえすれば今でも部屋として機能するだ――

「地下に物置があるからそこでいいかしら」

「姉貴……信じてないだろ、っていうか絶対敵対してるだろ」

何か地下と物置の単語にひたすら悪意を感じるぞ……？　仕方ない、強行策に出ざるを得ないか――

「仕方ない、ホニさんが勝手についてきたとは言え、それを阻止しなかった俺の責任も大きい、ということで俺の部屋で預からせ――」

「それなら2階に何部屋かあったはず！　お姉ちゃん掃除してくる！」

返答までの時間、０．５４秒でした。　どうやら弟が例え神とは言え女子中学生容姿の人と一緒の部屋に生活することは避けたいようです。
まぁ気持ちは分からなくもないですけどね。　……ユウジ姉が階段を登っていく中、ユウジは居間の地面に座ったところでホニさんに耳を貸します。

「色々無理を通しちゃってゴメンネ」

そんな中、手を合わせてホニさんが謝って来た。

「我、勝手に着いてきちゃったから……」

「いや、こっちこそ色々脚色してすまんな、姉らの説得の為であって……」

「うん、わかってる、我自身の為に動いてくれるのは、とてもうれしいよ！」

「ああ、これぐらいのこと朝飯前さぁ」

そう答えて、会話は続く。

「そういえば……あなたを何と呼んだらいいかな？」

そういえば俺を呼ぶ場合が”あなた”になっていた。　……別にそれでも良いのだが、質問にはしっかり答えておこう。

「下之だと姉や桐と被るから……ユウジでいいと思うぞ」

「ウジ？」

一部が聞こえないだけで大変なことに。

「……若干へこむぞ」

悪意がなくてもウジって……

「うーん……ウジ虫ね！」

「あ、悪意あるだろホニさん！」

「ユが足りなかったね！　ユウジね！　ユウジっ！」

「そうそう……その一文字で大きく意味が変わるからさ」

「じゃあユウジさん」

「いや、さん付けは……」

「付ける！　これは譲らないよ！　山を下りることが出来たのもユウジさんのおかげだもん……せめてもの感謝の意を込めさせて！」

いやぁいい子だ、否いい神様だ……何処かの古典言語がそのまま擬人化したような妹とは大違いだぜ。

「……まぁホニさんが良い方で」

「じゃあユウジさん！　これからよろしくねっ！」

嬉しさに溢れる表情を見せたホニさん、神々しいまでに明るい笑顔を俺に向けてくるのだった。

第０５０話　４－１１　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
こってり連載中！

第０５０話　４－１１　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

ザ・恒例の俺＆桐ｉｎ俺の部屋。

今日もやってきましたよ、ここはもうセーブポイントで、ここを通らないと明日には進めない暗黙のルールが出来つつあるように思えてきた。

ということで――

「新キャラ登場じゃ　（キリッ）」

桐がキリッ……ごめん今のは聞かなかったことにしてくれ。

「……それしても、またまた……濃いキャラじゃな」

「お前が言うのも何だがな」

桐はもうキャラ濃すぎる上、行動がワンパターンなので、この作品の人気投票やったら最下位になる気がする。

「何をほざく、マニア層にヒットして見事にわしが堂々の壱位に決まっておるじゃろう」

とりあえず漢数字ぐらい現在ものにしような、ってかマニアック層厚すぎだろ。

「それにしてもこのゲームは美少女だらけだよな……」

もちろん大歓迎だけどさ。

「そりゃクソゲヱじゃからな！」

「いや、それは関係ないだろ……」

というかこのゲームって絵の作りこみで騙されて買った人が多いから、キャラが可愛くて安定しているのはあたり前か。

「あたり前田のクラッカ～」

「勝手に心読むな」

そして昭和モダン級のギャグを挟むな……ツマランし。

「それにしても……まさかケモノミミを持つ狼の神様が来るとは、なんか似たようなのは予想出来たけど」

なんか肝試しって言うから幽霊かとオモタな、そしたら神……あ、ちょっと違うか。

「なんかこの捻くれた話の構成から、どこかに伏線張ってあったりしてな」

まぁ流石にはないだろうけどさ、ははははは――

「あるぞ」

ははははは、はは……

「えぇっ！？　あるのか！　この伏線！？」

「うむ、まだ話のネタ伸ばしが始まっていない頃じゃな」

「いや、確かに話を異常に伸ばしている傾向があるけどさ……」

流石にぶっちゃけ過ぎだろ。

ちなみに本更新版では肝試し編のみで執筆に2ヵ月使っていました、実際これでも良い方なんですけどね。

……はぁ、こっちの更新と本更新版の二回をナレーションする身にもなってくださいよ。

なので桐の判断は正しいです！　この引き伸ばしという悪徳連載を防止するには、皮肉の一つや二つあったって良いと思います！

「ほら　”ネタバレ”を言う回があったじゃろ」

「いやあったけどさ……それはそれでグダグダて無理やり終わらせたような」

ということで回想です。

『ネタバレ：ホ〇ルートがある』

嘘だっ！

回想終わりです、伏線確認をしたい方は読み見返してみてください。

「これかよ！　……伏字のとこは当時の展開考えてＢＬ方面だと勘違いしていたんだよな」

「お、お主がその方面にだったじゃとっ……」

え、そっちって……！？

「いや！　断固として違う！　だから当時の展開から――」

「良い、良いのじゃ……言い訳はしなくていい、わしはお主のことが一番よくわかっておるからな」

「わかってねぇ！　思いきり曲解してるっ！　その遥か遠くを見つめるような哀れみに満ちた顔を止めい！」

「……話は戻ってな」

「うおい、曲解されたまま次の話題なんかに進ませねぇぞ！」

「主人公が話の進行を妨害してどうする！？」

「うっ……」

もろ正論だったので反論できません、こんな時に真面目になりやがって！

「わしのネタバレは真実の場合があるからな、まぁどれが本物でどれがガセかは分からないがな」

「俺＆読者に色々な不安の種を植え付けやがった……」

「衝撃展開カミングスーン」

「……」

いや……これ以上の衝撃展開があるのか？　神様が出てきただけで全米が震撼しそうな勢いなんだけど。

閑話休題です。

「それにしても桐が妨害はまだしもルート入りの介助をするとはな、どういう風の吹き回しだったんだ？」

回想ですー

『お主、こやつを連れて行った方がいいぞ』と『何故そうなる！』に『こやつはゲームのキャラクターじゃ』や『以外のキャラが揃わないとシナリオが進行せぬぞ』など『違う』です。

「……いつも通りのわしではないか」

「いやいや、いつもなら否定的のはずだからな！　こんな行動有り得ないだろ！」

「……まぁ確かにいつもより積極的ではあったな、それは認めるぞ」

いつもよりというには語弊があるね、いつもと打って代わってが正しい。

「しかしそれにもキチンとした理由がある。　あの時連れ帰らないと、バッドエンドじゃからな……それも世界が滅ぶという」

「！？　ちょいと待て、なんで連れ帰らないだけで世界が滅ぶんだよ！」

世界がなぜ滅ばなければならない、思ったより深刻だったぞ！？

その答えについてはすぐにでも返って来た。

「スタッフの遊び心じゃろうな」

スタッフの遊び心ォ？　それで世界が滅亡されてたまるもんかってんだ！

「世界崩壊の回避は免れた、しかし……ここからも十分大変じゃぞ？」

……真面目な顔してやがる、本当かよ！　大変なのかよ！

あー、なるようになっちまえ！

完全に頭から抜けてますね……ああ、今日から2日後にも何かあるといいますのにねぇ。

「ユウくん、ユキちゃん、桐ちゃん、ホニちゃーん！　ばんごはん出来たよー』

1階から聞こえる姉の声

「晩飯か……」

「そういえば、昨日寝オチしたんだったな……寝る前に晩御飯は食べておくか」

最近疲労でどうもな……もうそんなに歳を取ったのか

「……相変わらずお主のボケはツマランな」

「心の中まで突っ込まないでくれる！？」

「はーい行きますー☆』

黄色い声を出して桐は扉を開けて階段を下りて行った。

「……はぁ」

言いたい事いいやがって……

「さて……と、俺も下りるか」

廊下途中でユキやホニさんと合流し、俺は1階の食卓を目指した。

第０５１話　４－１２　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
２月１３日　最新話更新！

第051話　4－12　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

五月ニ日

休日。
清々しい休日。
見事なまでに休日。
遥かなる休日。
ローマな休日。

いつもと違って慌ただしい休日。

目覚ましという安眠阻害装置をセットせずに深い眠りに就いた昨日、そんな俺は平日よりも2時間ほど遅く起きていた。
寝ぼけ全開で少し伸び始めたボサボサの黒い髪をかきながら、次第に目を覚ましていく。
パジャマ代わりの”俺の後ろに立つな”という白い文字列がプリントされた紺地のTシャツを着て、ポケットが左右腰元に二つの綿生地で出来た長めの黒い半ズボンを履いた――
デザインセンス皆無な主人公がそこには居た。

窓から射す春の日差しに目を傾けながらベッドから起き上がり、廊下へ続く自室の扉を開いたのだった。

「あっ！　ユウくん起きた？」

すると姉貴が扉前に居たようで――

「いや、見てわかる通りだよ」

若干寝ボケが抜けきらない頭でもツッコめる俺はかなりこの姉のペースに侵されているのかもしれない、起きてなかったらここの居ないだろ。

ちなみに俺の通う藍浜学園は月1で土曜が授業日となる、話によると授業時間の調整の為だとか。

よりにもよってこの週はないだろうと内心思いつつも、真面目な俺はキチンと昨日登校していたのだった。

「今、ご飯準備するねー」

「ああ、頼むわ」

朝食を終え、休みの日こそ休んでやるぜと意気込み。

部屋に籠ってサーフィンでもしてやろうかと目論んでいた時（注、このサーフィンはインターネット回線を介したネットサーフィンを指す）

「ユウジさん起きたんだー」

お次はホニさんと遭遇。

ホニさんは何故か今でもセーラー服を着ていた、それがデフォなのだろうか？

「ああ、はい。　今起きましたー」

さっきも似たような質問を投げかけられた気がする、なるほどこれがデジャブってやつか。

「あのね、ユウジさんに教えて貰いたい事があるの」

そう立てたケモノミミをピクピクと微動させながら言うホニさん、かわいい。

「じゃあとりあえず、ここじゃ何だし俺の部屋に入りますか？」

「うん、お邪魔するー」

扉を開けレディファーストの精神に乗っ取り、ホニさんが入ったのを見計らってから俺も自室に入り扉を閉めた訳だが……

「邪魔しておるぞ」

自室のパソコン前に目を向けると――桐が座っていた、しかも正座で。

「（本当に邪魔だな……）何時の間に入り込んだんだよ……」

「3分と46秒前じゃ」

「いやそこまでの正確さは誰も求めてないからな、俺が言いたいのは”勝手に入ってんじゃねーよ”と」

「おかしいのう……承諾を取ったはずなのじゃが」

「言っておくが俺はその承諾を微塵もしてないからな」

「もちろん心の中での話じゃが」

「じゃあ無理だろよ！」

もちろんとかさぞ当たり前のように言うな、というか心が読めるお前は異端中の異端だよ。

ようやく”テンション上がってきたー”状態になってきた俺、俺の脳も桐のどうでもいいボケを区切りに目を覚まし始めたようだ。

「で、ホニさん。　聞きたい事とはなんですか？」

「うーん……我はこの現代をもっとよく知りたいんだー、だからこの現代を教えて欲しいなーと」

「現代ねぇ……主にどんなところが知りたいんですか？」

「まずは文化かな！」

ホニさんが文化と発言したその瞬間、待ち構えていたが如く自室の扉が開き更なる来客が――

「それならこのアタシことユイにお任せっだぁ！」

ああ……ややこしい奴出てきた。

「というか勝手に入るな！」

「先ほど神からの許しを貰ったから大丈夫だ！」
「まずは俺に許しを乞うことをしような」
「我も神の一人だー！」
「ホニさんあの人には関わらないでいいですから」
「あの人とは失礼な！　私には堀〇ユイという名前があるんですよ兄さん！」（CV．堀江由衣）
「ユイ違いだよ、お前が兄さん言うな」
「ホァッーホァー」
「分かりにくい声優ネタはやめい、それになんか違うぞ」
俺とユイの出来そこないの漫才みたいな会話に業を煮やしてか桐がちょっとばかしキレた。
「掛け合いが長すぎるじゃろ！　化〇語かっ！」
「いや……いつも通りだろ、ってそれは西〇さんに失礼だ。それに掛け合い無くしたらもうこれは成り立たねぇぞ」
その掛け合いもつまらないことに定評があるし……なんかホニさんが笑いながら聞いてるけど、この掛け合いのせいで質問の答えが出てない訳ですよー
……ということで話を軌道修正して。

「文化って言うとなぁ……まず何から話しますかね」

「オタク文化からぁに決まっていうだろぅ！」

「どちらかというと最後に話すか話さないか悩んだ後に結局止めるレベルの末端の文化だ」

「えー」とユイが不満を漏らしているが付き合いきれん。

「文化というと……生活の中で使う家具……やっぱり”電化製品”とかが進化してますね」

「電化製品？」

「ええと、例えばあそこにある箱形の物とかが電化製品の一つで……調べ物とかする時に使います」

俺が指差したのは少し古めかしいデスクトップパソコン、ちなみに調べ物というのはゲームの攻略やブログのことを指す。

「あ！　あれがパソコンというものだね！』

「ん、知ってるのか？」

「主に助平な画像や動画を探して落とす機械だね！」

「わーお、偏った解釈っ！　その情報を何処から知ったんですか！？」

「我の祭ってあった石の前に来ていた中学生が話していたんだよ？」

やりやがったな中学生、というか墓地でそんな会話すんなよ……

「というか会話を聞いただけで、パソコンを理解するなんて凄いですね」

「ううん、その中学生のした貢物の雑誌に載ってたよ？」

……中学生捨てやがったな。

「その解釈は後で修正するとして……じゃあこっちの箱は分かりますか？」

今度指したのはなんとも時代遅れな２４型黒色ブラウン管テレビ、地デジ移行までにチューナを買わなかったら即お陀仏である。

「テレビで大きい……ブラ○アだね！」

なんでそんなもの知ってるんですか。

「違います」

そんな高価なものウチにはないからっ！

「これはブラウン管テレビと言って、ホニさんの言ったものよりも古いものなんだ」

「！　モノクロテレビだね！」

「ホニさん、その中間は無いんですか」

「そして助平なビデオを友人から借りてこっそり夜中見るんだよね！」

「違いますって！　それはまた誰から……」

「先ほどの中学生が話してたー」

中学生ェ……おまいらのせいで神様が独自過ぎる解釈してるぞ！
すると、ホニさんが寂しそうな表情を作り始めた……もしかして否定し過ぎたのか……？

「というかユウジさん」

「はいっ？」

謝った方がいいかも――

「我がやわらかく話してるのに、なんでユウジさんは敬語なの？」

「え、いや……神様ですし」

いや神様に溜め口ってのはちょっとばかし気が引ける、じゃあ神と認める前の俺はなんだったんだという話になるがそれは無かったことに――

「我ショック！　ユウジさんももっと気軽に話してよっ！

「で、でも」

「ダーメ、我はユウジさんに助けられたんだよ？　本当なら我こそ敬語を使うべきところなのに！　だからさ……もっと溜め口で話してよ……」

表情に合わせてケモノミミもしょんぼりしている、ホニさんには悪いですが可愛いです。

「ええ……わかりました」

「”わかった”だよ！」

「あ……わかった」

「そうそう、そうやって気軽に話そうよ」

「ホニさん……」

敬語と言うと身上の人に話す時に使っていて、少々気が張るから結果的には楽になったので嬉しい。　そして少しだけホニさんとの距離も縮まった気がする。

「……バカップルは消えてしまえ」

桐が低い声で呟いた、というかそんな声も出せるのかよ。

「ユウジさんとはそんな……」

ホニさんは顔を紅潮させて否定している……あら、かわいい。

でも――

ホニさんバカップルの意味分かるんだ……妙にナウイ神様だこと！

「ホニ様はぁはぁ……」

なんかユイが喘いでんだけど……相変わらず色気の欠片もねぇ、というか見た目アブナイ人が危なすぎる！

「かわいすぎる……これが萌え死ぬというヤツか……これで人生全う出来るなら本望過ぎるぜぇ……」

もう本当に重症だな。

でもホニさんが可愛いことは同意だ、ユキとは別の小動物的な愛護欲に誘われる可愛さだな……ああ、もふもふしてぇ――

はっ！？

いけないいけない、犯罪者の発想になりつつあるな俺！

ユイのことも言えなくなってきた……自重せねば。

ユウジも大分性格が出てきましたね、でも心の中で思い留めているだけ全然良いと思います。

ええ、私もホニさんが可愛いことには同意です、抱きしめてもふもふしたい衝動に駆られますよ！　ああ、どんな抱き心地なんだろう……

はっ。

私も少し地が……いけないいけない、自重しなくては。

第０５２話　４－１３　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
ゆっくり連載更新中ー

第０５２話　４－１３　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

「そういえばホニさん」

「なにー？」

「昨日岩から離れたのは８００年振りって言ってたけど……それってさ」

「あ、うん……ごめんそれ違った」

ごめんっと手を合わせて謝る、やっぱりそうだったのか。

「流石に８００年も生きてるはずないよ――」

「それは本当だよ？」

「ええっ！？」

「まぁ岩から離れたのは正確には７９４年振りだったってこと！」

６年の違いしかない……だとッ、８００年の中じゃ６年の差どうってことないだろうに！

「ああ……ソウダッタンデスネ、トンダシツレイヲ」

先輩とか身上とかそういうレベルじぇねぇっ！

「敬語はダメ！」

「あ、すまん」

「我が生まれたのはユウジさんらの年号に合わせて西暦１２０６年ってことです！」

わぁい鎌倉時代……とりあえずホニさん凄ぇ！　敬うべきなのかっ！

ちなみに補足しておくと当作品は２００９年の設定です、去年４月のカレンダー見て「４月２８日は平日じゃん」という素朴な疑問については――

スタッフを責めてください、単純にミスったそうですから。

そういえば……

「何で岩から離れられなかったんだ？」

実は昨日から疑問だった、何故そんな長期に渡って岩から離れることが出来なかったのか。

「我にもわからないんだよね、気づいたら岩の近くに居てそこから僅かな距離しか行動出来なかったの」

「ようするにわからない、と」

「うん、ようしなくてもわからない」

そもそも神様とは元がなんだったのか、もし人や動物……だとしても狼だから動物か。
だとすると、いつの間にか死んでいて岩の周囲僅かに束縛されてしまったことも考えられるな……

「それにしてもホニさんの喋り方は不思議だ」

「？　何が？」

「いや８００年前に生まれたのにも関わらず、随分悠長な現代喋りをするなぁと」

「むぅー、若干バカにされた気がする……」

「んなぁこたぁない」

「……まぁいいっか、でもね我は耳がいいんだ　だから遠くの会話も聞こえて来るの」

「なるほど地獄耳か」

「……ユウジさん確かに溜め口で話してとは言ったけど、ところどころに毒舌が挟まれてるよう感じるのはなんでだろう！」

「んなぁこたぁないぞ……で、遠くの会話も聞こえて？」

「……聞こえるからそれらの現代的な言葉の使い方を覚え始めたんだよ」

「なんでそんなことを？」

『……退屈だったんだよね。　だからもし我と話せる者が現れた時に差し障りなく会話できるようにと始めたの！」

「……そっか」

七百と九十四年間神石から離れられなかったってことだからな……そりゃ退屈だよな。

「それにユウジさん、約８００年前に生まれたからって古い喋りをするという偏見は間違ってます！　長く生きていれば知識は増えていく、そして喋り方も変わっていくものなの……何故か”我”という口調は残ってしまったけど」

確かに偏見だった、自分の知識を押し付けちゃいけないよな……

「ああ、そりゃ悪かった……すまん」

「謝ってくれたからいいよっ」

古い言葉喋りよりも親近感が沸くのは確かだし、なによりホニさんの努力が実った結果なのだから素直受け入れることにしよう。

「バカップルは北からのミサイルに撃たれて逝ってしまえ」

また桐の低い声が聞こえた、ったくどんだけ不機嫌オーラ撒き散らしてるんだか……ん？　古い喋り方……そうだ！

「ホニさん、じゃあ主語に”わし”とか語尾に”じゃ”とか”のう”を付けるのどう思う？」

「変！　そういうものが我らに偏見を持たせる原因だよ！　そんな喋り方をするのはマンガとかの読み過ぎだと思うなっ！」

「うっ」

誰かさんがグサリと来たようですが、意図的なので気にしない…しかしそれにしても――

ホニさんの口からマンガという例えがすぐに出てきたな……

「または、その喋り方は明らかに意図的で何かに媚びてるね！　いやらしいぃっ」

「うぅっ」

イメージ映像があるならば、今誰かさんの心臓狙ってサーベルが突き刺さっているに違いない、誰とは言わないけど。

「そんな人が居たら我は哀れみの視線を向けるよ」

「ぬぁぁ……その眼をやめるのじゃ……」

と頭を抱えて唸っていた、おい誰かさん、あんたは誰にも見られてないからさ。

その謎の行動が別の意味の哀れみの視線を送られる要因になるだろうから注意しなよ？

第０５３話　４－１４　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
ぬったり更新中！

半端じゃないカオス回です、書いてた時の自分は何を思って書いたのだろう……と。
まぁ、一部訂正して晒すことに……肌に合わなかったりした場合、ユイが「うぉう持病がぁ」ぐらいで止めておくことをお勧めします、いやホントに。

第０５３話　４－１４　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

それからと言うと、ホニさんの間違った現代の知識を矯正して

「……そうなんだー、我の聞いた事とは結構違いがあるねー」

「ああ、現実はそうだ」

まぁ矯正内容は先ほどの会話を主にしたが略。

「色々わかったよ！　ありがとうねーユウジさんっ」

「また何かあったら聞きに来いよー」

そう言ってホニさんは俺の部屋を後にした

「……わしには礼の一つもナシか」

「礼をされる程のことをしていないから当然だ」

ただ居ただけだし

「ちくそう、オタク文化を話すことが出来なかったなりよ……話すことで興味を持ってオタクに目覚める可能性があったというのにっ！」

「その可能性は果てしなく否完全にゼロだ」

と、信じたい。

というか俺が全力で阻止してやる、純粋無垢のホニさんをユイの毒牙にかけられてたまるものかあああああっ！

「仕方ない、かくなるうえは！」

「……俺の居ぬ間にこっそりホニさんにオタク文化を話すとかは論外だからな」

ええと……ここからは需要ナシの意味不明超展開が始まります。……まぁツマラナイ芝居みたいなものなのでスルーしても構わないと思います。

「っ……うぉう持病がぁ」

「……いきなりどした」

なんかいきなり腹抱え出したよ、正直関わるとロクなことがなさそうだ……しかし、ユイは勝手に語り始めた。

「拙者は……オタク文化を後世に残す義務がある、しかし持病のせいで……拙者の体は長くは持たんだろう」

お前が残す義務もなければ持病ってなんだよ。

「だからせめて最後の望みを聞いてくれ……」

「断る」

まさに一刀両断、とても清々しい気分だっ！

「……せめて望みの内容を聞いてくれ……」

「拒否」

「あの子に……あの人に！　オタクという素晴らしい文化が存在すること伝えて欲しい」

「拒絶」

「私たちの偉大なる文化は、引き継いでいかなければならないのだ」

「封絶」

「ありがとう、わかってくれたか」

「イヤ全然」

「拙者は永く深い眠りに就くだろう、しかし死ぬわけではない……なぁに、ちょっと眠らせてもらうだけだ。　それではさらばだ同じ志を持つものよ……』

「……」

「（がくり）」

「ユイさぁぁぁぁぁぁん☆」↑おわかりかと思われますが桐です。

そうしてユイが目を覚ますことはなかった、彼女は命をかけてでも、オタクという素晴らしい文化を伝えたかったのだろう。
ありがとう、ユイ。
彼女の勇姿を俺と桐は決して忘れないだろう。

ここ数分以内はな。
正直勇姿なんて微塵も感じなかったし、それよりも超展開過ぎて思わず苦笑しちまったよ。

……で、だ。　ユイが眠りについてしばらく経った、早く起きてくんないかな……もう夕方になっちまったよ。

「邪魔なんだけど……」

ネットサーフィン（〝サー〟のところがアクセントです、テストに出るかもよ）してスルーしていたが、流石に……

「……すぅすぅがぁぁぁぁ……すぅすぅがぁぁぁぁ」

「（うるせぇぇぇぇっ！？）起きろ、起きろ」　ぐらんぐらん

すると、コイツは寝言を垂れ流し始めた訳で――

「むにゃ……そんなに食べられませんよぉ……』

な、なんてテンプレな寝言ッ！？

「ハッカ飴３ｋｇだなんてぇ……」

……うん、そりゃ食べられないな。

「……むにゃ……お月見どすかぁ？　ノー！　ツキミィィ！」

どんな夢だよ、てか懐かしいな。

補足としてこれがネタにされて執筆されたのは、ちょうどその時期なんですね。

……まぁ時事ネタとして爆死している訳ですが、仕方ないんです。

「……そ、そんなスク水だなんてぇ……もちろん大好きですよぉ……旧スクも白スクも好みですぜぇ……」

夢のなかでも変態だった。

「うえっへっへ……このカレーパンはぁ、三千年前に、吉野ヶ里遺跡から発掘されたのだぁぞ……」

……いや、意味わかんねぇよ。

「ニーソックスは返して……セーラー服は持っていいからさぁ……」

……ええ？

「トマレだなんて……エンドレスしちゃうよ……」

……？

「消失の企画が消失、これいかに……」

いや、あるじゃん。

これも補（ｒｙ

某作品が映画になるのか、ならないのかの境目だった訳です。

「８回だなんて……多すぎるだろｏｒｚ」

……なんのことなのだろうか。

「パンツじゃないから恥ずかしくな（ｒｙ」

寝言で（ｒｙ　使う奴始めて見たな。

「原画なんてかけてないよ、かけたのは社運だよ」

いや、ダメだろ。

「その域に達していなかったのがそもそもの事の始まりでした……」

なんのことだよ。

「ギャラクシーエンジェル５期をはやくするにょ……」

どう反応すればいいんだ。

「お色気で釣るなんて……でもくやしい……ビクンビクンッ」

……

「え？　○投げマッドハウス？　アリソンのことかーっ！」

えーと……

「な」

なんの夢なんだぁぁぁぁぁぁぁ！？

スタッフによるとユイの寝言はマニアックネタのオンパレードだとか、もちろん私は一つも分かりませんでした。

それからというと（セリフに果てしないデジャヴ）どうにかしてユイを起床させるため……

揺らす、転がす、回す、曲げる――を試したものの一向に起きる気配はなく。

「仕方ない、初めてこの手を汚すことになるのか……」

と、お馴染みのマイ鉈がベッドの下から登場、それを振りかざそうと構えたその時だった

「ユウくん、ユイちゃん、桐ちゃん、ホニちゃんー！　ご飯できたよー』

と、夕食のお知らせ。

「飯か」すくっ

飯に反応していとも簡単に目を覚ましやがった訳で――

「おおぉ、寝ていたのか拙者は！」

「ユウジ、夕飯だぞ行こうか拙者らも！」

「……」

「なんだその鉈は？」

「……」ぶんっ

えっと……ユウジは鉈を振り落としました。

「すこし待てＷａｉｔまて」

「そ」

「そ？　楚？」

「そんなお決まりのタイミングで起きんじゃねぇっー！」

「な、何を怒っている！　そんなひぐ○し的な展開誰も望んではいないぞ！」

「俺がまずは望んでるんだよっ！」

「しかし待て”腹が減っては戦は出来ぬ”という言葉があるだろう！　まずは夕食で栄養補給、エナジーチャージだ！』

「……そうだな」

「わかってくれたか」

「……でも、すぐに済むから我慢してくれ」

そういって鉈を振り上げました。

「……いいだろう、この命を貴様に捧げるのも悪くはない」

あ、あれ？　なんでしょうかこの展開は？

「俺がお前の首を取れることを誇りに思う、じゃあ行くぞ」

「ああ、一思いにスパッとな！」

ユイさん自分が恐ろしいこと言ってるの分かってます！？

「うりゃあああああああっ」

そうして鉈はユイへと向かいます、え、ちょっと！

「……いつまでくだらないをコントやってるんじゃ」

いきなりの桐さん登場です、ドアを開けてその隙間に顔を入れてジト目で見ています。

「……」

「……」

「はいっ、お疲れしたー」

「お疲れさまー」

「いやー、流石ユイさん迫真の演技っすよー」

「そ、そんなことないですよー！　いえユウジさんこそお上手でしたよ？」

「ははー、そう言ってくれると嬉しいねー」

「では私、次の収録があるので」

「ああ、俺の妹（以下略）の収録だっけ」

「はい、〝拙者〟とか〝ござる〟とかこっちで言うセリフと被って困りもんですよー」

「大変っすねー、じゃあ次の仕事がんばってください」

「はいー、ありがとうー」

ええと……はい？

「だ・か・らいつまでそのコント続ける気なんじゃーっ！」

「ふぅ、今いい場面だったのにねぇ」

「いや、今わしには一区切りついたように見え……ってそうじゃなく！」

「ＫＹだな」

「お主らがこの話（クソゲェ）ではＫＹじゃ！」

「えぇっーアタシも入っちゃうんですかー？」

「……お主そんなキャラじゃなかろう」

「ふむバレたか」

「諦めがはやいわっ！　……たく」

そう呟きながら、見てわかる不機嫌さが出てくる中――

「そういえば飯じゃあないか」

「おうそうだったな！」

「おい、桐。　こんな話をしていても時間の無駄だ、そんなことより飯食おうぜ」

「わ、わしが時間を浪費した原因と言いたいのか！？」

「ほら飯いくぞー」

「GO」

「……」

わしがこの日経験したのは、ユウジというツッコミが消えた空間。
これほど恐ろしいことはない、何故なら――

話の収拾がただでさえ付いているのか微妙なのが、完全に付かなくなってしまったからじゃ！

ちなみに補足です、描写していませんが桐が来る以前にユイは起きていて、一度口裏合わせの後、桐がドアの隙間から見始めたの確認してから、あの寸劇をやったそうです。
……えと、寸劇をする必要性が見当たらないのですが、ただ桐をイジリたかっただけなのでしょうか？

そして、この話の回は後に”伝説の寸劇回”と呼ばれ、ＤＶＤがこの回が収録された巻だけ３４９３本売れる（通常は２０００本後半）ことは……
後に語り草となりました――

「なるわけないじゃろ」

ですよねー　というわけで、桐以外が実はグルだった寸劇でした。

「わしは仲間外れにされたのか！？」

という訳で長いようで短い一日は終わりを告げたのでした、あ、短いかな？

「ナレーターのお主までボケに回ったらどうなると思っているのじゃ！　本当に物語が成立しなくなるぞ！」

……いいじゃないれすか

「は？」

私らってねぇ！　いつもならこんなことしてないんれすよ！

「ま、まぁそうじゃな」

れすけどねぇ……このダラダラグダグダした話の構成には本気でイライラしまひたよ！

はたしなんて、傍から見てツッコミ入れるだけなんれすよ！？

「そ、それは辛かったじゃろうに」

話を矯正出来ないもどかしさと言ったられすねぇ……どうしてもクリア出来ないラスボスを友人がカンタンにクリアすることに並ひます！

「はぁ……」

ちょっと桐、食後は付き合ってください。

「はぁ？」

飲み明かしましょうよ、コーラかチューハイで。

「いやお主がチューハイじゃマズイじゃろ……というか既に舌回ってないぞ！？」

れっすよねー？　でももう飲んじゃいまひたよ

「！？」

桐も飲みましょう、この黒いビール。

「コ、コーラのことだろうな？　そうだと言ってくれ！

いいえ、もちろん”黒い缶に恵比寿様”が描かれたビールれすよ？

「っ！　とりあえず予想通り収拾が付かなくなってしまったッ！？」

食後は絶対れすよー？

「はいはいわかっとるわかっとるから、その前に夕食を頂かせてもらう」

りょうかいれすよー

スタッフ「……なんか暴走してすいませんでした、途中から訳わからなかったですよね……以後気をつけます」

第０５４話　４－１５　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（終）（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
ぐだーと連載中！

またまた全部新規で書きました、今後の伏線張り……？

第０５４話　４－１５　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（終）

「いやー、さっきはスマンかった」

なんとも素直に頭を下げるユウジ、そして頭を下げた先には……

「……」

不機嫌そうの頬を膨らます桐の姿が――

ええとその前にですね、さっきの私は忘れて下さい、あれは私じゃないです、別人です、影武者です。

”黒い缶に恵比寿様”な飲料飲んでいる訳ないじゃないですか、まったくそんな偽りの情報に惑わされてはいけません。

執筆者が書いた壮大かつタチの悪い駄目シナリオなのですから……

私はこの作品最後の良心、そんなことは絶対にあり得ません。

え、酒臭い？　って……あれ、ブレス○ア飲んだはずなの――

って違います、嘘です、アメリカンジョークです、鵜呑みにしたら最後あなたの負けです、Ｙｏｕ　ｌｏｓｅ　！！

私は健全な学生なんです、ということでお酒が飲めるはずないです、私はコーラで酔っぱらってしまうんです、はい！

……学生ってバラしせいで余計墓穴を掘ってる気がします、もう弁解は止めておきます。

かといって、曲解して貰っては困ります！　それでも私はやってないんです！

ええと、私情で取り乱してすみませんでした……ということで、桐の姿が――のところから再開します。

あちゃー、やっぱ怒ったか。

「……怒ってなどおらぬ」

「そうか……って、心を読むな！」

まったく心の中が筒抜けなんて、恐ろしいにも程がある。

「怒っているというか、呆然とはしていたな……読者も同じくじゃろう」

「まぁ、そう怒るなよ」

「お主は話を聞いておらんのかっ！？」

ユウジは桐を逆撫でします。

「まぁ超展開にも程があったな、それは反省している」

「そうか……たしかに途中からは付いていけんかったのう」

「しかし、これにも理由があったんだ……」

「な、なんじゃと！　……いやないじゃろ」

「まぁ俺が”いつもツッコミばかりで飽きた、壮大にボケがしたい”という理由があったんだよ！」

「単純明快じゃが、凄くイラっとくる理由じゃな！」

「まぁ、そう言う訳で……たまにボケに転じるから夜露死苦ナっ！」

「早速転じておるな！　わしは認めんぞ、お主のゆるい突っ込みで受け流さないと話がややこしくなるのじゃ！」

「ややこしくたっていいじゃない、人間だもの」

「……イヤ、意味がわからぬぞ！？　詩の傑作を汚すでないっ！」

「ああ……ボケも飽きた」

「とてつも無い程に飽きっぽいな！？」

「といってもツッコミ疲れたな……長い間やってきてるからな、ツッコミ」

「そろそろ”ツッコミ&ボケ”ネタがしつこく感じてきたが一応聞いておく……長い間とはどういうことじゃ？」

「あ、それはな……ルリキャベが展開される前から俺はツッコミに回ってたんだぜ」

「それは知っておる、ユイやマサロ……じゃったか？　あやつらへのツッコミ要員としてじゃろう？」

名前を思い切り間違われるマサヒロ……少し同情します。

「うんにゃ、まぁそれも正解だけどもそれよりも前の話だ」

「ん？　それよりも前……そういえば、お主の過去をよくは知らないな」

「……心を読めば分かるだろ？」

確かに、考えていることが分かるなら記憶の一つや二つ盗み見出来そうな気がしますが。

「いや”記憶”と”心”は別物じゃ、それに……お主は記憶を仕舞いこもうともしておるように見えるぞ？」

……違いがよくわかりませんね、って記憶を仕舞いこむ？

「……さっすが、桐。　そのとーりでだ。　理由としては、過去のことはもういいかな……と思っているんだよな」

「その口振りでは何か、過去にあったのか……？」

「確かにあることは、ある。　でも、今はもういいんだ――今は今で、過去は過去。　もう割り切ることにした」

「……ふむ？　よく分からんな」

「まぁ、言うなれば”全てが入れ替わった”と言うべきか、あの頃の空気はもう残っていないんだ」

「……？　余計わからぬ」

「ツッコミボケ飽きた言ってても今の日々は楽しいからな、現状維持が一番だー」

「……そうか」

……なんというか、ユウジが過去に何かあったこと匂わせていますね。

一体何があったのでしょうか”全てが入れ替わった”とはどういう意味なのでしょうか……？

「さて、ちょっくら風呂入って来るかな」

「お、風呂描写は初めてじゃな、わしも同行するぞ」

「しなくて結構、描写も結構。　数少ない1人の時間を阻害すんな……そう1人の時間を」

なんか心の底から、疲れたような言い方です。

「……ぬぅ、お主の裸体にかなり興味があったと言うに」

「その発言を男が言ったら、即署に連れて行かれるな……女でも、周りから白い眼で見られること間違いなし」

「しかしこんなことも言えるのが幼女特権、便利じゃな」

「お前はガキとババアのハーフだからアウト」

「わしをそんな風に表現するでないっ！」

「まぁ、風呂行ってくる」

「いや、また幼女特権発動じゃ！　おにいちゃーんのお背中ながすー」

「そして俺はお前の提案をうけながすー」

「流すなっ！」

「流すというのはちょっとばかし違うな……切り捨てる、コレだな」

「ひ、ひどいよお兄ちゃん」

「男の最後の砦に二度も入られてたまるかっ！」

「なんじゃと、別によいでは――二度も？」

「っ……行ってくるわ」

「桐・サーチ……ほほう、そうか」

「くっ、心を読みやがったなあああああっ！？」

「姉がいきなりタオル姿で……ほう――」

「あ、あれは事故だ！　いや、姉貴の陰謀だっ！」

「人類皆平等――おにいちゃん、わたしもはいるー」

「断る、そうはいくか帰宅部の全力ダッシュっ！」

「ふふ、逃さぬぞ、逃さぬぞおおおおお！」

そうして廊下を全力ダッシュし、風呂場へ向かうユウジを追う桐。

「ユウくーん廊下は走っちゃ駄目よー」とユウジ姉。

「おう、なにごとだー！」ユイ。

……色々大変ですね、ユウジ。

そんなこんなで、1日が終わりを向かえる訳ですが……忘れてませんかユウジ？

第０５４話　４－１５　肝試しとお揚げの意外すぎる関係。（終）（後書き）

まだ続いてしまうのです。

第０５５話　５－１　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
２月２０日　最新話更新！！

やっとこさプロローグの第5章です、本当にやっとです。

第０５５話　５－１　来訪者と疲労な主人公。

五月六日

いつも通り自室のベッドで布団に包まり、寝息を俺は立てていた。
そしていつも通り忌々しく思いながらも昨日のうちに稼働時間を設定し睡眠打破音波を発信する”ＭＥＺＡＭＡＳＨＩ”に起こされるはずだったのだが……

「おはよぅございまぁす」

ユウジ一人しか居ないはずの部屋には、一人グルグル眼鏡をかけたショートカットの女が立っています。

「現在は朝の６時５９分、ＡＭ６：５９ですー、あと数十秒で７時を迎えようとしています。　そして今回の企画は――」

小声ながらも少し盛り上げるように少々早口になります。

「アタシが下之ユウジのベッドに入り込み、耳元で”ゴッドモーニング”と間違った挨拶をします」

確かに間違ってますね……

「ちなみに挨拶を出来るのは、下之ユウジが起きていないのが条件

で、目覚ましが鳴ってしまい、起きてしまうとそれはアウトです」

すごくどうでもいいと思います。

「企画開始時間は7時。　そして目ざましの稼働開始時間も7時、つまりアタシの瞬発力が勝負の鍵であります」

……にしても、誰に話しているんでしょうね？

「そう話している間にもう7時まで残り数秒を切っていました、ではみなさんお楽しみください、これがアタシの雄姿ですっ！」

だから、誰に話して――

ピッピッピッ、３　２　１　０、　ピィ――

「（みえたっ！）」

ピィリ（目覚ましの鳴ろうとする音）

パシッ（目覚ましを止めるユイの手の叩く音）

……

「ご覧ください、成功です、てってれてれてー（肉声演出）いま時計の針は7時０１分を超えました、やりました！　我が軍の勝利です」

……かなりの少数精鋭ですね。

「では企画の本筋とも言える、下之ユウジのベッドにＩｎｔｏ！」
ゴソゴソ
「（暗いですねー、おっと、まだユウジは眠り続けています。　ではでは」ゴソゴソ……？
ユイは何かを思い当たったかのように自分の顔辺りをぺたぺた触ります。
「（あれ？　眼鏡は？　まさかのピンチです、今ベッド内でアタシ愛用の眼鏡を紛失しました、あれがないといつもの０．５倍の力（当社比）しか出すことが出来ません！　誠にピーンチでありまっす）」
はぁ……眼鏡かけたまま布団なんかに入るからですよ……くだらない企画なんてやらないでくださいよ……ふぁぁ、眠いのに起こされましたよ、まったく……ナレーターだけど一応学生なんですよ？で、案の定ゴソゴソやってたせいでユウジが……
「ん……？（朝か…ん？　布団の中に誰かいる？）」
「（焦）」
「（誰……だ？　暗くて正確にわからねぇ）誰だよ……俺の布団に入った奴は……）」
そうしてユウジが布団を取り去った訳ですが……
「え？」

「っ！」

なんというべきだろうか、そこには――

「眼鏡あった！　！　見たな！　よし記憶抹消チェストォ！」ガンッ

「ぐがぁ！？」

い、いきなり首殴られた！？（何回目だッ！）　……ってかこいつ誰だ、何で俺の部屋にこんな、こんなかわいい――――

ユウジは首の打撃により再度眠りに就くのだった（気絶？）

「あぶねぇー、記憶抹消術を通信教育で学んでおいてよかったなり、アタシの素顔が知られるとこだったぜ、さてと」

そう彼女は呟くと手に持ったグルグル眼鏡を耳にかけ直すのでした。

第０５６話　５－２　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

@　クソゲヱリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
２月２５日　最新話更新！！

長らく更新滞っていました……一応復活です。

＃アル死ニ神トノ平和ナル日常＃
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９６６５ｊ／
クソゲヱのスピンオフ、ゆったりと更新開始ですー

第056話　5－2　来訪者と疲労な主人公。

「はっ！？」

こ、ここは何処だ！？　きょ、教室っ？　え、俺寝てたよな！家のベッドで寝てたよな！？

何故か俺は学校の教室、そして教室の愛すべきマイデスクのマイチェアーに座っていた。

「え」

誰もいない……？　というかなんで俺が教室なんかに？

閉じられた遮光用の薄緑色のカーテンは太陽の光を遮るが、カーテン間の隙間からは僅かながら明るい陽が射している。
その部屋には音は無く、あまりの静寂さが耳に響く――

無音の世界、何もかもが消えた去ってしまった空虚な世界に居るような……
何もかも、俺の周りの人や景色が消え失せてしまったような嫌な感覚だ。

「！」

キュキュッとタイル張りの床と固いゴムで出来たイスの足が擦れ

る音、俺はかつて座っていたその椅子を立ち上がった。
そんな鈍い摩擦音のみがこの世界にはあり、相変わらず耳が痛くなるほどの静寂が包み込む――

スタスタスタ。

俺はこの不気味な教室から抜け出したかった。
人が居ないということが理由では、かなり弱い気もするが……この世界が俺にとっては”苦手”だったのだ。

スタスタスタ。

上履きが足に合わせてリズムを刻む、タイルと足は触れては離れていく繰り返し。

スタスタスタス――足音が止まる。

足を止めた目の前には、鋼鉄製で上部に長方形の小窓が付いた非常にオーソドックスな見慣れた引き戸がある。
教室と廊下を繋ぎ、分ける境界、何の変哲もない扉がそこにはあった。

常なら白いチョークで書かれた文字が賑わう黒板は綺麗なまでに緑地を曝け出している――
その黒板とは反対側、縦３段横１５段に正方形の箱を並べ積み上げただけの簡単なロッカーの側に俺は居た。

『扉を開けるのですか？』

「!?」

無音の支配していた教室に、不意に一つの声が響く。

注意が行っていた扉から目を離し、声の主を探す為に目を泳がすと――

『あなたは扉を開けてしまうのですか?』

その声は女性の声ながら、どこか親近感を抱く優しい声……聞き覚えがあるようで、無い。

声の主は俺とは逆、黒板側でも窓際の一番黒板に近い机に彼女は座っている。

「さっきまでは居なかったのに……」

誰も……いなかったはずなのだ、俺一人がこの空虚な教室に存在していたはずだった。

それならば、彼女が入って来るのに気付かなかったのか……いや、それは違うと思う。

二つの戸は閉じたままで、開けられた形跡は見当たらない。

しかし窓を超えて入るというかなり遠まわしな現れ方も、カーテンが空いていなく、微動だにしないことから窓が空いているという可能性も少ない。

……いや、それはたまたま今日が風の無い日だったら関係ないのだが。

まぁ、窓のサッシが放つ擦れる金属音も耳にしなかったことから違うと考えられる……ならどうやって

『その扉を開いてしまうのですか？』

彼女は殆ど同じ言葉並び、ほぼ同意味の言葉を繰り返す。

「……開いちゃいけないのか？」

俺にとっての素朴かつ単純な疑問を口に出す。

『開いてはいけません』

彼女は言葉を返してくれた。

その彼女はというと、俺らと同じ高校の1年の学年色の付いた制服を着ていた。

この時点でおおよそ俺とは同学年の藍浜高校の在籍者か、当学校の学年色は3色をローテーションするので卒業生あることが証明できる。

しかし肝心の顔はというと長く深い緑色の髪は額まで行き届き、顔の上部は伸びた前髪で隠れ、顔は見れず輪郭の形も正確には分からない。

この状態では誰か検討のしようもなかった訳で――

『その扉を開いてはいけません、開いたその時、僅かな狂いを起こしたこの世界は崩れ始めるのです』

「ボロボロとボロボロ」と二回協調するように彼女は付け足した。

『扉を開くというのは”抗い”を意味します。抗っても、失ったものは手に入りません、所詮は無意味です。”抗い”によってまた違うものを失うでしょう』

この人は、一体何を言っているのだろう。俺は一方的に言われるがまま呆然と立ち尽くしていた。

『世界の崩壊を避けたいならば、その扉を開いてはいけません』

しかし、この扉を開けたかったのはこの教室から出たかったからで……この不気味な世界から抜け出したかったのだ。

「でも、俺は外に出たいんだ、この教室から外に出たいんだよ」

俺は彼女にそう訴える。

『……それならば、教室の扉を開く必要性はありません』

え？　教室から外に出る為に扉を介しない？

「じゃあ……どうすんだよ」

『あなたはまた、眠りにつけばいいのです……かつての眠りの場所で』

「眠り？」

かつての眠りの場所、それは俺が起きた時点で座っていた自分の

席を指すのだろうか？

「そこで眠りにつけば……本当に眠ればいいんだな？」

『嘘はつきません』

俺は言われた通りにする事にした、まずは自分の席に座ることにした。

「……俺が眠る前に聞きたいことがある」

『……』

否定肯定がその隠れた表情からは読み取れない、しかし俺は続ける。

「お前は誰だ？」

非常に簡潔な質問だと我ながら思う、そして答えは返って来た。

『名前は……今は言えません。でも、いずれ答える機会が出来るでしょう』

なんとも納得がいかないというか……俺が聞いちゃいけない訳でもあるのか？

「ヒント一つもないのか？」

結構厚かましい気もするが、一応聞いてみる……まぁダメだろうな。

しかし、予想を裏切り彼女の返答は早く返って来る。

『きっと下之ユウジのすぐ傍に居るでしょう』

「!?」

彼女は確かに俺の名前呼んでいた。……しかし、その頃にはとてつもない睡魔が俺に襲いかかって――

『それでは、また』

……俺の意識は落ちていき、そして眠りについていた。

第０５７話　５－３　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

久しぶりの投稿です……いや、多忙だったもので。

第057話　5－3　来訪者と疲労な主人公。

「はっ！？」

こ、ここは何処だ！？　きょ、教室っ？　え、俺寝てたよな！家のベッドで寝てたよな！？

何故か俺は学校の教室、そして教室の愛すべきマイデスクのマイチェアーに座っていた。

ってあれ？　デジャヴ？　……この作品ならもしかして使い回しか？

初っ端からメタ過ぎると思うのですけど、ええとスタッフによると、その通りで使いまわしだそうです。

しかし違うことは、この教室には音が溢れていたのだ……いつも通りの同級生トークが重なる騒がしい光景――

これが普通な状態なんだ。

「（あれは……夢だったのか？）」

……いや、そうなんだろうけ――どっ！？

いやまて、これが現実という保証が何処にある！？　再現性の高い夢なのかもしれないぜ？

「（もしかして、これも……夢？）」

または――

「（今が夢で、あれが現実？）」

なのかもしれない……うん、っ！？

「（てーことはだ、今の俺がかつての俺とは別人かもしれない可能性も出てくる……）」

はっ、だからこうして悩んでいるのかっ！？

「（そうだとしたら俺は一体何者なんだ……何処から来て、一体どんな名前を持っていたんだッ！）」

まったくわからない……ッ！

「（というか俺は人間なのか？　そもそも生物なのか？　……もしかしたら実体など無いのかもしれない！）」

それなら……俺は何なんだ！

「（そうか、やっとわかった……俺はもともとゲームか何かの主人公として形成された架空の人物だったに違いない！）」

俺は存在し得ない存在、そしてこの世界も空想で作られた虚像――

俺は何を目指し、何に向かうのか！　俺は、俺は……

「どうすればいいんだッ！」

凄いややこしい事態になってません！？　思考が残念なボエマーに

も見えてきたんですがっ！
ユウジが壊れて……誰かっ、ユウジの吹き飛んだネジを探して来てください！　助けてください！

「起きたかユウジー」

「え？」

ユウジはその声に気づくと目の前にはグルグル眼鏡以下略。

「おい、俺は誰だ？」

「……それは本気で言っているのか？」

「ああ、今の俺の脳内にある情報は信用できない」

信用してください！　合ってますからっ！

「アナータハネボケテイルノデスカー？」

「……そうなのかもしれない、いやこの状態こそが覚醒した姿なのかもしれない、今までは寝ぼけていたということも」

「……アナタノオナマエハ？」

「名前……か、持っていないと言いたいところだが。　もともと存在していなかったのかもしれない、または有ったとしても言語で表現出来るシロモノではなかっ」

もう、訳がわからなくなってきたんですけど……

「エエト、アナタノナマエハ巳原ユウジ、ワタシノーニイサンヨー！』

「なんだと！」

なんという衝撃展開ですかっ！

「……って、それはねぇよ」

そこで、通常に戻るんですか！？

「ハラチガイノニーサン！」

「その口調の割にブラックなこと言ってるだろ」

カタカナなだけまだマシなもんですよ！

「まぁ腹違いは本当だけど置いておいて」

カタカナで誤魔化した意味帳消し！？　というかそれが本当なのはマズイですって！

「！？」

「ユウジが起きなくてさー、だからここまで連れてきたぬだ」※

ぬ　は誤字ではありません。

「いや、どうやって……というか起こせばいいだろ」

「いやぁなんかさ、起きなかったんだよねー　あんなことやこんなこと、したんだがなー」

「お前は俺になにをした！？」

「それは君の想像力次第だ☆」

「……」

よかった、想像力が不足してイメージが沸かない……と、言いたいところだけど。

ユイがやることねぇ……あ、R指定が――

「どうやって――という答えに関しては答えようじゃないか」

「おう、どうやってここまで？」

これが言わゆるテレポーテーションって奴か！　近未来的ぃ、ファンタジックぅ！　ふぇっくしゅ！

あ、あれ？　ユウジのキャラが必要以上に壊れている気がするんですが――

「担架で運んだ」

担架……？

「え？　どゆこと……？　俺は担架で通学したの？」

「いかにも」

なにそのシュール。　担架ってことはユイが片方を持って……

「ええと、誰と運びやがったんだ？」

「一人だぞ？」

「ええっ！？」

「頭に乗せてさ」

「バリ島の島民でも不思議がるわっ！」

しゅううううぅ！

「まぁ……起きてくれてよかった」

「おいそこは流すなよ……って、え？」

「いや、なんでもない……そ、それよりさ――」

……起きなかった原因が、自分が気絶させたことによるという事実は、一言も口にしないユイなのでした。

そうして、まだ朝のＨＲの始まる１０分前。

「今日は転校生が来る日なのさ！」

いきなりテンション高め、声大きめで言い放つユイ。

「数日前に言っていただろぅ？」

「え？」

「ん？　……あー」

そんなこと言ってたな。

「どの学年に来るんだ？」

「それはワカラン」

なんでだよ、一番気になる情報じゃねぇーか！　年上か同い年かのどっちかだぜ？

いや、だからユウジのキャラが変になってますって。

「……じゃあクラスも分からないよな」

「４組なりさ」

「中途半端は情報だな！　オイ」

「校長め、情報を出し渋りおって……まだ痛い目を見足りないとい

うのかぁっ」

「校長に何する気だ！？」

「ノンノン事後だ。　既にやっちゃったＺＥ☆　だから正確には”校長に何をした！？”が正しいのだよ、ワトソン君」

既に手遅れかよ、そして俺ホームズなのかよ……あー、校長に手出したんだからこの学校に消されるなユイ。

いつの間にか退学処分がされていてクラスには「巳原は一身上の事情で転校した」と嘘の情報が流される。

もうおしまいだ……学校のブラックリストに載ったが最後、開拓地行きがほぼ確定したようなものだ。

……短い付き合いだったなユイ、お前との波乱に満ちたエキサイティングな日常をありがとう――

開拓地！？

「お前のことは忘れない」

「おう！　忘れないでおくれよ！」

……久し振りにボケた結果がコレだよ！

今のがボケだったんですか！？　キャラが違うのも演出だったんですね……

「ちなみに転校生は女子だそうだ」

「へぇ」

「更に背は高くてスタイルもＧＯＯＤらしいぜ」

「ほぉ」

「好きな食べ物は甘いもの全般、３サイズは上から８９５０７８」

「で、学年は？」

「Ｉ　Ｄｏｎ、ｔ　ｋｎｏｗ」

すごい、学年だけなんで分からないのか逆に不気味だ……というか３サイズがなんで分かるんだよ。

「あと、美人らしい」

スタイルが良い上に美人……最高じゃあないか。

「それは是非顔を合わせてみたいものだな」

そう軽く流したのだが……うん、まぁお察しの通り伏線だった訳でして。

第０５８話　５－４　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

こんな話を平然と書いていた俺は、どうかしてるぜ！

第０５８話　５－４　来訪者と疲労な主人公。

ユウジとユイが会話しているその頃、校門前では――

いつも通りの風景の中で、一際存在を確固とする女生徒が長い金髪を風に流しながら背筋をピシっと伸ばして歩いています。
その女生徒は見るからにスタイル抜群で、出るところも出て凹むところも凹んで……大人びた美顔を持つ紛れもない美女でした。
同じく校舎に向かう生徒達はそんな金髪の美女に意識が視線を注いでいます――

「わぁ……綺麗な子」

「誰かしらあの人……転入生？」

「あんなに髪サラサラだなんて……妬ましい」

「胸……はぁ」

「……ちょっと藁人形買ってこよう」

以上女子呟き抜擢……なんか危ない人が居る気がするのですが。
以下男子発言抜擢。

「見かけない顔だな……しかしかわいい」

「ふつくしい……」

「……こんな辺鄙な場所にこのような美女がおろうとは、拙者の観

察眼も鈍ったものだ」

「はい、俺惚れた！　惚れたよ俺！」

「あ、あの金髪でもふもふしたいお」

「……二次元に生きると決めていたのにッ！　ちくしょう、保て俺の理性ェ！」

以上生徒発言抜擢……変な人が混ざってる気がしますけどスルー推奨です。

……あっ、金髪女生徒立ち止ましたね、そして校舎を見据えながら彼女は呟きます。

「ここが……藍浜高校ですのね」

そう呟くと公舎の中に入って行きました……はい、転校生編スタートです・

で、また教室に視点は戻ります……コロコロ変わりますね・

「あっユウジやっと起きたー」

そう言いながらユキがてくてく歩いてきた。

「ああ、オハヨー乳業」

「おはようユキ！」

「おはよー、ユイ」

名前で呼び合ってたんですね、あまりそういう絡みないですからねー　近くの手ごろな机に備え付けられた椅子をユウジに向けて座り話始めました。

「ほんとーにぐっすり眠ってたよ」

……さりげなく俺のボケがスルーされた件に関して。

いいじゃないですか、別に。

「おう、そうみたいだな」

「心地よさそう……には見えなかったけど」

あれ、ですね。

「そうなのか？　……んー、そういえば首が痛いな」

その時ギクリと動揺した方がいました……朝いきなり首チョップは酷いですって。

首をグリグリ回すユウジを見ているユキの顔が、突然曇り始めました。

「ユウジ……もしかして疲れてる？」

「え？」

ユキの顔は不安に満ちています……そういえばユウジの顔白っぽいですね。

……まぁ文章面では伝わりにくいですが、顔面蒼白とまでは行きませんが白っぽいです。

「顔が少し白い気がするよ？」

っ！　まぁ本当は疲れてるけど（何故か首も痛い）しかぁし、ここでユキに心配をかける訳にはいかねぇ。

「ふふ、この白さに気づいたか……俺の顔に水を付けてしばらくこすると……とろみが出てくるんだ」

なんか語り始めましたね。

「お湯には溶けないのに水には溶ける不思議な粉末……」

とろみ？　粉末？

「！　ユウジ……ま、まさかあんかけのとろみを作るのに使われる――」

「そう！　俺の顔は”片栗粉”で塗りたくらているのだっ！」

「えええええ！」

えええええええっ！　何故その粉末をチョイス！？

「いや、必要ないよね！　片栗粉なんて顔に塗る必要性皆無だよね！」

「……皮膚がとろみを求めていたんだよユキくん」

それはないです。　潤いととろみは全く別物だと思うのですけど！

「な、なるほど……って納得しないよ！」

ですよねー

「化粧品でもジェル塗ると保湿効果が出ます～とかあるだろ？　その代用として挙がったのが片栗粉な訳だ」

確かにそんなＣＭありますけど！　その発想はなかったですよ、いくらなんでも胡散臭い――

「なるほど……どっちにしろお肌の潤いを逃さなければいいもんね」

納得させられちゃってる！？

ふぅ、なんとかやりすごしたぜ。

本当にそう思えます？

にしても最近の疲れ具合は異常だな……そろそろ一日丸々休みたいものだ。

「……」

先程まで話していたユイはどうやら近くで話を聞いていたようですが、黙ったままですね……心詠んでみますか。

「（これは見ていて面白いッ！）」

そんな理由ですか……ユウジとユキが話し、ユイが押し黙る会話（？）の輪の中に来客が――

「ユウジ様おはようございます」

ユウジはその声に気付くと、すぐ前には挨拶をしてくる姫城が居ました。

「ああ、おはよ」

そう軽く挨拶……以前に比べれば大分気軽に話せるようになった気がするなぁ。

「それでユウジ様、肝試し時に現れた妹さんと別のもう一人の説明を要求します」

ええと姫城サン？　だから、何故俺に宝刀向けるのですか？

「……その宝刀貢いだんじゃなかったっけ？」

そうだよ、肝試しの時に置いて来たじゃないか！

「これは＜紅之血＞ではありません……＜肉塊斬＞です」

「なんでそんな物騒ばっか名前なんだ！？」

「……ごまかさないでください、さぁ説明を要求します」

説明したらしたで危ない気がするのは俺の気のせいではないだろう、だってマイハウスに居るんだぜ？

言った刹那俺の首がボールのごとく地面に転がり落ちるに違いない（過度な被害妄想）

それを手ごろなバッグに入れて恋敵に見せてから殺しにかかるに違いない！（某アニメの影響）

ユイなら……なんとかしてくれるはずっ、同じ家に住んでいるんだからさ。

「ユイ」

アイコンタクト開始。

すると、ユイははっとした表情を作ったあと――

「え……ユウジさん、うん、わかった。　ユウジさんなら私構わないよ」

な、ななななな何を言っているんでせうユイさん？　！　しまった……俺はどうかしてたぜ、ユイがストレートに受け取る訳がない！

「でも……優しくしてね？」

「なんの状況だぁぁぁぁ」

「ゴゴゴゴゴゴ（効果音）」

うわぁい姫城さんの宝刀から黒い何かが染み出てるぅ、というか姫城さん本体は黒く何かに包まれてて人の形成してねぇ！

「ユウジ……様どういうことですか？」

くぁっ！　カノジョからは圧倒的な殺意を感じるゥ！　マズイぞ……

「こ、これはユイのイカしたアメリカンジョークさ！　真に受けたらだめだぜ、フフフー」

「……そうですよね！　冗談ですよね！　……危なかったです」

「ええと、つかぬことをお聞きしますが、危ないとは……？」

「そうですね……それを聞かなかったら――」

「ユイさんの腹綿を全部外に出して色とりどりのお菓子を詰めるところでした」

どこのうみ○こだ、それは！　しかし危なかった危機一髪だった、

これでホニさんのことを脚色して話せばミッションコンプリートだ！

「おーい、ユウジ、昨日はお姉さんとお楽しみだったそうじゃないかー」

「ホラ吹くんじゃねぇ！　このグロマニアァァァッ」

「一緒に風呂入ったんだろう？」

「違えよ！　洗っただけだっ」

昨日は姉貴の風呂掃除手伝ったのは確かだけどさ……言い方がおかしいだろ！　ってかなぜ知っている!?

と、辺りを見渡すとグっとポーズするユイの姿が……くそおおおおおおおっ！

「クケケケケk、ユユウジサマユユユルシマセンヨッ？」

※ユが多めなのは当社の仕様です

あー、姫城さん完全に人型を失ってるー　なんか首ガクンガクン言わせながら……近づいてきたぞ。

それに……あれ刃物増えてない？　さっき持ってた手と逆に同じ大きさの小刀。　えー、二刀流はないってー

それにあともう一刀口にくわえたら完全に某海賊アニメの緑髪の侍じゃんー　ほんとナイスすぎるジョークだよー

あはははははは――

「とりあえず説明させてください、お願いしますこの通りです」

俺は人生で初、正座をしてから床に頭を付けた。

ようするに人生で初めて土下座をしました。

第０５９話　５－５　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５　のったり更新中！

書き方に安定感ないですね……

第059話　5－5　来訪者と疲労な主人公。

そして説明が終われば、若干の不機嫌さを残しながらも。

「……そうですか、一応状況だけは理解しました」

と姫城は言いました……が。

「でもなんでユウジ様の家なんです！？」

「これは展開上……げふんげふん。　ホニさんは行く宛てがないからさ」

これで納得してくれるだろう……いくら姫城さんでもここまできち

「行く宛てなんて関係ありません！　マリーアントワネットは言いましたよね”家がないなら作ればいいじゃない”と」

「言ってないから！　家をパンやケーキと同列に考えないでください」

「大丈夫です、フラグ1級建築士という知り合いがいますので建築士に関してはＯＫです」

「……姫城さん、フラグの意味分かってます？」

「”フラグ”とは人の名前ではないんですか？」

まぁ一般人にはそうしか考えれらないわな……でも何故その単語を姫城さんは知っているのだろう。

「土地はどう……」

姫城が言いかけたその瞬間、キーンコーンカーンコーン、ホームルームの始まりを告げるチャイムが鳴り響きます。

「あ、チャイムが鳴った席に着かなきゃ（棒）」

「まだ話は終わってませんよ！　ユウジ様！」

うまく逃げ切れた……いやー危ない危ない。　初めてこのチャイムに感謝するよ、ありがとうチャイム。

いつもは忌々しい授業開始を告げる悪魔のホイッスル（？）だったけど、今回だけはありがとう。

コンピューター制御か人力か分からないけど、ありがとう！　本当にありがとう！

……どれだけ感謝してるんですか、ホームルームが終わったら休みを挟むので結局聞きに来そうですけどね。

すこし戻って、まだチャイムが鳴る前の校舎の一階廊下にて――

「ここが藍浜高校の廊下ですわね……えと、すみません」

「は、はいぃ？」

驚いてらっしゃいますわね……私が原因なのかしら？　しかし今

は急ぎませんと……

「職員室はどこにあるのかしら？」

「……えと、こ、この廊下をまっすぐ行った先を右です」

「そうでしたか……ご親切にどうもありがとうございます」

「い、いえ！」

「それでは」

まっすぐ行った先を右……ありましたわ！

「し、失礼致します」

彼女は職員室の戸を引きました。

今度は先程の時間軸に戻って、キーンコーンカーンコーンと。

なんの茶目っ気もない束の間の休み時間終了を宣告するチャイムが鳴り響く、その音が止む頃には担任が閉まっていた教室の前位置の引き戸が引かれた。

床のタイルと担任の靴が触れる「カツカツ」という音と共に教卓前に向い音が止まり担任も教卓前に着く。

「日直号令」という非常に簡潔な指示を号令を命じられている学級委員長に出すと――

「きりつ、きをつけ、れい！」

若干間のびした頼りない女子学級委員長の号令に合わせて、クラスメイト全員がそれに習い行う、そんな基本日常的動作を終えると。

「で、親に渡して欲しいプリントがある――」

担任はまるで台本に書かれた台詞のごとくプリント配り、伝達事項を言うと。

「――までに提出するように。　じゃあ委員長号令」

「きりつ、きをつけ、れいっ」

もう録音で良いんじゃないかという程に全くもって同じ号令を委員長が終えると担任はすぐに教室を出ていく。

それと入れ替わるように、教室にはたくさんの会話が入り乱れた喧噪が帰ってくるのだった。

第０６０話　５－６　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

@　クソゲエリミックス！　@　未改修版。
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝１９９５
ほぼ無計画で連載中！

第０６０話　５－６　来訪者と疲労な主人公。

「し、失礼致します」

金髪美女こと彼女にはギャップのある、非常に悠長な日本語を扱いながら職員室の扉をノックし戸を引きます。

「……」

正直綺麗とは言い難い職員室の風景が目に飛び込んでくる、決して全てが汚いという訳ではなく総合的に見渡しての感想です。
主な主犯は整理が苦手そうな男の教師だと推測される、その机の主である男教師達の卓上はというと。
……回収したプリントやノートがザ・タワーと思ってしまうほどに積み重なっていて、傍目では常に倒壊に危機に瀕しているように感じます。

一方の女性教師の大半は綺麗に片づけられているが、悲しきかな。男子教師の卓上が放つザ・タワーなインパクトはそれを完全に打ち消し、完全に「汚らしい」空気感に作り変えてしまっていました。
基本的にここの生徒にとってなら日常的な光景でしょうが、編入した・するばかりの金髪の彼女には驚きだったようで――

しばらく呆気にとられていた（注、といっても約１０数秒に過ぎない）その時。

「待ってましたよ」

２０代前半と思われる若い女性教師がそう言いながらこっちに近づいてきた、金髪の彼女は「待っていた」というのを自分のことと解釈し。

「編入させて貰います――――です」

そう応対し。

「――――さんですね、私があなたのクラスを担当する田波です」

女性教師からはそんな返答が来ます。

「はい！　えと、これからよろしくお願いします！」

頭を下げた挨拶を彼女は済まして。

「じゃあ早速だけど、教室に行きましょうか？」

田波教師は片手に抱えた出席名簿もろもろを持ってそう彼女に言いました。

「はい」

田波教師は金髪の彼女を連れて、自分の担当クラスである１学年の４学級の組を目指して歩きだしました。

ええと、堅苦しい口調ですみませんでした……セリフでこう喋れって書いてあったので……

それでユウジ達の教室に戻って、１時限終了後の１０分間休み時間

にて、です。

「さきほどの続きです」

言いながら姫城とユイ、ユキ、マサヒロがユウジの席に集まってきた。

ちなみにホームルーム明けの休み時間には聞けなかったようで、ホームルームが思いのほか長引いちゃったんですよね。

「えー」

なんとも面倒臭そうに不満を漏らすユウジを無視して姫城は続けます。

「建築士に関してはフラグさんで大丈夫として」

「いや、だからそれ人の名前じゃないから」

そこにはツッコまざるを得なかったようです。

「土地に関しては……そうですね、ホニさんの居たあの岩を取り払って土地にしましょう」

「……その岩を取り払ったら思いきりバチが当たると思うんだが」

神石ですからね一応。

「なんでそこまでホニさんが住んじゃ駄目なんだ？」

「それは……一つ屋根の下で……！　わかりました、要するに私がユウジ様の家に住めば良いのですね」

「えええええっ！　何を要したらそんな結論になるんだ！？」

「私は何か事件が起きないか監視しなければりません！」

「行く先々で事件の起こる死神としか思えない某小学生の皮を被った名探偵じゃあるまいし、そんなしょっちゅう起きねぇよ！」

「でもですね、ユウジ様とホニさんと一つ屋根で生活した場合――」

姫城さんが言うにはこうらしい。

・ユウジ様がホニさんに浮気するかもしれない可能性がある。

……というか俺ＦＲＥＥですけどね、誰とも付き合ってないですけどね。

・ユウジ様の貞操が危ない。

俺が狙われる設定！？

・ユウジ様が私の恨みを買って殺される

姫城さんにかよ！

・ユウジ様が私に襲われる↑希望

さりげなく「↑」で「希望」とかすんな、関係ねぇし！

「あたしも考えてきたぜ☆」

なぜかユイも割り込んできた、正直一番来て欲しくなかったんだけど……なんか五月蝿いのでその考えを言ってもらった。

「ユウジとホニ様が一つ屋根の下で生活した場合はな――」

ユイが言うには。

・ユウジがホニさんを押し倒しそれを見たあたしで三角関係勃発。

修羅場じゃねえか！

・あたしの出番が少なくなる

果てしなくどうでもいい。

・そのままゴールイン……崖の下に。

最後の言葉なければちょっとばかしは賛成出来たよ。

・ユウジが死ぬ

経緯の説明を頼む。

・ユウジが生き返る

何故死んで生き返るのかの状況説明を要求する。

・ギ○スを使えるようになる

そんな能力持ったらろくな死に方しないだろ！

「正直全部ナイ」

「関係無しに監視のため住みます」

「今までの話題意味ねぇ！」

なんだこの時間の無駄遣い。

「それは何故ですか……まさか私が嫌いなんですか」

「いや……そんなことは」

「ユウジ様に嫌われた私は……自害するしかありません」

「ちょちょちょーっと待って、でなんでポケットから長さのある宝刀が出て来るのさ？　四次元なのかそれは！」

ってツッコンでる場合じゃねぇ！

「私の生首はユウジ様のご自宅の冷蔵庫で一生保存してくださいね？」

「冷蔵庫じゃすぐに腐る……ってそうじゃねぇ！」

何か言わないと本気で自害しそうだ、ああ！　もう首に宝刀突き付けてる！？

何か……何か言わないと、こう姫城さんにとってインパクトのある簡潔な……そうだ！

「姫城さん……俺、結構好きだったんだけどな」

「え」

そんな衝撃発言に姫城がまず反応して――

「え？」

続いてユキも聞き逃しておらず。

「……はい？」

ユイでさえも反応。

「ユウジは今なんて言ったんだユイ？」

ついでマサヒロも……よく聞こえてなかったようですが。

「い、今なんとおっしゃったのですか！？」

「俺、姫城さん好みだったんだけど……ここまで悲観的だとちょっとなぁ」

ユウジはいつにも悲観的な姫城が好かないようです。

「え……」

「なんというか、いつも悪い方に悪い方に考えてるんだよな……」

まぁ……そうですね。

「それは……」

「そんなに俺のこと信じられないか？」

「そ、そんなことは！」

「ネガティブにネガティブに考えてたら、息苦しいだけだからなぁ」

確かに。

「……」

「ボジティブに考えれば表情も自然と明るくなるだろうし……その方が俺は好きだな」

そのユウジの言葉に姫城は考えます……そして。

「……わかりました！　い、意識してみます！　ボジティブに、ボジティブに……」

そう言うと彼女は顔を真赤にして俯いてしまった……いやぁ、こういうところは素直に可愛いからなぁ。

「……」

あのー、言わせて貰うとユウジ？　今のハズカシイ台詞駄々漏れだったんですけど……ほらユイユキが唖然として、マサヒロがポカーンとした顔してますよ。

「（ポカーン）」

ええと、もしかしてルート決まりだったりします？

第０６１話　５－７　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

展開急すぎだろ！　伏線微塵もねぇじゃねぇか！
……という読者の方々、すみません、色々とこの頃から迷走してます。
でも、良ければ「クソゲーだし、まぁいいか」という感じに流してくだされば本望です……

あー……この先どうしようかな。

第061話　5－7　来訪者と疲労な主人公。

朝のホームルームでの自己紹介を終えると、彼女はクラスの女子数名に囲まれ色々質問をされていました。
それで休み時間終了のチャイムと共にやっとクラスメイトに解放されたようですね……

「はぁ……」

編入初めとは言え疲れましたわ……この時期に編入されるのも珍しいことですし仕方ないのでしょうけど。
しかし学校というのは噂の通りですが、それにしても人が多いですわね……この学校だけなのでしょうか？

……うーん、この町唯一の高校ですから、それなりの人数は居るのでしょうけど。

「！」

そうでしたわ……学校からの告知通りまだ教科書はないのですわ……なにせこの編入も急きょ行われたが為に仕方ありませんわよね。
ええと、1時限目は、世界史ですわね、授業は受けたいですが教科書がなければ……仕方ないですわ、一緒に見せてくれるようお願いするしかありませんわね――

「あの……」

「はい」

隣の席に座るのはいかにも真面目そうな黒縁で楕円の眼鏡をかけた女生徒です。

「教科書がまだ届いてなくて……見せて頂けますか？」

「ええもちろん、いいですよ」

彼女は快く承諾してくれたようですね。

「ありがとうございます」

ガタガタギギィ、彼女は自分の机を金髪の彼女の机へに寄せてきます。

「この方が二人で読みやすいでしょう？」

「あ、はい……そうですね、ありがとうございます」

綺麗な人……優しいですし、このクラスはわたくしにとって世に言う当たりクジだったようですわね……

始まりは順調のようですねー、でも……はい、あの展開がありますから。

ええ、あの展開が……って分かりませんよね、別のＷＥＢ掲載場所にはちょっとした予告あったのですが、こちらではごっそりカットされたようですので。

に、しても……編入当日というのに可哀想ですね――

で、またユウジクラスに戻ります……なんか忙しいですね、移り変わりが激しくて混乱しそうです。

その後はというと――

すぐに2時限目の授業開始のチャイムが鳴り、姫城さんは「では、失礼します」とまだ顔を紅潮させながらスタスタと席に戻り。

唖然とするユイユキマサヒロを「ほらもう現社の教師来るぞー」と警告して、自分の席へと散って行った。

授業中にあとの彼女らを見るに――

マサヒロは「ポカーン」を具現化した表情のまま、ユイユキは何かに不服を抱いている表情をしながら授業を受け始めていた。

それぞれ自分の席に戻るが、ユキに関しては授業が始まっているのにも関わらずこちらに一定間隔で振り返ってきていた。

ユイは一回だけ振り返ると、板書し始めた……正確には板書はせずにノートに落書きしているのだろうがな……

姫城さんは最初の頃までまだ顔が赤かったが、次第に授業に集中し始めていた……元は凄い真面目な人らしいし（設定上）それは当たり前なんだろな。

で、俺はというと、ときたまユキの視線を気にしながらも板書をし始める……本当言うと俺も根は真面目なのだ（※自ガ自サン病。普通は自分では言わない、ナルシストに見られる症例）

ちなみにクラスの後席からは男の図太いいびきが聞こえる、クラスの1割は今はここぞとばかりに体を休め、寝息を立てている（主に男子）

俺含む４割の男子と、女子全般（ユイ除く）はうるさいなぁと思いつつもいびきの授業妨害を今は無視しての授業を受け続けている、慣れなのか学習して諦めたのか……？

授業をする教師陣、その中の一人である現社の教師は初期の頃はかなりのスピードでチョークを飛ばし、寝ている生徒を叩き起こしていたが……今はため息をついて諦めている。

しかしその行いについてはキチンと評価されているので。

その寝息を立てる生徒の一部が後に親が卒倒確実「オール０に限りなく近い数字」の成績を取ることになるのだが。

それは俺の知ったことではなく、話の伏線でもなんでもなく、ただの情景描写に過ぎないのは言うまでもないので流してほしい。

そして書かれていく現代社会の「株式会社の仕組み」とやらの文やら図やらをノート１枚分書き写したところで――

キーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴り、現社教師が委員長に号令を要求しそれを委員長が実行し終わるとすたすたと足早に教室を出、廊下を歩いて行った。

それで問題は休み時間、授業終わりで若干の手に疲労を覚えつつも自分の机に構えていれば、不機嫌そうな出で立ちではユキがやってきたのだった――

「ユ、ユウジっ！　さっきの姫城さんに言った言葉の意味はなんなの！？」

姫城さんに言ったこと……？

「え？　水溶き片栗粉のことか？」

「それはとっくの昔に終わったよ！」

「それ程昔ではないだろ」

「どうでもいいよ！　さっきの、すすすす好きとかいう発言のことだよ！」

「ああ……そんなこともあったな」

「なにそのリアクション！　もう何年も経った出来事みたいに語らないでっ！」

「姫城さん好き～、云々か？」

「それだよ！」

「ああ……若気の至りという奴だ、あの時の俺をどうか許してくれ」

こう調子に乗って発言していたが、姫城さんに聞かれていなくて本当に良かったと思う。

「だからまだ1時間も経ってないから！　……ユウジ逃げても無駄だからね？」

あるぇー？　なんかユキもヤンデレ化の兆候があるぞぉ？

右手にコンパス持ってたら確実にやられる（殺られると書く方）

展開。

スタッフー、キャラかぶるから止めた方がいいぞ？

……冗談で思いつつも、なんかユキさんの顔がマジなので答えることにした。

「……あいつはなんか悪い方へ悪い方へ考えちまうように見えるからな」

俺の事を信じてくれない、出会った時もそうだった。

さっきのホニさん関係のことでもそうだ……浮気される、ってのは違うか。

なんというか発想が全体的にネガティブな感じがするのだ。

「それが癖になって、本当に染み付いちまったら……このあとも自分を苦しめ続けると俺は思う」

なによりも精神的疲労が半端ではないだろう。

「常に加害妄想・被害妄想に駆られてたら居心地悪いだろ？」

「それは確かに息苦しいけど……ユ、ユウジが構うことじゃ！」

ユキの言うことは一見冷酷に見えて、実際は正論だ。

他人の事に必要過多に首突っ込むな……ってことだろう。

「じゃあ誰かが”それを”を直してくれる保証はあるのか？」

保証なんてないから、俺は気にしているんだ。

「そ、それは……」

「一人の友人として見過ごしたくないんだよな」

友人として見過ごしたくない――は、聞こえはいいが見方は変えれば、ただの偽善だ。

「感謝してもらいたい気持ちが１００％ないとは言い切れない、まぁ俺ってもはそういう奴だ」

わかってるさ、そのぐらい。

「でもな、純粋にその癖を直してあげたいって気持ちもあるんだぜ？」

そして、あまりにも死に未練が無さ過ぎる、自分にも他人にも――直せたらな、とそれに俺は思う。

……いつもギャグのようだと考える半面、疑問に思っていた……何故、悪いことから考えてしまうのかと。

「そして、俺を信じてほしい」

「……」

「姫城さんにとっちゃかなりのお節介だとは自覚してる、でも俺はなんとか出来るはずだと思っている訳だ」

どこにも根拠のない自信だ、でも――

「姫城の好意を利用する形になっちまうけど、その癖を直せたら本

当に純粋な女の子なんだと思う、どこかでキッカケを作れれば……きっとな」

そのチャンスはいつかめぐって来るはず――

「……姫城さんのこと凄い気にかけてるんだね」

え、と言いそうになるが思いとどまる。

”姫城だけ”とは言ってないぞ」

一人だけではない。

「困っているならお前、ユキもユイもマサヒロも助けてやる……じゃ言い方が変だな、”手伝う”か？　俺に出来るのはその困った原因の解明・解決の手助けをするぐらいだ」

「……」

「しかし手伝うやら助けるやら調子こいてほざいている俺も、ユキには助けられてるがな」

「え」

「ユキと話してると落ち着くというか癒されるんだよな、日常に揉まれ続けた俺の心を癒してくれる的な」

……ゲームが始まり、忙しくなっていく日常、そんな中で変わら

す接していてくれるユキにだ。

「でも私！　大した話なんて……」

「それがユキの癒されポイントだっ！　何気ない普通の会話が俺にとっては一番なんだよな、あのテレビがどう～とか、あの先生はどう～思うとかさ」

「本当に……それだけだよ？」

「ああそれでいいんだ……普通が恋しくなるのが今の俺の日常なんだぁっ！」

最近は非日常に揉まれ続けて普通の日常が果てしなく恋しく感じる時が度々あるからな、あれ目からミネラル水が……

「わっ！　え、うん」

あー、いきなし大きい声出したからビックリさせてしまったようだ。

「チャラけた性格や特殊な性格は俺の得意分野ではない、茶目っ気があるも基本は真面目な人が俺の好みなのだ」

「茶目っ気？　真面目？」

「それに姫城さんが一部該当していただけで、断じてあれは告白などではないと断言しておく」

「そ、そうなの？」

「ああ、実際一番俺の好みなのはいつも家の近くｏｒ家まで迎えに来てくれる――」

キーンコーンカーンコーン、そんな時に訪れる授業開始のチャイム。

「おっと3時限目が始まるな、ユキ早く席に着いた方がいいぞー」

「え？　今なんて言おうとしたの？」

「いやなんでもない。　次回に続く的な終わり方をしているも、新聞のテレビ欄を見たら最終回だった的なノリだ！」

「い、意味がわからないよっ！」

「いいからいいから、もう来るぞ」

そんでもってまた授業が始まる、俺の言おうとした一番の好みは……まぁ分かるだろう？

さっきのは一種の照れ隠しだな、ということで当の本人には言わないでおこう

第０６２話　５－８　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

恥ずかしながら帰って参りました！

第062話　5－8　来訪者と疲労な主人公。

彼女と眼鏡をかけた女生徒それぞれの机を二つ合わせて、授業の始まりを待っていたその頃です――

彼女の席の前は男子で、突然やってきた転校生に興味があるのか振り返ってきます。

しかし男子の目線は、彼女ではなく彼女の机に広がる一冊の教科書に有りました。

「教科書、まだ無かったのか？」

しばらく彼女の机に視線を注いでいた前の席の男子がそう聞いてきました。

男子はというと……失礼ですが、何処にでもいそうな普通な男子です。

「ええ……はい」

突然だったせいか、彼女は若干警戒して答えているように見えますね。

「……俺に言ってくれてもよかったのに」

「え？」

「いや、貸してやってもよかったんだぜ？　どうせ俺の隣は授業中グッスリ寝てるしな」

男子の隣はまたもや男子でどちらかというとスポーツ系な彼は、男子曰く授業中は睡眠タイムだそうです。
男子の隣……面倒ですね。　彼女の前が男子A、隣の方が男子Bでいいです。　男子Bは「失礼な、これは立派な睡眠学習だ！」
男子Aは「毎日6時限全て使って睡眠学習か、学習してる割にいびきがデカイのは何故だろうな？　他の奴ら迷惑がってるぞ？」
それには「くくぅ、言ってくれるじゃねぇかブリーズ○イト買ってくる」「いや、起きる努力をしろよ」

「え、えと？」

「ああ、悪い悪い隣の奴は少し……な？」

そんな目で哀れむな！　蔑むな！　という男子Bの声を尻目に男子Aは続けます。

「だから、言ってくれりゃ貸せたからな。　ってこった」

「え！　はい！　ありがとうございます！　でも隣の方が貸してくれるので――」

彼女の言う隣の席の眼鏡をかけた女子生徒を見て

「おっけぃ、わかってる、まぁなんだ困った時は気軽に言ってくれな？」

「はい！　その時はよろしくお願いします！」

男子Aは笑顔で返すと、前に向き直り男子Bの相手をし始めました。

……彼女がお礼を言うのその脇で、眼鏡をかけた女子生徒がジトっとした目をして若干不機嫌になっている事を彼女は知りませんでした。

転入初日で長かったようにも思えたかもしれませんが、４時限目を終えて昼休みが訪れました。

ちなみに、授業での彼女の活躍と言えば――そりゃあもう、世界史だけは黙々と持参したノートに書き込んでいましたが、他の授業では積極的に発言していました。

何故か、国語の時間が一際楽しげに見えました……私の知らない事までスラスラ言えていて生徒のみならず私一人も驚いていたのは内緒です。

「昼食はどうするのですか？」

眼鏡の彼女は彼女に聞きました。

そういえば彼女は弁当など持ってきていたのでしょうか？

「あっ、まだ決めてませんでした……」

うーん……どう致しましょう、お弁当は持ってきていませんし。

学校にはなにからなにまで揃う「購買」というのが有ると聞いているのですが――

考え込む彼女、しかしその答えを待ってたかのように――

「では、学食を一緒にしませんか？」

「学食？　学食というのは学生食堂のことでよろしいのですよね？」

「ええ、よかったら」

確かにそんなことがガイドブックには書いて有りましたわ「はやい・やすい・ふつう」の三拍子そろった名店と聞きましたが。

”ふつう”で評価がガタ落ちしているような気がするのですが、可も無く不可も無くということでしょうか……それでは駄目じゃないですか？

「では……お言葉に甘えて」

「それは良かったです、では行きましょうか」

「はい！」

彼女は学食の正式名称まで知っていることから分かると思いますが、学食に興味が有り、機会が作れれば行ってみたいところだったらしいです
ところで彼女は金髪や風貌から外国人のようですが、ここまで日本語を悠長かつ知っているなんて……何か裏があるのでしょうね？

廊下での出来事です。

学食というものがどんなものか楽しみですわ。
学校資料の中に有りましたが、どうやら食を提供する場みたいですわね。

同学校に通う生徒の方々と共に食することができるとは……噂でも美味しいと評判ですし、期待ですわ！

ええと”ふつう”は何処に消えうせたのでしょうか？

「学食は初めてですか？」

眼鏡の彼女は聞いた。

「ええ、学食と言うものは初めてです」

「この学食は早くて安くてと評判ですから――――さんのお口に合えばいいですね」

味の事は申さないんですね、眼鏡をかけた女子生徒さん。

「たとえばどんな料理が出されるのですか？」

「まずは一番リーズナブルな”うどん”ですね――」

本当にこの人は親切ですわ……あの前の席の方も優しいですし、この学校というものはとても居心地が良いですわ。

でもこの眼鏡の親切な方の名前を聞きそびれてしまいましたわ……わたくしの名前は覚えてらっしゃるのに、どのタイミングで切り出せばよいのでしょうか。

そう眼鏡の彼女の話を聞きながら、名前を聞き出すタイミングを狙っている金髪の彼女。

二つの事に思考が行ってしまい、眼鏡の彼女が知らせるまであることを察することはできなかったです。

「それからですね……！　――――さん！　前！」

「へ？　前です――」「

そう聞き返す間もなく。

「きゃあああ！」

彼女は圧倒的な力に押され、地面に倒れました……って何が起こったんですか！？

……いや、思い切り見えてて分かってますけど……ね？　演技でもこんなこと言わないとですね？

同じく廊下です、彼女と眼鏡のかけた女子生徒が歩く逆を走リ抜ける二人が居ました――

「ユイ返せっ！」

ええと、お分かりと思いますがユウジです、そして――展開がもう読めたとか嘘でも言わないで下さい！

自分も台本を流し見している時に気付きましたよ……なんて分かりやすいシナリオ書いちゃうんですか。

「ふふふ、このカレーパンは私のものだっ！」

追いかけられているのはユイです、右手にはカレーパンの袋端が握れらています。

「自販機で売っててるだろ！」

なんという正論ですか。

「このユウジの触れたカレーパン……そこに僅かに香るユウジのニオイ……それがミソなのだよ」

「へんたいだー！　へんたいがいるぞー！」

ああ、わざわざパクらず自分で買えよ！

ということでカレーパンを巡っての争いが行われている。　それも廊下で、昼食時の廊下は混雑していて非常に走りにくい。

そして案の上……だ。

ドスッ、突然足が止まり何かに俺はぶつかっていた。　走っていた体をすぐに止められるはずもなく何かにぶつかり前のめりに倒れぶつかった何かをも倒した。

床に手を付こうと手を伸ばすが……触れたのは、床の感触ではない――

「（柔わらかい！？）」

どんなに鈍感な読者さんでも気付きましたよね、はい最悪な展開です――

俺のの右手左手が捉えるのは手にぎりぎり収まるぐらいの饅頭二つだ、学食でそんな気前のいい饅頭あったかなと思考を巡らせていた――

「わ……わ」

近くから聞こえる声、それも高く透き通った女生徒の声だ。　いや……まさか、女生徒を倒してしまったのか、じゃあこの饅頭は？
そう思い、衝突時に瞑った目を開いた丁度その時だった――

「い……いやあああああああ」

高い声がキンキン耳に響いた――俺の鼓膜が破れんばかりに彼女は涙目で叫んでいたのだ。
明らかに目立つ金髪……のくせして見慣れない顔の美女が、俺の目の前には居た。

そう触れていた饅頭二つとは――それを彼女の胸と認識するのには２０秒の時を要した。

ええと、ユウジ……やってしまいましたね。

第０６３話　５－９　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

久しぶりに更新したと思ったらこんな内容だよ！

２－９．５を追加しました。

第０６３話　５－９　来訪者と疲労な主人公。

「あっ、え！？」

「きゃあああああああっ」

目の前では女子が叫んでいる、耳の奥にも響く大きな声で。

「ああぁっ！　ごめんなさいっ」

「いいいやあああああっ！」

俺が謝った途端、その女子はすごい勢いで立ち上がり、触られた部分を両腕で隠すようにして廊下を突っ走っていった。

更に後ろから眼鏡の女子が追って行く――５０ｍ走を６秒で走る抜けるぐらいの速さだった、たぶん。

……後続の眼鏡の女子はもっと速かったかもしれない。

しっかり謝ることも出来ず、置いてかれてしまった俺。

そして孤立化する俺。

廊下をたまたま歩いていた女子からは侮蔑の籠ったギトっとした痛い視線を頂き、男子からは「またお前か」という嫉妬と羨望とかが渦巻いた怒りの視線を頂きました。

はい、ごちそうさまです。

でも正直イラナイです、イタイです。　女子のいくつかはたまた

ま持っていた鋭利な物を取り出し、狙ってます。
何をかというと、主に俺の首です、きっと。
男子のいくつかは自身の持つ握力やら筋力や超能力をスタンバイして、狙っています
何をかというと、主に俺の骨髄です、きっと。

ということで、俺史上空前かはわからないけどもピンチです。

すぐさま立ち上がりました。　そしてその場から逃げ出しました。
一部が追ってきます。　さらにピンチです。
シャーペンが飛んできました。　飛び道具は反則です。　なんとか撒けました。　俺の脚力に感謝です。

教室にて

「腹減った……」

そういえば元凶のユイは置いてきたな。　あいつのせいで昼飯は消滅しあんなことに……もうぅ来たら一発殴ってやらないとねッ☆
それにしても――あの時は２０秒間思考が止まっていたな。　いや、あれはさ……ねぇ？

いや饅頭と思うでしょ、普通？

誰かが落とした饅頭を掴んじゃったなぁと考える訳よ。　そしたらさ、目の前には女子そして俺の手が触れていたのは……うん、でもさぁ。
まさか押し倒す展開になるとは思わないだろよ……廊下は確かに

混んでたし走ってたよ？
それでよりにもよって女子の胸に手が付いてしまうとわ。
そういえばちょっと揉んだな、ふにっとしてた。
柔らかかった。
でも弾力もあった。
感動した。
童貞野郎の全俺が泣いた。
正直言って、今考えると。

驚きだよ！　サプライズだよ！　物凄い役得だよ！？

あの手でギリギリ収まる大きさ……ぱねぇかった！　うむぅ……
この現実に存在するとはね！
男は女性の胸に始まり胸に終わる。　あの魅惑の膨らみには男の夢や欲望や羨望が詰まってるね！

ごめんね……おかしなテンションで。　でも、俺にとっちゃその時歴史が動いたんだよっ！　ファーストタッチだったんだよ！

いつまで語る気んだよ、言われそうなので、ここで止め。　ごめんね……おかしなテンションで。　色々最近たまってるからさぁ、ストレスとかね。
しかし……なんだかんだで謝らないといけないな。　ユイが悪玉菌とは言え、実行犯は結局俺だし。

……今度会ったら謝らないとな。　いや探してでも謝るべきだよな。
うん……でも手がかりが”金髪の美少女”しかねぇんだよなぁ……
…まぁ、見つけ次第即刻謝ることにしよう。

第０６４話　５－１０　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

地文が少ない？　まぁ……今回は寒いコントみたいなものですので、はい。

第０６４話　５－１０　来訪者と疲労な主人公。

放課後の生徒会

そういえば生徒会ってどうも久しぶりの舞台ですねー。
そしてその「長」的な立ち位置の会長とその保護者のような雰囲気を醸し出す書記は机につけられた椅子に座っていました。

「や、やっと出れた……」

「私たち本当に久しぶりに出れたわね、アスちゃん」

「本当になんなのよー……」

「過去ログ調べて見たけれど一か月以上経ってるわね」

「時間軸だとまだ1週間経ってないのが現状だけどね！　とっくに春なんて終わったのに！」

「でも都合の悪い時だけ”―10年後―”とか使うのよね、本当に最低な制作――」

「アニメタに未払いのまま倒産して夜逃げする社長の居る業界なだけはあるわね」

「……それ違う業界だし制作というより、ここのスタッフだと思う……それに妙に生々しい表現出すね」

「精霊会議とかあのね商法とか生み出した人じゃないかしら、この脚本」

「……コアな層を狙い撃ちだね、チサ」

「まぁ見ている人の１０割が分からなくてポカンとしてしているかもしれないわね」

「もう分からせる気ないよね、１００％。　で……それにしてもなんで私たちを出さないのかしら」

「サブキャラの宿命よ、１巻ごとに新キャラを出して半分以上を使い捨てにする絵描き泣かせの某作品よりは待遇はマシよ」

「……今度はどっかの某巨大掲示板見てないと分からないネタだすんだね」

「だれも禁書なんて言ってないじゃない」

「聞いてさえいないよ！　というか伏字無しはマズいよね！？」

「大丈夫、商業誌にさえ載せなければ好き放題に出来るから！」

「……いいのかなこれ」

「いいのよアスちゃん、これで私たちの会話がコピーできて制作はラク出来るのだから一石二鳥よね」

「……この会話の殆どがメタフィクションでかなり酷いものがあると思うのは私だけじゃないよね」

「まぁ”自作自演乙”には違いないわよね」

「”乙”を入れるだけで一部の人からフルボッコされちゃうよ！」

「言葉に詰まったら草生やしとけばいいのよ！」

「だめーっ！　それだけはだめーっ！」

「……はぁ、それにしてもなんで私たちこんなにまで酷い扱いなのかしらね、いくら某作品より待遇はいいと言っても」

「うん、それは本当に抗議するべきことだと思うよ」

「……でも考えて見れば所詮はサブキャラだもの、”主な”登場人物の項に入れられないイラナイキャラなんだわ」

「いやチサ要らなくは――」

「まるで私たち制作が軽い気分で出した気まぐれキャラみたいじゃない……」きまぐれで生み出された私たちは、他のネタが出来れば不要になって……」

「あのー」

「すぐに忘れさられて、結局はサブのサブみたいな静止画でしか描かれない存在になっていくのね……」

「ああ！　チサがどんどんネガティブに！」

「……それもこれもスタッフがいけないのよ、キャラの扱いは偏るし時事ネタに頼るしネタは引っ張って伸ばすし」

「そういえば、スタッフはブログを始めたんでしたっけ……？」

「そうだわ……炎上させましょう」

「なんかチサが変にアグレッシブになった！」

「そうよ、こんなに私の可愛いロリキャラアスちゃんとヤンデレ系ブラックお姉さんの私だもの！」

「私はロリキャラじゃなーい！　それに私のってさりげない所有物宣言！？」

「え？」

「そのナチュラルな驚きはなに！」

「……私たちのパクリ元がアニメ化されて私たち意外とタイムリーなキャラのにね」

「パクリ元って言っちゃった！　というかさっき言った私のツッコ

ミはスルー！？」

「当たり前じゃない、わたしはわたしのものアスちゃんはわたしのもの」

「……出た、ジャイアニズム！　でも、なんか違う気がする……」

「そういうことで今後も出番が少なそうな私たちが出演するためには、みんなの協力が必要です！　この出演するための費用支援として黒十字募金に募金をお願いします！」

「もうそれは募金じゃない気がするよ……」

「黒十字アグ●ス募金にご協力ください」

「チサ、それはアウトだよ！」

ええと、傍観視してたんですが……どう反応すればよいのでしょうか？　とりあえず笑っておきます、ははは。
閑話休題？　ですかね……ということで再開です。

「それにしても、なんでこのタイミングで私たちを出したんでしょうね？」

「確かにね、突拍子もないタイミングだよねー」

「もしこれが制作の同情から来る行為だったとしたら、私はスタッフを侮蔑と嘲笑をこめて屍野郎と呼んでやるわ」

「チサ、またかなりわかりにくいネタ出すね……というか制作というのはＮＧワードにした方がいいと思うんだけど、すごいメタだからさ」

「いいじゃない別に”このネタ誰得だよ”って言われても”俺得”と答えとけばいいもの」

「……内輪ネタこそ見てて寒いことはないって、どっかで聞いたよ」

「夏なら丁度良かったのにね」

「まだ進行遅くて春だからねっ！」

閑話休題……って早い！？　４コマ漫画ならぬ４コマ小説って事ですか！　……ああ、丁度台詞が各４つ。

「でも今出した理由が分からないわ、本来なら尺と更新稼ぎのラジオでも放送すれば私たちを出せるのに」

「……もうメタ発言抜いたら私たちのトーク何も残らないんじゃないかしら」

「わかりにくいパロディも残るわね」

「知らないパロディこそすごく反応しにくいけどね、いきなり屍○のネタを出してくるなんて予測が付かないよ！」

「あら、○姫なら有名じゃない、某演技で」

「ぶっちゃけると違う漢字の”棒”でも合ってるよね」

「……で、このタイミングで私たちを出したのには意味があるんじゃないかな」

「そうねぇ……確か1学年に金髪の娘が編入されたみたいだけど、何か関係あるのかしら。　その娘がこの生徒会に関連してくるということの前触れかもしれないわね」

「まっさかぁ～、スタッフがそこまで考えてる訳ないよ～」

「しかし過去ログを見ても圧倒的なフラグの即回収率……ありえないとは言い切れないところがあるわね」

「う、考えて見ればたしかに……変なところはしっかりしてるからね、でも各それぞれのフラグはゴミみたいなものだけどね」

「このスタッフは単純思考のヴァカだから、そんなありきたりで寄せ集めな展開になると容易に予測できるわ」

「まぁ今までの展開もベタなところはとことんベタだからね……恥ずかしいぐらいに」

「たまに出てくるクサハズカシイ台詞を平気で連ねられれるのが逆に不思議よね」

「……まぁそれは仕方ないんじゃないかな」

「そうね、このスタッフだし、これぐらい低レベルな構成が妥当ね」

会話終了……ええと、スタッフが「Mでは有りません」と言っていました……自己擁護してる時点で怪しいですし、どれだけ自虐ネタ使ってるんですかね？

1分ぐらいの間二人のみの生徒会室は静まり、外から聞こえる運動部の怒声や遠いところから響く合奏部の演奏が聞こえていました―

―すると会長が一言発しました。

「1年呼ぶ？」

「そうね、あとミナも呼びましょう」

「意識してなかったとはいえ、最近はミナが仕事してくれたからだいぶ助かったわよね」

「うん”ユウくんにあまり負担かけたくないから私ガンバル！”って言って生徒会の雑務を殆どこなしてくれたんだよね」

「流石の私もちょっと手伝わなきゃって思っちゃったもの」

「でも結局手伝わないのよね」

「だ、だってチサやミナが止めるんだもん」

「アスちゃん」

「な、なに……？」

「アスちゃんは……マスコットでいいの、いいえそうじゃないとダメなの！」

「なんでそんなに必死なの！？　っていうかマスコットじゃあなぁい！」

「ああアスちゃんかわいいわアスちゃん」

「え、ほわぁ～……！　って撫でてごまかさないでっ！」

「酷いわ、私の生き甲斐はアスちゃんを１日３０回ぐらい愛撫することなのに」

「そ、そんなに撫でるの！？」

「ええ、しかも連続３０分間高速で」

「なんか摩擦熱で私の髪が危ない気がするんだけど……」

「安心して、する前にフッ素加工しておくから」

「効果ないよね、それ！　ふわ！？　やめ、やめて！　ふわぁあああ」

すると、先程「1年呼ぶ?」という会話通りに二人は生徒会室を出て、放送委員から放送室を貸してもらい放送スイッチを入れました。

『――ピーンポーンパーンポーン（最後になるにつれ音が上がっていく）』

『1年3組下之ユウジ、福島、2年5組下之ミナ、ホームルーム終了後生徒会室に集ご……ふわっ！　ちょっと！　チサ今放送中……撫でないでぇ！ふわぁ、スイッチぐらい切らせてぇ！　あ』

『――ピーンポーンパーンポーン（最後になるにつれ音が下がっていく）』

ええと、ナレーションサボってました。　そして一方のユウジクラスでは――

「え、放送室で今、何があったんだ!?　あ……そういえば俺、生徒会役員だったな……」

第０６５話　５－１１　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

ああ……やっぱりカットするしかないかなぁ。

ここ最近のユウジは変になってます、なんででしょうね？　書いた本人も覚えていません。

第０６５話　５－１１　来訪者と疲労な主人公。

生徒会か……そういえば俺は生徒会役員の一人だったな。なんだか忙しくて忘れかかっていた事柄だったりする――

姉貴が囮となり、俺を生徒会役員かつ同級生の福島戸夏が拉致し生徒会に連行、強制的に役員にされてしまったことは今でも鮮明だ。

遠くに感じてしまうほど前の生徒会での日々……なつかしいものだ。あの人たちは元気だろうか、そういえばもうしばらく会っていないな。

あの思い出の場所に、この卒業アルバムを持って向かおうか。

いや、嘘ですけど。

以上、俺こととユウジの自作自演でお送りしました。

時系列ではギリギリ1週間経ったかわからねーっつの！　体感時間では既に5カ月とか経過してるがなっ！（※ＧＡＹＭ版限定）

というか1日1日が密度濃すぎだって、死ぬって、スケジュールで圧死とかシャレにもなんねぇぞー！

先程の放送どおり生徒会室に向かっているわけで。　なんという忠実かつ誠実な俺！　ナウ！　俺イケテルゥッ！（意味不明）

ちくしょう……他の生徒は堂々鞄をひっさげトークしながら帰り始めやがって！

机内で2週間と3日温め続けた表皮に緑色と白色の斑点が出始めたアンパン投げたろか！　実際はないけど。

あー……ユキとも一緒に帰れなかったし！　……生徒会はそうや

って大事な場面で横やりを入れる、ＨＵＺＡＫＥＲＵＮＡッ！
しかし結局誘導されるところを考えると、これもルートなんだろな。　はぁ……主人公ってのはツライ職業だねぇ、職業ではないと思うけど。
あーっ！　もう！　一人でボケとツッコミの二役やるなんて寂しい&傍からみたら痛すぎる！　まぁ脳内で完結させてるから痛くはないはずだけどね！

「……これはイタイな」

「！？」

こ、この声は、来るたび不幸を持って来るシニガミの声だッ！
……面倒だからシカトしてやろう。

「誰がシニガミじゃ！」

「……」

「シカトか！　シカトするのかお主はっ！」

「（面倒なのが来たな……はぁ）」

「脳内でため息をつくななんて、どれだけイヤなんじゃ……」

「……」

「シ、シカトは立派なイジメじゃぞ？　教育委員会に言ってしまう

ぞ？」

「……」

「イジメイクナイ！　じゃぞ！」

「……」

「なぁ、これじゃ文章化した時手抜きにしか見えなく……」

「……」

「かくなるうえは……襲うっ！」

「……」シュッ

「避けられた！？　妙に俊敏な動きをしよるな！　というかシカトはやめろと言うとるじゃろう！」

「……」

「泣いてしまうぞ！　泣いてしまうぞ？　いいのか？」

「……」

「ひ、ひどい……」

「……さて生徒会室に行くか」

「ひどくクールじゃなっ！　そんなにわしのこと嫌いかっ」

「今のはツンデレから”デレ”を除いた部分だ」

「今までのは”ツン”だったのか！？　それならデレに期待が――」

「まぁ実際はツンしかないけど」

「ただのツンツン野郎！？」

「じゃあな」

「ちょっとまて、これじゃわしの来た意味がなくなる」

「俺には関係ない」

「ク、クールすぎる……」

「……でも少しなら付き合ってやってもいいぞ」

「デ、デレた！？」

「生徒会室ではおとなしくしてろよ」

「その言葉は嬉しいけど、わからん！　お主のキャラがわからん！」

「キャラか……そう、お前に一途な純情キャラだな」

「！　……って今までの発言からそのキャラの要素が見当たらないんじゃが」

「今はツンデレの”ンデ”の部分だからな」

「どの部分なのかわからんわっ！」

「さて……弄ぶのもここまでにして」

桐の鬱憤晴らしイジリタイム終わり☆　あー、楽しかったー。

ええと……私がツッコむ隙さえなかったのですが。　これはなんですか、兄妹の仲睦まじい会話と捉えれば良いのでしょうか……？

「意図があったのじゃな、確信犯めっ！」

「ということで帰れ」

「なにが”ということ”じゃ！」

「いや、帰れよ」

「居させてくれ！　頼む」

「えー、というか学校どうした」

「もちろん終えてから来た」

「へぇー、じゃあな」

「なぜ今聞いたんじゃ！？」

「なんとなく」

「なんとなく……じゃと」

「疲れてるんだよ、お前の面倒まで見てたら疲労で精神崩壊おこすかもしれん」

「そこまでわしが負担かっ！」

「……というのは嘘だ」

「そうか、それは良かった……」

ホッと嘆息する桐、にしてもユウジも流石に言い過ぎですよ。

「いや、なんだ……最近お前に構えなくてな、すまないと思ってる」

「ああ、そういえばそうじゃな」

と、思っていたらユウジが謝ってますね。　……桐以上にユウジが不思議な人に感じます。

「なんともな、お前の予言通りに事が進んでいるのはいいのだが……どうにも忙しくてさ」

「うむ、わかっておるぞ」

「今はどうにもゆとりがない……だから――」

「……わかっておる、少々わしもお主と話したかっただけだ」

「本当にそうか？　ここまで来たってことは……」

「だが、そんなことはシナリオにない。　わしが生徒会室に入るというシナリオは存在しないのじゃ」

「……そうなのか」

「だからわしも帰ることにする、まぁ思いのほか元気そうでなによりじゃった」

「そっか……お前も気にしてくれてたんだな」

「なんだかんだお主と家を同じにしているとはいえ、接触が少なくなってきたからな……こうしてまじまじお主の面を視ることは結構貴重じゃ」

「……ゆとりさえ出来れば、話す機会も増えるんだろうけどな」

「じゃあ、わしはその時を待つとするかの」

そう言い終わると、桐はユウジに背を向けて、かつて歩いた廊下を逆に歩いて行きました。

「それではなっ！　さらばだ」

「車とか気を付けて帰れよ」

「ああ！　もちろんじゃ」

高校の通学路を一人の小さい女の子が歩いて行きます。　鞄を手にぶら提げ、帰り始める高校生の中に埋もれながらも歩を進めていきました。

「十分構ってくれているというのに……ふふ」

そう静かに、誰にも聞こえないような声で呟いた女の子は綺麗な笑顔でした。

第０６６話　５－１２　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

うーん。　やっぱりここら辺のユウジは変だ。

※最近諸事情により多忙で修正が雑になっています、すみません。
時間が空き次第直していきますので……

第０６６話　５－１２　来訪者と疲労な主人公。

離れていく桐の背を少しの間見つめると、すぐにユウジは歩きだしました。
下校時刻からしばらく時が経ち、生徒会に続く廊下に居る生徒も数えるのみになっています。

桐と話していた場所から２０秒かからぬ間に生徒会室前にたどり着くユウジ。
そして若干……いえ、かなーり嫌な嫌悪感丸出しの顔で生徒会の扉を引きました。

「あっ、シモノ！」

と、いきなり会長がお出迎えだ。

「ああ、どうもです」

「ええ!?　そんな……あなた生きてるなんてっ！」

……こんなに大歓迎されるなんて、嬉しくて死にそうだよ。

「……なんで死んでそうな設定に俺はなってるんですか」

ユウジは色々あって疲れ気味、ツッコミもぐだーとしているのがわかりますね。

「だって死んだじゃないの、私の目の前で」

「はぁ……」

「……ツッコミにキレがないわね、どうしたの？　体調でも悪いの？」

「ツッコミのキレが俺の体力バラメーターなんですね……ただやる気がおきないだけですって、フラグなんかじゃないですよ」

「なんで納得するのよ！　これじゃお笑い芸人失格ね！　吉〇クリエイティブスクールからやり直しなさい！」

「吉〇芸能より松〇芸能派です、俺」

「そっちにツッコむのね！？」

「で、なんで呼び出したんですか？」

「……はっ！　私がツッコんでしまうなんて……調子が狂うわね」

「いやだから」

「なんとなくだよ！」

会長はロリボディにジャストフィットな薄い胸を張ってそう言い放った。

「はぁ……」

「その上司の問いへの答えに困って、とりあえず言っておけばいいや的な台詞を言わないのっ！」

「生徒会役員として考えるなら会長は上司であながち間違えではないかと」

「あ、確かに！　……ってここツッコミ時だよぉっ！」

「あー」

ポンと、手を叩くユウジ。　あ、フラグじゃないですよ？

「……」

「どうもユウの様子が変ね」

「私もそう思うー」

「何かあったのかしら……」

「これは……女が関係してるに違いないよ！」

「！　その発想はあったわ」

「手紙で告白されるも数十秒後、口頭で振られるとか」

「……アスちゃん、それ元ネタ分かるのかしら」

「ノ、ノリでいいんだよっ！　偉人はこう言ってたわ”こまけぇこたぁいいんだよ！（ＡＡ略”と！」

「それも分からないと思うわ、例え理解出来たら理解出来た人もか

なりの重度だと思うわ」

「でも考えてみると、シモノの浮いた噂は聞かないよね」

「噂以前に見てわかるハーレm……なんでもないわ、女の線は保留にして他になにかあるかしら」

「あとはよく買っていた季節限定品が昨日まで売ってた店の棚から消滅してたとか！」

「今度はあるあるネタなのね……」

「文化祭の看板に某アメリカネズミを描いたせいで某会社から訴えられちゃったとか！」

「それはアウアウネタね」

「……うーん、じゃあただの疲労？」

「その発想はなかったわ、でも一理ありそうね……あの見てわかる通り片栗粉を塗したかのような白い顔」

「なんで片栗粉？」

「そして後ろのアイツもやせ細ってるわ」

「後ろのアイツ！？」

「あら見えない？　ほら黒くてテカテカしたムチムチのジャージ着たおじさん」

「見えないよ！　チサにはいったいどんなものが見えてるの！？」

「私の右目には未来が見えているわ」

「予知能力！？」

「私は戦いたい、アスちゃんを守るために！　この右目を使って先読み攻撃を食らわせてあげるわ！」

「邪気眼！？」

謎の言い合いの横では、ユウジが生徒会室のテーブルに備え付けられたイスに腰を下ろしていました。

「あー、あの子にどのタイミングで謝れば……」

そう呟いたその時です。

「おーっす！」

見計らったかのように福島戸夏が入室しました。

ちなみに解説すると、福島戸夏、彼女は生徒会役員会計を務める。

茶色のセミショートを黒いリボンで纏めたツインテールの髪を揺らしながらやってきた。

あ、キャラクター紹介のところで黄色になってますけど、そんなヤンキーカラー一応生徒会では認められませんから。

手には薄い深茶色の鞄を片手で持ち生徒会のテーブルに備えられた椅子に座る3人に向かってスポーツ部的あいさつを投げてきます。世に言うスポーツ系少女ですね。　最近出てきた肉食系女子と、あまり違いがわかりませんが、スポーツ少女です。

「コナツも来たねー！　あとはミナだけかぁ」

人の噂をすればその噂された人が姿を現す訳でして。

「お、遅れましたっ！」

ミナが息を切らしながら、生徒会室に滑り込んできました。

「大丈夫大丈夫！　気にしなくていいよー」

「うん、ありがとね！　葉桜会長っ」

ユウジ姉はおとなしめにスマイル。　そしてユウジの姿を自分の視線が捉え。

「あっ！　ユウくんこんにちはっ！」

しかしユウジに思い切りの笑顔であいさつしただけで、他のことはしない。　一応は、生徒会という場を考えているのだと思うけど……

「よーすっ」

その思い切り笑顔に対比するかのようにやる気にない適当な挨拶を返すユウジ。

「ユウくん元気ないね……どうしたの？」

ユウジ姉は途端に不安の感情を作り出し、ユウジに問う。

「いや、ちょっくら悩み事があってな」

「え、何？　悩み事？　お姉ちゃんが聞こうか？」

「いや、止めておくわ。　もの凄く個人的な悩みだしさ」

どこか配慮の言葉の籠った言葉ですね。

「そ、そう？　……やっぱり、ユウくんも大きくなっていくんだね」

なんとも遠い目をするユウジ姉ですが、それには無反応でやはり考え事を始めるユウジ。

いや……確かにあれはヒドイですけど、そこまで悩むことじゃ……？

「それで会長、俺らを呼び出して今日は何をするんですか」

会長以外の誰もが聞くであろう質問を突然ユウジが発しました。

本当いきなりですね！

「え、えとね……そうだ」

「……今考えたんですか」

「そんなことはないぃょ？　今日は、今後の生徒会の方針を考えるのっ！」

「そして今、考えるんですか」

「これからの生徒会の方向性を決定付けるコトだから、１クールに渡って議論するよっ！」

「３ヵ月もあれば他のこと出来るでしょうに」

「シモノは黙ってて」

「はい、わかりましたー」

素直に了承すれば、腕を枕にして寝始めるユウジ。　えー。

と、思いきや自分の世界に入る為に寝たフリをしているようです、また考え事ですか……

「こらーっ！　寝ないで！」

「……」

「シモノに言ってるんだよ」

「……」

「廊下での会話とノリが似てない？　ネタ切れって言われちゃうよ？」

廊下での会話……というのは、先程のユウジと桐の会話のことです

よね？　……盗み聞きでもしていたんでしょうか？

「……」

「アスちゃんが”黙ってて”って言ったからじゃないかしら」

「屁理屈こねた小学生かよ……」

書記が解説し、福島がツッコミます。　なんというコンビネーションですね！

するとユウジは足元にある鞄から、適当なノートとペンケースを取り出す。　寝ながら。

そのペンケースからマジックを取り出しノートを開くとキュッキュッと音を立てながら何かを書き始める。　寝ながら。

そして書き終わるとペンケースにマジックをしまい、ノートとペンケースを鞄に片付け、書いたノートを千切ってその紙片をこちらに寄こした。　もちろん寝ながら。

この間、顔を皆に見せず、地面にほぼ顔が付いた状態で何かを書いていたことから今は必要のない器用さが滲み出ていた。

「なにかしら……」

そうして皆がユウジの書いた紙片を覗くと、そこには――

『”黙れって言ったから素直に実行してるだろ（＃＾ω＾）ピキピキ”』

「顔文字入り!?」

「それにあまり見ない類のものね」

「……体は高校生、頭脳は小学生だな」

そう福島が呟くと、また律儀にノートとペンケースを（以下略）
そしてまた出てきた紙片は――

『”コナンと逆じゃないか（´―ゝ、）”』

「なにこのイラっとさせる顔文字!?」

「なにか使い方違う気がするわ……」

「うぜえええっ!」

今度はノート、ペンケースをしまわずに居たので次の紙片はすぐに来た。

『”うざい？　その反応はこちとら本望だ（´―ゝ、）”』

「この顔文字気に入ったのかな……」

「見せられた方はたまったものじゃないけどね」

「というかもう喋れよ！」

『”会長ご許可を”』

「え、私!?　え、えーと……シモノ喋って」

そう会長が言った途端にです。

「……帰ってきました」

「おかえりユウくん」

「ここでユウジ姉参戦!?」

「今までの会話を傍観視してたみたいね……ミナ、やはりあなたは只者じゃないわ」

「それで会議するんでしょう?」

「……うん、まぁ」

「実際正論ね」

「で、会長さんどうするんだ？」

「……あ、もう時間だ！　もう帰る時間だよ」

「えー」

「……やっぱりね」

「パターン化してねぇか？」

「ということで会議は終了」

「してねーだろっ！」

「おお、ユウジが久しぶりにハイテンションになってる！」

ということで、会議終了です。　会議してないじゃないですか、という意見には全面的に賛同しておきます。

番外０１話　４－１　エイプリルフール？（前書き）

あらすじ
エピリミに掲載してもすげえ読みにくいことに気付いたので再掲載（２０１１．３．２１）
一応√２の伏線あり

番外01話　4－1　エイプリルフール？

4月1日

さぁさぁ新しい朝が来た、心地よーい朝が来たぞ。よっしゃ今日も学校生活を楽しく陽気に愉快に奇怪にエンジョイしてやるぜ！
そんなこと考えてる時間が勿体ねぇぜ、ちゃっちゃと着替えて通学路を千鳥足でスキップしてやるぜ！
ふはは、こんなこともあろうかと机の上には既に準備しておいた食パンがあるのさ！
朝の占いでもしっかり見てから、ユキと共に学校へ向かおうとするかな！

『さそり座のあなた――今日はとてつもなくどうしょうもない救いようさえない不幸が降りかかります、ラッキーアイテムなんて有りませんので諦めてください』

ぬぬ！？　なんて酷い占いだ、金返せや！　……そう言うと思ったかい？　いや、そうだろう！　しかし今日の俺は気分がいい、こんな占いなんて気にしないぜ――バァリィン。

その時、何かが割れるようなとてつもない衝撃音……なんだこの音はってぬわあああ！？　なんということでしょう、俺の部屋の窓が割られているであーりませんか！
盗人か？　盗人なのか！？　畜生やってくれたな盗人、しかし俺の部屋で盗む価値のあるものなんてないさ、あるなら俺の心ぐらいだぜ！　要らないですか、わかってます。

おんやぁ？　よおく見れば人が転がって居ますねぇ……って人！？　っていうか血だらけジャン！　やべぇ、この時救急車とスバル３６０どっちを呼べばいいんだっけ？

って……ふざけてる場合じゃねぇ。その血に染まった人は――見るからに華奢な体を持つ女の子だ。　顔から体、足に至るまで血色に染まっていてその全貌は分からない。
血がやべぇな、とりあえず救急車呼ぶか――

「待て」

……喋った、呼び止められた。

「いや、君……喋っちゃ駄目だって」
「気にしなくていい、大丈夫だ」

……と言うが、血だらけのその容姿からはなんとも大丈夫そうには見えない。

「ん、血か？　確かにその通りだが……」

血ならやべぇだろ、半端じゃない出血量じゃねぇ――

「返り血だ」

返り血を噴出させた相手の出血量が半端じゃねぇ！

「ちょっと敵と出くわしてな、腹を抉ってやったら……汚い血だ」

まてまて……いや、まて。

「水をくれ」

「はい？　ああ、水ね……」

態度を視るに、本当に大丈夫そうに見えてきた。水を与えれば――バシャア。

「……まだ鉄臭い」

水を頭から被り、綺麗さっぱり血を洗い落とした――って、え！？　コップ一杯の水で全身の水を流しきるってどういうことよ！色々物理法則無視してるだろ！

「さて……自分がここに来たということはだな――」

「お前は不幸になった」

「え？」

「不幸だぞ？」

「俺が？」

「ああ」

いや、いきなり窓から突っ込まれて床を血と水でびしゃびしゃにされて更に今、水を恵んでやったそんな少女にいきなり不幸宣告されて確かに不幸だけど……

「自分は厄病神、貴様に不幸を運んできた」

「え、えええええ！？」

「では、水ありがとうな」
「そのお礼はいいから、不幸ってどういうことだよ！　おい！」
……かつて破った窓から外へ出て、少女は何処かに走って消えてしまった　あれ？　今屋根を走って行ったような――
まぁ、いいや。それより不幸ってどういうことだろ？　いや、嫌な予感しかしないんだけどさ……

登校するために制服に着替え、予め持っておいた食パンを食いながら玄関で靴を履き替え外へ出た。
そう、ユキさんを待つ為である。　もうユイとかはどうでもいい、ホニさんは笑顔で見送ってくれたが。
ちなみに姉貴は、どうやら先に行っているようで……久しぶりにユキとの二人で登校出来るとなると、ワクワクが止まらねぇ！　胸が高鳴って仕方ねぇ！

「ユウジー」

おお、なんとも律儀に迎えに来てくれるユキに完敗ならぬ乾杯、一緒に朝のモーニングコーヒーなんていかがかい？

「おーっす」

「おはよー」

さぁこれから始まる通学路にドキドキが止まらねぇ――グガァン

ッ！　なんだこの衝撃は――！？
あれ、なんでユキはそんな驚いた顔を……？　あれ、真っすぐ歩いていたはずなのに、景色が横に移動してるぞ――バタン。
ん？　なんだこの感触……床？　コンクリート否アスファルト？
なんで俺が床になんて顔を付けているんだ……？
お、おい。なんでユキは涙目でこちらに近寄って来るんだ……？
少し見渡せば……フロントのへこんだタクシー……？
え、俺突き飛ばされたの？
いやいやいや。痛くも痒くもないんだが、意識もこうあるしさ。
「よっと」
「！？」
あらら、ユキさんが驚いてらっしゃる。驚くその表情も絵になりますなぁ……
「ユ、ユユユユユユユウジ！　だ、大丈夫！？」
「ん？　なんでだ？」
「なんでだ？　……じゃないよ！　今タクシーに跳ねられたでしょ！」
「え……うーん、そうみたいだな」

「え？　え？　……大丈夫？　何処も痛くないの？」

「え、あ、うん。　全然全く」

「……？　でもユウジが無事でよかったよ！」

「あ、そ、そうだな」

……んー？　どういうことだ？

いざ学校に付けば、不安が顔に出ていたユキもいつも通りの柔らかな表情を取り戻していた。

んー？　確かにユキの言うとおり跳ねられたんだがなぁ……っと、何故だが尿意が。

安心したせいか？　とりあえずトイレトイレっと――

スッキリスッキリ――バスッ。

あれ、なんだこの首の衝撃は……でも全く痛くない。

「！？」

って、なんだ姫城さんか。　なんで俺の首に手を垂直に入れているのだろう？　でも全く痛くないし……？

それでいて姫城さんの顔は固まっている……何故？

「……とりあえず、来てくださいっ！」

あ、あれ？　なんで俺連れてかれるの？　うーん、でも急に振り切るのもなんだし、連れられてみるか――

連れられてきた先には見覚えが――なんだ、最初に姫城さんと言葉を交わした倉庫前兼階段踊り場じゃぁないか。

「あなたを殺します」

「え？」

な、なんだ？　歴史は繰り返すとはいうが、なんというデジャブ！　いやいや、そんなことを平然と言っている俺はどうかしてるぜ……ほら、短刀突き付けてきた。

「好きです。好きすぎて殺します」

「なんか色々略されてね！？」

なんという省略、もっと色々な経緯があった気がする、なんとも薄っぺらい。

「ということで食らってください」

「早いよ！　早いって」

ちょまてよ、はええって展開がブスリ。
あれ？　なんか首筋に冷たい感じが――でも全く痛くありません、一体なぜでしょう？

「！？」

またまた驚かれています、なぜでしょう、なぜでしょう？　なんか変な顔でもしてんのか――！？

ええええええ、なんか首筋に短刀が突き刺さってる！？

どういうことなの……でも痛くも痒くもない、ということは――ということで、実際に短刀を抜いてみたブシュ。
なんということでしょう、音だけ立派ながら、血なんてもの噴き出ません。　勿論痛みも有りません。

「っ！？」

さらにさらーに驚かれています。

「ユウジ様！？　なんでなんで！？　死なないんです！？」

死なないんです？　と聞かれても……って何回も短刀を首に入れないでください、妙な金属の冷たさが気持ち悪いです。

「！？　……そ、それならッ！　えいっ！」

えいっ、なんて可愛げに言いながら短刀を俺の腹部に刺さないでください……いや、まぁ勿論痛くも痒くも疼きもしないんですが。

「……そんな」

そう座りこむ姫城さん……？　もしかして情緒不安定なのかな？
普通に殺人未遂二回目だけど痛くないからいいや。

そうして、その後も首筋にチョップを食らっても屁でもありませんでした。
いやぁ、俺の体に何が起こったんでしょう……？
俺が推測するに攻撃され大きな体へ衝撃など受けても死ねない、もとい不死身の体を手に入れてしまったようだ。
そういえば、言ってたな「お前は不幸になった」とか言う血だらけの少女に宣告されたけど……
痛みも無くなって、不幸どころか幸せだぜ……ってあれ？　なんで俺をみんな避けるの？　え、傷が出来ないし痛がらないで不気味？　人間の皮を被った化け物？
おいおい、なんでそう離れて行くんだよ、ちょっとユイまでぇ…
…先生まで俺は、またまたぁ～
いや、少し近づいただけじゃん、いやいやいや、人間ですぅ！
立派な人間ですぅ！
あ、あれ？　いつまにかあのホラーマニアのマサヒロも敬遠する？

なんの冗談だよ、はっはっはっは……

そうして、俺の周りから人が消えた。　果てにはよくわからない実験施設に入れられ、人体実験が度々行われた。そんな現在モルモット状態の俺は、これだけは言えるね。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

なるほどな、疫病神の言った”不幸”とはこのことか、やってくれたぜ！　しかしだ、そんなことでめげる俺じゃないぜ。　ポジティブに今は考えている。それはこのクソ実験施設からの脱走計画だ、そして俺は翌日決行を決意した――

「ふはは、逃げられると思ったか？　このモルモット３５号」

く、くそ！　自分の檻から出て５秒で研究所員Ａ見つかちまったぜ！

「さぁ、檻の中に戻ろうか」

……フフン。

「なんだ、その不気味な笑いは。モルモットはモルモットらしく実験台になっていればいいんだよっ！」

「アンタは残念な頭の持ち主のようで、残念だ」

「ハァ？　何を言い出すかと思えば負け犬の遠吠えならぬ、モルモットの遠吠えか？」

……はぁ。とことん残念な思考力しか持ち合わせていないようだ。

「俺に施した実験を覚えていないのか？」

「実験？　そりゃ、お前は死なないからな……あらゆることをしてやったさ」

あらゆることをされた、死にもしないし苦しみもしない……だがな。

「そうだな、じゃあなんで俺は檻から出ているんだろうな？」

「それは……っ！？　まさかッ！」

そう、俺は実験を受けたことによって思わぬ副産物を得ていた。

そうそう、いきなりだが俺はそこら辺で1円玉を拾っていた。

そしてそれを取り出し空中へ投げた――

「実験の賜物だ、有りがたく喰らうがいいっ！　超電●砲っ！」

研究所員を貫く、眩い電光――俺は右手の人指し指を研究所員に向け、投げられたコインが直線上に来たその時、電撃を解き放った。

なお電撃のほか、重力制御・炎・風・鋼・悪……その他多数の能力を理由は分からないが習得していたのだ。

「くっ……実験が裏目に出ようとは」

ちなみに1円玉だったが為に、研究所員に辿りつく前に放たれた電撃に押されている内に溶けて無くなっていた。　つまり電撃だけが研究所員を貫いたのだった。

「ああ、脱走ついでに復讐も出来るんだから便利なもんだな」

放たれた電撃はとてつもない衝撃を生み電撃が走った、ちょうど真下のコンクリートで出来た地面は、いとも簡単に抉られていた。

「くぅ……これで勝ったと思うなよ、俺だけが研究所員じゃない…

…」

それぐらいは知ってるさ。

「俺こと A の他 B～Z、加えて α 様、β 様、Ω 様、Σ 様の更に上エクスクラメーション（！）様までいらっしゃる……簡単にここを抜け出せると思うな……ガクリ」

わかってるさ、ふははっ！　しかし不死身で能力を得た俺には赤子を捻るも同然、いいさやってやろうじゃねぇか。

「いいぜ、てめえが何でも思い通りに出来るってなら――まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！！」

そうして俺の脱出計画は始まった、しかしまだまだ道のりは長い。だが、いつか……かつての日常に戻れる日が来るはず。　いや来るだろう。　そのときには――

「俺様の戦いはこれからだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

5月2日

「という夢をみたのさ」

そう、夢だったのだ。ということでウーソ！
だって考えてもみなよ？　最初の日付が4月1日になってる時点でね。

※この作品は2010年4月1日に書かれたものです。

4月1日と言えば？　わかるでしょ、ぐふふ。

※あくまでこの作品は2010年4月1日に書かれたものです。

乙でしたぁぁぁぁぁー

※マジで本当にこの作品は2010年4月1日に書かれたものです。

X－1　とある予告の更新稼ぎ（アンアップデート）　跡地（前書き）

そのうち消します。

※4月3日　消しました

X－1　とある予告の更新稼ぎ（アンアップデート）　跡地

ああ、いらっしゃい。
さっきまで掃除してたからちょっと埃っぽいかもしれない、ごめんよ。
これを見ての通りだ。
何も残っていないって言うのも小奇麗でいいだろう？
色々あったけど、なんだかんだ楽しかったよ。
常連のお客さんとの会話が日課だったんだよね。

あ、でも看板だけは残しておくことにするよ。
かつて来てくれたお客さんがこの店を目印に出来るようにね。

だから、悪いね。
もうコーヒーはだせないんだ。

でもわざわざ来てくれてありがとうね、じゃあまた。

第０６７話　５－１３　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

エイプリフールネタはもう黒歴史、気を取り直して本編再開です。
ここからはＧＡＹＭ版を流用出来ないので、殆ど書き下ろしになりそうです。

第067話　5－13　来訪者と疲労な主人公。

そうして姉貴と俺以外はさっさと帰ってしまった。　もちろんユイもだ。
そして生徒会室前に取り残された俺は――

「本当に終わっちゃったよ」

なんということだ、マジで生徒会終わったぞ……なんという時間の無駄。
生徒会にさえいかなければ”あの”ぶつかった娘に謝罪するチャンスがあったというのに。
……ただでさえ下校時間を過ぎた上、生徒会待機時間による喪失だからな、流石に”あの娘”も帰っているだろう・セクハラをしてしまった

「じゃあ姉貴、帰ろうぜー」

なにげなーく声をかける、そういえば姉貴と帰る機会って少ないな……

「ごめんねユウくん……ちょっと用事思い出しちゃった」

生徒会室を出て、鍵を締めた後にそんなことを言う。

「ん？　用事？」

「うん……お姉ちゃんとして、すっごくすっご～く残念だけど、先

に帰っててくれる？」

残念という言葉通り、姉貴の顔は残念そうで「ショボーン」としている

「あ、ああ。　別にいいけどさ」

「晩御飯が作れる時間までには帰るからー！」

「わかったー」

ということで、俺はまさかの一人帰りとなってしまった。

姉貴の用事とは一体なんだろうか、もしかして……ということはなく、思い当たる節もない。

うーん……どうしたことか。

さてと、どうしようか。　家に帰ればホニさんはともかく、正直どうでもいいよランキングベスト3に入るユイと桐しか居ない。

帰っても仕方ないような気がしてきた、話相手もいないことだし、久しぶりに商店街でもブラつくかな――

ということで商店街だ。

夕べの商店街は主婦勢が半分以上が締め、スーパーの他青果店やら精肉店やらに集中している。

藍浜商店街――正直、町に始まり学校全般まで統一感有り過ぎて名付る予算をケチったことようにしか思えない。

５００m程の長さで、学校から近い「東口」から食品系が占め、

姫城さんの家方面の「西口」は日用雑貨から俺御用達のゲームショップがある。

そうして東口から歩いて西口方面を目指す……おお、なんという主婦の方々。　一部はセール開催中なのか阿鼻叫喚の地獄絵図……までは行かないが、なんとも人の密集した土地だこと。

そんな光景を横目に進むにつれ、混みぐらい飽和されていき人がまばらになっていくのだが。　これぐらい歩くとちょうど「食品系」と「日用雑貨」の境ぐらいに差し掛かる。

するとすぐに俺御用達のゲームショップだ――

「……ここからだったな」

ゲームショップ「キド」……ここで”あの”ゲームを買った店だ。

ここでゲテモノ掴まされなければ、今の日々は大きく違ったことだろう。

そう若干思い思いにふけりながら、ゲームショップに入ってみると――

「……」

なんということでしょう、俺の目に映るのは――

ゲームソフトの飾られたガラスケースにへばりつく……ユイだった。

第０６８話　５－１４　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

文章短めですみません。

第０６８話　５－１４　来訪者と疲労な主人公。

「……」

それはもうベッタリと、かけている眼鏡がガラスケースと擦れてカチャカチャいっているというね……えーと。

「（見なかったことにしよう）」

恐らくこれ以上ない最善の策だろう、実際数少ないゲーム店の客らが総シカト。

「ぼくは関わりたくありません」というオーラ言い知れず放つ若い店員。

なんというかもう「声かけたら負けかな、と思っている」状態だ。

もちろん俺もコイツが友人であることを悟られたくはない。

……いや、ユイが嫌いということではないぞ？

この状況でユイと知り合いということがバレたら確実に、同じ目で見られてしまうからな。

そして、有無言わさずに店内から出て行けば被害を被らずに済むのだ。

よし、じゃあなユイ。　また学校……じゃなかった、家でな。

そろりそろり、かつて入口のガラスドアに向かっていた――

「お客様、どういったご用件でしょうか？」

『っ！？』

そう、誰かが地雷を踏みつけた瞬間だった。

お客様、ということ敬語使いからおそらく、店員なのだろう。

しかし、先程の店員にしては貫禄のある声だ、どうにも声が渋すぎる。

「いや、ええと……このガラスケースの中にある”はーとふる☆でいずっ！”が欲しいのですけど、品切れになっていて……」

「ああ、それはとんだご迷惑をおかけしました……佐川っ！　ガラスケースに品切れ商品は残しておくなって言っただろっ！」

接客していたと思えば、個人名を出して怒声を浴びせた。

「す、すみません店長！」

店長……だとッ！

「お客様、大変申し訳有りませんが”はーとふる☆でいずっ！”品切れです。　宜しければ取り寄せることも可能ですが、どう致しましょう」

「え、出来るのでしたら是非お願いします」

「かしこまりました、それでは名前など――」

……しめた、この会話しているタイミングで抜け出せば気付かれまい。

「巳原さんですね？　電話番号を――」

よい、そろりそろりだ――

「繰り返します――で宜しいですね？　それでは入荷次第ご連絡させて頂きます、毎度ありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます」

ピロピロリン♪

っ！　しまった、ここの店は帰り際だけセンサーが反応して音が鳴るんだった！　この音で――

「おお、ユウジ！　ユウジじゃないか！」

……ゲームオーバー。

第０６９話　５－１５　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

今回もヤバイぐらい短めです、すみません。

第０６９話　５－１５　来訪者と疲労な主人公。

「よし、帰るぞ！　ユウジ氏！」

「はいはい……」

ということで、諦めた。　周囲の目線など知ったことか、このまま開き直って帰ってやる。

「そういえばユイ、ゲームを何か買おうとしたのか？」

というか入荷次第電話するやら言ってたな。

「ああ、もちろんだとも。　”はーとふる☆でいずっ！”というあるギャルゲだ」

「ハートフルデイズ？」

「うむ、それはな――」

ええと、ここからはユイから聞いた話をベースに俺が再構成してお届けしよう。

はーとふる☆でいずっ！――ゲーム制作会社「ガラスドロップ」から最近、というか発売されたばかりの全年齢対象恋愛シュミレーションゲーム。

アニメ「アメソラハート！」というアニメファンからかなり人気あるアニメのシリーズ構成・脚本を担当した「コトバイチロウ」が

ゲームのシナリオを担当。
原画にはＲｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓで話題を集めた「ごんすいち」の兄である「ＧＯＮＴＨＵ」が担当している。

という、前評判バッチリの作品で。　ネット巡回してみれば称賛の嵐、アマゾ●レビューで☆４つから５つが大半を占めている程。
某大型掲示板では、アンチスレが乱立するも圧倒的なファンにボコボコにされるという現象が見られた――

らしい。
なんかハードルが上がりまくってるな……本当に面白いのか？

「途端に人気になり、今では店頭から消え去っているのだ！」

「……そんなレア品入荷すんのか？」

「ふふふ、ゲームショップ”キド”を甘くみない方がいい。」

「なんだと……っ」

「特殊な販売ルートを隠し持っておるからな、アイツは」

「！？」

特殊な販売ルートだと……それは、アレか。　実は店長がそのゲーム会社社員かなんかの知り合いで、直接頼んで購入？
いや、ユイが「甘くみない方がいい」って言ったぐらいだ、店長が実は社長かなんかの親族だったりして？
ううむ、案外社長の弱みを握って仕入れを優先させたいたとか……？

「……というのは嘘で、問屋と仲がいいらしい」

「俺のトキメキを返せ」

なんだ、そのオチは！　色々考えてバカみたいじゃないか！

「……そんなことより帰ろうぜよー」

「え？　あ、うん」

……流された気がする。　というか気付いていないのか？　まぁ問い詰めるのも面倒なので、ユイの言った通り家に帰るとするか。

第０７０話　５－１６　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

ＧＡＹＭ版の記事数が限界寸前なので新スレになり再開しました！
ついに”あの”ヒロインのルートが開始！？

クソゲエリミックス！！（ＧＡＹＭ版２スレ目）
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

今回のエピソードはＧＡＹＭ版も合わせてお読みになっている方ならお気づきになるはず？

第０７０話　５－１６　来訪者と疲労な主人公。

おお、なんという茜色。

奥様方々で賑わう商店街を抜けてしまえば、人通りがそれなりにしかない住宅街を突っ切る帰路に就く。

少し上へ目を向ければ、そこには赤とも朱ともつかない焼ける空。

白い雲も自分の色に染めてしまっている。

隣に目を向ければ――

「そもそも”ギャルゲー”とはな――」

よくわからないギャルゲ論を講じていた……勿論半分以上は聞き流してる訳だがね。

「”ギャル”が可愛くないとそもそも成立しないのだよ、シナリオが残念でバグが多くても、絵が綺麗かつ可愛いければ、例え２ｃｈで”クソゲー”と叩かれてもギャルゲーを名乗る資格があるのだ」

「はぁ……」

そうざんすか。　……って納得いくかよ、オイ。

「いやいや！　脚本が破綻してりゃ、ヒロインの魅力半減じゃねぇか！」

「ふむ、確かにそれは一理ある。　だがしかし、シナリオなんてオールスキップして立ち絵とCGだけ見てみれば、どうだろう？」

「まてや、ちゃんとプレイしろ」

「うむ、私はしっかりプレイするぞ？　主人公のヘタレ具合や、ヒロインのビッチ具合にイライラしてもキーボードやコントローラーを叩きつけることなく進行させるぞ」

「……さりげなく毒吐くな、お前」

いや、そういう時たまにあるけどね。　ヘタレは分かるがビッチに関しては……知ってるけどさ、わざわざ口に出して言うことじゃないね。

「例え絵が残念でも、脳内補完すればよいのだよ」

「それはそもそもギャルゲーをプレイする意味を成さないのでは？　小説読んでろって、話だ」

「いや、ギャルゲーの内容を小説にしたら残念なことになるに決まっている」

……また、毒吐いてるし。

「絵そのものが無かったら？」

「貴様、お前の言うのは魔●少女アイ3のことかっ！　そう言いたいのかぁっ！」

「いや、知らねぇよ！」

……今思うと、高校生の男女がする会話なのだろうか。

「ん？」

そういえば……ユイがビニール提げてるけど、何か買ったんか？

「……おおぅ、忘れていたぁっ！」

「何を？」

そう聞いてみた。

「ユウジに謝ろうと思っていてな」

「え？」

ユイが謝る……だとっ！　いったい何が始まるんです？　天変地異の前触れか、超展開か？

「昼はすまなかったな、カレーパン」

「あ」

なんだカレーパンか……おい。

「何故か忘れてたけど思いだしたじゃねぇか！　そういえば昼から

何も食ってねぇよ！」

「む、何も食っていないとな？」

「ああ、ユイを追いかけてる途中――ちょっとしたアクシデントがあってな」

……ちょっとしたことじゃねぇけどな！　はぁ、明日謝らないとな。

「……どおりで、追いかけてこない訳だぬ。　……そうか、それは悪いことをした」

「いや……もう過ぎたことだからいいけどよ」

なんか時が経てばどうでもよくなった、しかし思いだしたら腹へって来たぞ。

そういえば生徒会室で元気が無さそうに見えたのも、空腹だったからだろな……体は本当に正直だ。

「お詫びと言ってはな」

「詫び？」

すると、提げていたビニールから見慣れた――

「学校時代に強奪していたカレーパンと、先程買ってきたカレーパ

ンだ」

「二つ！？」

おいおい、カレーパン好きだけども何故同じものを買ったし！

「いやぁ、学校時代のは時間が経っているから。　とりあえず新しいのを買っておいたぜ！」

変なトコに気を回してくれた！？　なんという要らない気遣い！

俺なら2、3日賞味期限が過ぎたってモウマンタイなのに！

「……余計なことだったか？」

「う……」

確かに余計だけど、余計だけどな。　気を使ってくれたんだから、変に怒鳴ることは出来ないな……

「ああ、有りがたく貰っておくわ」

「そうか、すまんかった……アタシも調子に乗り過ぎたわ」

「ここまで反省するユイも珍しい、何か悪い薬でも飲んだのか？」

「……いや、なんとなくだ」

「ふぅん」

むしゃむしゃとカレーパンを頬張る俺。

「……まぁ、実はな。　昨日にちょっとした夢をみたんだ」

「へぇ、夢がどした？」

夢なんて、みるだろうに。

「その夢がな……うーむ。　ユウジが倒れる夢だったんだよね」

……？

「俺が？」

「ああ、もうぐったりとな」

……なぜ？

「それも朝に忍び込んで殴ｒ……げふんげふん。　家から運び出してカレーパンを盗む場面まで、夢に出てきた内容と現実が完全に一致。　してたんだよな」

「正夢みたいだな」

「それで、アタシが家に帰ってユウジの帰りを待っていたら帰ってきたのはミナ姉によりかかる苦しそうなユウジ……という訳だ」

「妙に鮮明だな」

「……？　一体なんだったんだろうねぇ、ユウジをみるに空腹だっただけでダルそうにはみえないし」

「不思議なこともあるもんだ」

「ううむ……なぜアタシがそんな夢をみたのかわからない」

……そこまで被るもんかなぁ。

「わかった！　ユイ、お前は俺にゾッコンってことだ」

「それはない」

うお、完全に否定された。　ここは嘘でも頬を染めて返すとこだろ？

「じゃあ、願望の現れか？　俺に倒れてほしいという」

「それはない！」

「じゃあ、なんでだよ！」

「わからないんだって！」

……もしかして何かを暗示しているのだろうか？

「……考えても分からないので、止めるぜ！」

「まぁ、そうだな」

いや、思い過ごしだよな……？

そうして俺はカレーパンの二つ目を出して食べ始める。

するとユイは、先程の話がなかったかのように今度はアニメ談議をし始め、８割以上を俺は聞き流しながら帰路を歩き続けた。

第071話　5－17　来訪者と疲労な主人公。（前書き）

一週間ぶりです。
ええと、引き延ばしじゃないですよ？

あっちも遅れておりますー
クソゲヱリミックス！！（GYAM版2スレ目）
http://syousetu2.gaym.jp/s/read.cgi?no=2240

第071話　5－17　来訪者と疲労な主人公。

二つ目のカレーパンが食べ終わる頃に家周辺へと着く。
……家周辺ということから分かるかもしれないが”家につくまでが修学旅行（ｏｒ遠足）”ということで警戒を緩めはしない。
交差点近くを通っていたガｋ……子供に奇異の目で見られたが、人の目なんか恥ずかしくないもん！
そうして周りからは不可解極まりない光景だが、家から一番近い交差点の陰に俺とユイは潜んでいた。

「右よし、左よし、前よし、後よし、斜め――」

学校生徒などに”ユイが俺の家に入っていくところ”を見られていないかの確認をするユイ。

「コードナンバー２５２５状況確認終了、おｋ」

「おし、行くか」

しゅばばばば、と忍者走りする二人。　各腕を背の方へとびっしり伸ばして住宅街に無数に通された内の一本のアスファルト舗装の平凡な道路をダッシュ。
走りながらも思うが、なんともシュールだ。　二人と言った通りユイの他、俺も一応忍者走りだ。　しかし若干ハズカシイものである。　というか痛々しい。

……そんな感想を述べている時点で、この走りに好意的ではないように聞こえるかもしれないが。

「（実際コレ速いし）」

速い実感があるので困る、そして……たまには俺も時代の波に乗ってみたかったんだよ。　うん、これが強いな。

しゅばばばばば、あっという間に家到着。　帰宅部でも走れます、あなたとは違うんです！

「ただいまー」

「ただいM●XCOFFEEEEEEEE」

ユイのテンションが高いのはご存じの通りで。　……しかし寒いな、さっきまで太陽が覗いてたんだが日が沈んだ途端にコレだ。

それほど気温も下がってないように感じるけども……あ、ユイのせいか。　納得した。

「おかえりじゃ」

「おかえりー」

ダルそうに迎えに来て呟きのように挨拶する桐と、元気そうにビシっと右腕を上げて声をあげるホニさん……この辺が出来の差か。

「おい、お主。　今失礼なことを考えたじゃろ」

「ホニさんは除くぞ？」

「答えてきたのは確かじゃが、捻くれた答え方のせいで素直なのかわからぬ！」

「ならばはっきり言おう」

「いや、結構じゃ……やめておく」

なんだよ、面倒臭いヤツだな。

「そういえば、なんで桐もホニさんも迎えにきてくれるんだ？」

最初からずっと思っていたが、遅れるにしろ彼女らは迎えにやってくる。……何処のサ●エさん一家だよ、と思っても居たのだが。

「私はユウジさんとユイが待ち遠しいからっ！」

「なんとなく」

……。

「……この辺が出来の差か」

「聞こえておるぞ」

「ん、姉貴はまだなのか？」

「おい」

「ユウジのお姉さんはまだだよ？」

「おお、まだ帰ってないのか……」

携帯をスチャッっと取り出し開いて液晶画面に表示された時刻をみるに、もう6時半か……

商店街そのものが案外長いので、ゲームショップをチラ見してユイに絡まれただけだったけども、時間はかかるんだよなぁ。

「ホニさんわざわざ出迎えありがとな」

「ううん！　好きでやってるから（キリッ」

「わしにはないのか！」

「桐ちーーっす」

「何故お礼ではなくＤＱＮ風挨拶!?　わしだって……来ているというのに」

恩着せがましいけど、なんだかんだ迎えてくれるのは嬉しいからな。

「冗談冗談、ありがとな桐」

「ふ、ふん。　わかればよい」

エラソーに言ってる割に照れてやんの、顔が赤くなってんぞ。

「さてと――」

「ユウジ……」

「ん？　ユイどした」

「アタシにはないのか？」

「今の状況で一番ねーよっ！」

何故一緒に帰ってきた相手に「迎えてくれてありがとう（はぁと）」なんて言わなあかんねんっ！　というか、それ以前の問題か。

……少し疲れた。　とりあえず部屋に戻るか、そうだな。　で、ネットサーフィンでもするとするか――

第072話　5－18　来訪者と疲労な主人公。（終）（前書き）

一週間ぶりです。
ええと、使いまわしじゃないですよ？

あっちもゆっくり進んでおりますー
クソゲヱリミックス！！（GYAM版2スレ目）
http://syousetu2.gaym.jp/s/read.cgi?no=2240

第072話　5－18　来訪者と疲労な主人公。（終）

飯食って、風呂洗って、入れば。　……後は寝るだけだぜ。
いや……まぁ、すぐには寝れないだろうな。

風呂上がりでほのかに湯気が出ている体で脱衣所とは名ばかりな洗濯スペースを出る。
そのまま風呂には向かわずに、冷蔵庫を指標にキッチンを目指すことに。

「ぷはぁっ」

たまらねー。　この風呂上がりの牛乳考えた奴天才というか神だよ、ホントに。
素晴らしい。　美味しさは勿論カルシウムを筆頭に数種ビタミンやたんぱく質が摂れる、いわば卵ほかに並ぶ完全食品なだけはあるね。

さてと喉も潤したことだし、部屋に戻るとするか――

「おお、やっときたか」

部屋には桐――

「おじゃましてるよー」

とホニさんが、何故かオセロをしていた。

「ん？　オセロなんかあったっけ」

緑で黒い網目の入った盤に白や黒の駒が数個置かれていた。

懐かしいな。　最後にやったはいつだっけか……中学の修学旅行に友人の持ってきたヤツをやったのが最後だな。

しっかし、そんなアナログゲーム家にあったかな……？　あったとしても物置で半永眠状態なはずだが。

「わしが作った」

「なるほど、それなら納得だ」

それなら辻褄が合――わねぇよ！

「どういうことだよ！　作った！？　それは何か暗喩でも含まれているのか！」

「いやその通りじゃぞ？　わしの２０の能力の一つ”物体創造”じゃ」

「なんだそのチート能力！　もうお前老人喋りの妹とかじゃねぇよ、神様だよ」

「……うむ、否定は出来ぬな」

「しろよ」

……はぁ、そんな能力まだあんのかよ。　テレポーテーションとか空間創造とかしてたけど、そんなものも出来るんか。

何故か原作とキャラ違うし、喋りは老人だし……コイツは一体なんなのだろうか。

一方のホニさんはというと――

「ユウジさん！　オセロって楽しいね！」

と、無邪気な笑顔を披露され、めっちゃ癒された。　ユキとホニさんは癒しの二大巨頭だな。

「なんとも単純ながらも奥が深いものじゃのう」

こっちはオセロを”おせろ”と言いそうな老人訛りと喋りで、癒されはしなかった。

かつては俺のストレスの震源地だったが、最近はちょうどいいぐらいに数人に分散している気がする。

……というか、最近の桐の影が薄いように思えてきた。　桐は桐で何かやってるみたいだし。

「うむー」

「うーん」

なんとも言えないシーンだ。　見かけだけは良い桐に、見かけも中身もエクセレントなホニさんの対局（対極？）シーン。

自分のパソコン椅子に座って眺めてみることにしよう。

ちなみにホニさんは白、桐は黒……内面の色に忠実だな。

「大手ッ！」

桐、ちがうそれオセロちゃう！　更にまだ緑地も残っているし、黒白それぞれが共存していた。

……ああ、小学生のノリか。　なるほど、どうせ何枚もひっくり返せたから有頂天なのだろう。

「チェックメイトっ！」

ホニさんもノッてきた！？　……でもこういうノリがいいところもいいよなぁ。

「その飛車もらったぁぁぁぁぁっ！」

えええええええええ！

「いいよ！　なら桐の香車をいただこうかな！」

いや、どういうことなんだよ。

「なにをうっ！　ならばそのドローフォーカードをっ」

もう何のゲームだよ！

……まぁリクションが大きいからみてて思いのほか面白いけどね。

まぁしばらくすると、ゲームは終わった。

何故かホニさんが圧勝だった、しかしここまで白い盤上を今まで見たことがない。

なにせ――

端４つ以外全部白、いやまぁなんとも綺麗だね。

そして桐のなんともいえない顔、無表情で固まってるよ。　怒る気も悔しがる気もでないか、ここまでフルボッコにされると。

ホニさんすごいとしか言いようがない。　ホニさんはというと、無邪気に喜んでいてくぁいい。

まぁ、いいか。

「おじゃましました、ユウジさん」

と言って部屋にを出て行った。

残されたのはロウで固まったかのように微動だにしない桐。

「……どした、桐」

聞いてみた。
へんじがない、ただのにせろりのようだ。
「……怒った」
あ、喋ったと思ったら怒った。
「お主を襲うことにするぞ」
「そして全力全開で回避しようか」
……懐かしい受け流しだなぁ。
「だって、だって！　わしは弄ばれたんじゃぞ!?　あいつは純粋の皮を被った悪魔じゃ！　いてっ」
「ホニさんを悪く言うな！」
ったく、口より先に手が出ちまったぜ……あのホニさんになんてことを言うんだこのニセロリは。
「うう……ひどいよ、お兄ちゃん」
「これが……悪意の鞭だよ、桐」
「せめて愛にしてくれないかのう!?」
「飽きた寝る」
「!?　い、いやじゃ！　今日は譲らぬ」

「……仕方ないな」

「だからここを一歩も……って、え？」

「いいだろう、ここで寝て行け。　そして俺のベッドを使うがいい」

「！　お、お主！　痛んだわしを慰めてくれるのじゃな！」

「そして俺は床で寝ることにしよう」

「え、いや、お主もベッドで構わないのじゃぞ？　床で寝るなど遠慮しないで――」

「布団も自由に使ってくれ……なぁに一晩や二晩、布団がなくても風邪なんてひかないさ」

「いやだから、一緒に寝ても――」

「硬いフローロングの床から桐の寝顔でも凝視しながら寝ることにするか」

「じゃ、邪魔したな！　部屋に戻ることにする！」

「……ああ、そうか。　本人が言うなら仕方ないな」

「お、おやすみ！」

そう言うと、部屋を足早に出て行った。

「……計画通り」

そうして俺は安眠を手に入れた！

第０７２話　５－１８　来訪者と疲労な主人公。（終）（後書き）

まだまだ続きます。

第073話　5．5－1　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

ほぼ週一更新になってしまい申し訳ありません。
今日から6－1スタート！　……と行きたいところでしたが、都合上カットさせて頂きました。
なので「6－X」は欠番となり、次章からは「7－X」となりますのでご注意を。
……本当はカットしたくなかったんですよね、27話分も有りましたし、出来もまぁまぁ良かったですし。
しかしこのエピソード挿入があまりにも早すぎたので違和感アリアリになってしまい止むなくカットしました。

総称すれば6は「ユイ編」と言うべきでしょうか、ユイのさりげない暗躍が描かれているのですがほぼ全カット。

非修正ですがGAYM版に6があるので興味が有りましたらご覧くださいー

GAYM版　クソゲヱリミックス！
http://syousetu2.gaym.jp/s/read.cgi?no=1995

ルートが開始された最新版もよろしくおねがいしますー

クソゲヱリミックス！！
http://syousetu2.gaym.jp/s/read.cgi?no=2240

（6月19日追記　今確認したら7－1と内容が思い切り重複してる!?　すみません、色々とすみません!　7－1の方が修正版なので5．5－1を7－1版差し替えて、7－1を欠番扱いにします。

第073話　5．5－1　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

俺はその日を夢をみた。
なんとも不思議な夢だったことを明確に覚えている。

……ええと、ここは？

教室。　ユウジの居たその場所は、どこかの教室でした。　その教室には無機質に机と椅子が縦横揃えて陳列しています。
そんな机に付けられた椅子の一つにユウジは座っていました。

教室か。　教室……にしても静かだな。

その教室には音がありません。　閑寂な世界のみがユウジの周りには広がっていました。
外からは喧騒どころか風の音や鳥の声も聞きとることは出来ません。

カーテンはほぼキッチリ締められていますが、所々の僅かな隙間から陽が覗いています。

前にもあった気がするな。

ユウジはどこかに既視感を覚えているようです。　この光景には果てしないデジャブを感じているのかもしれません。

それに……周りの人や景色が消え失せてしまったような嫌な感覚だ。

何処か寂しさを感じるその光景。　それもかつてと同じです。

「また来たのですね」

――!?

突然静寂に響く音。　それは女性の声で、教室中に反響しました。
ユウジはその声に反射的に反応すると――

お前は……!

この部屋にもいつの間にか一人、女性が居ました。　物音立てず、かつてそこは空虚だった場所に彼女は前触れもなく現れました。
ユウジはその声を聞いて初めて、その彼女の存在に気付いたのです。

窓側で黒板に一番近い前1列の机に腰をかけ、スラリとスカートから出る白く長い足を前後に揺らしながらこちらを向いていました。
彼女の容姿は見た瞬間にわかるほど、体全体がスラリとしていてかなりスレンダー、そして深緑色の長髪を有しています。
しかしその髪はあまりにも長いため、自身の額だけでなく顔全体を覆う程に伸びていました。
それとユウジの高校で同じ学年色のリボンが付いた制服を着ていることで、彼女はユウジと同学年であることが見て取れます。

でもこのような子、私の記憶では居なかったように思えますが。

「わかりません？　それもそうですか、この世界では容姿変換が行われて、現実世界とは多少容姿が異なりますからね」

……お前は俺を知っているのか？

「ええ……声で解りませんか？　実はあなたのすぐ近くに居るのですよ？」

悪い、心当たりがない。

「それは残念」

微笑しながら彼女は言う。

「まぁ……私はあなたの傍にいて、それでもあなたに私はみえないですから」

なんとも意味深げな発言だ。

髪に覆われて見ることのできない彼女の顔からは表情を汲み取ることができない。

どんな心境なのかも俺には分からない。　今の言葉は本心から来るものなのか、それとも仮面を被って付いた嘘か。

だが、以前に俺はお前に会ったことがあるはずだ

以前に見た夢。

その中でこの景色、彼女の容姿に見覚えがある。　最初は無音で、少しすると何処からか聞こえる彼女の声に聴き覚えがある。

「そうですよ、この教室でお会いしましたね」

やっぱりか。

「やっぱりです。　これだけ声を聞いても解りませんか？　私の正体」

そこまで正体を知ってほしいなら、その顔を覆う髪をどけてくれ。

「いいえ、声だけがヒントです。　解ったらキスしてあげましょう」

お前はキス魔か。

「いいえ、痴女です」

なおさらタチの悪い……

「そうですか？　ふふ、やはりあなたと話していると楽しいですね」

お前の一方的だけどな。

それにしても、昨日のお前とは打って変わって、なんとも馴れ馴れしいな。

「あなたに私が懐いたんですよ、私滅多に懐かないんですよ？」

犬みたいだな。

「にゃー」

犬って言ったら猫の鳴き声で返すとは、なんて捻くれ者だ！

「で、冗談もここまでにしておいて。　あ、痴女なのと懐いたのは

本当ですよ？」

痴女なのは冗談であってほしかった。

「こちらの私が懐いたということは……また繋がりが出来始めたのかもしれません。　そして彼女も気になり始めたのかもしれません」

は？　なにを言ってんだ？

「なんでもないです、私の独り言に過ぎません」

そうか、ならいいけども。

「……今回は扉を開けに行かないのですか？」

嫌がってなかったか？　前回。

「嫌がってました、というか避けてほしかったです」

開ければ世界は滅びる……だっけか。

「よくできました」

お前が言ってたからな、自分の机で寝れば夢は覚めるって。

「よくできましたね、キスしてあげましょう」

遠慮しとく。

「覚えててくれて嬉しかったので、ヒントの二つ目を教えてあげま

す」

ほぅ、それはキスなんかより全然嬉しいな。

「かちんと来ました！　なんかとはなんですか！」

ふん、見ず知らずの女子にキスをするとか言われて警戒しないとでも？

「……見ず知らずですか。　少し悲しいです」

な、なんだよそれ……それじゃお前がかつて俺に面識があるみたいじゃねぇか。

「ありますとも、私は……踏み外したのですよ。　あなたと同じ道を歩くことから」

……何が言いたいんだ？

「踏み外したまま、私はその道を歩きはじめることは叶いませんでした。　その時から、私の時は止まったままです」

反応に困ることばっか言うな。　ポエムかなんかか？

「残念ながらノンフィクション」

……さいですか。

「……まぁ教えてあげましょう。　二つ目のヒントは〝ユミジ〟です」

ユミジ？　ん、どこかで聞いたことあるような。

「少しは覚えていてくれたようで、なにより。　というか少しホッとしました」

ユミジねぇ……まぁ後で思い出してみるとするか。

そう彼女から聞くとユウジは自分の席に向かっていきました。

「もう……寝てしまうんですか？」

ああ、長居しても意味ないからな。　というかその言い草じゃもしかして俺を引き留めたいのか？

「ツンデレても仕方ありませんし……本音を言うと、そうです。この姿ならあなたと話し放題、パケ放題ですから」

さりげなく寒いギャグを挟むな。

「でも本当ですよ？　この夢であなたと出会えてよかったです」

……。

「この出会いがキッカケで、彼女があなたに会えるなら……私は本望です」

彼女ねぇ。

「――だからこそ、その扉を開けてはならないのです」

正直理由が分からない。

……私には彼女の声がとても真剣に聞こえました。
少なくとも嘘は付いていないように思えます。

ちなみに女のカンです。

「いつか、あなたは知ることになると思います。　それまでは忘れて頂いて結構です」

変な気の引き方をするな……。
そんなに大切にする彼女って誰？　何者？　……とは聞いても教えてはくれないんだろ？

「彼女はあなたの傍にいて、それでも彼女に私はみえないですから」

ん？　さっきと違わないか？

「同じですよ？」

……聞き間違いか？　さっきは”彼女”の部分が”私”になっていた気がしたのだが。

「では一応前回と先程言ったヒントを復唱してみてください」

えーと確か「きっと私は下之ユウジの傍に居ます。　それとユミジという単語を覚えておいてください」
まぁ、俺の残念な記憶力で出来るだけは覚えていたのだが。

「合ってますよ、よくできました。　それではご褒美のキスを――」

要らない、持って帰ってくれ。

……ここでは”私”なんだな？

「些細な違いですよ？　……これから頑張ってくださいね。　それでは、おやすみなさい」

そうしてユウジは顔を机の上に乗せ、なんともすごい早さで迫ってくる睡魔に身を委ねて行きました。

……頑張ってくださいってどういう意味なんでしょうか？

何もかも知っているかのような発言に聞こえたのですが……？

一方現実では、です。

「こやつは夢の中でもフラグを立てるのか」

桐がボソっと不機嫌そうにユウジの寝顔を見ながら呟きました。

というかまた勝手に入ってますよね、桐！？

第０７４話　５．５－２　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

ＧＡＹＭ版での執筆開始の日付と小説内の日付に追いついてきそうだな……
ＧＡＹＭ版は何故か１周年……ウダウダやってたからだろうなぁ

第０７４話　５．５－２　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

五月七日

……。

……。

……ええと、ここは？

自室。

見慣れた自室の天井が俺の眼にはうっすらと映っていた。

うっすらというのも寝起きだからで意識が半ばしか覚醒していないからで。

眼を擦り布団を払い除けてから体を起こしベッドから下り――

「すぅーすぅー……」

寝息？　……ええと、ベッドから寝息が聞こえているのですが。

……俺は起きてるよな？　うん。　実際ベッド前にここに立ちつくしてる訳だしな。

誰かいるんだろうな、俺以外が。　というか俺が居たら色々とマズイだろよ。

もしそうだとしたら死んでるという展開か、生き霊のどちらかだ

よな。

……いや、ないか。

インターネットのし過ぎか、中学時代に読んだ漫画のせいに違いない。

まったくこんな中二病的思考回路を形成したかつての俺が恨めしいぜ。

「かつての俺ねぇ……」

中学2年最後。

あの時から全てがガラリと変わった。

手にあったものは殆ど失った――

そして最後の一つさえも失うところだった。

でもその最後の一つ……一人は手を差し伸べてくれた。

何度俺が手を振り払っても、はたき落しても、背を向けても、無視しても。

その一人は傷つきながらも手を差し伸べ続けていたのだ。

俺はそれに負けた、それは圧倒的に。

これで馬鹿な俺は、やっと理解した。

これ以上何も失いたくない、と。

これから手に入れて増やしていこう、と。

中学3年初頭。
そこでマサヒロと声をかけてきた。
更にユイと出会った。
それからは騒がしいながらも楽しい日々が始まった

高校1年初頭。
色々な期待を背負って入学してみれば――

これが現状だ。

「……」

色々あったもんだ。
失ったものは戻ってこなくても、新たに手に入れたものは失ってない――はず。
……だといいのだけど。

「あ」

いかんいかん、想いにふけるのも止そう。
で、布団の中から聞こえる寝息は誰なのかだ。　俺か他の誰かか。

そしてひと思いに布団を取り去った――

第０７５話　５．５－３　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

ＧＷなので調子に乗って全力こうしーん！

第075話　5．5－3　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

まったく酷い出オチだ。
本当に酷いな。　というか言うなればオチてさえいない。
なんだこのオチ。　僅かながら期待を抱いた俺がバカだったよ。
予測通り、期待はずれ。　これほど残念なものはない。

「やっぱ桐か」

ここまで予定調和で期待を裏切ってくれるコイツに感謝感激アメアラレだよ。

「はぁ……」

ホニさんだったら……本当に、心の奥底から、世界の中心から喜べたというのに。
これならまだユイの方が意外性があって良いよ、微笑レヴェルだけど。

「起きろー」

「すぅーすぅー」

何度みても、二度見しても見かけだけはいい。

将来素晴らしい美貌を手に入れるに違いないコイツだが……性格と喋りに難あり。

外面がピッカピカでも、中身が腐り朽ちてちゃなぁ――

「む、お主。　今失礼なことをふぁぁ」

「心詠みながらアクビしてんじゃねぇ」

「おはよう、主人公」

「その台詞には第1話冒頭辺りでお世話になりましたねぇ！」

懐かしい感じがするぜこのやろう。
でも数日しか経ってねぇぜこんちくしょう。

「……」

「む？　なにかわしの顔に付いてるかの？」

「……疫病神」

「お主！　つには口にも出したか！　わしは疫病神でなぞない！」

「じゃあ死神」

「それはキャラが被ってしまうじゃろう！」

「誰と」

「……黙秘」

はぁ……相変わらずだな、コイツ。

確かに最近構ってやれないからって、こんな堂々と部屋に踏み込んで来るとは……プライバシーの概念揺らぐね。

「わしは神は神でも只の神ではないぞ」

「ちり神、かトイレットペーパーだな」

「そっちのかみではないし、トイレットペーパーはもう紙が前提になっておるじゃろ！」

「じゃあなんなんだよ」

「”創造神”じゃ」

「――――」

「な、なんじゃ！　その冷たさが包み込む哀れみが籠った切ない眼は！　わしを凍らせる気か！」

「――……――……」

「モールス信号じゃと！？」

さて、コントもここまでしとくか……というか桐との会話は全部コントなのでこれからもコント同様だけど。

「で、なんで俺の部屋に居るんだ？」

「お、おにいちゃんの寝顔がみたかったから！」

「うわでた、大怪獣猫かぶり」

「おにいちゃん、ねごとで言ってたよ？　”桐好きだー結婚してくれー”って」

「ねぇよ、ニホンオオカミが生存してるぐらいにねぇよ」

「それに”俺……実はシスコンなんだ”って」

「……姉貴とかに対してなら、シスコンかもしれん。ただし桐を除外」

「きも！　おにいちゃんきも！」

「その口調でグサってくること言うなや！」

「だって～、シスコンとかマジありえなくな～い？」

「桐、お前の事が大好きだ」

「マジでか！」

「嘘だ」

「……」

「も、もう！　おにいちゃんてれちゃってぷんぷん」

「台詞が色々間違っておりませんでしょうか」

「そーいえばねー”桐を抱き枕にしないと……俺眠れないんだ、桐愛してるー！　うおおおおおお”って言ってたなぁ」

「桐を抱き枕にしないと……俺眠れないんだ、桐愛してるー！　うおおおおおおお（キリッ　だっておｗｗｗ」

「お主の言った寝言じゃぞ！？」

「ｗｗｗ冗談は顔と性格と、容姿だけにしろよｗｗｗ」

「かぶっとるかぶっとる！」

「さて、表にでろ」

「慎んでお断りします」

「慎まずお引き取りください」

「慎み返しじゃと！」

「そーいうことだから」

「ちょお主！　首元を掴むな！　そして扉の外に出すな！　更にそ

れを閉めるｎ」バタン。

……はぁ。　ギギィィ――

「お！　扉が開いた！　お主、わしを受け止めて……」

「朝飯いくかー」

「わしを朝食にするじゃと……助平な奴め、さぁ召しあがるがいい――って階段を下りてゆくな！　おい！」

今日も騒がしい一日の始まりだ！（マジで）

ふぁぁ……おはようございます、ナレーターです。
最近一人語りをやってくれるので私の出番が減って大助かりですね。

ああ、最近は普通に学園生活をエンジョイできて良い気分です。
さぁこれからもユウジと愉快な仲間達御一行様！　存分に一人語りに熱中してください！

「それで桐、どうやって入ったんだ？」

「２０もの能力の一つ”物体創造”を使って合鍵を作った」

「ってことはマスターキーはお前の手に渡っているというのか！」

「――ということも可能じゃが２０もの能力の一つ”針金細工”でホジホジっとな」

「……なんていうか、お前無駄に起用だよな」

「そ、そんなに褒めるでないぞ！　これぐらい朝飯前じゃ」

「しかし……その能力」

「なんじゃ？」

「ドロボーみてえだな」

「……まぁ盗んだものが無い訳ではないな」

「！　やりやがったな！」

「そう盗んでやったぞ――お主の心を」

「……」

「その無言という反応が一番困るじゃろう！　まて、まてというておろうに！」

なんだかんだ、この二人仲いいですよね……

第０７６話　５．５－４　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

今日を最後に更新下降すると思いますー

第076話　5．5－4　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

”とあるユウジの展開飛ばし”発動……だそうです。

朝食から学校支度、おはようから行ってきますまでの描写を省略。
そして玄関に出るユウジを律儀にも見送るホニ&桐。
ユイは裏口から抜けるという何か、後ろめたいことでもあるのかという家の出方をします。

後ろめたい……かは分かりませんが、隠している事。　知られてはいけないことは有りますけどね。
ということでユイとは交差点で再会……という運びの予定だそうです。

ユウジがユウジ姉と家を出て直ぐの交差点では「おはようー」「はい、おはようさん」とユイとユキが顔を合わせてました。
勿論、前者がユキで後者ユイですね。　そんな二人に「おはー」とユウジ「おはよう」とユウジ姉が二人に挨拶する。

なんともいつも通りの展開ですねー

少し歩けば、マサヒロと遭遇。　ということで5人メンバーが出来上がる訳ですね。
談笑しながら歩き続ければ、そこはあっという間に学校に。

「じゃあねー」と手を外れるんじゃないかくらいにブルンブルン振りながら去っていくユウジ姉を横目に。
ユウジ一向は足音は揃わないけれでも、下駄箱へ一心不乱かどうか

は分からないですが歩みを共に進めます。

そしてまた”とあるユウジの展開飛ばし”発動です。

で、教室です。

靴を履き替える描写なんて見飽きたのか定かではないですが、省略して教室に到着各自席に鞄を下ろし、最終的にはユウジ机に集合――……するはずでしたが、何故かユウジは「ちょっくら俺、用事があるからー」と言って教室から抜け出してしまいました。

集まってしまった残されるユウジ一向方々は途方に暮れますが、直ぐに他愛もない会話をし始めましたとさ。

「さてと……」

転校生とやらを探しに行くか！

意気込むユウジ。　なんとも元気です。　決意を籠めて歩きだしたその時です――

「そういえば転校生ってダレ？」

ふと疑問が浮かぶこのご時世、ご時世ではないですが瞬間。　そしてユウジは――

「……聞いてみるか」

まだ１－３からそう遠くは無かったので、直ぐに退却。

それは結構な速さで、おそらく自転車顔負けでしょう……あまり速さを感じない自転車というセレクトは仕様です。

「おーいユイ」

教室の戸を開け放って開口一番叫びました。
……と言っても叫んでないですが、声をかけたという表現が正しいですかね？

無理やりナレーターの仕事が増えたので、イタズラに誇張表現を多用しているのは仕様……気分です。
え、フォローになってないですか？

「なぁんだっ、ユウジ！」

歌舞伎役者顔負け……は流石に役者さんに失礼ですが、ちゃちい歌舞伎役者のモノマネをしながら答えるユイ。
ノリが良くテンションが高いのは、芸人顔負け……は合ってるかもしれません。

「いやー、俺転校生の名前よく知らなくてさ。　情報の申し子ことユイが知ってるかなー、なんておれの浅い推測のもとで来たのだけど」

うわなんか、私ことナレーターみたいな口調になってる！
ころころテンションやらノリやら口調が変わるのは……スタッフの好みでしょうね。

「おおう、それなら前回教えた情報のみですぜ、ダンナ」

学年不明、４組所属、美人以下略……という情報が与えられていたユウジ。

「ははっ、なんてこった」

まさかの当て外れに、少し落胆するユウジ。　しかしこんなことでめげることは出来ません。

とにかく謝らないといけないのです。　やってしまったことを反省するために、まずは行動を起こすのです。

はやくも行き詰まりかと思えたユウジでしたが、思わぬ手を差し伸べてくれた方が居たのです――

「あー、転校生なら1年4組だよ？」

そう言ったのは、紛れもない……文章体では分かりにくいかと思われますがユキが言いました。

続けざまに――

「オルリス＝クランナさんって言うんだってー」

……だそうです。

ということはクランナ家のオルリスさんてことですねー　……あのスタッフさんＧＡＹＭ版間違えてません？　え、伏線ですか？　そうですか。

「へー……ユイなんで知ってるんだ？」

「それはね、こぉの非公式新聞！　私のゲタ箱に入ってたの」

なるそど、ゲタ箱描写が省略されたのにはこんな裏があったとは。
なんという偶然、なんという奇跡。　運がいいのか悪いのか、判断につきかねますけどね。

「よし、わかった！　ちょっと用事思い出したから行ってくるわ」

「というかなんで転校生聞いたのー」

ユキの声は届かないまま疾走していきました――

しかし思い出してください？　ここは1年の3組。　そして目標は4組。
予め説明しますが、1年は6組から成っていて、1～6が横一列廊下に並んでいる訳です。
更に意味不明な「クラスシャッフル」も行われていないので――

「隣だよな」

全力疾走は体力の無駄遣い。　僅か30mにも満たない距離に目標は有りました。
クラスに入って転校生を探し……謝ることにしたようです。

そして、クラスに近づいたその時その刹那。　教室の戸か前触れなく不意に引かれました――

「！」

現れたのは、サラサラ金髪ロングヘアーの髪。
そんな長い髪をどうやって手入れすればそこまでサラサラのキンキラリンになるのか同じ女性として興味がある私が居ます。

ええと、つまり。

転校生のお出ましです。

オルリス＝クランナとの再会です。

……はぁはぁ。なんですかこの長文早口は！
ナレーター仕事入ったばっかりにこれですか！
キツいですって！　ブランク考えて下さいとスタッフ！

第077話　5．5－5　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

GW終了のお知らせ。
今回は死ぬほど短い上に、次の更新は……？

第077話　5．5－5　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

うわぁ……いやさ。　訪れて初っ端から遭遇すか。
ええ……心の準備なんてする時間微塵も無いじゃん。

「……」

そう、目の前に転校生……ユイ曰くオルリス＝クランナがそこには居た。
彼女との距離はおよそ2メートル。　廊下の幅より少し短いくらいだ。
……彼女はこちらを見ておらず教室内部に顔が向かって居る。
さぁ、こちらに振り向いた瞬間どうなる！
というかどんな反応が来るのか恐ろしい。　ッ！　来た――

「……？」

かのじょ　は　ふしぎそう　に　かお　を　かしげている。
……どういうことなの？

「……えと、おはようございます」

控えめに挨拶してくる彼女……え？　覚えてないのか？

いやいや！　それはねぇよ！
あんなことされて黙ってられるかよ！　とりあえず――

「あの時はすいませんでしたァッ」

謝った。

腰を４５度曲げて、恐らく結構綺麗なお辞儀。
その声は廊下中かは定かではないが、ちょっと響くぐらいに叫んだ。

「……」

反応がない……

「……っ！」

あ、なんか驚いてる……？

「あ、あなたでしたのねっ！　あんなことをよくも平然と！」

えええええええええ！？　このタイミングで気付いたんですか！

謎の展開のまま、転校生ことオルリスの回想編に続きます――

第０７８話　５．５－６　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

まるうつし
ＧＡＹＭ版７話より－

第078話　5．5－6　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

1日戻りますー

五月六日

ユウジが転校生を押し倒したその丁度その時です。
喧騒に溢れる廊下の中で一際大きな叫び声が響いていきました。

「きゃあああああああああああああああああっ」

廊下の学生たちは話すの止め一斉に視線は転校生とユウジに集まりました。

「い……いやあああああああああああああああああっ!?」

しかし当の転校生は、陸上部員もびっくりの素晴らしき速さで走り去り、いつのまにかユウジ1人が取り残されます。
そうして未だ廊下を全力ダッシュしていく転校生、後を眼鏡の彼女が追って行きます……分からない方は読み返してください（？）
まぁ眼鏡の彼女というのは転校生がクラスで少しお世話になったクラスメイトです、どうやら眼鏡の彼女は転校生を気にかけているようです。

そうして走り続け転校生は1年廊下から離れ、昇降口に辿りつきます。
息を切らし肩を上下させながら下駄箱手を付く彼女。

「オルリスさん……」

追っていた眼鏡の彼女も遅れて、こちらも息を切らしながらもやってきます。
ちなみに転校生の名前はオルリス＝クランナだそうです、生徒会の話中で会長がクランナと呼んでいたのはそう言う訳でしょう。

「木山さんですか……はぁはぁ、どうしたんです？」

眼鏡の彼女＝木山さんのようです、描写が無かったですが授業合間の休み時間にでも教えてもらったのでしょうか？

「どうしたって……オルリスさんが男子とぶつかって、そのまま全速力で逃げるから……」

「ああ、ごめんなさい……走らせてしまったのですね……」

貴女に早速迷惑をかけてしまいましたわ……それにしてもぶつかった……ッ！？

思わず必死で逃げてしまいましたが、どどどどどういうことなんですのっ！？
み、みみみ見ず知らずの男にむ、胸を揉まれ……さ、触られてしまうなんてっ！
この国で言う「変態」という野蛮人かつ犯罪者ですわ、我が国な

ら死罪に値する侮辱行為というですのに！
　最低最悪鬼畜下劣な人として終わっている最低人間ですっ！　は、恥ずかしさもありましたが……今では怒りで一杯ですわ。
　何故私がこのような辱めを受けねばなりませんのですかっ！？く、くやしいですわ……本来ならば四伎を奪ってもお釣りがくるぐらいですっ！
　……しかし私は心が広いのです、一切口を聞かないというこちらでは「しかと」と呼ばれる手段で仕返しさせてもらいますわ。
　もし私が許すとすれば、今回の事で社会的抹殺、制裁を受けた後の時ですわ、それ以外は認めませんっ！

「それでオルリスさん……大丈夫？」

「はい……なんとか落ち着いてきました、ご心配をおかけしました」

「そう、良かった……」

　木山さんは心から心配してくれてるようですわね……それにしても本当に頭が冷めてきましたわ。
　だとしても！　あの男の事は絶対に許せませんわっ！

「でも本当にあの男子最低だね、オルリスさんにぶつかった挙句倒すなんて……」

「そ、その通りです……」

　心配してくださるのは本当に有りがたいのですが……また思い出してきましたわ、忌々しいあの……顔？

っ！？

お、覚えてないですわ……っ！
急いでいたが故に、忌々しいあの男の顔さえ覚えることが出来ませんでしたわっ！
あの時は必死で、一目散に走っていましたから……

「オルリスさん、そろそろ教室に戻りませんか？　もうそろそろ授業が始まりますし」

「そ、そうですねっ！　付き合わせてしまってすみません、じゃあ教室に帰りましょうか」

「はい、行きましょう」

何にせよ次会った時が、あの男子の最後ですわっ！
……って覚えてないのにどうすればいいんですのっ！？
ああ……困りましたわ、復讐がこれでは出来ません……

オルリスさん……地味に危ないことばかり考えていてナレーターの私でも寒気がしましたよ！
そういえば「我が国」と言っていましたが、それはかつての母国のことで良いのでしょうか？
オルリスさんの自己紹介がカットされてるだけに私にはよく分かりません……

第０７９話　５．５－７　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

なお今話はＧＡＹＭ版の７話エピソードの一部を再構成して挿入しています。

ユニークアクセス２００００人、総合アクセス２４００００人超えました！

お読み頂きありがとうございます！
また更新が滞り始めましたが、ゆっくりとやっていこうと思いますのでよろしくおねがいしますー

ルートが開始された最新版もよろしくですー

クソゲヱリミックス！！
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

第079話　5．5－7　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

元の時間まで戻りますね。
やられた相手がユウジと気付いた途端に顔を真っ赤にしてビシっと指差すオルリス。

「ちょ、ちょっとあなた！」

もうこれ以上の赤が表現出来ないぐらいに茹であがった顔のオルリスがユウジに向かって叫びました。

「は、はい！？」

思わずその気に押され、うろたえながらも答えるユウジ……するとオルリスはつかつか歩き出し、ユウジへ向かいます。

「ちょっと、こちらへ来てくださいっ」

赤面した顔を隠すように俯いたオルリスは、大声で叫ぶとユウジの腕辺りのワイシャツを掴み歩きだします。
……どうやら教室前から違う場所へユウジを誘導したいようです。

「あ、ああ……」

言われるがまま、されるがままに連行されていくユウジ。
二人は廊下を少し歩いたところで一度立ち止まりました。　ユウジは冷や汗を掻き、オルリスは羞恥のせいか俯いています。
そしてユウジを引いてつかつかと階段を降りはじめます……そう、向かった先は――

「……ええと」

良く来るな……ここ。

そう。　ここは桐に連れ込まれたり、姫城に連れ込まれて殺されかけた倉庫入り口かつ半地下。

「あ、あなた……っ」

とりあえず、謝ろう。

「本当にすまなかった……申し開きできない」

言い訳なんて出来ないだろう。

「あ、あなたはなんてことを私に……」

そういう彼女は顔をまた赤らめて行く……そりゃそうだよな。

「む、胸を触る……なんて破廉恥なことを、ぬけぬけと！」

ぬけぬけとはやったつもりは……少し揉んだな、ああぬけぬけと。

ぬけぬけ……ですね、確かに。　でも物凄い謝ってますよねユウジ……？　回数の問題じゃないですが。

「すみませんでしたッ！」

「……許すつもりはないですわ」

「許されないとは思ってる……何か罪滅ぼしというか、償いはなんでもするつもりだ」

「……そんな猶予与えると思って？」

「……」

まぁ、そうだよな……嫌らしいにも程があるよな。

「……それで」

パシャ。

不意に音が聞こえた。

カメラのシャッターが切られたような、そんな乾いた音が僅かに階段に反響した。

「……今、何か聞こえませんでした？」

「え、あ……聞こえた。　何かシャッターが切られるような――」

「！」

シャッターと聞いた途端にしばし彼女は硬直した……？　あの音は一体なんだったんだ？

「……長居は無用ですわ。　ここに連れ込んだのも、あなたに聞く事があったからですわ」

「え？」

「……何故あんなことをしたんですの？」

「！　い、いや……友人に物を盗られて、それを追うの夢中で……前を見てなくて」

ついしどろもどろというか、自信なさげな言い方になってしまった。

「……嘘ですわね」

「信じちゃ貰えないだろうが……この通りだ」

俺は頭を下げる……事故とはいえ、彼女が実害を被ったのには違いない。

「……ふん、口でならなんとでも言えますわ」

「――本当に悪かった、償えることがあるなら言ってくれ」

俺はとにかく頭を下げ続ける。　許しを乞うとまでは行かないが、何か出来ることがあれば――

「――」

俺はただ頭を下げ続けた……許されないことぐらいわかってた。

「……これ以上、私に話しかけないで下さい。　私の目の前から姿を消してくれればもう何も望みません。　あなたに出来るのはその程度の事です」

遠ざかっていく彼女の足音だけが耳に響いてくる――

「――」

1分経たぬ間に、彼女足音は消えうせ。　俺は一人取り残された。

……まぁ、これは仕方ないですね。　少しずつこのピアノ線のように張りつめたオルリスとの空気が和らぐキッカケが出来れば良いのですが――

第０８０話　５．５－８　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

放置してすんません、ちょっと忙しかったもので
ＧＹＡＭ版に比べて、各キャラとな絡みを多くしてるのが特徴です
ｌ

第０８０話　５．５－８　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

……とーいうことで、関係根絶という最悪の展開に。
いや、仕方ないのだろうけどさ。　地味にショックでかいぞコレ。

「はぁ……」

鬱だ●のう。　――までは行かないが、朝っぱらからドンヨリでショボリだ。
１日の始まりのスタートダッシュを全力で滑り転んだ訳だ。

はぁ。

「どしたー　ユウジ」

「おお……」

話しかけてきたのはユイだ。　いやなんというかね、鬱なんですよ。

「元気がないな！　元気があればなんでもできるっ！」

某格闘家じゃあるまいし、元気があっても関係回復は無理でしょうよ。

「いやー　なんかね、朝から」

「そうか欲求不満か」

「……煩悩しかねぇのか、お前の頭は」

「ゲーム脳ならぬギャルゲ脳ならあるぞ！」

「凄まじい程に日常生活で役立たずだな」

「いや、あるぞ！　例えばユキさんや姫城さんやユウジを落とす為に必要だ」

「……なんで俺入ってんの？」

「そりゃもう、ワタクシの悩殺セクシー男共イチコロでエクセレントなヴォイスでな」

「それは悩殺というより洗脳とか催眠術に近いんじゃないか？」

「失礼な！　そんな失礼なユウジきゅんにはお仕置きしちゃうぞ☆」

「――――」

「む、無反応だと！　おかしい。　何かがおかしいっ！」

「狂った人間ほど自分と周囲の差異が解らず、自分は正常だと思いこんでいる――」

「ネトラジではそれなりに食いついてくるというのに……」

食いつしてしまったなんて可哀想な方々だ、現物見せられたら卒倒するだろうな……ちなみにネトラジにはあえて突っ込まない。

「まぁこれで”これまでのあらすじ”を話し終えた訳だが」

「粗すぎて訳わかんねぇし、そもそも何のあらすじだよ」

「そりゃ、アタシのサクセスストーリーに決まってるだろ？」

「……もはや意味わかんねぇよ」

……ここに病院を建てよう。

そう俺は思った。

なるほど、予てより理解出来ない事はあったがいよいよ解らなくなってきた。

常人には理解できない脳内回路なのだろう、人類を超越し過ぎてどうでもよくなってしまった感がある。

まぁ、長く思考しても時間の浪費甚だしいのでここで止めておこう。

しかしだ……落ち込んでる俺見つけて話しかけて、阿呆な話題をふっかけてきた訳だけども――

「まぁ、ありがとよ」

いちおう気を使って、励ましてくれたんだろう……と解釈しておく。

ユイも結構不器用だからな、コイツなりの励まし方なんだろう…

…と良い方向で解釈。

「ん？　何の話だ？」

「いや」

俺のお礼サーヴィスは一回限りなのでご了承ください。

「そういや、ユキは？」

ユイは来てくれたのに本命本命大本命のユキさんが来てくれないなんて……っ！

……いやまぁそれは冗談として、教室での姿が見えないから不審に思った訳で。

「ん？　となりの女子らと話してたぞぉ」

「ほぉ、そりゃ仲の良い方々なのか？」

「うむ、おれが知ってる限りではそうだぬ。……いや伏線とかじゃないぞ？」

何の伏線だよ。

そっかー、そういえば設定ではユキは男子女子共々人気があるんだったな。

それはこのクラスだけでも無いだろうし、他の教室もしくは学校中に友人が居るのだろう。

「ん？　ユキって人気なんだよな」

「おう、ファンクラブまで存在するぞ」

おお、そりゃ凄い。

ユキさんぱねぇ！　マジ惚れたッス！　ってか惚れてるっす！

「ちなみにアタシは――シングルナンバーだ」

すごいのか……それは？

「ファンクラブは公認なのか？」

「いや」

だめじゃねぇーか！

「……ある一つの逸話として、伝説のゼロナンバーを所有する者がいるらしい」

「へぇ」

どうでもいい。

「そいつは、他の女子にもモテて」

は？

「かつ長い付き合い」

あ？

「更には迎えにまで来てもらっている」

ざけんなよっ！　そんな羨まし……げふんげふん。　そんな妬ましい程の交友関係を築いている野郎が居るだとッ！

「ちなみソイツの苗字は――シモノだ」

「俺じゃねぇーか！」

そう見られてんのか！　俺モテてるようにみえるのか！

「こぉの自意識過剰野郎がぁっ！」

「ぐはっ」

自分の席に座っていたら、いきなりユイからアッパーを食らった。

「……な、なぜ」

「お前がゼロナンバーな訳ねぇ！　それにシモノだなんて苗字じゃねぇだろ！」

「いやいや、俺シモノだよ？　シモノユウジだよ？」

「証拠みせんかいっ、ゴルァッ」

「はい」

生徒手帳を即座に取り出し見せた。

「シモノ……ユウジだとッ！　まさか、そんなはずは……」

「知らなかったのかよ……」

「いや、てっきりユウジが苗字でシモノが名前だと」

「……ケンカ売ってんのか？」

「ははっ！　じょーくに決まってるだろぉボーイ」

うぜえええええええ！

「ということはゼロナンバーなら会員証を持ってるはずだが……」

「そんなの……持って」

財布には入ってないし……あ。

「生徒手帳返却」

「どぞ」

「……あったよ」

みよ、この金色輝くゴールドカード。

ヨド●シで使えるポイントカードじゃないぞ、そのカードに並ぶ数字は「００００００」

「おわ、まさか本当にゼロナンバーとわ！」

「いや、俺も知らなかった」

ってか何で持ってんだ？　コレ。

「……1万円でどうだ？」

「いや……売らねぇよ？」

「それとも……体で支払えってことでせうか！」

「なんでだよ！　お前の体には微塵の興味もねぇよ！」

「ショック！　ユイにゃんこと私はかつてないほどのショック！」

「いや、ねぇよ」

「……し、失礼な。　アタシだって脱げば――」

「脱ぐなよ？」

「……駄目か」

「駄目だ、全然駄目だ」

「……ふふっ！　プール開きの日を楽しみにするがいい！　ふははははっ！」

……と言ってどっかに走り去ってしまった。

そろそろ休み時間も終わるな、と思ったその刹那にチャイムが鳴り始めるのだった。

第０８１話　５．５－９　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

そろそろ話に動きが欲しいですね……

第０８１話　５．５－９　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

はい、午前の授業が終了っと。
ということで恒例の昼食タイム！

「ユウジよ」

「ん？」

「しっかり授業を受けていたのか？」

「藪から棒に何を言ってんだ」

「受けたのか？」

「いや……そりゃまぁ」

なんでこんなこと聞かれにゃならんのだ。
テストに弱すぎる俺は授業点で点数稼ぎせねばならんのだから！

もちろん優等生さながらのピッシリ伸ばした背筋とか以下略。

「いけねぇ！」

「は？」

「模範的な態度なんて取ったら……消されるぞ」

「……お前は誰と戦っているんだ」

まったくユイの言うことが俺にはさっぱりだ。……元ネタがあるんだろうけど、アニメを見る暇さえ無い今の俺にはわからん。

「ねー、ユウジ」

「お？」

ミニトマトを口に放りこんでいたその時にユキが話しかけてきた。

「ユウジのお弁当、いつも色が豊かだよね？」

ごっくんと、ミニトマトを喉奥へ押し込めて弁当を見る。

ご飯、トマトとレタスのサラダ、半分に切ったコロッケ、鮭、卵焼き、アスパラの肉巻きと色鮮やか。

「姉貴がいつも作ってくれるんだよな」

「お姉さんが？」

「ああ、毎朝早く起きて作ってくれてるんだ」

「へー」

「本当、色々助かってるよ。　姉貴には――」

弁当だけでなく、親不在のこの家を支えてくれている。

それに生徒会の実質会長。　余裕なんて無いはずなのに――

なのに、俺への態度は昔から変わってない。

いや、そりゃ高校生の身だから違う点があるけども。

根本の姉貴は変わっていない、幼いあの頃から変わってない。

過剰なスキンシップも俺が照れて煙たがっているだけ。

実際のところすごく嬉しくて、有りがたい。

改めて考えて、姉貴は俺にとって大切な人なのだろうと思う。

一人の、宇宙でたった一つの家族の一人として。

「……たまには俺も恩返ししたいもんだ」

そんな風にボソりと呟いた。

「してあげたらいいかもねっ」

小さい呟きに返してくれるユキ。

「そうだな……久しぶりに料理つくるかな」

姉貴に比べたらザンネンクオリティだけども、まぁ俺なりにやってみることとしよう。

……姉貴が夕食を作り出す前に伝えておかないとな。

チャイムが鳴る前に弁当を頂くこととしよう――

気分的なこともあるだろうが、今日の弁当はいつもより格段に美味しく感じた。

まったく、俺はひょうきんな奴だよな。

第０８２話　５．５－１０　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

ＧＡＹＭ版もシナリオ進行中！

ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

ワるきゅーレみて泣いた、笑った、死んだ。

第０８２話　５．５－１０　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

「――送信っと」

授業終わりの教室で、教師がずらかったのを見計らって携帯を取り出した。

それで「今日俺が夕食つくるから適当に食材買って帰るけど、いいか？」と姉貴へのメールを打った。

２０秒経たぬ間にブブブブブッ……

「はやっ！？」

バイブーレションが鳴ったので取り出すと、やはり姉貴からの返信が届いていた。

『え！　ユウくんが夕ご飯を！？　いいよ！　でも大変じゃない？無理しないでいいんだよ？』

まったく、少しは弟にも無理させろ……そんな無理なことではないけれども。

で「ただ作りたくなっただけだから、姉貴が良ければつくる」送信っと。

ブブブブブ……だから、はえぇよっ！

携帯閉じ終わる直前に返してくるとかどんだけ早打ちしてんだよ……

『そ、そう？　じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな……？　私は晩御飯の1時間前には帰るからっ！』

……何故晩御飯の1時間前？　まぁいっか。　とりあえず商店街に向かうとしよう。

「ユキ、今日ちょっと買い物あるからさ。　ここで」

「うん！　じゃあまた明日ね！」

ユキさんは駆けて行く、話が分かってくれて嬉しい。
あ、ちなみに補足しておくと、昼休みの最後に――

ピンポーンパーンポーン『生徒会役員に告ぐ、今日の生徒会は有りません以上！』ブツッ

と会長のアナウンスが入った。　ということで生徒会はございません、やっほい！
そんな訳で帰る訳だが……姉貴はなんで残ってるんだ？　まぁしょっちゅうあることだし気にしないで良いんだけども。

そうして帰路ではなく商店街方面へと足を向けていたその時だった。

「あれ、ユウジ様……？」

少し歩いた学校の塀伝いのところで姫城さんと遭遇。

描写してないだけで昼食も一緒にしたので、昼食振りの遭遇。

「おう」

「これからどちらへ？　家とは別方向のようですが……」

「ああ、夕飯の食材買いに商店街にな」

「！　わ、私もご一緒していいですか！」

「そういや、姫城さんの家って商店街方面だったっけか？」

「は、はいっ！　なんなら上がって行きますか！？」

速い！　展開がすこぶる速いぞ！

いや、きなりアポ無しで家に上がるのは流石に気が引けるぞ。

「いや、遠慮しとく」

「……そうですか」

すっげぇ残念そうな顔してるな……少しきっぱりと言い過ぎたかな。

「まぁ、機会があったらよろしく頼むよ」

「！　は、はい！」

途端に笑顔。　まぁ慕ってくれるのは普通に嬉しいものだ。

商店街までは直ぐではない、少し歩いた先にある。

「そういや、なんで塀の前に居たんだ？」

「え」

メールを打ったりと、ぱぱっと帰る学生よりは遅く校門を出たというのに。

比較的はやくに教室を出る彼女が何故ここに居たのだろう？

「そ、それは……」

「？」

「今日、買い物をすると聴い……あっ」

聴いた結果待ち伏せか……まさかの計算づくかよ！

「いえ、なんとなくユウジ様が来ると思って」

それはそれで怖いから！　なんで分かったし！

「でも嬉しいです……ユウジ様と二人で話す機会なんてなかなか有りませんから……」

「……」

まぁ、な。
ユキやユイおは話す機会があっても、姫城との機会はなかなか無い。
前回の姫城との弁当以来か？
確かに貴重かもしれん。
「うん、そうだな。　姫城と話す機会が出来て俺もラッキーだ」
「あぅっ……」
途端に彼女は俯いた……どしたの？
心なしか少し覗く顔も赤く見える……？
思考しながら商店街へと歩を進める。

第０８３話　５．５－１１　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

日曜更新しゅうりょー

第０８３話　５．５－１１　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

「ここでいいか」

商店街に埋め込まれた全国チェーンで展開するスーパーに俺はやってきた。

揃いも良いし、それなりに安いからたまたま付いて行った時の姉貴曰く重宝してるらしい。

「ここですか……品ぞろえが良いですよね」

「ああ、ここら辺で買うならここだな。　……そういえば姫城さん、時間とか大丈夫か？」

「え、大丈夫です！　私も行きます！」

「……付き合わせちゃって悪いな」

「そんなことありませんよ！」

という訳で俺と姫城さんはスーパーへと入って行く――

買い出し終了。

「あー買った買った。　これでいいだろー」

「？　あの昼食時、聞こえていたのですが……お弁当はお姉さまが

作っているということは食全般を作っているのですか？」

「ああ。　……でもたまには俺も作ろうかなと思って、今日は俺が料理するから食材の買い出しに来たんだよな」

「えっ、ユウジ様がですか？」

「まぁね」

「……（羨ましいなぁ）」

「え」

「いえ、なんでも！」

もしかして誘ってあげたら喜んだかもしれないけど（って言い方がエラソーだな）

俺も誇れる程料理は上手くないしロクなものも振舞えないだろうからな。

更に何もナシに連れ帰ったら姉貴と桐からどんな反応をいただけるかわからない。

ってか、ユイ居る時点でアウトじゃん。

あー、あぶねーあぶねー。

「じゃあ、私はこれで（とっても惜しいですが）」

「ああ、今日はありがとな」

と言って姫城さんを見送る、数mおきに振り返ってお辞儀するのは流石としか。

見えなくなったところで、俺は歩んできた道を引き返して家へと向かうことにしよう。

家に着いたのは4時半ぐらいのことで。

「おかえりー！」

「おかえりじゃー」

癒しのホニ様と、どうでもいい桐と――

「帰ったか……ユウジ」

――と、すっごい偉そうなユイがお出迎え。

「姉貴は？」

「ほう……ミナ姉のことを先に気にするとは、貴さまシスコンだな？」

「それだとお前ら全員が対象じゃねーかっ！」

「（ポッ）」

「ホニさん、赤くならないでください」

というか妹対象で何故赤く!?

「（ポッポ）」

「桐黙れ」

どこぞの総理かよ。

「（すばらすぃ）」

「この家族ノリ良過ぎだろ……」

正直反応に困る。

「ユウジさん、ユウジさんのお姉さんはまだだよ？」

「そっか、ありがとなホニさん（ちっ、ホニさん以外使えねぇ奴らだ）」

本当にダメな奴らだ……もちろんホニさんは至高ですよ？

で、なんか桐が俺の手元見下ろしてるけど……？

「お？　そういえばお主、何か買ってきたのか？」

ああ、この食材群か。

「ああ、飯の食材。　今日の飯は俺がつくるからな」

「え〜」

「……なんだよ、その嫌な驚き方は」

「お、お主！　飯などつくれたのか！？」

「ああ、一応はな」

「……今日の献立は？」

「豚の生姜焼きにキャベツとニンジンサラダとあさりダシの味噌汁と白飯……という簡単なメニューだ」

「簡単じゃと……！」

「ユウジさん、料理出来るんだ！　我にもいつか教えてね」

「もちろん、いいぞ」

ホニさん流石です！　もちろんお教え出来ることはなんなりと！

「ユウジ、お前飯つくれたんだな……」

「いやいや！　なんで俺が料理することが家族総動員で驚かれてんの！？」

「……いや、こういう生活面は出来ないものと」

「何を言う、姉貴がさしてくれないだけだ！」

「……」

「（……隠されたユウジのスキルが露わになったのぅ）」

「（ユウジさん、流石です！）」

「（むぅ……アタシはめっぽう出来ないというのに、ユウジの野郎！）」

女子勢がヒソヒソ話始めた……まぁいいか、とりあえず夕食の準備を――

「ただいまっ！」

……駄弁っていたせいか、いつの間にか姉貴が帰って来ていた。

第０８４話　５．５－１２　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

イイハナシカナー？

第０８４話　５．５－１２　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

何故か息を切らして帰ってきた姉貴。
気付くと、夕食を作り始めた方がよさげな時間になっていた。

「あうあう……ユウくん、本当に夕食甘えちゃっていいの？」

キッチンに買い物袋を持って向かうと、心配そうな表情で姉貴も着いて来た。

「だからいいんだって、俺が作りたいだけだから。　迷惑なら止めるけどさ」

「ううんっ、ううん！　ううんっ！　違うよ！　そんな訳ないよっ！」

ぶるんぶるんと首を横へ振って否定してくれた。　よかった、迷惑じゃなくて。

「なら、ちょっくら作らせて貰うわ」

腕まくりをしながらもキッチンに辿りつき、買い物袋を地面へと下ろす。

「ユウくんの夕食かぁ……ワクワク！」

「切り替えはええっすね、姉貴。　あっ……そういえば姉貴。　エプロン借りるよ？」

「うんっ、どうぞどうぞ！（あとでユウくんの残り香をっ）」

ぶるっ……なんか寒気がした。　風邪ではなさそうだな……何故かはわからないけども。

さてと、鈍っている腕で料理開始しようとするかね。

以下結果。

見た目はそこまで綺麗に出来ていないが、味は俺的に無難に出来た。

俺の料理は久しぶりな割には、まぁまぁ出来たと自負していた。

桐が「普通にウマイじゃと……っ！」と箸をカランと卓袱台に落としたのは地味に笑えた。

ホニさんの食べっぷりには料理をした身としては嬉しい物があるね。　「ユウジさん美味しい！　美味しいよ！」お世辞でも嬉しい。

ユイはというと「っ！」最初こそ驚いたもののその後は淡々と食べ続け完食した後に――

「ふ、ふん！　ユウジにしては美味しいんじゃない？　ユウジにしては、よ！　勘違いしないでよね！」

と、何故かツンデレ口調で言われた――

「完食したのは、買ってきた素材がもったいなかったからよ！　美味しかったなんて言ってやらないんだからね！」

……最初こそイラっとしたが、ユイはユイで不器用だからな。

急いで食べたせいで口元に食べカスが残り、頬が少なからず赤かったのはかなり可笑しかった。

姉貴は……涙流してまで「おいしいよユウくん」と言いながら食べてくれたのだが、反応がしづらかった。

「また、つくるよ」と言ったら姉貴が倒れた。……まったく、嬉しさのあまりに卒倒するなんてあまり見たことが無い。

倒れたと言っても、3秒後に復活したのでそれほど重くは扱わないことにしよう。

調理して分かる料理の難しさ。　姉貴の常に劇ウマ料理には太刀打ちしようがない。

本当姉貴ってのは、凄い人だと再認識させられた。　流石姉貴。

しかし、たまには料理するのも良いものだ……結構クセになるかもしれん。

姉貴の荷が軽くなればと考えてのことだったが、思ったより楽しかったのでしばらくしない内に食事をつくるかもしれない。

……ネットで、色々料理のレシピを探してみようかね。

姉貴に仕事を全て取ったら、逆に怒られそうなので。

少しずつ、少しずーつ。　俺にシフトしていければいいかな。

それで、姉貴に余裕・自分の時間が出来たらよいなと思う。

姉貴は大切な家族なだけに、自分だけの時間も大切にして欲しいというのは……弟の俺が考えても良いことだろう？

第０８５話　５．５－１３　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

更新数９０越えた、最近ペースがゆっくりになったとは言え続いているのが驚きだ。

第０８５話　５．５－１３　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

ということで自室。

「いやはや、お主に家事の才があろうとはな……」

部屋に先に侵入しているという事にはもうツッコまないとして。

「少なからずバカにしてんだろ！？」

何にも貢献してないロリ被りの老婆に言われたくないわ！

「老婆じゃと！？　これでもわしはぴっちぴちの１０歳じゃ」

ぴっちぴちの表現が既に古い。

というか――

「てか、お前１０歳だったんだな」

年齢詐称するなよ。

「失礼じゃな！　わしは立派な１０歳じゃぞ」

１０歳児がそんな喋りを展開するのかよ、どんだけ今のガキはませてんだ。

「ふん、ガキ呼ばわり出来る年でもないじゃろうに」

……本当にお前何歳だよ。

「体は１０歳心も１０さ――」

「大嘘つくなっ！」

というか、相変わらず何者なんだ桐って。

「いんやぁ、ユウジ分かってない。　分かってないね！　このギャップがいいんだろうに！」

水を差す……という表現が違うな。　油を差すような聴きなれた声が――

「いや、勝手に入るなよ」

「邪魔するぞ☆」

ユイが何故か侵入していた。　今日もまた面倒臭くなりそうだ。

「邪魔すんな、おっとそれはユイのみならず桐にも適応されるからな」

「……わしの生命は、お主の部屋に来ないと持たないのじゃ。　ここに来ると瀕死状態から回復出来るのじゃ」

「この部屋はセーブポイントじゃなく、ポケ●ンセンターみたいな代物なのか！？」

あのタダで回復出来るっていうご都合主義甚だしい設備なのか、ここは。

「てか、瀕死状態になる状況なんてあるのかよ……」

「うむ。　わしが能力を使うたびに命が削られていくのじゃ」

「……今日も何か使ったのか？」

「”心詠”……だったかの」

「さっきさりげなく使ってただろ！？　命削ってまで俺の心詠みたいんか！」

「まぁ、この部屋に来れば何の問題もないしのう。　だから今のわしはハッスルでバッチグーじゃ」

なんだよ、その死語連発。

「……ところでユウジにキロリ。　その能力とか心詠みとかいう中二病的発想を何故話しているのでせう？」

「うっ……」

そうだった。　そういえばこの部屋にはユイが居るんだった。

ったく！　描写が適当だから居るような居ないような曖昧になる

んだよっ！

こういうの……アレだろ？　「一般人に知られたら～」なんちゃらかんたらなんだろ？

爆発したり消えたりしなきゃいけないんだろ？　……てか、そしたらこの時点で俺は一般人じゃねぇのか！

俺は面倒だから特に手伝わないが、さてどう誤魔化す……？

「わしの能力じゃ」

「言っちゃったよこの人！」

いいのか！　それでいいのか！

「へぇ、そうなのか！　……心詠みは、察するに心を読む能力でガスね！」

まぁ文字通りだからな。

「そうじゃぞ、ユイ。　わしはお主の心を見透かすことが出来る！」

「まじでかー！　じゃあ当ててみてくれー」

「よかろう……ふーむ。　なるほど。　そういうことか」

何が見えてんだ……？

「”キロリ！キロリ！キロリ！キロリぅぅううわぁあああああ

あああああああああああああああああん！！！
あぁあああああ…ああ…あっあっー！あぁあああああああ！！！キロリキロリキロリぅううぅわぁあああああ！！！
あぁクンカクンカ！クンカクンカ！スーハースーハー！スーハースーハー！いい匂いだなぁ（ｒｙ〝じゃ！　ってなんじゃこれはっ！？」

ああ、４期まだかな……

「ユウジ、今わしの見たのは何なんじゃ！？　お主は知っているのか！？」

「……まぁ、知らなくていいこともあるんじゃね？」

「知ってしもうたわ！　ユイの素性を思い切り知ってしもうたわ！」

まぁ、ひくわな。　俺も流石にひいてるけど見慣れてるから耐性が付いちまったよ。

「おお！　当たっりぃ、すごいなキロリ！　惚れ……見なおした！」

「惚れたと言おうとしたじゃろ！？」

「ううん、そんなことはない。　ユウジさえ居なけりゃ襲えたのになんて心の底から思ってる」

「隠す気が微塵もないじゃと！？」

「俺が居なけりゃって、ここは俺の部屋だ！」

「いいや違う、既にここはユウジの部屋などではない……そう、なんだ。　可愛い女の子ホイホイだな、うん！　アタシながら上手い！」

「うまかねぇよ！？」

それを証拠にユキを呼べてない……畜生、なんでこんな奴らばっかり。　奇人ホイホイじゃねぇか。

あっ、もちろんホニさんは違います。　そりゃあもう全力で違いますからね？

ナレーターの仕事が更に減って歓喜していたというのに、いざ現状みてみれば――

はぁ、何やってんですか……この人たちは。

第０８６話　５．５－１４　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（前書き）

ぼかぁ、ユイが好きだなぁ

第０８６話　５．５－１４　平和かは疑問だけど楽しい数日間。

「どうしてわしを見てくれないのかのう？」

「それは……坊やだからさ」

「いや、どちらかというと子娘じゃな」

……まだ居座るのかよコイツら。

そろそろ課題始めたいんだけど……五月蠅くて出来るかってーの！

「そういえばユウジは生徒会役員だったのだよな？」

「ああ、そうだけど？」

なんだ唐突に。　てか入ったの結構前だぞ？

「いや、若干話題になっていたのだよね。　ユキ様や姫城様との間でさ」

「えっ」

……そういえばユキには伝わっていると思うけど、姫城さんには一切伝えてなかったな。

一応言っておいた方がいいのだろうか……いや、案外情報網駆使して分かってたりして

図星というかその通りのようですよ？

『ふふふ、生徒会室のパイプ椅子に座るユウジ様かっこいい……私も入れれば、もっと話す時間が長くなるのかな……』

『それにしても女子が殆どですね……なんですか、あれは。　ユウジ様狙いまくりじゃないですか』

『羨ましい……妬ましい……殺したい――私はなんてことを口走って！』

いえ、常に似たような事口走ってる気がしますけど……

「てか、なんで話題に上がったんだ？」

「いやさユキ様が――」

『最近ユウジと帰れてないんだよね……まぁ仕方ないんだけど”』

ユキがだって！　嬉しい！　凄い嬉しい！　この流れなら言えるッ！

言ってみせるッ！

ユキぃいいいいい大好きだぁぁぁぁぁぁっ！

え？　もちろん心の中で完結ですよ？　そりゃあハズカシイですからねぇ。

俺がユキを好きなんてこと皆に言えないよぉ！

……一部には丸わかり、ですけどね。
そういえばユウジ、ユキ関係になると性格が変わってません？
というか壊れてません？　……最近ユキと話せていないせいで、ストレスでも溜まってるんでしょうね。

「そしたら姫城様が」

『（ブチッ）そ、そうなんですか。　そういえば、ユウジ様は放課後どこに？（あらかた知ってますけど）』

なんで聞いたんですか！？

「そしたらアタシが」

『ああ、生徒会に行ってるらしいよ。　活動があったり無かったりするみたいだけど』

『へ、へぇそうなんですか（そんなこと知ってます！　私が知りたいのは生徒会でどんなことをやってるかなんです！）』

『ここの生徒会って特殊だよね？　なんか所属人数が極端に少ないらしいけど……』

『うーん、風の噂だとスカウト制だとかなんとか』

『そうなんだー』

『私、入りたいです』

『いや、入り方がわからないんだよぬ』

『そ、そんなぁ……』

『まぁユウジとは放課後以外でも会えるし、こだわらないでいいんじゃないかな』

こだわってもいいんだよ！　俺はいつでも会いたいんだぜ！　エブリディなんだぜ？　アイラビューなんだぜー！

……ユウジ、落ち着いて。

「てな、話をしていた訳だ」

「そうでもいいが、ユイ声マネが上手いな」

「声優とアニメーター志望だからねっ！」

”と”って掛け持ちすんのかよ！

「あとは……お嫁さん」

『――――』

「反応しろや！」

「いや、こんな時どんな顔していいかわからなくてな」

「笑えばいいんじゃね？」

『ハハハッハハハッハハハ、フフフッフフッフ、ヒッヒヒヒヒッヒイィ』

「笑うなー！」

あ、ユイいじり面白い。

なんか別の世界のあなたもそんなこと言ってましたね……

「ユウジは知らないか？　生徒会に入る方法」

「いや知らん。　てかダラダラ集団だぞ？　女ばっかだし」

考えるとハーレムみたいだよな……面子が面子だからそれほど嬉しくないけど。

「――マテ。　今なんと言った」

「いや”マクド●ルドのポテトって思いのほか高いよね！”」

「絶対言ってねぇ！」

「うーん……”てかダラダラ集団だぞ？　女ばっかだし」

「ストップ」

「てか、ここまでなんだけど……」

「女ばかりぃ？」

「ああ。　姉貴が副会長、会長がロリで書記が黒女。　会計が……スポーツ系？　まぁみんな美女には違いないな」

「な、な……」

「な？」

「なんだってぇぇぇぇぇっ！」

「うおぃ！　声でけーよ！　鼓膜はじけ飛ぶところだったわっ！」

「……アタシ入るわ」

「いや、来るな」

「……ユウジがそういう考えなら、構わん」

「うん、分かってくれたならいいぞ」

「ミナ姉ぇ～」

「あっ、こいつ！」

コイツが生徒会に来られたら困る。

いやハーレムがうんちゃらかんちゃらじゃなくて。

事が更にややこしくなる！

ああ、来んなよ！　絶対来んなよ！

……フリじゃねぇよ？　フリじゃないって！

第０８６話　５．５－１４　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（後書き）

言ってしまうと感想が無いのは少々寂しいね。
テンポも悪いしやっぱダメなんかな……？

第０８７話　５．５－１５　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（終）　（前書

シリアル

第０８７話　５．５－１５　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（終）

「はぁ……やっと一人になった」

いつまでも、永遠に永久機関のごとく喋り続けそうだからな。
首根っこ掴んで部屋外に放り出してやった。　まぁ恒例だわな。
ユキは思いのほか軽かったのが意外でしたけども。

さてっと、これで明日の課題をやるとしますか。

「……」

課題と言っても国語のプリント一枚なので、おそらく３０分経たぬ間に終わるだろう。
書かれた本文を元に問題を繰り出す読解問題なので本分さえ読み込めば大体分かる。

そうして一気集中型の俺は、ちゃっちゃっと終わらせた。

「ふぅ……」

椅子に座り続けていて固くなった体をぼぐす為に腕をぐいっと上へと伸ばす。
疲れた。　今日も昨日も一昨日も。　なんとも疲れる日々だ。

だが、こういう日々は嫌いじゃない。　むしろ好きだ。
これぐらい慌ただしい方が、俺には実は丁度いい。

この日々は俺が”ルリキャベ”を買う前から実は始まっていて。

オタク系（？）にハマり始めるユキやマサヒロと出会ったその時から、この日々は始まりを迎えていたのかもしれない。

そうだとしたら、だ。

全ての終わりが中二の春で、全ての始まりが中三の春だったのだと思う。

中ニの春、と言っても卒業式・終業式シーズン真っただ中の終盤の方だ。

中ニの春と中三の春の間には1カ月も無いが、そこには大きな壁が有りガラリと世界が異なっていた。

思えば中ニまでの俺の日々はこの日々に近いけれども、やっぱり今の日々とは何かが違っていただろう。

そんな中ニの日々には俺は戻れない。役者は俺以外、舞台を去ってしまったのだから。

それも、俺が全ての根源で。　それ故俺は全てを失った。

そうして俺はこれこそ忘却の彼方へ忘れ去ることにした。

あの日々を、あの会話を、あの関係を。

そうでもしないと、俺は立ち直る事は出来なかったと思う。

だからあの日々に、どんなことがあったのか……少しずつ忘れて行く。

今は抽象的にしか覚えていない――

これで良かったのだ。

この日々を生きるにはそうするしかなかった。

上手く組み合わさったパズルほど、一つが少しズレるだけで崩れ去ってしまう。

かつての日々だけでなくこの日々も、人と人の関係も同じなのだろう。

ちょっとしたきっかけで全ては変わって、消えて、失う。

苦く辛く、後悔するような失敗をしてしまったからこそ。今度の日々は失いたくない。

誰も失いたくない、そして失わせない。

俺にとっての全ての人を、絶対に。

第０８７話　５．５－１５　平和かは疑問だけど楽しい数日間。（終）　（後書

残念ながら続きます

第０８８話　７－１　進む日常、始まりの時。　＜本文追加＞（前書き）

６話は前述の通りカットォ！
そして７話冒頭は６話の一エピソードですが、まぁ伏線なので。

丸写しではなく、若干変えているのでＧＡＹＭ版より伏線多目でお送り致しますー

（６月１９日追記　今確認したら５．５－１と内容が思い切り重複してる！？　すみません、色々とすみません！　７－１の方が修正版なので５．５－１を７－１版差し替えて、７－１を欠番扱いにします。　本当に申し訳ありません。３．１３、矛盾が発生しない程度に本文追加しました。

第０８８話　７－１　進む日常、始まりの時。　＜本文追加＞

ベッドに寝転がりながらふと思い出すのは今からほぼ一年前のこと。

四月の丁度この頃に、塞ぎ切りずっと俯きがちの鬱に支配された自分はつまらない「作業的な日常」を過ごしてきた。

一か月前はあんなにも和気あいあいと話していたのに。あの頃はたった三人だったけれども、それはそれはゆっくりと日々が進んでいた。

そんな日常を急かしてしまったのは紛れもなく俺で、そしてあの二人は――

最低な方向へ、最悪の展開へと発展し。もうきっと根暗なまま過ごしていくものだと、人と関わらないなら別にいいやと無関心になりながら。俺はどうでもよくなった日常を過ごしていた。

そんな時にユイやマサヒロに出会ったことを思い出す。

ユイとマサヒロと出会わなければこんなお気楽な性格が戻って来ることもなかっただろうし、どっぷりと「オタク」の道へとハマることも無かったかもしれない。

そして、彼女たちとも出会えなかっただろうと思う。

今の日々は一年前の出会いから続いていて、その出会いからの一年間も十分に楽しかったけれど。今はこんな色々なことの起る日常が嬉しい。

面倒、大変、睡眠時間返せ……色々思うこともあるが、それを踏まえてもこの日常は刺激的で未来み満ちている。

ゲームをクリアして、このゲーム世界を巻き込んだ日常を終わら

せる――そう最初は思っていたはずなのに。
今では違う思考や感情が芽生えている……のかもしれない。
中毒症状のように無我夢中になって、目が覚めれば初心の「ゲームを終わらせること」を思い出してしまうのかもしれない。
それでも俺はそんな中毒症状に甘えてしまいたい気持ちが大きい、きっとヒロインの数も多いしまだまだゲームが終わる日は遠いだろう。
それまででも、この日常を楽しめたら――今はそう思う。

その日見た夢は何か懐かしいものだった。
幼き自分と幼き姉らと遊ぶ様子、かつての日常も恋しいのに今の日常も楽しめたら――本当に自分は我儘なのだろう。
でも、夢の中まで深く考えなくてもいいじゃないか。かつての俺なら出ない発想に身を任せて、そんな心地よい夢を過ごしていった――

そんな夢をを久しぶりに見れたせいか、かつての出来事を吹っ切れたかのような感覚が目覚めた当初にはあった。
さきほどまで見ていた夢はかつての俺の出来事を清算する為だったようにも思える。
忘れはしないが、それをトラウマとして引き摺っていかないように、俺はそうして闇から光へ向かって行く――

第０８９話　７－２　進む日常、始まりの時。（前書き）

時間が無いので今日はこれで

第089話　7－2　進む日常、始まりの時。

闇の世界から光の世界へ。
目を瞑っていてもわかるほどに強い日差しが部屋へと注し込んでいるようだ。

うお、まぶしい。

カーテンは閉めたはずだからそれほど日光が攻撃してくることはないはずなんだが……

「くぁー、今日はよい天気じゃなー」

……聞きなれた声、というか聞き飽きた声。
似合わない老人しゃべりに、大きく成長が期待できる未来有望なその容姿。

そして神出鬼没で、なんでもアリなよくわからない奴。

「おぉ、グッドモーニングじゃ」

もちろんご察しのことと思うが、桐だ。
「なんでこの部屋に居るんだよ」などという意味が皆無な質問などしないのは、俺に耐性がつき始めたからであって。
まず起こす行動といえば――

「出てけ」

簡潔に済むが故にこのような乱暴口調だが、まぁ心境を考えると

大体は合っていると言っていい。
朝起床すれば、窓のカーテンを全開にしてお日様の大歓迎会を開催している訳だ。
一分一秒争う、というのは大げさだが朝の貴重な一人の時間を起きてそうそう迫害されているのである。
まったく、これが一回や二回なら苦笑して終わりなのだろうが、いい加減しつこい。

「素直になれない奴め、照れ隠しなのお見通しじゃ」

その見通している眼は腐りきってる違いない。

「侵入するがためにそんなチート能力使ってんじゃねぇ」

「えー、これこそ使い時じゃぞ？」

「大幅というか、まったく使いどころじゃないと思うぞ」

「まぁ、今後に備えた腕慣らしの意も含んでおるがの」

「今後にいったい何が待ってるんだよ……」

侵入する必要のある未来って、嫌な予感しかしないのは何故だろう……いや、だいたい分かってしまうけれども。

「ところで、お主」

「ん？」

「いつになったらわしの求愛に気づくのじゃ！？」

「求愛だったんだ、今までの！」

ただ弄りに来たり、遊びに来たり、からかいに来ただけだと思っていた。

しかし、これを聞いてしまったからには桐への見方が大きく変わるな――

「残念、俺はロリコンでないんだ」

「くぅ！　それではシスコンはどうなのじゃ！」

「シ、シスコン……！」

シス、シスター。

それは妹という魅惑の言葉、一時期はそんな言葉の虜になっていた気がする。

あ、もちろん桐じゃあないぞ。

まぁ、若気の至りって奴……かな？

「今はそうではないな」

「かつてはどうだったかのような言いまわしじゃな」

「言葉のアヤだ」

「違うじゃろ！」

かつてはそうだった。

しかし、今は違う訳で。

「……さてと、起きるかな」

「さぁお主、今すぐ目覚めの接吻を」

「いや、間に合ってます。」

「わしにしろと、言っておるのじゃ！　……いや、でもわしがしても良いというなら」

「間に合ってます。」

「……頬にでも駄目かの？」

「全力でお断りだ。　……早く1階に下りるぞ」

「くうぅ、まともに相手にしてくれんのか、お主は！？」

「……えっ、今まではてっきりギャグかと」

「バ、バカ者がああああああ」

こうして一日は始まるんだとさ。

ああまったく騒がしいったらありゃしない。

五月十日

第０９０話　７－３　進む日常、始まりの時。（前書き）

うわあああああ、使いまわし出来ねぇ！

使いまわし出来たら誰かさんの”デレ”が見れたというのに！

第０９０話　７－３　進む日常、始まりの時。

朝食を終え、桐に見送られながら家を出る。　今日は俺、姉貴、ユイの３人登校で、通学路をゆっくりとしたスピードを歩いていく。

「ミナ姉、今日も良い天気ですねー」

「うんっ！　これだけ晴天だと、干しておいた洗濯物はパリパリだね！」

……ユイが普通の会話をしていると、なんか違和感がバリバリだね！

本当ここまで俺ほかとの態度が何故違うのか……生徒会メンバーにもだけど、年上には一応敬意を払っているのだろうか？

そうだとしても、俺にははっちゃけすぎかと思うのだが……どうやらユイを凝視する俺がユイには変に映ったようで、てか変か。

「ん？　どうしたユウジ、そんなに熱い視線で私を射て」

「……熱くはない、冷めた視線だ」

「私どんな風に見られてんの！？」

まぁ、実際は熱くも冷めてもいないのだけども。

「まぁ、それは冗談としてなー　いやー、姉貴や生徒会メンバーには敬語とか意識してんなー、と」

「ほう、よい観察眼だ」

いや、丸わかりだろ」

「私は人間的に尊敬する人物には敬語や言葉遣いに気を付け、敬意を払って会話するのだ」

「へー、そうなんか……って、生徒会メンバーは尊敬に値するのか!?　〝あれ〟だぞ?」

よくわからないロリに、よくわかんない黒女とかその他もろもろ。

「こ、こここここの無礼者っ！　その発言は万死に値するぞぅっ！」

「えええええ、いや確かに上級生だから敬うべきかと思うけど、万死には値するもんじゃねぇだろ!」

「くぅ……また懲りずにそんなことをっ！　ふふふ良かろう、そこまで死を急ぎたいのだな」

「……はぁ、面倒くせえ」

「っ!?　ワタクシへの侮辱は万死どころか、死に足りません!　二回死ぬべきです」

「……減ってね?」

「くらえええええ、このユウジィィィィィ」

「ユイちゃん、そういえば最近のユウくんどう？」

この空気を読まず、姉貴はそうユイに言った。

ユイが腕をグーにして殴りかかってきた寸前にそんなことを言ったからに、ユイは俺の腹直前で制止する。

正直、面倒になってきたので殴られて終わりにしよっかなー、などと思っていたのだが。

朝から外部からの腹痛に悩まされるのは、遠慮したいものだから、助かった。

「ユウジは、今日も元気です（キリッ）」

「お前の方が元気だろよ」

「そうですね、出会った頃からは大分元気になったかと」

「元気……なのか？　俺」

最近は疲れてばっかな気がしてならないのだが。

まぁ、今の日々は疲れもするけどエキサイティングで楽しいけどさ。

「うんっ！　私も思うよ！　……色々あったけど、ここまで元気になってくれて嬉しいよ」

「……そりゃどうも」

あれ？　かつての俺ってどんなだっけ？
なんというか高校に入った途端に2年前のことを忘れ始めてる気がするな。
というかそもそも2年前だっけか？　……2年でなく、1年か。
なんで抽象的なことを忘れてるかなぁ、俺は。

まぁ今の日々が楽しいから、忘れててもいいや。　と、逃避することにする。
それを考えてるだけで……それほど良い記憶でもないしな。

「ユイちゃんが居てくれたから、ここまで来れたんだよ？　ありがとね」

「……は、はい」

なんという……そのうち記憶を整理してみるとするか。　今まで何があったのか、とか。

それでも、何故か……これだけは俺の中で譲れないらしい。

『苦く辛く、後悔するような失敗をしてしまったからこそ。　今度の日々は失いたくない。　誰も失いたくない、そして失わせない』

苦く、後悔する失敗……ああ。　”あれ”か。

ごめん、悪い。

忘れていたというのはちょっとホラ吹いたわ……確実に覚えているシーンや会話があった。

それも、下手すると一文字一句間違わずに言えるほど、そのシーン、会話が俺に残した印象は計り知れない。
そして、その時俺がそれに押しつぶされたことも覚えている。

まったく、あの時の俺は何してんだか。

マジで血迷ってる……まぁ、今の現実が楽しいから（ｒｙ

「さっさと学校行こうぜー」

途中でユキやマサヒロを合流し、楽しい楽しい日が始まっていくのだった。

第０９１話　７－４　進む日常、始まりの時。（前書き）

最近上手く書けない

第091話　7－4　進む日常、始まりの時。

さてさて時間は流れて放課後へ。
基本気が乗らず、直ぐには生徒会へは向かいません。
少しの時間を経て、およそ15分後。
からっぽの教室を抜けて、いつも通りに生徒会へと向かうユウジでありましたが――

「なんでお前が付いてくんだよ……」

「まぁ気にしなくていいぞ、アタシはユウジの付録みたいなもんだ」

ということで何故かユイが付いてきました。　本当に何故なんでしょうね？

え？
既にフラグは立ってる？

「いや付録とかじゃなくてよ、放課後を迎えて生徒会に行くという憂鬱な俺に何故お前が付いてくるのかと」

「はは、社会見学というヤツだ」

「……社会見学が生徒会とは、どれだけ狭い社会を覗きたいんだよ」

「いや”美少女の巣窟”こと生徒会を一度は訪れようと思ってな」

「やっぱそっちだよな、どうせお前は！　というかなんだ、その煽り文句は！」

「ワタクシの情報を元に作成したキャッチフレーズなのだが、ご不満がお有りで？」

「巣窟って表現は明らかに間違ってるだろよ」

なんだか嫌なところみたいじゃないか……俺にとっては嫌ではないけど、ちょっとばかし苦手だが。

「うーん……”美少女の楽園　～天国か地獄か～”か”美少女の花園　～美女と花～”」

なんでそんなにサブタイ付けたがるんだよ。

「まぁ、いいや。　これから生徒会だし、ということでじゃあな」

「やぁ」

「……いや、一応別れの挨拶をしたんだが」

「”別れは出会い”」

「だからなんだよっ！」

「ということで別れを告げてきたユウジとほら再会、なんという奇遇でしょう」

「……次第にギャグパートのクオリティが落ちてるとは聞いてたけどここまでとはな」

まぁ別の世界は自虐と内輪ネタで持っていたぐらいですからね。

「はやく生徒会行こうぜ、ユウジー」

「断る。　お前が付いてくると色々厄介そうだからな」

「……ひどい、今までのことはあなたにとってお遊びだったのね」

「はい無視無視」

相手にしてたら日が暮れるどころか、日が昇る。

「――そう簡単に一人で行かせると思ったか、ユウジ」

「なにィ？」

「アタシはユウジの弱みを握っているんだぜ……？」

「！　な、あれはっ言っては――」

って、なんだろ。

「そう、アタシはユウジと一夜を共にしたという弱みを握っているぞ。　ふふふ、これは逆らえまい」

「……ユイ」

「なんだい、ユウジ」

「……病院を紹介した方がいいか？」

「きゃわいいナースが居るならよろこんで」

「精神科にナースが居るといいな」

「よしわかった、ユウジの生徒会が終わったら行こう」

結局来んのかよ、そしてどっちにしろ行くのかよ。　はぁ……

「生徒会は関係者意外立ち入り禁止だからさ――」

「遺族は許されるはず」

「俺か姉貴が死んだみてーな言い草だな」

「なにおう！　ユウジが死んでもミナ姉は守りきるぅ！」

「お前は何と戦うつもりなんだよ！」

なんだこれ、時間だけを無駄に浪費してる気がしてならない。

「ほらほら、時間と尺を無駄にしたくないならほらほら生徒会へと参ろうぞ」

「……もうどうでもいいから、行ったら大人しくしててくれ」

「うん、分かった！　ユウジ！（ＣＶ．ユキ風）」

「声だけなら録音したかったよ。　てか声マネが相変わらずうめぇな、お前」

「んなことはねぇだべさ」

「声の元ネタがわからねぇ！」

「んなもんねぇ！」

……痛い会話だな。　高校生がする会話じゃねぇな。

「１－４副生徒会長補佐代理の下之ユウジです」

なんとなく、言ってみた。　いつもは「失礼します」だけなんだが。

なんとなく、言ったみただけだ。　特に意味は無い。

「そして許嫁の巳原ユイです」

「ユイ、早速黙ろうな」

『ん？　シモノ？　連れてるのは友人？　許嫁？』

するとドア越しに聞こえる幼き声こと会長の声。

「友――」

「許嫁でぇす（ＣＶ．ユウジ風）」

「んなこと言わねぇよ！」

『はっ、シモノが二人!?　どういうことなの……』

「ほれみろ、会長がパニクった」

「このロリ声……ふむ、これはドア越しの彼女の容姿はよいモノに違いない。　ロリコンのアタシだから分かる！」

「分かってどうするよ！」

『え、シモノが二人と女子が一人?』

「いえ、二人だけです」

『シモノが二人で……読めたわ！　その女子の声はシモノのモノマネね！』

「だから俺はそんなことが出来る設定になってんだよ!?」

何か前にもこんなことあったな……というか主人公像が未だに掴めないのだが！

このゲームのクソゲーの所以ってもしかして主人公が要因だったりしてな。

「まぁ冗談好きの友人なんで、すみません。　俺と友人で二人です」

『そうなの?　そういえば、なんでシモノは友人なんか連れてるの?』

「いや、なんか……生徒会見学をしたいとかで、いいですか?」

『いいよ！　生徒会は来るもの拒まず、去るもの追う。　がモットーだからね』

「粘着質！？」

『とりあえずちゃっちゃと入っちゃってー』

「あ、はい」

『会わせたい新メンバーも居るしね！』

「え」

生徒会の戸を開くと。　そこには生徒会フルメンバーと――

「あ」

「え？」

生徒会に本来居るはずのない、彼女が居た。

「あ、あっあなたは！？　な、ななんで、あなたがここにっ！」

正直もう顔を合わせることもないだろうと思った彼女こと――

オルリス＝クランナ、かつての”廊下での惨劇（通称　俺による転校生へのセクハラ事件）”の転校生本人がその生徒会室には居たのだった。

第０９２話　７－５　進む日常、始まりの時。（前書き）

７－１の件はすみませんでした。
現在暫定版制作中

第092話　7－5　進む日常、始まりの時。

「どうしてあなたが居るんですのっ！？」

「え、いや……」

どうするりゃいいよ、てか気まずいよ！

まさかまた遭遇するなんて、それにまさかの生徒会かよ！

てか、何故転校生である彼女が生徒会に――

「あ、あのー会長」

「なに？」

「新メンバーはどなたで……」

「それはもちろん……青眼金髪の転校生よ！」

シャナみたいに言うなや！　てか、マジかよ……

「何で居るの？」という意見は相互に共通していたようで――

「か、会長さん！」

「なに、クランナさん？」

「なんで……あの方がっ」

「ああ、シモノのこと？　うん、シモノは立派な生徒会役員だよ？」

「っ！？」

その時の彼女と絶望と後悔に沈む顔を俺は忘れないだろう。

ちなみに俺はと言えば、絶望や後悔さえしていないが……気が重い。

「もう顔を見せないでください」とまでに忌嫌われた俺と、生徒会で遭遇するんだからあっちはたまったものじゃない。

そしてそんな気まずい空気今後も吸うハメになるとは、こっちは気が重い。

俺が全ての要因だけに仕方がないのだが。

「えーと、あのすみませんー　空気読まないようで悪いのですがー」

……ユキが会長に向かって話しかけた。　というか本当に空気読めや！

「えと、シモノの友人さんだよね？」

「巳原ユキです！」

「巳原さんね、ようこそ生徒会へ！　まぁこの生徒会はこんな感じなんだよ」

ちなみに俺とオルリスさん以外はこの俺と彼女の良く分からない唐突な展開を見守っている。

……なんというか凄い誤解を生みそうな感じがしてならないのだが。

「……噂通りキレイな方ばかりですね」

「そ、そんなぁ！　照れるちゃうよ」

いや会長あなたは綺麗ではないとは言いませんが、どちらかと言えば「可愛い」寄りだと思いますよ？

てか、解説してる暇なんかねぇ！　どうすんだ、この空気。

「そんな……何故あなたという人が生徒会なんですの」

「いや、俺にもさっぱり」

本当になんで居るんだっけ？　……副会長権限濫用による姉貴の拉致だよな、うん。

「ふ、ふざけていますのっ！？　そんな責任感のない者が生徒会に入るなんてッ！」

言いたいことは良く分かる。

しかし責任感ない者とは確定出来ないが、責任感さそうな者はこの生徒会の姉貴以外はほぼ全員かもしれないのだが。

だって、主な活動が駄弁りだけだぞ？　先生方への活動報告とか偽造に偽造を重ねているんだろうな……

「まぁユウジは仕方ないかー　あんな経緯だもんな」

とまさかのの福島がフォロー、おう久しぶりだな！

「困惑のユウくんも可愛い……」

誰だコイツ。

「仕方ないわよね――」

チサさんも擁護してくれた。　ありがとうチサさん！　このご恩は――

「ユウ以外は女子で、実質ハーレムだものね」

「！？」

「あ、あなた！　……そんなことが目的でこの生徒会に入ったんですの」

「違う、違うから！　そんなのに興味はないから！」

「……信じられませんわ」

ですよねー　好感度が昨日でガタ落ちどころか消失して嫌悪感しか残ってないもんな。

「それでハ、ハーレムを手に入れて何をなさるおつもりで！？」

「何もなさるつもりはねぇよ！」

こ、こんな集団に手なんか出せるか！

会長は見かけが犯罪になるし、書記さんはやられる（殺すと書く）福島はあまり話したことないし、姉貴は論外。

「ふ、ふん！　こんな綺麗な方々の中で理性が保ちますの？」

「いかがわしい理由で理性なんて吹っ飛ばねぇよ！」

理不尽な展開への怒りとかならあり得そうだけど。

「……と言うかお前、なんでそういう風にいかがわしい方面に話もってくの？」

「セ、セクハラですわ！　その発言もセクハラですわ！？」

「えええええ、今回の場合はセクハラしてるのお前だろ！？」

なんで、その方面にしか話が向かないんだ！

「……ユウとオルちゃんは何か面識があるようね？　オルちゃんは転校してばかりのはずだけど？」

「（うっ）」

考えてみれば隣のクラスと言えども、ここまで会話してるとおかしいよな。

てかオルちゃんってチサさん式ニックネームが付いてるんですね。

「こ、この方とは昨日会っただけですわ！」

こいつ、嘘が下手過ぎる。

「いや、ちょっとトラブルがありまして」

「ふぅん？（ニヤ）」

このチサさんの微笑みは――

知ってる。　確実に知ってる。　俺の心詠まれてる。

うわあ……逃げようがないじゃんかよ！

「（まぁ、何も言わないわ）」

心に語りかけてくる声……あ、ありがとうございますチサさん！

「（こちらこそありがとう……またネタが増えたわ）」

！？　はぁ、ですよねー　分かってましたとも！

「（まぁフォローしておくわ）」

「まぁミナまでは聞かないわ、色々あったのね」

フォローになってない気がするのだけども！？

”色々”というのが色んな意が籠められ過ぎてるから！

「ユウジ……お前、何やらかしたんだ？」

「ユウくん、何があったの？」

やっぱりか、この誤解しか生まれないよな！　はぁ……先が思いやられるな――

第０９３話　７－６　進む日常、始まりの時。（前書き）

間違ってないといいけど

第093話　7－6　進む日常、始まりの時。

またまた回想ですー

五月六日、某所にて。

「～♪　～♪」

電話の着信メロディが部屋に響きます。

「……こんな時間に」

姿は見えません、一体どなたでしょうか……分かることは誰からか電話が着たようです。

「もしもし……え？　明日転校生が生徒会に来るので対応よろしく？　……突然ね、どうしたの？」

電話口の声は聞こえません……知り合いには違いないでしょうね。

「忘れてたって……まぁいいわ。　それで彼女が本当に生徒会に入るのね？」

彼女……？

「わかったわ……ええ、ええ。　そうしておくわ。　じゃあまた」

プツンと彼女は通話を切りました。

「ふふ……面白くなりそうね」

……企みを持ったようなニュアンスで彼女は呟きました。

４月３０日の朝。

ＨＲ前のひととき……１－４での風景です。　そんな教室の一角で木山さんとオルリスさんが会話をしていました――

「オルリスさんは何処か部活動に入るの？」

「え」

部活動……ですか。　案内には確か色々な部活というものが書いてありましたわね。

「部活動に入る予定はないですね。　……まだこの学校の空気を掴めていませんし」

「そう？　この時期に部活動に入る子も多いんですよ？」

「それに……私には部活動以外で入りたいところがありまして」

「え、部活動外って言うとなにがありましたっけ？」

そうなのです、私は是非入ってみたいところがあるのですわっ！

「生徒会を……私は希望します」

「え？」

……それは驚かれるでしょうね、いきなり転入生として飛び込んできた私が生徒会だなんて――

「たしかにこの学校は特殊で、生徒会役員立候補時期が5月の中旬までと長いですけど……好んで入る方は少ないと思います」

「え？　どういうことです？」

「作業内容がよく知られていない上に、採用基準がよくわからないとの噂です」

「は、はぁ……」

生徒会とは「生徒を統べる総務的会」という印象がありましたが……ここでは違うのでしょうか？

本当はあってるんですけど、この学校の生徒会には雑談が多いですからね、生徒を統べる印象は限りなく薄いですよね……

「残りの募集も主要役員は締めきって、補助や雑務しかないと聞いていますよ？」

「雑務でも全然構いません、生徒の為に活動する……それに意味が

あるのですよ」

……現生徒会は、生徒の為の活動どころか具体的な活動は殆どしてないのですけどね。

「ということで、私は生徒会に入ってみます」

「……ええと、頑張ってくださいね」

「はいっ！　応援ありがとうございます」

放課後です、実際伸ばしてもしょうがないので展開を速くします。

そうしてオルリスさんは生徒会を目指します――

「ここが生徒会ですのね……」

そうして彼女は緊張した面持ちで唾の飲みます。

生徒会室に佇む金髪の女子。　設定では金色の髪は地らしく染めてヤンキー化しているのではないそうです。

ノックをして「失礼します」と声に出すと、中から聞こえる「どうぞ」の声までドアを開けずに待っていました。

「どちら様で？」

生徒会役員書記こと紅知沙１人がそこには居ました。

「ええと、生徒会役員希望の１年４組オルリス＝クランナです！」

「ああ、あのオルリス＝クランナさんね。　数日前にこの学校に来たばかりのようだけど……」

「はい、昨日来たばかりです」

「そう」

と、クールに返す書記。　突然舐めまわすようにオルリスさんの体を見始める書記……一体どうしたのでしょうか、それにはオルリスさんも若干戸惑い気味です。

「見かけは十二分に良し……ね」

「え？」

「こちらの話よ。　……あとはちょっとした質問を――」

「はい」

「――するところだけど、面倒なので省略するわ」

「ええっ！？」

「そうね……生徒会役員では何を希望しているの？」

「え、ええと……そうですね。　基本的に役員として働ければ――」

「採用するわ」

「ええ！？」

「その殊勝な心がけ……実にいいわ。　でも役務も埋まってるし…

…そうね。　雑務という役回りぐらいしか残ってないわね――」

「はい、構いません！　雑務ですね」

生徒会の雑務というからには働きがいがあるに違いないないですわ！

「本当にいいの？」

「頑張ります！」

「わかったわ。　オルリスさんを書記の私が役員名簿に追加しておくわね」

「ありがとうございます！」

思いの他すんなりいきましたわ！　でも……何故生徒会の人がこの方以外いないのでしょうか？　確かに授業が終わった直後とは言え……。

「副会長と副会長補佐と会計は……あとで連絡するわ。　会長はもうすぐ来る頃よ」

「それでオルリスさん。　今日は初日でまだ心の準備とか必要かと思うし、帰ってもいいのよ」

「いえ、出来ることがあれば！」

「出来ること……そうねぇ、じゃあまずは生徒会メンバーの紹介をしようかしら。　話とかはそれから」

「は、はいっ！　それまでに何か出来ること――」

「何もすることはないわね。　悪いけれどそこら辺にでも座っててくれるかしら？」

「わかりました！」

とりあえず生徒会には入れましたわ！

……これでとりあえずは一安心。　生徒会という全貌が見えない以上、未だ何も分からないですが！　私は力の限り頑張りますわ！

ええと凄み過ぎかと……そこまで肩の力入れてると、色々ショックを受けそうな――

そうしてその後に生徒会メンバーが揃い始め、最後の最後にユイを連れたユウジが来る訳です。

第０９４話　７－７　進む日常、始まりの時。（終）（前書き）

１１０９１０　総集編挿入の関係上７－７と７－８を統合しました

第０９４話　７－７　進む日常、始まりの時。（終）

一応の誤解を生徒会メンバーに解いていたその時だった。

「ユウジユウジー」

「ああん？　なんだよ」

「あー、ぼくもこんな美少女だらけの生徒会に入りたいなぁ」

今までの空気をガン無視してユイがそう言い放った。

「はは……それはタチの悪い冗談だな」

この空気でそんなこと言うなや！

「冗談なんかじゃないぞ。　この生徒会に居るユウジは……とても元気だ」

！　……そうかもな、内心は楽しんでいるんだろうな。　こんな明るく会話の絶えない生徒会。

そんな中でいやいや言いながらもボケにすかさずツッコミを入れる。　こんな楽しい時間が他にあるだろうか。

クラスとも家とも違う、そんな空間がここにはあった。　個性的な面々が紡ぐ愉快な物語。

ふ、俺ってばツンデレだから今まで気づかかな――

「な、訳ねーだろ」

へっ、そんなこと想ってたまるかよ！　冗談。

元気だぁ？　そりゃ俗に言う空元気ってヤツですよ！　やってられないッスよ、この空間でツッコミしてないと！

それに明るい？　……ナイスジョーク（笑）　書記さんとかめっちゃ陰湿だし、姉貴はねちっこいし、会長はちっせぇし！

ああ、疲れるだけのこの生徒会になんで入ったかなぁー？　てか拉致されたんだったな、うん。

ぶっちゃけまだ部活をエンジョイした方が良かったわ！

「そうね、ユウ。　あなたを部活でエンジョウさせるべきだったわ」

「燃えるんですか！？」

くっ、心詠み……これだから心の中でも気を休める暇はないな。

この高校に入って1月経たぬ間に拉致され、いきなり副会長補佐代行とかさ……。

いや、姉貴さん。　拉致せず誘ってくれたら俺はもっと違う反応をしたかと思われるですよ？

そしてこんな時に思い出すフレーズは――

『クソゲヱじゃからな！』

うん、その通り。　拉致とかさ、色々古い上にやられる側はちょっとした恐怖だぞ？

……そういえば、俺何回か首ぶっ叩かれて気絶させられてるけどさ。　調べてみたら、一回では気絶なんてしないんだそうだ。

つまりは一回の首チョップにどれだけの衝撃をこめてるのかと、

皆に問いたい。

「巳原さんはなんで、生徒会に入りたいと思ったの？」

書記のチサさんが何故かユイに食いつく。……このままフザケタ発言して失脚してしまえ。

「生徒会活動というものと第一に貴女のような方々と時間を共有したいからです！」

なんて素直だ。

……これはオワタな。　ユイの夢潰えたり～

「特に貴女のような妖艶な空気を身に纏う絶世の美女との時間を共に！」

うわ、くっせぇ。

「巳原さん採用」

ええっ！？

「素直は良いことよ、それにしっかりとした目的もあるようだし」

いやいや「しっかり」という表現は色々な物や方に失礼だと思うぞ！？

ようするに「生徒会の活動にも興味あっけど、美女と過ごしたいから生徒会入るー」てことだ。

この目的には浅さしかない。　既に地が見える程に薄い。

「はい！　ありがとうございます」

と、お礼を言った次の瞬間に会長がバンとテーブルを叩き。

「それでは、今日は生徒会メンバーが新たに二人増えたから。　自己紹介をしよう！」

会長もさっくり認めちゃうのかよ！

「え、こほん……ここで新しく入った生徒会役員を紹介します！」

バァンと生徒会テーブルを叩いて立ち上がった会長はそう叫びます。

「まずは……巳原ユイさん！　役職は――どうなのチサ？」

「書記補佐よ」

！？

「……書記補佐を務めることなった巳原ユイです。　どうぞよろしくおねがいします」

「えっ？　なんでお前が書記補佐に？」

「今決まった」

「ＮＯＷ！？」

てか、ということはチサさんの発言で全て決まったというのか…

…なんぞこれ。

「じゃ、じゃあ……オルリス＝クランナさん！　えーと……」

「雑務総指揮ね」

雑務なのにこころなしかカッコいい！？　……てか生徒会に雑務ってオルリスが最初だよな？

てことは指揮される側が思い切り不在なんじゃ――

「オルリス＝クランナです。　よろしくおねがいします！」

頭を下げるごとに、長い金髪が大きく揺れます。　ああ、綺麗な髪ですこと。

「……はぁ」

そんな脇を一人ため息をつくユウジ。

まぁ気持ちは……分かるような分からないような。

「以上が新しいメンバーだからね、みんな仲良くするんだぞ！」

なんとも会長らし……いや、小学校の先生みたいな言葉で締める会長だった。

「それでここのメンバーはね！　まずは私は会長！　この藍浜高校

の会長！　すっごい偉いよ、理事長の次ぐらいに偉いよ！」

「校長を超越しただと……この学校はどうなってんだよ！」

そうユウジがツッコミます……ということで、出番は無さそうですし私はツッコミを自棄することにします。

「藍浜校長生徒会、生徒会長”葉桜アスカ”だよ！　会長様とお呼びなさい！」

そういえばそんな名前……って物凄いナルシスト！？

「会長……様？」

オルリス、純粋過ぎます……。

「メイド様！」

誰だメイド様って言った奴……ってユイか。　なぁーんだ、ふぅーん。

……なんですか、その反応。

「じゃあ、藍浜高校生徒会、副生徒会長”下之ミナ”よろしくね！　オルリスさん、そしてユイちゃん」

姉貴が真面目に応答していた……俺の時とは偉ぇ違いだ。

「は、はいっ！」

「はい、ミナ姉……いえ、副会長！」

ユウジ姉、なんか久しぶりに真面目なことを喋った気がするのですけど……気のせいですよね。

「そして、藍浜高校（ｒｙ、書記”紅チサ”よろしくね、オルリスさん、そして改めて巳原さん」

「よろしくおねがいします！」

「はい、紅さん！」

あ……もう一つの世界では、ちょっとシナリオが違いましたね。いけないいけない、ナレーションミスするところでした。

「そして藍浜（ｒｙ、会計”福島コナツ”よろしくなっ！」

「こちらこそ、よろしくおねがいします」

「夜露死苦ゥ！」

もう死語どころじゃない気がします。

「更に（ｒｙ、副会長補佐”下之ユウジ”よろしく……な？」

「……！？」

「よろー」

……ユイの挨拶が次第に軽くなっていくのは気のせいでしょうか？

あれ、なんかオルリスさんが驚いてますね……心読んでみます。

「（シモノですって！　……あの下劣な男と、副会長の名字が同じですわ！　まさか、いえ、そんなことは、ない、はずですわ）」

残念ですが、彼らは立派な姉弟です。

「（それにしても似ていませんわね）」

あー、それは私は思います。

「（普通と美女じゃ全く釣り合わないですわっ！）」

地味に酷い言い方ですね……。

「うーんと、今休んでる生徒会役員はまぁいっか……ということで生徒会メンバーの紹介が終わりました！　これから1年間仕事を共にするんだから皆、仲良くね！」

まーた、小学生の担任みたいな締め方ですね……

「紹介が終わったので、今日はすることなし！　ということで今日の生徒会、終了！」

えええええええ！？　これで終わりですかっ！　ユウジと福島を待っていた役員の時間は殆ど無駄じゃないですか！

「お疲れさまでした」

次第に帰り始める、役員達。

「（えっ、えっ！　もう終わりですの!?　……なるほど、次回からが本格始動ということでよろしいのですね?）」

ええと、残念ながら――

「（にしても、変態が生徒会役員だなんて……今後、気が重いですわ……）」

どうなんでしょうね……ユウジが汚名返上出来ると良いのですけど。

そうしてオルリスは「皆さんお疲れさまでした!」と、言って足早に帰って行きました。

「もう終わりなのかー　よし、帰るぞ、ユウジ」

「ああ、うん」

「ミナ姉はどうします?」

「うーんそうだなぁ……そうだね、一緒に帰っちゃおうかな!」

「じゃあ、帰りましょうー、チサ鍵お願いねー」

5月1日

「……」

あれ、姫城ですね？　何か読んでますけど……新聞？

「ふふふふ……ユウジ様がそんなことを」

え、どういうことですか？

「これは……問い詰めなくてはですね」

いや、意味が分からないんですけ……ど？　ところで姫城は何で新聞なんか……っ！

えと、あれって――

非公式新聞です……よね？

＝　序章全7話　完結　＝

第０９４話　７－７　進む日常、始まりの時。（終）（後書き）

１１０９１０

プロローグのプロローグから進む日常、始まりの時。までの「1から7のダイジェスト。」第１００部に追加しました。

√1に飛びたい方や、どんな話だったか思いだしたい時にオススメですー

第０９５話　√０－ＡＬＬ　１から７のダイジェスト。（前書き）

１～７総集編です。すぐに√１に跳びたい時や、序章部分を思い出したい時はこちらをどうぞー

第０９５話　√０－ＡＬＬ　１から７のダイジェスト。

プロローグのプロローグ。

下之ユウジ、それが俺の名前だ。

俺はとあるゲームを買った。

最近オタク趣味に目覚めがちな俺は、中古店を訪れると真っ先に可愛い女の子の絵が描かれたパッケージの「ギャルゲー」というものを手に取る。

それは「恋愛シュミレーションゲーム」と言われる、プレイヤーが主人公となって恋愛疑似体験を行うゲームのこと。

Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～……？

そしてある作品に俺は惹かれ、そのソフトをレジへと運ぶのだった。

しかしそれは俗にクソゲーと言われる代物で、インターネットで評価を調べてみれば散々だった。

野口さん一枚に満たないほどに安く購入したが、やはり自分でやってみないと分からない。

そう思って俺はゲームをパソコンのＣＤポケットへと挿入した――

＊　＊

そうして俺は主人公になった。
まったくもって意味が分からないと、言われたらそこまでなので、少し説明しておくと――色々あって俺は買ってきたギャルゲーの主人公になってしまった。
と、いってもゲームの世界に入った訳ではなく、ゲームのキャラクターやシナリオが現実に紛れこんだ……らしい。
不確定なのは、それがどうにも胡散くさい話だからだ。誰から聴いたと言えば――

「おはよう、主人公」

そう言われて気付くと、俺の部屋には小学生ほどの容姿をした女の子が仁王立ちをしていた。

「お主が存在する現実世界に、お主の起動したゲームのシナリオやキャラクターをスライドさせた形になっておるのじゃ」

高い声と、幼い顔づくり。見た目には、やはり女子小学生にしか見えない。
しかし喋り方には、素晴らしいほどの違和感が付いて回る。

「貴様のせいじゃ主人公！　あのゲームを起動したのがそもそもの始まりだったのじゃ！」

マセガキでさえも引くほどの見事な老人喋り。それが容姿相応の声と合わさり、圧倒的なミスマッチ。

「わしは貴様の攻略対象である上、何故か一回目のリセット時の記憶も保有しておる。それに何故かはわからんが今後のわし含めた各

ヒロインの攻略情報がわしの頭に入っておるな」

一人称が”わし”という、もはや何もいうまい。

桐。俺の妹という”設定”で、下之桐となる。

「じゃがヒントを言うならば”選択は貴様によって作られる”ということじゃ」

このエセロリが言うように、俺は選択を強いられていた。

それは間違うごとに繰り返される、ゲーム仕様。選択肢が目の前にテキストとして現れるはずもない。

ある最初のヒロインの生死の選択。

＊　＊

俺がその最初のヒロインと出会ったのはゲームを起動して、何故か朝を迎えた時のこと。

聞き慣れぬ声が窓の外から聞こえ、その声は俺の名前である”ユウジ”を呼んでいた。

篠文由紀（しのふみゆき）。

黒髪のポニーテールに、少し幼い顔、スラリとした体に、どこか活発そうな性格。

一目で、美少女と分かるヒロインだった。

その子と俺は幼馴染という”設定”になっているらしい。

可愛い幼馴染と登校出来るなんて、なんと夢のよう。浮かれてい

たその直後に、まったく予想も出来ないし、そんな展開が信じられなかった。

目の前で、彼女が死んだ。

前を走る車にはねられた。出会ったばかりとはいえ、少し前まで親密に過ごしていた彼女が息絶えて行く様を見るのはショックだった。

そして、世界は繰り返される。

まるで、それがゲームオーバーで。最初からやり直しを強制されるように。いつしか暗転していた世界から目覚めると、窓の外から死んでしまったはずの彼女の名前が聞こえた。

俺は、何度も試した。ゲームの不可避のバグのように、彼女は死ぬ運命（さだめ）だった。

しかし、一回。たった一回の成功例を俺は見つけだし、彼女の死なない、世界が進む未来へと辿りついた。

＊　＊

学校には友人が元からいる。

と、いってもオタク趣味を繋がりにしているようなものなのだが。

一人はスレンダーな長身で、茶色の短髪、きっと顔の作りもいいはずなのに。全てをブチ壊すグルグル模様の入った眼鏡がデフォルトの残念女子だった。

もう一人は男。オタク的な会話をする、まあそれだけ。

そこに”幼馴染”という設定からユキが溶け込んだ。

二人の会話でも程良くついて行く様、まるで最初から居たかのようだった。

どうやら新しくゲームを起動したことで現れるヒロインは、この世界に違和感なく溶け込んでいるらしい。

そうしてユキ、桐に続いた三人目のヒロインが現れる。

最初に顔を合わせた時には、俺は殺される寸前だったのだけど。

俺達の戦いはこれから、だと思ったら既に始まっていた。

その三人目のヒロインは姫城舞（ひめきまい）と言った。

長い黒髪に、起伏に富みながらもスタイルの良い体。同学年の女子と比べると大人っぽい雰囲気を漂わせる、見た目はクールビューティな女子だった。

そんな女子に俺は、刃物を突きたてられた。

「あなたを殺すためです」

そして俺が好きだと、それでいてユキと抱き合う場面を見て危機を感じた。

……説明すると、あれは不慮の事故だった。階段で足を滑らせたユキを受け止めるようにしたところを、彼女に見られてしまったのだろう。

ストーカーまがいのことをして俺のことをずっと見ていて、それ

故に思った。このままでは私の想いは遂げられない――ならば結ばれる前に殺してしまおう。

どんなスプラッタな発想だ……それでも、彼女が俺に向ける気持ちは強く熱く真っすぐなのは確かな事だった。

しかし、彼女はそれでいてそんな気持ちを上回る程に猟奇的だった。果てには、自分が死ぬとも言いだす始末。

だから俺は自分の気持ちをぶつけた、彼女の気持ちに応えることは出来ない――でも、ここでどちらかが命を絶っていいのか、と。

＊　＊

姫城さんとの出来事が終わり、俺はまたもや良く分からないことなっていた。

俺には姉が居て、その姉は生徒会役員だった。ちなみに姉貴と呼んでいる。役員な上に、母親が放任しているようなものなので、実質家事は姉貴と俺で回していた。

そんな最中のこと、姉貴に放課後に呼びだされてみれば――

拉致され、謎の質問責めの末、生徒会へと入れられた。

役員にはレベルがかなり高いであろう、美女が揃っていた。

もちろん入る気なんてさらさら無かったのだが、姉の日々の負担を考えてしまうと出て行く気持ちにもなれない。

放課後には、ツッコミしがちな俺を弄ろうと言わんばかりの生徒会会議が始まるのだ。

ルート分岐は、気付かぬ内に。　超展開、目前に。

「これからアタシら家族になるらしいからな、よろしく頼むぞ」

そう告げられたのが生徒会に入れられた直後のこと。それも女の友人ことユイからだった。

俺のモノゴコロつく前に父親は亡くなり、未亡人状態の母親が再婚した。その相手が偶然にも、ユイの父親だった。

世界は狭い物だなあ、と思いつつも。ユイも俺の家に住むことになり、一応学校の生徒にはバレないようにと、警戒しながら、日々は変わり始める。

「アタシとユウジは、これから家族だ」

肝試しとお揚げの意外すぎる関係。

男の友人は春先なのに肝試しをしようと言った。

訳の分からなさに辟易しつつも、なんとなく参加。ユキや姫城さんも呼んだ。

ある寂れた神社の目の前に広がる墓地を突っ切るコースで、俺は姫城さんと組んで歩くことになる。

美人の隣にいるのは悪くない気持ちなのだが、先日の猟奇的行動思いだし複雑な心境だった。

肝試しの折り返し地点、神石前に辿りつき。形だけとも言える神

へのお供え物を置いて帰路につく、その時のこと。

『わ、好物のお揚げだ♪』

少女な声が途端に響き、中学生ほどの少女が現れる。

地面までつかんばかりの長い長い黒髪を持ち、ともかく童顔で、なんとも愛らしい空気を漂わせる少女だった。

「うん！　我こそ美桜山の農作物を護る神！　そして我の名前は”ホニ”！　我の姿が見えてる……決めた！　我は、あなたたちについて行く！」」

そうして俺は、彼女と出会い、彼女と過ごすこととなる。

彼女は俺が確認した中では四人目のヒロインで、ホニ。

神様だった。

来訪者と疲労な主人公

俺はセクハラをした。

それも転校したきたばかりの女子生徒に。俺はまったくもって不可抗力で、不慮な事故だと考えているが、現実はそんなことまかり通らない。

平和かは疑問だけど楽しい数日間。

その転校生とは生徒会室でその後ばったり出くわし、彼女も生徒会に入ったとのことだった。

「悪いですわっ！　私のむ、胸を揉んだ挙句に……生徒会室まで乗り込んで来るなんて！　言い訳は結構！　ともかく、私に今後関わらないで頂けますこと？」

最悪の出会いだった。転校生な彼女こと輝かんばかりの金髪を長く伸ばした、どこか”お嬢様”と言った呼び方がマッチしそうな第五のヒロイン、オルリス＝クランナ。

そして先程のセクハラ事件が、校内新聞へと載り。それを俺への好意が独特な姫城さんの目に入る。

そうしたところから、更に世界は変わり始める――

＝　序章全7話　ダイジェスト　＝

第０９６話　√１－１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ここからが本編ですー

第０９６話　√１－１　※独占禁止法は適応されませんでした。

出来事の発端は、ほんの些細なことだったりすることが多々ある。
そして、この物語の始まりも、何気ない行動によって幕が開かれただけに過ぎない。

しかしその発端が例え些細なことに見えたとしても、だ。
予め組み立てられ、その出来事は既に構成され完成し終わりまで描かれていたとしたら。
その”描いた者”の手の内という狭い世界の中で無意味に踊っているだけなのかもしれない。

そしてこの物語はこう。

男子高校生が何気なく立ち寄ったゲームショップ。　そして足は、比較的値段の手ごろな中古品コーナーに向いた。
その中古品コーナーの一角にただ棚に飾られていた一つのゲームに視線を奪われ、彼は出会う。

運命的な出会いと言ったら嘘になるが、この出会いが物語の発端となっているのには違いない。

その８００円という超お手頃で、絵はパッケージデザインを見た感じかなり良さげだった。
そんなパッケージには鮮やかな制服を着た可愛らしい女の子が並んでおり、その絵の綺麗さから彼はこのゲームに触手を伸ばしてしまったかのように思える。
さらに男子高校生という暗黙の了解内で完結する、Ｒ指定なしのこの作品。

思わず手に取り、しばらく裏表パッケージデザインをなめまわすように観賞した後。
学生の貧相な財布の中身を確認し、恐る恐るその手に取っていたゲームをレジへ運んでいく。
何故それを購入したかは、ほんの出来ごころだったように見える。
若気の至りというのだろうか、一種の気の迷いだったのかもしれない……しかしどんなに言い訳しても、それが出来事の発端で物語の始まりなのだ。
そして淡すぎる期待を持ちながらゲームショップから出て、自分の家にゲームパッケージの入った青い袋を提げながら歩を進める彼。
家に着き、自室に入って、雑誌の袋とじを開ける期待や焦燥のごとく薄いビニールで包まれたキャラメルパッケージを開け。
取り扱い説明書とディスクがゲームケースを開くと姿を現した――

そうして長くて濃い非日常的な物語は始まりを向えたのだった。

この物語は、何者かによって構成されたのか、それとも偶然が積み重なったのか。
否、偶然が積み重なるように構成された必然なのか。

全ての真相を知るのは――

ゲームを再開しますか？

はい↑
いいえ

ゲームを再開します。

Ｎｏｗ　ｌｏａｄｉｎｇ．．．

第０９７話　√１－２　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

３回連続予約投稿～

第097話　√1－2　※独占禁止法は適応されませんでした。

ナレーター：本格的にしばらく休ませて貰います。

「ええっ！？　どうなるのじゃ、この小説！？」

五月一一日

「……」

学校に向かう為に家を出ます。

「……はぁ」

何故私とユウジ様の家の方向がま逆なのでしょうか……

「（今頃、篠文さんや巳原さんと登校しているのでしょうね……）」

どうして、私とユウジ様をここまで引き裂くのですっ！　この世界に神など存在しないのですかっ！

「いいでしょう……」

居ないというならこの世界には失望しました。　どうせ報われないなら、いっそ――

「……というのはユウジ様はお望みにはならないでしょうね」

私だって分かってる。　自暴自棄になっても何も変わりはしないし、逆にユウジ様に迷惑をかけてしまうことぐらい。

でも……それ以外のことを私は知らない。　悲しい時、妬ましい時、失望した時……自分を傷つけることしか思い浮かばないのです

または、完全に私の物にしてしまう――

それがかつて私がしようとしたこと。

手元にあれば、それは盗まれる、無くなることはない――そう考えていました。

でも、それは全て感情論。　抑えることをしなかった、私の甘え。ユウジ様に教えられて、やっと気付いたのですから……もはやどうしようもないですね。

何故私はそこまで、堪える事が出来ないのか？　努力しないのか？

それは昔の私と、今の私に責任があるでしょう……ここに来てまで罪を分散させようと必死な私は一体なんなのでしょうね。

私が分からない。

どうして、信じることが出来ないのか。

何故、私はここまで子供なのか。

……いくら考えても、理解出来ないことが増えるだけですね。

それでも、私が只一つ「わかること」は――ユウジ様が好き、心の底から愛していると。

そんなたった一つの「わかること」に振り舞わされている事も事実ですね……

はぁ、そんな自分が信じられないです。

なんでこんな人間になってしまったのか……甚だ疑問です。

……あ、そして今度は自虐。　学習をしませんね、私。

「……」

考え事ばかりしていると、また繰り返しそうですね。　しばらく思考することを止めましょう。

「あ……」

考え事をしている間に、学校へ着いていました。　家から真っすぐではないのに何も意識せず着いてしまうとは。

……そういえば、この展開もいつものことですね。　はぁ、どれだけ私は学習しないのでしょうか。

「アイパマ新聞、無料配布だ」

「わっ」

気付けば、学ラン姿の男子が私を覗きこんでいました。

「とりあえず、受け取れ」

「え、え？　新聞？」

新聞……？　そういえばこの学校は新聞部が乱立してるとは聞いていますが。

「私たちの活動を知ってもらうためのキャンペーンだ、ありがたく受け取れ」

む、なんでこれほど上から目線なのでしょうか。

「い、いえ結構で――」

そう言いかけた時だった、その新聞に写るモノクロ写真。　モノクロ写真には見慣れた姿の――

「い、いくらですか！？」

「いや、タダと言っているのだが……」

「タダとはいくらですか！」

「いや……無料だから、なにもせずに受け取っていいんだぞ」

「あ、ありがとうございます！」

「……それでは失礼する」

新聞を配る学ラン男子はその後何処かに消えた……というか新聞に夢中で行く末うをみていない。

「（！）」

そう、新聞に写るモノクロ写真には――

「（ユウジ様ぁっ！）」

ユウジ様の姿がっ、それも目に棒線が入って居ない無修正――これは家に持って帰って永久保存しよう。

「（それにしても新聞に載るなんて……やっとユウジ様の良さが評価されたのですね）」

……世の中がやっと追い付いてきましたね！　で、記事の中身はというと……！？

「え」

ちょっとまって、なにこれ。　どうして？　え？　なんで？

「（生徒会役員Y氏が、同学年女子にセクハラ行為！？）」

Y氏って明らかに……ユウジ様じゃないですか。

「ふふふふ……ユウジ様がそんなことを」

……やはり、私は信じることが出来なそうです。

「これは……問い詰めなくてはですね」

正当な理由がないと納得が行きませんっ！　それにセクハラをされたこの女は誰ですかっ！

「なんで……なんでユウジ様を狙う人が日に日に増えているのですかっ！」

……教室まで走ります。

第０９８話　√１－３　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

やばいストックが３０切った

第０９８話　√１－３　※独占禁止法は適応されませんでした。

桐臼くシナリオの一つが始まったらしい。　なんと実感のないことか、しかし事実には違いないのだろう。
現状、転校生にそっぽを向かれている以外は何の問題もなくて助かった。
そんなルートの開始によって、今の日常がどう姿を変えていくのか、想像力の貧困な俺には予測さえつかない。
とにかく未知に満ちた……ギャグじゃないぞ？　世界が今日から始まるのだろう――

ルート１　※独占禁止法は適応されませんでした。

五月一一日

桜こそ散ってしまったが、まだまだあちこちに春の面影が残るそんな頃。
俺はいつも通りに眼を覚ました。　体内時計は結構正確で、７時５分を軸に±１０分の誤差のみで大体起床出来る。
「遅刻遅刻～」と、食パンを口に銜えながら、通学路を朝からしんどい全力ダッシュで駆け抜けたことが今までにないのは我ながら評価に値する。
……いや食パンを銜えず、っていうか食う時間さえなくダッシュで登校したことが中学時代にはあったことはあったりするが。

そうして寝グセの残る半起き状態でゆっくりゆっくりと歩みを進め部屋を出て階段を下りて行く。

1階の廊下を道なりに進めば姉がしているであろう「料理」という紛れもない生活音の一つが聞こえて来る

居間への扉を開けば「おはよーゆーくんっ」とエプロン姿の姉貴が張りきってお出迎え、俺も「おはよ」と返せば笑顔で料理作業に戻っていった。

キッチンで料理をしている姉の横を通り過ぎ、若干くたびれ始めた冷蔵庫の扉を開けて冷麦茶が8分目まで入ったボトルを取り出す。

冷蔵庫の向かいに存置されている食器棚から、これから起きてくるだろうと思われる人数分のガラス製コップを取り出して、各3重に重ねてから卓袱台に持って行った。

コップをバラして自分のコップを確保、ドプドプと勢いよく麦茶をマイコップに注げば、間髪入れずに飲み干した。

あらかた喉も潤ったが、食事時にはどちらにしろ水分が必須なので、自分含めた人数分のコップに麦茶を注いでおくことにする。

すると俺に続いて起床したのは「おはよー」ふぁーぁと欠伸するホニさんだった、ああ可愛い。

「おはよホニさん」と返す、やはり指定服化しているセーラー服姿……ではなく、姉貴のおさがりを譲り受けたらしく。

青と緑のギンガムチェックという鮮やかかつ爽やかな色合いのパジャマを上下着ていた、おお似合ってる。

寝ぼけているせいか犬耳が出ていて、あら可愛い。

ホニさんのそんなお姿に癒されていた、その時にやってきたのは「おはようじゃ」やはり眠いのか目をこすりながら歩いている。

いや、可愛くない訳じゃないんですよ？　でも、どうも桐の今までのイメージのせいで純粋に可愛いと思えないのが非常に残念なと

ころ、日頃の行いって大切だよね。

そして間髪入れずに最後の刺客……もとい、起床組の「オハヨウゴザイマス」日本語覚えたて外国人もびっくりの酷い片言を披露してくれた。

姉貴が食事を運び始めたので、俺も手伝いに行くことにしよう――

朝食を食べ終えれば、後は適当に用を足して顔洗って髪をとかして……あらかた済んで自室に戻り制服に着替えて鞄を持てば、登校準備は完了。

あ、朝食と着替え以外は描写省いていただけでちゃんとやってたんだぜ？　本当だぜ？

女性の支度は時間がかかる――というのはユイには通用しないのが悲しいところ、パジャマと部屋着を兼ねていたTシャツに綿のグダグダズボンはとってもシュール。

着替え終わったと想えば、髪はボサボサのまま……身だしなみ適当だなオイ、制服もヘナヘナになっていそうだが、それは違った。

姉貴が丁寧にも数日に一回は全員の制服をアイロンかけているのだから、頭が上がらない。

我ながら何回も想うが、なんて良い姉を持っているのだろう――手伝おうとしても頑なに断られてしまうので、手伝えなくて残念だ。

高校組が揃ったところで、早めに家を出る。　桐とホニさんの温かい見送りを受ければ、姉貴と俺は玄関を出た。　え？　ユイはどうしたって？

何故かは、おそらく分かっているかとおもうが……ユキにはこのことは知られていないのである。　このこと、とはユイのことだ。

ユイが俺の家に同居……家族となっていることを殆どの友人は知らない、勿論ユキもその一人だ。

というか知られたらややこしいどころの話じゃないから困る……おそらく学校の担任は知ってはいるのであろうが、詮索しないのは興味が無いからだろう。

そして念には念を入れて、最近はユイに裏口から出て遠回りして貰っている……ユイのせいではないのだが、俺が頼み込んだ結果承諾してくれた。

ユイはユキと出会うことの多いすぐ近くの交差点で合流することになっているので、その交差点までは姉貴と二人きりの登校だ。

姉貴と二人の時間も短いが、俺と姉貴の間に会話は少ない。姉貴曰く本当は長く話したいらしく、中途半端に話出すと抑制が効かなくなるから……らしい。

そんな抑制という単語があまりにも似合わない姉貴だが、一応自重という選択肢があることに驚いた記憶がある。

そうして少し歩けば交差点、ユイと合流し数分足らずで「おはよ～」とユキさん登場、ああ今日も可愛いなぁ。

二人から四人に一気に増え、また少し歩けば「よーっす」と最近出番がきっかりなかったマサヒロと合流。どうにも影の薄さに拍車が駆けられている。

そうしていつの間にか談笑している間に学校に着き「じゃあね、ゆうくん！　ゆいちゃん、ゆきちゃん、まさひろくん！」と言って髪を揺らしながら駆けて行った。

そうそう、言い忘れていたが姉貴は茶髪でポニーテールだ。あれ？　ユキの色違い？　ポケ●ンじゃないんだからさ、んな訳ない。

ユキは正確には少し額が広い、そのおかげで綺麗の白い肌の見える面積が大きくて、非常に健康的なんだよな。

一方の姉貴は目に被らないぐらいで前髪を伸ばしている上に、髪そのものがめっちゃ長い、弟の俺が言うのも難だが、姉貴の方が大

人びている。

……文章力が無いのでうまく表現出来ないや、各自の想像にお任せすることにしよう。

ということで、姉貴以外の3組メンバーはそのまま3組へ直行、鞄さえ下ろせばやはり談笑タイム。

さぁさと話題が切り替わり、ユイが始め俺がツッコミ、マサヒロ話せば俺ツッコミ、ところどころ合いの手を打つユキは可愛い。

そんな時だ――

「（ん？）」

おおおぉ、なんか寒気が。　何故か突飛押しもなく鳥肌がブァァァァァっと立ったのだ。　……？

疑問に思う俺を尻目に会話は続けられていく。

談笑の渦に居た俺が、自分に来たる事態に気付くのは、数分後の事で――

「――ユウジ様」

また寒気がブァァァァァッ！　聞こえた声に振り向けば――

「――おはようございます」

言い知れないオーラを放つ姫城さんの姿がそこにはあった。

第０９９話　√１－４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

近日、適当に挿絵挿入予定ー

え？　描いたのは自分ですよ？　本当ですよ？

第０９９話　√１－４　※独占禁止法は適応されませんでした。

はやく！　はやく、ユウジ様を刺し殺さないとっ！

ナレーターただいま戻りました、いやぁ久しぶりにのんびりさせてもらいましたよ、ああたまには普通に学校生活送るのも――って、えええええええええ！？　何事ですかっ！　何で姫城が血走った眼で全速力でダッシュしながらそんな穏やかではないことを考えているのですか！？

え？　バレた？　……ああ、なるほど。　それは……仕方ないですね、はい。

いえ、待て私。

これじゃかつての私じゃないですか……まったく、なんで私はこうも学習しないんですかね。

なんでいつも暴力的手段に走ってしまうんですか……それにしても、納得が行かないです。

ユウジ様は何故セクハラ、胸を触る等の行為をしてしまったのでしょうか……それも転校生相手に。

マスコミの一種で話題性を集める為に誇張表現を多用する新聞の特性から見るに……おそらくガセか、実際にそうだったとしても不可抗力に違いありません。

というか、そうじゃないと許しません。

……もし、セクハラが本当だと仮定します。　そうなると、私以外の女性の胸を触ったことですから……

それはもうユウジ様ラブな私としては触られるというスキンシップが羨ましいというか――

なんか悔しい。

ユウジ様が取られたような気がして悔しいです、ユウジ様とのゴールインは人生計画に既に組み込み済みですというのに。

横取りされちゃ適いませんよ！　それに、それにですね――

私からユウジ様が遠ざかってしまう気がします。

……一番の理由はそれかもですね、怖いんです。　見捨てられるのが、空気になってしまうのが。

確かに最近はまともにユウジ様と話せていませんし……だからこそ不安なんですよね。

一体どうすればよいのでしょうか？

いつも通りの発想ですと、ユウジ様を私の家に連れこんで監禁。

ユウジ様に寄りつく女をくたばらせる……それに――

……という既存の考えは駄目です。

すると他にどんな方法があるでしょうか、正攻法で襲って既成事実を作って仕舞えればよいのですが、難しいでしょうし。

ユウジ様を惹きつけられたら良いのですけど――

惹きつける……！

そうです、そうです！　既成事実は既成事実でも”私にユウジ様がセクハラ”という既成事実を作ってしまえばよいのです！
そうなれば妬ましい転校生と同等になりますし、あえて教室でやることによって周りにユウジ様とのラブラブっぷりをアピールすればよいですね。

そうとなれば、教室へっ！

え？　はい？　どゆことですか？

第１００話　√１－５　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ここまでコピペ……さぁここからが本当の（ｒｙ

第１００話　√１－５　※独占禁止法は適応されませんでした。

「――おはようございます」

言い知れないオーラを放つ姫城さんの姿が、そこにはあった。

「！？」

おかしい、一体何が彼女をそうさせているのか。

まさかッ！　……ユイとの同居がバレたのか！？　いやもしかして――アイツか？　アイツなのかっ！

いや……それはないか、ホニさんの件は仮とはいえ解決したし――でも、考えて見れば思い当たる事が多すぎる！

なんだこれは、俺は地雷原を走る抜けるどころか、ホフク前進で這いながら進んでいるようなものだ！

ちくしょう、なんなんだ！　姫城さんの琴線に触れた爆弾は一体っ！？

「今日はいい天気ですね」

ッ！？　よっぽど暇で息絶えそうな時ぐらい退屈な時に召喚するようなどうでもいい話題を切り出された！

「ああ……良い天気だな」

「ところでユウジ様」

「っ！」

来るぞ……とりあえず適当な話題で話をおっ始めてから爆発するんだな！　これが嵐の前の静けさって奴か――

「このことに身に覚えがありますか？」

「このこと……？」

すると姫城さんは持っていた物を広げる――新聞？　アイパマ新聞？　なんだこれは……！

まて、まって。　ちょっとばかしシンキングタイムを頂きたいのだが……そんな猶予は無いか。

新聞に載っているのは「俺」と「オルリスさん」……見出し各それぞれの二人の顔と上半身が入ったモノクロ写真を合成している。

ちなみにオルリスさんは別として、俺に関しては顔に棒線など入っていない、嬉しくない無修正仕様。

そして見出しのタイトルは「生徒会役員Ｙ氏が、同学年女子にセクハラ行為!?」というものだった。

なんという晒しｏｒ吊るしあげ。

「おうっ！　それはかの有名なアイパマ新聞、通称非公式新聞！」

非公式新聞……だとっ！　テスト原案とかこの世界の真理とか普通に載せる、あの非公式新聞だとぉ！
やられた……やられたよ、母さん。　まさかこんな形で俺の存在を学校中に知らしめてしまうとはね。

「この記事のことです」

「……と言いますと？」

「ユウジ様は、実際にこのようなことをしたのですか？」

「！」

そうか、そうだよな。　その質問は来るよな、うん分かってる。
……言ってしまおうか、死を覚悟して言ってしまおうか。
いや、命を惜しんで嘘をついて白を切るか――

そんなヘタレ主人公みたいな後者を選択してたまるか。

嘘はつかねぇ、ありのままを話す。
いくら不可抗力だったとしても、その事実には変わりは無い。

「ああ……その記事の通りだ、姫城さん」

「っ！？」

……言ってやったぇ、へへへ！　しかし、この震えはなんだ？

体のあちこちが震えてやがるぜ……

「……そうですか」

!?　え、えと何が来るんでせう？　パンチですか、キックですか……いやいや、宝刀で有無言わさずブスリですか、うわあああああああ

「お答え頂きありがとうございます」

長いよ！　前振りが長すぎて恐怖倍増だよ！　もういっそスパっとやってくれ、頼む、この間はキツイ！

「でもですね、ユウジ様」

来るか！　ああ、そうかい、さっさとこいやぁ！

「言ってくだされば、私は構いませんでしたのに……」

「え」

そういえば、俺の右手を掴み自分の胸元へ――

ふに。　……え？

「ユウジ様……いいんですよ？」

やわらかい……って、えええええええええええ！？
もう感じることは出来ないと覚悟していた感触を……こんな形で、だとッ！

「えええええええええええ！？」

「なんだってえええええええええええ」

「うおおおおおおおお、やりやがったなあああああああああ」

順にユキ、ユイ、マサヒロ……が驚愕していた。　……デカい声のせいでクラスの注目の的だぜどうしてくれるっ！

「いやいやいや姫城さん、これは――」

このポージングはまずいって！　早く手を姫城さんから離さない――って抜けねぇ！　ガッチリ俺の手をホールドしてらっしゃるぅ！

「……ん」

俺が手を動かしたばっかりに……もう、更に状況がおかしくなってる！　どういうことなの……お陀仏を覚悟していたら逆セクハラされたでござる。
ああ、姫城さんの心の内がわからない！　何を考えてこんなことをしたのか、逆にこえええええええええええっ！

第１０１話　√１－６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

すんません、更新遅れました

第１０１話　√１－６　※独占禁止法は適応されませんでした。

ええと、今回からナレーション再開しますねー
いやー、私が不在の間の記事見て仰天しましたよ、その発想はなかったですね。
で、姫城さんはユウジへ誘導尋問をかけた揚句に――

やってやりました……！　これであの名前も知らない転校生と同格ですっ！

逆セクハラですって。　ええ、驚きましたよ？
それはもう展開見てて噴出しそうでしたよ、まさかこう来るとは予想もつきません、というかしようがないですって。

でも、同じ女生徒としてそれはないです。

よぉく考えて下さい？　いや、考えなくても分かりますよね？
教室に来て怒り心頭の状態でユウジへの尋問をした結果に自主的にユウジの手を胸元へ持って行ったんですよ？

痴女ですよね、一見。　いえ、どうみても痴女ですよね？

オルリスのやられた事と同じ事を再現して、同格に。　それで優越感に浸る――ええと、私にはよくわからないです。
何かそれは誇れることなのでしょうか……？

にしても……ユウジも不運ですね。

「（な、なにごと!?　なんで俺姫城さんに手を胸元位置でホールドされてんの!?）」

まて俺、落ち着くんだ。　世界遺産の白神山地に延々と広がる自然の生み出した奇跡とも言えるブナ原生林を思い浮かべて心を落ち着かせるんだ。

……ん～、なんて心地よい木漏れ日。　見上げれば青過ぎない水色の空が木々の間から垣間見られ、なんとも爽やかだ。

辺りを見渡せば、天へと一心不乱に背伸びしたブナの木々がところ狭しと並んでいる神秘的な光景。

手元をみてば、結構な大きさの広大なおっぱい。　やわらかいながらもそこにある確かな弾力、そしてこの生温かさ、まさに男の夢が詰まってる！　おっぱいおっぱい――

うわあああああああ！　落ちつけてねぇぇぇぇｘっ！

逆にムラムラしてんじゃないか！

やってくれたな世界遺産！　近代化遺産の方が向いているとでも言いたいのか！

意味がわからないですから！　なんで世界遺産に始まり胸を経由して世界遺産に戻るのですかっ！

ふふふ、帰宅部を舐めてもらっては困る。　これでも高校生という元気真っ盛りの男。　腐っても男。　取り柄なんて皆無だけど男。

彼女居ないけど男。

腕力は人並みにあるんだぜ？　いくらなんでも女子の片手ホール

ドで俺の手が抜け出せない訳がない……ってあれ？　あれあれ？
ちょっとばかしまて、ちょっとおまちください。　少々ご待機下さい。　え？　え？　抜けない？　嘘だろ？　ハハッ、ナイスジョーク！
まだまだ本気だしてないからな、うんうん……うおおおおおおお！　あれ、いや今から本気だすって……とりゃあああああああ！
どして？　なして？　いやいやいや！　俺腕力無さ過ぎだろ！
でもそんなガリガリでもねぇぞ！？

……そういえば、姫城さんの胸にどんどん手が食い込んでいるような――

力を強めてらっしゃる！？　まさかの”これからが本当の地獄だ”パターンだとッ！　やめて、俺のライフはもうゼロよ！
というか柔らかさがヤバい、オルリスの時は思考する余裕すらなかったのに、今ではご覧のあり様だよ！
なんだこれ、おいおい……こんな最終兵器に包まれ続けてたら理性がトランプタワーのごとく崩壊するわ！

「あ、あの姫城さん！　……手を離してくれませんか？」

「駄目です。」

ああっ、速効で断られた！

「こんなことしてどんな意味が有るって言うんだ！」

イジメなのか！　地味に攻撃力高めなイジメの一環なのか！？

「……私が嬉しいんです」

痴女!?

ちくしょう！　この世界には変態しかいねぇ！

ああ、唯一無二の最後の良心ことユキさんやこの惨状を見ないでおくれ。　俺が仕向けたことじゃないんだよ。　本当なんだよ。

あ、ユキさんがなにかおっしゃ――

「……あわわわわわわわ――」

見ないで！　これ以上俺を見ないで！

「……ユウジめ、羨ましい」

……えと、ユイです今の。　マサヒロじゃあないんです。

というかなんでお前がそんなことほざいてんだよ！　お前女だろ！　自分の触っておけよ！

あのユウジ？　色々言動がおかしくなってるのは状況が状況だからですか？　……そうですよね！　いえ、そうと言ってください！

「呪呪呪」

のろのろのろ!?　ちなみにマサヒロ。
……いやなんというか普通の反応だな――ってオゥイ！　さりげなく鉛筆投げてくんな！　しかも鉛筆の７Ｈとか硬過ぎて本当に刺さるから！

「――――」

あのクラスの男子の方々、鈍器は投げないでくれませんか？
はさみ、カッター、アルミ定規、文鎮、剃刀、鎌、鉈、槍、ｅｔｃ――最後の方は完全に戦場でも使える武器ですって。
！　更に銃!?　……ｍ、まぁモデルガンかＷｉｉのアタッチメントだろうな、そんなちゃちいものオウフ!?　モデルガンで鉄製の玉打ったらほぼマジモンでしょうがっ！
ついにはモデルガン本体投げ始めたし！　どんだけ頭に血が上ってるんだよ！　……なんともしてもこの状況を変えないと――

「ちょっと姫城さん――」

「ふわ――ふふ」

姫城さんは見事なまでに悦に浸っていましたとさ。
じ、自分の世界にトリップしてらっしゃる！　うわあああああああ、誰か助けてぇぇぇぇぇっ!?

……不幸ですよね、ユウジ。　なんというか……はい。

第１０２話　√１－７　※独占禁止法は適応されませんでした。

それからはというと。

姫城さんは俺の手を自分の胸へと使いどころが間違ってる火事場の馬鹿力と言わんばかりの勢いで押しやって行くので、容易に脱出出来ない。

動けないので、嫉妬に狂ったクラスメイトは鈍器投げ放題。　……いや、ちょっと背中に当たって来てるんですけど！

しかし、そんな俺に手を差し伸べてくれたものが居たのだ――

『キーンコーンカーンコーン』

それはチャイムだった。

チャイムに一瞬の隙を見せた姫城から俺は、使い方の合っている火事場の馬鹿力を発動。　幸運にも脱出、即―により自分の席へと辿りつく。

チャイム……またお前に助けられちまったな。　ありがとよ、チャイム。

あぶなかった。　ああ、あぶなかった。　その１０秒後にいつもは遅い担任がやってきたのだから冷や汗モノだ。

本当に大変な目に会ったぜ……

……いや、まぁ正直良かったよ？　胸。　柔らかかったし、温かかったし、なんとも懐かしかったし――

でもね、場所というモノをですね。　分別というのをですね……

流石に教室の中心で女子の胸を揉む（揉ませられる）なんてさ。

そりゃ温厚なクラスメイトも血気盛んになる訳ですよ、俺がそんなもん見せつけられたら手榴弾投げつけてもおかしくないですもん。

だからクラスメイトは責められない……しかし、一気に敵が増えただろうけど。　へへっ、夜道には気をつけないとな。

しかし、なによりの問題はだ。

「……」

無表情のユキだ。

怖い。　なんか怖い。　まだ怒っていたり、悲壮に満ちた表情の方が良かったのに。

一番困りますって……どうしたものか――

1時限目終了、ユキのことが気になって授業どころじゃねぇ……とりあえず、声をかけてみようか。

まずはユキへと近づいて、椅子に座る彼女の目線までしゃがみ、そして小さな声で――

「あ、あのユキ？」

「……」

！

「ユキさん？」

「……」

！？

「ユキさーん」

「え」

え？

「あっ、ごめん。　ちょっとボーッとしてた」

「そ、そっか」

む、無視でなくて良かったあああああああああああ！

「えっとね……胸」

「え？」

「いや胸を揉まれるとどう感じるのかな……って」

「！」

分かりません！　絶対に俺には分かりません！　というかそんなこと悩んでたんすか！　うわーい止めてくれーい。

「あ、いや！　ユウジに聞いても分からないと思うんだけど……姫城さん見てて思ったの」

「いや、あれは、だって、無理やり」

すこし混乱気味なんだぜ、どうすればいいんだぜ！

「……姫城さん気持ちよさそうだった」

ギャルゲってーか１８禁ゲー的展開じゃぁぁぁぁぁん！

まさかのＲ指定への挑戦だと！　やめろ！　姫城さんはまだしもユキさんんいそんなこと言わせるんじゃねぇぇぇぇぇぇ！

この糞スタッフ！　止めろ、さっさと消えうせろや！（？）　とにかく誤解をまず解かないと……

「ユキさん、あれはですね！　違うんです！」

「……大丈夫、気にしてないよ。　男の子だもんね」

諦め入っちゃったあああああああ！　好感度下降線だよこんちくしょうぉぉぉぉｘ

「本当に俺からじゃないんだって……」

「でも……直ぐに離れなかったよね？」

少し怒ってらっしゃる！　ど、どうにか誤解をっ！

「姫城が押さえつけてきて」

「……責任逃れ？」

うわあああああああ！

「それになんだっけ？　新聞の記事の見出し。　転校生にセクハラだっけ？」

「違うんです！　あれもこれも俺の意思じゃないんです！」

「……ふんだ」

ぎゃあああああああ、一番ダメージ大きいっすよ！　ユキさん！

俺がユキさんラブなこと知らない、というか教えられないから傷が深いですって！

「……最近は一緒に帰れないしさ」

「え」

……ユキは何か言ったみたいだが、ボソっと小さく言ったのでよく聞こえなかった。

でも、結果的にセクハラに違いないよな。　オルリスの場合はあっち側から見たらそりゃあもう完全なセクハラだし。

姫城さんは、一応俺以外にはキチンと優等生だから、皆には俺にあんなことをされたとしか見えないだろうし――

「やっぱり……俺が悪いよな」

色々言い訳していまった。　いくら理不尽でも、不可抗力でも……自分のやってしまったことは認めなくてはならない。
いつまでも駄々をこねていては一向に前へと進めないだろう。

「ごめん……ユキ。　俺が悪かった」

「なんで私に謝るの？」

自己満足……なのかもしれない、謝ることで罪の意識から少しだけ解き放たれるという無責任。

「言い訳した俺が悪かった……ユキの言った通りだ。　俺は結果二人にセクハラをしてしまった」

「私より謝る人が居るんじゃないかな？」

「……！」

そういえば、オルリスはこのことを知っているのだろうか。
もし知っていても、知ってい無かったとしても――オルリスに、また謝ろう。
何度でもだ。　無視されたって煙たがれたっていい。
そして反省の意をこめた行動をすればいい。　そうやってゆっくりと治していくしかない。
即効性のある解決法なんてない。　時間をかけてでもやってしまったことを償う……悔い改めて行く。

「ごめん、わかった」

理解した、完全には許してくれないだろうけど。　俺はこれから――

「なんでまたユウジが私に謝るの……ふふっ」

ユキが笑った。　ユキが笑ってくれた。

ユキも分かってくれたのかもしれない……そうだと嬉しいのだけど。

「ユウジは私が言っただけで、気づけたんだよね？　偉い偉い」

と言ってしゃがんだ俺の頭を優しく撫でてくれた。

それは何か温かくて、どこか懐かしい感じがして……なによりも嬉しかった。

ユキにはまるで敵わない。

その後姫城さんに謝った。　何故かと言えば、あの新聞記事に触発されてのことだと俺は推測したまでで。

本人の内心はいず知らず。　実際のところは分からない。

謝られた本人はちょっとばかし照れているような呆然としているような嬉しいようなよく分からない感情を映していたようにみえた。

今日の生徒会で出会うだろうオルリスにもこの事を伝え、そしてしっかり俺は謝ろうと思う――

うーん、なんというかユウジ。　聞いてるだけで反省はトコトンしてますねー

誠実ですよね、彼。　……本当に二つの事件も運が悪かっただけなんですけどねぇ。

そんな頃です――

「（少年マンガの主人公なら、そんなことを気にし続けるなんて愚かな真似するはずないじゃろうがな）」

小学校の教室で周りの子と話している最中にいきなりそんなことを思う桐でした……どうして分かったんですか！

第１０３話　√１－８　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

暫定更新～

第１０３話　√１－８　※独占禁止法は適応されませんでした。

そして放課後を迎える。　この後、生徒会に行ってオルリスに謝らないといけない。
自分の行いによるものであって、当然のことなのだが。

ユキや姫城さん（とおまけにマサヒロ）に惜しみつつも別れを告げて、ユイとともに生徒会へと向かう。

「いやぁ、生徒会ってのは美人揃いで、オラぶったまげたわぁ」

「相変わらずの口調の安定感の無さが逆に安定感をかもし出しているな」

もうユイの独特なしゃべりはデフォ、てかどうでもいいな。

「にしてもユウジ、罪な男じゃんねぇ」

「？」

罪？　そんなもの俺とは無縁――ではないか。　まぁセクハラしてしまったからな。
なんとまぁ短時間で犯罪者予備軍となってしまったこと。

……あれ？　ホニさんはどういう扱いなんだろうか？
俺に付いてきたとも言えるし、俺が連れてきたとも言える。
そして一般観衆には――誘拐にも見えなくないよなぁ……

俺のホニさんを手放す――げほんげほん、ホニさんを追い出すつ

もりなんかないけれど、そこんところどうなんだろな？
……こういうのはゲーム内の出来事だから許せるのであって、いざ現実でやってみるといろいろ際どい。
セクハラしかり、殺人未遂しかり。

「……なんだかなぁ」

「？　どしたユウジ。　ギャルゲーの購入者懸賞にでも外れたか？」

「そんなもん応募してねぇ……てかそんなものあんのかよ」

「あったと思ふ」

「見事なまでに曖昧だな……で、お前になんで罪な男呼ばわりされにゃならんのだ」

「そりゃ……あれだ。　生徒会で見事なまでに美少女をはべらせている――」

「ほほう、なるほどよおくわかった。　ユイは今、俺のサンドバッグになりたい訳だな」

「や、やさしくしてね……」

「……」

相変わらず謎の返しで調子狂うな……はぁ。

「はべらせてなんかねぇよ、どこみたらそう見えるってんだ」

「男1：女：5」

「ギャルゲーのやりすぎだ、頭冷やせ」

ユイの頭を手の平でかるぅく殴った。

「違う！　違うなユウジッ！　そこは”少し頭冷やそうか……”と、ジト目のな●はさんを再現すべきだろう！」

「知るかよ！　そんなアニオタ意外お断りなネタやんじゃねぇ！」

分かるか！　そんな返し簡単には思い出せないに決まってるだろ！……え、知ってんじゃねぇかって？　うん、まぁ、知ってるよ？　まぁ、まぁあれは、あれだしね。　うん、面白いことには違いないからね。

「アニオタで何が悪い」

「……いや、批判しているつもりはないんだけど」

「そうやって一般人はオタクという種族を差別して云々かんぬん」

「そこは端折るなよ……はいはい、俺は俺でオタですよ」

「よく言った！　このオ●ーナを買う権利をやろう」

「今度は某掲示板ネタか！　付き合ってられんわ！」

ばしっ、っと右手で軽くユイをど突く。

「おっ、ユウジのありきたりでテンプレなツッコミキタコレ」

褒められてねぇ、ぜってぇーバカにしてんだろ。

まぁ……なんだかんだで生徒会室へと辿りついたのだった。

「……よし」

覚悟を決めて、戸を引いた――

第１０４話　√１－９　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ＧＡＹＭ版より性格が良くなっている……だと

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１０４話　√１－９　※独占禁止法は適応されませんでした。

ガラガラガラ――生徒会室の戸を引いて、室内へと足を踏み入れる。

「こんにちは――」

俺がそう挨拶しながら中へ入って行くと。

「こん――――！？」

まぁ、ものの見事にオルリスしかいなかった。

ちなみに挨拶を言いかけて止めたのも、おおよそ俺が入って来たからであろう。

「……あのさ」

「……」

ガン無視。　まぁ仕方ないわな。

「ユイ」

「はい、なんでしょう親分」

「悪いが、席を外してくれないか？」

「え……ああ。　なるほどね。　わかった、アタシは外で耳でも塞いで待ってる事にするよ」

「助かる」

ユイも先程の新聞公開時に一緒に居たから、空気を読んでくれたのだろう。

こういうのは本当に有りがたい。　こういう面でのスイッチの切り替えの良さは流石といったところだ。

さて……オルリス一人と俺が残された訳で。

案の定――

「……私一人にしてどうするおつもりですの？」

警戒心や不信感かつ不機嫌、嫌悪感を撒き散らす彼女。

「知らせたいことがある」

「……どうせ他にも何かするのでしょう！」

「しねぇよ。　……”あの”事が非公式新聞に載っちまった」

「”あの”……っ！　そ、そんなはずはないですわ。　どうせ私とあなたとの二人きりにする口実――」

「……現物はある理由で持って来れない。　一応、写メは撮っといた」

携帯を操作して、画像フォルダを開き液晶に映し出す――

「これだ。」

「……！？」

彼女はやはり驚きを隠せないようだった。
それとともに羞恥心が沸きたったのだろう。顔を真っ赤にして手を震わせていた。

「やっぱり……でしたのね」

「え」

表情を変えないまま、そんなことを言う。

「以前あなたが私を訪ねた来た時にです。……あなたも聞こえていたはずでしょう？」

「何の話だ……？」

「シャッター音ですわ」

「！」

そうだ……思い出した。
オルリスの教室を訪ね、その後オルリスに連れられ倉庫入り口かつ半地下で話していた最後の方にだ。
パシャ、というシャッターを切ったような乾いた音が響き聞こえた。

あのときだったのか。

それならば責任は全て俺にある。
あのとき、俺が訪ねなければ。　もし生徒会で会っていれば違ったのかもしれない。
所詮悔やんでも”もし”と言っても時が戻る訳じゃない。

「その件も、そもそもの発端も……本当に悪かった。　クランナ＝オルリスさん、すみませんでした。」

もう頭を下げるしかなかった。　例え、今でさえも無視されていても。
例え、答えが返ってこないとしても。　今は謝ることしか俺には出来ないのだ。

「……頭を上げていいですわ」

「え？」

「……連れ込んだの私には違い有りませんから」

「いや！　そもそもオルリスさんを訪ねたから――」

「いえ、私にも責任の一端は十分有ります。　申し訳ありませんでした」

「なんでだよ！　なんで俺なんかの為に謝る必要があるんだよっ！」

俺が全て悪いのだ。　何もかも。

「……なかなか言いだせませんでしたが、正直私も言い過ぎ――いえ、過剰なまでに憤りを感じてしまいました」

「それぐらい言われて当然のことを俺は――」

「あなたの顔を見るだけで……どうにも怒りが抑えきれませんでした」

「だから、それが当たり前だって――」

「あなたはあの時も、そして今日もこれほどまでに謝ってくれているというのに……私は心が大変狭かったようです」

「いや、だから――」

「ごめんなさい。　言い過ぎました」

「……こちらこそ、すみま――」

「あなたは十分謝ってますから……いいんです」

「……」

「何故、あのようなことが起きたのか……改めて理由を聞いて宜しいでしょうか？」

「は、はい」

……一応は包み隠さずに話した。　おそらく、大半がいい訳にしか聞こえないだろう。

それは、俺にとって仕方がないことなのだ。　覚悟もしていた――今度こそダメだと。

「……信じてもいいのですか？　あなたが、友人を追って――それで、あんなことになったと」

「はい」

「……信じます。　あなたのことを信じます」

「え」

「……感情に身を任せて周りが見えてませんでしたが、あなたは嘘をついているようには見えません」

「！」

「でも……このことを聞いたとしても、まだ許すことは出来ないです」

「ああ、分かってる。　聞いてくれただけで、こっちはよかった」

「……今後の行動で示してください」

「ああ……わかった。」

と……生徒会室ではそんなことが話されていたという。

そして、いつも強張っていた彼女の表情も少し軟らんだように見えた。

「それで……どういたしましょうか」

「ああ、よりによってあの新聞だからな」

「この学校では新聞部が複数存在すると聞いているのですが……？
ご存じなのですか？」

「……かなりヤバ目な新聞だ。　次期テスト問題をリークするぐらいに情報入手力がある」

「次期テスト問題……俗に言うカミングでしたっけ？」

「カンニング……まぁいいや。　そんな新聞に目を付けらた訳だ」

「ええ、生徒会役員内で起ってしまったが故に、とびきりのネタでしょうね」

「……思ってたんだが、オルリスさん」

「なんでしょう？」

「オルリスさんは、外国から来たんだよな？」

「あ……はい。　ですが？」

「いや、いやに日本語が上手で、驚いた」

「当然ですわ。　あちらの国では趣味とはいえ日本語、日本文化の勉強をしていましたから」

「おお……そりゃ凄い」

「聞いておかしくないのですか？　私の日本語は」

「いやぁ、全然。　下手すりゃ、日本人よりも日本人してる」

「日本人より日本……？　ええと、一体それはどんな意味で――」

「ま、まぁ話は戻すけどな」

「あ、はい」

「これからは標的にされたと考えて、注意した行動をとるしかない」

「……一体どういたしますの？」

「俺とオルリスさんは一緒に居ない方がいいだろう。　何かにつけてネタにされそうだからな」

「……しかし、生徒会役員としては顔を毎回合わせることに――」

「その時は――とにかく無視すればいい」

「む、無視ですか！？」

「ああ……言っては悪いけども、今までと同じようにだ」

「今までと同じ……私があなたに嫌悪感を抱いている時のような」

「それだ。　……オルリスさんには面倒な役回りを受けてもらって悪い」

「……いえ、このまま目を付けられる続けるのは嫌ですから。　私も協力させて頂きます」

「……いいのか？」

「あなたこそどうなんです？　……今までの私のあなたへの態度は決して悪いどころか、あなたにとっては――」

「そのぐらい、いいさ。　出来れば……こういう会話も失くしたい」

「……分かりましたわ」

「とりあえずは、もう警戒する必要がなくなる……半年程ぐらいか？」

「それほど必要ですの！？」

「ああいうのはねちっこいからな。　今のところは……な」

「分かりましたわ」

「……ということで、これから頼む」

「任せて下さい――ううん？　これは使い方が違うような……」

「いいんだよ、じゃあ――」

「ああ、忘れていました」

「ん？」

「オルリスと……名前で呼ぶのは変に思われるでしょう？」

「え……あ！　そうか、悪かった！　気付かなかったわ」

「いいんですが……これからは”クランナ”と苗字で呼んでくれると良いのですが」

「ああ、覚えた。　……今まで馴れ馴れしかったんだな、俺」

「気にしなくてもいいですわ。　……では、これからは――」

「ああ、じゃあ――」

新聞部を撤く為に、また元の関係へと戻る。

これからもそっぽを向かれることが決定したのだった。

でも、今までとは違って……少し胸をなでおろす俺が居るのだった。

第１０５話　√１－１０　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１０５話　√１－１０　※独占禁止法は適応されませんでした。

生徒会終了。
今回も役員が集まって談話して終了――
かと思ったら、今日は「衣服の乱れについて」という酷く惨いぐらいに真面目議論がなされた。
ずっとだらけてるだけかと思ったら、こんな風に議論……よく分からない集団だ。

実際会長が口火を切ったので、ただそれに俺らは乗っていっただけに過ぎないが。

しかしなんともスピード解決。
「集会での再度呼びかけ」とか「朝来て校門で検閲」とか決ま――
朝来て校門で検閲……？

「帰るっかー、ユウジ」

役員会議には思いのほか真面に発言していたユイ。
手と手絡めて両腕を上にあげて背伸びするユイがそう言ってきた。

「そうだな」

ちなみに俺らは既に生徒会室を出て昇降口方面へと歩き始めていた。
会長は「仕事してやったり」という謎の満足感を顔に映し、書記

は「もっとエキセントリックな意見が欲しかったわ」と若干不満気味で帰って言った。
福島「おお、こんな議論するのか！」とか言っており、オルリスは「これこそ生徒会ですね」と呟いていた。
……勿論オルリスのは、会長と話していたのを俺が耳にしただけだが。
そしてオルリス以外は「じゃねー」「じゃあまた」「またなー」など言って帰って言った。
何故俺らが直ぐに帰らなかったと言えば――
「ごめんねユウくん、ユイちゃん！　待たせちゃって」
と姉貴が生徒会室を施錠するのを待っていた。
「お姉ちゃんちょっと鍵返してくるから先に――でも、もう今の今まで待たせちゃったし……」
「いや、姉貴が良いなら待ってるぞ？　な、ユイ」
「ミナ姉の為なら待てますぜ」
「ユウくん、ユイちゃん……良いに決まってるよ！　じゃあ校門前で待ってて！　直ぐに行くからっ！」
言うと小走りで駆けて行った。　……あれ、小走りか？　明らかにダッシュして……加速してる!?　は、はええ！

「じゃあ、俺らは校門で待つとしますか」

「そうだぬ」

第１０６話　√１－１１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１０６話　√１－１１　※独占禁止法は適応されませんでした。

しばらくユウジとユイが何か会話していたようですが、途端に会話が途切れ。
ユウジは思わず空を見上げました――
太陽が黒い夜の海に落ちて、辺りはダークブルーの空と僅かに覗く星がそこには有ります。
おそらく皆が見慣れたその空ですが、ユウジは何故か呆然と見惚れていました。
今日はいつもより星が多かったのかもしれませんし、久しぶりに空を見上げたからなのかもしれません。

「おまたせ～！」

ユウジ・ユイが校門前で数分待っていると、ユウジ姉が駆けてきました。

「急がなくても良かったのに」

「そうですよー、ミナ姉」

相変わらずユウジ姉には敬語なんですね……ユイ。

「ううん！　ユウくん、ユイちゃんを待たせられないよっ！」

ユウジ姉は顔をブルブル振って否定します――
どうも彼女は気を使い過ぎな気がしますよ？

「まぁ、じゃ行こうぜー」

「そういえばユイちゃんの誕生日っていつかな？」

歩く道すがら、ユウジ姉はそんなことを言い出しました。

「え？」

「どしたの姉貴」

「なんとなく！　気になったんだよね～」

ものすんごい唐突ですね！　素晴らしいぐらいに思いつきっぽいですよ！

「えと、２月１３日ですよ？」

「２月？」

「はいー」

そう聞くと――ユウジ姉は何か考えだしました……？

「……ユウくんは11月11日だから、早生まれだから――」

ユウジ11月生まれだったんですね、というかさりげなくゾロ目なんですねー

「ということはユウくんはユイちゃんのお兄ちゃんだね！」

「ぶふっうぅぅ！？」

物凄い勢いで噴出しました……ユウジがです。

「……妹ってことですか」

！　たしかに！

というか、ユイ家族になってたんですよね！　すっかりそんな設定忘れてました！

「いや、え、なに、どうこと？　兄？　は？」

「いやだから、ユウくんはユイちゃんのお兄ちゃんってことになるねっ！　ってこと！」

「いやいやいやいや……合ってるのか？　えええええええ、合ってるのかぁぁぁぁぁぁ！」

……なんか果てしなく混乱、動揺してませんかユウジ？

「……そうか、ユウジは兄貴ということになるのか」

と、ボソっとちいさく呟きましたが――

「うわあああああああああああ」

ユウジ、近所迷惑ですよ。

「こ、これからよろしくね！　お、お……ユウジお兄ちゃんっ！」

目を閉じて聞いてみましょう……かわいいっ！　なんですか、ボイスオンリーだとかなり可愛く聞こえてきたんですけど！
ほらユウジも――

「ぎゃあああああああ」

……悲鳴をあげながらなんか地面をゴロゴロ転がってるのですけど。
そんなにショックだったんですかっ！

「ユイちゃんは桐ちゃんよりも年上だから……2．5女ね！」

「なんだよ、その小数点！」

悲鳴をあげて奇怪な行動をしていたユウジも思わずツッコミます。
なんでそんな中途半端なんですかっ！

「ほう……確かにそのレアっぽさが逆に良いな！」

「いやいや、なんで気に入ってんだよ！」
「ユウジお兄ちゃん。　そうだのぉ……ユウ兄なんてどうかい？」
「え？」
ユウ兄……？
「……どしたユウジ」
「あ、いやなんでもない！　というかいい加減やめろやぁっ！」
「ははははは、御冗談を」
「……いや冗談じゃないって」
ユウ兄か……なんだっけか。
どこかで聞き覚えが――
「行くぞー！　ユウジ」
「はやくー、ユウくーん！」
「お、おい！」
俺は二人を追い駆けながら考えた。
ユウ兄……以前聞いた気がする。

それも、そんな昔じゃないぐらいに。　確かにそう呼ばれた時期があったはず――

ゲームのシナリオのほかにも、現実に物語が有りそうですね。
今のところは伏線バラ撒いてる途中ってことでしょうねー

第１０７話　√１－１２　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

そろそろ追いつくな……

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１０７話　√１－１２　※独占禁止法は適応されませんでした。

「あー」

パソコン机前の椅子に座りながらうだーと背もたれにもたれかかるユウジがそこには居ました。
脱力感が凄いです……なんか退屈そうですね？　どうしたんでしょう……？

「はぁ」

いざパソコンをやろうとすると、何もしたいことがない。
忙しい時に「暇だ出来たらパソコンやろう。　パソコンやろう！」と思っていたのだが……
いざ、暇になると。　何をしたらいいのか分からなくなる。

いや、記憶力とかじゃないぞ？　ただ単に……うーん、例えるなら旬を逃がしたってことか？
出来ない時に出来ないと、何かが違うんだよな――

……実際周回してたサイトも周ってしまった。　そりゃあもうあっという間に。
で、現在何も検索することがなく項垂れている訳だ。

「あー……あ」

そんな時ふと思い浮かぶ。

ルリキャベのホームページってどうなったんだっけか？

ゲーム開始当初、ホームページそのものが消失していた。
それは時期的なもので、もしかしたら今アクセスしたらイケるかもしれない――

そんな考えが頭を過った。
思いついたら即実行。　好奇心旺盛な高校生真っ盛りの俺は検索を”ググレ”さんのお力を拝借して決行。
現れる検索結果、トップに現れた「Ｒｕｒｉｉｒｏ（ｒｙ」の文字列。

有無を言わさずクリックした。

『Ｎｏｔ　Ｆｏｕｎｄ』

……というのは大嘘だ。
俺の視線の先にあるパソコンのスクリーンには「ＲｕｒｉｉｒｏＤａｙｓ（サブタイ略」が無駄に凝ったロゴで描かれていた。
このホームページは思いのほか作りが凝っている。　まず面にあるのは美麗なアニメーションムービーが流れていた。
デフォルメキャラを多用して可愛らしくなおかつ見やすい。
キャラクター紹介ページではカーソルキーが紹介されているヒロインになっていたりと無駄に作りこまれている。

このホームページに騙されたヤツが何百人も居るんだろうなぁ……
……そう思わざるを得ない。
それでキャラ紹介をみることが出来たので、ここに記す。

［神主　直人］　主人公
（カミヌシ　ナオト）

本作の主人公。　正義感が強いだけで、基本は普通。
運動はそれなりに出来、勉強もそれなり出来る。
いわゆる平凡の模範

「地味にひでぇ解説だな」

［神主　桐］
（カミヌシ　キリ）

見た目に幼さが残るけど、それが魅力なヒロイン。
人懐っこく、兄が大好き。

「嘘つけ」

［篠文　由紀］
（シノフミ　ユキ）

小さい頃から主人公の傍に居る幼馴染。
明るく環境に溶け込み易い上、男子から人気も高い。
主人公の時々されることにドキっとすることがあるとかないとか。

「さすが僕らの天使ユキたん！　説明文が神々しいね！」

［姫城　舞］
（ひめき　まい）

容姿端麗、学力優秀の言葉が似合う。
スタイルはかなり良く人気の高さから、ユキ派とマイ派でファン争いになることも。
欠点の無さそうな彼女だが、あることになると性格が急変して……

「まぁ確かに美人だしな……あの性格が無ければ、ねぇ？」

［●△　□×］
（？？　？？）

「なんかバグってるし」

［オルリス＝クランナ］

●△●△□●△□×●△　□×□×
●△　●△　□●△　□××□●△　□××

「ありゃ？　文字化け？　説明分がバクって読めねぇぞ？」

［
●△　□×］

［●△　□×］

［ほに］

「ホニ様以外名前消えてるし、ホニ様の解説文が無い……」

以上終わり。
なんだよ、これ。

分かってることしか分からねーじゃねぇーか！

はぁ……なんだろうな、コレ。　そんなに俺に見せたくないのかね。
よくもこうも、丁度良く欲しい情報が手に入らないもんだ。
……誰かが糸引いてるんじゃねぇか？　と、思うぐらいに的確に消されてるからな。

うーむ、相変わらず謎だらけだ。

「そういえば、最近のゲームはどんなのが売れてんだ？」

Ｒｕｒｉｉｒｏも少し前の作品だし、今売れまくってる作品とか――

「あ」

そーいえば……行きつけのブログに売れまくってる作品とか載ってたな。

すぐにリンク先へ飛び、記事を読んでみる。

「……”はーとふる☆でいずっ！”？」

なんだこのポップなタイトルわ。

……パッケージ画像はすこぶる可愛いな。　ヒロイン達も一目で魅力有りだ――そう言えばどっかで聞いたな。

「検索、検索～っと」

ガラスドロップ制作”はーとふる☆でいずっ！”か。

なになにヒロインズはというと――

当初からデレデレな幼馴染に、オタクっ気ありな女子。

大人しくしっかりものな委員長に、同い年の妹。　デレてくれないツン同級生。

……まだまだあるみたいだが、ふむふむなるほど。　これは全員見事に美少女だなぁ。

俺的には当初からデレデレというスキルに幼馴染という立ち位置に果てしなく惹かれるなー

「あっ」

思い出した。　そう言えば、以前ユイが買おうとしていたギャルゲーの名前だった気がする。

ユイが食いついていることや、このパッケージに惹かれたこともあり、機会があったら買ってみるかなー

第１０８話　√１－１３　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

どうでもいいですけど、こっちに連載している方は生徒会の描写が大きく削られてるんですよねー
７割ぐらいがカットされてるから……どうにも生徒会メンバーの影が薄く感じるなぁ
特にコナツとか……誰？　ってレベルだし――

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲエリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１０８話　√１－１３　※独占禁止法は適応されませんでした。

五月一ニ日

「1学期中間試験も2週間前に迫った」

え〝。

「中間試験だからって甘くみるな。　期末試験は半分も取れないだろうから、中間試験で点数稼いでけよー」

以上、普段は出番が無い担任教師からのテスト告知と有りがたい警告でしたー

えええええええええっ!?

最近非日常に浸り過ぎて、そんな重大イベントを忘却の彼方までは吹き飛んでいないとはいえ忘れてたぜ。

幼馴染がタクシーにひかれたり、俺が殺されかけたり、神様との遭遇も果たしちゃったりして。

濃密過ぎる時間のせいで、入学書記に配られたテスト時期も分かる年間行事予定表はカバンの遥か底辺で原型を失っているであろう。

ということで、2週間後にテストだ。

正直授業もしっかり受けてるし、提出物もやってる描写がないだけで提出しているのだが……日頃の勉強をしていない。

ということでこの2週間で、ヘナヘナの字が陳列するノートからテストの問題を推測するしかないということだ。

ようするにテスト勉強だ。

しかし家という、環境が劣悪（惑わされる物や邪魔者が多すぎるという意味）な場所でやってはられない。

そこで、発動するのが「ドキッ！　代り映えしないメンバーでの普通に勉強会っ！」だ。

中学3年の夏ごろから開始された「ドキッ！　代り映え（以下略）」は、実際数々のテストという壁を打ち砕いて来た。

というか、勉強会してなかったら今の俺はここに居ないね。　それほど勉強会が俺のテスト得点へと貢献しているということだ。

苦手教科を教えて貰い、得意教科は教えるという見事なまでのギブアンドテイク。　各自教えあうスタイルで今までやってきた。

……ちなみに俺は、理数系が壊滅しているという由々しき事態だ。

一応国語とか社会系はなりに出来る。

中学時代は手堅く技能教科で平均を上げていたと言っても過言どころかその通りだ。

入学から、かれこれ1ヵ月。

授業もそれほど進んでいるようにも思えず、テスト範囲は思いのほか少ない。

でもやっぱり、理数系は駄目なので……ある人に協力願おうと思う。

「マサヒロー、科学と数学教えてくれー」

「代わりに国語の教えを乞わせてもらえるならいいぞ」

流石マサヒロ、まんべんなく成績いいけど国語だけはからっきしだ！　教えを乞うの使い方を堂々と間違ってるぞ！

「ユイー、勉強会やろうぜー」

「殺る？　誰を？　テスト作りしてる教師？」

「いやいや、勉強会勉強会」

「あっ！　つい、本音が出てしまったぬ……ぬふふふ」

ユイは俺と同じく理数系が駄目。　あとテストになるとどうしても実力を発揮出来ないらしい。

「テストにはよぉ……魔物が潜んでやがるぜ。　解答用紙にシャーペンを走らせようとした途端に金縛りにあったかのように動きを封じられる」

「テストが始まると緊張で吹っ飛ぶだけだろ？」

テストの緊張感は確かに精神に悪い。

１問目が早速空欄になったその瞬間にモチベーションが落下し始めるからな。

「あ、アタシはあんな固っ苦しい時間が大っ嫌いなんだ！　せめてアニメを観賞しながらのテストを！」

「その要求はテストに集中する気、まるでゼロだな！」

「な、なら寝転がりながら！　テストを！」

「そんな学校あったら、校長とその県担当の教育委員会問い詰めるわっ！」

なんだよそれ、秩序もへったくれもねぇじゃねぇか。

「……で、忌々しいテストがどうした。　アタシはその前に命でも断つべきなのか？」

「どんだけテスト嫌いなんだよ！」

死とテスト天秤に賭ける時点でアウトなのに。

「テスト勉強だよ。　ほら去年やったろ？」

「おおう！　そうだぬ。　ぼくぅも、やぁるでぇすっ！」

……ふう、手間取ったがとりあえず中学時代のメンバーは確保。

さて、ユキと姫城も誘わないとな。　誘いに乗ってくれるか分からないけども。

第１０９話　√１－１４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

本当にストックが尽きそうだ……そろそろ番外編挿入しないと追いついちゃうな

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１０９話　√１－１４　※独占禁止法は適応されませんでした。

「勉強会を学校でやるんだけど、よかったら姫城さんもど――」

手頃というか、近くに居た姫城さんに早速提案する。

「行きます。　命に代えても」

……言った途端に命を賭けてきた。

「いや、用事があるなら――」

無理して来られても困るし。

「それは非常に些細なことです。　こんなまたとないチャンスを逃がす事など出来ません！」

「そ、そう……なら良かったけどさ」

「た、楽しみです！」

自分ちょっと引き気味、だが姫城さんは頬を赤く染めて笑みを零す辺りとてつもなく嬉しそうだ。

なんというか、彼女のこういう喜ぶ姿は見てて可愛らしい、お茶目というのだろうか？

授業中に見せる彼女の精悍さとは打って変わっての喜びようをみていると、少しクルものがあるね。

さてと日時とか場所とか伝えたところでユキにも、っと……

「行く行くー！　勉強会かぁ、皆でわいわい出来そうだね！」

「おうよ！　俺としてはユキが隣に居るだけで思わず勉強もはかどるもんだぜ！」

きゃ！　ちょっと発言ダイタンだったかな？　えへ？

……壊れて過ぎてユウジ、キモ●です。

いや、嬉しいのは見てて分かりますけど……喜びすぎだと思いますよ。

「！　……そ、そうなんだ？」

可愛いっ！　照れたユキめっさ可愛い！

うわあああああああああ、やべえええええええええ！

……ユキさんマジぱねぇっす。　ああ、今の表情は脳内に永久保存だ。

そして孫の代まで言い伝えることにしよう。

誰かっー！　医者を呼んで頂けますかっー！

急患が！　それも重症な方がっ！

「ふぅ……これで例年以上にワクワクな勉強会になりそうだぜ！」

……良かったですね。

それで、いつから始めるんです？

「まぁ、一応明日ってことは伝えてあるから……」

明日なんですか……へぇー、結構早いんですね？

「場所とかは……おっと担任に予め伝えておくかー」

ちょっくら職員室まで行ってくっかな！

担任に、何をですか？

すこし廊下を駆けて、職員室に辿りつくや否や――

「失礼しまーす、○○先生居ますか？」

ユウジが”職員室を訪ねて3千里”かはどうか分からないですが、職員室へとやってきました。

ちなみに○○先生というのは担任のこと……らしいです。

「おう、下之か。　そういえば、生徒会はどうだ？」

「……ぼちぼち？」

こら。　ふざけないでください。

「まぁ、調子は良いようだな」

「（どうみたらそう見えるんだよ、この節穴教師がっ）」

内心で酷いこと言わないでください！

「それで、下之は職員室に訪ねてくるなんて珍しい。　何か用か？」

「ええと、明日テスト勉強をクラスメイトと行いたいので教室を借りたいのですが……」

「テスト勉強？　ああ……まぁお前は比較的真面目だからいいか。たまには遊び場に借りに来るやるも居てな――」

「（はやくしろや）」

……それには同意です。

「いいぞ。　だが使った黒板の清掃と戸締りもしっかりやって鍵は職員室に持ってきてな」

「はいっ、ありがとうございます！　では失礼しました」

……ということであっさり教室を奪取出来た。
これでお膳立ては全て済んだ……さぁ始めよう！

勉強会と言う名の勉強会を！

変わってないです、意味同じです！

第１１０話　√１－１５　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ああ、ストックがあああああああああ

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１１０話　√１－１５　※独占禁止法は適応されませんでした。

わっふぅ！　よっしゃ明日が楽しみなんだぜ！
明日どんな服着てくっかなー　……あ、ってか学校だから学ランじゃぁ～んっ！

……やべぇユキとの勉強会でテンション上がりまくりだわ。

二人きりになっているのは何故ですか！　姫城さんと他二名をお忘れになっていますよ！？

まぁ、姫城さんとも勉強できるし……これは両手に花。

いやいや、だから他二人は！

マサヒロは重要な数学要員で、ユイはおまけっと。

地味に扱いが酷いですよね。

楽しみだなー……って、まて。　よーく考えたら、生徒会があるのに勉強会設定して良かったのか？
まずいぞ、これは。　ダブルブッキングの可能性大じゃあないかっ！
いや、落ちつけ俺。　今まで散々ご都合展開で乗り切ってきたじゃないか。

そうだ。　生徒会というシナリオが存在している上にそのシナリオが組み込まれたのは紛れもないクソゲーだ。
そうだ！　ご都合展開で、ヒロインズとの勉強会の為に力技で「

今日からずっと生徒会休みだからー」と会長が言い出すに違いない。
そうだよ！　何も深く考える必要はないじゃないか……”あの”生徒会だぞ？　サボり癖のある”あんな”生徒会だ。

これは気にしなくて良さそうだな。

もし生徒会があったとしても、俺は勉強会を口実に……いや理由に休む！

この意思は変わらないぜ、絶対に揺るがないぜ！

「明日から勉強会をしますっ！」

バァンと、会長がテーブルを叩いた……！？　勉強会？　はい？

「会長！　俺と福島は学年が違うんですけど」

「おいおいアタシを忘れるなよ」

ユイなんてどうでもいいわい！　俺はユキと姫城との勉強会のことが気がかりなんだよっ！

「シモノ……年の差なんて関係ないよ」

「いや、学年ですって。　それになんですか、その言いまわし」

「そもそも生徒会というものは――」

あ、なんか語りだしちゃったよ。　このエセロリ。

「数少ない他学年との情報交換が出来る場なのよ」

「それは、まぁ……でも、部活でも同じことが言えますよね？」

「情報交換……それはギブアンドテイク」

「えーと、何の話ですか？」

「つまりは”情報が欲しくば情報をよこせ”ということなのよ」

「はぁ……」

一体何の話なんだ、着地は出来るのか！？

「ギブアンドテイクはこの勉強会にも言えることなんだよ」

「え」

「”勉強教えて欲しくば、私にも教えろ”ってことなのよ！」

「……いや、だから他学年で、更に下級生の俺らは教えてもらえても教えようが無いじゃないですか」

「ふふ、甘いねシモノは」

「え」

「私は一年の勉強が頭に入ってないの！　だから2年になっても問

題がチンプンカンプンなんだよね」

「な、なんだってー」

よくわからないカミングアウトされた！

「だからね！　私に1年の勉強を教えて欲しいんだよ！」

「……いや、だからって現役1年で入学して一か月程しか経ってない俺らに聞くのは間違いでは？」

「だから、私はあなたたちに賭けるの！　この二年の成績を！　留年か進級かを！」

「そんな重いことを俺らに託さないでください！」

なんだよ、この会長は……

「私は2年の勉強教えるからさ」

「今はあまり必要がないかと思うんですけど！　なによりテスト前にそんな未来に使うような学は要らないですよ」

「……未来？　なんのこと？　1年なんてあっという間に過ぎて、いつの間にか2年生になっているものなのよ！」

「確かにそうかもしれませんけど、ここにはツッコむところじゃないかと！」

「とーいーうーこーとーで。　勉強会開催決定ー」

いやいや、明日はどうなる！？　もし何も問題が無ければそのまま数日に一回のペースで企画しているというのに！

「いや、あの、俺明日は用事が」

「実はアタシもです」

……まぁユイもそうだったな。

「へ？　なんか二人とも関係あることなの？」

「うっ、そんなこと――」

勉強会に行くので生徒会の勉強会に行けませんだなんて失礼過ぎる！

「（間違っても勉強会だなんて言うんじゃねぇぞ）」

とユイに目配せ、通じろよー

「（おｋ）」

おお、通じたみたいだ！　なんとか説明しろよ……

「放課後にちょっと……でして」

意味深だぁー！　なんだ、その控え目に言いましたよ的なニュアンス！
おそらく逆効果だよ！　なんて事してくれたんだ！

「（グッ）」

グッ、じゃねぇよ！　なんでそんなに自信ありげなんだよ！

「……もしかしてあんたたち、付き合ってんの？」

「なぁんですってぇ！」

ガタンっ、とイスから立ち上がる……姉貴。　うわああ。

「どういうことなのユウくん！　そういうことなのユウくん！？」

凄い勢いでこっちきたー！　そして肩掴まれたー！　……案の定姉貴崩壊してるよ、ああ。

「落ちついてくれ！　とりあえず、これは言い方が悪かっただけなんだよ！　なぁユイ？」

「いや、そんな設定でも一向に構わん」

「構うから！　俺はまず構うから！」

「ユウくんひどい……ユイちゃんだったら何も言えないじゃない」

「えええええ！　ここは何か言えよ！」

「……そうなら仕方ないよね、ぐす。　私もユウくんから一歩身を引くよ」

「いやいや！　なんで姉貴が恋敵みたいな設定になってんの！？」

「……ユウも、これで幸せになれるわね」

「なんでこのタイミングでチサさん入ってきたし！」

「そうか……まぁアタシも少し前から気付いて、な？」

「福島も乗るなよ！　というか久しぶりだな、オイ！」

「まぁでも、それはないよねー」

そう会長がやる気無さげに言いました。　そして皆も合わせるように――

『ないよねー』

さっきまでのテンションは何処へやら、です。
まぁ、よくあることですね（笑）
でも、あれ？　ユウジ姉は、なんで泣いていたんでしょう……？
……まぁいいですね。　気にしない気にしない。

「……まぁ、そう言う訳なんで」

「むぅ、アタシとしては少々残念だ」

「なんでだよ……」

「いやさ、アタシがユウジの彼女宣言したら今の友人関係がどうなるかなーって」

「やめろ。　いやまじで。　本当やめて。　本当にやめてください……」

そんなことしたら修羅場どころか、俺とお前が地獄送りだよ……姫城に。

そんなことよりユキとの会話が気まずくなりそうだから、やだ！

えええええっ！　死ぬよりもユキとの会話を重んじるってことですよね！？

「えぇっ、冗談だよ！　いや、そこまで効くとは思わなんだ……悪い」

「ああ、良かったわ……」

あっぶねー、本当にどうなることかと思ったぜ。

いやユイが分かってくれて良かったわ……って、あれ？

そもそも、事の発端はユイの色々誤解が生じそうな発言からじゃないか。

……なんだろう、ムショウに腹が立ってきた、ユイの野郎――

「って、調子乗ってんじゃねぇよユイィィ！」

「態度が豹変しすぎだと思うぞ！？」

くっそー……調子乗りやがって。

「で、何で明日は出れないの？」

チサさんが聞いて来た、まぁ気になるよなぁ……

「いや、本当に用事がありまして」

「どんな？」

「うっ……」

……言ってしまっていいだろうか、勉強会。

いや、それだと引き留められるに違いない「友人との勉強会に出れて、生徒会の勉強会に出れないなんてね……」

と、例え許可を貰えても未来永劫ネチネチ言われそうだな……

「私は、そんなことしないわ」

「心詠まないでください！」

！　ってことは、勉強会があることも読まれているはず……分かってて聞いてるのか！　ちくしょうなんて人だ！

困らせたいのか、俺を！　悩ませたいのか、俺を！　弄びたいんだろうな、俺を！

「……まぁ、言えない理由なら無理には聞かないわ」

「チサさん……」

チサさんマジ天使。　わかってて見逃してくれるのだから、マジ優しい。
俺、もう一生かは分からないですけどチサさんに付いて行きます！

「いいのよ（計画通りっ）」

何の計画!?　はっ、さりげなくユウジを自分に従順にしようとこんな廻りくどいことを！

「（聞こえてるわよ？）」

うわ、なんかこっち来た！

「まぁいいやー、じゃあユウジとユイは明日来れないんだね」

『はい』

「丁度いいかー、まぁ明日から生徒会休止の予定だったし」

「！　それを先に言ってくださいよ！」

まさかの、かつての俺予想的中。
遅いよ！　散々言い終わって弄ばれた末にわかっちまったよ！

「とーいうことで、今日の生徒会終了ー、解散」

一体、今までの時間はなんだったんだ……

果てしなくどうしようもない無駄な時間かと。

ま、まぁ！　明日、勉強会が出来ると考えてポジティブにね！

お、前向きですねー　いいんじゃないですかー？

ユキと姫城さんと勉強できるんだから……いしょっしゃあああああ。

ポジティブどころかアグレッシブに！？　テンションがいつも以上に高いですよ！

やったよ、うえへへへへへへへへ。　ようし、明日が楽しみだなー

アグレッシブが空回りしてませんか！？

第１１１話　√１－１６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

あ、あれ？

”もうひとつの世界”とナレーターが称す世界。
その名もＧＡＹＭ版「クソゲヱリミックス！！」
ｈｔｔｐ：／／ｓｙｏｕｓｅｔｕ２．ｇａｙｍ．ｊｐ／ｓ／ｒｅａｄ．ｃｇｉ？ｎｏ＝２２４０

そこでは、この世界と僅かながらも違う物語が進んでいた――

第１１１話　√１－１６　※独占禁止法は適応されませんでした。

家に帰って、飯食って風呂入ってリビングで適当にテレビ観て。
さてと、後は寝るだけだ！　俺の部屋へＧＯ！

「邪魔してるぞ――」

するとそこには桐の姿が、その時俺の第六感が反応した。
これは絡まれる、面倒くさい、寝られないの三拍子が展開されると一瞬にして悟った。
ならば、俺のとるべき行動は――

「おやすみー」

「！？　なんで流れるような仕草でわしを避けてベッドにインするのじゃ！」

いや、ほんとに眠いしさ。　てーことで、俺は寝ます――

「ＺＺＺ」

ふぅ……本当に寝たい時は、グッスリ眠れるもんだな。　熟睡熟睡、意識陥落～っと。

「ゼットゼットゼットなんて発音しないものじゃと思うぞ！？」

それなら俺の迫真の演技をいびきに乗せて披露しようぞ。

「すぅー、はー。　すぅー、はー。」

いびきってこんなだっけ？　なんか深呼吸にも聞こえるけど、まぁいっか。

「わ、わざとらしい」

わざとらしい……注文が多いな。

「ひっひっふー、ひっひっふー」

「ラマーズ呼吸法はお主がやるモノではないぞっ！」

チッ、ウッセーナ……いちいちツッコむなよ。

「……ちっ、寝るから出てけ」

「なんでキレ気味なんじゃ！？」

怒った、寝る。

「……」

「おーい、おーい」

怒った理由が小さいことだが、気にしないでいい。

「……」

「そうじゃな、わかった……寝たのか」

「……」

「おやすみ、ユウジ」

「おやすみー」

一応言っておかないとな、うん。

「めっちゃ起きとる！？」

「いやー、眠れないもんだねー」

というか思考出来てる時点で眠る気ないな、俺。　いやぁ、なんてお茶目さん☆

「そ、そうか！　わしにそんなに居て欲しいからってそんなツンデレを――」

「いや、ない」

それは、ない。

「そうか……」

なんとも悲しそうだった、まぁ言い方が悪かった気がするな。

あまりにも突き放した態度はよくないだろう。　少し反省すると

する。

それで桐――

「だが、お前には俺の傍から居なくなってほしくない……大切な妹

っぽい何かだからな」

「お主……”っぽい”という表現が多いに気になるが、お主にそのように言ってくれると嬉しいものじゃな……」

なんとも形容しがたい、とても柔らかな笑みを桐は零した。

「お主から”居なくなってほしくない”という言葉を聞けたから及第点じゃな。じゃあ、わしも寝るとするかの」

「ああ、おやすみな」

「おやすみじゃ、ユウジ」

桐が部屋を出て行く。それとともに俺はベッドに入った。

妹っぽいはギャグだとしても……居なくなってほしくないのは本当だ。

それだけに、桐は俺の中でも大切な存在かと思う。

気兼ねなく、いつでも相談に乗ってくれたり、いつでも冗談を言い合える。

本音をぶつけて、本気ではっちゃけるのも桐にユイぐらいだ。

だからそりゃあもう、桐はとにかく俺にとってはかけがえのない人なんだと思う。

いつの間にか、あいつは俺の日常の一つになっているのだから。

第１１２話　√１－１７　※独占禁止法は適応されませんでした。

五月一三日

勉強会。　教室を貸し切ってのテスト勉強だ。
机を適当にくっつけてひと固まりにしてから座り各自勉強道具を展開する。

俺は右隣に数学サポーターことマサヒロを配置。
目の保養用に右斜め前にユキ、目の前は本人とっての希望で姫城さん。
で、左斜め前にユイとなり、男女が丁度分かれていることになる。

「……わからーん！」

わーい、高校の数学って難しいー。　中学での積み重ねの無い俺にどうしろと！
と言っても中学での積み重ねが無いというのは数学のみの話で、俺は数学そのものが大の苦手で。
テストでは赤点スレスレで通っても、翌日にはテストで出来たものが綺麗さっぱり記憶から抹消されてしまう。
なので後日テスト直ししていると全く意味が分からなくて困っていたりする。

「ユウジ様……？」

そんな風に若干投げ出し気味に呟くと、向かいの姫城が心配して

きた。

「いやぁ、俺数学苦手でさ。　困ったもんだ」

更に恥ずかしながらと続け、頭をポリポリ掻く俺。

駄目だなぁ、ここは勉強が出来るようにかっこよく見せるべきさろうに。

「そうなのですか……」

しかし向かいの姫城さんノートを見るに……なんという美しさ。

ぜってー教科書に書いてないだろ、的なことまで書いてあってもはやノート状の参考書と言ってもいい。

……と言うのを逆から見てわかるのだから、そのノートの完成度は半端ではないのだろう。

なんとも東大●ノートとやらを凌駕しそうな勢いだ。

「……あの、良ければ計算式を見せて貰っていいですか？」

「え……うん」

俺が書いたまったく上手でない文字が埋め尽くすノートを手渡した。

ほんと、少しは字が上手くなりたいもんだ。　そしてもっと記憶力が持てばいいのにねぇ。

「……ここは、こうして、こうすれば――」

なんということでしょう。　口頭で聞いているに過ぎないのに頭にスーッと入ってくる。

要約すると、凄い分かりやすいのだ。

「更にこう――あっ！　……一人で勝手に申し訳ありませんっ」

「いやいや！　聞いててすごい分かりやすかった！」

「そ、そうですか？」

「というか姫城が良かったら教えてもらいたいぐらいだよ！」

「……そうなんですか？」

「姫城の呟きを聞いていた時点で、かなり分かったしさ。　出来たら教えて欲しいな」

「呟き……私もしかしていつの間にかツ●ッターに書き込んでいたんですか！？」

「いや、普通に呟いてただけだから！」

「……良かったです、休日はツイ●ターに１２時間通してユウジ様への愛を呟いていたものですから」

「！？」

なにそれ、逆に見たい！　……俺もアカウント持ってるけど、姫城さんのアカウント名って何だろか？（後日”ｙｕｕｚｉｌｏｖｅ”でみつかりました）

「ということで、教えてくれると嬉しいんだが……？」

「え、ええ！　もちろんいいですよ！」

「良かった！　じゃあよろしくお願いします、先生！」

「は、はい！　こちらこそ」

俺の右隣が空いている……って空いてないな。

「マサヒロ、姫城さんとチェンジ」

「え！？　いや、更にさっきから居たのに台詞が――」

「Ｈｕｒｒｙ　ｕｐ」

「……わかったよ、でも数学を――」

「姫城さんに教えてもらえそうだ。　悪いな」

「悪いわ！」

「まぁ、国語のことは聞いてくれ。　な？」

「……うぅむ、了解」

ということで席移動、右隣に姫城さんがやってきた。

「！」

ほぉ……女子の隣というシチュは（彼女無し）一般男子よりも多

いと思うが、こうして近くなのはあんまないな。
……ふぅむ、近くに居るだけでいいにおいだ。　ユキとはまた違った感じだな（そこまで嗅いだことはないけど）
姫城さんってば俺への態度が独特なだけで”超”手前な美人だからな。　逆に独特な態度を幸と受け取るべきなのだろうか。

「ちょっと待ってくださいね」

姫城さんは一度移動の為に片付けた勉強道具をまた机を移動して広げていた。
……彼女の息遣いが聞こえる、隣に座る事自体少ないからな。
これはこれで貴重な経験なのだろう。

「ハァハァ」

……息荒くありません？　ハァハァって聞こえてくるんですが？

「ひ、姫城？　息荒いけど体調――」

「そんなことは有りません！　ただユウジ様が近くに居るので興奮してるんです！」

「その発言は胸の中にしまっておいた方がいいぞ！？」

いや、俺も姫城が隣なのは嫌じゃあないけどさ。　というか実は嬉しいけども。
堂々そんなこと言わんといてください！

……勉強会続行中。
今俺は数学を重点的に行っているので先程から姫城さんにお世話

になりっぱなしだ。
近況報告すると言えば、たまにマサヒロが「これどーやんのー？」と聞いてくるので「こーすんのー」と適当かつ一応は的確に教える。
ユイは……何アニメイラスト描いてんだよ、しかもうめぇし。
……美術のテストはないですぜ？　まぁ美術でアニメイラストはあまり生きないと思うが。
……気付くとユキがノートと俺へ視線をちょくちょく変えてこちらをちらちら見てきていた。
でも、ごめん。　成績落とせないからさ、今はごめん。

「ここに代入して――はい、そうです」

下手な教師よりも姫城さんのアドバイス方が分かりやすいだろう。
塾なんていらなかったんや！（通った事ないけど）
更にお願いしてとにかく噛み砕いてもらっているので、とにかく分かりやすい。

「あー…姫城さんは凄いな」

「xを――えっ！？　そんなことないです！」

熱心に教えてくれていたのを阻害してしまう形になってしまった。
姫城さんは手と首をフルフル振って否定する。

「いやいや謙遜しないでいいからさ、本当に分かりやすいんだよ？」

「それは、ありがとうございますっ」

「こちらこそ先生。　俺の為にお付き合い頂きありがとうございま

す」

「付き合う、でですか！？　嬉し過ぎます！　今なら不慮事故で亡くなっても悔いはありません！」

「喜び方が歪んでる！」

とツッコミを入れていると、だ。

「……（ジトー）」

「（うっ）」

少し感じる目線の先を見てみると……ジト目をしたユキさんが。

俺の視線に気づくと、はっといつも通りのユキに戻るのだが……？

ユキさんはどうしたのだろうか？　もしや俺は何かフラグでも折ったのだろうか――思い当たることがありすぎる。

とにかく、今はごめんなさい。　ホントごめんなさい。

「え、とじゃあ続きを――」

「あ、うん」

姫城さんの数学講習会再会。

ユイは相変わらずアニメイラス――すっげえ！　ＴｏＬ●ＶＥる絵を完全再現だと……！

ユキは……色々ごめん。

俺はといえばたまに来るマサヒロの質問に答えつつも、勉強会の時間は着実に過ぎていった――

気付くと日は落ちかかり、教室の外は闇夜が支配し始めた。
おそらく学校中でこの部活や職員室以外で普通の教室が電気を灯していることもあってか、先程警備員の方がやってきた。
勉強会で担任の許可済みという旨を伝えると「頑張れよ」と力強いエールを頂いた。

テスト範囲は大分進んだ。　あと2割を残して大幅に学習出来た。
それもこれも姫城さんの講習のおかげであって、本当に感謝している。
時計の短針が7を差す頃には、皆が片付けを始め5分経たぬまに鍵をしめた上で電気が落とされ、俺らは教室を出た。
「鍵返してくるわ」と、たったと職員室に駆けて行く俺。　靴とタイルの触れる音のみが廊下には有った。
ご苦労さまですと言わんばかりに未だ明りを灯す職員室のノックし「失礼します」と入り、誰も居なかったので鍵を所定の場所へと戻す。
そして今度は昇降口へとたったと駆けて行き、昇降口で靴を履き替え鞄を手に持ちながら待つ彼女たちへと向かって行くのだった。

第113話　√1－18　※独占禁止法は適応されませんでした。

昇降口にて。
ユイとマサヒロとユイが靴を履き替えながら談笑しています。

「いんやぁー、今日は良い絵が描けたぜ！　流石勉強会！」

「勉強会と関係ねぇだろ、てかお前も勉強しろや」

「うーん、そうだなー　ユウジかユキさんが教えてくれるなら勉強するぅー！」

「え、私!?　無理だよ！　私勉強あまり出来ないし……」

「ならばユキには俺が教えてさしあげましょう（キリッ）」

「……ええと、一人で頑張る」

「ひどい！　なんで俺だけこんな扱い!?　出番減らした上にここまで嫌われ者扱いされるなんて！」

「ごめん嘘。　うん、嘘だよ！　ちょっとね、悪ふざけしてみただけー」

「なぁーんだ、そうだったんかー　なら安心したわー」

「……じゃあの、ユウジにでも教えてもらおっかねー」

「あ！　私もユウジに教えて欲しいかも」

「うおーい、居ますよ！　ここにマサヒロが居ますよー！　マサヒロが居るのにユウジの話しを――」

そんな3人で盛り上がる頃……そういえばこの3人の絡みはなかなか無かったですねー
3人を置いて先に進む二人が居ました――

「ありがとな、姫城さん」

「え、はいっ！　え、えと。　ユウジ様も飲み込みの早さには驚きましたよ！」

「いやいや姫城さんの教え方が上手いからですぜ」

「そ、そんなことは……でもお役に立てたなら良かったです」

「大変お役に立ってくれました」

漆黒の空の下、鞄ひっさげ姫城さんと話しながら校門を出た。
その時には別れなければならないのだが――

「今日は楽しかったです。　ユウジ様、そして皆さんありがとうございました」

と言って頭を下げる姫城さん。
……勉強教えるだけで本当に楽しかったのか？　なんてことは聞かないことにする。

普通なら突っ込むところなのだろうが……なんだろうか、今回はなんとも野暮な気がする。

「勉強会もまた皆の都合の合う日で企画したいと思うんだけど、どうかな？」

「ええ！　もちろんです！　暇です！　毎日が暇です！」

大げさだなぁ……まぁ、毎日ＯＫってことでいいのか？

「ええと？　テスト前までいつでも。　ってことでいいのか？」

「はいっ！　朝の８時から深夜４時までいつでも！」

「いや、なんでそんな”深夜まで休まず営業”みたいになってんすか」

「とにかく、いつでも駆けつけますよ……ってそういえばユウジ様の家を知らないですね」

「あー、まぁそうだな」

番地で説明すればいいのか？　学校からの道順を――！？

いやいや、言ったらダメじゃん！　バレるじゃん！？　じゃんじゃんバレるじゃん！

ホニさんは知っているとしても……ユイは色々マズい。　色々どころじゃない。

「は、はっはっ。　まぁそのうち機会があったら、な？」

逃げ切ってやる……てか逃げ切らないとマズイ。

「は、はいっ！　またその機会に」

「あのさ、姫城さん」

「はい！」

「休み明けにテスト勉強ってはどうかな？」

「はい！　もちろんです！　休み明けですね！」

「ああ、土日を挟んで3日後ってことだな」

「じゃあ、その時はよろしくお願いします！」

「いやいや、こちらこそ――」

ということで3日後の月曜に設定した。

あ、ちなみに描写していないだけで今日は金曜で、明日が休みだからこそ思い切ってみた訳だ。

まぁ、本来なら明日は学校があるはずなのだが、テスト2週間前ということから学校側が配慮したとかしないとか。

……それならゴールデンウィークよこせって話なんだけどさ、まぁテスト明けにはゴールンデンウィークだからいいけどよ。

「それでは……皆さん、また」

そうして姫城さんは俺達とは別方向の商店街方面へと帰路につい

て行った。

色々疑問に思っていたのですが、学校では色々情報を掴んでいるのに学校を出たらユウジの家も分からないって変ですね？
もしかしたら、一応は「割り切っている」のかもしれませんね。
学校でははっちゃけて、外では有る程度自重する。

やはり姫城は実際のところ常識人なのかもしれないと、私は思いますよ？

第１１４話　√１－１９　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ユキ、ユイ」

姫城さんが先に帰り、同じ帰り道の二人に声をかける。

「なにー？」

「なんだぁい？」

「あのー俺は？」

誰かよくわからない男が呟いているが、気にしない

「休み明けに第二回テスト勉強会を開催しようと――」

「賛成ー」

「右に同じくぅぅぅぅ」

「いや、お前ユキの左だろ」

「それでは、明後日テスト勉強会するぞ？」

「いいよー」

「ずるぜーー」

「おーい」

「おkおk、皆の意見は聞いたぞ」

「いや、俺の意見を――」

「来ない？」

「行く！」

「はい、決定。　てーことで明後日、担任に許可取って勉強会だぁ！」

「いえーい」

「イェェェェイ」

「い、いえーい」

ということで、休み明け勉強会だ。

ちなみにここで時系列的なものを整理をしておきましょう。　今日は5月3日。　休み明け、3日後というのは5月6日に当たります。一応先週が奇数週（4月第5週）なので、本来なら今週も奇数週（第1週）なので学校が明日あるはずなのですが、理由はユウジの前述の通りです。

そして昨日（5月2日）にテスト2週間前宣言をしたということはです。

この高校はテストを4日間で行うらしく、5月16日開始で17日、

１８日日曜挟んで２０日で終了します。
日曜だけ挟むのは奇数週だからです……はたまたややこしいですね。
ちなみにゴールデンウィークというのはこの世界に存在しません。
残念でした。

……というのは嘘で、何故かゴーデンウィークを藍浜高校はテスト明けに移動させたそうです。
教師によるテスト直しの時間や、生徒の休息も考えてのことらしいです（まぁこれはユウジも話していましたが）

いやぁ、ややこしいですね。

ということでゴールデンウィークに当たる４日間の休みを２２日以降に適応するので――
……まぁ、そこら辺はあまり描かないのでいいですけどね。

そして俺は、家に帰って飯食って寝た。

「はやいわっ！　というかわしの存在について少しは反応してくれんかのう！？」

「はいはいおやすみおやすみ」

「むっ、言い方が雑じゃな……」

「桐、好きだ！」

「！　お、お主！　その言葉……本当か？」

「まぁ来年くらいには本当になって――ぐがー」

「寝付き、はやいわっ！　そして来年か……長いわっ！」

一日のセーブポイントことユウジの部屋は、桐のツッコミで締め括るのでしたー

第１１５話　√１－２０　※独占禁止法は適応されませんでした。

五月一四日

授業を終え、放課後を迎えた。　放課後と言えば、だ。
そう、予告した通りのテストの為の勉強会がある。
姫城さんへ朝にその旨を一応もう一度伝えると「も、もちろん参加します！」と興奮した様子を見せながらも、承諾してくれた。
ユキ、マイ（とマサヒロ）にも念のため伝えておいてある。

机を一点に並べる。　ちなみに、今日の配置は――

俺を中心に、右に姫城さん。　前にユキ、右上にマサヒロ、左上にユイ……だったのだが――

「ユウジの隣座っちゃおっ」

と、言って紛れない空席である俺の左に座っ……！？
ちょっとまて。　おいおいユキさんが隣だって？

なんだいその夢のシチュエーションは。

これは夢に違いない、もし夢でなくリアルだとしたら――おそらく一年間の運を今使い果たしたことだろう。
こんな使い方なら悔いはこれっぽっちもないけどな！

「姫城さん、いいよね？」

ユキはそう言い放つ。　そこには対抗心やら敵意が垣間見れたのは俺の見間違い、否幻覚だろう。

「いいですよ？」

と、姫城さんからはどこか優位に立っているかのような余裕を浮かべていたのは、完全に見間違いでない。

俺の両サイドでかつて類に見ない白熱した戦いが行われている気がしてならない。

そして、それを俺の思考は思い違いで処分することとした。

てか、そうであって欲しい。

そもそも理由は――分かっている、分かっているけども！

認めたら主人公として終了しそうなので止めておくとしよう。

勉強会開始。

悔しいながらも気になったのは「撲殺天使ド●ロちゃん」を鼻歌でふんふん歌っているユイだった。

ユイは奏でながら、別のことをすすめていた。

ユイはかなり頭がいいので勉強なんぞさっきどころか前回や今まで勉強会ではやろうとしない

じゃあ何をやっていたのか、と言えば――

「ってオイ！　ＧＡ●ＴＺ絵再現かよ！」

もはや何も言うまい。

ユイは粗末な安物ノートに同人上がりの新人漫画家顔負けの画力を披露していた。

てか、お前何者だよ。

マサヒロは現在数学――

「はっえええな！？」

1分で十数問の文章問題の書かれた1ページをクリアしていた。

マサヒロは「国語がダメ」なだけで他の教科はマジぱないのだ。

で、姫城さん――

「ここにyの式を代入して――えっと、世界最古の洞窟壁画は――」

まさかの両利き。

まさかの複数勉強展開。

……つまり俺に右手で数学を教え、左手で世界史の問題を解いていた。

ユキはというと――

「うーん……あっ、分かった！」

着実にコツコツと問題を解いていた。　おお、なんて普通さ！

今までの超人パレードを見てきた身としては大変癒された。　ありがとうユキ！

「……ユウジ様？」

「おおっと、悪い」

「今……他の女のことを考えてはいませんでしたか？」

「い、いんやぁ。　そんなことはぁないよぉ」

「……そうですか？」

「うんうん」

よし、誤魔化せ。　乗り切れ。　逃げ切れ！

これで、何も起こらない、何も横やりが入らなければ……あ、これフラグ――

「……もしかして、ユウジ。　私の事考えてた？」

「ええっ！？」

まさかのユキさん。　ええ！？

しかもなんて小悪魔的イタズラフェイス！　おおう、これはこれで――

「ユウジ様？　今、明らかに篠文さんのことを考えませんでしたか？」

「いや、えと、その……ごめんなさい」

「素直にありがとうございます……でも」

だきっ、と俺の左腕に姫城さんが――！？

「ちょ、姫城サン！？」

「勉強を教えている間は……離しませんよ？」

上目使いで、いつもの怖い感じはせず……なんというか逆に可愛いらしかった。

というか、姫城もこんな表情するんだ――

だきっ。

「私も勉強している間は抱きついていていようかな！」

「えぇっ！　ユキさん！？」

気付くと……気付かなくても、ユキが俺の左腕に抱きついていた――フォオオオオオオッ！

隊長、右からの攻撃のみならず、左からも惜しげもなく攻撃が行われています！

ええと……ナニコレ。　珍百景？　勉強会しているはずが……俺の抱きつき大会になっていたでござる。

しかも左手にご覧になれますのは、美女こと姫城さん。　右手を見れば、俺の女神ことユキさん。

やべぇ、マジやべぇ。　軽くじゃなくて、重くやべぇ！

……というか思い切り両腕が彼女らにホールドされて、全くもって筆を動かせません。

幸せですけども！　もう、こんなハッピータイムないですけども！

しかし……テストで危ない点数を取って、それが後々進級に影響

するようでは――

進級しないことには、どうしようもない。留学なんてしやがった暁には、姫城さんの宝刀を拝借して切腹モノだ。

ということで、とっても、すごく、かなり、マジ……名残惜しいですが。

「いやいや！　姫城さんにユキ、勉強しようぜ？　な？」

「あ……はい、すみません！　出過ぎたマネを」

「いや、まぁ、続きを頼むよ」

「ええぇー！　ユウジの困った顔、私好きなのになー」

おふう、ユキさんが何故かなんかSっぽくなってる!?　ええ、どしたのだろうか……？

「……（ユウジはそうやって……また誤魔化して）」

……ユキは何かボソボソと呟いていたみたいなんだが、どうにも聞こえなかった。気になるなぁ。

「では、ユウジ様」

「あ、ああ」

「……むぅ」

と、まぁ勉強会を再会するのであった。

ちなみに他の二人のその頃と言えば――

「ちくしょう……なんてなんて、神は残酷なんだ！　美少女が二人居て、男も二人。　それなら俺にも一人居るはずなのに」

「おーい、アタシはなんなんだよ」

「ユイ？　お前？　電柱？」

「そんな背高くないわっ！」

「じゃあポスト」

「もう、アタシの存在適当だな……」

「妬ましい、憎い！　この世界、この学校、そしてなによりユウジが憎い！」

「アタシもあの幸せ空間に加わりたいなー」

「っ！　ちょ、おま！　まさかっ！」

「うん。　なんか面白そー」

「面白ければ、オンニャノコが付いてくるのか！　ちくしょうめぇ！」

「いや、そういう発想がダメだとアタシは思うぞ？」

「俺は芸人王になるっ！」

「おおう、見事な人生からのストレート転落だな……」

と、まぁなんか話してたみたいです。

しっかし、ユキはどうしてんでしょうね？　あのセクハラ事件から、姫城に対抗意識を燃やしていますけど。

……ま、まぁ傍からみたら可愛いからいいですけどね！

第116話　√1－21　※独占禁止法は適応されませんでした。

「桐おやすみ」

「だーかーら！　早いわっ！」

五月一七日

今日もしっかり勉強会だ。　しかし、いつもの面子に――

「下之くん、私も教室借りていいかな？」

昼休み、ぐだーと飯を食い終わって自分の机でダラダラしていたところに思わぬ人物が現れたのだ。

「委員長……その情報をどのスジで？」

少なくとも誰も公にしてはいないだろうし。
まあ……立ち聞きされた可能性は十二分にあるだろうけどな。

「以前下之くんが〇〇先生に許可を取っていたのを見たのと、風の噂かな」

許可を取ったのは職員室の時だから……委員長も学級委員的な用事が合って、それでたまたま俺が許可を取っていることを目撃した――辺りか？

「ふーん、それでどうしてまた」

「いやさ、やっぱり学校の机が一番勉強しやすいんだよね」

「なる」

分からないでもない。　確かに学校机はなんとも勉強がしやすい。学校の緊張感を感じて身を引き締め勉強出来るからだろう。

「学習室は上級生優先だし、良ければ便乗させてもらおうかな、と」

委員長が言う通り、学習室はあまり1年の使える雰囲気じゃない。なにより人が集まってワイワイ勉強会なんて出来やしないから、最初から眼中に無かった。

「ふむふむ」

「私は自分の机で勉強させてもらうけど……もしかして邪魔かな？」

「……いや、邪魔なんてこれっぽっちも思ってないさ？　まあ、いいんじゃーねかな？　勉強するには手頃な場所だし」

「じゃあ、いいの？」

「おうよ、まあ他の奴にも一応知らせとくけど、いいよな？」

「ええ、もちろん。　じゃあ今日からよろしくね、下之くん。」

「ああ」

いやーまさか委員長から話しかけてくるとは予想外だった。

でも、考えると俺が倒れた時看病してくれたんだよな……それに同じ中学、同じクラス。

何か現実でもフラグが――まあ、それはないな。

ふふ、ユウジ。　甘いですね、その台詞こそがフラグであると！
ナレーターである私にはこの方達を見ていて大分読み取れるようになりました！

つまりは、これはフラグに違いありません！

それにしても……正統派真面目キャラであった私がここまで悪影響を受けてしまったのは何故ですか！
もちろんこんなナーレションなんてバイト受けちゃったのがいけないですけども！
にしても驚きですよ……まさか、フラグなんて言葉を自分が覚えて普通に使える日がこようとは――

「あのさ、ユキ、姫城さん、ユイ、マサヒロ――」

ユウジが時間をを見つけて委員長が教室を使うことを説明。

「うん、いいよー」

「はい、ユウジ様がおっしゃるならば！」

「おおー、いいんでねーかぁ」

「構わんー」

「よーし、てーことで放課後な」

おっと時流れて放課後、これから勉強会ですね。

「じゃあ下之くん、私も使わせて頂きます」

「どうぞー……って俺は鍵持ってきただけだぞ？　俺にそこまでかしこまる必要ないだろ」

「ううん、いいの。　なんとなく、なんとなくー」

あ、あれ？　委員長ってこんな人だったけか？
中学の頃は大人しく真面目なイメージしかないけど……あんまり話してないのに、あっちは少し気軽なようにも見える。
……まぁ、それが悪いって訳じゃないけども。

そうして委員長は俺らの固まるところからそれなりに離れた自分の席へと座り、机の中や鞄から教材をおもむろに取り出し始めた。
そしてあっという間に委員長は勉強開始。　おお、なんか問題読む速さがすげえ……このクラスは超人ばっかだなぁ。

「じゃあユウジ様」

「あ、ああ」

姫城さんが先に机を付け、自分の定位置に座っていた。
そして俺も机を付けると、ごく自然に姫城の隣へと机を付けた。

「ユウジの左いっただきー」

と、ユキさんが左にＩＮ！　ああ、なんて素晴らしい。
そして姫城さんが右へＯＮ！　ああ、なんて両手にフラワー。

まぁ、今ではそれほど両手にフラワー状態でも動揺しなくなってきた。　これが俗に言う――慣れって奴か。
それとは関係ないが、姫城さんは真剣に・分かりやすく教えてくれていた。

ユキは……俺の事を気にするかのように、ノートと俺を交互に観返していた……本当に悪い。

そして勉強会は続き――。

第１１７話　√１－２２　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ここら辺微妙

第117話　√1－22　※独占禁止法は適応されませんでした。

いつもの面子にプラスアルファ。
いつもの面子こと俺らは教室の中心で勉強会なのだが、委員長は教室の隅で黙々と勉強していた。
委員長はこの教室に来るなり最初に俺に挨拶すると、直ぐに勉強を始めてしまっていたこともあり、声をかける機会が無かった。
こうして考えると、どうも除け者にしてしまった感が出てきてならない。
姫城さんのわかりやすい数学教室を受けながらも、少しばかり委員長が気になっていた。

「ユウジ様？」

また、他の女の子こと考えていましたよね？　というような表情を交えて俺の顔を覗き込んだ。

「いやいや、姫城さんは教えるのが本当に上手だなぁ、と」

「そんな！　私はユウジ様の気持ちをお教えしきれていません！」

「いや、そこじゃないから！」

また、ユキさんからのジト目を頂戴……む、胸が痛い。
そしてユイは「イイナァ」というようなキラキラした羨望の眼差し、マサヒロは「シネヨ」という憎しみの籠ったどんよりとした眼差し。
マサヒロには眼つぶしをしておくとして、やはりユキさんには悪

いことをしてしまっている。

いや……ユキさんは別に俺に興味が有る訳がないんですけどね。

なぜ言い切れるかって？　……いや振り向いてくれる訳ないじゃん。　この俺だぞ？

姫城さんは何故か異常な程に懐いてるけど、どうせ一過性――

あ、あれ？　なんかものすんごく悲しくなってきた。

どうせ、こんな「うへっへへ女の子ばっかだぜぃ」なシチュエーションも時が経てば終わってしまうのだろう。

……そう考えると、この時を大切にせねば。

そして今日の勉強会が終わる頃には、やはり外は暗くなっていた。

教室を貸し出す条件である戸締りはもちろんこと、消しクズの掃除をちゃっちゃと行う。

ホウキ片手に消しクズやら埃やらを一か所に集めていた頃だった――

「今日はありがとうね、下之くん」

「おお、委員長。　殆ど委員長のこと気にしてやれなかったけど……良かったのか？」

「ええ、学校で出来たおかげで、大分はかどったよ」

「そりゃ良かった。　で、今後はどうする？」

「下之くんと他の皆が良ければの話だけど……出来ればテストまで勉強したいなー、と」

それを聞いて、俺は掃除をしている皆に向き直る。

「皆、明日も明後日もテストの日まで委員長が勉強に来てもいいかなー？」

その言葉を聞き取り、皆は一斉に――

『いいともー！（です）』

この面子、ノリが良いな。

「あ、ありがとうございます！」

「じゃ、ちゃっちゃと掃除すましちまおうぜー」

『いいぜー！（です）』

声が見事に重なった。　やはり、謎のシンクロ率だった。

「じゃあ、今日はありがと」

「ああ」

「下之くん、皆また明日」

『また明日ー！（です）』

……なんで今日だけこれほどにも重なってんだろうか。

「てーことで、明日も勉強会に来てくれるかなー？」

『断るー！（です）』

「ええ！？」

断られた！？　さ、さりげに姫城さんにもユキさんにもっ！

と、若干のショックを受けていたところ、ユキさんが口を開いた。

「ユウジ。〝来てくれる〟じゃないよ、私は自分の意思で〝行く〟んだよ」

「え」

そ、それは違いがあるのか？　で、お次にユイ。

「んだよぉ、ユウジ。　アタシたちは来たいから来るし、そしてその質問は愚問なんだぜぃ」

愚問？　何がだ……？

「そうだ、ユウジ。　お前のことは酷く憎たらしいが、なんだかんだで勉強会楽しいからな」

まだ引きずってんのか、コイツ。

「そうですよ、ユウジ様。　ユウジ様が催促する必要なんてないん

です。　きっと皆さんも何気なく、何も言わなくても勉強会を始めるのですから」

「そうなのか？」

『いいともー（です）』

「返し間違ってね！？」

「だから”来てくれる”じゃないんだよね……んー、なんて言ったらいいかな」

「……？」

「ユウジには”来てくれるかなー？”　じゃなくて”勉強会やるぞー！”って言った欲しかったんだよぬ」

「あ……」

「嫉妬で人が殺せそうなぐらいだが……ここまで勉強してきて、今頃聞くのはなしだろう、と」

「ああ」

「ユウジ様は先陣を切って、勉強会を企画して、こうして私も委員長さんも呼んでくれた訳ですから」

「わかった、了解」

……なるほど、それほどに俺は信頼されてるってことでいいのか。

ふむ……なんとも、良い友人共を持ったもんだな。

いいとものノリでやっただけなのに、ここまで批判されるのはちょっとばかし癪だが。

でも、まぁ……そうか。

言ってることは間違ってないかな。　それならば――

「てーことで、明日も勉強会やるぞー！」

『おー（です）』

はは……なんて奴らだ。　なんだかんだで、ユキさんも姫城さんも馴染んでいた訳だ。　この息の合い様も含めて。

そう考えると、ユイとマサヒロって実は凄い奴なんかもな。　人と溶け込める力があるのなぁ……なんとも羨ましい。

そういえば、俺もそうやって何気なく馴染んでいったんだよな。

あのときは、本当に助かった。　そして、今までも何度も助かった。

ほんと、ユイとマサヒロって奴は――

第118話　√1－23　※独占禁止法は適応されませんでした。

それからテスト勉強は、土日などの休日を除く毎日が行われていた。
日が経つに連れ、ユキの腕に抱きつく回数が増えて増えて、嬉しいんだけど表情を見ると喜べない。
ユキに反比例するように姫城の機嫌は上々だった。　そりゃあ見事なまでに。

そしてこの時、俺はユキがどんな心情で、どんな気持ちで俺の腕に抱きついていたのか。
なぜ、そんな表情を見せ続けていたのかを全くもって理解していなかった。
分かっているようで、俺は完全に分かっていなかった。　全て知らなかった。　無知だった。

しかし……それに気付いた時には、手遅れだったのだった。

そして気付くのはずっと先の話。　俺は鋭いフリした鈍感野郎だったのだ。
気付いたその瞬間に、俺はひどく後悔することとなるのだが……
まだそれは、本当に先の話。

「はい、満点です」

「おお！」

姫城さんに数学の模擬テストをやって貰っていた。
ちなみに、姫城さんには数学だけ教えて貰い、他の教科は自力かつ家で勉強したり、学校での合い間を縫って勉強していた。
姫城さんも勉強する時間が必要（正直、姫城さんの時間を奪ってしまって申し訳ないと思っている）なので姫城さんにも勉強してもらい、その間にも他教科を勉強していた。

時折、質問して来るマサヒロにもしっかりと応え、実は今日、俺が国語の模擬試験をしてやった。
出来は上々。もうなんというか、お前欠点ねぇじゃん。他の教科は言わずもがなだけども、国語も出来たら勝てっこない――教えなきゃ良かった（半分嘘）

ユイは勉強会最終日には周囲が気になったのか、独り模擬試験をやっていた。――オール９０点以上の点数を取れていて、俺は思い切り引いた。
どんだけだよ、と。毎回疑問に思っていたが、勉強会に来る意味ないと思うのだが……本人曰く「皆が集まるんだから、アタシも来るぞ？」と言っていた。

その応えになんともユイらしいな、と感じてしまったのは何故だろうか。

ユキは基本コツコツと勉強していて、国語だけは教えられるので、たまに「ユウジ教えてー」と聞くので「こうで、こうで、こうな」と教えていた。
「ありがとー」と言って嬉しそうにコツコツ勉強に戻る。その時には姫城さんにジト目攻撃を受けていた……ええ。

そんな訳で最終日を終え、テスト勉強は終わった。
そしてテスト当日を迎えるのであった――

5月17日

テスト直前まで勉強は欠かさない、最初のテストは英語だ。
チャイムと共に問題用紙・解答用紙と思われる紙束を抱えたテスト監視官（馴染のない教師）

「ではー、問題を配る」

テスト監視官がペラペラ列分の問題用紙を各列に置くと、問題が前から送られてくる……うへぇ、緊張するもんだなぁ。
シャーペン2本よし、消しゴム2個よし、シャー芯2個よし。
シャーペンの動作確認も終わってる……準備は良し。

「解答用紙を配る」

えーと、緊張をほぐす方法って――人という文字を手に書いて、正面に居るテスト監視官にぶつけるっ！
――というような行動をすると「カンニング類似行為」と見られて退場させられそうなので、絶対にやらない。

『キーンコーンーカーンコーン』

「始め」

……テストハジマタ！　よし。　俺は右手にシャーペンを持ち、

問題を解き始めた――

第１１９話　√１－２４　※独占禁止法は適応されませんでした。

五月三一日（第五月曜）

これからは週表記と曜日も入れてみようかなと思います。　その方が分かりやすくていいと思うのです。

テスト終了。　更にゴールデンウィークの振り替えを終えて。楽しい楽しいテスト返しの時間がやってきた。

「あぶなかったぁ」

と、安堵の声を漏らしたのはユキだった。

「うーん……」

ユキは俺と成績はほとんど変わらないぐらい――本人の数字を聞いた結果そう読み取った。

「……あー、問題入れ替えちゃったのか」

ってことでユキさんはドジっ娘でしたとさ……え、失礼？いやさ、確かに少しならケアレスミスで分かるよ？

「また４割もやっちゃった☆」

多いよ！　流石に多いよ！

更に答案をみしてもらうに、解答欄書き間違えだけで答えはほと

んど合っているときた。
ここまで来ると流石に萌ポイントよりも疑問とかが現れてくるから困る。

「うわあああああっ！」

マサヒロの悲痛の叫びが傍から聞こえてきた。
マサヒロは国語以外は点数高めで、国語だけが欠点とも言える。
しかし今回はそれなりに俺は教えられたし、マサヒロも点数も取れていたという。しかし、だ。

「なんで俺は違う名前を書いてしまったんだっ――――」

ちなみに名前というのはテストの問題ではない

自分の名前記入欄に何を思ったのか「田波直人」と書きなぐったらしい。

本人に身に覚えはないらしく、そしてこれが誰なのかも分からない。
とあるマンガのキャラクターらしいが……まあとにかくやっちまったらしい。
更に、組・番号も書かれておらず。テストの持ち主が分からず学校中の国語教師を旅してきたとか、なんとか。
もちろん自分のテスト答案と名乗りをあげたが、教師にこっぴどく絞られ、テスト点数を２０点分減点という罰を受けたらしい。

「赤点だあああああ」

まあ次のテストで挽回してね、というオチ。　国語以外は８０点以上を記録していたらしい……ざけんなや。　それで、ユイはというと――

「まあまあだぬ」

と、言ってオール九十点以上のテスト答案を見つめていた――悔しいが、コイツ頭いいからな。

学年でもトップテンに入っていて、貼り出されたときは目を疑った。　じゃあ、ユイに勉強教えてもらえよ。　といわれそう……だが！

ユイは教えることが壊滅的にダメなのでどうしようない。

一度教えて貰ったのだが――そりゃもう意味ワカランかった。

なんというか……日本語でおｋ？

「……」

姫城さんは言わずもがな。　順位はご想像にお任せします――

ちなみに、俺は……まぁまぁだった。　赤点は無かったのが非常に幸いだと思う。

数学の点数も姫城さんのおかげで奮闘した……７０点代は初めてだ。　これは姫城さんに本当に感謝だ。

情けない点数などとったら教えてくれた姫城さんに申し訳が付かないので、本当に良かった。

国語だけは点数を取れる俺は、マサヒロに教えながらも勉強になっていた為。

全テスト内では秀でた９０点を獲得することが出来た。　良かった良かった。

これで一つの峠を越えられた訳だが――同日、次のイベントが始まりを告げる。

そうこれはテスト返し行われる各授業が始まる前の朝のホームルームのこと。

第１２０話　√１－２５　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ここでまさかのモブキャラ追加

ＧＡＹＭ版に追いついたの一端やめ。

７月末連続更新にお付き合い頂きありがとうございましたー

第１２０話　√１－２５　※独占禁止法は適応されませんでした。

とうに過ぎし春を懐かしみつつ、夏の訪れを感じる蒸し暑さがテストの始まった頃から顔を見せており、後１日で来たる衣替えを心待ちにしていた五月の末。

ワイシャツを前へとグイグイ引っ張り、そこに右手を平らにして”疑似うちわ”として空気を送り込む……が、それほど効果はみられない。

労力の無駄と考えた賢い俺は、さっさと諦めることにした。　しかし、だ――

……あんにゃろ、下敷きなんて高貴なモノ使いやがって！　勝ち組か！　勝ち組なのか！

しかも窓際で、窓全開で風入り放題の場所でうちわ？　……はっ、こいつナメてやがるぜ。

ちくしょうめ……下敷きなんぞノートの下に敷いたり、夏期のうちわ代用でしか使えない文具だってーのに、夏はこれほどに重宝するなんて！

家に残っているだろうか？　眠っているのだろうか？　……帰ったら探してみようか。

暑さというものに体力やら気力やら思考能力やらが奪われていく中、金曜のロングホームルーム。

前に向き直って見ると――

「体育祭の季節です――」

委員長が何故か教卓前で、ロングホームルームの司会的なことをし、担任は手頃なパイプ椅子に座り込んで文庫本を読みふけっていた。

なんだなんだ……体育祭？　ああ、もうそんな時期か。

委員長はというと競技を淡々と言い連ねながら、黒板に書き出していく。

ふむ……５０ｍ走全員に７００ｍ・１５００ｍ走は希望――まぁ、それはどうでもいいか。

大玉転がし……って高校になってもあんのかよ！　二人三脚に障害物リレー、借り物競走――

ふーん、色々あんだな。　中学校の時は何やったっけ――

「――ということで、各出場種目の出場者を決めたいと思います」

「「えー」」

するとクラス中からブーイングの嵐が巻き起こった。

「いいよー、俺は家でゲームしてたいよ」

「いや俺、その日デートが――って俺彼女いねぇじゃん！」

「いいけど、楽なのがいいなー」

「疲れるのはやだー」

「るせえっ！　体育祭に参加しないで何が学生だぁ」

「灼熱地獄熱血業火、ファァイヤァァァッ！」

と、まあ俺のクラスの現状だ。

まさにカオス、まとまりの無さに関しては他クラスの追随を許さないね。

あ、ちなみに最後から2番目はなんとこのクラス初登場の”福島コナツ”……熱血キャラだったのかー

それで、俺がまとめるとすれば「体育祭否定派」「どっちでもいい派」「体育祭大賛成熱血派」の3つに分かれる。

ちなみに俺はどっちでもいい派に属し、まぁ意見の多い方でいいっかなー。　ちなみにユキは――

「うーん、どっちでもいいかなー」

うーん、流石ユキさん気が合うな！　俺はどっちでもいいー、がベストだと考えています、はい！

そして姫城さんは――

「ユウジ様との体育祭ならっ！」

まさかの爆弾発言。

クラス中に聞こえる声で言ったばかりにシャーペンとか定規とかが飛んでき――ちょっ、なんか背中に刺さったよ！

え、いやなんでユキさんも投げてくるんでせうか！？　……勉強会の頃からなんか変ですぜ？

おら、ユイとマサヒロも面白半分に参加すんなや……え？　俺は面白半分じゃなくマジだ？　はっは、ナイスジョーク！

あ、コナツ居たのか――ってオオイ！　少なからず本気で軟球投

げんな……え？　これはアタシの本気の１％もない……やかましいわっ！

「みんな静かにー」

「おお委員長助かっ――」

「静かにしてれば何してもいいけど……面白いし」

「おおい！　委員長そりゃねぇよっ！　ってか委員長キャラ変わってるだろ！」

「……」

「……」

ガンガンガンシュバビンスッサッヒュルヒュルドォーン――酷い擬音祭りだ。

そして背中とか肩とか腕に色々ぶつかってんすけど！　そして、無言怖いから。

無言で鈍器を一人一点集中で投げ込むって何事だよ。

「ユウジ様」

「おおう！？　……なんで姫城さんが、ここに居るんだ？」

結構席離れていた気がするんだが、いつのまに……？

「静かにしていれば――良いのですよね？」

「え」

やっべぇ、嫌な予感しかしない。

「えい」

だきっ、姫城は俺が困惑しているのをいいことに、右腕へと笑顔で抱きついた。

「！」

「「！？」」

ああ……ああ。

やっちゃったよこの人――！　衆目の中で、かつ豪華クラスメイトフルメンバーかよ！

――シュバッ

だ、誰だ！　学校にシュリケン持ってきた奴！

ちょまて、落ち着こう。　な？　本当にさ、クールダウンクールダウン。　いやさ――

「よく催涙ガスとか持ってんな！　てか噴射口を向けるな！　な、なんだよ……俺が何をしたって言うんだよ！」

そんな疑問の声は、何故かどうやら彼らを逆撫でしたようで――

「「し、死に晒せやぁぁぁぁ」」

クラスの男子が一致団結、心が一つになった瞬間だった。　女子たちは女子で――

「男子サイテー。　下之くんを除く」

「そんなことして恥ずかしくないの？　もちろん下之くんは除く」

「男子ってバカなの？　死ぬの？　ちなみに下之を除く」

「静かにしなさいよー……下之くんを除く」

何故か女子の間で「俺を除く」というのが流行り始めたようだ……本当に何故だ！

「では冗談もここまでにして、競技を決めたいと思います」

おい委員長。　何も無かったかのようにすまし顔で始めるなや。

「まずば……選択競技から決めます」

はぁ……俺だけ怒っていても仕方ない。

……消しゴムや鉛筆などの文房具類を未だ投げ続けるＫＹが居るけどな、十数人。

「てか姫城さん！　いつまでそうしてるんだ！」

「いつまで……ですか？　愚問ですよ、ユウジ様」

「いや、そろそろ本当に――」

「この命が尽きるまで、あなたのお側に。」

「！」

紅潮させた頬と真っ直ぐに俺を見る眼差し、彼女はとても真面目で真剣で……彼女が本気であることを理解した。

いや、でもさ――

「その台詞は使い方が違うと思うぞ！？」

なんだ、そのかっこいい台詞。

バトル漫画の思いを寄せる女性が自分の命を盾にしてでも守ろうと、傍にいようと――しているそうな台詞じゃねぇか！

ああ……なんか恥ずかしくなってきた。

一方クラスメイトは姫城の発言を皮切りに暴走開始、ああめんどくせぇぇぇぇぇぇぇ！

「……貴様には幻滅した。　その膨大な幸福の代価を〝死〟を持って償うがいいっ！」

「誰だお前！？　初登場のクセしてキャラ濃すぎだろ！」

「この”厨二”という名を脳に擦りつけて死ぬがいい！」

「ひっでぇ名前」

ええ……ナレーター不在の為、遠隔でわしこと桐がナレーションじゃ。

なんでなんじゃろうな？　……ま、本当は知っておるのじゃがな。

クラスメイト男子Ａ「厨ニ　太郎」いわゆる中二病が残っている……らしいぞ。

「ござる、ござるでござる！　じわりじわりと命を削ってやるでござる！」

「おめぇもまたキャラ濃いな」

「この”服部　甲伊賀”が、お主を死の淵へと追いやるでござる！」

「甲賀と伊賀どっちかにしろよ！」

クラスメイト男子Ｂ「服部（はっとり）　甲伊賀（かいが）」……甲賀と伊賀のハーフというのが本人の言い訳らしいな。

「うおおおおおおお、体育祭だあああああああ」

「うお、熱っ！」

「お前も出るだろ？　なぁ、なぁ、なぁ？」

「清々しいほどにテンプレ熱血キャラだな！？」

クラスメイト男子Ｃ「男島（おじま）　発戸（ほっと）」とにかく熱い、熱過ぎて扇風機が恋しくなる熱血キャラじゃ。

ちなみにクラスの男共はどうやら「ユキファンクラブ」と「マイファンクラブ」で分かれているぞうじゃ。
……そんな情報要らん？　まぁまぁ、後には重要じゃから覚えておくといいぞ。

「ちょっとーうるさいよー！　それに大丈夫？　下之くん」

「ま、まぁ背中からなんか流れ出している気がするが――」

「まぁ大変！　今すぐ手当を！」

「いや、大丈夫だから――」

「任せて！　私、保健医員だから！」

と、言って彼女はどこからか持ってきたか分からん救急セットを開いた。

クラスメイト女子Ａ「愛坂（あいさか）　ひだまり」保健委員らしいの、そして……うぬぬ、こやつも美少女じゃの。
しかし、ヒロインの中には入っておらぬな……まさか次回作（ｒｙ

「ということで服を脱いでくださいー」

「いや、いいって！」

「ユ・ウ・ジ・さ・ま・？」

「姫城さん！　違うんだこれには訳が――」

「そこの、あなた！　私のユウジ様には指一本触れさせないです！」

「ふふん、そうはいかないわ。　男子の体を触れるまたと無いチャンス、逃す訳にはいかない！」

「ええー、そっち系かよ！」

愛坂ひだまり……こやつは何かとんでもないオーラを感じる！

何か……そう、何か！　……そうじゃ！　このなんとも言えぬピンク色のオーラは！？

……わしに似ている。

「シモノくん、動いちゃ駄目だよー？（ハァハァ）」

「だめですー！」

「そうだよ！　ちょっと愛坂さん！」

おお、ユキも混じって大混戦じゃな！

そんな時に、何気ない顔で――

「はい、そこ静かにしてくださいー」

と、委員長が言った。

「お前のせいだろ！」

「……そんなことないですよ」

「……目を逸らした時点でアウトだと思え」

委員長……なんか、初期に想像したキャラと違ってきておるの。まぁ、この物語でノリの良くない者は生き残れないからの。　仕方ないのかもしれんな。

「……うるさい、読書の邪魔するな」

「なんで、俺に言うんだよ！」

「……事態の中心」

「知るか！」

クラスメイト女子Ｂ「金沢（かねさわ）　文庫（ふみこ）」……ネタじゃろう、こやつの名前ネタじゃろう！

ええ、ごほん。　無口で本をこよなく愛する女子らしい、図書委員じゃ。

「シモノ」

「はいはい、なんでしょうかね」

「何だ、そのふざけた態度は！」

「いや……なんで俺怒られてんの？」

「自分の胸に聴いてみるがいい！」

「わからん！」

「……判断がすこぶる早いのは助かるが、もう少し考えることが出来ないのか？」

「全く心当たりがない！」

「この状況を見て本当にそんなことが言える、と？」

「ああ！」

「……その答えは堂々し過ぎだ、シモノ」

「オッス、オラ下之！」

「堂々とし過ぎだ！　シモノ、君のせいで風紀が乱れている！

「そんなことないっすよセンパイ」

「同学年で同級生だろうが！」

クラスメイト女子C「笹川（ささがわ）　護（まもり）」まぁ、典型的なキッチリキャラじゃの。

ちなみに風紀委員で、だらけた者などを見ると矯正したくなる……らしいの。

何か、今回紹介した女子共は何か特殊な雰囲気を持っているのう……これは！

「ということで、競技決めるんで座ってくださいー」

まぁ、グダグダでカオスなクラスの競技決めが始まるのじゃった。

第１２１話　√１－２６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

また追いついた……結構ヤバいね

第１２１話　√１－２６　※独占禁止法は適応されませんでした。

委員長はこほんと咳払いすると、黒板に書かれた競技名をコツコツと指差した。

「それでは……二人三脚、一円から」

！？　えっ、えっ？　はい？

「千円。」

そんなクエスチョンマークが脳内を埋め尽くさんばかりの中、平然と忽然と突然に。

姫城さんが腕を天井にグッと真っすぐ上へと伸ばし、傍から見ても綺麗な挙手をしていた。

それと共に落札額の提示……！？

「「！？」」

クラスの皆が絶賛困惑中、そして俺も理解出来ていない。　何がどうして、こうなった。

そんな中、只一人状況を理解したのか分からないが、挙手する姫城さん。

……てか一円スタートなのに千円落札ってどういうことだよ！

「ということで、姫城さん落札です」

いやいや、どういうこと？

「よ、よし！」

当の本人こと姫城さんは、なんか落札出来て喜んでいた。

きっと姫城さんは勉強が出来ることから考えて、頭の回転が速いだろうから、このようにすぐさま現状を理解出来て挙手したに違いない。

「……」

しかし……頭の回転が自転車をこぐ速さよりも劣りそうな俺には、展開がイミフ過ぎる。

というか何故に競り風？　普通に挙手制でいいじゃない。　てかおい委員長、もうあんた別人がなりすましてるだろ。

そして姫城さんも、理解したからかもしれないすけどキラキラ燦々目を輝かせながら純粋に便乗しないでくださぁい！

「ちなみに落札されてもお金は頂きません、あくまで覚悟の程を確かめる為です」

意味ねーじゃねぇーか。

「それでは……借り物競争、一円から」

借り物競走。　ギャルゲとかでは度々目にするが、実際やってるとこは見たことがない。

というか、この世界ギャルゲ化してんのか。　……それならこんな競技があってもさほどおかしくはないな。

ま、ということで個人的に借り物競争が気になるし……試しに挙げてみるか。

「十円」

て、ことで俺は挙げてみる。

「……」

シーン。　……独壇場には変わり無いけど、なんだろう、この込み上げてくる寂しさ悲しさは。

「下之くん、決定ですー」

「はぁ」

……てか、やはり何故競り？

「続いて障害物リレー、一円か――」

どうせ、また過疎るだろう。　そして誰も無挙手で閑寂が支配するであろう……俺の予測は大きく裏切られた。

委員長がスタート額を提示する直後に、野太く、非常に大きな声が発せられたのだ――

「男は立ちふさがる壁を越えるか、壊さないといけない――だから俺は、この障害物という壁を乗り越えねばならんのだぁっ！　三十円三十円三十円三十円三十円っ！」

うわあ、出たよ。　しかし俺は油断していたのだ。　この一人で決まってしまうだろうと。

そいつとは全く別の大きく高い声……そしてなんとも活発な――

「なっ、男島っ！　アタシだって譲れない戦いがある――男は壁があってこそ熱く燃え上がる！　抜け駆けはさせねえっ！　五十円五十円五十円五十円五十円五十円五十円五十円」

更にまさかの福島……今までのクラスでは空気だってのに、この変わりよう。

ああ、どうにも福島が某生徒会ラノベに出ているキャラに若干似ている気がしてならない。

そしてテンプレ的ツッコミだが、お前は女だ。

「福島か――くぅぅ、ならば七十円七十円七十円七十円七十円七十円七十円っ」

熱いよ！　衣替えしてないってのにこの暑苦しさは正直困るよ！

「百円。」

ずびし、と福島がどや顔で言い放った。

「っ！？　百一円……」

うわ、ちいせぇ戦い。

「百五十円！」

そして、更に値段を上げた……微量だけども。

「うわあああああっ！　そんな大金俺には払えねぇぇぇぇぇぇぇ」

大……金？

「ははははっ！　アタシの方がやる気と熱意に満ちていた訳だな」

いやいや、その程度かよ。

「ちくしょう……ならば本番に勝負だ！」

「いいぜ、てめえが思い通り出来るってなら、そのふざけた幻想をブチ殺すっ！」

福島、禁書読んでたんすね。

「と、まあ。　冗談はここまでにして」

委員長がそうして前触れなくオチを付けた。

「冗談かよ！」

「この展開の提案は、巳原ユイさんの提供でお送りしました」

「戦犯お前かよっ」

やりそうだよな、うんうん。　こんなユニークで奇抜な展開はユイとマサヒロぐらいしか思いつかないだろう。

「てへぺろ☆」

……なんかウゼェ。

「今挙げて頂いた方はそのまま競技参加で宜しいですね？」

「「はいっ！」」

「は、はぁ」

なんだかなあ。

「今からはいずれかの二競技を選んで頂きます。　なお一回も挙げない場合――各長距離走に出て頂きます」

「「！？」」

「この罰ゲームの提案は、〇〇先生の提供で送りしました」

担任かよ！　そこで先生か！　当の本人、思い切りパイプ椅子でふねこいでるし。

「そーいうことなんで、まずは二人三脚――」

……まあ、なんというか。　委員長のキャラ壊れてるし、更に遊ばれてるけど。

長距離走は正直かったるい。　担任が絡んでいることからも本当に挙手しなかった奴から選ばれそうだ。

借り物競争は選んだとして、他には――

・障害物リレー

・二人三脚

・ＰＫ戦

ほうほうこの三つか――!?　いや待て、え?　なんか一つ浮いてないか?

「ＰＫ戦……?」

「ＰＫ戦とはサッカーのアレです」

「いや分かるけど……なんで体育祭でんなことしなきゃならないんだ?」

「体育には違いないですよ?」

「そうだけども!」

「出場者は４人×２チームの８人で、各チーム１人がキーパー役、１人がキッカー役。　残りが敵シュート時のディフェンス役となります」

おお、案外まともだな。

「各チーム５回のシュートでゴール数の多いチームの勝利です。総当たりで勝ち数の多いチームが優勝、同点の場合はまたＰＫ戦で勝利したチームが優勝――と、こんな具合です」

「「おお」」

パチパチとクラスのスポーツ男子が拍手。　そして少しのシンキングタイムが与えられた。

「ねー、ナコ。　障害物リレーって、大玉転がしが入ってるんだねー　ナコ、一緒にやろー！」
「玉転がしなんて……いやらしい」
「いやいや、なんで下ネタになってるの！？」

「ミコト、二人三脚やらない？
「いいわよ、でも……」
「でも……？」
「私とアユミは二人で一人、三脚も必要ないわ」
「そこ！？　そしてどうすんの！？」
「二脚よ！」
「すっごい疲れそうだよね！？」

「借り物競争がいいかなあ、女の子を借りたい」
「おいおいトウマ、お前の場合は借りて返さないだろ？」
「あは、バレた？」
「長い付き合いだからな」
「お前もや　ら　な　い　か　？」
「その使い方は間違っているがスレイス共にやろうじゃないか！」
「おうよ！」

「ＰＫ戦……ふひひ、ボールって当たったら痛いのかなぁ」
「ああ痛いだろうな、枝夢男。　しかし、相手の頭か急所にボールを蹴り入れられたら、心地よいだろうか？」
「うん、枝住男くん。　そうだと思うよぉ」
「やるか」
「やろう」

シンキングタイム終了。　そして委員長が口を開く。

「では、今から出場競技を決めるので、必ず、2回手を挙げてください」

さて、俺はどうしたものか。　面倒臭そうなPK戦は除外として、”大玉転がし”か”二人三脚”いずれかだけども……二人三脚はどうせ男子と組まされるだろうし、なんか嫌だな。

てーことで、消去法で障害物リレーか。　二人一組らしいけど、二人三脚ほど密着はしないから、いっか。

「次に障害物リレー」

「はい……っ!?」

挙手をしようとした、その瞬間。　背中に寒気やら殺気やらを覚え、腕が動かなくなった。

な、なにごとなんだ!?　それに突き刺さる視線……あ、これはもしかして――

「……（ジー）」

ヒメシロサーン！　やはりあなたでしたか。　てかあなたですよね。

って、いくら力入れても腕上がらねぇ……一体何をしたらこうなるんだ!

「――生涯普通リレーは締め切ります」

くっそう、上げられなかったぞ……ちくしょうめ。
というか姫城さんは一体何を考えているんだ……二回上げないと罰ゲームだというのに。

そして委員長、さりげなくボケるな。　ツッコミが追いつかん。

「それでは二人三脚――」

「っ！」

か、体が勝手に！？　力を入れてもいないのに右腕が上へと延びる――
く、くそう！　体が言う事を聞かねぇ！

「――では、ニニンシキャクを締め切ります」

「……（ホッ）」

ホッと胸を撫で下ろす姫城さん……だから一体なんで――
まてよ……そう言えばさっき挙手してのも二人三脚……もしかして、自分と同じ競技に誘導したかったからこんなことを！？

それと委員長、分かりにくいボケをするな。　かなり反応に困る。

「……（にこっ）」

すると俺の方目がけて姫城さんは微笑んだ……く、くそう。　そんな笑顔見せられたら、どうでもよくなるじゃねぇか。
……ってよくないよくない。　おそらくこの謎の技も一回限りとかじゃないだろうな……はぁ、未来になっても操られるのか。

「（ほっ、昨日”よくわかる遠隔操作　人間編”を読んでおいて良かったです！）」

……ずっと居たのじゃが、つっこむべきなのじゃろうか？

ということで各競技か決まっていった訳じゃ。　しかし、競技が決まっているが、組はどうするのかのう……

第１２２話　√１－２７　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

予定を変更～　しかし予約投稿ですー

第122話　√1－27　※独占禁止法は適応されませんでした。

という訳で、俺は借り物競争と二人三脚をやることになったとさ。
……不本意だけど、思い切り不本意だけども。

「全員二回は挙げたようですね――では二人三脚と障害物リレーは二人一組なので、各それぞれ組を作って――」

「ユウジさまぁっ～！」

「！？」

姫城さん、まさかのフライングスタート。
そして標的、俺。　男子クラスメイトの標的、俺へとロックオン。
くそー、ここでまさかの自由で組即製かよ！

「ちょ！　姫城さん！」

「私と組んでください！」

「ええ！？」

どうすりゃいいのか……きっちり断りゃいいのか？　……いやいや！
姫城さんが怖いのもあるが、それはなんか気が進まないぞ。

でも実を言うと姫城さんには悪いけど、自由に組めるってならユキと組みたい！

はぁ……でもこの考えってはっきりしないよなぁ。　これが優柔不断へと繋がる訳なんだよな……

しかし、このままクラスメイトに八つ裂きにされて生涯を終えるのはご免被りたい。

かと言ってユキなんて誘えない。

え？　ユキが誘ってくれる？

んな夢でもお釣りが来そうな程の儚い望み叶はずが――

「ユ、ユウジ！　私と二人三脚やろ！」

ユ、ユキさんきたあああああああ

なにこの夢。　素晴らしいんだが。　ユキからのお誘い？　かぁっー地球に生まれて良かったァァ！

「だ、ダメです！　ユウジ様は私と組むんです！」

「やだ、私はユウジと組むの！」

「ユウジ様は私とですっ！」

「ううん、ユウジは私と！」

ああ、取り合ってくれて嬉しいよ。

まさかこんな俺が取り合いになる日が来ようとは。

浮いた噂のない絶望に打ち拉がれる日々からは想像どころか妄想すら出来なかったよ。

いや、でもな。

男子クラスメイトの目とか挙動が大変な事になってるんだよな…
…身体バキバキ言わせながら蜘蛛みたいな体付きに変形してる奴とか居るし。このクラス、色んな意味で変態過ぎだろう……
そして奴らは俺の返答次第で集団暴力を起こすかを決めかねない勢いだ。
八方塞がりな俺。
下手すりゃやられる五秒前――しかし俺は覚悟を決めるぜ。
このチャンスは、この機会はきっともう訪れない、
だから今回ばかしは俺には譲れない――

「ユ、ユ――」

「はい、うるさいので自由決めは中止です」

「「えええええええええ!?」」

「あ……」

言えない悔しさの反面、八つ裂きを回避出来て胸を撫で下ろす俺が居た。
一応覚悟して言おうとしたが……こうなってしまった以上仕方ない。
……この貴重なチャンスをふいにされたのはかなりシャクだけどな。
しかし本当の主人公なら委員長の実質的制止を無視してでも言うのだろう。
そう考えると、俺ってヘタレだよなぁ……

「くじ引きです」

すると、そう言いながら委員長は、どどんと立方体の箱をどこからか取り出した。

ちなみに競技分なので二箱。

「今から競技の各組分のくじを箱に入れます、同じ数字同士で呼びあって決めてください――」

くじ引き、か。

くじ運は正直すこぶる悪い。

福引きの残念賞でお馴染みの「ポケットティッシュ」だって、最中にくじ引き機が壊れ、もらったことがない。

引けるくじが数合わせ間違いでなかったり。　くじ運というか、普通に運が無い。

――というのは今でっちあげたばかりの嘘だけども。

まあ、あまりくじ運が無いことは確かだったりする。

「二人三脚の人、くじ引いてくださいー」

さて、くじ運はどうかな？　席を立ち、くじ引き箱の置いてある教卓を目指す頃には――

「3番です！」

と、相変わらず姫城さんがフライングではないが、既に引いていた。

くじの番号を少し凝視した後。

「ユウジ様……3番です」

「ああ、そうか」

「当てて下さい！」

「無茶言うな！」

そんな、情報ナシの目隠し神経衰弱みたいな真似出来るか！

もう、もはやくじ運のレベルなのだろうか……当てろと言われて、当てられたら。

そりゃあもう、文句なしの奇跡なんじゃなかろうか。

「ユウジ様！」

期待に満ちた輝く瞳が、今の俺には半端じゃないプレッシャーを生みだした。

「……まぁ、無理だろうけど」

「ちょっとまってユウジ」

「ユキ？」

「先に引いていい？」

「おお！　ユキも二人三脚選んだのか！」

「う、うん。　ちょっとやりたくなってねー」

うおおお、ユキさんと組みてえええええ。

「じゃあ、失礼して」

「どうぞどうぞ」

くじ引き中……バンッ！

「5番……かぁ」

「何番だった？」

「5番。　ユウジ、分かってるよね？」

「え、何が？」

「ご・ば・ん・！」

「！」

こっこれは！　お誘い！？　ユキさんからのお誘いなのかぁ！

うっひょーい、天にも昇る心地だぜ！　てかちょっと昇って来るぜ！

「――――」

「ちょ！　ユウジ！　何か白目剥いてるよ！？」

「あ、あぁ。　大丈夫だ。　うん」

あ、あぶねー。　あやうく昇天するとこだった……さてと、気を取り直して！
ユキさんとのペアを――

「キラキラキラ」↑姫城さん

……うん、とりあえず引いてみよう。

「ていやっ！」

箱から飛び出す1枚の紙。　その紙に女神は舞い降りたか、それとも悪魔か！
さぁ、いざ尋常に……ハッ！

「3番か」

刹那だった。
クラスの何の関係もなしに駄弁っていたクラスの男子共がこちらを向いて目を光らせた。
その瞳にはドス黒い、憎しみ怒り悲しみ妬みに満ちていたように見える。

そして、俺の方へと様々な鈍器が振りかざされた――

「死に晒せやあああああああああああ」

その教室は地獄絵図だったと言えよう。　どれだけ、俺に鋭器が突き刺さったか……よく覚えていない。

そして、俺はいつの間にか教室から出ていたようで……保健室のベッドに寝ていた。

体のあちこちに包帯が巻かれ、更には体中から痛みが響く。

傍をみれば染み出た血液が白いシーツに赤く痕を残していた――

「俺はクラスメイトを侮っていた」

……おいおい、こんな奴ら敵に回しちゃったのかよ。

なにこのクラスメイト。　猟奇的発想を即刻するなんて頭がおかしいとしか思えない。

てか、怖い。　恐ろしい。

しっかし、上手に包帯巻かれてんなー……キツくもないけど緩くも無いし、消毒液があるってことはしっかり消毒もしたんだろうな。

もしかすると……あの娘か？

というかこの傷達を見るに……下手すりゃ死ん――

「あっ、下之くん起きた？」

「あ、えーと」

「愛坂。　愛坂ひだまり、だよ」

「えーと愛坂。　もしかしてお前が、俺を――」

「うん、そだよー」

「ああ、そりゃありがとな。　そしてスマン」

「謝らなくていいよー？　……見れるものは見してもらったし」

「え……！？　ちょ！　愛坂サン！？」

「いいね……教科書やネットで見るよりもいいよぉ（ハァハァ）」

「うわあああああああああ」

「ユウジ様！　私も見せてください！」

「うわああ、居たのか！　姫城さん！」

「居ましたよ……ベッドの下に」

「そこは人が隠れる場所じゃないかと！」

「それはいいんです。　愛坂さん……ユウジ様のは、どどどどどうでしたッ？」

「うん……いいよ」

と、言ってグーサインする愛坂――へ、変態しかいねぇ！

「それは……是非。　ご覧に入れたいです――」

今、俺は色々と危機に瀕していた。

このままではうやむやになってしまうので、愛坂に言っておかねば――

「ちょ、ちょま！　俺の言いたかったのはさ、愛坂さん！」

「ん？」

「言った通り、手当上手だねって……言いたかったんだけど」

そう言うと、彼女は何か驚いたような照れたような表情を露わした――

「！　そ、そう？　私の言った事覚えててくれたんだね……」

「まぁな……名前を言えなかったのはすまなかったが」

「気にしてないよー　下之くんって優しいねー」

「ん、なんあこたあないよ？」

「……ユウジ様」

愛坂だけに気を取られていたが……一方の姫城さんは不機嫌オーラを見に纏っていた。

「え、姫城さん！　いや、だから！　これには深い意味はなくてですね！」

「私には深イイ話だったよぉ」

「それはねぇよ！　って姫城さん！」

「……罰として見せて下さい」

「え、いやさ、あの」

「……×××を！」

「うわあああああ、いつからこの作品は下ネタにぃぃぃぃっ！？」

……あれ？　わしの出番要らなくないかの？

うーむ……というか、この学校は色んな意味で変態ばかりじゃの。

変態であるわしが言うのもなんじゃがの。

第１２３話　√１－２８　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

修正しきれなかったのは許してくだせえ

第123話　√1－28　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ユウジ様！　練習致しましょう！」

「え？」

俺が何気なく教室の後ろロッカーに寄りかかっていたところ、半端じゃないほどに目を輝かす姫城さんが近づき、そう俺に言った。

「……練習？」

「二人三脚のですっ」

「ああ――」

そういえばだった。

くじ運があるのかないのか疑問だが、俺は姫城さんとの二人三脚ペアになった。

くじ運がある、と言いきれないのは……このクラスの男子生徒の報復が恐ろしい。

ペアが決定した時なんて――

それを除けば……悪くない、というかこれまた貴重な経験だろう。

と、ここまで話した。

そして姫城さんはといえば――

「ということで練習しましょう！」

「いや、姫城さん。　一応授業内でも練習時間は取るし必要ないと思うんだが……」

「いえ！　私は二人三脚で絶対勝つんです！」

「へぇ、姫城さんって（学校行事に）積極的なんだな」

「せ、積極的ですか!?　そんなことないですよ！」

「いやいやここまで（学校行事に）熱心になるなんて、正直驚いた」

「当たり前です！　常に私は熱い思いを秘めていますから！」

「常に!?」

お、おおう……ここまで姫城さんが体育祭好きだとは知らんかった！

「と、いうことでお願いします！」

「……いいけど、いつ？」

「ユウジ様のご都合次第です」

「え、俺は基本的に生徒会が無い放課後は暇――」

「毎日ですね、分かりました！」

「断片さえも読み取れてねぇ！　いや、生徒会の無い日ったって当日に連絡が来るから、正直わからないんだよ」

「……そうですか」

「ああ、そのうち機会を作るからさ？」

「ユウジ様、では私に任せて下さい」

「いや、何を……？」

「ユウジ様のお暇のなくなる諸悪の根源こと、生徒会を、何らかの方法で！」

「いやいやいや消すなよ？　爆発させるなよ？　吹き飛ばすなよ！」

「……策は尽きました。　ううん、どうすればユウジ様とのイチャラブパラダイスを満喫出来るというのですか！」

「うん、目的が跡形もなく消し去られてるね」

「はっ、つい本音が！　ユウジ様っ！　私が二人三脚を選んだ理由がユウジ様と密着したいから、という本音も言ってしまいましたか！？」

「丁度今だから。　思いきし初耳だな」

「そんなことまで……更に私は――」

「あっ、姫城さん。　喋る度に墓穴掘ってるんで止めた方がいいかと」

「――そうですか？　ということ要約してユウジ様大好きです！」

「っ！　姫城さん、そんな恥ずかしい台詞白昼堂々言わんでください」

「恥ずかしい？　どこがですか？　私は嘘偽りなき本音を言ってるだけです！」

「いやいや！　まず俺が恥ずかしいよ！」

「……もしかしてお嫌でしたか？　ユウジ様のお心も考えず、私は発言を！？　これはもう――」

と、言うとどこからか宝刀を涙目で取り出し首に突き付ける姫城さんの姿が――
あっぶねぇ！

「いや、嫌ではないけど……」

「ほ、本当ですか！？」

「ま、まあな……でも場所と時間を弁えて――」

「！　だ、抱きついてもいいですか！」

「いやいや！　それは普通にダメだから！」

「しゅん……」

「で、二人三脚の事だけども。　姫城さんには悪いけど、俺の都合が付きしだいで頼むよ」

「は、はい！　理解しました！　なんなりと言ってください！」

「あ、ああ」

その頃の外野はというとの。

「お、ユウジは今日も姫城さんと話してるねぇ」

「だな。　勉強会の頃から何かが変わったね」

「変わったの！？」

「おお、ユキさんお早う」

「おはようユイ……ってマサヒロくんっ！　変わったって何が！？」

「え、えーとですな……どうにもユウジの姫城さんへの接し方が変わったなあ、と思った次第でございます」

「例えば！？」

「優しくなった……？　親密になった？　とかだな」

「！」

「おやおやユキさん。　どうしてそこまで動揺してるんでせうか？」

「そ、そそそそんなことないよっ！？」

「まあ、ユキさんはユウジとずっと仲良かっただけに……この泥棒猫、状態なんでしょう？」

「そんなことないって！　だってユウジとは付き合いが長いだけで、あっちはなんとも――なんでもないっ！　なんでもないからっ！」

「ほほう……なるほどな」

「な、なに……？」

「（嫉妬かーわい♪）」

「（し、嫉妬じゃないってば！）」

ふむ、ユキの中でも大きな心境の変化があったようじゃの。

うーむ、物語が着実に動き出しているのう。

番外０２話　番外１－１　ザ・生徒会（前書き）

ＧＡＹＭ版で３０更新分ぐらいボツになった記事を元に再編集とかしたみたものを投稿ですー

番外０２話　番外１－１　ザ・生徒会

ええ、ごほん……皆さんこんばんは。
最近ナレーションの仕事が減って一喜一憂していたナレーターです。
仕事が減ったおかげで疲れは減りましたが、バイト料が減りました……ぐすん。

都合の良い女とでも思われているのね！　心外だわっ！

……キャラ変えてみましたが、しっくり来ませんね。
ユウジと同じノリなのにおかしいなあ。

ま、私が今回呼び出されたのは作者曰くほかでもないらしく。

「続き作るのもいいけど、ＧＡＹＭ版の不良在庫処分したいんだよね～（ＣＶ．作者の声マネした桐）」

と、ほざいていました。　不良在庫ってなんですか、と聞くと。

「あれだよ、あれ。　なんかネタに走り過ぎて寒いから大半を取っ払った”生徒会編”」

ああ、あれですか。　あれは寒過ぎて反応に困りましたよ。

「ということで……なんとかして見せられるものにしてくれないかな？　君のナレーションで」

無理です。　既に普通に連載してる分も見せられるものなんかじゃないんですか。

「そこを、なんとか……弾むからさ」

……それを先に言ってくださいよ。

ということでなんとかしようとしました。　しました、が。

……正直御免なさい、読み飛ばして下さい。　というかこの作品そのものがゴメンナサイ。

それでも読んで下さるならどうぞお勝手に（？）

注意

この番外編は内輪・自虐ネタを数多く含みます。　そして一種の総集編に近い何かです。

そして、「スベってる」ということがほぼ確実に断言出来ます。

もはや読むことが時間の浪費かつ苦痛かもしれませんが、それでも読むというなら止めはしません。

ということで、しばらくの間本編はお休みして番外編１「生徒会編」をお楽しみ……楽しめるかどうかは疑問ですけど。

ええと、お楽しみください。

某日にて。

「私たちの出番少なくない？」

生徒会のある一角で幼い女の子のような声と容姿を持つ女性が向かいの女子へと問いかけた。

「そうね……散々喋らされた揚句にカットですものね」

なんとも妖艶な雰囲気と大人っぽい容姿を持つ女性は答える。

「そうだよ！　この仕打ちはあんまりだよ！」

「ということで、生徒会がしばらく乗っとることにしましょう」

「そうね、それはいいかも」

「じゃあ、まずは――」

（小気味良いＢＧＭ）

「こんなのやってどうするんだろね？　いい訳なんかしないで本編進めればいいのに」

「所詮更新稼ぎよ」

「じゃあチサ行くよー　せぇーの！」

『アイハマ放送局～』

（ノリの良いＢＧＭ）

「始まりましたー」

「そうね。　新たなる世界が始まりを向かえたわね」

「大げさだと思うよチサ。　ではではパーソナリティを務めさすは私、アスカと！」

「同じくパーソナリティを務めるチサよ」

「この二人でお送りしまーす」

「そして藍浜高校生徒会から放送室を遠隔操作で乗っ取ってお送りします」

「じ、地味に凄いことしてるね！」

（使い回しのＢＧＭ）

「第１回放送は……そうね、私たちの紹介でもしよっか』

「でも、その前に”普通のお便り”略して”駄便”のコーナーよ！」

「略されてない上にあまり印象がよくないね！？　というか第一回の放送なのになんでお便りが？」

「やらせよ」

「うわ、きっぱり言い切った」

「まずは一通目のお便り」

パチパチパチ（予め録音しておいたやる気の無い拍手）

「ペンネーム”暁さん”より」

「隠す気さらさら無いね！　もう吹っ切れてるよね！？」

『私はこの学校の現状に不満を抱いています。　この学校はどうして、猟奇的事件がないのですか？　一つや二つ恋人を取り合って殺し――』

「ストップストップ、チサ！」

「なによ、もう。　これからがクライマックスでもなんでもないけど、続きが読みたくてうずうずしてるのに」

「いや、チサ！　これやらせだよね！？」

「ええ、これも自分で書いたわ」

「……なんで、自分で読むものにうずうずしてるの？」

「いいじゃない、〝血〟とか〝肉塊〟とか〝赤く染まった頭蓋骨〟とか読むの楽しみじゃない！」

「同意を求められてもおおいに困るよ！　そして、不穏な単語しかないね！」

「で？　なんで止めたの？」

「え、そりゃ……放送コードギリギリ過ぎて――」

「放送コード？　アスちゃん、何を言っているの？」

「そりゃ、校内で聞いてて不快に思う人が――」

「このラジオを聞いている人なんて居る訳ないじゃない、放送してないもの」

「えええええ！？　さりげなく衝撃の事実を言わないでよ！」

「だって、今は真夜中の7時。　居る訳ないじゃない」

「そんな時間設定初めて聞いたよ！　は、どうりで辺りが暗くなっていた訳ね！」

「いや、アスちゃん。　それは気付いてもいいと思うのだけど……」

「え？　太陽の電池が切れちゃって、交換に手間取っているかと思ってたよー」

「え？　アスちゃん、太陽の電池？　太陽電池のこと？」

「え？　チサ、太陽って単三電池４本で動いているんだよね？」

「半端じゃない燃費の良さね」

「え？　違うの？」

「え？　はこちらの台詞よ……まぁでも可愛いからいっか」

「え！　私、もしかしておかしいこと言ってたの！？」

「いいえ、おかしくはないわ。　可笑しかっただけ」

「どちらにしろ私、変な目で見られてるよねぇ！」

「気のせいよ。　さぁラジオを続けましょう。　ええ”駄便”コーナーは今回は終わらせて……何にしようかしら」

「そういえば、乗っ取ったはいいけどノープランだったね」

「じゃあ次のコーナーは……”きょうの祟り”よ！」

「どんなコーナーよ！　”きょうのわ〇こ”みたいなノリで扱うべ

きジャンルじゃないかなと思うよ」

「じゃあ”きょうの傷跡”」

「なんかドキュメンタリーみたいなタイトルだけど、こんなラジオで扱うのは重すぎるから！」

「じゃあ、アスちゃん。　何かある？」

「そ、そうね……”きょうの……しばいぬ”？」

「きゃあ！　わんこと思い切り被ってるところがアスちゃんかわいい！」

「や、やめてチサ……ふぁぁ撫でないでぇ」

「……続きはまたね」

「続くのー！？」

第１２４話　√１－２９　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

更新再開ー、生徒会編はまたいずれ

第１２４話　√１－２９　※独占禁止法は適応されませんでした。

６月１日

「ぴんぽーんぱんぽーん、ええ、ああ……生徒会役員共に告ぐ！　今日は気分が優れないので活動はナシ！　以上！」

……ある日の昼休みのこと。

相変わらず飽きなく美味く調度よい量と色見た目にもこだわった姉貴の珠玉の弁当に舌鼓を打ちつつ、いつものメンバーで談笑をしていた頃。

昼休みに流れていた最近流行りのＪＰＯＰをサビで打ち消す、という不粋かつ空気の読めていない行動を我がお馴染みの生徒会の長ことあの人がしでかした。

スピーカーから流れる少しばかりキンキンとした幼い声は紛れもなく会長だろう。

そして流れたのは俺に深く関係する生徒会の有無。耳をかっぽじらなくても直ぐに理解した。

「今日は生徒会無いのか……」

自然にそんなことを漏らしてしまったのだが、右斜め前に居る姫城さんの耳は聞き逃さなかった。

「ユウジ様っ！」

まさに瞬間。反射のごとくに俺の名前を呼ぶ姫城さん。

「ああ、わかった！　今日は大丈夫そうだ」

諦めて素直に答えることとする。男に二言は無い！

「ユ、ユウジ？　大丈夫って？」

そんな俺らの会話に食い付いてきたのはまさかのユキだった。

「いや、放課後に体育祭の練習をすることになってんだよ」

秘密にしていたつもりは無いが、少し心苦しい。

「それは……姫城さんと？」

「ああ」

「二人だけ？」

「今のところは」

「じゃあ私もやる！」

「ええ！　いや、別に構わないけども（すっげぇ嬉しいけども）いきなりどした？　ユキは確か委員長と組だったはずだな……」

「え、いや、その……わ、私も勝ちたいなって！」

「そっかー、じゃあ委員長も連れてくるのか？」

「ううん、嵩鳥さんには委員長の仕事もあるし、私の事情で振り回すのも悪いしね……だから、もし良かったらユウジが練習相手になって欲しいなー、って」

「！」

おう！？　なんか最近のユキさんアグレッシブだなぁ！

でも、なんだろか……なんか最近のユキさんは変というか妙というか、焦ってるようにも見えたり見えなかったりするのは……どうしたんだろうか？

いや、どんなユキさんでも最高だけどねっ！

……！　姫城さんと放課後練習ということは、ユキとの帰り道タイムを堪能出来ないではないかっ！

し、しかし男に二言は無い上、約束を即刻破るというのは男以前に人として最低だ。

ユキには悪いし、正直名残惜しいが……と、考えている一方で。

ユキ、姫城さん間では――

「ダメです！　ユウジ様とは私が先に約束してるんです！」

「じ、じゃあ時間の合間をぬってさ！」

「ダメです。　ユウジ様との時間に合間などありません」

みっちり練習すか。ひえええー

「っ！　え、えと姫城さんは……なんでそこまでユウジに執着するの？」

ユキはさりげなく核心に触れてしまっていた。
確かに端から見れば俺への姫城さんの行動は不審極まりない。
誰も触れない、というか真実を知りたくなかった者（男子に限る）も居るであろうが故に、ここまでどストレートに質問してこなかった。
さあ姫城さん。　どのような返しをするか――目に見えてるよなあ。

「好きだからです」

言っちゃったよ。
ユキにはっきりバレてしまった……あーあ。ま、でもユキには関係の無いことだ……ろう……し。
あ、あれ分かっていることなのに。なんでこんなにも悲しいのだろうか……。

くっ、目に生ゴミがっ！

「そ、それは――！　冗談で言ってる……の？」

「本気です。心の底から大好きです。　愛しています！」

そ、そこまで言うか！
いや、なんというか。流石にここまで堂々と言われると恥ずかしいものがあるぞ！？

「な、なんでユウジなのっ！」

「お優しくて凛々しくて、時々見せるお茶目なところです」

やめろよてれる。

「！　……」

「とにかく言葉で言い表わせない程に、好きなんです！」

は、恥ずかしい台詞禁止！

「ユウジは……ユウジの事は……わ、私の方が良く知ってるもん！」

あるぇ、何事なのー？　何故にユキさんはここまで張り合ってるんだろうか？

俺のことなんぞ幼なじみ止まり……の……はず。

あ、あれ理解していることなのに。なんでこんなにも虚しいのだろうか……。

くっ、目がドライアイッ

「私は出会ってからのユウジ様のことは沢山知っています！」

「私はそれまでや今のユウジも知ってる！　例えばユウジはポニーテールが好きだってことも！」

うわあああああ、なぜバレたあああ！？

確かに、俺はポニテが好きだ。

しかし想像して欲しい、女性の持つ美麗な髪を一まとめにし、ヒョコヒョコその名の通り子馬のしっぽのように揺れ動く姿を！

最高に可愛らしいじゃあないか？

だからユキが好き……ということじゃない。
ユキの造る表情や人間性に惹かれていた。
だから心の中で気持ち悪い程にアピールしている訳だ！

「！　……だからあなたは、ポニーテールを」

「そっ、それは……ぐ、偶然だけど！」

「なら、私もユウジ様好みの髪型に――」

姫城さんがポケットからヘアゴムを取り出そうとすると――

「だ、だめっ！」

「――どうしてです？」

「どうして、って……わ、分からないけど！」

「分からないのにどうして止めるんです？」

「わ、私だって――」

ユキはそう言い掛ける瞬間に、俺と目が合った。
……ええと、こういうのは反応に困る。
何かしら言った方が良いのだろうか……いや言わない方が――

「……なんでもない」

「それでは――」

実は話の流れが良く分からないけども――

「姫城さん、ポニーテールにすんの？」

「はいっ！」

「確かにポニーテール好きは否定しないけど、姫城さんには、ストレートが似合ってる気がするなあ」

「！？　な、なぜですか！」

「いやさ、慣れ親しんだというか……きっと似合うんだろうけどさ、でも変えない方が姫城さんらしさがある、と俺は思うぜ？」

このポニテの件どっかのラノベで読んだことあるけども……盗作してないよね？　ゲームスタッフ盗作してないよね！

「！　ユ、ユウジ様っ！」

「ま、ありのままの姫城さんで、な？」

……うん、これはこれで恥ずかしい台詞だな。

「ユウジ様っ！　あ、あああありがとうございます！」

抱きつかんばかりに身を乗り出す姫城さん。

……表現はどうにしろ、素直にそう思っているから仕方ない。

「……」

嬉しいのか頬を緩め顔を紅潮させる姫城さんを裏腹に、ユキは――

「――――」

無表情だった。いままでなら何かしらのリアクションが合ったにも関わらずだ。

姫城さんへのセクハラ（誤解）事件、その際に俺が姫城さんの胸から手を離した時の表情にそこはかとなく似ていた。

俺が今、姫城さんの髪を褒めた途端の事だった。

ユキには表情が無かった。……いや有っても読み取れはしなかった。様々な思いがめぐっているのかもしれないし、何も無いのかもしれない。しかし、今の俺二番煎じ何も分からない。

「――分かんないや」

そう一言。たった一言なのに、ここ周辺の空気は凍り付く。

ユキさんを初めとして、姫城さんは顔を引き締めると同時に俺を凝視していた。

先ほどから中に入れないユイとマサヒロは無言で事態の推移を見守る。

それで俺は――

「さ、さあ！　昼休み終わっちまうし昼食を食べようさあ！」

完全傍観者、蚊帳の外だったユイが口を開き、凍り付いた空気を解かしていく。

ありがとな、ユイ。

俺はこんな時……こんな時じゃなくても動けない最低野郎だ。

本当に情けない。

「だ、だな！　時間も少ないし！」

「う、うん！　ちょっと私変だったみたい。　頂こうかなっ！」

「……ユウジ様？」

「お、おう食おうぜー！　それと、今日からよろしくな！」

「は、はいっ！」

少しずつ空気は解けていく。それでも、俺の中にわだかまりが出来てしまった気がする。……この先どうなるのか予想もつかない。

言えるのは、決して望んでなどいない。俺を中心に日常が回りはじめた――っというだけだった。

第125話　√1－30　※独占禁止法は適応されませんでした。

ということで、練習開始。

各自更衣室で体操着に着替えてグラウンドに集合。

ちなみに本校は後片付けさえすれば、他部活の邪魔にさえならなければグラウンドの使用が自由である。

そしてグラウンドにいざ出てみると、体育祭に備えて熱心に練習をする他クラスの方々が。

「姫城さん、これでいいんだよな？」

ポケットから取り出すのは、白色の幅5センチ長さ1メートルの布。

ちなみに制定品で、選択時に練習用として一ペア一本受け取った。

これを双方の脚へと結び付け、二人三脚をするのだ。

さて、まずは――

「肩を組んで走ってみようぜ」

「かかかかか肩を組むのですか？」

いや、組まないと二人三脚しようがないからな。

あ、ああ。もしかして身長差が少しある――」

「いえ！　実際にや、やってみましょう！」

「いいのか？　じ、じゃあ俺の隣に――」

プシャッ

「！？　姫城さん、鼻血鼻血！」

「はぁ、はぁい……なんか緊張して」

「ティッシュ持って……ないっ」

「上を向いていれば、大丈夫です」

「それはヒロインとして……女の子としていかがなものか――仕方ない、保健室行くぞ！」

「ええ！　大丈夫ですよ！」

「歩けるな？　……いや、あまり動かさない方がいいな」

「ええ！　ええっ？」

「よいしょっと」

「！？　ユユユユウジ様っ！？」

……俺は姫城を持ち上げる。片手を膝に片手を首に――これは俗に言う。

「（お姫さま抱っこ？）」

勢いで持ち上げちまったが、いいのかコレ！？

「は、はわっ……」

彼女の顔はまさに赤く茹であがっていた。……恥ずかしいよな。

だが、しかし姫城さんの鼻血も止めないといけないし――ウダウダ言ってられねぇ！

そうして俺は保健室へと向かう――

……抱き抱えてから放たれる血の量が増した気がするのは何故だろう。

そしてユウジと入れ違いで――

「もぉーユイおそい！」

「すまぬ、さらしが外れてしまってな」

「お前……いつもそんなもの付けてんのか」

ユキ、ユイ、マサヒロの三人が体操着姿でやってきました。三人も練習するのですかね？

「まあぬ！　他にはヌーブラに見せ掛けたスライムとかパッドだけとかビキニアーマーやおっ●いアーマーなどを――」

「ユ、ユイ？　付けてて恥ずかしくない……？」

「いや、特に何も！　一番危なかったのは穿いて――」

「ユイさ、もーいいから。満足だから！」

「そうか？　ならば止めておこう」

「「はぁ」」

「あれ？　そういえばユウジは？」

「ユウジの野郎……姫城さんをどこかに誘い込んでイチャイチャとかやってねぇだろうな」

「！　どういうこと、マサヒロくん！？」

「いやマサヒロ、ユウジがではなく姫城さんからだろう。ユウジがそんなこと出来る程に肝が座っていると思うか？」

「まったくだな。出来るはすがない。……認めたくはないが姫城さんからだな。姫城さんのユウジを見る目は何か違う」

「……そうなんだ。そう……だよね」

「ぬふふ、頑張りなさい少女よ」

「な、なにをユイ！」

「ユウジげったーちゃんす！」

「！」

「いいよな、ユウジは。より取り見取りの掴み取り、選び放題パケ

放題だもんな……」

「ああ、アタシとしては羨ましい限りだぜ……」

「お前も一応女だろうに」

「一応ではない、この喋り方や容姿を見れば――一目瞭然だろうに」

「……なら眼鏡を外せや」

「断る、この眼鏡は命の前に大切だ！」

「そこまでかよ！」

「これを付けなくなった暁には……二十四時間以内に見られた人全員まとめて道連れにして爆発する！」

「物騒な話だなあオイ！」

ところ変わって保健室です。

保健室で放出され続ける鼻からの出血を止める処置を保険医にしてもらい、保健室を出る。

「大丈夫か？　姫城さん？」

「大丈夫でし」

……鼻に詰め物をしているせいで鼻声になり、かなり痛々しい。

「肩が触れただけなんだが……俺、何か悪いことしたのか？」

「違うんです！」

「いや、もしかして体調が悪いのに――」

「ユウジ様のお肩に触れられたことに興奮したからです！」

「本当に言わせてごめんなさいっ！　マジですいやせんしたあ！」

……これは喜ぶべきなのだろう。でもゴメン、ちょっと引いた。

ま、まあこれが姫城さんスタイルだからね！　慣れなくちゃね！

「今度は大丈夫か？」

「はい！　体内の血流を操作しますので！」

「器用なこと出来んのなあ……」

「で、では」

「あ、ああ」

ブッシュッ

「姫城サーン！」

「理性には……勝てませんでした」

あー、ポケットティッシュもらっといて良かったわー

で、その後。

なんとか、慣れてもらい。布を結び付け二人で歩けるようにもなっていた。

これは革命的な一歩であり、今後に繋がる経験だった――ってなんだ、この締め方。

第１２６話　√１－３１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

この辺からは駆け足で

第１２６話　√１－３１　※独占禁止法は適応されませんでした。

後日生徒会の内日は放課後に練習を続け、俺と姫城さんとの息も信じられない程に合い始めていた。
勝てるかもしれない。そう思い始める俺が居た。

授業内での練習もクラス内でも、自画自賛だが秀でていたように思える。

「明日ですね、ユウジ様」

「ああ、勝てる。これなら勝てるさ。」

「あ、あの……」

「ん？」

「あの……もし勝てたら、ユウジ様を一回だけ呼び捨てで呼んでもいいですか？」

「ああ、いつでも呼び捨てにしても構わないって言ってるんだけどな……それに一回って」

「一回だけです。それがご褒美なんです。」

「いいぞ。で、俺も勝ったら……姫城さんのさん付けを止める！」

「ええ！　それこそ止めて良かったですのに！」

「いやあ、変えるタイミング失っちまったしな。いい機会だなと。」

「そうですか。はい、わかりました！」

「さて、お互いご褒美が出来たところで――明日は」

「勝ちましょう！」

当日。

梅雨近くなだけに延期が危惧されたが、見事なまで晴天。胸を張って予測した天気予報師を大きく嘲笑うかのように半端ない快晴となった。

学校に体操着登校ということに新鮮さを感じつつ、グラウンドには同じ服装の男女生徒が並んでいる。

それで生徒宣誓やらどーでもいい校長の話を終え、いよいよ体育祭が幕を開ける――

５０メートル走りをだらだらと終え、あっという間に個人選択の競技の時間がやってくれ――

まず俺が出場する選択競技は俺が興味本位でセレクトした「借り物競争」だ。

ルールと言えば単純なもので。

「五十メートル離れた”借り物”の書かれた紙の入った封筒目がけて走り、封筒を開き手紙に書かれた「もの」を学校内のどこからか取ってくる」というもの。

ちなみに借り物の書かれた手紙の入った封筒は人数分以上用意されておる、気に召さない場合は変更が可能となっている。
ただし、中にはダミーの手紙も混じっていて、封筒を開け手紙を開くタイムロスをしてしまう。

至極簡単な競技だが、瞬間的判断力と合計百メートルを一気に駆け抜ける脚力が試される。

「よーいどん」と空砲の銃声がスタートで、俺は帰宅部の本気を発揮する。八秒程で台へと辿り着く、そしてすかさず一つの封筒を手に取り、手紙の中身を取り出す――

「なんじゃこりゃあああああ！」

借り物内容に驚愕し、主催者の頭を少し疑う。
……いや、これはさあ。どうすれば――いいのかは分かるけども。
いいのか？　本当に？

彼女に悪い気がしてならない。

借り物は分かったので――俺は自分のクラスメイトが居る場所へと向かう。
そして、彼女の名を呼んだ――

「姫城さーん」

「は、はいっ！？」

「ちょっと来てくれる？」

「え、その、あの、ユウジ様は今競技中じゃ……？」

「そだよ……それで姫城さんが必要なんだ」

姫城さんのバックで――

「口説いてんじゃねーぞユウジ！」

「この色魔！」

「ケダモノがっ！」

「競技中じゃねえかよオラ！」

と、男子クラスメイトからの大ブーイングがプレゼントされるが受け取り拒否。姫城さんの手を引いて、線上へと出る。

「ユウジ様、手紙には一体……？」

「あ、あとで伝えたいことがあるから……」

「ユ、ユウジ様！？」

姫城さんの手を引いて、ゴールへと辿り着く。見事一着だ。

「手紙確認……証拠を提示して頂戴」

彼女に、姫城には申し訳にないが――

「俺――遠距離恋愛してる彼女が居るんだ」

「っ！！　そいつはどこに住んでいますか！？　切り殺してきますぅっ！」

「ふむ、これは演技ではなさそうだな……合格。君は一着だ」

「うがあああああああっ！？」

「姫城さん、ゴメン！　嘘だから！　彼女なんて居ないから！」

「えっ、えええええええ？」

「残念ながらフリーだ。そして借り物競争の為に嘘をついてしまった。すまん」

「ほっ……良かったです。もしそうなったらユウジ様とユウジ様の彼女もろとも切り殺すところでしたもの♪」

おおう、途端に♪を付けるほどの余裕を見せつけてきたぜ……しかし悪いことをしたな。

「借り物内容……聞かないのか？」

「えっ？　……もしかして手紙に「嫌いな人」とか「生理的受け付けない人」とか「死んで欲しい人」とかが書いてあったのですか！？」

「全部ないからっ！」

「ならいいです」

……いいのか？
まあ姫城さんがあげたものよりもかなりマシだろうけども――

借り物が「ヤンデレ」ってどうよ？

それから障害物リレー
「網が服に絡まって……あんっ」「ほーいぇーい、シャッターチャーンス」

「やだ……大きい」「そりゃ大玉転がしだからね」
「こんな大きな玉を手玉に取るのね……快感」「もう好きな解釈でどーぞ！」

「おりゃあああああハードルなんて吹っ飛ばせえええええ」「やめろおおおおお」
「なんだ、この網。メテオバーニングっ」「燃やすなあああああ、というかどっからそんなもん出したあああ！？」

――でＰＫ戦と続いていき。

「行くぜぇ、とりゃあ！」「おうふなんて速いボール……痛い、けどンキモヂイイイイ」
「ゴールに入らねえけど……ボールが相手の腹部に♪」「もっと、もっとおおおおおお」

……みんな色々な意味で順調のようで。そして遂に出番が訪れる。
靴ひもをギュッと締めなおし、二人を繋ぐ紐は結んだ。しっかりかつ丁寧に。

お互い顔を見合ってからタイミングを合わせて肩を組む。そしつ
二人で三本の脚を使って駆け出す――

「準備はいい？」

「はい。ユウジ様は？」

「オーケー」

「ではユウジ様」

「ああ、姫城さん」

「「勝つぞ！（ちましょう！）」」

よーい、バァンッ

「「――っ！」」

結果はというと、だ。
まあ――うん。

「姫城」

「ユ……ユウジ」

まあそういうことで。

この体育祭で、姫城との距離が二人三脚の結びまでな行かないが……大分。

いや、ちょっと？　結構？　なんにせよ、少なくとも二人の距離は縮まった気がするのだった。

第１２７話　√１－３２　※独占禁止法は適応されませんでした。

体育祭を明けて数日が経った。生徒会が体育祭に無関係なはずがなく、休み時間や放課後、後処理に追われていた。
そんな疲労を更に増幅させる出来事が、俺の身に起り始める――

「さて……と」

皆で仲良くメンバー登校は何も無いが、これからが勝負だ。

「……っ！」

覚悟を決めて自分の靴の入ったゲタ箱の扉を開く――

＜ガサガサガサガサガサ＞

下駄箱の許容限界を越え、溢れ出る。手紙、手紙、手紙！
一つ拾い上げると――

「へ、へぇ……ユウジって本当にモテモテなんだね……」

と、ユキさんが黒い表情を垣間見せながら笑っていた。
ユキにはその解釈しか出来ないように言ってあるが……実は全く違う。

「そんなにラブレターもらっちゃってさ……」

「はは……」

絶妙な苦笑を俺は繰り出した。

ユキにはそう伝えた。しかしその手紙の意味は１８０度違うのである。

ユキさんはこの俺が下駄箱を開け、手紙が流れ出る様子を見る度に不機嫌になる。

最近のユキはどうにも読めない。

それも純粋に怒らずに、溜めこんでいるような怒り方だからタチが悪い。

こういう場合は逆に触れないでおくことが先決な気がする。触れたら何かキレそうな勢いだからな……。

「これ拾い集めて行くからさ、ユキは先行っててくれ」

「んーん、見届ける」

怖い！　なんか怖い！

予め用意しておいたビニールに乱雑に入れ、やっと空気に触れることが出来た俺の上履きを取り出し。

「じ、じゃ……行くか」

「うん」

正直この手紙類を捨ててしまいたい。
今すぐ焼却炉があったなら放り込みたい。
塩酸ぶっかけてドロドロに溶かしたい。

……と言う程に忌嫌っているこの手紙。

え？　ラブレターなのになんでそんなにぞんざいな扱いなんだって？

は、これはラブレターなんてチャチなもんじゃねぇぜ。

呪いの手紙だ。

それも篠文ユキファンクラブ（非公式）姫城マイファンクラブ（非道式）によるものだ。

あの時、あの瞬間。姫城との練習が多数のクラスメイトに目撃され、感化されたらしい。

「ユキ様一筋だと思ったのに、このゲス野郎がああああああ」というユキさんファンクラブの逆鱗に触れてしまったらしい。

一方では「篠文狙いだと思って寛容になってやったのに、この野郎おおおおおおおお」と姫城ファンクラブの逆鱗にも触れちまった。

仕舞いには、俺を呼び捨てにした”あの時”を非公式新聞にリークされ、ついでに今までの状況も事細かに公開。

両ファンクラブ怒り狂う瞬間だった。

……そんな訳で、体育祭を明けてから呪いの手紙をたくさん頂い

ている。
ユキや姫城に余計な心配はかけたくない為、この手紙類は「ラブレター」と称している。

その称した名を聞いて姫城がブチ切れるかと思いきや「私も混ぜます！」と何故か意欲を示してきた（一応理由付けして断る）
それでユキはというと――この手紙を目にする度に、何か”黒いもの”を覚醒させてしまう。さてどうしたものか……

こっそり校舎裏のゴミ捨て場に全部廃棄するところまで戦いは終わらない。

ちなみに手紙を何枚が読んだのだが……そりゃあもう狂気染みて寒気がして鳥肌がたった。
いやだってさ……「ユキへの愛をＢ４サイズの手紙に3枚構成で書き綴り、残り3枚で俺への恨みなどを綴る」という狂気を感じる一品だった。
これは、ユキや姫城には見せられない。と思い、仕方なしにこの手紙の正体を隠していた。

……この判断、正しいよな？

そういえば、たまに鋭利な金属の何かが現れることがある。手紙と一緒に雪崩れているので、そこのところは注意しておかないといけない。
他にも瓶入りの臭素とかペットボトルに入れて容器ごと溶け始めた塩酸とか――
まったくシャレにならないものも混ざっている。

これはもはや戦争だった。

そして、この1対超複数との戦いに勝利する自信がありません。

正直……助けて下さい（泣）

番外０３話　４番外１－２　ザ・生徒会（前書き）

＜注意？

この番外編は内輪・自虐ネタを数多く含みます。　そして一種の総集編に近い何かです。
そして、「スベってる」ということがほぼ確実に断言出来ます。

もはや読むことが時間の浪費かつ苦痛かもしれませんが、それでも読むというなら止めはしません。
ということで、しばらくの間本編はお休み……しませんが番外編１「生徒会編」をお楽しみ……楽しめるかどうかは疑問ですけど。

ええと、お楽しみください。

番外０３話　４番外１－２　ザ・生徒会

「生徒会編、続きよ！」

どうもナレーターです。前回は居ませんでしたが今回からナレーションというか、生徒会役員二人のお相手をあせて頂きます。
（まぁ、大半はサボりますけどね）

「ああ、ナレーターさんが最初から投げやりになってるわ！？」

そりゃ、こんな夜中に学校に呼び出されてですもん。

「いや、ナレーターさんって基本録画されたものをナレーションしてるのよね？」

いいえ、リアルタイム版と録画版の二つを兼用してるの。

「なにそのテレビ番組にみたいな使い分け」

それで今日はリアルタイム版として、この学校に呼び出されてこの学校のどこかでナレーションしてる……はず。

「不明確なの！？」

「ねぇねぇチサ、さっきから誰と話してるの？」

あ、私の声ってそういえば書記さんにしか聞こえなかったですね。

「……ええと、いつ私があなたと話せると提示したのかしら。実際話せてるけど」

……ああ！　ごめんなさい、もうひとつの世界では話せているもので、つい。

「地味に気になること言うわね！　ナレーターさん！」

「だからチサ……ナレータ？　って誰？」

「私だけに聞こえる声の人なの」

「ゆ、幽霊！　チサって霊能者だったの！？」

「ち、違うわ！　人の心を読むことが出来て、天の声が聞こえるの！」

「意味が分からないよ！」

ああ、この状態だと話がしにくいですね。書記さん書記さん、パソコン付けて。

「え、ええ……分かったわ」

テンテテテン♪（ウィンド●ズの起動音）

ふ、古い起動音ですね……それでインターネットブラウザを起動して。

「なんか指示されるが癪だけど、仕方ないわね」

それで、ツ●ッターに行ってください。　そしてアカウントで「narenaresyo」と検索して下さい。

「ここに来てツ●ッター！？」

ええ、書き込みますから。

「分かったわ……はい」

『ナレーター書き込みなう』

「……」

『NARE・N　みえてる？』

「え、ええ（本当にリアルタイムなのね）」

『じゃあ始めましょう』

「えっ、これがなれーたーさん？」

「そうよアスちゃん、この学校の何処からか送信されてるらしいわ」

「ここに来たら手っ取り早い気がするんだけど……」

『こ、こまけえこたあいいんだよ！』

「ナレーターさん！？　キャラおかしくなってる」

『いや、居るじゃないですか。　メールとか文章体になると途端にキャラ変わる人』

「いや、ナレーターさんはもう変わるとか言うレベルでなくて……豹変」

『あらま、失礼な！』

「それも違う！」

『注文が多いですね。私は注文の多い料理店など来た覚えはないですよ？』

「……ええと、仮にも今までツッコミやってた人よね？」

『はい、でも最近はボケの方が性に合ってることに気付きました』

「気付かないでよ！　これじゃこの中でツッコむのは必然的に私になるじゃない！」

『はい、がんばってください』

「……ええと、色々グダグダしてたがけど、再開するわね」

「わーい」

『わぁーい』

「……それでは”クソゲヱの教えてQ&A”のコーナー！」

「おー……ってクソゲエって何？」

『この小説のタイトルです』

「この……小説？」

『今あなた達がこうして話している世界……それはゲームを舞台とした小説なんです！』

「な、なんだってー！」

「……私は知っていたけど、かなりぶっちゃけたわね」

『そういえばもう一つの世界もそうですけど、書記さんはなんでそうもメタなところまで分かっているんですか？』

「え！　ええと、そうね……女のカンね」

『んな訳ないだろー！』

「ナレーターさんのツッコミがかなり鈍ってる！？」

『まぁ、どうせアイツとの信通があるからですよね？　どうせ。』

「アイツって……まぁ、そうだけど」

「あのー、私に話が見えてこないのだけど」

『ちっちゃいのはお黙り』

「ち、ちっちゃい！？」

「ナ、ナレーターさん！　なんか性格まで悪くなってません！？」

『けっ、こんな遅くまでこんなクダラナイ事に付きあわされちゃグレるってもんですよ。それにもう一つの世界と同じようなナレーションをまた――』

「ご、ごめんなさい。分かったわ（私が謝るなんて何事なの……？）」

『で、Q&Aやりますか？　回しませんか？』

「……回しま――やりましょう」

『ええと、じゃあQは書記さんやってください。　Aは――』

「Aは？」

『ゲスト呼びました。　桐で一す』

「えええええええええええ」

『どーも桐じゃ。』

「どういうことなの……」

『桐さんのテレパシーを私経由で飛ばしています』

「はぁ……もうなんというか、ツッコミしようがないわね」

『なんでやねんー』

「……」

『……しくしくスベリりました、ショックです。いいですよプーンだ。桐さんにバトンタッチしますもーんだ』

「もはや、あなた誰よ！？」

『変わったぞ、改めて桐しゃ。そして肝心のQ&A編は次回に続く！』

「続くの！？」

第１２８話　√１－３３　※独占禁止法は適応されませんでした。

６月１５日

プール開き、担当の体育教師はこの高校内でもベテランで、力技で全校中初プールを奪取したらしい。
しかし、その恩恵を受けられるのは女子のみだった。だが、男子が割りしか食っていないと言えばそうでもない。
この学校のプールはグラウンドに併設されており、教師の行き来が容易になっている。
状況確認が出来やすいように塀ではなく金網でプールは囲まれている。
と、いうことは、だ。
お分かりいただろうか？

男子から女子の水泳授業を見放題ということなんだよオオオオオ！
更に紺色で何の縁取りもされていないベーシックなスク水が指定となっている。
しかし惜しむらくは背中が大きいタイプなのだが……まあ、割り切ることとする。

正直たまらないよね。
俺はたまらない。

あの体のラインが表れる素晴らしいデザイン。
スタイルに自信のない女子側にとっては最悪のユニフォームであ

るが。
逆にスタイルが良ければ、水着がスタイルを更に引き立てる――

以下略。

で、あるからして。
スク水こそ至高の水着なのだ。

……ふふ、喋り足りないが、まあこれぐらいにしておこう。
で、このクラス女子を見てみよう――

ユキ、姫城さん、福島、愛坂は当たり前に良いとして。
委員長は実はナカナカで、ユイは体「だけ」は良い。
金沢も、美女だし。風紀委員もかなりイケるということだ。

つまりは。
このクラスはハイレベェルな訳だ！
うっひょお、早くみてえええ！

うおおおおおおおおおおおお！
すげえええええええええええ！
ええくせれんとおおおおおおお！

「おおう、ユウジのキャラが必要以上に崩壊してるぞ！？」

ん？　姫城は……体操着を着てるってことは見学か。

体操着着ててもナイスバデーなことが分かるのに惜しいなあ。
水着を忘れただけなのだろうか？　それとも体調――後で聞いてみるか。

それから姫城に聞いてみたが「体調は大丈夫です……でもちょっと」と流されてしまった。体調は特に問題無さそうだが、どこか表情は暗かった。

それからも、姫城は水泳授業を狙ったかのように休み続けた。
優等生な彼女がこのような事をするのは教師陣の疑問らしく。
体育教師も普段が良いが為に数字を落とせざるを得ない事態に頭を抱えていた。

もう一度理由を聞けば答えてくれるかもしれない。
でも、聞く気は起きなかった。本人の意志次第と俺は考え、話す時もその話題を振ることはしない。
そして、何も分からないまま、期末テスト勉強、テストを終え、夏休みを迎えるのだった。

第１２９話　√１－３４　※独占禁止法は適応されませんでした。

夏だ！　夏休みだ！　暑さとともに襲来する長期休暇だ！
建前上では「暑さを凌ぐ為に真夏を中心に休暇を設定」なのだが……先生方が授業やるのが面倒なのもあるだろうに。
まあ恩恵は俺らに来るし、何も言うつもりはないけどさ。

今年はいつものメンバーに美少女軍団が諸の事情により参入した。
これで夏休みを適当に過ごす選択肢は完全消滅したと言っていい。

何故ならば、この夏が俺のピークである可能性が捨てきれないからだ。
ということで夏をエンジョイすべく思考を開始したのだが、ボロい上に必要以上のやかましさを披露するクーラーはなかなか本気を出してくれない。
あだ名に頑固オヤジとも付けたらいいほどに頑なに部屋を冷やすのを拒む。

ということで「外よりマシ」レベルの暑さが支配する自室に俺はおり。
この劣悪な環境で思考する余裕などなし。
夏休み計画よりも使えないクーラーに怒りを溜めていたりする。

……１階に下りればそこはオアシスだったりするのが世の中というものがよく出来ていることを痛感させられる。

「電気代節約して倒れちゃったら元も子もないんだよ！」

という姉貴の配慮によりクーラーが絶賛稼働中。
おそらく桐などが涼しい顔してを大味のドキュメンタリーなどを鑑賞してるに違いない。

俺はこの計画が主に桐に、伏兵に姉貴に。
あまり知られたくが無いが為にあっつい部屋に入りこんでいるである。
ちなみにユイには考えてもらっているので除外。
そしてホニさんは可愛いので除く。

暑さの中で色々考えていると、やはり思い浮かばないものだ。
うーむ……

「ユウジー」

ダダンダダンという雑なノック音とユキの声がドア越しに聞こえる。
ドアに向かってカギを開けて――

「ユウジ、海に行こう」

……なんともグッジョッブな提案に俺は即承諾した。
考えてもみようか。
暑さに悩まされている最中に、夏休み限定イベントこと海水浴。
太陽光線降り注ぐ真夏の地上で許された贈り物。

海だ。

水着という爽やかかつ開放的な衣類を身に付け海へと飛び込めば、最高に気持ちのよいことだろう。

更に目玉ポイントは美少女勢だ。
なんというサービス回。アニメにありがちな水着回の作画が悪いというジンクスを破壊する。
なにせ、皆が美少女なのだからな。
何を着せても似合いそうな女子勢なだけに期待は右肩上がりのごとく膨らんでいく。

「楽しみだーなー」

「ああ、全面的に賛同しておこう」

「今回ばかしは見事なまでなナイスアイディアだな、ユイ」

「へへ、アタシがアニメを何本見たと思っている」

「流石ユイさん、格が違う！」

「のほほ、崇めるがいいさ！」

「ははー」

「素直！」

ということで、海水浴決定致しました。
じゃあ今からメンバーを呼び集めるとしますかねー

第１３０話　√１－３５　※独占禁止法は適応されませんでした。

「海だ。」

風に乗って漂う磯の香りと、空から照りつける夏の太陽の下。
水着姿の男女が砂浜ではしゃぐ姿がみられる――
ということで海に来ました。そう、あの海です。駅から歩いて１０分で学校から歩いて５分な海です。
この町は海、山と見事なまでに揃ったご都合主義、箱庭状態な町な訳だ、
現地集合で、各それぞれ水着を着用してから来ることを条件にユイと俺が企画したのだ。

一応海の家もあれば着替えスペースもあるものの、着替えスペースは混雑するので避けたい。
ということで各自着て貰ってから、ここによこすよう連絡した。
……まぁ、着用した上にＴシャツやらズボンやらスカートやら履くのは自由って言ってあるし、そのまんま水着で来る人は居ないだろう――

「来たぜー！」

ちょっとした住宅街を抜けて駆けてきたのは、スクール水着姿のユイ――

「まずはお前かよ！」

居たよ！　確かに自由って言ったけど、するのかよ！

「ぬわ！　アタシが二番乗りじゃいけなかったのか！」

「いやいや……その姿で家から来たのか？」

「もちろん！　最初は全裸の予定だった」

「今すぐ捕まれ」

おいおい露出狂かよ……しかしスク水とは誰も選ばないチョイスだな。

アニメで良く言う「水着買うお金ないんだ……」的なシチュエーションではあるまいし。

ただ「買うのが面倒」だったり「選ぶのが面倒」だったりしたんじゃないかとあらかた推測しておく。

「……そう言いつつも、その口元の涎はなんなんだい？」

「くっ……！」

口元を拭うと確かな水気。

「アタシのこの水着に欲情したか？　それともアタシに――」

「水着です」

「……そうきっぱり言われると、なんか複雑だぬ」

「へー、お前に乙女心的な繊細なもの持ち合わせてたんだ」

「いくらなんでも失礼過ぎないかそれはっ！　ユウジ！」

「ウソウソ、お前スタイルは良いから似合ってる似合ってる」

「そ、そうなのか！？　うん、いやまぁ、どうも……」

なんかユイがちょっと照れていた。うん、新鮮。

「本当にさ、その眼鏡――って、その眼鏡かけてまま入るのか？」

「いや、ちゃんとゴーグルは持っている」

「ゴーグルを付ければ、お前の素顔見れるかもしれんな」

「はっはっは！　ぬかりはない！　渦巻き模様の入ったゴーグルを持ち合わせている」

「何処で売ってんだよんなもん！」

パーティーグッズ業界は海部門へも進出したのか……色々恐るべし。

「それで、アタシが何故この水着を着てきたか分かるか？」

「いいや？」

「そのほか家にある水着はマイクロビキニにスレンダーショット、穴あき――」

「なるほどな、危ないものしかないな」

「そこにアタシの美貌を組み合わせたら……それはもう」

「それはもう、言葉に出来ないだろうな」

眼鏡と水着のアンバランスさで。

「ということから消去法で、これ。　と、言いたいところだけどもう一つ」

「ん？　なんだよ」

「ユウジが好きそうだなー！　って思って！」

「なななななな、何を言いなさる！　そんなことははははははは」

「ユウジは女子のプール授業の時に見惚れてたからね、スク水に」

「いや、あれは女子を見ていただけで！」

「それはどうかな……あの見る目はケモノの眼をしていたぞ」

「くっ！」

「それに実際に着てみてはっきりした……」

「いや、だから――」

「ユウジはスク水好きだと！」

「大声で言うなやぁぁぁぁぁぁぁぁ」

よりにもよって、そこ大声かよ！　なにその最悪なチョイス！

すると、後ろから「ドサッ」という何か落ちた音が――

「ユウジ様……そうなのですか？」

うわー、最悪だ。姫城さんに聞かれてしまった。

「着替えてきます！」とか言いだしそうだから困る。……まぁ流石にないよな。

「そうだったのですね……」

「いや、それは、えと」

どういい訳すればいいのか、まぁ確かに真実には変わりないけど、ちょっとそれは特殊な気もして――

「……うう、私にはどうすることも出来ません」

「しなくていいから！　そういえば、姫城が持っているのはクーラーバッグ？」

ホッ、どうすることもなくて良かった。そして話題逸らしに成功！

「えーと、皆さん泳ぐでしょうし。スポーツドリンクを買い込んできました」

「！　え、姫城それ重くないの？」

「大丈夫です！　いくら近くに水があるとしても油断はなりません！　水分補給は別なのです！」

「おおー」

姫城、なんというかすごい気が回っているなぁ。俺は少し高いけども海の家で済ませる予定だったからな。

「じゃあ悪いけどさっそく1本貰おうかな……いくら払えばいいか？」

「そんな！　私が勝手に買って来たんですから気にしないでください！」

「いやいや！　それは流石に悪いよ！」

「いいんです！　ユウジ様はもちろん、皆さんが倒れては意味がないですから！」

「でも……本当にいいのか？」

「……じ、じゃあユウジ様が飲んだものを一口飲ませてください！」

「えっ、いや、それはいいけど……飲みかけってこと？」

「はい、そしてユウジ様が口を付けた！」

「……ええと、それに何の意味が？」

「か、間接キスを！」

「……」

凄い間接キスを堂々と狙っているのは初めてみた。しかし、姫城が買ってくれた訳だし。これぐらいはどうってこと――

「ああ、わかった」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

「じ、じゃあ頂きます……」

ごくごく……水分が体に染み渡るようだ！　っと、っここまでにして。

「えと、はい。　姫城」

「は、はいっ！」

……あ、あれ？　なんかムショウに恥ずかしいぞ？　分かっているとはいえ、分かっているのだが。うーむ……。

「いただきます！」

彼女がペットボトルに口を付けて、ゆっくりゆっくり……飲もう

としない。
　ずっとペットボトルに口を付けたまま、顔を真っ赤にして硬直させていた。

「ユ、ユウジ様の味……」

「！」

　違うから！　それスポーツドリンクの味だから！　……とはツッコめない俺が居た。
　悦に浸る姫城を見て、なんとなく動揺してしまっている俺が怖いというか悲しいというか……。

　そしてちょびっとだけ飲むと。

「あ、ありがとうございました！」

「い、いや！　こちらこそ（？）」

　と、姫城が口を付けたペットボトルを受け取る。

「……」

　あ、あれ。　間接キスごときで、何故ここまで緊張しているのだろうか。　小学生じゃあるまいし。
　って、姫城が小学生ってことではなくて……あれ？

　いや、飲んでしまえ。

「っ」

ごくごく……？　心なしかさっきより甘く感じるな……気のせいだろうけど。

「やっほーユウジ！」

「ユウくーん」

「ユウジさーん来ました」

「ユウジ来たぞー」

「おにいちゃーん☆」

「シモノーこんばっぱー」

「ユウ、なんだかんだ来たわ」

「おっしゃ来たぜぇ！」

「下之くん来たよー」

上から。

ユキ、姉貴、マサヒロ、桐、会長、チサさん、福島、愛坂。というマサヒロ以外は美少女美女が揃いました。

いや、会長達はまさか呼んだら来るとはね……驚きっすよ。

愛坂は俺を手当した頃から仲良くなったけど、生徒会メンバーに呼びかけたら、オルリス以外来るんだもんな。

びっくりだぁよ。確かに生徒会の仕事も（触れてませんけど）こなしてるし、有る程度は馴染んできたってことかな？

「ホニって言うんだ？　下之くんの妹？」「はいっ！　神様……妹です！」

「どうチサ似合う似合う？　大人な女性に見える？」「ええ似合ってるわ、可愛いわ！　可愛らしい！」

「おっしゃ！　ユウジ、後でビーチバレーすっぞ！」「え、まぁいいけど」

早速皆は着替える……というか既に着ている水着になるためにTシャツやらを脱ぎ始める。

……ま、まぁ。　一応は女子男子分かれているけども。

ちなみにユイはスク水姿で、微妙に周囲の視線を浴びつつも準備体操をしていた。

「おまたせー、ユウくん」

「……相変わらずだな」

「ええっ！　それってどういうこと！？」

相変わらずのスタイルの良さだこと。我が姉とは思えないね！

「ど、どうかな？」

「いいと思うよ、似合ってる」

「ほんと！　へそくり溜めておいて良かったぁ」

母がダメ親のせいで姉貴が更に主婦みたくなってるし。小遣いって言ってくれませんかね？

「どう、ユウジ？」

「Ｏｈ……ピューティフル」

「ちゃ、茶化さないで！　に、似合ってる？」

「似合ってるも何も、これほどユキに合う水着はこの世にはないぜ（キリッ」

ユウジ、ウ●いです。

「そ、そう？　ちょっと肌の面積が多いからハズカシイけど」

「いいや、ユキは体綺麗なんだし！　自信持とうぜ！」

「そうかな……？」

「そうだぜ」

「良かったぁ」

「おにいちゃーん☆」

「はいはい似合ってる似合ってる」

「その返しはひどいよ、おにいちゃん！？」

「いや、だってさー」

「（他のおなごは褒められて、わしの水着は褒められんとな？）」

「（いや……だって妹褒めてどうすんだよ）」

「（姉は良いのに妹はダメなのか！　流石現代、腐りきっておる！）」

「（怒りの矛先明後日向いてるぞ……いや、それに俺ロリコンじゃないしさ）」

「（くううう）」

「まぁ、可愛らしいんじゃね？」

「！　す、素直にそう言えばいいものを」

「素直じゃなさに定評のある俺ですから。　デレるのを待ってね！」

「待てんわ！」

まぁ桐はほっとくとして、皆美女ぞろいだこと。

「うう……皆胸おっきいな……」

「どうした愛坂、胸なんか押さえて……まさか心不全！」

「心不全ならとっくに倒れてるよ！」

「じゃあ恋の病か……」

「えーとさ……」

「……！　そっかごめんな」

「全部分かったかのような顔すんな！」

「いいや、乙女心と秋の空――俺にゃあ何も分からないさ」

「なら、ほっといて！」

ちぇ、ノリ悪いな。顔を真っ赤にしてそう言ってくるので退散することとしよう。

と、そこら辺をフラついていると――

「ユウ、私はどう？

チサさんが話しかけ――ぐふぅっ！

くっ、見事なダイナマイトボディ……姉貴も相当だがチサさんも――

「あら嬉しい、ミナちゃんと同列なんて名誉あることだわ」

「え、そうなんですか？」

「そうなんですか……って、あの姿を見なさいよ」

そこに居るのは自分の姉とは信じられないようなモデルのようなスタイルを持つ姉貴の姿が。

「……確かに綺麗ですよね」

「以前生徒会宛てに某アイドルオーディションが来てね」

「え、なんでそんなもん来るんですか」

「それでミナちゃんは受けてみたのよ」

「初耳ですね」

「それで第一次審査、第二次と受かって、最終審査まで昇りつめたのよ」

「ほぁ、そりゃあすごいっすね」

姉貴がそこまでの逸材とは、知らんかったなァ。

「ところがミナちゃん、最後の最後の質問で断っちゃったの」

「姉貴何してんだよ！」

「その質問が”スキャンダルを起こさないことはもちろん、恋愛は

しないように”それでオーディションを断っちゃった訳」

「まぁ、その質問は何の変哲もないことですね」

「そのミナちゃんの断った理由がね――”私は弟が大好きなので無理です！”」

「エ……それって只の池沼――」

「”弟と恋人関係になりたいのでお断りします！”」

「なんてこと言いやがる姉貴ぃぃぃぃぃ！」

「そんなこと言っちゃえば落とすしかないでしょ？」

「そりゃあまぁ」

「きっとミナちゃんは……あなたや桐ちゃんを寂しくさせたくなかったのよ」

「そう……なんですか？」

「アイドルになったら、弟達と遊んだり話したりする時間なんてないでしょ？」

「そう……ですね」

「だから理由付けの真偽はどうあれ、断ったのよ」

「姉貴が……」

姉貴もやっぱり俺達のこと心配してくれてるんだな……

「って、そういえば待ってください。　そもそも姉貴は何で受けたんです？」

「ああ、ミナちゃん含めて生徒会メンバー全員が参加したの……アスちゃんが勝手に申請してね。」

「会長かよ戦犯！」

「それでアスちゃんは身長制限に引っかかってフィードアウト」

「悲しい……最期ですね」

「私はミナちゃんが断っても選考に勝ち残ってアイドルになったんだけど……」

「ええ！　チサさんアイドルだったんですか！」

「元、ね」

「元？」

「アイドル活動を始めたのはいいものの……間違ってアイドル事務所のパソコンハッキングしちゃって」

「間違ってするもんなんですか！？」

「目障りなライバルの情報書き換えをしようとしたら……見つかっ

ちゃってね、そのまま解雇されちゃった☆」

「もう意図的じゃないですか」

「く、あの時は不覚だったわ……まさかあのタイミングでイカタコウィルスとか」

「すっごい時事ネタっすね！」

「まぁそんなところよ」

「ま、まぁ姉貴の凄さは分かりました」

「こんな暑い中で立ち話させて悪かったわね、私は今からアスちゃん愛でてくるわ」

「は、はぁ。　行ってらっしゃい？」

「行ってくるわ！　アスちゃぁんっ」

「……」

なんだったんだ？　チサさん。

とりあえず何か姉貴で知らないことが教えてもらったし、良かったかな。

みんな海に飛び込み始めてるし……よっしゃ、俺も行ってくるかな！

第131話　√1－36　※独占禁止法は適応されませんでした。

「いぃやっほーい！」

バッシャーン。飛び散る波しぶきがなんとも涼しい。

「ユウジー、パスッ！」

目の前に現れるのは某ピンク色した生命体な柄のビーチボール。

「あああ、よっと」

とっさに来たボールをなんとか回す。

「ナイスパスァ、ユウジ殿下」

誰が殿下だ。このボールパスはユキ、ユイ、マサヒロでやっていたようで、出遅れた俺がそこに入った形だ。

「ユイー、パスパス」

「喰らえマサヒロっ」

「えぇー、なんでー！」

ボスッと顔面にビーチボールが当たる音が響く。

「ぶふっ、マサヒロどしたー？」

「マサヒロくん、何してんのー？」

「ぬはは、これほどのボールを受け止めることも出来ぬとは……この軟弱者がッ！」

「お前の投げたボールだろうが！　てか水上でシュート打つなや！」

なんともにぎやかな光景だ。こういう風に外ではしゃぐのも悪くないな……てか、ユキと遊べるのが嬉しいぜ！

……ユキも胸あるなー、ユイもあるし。　無いのは――

「なんでこっち見た！？」

浮輪で浮きながらリラックスしてる愛坂を見たけど、特に意味はないぞ。うん。

「そういえば姉貴は何してんだろ……」

「ユウくーん、海の家のおじさんにおまけして貰っちゃったー」

姉貴の声に振り返ると……姉貴は有る場所をとにかく揺らして走ってきた。見ちゃだめだ見ちゃだめだ見ちゃだめだ。

なんというか、姉貴が物凄く誘惑な体つきで少しばかりとはいえ悶々としてしまったのは弟としてやってはいけないことな気がする。

視線を逸らして手元を見る、おぼんに乗った大量のかき氷――

「おお！」

「皆で食べよー」

『はーい』

砂浜とじゃれ合う会長を嬉しそうに見守るチサさんに「向かい岸まで泳いできたぜ！」という福島……向こう岸？　ここら岸なんか見えないんだけども。

バレーしていた俺達と、プカプカ浮いてた愛坂が姉貴のかき氷に反応し、集まって来る。

各自姉貴のおぼんから好きな味を取って行くと、さっそく食べ始め。

「フクシマサーン、かき氷競争シマセンカ？」「おう、ユイか！いいぞ、やろうぜ！」とか

「アスちゃん、あーん」「あーんもぐもぐ……ちべたい、でも美味しい」「アスちゃん可愛い！」や

「ユウジ、先食べてるよー」「下之くんも早くねー！」

「ユウくん、ちょっとこれお願いできる？」

渡されたのは二つのかき氷。一つは貰っていない俺として、もう一つは……そういえば、姫城の姿が見えないな。

来た時にスポーツドリンク貰ったし、居るはずなんだけど……もしかして。

「これって姫城の分？」

「うん、水着忘れちゃったらしくて荷物当番任せっきりにしちゃったんだよね、悪いと思ったんだけど……だからユウくん持っててくれる？」

「いや、いいけど……アイツ、水着忘れてたのか」

「んー、でもユウくんと会いたかったから！　って言ってたから、ユウくん行ってあげて？」

「わかったー。じゃ行ってくるわ」

「お願い」

少し歩いて、姉貴の言ったパラソルを目指す。

ここ、かな……

ちょっとした荷物が陳列し、姫城が持ってきたであろうクーラーバッグに姉貴が持ってきたであろうクーラーバッグなどが並んでいた。

その荷物の中心に、彼女は居た。

「ここに居たのか」

「ユ、ユウジ様！？」

俺がパラソルを覗くと驚いた様子をみせる姫城。ま、いきなりだったしな。

「ここで何してんだー？」

「ここで……ゆっくりしてます」

「そっかー、じゃあ、はい」

「え？」

「どっちにする？」

俺が両手に持つのは二色のかき氷。赤と緑（※きつねとたぬきでは有りません）イチゴとメロンだろう。

そう言って二つのかき氷を姫城の前に差しだす。

「え、えと……じゃあ赤で」

「んー、じゃ、はい」

「あ、ありがとうございます」

「隣、いいか？」

「は、はいっ！」

「じゃ、失礼して」

陽射しを遮断するパラソルの中は思いのほか涼しかった。

そしてそんなパラソルの中に姫城は体育座りで座っていた――私服姿で。

「姉貴から聞いたけど、水着忘れたのか？」

「は、はい」

「本当にぃ？」

「え、えっ？」

「いや、本当ならいいんだけども」

「……」

「姫城さ、体育の授業もプールだけ入らないからさ……何かあるのかなと」

「！　見ててくれていたのですか！」

「まぁ、な。　プールの授業はいつも見学してて、ちょっと心配だったんだぞ？」

「それは、すみませんでした！」

「いや、いいんだって……今日も水着を忘れたのって――」

「……嘘です。　ごめんなさい、嘘です」

「そっかー」

「幻滅しましたか？」

「いやー、真面目な姫城がしないんだからさ……なんか事情があるんだろ？」

「……」

「ま、言いたくなければ言わなくていいからさ……それよりかき氷溶けるから食べちゃおうぜ？」

「え、えと、はい！」

二人してかき氷を食べ始める……すると。

「ユウジ様は……本当にお優しいんですね」

「んなこたあない」

「だから……きっと私は、あなたのことを――」

「……」

「こんな愛が、もっと早くに欲しかったです」

「……食べちゃおうぜ」

「はい」

二人で食べるかき氷。真夏の太陽煌めく空の下。パラソル広げて二人座って海を眺めながらかき氷。

……久方振りに食べたかき氷。溶け始めているはずなのに、何故かとても冷たく美味しく感じた。

番外０４話　番外１－３　ザ・生徒会（前書き）

手抜きサーセン

番外０４話　番外１－３　ザ・生徒会

『……まぁよい、とりあえずＱ＆Ａを始めるぞ？　いいな？』

「はぁ……はい」

『じゃあ書記さんは今文章フォルダ送るから、それを読んでね』

「ええ……ってええ！　あなたにこのパソコンのメールアドレスなんて教えていないわよ！？」

『……とりあえずはりきってどーぞ！』

「ちょっと待ちなさい！　そういうのが一番気になるんだから――」

『残念ですねー、このメールアドレスを持っているおかげで会長さんの特撮り写真を送れると思ったのに――』

「――些細なことだったようね、続けて」

『クソゲヱで疑問を持ったそんなことをお答えするＱ＆Ａコーナーじゃ！』

わーいぱちぱちぱち。

『では紅、この内容をわしに聞いてくれ』

はいはい……ええと――

「Q1、この町（藍浜町）はどこにあるんですか？」

『日本の何処かじゃ』

「初っ端からアバウトというか適当な返しね……県とかわからないものなの？」

『スタッフが口を閉ざしておってな、拷問でもしない限り口を割らぬじゃろう』

「じゃあいいわ――なんて言うと思った！？　ふふ、拷問でもなんでもしてきなさい！」

『面倒なのでわしはやらんし、やらせもしない』

「……期待させないでよ」

「Q2、この町の設定にあった「山」の描写が一切出ていないだけど……」

『肝試し会場が一応山なのでセーフ』

……有りなの？

『ありじゃ』

「Q3、この町を走る鉄道は、何鉄道何線ですか？」

『満州鉄道――』

「違うに決まってるわよね？　よりにもよってそんあ日本から見たら際どいものを――」

『横浜高速鉄道こどもの国線』

「この町一体どこにあるの！？」

『いや、茨城交通水浜線』

「……おそらくこの町は関東にありそうね」

『そうは言いきれん……関東にみせかけたパラレルワールドかもしれんぞ？』

「正直もうどうでも良くなって来たわ……」

『ほい、次のQ』

「……はいはい。　Q4、なんでギャルゲ」

『知らん！』

「その答えで堂々とし過ぎよ。　Q5、登場人物10人なのに満たないわよね？」

『クソゲーじゃからな！』

「Q6、なんでオルリスちゃんを除いたヒロインが同じクラスに集まっているの？」

『ギャルゲーじゃからな！』

「Q7、生徒会の募集期限が5月ってなぜ？」

『クソゲーじゃからな！』

「Q8、というか生徒会ってそんな甘いもんじゃないわ、なめてるの？」

『ギャルゲーじゃからな！』

「って、さっきから交互に二つの答えを返してるだけじゃない！」

『しかし事実には違いないのじゃあ』

「まぁ……そうらしいわね。　Q9、ユウジの母はなんで出てこないの？」

『ホラじゃ、よくマンガにある”両親は海外赴任中で、今僕は一人暮らしだ”的なものじゃ、おそらく話がマンネリ化してきたら出るじゃろう』

「……。　Q10．ホニ様は付いて来たとはいえ、場合によっては誘拐――」

『次じゃ』

「……はぁ。　Q11、転校生の転入理由が強引過ぎると思うわ」

『伏線じゃ』

「なんで4月なんて中途半端な時期に転入してくるのか説明出来ないわよ！　Q12、3サイズ教えて……って、はい？」

『ナレーターのならよいぞ』

『は！？　え、何勝手に進めてるんですか！』

『1・1・1じゃ』

『紙ですか私は！』

『本当は8――』

『あーあーあーあーあーっ！』

8と続く数字を見るに――へぇ、ナレーターさん胸大きそうね。

「Q13、ヒロインよりリアルキャラのユウ姉が強烈なのだけど……」

『……そう思えるのも今だけじゃろうな』

「……見事なまでに不安の種を撒き散らかしていくわね」

「Q14、シナリオはどうやって出来てるの？」

『スタッフの思いつきと、そこら辺にあったラノベじゃ』

「悲しくなるぐらいに安直。　Ｑ１５、好きなキャラはなんですか……ってなにコレ？」

『わし……かな？』

「素晴らしい自意識過剰ね。　Ｑ１６、たまに出てくるシリアスがウザイのよ」

『うるさい黙れ』

「Ｑ１７、ユウの過去に一体何があった――そこのところはまだ聞いてないわね」

『わしも知らん……きっとこれからのお楽しみなのじゃろう」

「Ｑ１８、下之家では在宅者がホニ様しかいないのに、家事全般はどうなってる？」

『描写されないだけで、お手伝いさん――という名目のメイドさんがおる』

「ええっ、そうなの！？」

『嘘じゃ』

「……そうよね（今日は桐ちゃんに振りまわされてばっかだわ）」

『洗濯物は晴れの日以外は部屋干しで、湿気ないようにエアコン付けて後はファブ●ーズらしいぞ』

「地味にリアルね」

『食事全般はユウジ姉、風呂洗いゴミ出し食卓準備はユウジが手伝っておる』

「へぇ、そうなの……ユウジは思いのほか家事に貢献してるようね」

『ユウジの家事スキルは今のところ詳しくは分からんが、実際のところどうなのじゃろうな？』

「これからの時代は家事の出来る男が生き残る時代……それが本当だとしたら、ユウやるわね」

『ちなみにわしは何もしない』

「……何かしなさいよ」

『ホニは基本家で留守番で、洗濯取り込みの他に……おっと、続きは番外編で』

「引き延ばしですか！？」

『ということで今回のQ&Aはここまでじゃ』

「……ええと、いくつか私情とどうでもいいこととか入っていた気がするのだけど」

『ない』

「……そう」

『そしてまだまだラジオは続くぞ！』

「まだ続くの！？」

第１３２話　√１－３７　※独占禁止法は適応されませんでした。

７月３１日

「夏休みだよ！　全員とまではいかなくても集合！」

「なんだマサヒロ藪から棒に……冗談言いたいだけなら電話切るぞ」

「いやいや切らんといてーな。　……で、回想シーン☆」

「いやいやいや！　何の話――」

ええと、回想シーン担当のナレーターです。
……まぁ、こんな仕事は全部私ですよねー。分かってますとも。

覚えていますでしょうか。あの”季節外れの肝試し大会”を。
マサヒロは何を言い出すかと思えば肝試しを提案しました……まだ５月だと言うのに。

そしてユウジは姫城とペアを組んで、マサヒロのトラップに目もくれないでゴールに辿りついちゃったり。
そのあとに神様と未知との遭遇して肝試し自体がグダグダになったりと――

本当に残念な出来事だったと覚えています（マサヒロが）

きっとリベンジを果たしたいのでしょうね。そうなのでしょう。プリントに印刷された”第一回”の通り、それが現在の伏線だったんですね。

と、いうことで。

「第二回！　ドキッ、トラップだらけの肝試し大会！」

「トラップ言っちゃうのかよ！」

ここはせめて美女にしようぜ……どうせユキや姫城に姉貴も呼ぶんだろうから。

「ふふふ、前回は総工費１０万円、構想１年製作３ヶ月の肝試しトラップをものの見事にスルーされてしまったんでな……」

いえ、あれの大半は電気設備の多さが問題かと思いますが。

「ああ、うん。ご愁傷さま政弘くん」

「ということで！　ユウジ、連絡頼むわ。　美少女美女集めてくれ」

「美男子はいいのか？　……お前好きだろ？」

「そんな趣味今まで片鱗さえ見せたことねぇよ！」

「じゃあ……犬？」

「嫌いじゃねぇけど、肝試しにわざわざは呼ばねぇよ！」

「それじゃ、石●森さん」

「偉人かもしれないけど、いいって！」

「……仕方ねぇな、俺の人脈で集めてやんよ！」

「おお！　頼もしい！」

「俺が伏線張ってやんよ！」

「何のだよ！」

「そしたらそいつらと結婚してやんよ！」

「素晴らしい速さで裏切られただとっ！」

「まぁ、俺の人脈マカセロ」

「マカセタ」

と、いうことで。

8月1日

「お、おま……」

「集まりました（キリッ」

「マジでお前の人脈どうなってんだよ！」

「美女揃いだろ（キリッ」

「ああ、お前は（キリッ　とさせてもいい程の人材だ」

「ユウジー、来たよー！」

ユキさんに。

「こんばんは、ユウジ様」

姫城。

「手当は任せてね！　……そして下の手当てもハァハァ」

……愛坂。

「ユウくーん！」

姉貴っ。

「ユウジさーん」

ホニさん！

「おにいやーん☆」

桐（笑）

「おおー！　トラップを破壊するぜ！」

福島ー。

「ねぇチサ……お化けって出ないよね？」

会長さん。

「どんな幽霊と会えるかしら……というか呼ぼうかしら」

チサさん……と、言ったところ。

えーと、フルキャスト？

第１３３話　√１－３８　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

３００ｐｔ達成しましたー、やったー！　こんなに読んで頂けるとは思わなんだ

第133話　√1－38　※独占禁止法は適応されませんでした。

「また……だと」

「よろしくお願いしますね、ユウジ様っ」

抽選の結果が出た。そう、またなんだ。別に悪きゃ無いけど……

ユキさん。

姫城との肝試しが決定した。いや、なんというかね、体育祭に始まって陰謀さえ感じるよ。

「じゃあ、まずはユウジ&姫城さんペアどうぞー」

「はーい」

「行ってきます！」

ちなみに抽選会場では、です。

「また姫城さんかー、ユウジと行きたかった……」「ユウジとのペアを来年まで焦らせるなんて！　神様ったらイ・ケ・ズ」

「お姉ちゃんも、ユウくんと行きたかったなー」「下之くんと行ければごく自然に……ハァハァ」

「ユウジさん、モテモテですね！　我も行きたかったなぁ」「ちぇ、ユウジのリアクション面白ぇのにな」

「ユウと行けば……色々面白そう」「大人である私がリードしようと思ったのに！」

「っくしょう……ユウジばっかモテやがって、これからが本当の地

獄だ！」

本当ユウジってモテてますよね……主人公以前にお姉さんにモテてる時点でどういうことなんでしょうね？

まぁ、マサヒロにも振り返る人がきっといますよ！　……私はまずないですけどね。

またまたその頃です。歩きだした第一陣ことユウジ姫城ペアは――

「きゃあっ」

「って、姫城。　そんなに怖いか？」

「はいっ」

「このこんにゃくが？」

「は、はい！」

「……さいですか」

えーと、現在姫城に腕をがっちりホールドされています。

しかも怖くないもので、抱きついてくるんですが……絶対こりゃ――

「わざとだろ！」

「えへへ……バレちゃいました？」

「逆に気合の入ったトラップでは怖がらないのに、そういう安っぽいもので怖がるんだよ！？」

「……それは、私がタイミングを図るのが苦手だから仕方ないのです」

「いいのかなー」

なんか、やっぱり草むらからシクシク泣き声聞こえるし……はぁ。ごめん、俺はこういうのにもともと強いし、姫城も強いみたいだ。

ということで、正直全く怖くな……い訳ではない。

姫城になにされるかが、正直怖い。まぁ、何もないとは思うけど。にしても女の子が怖がらないってのもなんというか……

「姫城は怖いものとかないのか？」

「ありますよ」

「へぇ、こういうお化け関係？」

「いえ、そういうのでは」

「じゃあ？」

「ユウジ様が……私の隣から居なくなってしまうことです」

「っ！」

やばい、ちょっとドキッとした。こういう台詞をナチュラルに吐くから困る。

……ナチュラルかどうかは分からないけども、せめてもそう捉えておきたい。

「さ、早いとこ終わらせちゃうか」

「……そうですね、でも」

「どした？」

「ユウジ様と、こうして二人で居る時間が長ければ長いほど、私は幸せです」

「っ！？」

うおーい、そういうこと凄い嬉しそうな顔で言わんといてくれ。マジでドキドキするからさ。

「で、でも後ろが詰まっちゃうとマズイし……少しゆっくり歩いてからは、ペース早めようか」

「はいっ！」

……危ない危ない。

それで、ゆっくり歩いて目的地へと辿りつく。その頃にはすこし薄暗かった程の空は完全に漆黒へと変わり果てていた。
目的地は――神石前。

「懐かしいな」

「そうですね……ここでホニさんと出会ったんでしたっけ」

「ああ、びっくりした」

「あの時は……ごめんなさい」

「え、なんで謝んの？」

「ホニさんがユウジ様の家に住むと聞き、追い出せなどと言ってしまって……私は心が狭かったです」

「もう前のことだし、結局許してくれたんだから構わないぞ？」

「そ、そうですが……あの時、私は嫉妬してしまったんです」

「え？」

「ユウジ様と一つ屋根の下に住めるということが……心の底から羨ましかったんです」

「……」

「お姉さんも居ますし、妹さんもいますが……私、独占欲が強いで

すから。」

「まぁ……そう思っていてくれて嬉しい、かな？」

「ユウジ様にそう思ってもらえて、本当にうれしいです」

「っ」

また、彼女はそうして攻撃力高めの笑顔をつくる……本当にどうしたものか。

ここまで意識してどうすんだか。暗い中で二人というシュチエーションだからだろう。というかそうに違いない。

「さ、目的地へのお供え物も置いたし……戻るか」

「はいっ」

「……暗くなってきたから、腕掴むぞ？」

「え」

すっ――と彼女のか細い右腕を掴んだ。

「え、えええとユウジ様これぅわ!?」

「離れないようにな、腕掴ませて貰ったけど……ダメか？」

「いえいえいえ！　嬉しくて仕方ないです。本当に、今は夢でないのでしょうか？　ここまで素直に打ち明けられて、何気なく話せて」

「……もしそうなら俺も同じ夢をみていることになるな。でもこれは夢じゃないだろ？　頬引っ張ってみ」

「え、えと……いたた。そ、そうですね。夢なんかじゃないですよね、そうなんですよね？」

「ああ、そうだろな……じゃあそろそろ、だ」

「はい……夢のような時間でした」

「……ま、俺も姫城と歩けて良かったよ」

「ユウジ様……」

……なんでだろうね。本当に。さっきから何かがおかしいぞ？

「おーい、次のペア」

彼女の言う夢のような時間。それはあっという間に過ぎて行った。そんな夢の時間が終わる直前まで、俺は姫城の腕を掴み続けていたのだった。

俺は薄々感づいていたのかもしれない。ただ、素直になっていないだけで。

「あー、面白かった！」

「ユキ、お疲れー」

「楽しかった！　とっても面白かったけど……草むらからシクシク泣き声が聞こえるのはちと怖かったなぁ」

……。

『きゃあああああきゃあああああきゃあああああ！』

「姉貴の叫び声すっげぇ！？」

『うわあああああぎゃあああああああねずみいいいいいいいい』

「ユイも負けてねぇな！」

『おっしゃあああああやっと成功おおおおおおおおお』

「お前がナンバーワンだよ、マサヒロッ！」

オチはこの三人、結局途中で女二人は帰って来たという……ユイ、こういうの苦手だったんか。

第１３４話　√１－３９　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

この話は２ヵ月前から温めていたものでして、結構先の話は出来てたんですよねー

第１３４話　√１－３９　※独占禁止法は適応されませんでした。

祭りばやしの音を聞く度、改めて夏を感じさせる。

その音に惹かれるように俺は祭り会場の一つである商店街へと向かっていた。

ってか「夏祭りに行くぞゴラァ」とユイが提案してきたので誘いに乗った形だ。

ユイも何故か浴衣を着て来るそうだが……一番の期待はユキと姫城の浴衣姿に他ならない。

ワクワクし過ぎて待ち合わせ３０分前に来ちゃったぜ！　ああ楽しみだなあ！

「あ、ユウジ！」

「おお……」

ものの見事な浴衣姿に思わず感嘆の声を漏らす。

それは素晴らしいほどに似合っていて……やはり黒ポニーと浴衣の組み合わせはいいものだ。

「こんばんは、ユウジ様」

「ワォ……」

こりゃまたまた似合っていた。綺麗な着こなしはやはり美しい。

日本美人な彼女に本当に和風で華やかな浴衣がよく似合う。

……というか最近、姫城が真面目に可愛く見えてきた。最近はどうにも姫城の事が気になって仕方ない。

もしかして、俺姫城のこと――

「似合っていますでしょうか……？」

「え、ああ！　そりゃあもうバッチリ！」

「そ、そうですか！？　そうユウジ様に言って頂けると嬉しいです……」

……やっぱ可愛いなコイツ。ま、まあ！　俺はユキ一筋ですけどねっ！

「ユキも流石の着こなしだぜ！　見惚れるっ！」

ああ似合うなぁ、ユキ。素晴らしいなぁ、ユキ。

「……ありがと」

あ、ありゃ？　不機嫌でしょうか？　どういうことなのですか？

「ユキ、怒ってる？」

「……え、そんなことないよっ！　ありがと、ユウジ！」

「あ、ああ」

なんか俺はフラグ折ったのかしら。……むー。　似合っていて綺

麗には違いないのに。

「それじゃ行きましょ、ユウジ様」

「ちょっと待とうな」

「？　なぜですか？　……もしかして私じゃユウジ様に不釣り合いなのですか」

「いやいや違うぞ！？　ユイやマサヒロがまだ来てないからさっ！」

滅相もございません！　むしろ私こと平凡人間が（以下略

そりゃああんな熱狂的ファンを持っているんだからなあ。

あんだけ警告されて未だ話せているのだから、俺も図太いヤツだよ。

俺に惚れている〝という安心感から……なのか？

まぁ、それは天狗になっている証拠でも有り。

卑怯な言い訳でも有る。

「あ、そうでしたね……では少し待ちましょうか」

すると、タイミングを図ったかのように――

「きたぜー……ってうおお！？　お二人方似合いすぎ！」

「そ、そう？」

「そうですか？」

「しかし二人ともなかなか胸が大きいようで……これもアリだな」

「おーい、セクハラしてんじゃねーぞマサヒロ」

「うるせ、お前だって5月のあくる日に……触っただろ！」

「思い出させるなよ！」

ああ、あれは色々大変だった。正直あんなドタバタは避けたい…
…というか非公式新聞に目を付けらたのが痛かったな。

「……ユウジ様、構いませんよ」

「俺が構うから！　本当大丈夫だからさ！　ははははは」

「……ユウジのエッチ」

「がぁーん」

うわー、ユキさんにそんなこと言われるなんて！
これはヘコむ。ああ、ヤバイ、意気消沈してきた。

「あー……」

「ユウジ様どう致しました？」

「……じょ、冗談だってユウジ」

「マジで！」

「復活はやい！」

良かったー、マジで良かったー
このままじゃ、家に帰ってベッドの片隅で体育座りで1時間程へコむところだった。

「後はユイだな」

するとタイミングを……いや、もう狙ってるだろう。

「キタアアアアアアア、オニャノコの浴衣姿あああああああ！」

お前は一応そのオニャノコじゃねぇのかよ！　Tシャツに短パンのユイの私服姿……ん？

「そういや、お前浴衣で来るんじゃなかったのか？」

「あ、それはな。見つからなかった（泣）」

「そ、そうか……それは残念だったな」

「ううう……しかし、浴衣の儀礼にならって下着は付けてきてない！」

「いやいや！　というか私服には付けて来いよ！　実際に着てきたなら正式儀礼かもしんないけど、お前がやると何か違う気がする！」

「ユウジ……それは差別というものだ。アタシは私服でも制服でも関係ナシ下着を付けない場合がいくつかある！」

「うるせえ！　これ以上逆セクハラするなや！」

はぁはぁ……相変わらずのノリ過ぎだろ、ユイ。

「じゃあ皆揃ったところで、祭りをエンジョイするぞー！」

何故かマサヒロが指揮し始める。

「「おー」」

「人の流れが凄いから、余り離れるなよ！」

「「はーい」」

そうしていつものメンバーで歩きはじめた――

しかし5分後のことで。

「は、はぐれた……」

第１３５話　√１－４０　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ありゃー」

周辺を支配する祭りの喧騒の中で、俺は他のメンバーとはぐれてしまった。

人が絶え間なく続く波の中で、流されながらも探し始める。

「……いないなー」

電話してみっかなー……ユイでいっか。

プルルルルルプルルルルルガチャ「あ、もしもし」

「――ただいま電話にでんわ（ＣＶ．ユイ）」ガチャ、ツーツー

……やっべぇ、なんか携帯投げすてるところだったわ。

なんだよ、その残念過ぎるほどの駄洒落。それに録音サービスみたいだしよ……あいつは何やってんだ？

えーと、その頃です。

ある屋台にはトンデモナイ人だかりが出来ていました。

噂が噂を呼び、そこ周辺に人ごみが形成されていきます。

……何事ですか。　ただ私はユイをナレーションするだけなのに……！

「ふはははははは！　取れる！　取れるぞぉ！

「お客さん堪忍してください！」

「ぬはははははは！　制限などないはずだあああああ」

「他のお客さんのことを考えてくださいよォ！」

「いやあああああ！　これでこのプールの――」

「お客さーん！　大の高校生が金魚全てすくい上げる勢いでやらんといてください！」

金魚すくい。　なんとも夏祭りの定番屋台ですね。　そしてすくあげるのは……お分かりですよね？　この流れは、そうユイです。で、そんな定番屋台に大の女子高生が物凄い勢いで金魚をすくい上げています。

……もう3杯目ってどういうことですか？　話によればまだ１０分も経ってないじゃないですか！

「ぐはははははは！　心にいつも幼少の心！」

「ただ精神年齢が低いとちゃいますか！？」

「……接客がなってないな。　まってろ金魚群、今からアタシ皆救いだしてみせる！」

『おおー！』

「ほかのお客さんも関心しないでくれます！？」

「わーい、オラにたくさんの声援が来たぞ！　これは勝利間違いなし！　勝利の雄叫びをあげられるのも時間の問題！」

「……正直新手の店荒らしに、自分は悲鳴をあげたいですわ」

「まだまだ行くよー！」

『うおー！』

「ほんま堪忍してーな！」

すっごいどうでもいい事に体力使ってますね。　流石高校生、力に満ち溢れてるぅ！

……って私も立派な女子高生だった、危ない危ない。

「さってとー……探すか」

全員が集まるのは某ウォ●リーをさがすのと同等かそれ以上の難しさだな。あっちは遠望できるが、こっちは平面上にしか出来ないッ！

やってくれたぜ！　さて、どうする……ユイは残念だっとして、じゃあユキにかけてみるとしますか。

……そそそそそ、そういえばユキにかける機会ってなかなか無かったから。ししししし、新鮮だなぁ♪

ユウジキ●ッ！　ユウジキ●ョッ！

プルルルルルプルルルルルガチャ「あ、もしもし」

電話を受ける耳元に、祭りのやかまし喧騒が凄まじい音割れとなって襲撃を試みてきた……ま、負けるものか！

『はいもしまし、あっ』

ユキさん噛んだ。　おお、かわいー！　この音割れの中でも確固としたくぁいさ。さっすがユキさんだぜ！

「ユウジだぜ、今どこら辺なんだぜ」

と、一応は聞いてみるが。

『えっ、ユウジ？　ええと……綿菓子屋の前！』

「ええと、ユキ。　綿菓子屋って大体死ぬほどあるんだけど……そして俺の目の前にも綿菓子屋さんが」

『！　ユウジの目の前にも綿菓子屋さん……ホラーだね』

「すまん、違うと思うぞ！　で、ユキさん。　他に目印となるものはある？」

『うーん……この土は、くんくん。　……赤土だね』

「ますますわからん！」

ユキさんのそんなお茶目が可愛らしいですけど、今は真面目に頼みます……

『えーとね、この中で探しだすのは難しそうだから、１時間後に入

口前集合てことにしない？』

……せっかく夏祭りに来た訳で、探して時間を失うよりも楽しんだ方が良さそうだ。

「祭り終了まで2時間もあるしな。　残り1時間を皆で過ごせばいいだろー」

『じゃあ私ユイとマサヒロに連絡しとくからー、ユウジは姫城さんをお願い！』

「いやユキ、さっきユイにも電話したが出てくれなかったぜ？　一応俺がまた連絡しとくから、マサヒロを頼む」

『おっけー、じゃあ1時間後入り口でねー』

ピッ。　さてと……ユイと姫城さんか。

ユイは……と、プルルルルルプルルルルルガチャ「あ、もしもし」

「――ただい（CV.ユイ）」ガチャ、ツーツー

「使えねー」

その頃のユイは、です。

「おっちゃん！　UF●焼きそばくれ！」

「おいおいメガネのねぇちゃん！　そこまで銘柄指定は出来ねぇよ！」

「じゃあ塩焼きそば！」

「普通の屋台はソース焼きそばだぜ、ねえちゃん！」

と、後ろで行列をつく……っていない焼きそば屋で、そんな無茶な注文をしているユイ。

まぁ、店の主人も笑いながら返してるんで、悪い感じはしませんけど。

えーと、ちなみにユキも伝えておきますねー

「ユウジ、どこに居るのかなぁ……」

せっかく新しい浴衣買ったのに……ユウジにもっと見てもらいたかったかも。

来た最初に、ユウジに褒めてもらえて幸先良いと思ったんだけどなぁ……はぐれちゃったし。

……うん、でも1時間後には会えるだろうし！　それまでは――

屋台巡りしよー！

と、その前にマサヒロに電話しとこ……ってあれ？「電源が入ってない」　んー？

じゃあ、仕方ないよね。　そして今度こそ――

屋台巡りしよーっ！

「……！」

あ、あれは！　噂の「ロシアンたこ焼き　ハバネロ味」！
藍浜町商店街屋台名物の、ハバネロを蛸にも生地にも練り込んで赤くなってしまったのをカモフラージュするように、他のも赤く仕上げた珠玉の一品！
食べたい！　むしろハズレの激辛だけ食べたい！　どれだけ辛いんだろう！　食べたい！　チャレンジしたい！

「へいらっしゃいー」

「あのー……ロシアンたこ焼き、ハズレだけください！」

「いやいやお嬢さん、そういう注文はナシっすよ！」

……あれ？　ユキってこういうキャラでしたっけ？　でも……伏線あるんですか。
そうなんですか……って、ええ！　あれですか！　……ええと、それは各自思いだしてみてください。

一応マサヒロの様子は……いいですか。　いやまぁ一応。

「……みんなとはぐれちゃったなぁ、携帯の充電も切れるし。　ついてないなぁ」

……見なかったことにしましょう。で、ところ戻ってユウジです。

「……」

姫城に連絡……って、あ。

俺は大変なことを忘れていた。　そうだった。　そうだったじゃないか！

電話番号もメールアドレスも知らねぇぇっ！

どーすんだ！　1時間後終了を教えられないでどうすんだ！

絶望の淵かはどうかは分からないけども、この人だかりと通信手段ナシで八方塞がりな俺。

そんな時であった――

「ユウジ……様？」

後ろから聞こえる確かな声に、俺は反応した。

「姫城……か？」

番外０５話　番外１－４　ザ・生徒会（前書き）

手抜きで悪かったよ！　パソコンの前なら土下座でもなんでもするよ！　……あ、キーボード使用はナシね

番外０５話　番外１－４　ザ・生徒会

「えー、まだ続くらしいわ」

『続くぞ！　毎日更新したばっかりにストックが全くたまらないからな！』

「そんな本文前の”前書き”に書いておくようなことをここでサラっと言わないで！」

『”小説を読もう”限定のネタじゃな！』

「……それで、これ以上なにをするの？　もうアスちゃん寝むそうなんだけど」

「ふぁぁ……まだぁ」

『飽き始めているのう……仕方ない、そこのロリっ娘を目覚めさせとしよう』

「え、あなたが言う台詞ではない気がするわ――」

「んー？」

『葉桜飛鳥の入浴シーン写真集～』

「へ、ふぇ？　え、何事！？」

「……そんな素晴ら――けしからんものを見せるつもりね、いいわかかってきなさい」

「チサが言ってることがなんか支離滅裂な気がするんだけど！？」

『では……このまま、画像リンクを張った方がいいかの？　それとも――』

「ｚｉｐで」

「チサのキャラが崩壊してる！？　そして、さりげに私のプライバシー脅かさないでよ！」

『大丈夫じゃ』

「へ？」

『こやつは……』

「大丈夫とアスちゃん、私は個人的に使うだけだから！」

「写真を何に！？」

『それは……流石のわしでも言えんな』

「……言えないわね」

「なんで、そういう風に目を逸らすの！　おかしいよね！」

「ではまた来週～」

「こんな締め方アリなの！？」

『ふむ、文章量的には足りないのう』

「そういうことじゃないよ！」

「桐……はやくｚｉｐで送りなさい」

『急かすでない……今ならおまけも付けてやろう』

「おまけ？」

『葉桜飛鳥入浴音声じゃ』

「ｍｐ３で」

「！　も、ほんとに止めてぇ！」

『……えー、じゃあなんというか消化不良なので』

もうツイ○ター外していいよね？　じゃあ、地文で。

えー、ペンネーム”ＴｏＬ○ＶＥるる次巻まだかよ”さんからです。

「どーして、ナレーターの主演はまちまちなのですか？」

ええ……と、作者の都合です。

お次に、ペンネーム”う○い棒１０本で幸せになれる”さんより。
「クソゲーは分かるとして、リミックスってなんですか？」

ええーと、ノリです（キリッ
……と、言いたいところですが。まぁ意味はありますので首を５mぐらい長くして待っててください。

そして最後に、ペンネーム”どうせ未完”さんより。
「この作者の作品は長続きした試しがありませんよね？　これも、どうせそうなんでしょう？」

ええと……そうですね。
私としては、こう考えていますね――

さぁ？

えと、ご静聴ありがとうございました。

第136話　√1－41　※独占禁止法は適応されませんでした。

「やっと会えました……」

「あ、ああ」

探していると、まずは姫城を見つけた。
そして1時間後に入口前集合のことを伝える――

「あ、あの……」

「ん？」

「良ければ、一緒に屋台を回りませんか？」

「ああ、いいぜー」

「や、やった！」

姫城も、こんなことも言うようになったんだな……なんというか感慨深いというか。
それもこれも話すうちに親友になれたからなのだろうな。……そう思うと、素直にうれしい。

「じゃあ行くか！」

「あ」

何も言わずに、俺は姫城の腕を掴んでいた。肝試しのあの時のように。

「どこ行きたい？」

「あ、えーと……綿あめ？」

「よっしゃ行くか」

「は、はいっ」

姫城は惹かれるままだったが、少し振り返って見えた姫城の表情はとても嬉しそうだった。

……俺が勝手に腕掴んだけども、別にいいみたいだな。

「綿あめ二つ」はいよ、と店主からお金を払って受け取る。

「ほい、姫城」

「えっ、いいのですか？」

「海で飲み物も貰ったしな、気にしないでいいぞ？」

「で、でも……」

「さぁさ、溶けないうちに」

この台詞、少しデジャブだな……

「い、いただきます」

姫城は恐る恐る俺の手に持つ綿あめを受け取ると――もふもふした綿へと口を付けた。

「甘いです……」

「まぁ、そうだろな」

「ユウジ様が買ってくれたから甘さ倍増です！」

「おおげさだなー」

「もったいなくて食べれないです！」

「いや、溶けるって」

なんというか、普通に楽しい時間だ。姫城と話しているのに、こんなにもリラックスしてるのは……かつてと比べれば不思議だ。

あんなに気を使ってたが嘘のように、二人綿あめ手に持って笑いあう。

なんとも言葉に出来ない時間だ。

「じゃあ、次行くか？」

「はいっ」

屋台を廻り始める。俺はフランク買ったり、金魚すくいに孤軍奮闘した揚句に3匹どまりで泣きを見たり。

姫城の射的の上手さに驚いたり、たこ焼きを買って2人でつまん

だり――

あ、あれ？　このノリって俗に――

「デートみたいですねっ」

「ぶふっ」

思わず飲んでいたラムネを噴き出すところだった。

「だ、大丈夫ですか！？」

「い、いやダイジョブ」

あ、あれ？　本当になんでこんなにまで姫城を意識してんだ？
おかしいだろ？
俺はユキさん一筋で……い、いや姫城の笑顔を見るのが最近は楽しみに――うわ、これは一番ダメな主人公のパターン！

しかし、でも。……姫城との時間は今は凄い楽しいし、少し続いてもいいかな、とも思っていたりする。
どうしたのか、俺は。どうしたいんだ、俺は。

もしかして、俺は――

「ユウジ様？　お顔が赤いですが……大丈夫ですか？」

「いやいやいやいや！　大丈夫大丈夫だからっ！」

「そうですか？　……そういえば、あと5分で花火みたいですよ？」

「ああ、そうなのか……待ち合わせの１０分前に始まるのか。　まぁ、少し道から外れてみてみる？」

「はいっ！　ぜひ一緒にみましょう」

一緒、ねぇ……少し歩くと広場のようなものが見えてくる。そこにはベンチが並んでいて、大半が埋まっていたのだが、その一つが丁度今空いた。

空を見上げるにはうってつけの場所で、俺と姫城が座れるのには十分な３人掛けベンチだった。

「お、あそこにするか」

「はいっ」

二人腰をかけ、空を見上げる。

「今日は晴れてたからな……星が良く見えるな」

「き、綺麗ですね……」

その見上げている間は、時間が止まったようで、辺りの喧騒も気にならなくなっていた。

そして――

＜ヒュ～～～～ドォン＞

一つ目の花火が打ち上がり、辺りから歓声が聞こえる。

隣を見ると、次々上がる花火に見惚れる浴衣姿のマイが居た。

「っ」

とても、美しかった。

こんな人とデートまがいな事をしていたのかと、改めて驚く。

実は俺って、かなり幸せなんじゃないかと勘違いしてしまう。

……いや、幸せには違いないか。

5分ほど花火を堪能し、俺たちは入口を目指す。

「あと3分しかねぇ！」

「間に合いますかね？」

「少し走れるか？」

「はいっ！」

ゲタの彼女はあまり速くはしれない、それでもマイは速度を出す。

そして、俺は――

「……行くぞ」

「！」

何気なく、俺は。前触れも、予告もせずに――彼女の手を握る。

握ると、最初こそビクッと手を震わせたが――

「――お願いします」

と、柔らかな笑みを零した。

「よっしゃ」

と、祭りの喧騒を駆けて行く。

そしてユキの待つ、祭りの入り口に辿りつき――

「あ、ユウジ！　――――ッ！？」

この時夢中で気付くことはなかった。

「お待たせ」

「お待たせしました」

俺らは二人が一緒に来たことを。二人手を繋いで走ってきたことを。

この時は何も考えていなかったのだ。

「ん？　どしたユキ？」

「……え、いや！　な、なんでもないよ？」

楽しさのあまり、ユキの表情に気付くことが出来なかった。

「マサヒロに連絡付いた？」

「う、ううん」

「そっかー……一応ユイにももっかい連絡しとくか」

「うん、お願い……」

「もしもし――」

気付かなかった。これだけのことが、後の未来を大きく変えることとなる。

そして――

ある1人が深く傷つくことになることを。

楽観的でヘタレで有頂天な、今の俺は何も分かりはしなかった。

気づきさえしなければ……きっかけさえ無ければ良かったのに。

第137話　√1－42　※独占禁止法は適応されませんでした。

「姫城……ねぇ」

自室の机備え付けの事務椅子に座って、宿題のノートをシャーペンでトントンつつきながら考える。

姫城……かつては「さん」付けしていたけども、体育祭を境に呼び捨てにした。

だとしても未だ苗字で、ユキやユイやマサヒロのように名前では呼べていなかった。

「姫城……なんだっけ？」

すっげぇ情けないが……姫城の下の名前ってなんだっけなぁ。最近「ルリキャベ」の取説も発掘したし、見れば済む話なんだが……うーん。

いつか自分で言ってた気がするんだよなぁ……それも出会った初期に――

「……連想ゲームをしてみようか」

突飛押しもなく、頭に浮かんだ方法だった。関連付けて記憶してる場合はあるし、もしかしたら言っている内に何か思い出せるかもしれん。

「えー、まずは――黒髪ロング、黒、闇、病み、ヤンデレ、独占欲、敵、呪い……呪い？」

すっげぇ初期にあった気がする、呪いが関係して姫城の名前が――

「呪い、囁く、耳元で――あ」

あれは姫城と初めて昼食を共にした時のこと。

俺の弁当に姉貴の手によって描かれた「ユウジＬＯＶＥ」の文字にブラックオーラを展開していた――

『……目を覚ますと、ユウジ様は”舞、舞、舞”と私の名前を連呼しているでしょう』

「２－１０話かっ！」

なるほど、結構前だな。姫城サーンによる殺害未遂事件の少し後の事だと思うと……時の流れは思ったより早くも無いな。

まだ４カ月前のことなんだが……どうにも８ヵ月以上経った気がしてならない。

しかし良く覚えていたもんだ。ってーことは――

「舞……マイ？」

マイでいいんだよな。マイか。マイで。マイかぁ……。

「姫城舞……っ」

って、なんで俺はこんなにまで姫城舞のことをおおおおっ！？

俺は、俺は姫城のことなんてえええええええええ、なんとも思ってないんだからあああああっ！

「……自演乙」

……分かってるじゃないか、俺自身の気持ちがどこに向かっていることぐらい。

俺は、散々振りまわされて来たさ。だけども、そうだけども。

ユキも好きだった……大好きだった。隣に居ると自然と笑顔になれた。彼女の笑顔は俺には眩しかった――

けれどもそれ以上に、俺は――

「マイ」

俺はこれからは、心の中で姫城をマイと呼んでみよう。

本当の覚悟が決まるまで、まだ声に出すことはしないけども――

第１３８話　√１－４３　※独占禁止法は適応されませんでした。

九月ニ四日

「飽きた」

「は？」

「学校で勉強するのあーきーたー」

「駄々こねるな、練り潰すぞマサヒロ」

男がゴネるだけ、これほど気色悪く不愉快だとは……。

今日は2学期中間試験に向けてのテスト勉強をしていた。１週間ほど前から始め、１０月の初めのテストに向けて勉強している。

それでいて、春の中間試験・夏の期末試験と同じように授業中や成績からの担任の信頼を盾にして放課後、クラス教室をテスト期間は貸し切らせてもらっている。

たまに委員長も来るのだが、今日は来ていなかった。

来る日来ない日で法則性があるかは知らないが、どうやら週の半分ほど俺に言ってから勝手に机を借りて勉強している。

で、今日はいつものメンバーでの勉強をしている。

最近仲の良くなった、福島や愛坂も誘おうとしたが福島はメールが返って来ず失踪扱い。愛坂は「勉強嫌い」と言って断られる。

すると、だ。ちまちま……というかすごい速度で勉強を進めていたマサヒロのシャーペンが止まり――先程のようなことをほざいた。

「だってー、ずっと教室なんだぞ？」

「俺が交渉して手に入れたこの空間にケチ付けるのかよ」

担任からの信頼無ければ、この教室貸し切りなんぞ許してもらえんだろうに。

「ああ」

……はい、その発言レッドゾーン。

「”レッドカード、マサヒロ半永久的に退場”」

「え、えええええええええ」

「ということで、マサヒロばいばい」

お疲れさまでした～

「悪かった悪かったよ！」

男の癖してやすやすと土下座してやがる……なにしてんだか。

「……でも、まぁマサヒロくんの言う事も少し分かるよね」

「分かるの！？」

まさかのユキさんの擁護に少しばかりのショックを受ける俺。

……まぁ、確かに勉強以外じゃ何もすることが無い上に、同じ場

所でずうっと勉強だからな。

「じゃあ他に勉強出来る場所とかあるか？」

「そうだねー……うーん。　あっ！」

「？　そんな簡単に思いつくものなのか？」

「うん！　そして――」

すると、ユキさんは俺をズビシと指差して。

「ユウジの家！」

「えっ」

「ユウジの家か、確か居間が広かったよな？」

まぁ、６・７人は座れる程に広いですよ。

「ああ、アタ……ユウジの家は広いぞ！」

ユイ、口滑らすなコラ。

「ユウジ様の家……行ってみたいです！」

いや、あの……

「ユウジの家、行きたいなー」

だから、その。

「いやさ、姉貴に許可取ってないし――」

『明日？　いいよ？』

「……！」

電話越しのまさかの反応に驚く。……いや、それ程まさかって事ではないのだが。

『学校もお休みだし、勉強することはいいことだよ！』

「えー」

『その代わりにお姉ちゃんも混ぜてね？』

「いや、いいけどさ……」

『ご飯とか入る？』

「聞いてみる……えーと皆さん、どのタイミングで来るのでしょうか？」

「と、いうことは……」

「まぁ、姉貴は良さそうですねぇ」

「「やったー」」

「で、タイミングは？」

「お昼跨ぎが、いいかも」

「んー、じゃあ皆もそれでいいかー？」

「「はーい」」

「ちゅうことで、お昼ご飯必要かな？」

『うん、わかったー。じゃあ明日ねー』

「ああー」

プツッ。

「じゃあ、俺の家……分からない人も居るだろうから学校集合で」

「「わかったー」」

「じゃあ、今日の勉強会再開ー」

「「おおー」」

息が合っててよろしいこと。

……正直俺は何も隠すもの――あるけどさ。主にユイとか。

まぁ、まぁ！　バレないようにすりゃいいかっ！　うん、今日のうちに証拠を隠しとけば良い訳だし！

それよりも、我がクラスの美女二人が自分の家に訪れるとは――

第１３９話　√１－４４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

手抜き回サーセン

第１３９話　√１－４４　※独占禁止法は適応されませんでした。

ある程度の人の出入りが有る為に半開きにされた校門の前に私服姿の男女二人が二人――

「ユイ、大丈夫だよな？」

「むむう、抜け目はないぞ」

ユイと二人で皆の集合を待つ。大丈夫、という確認は――

「アタシ所有のエロ本はベッドの下に隠しておいた！」

「そういうことだけ言ってるんじゃねぇよ……」

「ん、じゃあなにか？　アタシの父から授かった土地の権利書なら、机の引き出しにしまってあるぞ！」

「そういうとこに隠すもんじゃねぇ！」

「アタシの眼鏡コレクションのことか。ふむ、それは金庫で厳重に保管してあるぞ」

「眼鏡と権利書の収容場所が明らかに逆だろよ！」

「いや、この眼鏡は命よりも大切だ。だからこそ厳重な金庫が必要なのだよぉ！」

「……まぁいいや、眼鏡と土地の権利書一緒に入れとけ」

「ううむ、そうしようかねえ」

というかユイ父……あれ？　再婚したから俺の父でもあるのか。
義父さん！　そういうモノは娘に持たせないでくれませんか！？

「早速第一陣だのう」

「お待たせーユウジ、ユイちゃん」

第一陣はユキさんだった。うーむ、私服姿が眩しいぜ！

「ごめんね、待たせちゃった？」

「いや、さっき来たところ」

「（嘘こけ、アタシも連れて３０分前に来てるだろうがぁ）」

「（水差すな）」

「（考えてみたらアタシは後で来ても良かったんじゃ？）」

「（いや、ユキとマサヒロは俺の家を知ってる。万が一学校の集合場所で落ちあえずにユイと遭遇したらどうな？）」

「（それは……面白いな）」

「面白かねぇよ！」

「ひゃっ！　な、なにユウジ？」

「いやゴメン、こっちの話」

「（ふふ、ざまーみろー）」

「（ガキかお前は……もしかして俺が女子誘って妬いてんの？）」

「（ば、ばかっ。んな訳ないだろぅ！）」

「（ウソだ、ウソ。大体お前に妬いて貰ってもなんも嬉しくないわ）」

「（む、それはそれで癪にさわるぬ）」

「（うるせ）」

「後はマサヒロくんと姫城さんかな？」

「ああ、愛坂も福島も来ないみたいだし」

ちなみに愛坂と福島の連絡手段は持っており、愛坂は最近話すようになったからで。

福島とは同じ生徒会役員で、実際電話に関しては体育祭準備の際に使用した。

それで二人とも電話してみたのだが、以前言った通り福島は連絡付かず、愛坂には断られたので終了。

委員長も誘うという話が出たが、住所も連絡先も知らないので万事休す。

ま、そんなところでいつものメンバーでの勉強会となった。
……姉貴が参戦してきそうな勢いだけどな。

「遅れてすみませんー」

と、言いながら駆けてくるのはマイだった。

「おお、じゃあ皆揃ったな」

「まてーい」

なんとも弱弱しいツッコミが入った、なんだなんだと後ろを見ると――

「なんだ、ただのマサヒロか」

「ただのってなんだよ！　進化した俺なら驚いたのか！？」

「ああ……透明人間に進化したならな」

「ええと、遠まわしに俺が影薄めなのをネタにしてないか？」

「しているが、何か問題でも？」

「俺にとっちゃ大問題だよ！　俺は影濃い目で居たいんだよ！」

「じゃあ黒塗りでいいな」

「色まで濃くするとは言ってねぇっ！」

……まぁ、ということで全員揃ったので。

「じゃあ行くかー」

「「はーい」」

で、経路省略。

「こ、ここだったんですね……ユウジ様のお宅は」

「ま、まあな」

……いつか知られるものだと思ったし、仕方ないよな。

「じゃあ、どぞおあがり下さい」

「「お邪魔しまーす」」

ということで、勉強会ｉｎ俺の家スタート。

番外０６話　番外１－５　ザ・生徒会

「ねぇ、前回の生徒会ラジオで番外編が終わると思った？　ねぇねぇ？（ＣＶ．ユイ）」

「うぜえええええええええ」

ちなみにユイ・ユウジの台詞はこれだけです。本当にお疲れさまでした。

某日某時、某生徒会にて――

「こんなのやってどうするんだろね？　ストック少しはあるんだし投稿すればいいのにね」

「所詮更新稼ぎよ」

「……あれ、チサ？　今の台詞完全に番外編１－１のコピペ――」

「文字数稼ぎよ！」

「……じ、じゃあチサ行くよー　せぇーの！」

『アイハマ放送局～』

（悲しいＢＧＭ）

「ええっ！？　いきなりなんでこんなに湿っぽいの！？」

「ええ……それには理由があるのよ」

「な、なんなの？」

「私たち……サブキャラだったの」

「な、なんですってー！」

「私やアスちゃんははヒロインでは無かったの……こうして脇で盛り上げるだけのモブキャラだったのよ」

「そ、そんな……って状況が読めないんだけど？」

「え？　私たち一応ゲームのキャラじゃない？」

「そんな設定初めて聞いたよ！」

「おかしいわね……言ったのはもう一つの世界の私だったようね」

「それもそれで気になるんだけど！」

「まぁ、早速放送始めましょう」

「ええ！？」

『アイハマ放送局、第二回！』

「パーソナリティは以下略」

「うわっ、えらく適当になったね」

「本日はゲストをお呼びしていますー」

「へぇー、2回もやればゲスト呼べるなんて、安い業界だね」

「アスちゃん、何か今日は黒くない？」

「そんなことないよー？」

「ということでゲストの方をご紹介――桐とナレーターです」

「前回と同じじゃない！」

「来たぞー」

来ましたー

「今日は桐ちゃんご本人登場なんだ」

「ふはは、更新を稼ぎたいと聞いてのう！」

私はなんか道づれにされました。

「では、桐アトよろしくね」

「ええ！　ここから桐ちゃん&ナレーター主導になるの！？」

「いいえアスちゃん……主導どころか独壇場になるの」

「私の来た意味何！　そして二人の時点で独断じゃないよ――」

「ええー桐じゃ。丁度主役も交代したところで」

はぁ、始めるんですか……ぶっちゃけ生徒会役員共に任せてといてじゃないですかー

「いや、このままじゃと文章が流用出来ぬからな！」

どんだけ作者グータラなんですか！

「ということで」

何しでかすんですか？

「第二期のキャラクターを呼ぶことにするかの」

ええっ！？　なに呼んでるんですかっ！　だめです、そういうのが一番だめです！

「もう呼んでしまった」

ええー……返して来て下さい。

「そんな、人を2泊3日で借りてきたレンタルビデオみたいな扱いをしおって」

借りた日数必要ありますかね!?　いいから消して下さい。

「ナレーター、お主何気に酷いことを言うな」

そういえば、何気なく話してましたが……桐でいいんですよね?
なんか適当に連れてこられたんで。

「誰がチーズじゃ」

いや言ってません。

「今脳裏に”キリ　キリキリ♪”という某チーズのCMが流れたじゃろ」

そういうローカルネタ止めません!?　分からない人には寒いだけですよ!

「この、小説自体が、既に、寒い……じゃろ?」

……否定しきれません。

「ということで第二期のキャラクターを呼ぶことにするかの」

はぁ、結局やるんですか……

「シモノユウジを生贄に捧げ、●●●●を召喚っ！」

名前に規制の入った人の為に捧げられたユウジがカワイソウ過ぎますっ！

「どうも」

なんか来た！

「なんかとはとんだご挨拶ね」

え、えとすみません。

「謝らなくていいよ……体でキチンと払ってもらうまで」

ごめんなさいすみません本当にごめんなさい。

「……謝られたらどうにも出来ない」

はぁ……（なんか微妙に真面目だなあ）

「それで桐ちゃん、自分の出番は遠く未来の２２世紀だったはずだけど？」

「年を越すどころか世紀をも超えてしまうのか！？」

「嘘よ、そんなことしてしまったら自分の寿命の半分を使ってしまうからね」

「元の寿命ゲージは一体どれだけあるんじゃ！？」

電波だ！　私こういう人図書館で借りたライトノベルで読んだことあります！

「ということでナレータさん私は●●●●。　花子でいい」

花子！？

「私のもし子供が出来たら付ける名前ね」

子供が不純すぎますっ！

「ちなみに男にね」

どうしようもないぐらいに惨い！　下手したらD●Nネームよりも酷いですよ！

「ええー、スバルとかなら男児女児両方に付けられるけど？」

時限が違うと思います。

「じゃそうね……●●と呼んで」

●●！？　これもまた声にしたら〝ピー〟なんでしょうね……

「いいえ●●は”ぎゃあああやめろおおお、そこはそこはぐわあああああ”」

たった二つの●の間にどんな情報が詰め込まれてるんですか！

「仕方ない、●×でいいよ」

記号にこだわるのですね……

「ちなみに重さは２５６．５６ＧＢ」

重さってそっちな上にたった二文字がどれだけ重いんですかっ！

「この●×だけで、弱ったノートパソコンをイチコロだぜ☆」

……スタッフが「ヤメテーヤメテー」って言ってるんで止めてください。

「……そういえば、何のために私は出てきた？」

ええと、自分が一番分かりません。

「じゃあまた眠りに就くとします……２２世紀を超えたその日まで」

ネタ引っ張りすぎですよ！　はぁはぁ……なんか疲れたんですが。

「お疲れじゃったな、わしはぷれいやーに入れておった”藍浜放送局”をノイズキャンセリング機能付きイヤホンで聴いておったからの」

え、今まで無言だったのはそういう訳なんですか！

「いやぁ、このグダグダ感がクセにもならんし、どうしようもないラジオじゃが何故か聴きたくなる、いや聞く価値もないラジオのはずがどうしてか聴いてしまう――」

クセになってますよね、絶対！　……それで今の人は？

「ああ”２０１１年３月制作開始（予）@　クソゲエリスタート！@”に出てくる予定の新キャラじゃ」

偉い遠い未来から来ましたね！

「その頃にこのクソゲエ後半が完結していればの話じゃがな」

ですよねー……それにしても特殊な娘ですね？

「いや、この作品にはそんな者しかおらん」

ええっ！？　だってユキとか――

「……それはどうかのぅ」

い、嫌な予感がします。

「ということで藍浜放送第二回は終了じゃ」

なんてブツ切りですかっ！　というかこんなコーナーだけで番組持たせるとか舐めてるとしか思えないんですが！

「……それでは、また次回じゃー」

無視しないでくださいー！

第１４０話　√１－４５　※独占禁止法は適応されませんでした。

「みんな、いらっしゃーい」

玄関でお出迎えるは姉貴……エプロン姿の。

「さあさ、突き当たったところが居間ですぜ」

「「お邪魔しまーす」」

玄関の床が来客者の靴で埋められていく、まぁドアを開くぐらいの余裕はあるけども。

なんというか……ここまで人が集まるってのは今まで無かったなぁ。

で、そんなことよりも――

「ちょっと姉貴サン」

「なにユウくん？」

皆と同じく居間に向かおうとしたところで引き留める。

「いや姉貴……そのエプロン姿、流石に料理をつくるのには早いんじゃ……」

「ううん、勉強会に参加してるとこから直ぐに料理出来るようにしたいからねー」

「なにもそこまで……」

「ユウくんとの勉強会楽しみだったんだもん♪」

「……」

そーすか。そういえば姉貴も勉強会混ぜてくれって言ってしましたね。

「うん、楽しみー」

「じゃ、皆も待っていることだし、行くか」

で、皆追って居間に行くことにするかねー

向かうと各自持ってきた教材を広い居間の卓袱台に広げ――ることは出来ないので。

来客用として埃を被っていた長テーブルを物置から引きずり出し、セッティングした。

長テーブルは片側横4人程縦2人程の大きさがあるので、今回のメンバー人数では余裕だった。

「ちょっとお茶入れてくるねー」

そんで、姉貴は「皆冷たい麦茶飲める？」と皆に聞く。

「あ、お気遣いすみません」「じゃあお願いしようかなー」「麦茶で！」「出来れば沢庵の入った――」

「うん！　じゃあ、待っててねー」「「はーい」」と言って玄関に向かった。

そうして各自教材を広げ……教材？

「おーい、ユイそれは何だー？」

「あー、保健の教材だ（キリッ」

広げらていたのは大胆というか変態というか……二次元系エロ雑誌だった。

もちろんユイ意外の女子勢は一斉にユイ辺りから視線を逸らす、そりゃああからさまに、仕方ないだろうけど。

「キメられたと思ったら大間違いだぞ！　このセクハラ野郎！」

「ははー、野郎ではない。これでも女だ」

「これでもって自分で言うか！？　てかそういうのは隠しとくって言ってたじゃねぇか！」

ベッド下とかすげえテンプレートなところに隠すとか言ってただろう！

「えー……ってユウジいいのか？」

「……なにがだ？」

すると微妙に明後日の方向を向いているマイが――

「あのー……隠しとくって言ってた、ってユウジ様はそこまで何故関知しているのですか？」

「あ」

「そ、そうだよ！　もしかしてユウジ……」

「いや、そのな」

マズい。バレる。これはヤバい。

確かに変なニュアンスというかなんというか、まるでユイと近くに居て親密なような！

とにかく誤解されかねない、発言だったことは分かる。とりあえずはピンチだな……

どうか、どうか気付かないでくれ！

「「ユイちゃんにその雑誌を読む為に持ってこさせたんだね（ですね）！？」」

「そっちかー！」

心の中でホッっとする俺が――っていやいやいや！

「男のですからね……」

「男の子だもんね」

「ユウジお前……」

「誤解だ！　いや誤解じゃない！　いややっぱり誤解――」

トントン、と誰かに肩を叩かれ――

「なぁ……吹っ切ろうぜ」

なんとも爽やかな（眼鏡をかけていても分かるほどの）表情をするユイの姿が――

「お前のせいだろうがあああああ」

こうして勉強会の始まりは波乱の幕開けだった。

……俺がユイにそんなことをさせていたということなんて屈辱意外の何ものでもないけれども。

バレるよりはマシだと思い、悔しさに唇を噛みしめる俺だった。

第１４１話　√１－４６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ここらから

第１４１話　√１－４６　※独占禁止法は適応されませんでした。

勉強会は進む。

基本的には学校での勉強会の人配置と同じで。

相変わらずマイの教えてくれる数学はわかりやすい。

自分なりに努力はしたけども、どうしても補えない部分がいくつかある。

マイってやっぱり切り替えが上手いんだろうな……すごいわ。

いつもアピールこそしてくれど、少し控え目な彼女とはまた違う。

真剣に、俺の事を考えて……彼女は俺へと勉強を教えてくれている。

だから俺は――

「おっ、姫城落ちたぞ」

教えている内にマイは結構夢中になる。

それほど真剣に集中して教えてくれるのはなんとも感謝しなければならない。

それでいいて、今回は消しゴムを軽く肘で飛ばしてしまい――

「あっ、すみません――」

俺は拾おうとした、その瞬間に――

「「あ」」

彼女も手を伸ばしていたが故に、俺とマイの手が重なった。
なんとも少女漫画からラブコメ漫画まで使い古されたテンプレートな出来事だ。
なんだが……な。

「あああ、すまん！」

「いえ！　大丈夫です！　お気遣いありがとうございます！（よしっ）」

正直俺は動揺しまくった。というか意識していたせいで過剰反応してしまった。
俺と手が触れられたことによるものか、ガッツポーズをしているマイは平常運行していたのだった。
しかし俺はと言えば――

「ほんと、悪い！　マイ！」

「ええと、いんですって――！？」

その時の彼女の顔はなんとも衝撃を受けた表情をつくる。
さっきの彼女は何処へやらで、少し動揺した様子で顔を紅潮させている。

「え、えと……ユウジ様？」

「あ、あっ、なんだ？　姫城」

「姫城――ああ、はい、なんでも……ないです（聞き間違え……かぁ）」

「？」

というかこんなことで心揺さぶれまくってる俺カッコ悪！

落ちつけー、落ちつけー……平常心、平常心――

「あのー、どうかしましたか？」

「！？」

気付くと、俺の顔を覗きこむマイがががががが。

「ほんと、俺は大丈夫！　うん、大丈夫！」

「……そうですか？　顔が赤い気がするのですが……もしかして体調を崩されて！」

「いや、ダイジョブ。　本当にさ――」

「もしかして熱が――」

このシュチエーションは……ヤバイ、今の俺じゃ無理だ！

「す、すまん！　ちょっと部屋に忘れ物したわ！　ちょっと行ってくる！」

俺は疾風のごとく、もの凄いダッシュして取りに行くものなんて無いのにもかかわらず廊下へ出て階段を駆け上がった――

えーと、最近任せきりのナレーション役のユウジが逃亡したので本業の私が状況説明を。

「どうしたのでしょう？　ユウジ様」

純粋に疑問を浮かべる姫城に対して――

「ユウジ……」

儚くユウジの名前を呼び、何か痛みをこらえるかのように胸辺りの服生地を握るユキ。

離れて行く「ずっと傍に居た」幼馴染。でもこの気持ちの正体の全貌を理解出来てはいません。

ただ、胸が痛いような苦しいような……不快で、不安な表情を浮かべています。

「（ぺろり――この味は！　……恋をしている「味」だぜ――ってふざけてる場合じゃなさそうだな）」

能天気にパロディ……で済む話ではないのは流石のユイも分かっているようで。

それに、地味にユキを応援していた訳ですからね……

「こりゃあ、もう焚きつけるかな」

ユイはグルグル眼鏡を光らせながらも、真剣な面持ちでそう呟きました。

第１４２話　√１－４７　※独占禁止法は適応されませんでした。

「……」

アタシの向かいに居るユキを見る。
ユウジが去ったあとは……痛みを堪えるような悲痛の表情をしていた。
彼女の思い悩む理由、原因をアタシは知っている。
ったく、あの野郎。

「なぁユキ殿、ユキ殿」

「……え、あ、うん？」

心此処にあらず……か。

「ユキ殿の少しお話があるのですうが」

「お話？」

「ちょっと廊下に……ふうむユウジに聴かれても困るし。ミナさん、少し物置借りていいですか？」

「え、ええ……いいけど？」

ちなみにミナさんにもアタシがここに住んでいるのは内密にして

貰っている。
ホニ様にキロリにも一応言ってあって、どうやら二人は部屋に籠っている……気を遣ってくれたのだろう。
それならば――

「じゃあユキ殿参りましょう」

「え？　え？」

と、ユキの手を引いて、階段を上がって二階の物置まで連行。
薄暗い物置を開けて、電気を付けると、扉を閉める。

「ど、どうしたの……ユイ？」

「どうしたの――って台詞はユキの方なんじゃないかな？」

聞き返す、分かんないかなあ。

「！　な、なんで？」

「最近のユキは苦しそうに見える。何かに悩んでいるようにも見える」

表情も暗いし、見てて居た堪れないね。

「そ、そんなこと……」

「ユウジのことじゃないの？」

「！　な、なんでユウジのことなんか！」

「幼馴染だよね？　それほど近くに居たんだよね？　でもユウジは――」

「聞きたくない聞きたくない聞きたくない！」

「このまま遠くに行ってしまう」

「！」

「まだ、自分の気持ちに気付いてない？」

「自分の気持ちって……」

「ユキはユウジのこと、好きなんだろ？」

「！！」

「アタシから見てりゃ丸分かりだよ？　姫城さんに惹かれてくユウジを見ていて……心が苦しいんじゃないか？」

「苦しいし痛いよ……でも！　これが好きってどうかは！」

「じゃあ、ユウジと話せて、隣に居れて――楽しかった、嬉しかったんじゃないの？」

「楽しかった……楽しかった。　けど！　友達だから……親友だから」

「それで片付けるならいいけど、後悔しない？」

「……」

「誰かと二人、嬉しそうに歩く場所にユキは居ないんだよ？」

「……」

「いつまで強情はってるのさ！　そこまで悲しい表情つくるぐらいなら正直になれよ！」

「でも……この関係が私は――」

「そんな消極的じゃ、姫城さんに取られるよ？」

「どうせ、私は」

「あの、太陽のように輝いてた明るいユキはどこに行ったのかねえ」

「！　それは皆が勝手に！　私は明るくなんか――」

「勝手かもしれんね、でも今のユキは、ユキらしくない」

「！」

「笑顔のユキが、アタシにとっては本当のユキだ……そしてその笑顔を曇らせたのはユウジなんだよ」

「ユウジは悪くなんかなくて！」

「いいや違うね。あの鈍感野郎、ここまで好かれてるのに気付きさえしないとか、ざけんなよ！」

「……気付かないのも無理はないよ。だってユウジは――」

「ああ、見ててユキ以上に丸分かりだ。でも、このままでいいのか？　ユキ」

「……」

「言って後悔、言わずに後悔。どっちがいい？」

「……言って後悔した方が――」

「なら答えは一つだな。タイミング見つけて告れ」

「な！　い、いきなり過ぎない！？」

「一時を争うことなんだから、早急に」

「……分かった」

「おお、いつものユキとは違う凛々しさが！」

「もうユイったら……ありがとね、ユイ」

「いやあ、二人見ててイライラしたからね。半端じゃなく世話焼いちゃったけど」

「ううん！　ユイのおかげで……やっと気づけたから」

「ほほう、それは何にかな？」

「……意地悪だね。――私はユウジが好きだってこと」

「おおー、良く言った」

「うん、頑張るから！」

「頑張れ、ユキ！」

そうして、アタシは扉を開け、１階へと下りて勉強会を再開する。

……ユキは凄いな。分かっている結末なのに。アタシの自分勝手な意見を受け入れて――

でも、彼女には言わずに後悔して欲しくなかったんだよね。

本当、言葉だけならなんでも言えるからね。

行動するのはユキで、傷つくのもユキ。

アタシってば本当、ズルイというか……卑怯だよ。

第１４３話　√１－４８　※独占禁止法は適応されませんでした。

どうもユイだ。
最近じれったい友人の恋の仲裁を勝手に行い始めてみた。

見ててイライラすんだよな……特にユウジとか、さっさと気づけよ！　分かりやすいってのによぉ……恋愛関係だけは鈍いというか、なあ。
流石のアタシも呆れるってもんよ、ユキスキーかと思ったら方向転換して姫城さん狙いになるとかさ。
いや……姫城さんのアピールは凄まじかったけども。だとしてもはっきりとした態度を示さないユウジにはほとほと失望だわあ。

こりゃテコ入れしないとな。

勉強会が終わり、アタシもついでに帰る。
なんとまあ、自分の家に帰る為に門を出て周辺を一周するなんて……違和感ばかりだぬ。
ユウジ家に来てからは似たよなことばっかだし慣れたけどね！

改めて家周辺に友人たちが残っていないことを見図り――

「ただいまー」

我が家へと帰る。
ユキには悪いけど、これはどうしてもやらないとな……キャラ萌えのギャルゲ主人公ほどのヘタレにゃ、有る程度刺激が必要なんで

な。
だからアタシは――
「なあ、ユウジ」
ちょっとした後片付けを終えてからユウジに声をかける。
「話したいことがあるんだが」
「なんだ、改まって」
くそっ、人の気も知らないで、よくぬけぬけと言えるものだ。
「こっちこい」
「ちょ、おい――」
ユウジを強制連行、そしてかつてユキを連れ込んだ物置へ――
「なんだよ……って扉まで閉めて何のつもりだ！」
「……お前、どっちを選ぶつもりだ？」
「は？　何を言い出すかと思えば……ギャルゲの話か？　今はそんな気分じゃ――」
「ユキと、姫城さんのことだ」

「！」

「バレてた……か」

分かりやすいことこの上ないけどな！　んだよ、隠せてたつもりなのかよ！

「……本当は決まってるんじゃないのか？」

態度見てりゃ分かる。

「……」

「いつまでもダラダラ出来ると思うなよ？」

いつまで続けることなんて出来ないだろ。

「分かってるさ、でももっとタイミングを――」

「それは幾年先のことだ？　このヘタレめ、一度奈落の底に堕ちちまえ」

ほんと、なんなんだコイツ。弱弱しいな！　畜生め、最近性格変わった気がするぞゴルア！

「なっ、なんでお前にそこまで言われなきゃいけねぇんだよ！」

「お前がニブイからだ。以上」

それ以上のことを言う意味がないな。

「はぁ……？」

「まぁ、お前が選ぶのは自由だ。どちらかを幸せにしたければ、片方を悲しませることになる」

アタシだってギャルゲと現実の区別ぐらいついている。

一人を選ぶなら一人は切り捨てなければならない。

ゲームというお話の世界だから成立するのであって、いつかは破綻してしまうことぐらい分かる。

「……」

「選ばないってのは一番卑怯で最低な選択だ。どちらも苦しめるだけだからな」

「……俺が優柔不断とでも？」

「分かってるじゃん」

「……そりゃどーも」

……もの分かりはいいんだよな。

「そう流せるのも今のうちだからな、さっさと心の内決めちまえよ」

「……はいはい」

「両方を幸せにすることなんか無理なんだからよ、せめてどちらか

でもさ」

「……今日のユイ、別人みたいだな」

まあな。いつも以上にキャラ作ってて、ちょっと面倒だ。

「ああ、現在は主人公の悪友役を演じているつもりだ」

「なんつか、そのまんまだな」

「だろ？」

「……分かった。もう決めてたからな。きっかけを待ってただけだしな」

「強がり言うなこのニブチン野郎……じゃあ俺がそのきっかけ作ったことになる訳だ」

いい訳ばっか並べてどーすんだよ。

「ああ、そういうことだな」

「へへ、節介焼いちまったな」

「いや、ありがとな……ユイ」

「……ふん、そんなこと言う暇有ったら告白の言葉の１つや２つ考えとけよ」

「わかった」

「一人を悲しませちまうなら、もう一人は幸せで溢れかえるぐらいに愛してやれ。それがお前の責任だ」

お、自分でも思うほどイイコト言った！

「はーい、ユイに質問」

「ああん？　なんだ？」

「一応聞いとくけどさ……姫城は分かるとしても、もう一人が――」

は？

「あのよ、今すぐ卓袱台があったらひっくり返して揚句にお前へ熱湯寸前の茶をぶっかけたいんだが……」

「へ、いや！　ホント分からないんだって！　俺が好かれてるのなんてマイぐらいだろうしよ、他に誰が居るんだ？」

「お前……本気で言ってるのか」

「ああ」

「……わっはっはっ！　ひどいわ、こりゃひどい！」

ひでえ。本当にひでええ。

「は？　え？」

「消え去れこのニブチン野郎！　地獄に堕ちちまえ！」

「意味わかんねぇよ！」

「……本当にか？　俺がこんな喋りだからからかってるのか？」

「いや、本当に分からない」

「身近な人思い浮かべてみろ」

「わからん」

「結論付けがはえーよ！　……本当に知らないんだってなら、教えてやるよ」

「頼む」

これだけは言いたくなかったんだけどな……スマンユキ。
こいつはアタシの予想以上に鈍かったわ。

「お前をユキは好いている」

「……はい？」

「だから、ユキはお前のこと好きなんだよ！」

わかんないかなあ？　あんだけの美少女に好かれてるのに。

「いやいやいや！　ないって！　俺ごときが！　こんな男がだぞ？」

「こんなしょうもない男だな」

「なんで？　ユキとはただの幼馴染で――」

「なんで、と聞きたいのはこっちだ。そんなんで勝手に線引きして、自分の価値観だけ通すってのか？」

「ちげえよ！　でも……そんなことお前が」

「だから焚きつけにお前を呼んだんだ、ユウジ」

「！」

「で、これを聞いて変えるのか？」

「いや……それはしない。もう心に決めたからな」

意地。それとも……？

「ふん……いい顔つきになってきたじゃねぇか」

「……さっきから思ってたけどお前のキャラ、悪友では無くなってるよな？」

「そうか？　まぁ、覚悟はしとけ、選ぶってことは一回限りだ。ギャルゲーならセーブポイントからやり直せるがな」

「あっ、なんかユイ色が出てきたな」

「とにかくよう、がっしり告白してこい！」

「お、おう！」

「あー、あー……声疲れた」

「だったら無理すんなよ」

「そんぐらいしないと、ユウジは聞く耳持たねぇだろ？　どうせアタシの妄想とかなんとか言って」

「……まぁそうだな」

「とにかくは、アタシから言えることは只一つだ。……健闘を祈る、とにかく頑張れな」

「お、おう」

がんばれよ、そうでなきゃアタシが汚れ役を演じた意味がなくなるからな。

さっさと、告白してこい！

悔しいが……お似合いだよ。

番外０７話　番外２－１　下之家のあれこれ。　（前書き）

番外編第２弾！　ユウジ家の日常をゆる～く描きます。

番外07話　番外2－1　下之家のあれこれ。

影の薄くなりがちなホニや桐やユウジ姉を中心に下之家へスポットライトを当てます。
今日もなんというか賑やかで、ゆる～い日常が続いています――

8月29日

まだまだ夏の暑さが占める8月終わり。楽しかった夏休みの思い出に耽っていた。
色々なことがあったものだ。今年の夏は特に楽しかった気がする。
それもこれもあの起動したギャルゲーのおかげだな。
起動してなかったとしてもユイとマサヒロで面白おかしく楽しめた事には違いないけど。
やっぱりマイやユキやホニさん、桐が居ないのとでは、その楽しさと充実度は段違いだったのだろう――

そんな家にて、夕食で腹も膨れ居間で一休みしている時のこと。
姉貴は皿洗いにホニさんは部屋へ戻っていた。現在居間に居るのは俺とユイと桐だった。

「なあユウジ」

なんとも薄味バラエティに苦笑していた矢先に、ユイが話しかけてきた。

「ん？」

「アマ●ミＳＳの”ＳＳ”ってなんだろうな？」

「え」

アマ●ミ……って、ええ？

「とーいうことで！　今放送しているアニメについて語ろう第３７２１回辺り！」

※ここから作者の個人的憶測、予測、感想のみが飛び交います。この場を使っての悪ノリお許しください！

「いぇーい（ＣＶ．桐による複数観客）」

「え、ちょっ」

桐も乗っていた……なんでやねん。

「おお、キロリ観ているのか！？」

「うむ、今クールの大半のアニメは観ているぞ（キリッ」

桐がキリッ……あれ、前にもこの寒いネタやった気がする。

というかもうキロリは諦めたんだな……

「ユウジは見ているのか？　どうなのか？」

「いや、まあ見てるけど」

ま、まあ一応観てますとも。最近忙しかったからマトモに観れてなかったけど

夏休みはアニメを一気観出来たからやっと追いつけた。

「アマ●ミはなんというか――」

「おおっと！　それはこれからだ、口を滑らせてはイケナイよ」

そういえば物語の初め辺りにこんなアニメ談議っぽいのが有った気がするな。

「今放送しているアニメについて語ろう第３７２１回、開始！」

「で、まずはあの”ＳＳ”が気になってしまうな」

「まあ、初アニメ化作品なのにＳＳって……」

「普通なら略称意味がサブタイ辺りに書いてあるはずなんだがぬう」

「某キス●ムＲのように”監督の私もＲの意味を知りません”とか言うパターンの一つかもしれないのう」

「いやいや、キロリ。監督はあの人だぞ？　まさか、そんなことは

ないだろう」

「……ＳＳって聞くとダ●ーポ思い出すのは俺だけ？」

「「いやいや、アタシ（わし）も！」」

「おおう、息ピッタシ」

「どうにもＤ．●．Ｓ．Ｓ．好きになれん」

「ああ、わかるぜよ。なんであそこまで妹プッシュするかねえ？」

「個人的には白河ことりに幸せになってほしかった」

「「同じく！」」

「白河と苗字の付くダカーポキャラはアニメで超不遇じゃからな」

「なんというか、主人公捨てて行った妹がまた戻ってきて、またラブラブしましょ。とかおかしくないか！」

「今まで世話してきた、隣に居たことりはどうなるっつーんだよ」

「本当に残念な展開じゃった……５話ぐらいまでは絵も綺麗で神アニメかと思ったのだがのう」

「でも、ことりはまだいいよ。ことりは２話完結ＯＶＡで幸せになってるし」

「あれで大分救われた気分じゃの」

「そうするとダ●ーポ2ななかタンは見事に不遇だのお」

「「本当アレはないわ（な）」」

「1期7話だけ当番とか舐めてるのかと思った」

「というか1期はココとかミナツは相当な被害者だぬ……シナリオ滅茶苦茶にかき回してどちらも台無しにしてるのが許せんなあ！」

「でもコミカライズのI．F．は神がかってたんだよな」

「「そのとおり（じゃ）」」

「あれこそアニメ化すべきだなあ」

「うむ、しかしP．S．のアニメ化もされない以上期待は出来無さそうじゃな」

「「ああ……」」

すっかりお通やモード。本当に忠実に作ればいいのにさあー

……え？　今まで俺のオタク分が薄いのにいきなりコレはないって？

温存していたのだよ！

「話戻ってア●ガミSSの”SS”の意無は――」

「うむ、考えたのじゃ……SSは”セカンドシーズン”の略で合っ

てるのかもしれん」

「ええ、なんでだい？　キロリ」

「キ●キスから数えれば――」

「「止めろおおおおおおおお」」

「はっはっは、桐何を言う。キミ●スはアニメ化してないだろう？」

「そうだよキロリ。あんな中の人にまで嫌われる主人公になってしまったアニメなんか無いよお」

「……黒歴史じゃな」

「だからキロリのは違うＹＯ！」

「うむ、じゃあなんじゃろな……」

「……”セガサ●ーン”か？」

「「なんでそのチョイスしたし！」」

「有る意味人気高いけどセガからしたら黒歴史だなっ！」

「うむ、セガ謹製ゲームハードが終焉した以上、黒歴史なのかもしれないのう」

「いや、無難にアタシなら……”セミショート”なんだな！」

「ロングの娘ディスんな！」

「じゃあなんじゃろな……”ＳＳ”」

「……真面目に考えたら”ショートストーリーズ”じゃね？」

「「あ」」

「原作ファンから聞くに、大分話が省略されてるみたいだしよ」

「うむ、一理あるかもしれん」

「４話で１シナリオという構成も考えるとあながち間違っては居ないねえ」

「オムニバス方式採用したから仕方ないんだろうけどね」

「まあ、でもそうすることによって各キャラをないがしろにしにくくなって成功じゃな」

「キミ●スもそうすりゃ良かったのに――」

あの、えーと。
ずっと黙って聞いてたんですけどね。
いや、専門的なことは分からないです（アニメもサ●エさんぐら

いしか見てませんし）

でも思ったことがあるんですよ。聞いててここまでメタというか時事ネタで特定ネタを扱うってのは――

ブログかチラシの裏でやれよ。

第１４４話　√１－４９　※独占禁止法は適応されませんでした。

テストが明けた。ユイに釘を刺された俺は、何度も告白しようと考えたが。踏ん切りが付かずに居た。
ヘタレだからしょうがない……という逃げ道では済ましてはいけない。
けれども、俺は告白することによって失ってしまうことが怖いのだ。

また、あの時のように。
何も言わず、答えも聞けずに、消え去り、全てを失ったあの時のように。

ユキとの会話もぎこちなさが目立ち、姫城ともマトモに顔を見合わせることが出来なくなった。
「生徒会だから」という口実で、二人から逃げるように文化祭の準備へと奮起していた――

１０月２７日

文化祭が迫る。

クラス展示の為に打ち合わせ、材料集めに奔走している生徒を度々目にする。
このクラスは体育祭を思い出すと行事には少し協力的で、お祭り好きなテンション高めの奴も居るので、総じて文化祭のクラス展示には前向きと見て良いだろう。

そんでもって俺は生徒会による文化祭の統括と、クラスの両方で走り回っていた。

「今年は文化祭巡り、難しそうだな――」

この忙しさが本番に無い訳がない。今年の文化祭は走り回って棒に振ることは目に見えている。

クラス展示は、何を思ったか「メイド焼きそば屋」

……誰がそんな奇抜な発想を思いつき、何故クラスが賛同したのか分からないが。俺がロングホームルーム中に舟を漕いでいた際に気付くと決定していた。メイド服をどうやって人数分揃えるのかなども決まっていて、このクラスの謎の団結力には驚かされる。

まあ、そんな訳で飾り付けを主に行い、焼きそばを焼く機械をどこからか持ってきたりして、大分教室の「メイド焼きそば屋」化が進行していた。

そんな買ってきたカフェオレをちびちび飲みながら少し休憩をしていた時だった。

「ユウジ」

「……どした？」

実はユキが俺一人の時に話し掛けてくるのは久方ぶりで、お互いきまずい空気が流れていたが為に話す機会を失っていた。

それもこれも、俺が全ての原因だと……俺は知っている。

それでいて俺の心は確実に違う方へと――

「休憩、あとどれぐらい？」

「んー、特に決まってないし、時間は作れるぞ？」

「そう……」

しかし次の言葉は、俺には予想だにしなかった――

「ユウジに伝えたいことがあるんだ」

「！」

思わず持っていた缶を落としそうになる。

ユキがなんだって？

いや……鈍い俺でも流石に分かるさ。ユキが何をしようとしているのかぐらい。

「……十分後、校舎裏の大きな木の下で待ってるから。」

それだけ言い残してユキは去っていく。

「俺も……ケジメを付けないとな」

ユキから言わせてしまって凄くカッコ悪いな。というか情けねえなあ、俺。

でも確固たる意志を持って。今なら言い切れる――

俺は――が好きであると。

第１４５話　√１－５０　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

このエピソードは３ヶ月前に書けてたんですよねー

第145話　√1－50　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ありがと、来てくれて」

彼女は俺に喝を入れる時よりも数倍に真剣な面持ちでそこにいた。

「……」

「あのね、ユウジ」

「なんだ？」

「私ね、ユウジが思っている以上に独占欲が強いんだ」

「そう……なのか？」

何を言いたいのか少なからず分かっていた。

「ユウジが他の女の子と居るだけで……妬いてたんだよね」

かつての俺なら、それを聞いただけで狂喜乱舞した挙げ句に昇天間違いなしだったろうに。

「焦ってたの、ユウジがとられちゃうって……私の隣から居なくなっちゃうって」

嬉しいさ、嬉しいけどさ。そんな言葉がズキズキと俺の心に突き刺さる。

「私は我が儘で欲張りな女なんだよ……」

「……そんなことねぇよ」

「嘘。　私はそんなだから、ユウジをここに呼び出したんだもん」

「……」

「そして、今から言う言葉は――酷く卑怯で自己中心的だから」

きっと来るであろう言葉は知っている。だから心が痛む。

「ユウジ……私、ユウジのことが好きなのっ！」

その言葉が聞こえた時の風は、余りにも冷たく、強かく感じた。
心に深く突き刺さるように。

「俺は……」

告白。
大好きな女の子からの告白だった。でも、その〝大好き〟は真実なのか？
ライクなのかラブなのか。……分かっている癖して、俺はとぼけていた。
知っているはずだ、彼女への気持ちの正体を。俺はとても卑怯で臆病だ。

どうしようもないヘタレだ。

「そうか……」

彼女は俺にとってアイドルだったのかもしれない。夢にみて、憧れて。

いや、女神とも言えるかもしれない。どこか孤高で、俺には眩しかった。

喝を入れられて、元気付けられて、癒されて。――ようやく理解した。

彼女に抱いていたのは恋心でなかった、と。ただ俺は羨んでいただけだった。

そして今、俺の気持ちが向かっていたのは――マイだったらしい。

いや、マイだ。

俺をいつも狙っては、正直いつも警戒していた。彼女の琴線に触れないようにと。

でも違う見方をすると……他人とは違う反応を俺だけに、その感情・言葉・表情を見せてくれた。

それは次第にどれもこれも、微笑ましく感じていた。

手を繋ぐだけで失神しかけたり。隣を歩くだけで茹であがる。

横の彼女の顔は覗けば、とにかく嬉しそうで、表情はかなり緩んでいた。

考えればなんとも可愛らしい。そんなマイが作る表情などに惹かれていった。

惹かれていた、そしてそれは一つ感情に変わっていった。

今なら言える――マイが好きだと。

だから、俺は言わないといけない。拒絶の意志を、最低の言葉で。

「……俺はユキとは付き合えない」

「っ……」

勇気を持って告白してくれた彼女を欺いた。彼女にどんな表情をさせてしまったのか。

ユキの顔は――

「ごめん、わかってた」

微笑していた。微笑しながら俺に言葉を返してきた。瞬間俺は……意味が分からなかった。

怒るなり突き放すなりすればいいのに――……いや、ユキはそんなこと――。

「私にとっての最終確認。　これではっきりしたよ」

何が……と、言う前にユキは話す。

「ユウジは姫城さんにご執心」

「え！　マ、マイにか？」

「……言ってなかったけど、呼び方も」

「あ」

つい、口が滑ってしまった。もしかすると最近はずっとそうだったのかもしれない。

……うあああ、無意識に言ってたのか、俺は!?　はっ、何も言わなかったのは――

「それに、姫城さんもユウジに興味があるみたいだもんね？」

「……」

「はっきりと言ってくれてよかった……なにより、はぐらかさないでけれたことが嬉しかったよ」

「で、でも」

「……私はユウジの意志を聞けたことで充分だよ？」

「ユキ……」

「あーあ、フラれちゃった。　一緒に居る時間はこっちの方が多かったのにねー」

「……」

「ごめん、今の負け惜しみ。　でもこれで終わりだからさ」

「……悪いユ――」

するとユキのしなやかな指が俺が後に続かせるであろう言葉を止める。

「謝るのはナシ。　ユウジはそれを選んだんだから、そうだよね？」

「――ああ」

「それならユウジにも、姫城さんにも絶対幸せになってもらうんだからね」

「分かってる……あいつは俺が幸せにしてみせる」

「そして、厚かましいお願い。　……いや命令！　私の分も幸せになって」

彼女には本当に敵わない。

「ああ……わかった」

「じゃあ、これでお仕舞い。　もう私には心残りはありません！　ユウジの健闘を祈っちゃうから！」

「ありがと、ユキ」

「お礼なんて勿体ない、そんなことより姫城さんだよ？　告白はまだ？」

「ああ、うん」

「早めにしてあげなよ？　……というかここで私と話してないで、行ってきなさい」

「え？」

「え？　じゃなーい、ほらほらさっさと行った行った」

「……わかった、じゃあ行くわ」

「うん、頑張んなよー」

ユキはユウジを見送る。喧騒溢れる校舎に消えるまで。

「あ、あれ……おかしいな」

膝からガクリ崩れ落ちる。ユウジが行った途端に全身の力が抜けた。

そして――

「な、なにしてんの私」

目を拭って、拭って、拭う。

「なーんで、私は――」

目元を擦って、払い落とす。

「止まんないや、涙」

ボロボロと溢れていく。それは止まることを知らない。

「はあ……弱いよなぁ、私は」

情けなかった。私は僅かな希望を心のどこかで抱いていた。それは叶いはしないのに。

踏ん切りを付ける為に、わざわざ呼んだのに。

「……本当に幸せになりなよ。ユウジと姫城さん？」

見上げると少し薄暗い秋の空。風が吹くたび髪が空へと流れていく。

「あー……そうだ――」

これで終わり。もしも、出来るなら――今までの日常に戻りたい。

「……無理、だよね」

風は私へと吹きつける。強く、強く。

第１４６話　√１－５１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ゼロの使●魔読んで書き方勉強

第１４６話　√１－５１　※独占禁止法は適応されませんでした。

文化祭前という祭りの前の喧騒。俺はそんな中で生徒会で走り回ったり、クラスで走り回ったり。今年の秋は何度廊下を駆け抜けたことか。

そして俺は今も走っていた。でも今回ばかりは思い切り私情で、走らなければならない訳じゃない。でも走っている。

俺は彼女の元へ向かっていた。早く、早く。足を運ばせ、文化祭に踊る学校の廊下を駆け抜けていた――

「……っ」

ユキは俺を好いていてくれて。ユキは俺が欺いたというのに笑ってくれて。ユキは俺の背中を力強く押してくれた。

ユキの必死の告白を断り捨てた。そんな俺に今出来るこのは――マイに告白することだけだ。

あのユイにも焚き付けられた。親友二人に背中を押された以上――いや、俺個人的にもだ。

マイにこの気持ちを伝えたい。

……もしかしたらマイは今まで俺をからかっていただけなのかもしれない。

慕っていたのも見せかけで、彼女に踊らされていたのかもしれない。

だとしても、今の俺は彼女のことが好きで好きでたまらない。日々を過ごすうち、彼女に惚れこんでしまった。

だから俺は、走って、走って――

「――マイっ」

今更だけども。俺は彼女に呪いをかけられていたのを思い出す。
あの二人きりで初めて食べた昼食のこと。まだその頃は彼女には僅かに不信感を抱いていて。
姉貴のイタズラにそんな彼女を怒らされてしまったあの時。

『……目を覚ますと、ユウジ様は”舞、舞、舞”と私の名前を連呼しているでしょう』

その時彼女の呪いは確かに、確実に俺へとかかっていたようだ――

教室のドアを開き、マイを探す。

「（ど、どこに……）」

走る必要も焦る必要も無い。けれども俺は必死で彼女を探していた。
文化祭故、机が一度取っ払われテーブルクロスが掛けられた机を複数繋げて接客テーブルとしたものがクラスには鎮座している。
その周辺の飾り付けをしたり、焼きそば機の調子を見ていたりする――そんなクラスの光景。
しかし探しても探してもマイの姿を捉えることは出来ない。彼女が行くとしたらどこだろう……分からない。
文化祭と関連付けるならば、機材や装飾を取りに倉庫。または近くの店まで買い出しに出ているのかもしれない。
俺は彼女のことなんて何も知らなかったことを改めて思う。予想すら出来ないなんて。彼女が個人的に行きそうな場所は見当がつかなかった。
しらみ潰しに探すか……途方に暮れはじめていた、そんな時のことだった。

「……なあ」

俺の肩を誰かが掴んでいる。そして呼ぶ声はなんとも聞き覚えに無い男の声だった。

そして何故か俺には、どこか不機嫌そうに聞こえていた。

「……なんだよ？」

焦っていたが為に少し口調が乱暴になってしまっていた。八つ当たりである。

内心悪いと思いつつも、早くマイに会いたい気持ちの方が先行していた。

「誰か探してんのか？」

「ま、まあな」

嫌に的を得た言葉だった。それも心を見透かしたかのような。

まあ……おそらく俺に「誰かを探している」というのが顔に出ていただろうけど。

「姫城さんか？」

「！　あ、ああ」

的を得過ぎている。でも今の俺にそこまで思考を巡らせるというのは酷なものだ。

「姫城さんなら、休憩に屋上に行ったぞ？」

「本当か？」

何故、マイに接点の無さそうなこの男が知っているのか。

そんな疑問など構いやしなかった。ただ俺はそいつの言うことを一瞬で信じてしまっていた。

そうとなれば、俺は教室を抜けて廊下を駆ける。階段へと向かって、上へと駆け上がって――

そして辿りつく。屋上へ――

「マイッ――」

しかし、俺は違和感に気付く。開けた屋上に居たのはマイなんかでなく。

「ユキ様ＬＯＶＥ」やら「ユキ様を幸せに」に「ユキ様をお守りする」等と言った”痛い”文面が刻まれたピンク色の法被を着ている。

大勢の男子生徒共。そして彼らに共通して額に見えるのは「ユキ様ファンクラブ」の文字轟くまたまたピンク色のハチマキ。

そう、俺は――

「下之ユウジ、貴様を私たちは許さない」

状況を直ぐには理解など出来なかった。あまりにも突発過ぎたのだ。

それでも俺は感ずづいた、こいつらは”痛い”を通り越して”危ない”ということに。

彼らの手に握られるのは幾多にも及ぶ鈍器、鋭器――

「その罪を自ら口に出してみるがいい、下之ユウジ」

自称ファンクラブのメンツは怒りを露わにさせた表情で俺を睨みつけていた。

第147話　√1－52　※独占禁止法は適応されませんでした。

俺はハメられていた。おそらくクラスの男子も誘導用で確実に仲間に違いない。

しかし何故俺がマイを探していることをこいつらは分かっていたのだろうか？

にしても情報の伝達が速すぎる――

「貴様、下之ユウジは大きな罪を犯した」

ユキ様ＬＯＶＥと記されたハチナキやらを装備するフザケた格好をする男子生徒が俺を睨みつけ言う。

「はぁ？」

「我々の信愛なる篠文ユキ様を散々振りまわした揚句に捨てたことだ」

こいつの宗教染みた喋り方は気色悪く吐き気がする。そんなことよりも――

「……捨てた？」

捨てた……か。

「幼馴染というのを口実に家へ向かいのこさせ」

ぶーぶーとブーイングするファンクラブメンバー共

「友人というのを口実に夏は振りまわし。我々の誰かでもユキ様のお隣に居られたらと何度思ったことか」

ふざけんな糞野郎と馬頭する。

「手紙で散々警告したはずだ。ユキ様に近づくな、と。我々は近づくことさえ出来ず、少し離れた場所から見守っているというのに」

俺は２０枚も送っただろうが、と声をあげる。

「本当に妬ましいながらユキ様は貴様に好意を抱いてしまった。貴様がユキ様をたぶらかした末に起ってしまった」

「しまった……か」

抱いてしまった――この言葉を聞いて、俺は確信し、怒りがふつふつを湧き上がりはじめる。

こいつらは自分勝手で、だだ好きなだけ。そして近づいた俺が許せない。

欲望に塗れている風にしか見えない。誰もがユキのことは考えていても、ユキの気持ちは考えてさえいない。

「不服ではあったが、ユキ様は貴様に勇気を振り絞って告白をした……というのに貴様は」

先程から俺に喋り続ける奴以外もそうだそうだと賛同し怒りを露わにしている。

「貴様は他の女に現を抜かし、ユキ様を傷つけた。……その罪は重

いぞ」

怒りを溜めているのは何もお前らだけではない。

マイをダシに使って俺をおびき出し、かつ理不尽な言い分で俺を責める。

そして――ユキの気持ちを踏みにじる。ユキの行動を間違いと言う。

「……こんな奴らが自称ファンクラブかよ」

鼻で嘲笑し見下すように言ってみる。しかしそれほどにこいつらは自分勝手だった。

俺自身が自分勝手じゃないとは思っていない。だとしてもこいつの自論は余りにも許せなかった。

「……なんだと？　自分の罪が分からないのか？　それとも愚者なのか？」

「愚者はどちらかと」

「貴様は調子に乗り続けている。幼馴染という間柄でユキ様に近づいて、近づいて来たら振る。人として最低の行動と思わないのか」

「ああ、最低だな。こんな手まで使ってでしか俺を呼び出せないなんて人として最低だな」

「……黙って聞いていれば、なんと自分勝手か。そんな者にユキ様など最初の最初からふさわしくなかった」

怒りなんて溜まり続けている。そして、俺は思う――

「そう言うのが自分勝手って言うんじゃねぇかなあ？」

「何を言う、我々は貴様とは違う。ユキ様の気持ちに応えることが出来る！」

「は、ユキの気持ちに応えられる？　笑わせるなよ。……結局は俺と同じだ」

「貴様と同じ括りにするな！　我々は貴様のように愚かではない」

「お前らはユキのことしか考えていない」

「それがなんだ。ファンクラブとして当然だろう」

「いいや違うな……お前らは自分のことだけだ。ユキの気持ちなんて考えていない」

「何を言うか！　我々はユキ様の気持ちを第一に考えている」

「それならユキの行動を否定しないよなあ？　俺と過ごしたことも、俺への告白も」

「それとこれと話は別だ」

「それとこれと話は同じだ。ユキが思い、考えた行動を、お前らは

”間違い”と否定したんだ。それのどこがユキの気持ちを考えられているんだ？」

「……そ、それでは貴様は考えられていたのか？　考えられていれば、ユキ様の告白を受けるべきだろう」

「考えられていなかったさ、友人に知らされるまではな。……でも、俺は嘘をつくつもりはない。その場に任せて気持ちを変えることはしない！」

「そうか、貴様は姫城マイが好きになっていたらしいな。憎きファンクラブ相手の姫城派に……なおさら許せん」

「ああ、俺はマイが好きだ。だが、お前らに許しを乞うつもりなんてさらさらねえよ」

「……我々は貴様を許せん。ユキ様を悲しませた罪は万死に値する」

「いい加減帰っていいか？　お前らの気持ち悪い自論にこれ以上付き合いたくもないし、はやくマイを探しに行きたいんだが」

「……この状況で帰る？　残念だったな。貴様が来た当初にその扉は内側から鍵がかけられた上に――我々が返すつもりがないからな」

振り返ると扉の前にはガタイの大きいファンクラブメンバーが守護神のごとく佇んでいた。

「そーかい……で、俺をどうするつもりだ？」

「……殺すつもりはないが、痛めつけないと気持ちが静まらないん

でな」

「は、武器無しな俺をそれも十数人で囲むたあ、なんとも卑怯丸出しだな」

「貴様には1人も必要ないが、皆血が上っているのだよ」

血が上っているのは俺も一緒だよ。ここまで言われて爽やか気分で居られるか？

今は胸糞悪い、こいつらのせいでマイに会えていないのと自分こととしか考えないカスファンクラブメンバーに。

そして、俺は頭の奥底かどっかで、思い出す。

そうだ、これはゲームなんだと。

すると、これはバトルシーンか？　……前座のファンクラブメンバーの自論がカスなのもクソゲーありきか。

だとすると、これは戦いざるを得ない。ということは、だ――

「（背中に重みがある……！）」

この握った感触に重さ……そうだ、コレは。

「き、貴様！　そんなものを何処にっ――」

「おお、俺の相棒な”鉈”じゃねぇか」

生徒会に行く時に一回。自室で一回――後はなんだったかな？

まあいいや、あっちも鈍器・鋭器揃いだし。こんぐらい振りましても構わないだろう。

「くっ！　皆かかれぇぇぇぇぇ！」

「「うおおおおおおおお」」

１対約２０人。ここで何故か戦いが始まった。

しかし、これも思う――唐突な展開もクソゲー故だな、と。

さあ、これで闘ってマイの元へ向かうとしますか。

番外０８話　番外２－２　下之家のあれこれ。

６月のある平日。

番外編の舞台は前回と同じく下之家。

皆が学校や会社に行っているそんな中、１人家で留守番し続けているホニさん。

「はぁ……」

トレードマークな超長髪とセーラー服を着たまま、憂げにため息をついていました。

……寂しいのでしょうね、きっとそうなのでしょう。ユウジ達は無情にも学校ライフをエンジョイしていますからね。

「あー……この時間は面白い番組がないなー」

え。

「チャンネルをひねっても、どうにも薄味な昼ドラばっかり……」

あー……えーとホニ？

「いい●もが終わるとどうにも鬱だなー」

……杞憂だったんですね。でもホニはなんで学校行かないんですかね？

ユウジ母に頼んでも良さそうなのに、何故か頑なに行くのを拒んでいるそうです。
学費などを考えて遠慮しているのでしょうか？

「あ、先週やってたバラエティの再放送だー！　これユウジさんと見てたら面白かったんだよー」

と、バラエティを観はじめますが――

「あ、あれー？　こんな薄味だっけ？」

そういえばこの作品の登場人物ってバラエティのことを薄味って言うのが流行ってるんですかね？
なんか表現で頻繁に聞くですけど……いや確かにですね、最近のは流行りものさえ呼べばいいって感じですけど。
ほら、でもテレ東とかＮＨＫでは結構面白い番組が――え？　テレ東は地方だから見れねえし、ＮＨＫは受信料――
……ごめんなさい、ここで止めておきます。

「（ユウジさんと見た時は面白く感じたのになあ）」

……ああ、なるほどー（？）

「そういえば我とユウジさんが話す機会が少なくなっちゃた……なんでだろ？」

おいユウジ（怒）姫城に現抜かし過ぎです。少しは他のレディにも気を使って（以下略

「思い切って今日はユウジさんの部屋に行こうっとー」

ほらこんなにホニは前向きなのに！　あなたという人は！　あなたという人は！　どこまで鈍感なのですか！

「ぶえっくしゅ」

「どしたのユウジ？」

「いや、俺の噂をしてしまった輩がいるらしい」

くそお、ティッシュを無駄遣いさせやがって……請求するぞゴラア！

「あら下之くん、風邪？」

すると何故か、委員長がやってきた。本当に何故か分からない。

「おお、院長」

「いつから私は病院の長になったの……？」

「風邪なら治してくれ」

「……風邪ごときで病院に来ないでくれる？」

「（うーん、最近委員長のノリが良くなったがするなあ）」

なんででしょうね？　さてー、戻って下之家ですー

「ああ、洗濯物とりこまなきゃ！　ああ、皿洗いしなきゃ！　ああ、桐帰って来る！

なんかホニ、日常に毒されてません？

「ユウジ家に住まわせて貰ってる身の以上、我も一生懸命家事じなきゃね！」

ええ娘だ……

「ただいま帰ったぞー」

「あー、おかえりー」

「おうホニさん、家事御苦労さまじゃ」

「いえいえ。それで桐さん？」

「なんじゃ？　早く靴脱いでいいかの？」

「まって！　我はやりたいことがあるんだ」

「……はぁ、手短にな」

「――あなた、ご飯にする？　お風呂にする？　それとも――帰る

？」

「どこに！？」

「決まってるじゃあないですかー、知ってるんですよぉ？」

「な、何がじゃ」

「……教えませんー」

「意味がわからぬ！？　その意味を教えるのじゃー！」

「あはは、捕まえてごらんなさーい」

……ホニ、桐と仲良いんですね。なんか姉妹がじゃれあってるような微笑ましい光景だなあ。

もう少し目の保養に観ておこう、うん。

第１４８話　√１－５３　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ぎりぎりセーフ

第１４８話　√１－５３　※独占禁止法は適応されませんでした。

「学校から商店街が近くて良かった」

私は歩きながらそう思う、布の買い出しを頼まれたのはいいものの……ある事が気がかりで。

篠文さんがユウジ様を呼び出していたのを目撃していた。そのあと篠文さんは去ってしまい、その後は――

「（どういう意図なのでしょう……？）」

篠文さんはどこか思いつめた表情だったような気がします。

それに……篠文さんも、私も。何故か勉強会以来はユウジ様とあまりお話する機会がありませんでした。

生徒会でお忙しいのは確かですが……どうにもユウジ様は私や篠文さんを避けていたように思えてならないのです。

そういえば勉強会の時のユウジ様の私への態度も少し変でしたし――

「（はぁ）」

夏休みは幸運と幸運が何層にも重なって、ユウジ様と共にする時間が多かったですよね――

「（あの夏は楽しかったです……あんなにもユウジ様と休みを楽しめるなんて）」

はっ、もしかして私は嫌われてしまったのでしょうか。

ユウジ様があまりにも共にする機会の多さに私にうんざりしてし

まったのでしょうか……？

「……ああ」

そうだったのだとしたら、死にたい。もう普通にお話も出来ないなら……本当に辛いです。

多くの幸せを望んだ私が愚かだったのですか？　生きてきて、ここまで温かな時間も数えるほどしかありませんでした。

それでも、高望みした私はいけなかったのですか？　……でも、最後の思い出があれほどまでにご一緒できた夏休みなら――

「いけないいけない」

最近は身を潜めていたネガティブな自分が出てきてしまいました。それほどに今までの日常が幸せだったのでしょう。

ああ、終わってしまうのですか？　この日々が、この幸せが。戻ってしまうのですか？　あの頃に。

そうなのでれば、これからは本当に辛い一生ですね。そうと分かっているならば――

「（思い切ってもう一回告白してみようかな）」

それで断られたら……引き籠ります。でも、でも、ですよ？　もしかして応えてくれたら――

「（嬉しすぎて出血死しますね。確実に）」

ああ、でもいいかな。そう思いながらも虎の狸の皮算用的なことをニヤニヤと買い出し袋を持ちながら考えていたのですが――

「！（ユウジ様の気配！　それも近く！）」

もう私はユウジ様が居る場所がある程度わかるほどになってしまった。愛ゆえですよ？

もちろん広範囲レーダーのごとくな使い方は出来ませんが、まあ学校内なら可能です。

そして導き出された場所は――

「（屋上？）」

見上げてみれば……何か生徒達が激しく動いています。

ええと、屋上は確か基本立ち入り禁止のはず――そう思いつつ眺めていると。

「くっ！」

何か鈍器を構え応戦している――渋い顔をしたユウジ様が、あ、そんな顔もいいですねって、そんなこと言ってる場合じゃない。屋上のフェンス越しにチラリと見えました。

ほんの一瞬ですが、ユウジ様のお姿を私は見逃さない訳がありません。

「と、とりあえず、向かいましょう！」

買い出し袋を提げながら昇降口へと走っていると――

「あ、姫城さん」

その声に横を向くと、今にも泣きだしそうで、崩れそうな表情をした――

「篠文さん……？」

ユウジ様の今の状況が果てしなく気になりますが、篠文さんの様子は余りにも変でした。

「――告白された？」

「え？　えと、なんの話で……？」

私は疑問譜を浮かべます。告白？　それは私がしようとしたことで、されることなど――

「ああ……まだ会ってないんだね」

「ええと、話がさっぱり」

「ユウジ」

「！　ど、どういうことで」

私はその篠文さんの意味深な発言は気になりますが――

「そ、そんなことより！　何かユウジ様が喧嘩に巻きまれているみたいです！」

「そんなことって……って、え？　喧嘩」

篠文さんの表情が固まります。

「今、屋上で何か鈍器を構えて――」

自分が見たことを伝えると。

「うん、私も行く――と言いたいところだけど、とりあえず先生を呼んでおこうかな」

「なぜ篠文さんは付いてこないのですか！」

ユウジ様を隣で長く見ていた方であるこそ、なにやら尋常でない雰囲気のユウジ様に駆け付けた方が良い、駆けつけるべきだと私は思ったのです。

……篠文さんのように幼馴染という立ち位置に居れたらという嫉妬心も芽生えていましたが、今は抑えて言いました。

「――私はフラれたからさ。だから、姫城さんが行くべきなの」

っ！　私は篠文さんの言葉を直ぐには理解できませんでした。それほど私は衝撃を受けたのです。

第１４９話　√１－５４　※独占禁止法は適応されませんでした。

はぁ、なんだかなあ――ギィンッと金属の衝突する音が響く中で思う。

「たぁっ」

ケンカなんかしたこともないのに、何故か体が動いていた。それもルリキャベの主人公スキルの賜物なのだろうか……？

揃いも揃いに不良が他校の不良とでも勢力争いをするがごとくなファンクラブメンバー武器装備、ご都合展開過ぎる、俺の背中に鉈。

……正直そんなことどうでもいい。こんなバトルさっさと切り抜けてマイに会いたかったというのに……こいつらは。

「お前らはなんでそこまで自分勝手かねえ！」

ガキンッ、とバールのようなものを鉈で受け止め嫌みを大声で漏らしてみる。

「自分勝手なのは貴様だろうがあ！」

右から振り下ろされる鉄パイプをスレスレで避ける、あっぶねえ。

「は？」

横から金属バッドが振りかざされる――そうして金属鈍器シリーズが次々俺を襲ってくる。

「さんざん遊んでおいて、好きな奴が出来たからさようなら、なん

だもんなあ！　それもユキ様が遊び相手と来た、ふざけるんじゃねぇ！」

「そういう勝手な解釈を自分勝手って言うんだよ！」

ああ、こいつらの言い分を聞いてるとイライラしてくる。

「く……」

俺は余りに複数人数が襲ってきたが為に押されていた。というか、これで致命傷の一つも負っていないのが奇跡とか言うレベルでない。だがアニメやマンガで見た喧嘩シーンでは不良共もっと俊敏な動きをしている、対して見た目インドア派なファンクラブメンバーだ。ようするに動きが素人だった。俺も素人だが、素人同士だから分かる。今までの動きを見るに闇雲に鈍器を振りましていただけのようだ。

ギシィ。背中には固い感触……俺はフェンスまで追いつめられたようだ。なぜここまで理不尽なまでに追い詰められなきゃならないんだろうね。

「俺が……俺が誰を好きになろうとお前らに関係ねえだろうがあ！」

渾身の力を鉈に籠めて、金属バッドを弾き飛ばした。

男の手から離れた金属バットは空中でクルクル回転しながら地面へと落ちてカランカランという金属音が響く。

その音にファンクラブメンバーは気を取られた、そんな一瞬に―

―

「っしゃ！」

地面を思い切り蹴って屋上からの出口、階段への入り口を目指す。

「！　くそっ、仕方ねえ」

先程まず最初に話しかけてきたリーダー格的な野郎が右手を振った。

すると、今まで襲いかかって来た鈍器部隊と別に待機していた――

「ぼ、ぼくは本気だよお？　き、きききききききみみたいな愚か者は痛い目見なきゃいけないんだよお！」

普段話さないような引っ込み思案な野郎が話す時は大体こんな感じ。

そして、発想や思考も少しかけ離れた――

「（野郎、サバイバルナイフなんて持ってやがるのか）」

もう不良の枠を越えつつある、刃物なんて冗談じゃない。刃物なんて簡単に扱うものじゃねえ。

マイはある程度の覚悟を持って、かつては扱おうとしたが。こいつは――

「げげげげげーむと同じなんだよお！　刃物を振り回せ倒せるんだあ！」

ゲーム感覚。狂気だ。どうせ、自分が死んでも残機があれば生き返るとでも思っているキチガイ野郎なんだろう。

確かに、これはゲームのシナリオで。お前らはゲームのシナリオ

に糸で吊るされたマリオネットで、俺もただの主人公演じる操り人形なのだろう。
だとしても、これは現実に起っている。今まで俺が傷を負わなかったのは運が良かっただけ。少しでも間違えば――致命傷以上だ。

「ぼくはこれでも、ユキ様がだだだだだだ大好きなんだあ、だからユキ様に悲しい顔をさせたきみを許さないよお！」

刃物の一直線に胸の前へ向け前に体重をかけて、一心不乱に俺へと向かってきた。

「くっ」

動きは余りにも直線的なので避けることは容易かった。しかし、それも一人ならでの話である。

「俺もいくぞおおおおおおおお」

「！？」

見よう見まねか横から抉ろうとするがごとく、右から刃を振りかざす。シュッと空気を切り裂くと、学ランの生地まで切れた。
幸い掠っただけで、刃もワイシャツを切り裂くには至らなかったが――

「なんてことしやがる！」

横腹が裂かれ血に溢れるところだった。しかしこいつらは既に怒りのあまり思考が働いていない。
ただ、俺を傷つけてこの怒りを晴らしたい――

「（ここに留まってられるかっ）」

そうして俺は出口を目指す。そしてこれは大きなチャンスだった。人は正常な判断を混乱時には失う――守護神のように立ちふさがっていたガタイの大きい男性生徒はこちらに鈍器を向けるばかり離れていた。

今なら、出れるはず。

「（いけるかっ）」

俺は他の生徒に目もくれずダッシュした。帰宅部生徒会所属の俺が全速力で走った。

「ぐあっ」

俺の動きに気付いた野郎共が攻撃を食らわせてくる――左横腹に木製バットが入った。

金属バットでなくてよかった、刃先でなくて良かったと思ったが、やはり痛みはある。

左横腹を左手で抑えつつ、それなりの重量のある鉈を右片手で持って駆け抜ける。

そうして扉まで数メートルに迫っていた――

「うぐっ」

鉄パイプが足に入り、転倒。チャンスとばかりに集まって来る野郎ども。

手を伸ばせば扉があった。だとしても足は鉄パイプの衝撃にやられていた。

「（万事休すか……）」

俺はそんな言葉が脳裏に浮かんだが、必死の思いで激痛走る足を動かし扉のドアノブを回した――

「ユウジ様っ！」

その声を聞いた途端に俺は手を掴まれ扉の中へ吸い込まれる。
そしてその声の持ち主は――

「！　なんて怪我を……今すぐここから！」

「ああ、うん」

あれだけ想いを伝えるだのなんだの言っていた相手なマイだった。
彼女は制服のブレザーポケットからなにやら鍵を取り出すと屋上の扉ををガチャリ閉めた。
なんというか、呆気に取られていた。言われるがままに肩を貸りて貰い階段を下りて行く。

「保健室に向かいましょう」

「ありがとな……姫城、あのな」

痛む横腹を抑えて言う。

「……とりあえず処置しないといけませんね」

「すまん」

後ろでは扉がガンガンと叩かれ、それは階段中に反響する。

しかし俺はそんな音などどうでも良く、それどころではなかった。

……彼女が隣に居るせいで心臓の鼓動が速くなっていたからで――

――そうして周囲に者が騒然する中で、俺とマイは保健室へと辿りついた。

第１５０話　√１－５５　※独占禁止法は適応されませんでした。

「え、えと……篠文さん？　それは一体――」

篠文さんの言葉の意味が分からない。フラれた？　それは俗に交際を断られたという解釈で――

「私はユウジに好きと告白したんだ」

「！？」

篠文さんがこ、こここここここここここ告白をっ！？　先手を取られました！　勝ち目ないですよ！

ユウジ様は篠文さんを好いていたように見えますし、もう断る理由が無いじゃないですか！

「でも、断られちゃった」

「な、なぜですか？」

とても篠文さんには言いにくいことかと思いますが……篠文さんに問います。

何故ユウジ様は断ったのでしょうか。

正直、私から見て羨ましいほどに明るくて可愛くて……幼馴染を抜きにしても魅力的な女性だと言うのに。

「好きな人が……居るんだって」

「っ！」

好きな人……好きな、人？　好き、な人？　スキナヒト？
私はその言葉の意味を考えます――ユウジ様にとって、好きな人……ですね。
だ、だだだだだだだだだだ誰なのでしょう！　篠文さんでなければ――最近話す機会が多くなった愛坂さん？
それとも巳原さん……いやいや、もしかして妹さん？　または居候しているホニ……さん！
あああああああ、ユウジ様が魅力的なのは分かりますがなんでそこまで候補が居るんですかあああああああっ！？

「お、お相手は……？」

断られた篠文さんはいたく傷ついていると思いますが……こればかりは聞き出したかったのです。
少し躊躇して渋っていて、もしかして言いにくい相手なのかなと、危惧して矢先に。篠文さんは衝撃的な名前を口にしたのです。

「姫城さん」

……え？

「え？　えーっと？」

「姫城さん、あなただって」

「え、へ？　えええええええええええええ！　冗談ですよね！？」

嘘だ！

そんなことあるはずがないじゃないですか。私が一体なにをしたらユウジ様が好きになってくれるのですか！？

「冗談じゃなくて……気付かない？　ユウジって最近姫城さんにメロメロだったよ？」

「え、え！　そ、そうなのですか」

すると篠文さんは、はぁっと盛大にため息をついて――

「も、もう！　ここまで言ったんだから行ってきなさい！」

突然口調が変わり、今までの落ちつきを吹き飛ばしながら言う篠文さんに圧倒される。

「え、ど、どこにですか！」

「ユウジのとこ。今喧嘩してるんでしょ？　さっさと捕まえてきちゃって」

確かに私の見たのは鈍器を持って何かと戦っている姿――

「で、でもですね――」

「ウダウダ言わずに行く！　ユウジってば姫城さん探しに行ったのに何処行ったかと思えば……屋上で喧嘩とかさあ」

ユウジ様は私を探していたのですか……！　なんて間の悪い事を

クラスメイトは頼んだのでしょう！
　恐らく教室に向かったのでしょうから……くう、居れなかった私が情けないです。

「そ、そうでしたね！　ユウジ様、喧嘩してたんでした！」

「……忘れてたの？」

「ちょっと衝撃的だったもので……」

　それはユウジ様のお気持ちがまさかの私に向いていつだなんて…
…妄想ならあったにせよ、想像も出来ませんでした。

「……まあ、いいから！　とにかくユウジにとっ捕まえて、告白されちゃいなさい」

　告白される、のですか！？　するのでなく！

「そ、そんな心の準備が！」

「もう、そんなんじゃ私フラれ損だよ」

「え、それはどういう――」

　フラれ損……それじゃまるで答えが分かってて告白したような――

「武器もってたんでしょ？　渋い顔してたんでしょ？　……ピンチかもしれないのに姫城さんはここで留まるんだ？」

「！」

少し嫌みなのか小悪魔のような表情で言う篠文さん……今日は初めてみる表情ばかりです。

「私は先生呼ぶから、ユウジを先生に見つからないように移動して」

「は、はい！」

「じゃあ、ほら行ってくる！」

「は、はいっ！」

私は篠文さんに背中を押されて走る。屋上……あの階段を上り続ければいいですね。

すると階段途中で――

「ちょっとそこの方」

「は、はい！」

女性の声……！　先生かと思って振り返ると――なんともお美しい長い黒髪の上級生。どこか悪魔的な妖艶さえ漂わせています。

腕の腕章に輝くのは生徒会役員の文字――

「はい、これ」

「えっ」

手渡されたのは一つのカギ。

「これ屋上の鍵だから、それじゃ」

「え、あの！」

すると鍵に目を落としている内に生徒会役員さんは一瞬で姿を消していました……この鍵は、屋上の鍵？

なぜ今、私に、これを？

「急がなきゃ」

ここで立ち止まってはいけませんね。そうして階段を上りきった先では金属と金属がぶつかる音が聞こえます。

「！」

すると屋上手前で、屋上への扉が少し開き――

「ユウジ様っ！」

そこには扉の前で倒れるユウジ様――外から聞こえる怒声。

「！　なんて怪我を……今すぐここから！」

どうやらユウジ様は脚を怪我されているようです……痛々しいで涙が出そうです。

「ああ、うん」

……もしかしてこの鍵は、ユウジ様を逃がす為に？

と、とりあえず喧嘩相手が追って来ないようにガチャガチャガチ

ヤリと扉の鍵を締めます。

「保健室に向かいましょう」

足を怪我しているようですね……少し恥ずかしいですが、肩を貸した方が良さそう？

ユウジ様のお腕が私の肩に……！　たまりません、けれど興奮してる場合いじゃないですね。

「ありがとな……姫城、あのな」

！　何を言おうとしているのでしょうか？　も、もしかして……ここここここ、告白を？　こんな場所で？

え、ええっと……出来れば落ちついたところがいいです。

でも、もしかして篠文さんが勘違いで、もしかして私でも篠文さんでもない別の方だったら――

聞きたくないです。まだ、まだなんです。もし私だとしても心の準備が出来ていません！

「……とりあえず処置しないといけませんね」

「すまん」

とにかく話題を逸らすというか……はい。ごめんなさいユウジ様。

後ろでは扉がガンガンと叩かれていて、それは階段中に反響していました。

でも私はそんな音などどうでも良くて、というかそれどころではなかったのです。

……ユウジ様が隣に居るせいで心臓の鼓動が速くなっていました

――そうして周囲に者が騒然する中で、私とユウジ様は保健室へと辿りつきました。

第１５１話　√１－５６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

いやあ、やっと終わっ――ってませんよ？　これからは堂々とイチャイチャ編？　リア充爆発しろ（笑）

第151話　√1－56　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ありゃー、これはひどい」

保健室に付き保険医に惨状を見せるなり言われた。

「左脇腹は打撲で済んでるけど……右足は折れてるね」

なんという宣告。どうりで痛い訳だ……てか動かすと激痛が走って結構キツいな。

まぁ木製バットが脇腹に。右足に鉄パイプが入ったなら、それも当たり前だろうな。

「あまり強くは折れていないし、全治3週間ってとこかな」

と言って保険医は痛む箇所を矯正する為に板を入れて包帯でグルグル巻きにして右足はがっちり固定された。

ああ、松葉杖確定か……

「それで……どうしたらここまで?」

ちなみに保険医の差すのは脇腹と右足のことではない。

「いえ……ちょっと、色々ありまして」

鉈を振りまわした弊害が出た。慣れない動きに体中が悲鳴をあげたようだ。

闘っている時さえ気にも留めなかったが、一安心入れるとこれだ。

見事なまでに全身筋肉痛だった。

あまりバトルのことは言いふらしたくない……一応傍からみれば喧嘩なのだが、俺は襲われて自己防衛の為に鉈を振りましている訳で。

そういえば鉈を持っていても「ああ、文化祭の道具ね」と保険医は勝手に納得。文化祭準備万歳だね。

「あー、ベッドに運んでおいてあげて」

保健には顎でカーテンに包まれたベッドをマイに差す。

「は、はい」

マイにはまた肩を貸してもらい、保健室のベッドまで運んでもらう。

……少しの振動でも体に響いて痛い。案の定ベッドに辿り着くと同時に仰向けにぶっ倒れた。

「おわっ」

「ユ、ユウジ様っ？」

「はは、情けねえ」

自分のことをそう思う。鉈振りまわしただけで全身筋肉痛とか情けねえよなあ。

「……そんなことありません」

「え？」

「ユウジ様は……その」

「……」

「失礼しますね」と彼女はベッド横の椅子に腰をかけて、俺を見ればマイは不安に満ちた表情を形作る。

ああ、俺告白するんだった。俺はマイと会う為に屋上に向かって、それから早く会う為に戦った。

よし、せっかく会えたんだ。ここで告白してしまおう……当たって砕けても悔いはない。

「え、えと……姫城？」

「は、はぁいっ！」

不安に満ちたマイの顔が一気に茹であがった。ん？　なぜ？　どちらかというと真っ赤になりそうなのはこっちだって……

「姫城に話があるんだ」

「は、はい！　なんでしょう！」

背筋ピーン、緊張ガチガチ。なんとも俺とマイは同じ精神状態だった。

俺はフラれたらどうしよう……今度こそ立ち直れないかもしれない。

いや、だけども！　こうして皆に背中を押して貰って手に入れたチャンスを逃がすわけにはいかないっ！

「突然で悪いな……それにこんな場所で」

本当に突然だし、よりにもよって保健室。ああ、もっとロマンティックな場所にしたかったもんだね。

しかし俺の今の身体状況故、お許し願いたい。ああ……ベッドで体を起こした状態から告白するんだもんなあ。

すげえ、格好が付かないよなあ。

「……っ」

「俺は……俺は」

彼女の顔を一直線に見て。……整った日本美人な顔立ちに紅潮した頬や不安と緊張が入り混じった表情。それを見て俺は覚悟を決めた。

すぅ、タメを作るように俺は息を吸い込んだ――よし。

「俺は、姫城マイが好きだ」

きっぱりと言い放った。その後は時が止まったかのような感覚を覚える。

目の前の彼女は完全に固まっていた。そしてこの世のものとも思えないようなものを目撃した表情だ。

えーと、困るって。そういうのが一番怖いんだって。それで、答えをよこさずに去っていくなんて俺のトラウマストライクなことないよな？

なあ、マイ？　フルならきっぱりフッてくれ。でないと、俺は――

「う、ううう……」

「!?」

彼女は目に大粒の涙を溜めて、何か留め具が外れたような、解放されたかのように泣き始めた。

ぽたぽたと、涙は溢れ子供のように泣きじゃくった。……そんな彼女の姿はもうショックで。

「あ、あの姫城……？」

「ううぅ……」

ああ、こりゃダメか。もうダメなんだろうな。ああ、人生二度目の恋散る――

さっきからネガティブオーラ全開で、かつてのマイを想像させる思考を展開していた俺に、ある言葉が届いた。

「よ、よかったぁ」

「え」

ぐしゅぐしゅと手で涙を彼女は払うと、少し落ち着いて続ける。

「ユウジ様から言って頂いて……本当に、本当にうれしいです」

少し目を赤くした。それでいながら嬉しそうに頬を染め、柔らかな笑顔を浮かべる彼女がそこには居た。

「私はユウジ様が好きです」

マイは確固たる意志を持っているかのようにきっぱりと言った。
そんな一瞬みせた精悍な彼女の表情にもドキリと来る訳で。

「私からこそ、宜しくお願いしますっ」

それを言われた途端に、何かが抜けた。腰……いや？　理性……
いや違うね。そう、意識が抜けた。
緊張の糸がプッツンと切れて、俺はベッドへと仰向けで倒れた。
生徒会や今日のバトルの疲労が重なった上に一月以上マイのこと
で唸っていた訳だ。

そりゃあ、もう人生最大の告白を受け取ってくれたのだから。シ
ョックと安心のあまり意識飛んでもいいだろう？

え、だめ？　あ、そう。でも、悪い――少し寝かせてくれ。
耳元ではマイの俺の名前を呼ぶ声が少し聞こえたが、すぐに止ま
り、体に布団が被せられることを感じると意識は完全に堕ちた。

番外０９話　番外２－３　下之家のあれこれ。（前書き）

実はこれ、壮大なネタバレだったり。　もっと描写力身につけたいなー

番外09話　番外2－3　下之家のあれこれ。

「き～り～」

「おお、ホニか」

桐の部屋にやってきましたー

部屋に在るのは小学校の教材が収められた本棚とパソコンの点けられた勉強机にベッドだけ。

案外殺風景ですねー……もっと、なんか薬品とか秘密の文書とか有ると思ったんだけどなー

でもきっと、来る度色々ゲーム道具が出てくる押し入れが怪しいかな。きっとそこには何かある。我はそう断言するよ！

それで我が来た理由はですねー

「ゲームしよー」

「うむ、良いじゃろう！　今度こそわしが勝たせてもらおう」

小学校なのか早く帰って来るのでよく桐とはゲームをします。

時々訪れたり、自分の部屋に招いたりして二人遊んでるんですよねー

「じゃあ、今回も我が勝っちゃおうかなー」

「ぬぬぬ、言わせておけば……望むところじゃ！　それで、きょうのげえむは一体なんじゃ？」

「将棋！」

「わかった、今出すからの。そこにでも腰かけておいてくれ」

なんか言いまわしが本当におばあちゃんみたいだよね、桐って。

「またせたな、では参ろうか」

「うん！　勝負――」

３０分後。

「桐に大手っ！」

「くぅ、これで3回目じゃとっ……」

「ふっふ～ん」

ハナタカダカ～、我はゲームだけは強いのだー

「おのれ～～っ！　ここまでコケにするとは！　ホニ、表に出るのじゃ！」

「いいよー」

ちなみに、桐は負ける度に庭へと出ろと言ってきますー

それで我も庭に出て――

「準備はよろしいかの？」

「うんっ」

そう我と桐は――

「能力”物体創造”発動！　木刀創造っ」

両手を天へと上げ、そう叫ぶと辺りは光に包まれる。
そうして桐は木刀を何処からか生み出し手に取る。

「母なる大地よ、源の海よ、永遠に広がる空よ。全ての自然よ我に見方せよ！　”風”」

その時の庭には小さな、本当に小さな竜巻のようなものが現れる。
実は我、神様である。それ故に色々出来るのだー

「うぬう、今回は風を味方に付けたのかっ！」

「前回は水に見方してもらったね」

と、くるくる竜巻を手に収めてそう思い出す。ああ、あの時は服が濡れちゃって止めたんだっけ……

「今度は濡れる心配ないからね！」

「わしの本領発揮じゃなっ」

「そうは行かないよー」

ビュウウウと風が吹き荒れ、それを切り裂く桐の木刀。二つの力がぶつかった――

と、まあ。実は我たちガチバトルを庭内でやってます。

一応それはユウジさん達には秘密で、知ってるのは戦ってる当事者だけなんだよね。

この力もなんで持ってるかは分からないけど、こうして桐とじゃれるだけで。

本当に戦う道具として使う日が来ないといいんだけど……

「ぶっふぁ」

「ああ、桐どーこーいーくーのー！」

桐が突風のあまり吹き飛ばされしまった……力加減すべきだったよね。

ごめん、桐……忘れてた。

「ごめん、きり～」

「きゅう」

ああ、桐目回しちゃってるよ……

え、えと！　我はそんなこんなで楽しい日常を過ごしています！

（無理矢理な締め）

第１５２話　√１－５７　※独占禁止法は適応されませんでした。

えー、こんにちは。ナレーションのナレーターです。
さてさて、あれからどした？　と、お思いの方多いですよね？
えーと、一応こんなことがありました――

職員室に向かったユキは、捕まえた教師に事情を伝えました。

「先生こっちです！」

と、ユキが職員室に居た先生（体育教師）を引き連れて、屋上に向かいました。
ちなみに、鍵が閉めて立てこもっていることも考えて、鍵も一応用意したそうですね。
それで、いざ屋上に着いてみれば、鈍器やら鋭器やらを持って待ち構える男子生徒達。
一部はどこからかロープを持ってきて、丁度屋上から脱出を図ろうとしていた頃合いでした。
体育教師はそれはもう大爆発。立てこもりの上に立ち入り禁止の屋上で鈍器・鋭器を持って居る訳ですから。
一方のユキは男子生徒の額に輝く「ユキ様ＬＯＶＥ」の文字に絶句していました。
長々と体育教師が説教を始め「だとしても下之ユウジが――」といい訳を展開しようとしても体育教師は止まりません。

そんな時に屋上を大きな風が吹き抜けました。

バサバサと音を立てて吹き飛んできたのは一枚の紙。
そこには「ユキ様告白　下之断る　武器を持って集合　ユウジ張り

倒す」と書かれており、その四つの単語で想像が付きました。
実は風の噂で、ちらっと聞いていた「私」のファンクラブ思い出し
「私」がユウジに断られたことでファンクラブの反感を買ったので
しょう。
それを考えた途端にユキはそれはもう大爆発。体育教師との双璧を
なす怒りっぷりを披露し、信仰していたユキに怒られてファンクラ
ブメンバーはどん底へ。

一方その頃保健室では、意識がぷっつん途切れたユウジを見守る姫
城の姿。
あーもう、なんか見てるだけでイライラしちゃうな。
お二人がたがこうして二人居れるのはユキとユイの背中押しがあっ
たからなんですからね？
でも、まあ、くっつけて良かったですね。一応祝福しておきますー

ユウジが起きる頃には日は傾いていて、姫城は椅子に座りながらす
ぅすぅと寝息をたてていました。
彼女には彼女なりに考えていて、更に文化祭の準備とユウジ関連で
疲れたのでしょう。
ユウジはあまりに心地よさそうに眠っている為、起こすのを躊躇し
ましたが、これ以上日が暮れるのは良くないと。

「マイ、マイ」

と、肩を叩きました。

「……はっ、すみません！」

と条件反射のごとくビクリと背筋を伸ばして謝ってきます。

「いやいや、俺こそ……なんか寝ちゃったみたいで」

「お疲れのようでしたし、それに……ユウジ様の寝顔は格別でした！」

なんとハズカシイことを言うんでしょうね。

「え、えと……日も暮れたし帰っろか？」

「は、はいっ！」

夕暮れに向かって校門を出る二人の男女、影は並んで歩いて行きます。

――と言えば、なんとなくロマンチックですが。

「くぁー、慣れねぇな」

「だ、大丈夫ですか？」

松葉杖を付きながら歩くユウジとその歩調に合わせて歩く姫城。

う～ん、ユウジのせいで台無しといったところでしょうか。

「まー……2、3週間で治るってんだからいいけどね」

と、苦笑しながらユウジは言います。

「……これじゃマイと文化祭回りづらいのが、残念だ」

「え」

なんか告白した辺りから調子づいて言ってるのか、それとも天然かは分からないですけど。
何言ってるんですか、ユウジ。そんな口説き文句通じる訳――

「っっっ！」

あーあ、姫城顔真っ赤。まあ姫城だもんね……ユウジにベタ惚れだし。

「ま、松葉杖で歩ける程度でさ。マイ……付き合ってくれるか？」

「は、はははははいっ！」

あーあ、リア充なんか爆発すればいいんですよ。
そしてこのノリなら、どーせ手を繋ぐのにも一月ぐらい要するんでしょう？
なんですかねー、本当に。

まあ、いいですよ。ナレーションでグチグチいっても仕方ないですし。

そんなこんなで文化祭準備の一日は終わります。
ちなみに松葉杖姿で帰ったユウジを見てユウジ姉は卒倒し、ホニは混乱し、桐はため息、ユイは唖然としていたそうな。

第153話　√1－58　※独占禁止法は適応されませんでした。

「はぁ～、やっと松葉杖取れた」

おかげ様で骨折はほぼ完治しましたー。いやー、なんというか治癒力が常人よりも凄い気がするんだけど？

流石クソゲー、歪みねえな！　関節じゃあるまいし、骨そのものの復元早過ぎだろよ！　……いや、好都合だけど。

「なんというか、祭りの後の静けさって奴かねぇ」

文化祭からほぼ1週間。あの喧騒はどこへやら、今は平常を取り戻した藍浜高校。

ユキ様ファンクラブの活動は無期限休止にさせられたらしい、それもユキ自身の手で。

あちらこちらと走り回った生徒会メンバーはと言えば――

「ああ、真っ白に燃え尽きたぜ」と福島が某ボクサー漫画のラストを思わせる雰囲気を漂わせ。

「ふぁぁ」と、盛大に眠気全開なごとくに欠伸をしている会長。

「……」いつものクールさはどこに行ったか、船をこいでいるチサさんがなんとも新鮮だ。

「つ、疲れました……」心底疲れた表情でため息を吐くオルリス。

「この学校の文化祭は楽しいいなぁっ！」と、何故か一人テンション高いままのユイ。

文化祭の翌日の生徒会による反省会はそんな悲惨な物だった。
それ程に疲労困憊してしまっているのだろう。俺も前日にフィードアウトというのは申し訳なかった気がしてならない。
それでもチサさんは――

「しっかり体治すのよ」と、なんという気遣いに溢れた言葉を頂いた。

甲斐あって、1週間のスピード完治で。なんとか今日からは普通に歩けるようになった。

「ね、ユウくん……本当に大丈夫？　辛くない？　痛くない？」

玄関で顔を覗きこんでまで心配する姉貴。

「だから大丈夫だって」

主人公パワー恐るべしと言ったところだろうか？

「じゃあ学校行ってくるかな」

「私も」

ちなみに例によってユイとは登校を同じにしない。先に出て貰っている。
いや、だとしても「遅刻遅刻～」と食パン銜えながら走って行く意味はあったのだろうか……いや、多分ないな。
というか、家からそれほど遠くないから登校にも余裕を持たせてるし。

「いってれっしゃいじゃー」

「いってらっしゃーい」

桐とホニさんの見送りを背に、俺と姉貴は通学路を歩いて行く。

「ねぇ、本当に大丈夫？　肩貸せるよ？」

「だから、このとーり」

と少し乱暴に足をブンブン振ってみる、実際痛みはない。

「で、でも！　私が肩貸したいというか！」

「……はい？」

「だって！　ユウくんと密着出来るチャンスなのに！」

「本人目の前にして堂々言うなよ……」

はぁ、姉貴がここまで俺の事気にしてくれるのも嬉しいことには嬉しいけどブラコン過ぎだよなあ。

「でも、本当に心配したんだからね！　まさかユウくんが喧嘩だなんて……取り返しのつかないことになったらどうするの！」

「ご、ごめん」

俺は素直に怒られる。あの事柄を説明すれば、ぞれは当然のこと

で、それほど心配をかけてしまった。
なんかんだ姉貴は良い姉さんで、こうして本気で心配もしてくれ
――

「だからバツとして……お、お姉ちゃんにキスを」

「なんか大胆になってね？　もちろんダメな方向に」

冷静に返した。……なんだこの姉は、そんなことまで言いだすのか！

「ユウくんが良いなら、く、唇もいい……よ？」

「自分で言って照れるな」

自分で言いだした癖して顔真っ赤である。ああ、良い姉なんだか、悪い姉なんだか……
そんな風に時折行う姉弟の掛け合いをしていると、いつものユキ合流ポイントに着く。

「あ、おはようユウジ」

「おはようユキ……って、え？」

ユキの外見が変わった。

「ん？　どうかした？」

ユキのその変貌振りに驚いていた訳で……どこがどうかと言えば
――

「その髪……」

「え？　この坊主似合う？」

ええええええええええええ――

「って違うだろ！　髪短くなってるってことで……って言っても坊主じゃないから」

「あらユキちゃん、髪切ったんだー。短髪も似合ってるよ！」

「ありがとう、ミナさん」

「それで、どうしたんだ突然？　あんなに伸ばしてたってのに……」

「……ふーん、ユウジそんなこと聞くんだ？」

「え、いや、その……」

「幻滅しちゃうよ？」

さりげなくショックを受ける俺。

「いやいや！　似合ってるから、大丈夫だな！　なんというか新鮮だな！」

「ふふ、ありがと」

よく見ればユキは小悪魔的表情を浮かべていた……か、からかわれていたのかっ！

「まあ、でも言えることだとしたら……一区切りかな？」

「え？」

「なんでもなーい、早く学校いこ」

「あ、ああ」

そうして俺達は学校へと向かった。すこし駆け足で、ユキを追うように俺と姉貴が。

いつもの日常のようで、少し変化している。ユキの髪のみならず、関係も。

文化祭前準備のあの頃から――それでもかつての日常へと戻ろうとしていた。

戻ろうとしても出来ない、したくない事が俺には有った。

学校に着き下駄箱で履き替え、教室で待っていたのは――

「おはようございます！　ユウジ様っ」

朝一番とびきりの笑顔をくれるマイの姿。そう彼女と俺の関係は変化を遂げた。

かつてのクラスメイトから友人、親友と――

「ああ、おはよう」

マイは彼女になった。俺はマイの彼氏になった。

俺とマイはあの時から付き合い始めたのだった――

第１５４話　√１－５９　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

ユイさんマジイケメン

第１５４話　√１－５９　※独占禁止法は適応されませんでした。

「おー、ユウジ松葉杖取れたのかー」

「ああ、おかげさまで完治だぜ！」

「んー……はやくないかぁ？」

そこに気付くとは、さすが。

「そりゃま、１日３０回ベホ●ミかけてたらな……」

「すげえ！　けど、自分の怪我をネタに使ったユウジの方がスゲエ！」

なんとまあ、いつも通りの空気が流れていた。

「良かったです……」

「ああ、色々サンクスな。マイ」

「いえ、そんな！　ユウジ様のお怪我が良くなって本当にうれしいです！」

実は、まあこんな感じで。今まで照れまくっていた俺は何処へやら。

次第に平常心を保てるように、特に意識しなくなった。……いや、もちろんマイのこてゃ大好きだけども？

胸のつっかえが取れたというか、俺はマイと付き合っているとい

う安心感からだろうか？

「ふぅーん」

「な、なんだよユイ」

「あの動揺しまくりんぐなユウジはいずこへ？」

「フッ、そんな昔のこと穿り出すなよ」

「うわ、なんだその返し」

「俺は変わったのさ、イメチェンしたのさ」

「いや……なんか使い方おかしくなってるぞ？」

かつての俺風（ボケｖｅｒ）でユイのツッコミを返したらテンション上がってきたあ！

まー、読者が望んでいるのはこんな会話なんですかね？
ギャグモノだと思って読み進めていたら、いきなり純情恋愛モノになってるんですもんね。
にしては今までのコメディパートに時間注ぎ過ぎて、力を入れるべき恋愛描写が雑になって――

え、なんですか？　私に説教？　え、作者が？　はは、冗談っ。

「まあ、ユイには感謝してるぞ」

「な、何の話だ？　それはアレか？　こないだ貸したエロ本か？」

「え、ユウジ様。それはどういう？」

少し瞳に闇を秘めて聞くマイ。

「ユウジ、やっぱり……そだよね。男の子だもんね」

諦めたかのように突然俺から視線を逸らすユキ。

「借りてねーよ！　そして持ってもいねーよ！」

ちくしょー、今日はボケに徹する事が出来ると思ったのに！

「ほほー、そんなこと言っていいのか？　アタシは知ってるんだぞお？　ベッドの下に。あるんだろ？　な？」

「そんなテンプレなとこに置くかっ！」

「あ、持ってるのは否定しないんだ」

「う」

やってくれたな誘導尋問！　なんだこの少年漫画にありがちな誘導はっ！

……そんなものにひっかっかる俺ってどうなんだろ？　俗に言う「阿呆」の類かもな……はは。

「そういえば、ユウジはスク水フェチだっけ？　そういう系多し？」

あっけらかんと俺のシークレットゾーンを暴露する渦巻き眼鏡野

郎。

「ユウジ様……そうなのですか？」

深海のごとく澄んだ闇色の瞳で見つめてくるマイ。

「へぇー、ユウジが……男の子だからね」

それを聞いた途端少し遠ざかるユキ。……な、なんてことを！

「ははぁ、ユイ。そんな嘘で固められた冗談は止めときなよ？　そんな身も蓋も無い話――」

白を切ってみる。てか切らないと俺のイメージが……！

「そういえば巳原さんが言ってましたね……」

うわー、海の時言っちゃったじゃーん！

「男の子だもんね！　男の子は皆スクール水着が好きなんだよね！　そうなんだよね！」

「ユキ落ちついてくれ！　声めっちゃ響いてクラスの皆振り返ってるから！」

現在会話中の俺らはクラスの注目の的。うわーい、目立ってるぅ！

「ご、ごめん……そうだよね。人の趣味をとやかく言うのはまずいよね」

「いや、なんというかゴメン。流石にこれは趣味としては誇れないわ」

好きなのは譲れないけどね！

「で、散々お茶を濁されたが……ユイには感謝してるぞ」

「うーむ……そうか、あれか。あの風呂をの――」

「えーい黙って聞け！」

横やり入れんなと……こちとら真面目に言おうとしてるってのに。

「ええと、気になります」

「私も気になるんだけど」

まさかの食いつきを見せるマイ&ユキ。

「お二人方、こいつの妄言は基本スルーしてください」

「ええー、ノンフィクションで脚色してお話しようかと思ったのに」

「矛盾どころの話じゃねぇな！」

ノン、じゃねえ。

「もういいや、ユイだけこっちこい」

「え……姫城さんという人がありながら？」

「なんですか、ユウジ様？」

「なに、ユウジ？」

お二人方は揃いも揃ってダークオーラ放出中。こいつぁやべえぜっ！

光速、いや音速で、違うな高速か、いやいや早歩き……これだな。

俺は早歩きでユイをクラスの隅に誘導した。

お二人方が付いてきそうになったので腕と腕を交差させてバッテンマークを作ると、しょぼんとしながら戻っていった。

「で、話とは？」

「あー……大したことじゃねーのによ、お前のせいで」

「いつも通りのアタシだ！」

「いや、その通りだけども！」

そろそろ言わないとな、うん。茶化されたまんまじゃ癪でもあるし。

「いやさ、色々背中押してくれてありがとな」

「……ああ、そんなことか」

「そんなこと？　俺はユイに背中を押されたからこうして……」

「いやあ、友人の恋のキューピッドになるなんてステキジャン」

「そ、そうなのか？」

「んだ。それで結果は……聞かなくても分かるか」

「おかげさまで」

「ふん、せいぜいイチャイチャするのは二人だけの時にしろ。リア充とかアタシが一番嫌いな種族だからな」

「そんなリア充を生みだしたのもお前だけどな」

冗談混じりで言ってみる。なぜ、ここまでしてくれたのかと。

「そりゃあ、親友のユウジと姫城さんとあっちゃあ仕方ない」

「ユイ……」

「まあ、せいぜい幸せにやんな」

と、言うとユイはユキ達のところへ戻って言った。

「本当に……ありがとうな」

一人、人に聞こえないぐらい小さな声で呟く。こんな親友を持てて、俺は心底幸せだと思った。

第１５５話　√１－６０　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

あぶねー

第１５５話　√１－６０　※独占禁止法は適応されませんでした。

昼飯。いつものメンバーでのランチタイム。いつもと変わらない他愛もない会話。

最近面白いアニメだとか、最近つまらないアニメだとか、ハマッたギャルゲーとか、集め出したアニメグッズなどの話題がユイ、マサヒロ間で繰り広げられている。

よく事情は知らないが、マイとユキが最近一気に親密になったようで、よく休み時間に話す光景を垣間見れる。マイも打ち解けてきたってことかな？

双方の話題に入ったり抜けたりして丁度中間地点に居るのが俺である。もっともユイ、マサヒロ側は最近はアニメを観る時間がないので話半分だが。

「あ、そうだ」

アニメのあの回がなんちゃら～と鼻息荒く熱弁していたユイが突然思いついたようにふっと会話を切る。

「どした？」

なんとなく飲みたいので買った紙パックの野菜ジュースのチューチュー吸いながら聞いてみる。

「ところで御二人さん、あの後から恋人らしいことはしたのかな？」

「ぶふっ！　げほっげほっ」

噴き出す直前で口を固く閉じたまではいいものの、思い切りむせた。

「あー、それは私も気になる」

「え」

ユキが興味津々に箸を置いて身を乗り出して言う。

「あ、それは……」

「えーと」

まさかユキが食いついてくるとは……いやぁ弱ったなあ。

「ん？　何の話だ？」

先程まで興奮度マックスであのスタッフは云々～と語りまくっていたマサヒロが状況を読めていないらしく首を傾げて聞いてくる。

「いやさ、お二人さんって付き合い始めたばっかとはいえ、ここまで二人の態度があまり変わっていないのに疑問を持ってなあ」

「ん？　はい？　付き合う？　誰が？」

「「！？」」

「な、なんだよ……そんな驚いた顔して」

「いや……え、マジですか？」

冗談だろうと問うが、残念ながらマサヒロは真顔だった。

「なんだよ！　もったいぶらずに教えてくれよ！」

「「……」」

メンバー沈黙。えーと、まずは何処から話せばいい？

マサヒロの状況把握能力がここまで皆無だなんて……流石に気付いてくれるかと思っていたが。

確かに、態度もかつてと似たような感じだよ？　だとしても、ユイに散々ネタにされた「動揺しまくりんぐな俺」を見てて何も思わなかったのだろうか。

「えーと、だな――」

言いかけたその時、思わず人物の横やりが入った。

「え、下之さんと姫城さん付き合ってるんだよねー？」

「な、なんだって！」

思わぬ人物とは、クラスメイトの女子。さも誰もが知っているかのように聞いてくる。

そして驚くはただ一人だけ。

「ユ、ユウジ！　どういうことだ！　説明を要求する！」

「いや、話すけどさ……いくらなんでも気付かないか？」

ちなみに一応ファンクラブが存在するマイなこともあり、クラス中に知れ渡っている。

松葉杖時代に介抱してくれるマイの姿もクラスメイトしかり生徒には焼き付いているようだった。

「一応俺はだな――」

「まさか、副会長さんと姫城さんが付き合ってるなんて」

「「……はい？」」

「えっ」

皆が口を揃えて聞きなおし、マイはただ呆然とした。

「いやだって下之〝さん〟だろ？　この流れだと、そうとしか思えん」

「いやいやいや！　それじゃ女同士じゃねえか！」

「何か問題でも？　……それとも同性愛を貴様は否定するのかユウジッ！」

「いやそう言う事言ってるんじゃねんだよ」

「じゃあ、何だ？　副会長と姫城さんは付き合ってないのか？　そうなら誰と誰が付き合ってるか言ってみろ」

もろ上から目線な上に、周知の事実をさぞ胸を張りながら聞いてくるトンデモ勘違い野郎なコイツは何なのだろう。

「いや、だから俺とマイが付き合ってるんだって……」

「……は？　お前と姫城さんが付き合ってる？」

「ああ、受け取れる情報の通りのはずだけども」

「……ははっ、冗談言うなよ！　それなら俺だって気付いてるはずじゃないかー、こんなに行動するのが一緒なんだからさー」

「「……」」

「え、皆知ってたの？」

こくりと、揃いも揃って頷くメンバー。というか、さきほどのクラスメイトのみならず、教室中のクラスメイトが無言で頷いた。

「な、なんだとおおおおおおおおおおおおおおおお」

その驚愕の声は教室を抜けて廊下をも響き渡る。

ああ、俺が言えタチじゃないが。そこまで鈍感なのはどうなのだ

ろうか。

「なんだって……あのユウジが、ついモテるけど付き合いはしない、結局は俺の仲間止まりだとばかり思っていたのに」と一人頭を抱えて呟くマサヒロ。

は、すかさず放置を決め込むことにした。

「で、ユウジ。恋人らしいことは？」

「いや、その……」

俺は素直に言ってみた。うん、素直なのが一番だよな！　嘘はイクナイ。

「ばっかやろおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

「！？」

「舐めてるのか貴様わあああああ！　そんだけ美人な彼女捕まえてきて、何にもなしぃ？」

「う」

確かに俺には勿体ないほどな美人さんなマイと付き合うことになった。……だとしても、あまり変わった感じがしないというか。

もう、一緒に居られるだけで、話せるだけでいいんだよな――

「ほ、本当？」

ユキも疑問気に聞いてくる。

「あ、ああ」

それを聞くとユキ、ユイともども心底呆れたように盛大にため息をついた。

「……いいのか姫城さん？」

「えっ」

「そこまで無情な彼氏で」

言われたもんだ……いや、まあ仕方ないか。誘うことも出来ない俺が悪いんだしな。

「え！　えっ！？　そんなことないですっ！」

「付き合ってから一週間ほどだ。だがしかし、デートどころかキスもないだとっ！　この純情ロマ●チカ野郎！」

「それ意味が違ってくるから！」

必死にツッコむ。その解釈は色々とマズい！

そんな感じでもの凄い勢いで首をブンブン振って否定していた――

「幸せですから」

「え」

「私はユウジ様が隣に居るだけで、幸せですから」

「「……」」

「マイ……」

「怪我をしてしまったおかげと言うのは失礼なんですけど……ユウジ様と共に居れる時間も増えました。それに――」

そしてマイは本当に嬉しそうに、柔らかな表情でこう言う――

「ユウジ様は私に告白するが為に怪我してしまったのですから……私を考えていてくれたことが、心から嬉しくて嬉しくて」

「！」

そんな、彼女の気遣いが。笑顔に俺は惹かれていたんだろうな…彼女の温かさが、俺を包み込んでくれる。

「ユウジ、金のかからない彼女で良かったな」

内容こそ酷いが、なんともユイはユイで優しく言った。

「……マイ、じゃあ今日行くか」

「え、え？」

「デート」

「え、えええええええええええ」

「なんとも甲斐庄無さ過ぎてさ……これじゃ情けなさ過ぎる」

「いえ！　ユウジ様、そこまで気を使わせては――」

「それに完治したからさ。……出来れば、ちゃんとした足取りでしたいからね」

「ユウジ様……」

もう超ベッタベタワールドが俺とマイでは展開されていた。

蚊帳の外に出されたユキやユイは呆然と聞いていたみたいだったが――

「イチャイチャすんなやあああああああっ！」

無言を決めこんでいたマサヒロがそう叫んだのだった。

そして俺は何回か殴られたが、倍にして返したのは正直悪いかなと今思ったり思わなかったり。

番外１０話　番外２－４　下之家のあれこれ。（前書き）

まったく中身の無い話

番外１０話　番外２－４　下之家のあれこれ。

６月休日（夏休み）

ベッドに適当に座っての～んびりしていた。うーむ、パソコンもゲームもしなければマンガも読まない。

そんな時間が必要だと改めて思う。……まぁ日常の喧騒も影響あるんだろうけど。

「六●麦茶超うめぇ」

テキトーに買ってきたお茶をちびちび飲んでいるとドア越しにノック音共にある女の子の声が聞こえた。

「やっほーユウジさん」

「おお、ホニさんいらっしゃい」

ホニさんが俺の部屋を訪ねてきた。相変わらずなんという長い黒髪に可愛さ満点な童顔。

普段着と化したセーラー服が似合いすぎて死にそう。

「ねーねーユウジさん」

「ん？」

「中●と日●の関係が悪くなってるねー」

……はい？

「えーと……ホニさん？」

「なに？」

「この話題は止めておこう」

「なんでー？　テレビじゃ日常的に見るよ？」

「いや、この小説で取り込むべきネタじゃないというか……とりあえず打ち止めで！」

「ユウジさんが言うなら……いいけど」

「ありがとうホニさん」

「じゃあ、話す話題も無くなっちゃったけど……ここに居ていい？」

上目遣いでなんとも小動物的可愛さを誇るホニさん頼まれごと。

「もちろん！」

「わぁい！」

ベッドに座っていた俺の隣に可愛らしくちょこんと座る。

「（可愛い！）」

「はぁ～なんかユウジさんの隣に居ると落ちつくな～」

「！」

何気ない一言になんともドキリとする。ああ、可愛いなあ。

……いやロリコンじゃないぞ？　ほらミニコンって奴だよ、うん。

あ、でもミジンコとかはあまり好きでないから……違うな。

にしてもこの保護欲を盛大に掻きたてるホニさんってなんだろうね。

可愛らしいというか、か弱いそうというか……護ってあげたくなるんだよなあ。

「（これは陰からマモリたくなるわ）」

そうしてホニさんが訪れてから数分が経っていた。それまでは二人無言でぼ～っとしていた。

そんな時ドア越しにノック音と共にある人の声が聞こえた

「ユウジー、居るかー？」

「ああ、ユイか……どした？」

「いや、なんとなく来てみた。入っていいか？」

「いや、いいけど……何にもないぞ？」

「またまた～、御冗談を。ほらベッドと押し入れの下段奥に――」

「あー、あー、あー！　ただいまマイクのテスト中！　ただいまマ

イクのテスト中！」

「おおう！　びっくりしたあ、じゃあ入るぜー」

ガチャリとドアノブが回されユイが入って来た。

「おおー、ホニ様！」

「ホニでいいってユイ！」

若干ユイの呼び方に不満を覚えるホニさん。

そんなちょっぴり怒ってる姿もなんとも可愛らしい。

「で、どした？」

「いや……ユウジに会いたくなって」

「金はないぞ」

「借りたことないぞ！？」

「じゃあなんだ、ゲームか？　パソコンでも壊れて生殺し状態か？」

「いやいやいや！　ただ単にユウジルームに来たかっただけなのだよ！」

「ふーん、まあいいけどよ」

「さんきゅー」

と、言うとユイも俺の腰かけるベッドに座った。

「はぁ～なんかユウジの隣に居ると落ちつくな～」

「いやいや、いつもお前は学校で一緒だろ？」

「うーむ、ちょっとばかし違うねん。それとこれとは別だのう」

「ふーん、なんで？」

「なんというか……ユウジの家に入り浸っているのが友人に悪いと良心の呵責が働いていながらも、この圧倒的な背徳感！　たまらねェ！」

「あー……さいですか」

うん……色々発想がおかしいなコイツ。

「それに、本当にユウジが近くに居ると安心する」

ユイは眼鏡越しで表情こそ見えないが、なんとも柔らかな、本心を出しているかのように言った。

ユイとホニさんに挟まれるようにベッドに腰をかける。それでも俺含めて無言。だがこういう空気も嫌いじゃない。

この二人も、本当の家族に思えてきてならない……ユイは妹というより弟というか馬が合う親友みたいだけども。

ちなみにこの後の展開をおおかた予測出来たと思うが一応言っておこう。

その後何か俺の部屋は人を寄せ付ける香りでも発しているのか、桐に姉貴も順を追ってやってきた。

まあ、細かくは話す意味はあまりなさそうなので割愛するとして。

今日は何故か、俺の部屋に皆が集まりただ無言で、和んでいるという光景が繰り広げられた――

あ、あれ？　この状態って傍からみたら女の子手当たり次第に連れ込んでるんじゃ……？

うん、姫城に知られたら確実にヤバイ。和やかな記憶だけども、これは他の誰にも言わないこととしておこう。

命は惜しい。

第１５６話　√１－６１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

平行してシナリオ展開！　というかこれがないと√が成立しなくなるからなあ

第１５６話　√１－６１　※独占禁止法は適応されませんでした。

「あー」

皆の前で、かつマイの前で「デートするか！」なんて大見栄張ったのはいいものの。

「（見事なノープラン）」

それに、今日約束してしまったもんだから、仕方ない。

交際経験無し、しかしギャルゲーのシチュを頼りに……しなきゃいけないのが悔しい。

わー、なんで俺はこんなにもダメなのか。そんな自分にはたはた呆れる。

さてどうしたものかと授業中。板書もいつもはガッチリ写すのに、今はと言えば上の空。

『デートですか……行きますっ！　この身が裂かれても行きます！』

『どんな状況！？』

えーと、何か半端じゃない争いに巻き込まれているかのような台詞なんだが。

……うん。比喩だろう。つまりは「どんなことがあっても行きます」こういうことだろう。

「！」

あ、えーと。そこまで俺の事を慕ってくれるのか……いや、今ま

でも似たようなことは言ってくれたけど。
いざ恋人同士と考えると――

「（て、照れるっ）」

あー、なんというか。俺って相当ウブだよなあ……

放課後が訪れたとさ。

ちなみに補足しておくと文化祭後は生徒会役員は皆屍状態なので意気消沈中。
それ故に何故か会長は「これから当分は毎週金曜だけが生徒会っ！」と全開の屍臭漂う生徒会で宣言した。もちろん異論を唱える者は誰ひとり居なかった。
今日は水曜日。日直にもなっていなければ掃除当番でもない。ちなみにマイも同じ。
一応は考えたまでの発言だったのだよ、はっはっは！

……だぁけどプランゼロなんだよなあ。

「ユウジ様っ」

「お、おう」

俺を見つけるなり凄い嬉しそうな笑顔で駆けてきた。そんな笑顔に胸ドキュンな訳だが、平常心平常心。

「か、帰りましょうか？」

なんともモジモジして俺に聴いてくるマイがマジカワユス。

「あ、ああ。とりあえずは学校出よっか」

「……はいっ！」

俺のニュアンスに気付いたか、更に笑顔を輝かせたマイめっちゃ可愛い。

そうして二人仲良く校門を出て、立ち止まった――

「あのさ、マイ。マイは行きたいとことかあるか？」

「え、それって……」

「昼時約束したろ？　デート。それとも、マズかった？」

「い、いえいえいえいえ！　嬉しいです！　誘ってくださったことが！」

首をこれでもかってぐらいに振るマイ。必死な姿がなお可愛い。

「良かったー、それでさ、何処か行きたいとこあるか？」

「いえ……ユウジ様となら世界の果てでも」

「いやー、それは無茶だろ」

「私はそれほどの覚悟を持っています！」

今度は自信に満ちた表情で、目をキラキラ輝かせながら熱弁された。

「そ、そっかー。でも手近な方がとりあえずは――」

「グアムですねっ」

「新婚旅行！？」

「ああ、結婚だなんて……！　そんなユウジ様嬉しすぎて身投げしちゃいますっ」

「いやいや！　何故自殺するし！」

「嬉しさのあまりです！」

断言された。なんというか付き合い始めて、かつ二人きりのときはマイってすっげえアグレッシブだよなあ。

嬉しいけど、嬉しいけど！　本当にマイなら身投げしそうだから止めてほしかったりする。

「身投げしたら、俺らの関係も終わるな」

そう、冗談めかして心底マイはショックを受けた表情をつくり、ポケットからおもむろに太い縄を――

「……首吊ってきます」

「そういうことがダメだって！　死んじゃったら付き合うことも出来なくなるだろうが」

「そ、そうでした」

いやあ、単純なことだと思うんだが……

「こ、子作りも出来ませんしっ」

「一気に飛んだな！」

あ、あれ……これギャルゲー？　いいの？　色々と。

「とりあえずはデートをしよう。話はそれからだ」

「そ、そうですね！　そこから子作りですね！」

「だから過程１０数個吹っ飛ばしてるって！」

「私、いつでもいいです」

「いや、今覚悟を決められても……とーにーかーく！　マイ、デートだ！」

「はいっ！　行きたいところ……行きたいところ……極楽浄土！……じゃなかった」

うお、マイなら行き兼ねないから困る。でもそんなお茶目なマイが俺は好きになったんだけどねー

……あ、あれ？　お茶目って使い方違うような。

「決まりました！」

「おお、何処だ！」

さあ、何が来る！　一応いつかのデートに備えて小遣いは確保してあるぞ！

電車で隣駅に行けばアミューズメント施設（要は中規模な遊園地）が何故かあるし、２駅飛べば映画館。３駅飛べば植物園。

なんだ、なんだ手近に結構スポットあるじゃないか藍浜！

それとも気取っても仕方ないから海岸線をゆっくり歩く！　うわ、途端にケチくせえ、俺！

さ、マイ！　一体どこに――

「公園ですっ！」

「……公園？　公園って言うと……」

「はい！　学校の近くのです！」

……ええ、いいのか？　それ。

ＨＲＳ√１－１

とある家族のお話。幸せが消えて行った日々の物語――

私は家族の中で長女として産まれた。今のところは一人っ子で、父母の愛情を目一杯に注がれていました。

そんな4年後、私たちには家族が増えました。長男が、私にとっては弟が産まれました。

父はサラリーマンで、母は家事や子育ての為にパートに出て稼いでいました。

父が休日には映画館や遊園地に連れて行ってくれたり、母が手編みのマフラーやセーターを編んでくれたり。

母が家事に埋もれている時は、私たちの相手も沢山してくれました。

父母は私を愛してくれました。そして弟も私同様に愛されていました。

嫉妬心はなく、たまにワガママを言う弟に「お姉ちゃんだから」と言い聞かせました。

この時が、一番至福の時間でした。世界で一番幸せなんじゃないかと錯覚するほどにです。

でも、こんな時間は長く続く事はありませんでした。

あの出来事から。全てが一斉に、図ったかのように狂いだしたのです。

第157話　√1－62　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

わー、今日で1カ月連続更新達成ー

第157話　√1－62　※独占禁止法は適応されませんでした。

ええと藍浜町3丁目公園からお届けします。

紅葉が公園中に植えられた秋色に染まる景観が特徴で、文化祭明けの冬の一歩手前。

今日はなんとも気温が低い、こうして学校指定のダッフルコートを学ランの上に着ていても少し肌寒い。時より吹きつける風が妙に冷たく感じる。

スカートな女子全般に言えることだが、こんな寒空の下じゃマイもしんどいだろうに……

紅葉は言うと少々散り始めてはいるが大分葉を留めていて、紅葉がズラリと公園を囲みこむのは壮観かつなんとも良い景色。

この公園は学校の近くなので、たまに運動部の休憩スペースに使用されていたりするが、大会がここらは無く閑散としている。

なんとも寂れた感じがするのも、幼児・子供向けの遊具が一つも置いていなく、ベンチだけが等間隔で並んでいるだけからかもしれない。

簡単デートスポットとしては最適……なのかもしれないが。

「（初デートが学校近くの公園なのはどーよ）」

デートなんかギャルゲーでしかしてないので分かりません（痛い子）

それでいてやっていたのがトンデモ系ばっかなので参考ならず。

ちなみにどれだけトンデモかといえば――

「じゃあマモくん、宇宙にデートしに行こう！」「地獄めぐりをしましょう……それでは本当の地獄へ参りましょうか」

「体から力を抜いてー、さあ二次元世界にデートに行こう！」「

あ、あの……電話ボックス巡りをしませんか？」
「マクド●ルド食いに仙台行くぜえ！」「デートですって……絶望した！」
「（考えたらクソゲーばっかじゃねえか！）」
いや、マンガとかも読んでたけど……うん。それが昨日ひねり出した行き先ね。
わー、俺情けねえええええええっ！
「なー、マイーー」
なんとも甲斐庄無しセンス無し能無しな俺が恐る恐るマイの顔を覗きこんで見ると。
「デ、デートですね！　ユウジさん！」
四葉のクローバーを一瞬で見つけた少女のように瞳をキラキラさせながらも、どこか興奮気味の彼女が居た。
「あ、ああ」
本人見るに大満足で、興奮のあまり息が荒くなっている……ちょっとマイさん？
「マイ、こんなところで良かったのか？」
「はいっ！　ユウジ様との第一歩です！」
「そ、そうか」

「身近なところからデートしましょう！」

マイがこう言うのは初心者向けビギナーズクラスから始めようと解釈していいのか？

いいのか？　甘えていいのか？　いや……もしかして次回デートもマイは視野に入れてるってことなのだろうか……？

そうだったとしたら、すっげえ嬉しいけども。

「それに、私は……ユウジさんが傍に居れば何もいりませんから」

「！」

そんなハズカシイ台詞を真顔で、真面目に言われたらクルじゃあないかっ！

「あ、いえ！　私とユウジさんとあとは……二人の子供が居ればいいんです！」

「……」

いやー、なんというか萎えてはいないけども、マイ節絶好調でなんかほっとした。

経過以上に発想が吹っ飛んでいるのに気付いているのだろうか、彼女は。

「じゃ、マイはそこら辺座ってて。ちょっとあったかい物買ってくるわ」

「そ、そんな！　悪いですよ！」

「デートなんだから、少しは格好つけさせてくれ、な？」

と言っても何にも屋台なんか無いから、悲しく自販機の飲み物だけどね！　うわ、カッコワル！

「何か飲みたいものとかある？」

「ミルクティー……をユウジさんの口づけ後のあとのものを」

「ああ、わかった」

なんというか軽く流したけども、彼女はやはりとんでもないこと言っていたりする。

じゃあ1つでいいのか……ってケチくさいなあ、俺。温かいものも、寒風に冷えた手を温める為のものじゃないか。

公園の片隅で誰が買っているのか分からないが自販機がポツリと稼働していた。

”あたたかい”コーナーのミルクティー二つを購入した。一つはマイ用で、もう一つは俺の分だけどマイが飲む……分かりにくいな！

「待たせて悪い」

「いえいえっ」

「はいっ、ミルクティ」

「あ、ありがとうございましゅ」

寒さなのかマイが噛んだ。かわええー

「マイの要望のはまあ……後で」

「はい！　楽しみにしてます」

なんというかマイのそんなどこかぶっ飛んでいるところが可愛くて、好きだったりする。

こんな発想をするもの俺を考えてのことであって……そう考えると胸が熱くなるな。

「きれいですね……」

マイは少し見上げて呟いた。目線の先には朱やら赤茶色に輝く紅葉と、散って行く茜色の紅葉。

たしかにそれは美しいもので、見つめるあまり時間を忘れそうになる。

「最初のデートがここで良かったです」

「ああ、近場にこんないいとこあったんだな……」

改めて思うと、マイが此処を最初のデートに選んだのも分かる気がする。

ここは始まったばかりの二人が、ゆったりと時を忘れてくつろげる場所。落ちつけて、和めて、想いに耽ることも出来る場所。

すると隣座るマイが、俺にふっとよりかかってきた。任されたマイの体は驚くほどに軽く感じ、覗きこめば頬を紅潮させながら目を

瞑っていた。

「ユウジ様……もう少しこのままでいいですか？」

「あ、ああ」

紅葉散る中、ベンチに二人。寒風は吹くけども、心はとても暖かだった。

第１５８話　√１－６３　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

何この番外編

第１５８話　√１－６３　※独占禁止法は適応されませんでした。

「人生楽あれば苦もあるのよ！」

会長がそうどこぞの長寿時代劇の名言のようなことを薄い胸で言った……ってあれ？

このノリ懐かしい以前に、見たこと有るな……そう、あれは某生徒会ラノベの――

「今日の生徒会は反省会！　だけど、その前にっ！」

「〝時境〟っ！」

チサさんが中二病まっしぐらな言葉を呟いた――途端に。

「！？」

俺とチサさん、会長を残して。全ての動きが硬直する。それはビデオの一時停止状態を連想させた。

つまりは――

「私とアスちゃんとユウ以外の時を止めたわ」

「えええええええ」

えーと心詠む以外にもそんなこと出来るんすか。

「たまに未来予知も出来るのよ」

もはやなんでもありだなこの人。

「それで、なんというか言ってることおかしいんですけど……なんで時止めたんですか？」

”なんで習慣だった週刊雑誌買うの止めたんですか”的なノリで言っている……が、正直そんなレベルでは到底ない話で。

時を止める。単純に考えて”ザ・ワ●ルド”が思い浮かんだ。てか、それ以外の中二病的名称を知らねえ。

だとしてもＳＦやらマンガやらゲームやらで使い古された中二病系の能力ではある訳で――

「（あれ？　思いのほか驚きが――）」

――なかった。非日常に毒され続ける俺。まー、あのゲームを起動した時点で決まってたようなもんだ。

そもそも「そんなこと受け入れてやるか！」なんて否定的過ぎたら、ギャルゲーの主人公として残念過ぎるからな。

それに、今は……マイもいるし。

「ユウ？」

「（にへぇ）」

「……気色悪い顔してどしたの、シモノ」

「え、いや！」

顔をぺたぺた触るとどうやら俺は相当ニヤけていたようだ。

「さては……彼女でも出来たわね」

「こ、心詠みましたね！」

「いや……詠まなくても分かっちゃったんだけど」

詠まずに分かる……だとっ？　もしかして、まさか、本当に。

「……顔に出てます？」

「え、ええ。”ボクは幸せで死にそうですぅ”ってのが顔に出てるわね……」

「えっ、マジですか」

「見てるこっちとしてはイライラするぐらいね」

チサさん笑顔だった。ちなみにチサさんの不自然な笑みを浮かべている間は結構なぐらいに機嫌が悪い。

嫉妬という訳では絶対ないとしても、ノロケ聞かされて嬉しい奴なんてそうそう居ないからあ。

とりあえず俺のニヤけ顔のせいで、チサさんの機嫌が悪くなってしまったようで。

「……と、とりあえず！　なんで時を止めたんですかっ！」

「そ、そうね！　某人物からチサに頼んだの！　ではクソゲヱ、反省会！」

「……クソゲー？」

ってなにさ？　この生徒会でゲームなんかやったっけか？
……文化祭の準備で遊ぶ暇なんぞ無かったし、そんなこと身に覚えがないんだが。

「あ、そうだった！　シモノ聞いちゃマズいんだった。チサ」

「”時境”っ」

「え、ちょ、おま――」

そして誰もいなくなった――訳ではなく、会長と書記さんだけが残っています。
後はポーズをとったマネキンのごとく硬直していました。

「さて、はーんーせーいーかーい、スタート」

「ええ。文化祭のではなく、この”世界”のね」

ちょっと書記さん、この本編に番外編のノリ入れないでくださいよー

「いいじゃない……だって私たち番外編なかったら、まともに出たの久しぶりよ？」

う、それはそうですが。

「考えてみたら私たちの出番って少ないよね……生徒会とはなんだったのか、完全に要らない子じゃないかと」

そ、そんなことは！

「スタッフが”生徒会の●存”のファン過ぎて無理やり挿入したばっかりにね」

スタッフさん！　違うって否定してくださいよ！　ね、そうですよね！

流石にそんな血迷ったかのように、私情でそんなことしません……よね？

なんで首振ってるんですか？　素直ですねえ。本当に私情で、ノリで、その場の勢いでやったんですかあ？

……無責任なことしないでくださいよ！　生徒会番外編のせいで台詞量戻りました！　最盛期まで行かなくても戻りました！

え、一応考えがある？　それもチサ様には伝えてある……あ、逃げた！　スタッフめ……で、どーなんですか、書記さん。

「スタッフ、あなたの近くに居たのね……ええ、メールで知ったわ」

そーなんですかー……で、考えってなんですか？

「どうやら”√3　姫様”で生徒会フル描写とまでは行かなくても描写多いみたい」

√3？　今は√1で。姫様って言ったら……ヒロインは誰なんです？

「そこまでは聞けなかったの」

そーなんですか……姫と言われる方って誰なんだろう？

「まあ、生徒会を描写するって言うのだから生徒会に関連する方でしょうね」

……あ、大体予想ついたかもしんないです。

「実は私も」

「……さっきからチサ、誰と話してるの？」

「ナレーションの方」

「なれーしょん……え、私たちナレーションされてるの！？」

「ええ。アスちゃんが可愛い事とかか微笑ましいことを言うと、やさしくツッコミを入れてくれるのよ」

でも私はただ単に”可愛い”より、普段みせない表情を見せたりする方のほうが好きなんだなあ。ようするにギャップに弱いです。

「え……でもスタッフってのも居るみたいだし！　ちゃんと修正されてるよね！　私ちょー頭よく描写されてるよね！」

「いいえ、スタッフ手抜きだから。それ以前に誤字脱字、描写間違えコピペミスに溢れているわ」

「ええー！　そんな重大なことまで出来てないとか、やる気ないんじゃないの！？」

「やる気はあるそうだけど、気力と時間が無いらしいわ」

「……スタッフの集中力は皆無に等しそうね」

「それと貧弱な知識と、小さい頭が合わさって……それはもう残念なことに」

言われ放題ですね。

「まあ、スタッフの伝言によると――」

√1では「今日は生徒会で忙しかった」というのを√3では細かく描写する予定で、代わりにクラス描写が減るとかなんとか。
つまりは「√1で足りない描写は√3で補う」とのこと。補完型シナリオという形でいいのかな？
あの時はユウジは「～をしていて」一方あの時は「～をしていた」という感じになるらしい。

「ということで、スタッフの気力が尽きない事を祈りましょう」

「なんだかあまり話が読めてないけど、おおー！」

おおー

「”時境”解除」

そして、時は動き出す――

お、おわ！　なんか俺、よくわかんない事言ってるチサさんに質問しようとして……それで……なんだっけか？　まーいいか！

なんか都合よく記憶吹っ飛んでますね。

「とーいうことで、今日の生徒会終わり！」

「え、今日何も――」

「文化祭で頑張ったからいーの」

「ええ……」

いーのか？　本当に。

いいんじゃないですか？　文字数的にも大丈夫そうですし、今日はこのぐらいで――

第１５９話　√１－６４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

あぶな

第159話　√1－64　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ただいまー」

帰ってきました我が家へと。ちなみにユイは先に帰宅してるそうな「ダッシュブーツを作ってみたんや」とか言ってたな。

……校則でいいのか？　なんでそんな発明家キャラっぽくなってるんだか……確実にラブ●な再読したな、これは。

そうして笑顔の桐が……あれ？

「おかえりじゃー。そして来るのじゃー」

「ちょ、どした桐！」

笑顔は笑顔でも、ドスの聞いた笑顔だったのだった。機嫌悪そうだな……なぜ？

俺は桐の逆鱗に触れるようなことをしたか。いや、それはないだろう。

というか桐と話す時間も連載――ごほんごほん、出会った初期に比べると少なくなっているよーな。

ああ、それか！　俺が相手してやらなかったせいで、イジけたか（超上から目線）

さあ、桐。これからどんな展開を巻き起こすんだ……？　こうして何故か自分の部屋に連れ込まれた。

「ユ、ユウジ……きさまぁ」

「な、なんだよ」

「マ、マイとはどこまで行っておる！？」

「は！？」

マ、マイ！？　なぜその話題を出したし！

「どこまで行ったのじゃ！　ほらほら言ってみい」

「……なんかエロオヤジみたいになってないか？　お前」

「失礼な！　エロババアじゃ！」

「余計悪くなってるだろ！？」

自虐ネタかよ！　もう意味わかんねえよ！

「ほら言え」

「……なんでお前に言わないといけないんだ？」

俺は情報番組の情報提供者じゃねえっての。

「それは、わしが貴様の本妻じゃからな！」

……妻？　こいつもこいつで過程吹っ飛ばしてるのな。なんだかんだ、マイと相性良さそうで反応に困る。

「……まだそんな妄言言ってるのか。４月病の一種でとっくに完治していると思ったのに」

「完治など絶対にせぬっ」

「そんなきっぱり断言するなよ……これから生きるのが辛くなるだろ」

社会的な意味で。

「そんなにわしの愛は重いというのか！？」

「ああ、とてつもなく」

そりゃ桐は嫌いじゃないけど、恋愛対象にした世間の風辺りが大変なことになって。

某アグ●スさんがニヤリ微笑みを浮かべながら引き戸を開けてやってきてしまう！

「それで」

「誰が言うか」

「……あ、そうじゃ。心を詠めば手っ取り早かったのう」

「忘れてたのかよ！　そして詠むな」

「ふむふむ……なるほど」

「早速詠み始めてんじゃねー！」

なにやら桐の脳内を駆け廻るのは俺の心の中身のようで……ちくしょー、なんでこんな危ないやつにこんな能力授けたかなあ！

「……ふ、勝った」

「何とお前は戦ってたんだよ」

「マイじゃ」

「それまたなんで」

「わしがユウジに先に接吻したからの！」

「……え？」

「初めてのチュウじゃ」

「えええええええええ、いつの間に！？　寝込みを襲ったな、この変態夜這いロリが！」

「その通りだ、壁を通り抜けてユウジの部屋に侵入しまくったぞ」

「もはやチート！」

「まあ……しかし。ユウジのあんなにまで力と思いの籠った告白は

……羨ましくもあるな」

「え」

「到底わしとはお遊びじゃからの、しくしく」

「なんか俺が女グセ悪いみたいなニュアンスで言うなや！」

「クセ悪いじゃろ！　色々なオニャノコたらしこんで……どういうつもりじゃ」

「え、って言ってもマイとユキぐらいだろ……俺はそんなにモテはしないぞ」

「このニブチン野郎が！」

「……ユイにも同じこと言われたな。で、どこがニブイんだ？」

「全体的にじゃな……それはもう女泣かせなほどに」

「……桐さ、でっちあげるなよ」

「な」

「俺がモテる訳ないじゃーん、マイは奇跡みたいなもんだし。ユキもどうせ……」

「ま、まずはわしがホレてるというのに！」

「あー、はいはい。そうですか」

「人生最大の告白を受け流されたじゃと！」

「それで、接吻ってのは……」

「ああ……ほっぺにチュウじゃ」

「……勝った」

「なんじゃと？」

「ほっぺは接吻とは言いません（おそらく）」

「貴様のファーストキスをそんな形で奪いとうないわ！」

「おお、なんだ。変なトコは気にかけてくれてるんだな」

「一応はな……だがしかぁし！　これからわしのターンじゃ」

「はい？」

「わしはマイに夫を取られてしまった」

「いや夫って誰だよ」

「だがしかぁし！　わしは愛人でも良ければ、寝取りにも興味があるっ！」

「……」

「背徳感があっていいじゃろ？」

「お前、年齢詐称しすぎ」

「これでも花も恥じらう１０歳前後じゃ！　人の趣味をとやかく言うんじゃないぞ！」

「１０歳は花も恥じらうものじゃないと思うが……それにそれは趣味というより、フェチだ」

「ロリコンのハートを狙い撃ちじゃ！」

「ざーんねん。俺は対象外だわ」

「……そう言うなれば、わしにも考えがあるぞ」

「もうなんだよ、面倒臭いな」

「わしの能力の一つ”性癖追加コマンド”！」

「チートというより、もはや能力の定義がワカンネェ！」

「まてまてー、今から”ロリ好き”と”ババア可愛いよババア”を追加してやるぞ！」

「いらねーって！　ほら、早く出てけ！」

「わー、お約束の首根っこ掴みやめるんじゃ――」

そうして桐を追い出すことに成功したのだった。

……って桐そのものだったな。なんというか久しい感じがするなあ。

「おお、聞き忘れていたがの」

「まだ居たのか」

「……今は幸せか？」

それはさっきまでの桐とは違って、真面目な口調でそう問いかけてきた。

今、マイとの交際。たくさんの友人が居る教室――幸せに決まってるじゃないか。

「え、は？」

「真面目な質問じゃぞ？」

わかってるさ。桐がここぞという時には空気を読むことも、俺の良き理解者になっていることも。

「ああ」

返事こそ、薄っぺらいが。俺には大きな自信があった。今が幸せであるということに。

「そうか……まあ、今の日々を堪能するのじゃぞ」

「ああ、わかったけど。いきなりどうした？」

そう聞くと少し押し黙る。そして小さな声で、聞きとれないほど――

「……この日々の長く続くとは限らないからの（ボソッ）」

「何か言ったか？」

何も聞きとれなかった。それがまるで俺に聞こえないように言ったかのようにも思えた。

「なんでもない。では夕食でまたの」

……変なやつだな。まあ今までも変な奴だったけども。

ただ単に俺をからかいに来ただけなのか？　それとも、何か意味があったのか？

そして、今問いかけられた「幸せ」……分からん。桐の行動がよくわからん！

ボソっとして聞こえなかったけども、桐は一体何を言おうとしたのだろうか……？

「まあいいか」

桐も意味深なこともいいまくってた時期もあったしな。それほど重く受け止めるのはよしておこう。

桐の質問の答えを、少しはずいから皆までは言えなかったけどな。

「幸せだ。もうこれまでにないぐらいいにな」

さーて、姉貴の絶品夕食を待つとしよう。おっと、準備手伝いに

――

番外１１話　番外２－５　下之家のあれこれ。　（前書き）

次回の番外編枠には「Ｂ．Ｅ．√１」が入ります。ええとＢ．Ｅ．はＢＡＤ　ＥＮＤの略です。つまりは――

番外11話　番外2－5　下之家のあれこれ。

下之家の日常（休日編）

下之ユウジの場合。

「おー、久しぶりに観てみたら……」

ここまで、進んでんのかー……え？　何の話かって？
アニメですよ、アニメ。一応俺の設定でしたじゃん？　ユイとマサヒロがどろり濃厚なせいで薄く感じるけど。

「これでも今期は5本観てるからな！（深夜アニメを）」

うん。5本は多い。特に深夜アニメなんてオタぐらいしか観ないだろー
そんなオタですよ。いやでもオタと威張れるほどにはどっぷりつかってないので、俗に言う「にわか」や「ライトオタ」ってとこだNA。
本当にさ、ユイとかアニソンの歌詞なんであんなに覚えられるんだか。
まー、あいつが頭いいのは確かだし、マサヒロも頭いいけどよ…
…ってもしかしてオタって頭いい奴の専売特許なのか？
じゃあ、俺は平凡な頭だし向かないかもな――

「おおっ」

キター、キター！　うっひょおおおおお、キター！

このために観てたようなもんだんぜ！　こんな微妙なアニメ観てられるかってんだ！

え？　何が来たって？

「スク水イ〝エーイ〝ッ！！」

うーん、描き方はまあまあかな。スク水と言ったら綺麗な体のラインを描くには他の追随を許さない生物兵器だ（？）

しかし●●びに●●ヨ！３話のスク水は良かった。あの食い込みとスク水独特の艶、そしてなによりもエエエエエエエロィッ！

他にもアニメなら――

ライト……？

巳原ユイの場合。

「ふぉおおおおおおおアニメパラダイスゥッ！」

来たぞ来たぞ！　休日と言えばアニメパラダイス！

まずはリアルタイム視聴からの二週目いっとこー！

「……一時停止」

ナァァァァイスおっぱい！

「……一時停止っ」

グレェェェェトぱんてぃらっ！

「……一時停止っ！」

スゥパアアアアアぼでいぃっ！！

「……ザ・●ールド」

えーと、リモコン壊れますよ？

「さーてもう一周……一時停（ｒｙ」

ホニさんの場合。

こんにちは、ホニです。最近昼ドラにハマっています。中身ないとか。使い古された。……とか言われていますが、発見もあります。

「おお！　泥沼っ！　ここでその人が来るんだ！」

予想外の展開があると思わず嬉しいです。使う古された展開は、以前に観たドラマを思い出します。

「あー……我もこんな関係を誰かと築きたいなー」

ユウジさんと……それも、愛人として！

「……いいかもしれない」

中学生の読んでいた雑誌に「ＮＴＲ」と有りましたが、まさしくコレですね！

「あっ、テープ入れ替えないと――」

テレビ横には何個も積み重なれたテープの山……そしてタイトルは――

適当に挙げて「茨の花園」「若奥様」「禁断の果実」……なんか、妙にそれっぽいですね。

桐の場合。

「……ネットサーフィンでもするかの」

おもむろにパソコンを立ち上げネットサーフィンをしていた時でした――

「こ、これは――」

何か見つけたようですね。

「盗撮一式３千円！　安いな！　ポチッ」

え。

「これでユウジの部屋を、ぬふふふ」

……ユウジ、お悔やみ申しあげます。

ユウジ姉の場合。

「勉強しよ！」

ぎゅっとハチマキを頭にしめて勉強をしようとするユウジ姉……テスト時期でも受験でもないのになぜハチマキ？

「あっ」

どうしたんでしょう？

「こんなところに置いちゃ――」

目の前の写真立てを手に取り――

「ユウくうううううんっ！！　だめ、カッコカワイすぎるううううううう！」

凄い勢いで頬ずりを……ちなみに1時間それで消えましたとさ。

あれ？　なんか写真立ての縁の色が落ちてませんか？　……え、それって、まさか――いやいや。

？？？の場合……って誰ですか？

そもそもユウジ家にこんな場所ありましたっけ？　……タイトルに偽り有り！

ユウジ家じゃないもの混ぜるなんて何考えてるんだかスタッフは――

「久しぶりに”ファーデイ”やるかなー」

ええとそれで、誰？

「（懐かしいなー、うんうん）」

いやだから、どちら様ですか？

「（もう1年以上にもなるかな……）」

だから（ｒｙ

「（おお、私のアカウント残ってる！　ユミジ！　懐かしー）」

だから……って、え？　ユミジ？

ユミジって言ったら、あの――むぐぐ、何するんですかスタッフ！

セクハラで訴えますよ！　あ、こら――

第１６０話　√１－６５　※独占禁止法は適応されませんでした。

一一月ニニ日

突然日付が復活しましたね。

「文化祭終わったと思ったらもうテストか……」

箸をくわえながら不満を漏らす俺ことユウジ。

朝のＨＲを思い出す……何を思ったか担任が漏らした「テスト三週間前」がクラスメイトの関心を集めた。

おもむろに予定表をチェックする者やノートをパラパラ開いてテスト範囲を予想し始める者などが現れ始めた。

文化祭から約2週間。そして二学期期末テストは3週間前に迫った。

この学校は3学期制のせいでテストが多い方で、なんとも2学期を経験した身としてはテストが多いのは堪える。

しかし入学した以上は仕方ない。そうしていつものメンバーは揃って勉強会をしてテストへ備えるのだ。

そんなことを考える昼に集まっていつもの面子でランチタイム。

「恒例の勉強会やろーぜ」

マサヒロがそう提案してくる。……というか、その話題出した時点で俺は勉強会する気マンマンでしたけど。

いや、だって成績上がるし、話せるしで良い事ずくめじゃないかと。

「おお、いいな」

「いいですね」

「いいなっ」

「うん、しよー」

全員一致というか、異を唱える者は居なく。多数決をしなくてもほぼ勉強会は決定だった。

「じゃあどこでするかだな」

「え？　ユウジん家じゃダメなのか？」

「マサヒロお前……少しは遠慮ってモンを知ろうぜ」

「だってよー、居心地いいんだもんー！　ユウジの家、なんか和む」

「……姉貴目当て？」

「それも、ある。が、シスターズが居ることも大きいな」

「某魔術ラノベのキャラ総称みたいに言わんといてくれます？」

「いいじゃん！　ロリ要員の桐ちゃんに、小動物要員のホニ様！　うーん、イイネッ」

「それが理由かよ……」

「まー、いいじゃん。それともこんな寒い教室に籠って勉強会ってか？」

「あー……まあ、ストーブ焚く訳にはいかないよな」

この学校にエアコン等と言う高貴なものは無い。

夏は壁掛け式の扇風機４台が忙しなく生ぬるい空気をかき混ぜ、冬はなんとも懐かしい灯油式ストーブ。

そしてストーブ周りは異常な熱気を発し、離れれば殆どストーブの恩恵を受けることはない。

それに灯油の給油は限られる上に、放課後の使用は実質不可。ならば、それならばと提案してみる――

「じゃあ、職員室でやろうぜ！」

うんうん、エアコンも何故か効いてるし、夜遅くまで使える――って冗談ですとも。

いやいや。先生共の机だけで窮屈な職員室に誰が居座れるものですか。

「ユウジ……それもいいかもな」

「え」

「テスト問題を盗み見るチャンスでもある！」

そんな馬鹿な。てかお前頭良いんだから見る必要ねーだろ。

「いやー、マサヒロ？　テスト作成って３週間前にはまだ出来てな

いだろ？」

「そこは先生共を脅して」

「……返り討ちにあって退学させられるな」

「じゃー、いいのかよ！　ユウジの家で！」

「んー……分かったよ」

「そうこなくっちゃな！」「ですねっ」「だよ」「だぜっ！」

今までマサヒロと俺の会話を黙って聞いていた女子三人勢が同意する。

……こいつら見計らってただろ。

「……そんなに俺の家がいいのか？」

「悪いとは思っていますが、高橋さんと同じく居心地がよいのです……ダメでしょうか？」

「う」

上目遣いは卑怯だって……マイさんや。

「私もユウジの家が落ちつくな～、なんて言うんだろ？　好きな人の――あ、なんでもない」

「？」

まあ意見は同じらしい。

「アタシもユウジの家は落ちつくんだぜい（棒）」

合わせてるんだろうな……ユイの家でもあるんだし、申し訳ない気がするが。

「わーった。じゃあ明日からでいいか？　一応姉貴にも言っておかないとな」

「「わーい」」

皆大喜び。俺の家ってそんなに広くも無いし、大したものも無いのに……なぜだ？

決まってるじゃないですか”ユウジ”の家だからいいんですよ。あなたと言う人間に惹かれているから……って台本どうりに読みましたけど。

ユウジに惹かれるほどの要素が本当にありましたっけ？

そりゃま、有る程度茶目っ気があって真面目なときはしっかりするし、たまに男らしいけども……

中盤はヘタレてたし、シャイだし、スク水好きだし――

まあ、愛されるキャラではあるのですかね？　読者がとう思っているかは分かりませんが。

私は見ていて……たまにイライラさせられますが、いいんじゃないですか？

第１６１話　√１－６６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

どうしてこうなった（色々と今回は申し訳ない）

第１６１話　√１－６６　※独占禁止法は適応されませんでした。

テスト前時期恒例の勉強会開催。そんで絶賛勉強中。
各自問題を解いたり、教えてもらったりでテストへの準備をしているところ。
この一斉勉強会方式が一番テストに効果的で、たまに談笑を交えつつも黙々と勉強をしている。
そんな一同がそれぞれのマイスタディに没頭している時のことだった――

「なあユウジ」

「んー？」

「キスしたのか？」

「ぶふっ！」

あまりの不意打ちに噴出した。

「なっ……何の話だよ！？」

「そりゃあ、ガールフレンドとですよ」

「！」

「ユウジ、どうなの？　したの？」

「ユウジ、したのか～？　それともももっと凄いことしたのか～？」

「す、凄い事ですか！？」

顔を真っ赤にしてユイの言葉を真に受けるマイ。

凄い事なんてもっての他！　全然進展してませんよ！　悪かったですねえ、ヘタレで！

あー、俺はそんなのが目的じゃあ無い訳ですよ！　只一緒にいられるだけでいい訳で――

「ええと夢や妄想の中ならユウジ様とぐんずほぐれつ、イチャイチャラブラブ、●●●●、●●！」

「――詳しく聞かせて貰えないだろうか？　そのぐんずほぐれつ以下略を」

マジか。マイの夢や妄想では超イチャラブ●●なのか……マイの気持ちに気付いてやれないだなんて、なんか情けないな俺。

「えーと、ですね――」

マイはヒュンと場所を移動してユイの耳元へゴニョゴニョと何かを吹き込みはじめた。

「えー……え、あ、マジ？　うわー、おう、え゛え……わっ、ちょ、それは――」

聞かされるユイの顔が赤に染まって行く……って、ええ！？

ユキじゃなくてユイ！　マジでか！　ユイとか一番エロに近そうな奴なのに、赤面させる程のことをマイは――

「……ふにゃ～」

「うわ！　ユイがノックダウンしちゃった！　ねえ姫城さん、一体どんな内容なの――」

「それはですね――」

「へー……ふーん、ああ、ええ！　そうなんだ……ええっと、ううえっ」

聞かされるユキの顔がこれでもかと思わんばかりに真っ赤に茹であがる。

「ふぇぇ……」

ユイもへなへなになってその場に堕ちた！　ノックダゥンっ！

「俺にも聞かせてくれ！　頼む姫城さん！」

「おい、マサヒロまで――」

「わかりました。それでですね――」

「おーい、羞恥心どこ行った！」

ユイやユキが赤面するようなことを平然と仮にも男であるマサヒロに話すマイって一体……？

「あー……なるほど。ふむふむ、そーきたか。これまた驚き……おお、これはなんと――」

マサヒロは女子勢二人と比べなくても、全く動じていなかった。
マサヒロとか18禁ゲームやりまくってそうだからな……てーことはマイとマサヒロ同レベル！？

「ふぅ……姫城さんはとんだ淫乱女だぜ」

「そんなことないですよ～」

「あそこで、あーするとは……どこでそれを？」

「ユウジ様のことを考えていたら……イ、インターネットで」

今までの明らかにヤバ目な会話でなんともないのに、インターネットでなぜ口ごもったし。

「実際にやってみたこともあります」

「おおー……そりゃあチャレンジャーだな。ここまでさせたのは流石人類最強の発明。文明の利器インターネッツ！」

「つ、ついてけねえ」

マサヒロとマイ意気投合しちゃってんなー……まさかマイってエロ方面に詳しかったりするのか？
なんというか、以前も堂々と「子作り」とか言われちまったし……なんというか、ねえ。

「……」

「ユ、ユウジ様!?　ひいているのですか！　こんな淫乱女にひいているのですか！」

「いや！　それよりも淫乱って自称しちゃったマイに、なんというか驚きだよ！」

認めちゃったよこの人！　だめだろ、そんなハシタナイこと……

「ユウジ様はこういう方面に行く人はお嫌いですか……？」

「え、いや、その」

なんだその反応に困る質問！　しかも目を潤ませて聞いてこないで！　ああ、卑怯だ！　マイは本当に――

「そ、そんなことはないよー（棒）」

「だろうな、ユウジはスク水が大好きだからな！」

「ユイゴルァッ」

なに今までぶっ倒れていた癖に、俺晒しが出来ると分かってはむっくと立ち上がりやがって！

「ユウジ様、それは以前より伺っていましたが本当なのですか」

「だからマイ、それは全部ユイのねつ造で――ってこの展開何度目だ！　な、いい加減みんな飽きただろ？」

「飽きません。ユウジ様の性癖を全て受け止めてこそ、立派な彼女

だと思っています」

「そこまでしなくていいからぁっ！　てか、その考えは根本的に間違ってる！」

どうしてこうなった！

「お、エロトークしてるねー」

「あ、愛坂おはー」

「マサヒロナチュラルに挨拶してんじゃね！　なんでお前がここに――」

「表札みてピンポン押したらユウジの綺麗なお姉さんに入れて貰えました」

やりやがったな姉貴！　こいつは、思春期まさっかりなのか、かつて俺の下半身に異常な興味を示していた――

こいつにとって、今のトークだと完全に地雷だ！

「で～、ユウジさん。スク水がどうしたんですって？　あ、裏地が気になりますか」

「いや～手触りどんなだろ～な～……はっ！　って、違うから！　ウソウソ！　なんでもないなんでもない！」

手をブンブン振って否定の意を込めるが言って時すでに遅し。

不発弾を地上3階から飛んで踏みつけたぐらいの問題発言をしてしまった気がしてならない。
そして皆の目は据わったり、熱くなったり……様々な視線が俺を襲った。

「ガチなんだ」

「ガチですね」

「ガチだな」

「ガチやなあ！」

「……男の子だもんね」

「うわあああああああああああああ」

その居間に響く絶叫。勉強会がこの日、ちょっとトラウマになった。

自滅じゃねえかよ。

「それで、どこまで行ったんだ？」

先程の精神攻撃で残りライフゼロ間近。いや、まあ……俺がいけないのだけども。

「ユウジ様とは……手を繋いだところまでです（ポッ）」

「「中学生かアンタらは！」」

「お、おおう！？」

マイ以外から総ツッコミを受けた。マイもボケたつもりはないだろうに。俺もそこまでおかしくはないと――

「ユウジってどんだけピュアだよ！　ピュアハート過ぎるよ！　マックスハートぐらいになれよ！」

「え、意味わかんないす」

「そ、そうだよ！　恋人と言ったらキスぐらいしないと！　それじゃ私が諦めた意味ないよ！」

「え、え？」

「そうだぞ、ユウジ。どれかしらのタイミングでも心を無にして押し倒すべきだったのだよ」

「下心に満ちてるじゃねえか！」

「そうだよー下之くん。ここはズブリと、ズブリ！」

「下ネタやめろおおおおおおおおお」

なんでこんなことに……俺は、ただ平凡に勉強会にしたかっただけなのに！

「皆さん！　私はいいんです！」

そこでマイは制止に回ってくれた。マイ……もとはというとエロトークの発端はマイだけど、気にしていないぞ。

「ユウジ様が幸せなら……欲求を抑えればいいんです」

あれ、なんか罪悪感。

「ユウジ様の隣に居るだけで……心がぽかぽかしてくるんです」

……

「一人でしますから！」

「フォローが一瞬で玉砕！？」

「姫城さん、そんな消極的じゃダメだよ！　そんな自分一人の中で完結させちゃ駄目だよ！」

「篠文さん……」

「自分がしたいことをしっかり意思表示しなくちゃ。気付いてくれない誰かさんがいけないんだろうけど」

ユイにギロリ睨まれた。うえー……怖っ！

「……すみません」

「ですが、ユウジ様がっ――」

「そんな悠長にやってたら……私取っちゃうよ？」

「え」

そういうとなんとも妖艶な笑みを浮かべて……ユキはこっちをみてきた。

「ユウジ誘惑しちゃおっかなー」

「ユキに誘惑されるのか俺!?」

本人目の前でそういうこと言わないで……てか出た。小悪魔モードの通称（今決めた）黒ユキ！

「あっ……そ、そのっ」

「マイ、無理しなくていいからな……ユキもからかうなよー」

「えー、からかってないよ？　私は、いつでもユウジのこと好きだよ？」

「えええええええええええ」

「篠文さん！」

なんか最近ユキが怖いです。小悪魔からだんだんと悪魔に近づいているような――

「なーんてね。ウソウソ、そこまで私も悪女じゃないよっ」

「（ほっ……）」

なんというかすげえホッとした。

「もう……ユウジはこれだから（ボソ）」

「え？　何ユキ？」

「な、なんでもない！　さあさ、二人の仲をはやく縮めてね、っと」

「篠文さん、皆さん。わかりました……ではユウジ様っ！」

「は、はい！　なんでしょうか！」

なんというかマイの強気な物言いに思わず圧されていた。

「ユウジ様っ！　それでは、ここで……ここで」

何が飛び出すパンドラの箱。マイの次の言葉は全く予想出来なかった――

「みんなが居るなかでディープキスをしましょう！」

「え」

「「えええええええええええええ」」

……もうなんなんですか、この√。

意味分かりませんて……なんでここまで1話でエロエロにしちゃっ

たんですか！
え？　物語のアクセント？　……やかましいっ！

第１６２話　√１－６７　※独占禁止法は適応されませんでした。

「ちょ、マイ！」

何を言っているんだか、ははは。

「私は本気ですよ？　ここまで焚きつけられては何もしない訳にはいきません！」

……マジで？　え、火付けちゃったのか？

「いやだからって、そのセレクトは色々と違うと思う！」

なんで最初のステップアップがキス飛ばしてディープキスなんだ……

「ユウジ様。私がお相手ではダメなのですか……」

ダメな訳ない。だがな……女々しいとか言われるだろうが、雰囲気を大切にしたいんだよな。

……いやさ、勉強会を中断し友人見守る中では普通にしたくないだろよ。雰囲気とか言うレベルでなく羞恥心どこ行った。

「そんなことはないけども……俺はファーストキスだし（ボソッ）」

そうですとも。童貞でキス未経験のチェリーボーイですが何か！

「え」

「俺はファーストキスになるから！　出来れば、こんなノリでやりたくねえんだっ！」

「……ファーストキスですか」

「あ、ああ」

言っててすっげえハズカシイ！　男が言う台詞じゃねえよ……うわあ、ミスター●リラーのごとく穴掘って入りたいわ。

「私もですから……安心してください」

「え、マイも？」

「……はい」

そ、そうか……マイって今までそういう経験無かったのか。

「実体験はないですが、ユウジ様と妄想の中では何度したことでしょう……」

「……」

……だとしたら、今含めてのエロ発言は全部マイ曰くネットか！　恐るべし文明の利器！

付き合い始めてから彼氏がオタクだったことを知った彼女のような構図な気がする……思い切り逆だが。

まあ、俺も嫌いではないが……男ってそういうモンだろ？　ただ公言はしないわな……

「では、ユウジ様」

「まて、マイ。こんなところで……しちゃダメだろ」

ちなみに現況説明。マイの発言に触発されたか、ユイは妄想に耽って時々ニヤニヤしているのが結構気色悪い。

マサヒロとユキは絶賛硬直中。ユキは焚きつけた本人にも関わらず、予想外の展開に思考停止しているようだ……無理もないわな。

先程現れた刺客こと愛坂は子供が買ってきたおもちゃを開封する時のワクワクに満ちた表情に似たものを形作り、小声で「はやくはやく！」とモロに楽しんでいた。

「……興奮しませんか？」

「しねえよ！　ハズカシイの一言に尽きるから！」

「でも、いいじゃないですか……篠文さんからのお墨付きを貰いましたし」

「え」

それを聞いたユキが途端に我に返り、マイの言い放った言葉に疑問を抱いた。

「ええっと……姫城さん？　私は、ただ距離を縮めて――」

「グンと近づけます」

今までが1メートルだとしたら、今は5ミリだな（注、純情なユウジによる表現です。個人差はあります）

「で、でも！　そんな急がなくても――」

「善は急げです」

善なのか！？

「でも、でも……」

ユキは居心地が悪そうに否定を続けていた。俺にはどうしてか分からないけども。

無能なユウジに変わってナレーション。ああ、なんですかこの男は。結局は鈍感ヘタレ野郎な残念男ですか！

というか姫城、さりげなくユキの心をズタズタにしてませんか？

……あー。なるほど、このカップル鈍感ですからね。

ユウジはユキの気持ちに気付かず、そのまま放置。マイはユウジの気持ちに気付かず、平常通りアピール。

そしてユイのおかげで自分の気持ちが知れたとはいえ……二人程鈍感ではありません。

「……ちょっとお茶を」

そして手近にあった小麦色の液体を――小麦？　てかそんな色のお茶なんか出したっけ？　姉貴が入れたのはただの麦茶で――

てか、さっきから何か臭う……これは、アルコール？　……って、ええ！？

以下回想。

『おい、マサヒロ。何か買って来てたよな』

手提げ袋には何か缶のような物が入っているようにも見える。

『えー？　なんだ、これか……ビールだ』

何故か取りだして説明された。

『んなもん買ってくるな！』

『間違えちまったらしい、てへ』

うわ、きめえ！

『絶対卓上に出すなよ、絶対にだぞ！』

『……フリだな』

『ちげーよ！　いいからどっか隠しとけ』

『はいはい（棒）』

以上回想。で、卓上にはビールの空き缶……フリじゃねえって言ったのに。

当の本人は何かムシャクシャしたのか、コップに何杯も注いで飲んだが故に出来上がっていた。

次飲もうとして入れた奴がもしかして、とーいうことは今ユキが飲んだのは……！？

「ユ――」

「もしかして篠文さん……」

……もしかして姫城、やっと気づきました？

「……！　そんなことないよ！　私はフラれちゃったんだから……いいんだよ」

否定するユキは、それでも辛そうな表情を浮かべています。

「……ごめんなさい。篠文さんのお気持ちを考えずに、こんなことを……」

「いいんだって、私が焚きつけたんだから……でもちょっと羨ましい、かな」

「そうですか……ならば」

ならば？　……嫌な予感が――

「篠文さんも一緒にしましょう！」

「へ、えええええええええええ！？」

えええええええええええええっ。

なんですか、その予想の遥か上を行く展開は――いいんですか、それは！

「なに、なにが起こっているんだ!?」

二人に挟まれるユウジ困惑中。

「篠文さんは今もユウジ様が好きですか?」

「え!　わ、私!?」

「正直にどうぞ」

「え、えーと……ごめんなさい」

「好き、なんですね?」

「は、はい」

「なら問題はありませんね!　ファーストキスは譲れませんが、セカンドキスなら!」

セカンドキスってなんですか!　聞いた事ないんですけど!
ちょっとユキ!　そんな良く分からない展開に乗っちゃ駄目ですよ?　第一なんで姫城は――

「……いいの」

!?

「いいですよ……それにユウジ様を誘惑するおつもりがあったのでしょう?」

「そ、それは！　冗談で……」

「誘惑してきてもいいですが、渡しませんよ？」

「……いいの？　私としてはふっ切ったつもりなんだけど？」

「いいです。恋のライバルが居たって、私がユウジ様を手放すことはありませんから」

「……わかった。ということでユウジ、好きです」

「なにその衝撃の展開と告白のバーゲンセール！？」

「フラれたけど……ここまで言われちゃったら黙っていられないからね」

「え、いや、でも、俺はマイと付き合っている訳で――」

「奪い取ってみせるっ！」

な、なんかユキが突然元気になった上に衝撃の展開が続いてるんだが！

なあ、これどういうこと！　一体なにが起った末にこうなったんだ！？

「少し篠文さんには後ろめたさもあったのです。これで解消です」

え、いいの？　色々とこの展開は。

「そうと決まったら、ユウジのファースト貰っちゃおう！」

「いや、私です！　彼女特権です！」
「既成事実さえ作れば私のものなのよお！」
「てかさっきから言動がおかしいぞユキ！　というか酒飲んだだろ！」
「飲んでないひょ！　私はずっとユウジらぶっ！」
「！」
あ、あれ。少し酔ったユキにドキリと来た――
「ユウジ様、んー」
「まったまった！」
「わたひがさきー」
「うわあああああああ」
二人の美女に接近された上にキスされる五秒前。なんともこれ以上の天国などないだろうに。
だが、なぜだろう……背徳感とか恐怖とかの方が色々と勝って――
「お茶のおかわり――は？」

カランとスチール製の御盆が畳み張りの床に落ちる音がした。
その音を追ってみると――紛れもない、表情の消えた姉貴。

「ユウくん……？　えーと、なにかな？　それは？」

「え」

あ、姉貴の差すのはビールのことだろうか。

「こ、これは手違いで開けてしまってもので」

「ううん、違うよ？」

「それなら、なんでございましょうか」

だんだんと増す迫力と、消えて行く表情の対比が凄く恐ろしいが故に、思わず敬語になった。

「ユキちゃんに、マイちゃん。ユウくんにキスしようとしたよね？」

「え、えと……」

どもるマイと。

「ひゃい！」

自信満々に答えるユキ。
それに、肩をビクリとさせ姉貴は俯いた……これはヤバ目な雰囲

気――

「ユ、ユウくんは……」

何か溜めるように。チャージするあのように、溜めて、溜めて――

「私のものなんだからあああああああああ」

飛びついてくる姉貴。

「あ、お姉さんだとしても！　私が！」

襲いかかるマイ。

「へへー、ユウジときす～」

抱きつくユキ。

そうして三つ巴の戦火を浴びて……身動きが取れなくなった俺は思う。

「（どうしてこうなった！）」

ちなみに流石の愛坂もですが「こ、これは……なんか怖い」

先程までは楽しんでいた愛坂もかなりひいていました。

そりゃあ、クラスメイト二人に姉が、一人の男に飛びついているという光景ですからね。

ちょっとその後の話ですが。

酔いが覚めたユキは我に返ると同時に今までの自分のやったことが思い出され、羞恥と後悔のあまり赤面の後、トイレに籠って仕舞いました。

姫城は色々高ぶっていただけなようで、少し経つと落ちつきましたが。流石姫城、まったく動揺はしておらず「またの機会に」と懲りずにユウジに耳打ちしました。

それからユウジは正座させられユウジ姉に説教を受けるようですが……ええと、ユウジ姉も色々と同罪な気が。

ユイは我感とせず――ではなく、ネタにするべく、今までの展開をノートに書き取っていました……後にこれが人名を変えた上でネット公開されたそうな。

マサヒロはビールにすっかりやられ、完全に出来上がり、一人寝入っていました。

……ええとこれは勉強会とはもはや呼べないような――

第163話　√1－68　※独占禁止法は適応されませんでした。

どうも、ユウジです。先程から姉貴に説教受けています。

「ごめんね……だって、ユウくんの唇が奪われるなんて……見てられないよ」

「そりゃ見てりゃ恥ずかしいわな」

俺は姉貴に連れ込まれ居間から少し離れた和室に居た。
俺と姉貴が向かい合って、いかにもな説教スタイルで二人とも正座をしていた

「そうじゃないよ！　私はユウくんのことが好きだから……一人の男性として」

「あちゃー、家族止まりにして欲しかったナー」

相変わらず何を口走ってるんだろうね、姉貴は。

「いいもん、いいもん！　既成事実さえあれば――」

と言って姉貴は正座状態から立ち上がり、俺を押し倒そうとしてきたので――

「さっきの酔ったユキと同じ事を……ていっ」

ガンッ……音は誇張表現だが軽く手を垂直にして姉貴の頭へと落とした。

「あいたっ……うぅ」

とりあえず、冷静になろうか。

「さっき散々”不純異性交遊はダメだよお！”って言ったのに、ほぼ瞬間的に不純なことをしでかしていませんか？」

「そ、そんなことないよ！　これは私の純粋な気持ちだよっ！」

「……押し倒した後は何をしようとしていたんでしょうね？」

「それは……既成事実を」

「既成事実、とは？」

「……赤ちー―」

「ていっ」

「いたっ……なんでそんなに叩くのー！」

「……今までの姉貴のしようとしたことが不純でないとしたら、俺と誰かがキスするのも問題無さそうだけどな」

「お、お姉ちゃんとなら良いんだよ！」

「横暴だなっ！　……なあ、姉貴。今言わせて貰うけどさ」

一応彼女が居ることもあり、少し行動を慎んでもらいたい気がし

た。
そして言っていなかった……今のいままで。
「な、なに？」
今俺は、姉貴に告白する。
「……俺、マイ――姫城と付き合ってるんだよ」
「……え？」
「そのまんまの意味で、マイは俺の彼女です。」
「え、えええええええええ」
「ということで、不純でない異性交遊をしていますです、はい」
「な、な、なななななな」
ショックのあまりか言語機能が吹っ飛んでしまった姉貴は素晴らしい程に痛々しい。
そして、かつての興奮に満ちて俺を押し倒そうとした時の火照った紅潮させた顔と思い切り対比して今は青ざめていた。
「ど、どういうこと!?　聞いてないよ!?」
「まあ、今初めて言ったんだからな」

「そ、そんなこと……なんでお姉ちゃんに相談しなかったの」

「相談したら思い切り邪魔してきそうだからな」

「邪魔するに決まってる！」

……姉としてそれはどうなんだ。

「ということで、スキンシップもほどほどにして弟離れしてください」

結構辛い事言ってるのは分かってるけども、姉貴も容姿端麗かつ副会長をポジショニングが後押しして人気も高い。

告白したい男なんてそこら中に居るだろうに。だからこそで、そろそろ弟離れした方が俺の為にも姉貴の為にも――

「出来ないよ……ユウくん居なかったら、私は……生きていけないよぉ」

「そこまで想ってくれるのは嬉しいけどさ、姉貴もさ……俺だけに執着したダメだって」

「でも、でも……」

「俺の姉ならさ、笑顔で彼女が出来たことを喜んでくれてもいい気がするんだけどな」

「……確かにユウくんは、カッコイイし、可愛いし、家事出来るし、生徒会でも私をサポートしてくれて――モテてもおかしくないと思う」

「いやいや、俺なんて、たまたまマイが好いてくれただけだからさ」

「私だってユウくん好きだよ。ユウくんが産まれた時から……ずっと好きだったんだから」

「姉貴……ありがとう。姉貴のおかげでここまで元気になれたからさ。本当にありがとう、姉貴」

「ユウくん……」

少しの沈黙。俺が彼女を作ったことを直ぐに受け入れることなんて出来ないことを今までの姉貴の見ていて分かる。

だとしても、俺も姉貴も。一つの場所に留まってはいけないから。進まないといけないと思うから。

「姫城さんは……ユウくんを幸せにしてくれるのかな？」

「はは、変な質問だな……きっと、そして俺からも幸せにしてあげたい」

それを聞くと、姉貴は唇を少し噛みしめたかと思うと――

「……分かったよ、ユウくん。ユウくんが選んだんだから最高の人なんだろうね……なら、いいかな」

「姉貴」

「……かなり惜しいけど、私も卒業しようかな。じゃあユウくん、最後のお願い」

「ん？　なんだ？　キスとは無しな」

「分かってるよ……だから弟卒業記念に、一回だけ。”ミナおねえちゃん”って言ってほしいんだ」

「懐かしいな……小学低学年ぐらいか？」

「ううん、中学年だった」

「まじか、そんな時まで姉貴にひっついてたのか」

「私もユウくんにひっついていたけどね」

「……分かった。じゃあ言うぞ――」

その後「じゃあ、悪いけど先行くな」と俺は部屋を後にする。
姉貴は「少し一人でいようかな」と和室に残った。今まで散々愛した弟に馴れ馴れしくするな、なんて言われたもんだからなあ。

「（……逆説教してやったぜ）」

某上条さんのような心にしみる、思わず更生しちゃうような口上の説教は出来ないけども。
先程の誤解を修正後、襲いかかって来た姉貴を問い詰めたということで。
今思えば、あまりにも唐突過ぎた気もする……が、マイとの仲を認めてもらう為には、これぐらいしないとダメだと思ったからで。
きっと姉貴が一人和室に残ったのも、色々思いを整理するためな

のだろう――

と思ったが、俺が襖を後ろ手で閉じて和室の中から聞こえた「おねえちゃんだって……えへへ～」と凄く嬉しそうに独り言をつぶやいていたのは聞かなかったことにしよう。

居間に戻るとマイは黙々と勉強していた。買被りにも程が有るが、本格的に勉強が乗って集中しているようで俺が来た事も気付いていないようだった。

そんな集中力を俺も習わねばと思ったのだが――

「あれ？　ユキは何処行ったんだ？」

部屋には何かを猛スピードで書き続けているユイと酒で潰れたマサヒロとテレビをひゃははと笑いながらみる愛坂。

猛勉強しているマイと……ユキだけが1人忽然と姿を消していた。

そういえばさっきトイレに籠っていたとユイに報告を受けたのだが、３０分経った今での籠っているのだろうか？

「ああ、ユキなら夜風浴びにいったぞー」

１分１枚のペースで何か原稿のようなものを書きあげるユイが、仕事半分に応えた。

「……外か、寒そうだな」

もう秋で学ラン、セーターが完全常習化し。夜に窓を開けると夏の冷房も真っ青な、超冷風が襲いかかって来る。

そんな寒空の下にユキが居るのか……

「ちょっといってくるかな」

適当にかけてあったはんてんを羽織り、庭へと玄関からスリッパを履いて出る。

「……」

ただ立つくして、空を見上げるユキの姿が寒空の下にはあった。コートも何も羽織っておらず、私服姿はなんとも寒そうだ。俺はそんなユキがあまりにも見ていられないので、セクハラ覚悟で自分の羽織ったはんてんをユキの肩へとかけた。

「ユ、ユウジ！？」

「よぉ」

「あああああ、さっきは！　間違いなの！　コントだったの！　面白かったよね！　うん！」

なんというかユキはもの凄い動揺してしまっていた。まあ、さっきの行動は色々と積極的というか小悪魔レベルでは――

「いや、いいって。エラソーに言うのもなんだけど、冗談でも好きって言ってくれたのは嬉しかった」

「え、冗談じゃ――はっ」

と、失言をしてしまい、しまったとばかりに口を押さえるユキ。

「ありがとな」

「え」

「振った男の背中を押すなんてさ……なかなか出来ないだろ？」

「う、ううん！　そんなこと！」

「ユキの気持ちに気付いてもやれず、自分の気持ちも正直に伝えられずにぐだぐだ……今度こそ幻滅したろ」

「そんなことないよ……私だってユイに言われるまでは気付かなかったんだから」

「え、ユキもユイ？」

「ってことはユウジも？」

「……」

「……」

「「ははははっ」」

「なるほど、そーいうからくりがあった訳か」

「そうだったんだ……ユイちゃんの手のひらで踊らされたみたいだね」

「そうだろうよ」

「かもね」

二人笑いあう。なんというか懐かしい感じがしてたまらなかった。

「あー……そうことだったのか」

「ユイちゃんには感謝しなきゃね」

「俺はユキとユイに感謝しなきゃな」

「えー、大したことしてないよー」

「いやいや。俺のヘタレを見くびっては困る……ああ言って貰えなかったら、いつまでもグダグダやってただろうな。永遠にユキの気持ちに気付かずに」

「ひどいなー」

「とにかく、ありがとうな」

「……う、うん」

そして寒空の下沈黙。紳士としては当然とはいえ、カッコ付けてはんてん貸したら、流石に冷えてきたなあ。

「はんてんありがとね……ってユウジ！？　すっごい寒そうだけど、大丈夫！？」

「ダイジョーブダイジョーブ」

「何かかじかんできてない！？」

「ソンナーコトハナイヨ」

「さ、寒いよね！　ごめんねっ、今返すからっ」

「いいって、ユキに風邪ひかれた方が困る」

「……ありがと。そんな風に優しくするのも、今度からは姫城さんにしてあげなよ？」

「ああ、わかった。でもユキも――」

「あーあーあー！　優柔不断はだーめ！　私も諦め付いたからっ」

はんてんを着たユキがくるりと回った。

「酔った勢いで自分の溜まってたもの全部出せたから、いいのっ」

「ユキ……」

「まぁ、もう少し酔えてたらキス出来たかもしれないけど……うん、諦める！」

「……」

この人はとんでもないことをときたま平然と言うから反応に困る。

「とーいうことで、私は吹っ切れました！　新しい恋に生きますっ……ユイちゃんとかいいかも」

……恋関連は聞かなかったことにしよう。

「フラれたので不幸のドン底～……って訳じゃないよ？　ユウジはこんなにも自然に接してくれるし……普通振った女といつも通りになるのはきまずいよねー」

「あの、ユキさん？　それは皮肉も込められているのでしょうか」

「……どうかなー？」

いつもの小悪魔フェイスをユキは形作っていた。おお、なんというか末恐ろしいな。

「嬉しかったよ？　このままユウジと疎遠になっちゃうのかなって……だからいいの。だ・か・ら！　ユウジも心置きなく、ね？」

「ああ……分かった」

「さあさ、部屋に戻ろっか……あ、でも私は少し残ろうかなー。はんてん借りていい？」

「いいけど……体調崩さない程度でな」

「はーい」

「じゃ、先戻るわ」

「後から行くからー」

俺は庭を後にして、玄関扉を開く。
寒かったのもあるが、まずは本人の希望でもあったので俺は部屋へと戻った。
そこには――

「ユ、ユウジ様っ!?　なんだか震えてますけど、お寒いのですか!?」

「いやいや、大丈夫。ちょっと夜風に当たって来ただけだからさ」

「そ、そうなのですか……それと、すみません。先程ユウジ様が戻って来ていたというのに気付くことも出来ず――」

「いいって、いいって。マイの集中力も見習わなきゃな」

「そんな大したことではないんです！　ユウジ様とユウジ様のお姉さまが一体何を話しているのか気になっていましたが……そこは家族の会話だと言い聞かせている内に――」

「止められなくなったと」

「はい……」

「配慮ありがとな」

「い、いえ！」

「じゃー、俺も勉強するとすっかなー……あー、早速で悪いけど、この公式なんだっけ？」

「！　え、ええとですね――」

そうこうあったけども、勉強会はそのまま続いていった。

番外12話　BOTSU　1－4，2－4（前書き）

ボツシナリオとかパロディモードとかです。予定していたＢＡＤＥＮＤシナリオは今後のネタとして温存しておきます。
今日で9月中毎日更新が終了ですね……あー長かった！　とりあえずは目的達成したので少し休もうかなと思います。
1週間ほどで帰って来るかもしれないですが、それまでは更新無しか、番外編で埋め草するかと思われます。
それではっ

番外12話　BOTSU　1－4，2－4

BOTSU　√0

1－4（通常のユウジと少々異なります。用法・容量を守って正しくお使いください）

「!?」

目が覚めるとそこは見慣れた自室で、俺はベッドに寝ていた。汗をびっしょりとかき、目もとには涙と思われるものが線を描いていた。それはまるで悪い夢から起きた直後のような感覚。

「今のは夢……だったのか?」

あまりにもリアルで、とても恐ろしく怖い夢。記憶は鮮明に残り、今でも思い出すだけで寒気がした。

『Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ』

そんなタイトルのソフトが落ちていた。

「（嫌な夢……だったな）」

きっとあの幼馴染キャラが出たのも夢の話なのだろう。にしても……

「これで２７６１５回目か」

ああ……なんでこんなに鬱展開繰り返されなきゃいけないのさ。色々頑張ったけどどうしてもな――

「回り道したら、今度は俺が死んだし」

どうなってんだよっていうね。これ以上ユキの死に際なんて見たかないのに――

「ま～だお主は進めないのかっ」

「おお、桐居たのか」

うむ、ずっとな。と桐は答えた。

「仕方ないのう……ほれ攻略本じゃ」

「あざーす！　えーっとなになに……フラグ立てる為に手つなぎ登校！？　え、それだけ？」

「そうじゃな」

「えー……今までおんぶしながらー、とかお姫様だっこー、とか両手繋いでクルクル回りながらいってもダメだったのに」

「そ、そんなことしておったのか……それじゃ逆にフラグが立ちそうな気もするがの」

「なんで思いつかなかったんだろうな……最近マンガばっか読んでた弊害だな（キリッ」

「昨日見たアニメの必殺技を学校に来て意気揚々と披露する小学生じゃあるまいし……王道を何故試さぬ」

「え、だってクソゲーだろ？　コレ」

……。

さて状況を説明しようか。現在俺は殺される一歩手前まで来ている。

なんかアブナイ薬とか毒を盛られてジワジワとじっくり体の中から殺されるとかではない。

喉元には鋭さを強調する、眩いほどの金属光沢を放つ小型の折りたたみ式ナイフが突きつけられている。　ようするに頸動脈がピンチ、大量出血の危機到来だ。

「殺される」という表現から分かるかと思うが、他者にナイフを付きつけられていて――

「あなたを殺せば……うふふふ」

これこそが、狂乱と言うのだろう。　狂気に蝕まれた女生徒が、ナイフを右手に持ちながら妖艶に笑う。

なぜこんな事態になったか、経緯、というかちょっとした回想を――入れようと思ったけど止めた。

「（うわー、俺ヤンデレとか無理だわあ）」

２－４（通常のユウジと多少異なります。用法・容量（ｒｙ）

「な、なんでこんなことするんだよ！？　俺が何かしたってのかっ」

「あなたは罪作りな人ですね」

「え」

やべ、会話噛みあってねえ。

「私をこんなに虜にしてしまうなんて」

……電波ちゃん？

「ええと、言いそびれていました。　ユウジ様私こと、姫城舞はあなたのことが好きです」

「えっ」

思わずドキッとしてしまう――わけねーだろ！　ナイフ付きたてられている上での告白だぞ？

そんなんでドキ――言わば興奮してしまう奴は紛れもない変態だ！

いや、こんな美少女に殺されるなら別にいっかな～、とも思ったけど。

ヤンデレだからな。ヤンデレ。言●様みたいに盗んだ～ボートで～夕日に向かう～……●の首を持って。
道端で首スパアとか、空の鍋をかき混ぜて音楽奏でたりとか、ヤンデレな妹のせいで今日も眠れないとか。
とーにーかーく……トラウマなんだよ、うん。

「なんで……虜にされたのが俺を殺すに理由に繋がるんだよ……」

あー、カンペ持ってきといて良かったわあ。

「それは簡単なことです。私はあなたに一目惚れして胸が切なくて切り裂かれるほど（ｒｙ」

一呼吸おいてから、彼女は言う

「ユウジ様の彼女かと思われるものが現れたのです」

「えっ。俺に彼女なんて居たの？　それは驚きだなぁ」

「……あのユウジ様、そこは地文で」

「ええと……ああっ、そうだった悪い悪い」

気を取り直して――

「それは……誰？」

「……しらばっくれても無駄です。篠文由紀さんのことですよ」

あー、あの可愛い幼馴染か。大体あの立ち位置は恵まれないヒロ

イン枠だよなあ、うんうん。
　初っ端交通事故に会うとか、もうね。色々と不幸だよね。でも、そんなとこにそそられるぅ！

「いや、まて！　俺は付き合っていない！」

「嘘です、私はあなたをずっと見ていました。そうですね……表現するとしたら。ねっとり熱い視線で舐めまわすようにじわじわと確実に、かつ繊細にそれでいて春風のような（ｒｙ』

　今は黙ってればいいのか。声優のギャラとかって一部は拘束時間らしいね、ってことはラッキー！

「そして今日の美術の授業帰りには……お互い抱きしめ合って……ッ！　なんて羨ましい！　妬ましい！　素晴らしい！　ああ、なんで私じゃないのですか……ユウジ様」

　なんだかんだ姫城さんも変えてんな……アドリブって奴か？

「いや誤解なんだよ、あれはユキが階段で躓いて――」

　いや、実はピアノ線が（ｒｙ

「ゆ、ユキ！？　……うふふふ、あなたと篠文さんは名前で呼ぶ仲なのですね。篠文さんもあなたを呼び捨てで呼んでいましたし……マイと呼んでくださいぃ！　一度でいいですからぁ！」

「でも、それが何故俺を殺す理由になるんだ？」

「なります。本当なら篠文さんを闇討ちすればよいのですが――末

には刃物で原型を留めないまでに」

わー、姫城さん。アドリブ入れるのはいいけど、なにその鬼気迫る表情。演技としては最上級だなあ。

「でもユウジ様はとても魅力的です。まずは、その優しさと（ｒｙ」

以下略。

「なら虜にさせないように、私のものにしてしまえばいいと私は考えました。殺して愛しいユウジ様の生首だけを持って、私は生きて行くのです。決して邪魔されることのない、永遠の二人の時間が続くのです！」

防腐剤とか使うんだっけ？　もしかして剥製？

「俺は、そんな事の為に死にたくはないな」

うん。出来れば腹上――

「そうですか……なら方法を変えましょう」

あれま、意外とあっさり変えるんだな。

「私が自殺しますから、私の生首を持ってユウジ様と共に生きさせてください」

「だから、なんで結局どちらかの生首しか残らないんだよ！」

何故に生首オンリーなんだ……オンリーイベント開く気なのか？

「それがいいですね！　そうすれば私の生首を気味悪がって他の女は寄り付かないでしょうし。それを構わない、という方がいたら呪い殺します」

というより直ぐに捕まるだろう常考。

「では、ちゃんと事後処理を……あ」

「姫城さん？」

「刺しちゃいました……ああ、なんか力が――」

「え、え……マジモンの血？　たかその小刀本物だったのか！　おいスタッフ何渡してるんだよ！　え？　個人の持ち物には干渉しない？　んなこと言ってる場合か！」

「……ユウジ様、血が、血が止まりません」

「ちょ、まってろ……今シャツを破いて――スタッフ！　早く救急車呼べや！　おいっ、モタモタしてんじゃねえ！」

「なん……ですか？　ユウ……ジ様が……死を選ぶの……ですか？」

「いや、姫城さん！　この状況で演技なんかしたら、うわっ、出血量が半端じゃ――」

「ユウジ様の腕の中で死ねるなら――本望で……す（ガクリ）」

「姫城ォォォォォォォォォォォォ」

『ハーイカット』

「おつでーす」

「お疲れ様でーす」

「おー、姫城迫真の演技だったな」

「いえいえ、ユウジ様の毒舌たっぷり皮肉増量メタ成分大目な地文も良かったですよ？」

「えー、そうかなあ」

「そうですよー」

「え、次の現場？　ああ、わかった。じゃ、後でな姫城」

「はい、それではユウジ様っ」

※これらのシナリオはカットされました。

第１６４話　√１－６９　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

げふっ（吐血）

第１６４話　√１－６９　※独占禁止法は適応されませんでした。

ＨＲＳ√１－２

私はある夫婦の間に産み落とされた第一子でした。
花が舞うように、身の周りを友人や人で彩ってくれるように。私は「舞」と名づけられました。
祝福され、笑顔に包まれ、宝物のように大切にされていました。
――というのは母がしみじみ話してくれたことなのですが、きっとそうに違いはなかったのでしょう。
モノゴコロが付いたのはそれから3年程経った頃で、家では母が家事をして父はハキハキと会社に出かけて行く光景を目に浮かびます。

そしてその1年後。家族は子に恵まれました。

「ねー、おかーさん。なんでお腹が大きくなってるの？　食べ過ぎた？」

その頃の私は純粋で、ただ単純に聞いたのです。

「ふふ、違うわよ！　家族が増えるの……そしてマイに弟が出来るのよ？」

母は嬉しそうに答えます。

「そっかあ、私に弟が出来るんだ～」

指をくわえて母の大きくなった腹部に目をやる私。

「もう少しかな？　あと2、3ヶ月で予定日だから。待っててね、マイ」

「うん！　まってる、弟楽しみだな～」

弟への期待にワクワクし胸を膨らまし、そして予定日の数ヵ月後。

「よくやったな……」

父は何もなく産み終えたベッドに横たわる母に慰の言葉をかけると同時に、近くからおぎゃあおぎゃあと声が聞こえます。

「これで私もお姉さんなんだねー」

と、産まれたての弟を見て、私は呟きました。弟も増えて、私たち家族は笑顔に満ちていたと思います。

家族が増えても母と父の仲は変わらず、というよりも仲が良くなっていたのかもしれません。

どうしても私に構うことが少なくなった両親。そんな弟に少し嫉妬しつつも、私と同じかそれ以上に弟の成長ははやく。

そうして4年の歳の差あれど、体は追い越せ追い越せと大きくなっていきます。そうして、モノゴコロがついて少し経つと気でした。

まさか、あれほどの悲劇が家族に起り。

それを起爆剤に、崩れ始めていくとは。幼き私には夢にも思わな

かったのです。

11月29日

「よーし、範囲は大体終わったな！」

勉強会を繰り返し、着実に復習を繰り返して頭に叩き込んでいく俺。

「（最近デート出来てないんだよなー……）」

デートとは名ばかりの寄り道の延長線上に過ぎないけども。

「そういえば11月もあと少し……か」

言い忘れていたのと少々気恥かしかったのもあったが……言ってしまうが、俺は誕生日を迎えた当日にマイからプレゼントを貰っていた。

それもお手製のクッキーという……おいしかったですとも。「一生懸命つくってみたのですが……お味はいかがですか？」

そんなこと言われた暁には美味さ百倍ですとも。……マイの初手料理に感謝感激アメアラレと味わいながらいただいた。

誕生日とは関係ないが、12月には――

「クリスマス！」

そうだな……プレゼントしなければなるまい、というか気が済まない！

ということで、現在思案中……さてどうしたものか。

「あー……とりあえず短期バイト始めようかねー」

姉貴に頼るのは色々と情けないし、汗水流して貰ったお金で買ってあげる方がさぞ気分がいいことだろう。

「よーし、とりあえずはバイト探しだっ！」

一人机に座りながら意気込む俺だった。

第１６５話　√１－７０　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

帰ってきました……がなんか感じが掴めないなあ
というか読みなおして気付いたけど俺の小説ってこんなに寒かったっけ……あれえ？

追記
１－５リニューアル
追記２
体調不良と多忙により執筆が止まっています、もうしばらくお待ちを

第１６５話　√１－７０　※独占禁止法は適応されませんでした。

一二月九日

「テスト終わったぁー」

びっしりと答えを書き込んだテストを回収されて、テスト担当の教師が教室を去っていく。

教室中の緊張した空気が解かれ……俺も思わずつられて椅子に座りっぱなしだったが為に固まった体をほぐす。

いぃよっしゃっ！　これからは冬休みまでのカウントダウンだぜ！

「終わったねー、ユウジ」

疲労が顔に出たユキ達が俺の席へと近づいて個々に試験終了の感想を言い始める。

「ああ……これで今年のテストは終わりっと」

「こ、これで積んでいたギャルゲが出来るっ！」

瞳に涙を浮かべているのかは分からないが、心底嬉しそうにそう呟いていた。

「……試験前にはアニメ観てたから、そりゃギャルゲ出来る時間はないわな」

ユイの部屋の前を通り過ぎる旅に時折聞こえる、現実にはいない

であろう高い女の子の声。
軽快なＳＥとかＢＧＭとかが部屋から漏れていたのを俺は聞き逃しては居ない。

「まあな！　試験前だけで２５本のアニメは観たからな（キリッ」

１クール・２クール作品、ＯＶＡ含めて合計５００話で１２００分。ＯＰ・ＥＤも忘れずに予告を漏れなく観ていたという。
そこまで聞くと呆れを通り越して逆に尊敬してしまいたくなった。
いや……テスト前にそこまで時間費やすなと。

「どんだけ観てるんだよ……」

「ふふっ、もちろん現放送中のアニメは除くっ！」

それでいてテストは学年トップの成績を修めるチート性能の持ち主このユイ……マジでなんなんだコイツ。
何処に勉強する時間があるのかユイの実生活が同じ家の中に居ながらながら気になる。
ユイの部屋の中だけ時間の流れが遅く、だから俺と比べても有意義な時間の使い方が出来たりしていてな。
勉強会では最後の方ぐらいしかまともに勉強せずに、後は「絵はプロレベル、話はバカにしている」感じな４コマを描いていた。

「終わったぜぃ！　ユイ、なんか面白いアニメあったか？」

一時期半端じゃないほどに影の薄かったが勉強会のおかげで大分挽回しているマサヒロがユイに問う。

「うーんエクス●ンドかな」

「全てのロボットアニメは道を譲れ！」

「ユイとマサヒロ……それは地雷過ぎる」

特定の作品を扱うのはマズいだろって。

「原作は良かったのに……くそう、無印だけで構成すれば良かったものを」

「いや、あれはもともと2クール企画だった――」

「もう止めようぜ！　とりあえず！」

なぜにこんな話になったんだろうか！

「ユウジ様……終わりましたね」

彼女もかなり成績もよくテストも俺の見た事のない無い点数を取るが、テスト習慣はやはり披露が出るようで。

流石の彼女も疲れている様子を見てとれる。

「ああ、今回もマイのおかげで良く出来た。いつもありがとうな」

「そ、そんな！　いいんですっ、ユウジ様の隣で……ユウジ様の匂いを嗅いでいられるのですから！」

「……ああ、うん」

なんか彼女の方向が悪い方向へと行っている気がする……キャラ

崩壊ってレベルじゃねーぞ！　だけども――

「ま、まあ！　そんなお茶目な彼女も！」

「なんかユウジも毒されてるよぬ……愛とは恐ろしい」

「男の子だもん……って、あれ？　今回は姫城さん？　……女の子だもん？　いや、私はそんなこと――」

なんというか相変わらずというか、なんというか……それで、ユウジはバイトを見つけたんでしょうか？

試験前までに探しているとは思えませんし、始めているなんてことはまずないでしょう。

あと１０数日も無いですが、大丈夫ですか？

第１６６話　√１－７１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

なんとか更新。本当に申し訳ない。そして出だしも申し訳ない。

第１６６話　√１－７１　※独占禁止法は適応されませんでした。

無残にも砕かれたアスファルトは下地の土が露出していた。電柱は倒れ、電線はガードレールに垂れかかる。
何かに衝突したか前部が大きく窪んでしまった車の車内には粉々に砕けたガラスが散乱していた。
落ちた看板はぐにゃりと拉げ力なく道路に投げ出され酷い惨状を露わしている。

荒廃した旧都で、俺らは戦っていた。

「くっ、和！　どうすりゃいいっ！」

敵からの砲撃が襲う中で、隣を共に走る彼女へと質問する。

「……とりあえずは逃げるしかなさそうですね」

「全然解決策じゃねぇな」

「それは後々」

黒服。それもワンピース状に肩から足首までを覆う飾り気の一切ない黒一色の服を着る。
腰まで届くかのような長く流れるように美麗な黒髪を有し、精悍で非常に整った「美」をつけても遜色ないほどの美少女が彼女だ。
左手には繊細に磨かれて銀色に輝く刃先の反った日本刀を提げていた。そう、そして俺と彼女は戦っている。

「主、そこの路地に入ってください」

「おう」

半分以上が崩れたコンクリートのビルの影へと隠れる。

「8秒後に砲撃、来ます」

「!?　だからどうすりゃいいんだっ！」

後ろを振りむけば、これ以上は進めない行き止まり。見事に袋小路に追いやられた訳だ……それも見方の彼女に。

「これを」

と言って彼女が俺へと放り投げたのは薄汚れた銅色を放つ１０円玉だった。

「これを撃ってください」

「ちょ、まて！　俺はパチンコ玉しか――」

「有無を言わずに撃ってください、主。……きます」

「ええいっ、こうなりゃヤケだ！」

そうして俺は１０円玉を空へと放る、目の前へと１０円玉が落ちてくる――それが分かった途端。

「高速射撃！　”スピードシュート”」

俺の右手から放たれるは電撃……とは呼べない弱弱しい代物。弱弱しいことには違いないが、速度が他の攻撃を比べ物にならない。
そして言唱からのラグは1秒未満で、連続発動が可能なのがこの攻撃の大きな長所だった。

不意打ちのごとく相手にモロに食らわせた。普通なら速度だけの威力はからっきしなこの技も何か固形のものを付加すれば大分マシになる。
そもそもこの技は熱を微量にしか発生させず、瞬はつ的な目くらましなどが主な用途な技であり、それをなんとか敵へとぶつけることと成功した。

「ていやっ！」

そうして俺が電撃を放つと同時に、彼女は壊れ砕けた道路を踏みつけ勢いを付けて飛びあがる。
キラリ光る刃先を敵へと向けて、鋭く光る日本刀を大きく振りかざし、相手を一閃した。
ダメ押しのように俺は、さらなる能力を発動させる。

「強力射撃！　”ライトスピア”」

右手という小さな面積から生まれたとは到底思えない程に電撃は強大に激しく暴れまわり、一直線先の敵を捉えた――

「ユイ、このアニメ何かどっかで見たことあるんすけど」

冒頭のはアニメの一シーンで、なんとも二人ぼーっと観賞してい

た。

「ああ”ｅｐ　ｔｗｏ”って作品で、なんかレー●ガンの要素入っちゃってるよねえ」

「だとしても、妙に気合いの入った戦闘シーンだな」

「ここだけで動画枚数どれだけ使ってるんだかねえ」

やあ、俺だ、ユウジだ。

俺はある場所、延々とアニメやゲームのＰＶやら本編やらを垂れ流すテレビを観てそんな感想を呟く。

ちなみに、ここは絶賛女子率向上中の俺の家こと下之家ではない。

ユイが居るので俺かユイの部屋のどっかだろと錯覚してしまいそうになるが断じて違う。

「あ、らっしゃいませー」

「いらっしゃいー」

訪れた客に頭を下げ、絶妙な具合に五月蠅すぎない声でお出迎え。

俺とユイは二人店番をしていた。そう、あの店でだ――

１１月末。アルバイト先を探そうとネットで検索をかけるも、こんな貧弱町に載る勝手の良いアルバイト先など見つからず。

ネットがダメなら足で探そう……ろ、今日の夕飯作りも考えて、食材買い込みの為に商店街へと繰り出した。

歩みを進め店に張られた求人チラシを期待に胸を膨らまして覗く

も、直ぐに期待は打ち砕かれる。
多くのチラシに踊るのは「大学生以上」という文字。それは高校生である俺を全否定し完膚なきまでに叩きのめされた。
年齢制限は書いていないのに「普通自動車運転免許がある者」と、さりげなーく俺を除外する。
そんな中でふと目に入ったのは、現在好評現実プレイ中の「ルリキャベ」を購入した全ての元凶こと「ゲームショップキドだった」
チラシそのものが張られていない……というかこの店は案外高校生が本分な俺には最初から論外かもしれない。
なぜならこのゲームショップということから想像も付くかもしれないが、モチロンのこと「エロゲー」も売っている訳で。
事実Ｒ－１８指定の商品を動かすゲームショップが果たして高校生をバイトとしても雇うだろうか……いや、ないだろう。
そうして「ああ……どうしようか」と頭を抱えながら店前を後にしようとしたところ――

「おお、ユウジか。なんだ、何か買いに来たのか？」

聞きなれた。否、聞きあきた。声が俺に飛び込んでくる。いつものふざけた口調で統一感のない語尾を持った――

「ユ、ユイ！？」

「おうよ」

目の前に「ゲームショップ・キッド！」と青地に白いペンか何かで適当に書かれたエプロンを身に付けた、ぐるぐる厚層眼鏡をかけたユイが不思議そうに俺を見つめながら立っていた。

「お、おま！　こんなとこで何してんだよ！？」

「バイトだ」

「は？」

「バイトなんだぜ！　これも裸エプロンの練習でなく、この店の正装だ」

挙げる一例がひどすぎるとして、ユイがバイトと考える。

真っ先に「なぜ？」という疑問が浮かぶ。しかし、ある日のこと、ユイに聞いたことがあったのだ――

8月某日のこと。

流石の暑さに気が滅入り、我が家のオアシスこと居間で麦茶片手に報道番組という至福の時間を過ごしていた頃の事。

「ミナ姉、じゃあ今月分」

「はい、しっかり受け取りました」

と後ろでの会話が聞こえたので、気になって振り向いてみると、ユイと姉貴が卓袱台越しに向き合って座っていた。

「？　二人とも何の話？」

ギャルゲとかやっていて「女の子の話題に割り込んじゃ、メッ」というテンプレートな展開が頭に浮かんだが。

そもそもユイは女としてみるべきなのか、姉貴は正直どうでもい

い……ということで今の思考は即刻廃棄することにする。

「生活費だ」

「生活費ぃ？」

「そうよ、ユウくん。ユイちゃん、毎月今月かかったであろう食費や光熱費とかを計算して渡してくるの」

「うむ、居候として当然のことだ！」

「ふーん」

その金の出所がすこしばかり気になったが、父親……俺の義父にあたる人も母さんと同職だったらしいし、仕事もしてるから、それなんだろう。

「別にいいのにー」

「アタシとしてはこんな温かい場所に居座らせて貰ってることに本当に感謝しているんです。下之家の家計を圧迫する訳にはいかないですよ」

「まぁ、ユイちゃん良い子！　ユウくんと同じくらいいい子！」

何故俺を比較対象に出したし。

「じゃあ、これはしっかり預からさせていただきます」

「お願いします」

二人頭を下げる光景なんとも言えないな。ユイの態度が違うようで変わりないのが少し気になるところだけど。

「じゃ、ちょっとお茶煎れてくるねっ」

「あ、アタシは部屋に戻ります」

「あ、もしかしてこれを渡す為に来てくれた？　ごめんね、手間とらせちゃって」

「そんなことないっすよ、じゃあ失礼して」

そういえばこれの他にも疑問があって聞いたことがあったな――

１０月某日、生徒会の仕事に追われ様々な小道具の入った結構な重さを両手で持ちつつも、俺とユイ二人歩いていた。

「よっしゃー、今日は”俺の姉がこんなにお美しいわけがございません”」の発売日だぁ！

この手の話題は良くする。そして月数回以上のペースでそんなこと報告してくるユイ。

「てか、よく月にそうボンボン買えるな」

「今月は抑えてギャルゲー５本だ！」

もちろん定価で（キリッ、と付けたして誇らしげに言うがダンボ

ールに顔が隠れているのとそもそも厚ぐるぐる眼鏡のおかげで表情など見えない。

にしても、高校生のお小遣いでそれほど購入できるものだろうか。ゲームショップキドはそれなりに引いてくれるが限度がある。

そうなれば、やはりどこからそんな金が？　と考えてしまう。

「金あるなー」

「うむ、まあな」

と胸を張っていてもおかしくないが、相変わらずダンボールで隠れて見えない以前に、俺もダンボールのおかげでほぼ視界がないので分からない。

そうか考えると、やはりナオトさん（父）だろうか。

会いに来る前はどんな人だよ、と身構えていたらなんとも風貌は髭こそ生やしているが整った顔立ちの若さが残った好青年だった。

無精髭も相まってか少し野性的な顔つきながらも、どこかとっつきやすさを感じる……悪い感じはしない義父だった。

8月某日、以前から「来るね」と言っていた俺の父となったナオトさんが訪ねてきたことがあった。

『いやあ、会えなくてごめんね』

と何回も、何十回も……あの、やりすぎですから……本当にそこま……止めて！　もう壊れた人形のように謝り続け、終いには土下座スタイルに移行しようしたので阻止した。

『本当にいいのかい？　こんな会ってやれもしない糞野郎だからね』

「いや、いいんですって」

『……こんな不潔そうなオッサンでごめんね。こんなのが父なんて自殺も考えたよね？』

「いやいやいや！」

『本当にごめんね、生意気に来ちゃってごめんね。というか産まれてきてごめんね』

普通ならここまで低姿勢だと舐められること確実なのだが、もともと俺は低姿勢だからと言って図に乗ることはない。

というか、それ以前にここまで自虐的でネガティブな父（仮）に少しばかり焦り引いていた。

「いいですって！　本当に！」

まあ、この時の「父との遭遇」はまた後々ゆっくり話すとして、ナオトさんがやはりユイに自分が居ないからお金を渡しているのだろうと、推測。

そうして俺は勝手に納得した。

「あ、今日は”夜明け前よりイレブン坂、エクステンド・セカンドシーズン”のＤＶＤ４巻の発売日じゃあないか！」

……どれだけの金をこいつに渡しているのだろうか。

と、まあ回想終了。それでユイとゲームショップキドの前で遭遇した時間軸に戻る。伏線張りって大事だね。そう思わざるを得ない

ことだった。

「それで、ユイなんで――」

第１６７話　√１－７２　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

どうなんだろね

第167話　√1－72　※独占禁止法は適応されませんでした。

「それで、ユイなんでこんなとこで――」

「ああ、バイトだ」

……バイト？　ええと、あの容量とかの単位のバイトでなく、アルバイトの略称ことバイト？

「おま……バイトなんかやってたのか」

「うむ、結構な！」

「……」

「まあ、ここで立ち話もなんだ。中に入ろうじゃないか」

「あ、ああ」

で、ゲームショップキド店内へ。てかユイのエプロンだと「キド」が「キッド」になってるんだが、どっちだよと。

ちなみに看板は「キド」になっており……店の中で情報がなぜここまで齟齬が発生しているのか、食い違いが誤植か、果たしてどうなのか。

そんな非常に益のないどうでもいいことを疑問に思っていたが、それよりもだ。

「ユイ、ここでバイトしてるんだよな……？」

「ああ、その通りだ！」

「高校生が雇って貰えるものなんか？」

「いや、店長と気が合ったからぬ。逆に誘われたぞい」

それが雇用理由とかすんげえな。なんというか、適当なQ&Aで採用した生徒会を思い出したのは何故だろう。

「……」

これは……もしかしてチャンスなのかもしれない。

さりげなくネットで数時間検索し続けて、商店街も見落としがないように2周してみたりしていた。

しかしどうだろう。この店で決まれば本当に助かる。それも俺も興味のあるアニメやゲームを取り扱うショップだ。

「なあ、ユイ。ここって店員募集とかしてないか？」

とりあえず表にはゲームの入荷チラシなどが無数に貼られてはいたが、求人チラシはなかったように記憶する。

そんでもってわざわざ募集はしていないと考えて、

「ん？　ユウジ、ここで働きたいのかー？」

ユイは頭の回転が良い……のもあるだろうが、俺の質問そのものがあからさま過ぎたからかもしれない。

「ま、まあな」

「うーん、店長！」

カウンターを挟んで店の奥から出てきたのは、なんともガタイの良いまたもや「ゲームショップキッド」と書かれたエプロンを着た男だった。

「おお巳原くん、どうした」

更にとても良い声をお持ちであった。玄●さん並みと言ったら分かりやすい……わからない？

「店長、この人はアタシの友人でして。ここで働きたいようです」

ストレート！　……まあ事情も何も話してないから、仕方ない。

「下之ユウジです」

と、軽く名前を言って会釈する。

「おお、ここでか？　うむ、では雇用試験を行おう、ここで」

「ここで！？」

もろ店内で、もろ二人棒立ちである。いいのかこんなで雇用試験。

「では、君。好きなアニメは」

「へ」

デジャブだ……なんというか、このノリはやはり。

好きなアニメ……俺はなんというか大ウケするアニメにはあまり食いつかず、マニアックかつB級をよく見ていたりする――

「プリズ●アーク……ですかね」

「プリズム●ークだとっ！？」

知っていても、正直反応に困るよなあ……でもあの雰囲気好きなんだよ。結局尺足りなかったけどさ。

「アニメ版を、君が？」

「は、はい」

版、ということから知ってはいるようだ。もとはR－18ゲームが原作だからどっちを差すのか確認を籠めたものなのだろう。

しかし残念ながらゲーム版はやっておらず、アニメだけは何度も観た。それだけ気に入っていたと言える。

「……あれはゲームをやった者からしたら辛いものだが、別物と考えれば非常に良いものだ」

「え」

「初元請けの会社が頑張って絵を動かしていたのが非常に印象的だった。しかしあれは本当に尺が足りなかった。本当に惜しい」

「！　俺もあの動きが好きでした！」

動かしてはいたが、正直作画はガタガタ。だとしてもなんとも憎

めないB級作品だった。

「……ごほん。あと一つ上げるとしたら、どんなアニメか？」

「えーっとですね……」

考えてみたらここアニメ商品も扱ってるとはいえ、アニメ中心の質問でいいのだろうか。仮にもゲーム屋でしょうに。

それもう一つあげるとしたら、だ。俺はB級アニメを以下略――

「ご愁傷さま●ノ宮くん」

「ご愁●さまニノ宮くんだとっ！」

知っていても、正直どうでもいいよなあ……でもあの独特の空気が好きなんだよなあ。結局放送時間帯が悪かったけどさ。

「原作ラノベでなく、君がか？」

「は、はい」

原作に関しては実は数巻は読んだ。そして続きを買う頃には放送終了2年が経過、書店から姿を消してしまった。

原作と比べると少々物足りなかったが1クールに収めたのと、ある程度話を纏めた点は評価出来た。

ちょっと作画がヘタレた部分があるのは少しばかり残念だったが、だとしても実際憎めないB級作品だった。

「……あの放送時間の悪い中でも、妙な魅力があった。しかし2クールモノの風のス●ィグマと精霊会議で話題を呼んだH2●に挟ま

れ、後にロマン●カ、スト●ンと印象作が続いたのは運が悪かった」

「で、ですよね！　でもスティ●マもなかなか良かったと思います」

「だな！　懐かしいな……あの枠は深夜まで目を擦りながら観たものだ」

「自分も明日が休みで良かったと何度思ったことか……」

※超ローカルネタです。ご注意を。

「さ、採用だ！」

「え！」

「君には見る目がある！　それもB級良作を探しだす素晴らしい目がな！」

「そ、それでは！」

「ああ、採用だ！　ここで働いてもらおう！」

「あ、ありがとうございます！」

――と、いうことで。なんという雇用試験を終えると、それから働き始めたとさ。

元の時間軸に戻って、店番する俺とユイ。先程の客は中古ゲーム1本を購入して去って行った。

店長は今日はどっかに仕入れに行ったか、不在で俺二人で店番していた。でも数時間程で帰ってくるらしい。

「いやー、お前がバイトしてるとはなー」

「うむ、本当に店長と話が弾んでしまってな！　いやあ、あの人は凄い。ダ●録を何台も駆使して朝台から深夜台までの全てのアニメを溜めていた」

「そいつぁすげえ」

「続けて”ネットには頼らない、スタッフには一切還元されない、だから俺はＤＶＤやＢＤを買う”という台詞を聞いた時には思わず惚れちまったぜ」

「そりゃあ惚れる」

「そしてこの品ぞろえ！　店内にびっしり埋められた棚にはさらにぎっちりと商品がメジャーなものからマニアックなものまで」

「こりゃ凄い」

「なによりも新品以外にも取り扱い、更に格安で提供する太っ腹さ」

「お世話になりやしたー！」

ちなみに言うと、ゲームショップキド（キッド？）は地方の町にも関わらず。コンビニの１．５倍程の店内スペース誇り。

それでいてびっちりと埋められた良商品の数々。この店目的でこの町を訪れる輩も多いという。

最近、商品数を増やしたようで人手が足りなかったとのこと。それで、俺を起用してくれたようだ。

「そういえば……ユイが姉貴に渡してる生活費もここからか？」

「うむ、働かざるもの食うべからず、住むべからず」

住むべからずというのは初耳だけども、まあ筋は通ってるわな。

「正直タダで居候してるかと思った」

「ま、失礼な！　これでもアタシは真面目ですから、義理と道理は通すものものよ」

「へー」

「それにミナ姉には迷惑なんぞかけられねえ、アタシがワガママ言って住まわせてもらっているからな」

「はぁー、お前姉貴のこと好きだねー」

「そりゃあ優しくしてもらってるからぬ」

と、グルグル瓶底眼鏡をかけているので表情は見えないユイがそう呟く。

ユイは一人っ子で、親は俺の母と同じく職にのめり込み。まあ、実のところ寂しいよなあ。

「……ユウジはアタシが居て迷惑か？」

「は？」

「いや、もうあれから半年以上経ったが……一応な」

「迷惑かもな」

「え」

「廊下を歩くたび聞こえるユイの部屋から流れ出すアニメのＢＧＭやらに、テスト期間中何度誘惑されたことか……」

「え、あ！　そうだったのか！？　それはスマン！」

なんというか、これでもかな程に謝られた。いや、冗談のつもりだったんだが……嘘ではないか。うん、あれは危なかった。

「でも、お前が来てからなんだかんだ楽しいぞ？」

楽しいさ。会話に困らなくて居てて楽しいさ。

「へ？」

「なにより、桐と同じくらいに気軽に話せるからな……」

「キロリ……妹とアタシが同じくらいにか？」

なんだかんだ心を許せているのは二人だけなのかもしれない。

マイと付き合っているというのに、なんという体たらく……まだ信じ切れていないのだろうか。

「話し易いんだよ。何の気兼ねもなく」

「……そうか」

「そして理由付けであげるのはちと違うが、お前は良く俺の背中を押してくれた」

何度だっけか、マイに告白出来たのもユイのおかげだ。感謝しきれない。

「いや、それはただの節介だ」

「そんなユイには俺は頼り切って、甘えてしまっていたんだよな」

「でも、それは……」

「本来ならば俺は誰にも判断を仰がずに決断すべきだと思ってる、ユイの進言が迷惑でなんかではくて、ただ単に俺は一人で決断が出来るようになるべきだと」

自分の考えで、全てを決めて行けるように。なぜならば他人に判断を仰げない、そんな窮地にたたされる状況、そんな時が来るような気がする。

「それで節介言うがな、実際助かってる。だから本当にありがとう」

と、ユイに頭を下げた。これも本当に助けてもらった故にだ。

「ユウジ……」

「だから迷惑ではないな。ユイがどう思ってるかは知らんが、俺はユイが立派な家族の一人だと思ってる……ダメか？」

「い、いや……」

すると、眼鏡越しでも分かる程にユイの顔が赤く染まっていく!?

「す、すまん！　恥ずかしいことばっかぬかしたな！」

「いや、いいんだ……嬉しいぞ。そう言って貰えて」

「そ、そうか……じゃあ熱か？　以前お前に心配されたことがあったが、お前こそ無理しそうだからな、そんな顔色で大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ！　問題ない！」

と言うと少し沈黙。俺はと言えば店内のディスプレイに流れるアニメのＰＶをぼーっと観ていた。

少し落ち着いたか、いつもの感じに戻ったユイが口を開く。

「バイト言いだしたのも……もしやクリスマスか？」

「いや」

「違うのか？」

「鋭すぎだろ……」

いえーい、と胸を張ってブイサインされた。なんだかんだ、こいつには敵わないなあと思った。

番外13話　BOTSU　√1－51~56（前書き）

√1－51－56
部分「ユウジの告白」の別原案を元に少し加筆したもので、この話のユウジは今まで以上にヘタレていました。
中略した部分はもともと構想はありましたが、この方針を止めたので書かれていません
なんというか、少しかっこつけてしまったようにみえる実際の投稿版ですが、いざボツを読み返してみるとその方針変更が良かったと思わざるを得ませんね

番外13話　BOTSU　√1－51~56

BOTSU

俺はユキの告白を断った。噂というのは驚くべき早さで浸透する。
それもファンクラブが存在するユキであるのが多少なりとも影響していた。
俺は以前から目を付けられていた。ユキのファンに、マイのファンに。
呪いの手紙だけで今までは済んできた。一応ファン共にも分別というモノがあったのだろう。
しかし、だ。今回は分別をぬかしてる場合ではないのだろう。

あのユキ様が告白をしてきた。その時点で狂乱モノなのに、揚句には断った。
それは、ユキの気持ちを受け止めず背けたこととなる。
そんな俺の行動を知ったファンクラブメンバーは、黙っていることなど出来なかった。

そうして俺はユキファンクラブメンバーに囲まれている。
「ユキ様ＬＯＶＥ」などとふざけた言葉が並ぶハチマキを有すメンバーの男共だが。表情は居たってふざけてなどいなかった。
噴火寸前の活火山、爆発まで数秒を切ったダイナマイト。彼らの状況はそれほどに怒りを溜めに溜めていた。

「俺達はユキさんの幸せを願っていた。　近づいた挙げ句に責任を取らないお前には天誅を下す」

「……」

俺の反論は許されない。この罪を背負う義務が有る。
ユキの期待や気持ちを裏切った。それが彼女をどれだけ傷つけたか想像も出来ない。
だから罪なら認めよう。罰なら受けよう。俺はそう決意をした。
ユキを振ってまで、彼女……マイに振り向いてもらえるように。

「反論の一つもしないのか？　……まあ、最初から聞くつもりなどなかったが。では償うがいい」

振りかざされる金属バット。体のどこかしらに当たっても無事では済まない。それも見事なまでにフルスイングしそうだ。
振りかざして、そんな衝撃が来る。それに目をつぶり、痛覚が働く瞬間を待っていた――
そんな時にガキィィンと何かがぶつかった衝撃音が響く。金属が金属へ。
片方は鈍く、片方は振動するように音を震わせる。

「……止めてください、私の大切な人を傷つけないでください」

その声に目を開くとマイが怒りに身を震わせ、ここに姿を現した。

（中略）

ユキはあの後バッサリと髪を切った「切った理由なんて、今私に

聞いちゃ幻滅するよ？」と半ば本気の口調で言われてしまった。
そして続けて「ユウジには幸せになってもらわないとね」と付けたされ、俺は。

「ああ、分かってるさ」

「約束だからね？」

戸惑いを一切見せず、今でもただ純粋も笑顔を向けてくる彼女は本当に――流石だと思う。
今は……あの日から話すこともままなず、避けられ続けているマイと話さなければならない。

（中略）

「姫城っ！」

逃げゆく彼女を追い掛けて、追い掛け彼女を捕まえる。
彼女の手は小さく、それでも俺の手を振り切ろうとしていた。
そんな彼女の行動にかなりショックを受けていたりする。
好きな人に、こんな態度を取られて嬉しいわけが無い。胸がひどく痛かった。

「っ！」

今の今まで話すこともままならず、俺が近づいては離れて行く。
それが数週間続き、正直心が折れそうだった。
でも、今回だけは。彼女に思いを、彼女に振り向いて貰えるなん

て思っていない。
それでも、俺は今の思いを彼女へと伝えたかった。
「こんな私に……なんで、声を掛けてくれるんですか？」
「……友人だから、当たり前だろ」
恥ずかしさが先行して、思わず友達と言ってしまった。
ここで言えれば良かったのに、と後悔が一気に募る。
「私は……またやってしまったんです。　余計な事ばかり……」
「余計？」
「ユウジ様のお姿が……あまりに痛々しかったもので、つい加勢を――」
はぁ……そんな訳ないだろ。あの時マイが来てくれてどんなに助かったことか。
あのままなら俺はとっくにボロボロで、マイのことも諦めざるを得なかったかもしれない。
「……嬉しかったぞ？　男の立場としては情けなさすぎるけどな」
「嬉しかった……ですか？」
「ああ」
それはもう……堂々ときっぱりと言った。

「ですが……」

「理由が必要か？」

「それはそうですよ！」

はぁ……察してくれると有り難かったのだがな。
いつまでもウダウダと引き延ばしていてもしょうがない、腹を決めるしかないよなあ。

「俺は姫城マイが好きだからだ」

恥ずかしさの余り、淡々と抑揚の無い言い運びだった。
そんな一言を彼女の前で口に出すことだけでも心臓バクバクで汗ダラダラだった。

「え……今なんて」

「マイ好きだ……俺と付き合ってくれないか？」

その時、マイ曰く俺の顔は真っ赤だったという。でもマイも相当だったぞとカウンターを食らわせた。
やれやれ慣れないことはするもんじゃない……でも、あの時の告白で――

「私でよろしければ……よろしくお願いします！」

第１６８話　√１－７３　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

こんなことを平気でネットに公開する作者とかどうかしてるぜ！

第１６８話　√１－７３　※独占禁止法は適応されませんでした。

一二月一五日

期末テストを終えて冬休みまでの授業単位の消化試合とばかりに教師共は授業をしているそんな頃。

俺は生徒会の日を避けてバイトに明け暮れていた。生徒会は木曜活動が固定となり、なんというくだらない話題で盛り上がり活動終了。

しかし、その駄弁りをナメてはいけない。なにせバイト終了時間と時を同じくするほどに時間を費やす時もあるわけで。

なんというか、逆に木曜集中になってから１生徒会の密度が増した気がしてならない。

そんな訳で放課後。最近はユキやマサヒロと帰れず、ユイとも帰らない。

セーターを着こんで、かなり前に姉貴に貰った手編みのマフラーを首にまきつつ学ラン制服のままバイトへと向かう。

もちろんのこと、バイトのことはマイに知られてはいるものの、そのバイト理由を明確には教えていない。

向こうも聞いてこないので特に気にする必要もなかった。

聞いてこないのはなぜか。それはあらかた理由があったりする――

「ユウジ様、それでは帰りましょう」

「ああ、途中までだけどな」

マイが家に帰るには商店街を通らなければならない。俺がバイト

を務めること「ゲームショップキッド」は商店街の中間地点へと店を構えている。
つまりはバイト時、商店街の店先まではマイと一緒に帰れるのだ。自分が言うのもなんだが、そんなチャンスを逃がすわけがないマイは何も聞いてこない。
デートの回数が激減してしまって申し訳ないが、こうして二人帰れる機会が増えるどころか出来たのだから俺も嬉しければ隣を歩く彼女も満更で無さそうだ。
そうだ、こんなヘタレな俺から報告があったりする。

「……じゃあ、行くか」

「はいっ」

校内でのこそ視線がヤバ目な時があるので基本的には出来ないが、学校を出てしまえばこっちのもの。
堂々とマイと手を繋いで帰ることが出来るのだ、彼女の手はそれはもうほんのりと温かく小さくて柔らかい。いつまでも触れていたいと思う程にだ。
これは流石の俺も、マイの仕草で左手が空いていることに気付き――

『良かったら、手、繋いでもいいか？』

と提案してみる。すると彼女はこう答えた――

『は、はいっ！　手のほかにも、もっと色々繋がりたいですっ！』

シモで返された。おおう、マイが壊れて続けてる……まぁ、そんな彼女も愛おしい俺だけども。

『……っ』

『ひゃ……』

最初こそ、ぎこちなかったが。帰り道を共する機会が増えてからは慣れていたりする。

今は見事な恋人繋ぎ、俺が絡ませればマイはそれ以上に絡ませてくる……繋がっている実感が心の底から沸き上がって来ていた。

ということで、今日も何気ない話題で盛り上がりながらも手は確かに繋がっていて、そうしてバイト先の看板が見えれば――

「それでは、ここで……」

「ああ、また明日な」

と名残惜しく手を話せば、その手は彼女を見送る。

マイは、何度も何度も振り返り、彼女が人ごみに紛れるまで手を振り続けていた。

手の感触や温かさを少し思い出しながらも、エアコンで温められた店内に入ればマフラーを取ってから――

「おお、下之くんか。相変わらずはやいなっ」

「今日も、よろしくおねがいします」

と店長に挨拶すると、店奥へと入り学ランとセーターを鞄の上に畳んで載せると「ゲームショップキッド」の書かれたエプロンを付ける。

手洗いに入ってある程度髪を整えてから店内へと出る。

「店長、お待たせしました」

「下之くん、今日もよろしく頼むぞ！」

「はいっ」

と挨拶だけはしっかりするも、そこからは――

「なあ、これ入れようと思うんだけど下之くんはどう思う？」

「んー、そうですね……通常版は入れずに限定版を見えやすいところに置けば」

「いやいや、通常版をお布施と買うお客様もいらっしゃる」

「それじゃ――」

至ってマジメに議論し、限られた商品スペースに置く商品談議をする。そして俺が来て１０分経ったぐらいには――

「店長ちーすー！」

「おお、巳原くん。そこで着替えといで！」

「そこて思い切り店内じゃないすかー、セクハラっすよー？」

「はっはっは、冗談だぞ？　奥で着替えたらこっちに来ておくれ」

「はーい」

なんというかユイのキャラは、若干言葉遣いがアレなバイト風であった。しかしこれでも半年以上勤めてるんだから店長も慣れているのだろう。

というか、ここの店長はみかけで人は判断してはいけないの超典型で、いざバイトを始めて見ればスーパーなぐらいにフレンドリーである。

「下之くん、こっちはどうかな？」

「おお！　もう出たんですね、ＤＶＤ」

「うむ、この販売スピードには恐れ入るな」

「放送中ですし、これもかなりプッシュした方がいいですよ」

「そうだな！　面のガラスケースに入れよう！」

「ですね！」

「ところで、下之くん」

「はい」

「この作品どう思う？」

「クラゲ娘かわいい」

「！　なんという的確な答えだ！　”謀略！クラゲ娘”は実際にクラゲ娘かわいい、だからな！」

「はい！　なんというか……かわいいです！」

「おお、やはり君とは気が合うな！　はっはっはっ！」

「店長、ユウジー、何の話すかー」

「おお、これの話だ」

「ああ”クラゲ娘かわいい”な作品ですね――」

と、まあ俺もなんだかんだで店長と気が合っていた。

そんな一方では――

「し、下之くんっ！　それは聞き捨てならんぞ！」

「いえ、これだけは譲れません！」

「店長ー、ユウジー、何のトーク？」

「これは、俺だってこだわりがあるんです。別にいいじゃないですか、そんあことがあったって」

「なあ巳原くん、聞いてくれ。下之くんは――」

「いやユイ、店長は――」

「おっぱいの大きい妹なんぞ認められるか！」

「妹は貧乳オンリーだなんて言うんだよ！」

「……ああ、なる」

「て・ん・ちょ・う・！　いいじゃないですか、育ち盛りなんですから、いいじゃないですか！　1歳年下でも立派な妹なんですよ！」

「いやいや！　妹はロリであるべきだ！　すなわち貧乳こそ至高！　変態紳士として当たり前だ」

「だからロリ巨乳でも構わないじゃないですか」

「それもいい、それも悪いとは言わない……だが、妹は貧乳に限るっ！　あの”おにいちゃん、おおきいむねのほうが好きなのかな……”ってシーン萌えるだろう！」

「萌えるっ！　でも”なんで、こんなにおおきいのかな……”というシーンには勝てません！」

「くっ、なかなかやりおるな……しかし貧乳あってこそ妹だ、これは譲れない！」

「店長？」

「……なんだ？」

「貧乳な妹も確かにいいかもしれません……でも貧乳な姉ってのも良くないですか？」

「っ！？　それに妹がいて、更にロリながらも胸が姉よりも大きめな妹を持つっ！　コンプレックスを思わず抱く姉――」

「……萌えませんか？」

「萌えるぅぅぅぅなっ！　下之くん、君のセンスは素晴らしい！」

「わかってくださいましたか！」

そう熱弁する俺。今思うとなんてこと話してるんだ、俺。

そんなところに思わぬ伏兵ことユイが参戦した――

「……いや、主人公の幼馴染キャラが巨乳。そんな幼馴染を羨望の眼でみつめるともども貧乳な姉妹――」

「「アリだっ！」」

こうして三つ巴でヘンタイな話題が盛りがあがったりするのだった。

……最低な関係ですね。

第１６９話　√１－７４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

さむい

第１６９話　√１－７４　※独占禁止法は適応されませんでした。

１２月１７日

そろそろ寒さがキツくなってきた……授業中の教室とかもはや極寒レベル。

俺は後ろ席を超幸運なことに獲得してしまいストーブの恩恵は微塵にも受けられない。

前席で「あつい、あつい（汗）」言ってる奴が妬ましい。後ろ席こと左遷組は同じく皆同意見だろう。

なにかブチ切れたか教室内かつ授業中にマフラーを巻いている奴もいるから恐れ入る。

他は使い捨てカイロをにぎにぎ、といった女子生徒が結構見受けられる。

老教師が寒さのあまり手が震えてチョークを授業中に何回も落として粉々に粉砕することもしばしば。

このあんまりな待遇改善を求めていた。

「なぁ、ユウジ……」

「なんだ、マサヒロ」

「俺……もうダメだわ」

「そうか、安らかにな」

「ああ、先に行くぜ……がくり」

隣でブルブル震えていたマサヒロが3時間目数学の時間にてダウン。

高橋マサヒロ、享年16歳。なんとも短い生涯だった……散って行った戦友に黙とう――

――で目つぶってたら、マジで眠たくなってきた。ヤバイっす、体力ゲージガシガシ削られてるっすよ。

「しかたなし……秘密兵器を召喚しよう」

学校カバンをまさぐって、太くて固く長い棒状のものを取り出す――

「（魔法瓶っ！）」

まさに魔法のごとく温かさを保つ、科学が生み出した最強の飲料保温器具。

「（授業中は流石に止めようと何度も思ったが……げ、限界だ！）」

姉貴、俺は不良の階段を一段上ります。いいじゃないですか、生きる権利はあるのだから。

「（お、おおう）」

とくとくと丸っこい魔法瓶の蓋兼カップに注がれるのは熱気立つ麦茶。ああカップがじわじわ温かくなってきた……

「（な、なんて深い小麦色……これを飲んだらさぞ体も温まるんん

だろうな）」

ごくりと口内で冷えた生唾を飲む、飲むべきか飲まざるべきか。

「（ええい、ままよ！）」

温まったカップに口を付けて、ゆっくりと口へと流し込む――

「は、はぁ～……」

思わず声に出るほどの優しさ温かさ。ありがとう魔法瓶、ありがとう朝の姉貴。

温かい麦茶はここまで心に染みて行くものなんだね……感動した。

しかしそんなことをしているというのに、教師はまったく気付かない。

なぜなら何故なら颯爽と黒板に書き記すと、よしきたとばかりに黒板横のストーブに身を寄せるからで。

案の定うしろ席の上に、保身優先で感づかれることはなかった。

今年の寒さは異常。そろそろ本当に待遇改善を求めるぞ、藍浜さんよ。

放課後。

授業終わりの毎にストーブへと人が集まった光景も今日は見おさめ。

クラスメイトはストーブで体を温めると、男子の場合は保温をするがごとくに服へ熱気を送り込み、そのままさっさと下校する。

俺もストーブにたかっていたが、そろそろだなと思いマイへと声をかけた。

「マ、マイ」

「はい？」

「あのさー」

「はい」

「クリスマスイブ一緒にどうだ？」

「え、はいっ！」

「クリスマス、マイと一緒に過ごしたいんだよな」

「はい！　もちろんです！　既に3年前から２４日のクリスマスイブは空けてあります！」

「え、そう？　じゃあ、オーケーってことでいいんかな？」

「はいっ！　楽しみですっ！」

そして自然と二人手を繋いで教室を出る。

何故かマイと手を繋いでいるとストーブよりも心から温まれるから不思議だ。

その頃です。なんというか、スタッフの都合で影薄めな「いつもの

メンバー（からマイとユウジを抜いた3人）」
ユイこそ絡みが多いですが……うう、ユキ。名前こそ季節ぴったりなのにこの扱い……ひどいですね。

「ふむー、巣立って行ったな」

「そうだねー……」

ユウジとマイの手つなぎをみて、なんとも思いに耽るユイとユキ。

「いやー、成長したもんだ」

「そうだねー……」

「クリスマスのお誘いと来た、少しは出来るようになったな。ユウジ」

「そうだねー……」

「……ユキさん？」

「そうだねー……」

「ユキ、今年のクリスマスは二人で廻ろうか（中●悠一風のイケメンヴォイス）」

「そうだねー……って、え？」

「じゃあユキ、今年は俺と過ごそうぜ。なに、いいところ知ってるんだ」

「え、え？　え？　何事っ！？　ユ、ユイ？」

「ユキ、クリスマスの日は空けておいておくれよ……俺との大切な日になるんだから」

「え、は？　えええええええええええええ」

……なんかユイが変な方向へ行ってますね。てかそんな声も出せるんですね。

「ユイ……」

「なんだ？」

「……ふふ」

「な、なんだ……？」

「調子に乗っちゃ駄目だよ？　本当は私が誘おうと思ったんだから」

「え、えと……そうなんですか？」

ユイ、素なのか声戻ってる上に敬語になってますよ。

「今年の二人は私とユイで……過ごそう？」

「あ、ユキ、そんな……こんなところで」

「ユイ……かわいい、抱きしめていーい？」

「え、えと、その！」

「じゃあ、帰り道に話そっか？」

「は、はい」

立場逆転……これは、なんなんですか？というか見事なまでにユキもおかしくなってません？

ユイが男声出したと思ったらユキは小悪魔的な笑顔を浮かべて――

「あ、俺は……」

一人誰ともクリスマスの予定の入らないマサヒロ。なんか……切ないですね。

第１７０話　√１－７５　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

回想～、マイ視点での物語……凄いキャラ崩れっぷりだな　√１－６４より

第１７０話　√１－７５　※独占禁止法は適応されませんでした。

一一月ニ六日

昨日ユウジ様のお家での勉強会が決まりました。す、好きな方の家へお邪魔するほど嬉しいことはありません。

ユウジ様や皆さま方との勉強会、そうして私たちは黙々と勉強を進めていたのですが――

「なあユウジ」

「んー？」

「キスしたのか？」

「ぶふっ！」

ユウジ様が噴き出すと同時に外には出しませんが私は思い切り動揺します。

キス、接吻。それは今まで私が夢に見て……表現でなく夢に見ていたこと。

ユウジ様という愛しい人が出来ただけで表面上は満足していましたが……少々物足りなかったりもしました。

ユウジ様はとてもお優しいですから、このように行為を急ぐこともしません……それがユウジ様の魅力の一つではあるのですが。

もう少し、積極的にして欲しいとも思っていました……でも多くを望んではいけない、と。

家での妄想や書き溜めたポエムに留めていましたが……まさか、

この話題が出るとは予想外でした。

「なっ……何の話だよ！？」

「そりゃあ、ガールフレンドとですよ」

「！」

私……ですよね？　ガールフレンドですか……あ、少し頬が緩みそうに――

「ユウジ、どうなの？　したの？」

「ユウジ、したのか～？　それとももっと凄いことしたのか～？」

「す、凄い事ですか！？」

凄い事と聞いた途端に私の残念な思考はイカガワシイ内容へと直結します。

ああ、なんでこんなに私はイカガワシイのでしょうか！　俗に言えばエロエロなのでしょうか！

「ええと夢や妄想の中ならユウジ様とぐんずほぐれつ、イチャイチャラブラブ、●●●●、●●！」

ああ、一番は授業中にユウジ様の●●を●●しながら、自分の（規制）

「――詳しく聞かせて貰えないだろうか？　そのぐんずほぐれつ以下略を」

話してよいのでしょうか？　所詮は私の幼稚ないかがわしい妄想。
おそらくはなんともないでしょう……ここは話しても良いかもしれません。

「……ふにゃ～」

あれ？　巳原さんが……大したことは話していないはずなのですが、熱でもあったのでしょうか？

「ふぇぇ……」

……？　おかしいですね。本当に幼稚なことなのに、イカガワシイことには違いないですが、言う程では――
でも、なんかノッてきました！　今ならなんでも口に出すことが出来そうです！

「ふぅ……姫城さんはとんだ淫乱女だぜ」

「そんなことないですよ～」

本当にそんなことないですよ。私なんてまだまだですって。

「あそこで、あーするとは……どこでそれを？」

「ユウジ様のことを考えていたら……イ、インターネットで」

便利なものですね、インターネットで何度（規制）

「……」

「ユ、ユウジ様!?　ひいているのですか！　こんな淫乱女にひいているのですか！」

それほど私はエロエロなのですか!?　淫乱な女なのですか!?　そ、そんな……ユウジ様にこのようなことで嫌われてしまうのですか……

「いや！　それよりも淫乱って自称しちゃったマイに、なんというか驚きだよ！」

「ユウジ様はこういう方面に行く人はお嫌いですか……？」

最近はクセになってしまって……ユウジ様がおっしゃるならば禁欲致します。

「え、いや、その」

はっきりと申し上げてください！　ただ５００メガバイトにも及ぶ自作ポエムが廃棄されるだけなのですから！

「そ、そんなことはないよー（棒）」

「だろうな、ユウジはスク水が大好きだからな！」

!?　スク水というのはスクール水着のことで宜しいのでしょうか？

そういえば以前にも……夏でも聞きましたね、ユウジ様はあの水着が――

「ユイゴルァッ」

「ユウジ様、それは以前より伺っていましたが本当なのですか」

わくわく、気になります。ユウジ様の性癖を伺える二度とないチャンスです。これを逃す手はありません！

ただあの水着というか、水着大半が私は着れないというのが非常に惜しいです――

「だからマイ、それは全部ユイのねつ造で――ってこの展開何度目だ！　な、いい加減みんな飽きただろ？」

「飽きません。ユウジ様の性癖を全て受け止めてこそ、立派な彼女だと思っています」

ユウジ様の全てを受けて認めましょう！　（規制）でも全く動じることはありません！

「そこまでしなくていいからぁっ！　てか、その考えは根本的に間違ってる！」

……えー、そうですか？

それからは、なんともイカガワシイトークやらが展開されます。

そして篠文さんは――

「姫城さん、そんな消極的じゃダメだよ！　そんな自分一人の中で完結させちゃ駄目だよ！」

「篠文さん……」

「自分がしたいことをしっかり意思表示しなくちゃ。気付いてくれない誰かさんがいけないんだろうけど」

「ですが、ユウジ様がっ――」

「そんな悠長にやってたら……私取っちゃうよ？」

「え」

そういうと篠文さんはなんとも妖艶な笑みを浮かべて……それは卑怯かと思います。ユウジ様っ、少し見過ぎです。

「ユウジ誘惑しちゃおっかなー」

「ユキに誘惑されるのか俺!?」

でもその時の篠文さんは私からみても魅力的で……心底楽しそうに、嬉しそうに仰っていました。

「あっ……そ、そのっ」

「マイ、無理しなくていいからな……ユキもからかうなよー」

「えー、からかってないよ？　私は、いつでもユウジのこと好きだよ？」

「えええええええええええ」

「篠文さん！」

な、なんてことを言うのですか！　そんな、篠文さんが言ったら……不安になってしまうではないですか。

「なーんてね。ウソウソ、そこまで私も悪女じゃないよっ」

ほっ……ユウジ様と同じように安堵の息を漏らします。篠文さんは本当に恐ろしいです……

「な、なんでもない！　さあさ、二人の仲をはやく縮めてね、っと」

……ここまでお膳立てしてもらえたら何もしないのは申し訳ないですね。

篠文さんはここまで身を張って、私たちとユウジ様との進展具合を危惧してくれたのですから。

わかりました。それでは色々順序を飛ばして参りましょう……そしてここで進展が、目に見えて分かりやすいように！

「篠文さん、皆さん。わかりました……ではユウジ様っ！」

「は、はい！　なんでしょうか！」

「ユウジ様っ！　それでは、ここで……ここで」

「え」

「みんなが居るなかでディープキスをしましょう！」

「「えええええええええええええ」」

覚悟を決めて言ってみました。前々から知って興味がありました
から……ユウジ様との関係を深める為に、宜しくお願いします！

第１７１話　√１－７６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

燃え尽き症候群

第171話　√1－76　※独占禁止法は適応されませんでした。

ええと冒頭では久しぶりですね、ナレーションのナレーターです。
なんというか、前回辺りから姫城視点での物語が始まったのはいいんですが――
前回から続くところのマイ視点は色々アウト、とのことなので省略するそうです。
え？　諦めんなよ？　諦めて下さい。
はい？　どうせ手抜きだろ？　ちが――いません。
というかそろそろ物語進めないと色々とマズいんですよ。
心情表現に力入れると思ったら、何故かコメディ（それもヘンタイ的な）寄りにシフトしてるんですもん。
何してるんだよって、話ですよ。どんだけ前から姫城√の最終プロット完成してると思ってんだよって。
半年以上前には決まってるのにどういうことなの？　2期のシナリオも一部は出来てるし、何を血迷ったか1期と2期の間のシナリオ書き始めてるし。
いい加減にしないと、ナレーションが勝手に物語打ち切りにするぞ☆
こうして、ユウジとマイは幸せに暮らしました。めでたしめでたし、完。
え、色々な伏線どこいった？　そんなことしらねーですよ。分かったらスタッフ野郎、さっさと続き書きやがれってことですよ。
……なんとかスタッフが重い腰を上げたので、スタートです。

「（ユウジ様とキスできなかった……）」

ここからですか。

ディープを狙ってしまおうかと思ったら……まさかセカンドキスを譲った篠文さんが先行攻撃を仕掛けてくるなんて。

更に更にユウジ様のお姉さまが乱入して――そのままユウジ様を何処かへ連れて行ってしまいました。

”ユウくん、話があるから”というニュアンスを考えると、お説教でしょうか？　……それで結局は二人きりかあ（？）

羨ましい……お姉さまにはそんな権限があるとは！

ユウジ様と二人きりになれるならば、お説教の一つや二つしてあげられます！

もはや意味分からないですね……って久しぶりに来たらツッコミまくりでどうした、って？

……いや、ユウジの地文が無い上は基本的に私がやらないとダメでしょう。

でも、姫城を暴走させておくものも良いですね。というか、あまりノリ気でもないんでナレーション放棄して見守ることとします。

「（思いのほか長いような……）」

……もう１５分以上経ってるんですね。気を紛らわす為に勉強してしましたが……やはり気になります。

「！」

二人きり、そしておそらく二人の居る場所は――

「（……位置は特定しました）」

居間を出てすぐ右方向に向かった先……襖？　和風な佇まい、そして畳――っ！

「（和室ですかっ！）」

えーとちなみに、姫城はユウジの家探索を一回もしていません……なんで分かったの！？　それも、そんな明確に！

「（……広さは6畳ほどでしょうか）」

というかこの作品に出るキャラって、なんでこんなにも常人離れしてるんでしょうねえ……桐然り書記然り。

「（気になります！　……で、ですがっ！）」

ユウジ様のプライベートは気になることは気になりますが、意思を無視して浸食することは出来ません。

くぅ……なんで、部屋の状態までは分かるのにユウジ様まで透視は出来ないのですか！

部屋の状態が分かる時点でおかしいことに気付いていないのでしょうか。

すぐ前にプライベートを浸食しないとか言ってすぐに「ユウジ様を透視出来たら」って……姫城、浸食する気ありまくりじゃないですか。

ま、まあ私は天の声でありナレーションであるが故にプライベート覗きまくりですけどねっ！

……姫城にこの仕事紹介したら凄い喜びそうだね――ってダメ？

君じゃないと、って？

スタッフさん、その口説きはナイです――って違う？　いや、ま。

私はバイト代弾んでくれればどうでもいいですけど。
弾んでくれないと姫城に仕事紹介して世界感ぶっ飛ばしますよ？
――世界感はナレーション入れた時点で壊れてる？
……分かってるなら、なんで私雇ったんですか？　まあ、仕事してない割に額あるから助かってますけどね。
って、いつまで無駄話してるんだよって、話ですね。

「（気になって、気になって……）」

勉強がはかどっちゃいますううううううう！

いいことじゃないですか。

「（いつもならユウジ様のおかげで勉強内容の半分も入らないのに……）」

ユウジ悪影響及ぼし過ぎじゃないですか。

「（ユウジ様のお姿を記憶に留めるならば、勉強なんて●くらえ！）」

わーい、キャラと姫城の株が大暴落～

「（もはや勉強会はユウジ様と時間を共にするのと、ユウジ様の吸った空気を味わう為の口実ですし！）」

うわ、さりげなく色んな意味で最低なこと言っちゃった！

「（それにしても遅いですね……こっそり覗いてもバレないかな）」

うわー、さっきの意思粉々に消え去ってますねー

「（いえ！　それはダメです！　ユウジ様は気になりますが、ユウジ様のお気持ちを第一に考えなければなりません！）」

それまでは全力で勉強です――あ、ワーク３冊目終わりました。

ちなみにワーク開始は妄想についての話題が終わってユウジが連れて行かれた後からです。
そして更に１０分後で。

「（……）」

姫城――って、わっ！　なにその動き、もはやシャーペン裁きが速すぎて残像が出ちゃってます！？
そのシャーペンの勢いによる摩擦でワークが燃えてもおかしくないと思うのですが……もはや、なんというべきか。

「（……）」

勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強っ！
勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強っ！
勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強勉強っ！

自己暗示！？
ちなみに自己暗示が凄過ぎてか、書くスピードが減速していますが元が速いので今も相当です。……で、その頃にはですね。

「あれ？　ユキは何処行ったんだ？」

「ああ、ユキなら夜風浴びにいったぞー」

「……外か、寒そうだな」

と、言ってはんてんを持って出て行くユウジ……すれ違いですね。

「……はっ、ユウジ様の香り」

って、どんなですかぁー

途端に止まったが為に勢いのついたシャーペンが吹っ飛んで……壁にめり込みました。ええー

「巳原さん、今ユウジ様が来ていませんでしたかっ」

「ああ、うーん。なんかすぐ前にユキを追って外に出たよ」

篠文さん追って居雲崎、悲しみのオホーツク海ですかっ!?

えらい遠く……って、ここ日本のどこか分からないんでしたっけ。

そんな……まさか私に愛想を尽かして密会を!

えらい発想の仕方……浮気を思わせる痕跡を見つけたら、トコトン追い詰めるタイプですね。

ですが、ユウジ様はそんな浮気性には見えません! だって私のユウジ様ですから!

えらい自分本位な根拠……理由付けがまったく出来てないですよ。

しかし篠文さんは魅力的……私が男だったら引き寄せられてしまうかもしれないです。

……姫城がそんな発言をするとは、なんというか新鮮ですね。

例え引き寄せられても、ユウジ様への愛は変わりません！

そこは変われ。

……大丈夫です、きっと大丈夫です。

このまま逃避行なんて有り得ないですから。

そりゃ、薄着にはんてんで逃避行は無謀すぎるかと思います。

ということで待ちましょう、いつまでもいつもまでも……それまでは勉強です！

ちなみに5分後には帰ってきて。

「ユ、ユウジ様っ！？　なんだか震えてますけど、お寒いのですか！？」

ユウジ様を見ると、体が小刻みに震えていました。巳原さんから聞いた通り外に出ていたのですね……

「いやいや、大丈夫。ちょっと夜風に当たって来ただけだからさ」

「そ、そうなのですか……それと、すみません。先程ユウジ様が戻って来ていたというのに気付くことも出来ず――」

不甲斐ないです。彼女失格です。人間失格です。私なんて開拓地送りにされてしまえばいいんです！

すんごいネガティヴ！

「いいって、いいって。マイの集中力も見習わなきゃな」

た、確かに気を紛らわす為に勉強に集中していましたけど――

「そんな大したことではないんです！　ユウジ様とユウジ様のお姉さまが一体何を話しているのか気になっていましたが……そこは家族の会話だと言い聞かせている内に――」

篠文さんにと会いに行ったことは聞きませんでした。巳原さんの「すぐ前」ということから数分程度でしょう。聞く必要はありません。

「止められなくなったと」

「はい……」

ユウジ様の事を考えることを思えば勉強は止められますけどね！　一度ユウジ様を想ってしまうと……ユウジ様ご本人から話しかけられない限り1時間は――

「配慮ありがとな」

「い、いえ！」

「じゃー、俺も勉強するとすっかなー……あー、早速で悪いけど、

この公式なんだっけ？」

「！　え、ええとですね――」

幸せです！　ああ、ユウジ様にお教え出来る……至福の時です！　そしていつもより2センチ近づきました！　これぐらい、自分へのご褒美でいいですよね！

どうぞ、ご勝手に。

番外１４話　ＢＯＴＳＵ　５－１２（上）（前書き）

５－１２の別案で、というかＧＡＹＭ版６話の一部だったりします。
そのまとめ版の上です。
もともとはこんな話で、変にシリアスになって気持ち悪かったですね。まあ（下）がかなり関係していて６話が５、５話に差し替えられた理由でもあるのですが――

番外14話　BOTSU　5－12（上）

「おーっす！」

福島戸夏こと生徒会役員会計を務める、茶色のセミショートを黒いリボンで纏めたツインテールの髪を揺らしながらやってきた。
手には薄い深茶色の鞄を片手で持ち生徒会のテーブルに備えられた椅子に座る3人に向かってスポーツ部的あいさつを投げてくる。

「コナツも来たねー！　あとはミナだけかぁ」

人の噂をすればその噂された人が姿を現す訳で。

「お、遅れましたっ！」

ミナが息を切らしながら、生徒会室に滑り込んできた。

「大丈夫大丈夫！　気にしなくていいよー」

「うん、ありがとね！　葉桜会長っ」

ユウジ姉はおとなしめにスマイル。そしてユウジの姿を自分の視線が捉え。

「あっ！　ユウくんっ！」

しかしユウジの名を嬉しそうに呼んだだけで、他のことはしない。
一応は、生徒会という場を弁えてのことなんだろうね。

「……おーう」

その思い切り笑顔に対比するかのように陰湿で適当な挨拶を返すユウジ。

「ユウくん元気ないね……どうしたの？」

ユウジ姉は途端に不安の感情を作り出し、ユウジに問う。

「いや別に」

非情に淡泊な返し、でもユウジ姉はテンションを変えずに。

「そうだ！　鞄にう○い棒入ってたっけ……えーと」

なぜ鞄にうま○棒が入っているだろうという疑問をよそに。

「姉貴、俺のことは気にしなくていいからさ」

今度は配慮の言葉の籠った言葉。

なんというか今日のユウジの発言や言葉は安定していなくて統制がとれていない気がする。

「そ、そう？　ならいいけど……」

「それで会長、俺らを呼び出して今日は何をするんですか」

会長以外の誰もが聞くであろう質問を低めのテンションでユウジが発す。

「え、えとね……そうだ」

「……今考えたんですか」

「そんなことはないょ？　今日は、今後の生徒会の方針を考えるのっ！」

「そして今、考えるんですか」

「これからの生徒会の方向性を決定付けるコトだから、１クールに渡って議論するよっ！』

「3ヵ月もあれば他のこと出来るでしょうに」

「シモノは黙ってて」

「はい、わかりましたー」

素直に了承すれば、腕を枕にして寝始めるユウジ。えー。

「こらーっ！　寝ないで！」

「……」

「シモノに言ってるんだよ！」

「……」

「前々回とノリが似てない？　ネタ切れって言われちゃうよ？」

「……」

「アスちゃんが”黙ってて”って言ったからじゃないかしら」

「屁理屈こねた小学生かよ……」

するとユウジは足元にある鞄から、適当なノートとペンケースを取り出す。寝ながら。

そのペンケースからマジックを取り出しノートを開くとキュッキュッと音を立てながら何かを書き始める。寝ながら。

そして書き終わるとペンケースにマジックをしまい、ノートとペンケースを鞄に片付け、書いたノートを千切ってその紙片をこちらに寄こした。もちろん寝ながら。

この間、顔を皆に見せず、地面にほぼ顔が付いた状態で何かを書いていたことから今は必要のない器用さが滲み出ていた。

「なにかしら……」

そうして皆がユウジの書いた紙片を覗くと、そこには……

「”黙れって言ったから素直に実行してるだろ（＃＾ω＾）ピキピキ”」

「顔文字入り!?」

「それにあまり見ない類のものね」

「……体は高校生、頭脳は小学生だな」

そう福島が呟くと、また律儀にノートとペンケースを（以下略）そ

してまた出てきた紙片は……

「”コナンと逆じゃないか（´―｀）”」

「なにこのイラっとくる顔文字」

「使い方違うわね……」

「うぜえええええっ！」

今度はノート、ペンケースをしまわずに居たので次の紙片はすぐに来た。

「”うざい？　その反応はこちとら本望だ（´―｀）”」

「この顔文字気に入ったのかな……」

「見せられた方はたまったものじゃないけどね」

「というかもう喋れよ！」

「”会長ご許可を”」

「え、私！？　え、えーと……シモノ喋って」

「……帰ってきました」

「おかえりユウくん」

実況と解説。実況、会長。解説、書記。

「ここでユウジ姉参戦！？」

「今までの会話を傍観視してたみたいね……ミナ、やはりあなたは只者じゃないわ」

「ユウくん今日はグレちゃって……どうしたの？」

実況と解説その２．

「おっとここでユウジ姉の尋問に入る！」

「……随分やさしい尋問ね、怒りや勢い、速さが足りないわっ！」

「チサ、勢いも速さも要らないと思うよ……」

「じゃあ怒りを５トンほど入れても言いわけね」

「いきなりトン単位！？」

「いや、とくになんでもないんだが」

実況と解説その３の他にゲスト乱入。

「あっさりとした返し！　コイツベテランだ」

「コナツはそこ突っ込むところじゃないと思う……」

「じゃあどうして……自分のノートを使ってまで！」

「論点ちがくね？」

「もうどうでもいいよ……」

「会長に言われたし、会長は最高指導者だからな……逆らったら夜道にヤラレルだろ」

「私、どんな設定！？」

「夜道で背中をブスリか、脇をブシュッか気になるところね」

「チサさんそこは気にならないからさ」

「大丈夫よユウくん、会長はやさしい人だよ」

「ミナ……」

「百合ね」

「なんでだよ！」

「そうか……なら心置きなく反逆できるな」

「態度の翻しが酷いよっ！」

「のちのル○ーシュね」

「ロクな人生送れないな、ソレ」

「あのー、みなさん」

「え、私たち？」

「みたいね」

「そうみたいだな」

「少し黙っててもらえます？」

「ひぃっ！？」

「ど、どうして私の手は震えてるのかしら……ただミナの笑顔を見ただけなのに」

「笑顔が怖いですから！　ミナさん！」

「そんなことないよー」

「……静かにします」

「御意」

「同じく」

「それで本当になんでさっきは……」

「疲れてたんだよ、色々とあってさ」

「え！　そうなの!?　お姉ちゃんに相談してくれれば良かったのに」

「いいよ、悪いし」

「そんなことない、お姉ちゃんなんだから頼りにしてよ?」

「でも……いいからさ」

「そう……わかった。今度困った時は頼りにしてね」

「ああ、ミナが一目見てもわかるショボリムードに！」

「可愛い弟に拒絶されたのだものね」

「下之の野郎……」

「で、結局会長、今後の方針はどうするんです」

「こっちに来た!?」

「予測が付かなかったわ!」

「またはチサさん」

「わ、私!?　そうね……残虐的とか」

「アドリブグッジョブと言いたいところだけどチサさんの趣味丸出しだ!」

「じゃあ、姉貴……はいいや」

「……チサロープ貸して」

「な、何するんですかミナさん!」

「はいロープ」

「チサさんもなんで渡すんですか!　というかなんで持ってるんですか!」

「ミナ、一体何に使うの？」

「……ぅぅぅ」

「？　どうしたのミナ」

「うぅぅぅ……吊ってきますぅ」

「ミナに何があったの！？」

「ユウゥくんにスルーされたぁ……もう首吊って――」

「早まらないでミナさん！」

「そ、そうよ！　ロープはユウに使いなさい！」

「なにチサは勧めてるの！？」

「手首をこのロープで拘束すれば……ユウくんは私のものに……ふふ」

「ミナがチサ化した！？」

「アスちゃん、私を代名詞みたいに使わないでちょうだい、大体あってるけど」

「結局は認めるのか！」

「さぁチサロープを渡して、ユウくんは私のずっと傍に……」

「これは重度のヤンデレね……尽くすタイプだけど浮気を知った途端その浮気した相手を刃物で惨殺するタイプね」

「そんな考察要りませんから！　ロープしまってくださいチサさん！」

「もうわけわからなぁーいっ！」

そんな女子勢の混乱をよそにユウジはというと。

「眠い、だるい、はぁ……」

テーブルに項垂れながら肩をコキコキ言わすと小さなため息をつきました。

「ミナ、どうどう」

「うぅぅ……」

なんとか書記の紅がユウジ姉を落ち着かせました。

会長はともかく福島ではなく”あの”紅さんが何故止めたのかは…

…放っておいたら本当に自殺しそうだったので仕方ない気もしますね。

「ユウ」

「はい」

「ミナに謝って」

「姉貴ごめん」

「謝るのはやっ！　というかねぇユウ理不尽に感じないの？　確かに私が言ったこととはいえ……」

「姉貴はそういう人ですから、すごい寂しがり屋なんですよ」

「そ、そうなの……？」

紅さんは呆気にとられている様子。

「自分がなかったことにされるのは、一番嫌で怖いですから、それは自分も同じです」

「……えーとユウどうしたの？　なんか急にキリっとして」

「いつまでもダラーっとしてたらいけないですから、それに俺もすこし調子に乗りすぎたようです」

「そうなんだ……」

待って待って待って！　ちょっと待って話の流れがおかしくない？　ユウジがユウジ姉の意見を聞かずにスルーしただけでここまで発展

するっておかしいよね！？
ユウジもユウジで自分が原因でした的雰囲気作ってますし。
いつもなら姉や生徒会メンバーに反抗はしているはずなのに。今日は自分に罪があると決めつけている上に、即刻謝ってますね。
……なにかがおかしいです。嫌な予感をナレーターこと私の直感が感じています！。

「……」

会長は何か悩んでいる表情で無言のまま座っています。

「アスちゃん」

「え？　なにチサ」

「今日の生徒会はどうする……？」

「え、そうだね……」

会長は辺りを見回す。そこにはまだ泣きじゃくっているユウジ姉が。
福島は電子ポットで熱湯を沸かしお茶を淹れ、ユウジ姉の前に置いた。
ユウジに関しては、ぼーっとしているというか我ここにあらずというか意識が何処か遠くに行ってしまったような雰囲気を醸し出している。……ますます嫌な予感。

「皆、今日はみんな駄目そうだし解散にしよう」

「そ、そうね。アスちゃん」

「えっとー、みんな注目ー！　とりあえずこれで今日の生徒会の活動は終わり！　明日の放課後辺りにでも放送流すけど覚えておいてねー」

会長がそういうと。

「はい」

ユウジが答え。

「ぅん……ごめんね」

ユウジ姉も答えて。

「わかった明日だな」

福島も答えました。

「じゃあ、今日の生徒会しゅうりょうっ！」

会長の呼びかけで生徒会活動は終了しました。うーん何かひっかかりますねー。

第１７２話　√１－７７　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

１１月１２日追記
多忙により更新停滞してすみませんー、明日当たりに更新しますんでー

第172話　√1－77　※独占禁止法は適応されませんでした。

一一月ニ九日

「（どういたしましょうか……）」

今からほぼ一ヵ月後には、大きなイベントがあります。
あ、ユウジ様とのそれぞれのデートは個人的に大・大イベントですが、一般的な話でも私にとってもなイベントです。
家でぼんやりと夕方のワイドショーを見ていると改めて思いました

『今年のクリスマスまで一ヵ月を切り、クリスマス商戦に備えた各企業が――』

そう、クリスマスです。
好きな相手が居て、それも付き合ってる方が居るのならその方と時間を共にしたい恒例行事です。

「（……クリスマスだからという訳ではありませんが）」

とにかくユウジ様と多くの時間を共にしたいのです！　クリスマスデートとなれば……予想共有時間は午前9時から午後9時と――12時間！
1日の半分の時間を二人で共に出来ることを考えてしまうと嬉しさのあまり紅いスイートピーを熱唱してしまいそうです。
毎年おじいちゃんとおばあちゃんとで過ごしていましたけれど……今年はユウジ様というお方がいますからね。

おじいちゃん、おばあちゃん。とりあえず今年はゴメンなさい。これだけは譲れないんです、お願いします。

「（出来れば、出来ればです！　クリスマスの締めくくりにキスなど出来たら……）」

嬉しさのあまりその後は回想を繰り返してしまいそう――あ、いつものことでしたね。

……最高のシチュエーションの為にお預けですね、ああ、はやくクリスマスにならないかなあ。

12月10日

私はクリスマスにユウジ様を誘おうと決めていました。2ヵ月前からもです。

何十パターンのデートコースを考え居ました。例えば映画か公園かゲームセンターなどを色々組み合わせていたりします――

でも私は情けないです……テスト期間のせいか、最初は話す機会も有りませんでした。

そして言いだせなくなるような、でも私にとっては全くもって素晴らしい事態が起こったのです。

『あのさ、マイ。今日から一緒に帰らないか？』

『えっ！』

そのユウジ様の仰る意味が一時理解出来ました。それ程に私にとっては耳を疑うことだったのです。

『それはどういう――』

『ちょっと商店街内でバイトし始めてな、その店まででってことなんだが……ダメか？』

『ダメなんかじゃありません！　むしろ良いです！　というか神様ありがとうございます！』

前々から運に見放され神なんてものは疫病神しかいないものとばかり思っていましたが、居るものなのですね！

神様万歳です。ユウジ様大好きです！

と、放課後デートが始まったのです！　それもほぼ毎日！　ああっ、幸せ！

今度こそ「私、死期が近づいてるのかな……」なんて思ったりもしてしまいましたが、そんなことはありません！

ユウジ様の隣に居ることで受け取れるユウジ様エネルギーのおかげで元気ピンピンです！

ユウジ様と共にする下校……色々のお話をしました、というか今まで”ユウジ様との会話”を想定したマニュアルを使う時がきました！

マニュアルといっても授業中や電車の中で書き溜めた色々な会話内容なのですが、会話が弾みに弾むのです！

優先順位的に後ろでは完全に無いのですが……つい言いだす機会を失ってしまい、ダラダラと話せていませんでした。

クリスマスも大事ですが、共に下校する時間もとにかく貴重ですから！　後悔はしているようでしていません！

いや、でも言えないのは流石にユウジ様へのお気持ちが弱いよう

にも見えますし……ああ、なんてひどい女なのでしょうか、私は！
言いだそうとしても、口は言う事を聞かないのです……は、はずかしくとも、言わなきゃいけないのに――
でもおかげ大きくユウジ様との仲が縮まりました！　……手を繋げだんです。そう、ユウジ様とお手を！
ああ、嬉しい！　家に帰ってその繋いだ手を何度頬ずりしたことか！　風邪の季節なのに手を洗えないなんて……嬉しい悲鳴です。
それもある日から毎日！　……こんなに幸せで良いのでしょうか。

一二月一七日

……私は情けないです。手を繋げたことに浮かれて、クリスマスのことを言い出せずにいました。
このままではあっという間にクリスマスが訪れてしまいます……ダメです！　今年はユウジ様とっ！
言いだすタイミングを掴めぬまま放課後に……こんなヘタレ女、いっそ死んだ方がよいのかもしれません。
そんな風に自分を責めまくっていると、ユウジ様は私に言ったのです。

「マ、マイ」

「はい？」

思わず聞き返しました。ユウジ様の照れ表情をゲットしました！
……けれどもなぜそんな表情を？
まるで、何か重要なことを告白するような……！　もしかして、もしかしてもしかしてもしかして！

残念過ぎる私に愛想を尽かして、フ、フフフラれてしまうのでしょうか！　そんなユウジ様の告白に内心怯えていました。

「あのさー」

「はい」

「クリスマスイブ一緒にどうだ？」

「え、はいっ！」

とにかく即答しました。そしてユウジ様の仰ったことを理解していきます……クリスマスを一緒に？

そ、それは……！

「クリスマス、マイと一緒に過ごしたいんだよな」

デ、デートですか！　それもクリスマスデートのお誘い！

「はい！　もちろんです！　既に3年前から２４日のクリスマスイブは空けてあります！」

嘘じゃないんです！　いつもはおじいちゃんやおばあちゃんと一緒にいますけど！

毎年予定もなく、家で過ごしていただけですから！　でも、ごめんなさい！

「え、そう？　じゃあ、オーケーってことでいいんかな？」

オーケーどころか、こちらからお願いします。後生です、心の底から宜しくお願い致します！

「はいっ！　楽しみですっ！」

楽しみ、なんて言葉で表現できないほど内心は舞い上がってます。ハイになってます、ハイに！

でも、ユウジ様も困らせてもいけませんし……心の中だけで。心の中だけです！

その時のどれだけ嬉しかったことかユウジ様からお誘い頂けたこと。心の底から喜びました

でも少しわがままを言えるなら――そう思いながら私とユウジ様は教室を出ました。手を繋いでで、です！

第１７３話　√１－７８　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

書き方変えてみた。今回限り

第173話　√1－78　※独占禁止法は適応されませんでした。

一二月ニ〇日（月）

もう曜日とかは正直気にしないでいいかもしれない。
土日挟んで、今日やっとのこと今年の学業が終了する。
正直先週の金曜に終業式と通信簿渡しを終わらせておけば冬休みが土日含めて実質3日間増えるのに、と大多数の生徒が思うとのこと。
しかし俺は例外であった。学校に行けば必ず下校がある（？）つまりはマイとの放課後デートが何の理由付けも無しに出来るということ！
いや、まあ。学校ナシでも誘ってもいいのだけども……いや、正直あと4日でアレじゃん。アレ。

通信簿の数字は結構波が有ったり無かったり。まあ、全部平凡で10段階の5と6を彷徨うだけにとどまった。
しかしユイやマイの通信簿に並ぶ”9”とか”10”俺の通信簿に過去一度も露わしていない数字とか目の当たりにすると、なんというか虚しくなる。
マサヒロは1学期中間はやらかしたのもあって「3」だった国語だが、今回はあまり変わらず「難しくなった」とのことで結局「4」だったそうな。
その他クラスメイトはその通信簿を見て一喜一憂してたり、ガクブルだったり、世界の中心で愛を叫んでいたりして終業日まで相変わらずこのクラスは賑やかだった。
愛坂は「あちゃー、保健だけ10だよぉー」と言っていたので「ムッ●リーニィィィ」と呼んでおいた。
「あんなテストなら私も召喚●争で優位に立てるのに！」とネタ

理解の上で返答してきたのには少し驚いたような驚かないような。

コートを見に包み、今日もバイト――の前に生徒会。マイには悪いので先に帰って貰った……無念。

生徒会の年末大掃除を数日間に及んでやったのにもかかわらず、懐かしい品々に作業進まず。終業日までなだれ込むという体たらく。

やっぱ生徒会だなーとおもいつつも、なんとか切り上げ。バイトへと向かった。

バイトでは「下之くん、ろりこんにちは」と凄い挨拶でお出迎え「店長、趣味が挨拶まで滲みでてます」「はっ、つい！」

やっぱ店長だなーとおもいつつも、ユイが着替えてからやってきたりして今日のバイトは楽しくかつ品だしとかでしっかり働いて終了となった。

家に帰ると「ユウくーん、おかえりー」「ただいま」「私にする？」「……はい？」「だ・か・ら！　お風呂にする？　ご飯にする？　わ――」

「A．部屋に戻る」「ああん、ユウくん！　そんな別の選択肢はダメだよー！」「姉貴もそんな選択肢はダメだぞ？」「あ、ユウくんが優しく怒ってくれた……」

やっぱ姉貴だなー、とおもいつつも半ば治らないブラコンに呆れながら外よりはマシレベルな2階へのひんやりした階段を上って行く。

部屋に戻ると「おお、ユウジ来たか」「またお前か」「その台詞も今年は38回聞いた」「それほど不法侵入したということだな」「不法侵入も愛故じゃ」

やっぱ桐だなー、とおもいつつもいつもの要領で首根っこ掴むと、部屋の外へ放り出した。廊下は寒いだろうからはんてんも一応渡したけど。

パソコンを立ち上げインターネットブラウザを熟練の手さばきで起動してグーグルさんを発動。地味にデートプランを再考中。

「どうしたものかー」もはやパズルであるが、藍浜はあまりスポットが無いのが不幸中の幸いなのかもしれない。
「マイが喜んでくれる場所ねえ……」……と考えると、ナルシストではないが思いだす「ユウジ様がいればいいんです（おおよそそんな感じ）」
じゃあ、公園巡りしようZE！　なんてこんな寒空の下とか、ネロとパトラッシュの末路にする気かと色々な人から怒られそうなので。一応はちゃんと考えている。
まあぶっちゃけ「俺もマイがいればいいし……」……言わせんなよはずかしい。そして背後から「ぷくく」と聞きなれた笑い声。
「その声はッ……ユイか！　ユイなのか！」「おうよ、ぷっぷくくく」「わしもおるぞ」まだ居たのかよ。そしてユイにも聞かれたのかよ！
「俺……マイがいればいいし、マジマイアイラビュー」「誰だよそれ」「要約したユウジ」「そんなチャラチャラしたように聞こえるなら、俺大ショックだわ」
「……未来のユウジ？」「最悪の予言だな」「大丈夫じゃ、チャラくなっても引き取り手は数多じゃ……わ、わしとか」「いやならねえよ」
「未来少年ユウジ」「こらこら」「なんか、名作にありそうじゃな！　映画化決定！」「気がはええどころの話じゃねえ」
「べ、べつにユウジのハズカシイ台詞を聞きたかったわけじゃないんだからね！」「いや、ここでツンデレテンプレートは合わない」「べ、べじゅに――」「無理すんな」
「小説のネタが出来たところでさらばだユウジ」「なにしに扉前まで来てたんだよ」「愛故じゃ！」「どうせ開けて貰えるとでも思ったんだろうが、開けるつもりはない。なぜなら開けると寒い」
「わしと寒さを天秤にかけるなんて……ひ、ひどい」「だからそのはんてん持って部屋に戻ってろ。後で返せな」「……仕方ないこれで楽しむか」「汚すなよ」「なにもせんわ！」

やっぱユイと桐のコンビは鉄板だなー……悪い意味で、とおもいつつ――って、何度繰り返すんだよこのフレーズ。

そうしてクリスマスも数日前に迫った夜は更けていくのだった。

第１７４話　√１－７９　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

遅れましたー、文章悪いなー

第１７４話　√１－７９　※独占禁止法は適応されませんでした。

一二月ニ三日

その日、俺はバイトに出ていた。
コート必須で白い息を吐きながら冬休みを迎えた少しばかりいつもより明るく賑やかな冬休み一色な藍浜商店街を歩いていた。
商売人にとって何かと呼び寄せる口実であり、今年では年末商戦を最後としその前の商売人の腕の見せ所でもある。
そう、恋人から友人に家族までもが何だかんだで体験するであろうクリスマスと言うイベントだ。
宗教にあまり執着のない日本人は２４日にキリストの誕生祭ことクリスマス、神社まで出向きお参りをする仏教方面な翌年１日という。
多宗でない外国から見たら毎年宗教を二股とか何考えし腐ってんだとか思われていそうだが。
宗教間争いで血が流れるなんて事例とは遠くに遠すぎて対岸の火事どころか名前も知らない町でのボヤ騒ぎレベルがおおよそな日本人としては――
「ケーキ食ってとりあえず祝っとけばいいんじゃね？」が俺含めての大衆の意見なんじゃないかなあと思う。
あとは行事にカッコつけて好きなあの子とｗｉｔｈデートしてしまう感じだろうか。そして俺は前述の好きなあの子とフォーリンラブな訳で。
クリスマスの１週間前に誘うことに成功し見事オーケーサインを貰った。そりゃあ、嬉しいってもんですよ。
バイトにも熱が入り「やあユユユギ君、元気いいねえ、何かいいことでもあったのかい？」と店長に聞かれたので「原型なくなりか

けてんじゃないすかー」と突っ込みをいれつつも頷いた。

そうして冬休みかつ祝日故に混雑を極める商店街の一角のゲームショップは当社比3．5倍で繁盛していた。

マニアさんからサラリーマンに子供の方々まで訪れる当店はクリスマス前日での駆け込み購入を狙ってゲームを大量仕入れ。

売れるに売れて大忙しで、店員を増員した意味が大きいことを最近知った。……まあ今までも普通に忙しい時は忙しかったけども。

ちなみに俺とユイと店長以外にも店員が居る。久原さんといって俺とユイの居ない日に来ているらしく、成人でなんとも締まった顔つきをする２０代前半の男性だ。

店長曰く働き者でかなりアニメ・ゲームに精通してるとのこと。ユイや店長ほどには話さないが、たまに放送中にアニメを話題にあげたりして会話している。

そうして営業終了時間である9時まで迫った時に「下之くん、巳原くん！　お疲れさま、上がってくれー」二人同じく「はーい」と返事をして。

「あ、ちょっとまって……あ、久原くんちょっと頼むー」「わかりましたー」と久原さんにレジを任せて着替えに店奥へ行こうとした俺らを呼びとめた。

「はい、1ヵ月おつかれさん。今月分の給料」「あ、ありがとうございます」少しその給料が気になっていたことでそわそわしていたのが分かったのか、俺に第一に渡してくれた。

「巳原くんも」「ありがとうございますー」ユイもグルグル眼鏡でどんな瞳をしているかは分からないが上機嫌にみえる。

「それで、下之くんは明日は休みだっけか？」「はい、どうしても外せないー―」「ちっちっ、言わないでいいぞ下之くん」「はぁ、店長」

「巳原さんは明日来るんだっけ？」「夕方まで……独り者のクリ

スマスは寂しいからぬ」「分かるよ、分かるよ！」「……なんかすみません」

「いやー、店の前までデートする彼女さんとクリスマスの夜を楽しんで来い」「ば、バレてたんすか！？」「それはバレるよ、ユウジ」

「まー、下之くんもよく働いてるし、ご褒美ってことで」「あ、ありがとうございますっ」じゃあお疲れ～、と店長が笑顔で手を振りながら店内へと戻っていった。

気遣って貰い給料袋の入った茶封筒をコートの右ポケットに突っ込むと外へと出る。店内とは打って変わっての天国と地獄。膨大な寒気が俺を襲撃してきてむっちゃ寒い。

ユキでも――おっと、雪でも降るんじゃないかってほどに寒く薄暗く雲に包まれた灰色の空。その下を手をかじかませながら歩いて行く――

しかし俺は商店街を抜け出していなかった。俺はまだ商店街に用事があった。そう、限界ギリギリでのプレゼント購入だ。

以前からチラチラ外から店内を覗いたり、中に入ってみたりするアクセサリーショップがあった。

「まだ……あった」

よかった、と安堵の息を漏らす。俺には既に目ぼしをつけている商品があったのだ。営業時間も予め調べておいて良かったと思う。閉まってたら洒落にならない。

お目当てのものはピカピカに磨かれたガラスケースの中に特別製のケースを開いた状態で大切に展示されている。

エメラルドで純銀が縁取られたクローバーのネックレス。落ちついた色合いで見ていると癒されたりする。

俺が見て「いいな」と思ったのもあるが、マイにはこの落ちつい

た色合いが似合うかなー、なんてマイが喜ぶかは分からないが選んだ。

悲しいことだがギャルゲとかを参考にするに指輪がプレゼントでも良さそうなものの、マイなだけあって曲解されそう……それにはちと早い。

ピアスは俺が好かないという理由で回避すると、収納もラクで首にかけるだけなネックレスを選んだ……ってなんか変な選び方だな。

値段が学生というのを考えると張るし、デート費用も合わせるとそれほど給料での余裕はない。

俺的には価値が必要ではないけれども、働いてマイの為に買うことに意味があった。だから少しハードルを上げてもいたのだ。

「お買い上げありがとうございましたー」

特別製のケースに入れられた上で包装紙で包みこみ、白い光沢を放つ店のロゴ入り紙袋に入れて大切に抱えながら店内を後にする。

相変わらずさっむい。さきほどまで手をポケットに突っこんでいただけまだマシだったが、今は外に出ていて冷えてくるのを感じる。

家に帰る頃には完全に真っ暗で、姉貴がそろそろ心配で携帯にコールしてきそうだ。

時折吹く風に体を少しばかりううと震えさせながら帰路へとつく。

家に入って「ただいまー」と言うと「おかえりー、ユウくーん」とキッチンから声が聞こえる。

今タイミングを図って夕食をつくってくれたのかもしれないが、まずは……「少し経ってから下りるわ」と自室へと向かう。

部屋に付き、プレゼントを卓上においてまたまた安堵の息を漏らすと「ブルルブルル」と携帯の着信音とバイブレーションの鳴る音が聞こえる。

どこかどこかと体ををまさぐるがコートの中が発信元だと気付き、慌てて携帯を開いて通話ボタンを押した。

「もしもし」

「あ、ユウジ様！」

落ちついて画面を見ると、そこに踊るのは”姫城　舞”の文字。

さて、いつ電話番号など知ったかと言えば。最近のことで「不便だから連絡先交換しようか」「はいっ」と嬉しそうに交換……電話番号だけを。

「ん？　メールはいい？」「はい！　メールというのものは便利で少々惜しいですが、ユウジ様とは文字を通してでなく声でお話したいですから」

そのマイの理由に少しばかりドキッっとするが「それに私なんかにメールアドレス渡したら、四六時中しちゃいますよ？」と、最近自己分析が上手になったなー、とマイを見て思う。

ということで、自制するようにメールアドレスの件は断られた。

「明日の件か？」

「はい」

「集合場所は商店街高校側入り口前で、集合時間は午前9時……でいいんだよな？」

「はい、それで合ってるんですが……」

「？」

「あ、あの！　ユウジ様にお願いしたいことがありまして！」

なんだろうか。もしかしてデートコースのことだろうか。

これでも一時は徹夜しながら考えたこともあり、様々なパターンを作りだし、最終的なルートが決まっていた。

「なに？」

「あの……ユウジ様を私がお連れしたいのです」

「？」

「明日だけは、ユウジ様を連れまわしたいのです」

「連れまわす？　俺を？」

「はい！　……ダメでしょうか、出過ぎたマネでしょうか」

「とんでもない！　いやー、マイに連れまわして貰えるなら嬉しいな～」

今までのデートコース選択に割いた時間がボロボロ崩れ去って行く音が聞こえるが、マイ主導デートとあればそんなの関係ねえ。些細なことだ。

生意気に今まで連れまわしていたこともあってか、クリスマスという特別な日にそんなことをしてくれるのはなんとも新鮮だ。

「ほ、本当ですか！？」

「ああ、期待していいか？」

「えーっと、はい！　一生懸命頑張ります！」

あー、なんか可愛いなあ！　そして嬉しい！　俺の為に一生懸命っ――いいねっ！

「マイ、じゃあ明日はよろしくお願いします」

「あ、あああこちらこそ！」

テンパるマイかわええー。

「ではまた明日」

「ああ、また明日」

と俺もマイも名残惜しそうに通話を終わらせた。明日が楽しみすぎる。

第１７５話　√１－８０　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

３日おき更新になってんなー

第175話　√1－80　※独占禁止法は適応されませんでした。

12月24日

クリスマス当日。明日が楽しみすぎて眠れない――なんて当日の行動に思い切り悪影響を及ぼしかねない事態にはならず。
十分な睡眠を取った上で朝7時起床、ぱっぱと顔を洗って茶の間で寝転びながら朝アニメを視聴するユイに話しかける。

「おはユイ」

しまった、繋がっちまった。

「いいね！　その挨拶、流行るね！　これから使おうかぬー」

いやー、自分で使うのはどうかと思うぞ？　というかこれそのものが流行るとは到底思えない――あれ、フラグ？

「あー、じゃあ服選ぶからユウジの部屋いくぞー」

「お、おう」

なぜユイが服を？　それも俺の、と言えば。ユイプロデュースの服装で今日のクリスマスデートは望むこととなった。
実際ファッションセンスに乏しい俺に手を差し伸べたのは姉貴でもなければ桐でもなくまさかのユイだった。
まあ姉貴の場合、以前に「ユウくんはTシャツ一枚でもカッコい

い！」とか気持ちは嬉しい……のか分からないが服よりも俺を評価してしまうので。

桐は「ふむ、布切れというのはどうかの？　なかなかスタイリッシュじゃろう？」いや、原始人じゃないんだから。てかこの寒空の下その格好で行けとは凍死しろと言わんばかりだな。

ホニさんは「甲冑とかいいかも！」ホニさんの時代設定はどこで止まっているのだろう、と率直に思った。昼ドラ見てるからどうかなとも思ったけれども……ダメか。

若干最後の手段かつ困ったときの救世主ことインターネットを使おうと思ったけれども、ダメ元でユイに聞いてみた。

『いいぞ？』

まさかの即答だった。

『お前こういうの得意なのか？』

普段からぶっちゃけジャージぐらいしか着ていないこともあって”着ることに興味がない”タイプだと偏見で思っていたが為にその答えは衝撃だった。

いや、確かにオシャレなオタクさんは居るであろう。しかし日常のユイを見る限りでは到底そうはおもえない訳でして――

『ふむ、ギャルゲーやマンガ、ラノベ、アニメ。個人的にも絵を描く資料としてファッション雑誌を参考にも買っているからな！』

なんともなオタ順列の中でファッション雑誌が物凄く浮いているように思える俺は相当毒されてるな。

『お見逸れしました』

考えてみればユイって絵上手いんだよな、なるほど参考資料も買うのかー。

まぁ、そんなところでプロデュースを頼んだが――

「これいつも通りじゃね？」

「だな」

またもや即答だった。

「まあ……俺持ってる服少ないからな」

引き出しを見て出てきたのはなんとも見慣れたTシャツ……一回着るごとに洗濯はしているが、正直Tシャツ三昧で種類はパターン化していた。

上のくたびれ始めた数枚を無限ループで使っていることもあって、まったくもってファッションに興味がないことが証明されてしまう。

底に畳まれた服を見るに新品同様なのに虫食いがあったりと、改めて見ると切ない気持ちになってしまうのであった。

「だが手堅くはまとまってるはず！　てかユウジごときが気取んじゃねえ」

「さりげに蔑まれたが、ダサダサではないかな、ありがとよ」

「うむ、ユウジの顔立ちは悪くないからこれでヨシだな！　検討を祈るぞ！」

「おう」

ま、実際のところ上からコート着るし正直意味なさげだったりする。コートにを着込んでプレゼントをポケットに突っ込むといざ商店街へ。

冬休みを迎えてひっそりとした学校の門前を通り過ぎて冬の澄み切った青色とそれを蝕む灰色の雲が広がる青空を少し見上げながら道を歩いて行く。

ぶっちゃけ家を出た時間が恐ろしく早かった。ということで嬉しさのあまり約1時間前に到着していた。

集合は9時、左腕に付けた1000円のアナログに時計を刻む腕時計を覗くと時針が差すのは8、分針は0。

さて、早く着いてどうしたものかと思おうとしたその時に、数秒経たずしてマイが商店街から結構な速さで駆けてきたのだった。

「ユウジ様！　お待たせしてしまいましたか！？」

「いや、来たばっかり――」

「気は使わないでください！　遅れたら遅れたと愚かな私をッ」

久しぶりのマイのネガティブ発言頂きましたー

「大丈夫だから！　というかまだ一時間前だし！」

「一時間前……もうそんな時間なのですか」

「そんな時間……？」

「ユウジ様とのクリスマスが楽しみすぎて……」

「……何時から？」

「まだスーパー山中が営業してませんでしたから……」

「スーパー山中って言ったら”コンビニという幻想を”以下略と言わんばかりに早朝営業で学生対応な朝６時開店――２時間も前から来てたのか！？」

あの「（商品が）安い！（開店が）早い！（他の青果店に対して）惨い！」で知られるスーパー山中よりも早いといっちゃあ、凄い物がある。

「そうなのですか？」

だめだこの人、一つのことに一心不乱過ぎる！　まあ、そんなマイが可愛（以下略）

萌えている場合ではなく。不安になるのは彼女の体で、こんな寒空の下に２時間いるだけで相当厳しいものがある。

前述の通りこの地域にはコンビニは１店舗しかなく、それも商店街からは離れている。そこで２時間待っていたとは彼女の様子を見て思えなかった。

そうして思わず俺は彼女の手を取った。

「ユ、ユウジ様！？　な、なにを」

「あーあ、こんな冷たくなっちゃって……」

冷たかった。手袋もせずに白い息を吐いて俺を待っていた――

「あのユウジ様……？」

「体調とか、大丈夫だよな？」

「え」

今度は自分の手を彼女の冷えきった手から外して彼女の額にかかるしなやかな黒髪を除けて、額を触らせてもらう。

「……熱はなさそうだな」

というか逆に冷たい。

「ユウジ様、もしかして私のことを――」

「当たり前だよ！　……マイに倒れてほしくないからさ」

そんなことされたら俺、自分を責めまくるぞ？

「す、すみません」

「無理はしないでくれな？」

「は、はい！　あの……手、触らせてもらってもいいですか？　さっきは一瞬で味わえなかったので」

「あ、うん」

と言って右手を差し出すと、彼女の柔らかで冷え切った手に包みこまれる。

「あたたかいです……ユウジ様の手」

「そりゃそうだ、こんな寒空の下で待ってるなんて」

「……それほどに楽しみだったのです。子供染みてすみません」

頬を染めて言う彼女はあまりに可愛らしかった。

商店街の入り口で何やってんだと横やりを入れられてもおかしくなかったが、朝早いおかげで一切邪魔が入らなかった。

１０数分後、俺たちは早速手を繋いで歩き始めた。

「それで、何処に行くんだ？」

昨日の電話で「明日だけは、ユウジ様を連れまわしたいのです」と言われていただけで、明確な行方は聞いていなかった。

まあ聞くことが無粋だったからで……もあったが、マイが誘ってくれたのが嬉しいあまりに有頂天になって聞き忘れていた。

「まずは、寒い思いをあまりするのは良くないですから映画館に」

……マイさん、さっきの自分はなんなんでせう？　と突っ込もうとしたが止めた。

「――は、まだ空いていないですね。うーんどうしましょう」

早起きは三文の得。しかし、今回ばかりは損したと言ってもいい。

いや、確かにマイとのデート時間が増えたはいいものの廻れる場所がない、ない、ない。

地味に開店の早い映画館は9時営業開始で、それまであと50分近くはあった。店が開いているのはスーパー山中ただひとつ。

「とりあえずスーパー山中で時間潰す？」

と冗談半分で言ってみた。

「そうですね！　あそこは品ぞろえも良いですし！」

乗って来た。……まさかのデートスポット一つ目が近所のスーパーというね。地方の素晴らしさを知り都会に憧れた瞬間だった。

ということでスーパー山中。まさかさっきの例えが伏線だったとは……ということで地下階と地上1階のスーパー山中に入店。

既に主婦の方々が数名店内へと居た。若干物珍しそうに見られる……仕方ないわな。

「ユウジ様、ユウジ様っ」

「ん？」

「なんか、二人スーパーで買い物って夫婦みたいですよね！」

「あ、まあ……そうかな」

学生同士のデートとは程遠いからなあ。

「……夫婦に見えますかね？」

「それはどうかと」

いや、見えませんって。俺、残念ながらそこまで大人びてないっすから。

「夫婦に見えませんか……じゃあ、私愛人ですかっ」

「そこが論点じゃあないな！」

「愛人でもユウジ様のお傍に居られれば……いえ、でも！　やっぱり固く結ばれた夫婦の方が……いえ、愛人が結ばれていないという訳では――」

なんというかマイ暴走中。マイさん息荒げすぎて「ハァハァ」してる上によだれ出てます。

普通なら引くが、マイは可愛い！　そしてこれこそマイの真骨頂！　やっほう！

「マイ、一応店内だからさ」

「ユウジ様、結婚しましょう」

「せめてスーパーの店外でしようか！？」

なんだこの情緒も雰囲気もへったくれもない告白場所。……案の定まばらに居る奥さま方が聞き耳立ててざわざわし始めちゃったよ！

「ユウジ様、大好きです」

「俺もマイ大好き。だからとりあえず落ちついてくれ」

「ユ、ユウジ様が私を……大好き？　はぅっ」

と、今度は泣きだしてしまった。酔ってるのか！？　マイ、酔ってるのか！

とりあえず奥さまのいる部分から離れて、客の殆ど居ない乾物コーナーまでやってくる。

「マ、マイどうしたんだよ……」

「デートやユウジ様の”大好きで”感極まって……えぐえぐ」

「！」

可愛い！　泣いてるマイ可愛い！　あー、やべえ萌える。萌えちまう。

めっちゃ可愛い。素晴らしいエクセレント、デートでこんな表情が見れる……なんて幸せなんだ。

「って、おい俺！　マイ、泣いてたらデート楽しめないからさ、な？」

と、ポケットからハンカチを取り出して渡す。

「は、はい……って、これはユウジ様のハンカチ！？　はうっ」

今度は鼻血を出し始めた。えええええええええええええ！？

「す、すみません。ユウジ様のお手が触れたハンカチに感極まって」

「と、とりあえずそれで拭いて！」

「出来ません！　ユウジ様のハンカチを汚すことなど、私にはっ！」

そうしてマイ自身がしていたマフラーを取ろうとしたので――

「マイ、それはマズい！　はい、ティッシュ！　とりあえずマフラーやめて！」

「は、はい……ユウジ様のくれたティッシュ！　は」

「マイー、落ちついてくれ！」

こんなカオスな展開が人の少ない朝の店内で良かったと心から思った。

番外15話　BOTSU　5－12（下）（前書き）

若干変な箇所があるかもしれん

番外15話　BOTSU　5－12（下）

祝（ＧＡＹＭ版）１００投稿目！
藍浜放送第二回！　翌日放課後生徒会室にてです。

「こんにちは。おはようからおやすみまで、ずっとあなたを監視し続けている私こと紅知沙と」
「チサそれすごくこわいよ!?　プリティ生徒会長の葉桜飛鳥がアイハマ放送をお送りするよっ！」
「自分でプリティとか言う人ってどうなんだろう……いやもちろん合ってるけど」
「シモノは私を批判してるのか賛同してるのかどっちなの!?」
「……ということで何故か2回目の藍浜放送、スタッフさんそこまで忠実に引き継がなくても良かったと思うぞ?」
「軽快にスルーされたっ!?」
「記念って言っても何を話せばいいのかしら……」
「……」
「放送しちゃったんだから、前回の予告通りゲスト出すか」
「そうね、というかさりげなくなんでユウがこの場に居るの?」
「生徒会コンビだとツッコミいなくて収拾つかないから派遣されたんだよ……寝てたのに」
「ユウが居てもいつも収拾ついてないじゃない」
「それもそうだな」
「納得しちゃった！」
「ということでゲスト、他小説作品「ｅｐ　ｔｗｏ」から”亜桜シヨリ（Ｂ）”さんです」
「予告通りとはいえいいのかな……」

「え、ここどこですか？」

「亜桜さんいらっしゃーい」

「え、え？　ユウトくん？　ユウトくんは？」

「ユウトくんとはｅｐ　ｔｗｏの主人公だそうで、詳しくは「ｅｐ　ｔｗｏ」をチェックよ」

「そういえばしばらく更新してませんけど、どうしたんですかね」

「修正元が消えたのよ……」

「……なんでここだけは今の状況になってんすか」

「この文章を書いてるスタッフに聞いてみたらどう？」

「それが一番避けるべき人だから！」

「で、えーと……あなた達は一体」

「こっちに質問してるわよ」

「俺たちは迷走戦隊”グダクダジャー”ギャグから恋愛話まで、もうどうしようもないぐらいグダグダにしてしまう戦隊さ」

「……ユウがボケたらそれこそアウトじゃない」

「グダグダジャー！？」

「あ、食いついてきた」

「わざわざ話をダレさせるためにしばらく更新されていない他作品からキャラを拝借してきているのだぁっ」

「もうメタとかのレヴェルじゃないわね」

「それで、なんで私を呼んだんですか？　グダグダジャー？」

「その呼び方普通に使われちゃってる！？」
「純粋な子だ、まるで南アルプスの水道水のごとく純水だ」
「……ユウ、だからね」

「アルプスに水道があったなんて！　驚きです！」

「この娘すごくノリがいいよね！」
「ギャグをかますこちらとしては本望じゃあないかっ」
「……あなたユウじゃないでしょ」

「それでいて、私をなんで呼んだんですか？」

「この娘天然！？」
「いいじゃないか」
「ユウに同意しておくわ」
「それへの答えは。なんとなく呼んでみた」

「えぇっ！？　そんな理由で！」

「ああ、すまん……しばらくしたら戻れるはず」

「なら良かったです」

「いいんだ……」
「いいのね……」
「ここでゲストさんに質問コーナー「ネボリハボリ」の時間がやってまいりました！」
「ユウ大丈夫？　なんかさっきからテンションがおかしいわよ？」
「ダイジョブダイジョブー」
「……そのギャグは大丈夫じゃないわね」

「し、質問ですか？　ええと、答えられる範囲なら」

「身体的特徴を一つ（キリッ）」

「ああ、シモノが壊れてく……」

「特徴ですか……じゃあ足辺りを見てください」

「足？　ニーソではなさそうだな」

「あなたは一体誰！？　今までの発言からユウの要素が見当たらないわ！」

「……誰？　バレましたか」

「！　やっぱりね！　それであなたは誰なの！」

「あっしですか……そうあっしの正体は！」

「小説媒体そのものに絵がないから実質サウンドオンリーで気付かなかったけど、あなたまさか……」

「あっしは……そう巳原ユイだあああああああ」

「……確かに、さっきのニーソや身体的特徴を聞く変態性から巳原さんに十分繋がるわね」

「いかにも！　先輩よく見破りましたね！」

「こうみえても洞察力は高いの、近所に居るおじさんの服装からおじさんの吸っているたばこの銘柄が容易にわかるわ」

「ヤニ量で測定！？」

「あのー、私どうすれば？」

「ああ、ごめんなさい、足ね……っ！」

「え、なになにー……っ！」

「そう私地上から１ｃｍ浮いてるんです！」

「ドラ○もんっ！？」
「会長、ドラえ○んは地上から１ｍｍ浮いてるだけです！」
「巳原さんは変なとこにこだわるのね」

「実は私、死んでるんです」

「お、おばけぇっー！」
「アスちゃん落ち着いて」
「こんなかわいい幽霊が幽霊な訳ない……アレ？」

「でも私、見た目生きているように見えますよね？」

「――――」↑絶賛気絶中
「ええ、そうね！」
「ああ！　その控え目にある胸からそれが読み取れるぅ！」

「むっ、そっちの身体的特徴は禁句だよ……呪っちゃいますよ、うらやめしやー」

「イィッ！　こんな可愛い幽霊に呪われるなら……というか呪ってくださいっ！」

「ええっ！？」

「ユイ、ひいてるひいてる」

「……えっと、そろそろ時間みたいです、それでは！」――シュン

「なんで幽霊なんて呼んだのかしら……」

「私にはわかんないよ……」
「次のゲストが楽しみだなぁ！　ワクワク」
「……もう呼ばないと思うわ、グダグダになるだけよ」
「私も同意見だよ……」
「ええぇー、結局は変わらないじゃないですか」
「……そういえばなんで巳原さんがユウに化けてきたの？」
「あ、それは――」

「ユウジが倒れちゃったんで、その代役として」

「そっか倒れたからかー」
「それなら仕方ないわねー」

「「え？」」

はい、ここから回想入りますー
というか今まで地文が無いせいで、もはや台本状態……小説と呼んでいいのかな？　バカにしてない？
言ってても仕方ないので、藍浜放送開始前まで遡りますー

生徒会室の扉は最後に部屋から出たユウジ姉に閉められた。

「じゃあ私帰るねー！」と会長。
「さよならユウ、ミナ、コナっちゃん」と書記。
「おう、みんなまたなー」と福島。
「……生徒会のカギ返してこなきゃ、先に帰っててねユウくん」とユウジ姉。

そして会長と書記、福島、ユウジ姉は散り散りに生徒会室前からユ

ウジ一人を残して去って行った。

「やっと……終わったか」

心身疲労したかの表情と声で生徒会室前でフラつくユウジがそこにはいました。

「眠いしダルイし首痛いし……なんだよこれ」

はい、それ完全に風邪の症状ですから！

「まぁ……よくあることだし大丈夫だろ」

ええと、大丈夫なんですかね……それ。

「それにしても死ぬ」

ええ！？　いきなり死ぬ宣言ですか！

「慌ただしくて死ぬ」

あ、そっち……まぁたしかに傍から見てたらそうですね。

この１週間出来事がすごい密集してましたからね……（５－１２までのユウジより）

「最近何があったっけ……ド忘れしたな、なんだっけ」

ユウジ重症だ！　この人相当体調マズイですよ！

「ゲーム買って起動してユキ出てきて桐出てきて姫城さんに殺され

そうになって生徒会行って肝試し行ってまた生徒会……」

だいたいあってるのがすごいですね……

「寿命がこの１週間で約３０年縮んだに違いない」

典型的な表現ですね。

「ＭＰなんて……もうカラだぜ」

マジックポイントなんて一般人は持ってないでしょ！　なんで持ってるんですか！

「はぁ……死ぬ」

そういえば私が実況してるからいいですけど、傍からみると独り言がすごい怪しい男子高校生ですよね。

「とりあえず……帰るか」

そうしてユウジは足元がフラついたまま廊下を歩いて行くのですが……

「……」

本当に危なそうなんですけど。

「……っとと」

何もないところでコケそうになるユウジ。なにしてんですかーユウ

ジさーん？

「……おわっ」バタァン。

今度はコケて、廊下のタイルに顔から突っ込んで倒れるユウジ。またー、本当大丈夫ですかー？

「……あ、体に力入らねぇ」

え。

「なんか視界もボヤけてきた……な」

ちょっと。

「ああ……このまま少し――」

ユウジさん。

「……」

ユウジ！　ちょっとこれ……ええとマジですか？　演技ですよね、笑いを取ろうとしてるんですよね？

でも笑えないですよ、私はずっと見てたんですから。ほら起き上がってくださいよ、ユウジ。悪ふざけがすぎますよ、ユウジ。

ユウ……ジ！？

ここはどこなんだろうと思った。でもすぐ理解した。
そして俺はどうしてこんな場所に居るのかと思った。それはわからなかった。
廊下で倒れて俺はどうなったんだろうと思った。それもわからなかった。

なんでこんな前のこと、思い出しているんだろうと俺は思った。

少し前のことなのに。ひどく懐かしく感じるこの思い出。たった2年前のことだったのに。
”あいつ”が隣に居た、あの風景。なんで”あいつ”は俺に顔を見せなくなったのだろう。
なんで”あいつ”は、心を閉ざしてしまったのだろう。わからないまま、時が過ぎた。

俺はそれをなぜ、今になって思い出しているのだろう。

今のはユウジの夢の中のようですね。結構伏線ですよね？　これ。
それで力尽きてしまったユウジ……大丈夫ですかね？

遠くのような近くのような”あの頃”の情景が俺の目の前には広がっていた。
その情景は俺にとっては懐かしい記憶で、見覚えのあることばかりだった。
でも気づくといつの間にか、この情景には居ないはずの女性の声を俺の耳が捉えていた。

その声は、情景の中ではひと際存在感を放った浮いた存在で馴染むことはない。

しかしその声の音量は次第に増していき、反比例するかのように情景の色は薄れ、黒という色に食われていく。

黒が情景を食い消し、目の前の光景は黒い闇に変わっていく様を、俺は何もできないまま無気力に眺めていた。

その情景は俺が望んで見たかったものではない。ちょっとした懐かしさに胸を締め付けられ、今と比べ絶望する。

目を背けたい気持ちの方が勝っていたので、情景が消し食われても俺は構わなかった。

それに、その情景に俺が干渉することは出来ない。目線が定位置で固定され、流れる一点の情景を見ることしか俺には許されなかった。

そして、思えばそれはあっという間にその情景は黒に食い尽くされていたのだ。

目の前に広がるのは漆黒の闇。どこか寒々しさや恐怖をも覚える非情で純粋な深い黒一色が今の俺に見える全て。

黒一色、さらに物音ひとつしない無音のこの世界は寂しさに満ち溢れていたように思えた。

そんな黒の世界に音が響いた……いやこれは正確には声か。

聞いた声は先程の女性と同一人物の声であることは直ぐに理解出来たのだが……

そうしてやっとのこと俺は思い出した。この声の主を俺は知っている。この闇にただ一つ響くその声の主は――

ここまでがＧＡＹＭ版の６話導入だった訳ですね。

ここから５．５話とちょっと違う話が展開されるのですが――止む

を得ずカット。
５－１２でのユウジが会議への参加がテキトーだったのはこの一部を流用したことから。
ＧＡＹＭでは体調不良、こちらではオルリスの事が気になって～のことでした。

今回のＢＯＴＳＵはこちらの連載版本編では続かなかったもうひとつの物語のプロローグということで。

第１７６話　√１－８１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

終わりそうにないｏｒｚ

第176話　√1－81　※独占禁止法は適応されませんでした。

「色んなもの出したらスッキリしました！」

「……店出て早々そういうこと言わないでくれ」

お前ら店内で何やったんだよという台詞が聞こえてきそうだ。いや、俺達は全くもってイカガワシイことはしていない。

マイが泣いて鼻血出しただけで、後は何もない！　あのあとも適当に店内を廻ってただけだ、本当だ！

同人誌で”空白の30分間”を使って何かアレなことをかかれても、そんな事実は一切ない。至極健全だ！　テ○東並みに健全だ！

「それでは、まずは映画館ですね」

で、映画館――か。

シネマズアイハマ。

藍浜座でいいじゃん……なんてことは言ってはいけない。オサレにしてみたかったのだろう、映画館の看板を見上げてそう思う。

商店街から少し離れ、地方の映画館であるのにも関わらず異様にデカい。横幅だけでもコンビニ3店が立つし奥行きもある。

そして3階建てで、3フロア合わせて7スクリーンという異常なまでの設備量なため、商店街から離して立地を確保した意味が理解できる。まあ田舎だからこそ出来るのだけれども。

多岐に渡るジャンルの映画を購入し放映することでここら藍浜周辺の町民で映画が見たければここにくるという。たまたま見つけたネットでの感想欄はこちら。

「シネマズアイハマのおかげで明日の夜明けをみれました」ここらの町じゃ、映画館はここぐらいだからな。

「シネマズアイハマのおかげで灼〇シャナ劇場版をみれました！」電〇フェスタだけでしか見れないはずなのになんで？

「シナマズアイハマのせいでエボ〇ューションみせられました、ふざけんな！」いや、シネマズアイハマのせいではないだろう。

「シネマズアイハマのおかげで身長が3センチ伸びました！」どこぞの通販ＣＭかよ。今流行りの３Ｄ？

「うわー、な〇はー、はー！　フェ〇トちゃあああああああん！」荒らしか！　それともそれを実際に叫んだのか！？

と（一部評価を除いて）評価は悪くない、映像設備と音響設備もしっかりしていていいらしい。

地方の癖して出来過ぎじゃね？　と思われるかもしれないが、おそらく館長の趣味なので仕方ない。

館内に入ると、まずは各映画の宣伝ポスターが目に入る。

一応前評判こそ来てからのお楽しみ要素、として大半は聞いていないもののオオスメな映画はあらかた目星を付けていた。

まあいくらここでも全ての映画を網羅している訳では決してないので、一応映画館を訪れてみると――「シロソラ」という映画が良さそうだが。

――果たして今行って上映されているか、日で放映スケジュールが違うのでなんとも言えない（ちなみにここまで気合い入っているのに肝心の映画館の公式サイトはない）

やはり上映本数が多く、今だけで３０本以上を上映しているようだ。そのうちの7作品を同時上映するシステムを取っている……たぶん、おそらく、きっと。

入ってみると小綺麗なロビーが視界に入り、所狭しと壁一面に前

述の映画のポスターが貼られている。そんなポスターをさしてマイは言った。

「ユウジ様、あれなんてどうでしょう？」

マイの好きなジャンルとはなんなのだろう、今ごろながらそう思う。コレならもっとマイのことを知っておけばと少なからず後悔。

とりあえずマイの差したポスター作品を見てみよう――

「どれどれ……！」

タイトルを見て、タイトルの字体を見て。なによりポスターの女性二人の登場人物名に素晴らしいほどに見覚えがあった。

「ハイスクールデイズですかー……」

んー、嫌な予感しかねえ。

「あの、マイさん。もしかしてそのタイトルの映画をご所望で？」

「はい！　なんか恋愛モノらしいですよ？」

映画を調べてる内にふいに見てしまい、前評判を既知な俺は冷や汗ダラダラなタイトル。

決して悪い出来ではない、しかし出来上がったものは恋愛モノでも後半になるにつれドロドロになり、最後はヒロイン同士が殺し合い最後は諸悪の権現こと主人公もろとも死に至ってナイスボート。

という、なんともサディスティックな映画だ。このタイトルと似たようなアニメの内容がうり二つにも見えるのは気のせいではないらしい。

これをマイに見せてよいものなのだろうか、いやマズい。それにマイがサドスティックな映画を見たら――反応というよりどんな行動を起こすか分からない。

やめておこう。紙（ポスター）は言っている、これは回避すべきだと。

「ほ、他にも見てからにしないか？」

「そうですねー……ではホワルバムービーとかは」

なぜ映画化したし。タイトルはなんとも良さそうだけれども、原作は知らないがアニメはアレだった。

「他には……」

「トゥルートゥティアーズもどうでしょう？」

なぜトライアングル（三角関係）ものしかないのか！？　”シロソラ”はものの見事に放映時間が合わない。

そして挙げた3つは放映10分前だったりして、ならば応マシそうなのは一応――

「トゥルートゥティアーズ……か？」

「はい、みましょうかユウジ様！」

どうやら今までな反応を見るにマイが好きなのは恋愛モノらしい。しかし悪いことをした、マイに挙げる映画をことごとく却下して……でも、正直二人で見るならこれが一番いい。

映画終了。

「面白かったです！」

「面白かった」

いやー、案外実写モノも悪くない。実際のところ三角どころか四角関係だったけれども。

あのビンタは迫力あった、思わず頬さすっちゃったよ。

「あの二人が結ばれて良かったです！」

「もう一人とも結ばれそうだったけども、決意は固かったな」

「はい！　私もユウジ様との契りを果たすという決意は固いです！」

「……契り？」

「結婚の前に、心と体を……体を中心にコネクトするんです！」

「さりげなく下ネタなのか！？」

「今日はそこまではしないですけど……いつかは」

ホッとする反面残念――とは思えなかった。いやだって、付き合ったのにキスさえなし……ユイやユキになじられるハズだわ。

マイは妄想たくましいのでどうか分からないが……うーん、ハズカシイとは思わないのだろうか。

「ユウジ様、次は本屋です！」

「本屋？」

「はいっ、少しデートっぽくはないですが！」

そうして本屋へと向かう――

本屋を出る。

「いい本が買えましたー」

「ああ、うん」

まさか、ユイでもマサヒロでもなくマイと――ラノベ漁りをするとは。

「キ○の旅……深いですね」

「確かにそうだけども……」

デートとしてこれはいいのか？　スタッフの底が知れるぞ？

と、言いつつも俺はゼ○の使い魔の最新刊を買っていた……いやさ、コーナーまで来たんだから仕方ない。

「私は色んな方の著書を読んできましたが、ライトノベルは読んでなかったです。でもライトノベルと言うのにディープなのですね！」

うまいのか、それは。まあキ○には色々考えさせられたけど……

他のにハマって途中放棄した覚えが――読み返してみようかな。

「お昼ご飯は……マク○ナルドで！」

おう……たまにユイとマサヒロと来て駄弁るレベルなんだが、大丈夫か？

「マイはいいのか？　ファストフード店で？」

「ユウジ様と気兼ねなくお話出来ますから、それに私はこう見えてもファストフード好きですよ？」

「へー、そうなんだ」

「一番は日本の主食こと白米ですけども！　たまに食べると美味しいと思うのですが……ユウジ様はお気に召しませんか？」

「いやいや！　何か適当に頼んで話でもしようぜー」

「はい！　じゃあ行きましょうー！」

いつも手は繋いでいたけど、今日だけはマイに手をひかれていた。マイは嬉しそうに時折こちらへ振り向いて笑う。その笑顔に俺は何度も何度も笑顔を作っていた。

見栄もなにも張ってないけども。なによりマイが楽しそうで、俺も楽しい。だからこれでいいんだと思う。

第１７７話　√１－８２　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

リア充とか●ねばいいのに

これで、クリスマス編終了！　終わったー！
今回だけで５０００文字オーバーとか……どうりで長い訳だ

第177話　√1－82　※独占禁止法は適応されませんでした。

ここはかつて”夏でもないのに肝試し”というものを行った場所。
一見酔狂にしか見えない企画だが――マサヒロを思えばそのまま酔狂だったと言わざるを得ないので否定はしない。
今思えばなんなんだよ、春の入学ｏｒ進級したばかり時期に肝試しとか。夏には第二回開くしさ……でもって全然怖くないし。
……文句垂れたとしても、あるきっかけを作ってくれたマサヒロには少なからず感謝している。
まあ、マサヒロ本人はそんな意識は皆無だろうけど。そんなことを行った場所なこともあってこの墓地はかなり印象に残っていた。

そんな墓地まで、マイに連れられ山を登って来た訳で。

「ユウジ様……覚えていますか？」

「ああ、覚えてる」

……覚えていないなんて答えた暁には自分の深層心理やらもうひとつの僕やらが自分をコロス。といった程に忘れては絶対にいけない場所と思い出だ。
ここはホニさんと出会った場所であり……マイと初めて――

「ユウジ様と初めてのバージンロード……」

――デートをした場所のはずだったんだがなあ。

「……墓地での結婚式は色々といいのか？」

ここでまさかのマイの「お茶目モード☆」発動で若干困惑する俺。
というか墓地での結婚式とか聞いたことありゃせん。
『じっちゃん、俺結婚するよ……』だからって私のお墓の前で結婚式しないでください、ここに私はいないんですから。眠ってなんかいませんから。

「いいんです！　場所があれば即結婚！　インスタント結婚式セットはいつも持ち歩いていますっ！」

インスタントって、即席麺かよ。
なんかよくわからない記憶回路が活性化してかつて存在したけど流行らなかった「一分カップ麺」ならぬものが脳内に顕現したけど……おそろしく関係ねえ。
くだならないことを考えていたらマイがおもむろに箱を取り出し、その箱から本当にウェディングドレスやらケーキ（!?）の一部が飛び出ていたので言葉に出来ないどころか何も言えなくなった。
うーむ、なんとも反応に困る展開だ。で、デートのことは忘れられてしまったのだろうか……ちょっくら個人的には印象深かったのだが。

「……冗談は抜きにしてユウジ様と共に歩いた場所なんですよね」

あ、覚えててくれた。

「ああ、あの時は――」

……ついでに思い出した。あの時の俺の心境を。言えないっ、あの時本当はユキが良かっただなんて！

「二回目もユウジ様と共に歩めましたし――」

マイは思い出深いですと続けた。二回目もマイと歩けるとか神の思し召しがあったに違いない、あああありがとう神よ。

そうして少し歩みを進めて墓地を抜け、そうして俺とマイは社を訪れた。

「少し休ませてもらうかっ」

「そうですねー」

そして神社の階段の埃を少し払って腰を下ろす、そこからは墓地を眺められる――のだが、なんだろうあまりいい気分がしない。

景色はさておいて、それからはかつて俺はマイをどう思っていたか、逆にマイは俺をどう思っているのか……を、思い出も合わせて話をしていた。

「私は――ユウジ様を去年から想っていました」

去年というと……一応言っておくが俺はまだまだ高一だ。そうなると中学校からってことになる――

ちなみにこの町には中学校というと藍浜中学校しかない。学校が乱立せずに、一点に生徒が集まるため中学校もそれなりに生徒数は多かった。

「あれ、マイって去年と同じクラスだった――」

そう言い掛けて止める。この物言いはおそらく同じクラスだったに違いない。

「いえ、中学の頃は別のクラスでした……でも私は――」

ユウジ様を見つけたんです。そう優しい口調で続けた。
別クラスなのになんで、俺なんかを？　……ユイやマサヒロと駄弁ってただけな気がするんだが――

「そう、なのか――」

でも、とりあえずはそう答える。俺を見てくれていたことが嬉しかったのでこれ以上の言及が必要ないと感じたからかもしれない。
とにかく色々な高校での思い出話を聞けて良かった。マイにも俺のことを少しだけ話すことが出来て良かったと思う。

しかし、この時俺はすっかり忘れていた。今の日常がなんなのかと、この世界はどう出来ているのかを――

「それでは次に行きましょうか？」

「ああ」

そうしてマイに手をひかれながら山を降りていく。改めてみると、山の多くの木々は葉をなくしていた。
凍てつく風がどんなに強くとも俺とマイの手と手の繋がりがなくなることはなかった。そして心も――

「さむうううううううう」

心は暖かったけど、体は寒いという……なんとも情けない。でも、ちょっといい訳いいかな？

「波、荒れてますね～」

凍てつく空の下、人っ子ひとりいない海に砂浜。吹きつける海風は容赦なく冷たい。

「いやー、予想以上にクルな」

以前肌着で庭に出てきたのと同じぐらいに寒い、なんで？　この防寒着はなんなの？　保温できないただのナイロンカバー？

「すみません、寒いですよね……でもここに来たかったんです」

……そうしんみりと言われちゃったら文句は言えないぞ？　マイがいるからアタタカイ、マイがいるからアタタカイ……よし、慣れた！

そしてマイはそう言うと海をじっと見つめ、俺も冬に少し荒れる海を眺める。でも俺とマイは手を繋いだまま。

「今年の夏、覚えていますか？」

今年の夏『映画化決定！』してもいいぐらいにエンジョイした夏休みだった、なによりマイの魅力に溢れた日々だった。うん、今思っても素晴らしい。

そんな中で、一番最初のイベントと言ったら――

「ああ、マイと初めて海に来たな……まあ皆も居たけれど」

皆の水着姿みれて、ものすんごい役得だったなー……と思いだす。

……ん、あれ？

「でも嬉しかったんですよ？　ユウジ様と知り合えて……海に一緒に来れる間柄になれたのが、なにより嬉しかったんです」

「そっか……いやー、まさかあの時マイと付き合えるとは思ってもいなかったなー」

美人さんだけどヤンデレな彼女。正直、その頃から気になっていはいたのだけれど、ここまでになるとは――

「そうですよね……私なんて、眼中にも無かったですよね……」

言い終わってはっ、と気付く。これはもしかして思い切りマイを傷つけた……？　いつの間にかそっぽを向かれて、更にそれに確信を抱く。

「え、え、いや！　そう意味じゃなくてだな！　ええと、それは――」

そう慌てて弁護しようとすると、ふと気付く。

「ふふふ……」

マイが肩を震わせていた。

「マイ……？」

それに、笑いが零れていた。

「ふふ、冗談ですっ！」

向き直って彼女は笑顔で言った。

「えええええー」

「というかユウジ様が振り向いて貰えるなんてそんな夢のまた夢、妄想レベルなこと起りえないなんて思ってましたからっ」

と言い舌を軽く出して冗談を言う彼女。やられた、と思う反面…凄い可愛かった。やってくれるよ、彼女は！

「冗談やめてくれよー」

「ごめんなさいー」

今回の”ごめんなさい”も今までと違って茶目っ気のあるものだった。俺は改めてマイも出会ったころとは本当に変わったな……と思う。

「そういえばさ」

さっき思い出したのだ。思えば、なんでマイは水着で来ず……ってソコじゃない。なんで泳がなかったのかと。

「？　なんですか？」

「なんで、マイは泳がなかったんだ？」

泳ぐのが苦手なのが理由なら、少し水着姿を見れないのが残念に思っていた。

「え」

すると、途端に会話が途切れた。もしかして本人に触れてはいけないことだったのかもしれない。

プールにも出席したところを見ていないのをみると――

「ご、ごめん。何か事情があるんだよな、悪い踏み込んで」

「いえ……私こそ、ごめんなさい。でも、少し待ってください。ええと、覚悟が出来たら――」

その時のマイは少し憂げだった。今までの明るい表情を見たあとにこれを見ると……まるで出会ったころの――

「……マイ」

「ここまでにしましょうっ！　ニヵ月も待ち望んだクリスマスデートですから！　楽しみましょう！」

「あ、ああ！　……ってニヵ月？」

そこで引っかかる。二ヶ月？

「あ」

慌てて口を抑えるマイを見る。

「ニヵ月も前からマイは考えてたのか？」

「は、はい！　すみませんっ、実はどうやって切り出そうと考えていたら、いつの間にか差し迫っていて――」

「なるほど、もしかしてそれで今日のデートは――」

「はい……ユウジ様から誘って頂いたのに、私が連れまわす形になってしまい……わがままばかりで、すみません」

「いや、いいんだって。マイに連れまわしてもらえてうれしいよ。そしてなによりマイが隣にいれば――」

「ユウジ様……はいっ！　それでは、次に！」

「おう、マイさんにエスコートを頼んますー」

「はい、では――」

「随分見慣れた――」

その目の前に現われた建物は見覚えしかなかった。頻繁に訪れているこの場所、そう冬休み前までにほぼ毎日――

「藍浜高校です！」

そしてまた手をひかれていく。
来客用か少し無用心にも開いた校門を抜け寒々とした並木を歩き昇降口のガラスドアを押すとやはり少し無用心ながらも校内へと入ることができた。

「こっちですっ」

「あ、ああ」

そうして辿りついた場所を見て思った……懐かしい。そうか、あれからもう八ヶ月近くも経つのか――

「ここがユウジ様と初めて向き合って話した場所です――」

薄暗く、一階から物置へと続く少し下った階段。そこで俺は――

「ユウジ様を殺そうと、又は私は自害をしようとした場所でしたね」

改めて聞いても恐ろしい話だ。ここで殺人未遂、自殺未遂が行われたと考えると。

「あの時、ユウジ様が私に仰ってくださったおかげで……こうして今があるのですね」

あの時のマイは何かに急いでいたように、何かに急かされていたように見えた。
それはきっと、俺のせいなんだろうけど。だとしても、俺がマイに言うしかなかった――止めろ、と。

「だから……ありがとうございました」

優しく表情を形つくりながら頭を下げた。マイは出会った頃から本当に変わったなあと改めて思う。
そしてもっと綺麗に、可愛くなった。

「いいって、いいって」

そして少しの沈黙を終えて。

「ユウジ様」

「ん？」

「ユウジ様、覚えていますか……私がここで初めて告白をして――」

「あー、された……な」

「あの時の私はユウジ様のことを考えず自分ばかりで……だから私はユウジ様に振り向いてもらえるように、ユウジ様にとって魅力的な女性になろうと決めました」

魅力的……ねえ。

「それでお聞きしてもよろしいで――」

決まってる。

「魅力的だ」

「え、あの――」

「努力家で真面目だけど、どこかお茶目で可愛いらしくて――俺にはもったいないぐらいにマイは魅力的な彼女だ」

「そんな……私は！」

「体育祭での準備も、夏休みの思い出も、文化祭での告白も。全てが俺にとっては大切なことなんだ。マイと過ごせたという事実が記憶が」

「！」

だから、改めて。俺は――

「姫城マイさん、俺とこれからも付き合っていただけませんか？」

そうして告白をする。しっかりと迷いなく、確かな意思がそこにある。俺は返答を待ち、そして――

「あ……あっ、はい……ユウジ様、これからも私と付き合ってくださいっ！」

思い出の場所、始まりの場所での告白。そして――

「ユウジ様……よろしいですか？」

「いいのか……？」

「好きな人にはじめてをあげようと決めていましたから」

「じゃあ――」

俺はマイとそっと唇を交わした。俺にとっても、マイにとっても初めてのキス。柔らかで温かで――当分この感触は忘れられないかもしれない。

学校を出る頃にはすっかり暗くなりはじめていて、そうして商店街へと戻る。

キスの後もあってきまずいことになるかな、と思っていたらそうでもなかった。でも――

「ユウジ様とのキス……心地よかったです」

と、綺麗な薄桃色の唇を指で触りながら笑顔でそう言ってくるマイに。

「ああ……なんか柔らかかった」

俺、素直である。

「あの場所で出来たことが……私にとって――」

始まりの場所で。二人が結ばれたことを確かめるように。

「……」

「……」

流石に会話も途切れた。やっぱり俺にはハズカシイ訳で。それでも、俺にとって勿体なさ過ぎるほどのプレゼントだった。

「ク、クリスマスイルミネーションが見えてきましたね！」

「お、おう！　結構凝ってるな」

「行きましょうっ、ユウジ様っ」

「ああっ」

そうして俺たちはデートの始まりの場所へと白い息を吐きながら駆けていった。

入口から垂れるリースやら電球達がきらきら光って鮮やかに夜を彩って行く。

商店街の間近に有り、クリスマスの星やら鈴やらの装飾の施された大きな杉はクリスマスツリーへと変貌し、そんなツリーの植えられた広場へと辿りつく。

もうとにかくここらじゃ定番のクリスマススポットで、主に学生が占めるであろうカップルたちが少なからず集まりそれぞれ話したりツリーを見上げていたりしていた、

「それで、あのさ」

そうしてコートから包装された長方形の箱に入ったプレゼントを、マイへと手渡す。

「こ、これは……？」

「まあ……一応クリスマスプレゼント、大したものじゃないけども」

「私に……ですか？」

「その質問はどうだろう……答えは当たり前だっ、マイにだ」

改めて向き直って、ツリーを背景に。

「まあとにかく、メリークリスマス。マイ」

「ユウジ様……メリークリスマスっ」

そうしてまたマイと口づけをする。ちなみに今度はマイからしてきたので正直かなり嬉しかった、そりゃあもうね。

それはやっぱり温かく、いつまでもいつまでもこの心地よいことが続いて欲しいと思ってしまった。

同じ頃には空からは真っ白の贈り物が降り始めていて……この夜はベタだけれどもホワイトクリスマスになっていた――

第１７８話　√１－８３　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

前回ことＨＲＳ√１－２は√１－６９ですー

第178話　√1－83　※独占禁止法は適応されませんでした。

HRS√1－3

ここはどこなのだろう。なぜ私はここにいるのだろう。

白い壁に白い床、白い天井。それは本当に真っ白な部屋だった。
視覚に次いで聴覚を働かせると……聞こえるのは啜り泣く声と、何かに同情しているような会話が聞こえる。
なんで私はここにいるの？
聞こうとした、でも声が出なかった。出せなかった。

「そ、そんな……」

顔を両手で覆いなき続けるお母さんがいた。
どうして泣いているの？
でもそれは口にしない。幼き私は少しずつ理解し始めていたからかもしれない。

「くっ……」

父が泣いていた。後悔に苛まれ、自分の無力さに失望するように、唇を噛み締める。
私の視線の先に見慣れないものが鎮座していた。
それは大きな箱だった。直方体で覗きガラスが付いた、まるで人が入れるような大きさの箱。
労るように、慰めるように。箱の周りには花が据えられていた。
何よりもその箱の前にある写真に圧倒的な違和感を感じた。

「弟くん……？」

それは昨日まで一緒に喧嘩もありつつ遊んでいた――弟の写真だった。

どうして？

幼き私は分かったかもしれないし、分からなかったかもしれない。

しかし確かめたたかった、これが何かの間違いだと。

箱を覗きガラス越しに見ると――

「……」

そこには外傷こそ思いのほか少ないが、健康的な肌色は薄暗い土色になってしまった弟の姿。

その表情は柔らかく、箱から出したら寝息をたてていそうなほどに安らかに眠っていた。

そう、弟は死んだのだった。

四歳年上の私と、母と父を残して飛びだって行ってしまっていた。

それは葬式、それは棺桶。弟はもうこの世にいなかった。でも私には実感がいまだなかった。

そして火葬される弟をみても何も感情はなかった。

そうして家に戻って少し時が経ったその日に、私は圧倒的な喪失感に襲われ――

「そっか……もう弟くんは」

涙が止め処なくポツリポツリと床を湿らして行く。その時私は、弟がこの世から居なくなって、もう帰って来ないことを実感したのだった。

１２月３１日

「あー、もう年末か」

年末は「笑ってはいけないデパート密着４８時」なるもの以外はネットでアニメ観賞をしていた。

時折マイと電話で話したり、ユイが部屋を訪ねてきたり、ホニさんが夕ご飯を呼びに来たり。

いつもの、ぬぅ～っとした日常を過ごしていた。しかし机にある１つのモノをみて思う。

「……なんかちゃんと読めてないけど」

それは本。葉書二枚分の大きさで、それも光沢の入った紙を使用したであろう表紙。

しかしそれならどこらでも転がっているのだが――

「マイ……だよな」

マイが表紙には写りタイトルとして「マイ様ファンクラブ会誌Ｎｏ．１５」と書かれていた。

「一応チサさんに貰ったけれども……うーん」

とりあえずは、読むのはやめておこう。うん、そうだな。

でも、捨てはしない。キチンと保存して……うん、いつかに。

第１７９話　√１－８４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

実はだいぶ力尽きてるよ！

第179話　√1－84　※独占禁止法は適応されませんでした。

年末。その名通りの年の末。テレビの画面の中では見てて寒いぐらいに芸人や俳優がドンチャン騒ぎをしていたりする。
ニュースでは何故か事件が増え、次々と今クールのアニメが終了していく。

「バイバイ、ミル●ィホームズ」

と最近ユイがガチ泣きしていたのは良い思い出（？）

「年越しそばにはお揚げつくかな！？」

あー、おそらくついてないかな。とホニさんに答えるとかなりションボリしていた。
いや、そば＆お揚げはそもそもあんまりないぞ？　その組み合わせはど●兵衛だって季節商品だ。

「ユウくん、年越しそばは期待しててね！」

「あー、楽しみにしてるぞ」

”年の締めはお姉ちゃんの料理で！”と胸を張っていたので、俺はそれに甘えて年末はとにかくゆっくり。
なんというか今年は色々あり過ぎた……うーん、疲れた。今年で思い残すことは……ないっ――

「……」

かと思っていたら、思い出してしまった。クリスマスデートの海岸で俺がマイに質問した答え。

『いえ……私こそ、ごめんなさい。でも、少し待ってください。ええと、覚悟が出来たら――』

覚悟とはなんなのだろう、躊躇する理由が本人とっては重いことなのだろうか？

そして俺は覚えている――その時みせた憂げなマイの表情を。

「……なんなんだろうなー」

そして未だ開いていないマイファンクラブ冊子。

大きさ程それ程でもないが、厚みはゼロの●い魔のラノベ一冊分はあるだろう（注・憶測です）

ついでにＮｏ．十五とういことから既刊済みのものが十四冊は確実にあることになる……恐るべきマイファンクラブ。

「ご飯だよー」

という姉貴の呼び声で、俺は表紙のみをじっと眺めていたマイデスクを後にして自室を出た。

夕食終了後は、居間に家族が集まった。

「マ、マツダｗｗｗ何やってんだよｗｗｗｗデュフフフ」

「ぬはははははははは」

「い、痛そうだねー」

「ユウジさん、これはえすえむぷれいの一つなの？」

俺らは何気なく「笑ってはいけないデパート密着４８時」を観賞していた。

エアコンの効いたぬくぬくの部屋で少し冷たいみかんを食べながらの年末。

「贅沢だ……」

なんという至福の時間。するとＣＭになった途端にユイが話しかけてきた。

「おお、ユウジ。知っているか」

「何を？」

ワッツ？

「今日の２３時から迷い猫オーバーウォークの一挙再放送だ！　見るよな？」

「え」

いや、完全に断定しなくても。てか思い切り時事ネタだよなあ……

「全１３話一挙放送。ＢＳ３１にて」

「何時まで？」

「２９時半」

「すげえ時間帯……ポリ●ォニカも真っ青だな」

「では答えを聞こう」

「面白い回だけみる」

原作ファン涙目なのに、原作者歓喜という謎アニメだからなあ。

「つまらんなー、ユウジ」

「銀●もよりぬいてるからいーの」

「わーかった。東京ＭＡＸの祝祭のカンパネーラに備えるのか、ううん？」

「いや、それはいいや」

あんま面白……それよりもリアルがあるからなあ。

「……あーそっか、ユウジはアレか」

「まあ、アレだよ」

マイとの新年最初の電話トークをするっ！　……というのが今回の目標。

しかし年末年始の電話回線も天下のN●Tであっても混雑するわけで、プレミアム会員なんてものはないので運任せ。
だとしても一秒でも早く年始電話を成功させたい！　と、思ってる訳で。

「（とりあえず年明け十分前くらいからコールしまくろう）」

こういう顧客がN●Tを苦しめるという事実はどっかに放っておこう。
しかしそう思えばパソコンメールでも交換しとくべきだったなあ、と思ったり思わなかったり。
でもパソコン故に直ぐに返信出来なかったら悪いしで、迷ってたのもある。
決戦は自室にて、携帯回線を使用しての勝負。それまでは居間でテレビをみていることとしよう。

11時半。
俺は自室に戻って、古臭いブラウン管テレビ越しに先程のバラエティを観ていた。
すると突如「ピロピロリン」と購入時に設定されたままの着信音が鳴った。

「メールだよな？　誰からだ？」

マイはアドレスをそもそも持ってない。ユイについてはこんな数部屋挟んだ程度の近距離メール会話とか家庭崩壊だろう。
生徒会メンバーも委員長も知らないので、じゃあユキか愛坂かマサヒロか。

「あれ？」

……男すくね。男友達すくねえ！　すごい、年末にこんなこと気付かされるなんて！

「あ、はは」

ちょっと落ち込んできたぞ……ホットになれ、ホットになるんだ俺。ポジティブになるんだよ、俺。

「女の子ばっかでウハウハじゃーん」

……彼女持ちの発言としてどーなの？　ああ、逆に図に乗っちゃったよ俺。

そーだよなー、高校入学時も基本的に中学三年のメンツ三人がスライドしただけだしな……

「いや、これでも俺。以前は友達居たんだぜ？　男友達」

何かに弁解するように俺は――誰だおホモ友達とか言った奴、縛り首にすんぞ。え、それより嘘だろって？

ふふ、俺を甘くみない方がいい。

俺だって中学二年までは友人の多さに右手と右目が疼いて仕方なかったんだ、その疼きもアーマーコアの組み込まれた友人が傍に居たが故にっ！

え、なにいきなり厨二病暴露してんだよって？　ネットに晒す？

……ごめんなさい、って俺誰に謝ってるんだ!?

「あれ、こっちの方がイタイ」

一人芝居展開とか厨二病以上に痛すぎる。うはぁーさらにこの十数分間で相当に百面相だったろうな、俺。

忘れることにしよう。

今までの部屋は全部夢、冬の迷いがみせた夢、だからなおのこと今までの事は泡沫と消える。

スタッフの発作による間違い。全てここから……ということにしてください、お願いします。

「で、誰からだよ……」

もう誰からなんてどうでもいいのでやる気なさげに携帯を開き、未読メールのアイコンをチェックする。

『Ｆｒｏｍ．マサヒロ』

パタン、俺は携帯を閉じた。

ちなみに後に確認した内容は”除夜の鐘？　そんなもので俺の煩悩を消し去るとは方腹痛い、俺の煩悩は１０９つある”と読んだ時間と俺の労力と携帯の電池残量を無駄にした。

そうして１１時４５分ぐらい。時は満ちた。

「さあ、コーリングの準備をっ！」

『電池残量が不足しています』

「マサヒロオオオオオオオオオオオオ」

（※一概にマサヒロ一人のせいにはできないですが、そこんところ

はお察し下さい）

「てめ、このっ、充電っ」

携帯に充電コードをプラグ・インして少し待つ。

「5分でどれほど通話出来るか……」

最近の充電の速さには恐れ入るが、5分ならどうだろうか。

しかしかつて内には14時間充電して30分しか使えないムダにデカイ掃除機があったのを考えると恐ろしいほどの進化だな、うん。

（※いや、なんで携帯と電気食う掃除機を比べるんですか？）

5分後。

「よしきた！　コーリングッ」

『ただいま回線が混みあって――』

「ダメか、リトライ！」

『ただいまー、かーさん――』

「呼ばれた！？」

『回線が混雑するでしょう』

「予報！？」

『連続投稿すんなワレ！』

「ええっ」

『お前のＩＰアク禁にすんぞ』

「えええー」

『Ｎｏｔ　Ｆｏｕｎｄ』

「まさかの口頭っ！？」

そして２３時５８分４５秒。

『プルプルプルプル』

「きたこれ！」

『ガチャ、ツーツーツー』

「切られた！？（ｏｒ通話中）」

マジか……もう一分しかねえじゃん。うわー、どうするよ。そんな時に――

『チャラチャラチャラーン、チャラーン、チャラーン、じゃらーん（着信音：ＴＲＵＴＨ）』

直ぐに手に取り通話ボタンを押した。

「ああっ、もしもしユウジです」

『……』

「あのー」

改めて確認すると、携帯のディスプレイには「姫城舞」の文字…

…？

「えーと」

そして後ろのテレビ（時計確認の為にチャンネルを変えた）から、

あけまして――

『あけましておめでとうございますユウジ様あああああああああ

あああああああああ』

「おおうっ！？」

1月1日

声こそそれほど大きくないが、いきなり声がきたのでビックリした。

『今年もよろしくおねがいします！　おそらくユウジ様への新年の挨拶は私が最速でしょう！』

「ああ、マイが一番最初」

『本当ですか！　あけましておめでとうございます！』

「何度言うのさ」

『う、嬉しさのあまり！』

「俺も新年早々にマイと話せて嬉しいな」

『ほ、本当ですか！　今年もよろしくおねがいします！』

「あけましておめでとう。今年もよろしくな、マイ」

『ありがとうございます！　あ。あ、あけましておめでとうございますっ！』

そんなこんなで新年のスタートはマイとの会話という凄まじいほどの幸運で始まったのだった。

第１８０話　√１－８５　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

遅れてる割に文章量少ねェ……

番外編挿入ミスったあああああああああ

第１８０話　√１－８５　※独占禁止法は適応されませんでした。

なんでこんなことになったんだろう、と改めて思う。
俺がいけなかった。俺に全て非が有った。でも、それでも……

「こんな別れは――」

無理だ。こんな最後は悲しすぎる、切なすぎる。
それに俺は伝えなければならないことがある。
俺が拒絶されていても、それでも声を大にして一つだけ伝えたいことがあるんだ。

「俺は……俺はっ」

マイが好きだ、と。
届かなくてもいい、その言葉で終わってもいい……でも、言わないと気が済まないから。
俺は駆けて、駆け抜いて。彼女の元へとスニーカーで地面を蹴飛ばしながら走って行く――

１月１２日

正月が明け冬休みも明け。少し休みボケの残ったまま始まる三学期、そんな始業日から４日経った１２日のこと。
いつも通りのワイワイガヤと喧騒にまみれた昼休みに、いつものメンバーで机をくっつけてランチタイムを展開していた。

「おおー、ユウジ、今日の弁当は、うまそうだな」

ユイは同じ家なのになぜにそんなことを棒声よろしく聞くのか。

……いや、ユイが住んでいるのがバレちゃいけないからだけどさ。

あー……ここで、説明しておこう。

メイドインオレデイ。

俺が朝早くか、前日に予めつくって置いた……まあ俺が作った弁当の日だ。

ユイが同居し始める以前、桐が来るまでも「姉貴の負担軽減」理由として勝手に俺が姉貴の反対を押し切って設定した。

まあ食事当番の弁当版と言ったところ。それまでは姉貴の絶品弁当か俺の普通弁当と学食ｏｒ購買のローテーションだった。

ユイも引っ越してきた当初は展開にあったように食堂や購買、又は予め買い溜めしたパン、おにぎりで回していたのだが――

『栄養不足するからダメー』

と、姉貴がすぐさま異議を唱えた。じゃあどうする？　俺とユイの弁当が被ってたら少なからずバレるぞ？

と考えた結果。

『日によって弁当作り主を変えればいい』

ということだ。え、どういうことなんだって？

つまりは「俺のつくった弁当」と「姉貴のつくった弁当」をユイと俺は違えて持ってくるということ。

俺自らがつくった弁当を自分が食べることもあれば、俺の弁当がユイに食べられることもある。

そんなものをスケジュール管理をしっかりした後、ユイは水曜は弁当無し、俺は木曜弁当無しと負担を軽減している。
いつかそんなものバレるだろと言われようが、とりあえずはこの体勢で行く予定。
ユイはどうやら料理だけは苦手らしく、殺人料理こそ生み出さないがよく炭を顕現させる……消臭用に使えそう？
そんなこんなで一応食べられるものは作れる俺と、絶品星三つな料理を生み出す姉貴で回しているという訳。

いや……マイに秘密にするのは正直心苦しいけども。そのうち、機会に……ね？

既に出来上がり巾着に入れた状態で皆に弁当は渡すこともあって、そんな訳でユイは俺の弁当を知らないのだ。
例えユイ担当の声優が某演技でも、それはスタッフの文章の稚拙さが原因であることを明記しておく。

「ああ、これか？　ベーコンサラダ。ごま油とベーコンって合うな～」

「ユウジ様がおつくりになったのですか？」

「ああ、うん。数日に一回は俺がつくってる……まあネットで見つけたレシピで簡単につくってるだけだけども」

「す、すごいですね！」

「いやー、姉貴にはかなわない」

「でも色どりも綺麗で……ユウジ様もすごいですって」

「ああ、ありがとな。そう言ってくれると嬉しいもんだ」

そんな会話に目を光らせたユイが居た。そうだ、これだ――と。

「（こちらユイ応答せよ）」

「あー、でも今日のは上手く出来たかもしれない。良ければマイも」

「いいのですか？」

「（おーいユウジ）」

「じゃあ、どうする？　弁当のふたに――」

「あーんで」

「（ユ～ウ～ジ）」

「……大胆ですね、マイさん」

「チャンスは逃しません」

「（おっと、空気読むか）」

「じゃ、じゃあ行くぞ？」

「はっ、はい！」

「（リア充してるなあ……てめ、このっ！）」

「どう？」

「合いますね！」

「だろ？」

「（ユウジさんの女たらしー）」

「（誰がたらしだ）」

＞ユウジが入室しました。

「（聞こえてるなら反応してくれよー、放置プレイとか……興奮しちゃうだろ？）」

＞ユウジが退室しました。

「（ごめん、聞いて……というかユウジ、これは貴様にとって利のあることだぞう？）」

＞ユウジがこちらの様子を伺っています。

「（いや、入ろうよ）」

「（はいはい……で、なんでこんな精神サーバーまでテレパシー飛ばしてなんの用事でしょうか？）」

「（いやー、アタシ思いついちゃったんだよ）」

「（何を）」

「（ユウジサン？　好きな彼女を家に呼びたいとか思わないかい？）」

「（いや、まあ……いや！　イカガワシイことは絶対にしないけどっ）」

「（エロは置いておいて、純粋に好きなあの娘をヘッドハンティングしたいと思わないかい？）」

「（引き抜いてどうすんだよ……まあ、呼びたいとは思うよ？）」

「（さらに出来ればユイやマサヒロみたいなお邪魔虫は居ない方がいいと）」

「（うん）」

「（あ、そこは即肯定するのね……で、アタシの言いたいのは何気ない彼女の誘い方なんだよ！）」

第１８１話　√１－８６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

少ないどころの話じゃねーぞ！

第１８１話　√１－８６　※独占禁止法は適応されませんでした。

「（で、アタシの言いたいのは何気ない彼女の誘い方なんだよ！）」

何気なくマイを誘う……あからさまは出来れば避けたいからな、それは賛成だ。

いや、なんというかマイなら別にどストレートに言っても承諾してくれそうだけども……気分的に。

「（おおー、そりゃ役に立ちそうだな）」

やっぱユイって俺たちのこと考えて――

「（まず一言目は”俺の家でアレやろうぜ”）」

ないか。

＞ユウジが退室しました。もう戻って来ることはないでしょう。

今回に関しては完全にからかわれてるだろよ……

「（ユウジカムバァーック）」

「（ラストチャンス）」

はいはい……次は頼むぜ？

「（了解。それで”新レシピの試食をお願いしたいんだ”と、だ）」

さっきの弁当会話と弁当解説はこのための伏線だったのか！

マイにも一応手料理を食べて貰えたし――だが。

「（！　なるほど。しかし、俺はそれほど料理上手じゃねぇぞ？）」

うん、姉貴には一生勝てない。例え十人がかりでも（？）

「（数日置きにうめえ弁当を提供するお前のどの口が言うか……味に関しては大丈夫だ！）」

えー……まあ、食べられるレベルではあると思うけども。

「（それで、何気なく呼ぶと）」

「（そういうこった。ちなみにその間アタシはどっか出かけてるぜい）」

「（なる、助言ありがとさん）」

「（いいってことよ、弁当とか世話になってるしな！　じゃあ、いってこい）」

この間のユイとのチャット、１０秒にも満たない。

ユイの助言もあり”味見に誘おう”ということで俺の家へと呼ぶことに決定。

家族に味見してもらえばいいんじゃないですか……と言われても「マイに一番に食べてほしいんだ」という……クサイ台詞でごまかすつもり。

日程は……すっかり生徒会固定日となった木曜日――にしようかと思ったけど、それじゃ不自然か。

それならば、今週土曜は奇数曜日だから……日曜に呼ぶとしよう！　うん、それがいいな。

ちなみにここまでの思考5秒にも満たない

「あのさー、マイ」

「はい」

マイの箸を止めてしまったが、ここで言わねば！

「今度の日曜俺の家に来ないか？」

「え！」

「いやー、ちょっと新レシピの味見を――」

「行きますっ！」

言い終わる前までに承諾。……いい訳とかいらなかったな、うん。

本当に「味見～」うんたらかんたらは必要なかったかもしれん。

で、でもそこまでキッパリと即決できるそんなマイが以下省略。

「今週の日曜の……10時ぐらいかな？　ついでに昼食も」

「いただいてよろしいのですか！」

先読みはっやい。

「ああ、じゃあその日の時間に……道は分かる？」

「はいっ！　以前行きましたのでっ」

ということで、約束を取り付けた。マイの嬉しそうな表情は更に俺のテンションをあげていく。

この時俺は内心喜びまくっていたのだが……実際あんなことになるなんて、予測しようがなかった。

……こう意味深げに匂わせてなんてことはなかったりするけども、今回は本当に。

番外16話　BOTSU　祝200投稿突破！　ルート1のツ●ッター企画（磔

あらすじ。　6月、キラワケは何を思ったかツイッターの放置アカウントをリニュして「ｙｕｕｚｉｌｏｖｅ」としてニューアルしひと月の間マイの独り言を掲載していた――フォローなんて殆どなかったけどね！　（元ネタ√1－17　マイのツイ●ター発言より）

番外１６話　ＢＯＴＳＵ　祝２００投稿突破！　ルート１のツ●ッター企画（残骸）

祝２００投稿突破！
皆さんのご応援の賜物ですね！　ありがとうございます！
これからも色々な意味で（出来を多く含む）ツッコミどころのある駄文が展開されていきますので、宜しくお願いします！
そんな２００投稿越えな２０１投稿目は――ＢＯＴＳＵ企画ですｏｒｚ

どうもナレーターです。
本シナリオでクビ扱い受けてる私ですが、そのうち復活するかもしれませんね。
あななたちのリアルで言う年明けぐらいですかね？　一応ひと段落してるでしょう。

今回の「ＢＯＴＳＵ」はなんと世を騒がしてかき混ぜてコロッと丸めて出来上がりな”ツ●ッター”企画です！。
……いや、黒歴史なんだろうか。うーん、微妙？　基本的にはルート１の姫城のシナリオの勉強会編辺りからリンクしています。
リンクを張り付けたのもＧＡＹＭの方ですから、殆ど人は来ず体育祭編の体育祭直前で打ち切りになってしまいました。
そんな姫城用にリニュしたツイ●ターアカウントの残骸がありましたので、そこのをコピペしてお披露目。

……誰得なんだろ？

ということで姫城マイの独壇場、レッツビギンでございますよ！

11：30　PM　Jul　10th
「ユウジ様カッコよすぎます！　ああ、この表情いつみてもカッコいい！　……よくわからない販売のおじさんに勧められた一眼、買っておいて損はなかったです」

11：41　PM　Jul　10th
「今頃ユウジ様はお風呂でしょうか？　テレビでも見ているのでしょうか？　うふふ、どうしているのかなぁ……ん？　今ニュースで盗撮事件の犯行内容が流れてます。　へぇそんなこと出来るんですね――」

11：52　PM　Jul　10th
「もう12時ですね……明日も休日ですが、眠たくなってきたので寝ます。明日はユウジ様に会えないので悲しいです……」

9：57　AM　Jul　11th
「おはようございます……ふぁあ、今日は遅く起きてしまいました。昨日の夜は布団に入ってからもあの方を思うばかり……なかなか寝付けなかったのです。……ああ、ユウジ様は今頃起きているのでしょうか？　寝ているとしたら――寝顔が見てみたいなぁ」

10：49　AM　Jul　11th
「ずっと考えていましたが、ユウジ様の好みの方は一体どのような人なのでしょうか？　ま、まぁそれは私に近い人なら嬉しいのですけど……ユウジ様の篠文さんをみる目が違うような気がします。……気のせいですよね？　そうですよね？　そんなはずは――」

4：51　PM　Jul　11th
「はぁ……ユウジ様」

７：１３　ＰＭ　Ｊｕｌ　１１ｔｈ
「はっ、もう４時間も経ちましたか！　……考え事をしていると時が流れるのは早いですね」

８：４７　ＰＭ　Ｊｕｌ　１１ｔｈ
「勉強会楽しかったです……いつもよりもユウジ様の近くに居られて、ましてや勉強を教えられるなんて！　幸せな時間でした……次回の勉強会が楽しみです！」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　１１　２０１０　２２：３８：５３
「明日は学校ですね……ユウジ様のお顔を見れるのが待ち遠しいです！　ああ、早く明日になればいいのに！」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　１２　２０１０　００：２０：４３
「そういえばユウジ様は料理をなさるのでしたね。一体どんなお味なのでしょう、食べてみたいです……いえ！　決して食い意地ではなくて、純粋に……す、好きな人の料理を食べてみたいとととととｔ」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　１２　２０１０　２１：５７：５６
「ふぁぁ……もう夜ですね。明日に備えて寝ることにしましょうか……ああ、明日は２日ぶりにユウジ様とお会いできます！　ああ、楽しみです！　わくわく」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　１３　２０１０　２０：３５：１８
「帰ってまいりました。　楽しかったです！　素晴らしかったです！　かっこよかったです！　流石ユウジ様！　そこに痺れる、憧れます！」

Ｔｕｅ　Ｊｕｌ　１３　２０１０　２１：００：２４

「今日の勉強会も楽しかったです……ユウジ様のお隣に居れるだけで幸せです！　ああ、テストが来なければ、このようなテスト勉強の日々が――」

Ｔｕｅ　Ｊｕｌ　１３　２０１０　２３：０６：３６
「ああっユウジ様っ」

Ｔｕｅ　Ｊｕｌ　１４　２０１０　２３：０９：２４
「ふぁぁ……今日は一段と眠いです。ということでもう寝ることにします。……中学生の頃は１１時なんて当たり前だったのですけど、なにせユウジ様のこと考えていたら――」

Ｔｈｕ　Ｊｕｌ　１５　２０１０　２２：３０：３０
「あっ、もうこんな時間……ユウジ様の事を考えていたから？　ええっと、ちょっと違いますよ。ユウジ様に勉強をお教え出来るよう私も勉強してたんです……本当ですよ？　確かに2時間ぐらいは考えてしまいましたけど――」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　１８　２０１０　２３：５７：５４
「ユウジ様の隣に居られるなんて本当に至福の時間です……勉強会、今日も楽しかったなぁ」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　１９　２０１０　１９：１０：１８
「あっ、パスワードを書いていた紙を失くしてしまってずっと探していました……教科書の中に挟んであったのですね、分かりませんでした」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　１９　２０１０　２１：３６：３６
「はぁ……ユウジ様への愛を綴ったポエムを延々と考えて、実際に書いてみたら……文字数が1万を超えてしまいました。　内容は…

…きゃっ。　とてもじゃないですけど言えません！　でも私のユウジ様への愛は到底1万文字等という少なさでは語れません！　せめてでも1億と2000万文字は――」

Ｆｒｉ　Ｊｕｌ　２３　２０１０　１７：４４：４７
「そう言えば私のイメージ画像としている方がですね――キラ……キラハセ？　キラ……リン？　……きらりん？　あ、あれ？　どんな名前でしたっけ？」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　２５　２０１０　０２：５４：２２
「ユウジ様の写真データをパソコンに移しとかなきゃですね。……もう８００枚も撮ってしまいましたし、そろそろ入れ替えをしないといけないですねー」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　２５　２０１０　０２：５６：０９
「テスト後は体育祭ですね……ユウジ様との初めての学校行事！　楽しみです！　楽しみです！」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　２５　２０１０　０２：５７：５０
「体育祭ってどんな種目が有りましたっけ？　……借り物競走でユウジ様をお借りして、そのままお持ち帰りしたいです！」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　２５　２０１０　０２：５９：２１
「他の種目は……？　５０ｍ走でユウジ様との愛の逃避行――たった５０ｍしか有りませんね……短いなぁ」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　２５　２０１０　０３：０４：４０
「他には……？　ああ！　ユウジ様との二人三脚で心も体もピタっと密着！　いいですね！　楽しみです！」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　２６　２０１０　００：２１：０３
「そして……？　大玉転がしを二人で一緒に……こ、これが噂の初めての共同作業！　とっても魅力的です！」

Ｓｕｎ　Ｊｕｌ　２５　２０１０　０３：０４：４０
「そう言えばこんな時間まで起きていたのもユウジ様の写真の整理をしていたからなんですよね。……いつもは１２時ぐらいに寝ているのですが……流石に眠くなってきました、だから整理は途中にして今日はもう寝ることにします――」

Ｍｏｎ　Ｊｕｌ　２６　２０１０　００：２１：０３
「ユウジ様お美しい……えと、あれ？　カッコいいの方がいいですかね？　それとも……可愛い？　うーん、素晴らしい！　そうですね！　ユウジ様素晴らしい！」

Ｍｏｎ　Ａｕｇ　０２　２０１０　００：２８：１７
「ユウジ様との二人三脚楽しみです！」

お疲れ様でした。
明らかに「迷」企画でしたね。いやはや、なんで公開したのやら。

第１８２話　√１－８７　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

何が俺をここまでさせるのか……ちくしょう、クリスマスの野郎！
俺が書いた通りリア充にとっちゃイチャラブパラダイスなんだろう！　そして（童貞達にとって）伝説へ……リア充なんか滅びてしまえ！　用事が無いから小説殴り書きじゃボケ！　ちくしょう、メリークリスマスイブ。

第１８２話　√１－８７　※独占禁止法は適応されませんでした。

１月１６日

その日は雨だった。よりにもよって、こんな日に。天気予報はホラ吹きで、今日の惨状を予報などしてくれてはいなかった。

雨の降る音に目を覚まし、横目に窓を見れば縦線が入るかのように土砂降り。

そんな憂げに窓から灰色の雨降る空を覗いていたが、きりがないのでさっさと着替えることとする。

気取らずいつも通りの部屋着――だと流石に失礼かもしれない。普段は数着ある中学ジャージを流用して部屋着としている。

それならば、考えるものの。ファッションセンスどころか美的感覚も狂う以前に存在しない俺には選択肢は少なかった。

適当にあった紺ジーンズとTシャツで身繕い……という表現はファッションモデルのみならずファッション雑誌を購読するそこら辺の女子からしたら怒りどころか逆に嘲笑されるかもしれない。

そこんところは気にしない俺であった。それに気を滅入らしても仕方ないと判断したからで。ありのまま、ありのままを貫くこととする。

休日にしては目覚めが早かった。時針が指すのは６時、分針は５と、姉貴でさえ自室で寝息を立てているぐらいだ。

節電よろしく電気が灯されていない、自然光のみ薄暗い廊下・階段を伝って未だ寝起きの目が覚めないままキッチンへと向かう。

冷蔵庫を開けてみるに――

「……買う必要があるか」

その各扉、引き出しをみて思う。材料は到底足りないと。
この日曜を向かえるまでに時間はたんとあった。たとえバイトや生徒会をこなしていてもだ。
ネットでグーグルさんに助力してもらい”この家に来てもらう為の名分”の新レシピを探すのである。

「……こんなのどうだろか」

十時から来て貰うということから分かる通り、仕込みとかも考えてのこと。
仕込み――そんな大層なことはしないし、貧弱な知識経験故にレシピ頼りである。

「寒いからなー……」

汁物がまず欲しい、けんちん汁とか地味だけど野菜入れられるし栄養価が――と、思ったが新レシピだった。
それなら手頃な一品で行こう。そうなれば、簡単おかずってところかな？
出来れば安い野菜を使いつつも（以下略）

「……とりあえず朝飯作るか、テキトーに」

姉貴が起きる前にちゃっちゃと、ね。
ご飯は炊けてて保温状態。魚は――冷凍しておいたサバがあったから、それにしよう。
後は小松菜があるからおひたしにして……卵焼きかな？　そうして朝食をつくった――

出来上がっていた朝食をみて驚きを隠せない姉貴だったが「気分

で」と答えた。
続々と現れる家族勢……いつもは遅起きのユイも早起きで、はやくも七時半には全員が揃う。
ちなみに姉貴とホニさんに”今日のこと”は伝えていなかった。
なにせ――

『ユウくんが、女の子を連れ込む!?　なんで私じゃないの……って元からいるから!?』

それから云々かんぬん続いて、マイとのイチャイチャ――までは思ってないけども。
ゆっくりはできないと判断し。

『ふふ、アタシが連れ出してやろう』

『ユイ様、ありがとうございますっ』

自分から勘付いて言ってきただけに感謝感激雨霰。
そんなとこで露払いするわけではないが、姉貴とユイには出かけてもらうことにした。

「めっちゃ雨降ってるけどな……」

大丈夫か？　これ。

「……アタシに二言はないっ」

かっこいいけど、どうしよう。

「ミナ姉～、今日どぉっしても。どぉしっても！　欲しい参考書が

あるんだー。付き合ってくれない？」

「え……こんな雨だけど、いいの？」

「いいの！　ミナ姉にみてもらいたいからー」

「うーん、いいけど……」

と、渋々ながらも説得していた。ありがとうユイ、心の奥底から感謝する。

ホニさんには伝えていない……姉貴みたいに害はないし。ユイとは違ってマイも知ってるし。

桐はシラネ。なんとかなるだろう。

九時半、俺は雨中通学路を歩いていた。

「くそー、雨足強いな」

料理材料を買いに商店街へと向かう。部屋を片付け、廊下を掃除機を掛け、雑巾で気になるところを吹いていたらこんな時間になってしまった。

「（もしかしたら途中で会うかもしれない）」

ちなみに会うかもしれないではなく”会おう”というのが俺の意図である。

丁度その頃には朝早い映画に何故か姉貴は付き合わされているという……その後に参考書目当ての本屋ならば、俺のデートコースに似てるとかは言ってはいけない。

ユイ達が出かけたのが十五分ほど前、映画がの放映時間が二時間

前後……とすれば遭遇はしないハズ。
そうして俺は足早に忌々しいく叩きつける雨の通学路を歩いて行く。

「……こんなところか」

提げるビニール袋は両手に二つ。野菜やら卵やら肉やら……ついでついでと買い込んだ。

「（時間は……あと１０分か、これはマズい）」

流石に焦る。家に呼んでいるというのに呼んだ張本人がいないとか……それ以前の問題だろう。
恐らくもうマイは向かっていると考えていい、なにしろこの雨だ。天候で足を取られることを考えて早めに家を出ているだろう。

「（ここで会って行くのは無理……走るか！）」

水たまり……というかアスファルトには雨の降ったせいで水が張られ、走る度に跳ね返って来る。
そして――

「うお！？」

ザアアアアアアアという雨の勢いが増す。例えで使うバケツの水をひっくり返したら、そのほどだろう。こんな時によりに、よってのゲリラ豪雨。環境破壊の弊害が今ここに。
更には突風と断言出来るほどの風が瞬間風速的に巻き起り、貧弱とは言わないが安い傘はそれになすすべも無く俺の体を濡らしてし

まった。

「あーあ」

なんというか、この天候と自分の計画性の無さにウンザリする。
ちゃんと時間を考えて行動しろと、どれだけ部屋を磨いたって出迎える人がいなければ何の意味も無い。

「間に合ってくれ……！」

先程よりは弱め、それでも十分な強風が雨を巻きこんで吹き荒れる中、通学路を家へと逆走する――

「はぁ……はぁ」

帰宅部生徒会所属の俺はスポーツ全般はあまり得意ではない。もちろん持久走など、それが行われる春の時期が来る度に体育なんて潰れてしまえと切に願――呪っているものだ。
通学路そのものはそれほど長いかと言われれば、普通なのだが。予想外に雨と風の妨害が大きく通常の二、三倍の時間を要してしまった。

「もう来てるよな……」

しかし玄関前には人影はない。

「（ホニさんか桐辺りが入れてくれたのだろう）」

背後のゲリラ豪雨と強風のコンビネージョンに嫌気がさしたので、

そう勝手な解釈をし鍵を明け玄関扉を開く。
　すると目に入ったのは濡れた玄関と、見知らぬ靴が踵揃えて一足綺麗に置かれていた。

「（やっぱ来てたか……でも入れてくれて良かった）」

　そこで自分のびしょ濡れ具合にはぁと息をつく。コートの前をしめるのを忘れたが故に中身のTシャツまでひどく濡れていた。

「タオル貰うかな……」

　水も滴るイイ男……だったら良かったのだが、俺はイイ男ではないのでただの雨にやられた買い物帰りの学生だ。
　そこでふと思う、あの突風にマイが巻きこまれてたかもしれない。
……そんなことなければいいのだけど。
　俺は何気なくドラム式ではない古い型の洗濯機が鎮座しタオル置き場兼脱衣所となっている風呂場へと続く扉を開いた。
　しかし、俺は濡れていることに気が取られて。その風呂場へ続く着替えスペースに電気が灯っていたのを疑問に思わなかったのである。
　もちろん、節電主義であることは言わずもがな。使っていなければ、電気など付けない。

「タオルタオル――！？」

　扉を開いた先にはそれはもう美しい肢体が背中があった。丸みを帯びながらも引き締まり、その曲線美に見惚れてしまう――
　しかしそんな中でも一際目立ちそれらを全て台無しにするかのような――

「!?」

「あ、それは……その」

言語が働かない。冷静になれ。俺は何を見た、俺は何をした?

それは……俗に言う覗きという行為ではないか。

そんなマイの反応は早く、大きいものだった。

「い、いやあああああああああああああああああああああああああああああ」

耳を劈く絶叫、脳の奥底までキーンと響く絶叫。

俺はこれ以上はいけない、と扉を閉め廻れ右。風呂場を背にした。

「……み、みられてしまいました。これで、私は――」

微かに聞える声で、そう俺は聞きとった。

しかしそれよりも俺は、美しいものを見た感動からやってしまったことへの罪悪感が一気に押し寄せる。

……俺はなんてことをした? 俺の不注意で、彼女を何をしてしまった?

許しなんてもらっているわけもなく、俺は彼女の裸体をその目にみてしまった。

「俺はなんてこと……」

かつてのセクハラ事件など霞むほどの、愚行だった。

そんな俺に怒りか、哀れみか、軽蔑か。彼女は脱衣所の扉を壊れ

るかと言わんばかりに押しあけた……絶叫を続けながら。

「いや、いや、いやっ！　いやあああああああああああああああああああ」

「あ、ああ！　マイっ」

情けない声しかあげられなかった。とっさに着替えたであろう彼女は俺の横を走り去り、玄関へと一目散に駆けて行った。

そして自分の靴を履き、決死の思いのごとく扉の鍵を解錠すると降り注ぐ、降りつける大雨の中を傘もささず肌着だけで走って行った。

「ま、まってくれ……！」

呼びとめるには弱く、馬鹿にしてるようにしか思えない声を彼女にかけるが届くことはない。

俺も投げ捨てられたサンダルを履いて彼女を追いかける。どうしても謝らなければならないからで、これが大きな溝を傷跡を作ってしまうように思えたからだ。

「……っ」

雨は嘲笑うかのように俺に雨をぶつけてくる。これが罰ならどれだけ優しいか。

もしかしたら、これで全てが終わってしまう。走っているうちにそんなことだけを考えてしまうようになる。

靴箱に放置されていた手に持つ折りたたみ傘を開く間もなく、俺は彼女の足を追った。

公園へと辿りついた。
もちろん彼女と俺以外に人影はなく。土がぬかるみ水たまりが点在している。
そんな公園の濡れに濡れたベンチに俯きがちに彼女は座っていた。

「マイ……悪か――」

「なんで、追いかけてきたんですか」

「え……」

「ごめんなさい、ユウジ様。もう私はユウジ様に会わせる顔がございません」

淡々と、機械的に吐き出される言葉に俺は衝撃を受けた。
会わせる顔？　それは、俺があんな最低なことをしたから――？

「俺こそ悪かっ……ごめんなさい、悪気はなかったんだ。でも、俺は最低なことをした……嫌われても――」

「嫌われるのは私の方です！　私の、私のあんな傷……あっ」

言いかけて口を紡いだマイは、そして。

「……ごめんなさい」

そう言うとマイは俺の横を走り去って行った。
俺は追うことが出来なかった。決して俺は追えないほどに力尽きていたのでない。

俺は彼女に拒絶されたのだ。俺のしてしまったことのせいで。

「ああ……なんだろうなあ」

雨は止む気配なく、一人残された公園で立ちつくしていた。
それは寒く悲しく虚しく――激しい後悔と果てしない失望感に当分体を動かす気になれなかった。

「……本当にごめん、マイ」

謝る相手は既にいない。そんな謝罪の言葉は雨の降りしきる音に全て掻き消される。
俺一人が、残された。

第１８３話　√１－８８　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

まだまだ～

第183話　√1－88　※独占禁止法は適応されませんでした。

「わわわ、ユウジさんびしょ濡れだよっ？」

家に戻ると急に家を飛び出した俺を心配したのか、ホニさんがタオルを持って待ってくれていた。

「ああ、悪い……」

タオルを受け取って……自分の濡れた髪を拭く。

でもマイはもっと濡れているだろう、寒い思いをしているのではないか。

俺にあんなことをされて辛く、大いなる恥辱を感じているいるのではないか？

「ユウジさん？　マイさんは……」

「……」

俺は答えることが出来なかった。

「タオルありがとな、ホニさん」

「あ、うん……」

自分から水が滴るのも気にせず、俺がやらかしてしまった現場……脱衣所へ行く。

開かれた扉から、まだ湯気が立っていて直前までマイがシャワーを浴びていたことが分かる。
そんな着替えている場面で俺は直面してしまった。

「これ、は……」

脱衣籠にはマイの衣服が入っていた。そしてキラリ一つ光るモノが目に入る。

「ああ……」

手にとって確信する。これは俺が彼女にプレゼントしたクローバーのネックレスだった。
身につけてきてくれたことが嬉しい――そんな感情は、一気に喪失感に押しつぶされる。

「はは、見限られた……よな」

急いでいたから、焦っていたから――そんなことが浮かばない俺にとってこれは明確な拒絶、別れに思えた。
それを理解した俺はその場に立ちつくす。足元には買ってきた食材の入った買い物ビニール袋が雨の水を含みながら残されていた。

着替えて、マイのコートや上着をハンガーにかけ部屋干しをして食材を律儀にも冷蔵庫にしまってから俺は自分の部屋へと戻った。
メンタル的にかなり追いつめられているが、振り切ったかのようにそこでふと考える。そして思い出す。

「……」

俺は彼女の裸を目撃した。男としての本能か、嫌なほどにこびりついたそのスタイルのよい肢体を鮮明に覚えている。

そんな中での違和感。色とりどりの花が咲きほこる花畑にぽっかりと顔をみせる土の地。

いや……そんな生易しい物ではなかったのかもしれない。思い出せ、俺は一体何を見た。何に違和感を感じた？

そしてあの時彼女はこう言った。

『嫌われるのは私の方です！　私の、私のあんな傷……あっ』

傷。

彼女の背中に無残にも酷にもつけられた傷。

それもかすり傷ほどではない、深く抉り取られたかのように左肩から腰骨まで斜めにほぼ一直線にひかれた線。

絹のごとき柔肌の中で、赤黒く描かれるその線、彼女の美しい背中ではそんな傷に大きな違和感しか抱かなかった。

一言で言えば……醜い傷だった。

「……あんな傷が普通あるのか？」

いや、ない。背中という場所からして自分ではあんな深い傷を付けるのは難しい。

そもそも自分へ傷を付けてしまういかなる場合でも、多少なりとも生存本能が自制し思ったような深い傷は出来ないという。

あの傷の深さを考えると……他人からの危害を加えられた可能性と、事故に遭遇し負傷した可能性だろう。

「……あー」

気になることは、気になる。しかし、俺にそれを聞く権利も――もしかしたら今後話すことも出来ないかもしれない。

自分が本当に愚かであることを再認識する。これだから俺は――

「……このタイミングで思い出すか」

引き出しを開けると、そこには姫城舞ファンクラブの会誌があった。

俺は貰ったはいいものの、結局マイに悪い気がして読んでいなかった。

俺は何も知らない。

出会ったころの残虐的さや、恐ろしいまでの執着心。その意味を俺は知らない。

好きなものも、好きな場所も、好きな言葉も。俺はそれを殆ど知らない。

彼女がどう過ごし、どんな家庭を持っているか。そんな当たり前のことですら知らない。

所詮俺とマイの関係は、そんな外面だけの薄く遠い関係だったのかもしれない。

そもそも――俺なんかを何故好きになってくれたのだろう。

言わなかったから。いや、聞かなかった俺が悪いのだ。

知ろうと思っているのに、臆病に聞くのを躊躇していた俺に全て非があるのだ。

「……見てしまおうか」

会誌にはおそらくマイのことについて書かれていることだろう。
彼氏だった俺でさえも知らないことがそこには踊っているのかもしれない。

マイに拒絶されたことにより感じた喪失感を深く味わされていた俺にとっては、それは禁断の果実。
取ってはならないのに、その手を止めることは出来ない。
そして俺は、また愚かにも――

「ままよっ」

欲望と寂しさに俺の理性は負けた。
そうして開かれる度に表れる魅力的な彼女の写真に見惚れてしまっていた。

「悔しいが、すげえ上手い――」

こんな時に俺は何を抜かしているんだろう。腐った根性を持った俺なんぞさっさと死ねばいいのに。
しかし、理性はそんな自制を促すことなく右手は次々とページをめくっている。

そんな時に「姫城舞、公式プロフィール」と書かれたものが何故か袋とじであった。

「あけるか、あけないか」

理性はまたもや負け、そして開かれる情報の数々。

スリーサイズは書いてあるのに住所や電話番号が書いていない偏ったプライバシー保護っぷり。

「……いいのか？」

そんな項で、気になるものを見つけた。

「家族構成……祖父、祖母？」

彼女の家族は祖父母のみだった。両親はどうしたのだろうか。

そして下にはこうも書いてあった。

『両親、弟は他界』

……え？

この時俺は、やっと彼女を知ることができた。

彼女を介さない、最低の方法で。

第１８４話　√１－８９　※独占禁止法は適応されませんでした。

ＨＲＳ√１－４

弟の死因はひき逃げだった。公園に行こうと道を歩いてた際に後ろから走る車が減速せずに突っ込んだ。
しかし目撃者である証人が未だ小児で、あまり人通りの少ない道だけあって発見も遅れた。ナンバープレートも車の特徴も分からないであっては証拠はあまりにも少なくひき逃げ犯の特定は難しかった。
車に突き飛ばされ頭を強く打ち、出血はさほどないものの発見され病院に搬送途中に亡くなった。

そうして無情にも私の弟は誰かも知らない者に命を奪われ、それを晴らすことも出来なかった。
弟が居なくなったことによる喪失感が、家に帰ってから訪れる私。
葬式で「私が傍にいてあげられれば……」と後悔に涙する母と「こんなのねぇよ……」と納得のいかない終結に涙を流す父。

母はその後、しばらく家事も手に付かず泣き続け。父は会社を休んで酒を飲み続けて自暴自棄になっていました。
この頃から私たち家族は壊れ始め、この出来事が人を変えてしまった――

１月１７日

翌日が学校でどれだけ落胆させられたか。正直この空気で彼女に会うのは避けたかった。

しかし皮肉にも俺が避ける間もなく、彼女は俺を避け始めるのだった。

”避けたかった”というのはあくまでこの空気という理由で。マイとは話がしたかった。一緒に居たかった。

そんな言葉も交わさず、目も合わせることなく放課後が訪れ。そうして彼女は一目散に帰って行った。

俺に追いかける権利などなく、すれは全て俺に非があって。それ故に彼女に避けられているからだ。

「姫城さんと何かあった？」などとユキが聞いてくるも「ちょっとな……」と返すことが出来ない。

「気を落とすな」ユイには事の顛末を全て話していて「お前が悪い、そしてそっとしておけ」という忠告を受けた。

「少なくとも彼女を傷つけたのはお前なんだから、今は何もするな。時を待って謝り通せ」と渇をいれてくれていた。

そんなわけで生徒会もバイトもなく、一本道に帰ろうとした時に。

「ちょっといいか？」

そう言って黒い学ランをコートも聞かずにピシッと着た男子学生に呼び止められる。それを見たユキ達は「先に帰るねー」空気を読んでくれたか、帰って行った。

そして、連れて行かれたのはちょっとした木陰で。傍目には下校する生徒が溢れている。

「あー、スマなかった」

開口一番に謝罪の言葉、もちろん意味がわからない。

「？　えと、どちら様でしょう？」

そんな手を合わせて謝ってきたのは思わぬ人物だった

「申し遅れた……非公式新聞部部長の杉谷だ」

非公式新聞部、かつて色々やらかしてくれたところである。

「……非公式新聞部の部長さんが俺に何の用で？」

生徒会内での恋愛を報じられ、俺とオルリスを記事ネタにされマイからのセクハラの要因となった。

故にあまり非公式新聞部には良い印象がなかった。そして、こいつは衝撃的な発言をする。

「”学園の一輪の花こと篠文ユキを振る！……ということをリークしたのは他ならぬ非公式新聞部だ」

「！？　て、てめえらがっ」

そのせいで、俺はユキファンクラブに滅多刺しにされて全治一週間の骨折をした……一週間の完治は正直異常だけども。

「本当に悪いことをした。申し開きのしようもない」

何度も何度もコイツは頭を下げてきた。

「……」

「あまりに際どいこともあり記事掲載は見送ったが……新聞部にスパイが紛れていて、ネタを使われてしまった」

「言い訳のつもりか？」

「いや、情報管理に責任があった私達の落ち度だ」

「……あの後は大変だったんだ。ファンクラブメンバーに襲撃されたからな」

「ユキファンクラブには手がまわらなかった……すまない。しかし責任を持ってマイファンクラブは潰させてもらった」

「マイファンクラブ？」

そういえば手紙以降音沙汰がなかったマイファンクラブはつぶされていたのか。どうりで。ユキファンクラブはなんだかんだユキ本人の手で解散させられたと聞く。

どこの馬の骨とも知らない今まで馴れ馴れしかった男に学園で一、二位を争うマイがうばわれたってんだから、ファンの怒り心頭も仕方ないのかもしれない。

いや、だからって理不尽には違いないけども。

「それでお詫びが出来れば、と」

男はポケットから何かを取り出してみせる……それは一枚のケースに入ったＣＤかＤＶＤのディスクだった。

「これが……なんだ？」

「年末清掃していたらある記事を見つけてな」
それをＤＶＤ入れた、と続ける。
「？　それが何か俺に関係あるのか？」
「どちらかといえば、お前さんの彼女の方だ」
「……！　マイに？」
そのこいつの言う記事はマイに関係ある事柄……新聞に載るようなことって？
何かで賞とか取ったとかだろうか。
「ちょっとした事件――いや、本人にとっては半端じゃない事件だな」
「どういう……意味だ？」
「その様子をみるに初耳と見受けられるが、どうだ？」
そういえば思い出す、生徒会大掃除の際に貰った「マイラブ」なるファン冊子を読んでわかったのは両親が居なく、祖父母っ子であること。
それも弟までも他界していると。
それがどうして事件と、新聞に載るような事件に繋がる……？
「だからって、なんで今になって……」

こんなものを。襲撃事件はとっくの前のことだ。

「なかなか接触する機会がなかったのもので。授業の合間にこんなことは話せないし、生徒会に私は敵視されているものでね」

なぜかふふんと笑ってこの野郎は続ける。

「放課後も邪魔する訳にはいかなかっただろう？　しかし、今日は生徒会も無いようだが……どうにも彼女が居ないから、呼びかけさせてもらった」

皮肉な話だな。マイが離れていったせいで野郎は俺に接触したというのだから、それもマイの事柄で。

「……」

「これで全て帳消しにするつもりはないが、受け取ってくれ」

「いや、俺は……！」

こんなものいらない、彼女のことに必要以上に踏み込んでどうする？　彼女を傷つけるだけじゃないのか――

それでも、彼女のことを知りたい。好奇心に溢れた愚かな俺も居たのだ。

「要らないなら捨てておいてくれ」

「……分かった」

「本当に、色々スマないことをした。それでは失礼する――」

そうやってお辞儀すると、野郎は足早に去って行った。俺の手には一枚のディスクが残される。

「……例え見るんだとしたら、パソコンでってか？」

俺はそれを鞄にしまうと、一人寂しい帰路についた。

また情けないほどに俺は理性が敗北していた。

第１８５話　√１－９０　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

なんか変な出来に

第１８５話　√１－９０　※独占禁止法は適応されませんでした。

俺はその受け取ったディスクをパソコンのドライブ挿入した。
なんの躊躇いもない――わけがない。彼女の過去を踏み荒らしかねないことなのだ。
彼女にとっての半端じゃない事件……祖父母っ子で他界した両親と弟、そしてあの抉られたような傷。
これを見たら、全てが繋がるのか？

「……」

ウィンウィンという音をたてながらドライブ内でディスクは回転する。
それが止む頃にデウクトップには”リムーバルディスクが読み込まれました”という表示がされ。
コンピュータ画面でディスクアイコンをダブルクリックするとｚｉｐ形式で保存された二つのファイルが現れる。

『２００３年９月１３日』と『２００６年３月５日』

という二つのファイル名が表示された。

「事件は一つじゃない……？」

もしこの日付が連動していて、これが彼女の身に起った事件だとしたら――
これを開いたら彼女に俺はどんな事が出来るだろうか……俺には分からない。
分からないこそ知りたかった。最低がなんだ、もうとっくのとう

に俺は最低なことをやらかしてるじゃないか。
好きだから、俺は彼女に遠慮するのか？　好きだからこそ彼女に遠慮しない。
彼女が……マイは、何を抱えて、背負っているか。俺には全くわからないから。

言い訳で固める最低な俺だけど、マイを愛していることは揺るがない。

このまま別れるのはごめんだ。こんな終わり望んでなんていない。
またマイの隣に居れるように……俺は彼女を知る。

フォルダを解凍するとｐｄｆ方式で保存されたファイル。今度は迷いなくダブルクリックをした。

ここら一帯では地域新聞が配られる。それも週刊で、つくり大手新聞社に対抗していた。
それも影響して、藍浜では新聞部が乱立していたとも聞く。
大きくではないが見出しに載ったそんな記事の一つに、彼女の苗字を見つけた。

「ひき逃げ……！？」

書かれていたのはひき逃げ事件だった。四歳の長男が車に轢かれ、死亡した。

「……マイの弟はこんなに」

こんなにまで若く、幼い時に亡くなったのか。
七年前と考えるとおそらく八歳のマイにとっては半端じゃない―

―理不尽で不幸過ぎる事件だっただろう。

「？」

しかしここで疑問に思う。事件は二つあった。

縁起でもないが、この事件で亡くなったのはマイの弟一人。それではマイの両親はこの時健在だったとも考えられる。

それで彼女にとっての大きな事件。そのもう一つのこと――

「嫌な予感がする」

俺はとんでもないことを知ってしまうのかもしれない。

俺に受け止めきれるだろうか？　こんなに打たれ弱く、マイに離れられただけで不安に自己嫌悪に陥る俺が。

「でも、受け止めなければいけない」

いや、受け止めろ。

彼女の隣にあろうとするならば。

マイの彼氏にふさわしくなりたいならば。

「……開くぞ」

俺は先程と同じ要領でフォルダを開き、記事を見た――

「これは……！？」

絶句した。その事柄に。

『一家心中、娘は生存するも虐待の痕』

彼女が言ったように、軽いものではなかった。

俺はその記事のタイトルを見ただけで呆然とし、その記事の内容が頭に入って来るのには結構な時間を要した。

第１８６話　√１－９１　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

もっと伏線張るべきだったなあ

クソゲヱの１－４（序章）にユキのイメージイラストを載せてみた！　とりあえず、やり方は覚えてきたので随時追加予定ー

第１８６話　√１－９１　※独占禁止法は適応されませんでした。

ＨＲＳ√１－５

母こそやはりそのことを引きずりながらも「マイがいるのに、泣いてちゃだめね」となんとか立ち直って家事をし始めました。

一方の父は完全に心が折れたように無気力になり、会社も休みがち……母が父から聞いた愚痴曰くミスも増えたとのことでした。

それに痺れを切らした会社は、二年後父に退社通告をします。こちらから見れば非情にしか思えませんでしたが、会社としては使えない者を残してもしょうがないという判断なのでしょう。

そういて新しい会社こそ見つかり、職に就くことが出来ましたが――そこから父は変わって行きました。

慣れない仕事で、明らかに年下な先輩にコキ使われて――日に日にストレスは溜まり、物を壊すようになります。

まだティッシュ箱なら良かったのです、次第に鋭利な破片が床中に散らばっていて、良く切り傷も作りました。

物で補いきれないほどになった頃、三人で食べる夕食時にグチを零しながら、そこら辺にあるものを投げつけるようになりました。

今思えば幼すぎる、幼児まで逆行したかのように思える振舞いでした。そんな振舞いでも力は大の大人で男だけあって投げつけられる物の破片は四方八方に散らばり、それで擦り傷や切り傷を作ることは少なくありませんでした。

食卓では醤油瓶や皿、ガラス製のコップが飛びそれを避けた上で食後には様々な形状や材質の破片をほうきとちりとりで片付けている母が印象的でした。

そして怪我したところを消毒して絆創膏や包帯で巻いて手当を、自分も負った傷も顧みずにしてくれていました。

次第にエスカレートしていき、そのストレスの捌け口は次第に私たちへとなっていきます。

そしてある時。

ったくよう、お前はいーよな？　学校ってのは楽だろう？
俺の会社もそれほど気楽なら良かったんだだがねえ？　ああ？
ちっ、反応もしねえのか……あーつまんねぇな！

父はいつも以上に荒れていました。偉そうに説教する年下の先輩がひどく気に食わなかったらしく。酒を浴びるほど飲んでいました。私は余りの怖さに、父の言うように怒りも泣きも笑いもしません、ただただ黙っていました。

本当ならば、父のせいで日に日に増える絆創膏や包帯で小学校のクラスの人には馬鹿にされていました。気楽なんかじゃない、そう言ってやりたかったのです。

俺だってよ、入るのがはやけりゃお前なんかさ……腹たってきた。おい、マイ酒持ってこい。

それを聞き逃したのが発端でした。

無視かこのクソ娘が……そんな奴にはお仕置きだ。

「え」

思わずあげた声の直後には酒びんの割れる音。そして――

そんな悪い娘にはこうだっ。

父は割れたガラス片を手にとり、Ｔシャツ一枚の私の背中を一直

線に抉ったのです。

「いた、いやあああああああああああああ」

背中から走る激痛は凄まじいものでした。あまりの痛さに身をよじり、その度に傷は開いて行きます。

「マイッ！　マイ！　あなた、なんてことを」

るせえ、そんなこと知るか。

そう言って自分の部屋へと消えて行きました。
そんな父を見送ることなく母、必死で手当をし。

「藍浜町～です。娘が大量に出血して――」

即座に電話をしていました。どうやら救急車を呼んでくれていたようです。
そんな母の行動に安心したか、私は意識を失いました。

病院で目覚めると、背中にはやはり痛みと違和感がありました。

「よかった……マイが起きてくれて」

しばらく、数日間意識を失っていたそうです。
母の涙ぐむ顔を見て、父の非情さを心の奥底から確信しました。

あんな家に戻っても、父の暴力が始まるのだろう。
母と一緒にいつまでも病院に居れたら……そう思ってました。

家に帰っても父は変わりませんでした。
流石の今まで殆ど何も言わなかった母も私を傷つけたことには憤慨しましたが、父は聞く耳を持ちませんでした。
余計に娘の入院で母が家事に手を付けられず、それにストレスと怒りを溜めていました。
捌け口にされた私たちに積もり積もって行くストレスなどお構いなしに。

そして、全てが壊れる時が来ます。
いつもの物が飛んでくる夕食の中で、父は弟の仏壇の遺影を私たちに投げつけたのです
それを私、母は十分に捉えていました、遺影立てのガラスは砕け、床に散乱しました。

「　になんてことするのっ！」

今まで殆ど怒ることがなく、我慢し続けていた母が憤怒しました。

「こんな遺影なんかいくらでも作れんだろ！」

「こんな……ですって」

怒りのあまり母の手は小刻みに震えていました。

「今の行為がどれだけ　を侮辱したかわかっているの！」

「死人のことなんか知らねえよ！」

「なっ……」

積み重ね、そして彼の最後の言葉でもう意思は固めてあったのかもしれません。

「　をそんな扱いしないで」

私も反抗しました。

「おうおう、人気者だな　……調子のんじゃねえぞゴルァ！」

仏壇に供えてあった花の添えられた水入りの花瓶や、一緒に添えられていた弟がよく遊んでいたおもちゃ私たちに投げました。

花瓶は母の腹部に直撃し、幸いそれほど威力がありませんでしたが、花瓶の水は母の服を濡らしていました。

そして私の横には、投げつけられてきたおもちゃが壊れて横たわっていました。

「こっちは会社で面倒だってのによお、俺のことも考えろってもんだ」

本当に自分勝手な愚痴を呟きながら彼は自分の部屋に戻って行きました

「舞、大丈夫？」

「うん……お母さんこそ？」

「……大丈夫よ」

その母の顔は見えませんでした。その表情に怒りか悲しみが浮かんでいるのか、その時の私には想像できませんでした。
今分かるとしたら……それは怒りに燃える表情だったのだと思います。

「風呂に入ったら寝なさいね？」

「うん」

その肯定は嘘でした。風呂には入らず自分の部屋の物入れを探りました。
そして出てきたのは一本の小刀、その小刀を右手に持って私はある部屋に向いました。
その時の私は――

「殺してやる」

その一つの感情しか持ち合わせてはいませんでした。
散々傷つけた私ならいず知らず、母を傷け、あろうことか弟をひどく侮辱した。
それには怒りを通りこして殺意が芽生えていたのです。

私は少し震える手で、歩みを進めると何故か父の部屋の扉が半開きでした。
半開きの扉に近づき、恐る恐る扉を開くと――

「！？」

そこには母の姿、そして血だらけになって横たわる、変わり果てた父の姿がありました。

「……ごめんね、マイ。こんなところ見せて」

振り返る母には返り血が飛び、それでも母は最近では見せない笑顔という表情を形作ってしました。

「――――」

その時の私はどうだったでしょうか。

父は腹部を私の持つ同じ小刀で刺され、そこから部屋着に染み出る血、血、血。

今で流れでる鮮血は特別フローリングだった部屋に染みわたっていきます。

母の手には血のりで染まった小刀があり、着ていたエプロンには父の抵抗した痕か、掴もうとした血に塗られた痕が残っていました。

そんなおぞましい光景を見て、そんな猟奇的な場面に遭遇して。

「――はは」

私は笑っていました。

怒り憎しみ悲しみに殺意……全て吹き飛んで、喜び。

父がこの世を去った。その喜びは私を笑顔にしていました。

「ごめんなさいね、マイ。私はこの方に付き合うわ」

「？」

言っている意味がわかりませんでした。

「ごめんなさい、マイ。あなたの晴れ着は見れないわ」

「……？」

何を言っているのか、こうやって憎き父は死んだじゃないですか。

「私は、責任を取って彼の後を追うから――」

その次の瞬間、母は父を刺した小刀で自分の頸動脈を突き刺しました。

血が噴き出し、操り糸をなくした人形のように崩れて行く母。

「お母さん……お母さん？」

ほぼ即死だったのかもしれません。母の返り血を浴びて、私は――

「はは、ははははははははははははははは」

泣きながら笑いました。

この時に私は壊れてしまったのです。人が持つであろう常識を、感情を。

すべてすべて、この血から発せられる鉄の臭いが充満する父の部屋で。

失ってしまったのです、なにもかも。

第１８７話　√１－９２　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

色々すんませんー

第187話　√1－92　※独占禁止法は適応されませんでした。

『一家心中、娘は生存するも虐待の痕』

その見出しから内容を読み進めるに、あまりに酷い惨状が記されていた

通報したのは近所のおばさんで、着いた頃には血まみれの長女が一人立っていたという。

部屋には血が飛び散り、白い天井も茶色のフローリングも全て真っ赤に染め上げていた。

両親は既に息は無く、残されたのはたった一人の少女のみだった。

後日病院に搬送された少女には虐待の痕が見られ、背中に大きな傷を負っていた――

大体が書かれていたことだった。

「……なるほどな、あの傷はそう言う訳か」

虐待による大きな傷、それなのだろう。

『嫌われるのは私の方です！　私の、私のあんな傷……あっ』

彼女は俺に嫌われると言った、それもこの傷で。

「……はは」

それで嫌いになる？　……俺は外見で全てマイを選んだわけじゃない、彼女の内面含めて――全てに惚れたのだ。

最初は無闇に絡んで来る美少女なクラスメイト――でも一緒に過

ごす内に彼女の魅力に気付いた。
俺を純粋に想ってくれて、表現豊かな表情を見せてとにかく隣にいてくれる。
それが、俺の好きになった理由だった。それが傷があることで”好き”なことが帳消しになるか？

「なるもんか」

彼女にとっては体にとっても心にとっても大きな傷だ。
でも俺は、それを拒絶することなんてしない。そんな理由で関係が離れてしまうのが解せない。

「（この想いを伝えれば――）」

もしかしたら答えてくれるかもしれない。でも、傷つける結果となってしまったら？
本当に俺はそんなことで離れられてもいいマイにとっては軽い存在だったとしたら？
未だ踏ん切りがつかない。何も知らない彼女を突然知った、それも深く重く痛々しい過去を。

これは時間が解決することはない。ただその溝が深まり広がり、揚句には取り返しのつかないことになる。
だから、俺は行動を起こさないといけなかった。

「（明日……言ってみるか）」

もしかしたら、こんなことを勝手に知った俺に怒り。本当にこの関係が終わってしまうかもしれない。
それでも、俺は彼女が好きだから。だから、俺は――

1月18日

一日が終わる。

今日、マイに話すつもりだった。けれど、マイが今日登校することはなかった。

病欠という知らせが学校に来ていたようで――

「今日も休んだな、姫城さん……まあ、悪いがバイトだ。ホラ先に行くぞ」

「ああ」

彼女の家を知らない俺には成す術がない。

マイの登校する日を待つしかない。……でも、もしマイが今後登校することが無かったら？

最近は昔のようにネガティブな考えに浸るようになってしまった、それだけマイが俺の心の支えになっていたことを心から思い知る。

かつてのバイトまでの道はミニデートだった。隣を歩き、話し笑い――楽しかった。でも、今は隣には誰もいない。ひどくつまらない、退屈だ。

バイト終えて外に出る。

未だ盛況な商店街こそ明るいものの、外は既に真っ暗だった。

「……さむ」

時折吹き抜ける風がなんとも冷たい。

「……帰るかな」

さっさと帰ってしまったユイを追うことは諦め、ゆっくりと歩みを進める。そんな時だった。

「……？」

俺を凝視する老婆が右斜め前にはいた。老婆と言いうのは失礼か……少し老いたご婦人がそこにはいた。

見つめるのは俺の顔、目を細めて訝しげに俺を凝視してきている――

「ええと――」

切り出そうとしたその時に。

「つかぬ事をお聞きしますが」

その声は想像以上に若々しい女性のものだった。

「えと、はい？」

「下之ユウジ様でしょうか？」

「え」

「……人違いでしたか？」

「い、いえ！」

「良かったです、ユウジ様で合っていましたか」

しかしこの人に見覚えも、聞き覚えもなかった。だから失礼承知で問いかける。

「……ええと、以前お会いしたことが有りましたっけ？」

「いいえ、おそらくないでしょう……あ、紹介が遅れてすみません」

「私、佐藤ハナ……姫城舞の祖母でございます」

「……え？」

第188話　√1－93　※独占禁止法は適応されませんでした。

「マイ……マイさんのおばあさん？」

「はい、母方の祖母でございます」

「……」

おもわぬ人物に会ってしまった。

会誌に書かれていた家族構成の祖母ではないだろうか、マイと苗字が違う事からおそらくは母方で合っているのだろう。

「なんでまた俺を？」

「ええ、孫娘に何度か写真を見せてもらいまして」

……マジで？　俺撮られてた上に、その写真を見せられてたの？

「そう、なんですか」

マイが俺の事を家族に話してくれていたことを嬉しいと思う反面、現状を思い出して虚しくなった。

「……今はお暇でしょうか？」

一応急ぎの用事のないし……後々姉貴には説明しとけばいいか。

「え……ああ、はい」

「足腰が良くないもので……喫茶店にお連れしてもよろしいでしょうか？」

「いいですよ」

それ以前に買い物袋を提げている、老婦人に立ち話は辛そうだった。

都合良く目の前にあった喫茶店へと入り、二人席に向き合って座る。

「ふう、我儘を聞いて頂いてありがとうございます」

「いえ、そんな」

「少し聞きたいことと……ちょっとしたお願いが出来れば」

「お願い……ですか？　それは俺に出来ることなのですか？」

「その前に失礼なことをお聞きします……孫娘のマイとは、あなたはどのようなご関係で」

「え」

真面目な表情を形作った貴女から聞かれ、言葉に詰まる。俺は本当の事を言っていいのだろうか？

彼女の気持ちが分からない以上断言は出来ないけども――言うべきだろう。

「俺とマイさんは付き合っています」

「……」

少しの沈黙の後、老けていても愛想のよい笑顔が佐藤さんに戻り。

「そうですか、孫娘がお世話になっています。」

「いえ……」

「そして、ありがとうございます」

「いや！　俺は、お礼を言われるようなことなんて――」

「してくれたのですよ、あなたは……ユウジ様は――」

そうして話してくれる。彼女のことを、彼女のちょっとした日常を。

「あの子は私たちが預かり始めてもずっと憂げでした。手伝ってと言えばなんでも手伝ってくれ、色々と老いた私たちを気遣ってくれる。良い子で関心する反面、一抹の不安を感じていました。それは”笑わない”ことです。どんなことが有っても、マイの笑顔を見ることは預かり始めてから一度も有りませんでした。まだ小さい頃には笑顔の似合う、本当に可愛らしい娘だったのです……少し茶目っ気も有りました。今のマイが悪いとは言いません。でも何も話そうとせずに、それでいて私たちを気遣ってくれる。……そんなマイに不安を――いえ、本音を申せば、甘えてほしかったのかもしれません」

「そんなマイの表情が変わったのがほぼ1年前です。何気ない食卓

の中で、今までで初めて話題をマイから切り出したのでした。そして今まで見せたことのない表情を、ある名前の男性をあげるごとに形作ってくれました。そして、数度話してくれた彼の名前は――下之ユウジ様、だったのです」

「！」

「そしてここ1年……いえ、この数カ月は特に変わりました。あれは娘の孫が亡くなるまでの活発で笑顔をよくみせるマイが戻って来たようでした。だから私はあなたに本当に感謝しているのです」

ですから、と一息を置いて。

「マイに笑顔を取り戻してくれて、ありがとう」

心の奥底からのお礼だった。それに思わず泣きそうになる。俺がどれだけ彼女に想われていたか……痛い程知った。

「そんなマイも最近はあの頃に戻ったかのように憂げで……」

「っ！」

心当たりのあることしかなかった。あの時あの瞬間に、大きな溝が、彼女を憂げにさせる要因が出来てしまった。俺の行動が悪かった為に」

「それで、お願いなのですが」

「それは……本当に俺に出来ることですか？」

俺に出来ることなんてたかが知れている、そもそもないのかもしれない。
最低なことをやらかし、拒絶された俺になんて――

「少なくとも私たちではどうしようもありませんでした。だからお願いしたいのです。初対面の老婆にこんなことを言われても承諾出来るはずなんて有りません、それでも私は――」

「……」

「どうか、マイに笑顔を戻してやってくれませんか？　私たちが出来なかった事を、あなたにお願いしたいのです」

切なる願いだった。自分には出来ない悔しさを噛みしめながら、殆ど見ず知らずの男に頼む。今日会って話したばかりの、ただの高校生に。
それでもマイのことを考えて、俺に頼んだ。……これに答えないで、俺はどうするのだろうか。例え無理だとしても、永遠に嫌われることがあっても。
話す前から諦めるなんて、もっと最低で卑怯なことを俺はするのだろうか？　……今度ばかりはしない、だから俺は。

「分かりました……いえ、こちらからこそっ！」

「え」

「マイさんの笑顔をみたいのは俺も一緒です。俺にどこまで出来るかは分かりませんが」

笑顔が見たかった。あのデートまでの満開の笑みを、もう一度。

「ほ、本当ですか！　なにとぞ、お願いします……」

「それで、早速なんですが……案内していただけないでしょうか？　マイさんのお宅を」

俺はもう決断していた。迷わない、立ち止まらない。

「！　急かしたようなら申し訳ありません、でもそんな急に」

「佐藤さんがよろしければ、俺はすぐにでも」

一秒でも早く、彼女の元へ。

「……こちらからこそ宜しくお願いできますか？」

「ありがとうございます」

俺は佐藤さんに連れられ、マイの家へと向かう。

そこで俺は改めて伝えるつもりだ。彼女が好きであることと、俺はマイと共に歩きたいと。

例え大きな傷を背負っていても、別けられるなら俺も共に背負うと。

だからここに俺は誓う。俺はマイの全てを受け止める。

第１８９話　√１－９４　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

個人的には盛り上がっているつもり。

第189話　√1－94　※独占禁止法は適応されませんでした。

「なんで、おばあちゃん！」

それほどの怒鳴り声を上げるマイを初めて知った。離れてからは俺の知らないマイを知ってばかりだ。

訪れたマイの家――佐藤さんの家にはマイが居た。

崩れた部屋着で目を真っ赤に腫らしながら……目元に残る雫、マイは泣いていた。

佐藤さんが帰り、俺を連れていることを知らずに玄関に出たマイは驚愕していた。

なんで、ここに？　なんでおばあちゃんと？　なんで、なんで――俯きながら小さく呟いていた。

「マイ、私はあなたを想って――」

それがマイの逆鱗に触れる。

「望んでない、望んでない！　私は、そんなこと――」

ここまで喋りのくずれたマイも初めてだった。

気持ちをここまで真っすぐにぶつけられている佐藤さんは内心少し羨ましかった。

しかし、そんな佐藤さんにマイは応えない。そして思わず名前を零してしまう――

「マイ……」

「っ！」

もしかしたら今まで俺がいないように振舞っていたのかもしれない。
だから俺をまた見た時には、かつての口調へと戻り。

「ごめんなさいっ」

「マイっ！　何処行くの！」

マイはまた俺を横を走り去る。何度目か分からない拒絶に今にも心は折れそうだった。
でも、俺は。

「マイっ、マイィィィィィィィィィ！」

力の限り。声の限り。近所迷惑なんていず知らず。全力で走るマイを追いかけて行く。

なんでこんなことになったんだろう、と改めて思う。
俺がいけなかった。俺に全て非が有った。でも、それでも……

「こんな別れは――」

無理だ。こんな最後は悲しすぎる、切なすぎる。それに俺は伝えなければならないことがある。
俺が拒絶されていても、それでも声を大にして一つだけ伝えたいことがあるんだ。

「俺は……俺はっ」

マイが好きだ、と。
届かなくてもいい、その言葉で終わってもいい……でも、言わないと気が済まないから。
俺は駆けて、駆け抜いて。彼女の元へとスニーカーで地面を蹴飛ばしながら走って行く――

HRS√1－6

散々笑い泣いた私は、無感情になった。私に残されたのは何もなかった。
弟は私よりも若く死に。あれだけ憎んでいた父は母を道連れにして死んでいった。正確には違う、母が道連れにしたのです。
分かっていても私はそうは思わない。責任を感じて、これから手を汚したまま生きて行くのが辛いものだと悟ったから。
だから、父だけ死ねばいいのに。母自身も自殺したのだと思う。
でも出来れば考えてほしかった。私がいることを。私を残して皆が消えてしまったら、私はどうすればいいのか。
いっそ、私も死ねれば良かったのに。そう考えていた――
母を憎むことは出来ないけども、最後の最後に見捨てられ私にとっての”裏切り行為”は私を大きく傷つけられた。

その後は本当に親切な母方の祖父母にひきとられた。本当に親切で、逆に困って仕舞うほどだった。
私を強く想ってくれていた。ただの孫娘と祖父母の関係なのに、直接な繋がりはないはずなのに。

だけど祖父母はこう言った「私の娘が残してくれた最後の孫でもあるの……それに、マイ自身がとっても大切なんだよ」

その愛を感じなかったかと言えば嘘になる。でも信じることは出来ない――

もしかしたら、父はないにしろ母と同じ”裏切り”をするかもしれない。そう思ってしまうと心を開くことは出来ませんでした。

中学生になっても人を信じることは出来ませんでした。

クラスメイトとは友人関係を築くことは出来ず、いつも一人ぼっちでした。

それでも私は寂しくなかった。そもそも寂しいという感情をあの時に失くしていたから何の問題もありません。

それから二年は時が過ぎて行く。消化試合のように、機械的に過ごす日々。

死んでもいいけれど、死ぬ理由もなかった。それに祖父母のことも心の片隅にはあったのです。

……少なくともあれほどに親切にしてくれる祖父母に迷惑はかけたくない、と。

変わったのは三年の初めでした。

いつも通り、何も感じない日々を過ごしていた。そんな時に一人の男子生徒とすれ違ったのです。

「……」

その男子生徒はひどく沈んでいた。まるで、私を鏡でみたかのように暗く憂げで絶望に満ちていました。

だたの同類としかその時は考えず、記憶の海に流れ去って行くかに思えました。

翌日また男子生徒とすれ違った、しかし様子が違いました。
今度は話相手が居て、延々と聞かされることにたまに相槌を打つ程度です。
それも彼が変わっていっているように思えました。

そのまた翌日にすれ違えば今度は自分から話題を切り出していました。
大きな進歩だった。かつての同類だと思った彼は数日で様変わりしているのです。

「（どうしてそこまで、変われるのだろう）」

その男子生徒が気になり始めていました。

更にそのまた翌日。
すれ違うことはありませんでしたが、こっそりと休み時間風景を覗く。
そこには普通に笑いあいながら話す男子生徒が居て、もう同類とは呼べないまでの変わり様でした。

「（！）」

さらにもう一人やってきた。茶色い短髪の変な眼鏡を掛けた女子が話す二人に話しかけていました。

口車にのるよう――いえ、ごく自然にその女子は会話の輪へと入って行き、会話は弾んでいます。

「（どうして……どうして）」

疑問でした、なぜ人が集まるのか。かつての同類になんでここまで人が集まって来るのか。

その後にも、女子が輪に入り。若干噛み合っていない場面こそあれど会話は弾んでいました。

その時私は「羨ましい」そう思うのと同時に「あの男性生徒は私と何が違ったのだろう」と思うようになりました。

その頃から、男子生徒を付けるようになり――そして名前を知りました。

「ユウジー、はやく見せてくれよー」

「いや、まてって……このキャラメルパッケージが――」

……ユウジ。

ユウジ。ユウジユウジユウジユウジ。

ユウジユウジユウジユウジユウジユウジユウジユウジユウジユウジユウジ。

「……ユウジ」

名前を覚えてからは、彼を目で追うようになりました。

もしかしたらその頃にはもう私は好きになっていたのかもしれません。

それは羨望か憧れか……分かりはしませんでしたが、気になって

行くのです。

そして想うのです。あのように人を寄せ付けるような人に。

私は愛して貰えるのではないか、想ってくれるのではないか。

決して”裏切らない”のではないか。

そうして私は深みに嵌っていきますが、結局中学時代には会話を交わすことは一度もありませんでした。

それでも私は変わろうと思いました、私をいつか愛してくれるように……手入れしていない髪を整え前髪を切り――

印象が変わる頃……三年も終盤に差し掛かった頃には、色々な男子生徒が集まってきましたが。

どれもこれも私の容姿だけで、いつかきっと”裏切り”をするであろうと考え、告白も断り続けました。

私はもう心に決めていたのです。

ユウジ様という方に愛してもらいたい、だから私からまずは愛そうと。

そして、高校になってから念願の同じクラスメイトになって。

最初の遭遇はあの時……ユウジ様が私のペンケースを落としたあの時です。

それから、私の世界はまた動き出したと言えるのかもしれません。

第１９０話　√１－９５　※独占禁止法は適応されませんでした。

ＨＲＳ√１－７

私はその時に、ユウジ様を愛しようと思っていました。
クラスが一緒になれて、それで四六時中ユウジ様を見ることが出来て。
でも、私は知ってしまった。ユウジ様は既に誰かのモノになっているのだろう、と。

私から見て、ユウジ様と……そしてお相手の篠文由紀さんはお似合いでした。
”幼馴染”という時間のハンデは、ユウジ様にとっては初見同然の私にはハードルが高かったのです。
そして思ってしまった。あまりにも身勝手で、あまりにも独占欲にまみれたことを。
このままでは今まで愛すと決めたユウジ様が取られてしまう――”裏切られて”しまう。
怖かった。これでは本格的に、接点が無くなってしまう……また私は狂い始めていました。
ユウジ様のことだけで頭がいっぱいで、どうしたら私が愛せるように、取られないように出来るか――

そうだ、この手に奪ってしまえばいい。
誰も奪いとれないような、唯一の方法。
ユウジ様を殺せば、ユウジ様の最後の記憶には少なくとも私がいる。

そして時の止まったユウジ様を永遠に愛し続ければいい。

そしてあの場所へ――あの暗く、一階から物置へと続く少し下った階段で。

「あ、そういえば。　ユウジ様を呼び出した理由があるんです』
「……なんでしょうか」
「その理由はですね……あなたを殺すためです」

小刀を隠し持ち、ユウジ様を眠らせて連れてきて、そうユウジ様に告白しました。
その時のユウジ様の驚きようには……少しばかりキュンときました。

「な、なんでこんなことするんだよ!?　俺が何かしたのかっ！」

ユウジ様が私に直接何かしたわけではありません。でも……ユウジ様は私を困らせ惑わせていたのですよ?

「あなたは罪作りな人ですね」
「え」
「私をこんなに虜にしてしまうなんて」

気になり始めた一年前からずっとあなたを目で追いかけてました。
顔を合わせることも、言葉も交わすことも無かったけれど……私はあなたの虜になっていたのです。

「ええと、言いそびれていました。　ユウジ様私こと、姫城舞はあなたのことが好きです」

さりげない告白。それでも私はそれに意味を感じていませんでした。

きっと断られるから。何も知らない女子生徒に話しかけられ、拉致され、告白されても承諾することなんてないでしょうから。

「えっ……でもなんで、虜されたのが俺を殺すに理由に繋がるんだっ」

「それは簡単なことです。私はあなたに一目惚れして胸が切なくて切り裂かれるほどの苦しさを経験しました。すぐにあなたの傍に行きたい、と思っていた矢先……ユウジ様の彼女かと思われるものが現れたのです」

一目ぼれは今思えば違うのかもしれませんし、やっぱり合っているのかもしれません。

この時私は愛そうとしただけ……結局”好き”という気持ちが明確にあったかは分かりませんでした。

嘘をついてでも、偽りに塗れていても、ユウジ様を今繋ぎとめられる言葉はそれぐらいだったのです。

「それは……誰？」

「……しらばっくれても無駄です、篠文由紀さんのことですよ」

「いや、まて俺は付き合っていない」

「嘘です、私はあなたをずっと見ていました。そうですね、表現するとしたら、熱い視線で舐めまわすように』

高校に入ってからは特に熱い視線を浴びせていたかもしれません。

「そして今日の美術の授業帰りには……お互い抱きしめ合って……ッ！」

「いや誤解なんだよ、あれはユキが階段で躓いて――」

「ゆ、ユキ！？　……うふふふ、あなたと篠文さんは名前で呼ぶ仲なのですね。篠文さんもあなたを呼び捨てで呼んでいましたし……」

羨ましい、なんそこまで親密なのですか……幼馴染とはそこまで行けるのですか、そう妬ましざるを得ませんでした。

「でもそれがなんで俺を殺す理由になるんだよ！」

「なります。本当なら篠文さんを闇討ちすればよいのですが」

「でもユウジ様はとても魅力的です。　きっとまたあなたの虜にされる者が現れると私は思うのです」

「……」

「なら虜にさせないように、私のものにしてしまえばいいと私は考えました。　殺して愛しいユウジ様の生首だけを持って、私は生きて行くのです。　決して邪魔されることのない、永遠の二人の時間が続くのです」

「俺は、そんな事の為に死にたくはないな」

「そうですか……なら方法を変えましょう」

それなら……分かりました。

「私が自殺しますから、私の生首を持ってユウジ様と共に生きさせてください」

「だから、なんで結局どちらかの生首しか残らないんだよ！」

私に正直ユウジ様以外に未練はありません。祖父や祖母には悪いですが……私は愛の為なら死ねます。

だから、私が死んだあと。ユウジ様が私を愛してくれさえすれば――私はいいのです。

「それがいいですね、そうすれば私の生首を気味悪がって他の女は寄り付かないでしょうし。それを構わない、という方がいたら呪い殺します。では、ちゃんと事後処理を……」

「……まてよ」

「なんですか？　ユウジ様が死を選ぶのですか？」

「……」

そしてユウジ様はそう言ったのです。

「お前に、本当に死ぬ覚悟があるのか？」

「……ありますよ。好きな人が、他人に取られる痛みに比べれば、死ぬ痛みなんてマシなんです」

そんな事を言い切った手前、ユウジ様の次の言葉は想像出来ない事でした。

「ありがとう」

「え」

私は、あまりの予想外さに驚きました。

「な、何故お礼を言われたのですか！？」

「気にしないでくれ」

「気にしますっ！」

その時私は平静を保てていませんでした、あまりに不明瞭なその点に思わず身を乗り出すほどでした。

「……多少悔みたいことも、ありますが、私はここで死のうと思い

ます」
「今のお礼の理由を教えようと思ったのに、もう死ぬのか」
「え？」
その言葉を聞いて私は首からナイフを数センチ離しました。
「死ぬんだったら、別にいいか」
「よくないですっ！　教えてください！」
それは小さな未練でした。私に向けてのお礼の理由……それが気になってしまいました。
「馬鹿じゃねーの？」
「！」
そんなことを言われた私はナイフを構えたまま呆気にとられていました。なんで、今その言葉？
「え、えと、ユウジ様から言われるのはよいのですが……それは一体どのような意味で？」
「姫城さんが俺のことを好きだと仮定して」
「確定してもらって結構です、っていうかしてください。お願いします」
それだけは譲れません……いや好きかは分かりません、でも愛したかったのです。
「え　ああ、うん」
「あっ、ありがとうございます」

「他人にとられる痛みに比べれば、死ぬ痛みなんてマシなんです…って言ったよな」
「はい、すごいですね！　一語一句合ってます！　流石ですユウジ様」
感激ですよ、そんなことまで覚えていてくれるだなんて……嬉しいです。
「それは、ただ痛みから逃げてるだけだ」
「！　いいえっ！　私は、そうして死の痛みを選んで」
「言い訳だな。死ぬ選択なら、その痛みは一瞬だ。自分の妄想した、思い通りの記憶と共に散れるのかもしれない。でもな――」
「自分の妄想だけで、生きて、死んでいくのは本当に本望か？」
「っ！」
「思い出がなくていいのかよ！　それは、余りに悲しいんじゃないか！？」
「……今の私を全否定するんですか」
全否定でした。今までの追いかけ、想い続けた私を全て否定されてしまったのです。
「ああ、否定してやるねっ！　死んで一人楽になろうなんて考えてるお前みたいな大馬鹿者なんて全否定だよ！」
「！！」
「チャンスを探そうともせず、あーだからこーだからと勝手に理由付けして、諦めて死のうとしてる奴なんてただの負け組だ、今のお前はそうなんだよ！」
「！！　そ、そこまで言うなんて……酷いです」

それは余りに酷でした。今までの生き甲斐を、そして死ぬ理由も――全て全て否定されていく。あまりにショックでした。

でも、その後の言葉に――

「だから、生きてみろよ」

「えっ」

唖然とぽかんとしてしまいました。

「自分を否定されて、大馬鹿者とか負け組とか罵られて悔しかったら生きてみろよ」

「……」

「俺はお前を知らない。多分お前も俺を知らない」

「し、知ってます！　私は、この学校に来たあの日から――」

実際は一年前のある時から。ずっと、私は。

「それは俺のほんの一部だ。本来の俺は別人かもしれないぞ」

「！？」

「今の俺、お前を罵っている俺を想像出来たか？」

「い、いえ……」

「だからだよ。お前は俺を知らない。殆ど全くな」

思わず、自分の望むことを。興味を好奇心を……口に出しました。

「……し、知りたいです」

「ん？」

「……知りたいですっ！　ユウジ様のことを！　教えてください！

ユウジ様のことをっ！」

心の奥底から、ユウジ様を知りたいと思った。

ほかにどんな表情のユウジ様がいるのだろう、どんなことを言うユウジ様がいるのだろう――気になって、気になって。

「それなら、同じ道を歩いて貰わないとな。一緒に話したり、飯したり、帰ったり。関係を持てば別のこともっと」

「！！　別のこと……？」

「それが知りたいならさ……生きていくしかないよな？」

生きる。今まで意味が無いことだと思いました。全てを失くした私は生きている意味を見いだせない。

でも、私はこの時に……生きる意味を見つけたのです。それは、ユウジ様をもっと知りたいということ。

そしてユウジ様の近くで……欲を言えば隣で。感じていたい、話していたい――

「はい……覚悟しました。これから生きていく覚悟をしました！」

「ああ、それはよかった」

「……わかりました。ユウジ様の言う通りかもしれません。いえ、そうです。私にも傍にいたいという気持ちがありながら、奪われないために……独占欲が強すぎました、でも」

独占したとしても見られるのは僅かな表情だけ、生活の中で生きるなかでならば色々な表情を見られるはずです。

「――怖かったんです。一度手にしたものが、欲しかったものが、他の人に取られることが。他人の手に渡ったらもう二度と返ってこない気がして……でも、私はやっと、遅過ぎるぐらいに解りました」

「ごめんなさい――」

顔を下げて涙声でしっかりと謝る。気付けば本当に涙が出て……両親の居なくなったあの日から、初めて涙を零していました。

「それと……ですね」

「ん？」

「ごめんなさい」

「？」

「私の告白は撤回します」

「え？」

撤回です。あんな適当過ぎる告白なんてノーカウントです。もっと時間をかけて、想いをこめて。

だって生きれば、まだ時間はたくさんあるのですから。

「まだ、私にはユウジ様を独占する権利はありませんでした……だから告白は撤回します」

「……まぁ姫城が、そう言うなら構わないぞ」

そうして私はユウジ様を背中に階段を上って、半分ほどで立ち止まって言いました。

「でも、私はまだ諦めません。いつかユウジ様が私に惹かれる日を待ち、いいえ……私が好きにさせてみせますから。　私が魅力的な

女性になった時は、覚悟しておいてください」

その時の私は笑顔だったのかもしれません。この場所でこの時から……私はようやく感情を取り戻し始めたかのかもしれません。

その後も怒りそうになったり、かつての独占欲丸出しになったりしましたが、なんとか自制してきたつもりです。

そして楽しい時が過ぎ、幸せな日常が流れ、私の感情もかつてのものを取り戻して行きました――そして文化祭の準備前日。私は――

「え、えと……姫城？」

「は、はぁいっ！」

不安に満ちる私、それでもユウジ様の真剣な面に茹であがっていました。

「姫城に話があるんだ」

「は、はい！　なんでしょう！」

背筋ピーン、緊張ガチガチ。なんとも私はユウジ様と同じほどに固まっていました。

一体私は何を話されるのだろう……なんなのだろう、分かりません。

それでもユウジ様から染み出る真剣さに思わず体を硬直させていました。

「突然で悪いな……それにこんな場所で」

「……っ」

「俺は……俺は」

ユウジ様に見つめられる。……ハズカシイです！　見ないでください……いや見て下さい！

そんな、自分の中の〝恥すかしい〟私と〝嬉しい〟私が戦っていた時でした。

「俺は、姫城マイが好きだ」

しっかりと聞きとった。その後は時が止まったかのような感覚を覚える。

目の前の私は完全に固まっていました。おそらくこの世のものとも思えないようなものを目撃した表情を浮かべているのかもしれません。

「う、うう……」

「！？」

私は泣いていました。もう嬉しくて嬉しくて。まさかそんな言葉を告白を、ユウジ様から頂けるなんて――

ようやく私は、ユウジ様に認められた。似合うかどうかも魅力的かもわからないけれど。

「あ、あの姫城……？」

「ううぅ……」

「よ、よかったぁ」

「え」

「ユウジ様から言って頂いて……本当に、本当にうれしいです」

嬉しさのあまり泣いていましたが、おそらく泣き笑っているのでしょう。

あの時とは違う”壊れた私”でなく”幸せな私”が感情を露わにしていました。

そして、私はしっかりと。ユウジ様の勇気に気持ちに応えるように――

「私はユウジ様が好きです。私からこそ、宜しくお願いしますっ」

そして私たちは、付き合い始めました。

幸せは長く長く……いつまでも続いて欲しいと願っていました。

でも、それもあの時まで。あの冬の日の、ユウジ様を訪ねたあの日に。

おそらく全ては終わってしまうのです。

第１９１話　√１－９６　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

怒涛の更新ですよ！　今月の更新数「８」とか言ってたのを打ち負かすほどの連続更新！　おれは諦めないぞ、今年中に終わらせることを！　……その代り文章はアレかもしれんね

第１９１話　√１－９６　※独占禁止法は適応されませんでした。

ＨＲＳ√１－８

初めてユウジ様にお呼ばれした日。
ユウジ様の家を訪ねようと外を見ると、雨風が吹き荒れていました。
でも、せっかくのユウジ様からお誘い。無下には出来ませんし、したくありません。
服を選んでいる内に時間は過ぎ、時間はギリギリになってしまいました。

「ああ、もうこんな時間」

雨ですが走ります。雨が降ろうと風が吹こうと――私は地面の水を弾きながら走って行きます。

「あっ」

瞬間的な強さの風が吹き、見事にびしょ濡れに。

「（濡れてしまいました……でも）」

はやくユウジ様のお宅へ！
首にユウジ様から頂いたネックレスを下げて、私はやはり走って行きました。

「あ、お客さんだね？」

向かえるのは可愛らしい女の子……と言っても中学生ほどの方が出迎えてくれました。

「ああ、ユウジさんなら、買い物に出かけてる……遅いなあ――ってびしょ濡れだよ！？」

「ええと、はい。ちょっと雨に」

「それはいけないよ、我は丁度お風呂から出たところで暖かいから入って体を温めて！　体冷やしちゃだめ」

「え、でも、ユウジ様に――」

「いいのっ、とにかく入って入って」

おそらくあの肝試しでユウジ様が引き取ったホニさんがそう言ってくれた。

私は少し冷える体を見て――

「（こんな体で会うのは失礼かもしれないですね）」

甘えて風呂を頂くことにしました。

そしてシャワーを使っている時に背中をさすりました。

「（……まだ、これほどに）」

深い傷。何十針も縫うほどに深く抉られた背中は、未だ完治していませんでした。

後ろ鏡で見るに、赤黒く……やはり醜い傷を晒していました。

「（誰にも見せられない……ですよね）」

こんあ醜く汚い傷。絶対に誰にも見せられません。

だから私は背中が見えてしまう水着の学校指定水着を嫌い、体育の中の水泳授業が全て欠席していました。

海に行ってもパラソルの中……こんな傷さえなかったら、ユウジ様とじゃれ合いたかったものです。

「（いつか話せる……時かあ）」

来るのでしょうか。ユウジ様にはあの海で水着で来ずに着た私に、デートでは疑問に思っていたようですし。

「（でも、ユウジ様だけには）」

見られたくない。もし他の人でうしろ指指されるだかならいい、でもユウジ様は――

「嫌われたく……ないから」

この関係を保つ為に、これは私にとってのタブーなのです。

そう考えた矢先に――

「！？」

よりによって、体を拭いている途中に背を向けた脱衣所の扉が開かれ。

そのユウジ様に見られてしまったのです。

マイは商店街を駆け抜けて行く。
彼女の運動神経を侮っているわけではないが、サンダルで走っているのに異様に速い。
追いつき始めるのは商店街を抜ける頃で、そうして彼女は更に走り――

「……学校？」

黒い闇が蝕む冬の夜。走ったのは通学路で、先は藍浜高校。その校門へと吸い込まれていくマイ。

「マイ待ってくれっ」

昇降口へと続く木々の間の開けた道で、逃げゆく彼女の腕を放さないようにしっかりと掴んだ。

「……離してください」

涙声で拒絶しながら彼女は俺の手を腕から振りほどこうとした。
けれど、俺は離そうとは思わない。
彼女が俺を拒絶するとしても、最後だから。……これが彼女にする最後の強行だ。

「離さないっ」

「ダメです……ダメなんです！」

明確で大きな拒絶の言葉。今度こそ俺は嫌われ、憎まれ、卑しまれ……もう話しかけることも許されないかもしれない。

でも今離してしまったらマイは本当に遠くへ行ってしまう気がする。だから俺は力を弱めることが出来なかった。

「……私はユウジ様に合わせる顔なんてありませんから」

「なんでそんなこと言うんだよ！」

「……私の、私の傷を――」

傷。それは、あの脱衣所で俺が見てしまった深く抉られた背中の傷だろう。

嘘をついても仕方ない、だから俺は正直に。

「見たさ――本当に悪かった。いや……覗いてしまってごめんなさい」

頭を下げる。俺がしてしまった愚行を。

「……」

するとマイは黙りこんでしまう。でも、彼女は腕を振りほどくのを止め、逃げることはしなかった。

少しだとしても話を聞いてくれる。そう俺は感じ取り、まだ話を続ける――

「マイが俺を避けるのは……平然と覗いた俺に失望して顔もみたくない。そうなら、もうマイを追うことは止めるから――」

それならもう俺は止める。そして煮るなり焼くなり好きにしていい、それだけのことを俺はしてしまったのだから。

しかしそれを聞いた途端、一気にマイの口から感情が流れ出す。

「そんなことは絶対有り得ません！　私もユウジ様がお隣に居てほしいんです！」

俺の隣。彼女は未だ俺を望んでいてくれていた。隣に居ることを許してくれていた。

それを聞いた途端に嬉しい反面、情けなくも思う。彼女の気持ちの強さを侮っていたことを改めて知る。

「！　そうか……良かった。じゃあ――」

言ってもいいだろうか。俺の気持ちを、マイへの気持ちを。

「どうして――」

言いかけたマイを制止して俺は言い放った。

「姫城マイさん、好きです」

第１９２話　√１－９７　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

一応締められていればいいのですが……文章の酷さはもう、ごめんなさい。

第１９２話　√１－９７　※独占禁止法は適応されませんでした。

ＨＲＳ√１－９

私は服を着ると途端に逃げ出しました。下着もちゃんと付けられていなければ着ている服はヨレヨレでした。

とりあえずあの場から、ユウジ様に見られてしまったという事実から逃げたしたかったのです。

ユウジ様の表情に確かに存在した驚きという感情を読み取れてしまった。それも私が背を向けていた際に見えたであろう深く醜い傷を見て。

「マイはそんな傷があるんだな……幻滅した」

ユウジ様はそんなこと言いません――そう断言出来る自信に満ち溢れた私。ユウジ様でもこれは受け入れてくれない、という不安な私。

そのときどちらが勝っかと言えば――

私は逃げ出しました、ユウジ様の家から出来るだけ遠ざかるように。しかし雨の中、容赦なく雨具を持ち合わせていない私を襲います。

着てきたコートも忘れて……ユウジ様には迷惑しかかけていません。分かっていましたが足は止まりませんでした。

雨空の肌凍る下を肌着一枚と長めのスカートで走ります。髪こそ水気が残らない程度まで拭けましたがろくに拭けていませんでした。そこに雨、雨、雨。

湯冷め以上に雨で風邪を引きそうで、風呂上がりが更に私の体温

を下げています。
どこに向かう？
家まで走ろうか、でも流石に息が切れて――ユウジ様もきっと追ってこない。そう思って公園のベンチに座っていました。
けれどユウジ様は来てしまった、追いかけてきてしまった。
ああ、これで嫌われ、関係が終わってしまう――そして今別れを切り出される。そう思いこみ、私は言ってしまうのです。
「なんで、追いかけてきたんですか」
驚くユウジ様のお顔を見ることは叶わず、ずっと私は俯いていました。
本当に追いかけてくれたのに……なんてことを言ったのだと、改めて思います。
「ごめんなさい、ユウジ様。もう私はユウジ様に会わせる顔がございません」
あんな傷をみせて、それを黙って騙して……会わせる顔なんてどこにも有りません。
「嫌われるのは私の方です！　私の、私のあんな傷……あっ」
言いかけて私は口を手で押さえ――
「……ごめんなさい」
そうしてまた私は逃げ出す。
ずぶ濡れで家に帰り体中探りますが――

「……ない」

どこにもネックレスが有りませんでした。

初めて……ユウジ様が私に下さったプレゼント――それだけに、失意の海へと落ちて行きました。

いつまでも、関係が壊れないように。それでも彼に拒絶にされないように……今までとは離れた関係を保つことにしました。

それが解決策ではなく、いつかは崩壊してしまうのも目に見えていましたが――混乱していた私には、考える余裕などなかったのです。

しかしユウジ様は逆に積極的に私に近づいてきました。

それほどに忌々しく、失望してとっとと早く別れたい――かつてのネガティブな私に逆戻りし、ユウジ様を避けて行きます。

会話に入ろうとはせず、話しかけられても無視をして、今までデートだった下校は逃げ帰るように一人。

とても辛く寂しいもので……ユウジ様にどれだけ支えられていたかを思い知りました。

それでも、終わりを遠ざけたかった。いつか来るであろう終わりが遠くなるように――

少し前まではおばあちゃんやおじいちゃんに……ユウジ様のことを少し話していたりもしましたが。

今では何も話すことは出来ず……たった数日。ユウジ様を避けるだけで私の心は折れてしまいました。

ユウジ様と話すこと会うことを禁じた数日後、私は学校を休み……部屋で泣き続けました。

離れたくないのに……離れるしかない。好きなのに……避けるし

かない。
自分に失望し、部屋にこもって泣き続けていました。
そんな時に、おばあちゃんはユウジ様を連れて……帰って来たのです。

「姫城マイさん、好きです」

「!?」

……その反応で合ってるよなあ。でも俺は伝えたかった。
彼女が嫌われてしまう要因だという傷のことを知っても、俺はマイが好きだと。

「あんなことをしてしまった手前、言うのも止めるべきだろう。でも、今の俺の気持ちは――」

「待ってください！　どうしてですか！　どうしてなんですか！
あんなものを見せられて、こんな体をみたら普通――」

「驚いた。正直痛々しいと思った。」

「醜いですよ？　汚いですよ？　こんな深く抉られた――」

「俺は驚いただけ。見たからってマイへの気持ちは変わらない。改めてマイが……好きだ！」

強く強く気持ちを示す。今俺が出来るのはそれぐらいで。

「どうして……どうして！　私はユウジ様に黙っていたんですよ！

こんな傷を体を……ユウジ様こそ失望したでしょうっ？」

「しない、失望なんか」

黙っていただけで失望なんてするはずがない。人には秘密が一つも二つもあるものだから――そう、俺だって。

「……もっと私は汚いんですよ、私は――私はっ」

汚い。それは何を指して言うのか、やはり彼女を知らない俺には分からない。

そして、俺は告白する。

「ごめんマイ。俺さ、教えてもらったんだよ……マイの家族のこと」

「なっ……！」

どれだけそれが失礼か、どれだけ彼女にとって屈辱か。

彼女の過去を、自分の知らないところで知られている。俺のやっているのはそういうことだ。

でも、遠慮する時間はなかった。

「数年前にこの町で心中事件があって、両親共々が――残ったのは小学生ほどの幼き娘」

「どうして――」

「ある人に当時の新聞を見せてもらったんだ。勝手な詮索をして悪い」

「……」

「生存していた娘には虐待の跡――その娘の名前は」

「そこまで調べてくださったのですね……」

その顔には怒りでも憎しみでもなく……ちょっとした笑顔と哀しみの表情が浮かんでいた。

「もう一度マイと話たかったからさ、その口実に……勝手に調べるなんて最低なことだけどな」

「嬉しいです……私のことを考えてくれていて」

「マイにどんな辛い過去があったのか……俺には分からない」

今回知れたのも、出会うまでの彼女のごく一部の過去でしかない。

「でも俺はマイを好きな気持ちが変わることはない、だから俺は――マイの過去も未来も現在も全部受け止めて、そうして俺はマイと一緒に歩いて行きたい。マイを好きというからには、覚悟を決める。俺はマイの全てを受け入れ……受けとめる！」

「……ユウジ様っ、私の全ては軽くなんかありません。きっと全て知ったら……少しでも知ってしまったら私、きっとユウジ様は――」

「わかってる、他人の事情を抉り出すのがどれだけ重く愚かであることぐらい。それでも俺はマイを他人と思いたくない……彼女で居て欲しい」

「わ、私だって……ユウジ様の彼氏でいられたら――それでもっ」

「……マイと、こんないつ途切れてもおかしくないほどに弱くなった関係は俺には耐えられない！　マイには嬉しそうにして欲しい、隣で笑っていてほしい！　だからマイが背負っていることを教えてほしい！　マイ、俺に――その過去を教えてくれっ！　頼むっ」

「……いいのですか？」

「言っただろ。俺はマイのどんな過去も未来も全部受けとめるって」

「……後悔しますよ」

「マイを知ることができるなら後悔のこの字もない」

「……分かりました。私がどれだけ愚かで汚いか――」

マイは話してくれた、どんな家庭に育ちどんな境遇でどんな道を歩んだか。

亡くなった弟さんも、両親も――新聞の紙面だけでは伝わらないことがマイの口からは語られた。

「私は犯罪者一歩手前だったんです。お母さんが代わりにしなければ、私は父に殺しにかかっていた。そして私は血がカーペットに滴る父のガックリとうなだれた亡骸を見て――怒りよりも悲しみよりも、笑いがこみあげてきたんですよ？　――私は狂ってるんです。どうですかおかしいでしょう？　壊れているんですよ！　こんな人

間が幸せに――」

「話してくれてありがとうな」

壊れた機械のように自虐し話続けるマイを思わず抱きしめた。

「！」

それは本当に小さく儚いように思えた。こんな華奢な体で、強い心でここまで生きてきた。

「汲んでやることが出来なくてゴメンな」

「今までよく頑張ったな、マイ。……俺がこれからどれだけマイを手助け出来るかはわからない。でも必死でマイの彼女として傍に居続けるから……これからは全部は背負わないでくれないか？」

背負い続けたら、本当に壊れてしまうから。少しでも助力が出来れば、一緒に背負って行けたら――

「私は……ユウジ様のお隣に居てもよろしいのですか？」

「もちろん……というか、居て下さい」

「ユ……ユウジ様ッ！」

マイの方から強く強く抱きしめてきた。長く長く、その抱擁は延々と続く。

二人の体温を感じ合うように。今までの寂しさを晴らすように。

たった数日……でもそれが数週間、数カ月にも感じてしまうほど

だった。

「マイ……あのさ、また受け取ってくれるなら――」

ポケットを弄り、いつか渡そう……返そうと持っていたものを取りだす。

「！」

「受け取ってくれますか？」

「は、はいっ」

それはマイが俺の家へと忘れたネックレスだった。少し間合いを開けて、マイの首へと下げる。

「あ、ありがとうございます……」

「よかった。忘れた衣類は……」

「取りに行っても宜しいですか……？」

「悪くないか？」

「いいえ！　後日行かせていただきます」

「そ、そう？」

「……」

「……」

しばらく沈黙して、そうして俺は改めて聞いてみる。

「俺なんかでいいのか？」

「こちらの台詞です。私なんかでいいのですか？」

「マイだから、いいんだ」

「私も……ユウジ様だけでいいんです」

そうしてお互い自然に唇を交わした。

久しぶりの感触に、思わず嬉しく気持ちよく幸せな気持ちになってくる。

学校を出て、もう遅いからと俺はマイの家へと送り届ける。

そんな道中のこと、マイが隣で歩きながら聞いてくる。

「また、ユウジ様の隣を歩いていいんですよね？」

「ああもちろん」

すると、マイは向き直って言った。

「ユウジ様、だーい好きですっ」

「！」

その笑顔と子供っぽい仕草に胸を射ぬかれたのは言うまでも無い。
こうして、また幸せな関係へと戻った。それももっと幸せで、信じあえる関係に――

第１９３話　√１－９８　※独占禁止法は適応されませんでした。（前書き）

この回は既に半年前完成していましたー
いやーやっとこさ辿りついた感じですねー

第193話　√1－98　※独占禁止法は適応されませんでした。

三月ニ五日

終業式を終えて、春休みを向かえた俺はマイと近くの公園へと来ていた。

「わぁ……」

「おお……」

二人して感嘆の声を漏らすのは、目の前のなんとも美麗な光景を目の当たりにしたからで。

「きれいですね……」

「見事な満開だな」

二人が見ているのは桜の木。学校から近くの公園には桜の木は咲き誇っている。

「じゃ、そこら辺に座るか」

「はい！」

俺とマイは適当なベンチに腰をかけた。もっと人が居るかと思ったが、殆どいない。

まばらどころでなく、見渡しても犬を散歩させている爺さんぐら

いしかいない。
そう考えると――

「二人きりですね……ユウジ様」

「あ、ああ」

”約”だけど。でも、まあ……悪くないな。

「それではっ」

だきっ。マイが俺の右腕に抱きついてきた……なんとも心地よい感触を腕に感じる。
少し自慢のようで「死ね！」と言われそうなことを言うけども――
この感触に慣れ始めてしまった。だからあまりドキドキしない。

……慣れってのは恐ろしいね。今はなんというか……安心する、だろうか？
そして俺の腕に抱きつくマイの頬が緩んで、いかにも幸せそうな表情を見ていると更に安心してしまう。

「えへへ……」

なんというかムチャクチャ可愛い。もう抱き締めたいね、やばい。
彼女がここまで自然な表情や呟きを漏らすようにもなったのは、やはり付き合い始めてからだ。
そして過去を俺に打ち明けてくれた時からで。それからは順調にバカップル化していった。

「えへへー」

おうふっ……可愛いさに磨きがかかってやがるぜ。首を左右に動かして、マイが俺の腕に等間隔で当たってくる。

正直今、幸せだ。

もうかつてマイが口にしていた「死んでもいい」という発言も比喩表現としてだけでなくとも思えてきた。

「あ、あの……いいですか？」

「！　ああ」

理解した彼女が望んでいることを。彼女は紅潮した頬のままこちらをみると目をつぶった。そして俺は――

「――」

彼女の、マイの温かくて柔らかい唇に口付けをした。

なんとなくだ。なんとなく甘い余韻が残った。唇を離すと――

「……っ」

ニコッ、今日一番の満面の笑みをもらった。

もう、その時にはマイをぎゅっと抱き締めていたと思うね、てかそうせざるを得ない可愛さ。

キャラ崩壊？　ハッ、知ったことか！　可愛けりゃいいし、なによりマイだからいいんだよ！

そんな俺も完全にマイラバーであった。

「ユウジ様、大好きですっ」

「俺も、マイが大好きだ」

……本当に幸せで仕方ない。この時が長く永く続いて欲しい。この幸せな時間が終わらないで欲しい。

永遠を願うように、俺はマイを抱き締めた。

第１９４話　√１－９９　※独占禁止法は適応されませんでした。（終）（前書き）

出来はどうあれマイ編完結！　ああ、長かった！　アニメで言う２クール分とか超なげえよ！　もうね、マイ可愛すぎてね、描写増やしまくったんですよ？　もっとイチャデレシーン書いても良かったけども、流石にね！　次の√進まないとね……読者のみなさんにどう映るかは分からないけれども、今キラワケは満足です。ありがとうございましたーーー

ん？　最後はなんだ、って？　まあ、お察しの方も多いと思いますが、次の更新で少し……分かるかもしれません。

第１９４話　√１－９９　※独占禁止法は適応されませんでした。（終）

あのあと……マイとの関係を取り戻したあと、佐藤さんに会った。

「ありがとう、またあの子に笑顔が戻りました――」

マイが飛びだされた時はどうなるか分かりませんでした。
あのマイの不安定な精神状態で会わせるのは酷なものでした……
ごめんなさい。
それでも、ユウジ様は……あの子に笑顔を戻してくれて――本当に、本当にありがとう。

……と言ってくれた。そしてまた愛想のよい笑顔をみせてくれた。

そういえば3月を待たずして、バレた。え、何がって？　それは、だな――

「ユウジ様！　聞いてないです！」

「ああ、悪い。言えなかった」

「そんなのないですよ！　なんで……なんで！」

「ユイさんと暮らしてるんですか！」

……まあ、バレなかったのが不思議というかなんというか。

ということでユイが同居しているのがバレた。
今考えれば隣に住めば「隣なんて……羨ましい」とは言ってきそうだが、ここまでにはならなかった気がする。
でもどうやら、ユイの強い希望らしく。だからユイの同居隠ぺいの協力も積極的だったのかもしれない。

「いや、あれだ……俺の母が再婚して、その娘が――」

「ユイさんなんですか！　えええええ、そんな！　ということは……家族なんですか！」

これはもう隠してた俺が悪い。

「ごめん」

素直に謝ることにした。本当にすまない。

「……ふふ、でもいいですよ」

「え」

「いずれ、私も下之家の一員になるのですから」

「それは、どういう……」

「結婚しましょう！　卒業したらすぐに！」

「えええええええええええええ」

とまあ、まさかの展開に驚きつつも。幸せに満ちた日々な訳で。

「へぇー、らぶらぶだなー」

「そう思うか、ユキさん」

話すのはユキとユイだった。

「……振り切ったつもりなんだけど、どうにもあそこまでベタベタイチャイチャされると」

「まったく！　リア充どもめ！」

「私も、したくなっちゃうね」

「……え、アタシ？」

なんかユイの叫び声が聞こえ……って、ユキがユイを食ってる！
おおう、なんか凄いことになっとる！

「ユウジ様こっち向いてください、あーん」

「あーん」

周囲の目線は痛いけれども、マイの弁当は美味しかった。

「お、おいしいです！」

「そう？」

出来なかった新レシピ試食会を開いていた。

「私も見習わなければ！」

「あ、そういえばマイ、肉じゃが美味しかったから教えて欲しいんだけど」

「！　いいですよ！　まずはですねー」

そう俺の家のキッチンでらぶらぶ新婚のごとく、二人料理をするシーンを眺める。

ハンカチを噛み、水道の元詮大で涙を流す……姉貴。

「うーん、羨ましいなあ……私も、私もマイさんになりすませば！」

「いや、ユウジのお姉さん。それはだめだと思うよ……」

居間にはミナとホニさんが座りながら物珍しそうに料理風景を見せていた。

「お似合いだねー」

「……ひ、否定できないのが。悲しいっ」

あんだけ言ったのに、やっぱりブラコンは治りそうもない姉貴が

そこには居るのだった。

「マイと一緒にこれからの人生を歩いて行く」
「山も谷も溝もあるだろうが、助け合いながら乗り越えて」
「マイは俺の歩く道を、共に歩いてくれるか？」

「……手を、手を繋いで歩いて行きましょう。ユウジ様っ」

演劇の練習でもするように、俺は改めてマイへと言った。
思い切りの笑顔でそう答えてくれた。頬を桃色に淡く染めながらも、左手をそっと俺の右手に合わせる。
それに答えて、俺はマイの手をそっと握る。

「……ユウジ様の手、とっても温かいです」

こんな可愛い彼女を持てて幸せ者だよ、まったく。
マイを見る俺の顔がどれほど緩んでいるか想像したくない。そりゃあもう自分でも引くぐらいの有様なんだろう。
それでも構わないさ。相応に幸せなんだから。かつてない幸せを噛み締められているのだから。

「……」

ふいっと、彼女がそっぽを向いた。

「！」

マイの方を見るが、目を逸らされてしまった……悲しみに暮れようとしたその時に。

「／／」

俺に顔を見せながら、手の握る力を強めてきた。もちろん俺もそに答えてマイの手を握り返す。

「……」

にこっと笑うマイ。

言葉こそないが、それには殺されかけた。可愛い過ぎて、萌え死ぬところだった。

ああ、これまでに何度殺されかけたことか。でも、今なら死んでもよかったかもしれない。

悔いは……もっと二人で居る時間が欲しかったくらいだ。

「……」

「……」

どこまで手を繋ごうか？そんな野暮な事は聞かず。いつまでもいつまでも手を繋いで歩いて行くことにしよう。

マイの家に着く、その時まで。　至福の時間は続いてく。幸せ過ぎて、嬉し過ぎて。無かった頭が更に溶けて無くなっていくようだ。

べつにいいか。

などと思い始めたのも、救いようのないバカになったからかもし

れない。
でもいつまでも続いて欲しい。このまま時が止まってしまえばいいのに……そう思う俺がいた。

「もう少しで二年かー」

この一年色々あったもんだ。
あんなに可愛く美しい彼女を持てるなんて――

「（一年前の俺、分からないだろ？）」

わかんねぇよなあ？　こんなに幸せだなんて。

「……いやー、また明日マイに会うのが楽しみだわー」

春休みが始まっても、頻繁にマイと会って居るのは公然の秘密……にはなってないか。
と言うわけで、俺は今幸せです。ものすんごく、彼女もあの時から更に変わって……純真のマイが見れるようになった。

「……ほんと、もう幸せで」

ベッドに寝ていたので、眠気が襲ってくる。そうだ……明日も有るしさっさと寝よう。
俺は布団をかぶり、眠りに堕ちて行く。

「（おやすみ）」

明日が来ることに胸が高鳴り、そうして俺は夢の世界へ――

カチ、カチ、カチ、カチリ。

何かが止まる音……それは今まで刻んできた時計の針が止まっていた。

電池切れ？　そうではなかった。電池を故意に抜き取った……それもそうだが、そして。

時が止まった。

「ユウジ、すまないことをする……じゃが、これしか方法がないのじゃよ。だから、本当にすまぬ」

その声の主は手に持つ時計の時針を制御して、逆戻りさせていく。

そして時針は反時計回りを終えて、そこで外していた電池を入れる。

「これで、終わりじゃ。そして始まりじゃ」

そして時は動き出す。

また、あの時へと戻って。

第１９５話　√２－０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

追記、文章内の日付を修正しました

第１９５話　√２－０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

太陽の光で目を覚まされる。
携帯アラームに起こされることなく早起きだった。
携帯を覗くと――

四月二〇日

……の、七時丁度を示していた。

「んー？」

何か長い夢を見ていたかのように、頭が重い。
見ていたかのよう……というのは本当で、内容こそ覚えていないが何か夢を見ていたのだ。

「さーて起きるかな」

ベッドから出て寝ぼけ眼で居間へと向かう。今の隣のキッチンから鼻歌が聞こえてくる――

「おはよー、ユウくん」
「おは」

なんとも香ばしい匂い漂うキッチンから姉貴が顔を出した。

「もう少しだからまってててー」
「ああ」
それを聞くと俺は畳張りの居間の卓袱台前へと座りこむ。後から
――
「ふぁぁ」
「おはー」
桐とユイが寝ぼけながら現れる。日常に染み込んだ光景で、あまりにも俺にとっては普通だった。
朝食を終え身支度を終えて、現役高校生な俺は学校へと通う。そんな家の表にでは――
「おっはよー、ユウジ」
ユキが待っている。

第１９６話　√２－１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

気が抜けてました。

第196話　√2－1　G・O・D・

「おはよー、ユウジッ」

玄関を出れば、快活にポニーテールを揺らしながら振り返る篠文由紀、幼馴染の彼女の姿がそこにはあった。

笑顔で挨拶を繰り出すユキに、俺ももちろんのこと挨拶を返すことにする。

「おはユキ」

「……繋げてない？」

おはユイよりは繋げた感が薄いのでセーフ。

「おユキ」

「時代劇の役名！？」

と、いうことで俺はいつも通りの日常を過ごしている。

毎日律儀にも迎えに来るユキと共に学びやへの道をひた歩く訳で。

途中で会うは――

「おはようっ、ユウジッ君＆ユキ！」

「おはー」

ユイとマサヒロと合流である。

マサヒロは何処にでもいそうな、ホラー・グロ・アニメ……多岐

に渡る趣味を持つ、オタッキナーな悪友である・
まあユイに関しては諸事情によって登校を別にしてはいるものの「同居関係」にあるのだが、それは別の話。ユイもこれまたオタッキー。
そんな訳でいつのもメンバーこと”４人”でやっと歩み慣れ始めた藍浜高校への道を歩いて行く。

一〇分経たずしてその地上３階建ての藍浜高校の校舎が姿を現す。この町に只一つの高等学校で、生徒数も地方にしてはそれなりらしい。
大体の生徒がまたまた只一つの中等学校こと藍浜中学校からほぼエスカレーター式にやって来るので面子は変わり映えしない。
有る意味閉鎖的社会とも言え、転校生がこの学校へと来る度に全校生徒で話題になるのもそんな社会の弊害の一つとも言えよう。

我がクラスこと一年二組の教室に着く頃だが、まだ担任が襲来するまでは三〇分以上の余裕がある。
そしてそれまではいつものメンバーでトーキングタイムであった。
先陣を切ったのはユイで、更に次に乗ったのはマサヒロだった。

「いやー、昨日の”俗・荒物語だっしゅ”面白かったわあ」
「確かに良かったな、あの橋の下で失望を叫んだちわらぎ先生には笑った」
「おーい、二人ともなんでそんなにシャ●トに固執したネタ展開してんだよ」
「いやユウジ、あれは面白かったよ？」
「ユキも見てるのか！　アタシは嬉しいぞ～」
「ユキまで……いや、面白かったけども」

アニメちっくな話題で盛り上がることもあれば。

「あの学食の新メニューどう思う？」
「辛さが足りない」
「いや、ユキ。親子丼には辛さは必要ないと思うぞ？」
「えー、美味しいよ？　辛親子丼」

なんというか子に辛く当たる親みたいだな、ソレ。

「ん～、そうだな塩っ気かぬ？」
「いや、俺的には……ユウジ、どうぞ」
「俺かよ……なんというかダシが薄い気がする、それから――」

こんなベーシックな話題でも盛り上がり。

「あの杉坂先生について一言どぞ」
「自慢話が長い」
「卒業生の悪口に授業時間費やすな」
「しつこい……かな？」

まあ、学生らしいっちゃらしい何故か上から目線な教師評価とかをしている。

そんな何の変わり映えもしない日常だ――

「テスト時期いつだっけ？」
「ググレカス」
「いや……ググってもそんなピンポイントには出てこないだろよ」
「分かったらついでに教えてちょー」

学校のホームページにアクセスして確認……しても良いのだが、

携帯のスケジュール機能に記してあることを思い出す。
そしてカレンダーを覗く。

「えー、二〇一〇年五月一七日から三日間……アト一か月もねぇな！」

「へー、そんな時期ねえ」

これから始まるのは二〇一〇年四月からの物語。
まだ中学校の空気を残した高校一年生の俺はこの翌日に――
ユキの交通事故を目撃する。

第１９７話　√２－２　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

盛り上がってきた？

第197話　√2－2　G．O．D．

四月二一日

「……！？」

俺の瞳に映るのは、交差点でタクシーに撥ねられるユキの姿。
発泡スチロールが弾かれるかのように彼女の華奢な体は宙を舞う。
地面に落ちる頃には鼻や口から出血し地面へと衝突した時には体がぐにゃりをとひしゃげる――
腕が有りえない方向へと曲がりアスファルトの灰色の地面に染みてゆく血だまり。
変わり果てた彼女の姿に悶絶して、そして俺は――

「ユキイイイイイイイイイイイイイイイ」

四月二一日

「……！」

目が覚めた。今までの事は、ユキが事故に逢った事は夢だったのだろうか？
いや、違う。今までのは――

「おはよう主人公」

「……何してんだ、桐？」

「あれ、リアクション薄い」

「言ってるだろが、俺の部屋勝手に入るなって」

「……言ったよな、わし」

「何を？」

「おはよう主人――」

「どうもルリキャベの主人公です」

「自覚あるのか！？」

「ええ、まあ」

「……どこから、どこまで？」

「そりゃ……胸糞悪いユキが事故に遭うところから、前にお前がこんな登場したことまで」

「……まじ？」

「ああ」

「……お主にはまだ言っていないはずなのじゃが」

「は？」

桐は何を言い出すんだ？

「このユキの事件はこれで一回目――」

のはず……ん？

一回目？

ちょっとまて、なんで一回目とか、まるで次があるかのような表現を俺はした？

この夢を見たのは今日が初めてのはずで……それなのに俺は、ユキの交通事故を”事件”と明確に表現している。

意識せずに、桐が聞いて来たから俺は答えた……なのに、俺はその答えを知ってはいなかった。

しかし、俺は言った。それも無意識に。

それに俺は何と名乗った”主人公”？　それも、ルリキャベの……？

ルリキャベは昨日買ったばかりの中古ソフトで、開封してプレイしようとして――そのゲームの、ルリキャベの主人公と俺は名乗ったのか？

そして俺はこの桐の登場の仕方を知っていて――

……そんなことといつ俺は知った？

いつだ？　いや、そんなこと過去にはなかったはずだ。

四月の初めにこの高校にユイやマサヒロとユキ共に入って――それからは普通の日常だった。

桐はなんというか、俺にだけは変な口調で変な思考で……度々困らされていただけ。

どこにもそんな漫画の延長みたいなことは無かったはずだ、それで――

俺は何か大切な事を忘れている気がする。

「あー、あー！　とにかく、お主はユキを殺さない方法を考えなければいけないのじゃ！」

「……？」

言っている意味が分からない、ユキを殺さない？
方法が見つからなければ、ユキは夢のように死ぬってこと……なのか？

「ユウジー、遅いよ？」
「ああ、悪い悪い」

ユキは俺が遅れたせいで少々不機嫌であった、そんなふくれっ面かわいい！　……なんて、思っている余裕などなかった。
ここまで、ユキの表情も会話の内容も時間も風景も天気も音も色も肌に感じる春の温かさも――
ほとんど夢と同じだった。

こんな偶然があっていいのだろうか？　いやダメに決まってる。
もし、これが夢と同じなら数分経たずして――そこで桐が言っていたことを思い出す。

『ユキが殺さない方法を考えなければならない』

ユキを殺さない。つまりはユキが死ぬのが仮定事項にあるということなのだろう。
あの夢のような、文字通り悪夢のような光景を、俺は見て……彼女を失ってしまうのか。
それなら桐の言う、殺さない方法ってのはなんだ？　歩き方を、行き方を変えればいいのか、それとも――

おい。

なんで、ここまで考えられる？
もっと動転してもおかしくはない、もっと危機を持ってユキにそのことを伝えてもいい……いや、それは不審がられるか。
だとしても、なんでここまで冷静なんだ？

まるで、今までに同じ事があったかのように。ある種淡々と――

「待てっ」
「ユウジーっ！　手首なんて掴んでどうしたの？　遅刻しちゃうよ？　わわっ!?　な、なにするの、ユウジっ」」
「こういうのもたまにはいいだろ？」
「へっ？　で、でも高校生だよ？　こんなことして――」
「いいじゃんっ……それとも俺がこんなことして気持ち悪いか？」
「ううん！　別にいいの！　いいんだよっ！　うん、じゃあ手繋ご！」

なんで、俺は手を繋ぐ？　考えるより先に体と口が動いてるじゃないか……なんでだよ。思考だけ取り残されっぱなしじゃねぇか。
なんでこうも自信あり気にすたすた俺は歩くのか？　……足は止まらない、見えない誰かに操られているかのように俺は歩いて行く。

そして走った。そうして交差点を越えた。

「……なんで走るのよぅ」
「いやー準備体操？」
「はやいよね!?」
「いーじゃないか」
「いや……悪いとは――」

積極的だろ俺。なんというか俺は蚊帳の外で別の俺が積極的に動く。

分からない、なんでこんなことになっているのか。そしてタクシーは後ろを通り過ぎてさりげに事故を回避してるし……

なぜかユキの顔は紅潮してるし、わけわかんね！

学校に着く頃までは俺の意識は届かず、昇降口で手が離れた時にようやく俺の意識が体へと戻った。

まあ、そんな時には周囲のじとーっ、とした視線を頂戴する訳で——

その後も色々あった。いや”色々”と省略するには躊躇するほどに、あまりにも様々な事があった。

まず、一つ桐がやってくる。二つ男子勢に襲撃される。三つ嫌な程に視線を感じる。四つ桐、再来。

そうして不機嫌そうな桐を連れて、家に戻るもとにかく絡まれた。色々やって追いだし、夕食風呂を終えて、やっとのこと自分乃時間。そうして今日の出来事に耽る訳だ。

「……なんだったんだ？　今日は」

なによりユキが事故に遭う夢を見たことが俺にとって衝撃だった。それから体が誰かに乗っ取られたのも——

「とりあえず、寝るか」

なんか今日は疲れた、もう眠気も迎えにやってきた。
ユキが事故に遭うような悪夢に見舞われないことを願いつつ、俺は眠りに着いた。

しかしこの時”明日は色々な事がありませんように（起きませんように）”と願うのを忘れていたのを大いに後悔するハメになる。

第１９８話　√２－３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ここら辺はオマージュ

追記

１－１~１－９までのニューアル完了！　少しは読みやすくなったかと思いますー

第１９８話　√２－３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

四月二二日

そうあれは……俺が気にも留めなかったことだった。ただ昨日、偶然に彼女の筆箱に体が擦れて落としてしまっただけ。

クラスメイトな彼女との接触はそれが、昨日が初めてだった。

マサヒロ曰くユキと双璧を成す一年二組どころか学年否、学校レベルで知れ渡る美女らしく、どこぞのギャルゲかと言わんばかりにファンクラブまで存在するとのこと。

……というのが、マサヒロから聞いた話だ。ユキの人気っぷりに驚愕するも、こんなに可愛く明るければ納得が行く。

一方の彼女に関しては名前さえ知らなかった。接点が無ければ話す機会も無い。ただすれ違って行くだけのクラスメイトの一人。

――そう思っていたのは俺だけで、彼女は俺の名前を知っていた。いや、確かにクラスメイトではあるけれども。

……ここまで前振り、ここからが本題だ。

役得的なユキとのラッキーイベントが巻き起こった。

そのイベントは脳内メモリーに保存して家に帰ってから脳内再生したりして個人的に楽しむだけなのだが――そのイベントが着火点だったのだ。

そんな光景を目撃した人がいた。そう、それが彼女こと――姫城舞だった。

見られただけ――ただそれだけのはずだった。

しかしその後俺は余りに唐突な展開に遭遇する。

「あなたを殺すためです」

それだけ聞いたら誰がなんのこっちゃと思うかもしれないので、経緯を説明する。

俺はあのイベントの後、突然拉致られた――いや、拉致られたとか……表現は間違っていない。なにせ犯罪よろしくご丁寧に俺の意識を失わせてから運んだとのことだからな。

拉致されて目が覚めれば、そこは階段を下りた先にある半地下倉庫前のちょっとした空間だった。

彼女――姫城舞は、短刀を光らせて俺にこう言った。

俺が好きだと、それでいてユキと抱き合う場面を見て危機を感じた。

ストーカーまがいのことをして俺のことをずっと見ていて、それ故に思った。

このままでは私の想いは遂げられない――ならば結ばれる前に殺してしまおう。

……どんなスプラッタな発想だよ、こいつはおかしいと内心思った。でも、彼女が俺に向ける気持ちは強く熱く真っすぐなのは確かな事だった。

しかし、彼女はそれでいてそんな気持ちを上回る程に猟奇的だった。果てには、自分が死ぬとも言いだす始末。

だから俺は自分の気持ちをぶつけた、彼女の気持ちに応えることは出来ない――でも、ここでどちらかが命を絶っていいのか、と。

「だから、生きてみろよ」

死ぬよりも生きることに希望がある。生きれば、生きていればこれからは――そんなメリットを説教のごとく語り続け。
そして”俺を好いている”ことを利用して。

「……知りたいですっ！　ユウジ様のことを！　教えてください！　ユウジ様のことをっ！」

生きる意味を、生きる希望を彼女に見出させた。
まあ、その後は告白撤回されて少々残念に思うも……なんだろうか、この感覚は。

こんなことが前にもあったような気がする。

そして、そんな彼女の言葉や発想も――何か懐かしい。
おぼろげで、確実にあったとは言い切れないほどにあまりに弱弱しい感覚だった。
けれど、俺は彼女と出会ってばかりのはずで……そんなことは有り得なかった。
気のせいだと、思い違いと言い聞かせ――それは記憶の海へと沈んでいった。

第１９９話　√２－４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

四月二六日

放課後姉貴に呼び止められた。

昼食時にとんでもない爆弾を弁当にしかけてくれた姉貴は「放課後にね、ユウくん少し教室の前で待っててくれる？」と何故かは知らないが、友人達に別れを告げる中一人閉め切られた教室を追いだされ、廊下に立ちつくす。

二〇分は待ったであろう、既に生徒もまばらで各運動部の今日の活動も始まっている頃だ。

「ごめんねー」

息を切らしながら駆けてくる姉貴。確かに待ったけども、息を切らすまでまで走らなくても……

「ホームルームで遅れちゃった、ごめんね？」

「いや別に構わないぞ？　で、用件はなんだ？」

何も聞かされていない状態で放課後残留指令が来たので、一体なぜに俺を呼びとめたのか。

「ユウくんに……伝えたいことがあるの」

「！」

なんだ、この姉貴の雰囲気。ギャルゲーならばしんみりとしたＢＧＭが流れ出し、立ち絵から夕日をバックに立つヒロインのＣＧが

展開されるだろう、ってそんなことどうでもいい。
ゲームならば、ここで放課後告白タイム（ＨＫＴ）で、いつもにも増して頬を赤らめる姉貴から推測するに――

熱か。
流石にある訳ないって、俺への愛の告白なんかは。なんか最近の姉貴の溺愛がガチの愛に変わりそうな気がしないこともなくて時々戦慄を覚えているけども。
それはいけない。背徳恋愛とかさ、学生の身で何しでかしているんだよ、と。学生でなくても白い目で見られること確実で、湖に飛び込んで心中未遂後、海外逃亡しなくてはならないハメになる。
パソコンの放熱現象で熱が籠るのが機械には良くないのと同じように姉貴も熱のせいでいつも以上に脳に負担がかかって脳内回路がおかしくなっているのだろう。

「あのね……」

そうなれば、間違いを冒す前に止めておこう。

「私……」
「姉貴、もしかして熱ある？」
「私の……へ？」

俺の気遣いに呆気にとられる姉貴。違うの？

「いや、顔赤いし熱あるんじゃないかなーって」
「だ、大丈夫！　これも演出の一つだからっ！」
「演出？」
「……はっ」

しまったと言わんばかりに口を押さえる姉貴。
そして、悲しいことに鍛えられた俺の五感は殺気を直ぐに感知できるようになっていた――

「ちっ、外したか」

近くから少し男勝りな女子の声。更に……大勢いる、だと！

「それでも執行しろ、皆の者かかれぇっー！」
「「イエッサー！」」

しかし俺の回避は神懸かっていた。
囲まれる直前に人との隙間を縫って床をスライディングし追手は回転しながら拳を振り回して攻撃。
その中で随一と言っていいほどに運動神経が優れているようにも見える先程の男勝りの女子の力強い勢いのある拳が俺を襲う。

「（ハイ●ーセンシティブ）」

あれよあれよと振りかざされる拳を避けて行く。その様はお花畑を踊るようにも見えた。

「な、なんだと！」

流石の男勝りもこの動きには驚いたようで。

「（トライア●ンド）」

流石にト●ズは使えないので、火事場の馬鹿力――男女平等パンチ！　……も現代社会的、俺の意識的に出来ないので、フェイント

で逃げっ！

「あ、まてぇぇぇぇぇぇ」

しつこく追いかけてくる生徒共を振り切り、学校を出た。

「はは、俺の勝ちだ」

……にしても何だったんだ？　アレ。演出とか言ってたのを見るに、姉貴も仕掛け人ってところか。

一体なぜあんな超劣化済みバトルシーンが展開されるほどに俺を捕まえたかったのか……謎過ぎる。

姉貴はおそらく今日も生徒会……生徒会？　もしかして、生徒会関連とか……どうだろうね。

今日は共に帰る相手がいない、そうだな。丁度いいから商店街の惣菜屋で”いっぱい☆コロッケ”でも買って帰るか。

えーと、どうもナレーターです。久しぶりですね、今までずっと視聴させていただいてましたー。

四月二一日からは一話からのおさらいってことですかね？　そして姫城事件があり……今日は、あれ？

なんか展開変わってません？

それで一方の生徒会室。

「え！　捕獲出来なかったの！？」

「面目ない……アタシがアイツを甘く見ていたんだ、ごめんな下之

副会長」
「いいの、いいの……協力してくれてありがとう、みんな」
「ミナ、気落とさないで……私たちの出番これで終わりだけど」
「ええっ、シモノユウジとの関係性が無くなってせいで私たち出番ないの!?」
「そうよ、アスちゃん……だって絡む意味がないもの」
「そ、そんな……」
「……あのさ、さっきから会長とチサさんは何話してたんですか？」
「こっちの話よ、気にしないで」
「そうですか？　なら聞かないですけど……」

「ナレーター、聞こえてる？　私たちの存在意義無くなったのだけど、どうしましょう？」

私に聞かないでください。
……生徒会が絡まないということは必要以上に拘束される時間が減るということ。
学校行事も日常も……一体誰が今回は主役なんですかね？

第２００話　√２－５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

セーフ？

第200話　√2－5　G．O．D．

「ごめんね、ユウくんっ！」

俺が居間でくつろいでいると、帰って来たばかりであろう姉貴が突然に謝って来た。

……いや突然ではないか、俺が姉貴も仕掛け人として含まれるであろう謎の集団に襲われた。

そりゃあ、低予算なだけに戦闘シーンが一枚絵とかで済ま――って関係ないか。

「姉貴は何に対して謝ってるわけ？」

「それは……あの」

「あの、どの？」

「……ユウくんを襲ったこと、です」

やっぱりか。てーことは生徒会で間違ってないのかもな、あの襲撃してきたメンバーも。

そう考えるとすげえな、あの戦闘力と統率力のある女子。バトルモノの学園生徒会にありがちだけれども、それを現実で見ると――結構アレだな。

「あ、性的な意味じゃないよ」

「そんなことが有ったら大問題だ！」

反省してないだろ……姉貴。

どこの世界にそんな弁解をする姉貴がいる……って、ここか！

もう伏線と言うべき片鱗は今まで見せらてたからな。

なんか幼少期には「お兄ちゃんと子供つくるのー」とかやっべえ発言残してるし……なるべくしてなったということか。

「で、なんで襲ったの？」

「それは……ユウくんに生徒会を手伝ってほしかったから――いい訳にならないよね！　ごめんっ」

そういうことか、生徒会で結構学校に残ってたからな……少なからず、いや姉貴には家事も任せて結構な負担が強いられていたのだろう。

今まで散々迷惑をかけてきた。弁当も殆ど作って貰ってたし、絶品姉貴料理がたまらず朝晩任っきり――母はずっと働きづめで帰らないから、家事は姉貴主導だし。

それだけでも姉貴にとっては負担なのに中学二年最後に、俺は姉貴に――

「そうか、分かった」

だから生徒会を手伝ってほしい――ある種、タ・ス・ケ・テのサインだった訳だ。

それならば、俺もいつまでも呆けているわけにはいかない。どれだけ姉貴の肩の荷を下ろせるかは分からないけども！

「……ユウくん？」

「分かったよ、姉貴」

「え、それなら――」

「俺、家事頑張るよ」

「……え？」

俺に出来るのはそれぐらい、せめての手助け。
そうだよな。姉貴の日常生活で負担になっているのは家事もあるはず。だから、少しでも姉貴の仕事を軽減出来れば――

「えーと、そういうことじゃなくてね……私はユウくんと一緒に――」
「わかってる、わかってる。姉貴をこれからは家事で手助けして行くから！」
「あうっ」
「心配するなよ。姉貴には及ばないけど料理、少しなら出来るからさ」

少し心得はあるけども、料理のレパートリー増やす為に料理本片手に勉強してみるぜ！

「はうっ、ユウくんの手料理……あっ、でもユウくんとの生徒会……うーん！？」
「姉貴も少しは休む時間必要だからさ」

仮にも学生。姉貴の成績はかなり良く、それも日々の賜物だと知っている。だからこそ、少しでも自分の時間が出来るように！

「あの、ユウくん？」
「ん？」
「生徒会に入る気は――」
「ないぞ？」
「がーん」
「いやーだってさ」

「襲ってくるような人たちだぜ？」

「あうっ！」

姉貴には悪いけども……いや、それはない。あんな物騒な方々とはあまり知り合いたくないです、はい。

姉貴もその中ではまともで……それでいてきっと乗り気じゃなかったのだろう、きっとそうに違いない。

姉貴を操った生徒会許すまじ、そんなところ誰が入るか！　それに、さ――

「なんか、先見えてるよねー？　人員少ないからってコキ使われて」

「あううっ！」

「ネタキャラ化とした揚句、上級生の横暴で日常生活が大分拘束される気がするんだよな」

「……ごめん、ユウくん。お料理楽しみにしてるね」

「おう、頑張るぜ！」

打ち負かしちゃったよこの人。あのミナを問い詰めて追い詰めちゃいましたよ。

えー、これで本当に生徒会関わり無くなりそうですね……トドメを刺しましたね。

そんなこんなで時は過ぎて、そしてあのイベントでユウジと彼女はついに出会います。

もう分かりましたよね？　そうです、日にちは飛んでマサヒロ主催の春の肝試し大会へ――

第２０１話　√２－６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

文字数５０００００ピッタシ！

第２０１話　√２－６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

四月二七日

「肝試し、やるぞ！」

そうマサヒロは言った。

「どうぞ」

「いや……どうぞ、っておま！　お前も来るんだぞ？」

「ええー」

マジか…こいつはこうしてまた変な事を思いつく。以前にも「右手が疼くからゾンビ退治に行こうぜ」とか言ってた時期もあったなあ、とおおよそ半年前の出来事をしみじみ思いだす。

ギャルゲーだったら所詮友人Ａにしかなれない凡人キャラが！

いや、正解ですが、ユウジが言う立場じゃないですよ？

「露骨に嫌な顔をするなよ」

「……はぁ」

盛大なため息が漏れる、幸せが全力疾走で逃げて行く気がするね。

今こそ俺にハッ●ーターン！

「その”またか”みたいな顔やめろよ！　俺傷ついちゃうよ？　シルキーハートだよ？」

「で、昨日どんな夢でも見やがったんですか？」

「夢じゃねーよ！　神様のお告げでも無く……まさしく気分で決め

たことだ」

余計最悪だ、もっと面白い返しを期待したのに……実につまらん。

「あー、ごめん。俺神様以外では従わないから」

「嘘です、本当はお告げでした。なんか神様を名乗る”すたっふ”って奴に”肝試しやれよ”と脅されて」

「の割には嫌な顔していないように見えるのだが、気のせいか？」

言っている顔はにへらと笑み崩れ、明らかに楽しそうである。まあ、こいつホラーやグロとかいける口どころか大歓迎みたいだからな。

「てへぺろ♪」

「……」

あー、でも時間を無駄にした。こんなら読み終わってないキ●の旅読んでた方が有意義な時間の使い方だったわ。

いや比べることそのものがキノの旅に失礼だな、いや販売するメ●ィアワークスにも電●文庫にもその作者さんにも失礼だった。

「じゃ、まあ頑張れよ。助力するつもりは一切ねーけど」

「そんな……肝試し、こんなに面白いことはないというのに」

「はぁ？　時期が問題だろうよ、今四月だろ。それに俺とお前と誘うならユイか？　そんないかにもなメンバー御免だぞ」

「そこんところ最近モテ期到来なユウジさんにですねえ」

「拒否」

「なして」

「……俺が誘っても、いくら肝試しでも来ないだろう――」

そんな非常識的な時期に、肝試しなんてやるなんておかしいだろう。

だから来るはずがない、来るのは物好きなユイぐらいだ。姫城さんもユキも来るはずがない――

と思っていたのだが。

四月三〇日

「ユウジー、ミナさん、桐ちゃん行こっかー」

「ああ、悪い」

ということで、一家総出で肝試しであった。俺の選択や行動は間違っていたと言っていい。

来ないだろうと高を括っていたのが、そもそもの原因だった。

姉貴は、それを耳にした途端……というか姉貴そのものには話していないなかったが立ち聞きし「ユウくんと肝試し!?」と今にも目を血走りそうな勢いで「行きたい!」と小さい子供のごとく言ってきた。

桐は「ふふ、実に面白い……それに、まあ既定路線じゃしな」とかワケワカランことを話していたがついてくるらしい。

ユイは「行くぜ、超行くぜい!」とか言って俺らと行動を別に先に行っていた。

ユキも何気なくマサヒロ謹製の気持ち悪いほどに良く出来たチラシを見せて誘ったら「……ペアかあ、じゃあ行く!」

更に立ち聞きパターン……またかよ!　姫城さんが「ユウジ様が行くのなら、行かせてください!　お願いします」と言われたことで押しに弱く聞かれてしまった責任も考慮して、俺も肝試し参加を

決定せざるを得なくなった。

「こんばんはユウジ様、皆様方」

「こんばっぱー、皆の衆」

「なん……だと」

ということで、地味に集まる女子勢に驚きと嬉しさを滲みださせるマサヒロに少しばかりイラッとしたので来て早々殴っておいた。

そのあといきなしくじを引かされペアを決めることに、そして結果はというと――

「やったあああああああああああああ、ユウくううううううううん」

抱きつかれています、実の姉に。嬉しさのあまり抱きついてくる姉貴をどうかしてほしい。

姉貴のテンションマックスであった。そう、まさかの姉弟デートが決定した瞬間だった。

しかし一応断っておくが、まったくと言っていいほど嬉しくない。以前の生徒会事件もあったこともあり最近姉貴に背中を見せると寒々しいものを感じるのはなんでだろうと。

色々と初めてのモノが狙われている気がしないでもないのは、自意識過剰か姉貴の醸し出す空気感がそうさせるのか定かではないが、前者は論外としても後者でないことも願う。

まあマサヒロが相手だったら、全力全開その場から力の限りＦｌｙ確実だったが、まあ姉貴だから一応はマシである。

正直、今肝試しの伝統っぽいペア行動を呪いたくなる瞬間だった。

「ユキさんと組みたかった……」

「ユウくん、他の女の名前は出ちゃだーめ」
「あんたは俺のなんなんだ！　それにユキは立派な幼馴染――」
「それでもだーめ、肝試し中は……ふふ、ユウくんと、はぁはぁ」

だめだこの人イカれてやがる。誰かに病院を紹介してもらいたいちころだが、精神科でもある種逃げ出すかもしれない。
そんなこんなで、俺らのターン。よりによってのトリで、焦らされ熟成された姉貴は出番が来るのと同時に俺と手を繋ぎ、指を絡めてきた。

「ユウくんを守らなくちゃ」

どうしてこの作――ごほんごほん。この俺の家族や周辺人物は嘘がつけないのであろう。例えついたとしてもまるっきり分かる棒演技で。

「ああ、でも俺は別の恐怖を感じてますんで」

暗闇のシチューエションと墓場が舞台で肝試しという中での罰当たりなロケーションでのアレとかアレはさぞ興奮する――と以前マサヒロがほざいていた気がする、もちろん当時はブンぶん殴ってやったが。

「ユウくん……ユウくんっ」

隣の姉貴は息を荒げている。
あれか、俺が生徒会に入らなかったのがそんなにショックでしたか、そうでしたか。
だからって、反動でここまでなるだろうか……いや、ない。潜在的な何かが姉貴をそうさせているのだろう。

襲撃カウントダウン、今に襲われる五分前。思わず姉貴が絡めて来る手から解き放たれたい衝動に駆られるが、姉貴はがっちりホールドして放す気は金輪際ないらしい。

「さーて、貢物貢物っと」

マサヒロの指定した大きく、綱の巻かれた神石前に辿りつく。

姉貴の手を決死の思いで振り切り、持っていたビニール袋から液体と小麦色の薄い何かが入ったタッパーを取りだす。

ちなみにこれは昨日の晩餐で残った稲荷揚げの余りであり、冷蔵庫にはこれほどのものしかなかったと弁解しておく。

貢物を置いて、ハイ終了。この瞬間に逃げ出してしまおうかと思っていたのだが――

『わ、好物のお揚げだ♪』

聞こえるのは高い女性というより女子の声。かといって桐の猫かぶり状態のときほど幼くは無く、成長期で次第に色っぽい声へと変わって行く――中学生ぐらいだろうか？

「えと、誰？　どっかに隠れてんの？」

『あ！　聞こえてた？　うん、我は我だよ？』

喋りこそ軽快だが、どこか驚いている節があった。

『じゃあそっちに行くねー！』

「！？」

途端に光り出す神石。こんな夜中に光り出すのは一体どんな理由か、それ以前に石が光るというあたかも漫画の読み過ぎな展開は何か、目がくらんで瞑った俺にはわからない。

あまりに明るく眩しい光そして、そして――

「よっこいしょー……って、なんであなたは我の好物を？」

目の前にはとある少女が立っている。もちろん見覚えはない、紛うこと無きはじめましてである。

床に引きずるほどにに長く黒色の綺麗な髪を持ち、大きく吸い込まれそうなほどに緑の瞳が特徴的な、美少女に分類するというならば太鼓判が押せるであろう顔つき。

背は中学生程にあり桐とは大分印象が異なって、そして服は何故かセーラー服を着用していた。

「我の好物はお揚げなんだよー、その様子をみるに偶然持ってきたのかな？」

はぁそうなんですか。ええ、たまたまですね。食べる？

「え、いいの!?　わぁ、ありがとー！　じゃあ遠慮なくいただくねっ！」

それで……君はこんなところで何を？

「こんなとは失礼なっ！　我が祭ってあった神聖な石だよ！」

今”我が祭ってあった”って言ったよね？

「うん！　我こそ美桜山の農作物を護る神！」

……えーと、とにかくあなたは神様なんですか？

「うん、そうだよ！　そして我の名前は”ホニ”！　我の姿が見えてる……決めた！　我は、あなたたちについて行く！」」

そうして俺は、彼女と出会い、彼女と過ごすこととなる。

第２０２話　√２－７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

本調子ではないです、ちょっと変な部分あるかも

第202話　√2－7　G．O．D．

「ということで、神様拾った」
「……はい？」
俺がそんなことを言ったユイの反応は以上の通りだった。
俺は肝試しチェックポイントである神石前で、神様でホニと名乗る少女と出会う。
居合わせた姉貴も見たそうだが……少なくとも普通の人ではないかと。
狼の化身とのことで、力を入れると耳をぴょこり突き出されることが出来るらしい。
ここまで真面目に語って来たつもりだ、だがしかしもう我慢できねえ。
「可愛いよな？　この子」
「……」
かわいいよね？　庇護欲に苛まれるほどかわいいよね！
なにちょっと古風なセーラーが、人形のように整った顔や、すっきりとしたスタイルに綺麗な黒髪が良く合う！
なんというか、妹系？　しっかりもので「お兄ちゃん、わすれものだよー」とか駆けよって来るの。
かー、たまらねえ！　それにイヌ耳だってさ！　もう素晴らしいよね、むっちゃ可愛い！
ああ、ホニさんは可愛いなあ！　部屋に連れ込んで普通の意味でじゃれたい！

「なにこれかわいい」
「だろー？」
「これはどこで拾えるのですか、ユウジ殿」
「神石の前で、お供え物にお揚げだしたら……どこからともなく可愛いこの子が」
「なんだ……だと！　な、名前はなんと言うのでしょうかっ」
「我は農作物を司る土地神、ホニだよ！」
「……ガチで可愛いな」
「ああ」

オタクは実際は「萌えー」とか言わないものだが、これは萌えざるを得ない。
かわいいものはかわいいから仕方ない。かわいいものを愛でる、それは自然の摂理也。

「ユ、ユウくん！？　どうしてこの子がついてきてるのっ」
「我は土地神から守護神へと変わったこともあって、それでこの方に憑かせてもらいましたー」
「憑く……ということはあなたは――」ばたんきゅー。
「お化け――じゃないよ、ってええ！？　大丈夫？」
「おーい姉貴帰ってこーい」

駄目だ気絶してやがる。てか姉貴も居合わせたじゃんか！
というか憑かれた印象が皆無だ、肩が重い訳でもなければ何の違和感もない。
ただあるとすれば身近にホニさんを感じるということぐらい。それが曲がりなり守護神ということになっているのだろう。

「……ふむふむ、既定路線じゃな」
「桐、何か言ったか？」

「なんでもなーいよ☆」

なんだかんだで、突然目の前に現れたホニさんは、次第に溶け込んでいく……っていいんですか？

普通に誘拐っぽいですけど……そこがクソゲーってことですか、そうですか。

状況を整理しましょう。

まずは。

・四月二〇日からまた二〇一〇年がはじまっているということ。

まずは、ですね。既に十二月を越えて年越しをして二〇一一年を迎えた上で、春も訪れていた。

そこまではいいのですがある日を境に年が二〇一〇へと戻り日付も去年の四月へと逆戻ってしまったということ。

・ユウジは姫城と付き合っていた頃の記憶は消えて、それ以前に姫城と付き合い初めて問題が解決ししたところまでの、全ての登場人物の出来事が無くなっているということ。

にしては、ホニさんが居ないことは分かるとしても、何故かユイが同居しているのはそのまま継承されているんですよね。

・桐の行動・発言。

後半になって、殆ど姿を現さなかった桐。ほかにも突然ユウジの決意を確かめたりしていて、不審な感がありましたね。

・ユウジが知っていること、知らないこと。

ユウジは冒頭でマイの事件を知っていた、けれど本人は無自覚で本人そのものは覚えてはいなかった。

ほかにも自分の行動が制限されたり、見知らぬ自分に操られていたり――

んー、いったい何が起こっているのでしょうね。

おそらくは、この世界にスライドされたゲームがリセットされた

かのような状態な訳です。
そうして生徒会へ入ることが無くなり、おそらくは未来が変わり生徒会役員とユウジとのつながりが途絶えたことなど。
かなり混沌とした事態になっているようです。そして、ホニが住み始める……生徒会を覗けばほぼ順序、前の展開通りですね。

第２０３話　√２－８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

姉貴の気絶で肝試しはお開き、姫城さんやユキには悪いと思った。
最初俺は姉貴とホニさん連れて帰るから、他のメンバーで続けてと促したものの。
気を使ったのかは分からないが結局皆帰ることとなり、実はじわじわと準備していたマサヒロの肝試し仕掛けが完全に徒労に終わった瞬間でもあった。
マサヒロは渋々、他の皆は「ユウジー、夜遊びもいいものだねー」やら「ユウジ様、またぜひ次の機会も……いえ、私が夜間――」と案外楽しそうに帰って行った。
二人の表情通り、こんな風に夜顔を合わせるだけというのも新鮮味があって確かに楽しいかもれない。
しかし俺はそれを考えるよりも、目を「×」にして気絶する姉貴をどうにかしなければならず――

「わー……わー……」
「……（汗）」

本当に神様を拾ってきました。気絶更新中の姉貴を負ぶさりながら下山し家へと向かった。
隣をひょこひょこと歩く自称「神さま」ことホニさんは家までの過ぎゆく風景に目を宝石のように輝かせていた。
聞けばウン百歳の見た目に騙されてはいけない、ご長寿さんなので一応敬語も試みるも「我を助けてくれた恩人だから敬語はナシ！」と、言われたのでタメ口。しかし流石に呼び捨ては頂けないので”さん”付けで通している。

「ユウジも大変だねえ、まさかミナ姉気絶するとは……重くないか？」
「まあ、ショックに弱すぎな気がしないでもないけども。重くは無いぞ？」
姉貴は思いのほか、というかかなり軽かった。
年上でスラリとした長身なだけに覚悟していたが、そうでもなかった。
「しかしだな、これは……」
……しかしこの背中に当たる柔らかな魅惑の感触に俺の理性はフルボッコ状態でもある。
おい、俺。冷静になれ、相手は姉貴だ、うん、姉貴。姉に貴族の貴と書いて姉貴。うん、染み渡った！
「慣れたっ！」
「何に！？」
そうだ、煩悩よさらば。俺は業務用スポンジでも背負っていると思えばなんと気が楽な事だ。
「それでユウジ殿下、この子はどうするのでせう？」
「いや……当分は家で預かることになるのか？」
絶賛放任中の母親は居ないし、無駄に小分けされた家の二階には使われていない物置代わりと相成った部屋がいくつかある。
掃除して片付けて有る程度の居住空間を確保した後、当分は過ごしてもらおうという考えだ。

「というかユウジしゃんは大胆だねー、まさか落ちてた女の子を拾ってくるなんてー」
「まあな……」
いつもの俺ならこんなことはしない。
いくら無情と非情と鬼畜だ言われようと、流石に少女誘拐紛い……てかガチ誘拐か。実のところは避けたい。
しかしこの子を連れ帰る、連れ帰らなければならない――そう直感が言っていたのだ。
猫を拾って育てるなんてチャチなものじゃないのは分かっている、それでも俺はこの人を連れ帰りたかった。
よろけたセーラー服と少しでも漂う寂しさに思わず、だ。なによりも彼女は強い意志で俺に連れて行ってほしいと言った。
だから……まだ身の上話も何も聞けていないけれども”保護”的な意味合いで、俺が独断で預かることとした。
「悪いか？」
「いや、逆にバッチコイだ！　こんなに可愛い子が来るななんて、ユウジグッジョブだ！」
「桐はどう思う？」
「ふふ、別によいではないかの？　こやつの意思でもお主の意思でもあるからな、わしは口出しせん」
とまあ、今好評気絶中の姉貴を除いた家族の方々は別に異議を唱えはしないらしい。
そうすると、残るのは一番何か言いだしそうなアンコール気絶中の姉貴である。
身の上もなにも知らない女の子が急に家へと介入するのだから、ある種の理不尽さに怒りたい気持ちは分かる。

しかーし、姉貴の場合はあることで怒りを露わにすることになる――

＊　＊

「ホニです、これからお世話になりますっ！」
「ああ、ということだそうだ」

家につき、目を覚ました姉貴へと簡単な紹介を試みた。

「許しません！」

ああ、やっぱり？　というのが俺の感想第一号であった。

「一応聞くけど、なんで？」
「なんで、って……そんな見ず知らずの女の子を連れ帰っちゃ駄目です！」
「っていっても、聞くところ帰る宛てがないらしいし……なあ」
「ごめんなさい、本当にいきなりで我儘だと思うのだけど……でも我は！　やっと、こうして外に出れたの！　あなたのおかげで……」

外に出る、というのはあの墓地から出るということだろうか。
ただの電波ちゃんでなく、全てを信じるというならば彼女は元土地神で、今は俺に憑く守護神となったらしい。
俺ピンポイントの神になったことで土地よりも大幅なスケールダウンな気がするがそんなことはどうでもいい。

土地神ということは、ずっと縛り付けられていたということも考えられる訳で、そうなれば――やっとのこと、俺が連れ出せたのかもしれない。

山を下りてからのホニさんはそこら中に広がる日常の風景を、あまりにも新鮮にあまりにも衝撃的に感じていたようにも見えた。

「なあ、ホニさん。本当に帰るとこないんだよな？」

「うん……我の居場所はあの石だけなんだ」

「姉貴は彼女をまた石のところに戻すの？　人通りどころか、誰も居ないあの場所で」

「……」

「頼む、姉貴非常識なのは分かってる。でもさ、とりあえずはさ。ここで預かることに出来ないか？　頼むよ、姉貴。迷惑はかけないから」

まるで拾ってきた子犬を、自分で育てるからと言って親に懇願するかのように。

俺は姉貴に頼んでいた。なぜ、ここまで俺は出来るのか疑問に思ったが、それは今はどうでもいいことだった。

「……わかったよ、ユウくんの頼みでもあるし。このまま見捨てることは出来ないもんね」

「姉貴……」

「部屋は地下室でどうかな？」

「……」

姉貴最後の抵抗？　ぶっちゃけ嫌がらせですよ、それは。

窓無し、光少なし、通気性悪し。夏はジメジメサウナ状態、冬は寒々と天然冷蔵庫と四季に渡って住めそうな環境ではない。

そのような最高の物件を姉貴は紹介したのだった。部屋は片付け

さえすれば沢山あるというのに。
そんな姉貴の大人げさに嫌気がさした俺は、ここで秘策に打って出る。

「姉貴、そりゃないよ。俺が連れてきたから……分かった！　よし、分かった、こうしよう！　俺に責任の一端は確実にあるわけだから、いっそ俺の部屋で一緒に。ホニさん、どう思う？」
「我は構わないよ！　ここに身を置かせてもらう訳だし、それにあなたの傍に居た方が」
「……お姉ちゃん、空き部屋、掃除してくるね！」

目にもとまらぬ速さで駆け抜け、遠くで階段を駆け上がる音が聞こえる。
作戦は成功に終わった。つまりは姉貴が反対していた理由はおそらく「自分以外の女性が更にこの家に増えるなんて」が大きな理由だと思われる。
だから、自分で言うのは難だが溺愛する俺の頼みなのに、ホニさんには目の敵のように素晴らしい物件を紹介したのだと思う。
そこで俺は、あえて”俺の部屋にホニさんを～”ということを挙げた、すればホニさんが俺と同じ部屋で生活することに危機を感じるであろう。
なぜなら、俺の姉貴は弟をひどく溺愛しているからだ。
例えるならば、まさにテンプレートな父親であろう。
いくら小さくともホニさんは女性、何かの間違いで結びつくことも無きに等しい訳ではない。いや、まあ現時点で俺にはその予定は無いけれども。
娘を嫁に出したくない父親のように、弟を婿に――という表現はかなりおおげさだが、いわゆる独占欲も少し存在するのだろう。
弟を渡したくない。二人が結ばれる、それは二人傍に居れば必ずしもとは言えないが、確率はおそらく跳ね上がる。

それを危険視し、嫌がらせが裏目に出てしまうことを恐れた故の行動だろう。

と、なんだこの腐った解説はと。今更自己嫌悪に陥る、なんだよ結ばれるって。

ほぼ初対面のホニさんと結ばれる妄想をしているのだから、かなりの頭のわきっぷりである。

変態か、俺は年下に平然と手を出そうとする変態なのか！　つまりはロリコンなのか、そうなのか！

むむう、少しは自制せねば。姉貴のピンク色の脳内のごとく重度の妄想パラダイスには陥りたいくないからな。

「よっこらせ」

さて、姉貴の手伝いにでも行くかな。

「あ、ホニさんはちょっと待ってて。ちょっと部屋整理してくる」
「……我の為にそこまでしてくれるの？」
「これからはここに住む以上一応は家族だからな」
「……」
「家族って表現悪かったか？　な、なら――」
「ううん、こんなに良くして貰えるなんて思わなかった。自分勝手で付いて来たけど……すごい嬉しいな。我はずっと一人ぼっちだったから、この愛情が温かい――」

きっとウン百歳通りだとしたら、土地神でどれぐらいあの場所ですごしていたのだろうと思う。きっと俺には想像もつかないほどに寂しい――

「……じゃ、ちょっくら行ってくるな」

「我も」
「いーや、まっててな。少しでも歩いて疲れてるだろし、ゆっくりしてて」
「……わかった、じゃあよろしくおねがいします」
俺はそうして慌ただしく物置兼空き部屋を片付けている姉貴の元へと向かった。

第２０４話　√２－９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

書き方が変になった

第２０４話　√２－９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

俺はこうして姉貴がせっせと片付けているであろう物音のする二階の空き部屋兼物置代わりとなっている部屋へと足を運んだ。

それも、一応ホニさんを連れてきた責任が俺にあることにある。

いくらそそのかしたとはいえ、丸投げは良くない。

ということで手伝いに来た。姉貴にかかればジョ●ョイのジョ●かもしれないが、なにせ入った記憶が今までで殆どない部屋だ。

姉貴が定期的に手入れしていたとしても限界がある。おそらくは埃がフローリングの上に見事な絨毯をつくり上げているであろう。

と、いうことで数枚の雑巾と水の入ったバケツを持ってやって来た。頭には三角巾を付けて”必勝お掃除人スタイル”である。

「（……入るか）」

しかし、ここでふと考える。この中で本当に片付けているだけなのか、と。

もしかしたら「こんな服あったんだー」と着替えてる嬉しはずかし（姉貴にとって）のイベントの最中かもしれない。

あるいはふいに少年漫画的なエロスシーンに遭遇してしまう可能性もないとはいえない。

ましてや少年誌でも青年誌でもアウトな「赤い核実験場」と呼ばれるコミック誌に連載されている作品の展開のような十八禁一歩手前な光景が展開されているかもしれない。

ちなみにそんな展開に遭遇しても、俺は目を背けることで事足りる。

そう、問題はそんな展開の中心となる姉貴だ。もうノリに乗って「赤い核実験場」と呼ばれるコミック誌でもアウチな展開、いわゆ

る襲撃をしてくる可能性が満に一つ無いとも言えない。
それほどに、最近の姉貴は危険だ。
生徒会濫用による襲撃に、日常でのあれやこれやアレ。もはや説明したくないほどに驚きな行動を見てしまっては……こういう思考にならざるを得ない

と、この思考〇コンマ五秒のこと。まさ刹那たる時間に考えられたことである。
そうだ、と手を打つと。俺は何の変哲もない木製ドアを右手で軽く叩いた。

「あー姉貴、俺だ。入るぞー」
「えっ、ユウくん!?　な、なんで」
「手伝いに来たんだけど……邪魔か？」
「邪魔じゃないよ！　いらっしゃいませご主人様！」
「……その出迎えは頂けないな」
「え、ユウくんは……おかえりなさ――」
「さー、入るぞー」

姉貴の謎の出迎えの言葉を半ば制して扉を開けると、目の前にはダンボール箱が迫っていた。

「……はぁー、出オチレベルだな」

思いのほか荷物量が多い。おいおい、これでホニさん用に部屋を空けれるのか？

「ユウくーん、こっちー」
「あ、ああ」

出オチと言わんばかりに積み上げられたダンボール群に圧倒されながら、人一人通れる合い間を縫って姉貴の声の元へと進んでいく。
ダンボール群のせいで打ち消された証明の灯りが次第に明るみを増し、開けた場所へと出る。
まさに姉貴を中心に片付けが行われていたようで、周りだけが綺麗にかつ床はかつての輝きを取り戻していた。

「わざわざごめんねー、ユウくん」
「いやいや、姉貴にまかせっきりじゃ悪いからな」

さっきの脅迫まがいのことはいいのかと言われればどうしようもないがそれは水に流して欲しい、水量大で。

「ユウくん……」

親孝行ならぬ姉孝行に感動したか、目を潤ませる姉貴。俺を相手にすると大体オーバーリアクションがデフォな姉貴であった。

「あるだろうけど、一応水と雑巾な」
「ユウくん……」

しかし姉貴のことだろうから、と思い床を見るとやはり余分に多く持ってきた雑巾とバケツ三杯分の水が置かれていた。
流石姉貴。しかし下でホニさんと話していた時間はごくわずかであり、二階は水周りはあるものの使用できないところにある為に水汲みに一階には一度下りなければならない。
しかし聞こえた足音は一度きりで、仮に忍び足をしたとしても少しは何か音が聞こえても不思議じゃない。
……どうやってこんな量の水と雑巾を短時間かつ、音もたてずに運んだのか。

謎が残る行動ではあったが、対して考えても意味が無いことを知ってすぐさま思考放棄をすることとした。

「じゃあ、俺はどこから……とりあえずダンボールはどこに――」

「……やっと二人きりになれたね」

うん？　ああ……聞き間違えか。

「姉貴、あのさ。ダンボールはどこ――」

「やっと二人きりだね、ユウくん」

……あー、最近耳掃除してないな。

「だから、姉貴？　ダンボールの退避場所を」

「ユウくんと私……二人だけの部屋」

……おかしいな、そんなギャルゲー脳だっけか俺。

「ダンボール箱をですね」

「ここが全ての関係の始まり、ユウくんと私の……」

幻聴か、聞き間違えか、はたまた暗号か。

「姉貴、何言ってるのかわかんないんだが」

「ユウくん。ここなら誰も邪魔は入らないよ？」

「えーと……ミナ姉さん？」

「……ここではミナでいいのっ」

「……」

嬉しくないギャルゲ展開キター。

いや、本当に嬉しくないって。姉貴だよ？　いくら美人でも姉貴。そう簡単にヨスガっちゃだめでしょう、というか俺掃除しに来たはずなんだが……そうだ、掃除だ！　クリーニングだ！　ホテルで言うベッドメイキングだ！

「ユウくん心配しないで……音はあまりたてないようにするから、きっと誰も気づかないよ？」

伏線だった！　さっきの水運びうんたらは伏線だった！

「俺は掃除をですね」

「掃除の前にユウくんとカンケイを築きたいです」

「……一応お聞きしますが、姉弟という関係なら俺の熟知する限り出来上がっているはずなのですが」

「もう、ユウくんっ。……お姉ちゃんに言わせるの？」

上気した肌、粗い吐息、据わった目。鑑みて分かることは――おそらくこれから訪れるのは最悪の展開ということだ。

「いやー、自慢じゃないけど鈍いからさ、俺。はっきりと――」

「結婚しよう、ユウくん」

俺の予想はあくまで、ヨスガる程度だった。いわゆる家族から恋人どうしへとランクアップ……まあ、これでも大問題には違いなく、今までならブン殴って解決するところなのだが。

いやあはっきりだね、はっきりですねえ！　それも予想を付き抜けて……結婚ですか！　これは笑えますなあ、なあ？　ははは……って軽快に笑えるかボケエ！

「落ちつけ姉貴、なんだその発言は。俺達姉弟じゃないか、法律上

は――」

「法なんて私たちの愛の前では障害でさえないわ」

まさかの法破壊宣言。

「いや、でもモラルというものは」

「私たちの愛で、そんな小さいことは目の前の塵と消えるの」

消しちゃった！　モラル完全消滅！　常識という二文字が姉貴の頭の中から確実に崩れ去っている事実を確信する瞬間であった。

「いや、姉貴。そもそも私たちとか言われても、そもそも俺は――」

「……昔の王族間では、血を深める為に近親間での――」

「言うな！」

まずいぞー、ひっじょーにまずい。

何がまずいって、ここは姉貴が造り出したフィールドであり、姉貴のどこにも隙がないことだ。

揚句の果にさりげなく、俺の来た道はあとあとご丁寧にも塞がれている、流石姉貴。認めたくは無いが抜け目がないぜ。

「ユウーくーん！」

「待て、待て！　お座り！　ええい、やめろおおおおおお」

ルパンダイブ（もちろん服は着用）よろしくのジャンプで俺へと襲いかかる姉貴。

しかし生存本能が働いたか、俺は寸前で体を横へと倒して丸太のように転がった。

「っぶねー、な！　って……ん？」

そして、その姉貴が近づいた瞬間に香る……鼻に着く果実系の香りと、アルコール臭。

俺が避けたことで呆気に取られている姉貴を裏目に、俺は体を起して言い放つ。

「姉貴、酔ってるだろ」

「……ユウくんは、何を言い出すのかな？　私は酔ってなんか――」

タガが外れたかのように発情状態の姉貴、理性の欠片も感じられず、俺の聞いた質問は十割九分返って来ない。そして姉貴から発せられた果実とアルコールの香り――

「……ワインか？」

「飲んでないよー！？　ただ、そこに瓶入りのぶどうジュースが――」

「素晴らしいほどにベタなボケですねえ！」

なんだその在り来りなボケは……そう思っているふつふつと苛立ちが沸き上がって来る。

なんで、片付けるだけでこれほどまでに手を患らわされなければならないのか。

いくら半ば脅しでも良心の呵責で手伝いに来たというのに、姉貴本人は曰くぶどうジュースでぶっ倒れていると来た。

さあ、俺。どう行動する？　貞操の危機ごときでビビってどうする、男だろ？　そうだ、俺がまずすべきことは――

「姉貴目を覚ませ」

と言って、持ってきたバケツの水をぶっかけた。
一応弁明するが、これは水道から入れてきたばかりの綺麗の水でありバケツも一応綺麗なものだ。
間違っても、家庭内暴力の発端ではないこと。弟から姉への虐待の現場と勘違いされないことを祈るばかりだ。
それにこれは正当防衛でもある訳だ。そんなところで、神様仏様と一応親への弁解を終わらせたところで。
濡れに濡れた姉貴を見る。どうやら冷水で一気に酔いが醒めたか、辺りを見渡し自分の濡れた服を見下ろす姉貴。
ちなみにこのとき”濡れたせいで下着が透けてたんじゃね？”とかいうくだらない疑問については受け付けるつもりは一切ない。

「……はれ、私どうしてた？　あれ、なんで私濡れてるの？」
「分かりやすい惚け方だなあ」
「？」

どうやら酔っていた時のことは覚えていないようだ。

「とりあえず、それじゃ風邪ひくから風呂シャワー浴びてきたら？」
「ユウくんといっしょに？」
「……姉貴覚えてそうだな」

なんとも都合のいい話だ。

「いいからシャワー行ってこいー、着替えは……」
「ユウくんのがいいな」

……まあ姉貴の服探しの為に部屋を探るのも気が引けるから、とりあえずは。

「……短パンとTシャツでいいか？」
「うん！　出来れば、今ユウくんが来ている奴が――」
「行けっつうの」

「ああ、もったいない……」と渋々自分で塞いだ道を開けて風呂へと向かった姉貴を見送ったところで、俺は自分の部屋へと向かう。
部屋にある時計を見て気付いたのは、これで三〇分も消費していることであった。

「……気が遠くなるな」

もしかしたら、今止めなかったら姉貴酔い潰れてたまんまとか？
……襲撃未遂にあったことを抜いても、俺が手伝いに行ったのは正解だったようだ。
しかし、このペースで……いいのか？

「はぁ」

引き出しから化学繊維の安い短パンと、畳まれた絵柄未指定のTシャツを取りだすと俺も姉貴を追って風呂場へと向かう。

「はぁ」

今日何度目も分からないため息をついた。

第２０５話　√２－１０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

テコ入れなお色気回？

第２０５話　√２－１０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

シャアアアア、と水が床のタイルを弾ける音が聞こえます。
人が六人ほど余裕で経てそうなスペースのあるシャワー兼洗い場で女性が
髪をたくしあげてシャワー口から出る適温なお湯を浴びています。

そうユウジ姉が、現在シャワーを浴びているところです。
流れるようになめらかで、丸みを帯びた肢体にそれぞれのパーツも素晴らしいほどに整っていますね。
細身ながらも出るところは出ている、アイドル顔負けでなんとも私からみると非情に羨ましい体つき……何食べたらあれほど大きくなるのだろう。
それでいて学校生活と生徒会から家事までこなす万能超人なのに……弟溺愛要素が残念過ぎるのは気のせいだろうか？
……ある種それぐらい、崩れた姿を見せられるだけでも人間味帯びていていいのかもしれませんが。
ちなみにＤＶＤやＢＤを売る為に湯気が働いてくれています、レッツ売上向上！

「ふん～♪」

シャアアアア（見えないサービスシーン中）

思ったんですがこの作品お色気少ないですよねー、まあスタッフの技量がないせいなのもあるんですが。
あとは特殊性癖過ぎて載せられないとか……いやスタッフ、スク水フェチやら汗フェチやら結構高度なものがあると思うのですが。
ある意味健全な青少年的色気要素でなく、陰湿な上級者向け色気

要素の比率が多いのはどうしたことでしょうね？

シャアアアア（心の眼で見るサービスシーン中）

というか今回の更新はこんな出来損ないの色気シーンで終わりそうなんですが。

確かにかつての同じ状況での片付けシーンが省かれたのは時間的な都合だとは思いましたよ？

それでいて、今度ばっかりはじっくり４話ぐらいかけるのはどうかと思うんですけど。

シリアスな展開に入るとコメディ要素展開出来ないのは分かるけど、序盤で出し切ろうとするのは駄目なんじゃないかな？

だからこの作――スタッフはガチで描いてみてもギャグにしかならないんですよ！

クソゲエってのは皮肉とかでなく予防線ですか？　自分の技量不足による予防線ですか？

はぁ……まったく。こんなこと言われたくなかったら、思い出したかのようにナレーター単独回出さないでくださいよ。

シャアアアア（上級者なら全てを見透かすサービスシーン中）

「はぁ……ユウくん」

このバカ姉は……もうユウジ姉とかゴロ悪いせいで使いたくなくなりました。

年上だろうと天の声では聞こえない！　今までも容赦してませんでしたし、実際ユウジのことになるとバカになりますからね、ユウジバカですね。

「はぁはぁ……ユウくん」

シャアアアアくちゃ（余計な音は聞き逃さない紳士達の見るサービスシーン中）

「ユウくん……ユウくんっ」

あれ？　これヤバ目？　フェイク？　それとも……いや、ないですよね？

バカ姉、表情見えないですけど大丈夫ですよね？

「ユウくん……すきぃ、ユウくん」

……（汗）ああ、スキーですか。スキーいいですよね、寒いですけど爽やかで良いスポーツですよね。

きっとこのユウジ姉も上手なんだろうなあ、ぜひ一度見てみたいなー

「ユウくぅん、私ユウくんのことがぁ……」

シャアアアア●●●●（規制の限界で心を研ぎ澄まして見るサービスシーン中）

マイク切断！　映像根絶！　はい、しゅうりょーしゅうりょー！　終わりだよー、はい公開録音の人は帰った帰った！　見せものじゃないよー、続きは十八禁ＯＶＡでねー

な、なんか足音がこっちきますね……！　あ、あなたは某知事の――

アニ●フェア参加団体激減で東京都涙目の要因をつくった石●じゃないですか！　まずい消される！

いやあああああ、こっちこないで石●！　決してヨスガってなんかないですって！

本当ですよ？　フェイクです。これは青年漫画にありがちなフェイク――それもアウト？

それぐらい許しなさいよ！　自分だって若気の至りとは言い切れない官●小説――

「ユウくん、すきぃ」

バカ姉いい加減にしろ！

第２０６話　√２－１１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

更新出来ず、すみませんでした。まだまだ寒い日常編は続きますー
ギャグセンスの欠片もないのは仕様

第２０６話　√２－１１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

サービスシーン中。俺は着替えを脱衣所に置くと速やかに退散した。

傍からシャワーの水の滴る音と別に声が聞こえるのだが、嫌な予感しかしないので颯爽退場。

着替えを持っていく際に半開きになった他の空き部屋兼物置を見つけたので、おそらくはそこにとりあえず荷物を運び込んでいるのだろう。

そうと分かれば行動は早い。見るからに分かる姉貴の私物以外はすばやく運び込んでいった。

「（この部屋、結構前から使ってないからな……）」

今掃除している部屋は、少なくともここ数年は人が過ごしてはいなかった。

テキトーに自分の部屋に入らない私物やら家財を詰め込んだ印象のあるこの部屋。

蒼然と積み上げられたダンボール箱の絵柄にも時代を感じる……いやいや。

”福山●物運送株式会社”って何だよ、何時の話だよ。その一方でアマ●ンの小型ダンボールが塔を形成してるし。

他にも明らかに骨董品な壺とか、電車の台車とか学校の机が数個鎮座している光景は非常にシュールだ……ここの時代設定が分からねえ。

「……あー、これか」

部屋の隅をみると、そこには空き瓶が転がっていた。そこからは

果実系のお酒の匂いが漂っている。

「ったく、マンガじゃあるまいし。ぶどうジュースと間違えて飲むとか……せめてファ●タだろ」

いやユウジ……それも五十歩百歩な気がするんですが。

「で、これは……っと」

瓶を拾い上げて見てみる、香るのは芳醇な葡萄の香り。そして、なんとも高価そうな緑色を帯びた瓶だ。俗に言うビィンテージワインなんじゃないか？

そしてラベルを見るに明らかに輸入物のそれはこう書かれていた。

『Ｒｏｍａｎｅｅ　Ｃｏｎｔｉ　１９６７』

「……え？」

これって、アレだよな……ガチじゃね？　ニセモノじゃなきゃガチじゃね？

「ロマ●コンティだよなあ……」

高級ワインの代名詞かつ、生産数が少なく需要も高いので安くならない……それで四〇年物。どっかで聞いたがウン十万は下らない上に、年代によればウン百万――

……おいおい、う●い棒が何本買えるんだ？　大当たり～、うまい棒一年分ならぬ一生分だわこれ。こんなのやお●んもビックリだよ。

「おそらくは……母さんのか」

母さん家に帰るときは片手にビール缶の入ったビニール提げて帰って来るからなあ……結構な酒好きな訳で。

やっちまったよ姉貴。おそらく母の隠し持っていたであろう秘蔵のワインを葡萄ジュースと間違えて飲んじゃったよ。こんな物置に放置する母さんもなんだけど。

ロマネさんも報われないな、なにせ葡萄ジュースだ。グレープジュースなら僅かに格好がつくけれども、姉貴曰くぶどうジュースだもんな。

この実はまずい状況にしばしば困惑、少し思考。うーん、うーんと唸ってみるやはり良い案は思いつかず。しかし俺は妙案を思いつき、左手を平らに右手を固めてポンと叩き。

「見なかったことにしよう！」

俺は何も見なかった、ということで通すこととしよう。まあ母さんが弁償するとか言い出したら、一応はフォロー……出来るといいなあ。

「ユウくん、お待たせー」

何も知らない（覚えていないは誤り）姉貴は湯上りの上気した体を俺の半そでTシャツに短パンのボーイッシュなスタイルで包み、乾き切れていない茶色というより今は栗色に近い艶やかでしなやかな長髪でやってくる。

学校生徒がこれを見たら溢れ出る色気に卒倒なのだろうが、俺はとうに見飽きているので何の問題もない。

「？　どうしたの、ユウくん？　私の顔何かついてる？」

「……いや」

なんでもない。きっといつか知られてしまうだろうが、それはもっと遠く未来の話だろう。責任感の強い姉貴が何をし出すかわかったもんじゃないから、とりあえずは先送りにしておこう。

「……！　もしかして、私と付き合ってくれるの！？」

「掃除の付き合いなら」

「そうじゃないよ、恋――」

「誰のせいで、こんなに時間かかってると思ってるんですかな？　お姉さん？」

「お姉さんなんて呼んでくれるなんて嬉し――じゃなくて、ごめんね！　真面目にやるから、うん！」

きっと姉貴の”付き合って”というのは掃除のことではないことを俺は確信していたが、反応するのも面倒なので、ドスを効かせてみた。

まったく、疎遠な姉弟よりは幾分もマシなんだろうけど……少しは自重してくれな？　姉貴。

第２０７話　√２－１２　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

更新ペースが駄目すぎる

第207話　√2－12　G・O・D・

「いやあ、姉貴……一つ聞きたいんだけど」

俺はあるモノを手にとって眺めながら首を傾げる。

「え？　お姉ちゃんはユウくんが好きかって？　そんなの分かってるくせにぃ」

「いやいや、そんなどうでもいいことじゃなくて」

そうそう、実にどうでもいい。そのどうでもよい加減だとしたら、スーパーで売れるうまい棒の本数ぐらいどうでもいい。

「ど、どうでもいいことじゃないよ！？　例え罪を犯してまでもユウくんとくっつく目標があるの！」

「もういいから、弟溺愛ネタは飽きたから」

使い古されたネタは衆人を萎えさせる。それが自己満足によるものならば尚更で、今回の場合は面白いよりも引きが勝っている、少なくとも俺には。

「がーん！　ユウくん、お姉ちゃんに飽きちゃったんだね。ごめんねごめんねごめんね、つまらないお姉さんでごめんね」

「いやー、だからさ」

俺はそういうことを言いたいんじゃない。こんな素晴らしい姉なんてそういない、ただし溺愛行動を除く。

「そうだ、お姉ちゃん止めればいいんだ！　ということでユウくん、

これからはユウくんの幼馴染で許嫁でつんでれでツインテールな女の子になるから」

「話を聞けい」

矢継ぎ早に暴走する姉貴についに堪忍袋の緒が切れる、そうして姉貴の頭頂部へと右手でチョップを入れた。

しかし既にこの国ではこんなこと姉以外の見知らぬ女性にやったら即訴訟されるであろう、もちろんやる気はないが。

「いたあ！？　でもユウくんにされたんだよね……はぁはぁ」

「なんならまた水被るか？」

一応ここに持ってきた水入りバケツは、幸いにも数個全てを使っているわけではない。まだ綺麗な水だろうから後始末に俺が苦労するだけで今の姉貴の暴走を止められるならば安いものだ。

「もうユウくんそんなに透けたお姉ちゃんが見たいなら素直に言えばいいのに、でもTシャツ一枚のノーブラだからきっと刺激が」

「じゃあ、それ燃やすわ」

庭でファイヤー、中に燃えていいのか分からないものもあるけども細かいことは気にしない。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。お姉ちゃん調子乗り過ぎました。それだけはやめて、本当にこれだけはだめなの。他なら燃やしていいから、私もいいから。これは私にとっての命の次の次の次ぐらいに大切なの。あ、もちろん一番大切なのはユウくんだからね？　その次は私の家族……ユウくん家族だけどそのうち家族の枠組みを越えると思うし、きゃあ楽しみだなあ、早くユウくん卒業しないかなあ。あ、でも卒業したらユウ

くんとの学校ライフを楽しめない……留年しようかな、そうだ留年しよう！　来年はユウくんと同じクラスで、同じ授業、同じ昼食、クラスメイトのノリで体育祭とか文化祭とか楽しんで……そしてＢｏｙ　ｆｒｉｅｎｄｓへ。ユウくん、だからね、私と付き合おう？　もう我慢できない、留年まで我慢できない！　あ、ならブラジルに行って結婚しよ？　大丈夫、私がユウくんの子供を授かれば結婚出来る法律があるらしいから、いざゆかんブラジルへ！　あれ、ユウくん黙ってどうしたの――」

新人声優顔負けの超早口を披露してくれた姉貴だが、その発言の半分以上は俺の耳に届いていない……ことにしておく。

いやだって留年とか聞こえたんスけど。それも何か俺と同じクラスになるためってんだから……キチ●イ染みてるぞ姉貴さん。

反応したら変化球どころかデッド狙いの剛速球が来るかも分からないので完全スルーを決め込むこととして、本題ことこのあるモノへの疑問をぶつけることとする。

「いやさ……三冊も要らないだろ？」

「ううん！　三冊は必要だよ！」

”冊”という単位を聞いて、少しばかり俺の指すある物について見えてくると思う。

辞書や図鑑でシリーズモノで沢山あることや、コミックやラノベなら実例もあるから許容できる、もちろん雑誌も含む。

しかしこれに限っては複数ある時点でおかしいのだ。それも内容が三冊共に完全に一致したまるで複製したかのように揃っている。

「これは記憶なんだよ？　思い出なんだよ？　……ユウくんが言っても、これは捨てられないよ」

ここでネタをばらすこととしよう。〝記憶〟や〝思い出〟という単語から思い浮かぶ人もいるであろう。そう、これは――

「同じ内容のアルバムが三冊あっても意味ねえだろ！？」

アルバム。正確にはフォトアルバムだ。その名の通り、写真を保管し写真を見やすいように並べて整理するための冊子だ。

最近は当たり前なポケット式で写真の入れ替えが容易な、まあホームセンターから文具屋でもおそらく買える普通の代物である。

例えば年代別や人別に分けて三冊なら俺はぎゃあぎゃあ言わない。しかし内容は全て、完全に枚数も挿入位置もまったくもって同じ。

「必要だよ……観賞用・保存用・布教用の三用途として！」

「どこぞのオタク理論か！」

そして写真の内容は、俺が反発せざるを得ないものである。

「それもなんで俺の幼少期の写真ばかり！」

「かわいいから！」

即答するなや。自分の写真が収録されたまったく同じ内容のアルバムが三つ存在するのだ、疑問どころか異論を唱えてもなんの不自然さもない。

「そもそも布教用ってなんだよ！　誰かに俺の幼少期布教してどうすんだよ！」

「必要だもん！　桐ちゃん、ユイちゃん、さくらちゃんにも貸したんだよ！？」

「あああああ、なんでそんなにヤバ目な奴らに貸し出すんだよ！」

さくらとか少なくとも一年も前じゃねえか……なんてことを。

「皆喜んでたよ？　ユイちゃんと桐ちゃんには複製版あげたんだ」

「コピー本じゃあるまいしそんな手軽に複製するなよ！？」

……ったく。

「でももう貸し出すなよ……」

「えー、ユキちゃんや姫城マイって方からも貸出してほしいって」

「どこでそんな情報広まったし！」

ユキさんに姫城さんだと！？　なぜに、そんなことが起るんだよ！

「ダメダメ、貸出は断固禁止！　じゃなきゃ原本燃やすぞ」

「！　……分かったよ、二人には謝らないとなあ」

「そんなことより、とっとと片付け終わらせるぞ」

「う、うん」

そこからの片付けは早かった。今までのグダグダが嘘のように姉貴も主婦モードに入り、本格開始まで一時間半かかっていたのに対し、実際の片付け・掃除は僅か三〇分で終了した。

当事者とはいえ拍子抜けだった。二五分経った頃には家具配置が開始され、まさに”なんということでしょう”状態だった。

他の部屋に放置してあった折りたたみベッドを整備し、綺麗なシーツとふかふかのベッドパッドと寝心地は俺の保証済みな枕が用意された。

三〇分経った頃には完全に物置の面影は皆無となった。カラーボックスを横倒しして作られた棚や、天井へと延びるしっかりとした作りの本棚に、プラスチック製の青い引き出し型衣装ケース、スチール製の卓袱台大の大きさのテーブルが置かれ、物置に眠っていた

黒色ブラウン管テレビを引きずり出した
。
　ホニさんの趣味は分からないが、居心地はそれほど悪くないであろう。あとはホニさん本人に足してもらえばいいと思う。

「終わったねー、ユウくん」
「本当、これだけ出来るんだからさっさとやればいいのに」
「ユウくんと一緒の時間が欲しかったからね！」
「一応、俺は姉貴を手伝いたかったしな」
「……きっとユウくんも私から離れて行くだろうから、少しだけでも――」
「ん？　何か言ったか？」
「な、なんでもないよ！　優しいユウくん大好き！　今度デートしよ！」
「断る」
「がーん！　そ、そんなぁ……」
「……か、買い物なら付きやってやらんこともない」
「！　うん、今度買い物行こ！　買い物というのは名ばかりのデートしよ」
「名ばかり言うな」

　その後、ホニさんに綺麗になった部屋に連れてきたところ。

「わー、すごい綺麗！　ありがとうございます！　うわ、なにこれ！　ふかふかだー……おお！？　この黒い箱は一体――」

と、非常に好評だったとさ。

第２０８話　√２－１３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

ザ・家族会議。相変わらずの姉貴の極上夕食に下鼓を打ったその三〇分後。

食器を片づけ、手洗いしやすくするために食器はぬるま湯に漬けてしばらく放置。

そんな間、家族全員が自分の部屋へと戻らず居間に集結している。その理由は他でもない――

「ホニさんのこれから、どうする？」

ある種家事を行う俺と姉貴だけでもいいのかもしれないが、一応家族全員の意見を募ろうとの魂胆が存在する。

ちなみに俺の「どうする？」というのは、ホニさんがここに住むのは決定事項で、ホニさんの部屋は確保した。問題はというと――

「ホニさん、ホニさんは学校とか行かないのか？」

「そういえばそうだね、ホニさんはどうするの？」

「学校……あー！　マナビヤのことだよね？　うーん、行かないかな」

答えは分かっていた。なにせホニさんは話によれば、長きにわたってあの神石前に居たというからだ。

だけども出会った当初からデフォルトの衣服が、持ち合わせていたのがセーラー服だった故に聞いてみた。

「というかホニさん、そういえばなんでセーラー服なの？」

「んー……ごめんなさい、これは言えないかも。あ、でも趣味でもあるよ？　かわいいよね、この服」

そうか……無理強いして聞くつもりはないが、なんらかの方法でセーラー服を手に入れたのだろう。

そうなると、問題は俺達が学校へと登校している期間・時間になる。

「ホニさんはこのままだと留守番になっちゃうんだが……いいか？」

「いいよ！　住まわせて貰ってる身だし、我もその間なら家事だってなんなりとやるよっ」

「ホニちゃんいいの？　家事って言っても……たくさんあるのよ？」

「時間は沢山あるから頑張る！」

家事やってくれるのはありがたい。俺の家は両親不在で昼には家はガラ空きとなる。もちろん学校に通い、姉貴に至っては生徒会で時間も要する。そうなれば日々の家事がどうしても十分に出来ないのだ。

平日は洗濯物も二階のまたしてもな空き部屋にエアコンを稼働して部屋干しがデフォルトで、土・休日のみ外干しとなる。

やはり日中に干せないの大打撃で、その空き部屋も除湿機を増設したりしてはいるが、現状洗濯物干し専用の部屋になって他の用途には使えない。

母親が仕事漬けな有り様もあって平日の日中に家事を出来ないのは当たり前、どうしたものかと困惑していたがこれは助け舟だった。

「でもホニさんって、今まで家事をやっていい――」

途中で己の発言の愚かさを思い知った。いやいや、だからホニさんは神石前で、と言っているではないか！　俺の馬鹿野郎、二回●ねっ！

「やったことない、やったことないけど！　我、頑張るからっ」
「……いいのか？　ホニさん」
「でもユウジさん、家事教えてね？」
「それは勿論」
「！　ユウくん、私にも教えて！」
「はは、姉貴。冗談じゃなかったらぶっ飛ばすぞ？　ということでユイに桐、これからはそんな感じになるがいいか？」

以下返答。

「いいんじゃないか？　というかアタシってそういえば家事とか殆どやってないなぁ……ユウジ、アタシやったほうがいいか？」
「いやいや、この言うタイミングはどうよ？　てか、皆と同じように学校行ってる上にバイトもやってるお前にゃ無理だろう」
「う、うーむ……だが！　時たま手伝わせてもらうぞ！」
「まあ無理はすんな、で桐は？」
「いいと思うが？　わしもなんだかんだで小学校に行っておるしな、知識はもともとあれどなかなか小学校を再体験するのは面白いからの、家にいるのであればやってもらっても構わないじゃろう」
「ユイと違ってお前は自分が家事をしていないのを気にしないのな」
「なあに、やってくれる者がおれば出しゃばっても何の得もないじゃろう？」
「なんというか……図太い奴だ、大物になるな」
「何を言う、最初から大物じゃ」
「それは単なる自画自賛かと」

「じゃあ、ホニさんよろしく。じゃあ明日は休日だし、明日にでも教えさせてもらうぞ？」
「はい！　どんとっ」

全員一致でホニさんへの日中の家事を任せることとした。

まとめ。

日中の家事＝ホニさん。土休日の家事＝姉貴&俺。

これでファブリーズでカビ臭さ防止をせずに済むぜ！　ありがと、ホニさん！　kろえは大分助かる！

それに家事を任せているとなれば姉貴もうだうだ言う事はないだろう。一応内心そんな作戦もあったのだった。

第２０９話　√２－１４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ギャグのノリを原点回帰してみるの巻

第２０９話　√２－１４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

五月二日

休日。それはもう清々しいほどに休日。大統領も驚きな見事なまでに休日。定期的に訪れる国民に約束された確固で遥かなる休日。ついでにローマな休日。

今日は日曜日だ。

「ＺＺＺＺ」

俺は八時になろうとする時を気にせず、いつも通り平常運行で安らかな寝息をたてていた。

平日ならば学校へのダッシュ＆ノーブレックファーストとなってしまうのだが、気兼ねなく日曜は酷い時はお昼まで寝過ごす。

目覚ましも沈黙し睡眠を妨げるのを止めて鎮座してくれているのだが。

ぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴ。

なるはずのない目覚ましが、時計の針が”八”を指したところで今の今かと待ち望んでいいたかのようにけたたましく鳴りだす。

誰かの実体験だと電子音が響くよりもアナログチックなベルが鳴る方が睡眠破壊には良いらしいが、俺は思うに五分五分だ。

「んん……？」

ぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴ。

何事かと目を開いて行くと、そこには味気ないアイボリーの天井と傘点きの明るさ調整を三段階出来る証明が見えるのみ。

「なんだなんだ……」

ぴぴぴぴぴぴ、ぴ。

飽きないのだろうかと思うほどに長く鳴り続ける目覚ましの登頂部のスイッチを右手で押すと、ようやくその機械音は止まり部屋には静寂が訪れる。

「え……と」

なぜ起きた？　なぜ目覚まし？

と、寝ぼけの三輪車の車輪ほどにゆっくりと回る頭で考える。

「……あっ」

思い出す。そうだ、なぜ起きたのか……昨日約束したばかりだろうに。

「っ、っ」

ぱちぱちと両頬を叩いて、仮覚醒を果たすと俺は自分の部屋を寝巻というより部屋着なよろよろ半袖半Tシャツを着ながら居間へと降りて行く。

「おはようございます！」

居間に着くと、キッチンから聞こえるカチャカチャと聞こえる皿洗いの音と正座をして俺の開けた居間への扉へと向き直る正座したホニさんが居た。

「ああ、おはよう……」

ホニさんはかなり目が覚めている様子……というか、あれ？

「ホニさん、目の下にクマがあるけど……寝不足？」

「え、ええ！？　そ、そんなことないよ？　我は元気いっぱいだよっ」

元気には違いないがそれは寝不足をひた隠しにする空元気にしか見えないのは何故だろう。

ホニさんはここに来るまで、あの山を降りてから周りの景色に新鮮さを感じていた。

そうなれば、新しく整えたホニさんの部屋。自分の部屋を舐めるように見渡したのではないのだろうか？

ホニさんは好奇心旺盛で、若干目新しいものには興味津々だ……ということは、だ。

「そういえば部屋どうだった？」

「すごいよかった！　あんな軽い卓袱台も、ふかふかの寝床も、太陽さんのにように明るい上の何かも！　なによりあの黒い箱っ、どうなってんだろうって気になって気になって、すっと見て――」

そこで自分が口を滑らしたと言わんばかりに口元を押さえる。ちなみに俺は完全に理解していた。

「そっかー、それは良かった……で、どうなってるか分かったのは

何時間ぐらい経ってから分かった？」
「……ごめんなさい、それで寝不足です」
内心ではインターネッツがここまで普及する数十年前の深夜のテレビにかぶりつく男子学生かよ、とツッコんでおく。
「ホニさん、寝不足はあまりよくないから」
「……はい」
しゅんとするホニさん可愛いなあともう一人の僕が思いつつも、口は本音がぼろぼろと出ていた。
「俺なんて最近は夜更かししたくても出来ないほどに睡魔が訪れて、うらやま――」
――しい、なんて思ってないんだからね！　色々凄いことが起り過ぎて疲労困憊故に直ぐに就寝しているのが虚しいわけじゃないんだからね！
……はぁ、厨ニ病と言われようが中学生のころは良かったよ。毎日U局で放送されるマニアックな深夜アニメに暗くなった部屋で一人テレビに被りついてみていたあの頃が懐かしい。
まぁ、あの頃はアニメが凄い面白かった時期だったのもあるけどね。
「？」
「な、なんでもないぞ……で、まずは家事のことだけども」
「！　うん、なになにっ」
＊　＊

「うう……お姉ちゃんに反応してくれない」

良かったですね、皿洗いしているおかげで涙がわかりにくくていいですよ？

ということでバカ姉涙目、一方のユウジは洗濯のやり方を教えに洗濯室へと向かいます。

「でも、もしかしてこれもが放置プレイの一つだったとしたら……！」

なんというか残念な方向にポジティブで私は若干引きます。前向きを向きを間違えるとおかしいものですね。

「……ユウくんったら」

一見ただ気持ちの悪い発想をしているだけに過ぎませんが、この妄想のおかげで皿洗いがはかどるはかどる。

ユウジが居た頃はわざわざスローでウォッシュしていたのに対し、凄まじい勢いで朝食で使われた平皿やら夜中に水分補給に使われたであろうコップをなんとものの二分間で洗い終えてしまいました。

洗いぬかれた皿は鏡も飛びのくほどの光沢というより、ピカピカでした。おそるべきユウジの放置バースト。

＊　＊

「まずは昨日出た洗濯物を準備する」

「うんうん、その衣類とかだね？」
「そうそう」

ちなみに我が家では、まあまあ古い洗濯機の型故に音もなかなかダイナミックである。
夜分にやれば近所迷惑になりかねないので夜十時以降は洗濯しない方針で、それ以降の入浴時等の洗濯物は平日ならば夕方まで放置、休日ならば朝に洗うことになっている。
ということでこんもりと男枠と女枠で分けられた長方体の布で編まれた色違いの籠をラックから下ろす。

「これをこの洗濯機に入れる」
「質問！」
「はい、ホニさん」
「”せんたっき”とはなんですか？」
「洗濯物、汚れた衣服とかをこの箱に入れて洗剤を入れると勝手に洗ってくれる機械だぞ」
「なんと！　……我が知らぬ間に世の中は進んでるねー」

ホニさんはまたまた洗濯機を好奇の視線でみる。しかし、この無邪気さ可愛い。

「洗剤というのは、これ。この白い粉をこの量入れるとちゃんと洗えるんだ」
「白い粉なら知ってるよ？　ええと……なんだっけ、コカイ――」
「ああ、ホニさんそれ違う」
「そうなの？　でも神石前でそのぶつぶつ交換？　してるところ見たんだけどなあ」

こんなチンケな町かつ、なんてとこで取引しているのかと。罰あ

たりだな、まったく天罰を下さない神様は何をやってるんだよ……って、ホニさん神様だった。それじゃしゃあない……法律的にはスリーアウト、チェンジだけども。

……やべえですよ、というかその知識があるせいで白い粉＝アレなのはマズイ。でも変に食いつてきちゃまずいから、ここで寸止めしておこう。

「それで、蓋を開けて洗濯機に入れる」
「入れるー」
「籠が二つあるけどもまとめて入れるー」
「入れるー」
「あと、ここにある洗剤を入れるー」
「食べるー」
「……食べては駄目だなあ」

間違いなく有害で一歩死に近づくだろう。そう考えるとどこぞのアニメで見た”皿洗い洗剤を油と間違える”というのは有る意味毒殺に近いのかもしれない。

「蓋をするー」
「するー」
「このボタンを押すとー」
「押すとー……東京消滅」
「え、俺一体なんでそんなボタン押しちゃったの？」

なにそのいきなりのほのぼの大量虐殺。おい洗濯機さんよ、東京を日本から洗う前に洗濯物を洗ってくれませんかね？

「……ボタンを押すと動き出すからな？」
「え、歴史が？」

洗濯物が洗濯機の轟音と共に廻り出すかのように、歴史も大きな音をたてて動き出した――その時歴史が動いた。

……ってやかましいわ！

「なんで、ホニさんはところどころネタを仕組むの？」

「え、え！？　我、変なこと言った？」

「……いいんだ、自覚ないなら」

尚更タチ悪いけども。

「それで時間が経てば、洗い終わり！」

「なるほど！　わかった、理解したよ！」

「おおそれは良かった」

「でも……」

「でも？」

「洗濯物はいくらでも綺麗に出来ても、汚れてしまった心と体は――」

「はーい、次いってみよー」

地味にホニさんは地雷なのかもしれない。

本人いわくの幾年を過ごしたことで謎の知識網が完成しているとしたら……

「どうしたの？　今震えてなかった？」

「い、いや？」

これから巻き起こるかもしれない展開に身震いした。

＊　＊

「はぁはぁ……ユウくん」

バカ姉は未だにキッチンに棒立ち。

「まだかなあ……焦らすなあ」

いや……当分来ないかと。というかバカ姉いい加減にしてくださいよ……

「ユウくんオ●ズにして●●●●●――」

平気で放送禁止用語使わないでくれませんかねえ！？　ピー音入れてるの私なんですから！

＊　＊

「あ、そういえば飯食ってなかった」

「あ、ごめんね？　我が教えてもらうの催促したから……」

「洗濯のやり方は覚えた？」

「うん、それはバッチリ！」

「それならいいや。じゃあ朝食にするかなー。姉貴ー、飯ってどこ？」

「ああ、ユウくんユウくんユウくん――」

「姉貴？」

「ああ……ああっ！？　ユウくん！　ご飯！？　ちょっと待っててねー」

「ああ、悪い」

よくバレませんでしたね、バカ姉。

第２１０話　√２－１５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

５－１参照〜

第２１０話　√２－１５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

その休日、ホニさんに次々家事を教えるもそれはもうスピーディに覚えてくれたのだった。

まさに俺顔負け、姉貴の次点といったところだろうか？　……それでも紆余曲折の場面があったので機会があったら話そうと思う。

ご飯は何故か和風なものしか出来ないけど、それは姉貴に並ぶ絶品料理達。ホニさんのつくるけんちん汁が素晴らしかった……

隠された家事スペックに驚愕しつつ、そうして俺と姉貴は安心して家事を任せることが出来るのだった。

五月六日

えーと、バッター代わりましてナレーターです。

現在朝の六時五五分、目覚ましの暴動開始まで五分を切ったその頃。

一応かけられていたはずの鍵がプライバシーよさようならと言わんばかりに開けられ、思わぬ訪問者が訪れたのです。

「……しー」

カメラが無いのにカメラ目線、こちらに向かって静かにするよう促す訪問者。

その容姿は藍浜高校制定の冬季制服で白地に明るい青を基調としたある種ベーシック、ある種古臭いデザインのセーラータイプの制服に身を包みます。

首元までで切られた茶色のショートヘアーに、実は結構胸が有り

くびれは分からりませんがほっそりとして足は長く長身なスタイル。

「おはようございまぁす」

……そして全てを破壊する、縁日商でさえ首を傾げるしっかりとガラスで出来たグルグル眼鏡。

目を覆い隠し、表情を大きく隠すそれは彼女のトレードマークでもあり。

「現在は朝の六時五九分ですー。あと数十秒で七時を迎えようとしています。そして今回の企画は――アタシが下之ユウジのベッドに入り込み、うんたらかんたら」

ユイです。というか分かりましたよね？　ヒントがここまで溢れているので気付いてくれるとは思います。

というかユイ、ユイの台詞は今のところ使いまわしなのにそれで略したら……

「ちなみに挨拶を出来るのは下之ユウジが起きていないのが条件で、目覚ましが鳴ってしまい起きてしまうとそれはアウトです」

……ええと、二度目ですが。すごくどうでもいいと思います。

「企画開始時間は七時。そして目ざましの稼働開始時間も七時、つまりアタシの瞬発力が勝負の鍵であります」

……カメラがあるかのように、何もない扉へと話しかけるユイ――

「そう話している間にもう七時まで残り数秒を切っていました、ではみなさんお楽しみくださいこれがアタシの雄姿ですっ！」

一応女子なのに雄姿とはこれいかに。まあ悪い意味で勇ましいっちゃ勇ましいですが。

ピッピッピッ、三、二、一、０、ピィ――

「（みえろっ！）」

命令形になってる!?

ピィリ（目覚ましの鳴ろうとする音）パシッ（目覚ましを止めるユイの手の叩く音）

「ご覧ください成功です！　てってれてれてー（肉声演出）いま時計の針は七時一分を超えました、やりました！　我が軍の勝利です」

……かなりの少数精鋭ですね。……って、この台本のセリフ覚えてるのはどうしたんでしょうねえ？　なんか変に板について来たせいでなんか悲しいですよ。

「では企画の本筋とも言える、下之ユウジのベッドにｉｎｔｏ！（暗いですねー、おっと、まだユウジは眠り続けています。　ではでは」

ユイは何かを思い当たったかのように自分の顔辺りをぺたぺた触ります。

「（あれ？　眼鏡は？　眼鏡眼鏡……ああ、頭の上にあったー！　アタシったらドジだなー、テヘ☆）」

はぁ……眼鏡かけたまま布団なんかに入るからですよ――って、え!?　前の展開と違う！
　いやでもなんで布団の中でもてへポーズ取るんですかユイ、動いたおかげで少しカーテンがめくり上がって朝日の侵入許しちゃってますよ！

「ん……？（朝か…ん？　布団の中に誰かいる？）」
「（ほほう、気付かれるか？　その前に退散するかな）」
「（誰……だ？　暗くて正確にわからねぇ）」

　ユウジは布団に入っていた手を動かしはじめます。すると――

「ひゃはは、ユウジ、何処触って……だ、だめだって――」
「んー……（ぬいぐるみかなんかか？　いや、そういえば倉庫から低反発クッション持って来たんだっけ？　にしては感触が違うな……）」
「ちょ、ユウジ……ひゃっ!?」
「？（むに？　なんか今までの肌さわりとも違うこれは……懐かしい、なんとも母性の――）」
「い、いぃやぁっ！」ドスッとユウジの腹へと衝撃が落ちました。
「げ、げふっ!?」

　……分からない方へのご説明。誰かいるのかと布団をかっぱらう手も有りましたが、春の布団のぬくぬくは惜しくとりあえずは手探りで探すことしたようです。
　そんな手がユイの体をぺたぺたと触り、果てには女性の持つであろうふくよかなで柔らかな部分……む、胸に触れてしまったのでした。
　あまりの当然さと衝撃に、ユイもキャラを忘れ――ごほんごほん、

我を失って少女さながらのリアクションを取った上でユウジへと腹パンを決め込んでしまったようです。

「はぁはぁ……」

布団の中で息絶えるユウジをよそに、布団から息を荒げて出てくるユイ。

あの眼鏡もかけられずに頭でズリ落ちそうになってますけど、大丈夫ですか――って、ええ!?

「びっくりしたあ」

ええ、これは……むぐぐ＜規制＞

「ユウジったらいきなりアレだもんなぁ……でも、腹パンはごめん、ユウジ」

むぐぐ……＜と手で胸辺りを隠すユイ、どこか顔も紅潮しているように見えます＞

「……あちゃー、殴って気絶させちゃったけども、どうしようかねえ」

むぐっ＜目を以前のバカ姉のように”×”にしながら倒れたままのユウジを見て＞

「……あれ、使うか」

何かを思い出したかのように自分の部屋へと戻るユイ、返ってくるとその手に持つのは――

「これなら入るだろう」

そう言い手に持つ”それ”を引きよせました。

第２１１話　√２－１６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

手抜き回？

第211話　√2－16　G.O.D.

「はっ！？」

俺は寝ぼけを介すことなく突然に覚醒した。そして違和感へとすぐに気付いた。

「俺……ベッドに寝てたよな？」

しかし俺は椅子に座っている、そして目の前には机。

「それにここは……学校？」

机へが有る程度の整列を成し、古びたチョークが刷り込まれた黒板にコンクリートの少し黄ばんだ白い壁、カーテン越しにあるアルミサッシの交差式窓に。天井には蛍光灯が点けられている。

しかし、誰もいない。教師もクラスメイトも誰も、誰もいない。きっと俺が今この教室には一人であることが容易に想像出来た。

だからもちろんのこと座る椅子も、目の前の机も自分のマイデスク・マイチェアーではなかった。

見事なまでに大量生産されるのに向いたデザインの学校机・椅子。そんな椅子に座ったまま、俺は机に自分で腕枕を作って寝ていた――らしい。

「しかし、なんで学校……？」

確かに俺は寝ていた、自分のベッドで布団へと入り朝を待たずに深い眠りへと落ちて行ったはず。

それがなぜに俺は学校に居るのかと。

「そうか」

夢か。

夢オチとかいいのか？　というか俺は眠りから覚める夢を見ているということか……どんだけ睡眠に飢えてるのかと。

「そうと分かれば……」

寝よう。どうせ睡眠に特化した夢なのだから、また寝ることも可能であろう。

何の根拠もないがそう適当に考えて、また同じ体勢で眠りへとつく。

「おやすみ……」

「いや、寝ないでくださいよ」

「……誰かの声が聞こえたような気がする」

「いや、すぐ近くに居ますから」

「え」

腕枕から顔をあげると、そこには――

「誰もいない……か、寝よう」

「隣にいるじゃないですか！」

「隣……うわお！」

顔を上げた状態から首をぐるぅと左へと向けると、そこには女生徒が立っていた。

「そんな叫びはないでしょうに……お久しぶりですね、下之ユウジ」

久しぶり……？

その女生徒は背丈は女子高生ならば中ぐらいの１６０センチ前後で、前髪が長く、髪色はアニメや漫画で見がちな深緑の髪色をしている。

前髪が大きく表情を晒すことを邪魔していて彼女がどんな顔で、俺に話しているのか分からない。

「？」

「とにかくですね、これで三回目ですね。それではまたヒントを――って、なんでそんな怪訝そうな顔をするのです？」

「いや、えーと。話が全く見えないというか、なんというか」

彼女は何を言っているのだろう。ヒント？　三回目？

「えーと……もしかして私のこと覚えてなかったりします？」

「……ええ、まあ。すみません」

「そうですか……あ、ちょっといいですか？」

「多分、俺の記録力がアレだった――って、一体何をっ！？」

突然彼女の顔が接近し、額と額が触れ合った。とにかく長い前髪を介してだが彼女と額が触れ合ったのだ。

「分かりました……やっぱり、おかしいですね」

「え、俺が何か悪いことでも――」

「いいえ、こちらの話です。少しばかり把握の出来ない状況になっていますね」

「……」

さっきから彼女は以下略。

「きっとあの子ですね、まったくお人よしとも残虐とも言える行為をやってくれるものですね――」
「いや、あの」
「ああ、ごめんなさい。今のは電話していたところでしたの」
「携帯持ってなくね？」

その手には携帯などというものはなかった。

「間違えました、テレパシーです。そして以心伝心です」
「無理があるよーな気がするぞ？」

そう応え、そして俺も疑問に思ったことがあった。

「えーと、やっぱり俺とあなたは以前合ってるのか？」
「会っているとも言え、会っているとも言えない。少なくとも今のあなたが私にあったのは初めてでしょう」
「？？？」
「……そろそろ起きたらどうでしょうか？　学校もありますから」
「いや、俺はそれよりもあなたの言う事の方が――」
「まあきっと少なからず会う機会はあるでしょうが、安心してください」
「いや、あのさ……」
「はやくねてくださいっ」

その時うなじ辺りに衝撃を受けた。それも結構強めの一撃。

「それでは下之ユウジ、次会えるのはもう少しでしょうから。その時はよろしくお願いしますねー」

そんな彼女の声をＢＧＭに俺の意識は途絶えて行った。

第212話　√2－17　G・O・D・

「はっ！？」

俺は寝ぼけを介すことなく突然に覚醒し――なんて書かせませんよ！

な、なんだ！？　俺の思考に別の声が――うるさいシャラップ、何回目ですかクソスタッフッ！　同じ展開これで四回目ですよ！？　なんですか、それほどに使いまわしに執着してどうするんですか？　そんなにアクセス数欲しいですか？　このアクセス乞食がっ、こんな小説長く続いてるから「あ、これ続いてるってことは面白いのかな」なんて騙されてきた人で成り立っている詐欺小説じゃないですか！　訴えますよ！　時間浪費罪で訴えますよっ！

……何の話だ？　――ああ、ユウジの思考でしたか。面倒なのでそれまでの記憶消しますね。

えっ、えっ？　なに？　俺が何を――3、2、1。はい忘れた、今この瞬間何も聞いていませんっ！

「はっ！？」

なんだろう、すごい頭が重い。さっきまで凄く唐突でメタで理解できないことを延々と聞かされたきがするけど俺は一切覚えていない。

それにしても、俺はベッドで寝ていたはずなのに――

「なぜに学校？」

はっ、少し思い出して来たぞ！　そういえば俺は「学校で目が覚める～」ってな夢を見たんだった。その中で深緑の髪色の女子生徒に会ったのだ。

確かに俺は家のベッドで寝ていたはず。しかし俺は気付かずにここへと、学校へと移動していた。それから考えられる事は――

「……てことは、これはテイクツー？」

そうか、二度寝したのか。他にも「寝ながら登校」「テレポートを身に付けた！」ということが頭に浮かんだが、今着用しているのは部屋着兼寝巻でなくなんとも黒々とした学ランで、中のワイシャツもその内に着るTシャツも間違いない。

というか寝ながら登校とかどれだけ学校に行きたいんだよと「学校に行って勉強しないと禁断症状のあまり体があらぬ方向に向いちゃう！」なんてことは無いわけで、というかどちらかといえば休日ラバーな俺としては絶対的にあり得ない。

テレポートを身に付けたならば「ジャッジメントですの」とか言って学園都市を――はとりあえずどうでもいい。

しかし、だ。

「……？」

見た夢と随分に違う。その相違点はかなり大きいものがあった。

一つにクラスはいつも通りの喧騒に溢れていたこと、二つに腹部に謎の痛みを感じる……内から来るものでなく外傷的な方面でだが。

「ふ、俺のブレインもその程度か」

以前に見た夢を完全再現出来ずに中途半端とは……まったく呆れ

たものだね。だからアニメ化は地雷だと言ったんだ、原作の良さや意味を理解せずに脚本をつぎはぎに作るから見ている側から見ていたらあべこべだし、面白みもない。あとは製作が一クールにラノベ六冊分を押しこむのもかなり無理が――って、何の話だコレ。

いつまでも自分の脳を馬鹿にしていても何も進展がない以上にじわじわと蝕んでいく虚しさがあったので、よりあえず止めておこう。

「起きたかユウジー」

するとセンス皆無のグルグル眼鏡をキラリ光らせながら下之家の隠れた同居人こと、巳原ユイがすたすたと軽い足取りにやってくる。

「起きましたけど」

「そうか、それは良かった」

なんと、この夢では質疑応答が出来るのか。ひゃぁ、最近の夢は便利になったもんだねぇ（？）

……というのは冗談で、俺の話すことも既にセッティングされていて日々の会話パターンから応答を選択されている可能性も十分にある。ならば返しが面倒な事を言えば――

「なんで俺は学校に居るんだ？」

「！？」

ユイは「あ、やべっ」のような驚愕と隠し事がバレて血の気が引くような表情をする。

「ユイ、なんで驚いてんの？」

「え、覚えてない？」

「なんで？」

「……」

まるで俺は忘れているかのような言い草だな。失礼だなあ、これでも現役男子高校生ですよ？　活力に溢れた青年ですけども？

そんな俺に忘れてしまうことがあるだって？　はっ、冗談はよしてくれよ。俺はこう見えても記憶力は悪くない方だぞ？

中学一年の頃、校歌をニ週間で覚えて更にバス・テノールを使い分けて歌えるほどまでの記憶力を持っているんだぜ？

例えば最近の夕食だ。在り来りだが応えられない若者は多い、さあ俺は胸を張って言えるはずだ。さあ一昨日の晩御飯が何だったかをっ！

……ご飯、味噌汁……あ、その日はコンソメか。そうなると、ハンバーグ……じゃなかった。コロッケ……だっけ、だったはず、だったたっ！

他には……無かったはずだ！　うん。ご飯、コンソメ、コロッケ――

「野菜系がねぇっ！」

体に悪いわっ！　油ものに炭水化物に汁物しかないじゃあないかっ、有り得ない。姉貴がそんなバランスの欠片もない献立をつくるとは思えないっ！

……ということは俺の記憶は完全圧敗ということか。ふふ、笑いたければ笑うがいいさ。この散々調子に乗った末にこのザマだよ！

忘れている繋がりでそんな献立よりも。なによりも、何に代えても忘れちゃならないことを、俺は忘れている気がしてならない。歯に小骨が引っかかったかのようにむずがゆく違和感のある感じ、その正体にはまったく見当がつかないが……それは忘れてははいけないことのはず。

「ぬわっ、いきなりどうしたユウジ」
「え、いやなんでもないよ。ははは、ユイはおかしなことを言うなあ。まあ、もともとユイそのものがおかしいとは思うけど」
「ぐっ、さりげなくアタシに槍を一挿しするとは……ユウジやりおる」

……あれ？　なんかどこからか方向性がズレた気が――ああ、なんで俺は学校に居るのかってことだ。
そもそもこれは夢で……いや、冷静に考えて夢なのか？　夢の中でも俺はネガティブ発想が炸裂するぐらいの根暗野郎なのか？
それじゃ夢もキボーもありゃしないじゃないか。せめて夢の中では明るく生きようぜ、俺！　今までは見ていた夢や、今の俺の現況から夢と断定していたが――

「ユイ、これって現実か？」
「……それは、どのような意味で？」
「いやー、今おれがユイと話しているのも含めてこれは俺の見ている夢なんじゃないかと」

後で考えればなんだこの電波野郎はと思われるかもしれないが、疑問に思ったから仕方ない……と冷静に考えてみたら相手はどう返せばいいのだろう。
これは夢ですか？　いいえ、現実です……なんでそんな質問をしたのか発した数秒後に後悔する俺、案の定。

「……打ち所悪かった？」
「いやいや！　俺はおかしくないよ？」

おかしいならこんな夢をみせる俺の頭だよ……ってアレ？　やっ

ぱりおかしくなっていたみたいですねっ☆

「……そっか、腹パンの衝撃が脳内に直結して――」

「腹パン？　そういや、少し腹部に痛みがあるな」

腹をすするとアザに触れたような小さな痛み……何かしらの打撃を俺を受けたか、どっかの角にぶつけたのだろう。

「ごめん」

「？　なんで謝ったし」

ユイが若干冷や汗を流しながら謝って来た……なぜに？

「いや……なんとなく、これは謝らないといけないと思った次第ですわねえ」

なんかユイの口調が変というより、別キャラに転身しているのが少々気になったが触れないでおこう。なにより、今俺が知りたいのは今のこの状況だ。

「いや……夢ではないかと思うけども」

「そうなのか……じゃあ、どうやって俺はここまで来たんだっけか」

そしていつ着替えたのかと。そんなこと聞かれたら「ハァ？　アンタバカア？」とか言って罵られそうだけども、気になるから仕方ない。

「ああ……それは」

「それは……？」

いつもの違って遠慮気味に喋るユイに、今までの言動や挙動を含めて疑問に思いつつもユイの指さす先を見た。

「そこの棺桶で」

「!?　えと、ごめんなさい。棺桶がどうしたことなのだろうか？」

混乱で若干日本語が崩壊している。というか何故掃除ロッカーの隣に平然と黒地に紅い帯の入った吸血鬼が今の今に出てきそうな風格を漂わす棺桶があるのかと。

いや、でもそういえば……これは――

「棺桶で、ユウジを、運んだ」

「なぜに!?」

まてまてまて、何事？　一体何故そんなことをユイがしたのかと。

「いやー、なんかユウジ寝かしてやろうかなと」

「いやいやいや！　なんで、僅かな睡眠時間を考慮してまで棺桶登校させたんだよ!?」

「それは……き、気分だ」

「なにその”今日はこのハンカチにしよう”的なニュアンスで俺が棺桶登校することになるんだよ！　というか起こせよ!」

「起きないようにした……いやっ、起きなかったんだよ！　うん」

「……？」

どうにもユイは何か隠ぺいしている気がしてならない。さっきか

ら傍目からみても動揺しまくってるもんなぁ。

「……棺桶でどうやってここまで運んだんだ？」
「引き摺った、というところかな？」
「引き摺る！？　ユイが？　一人で？　オンリーイベント？」
「ああ、まあな」

どこぞのＲＰＧで仲間に先立たれて、死んだ仲間の入った棺桶を引っ張らされる仲間の図……を、頭に思い浮かべる。
それをクロマキー合成をして、通学路の背景（通学する生徒込）と組み合わせるッ！

「シュールだな！？」
「そ、そんなことないぞ？　近所の奥様方も”あらあらまたモンスターに倒されちゃったのね”とか”仲間の方々に申し訳ないと思わないのかしら？　薬草の使いどころを間違ったのでしょうね”とか話していた」
「嘘付け！　このその発言はこの世界感を行方不明にするだけだから止めろ！」

実際のところは不審物だと奥様方見たのならば通報するだろうに。

「……で、ユイ。改めて聞こうか」
「なんでございましょう」
「どこからどこからがマジだ？」
「棺桶登校のところまではマジだ」

なんてことだ……それこそギャグであってほしかったのに。

「証拠にあの棺桶の中身をみるがいい、栄養チューブのゴミが入っ

ているからな」
「どうりで腹が膨れてるのかと思えば棺桶の中で器用にもチューブで栄養摂取してたのかよ！」
「腹膨れるのかよッ」
「ノリでツッコンでじゃねえ！　おい、ユイ。何か隠してるだろ」
「な、なんのことかなー？　ドュフフッフッ。ぼ、ぼぼぼぼくが何か隠してるとでも言うのかい？　し、心外だなあ」
「その口調は何かを隠してるうんぬんよりもムショウに殴りたい衝動が沸き起こるのはなぜだろな」
「まあその口調そのものが不快なのと、アタシがやってることによるダブルコンボ故だな」
「分かってるなら、凄まじいほどのタチの悪さだな」

……なんか朝から疲れたな。

「そ、それよりもさ――今日は転校生が来る日なのさ！」

「え？」

第２１３話　√２－１８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

別視点の物語、１人の寂しさは自分の周りから居なくなってからでしか分からないものですよね？

第213話　√2－18　G・O・D・

HRS√2－1

我は狼、一匹狼。でも孤独になりたかった訳じゃない、怪我をして仲間に見捨てられて――我は一匹。
痛む右足はびくびくと脈打って、そのたびそのたび痛みが走る。

「我をおいて行かないで……」

悲痛の鳴きも仲間は聞き入れてはくれない、足手まといにしかならないモノは切り捨てて行くのだ。
それは我も分かっていた。でも、我は――

「孤独は寂しい……」

取り残された我は、泣きだす空と同じように我も涙を流す。
寂しいよ、寂しいよ……誰でもいいから、我の傍に――横倒しになったまま我は孤独に苦しむ。

＊　＊

”あのこと”から数日が経って。訪れる人はやっぱり少なく、神石から見下ろすのは変わることのない景色だけが有る。
余りに代わり映えないその景観に、我はとっくの昔に飽きてしまっていました。

ずっとここで我は漂わなければならないのだろうか、いつまでも我はこの神石から離れることが出来ないのだろうか。
途方もない月日を過ごしてきた我でも流石に滅入ってきて。

「（仲間はあの後どうなったのだろう）」

何百年も昔に仲間に見捨てられた我は、それでも仲間のことが気になっていました。

「（……神様と崇められて、こんな力があっても一人孤独なら意味がないよ）」

崇められたのはずっと過去の記憶、我の存在は言い伝えになって伝説になって果てには作り話にまでなる……けれどもそれは忘れ去られていく。

「（我はここにいるよ、誰か我を救い出して……）」

悲痛の声は誰にも聞こえない。我は神様で、そして今はもう誰にも見えない存在なのだから。
少し前までは良かったのに、あの子のおかげで我は久しぶりに好物を食べられたのに。

「（また……食べたいなあ）」

四月二五日

ここに来る人は殆どいない、居るとすれば寂れた神社の前を丁度

良い道草の場として使う者だけ。
たまにチュウガクセイという人が訪れて、色とりどりの本を広げては置いて帰って行き。
退屈な我はそれさえも好奇の対象で、それに書かれた事柄をすぐさま頭に叩き込んでいました。
その意味は分からないけれど、あまりにも退屈過ぎて”知る”ことしかできないでいます。

「（この山を降りたら一体どんな景色が広がっているのだろう）」

少しは知っていても百聞は一見にしかずとも言うし雑誌に載る絵、それらを聞いていても実感が沸かなかった。
するとある人が我の居る神石へと何かを抱えてやってきました。

「よいしょっと」

持ってきたのは白地に果物の絵が描かれた箱と、何の変哲もない木の板。
その箱の上に木の板を載せると「これで、よしっと」汗を拭う仕草をするも一滴も汗をかいているようには見えません。

「神石ねぇ……あっ、どんな神様が祭られているのか調べ忘れてた」

その人は我に興味を持ってくれた。あまりに久しぶりで我はそれがとにかく嬉しかった。
辛いのは忘れさられること、孤独になること。それはいままで我が過ごした幾年を踏まえて言えること。

「まあ、今度調べるとして……じゃあ神様、これを置いておきますね」

置かれたのは朱色で頭頂部に葉の生えた丸っこい果物……みかんだった。

「（……例えどんなものでも、それが我の為とあればうれしいな）」

言ってしまうとみかんは生前に食べ飽きていた。それでも……その我へと向けてくれる気持ちがひどく嬉しかった。

「（名前もしらない方、ありがとう）」

その人の背中を見送りながら、我はみかんの皮をむいて口へと運ぶ。甘くて酸っぱい……普段のみかんの味。でもいつもよりも美味しく感じて、ゆっくりと食べる。

＊　＊

そのあとも人が訪れた。女二人で歩いて来て本やらお菓子やらを置いて行った。

それらは新鮮で、過去十何年分の知識が手に入りそうな分厚い本も、草木を切るのに重宝しそうな小刀などもあった。

ここへと訪れ我のところへと物を置いて行ってくれる……そんな嬉しい出来事が続き、我はとにかく舞い上がる。我の為にこんなにしてくれるなんて――

そして……運命の出会いなのかもしれない、彼がやってきて。

「ユウくん……ユウくんっ」

先程から二人で歩いて来ていて、今回は男と女の二人だった。
男の方は女の方をみて呆れているような、ひいているかのような表情をみせている。

「さーて、貢物貢物っと」

そして彼がおいた、その中身に我は驚き。嬉しさのあまり大きな声が出てしまった。

『わ、好物のお揚げだ♪』

第２１４話　√２－１９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

修正予定～

第２１４話　√２－１９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「えと、誰？　どっかに隠れてんの？」

！？　彼は”誰”と言った。それも我がお揚げに反応した時を同じくして。

まさか、本当に。我の声は聞こえないはずなのに……でも、彼の言っていることは――

『あ！　聞こえてた？　うん、我は我だよ？』

何気なく、それでいて驚きが悟られないように明るく振舞う。彼には聞こえている。

試しにしてみよう、もしかしたら……もし出来るのならば――

『じゃあそっちに行くねー！』

「！？」

我は準備を整える、仮初めの肉体を借りるのだ……そして中へと入りこんだ。

手足の動作を確認してみたり、頬を右手で引っ張ってみたりする。問題無かった……ただ引っ張った頬が痛むけれど。

そして我の居た岩からゆっくりと降りて行き我の好物を持ち、我の声が聞こえていたように思えた彼の元へと向かう。

「よっこいしょー……って、なんであなたは我の好物を？」

「え？　これか？」

返してくれた。言葉を返してくれた。嬉しさがこみあげてくるが

ここは必死でこらえる。
もっともっと話がしたい。

「そう！　あなたの持ってるそれ！　我の好物はお揚げなんだよー、その様子をみるに偶然持ってきたのかな？」
「はぁそうなんですか。ええ、たまたまですね。食べる？」

そう言って彼は透けた四角い器に入ったお揚げを前へと突き出してくる。

「え、いいの！？　わぁ、ありがとー！　じゃあ遠慮なくいただくねっ！　うぅぅん、おいしい！　やっぱこれだね！」

美味しかった、それは本当に久しぶりで。こうして人と直に話すのは幾年も生きてきて二回もなかった。しかしその二回も会話しているとは到底言えない、神様という立ち位置から一方的な願望を我にかけるのみだった。
でも、今度は違う。こうして美味しいお揚げを貰って話せている。純粋な会話が出来ていた。

「それで、君はこんなところで何を？」
「えーと……眠ってたの？」

眠っていることは嘘じゃなくて、我のかつての肉体はこの石の下で確かに眠っている。
そしてそれを離れた魂は、我はこの石に絡め取られているかのように放してくれなかった。それからずっと我はこの石で過ごすことになり。

「……こんなところで？」

「こんなとは失礼なっ！　我が祭ってあった神聖な石だよ！」

祭って”あった”それは言い間違えでなく、かつてのこと故だった。今は我は祭られてなどいない、そもそも我の存在を知る者が僅かしかいないのだから。

でも、こうして先程の男や女の方も我を目的に訪れてくれて……まだこの世界で我の存在が生きていたことに何度も感動させられた。

「うん！　我こそ美桜山の農作物を護る神！」

農作物を護り、恵みをもたらす神として崇められていたことがある。それに我には――

「……えーと、とにかくあなたは神様なんですか？」

「うん、そうだよ！　そして我の名前は”ホニ”！」

ホニ「穂に（宿る）神様」ということから我に何百年も前に付けられて、それを我は気にいって使い続けている。

「我の姿が見えてる？」

今まで我と話は出来ても、見えているというのは初めてかもしれない。

我が入りこむだけで、存在しているはずの仮初めの肉体でさえも他人には見えなくなってしまった。

だから彼には特別な何かを感じる……何の違和感もなく平然と、今まで出来なかったことが出来る。

「（！？）」

どれだけやっても見えない壁に阻まれるように、一定の範囲までしか動けず鳥籠に閉じ込められていたようだった。仮初めの肉体を使ったとしても、それは無理だったのに。

でも今は抜け出せた。一歩を進めた。

「決めた！　我は、あなたたちについて行く！」」

そうして我は、彼と出会い彼と過ごすこととなった。

……強引で勝手に決め込んだことだけれど。もう一人にはなりたくないから。

そして我が初めてあの石から離れることができて、初めて会話が出来たから。

彼には悪いけれど、少しの間わがままを許してほしい。そして彼は――いや、ユウジさんは。

第２１５話　√２－２０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

わ、笑いのポイントが分からない！？

第２１５話　√２－２０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

ええ、まあ時間軸戻っての「五月六日」ユウジが謎の棺桶登校を果たした朝のこと。

「今日は転校生が来るデュバァッ！」
「なんだよその出オチ」
「いんやあ奇をてらってみたくなってね」
「……奇をてらうという表現は今に限らずお前には過去現在未来夢現日常茶飯事オゥルウェイズ適応されると思うんだが」
「ん、最近では久しぶりだが？」

天然なのか！？　既にユイのキャラ作りが奇をてらった末に滑っている残念キャラだというのに……本人はそういう認識ですかそうですか。

ゲームのキャラを探してもここまで統一性の取れていない語尾・人称や四季通して保ち続けるテンションそしてキラリ輝く教師も呆れるグルグル眼鏡、ここまで濃い人物像はそうはいないだろうと思う。

ましてやこいつは”ゲーム”のキャラなどではない。ガチであり素でありデフォルトだ。それ故にたまり繰り出される天然か策略か判断つかぬ行動に白旗を上げざるを得ない。

むしろこいつと比較すればゲームから現れた彼女達の自然さといったらない。逆にこっちの現実サイドのユイや姉貴、それに”あいつ”やら彼女のいる方が不自然極まりない。

ゲームの主人公になる以前から濃い方々に囲まれていることも、ゲームが突然に現実と融合しゲームから現れた”彼女”達への違和感などを感じない理由なのかもしれない。

「で……転校生だっけ？」
「数日前に言っただろう？」
言ったっけ？　ああ、言ったか。ものの数秒で思い出した。そういえばそんなことを抜かしてた気がする。
「グッドニュースだぜい」と教室に滑り込み勢いで近くの机・椅子を吹っ飛ばすというなんともハタ迷惑な登場をしつつも俺は律儀に「で、グッドニュースってなんだ？」
あれだろ、そうだ。お前の欲しいギャルゲのタイトルとかが発売されるんだろ？　なんだっけか「D・C・X」だっけか？　あれ長く続いてるよな～、もう無印出てからニ〇年ぐらい経つもんな……ってその発言は時間軸が崩れるから止めて？
またはは、そうか。お前が最近ハマってるアニメのLDだろ？　えーっと「とあるお兄ちゃんなんて夢も希望もドラゴンストラトスですか？」だっけか？　タイトル長いよな～各テレビ局の番組欄での略し方異なるせいで確認しにくいって……ってその発言は実際の時間軸と現実を混同させているせいで状況把握がしにくくなるので止めて？
――と俺が思考する度に何かが割り込み異論を唱えてきた。　はは、何を言うのやら……って誰だよ？
と、まあそんなことをじゃないかとあながちニアピンを狙っていたが。
「よくぞ、きいて、くれ、まし、た！　転校生が来るんだってサ！」ということについて適当な返しをした上でそのあとグダグダ喋るとM&――おっと追手が来たようだ、さらばだ！　ユウジ！」なにか不穏なな展開を臭わせつつも足早に走り去ったことを覚えている。
まあ、転校生は既にその時聞かされ。実のところそれほどまでに期待していなかく、クラスメイトの男女よりも関心の薄い俺は冷めた反応になる訳で。

「そうか、良かったな」
「それでその転校生――って、なんでそんな冷たい返しなの!?」
「いや、興味ねーもん」
「またまた御冗談を～」
「……冗談を言う顔に見えるかね？　ワトソン君」
「なんでいきなしホー○ズネタ挿しこんだんですかいユウジさん（ダンディボイスで）」
「てか興味ねえ、女であろうと男であろうと興味ねー」
「ダミダヨユウジクン！　そんなこの学校では話題にせざるを得ないほどの一大イベントを、みすみすと不参加とするのかね!?」
「いや、もともとなんだそのイベントは。ただ転校生が来るだけだろ？」
「ちっちっち、甘いなユウジ。あまりに平穏で退屈で変化も起伏もないありふれた流れるだけの日常に唯一落とされる清涼剤……それが転校生という奴だよォ！」

まるでライトノベルで「非現実世界に行きてー、あー女の子落ちてこないかなー」とかな主人公の友人Ａが言いそうなことをさも当然のように言うが、どうだろう？
そりゃ美女なら驚きもするし、美男子ならばクラスの女子勢は喰いつくかなあ……なんて思う。

「中国やドイツやらの代表候補生が来るなら驚きだな」
「ユウジからＩ○ネタが出たことにアタシは驚きだよ。というかアタシは美少女ならいいぜいっ！」
「いやー、でもさハードル上げても転校生が苦労するだけだぜ？」
「アタシは代表候補制の方がハードルがグングン上げられていると思うんだが」
「まあ俺はちょっとやそっとじゃ驚かないぜ？　宇宙人・未来人・超能力者……なんでも来いや！」

「どこの涼〇さんだお前は……ってそのボケはアタシの特権！　許さぬぞっ、ユウジィ！」

しかし結局は現実だ。そう簡単に美女・美男子がやってくる訳がない。そうこれはまぎれもない現実だから――

『ふふ、甘いなユウジ』

「！？」

突然頭に響く声、先程のとはまた違う高く幼い声だ。しかし老いた喋り方が大きな違和感を孕んだ――

「（桐……だよなあ）」

『なんだユウジ……他の女子が良かったと申すのか？』

「（うん）」

『え、否定しないの』

「（そりゃ、桐だとガックシ来るね）」

『その冷たい反応にわしはガックシじゃ！』

最近絡んでこないかと思えば、こんなところでである。まったく、一体何を思って桐になんかテレパシー能力を与えたのか憎むべき相手がいない故に空回りしている。

そんなわけで、久しぶりの桐とのトーキングタイム。正直あんまり嬉しくない、というか面倒くさい。

「（で、なに？　何も用事ないなら切るぞ？）」

『いやいやいや、公衆電話とかじゃないぞコレは』

「（おかけになった電話は現在使われておりません）」

『途中からは無理があるじゃろうて』

「（おかけになった電話は相手側の都合によるお繋ぎできません）」

『着信拒否されとるー！？』
「（ガラにもなくツッコミ入れてないで、はよ用件言えや……俺は気が短いんだぜ？）」
『誰のせいじゃと思っとるのかのう……まあよいわ、大したことではないのじゃがの』
「（……じゃあの）」
『だ・か・らぁ！　なんでそう簡単に受話器下ろすように言うかなあ？』
「（口調口調）」
『……！　おっと失礼失礼。それで、ユウジ。貴様は先程”まぎれもない現実”と言ったな』
「（……果たしてそう言えるかな？）」
『いやいや話を伸ばさんでいいから、尺とか気にせんでもいいから』
「（そう？　なら、どうぞ。三分間待ってやる……もうテレホンカードの残量少ないしな）」
『えらいリアル指向！？　ご、ごほん。真面目に言うぞ、うむ』

するとらしくなく桐は深呼吸すると言った。

『この世界での転校生は果たして現実の人かの？』

「（……！）」

なるほど、と俺は一瞬で理解した。
俺が今把握している状況は「この世界は現実に”ルリキャベ”のゲーム設定やシナリオにキャラ設定に至っても擦りこんだものである」「起きているのは確かなことで、ここで受ける傷も記憶も確実に蓄積される、現実となんら変わり無い」「今俺が知りうる上で存在するヒロインは四人。ユキ、姫城さん、ホニさん、桐」というところまで。

そして桐のいう事を考えると今回訪れる転校生は”ゲーム”のヒロインである可能性が高い。というかここまでのフリでそうじゃなかったら桐叩く。

『ちょっとしたドキドキイベントに遭遇するかもしれんが、気にするのじゃないぞ？』

「（Q．ドキドキイベントが気になって夜以外眠れません、どうか教えて下さい）」

『A．ユウジによる転校生へのセクハ――って、なんでわしはノリに乗せられやすいのじゃ！？』

「（フフ、理解したぞ？　そもそも転校生と遭遇しなければそんなドキドキイベントならぬセクハラには発展しないいうことだ）」

セクハラ、セクシャルハラスメント。かつて父親が怒鳴り散らし一家の大黒柱としていたのは今は昔、男尊女卑の思考は尻すぼみとなっていき、それまでの恨み辛みと言わんばかりの女尊男卑の時代が到来している。

セクハラという行為はした者を地獄の底へ突き落す、例えそれがまったく意図し得ない不可抗力だったとしても、女性側から見れば何も変わり無いセクハラなのだ。

つまりはそんなドキドキイベントと引き換えに俺の学校生活やら社会的生命が終わりを迎えることも十分にありうる。

それを知ってさえいれば回避行動や対策を練るのが常であろう。

ということで俺はそんな展開には持って行かないことを宣言しよう！

『お、お主！　貴様は女の体に興味がないのか？』

「（ふっ、セクハラしてまでは知りたくないものさ。それに俺は既に薄い本で学んでいるからな！！）」

『う、薄い本は独断と偏見と狂気と性癖にまみれた一番教材にしてはいけない部類の気がするのじゃが！』

そういう風に薄い本の意図とポイントを理解している桐もどうかと思うぞ？

「（ならばギャルゲにエロゲだ。かつて友人は言っていた”ギャルゲは俺にとって教科書で、エロゲは参考書”だってね）」

エロイ人はよく言っていたものだ。

『今は関係なかろうに！』

「（うん、あんまり関係ない。とりあえず怒りやら軽蔑をされるような行為を俺はしない！）」

『……まあ、警告をしただけじゃ』

「（一部は俺が誘導したけどね！）」

桐は面倒くささえなくせば使いや――げふんげふん、扱いやすい子である……って意味があまり変わらないって？

『それでも、貴様にその呪縛から逃げれるか傍観させてもらおうかのう』

「（望むところ……と、言いたいところだが。小学生なお前はさっさと自分の持ち場に戻ってろ）」

『ふむ、ここに意識を置いてもそれほど影響はないが……それではの。健闘を祈るぞ』

……なる。転校生はヒロインか。

「まあ、俺はユキ一筋だしな」

ああ、もちろんホニさんもほぼ同列でかわいいです。

ということで桐の曰く”セクハラ”なんて展開になってしまった暁には、あとあと大変そうなのでなるべく関わらないようにしよう。

それに……昨日の俺は何故か今日に起りうることを全て想定したかのように今になれば思える。偶然には出来すぎることが起きたのは昼休みのことだった。

第２１６話　√２－２１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

まさかのユキ回、ユキとホニさんは感想見るに人気が高いのはなぜだろう？

第216話　√2－21　G・O・D・

ユイとユウジがコントを繰り広げる少し前、つまりはユウジが未だご就寝の頃。休日に肝試しに参加した女子（又はヒロイン）が登校し始めていた。

比較的早くに登校した姫城さん、ユイからの連絡を受けてユウジが先に行くことを知っていたユキはマサヒロといつも通り合流しながら登校しました。

ちなみに二人きりだからって何の展開も起らず、マサヒロのなんともどうでもいい話題に律儀にも相槌を打っていたとのこと。

更に補足しておくと、マサヒロは自分の設置した肝試しトラップが大失敗しかなり日曜は寝込んでいたらしい……ってこれはすごいどうでもよかった。

するとユキは自分の机に座り、それでいて机でご就寝のユウジを眺めているとある人物が話しかけてきた――

「おはようございます、篠文さん」

「ああ、姫城さん！　おはよー」

私とユキはまた友人が増えたのだった、その名も姫城舞さん。

なんとも長くしなやかな黒髪は私もかなり羨ましい、それにスタイルも良くてびっくりだ。

サヤカちゃん……あ、私の友人なんだけど。サヤカちゃんの聞く噂によればかなり男子に人気があるとか。

……美人さんだもんねえ、モテモテなんだろうなあ。

そういえばユウジは彼女のことどう思ってるのかな？

もしかしたら……うーん、ないといいけど――ってユウジが誰を好きになろうと私が口を挟むべきじゃないよね！　でも、それは気になって、もしかしたらその好きなった女の子に嫉妬しちゃうかも

……ああ、私悪い子だっ！

もう自己嫌悪だよ……でも、いつまでも意気消沈していてもしょうがないから、気分を切り替えてみる。

話は戻って、最近は姫城さんとも話すようになり昼食も一緒だ。

彼女とは気が合うようでユウジのことを話しているとかなり盛り上がる……ううん！　他の話題も話すけど！　つい、ね？　ついだからね？

それで最近はミナお姉さんとも話してユウジの幼少期のアルバムを譲ってもらえることが分かって、姫城さんにも聞いてみたら「欲しいです！」と目をキラキラ光らせて言ったので追加注文してみた。

いつになるのかなあ、わくわく……ってユウジのことなんてこれっぽちも興味なんか――あるよ？　あるけどね、仲良く過ごす男の子のことが気になるのは当然だよね。

うん、たぶん。れ、れれれれれれ恋愛感情とかではないはず！

きっと、そうだよ！

「篠文さん、土曜の事どう思います」

「肝試しの日だよね？　それがどうしたの？」

「ユウジ様とユウジ様のお姉さまが少し年下の女の子を連れてきたことです」

「……あっ」

そういえばそうだった。ユウジとユウジのお姉さん二人で肝試しをしたというのに帰りには一人女の子が増えていた。

中学校ぐらいの背丈にこの高校とはまた違った、落ちついた紺色がベースのセーラー服を着ていたあの子。

その後はミナお姉さんが倒れちゃってあやふやになったけど……あのあとどうしたんだろう？　なんかユウジの近くを付いて行った気がするのだけど。

「……私が考えるにユウジ様はあの女の子を連れ帰ったように思えます」
「どうして？」
「私のカンです」

女のカンってやつだね！　……本当にそういうのは良く当たるからなあ、気になることは特に。
たしかにあのまま付いて行くのは流れ的にあり得る。

「じゃあユウジは……」
「そうです、連れ帰ったということになりますね」
「！？」

ユユユユユユユユユユウジに限ってそんなこと！　犬でも猫でも狼でも無いんだよ！？　そんな女の子を連れるなんて……そんなユウジが大胆な行動をするなんて。

「どうせなら私も連れ帰ってくだされば良かったのに」
「……」

どう反応すればよいのだろう「うん、そうだね」という返しは誤解を生んで、何か修羅場が展開されそうなので自重しておこう。

「でも変じゃない？　じゃああの女の子は肝試し会場、墓地に居たんだよね？」

気になっていた。というかユウジ達が肝試しを行っている間の怪談トークをしたばっかりに少し考えていた。
怪談や怖い話にありがちな「気付くと一人増えていた」ということを当てはめてみると……

ユウジとミナお姉さんの二人で墓地が会場の肝試し会場へと向かった、そして帰って来ると二人にほかにもう一人小さな女の子。

もしかしてお化けさんだったり？

「……」

「篠文さん？　顔が青ざめてますけど、大丈夫ですか？」

「いや、でもないよね……でもなんかナチュラルに帰って来たからもしかして、ユウジ達は気付いてなくて……」

「篠文さん？　あのー」

「は、はいい！」

「震えていますけど……寒かったりしますか？」

「ええと、想像で寒気はしたかも」

「風邪をひいているとかでは……」

「ないよっ！　うんっ」

これはユウジが起きたら聞いてみないといけないかもしれないな、うん。

「自分の家へと連れ帰ったと考えるべきか、交番に迷子として連れていったのか気になりますね」

「いやー、でも冷静に考えて家に連れ帰るなんて……誘拐だよね？」

まごうことなき犯罪だと思う。でも、もしだよ？　もしさおれが本当なら――

「ユウジ様のストライクゾーンがあの年齢ならば、前者はあり得そうですね……」

ええと、代弁された。なんでユウジのことになると姫城さんとは

以心伝心するのだろう。

「……起きたら聞いてみましょうか、篠文さん」

「そうだね」

そしてユウジは起きると手近に居たユイと話し始めていた、合い間を見計らって行ってみよう。

第217話　√2－22　G.O.D.（前書き）

復帰？

第217話　√22　G・O・D・

「ユウジ様」

俺がユイとオタコントをこんな朝っぱら暇だなと言わんばかりに展開していたそんな最中、姫城さんがすたすたとユキを連れてやってきた。

にしても姫城さんとユキという組み合わせは絵になるなあ、一時間と三〇分以上眺めていても飽きないだろう。

学園の花が俺の元へとやってくる……そう考えると俺って凄くね？　と思いがちだが俺は自分の力でそうなったんじゃないからな、と少しばかりネガティヴ思考へと陥る。

たまたま俺は主人公になれただけで……もともとの俺には何の魅力もないからな。

俺とヒロイン二人を現すとしたら、地を照らす太陽と地に生えるゼンマイってところか。え、山菜なめんなって？

なぜか過去の古傷が疼いて後ろ向きな気持ちになっていたが、主人公になれたのだからそれはエンジョイすべきだろう。

そうだよ！　この二人にホニさん……最高の面子じゃないか！

俺がふさわしくないなんて諦めてちゃだめだよな、俺が彼女らの隣を歩いても違和感のないような男になればいい！

え？　他に妹みたいなものが居なかったけ？　……誰だそれは（素）

そう思ったら、テンション上がって来たー！

ああ、相変わらず今日もユキさんは可愛いなあああああああ！

「あのユウジ様」

「あ、ああ姫城さん。おはよ」

しまった、思考展開し過ぎて姫城さんの呼びかけに答えられなかった。

いけないいけない、しっかりせねば！

「ユウジ様にお聞きしたいことがあるのです」

「ん？　何？」

「正直に答えていただけますか？」

「ああ」

朝のネクラユウジからココロハイテンションユウジへと僅か思考二〇秒で変身を遂げた俺は何でも答えられそうな気がするぞ！

まったくもって確信なんてないけど！　さあ、質問カマン！　なんでも相談箱も飛び退くユウジですよっと！

……しかしこの時ハイになり過ぎて気付いていなかったが姫城さんの眼の中に冷たいなにかが浮かんでいたことをその時俺は知る由もなく。

「昨日ユウジ様が連れていた方は、あの後どうなったのですか？」

「……え？」

「ユウジ様が肝試しの会場から帰って来る時に付いて来た女の子、あの後どうなりました？」

連れていた？　なんだ、それは。俺がまるで女の子を誘拐したみたいな言い草じゃないか、はっはっはっ、何の冗談を姫城さんは……姫城さんは、冗談を……冗談？

「交番に迷子として送ったのですか？　それとも……」

それに続くことを知っている、そしてそれを言いかける姫城さん

の表情は笑顔のままドス黒い空気を漂わせ始める。
うん、そうか。やっぱり俺は連れ帰ったのか。俗に言う誘拐ってヤツか。
盲点だったなー、あの場所には姫城さんもユキもマサヒロは終盤空気だからともかく居たんだよな。
あの時弁解やら何かするべきだったと今になって思うよ。いくら姉貴が倒れたからってちょっと気絶した程度だったしな。
そして休みを挟んで姫城さんの中では疑問が膨れ上がったのだろう。

「それは、だな……」

なんでも相談箱なユウジさんは、なんでも答えます。それが例え自分の犯罪行為を証明してしまうことでも、だ。
そういえば姫城さんはユキも連れてきたんだっけ？　そういえば昼食時とか休み時間も二人話している姿をみかけたりしてるなーってことは、可能性の問題だが。もしかしたら姫城さんの疑問はユキも持っていたりするのだろうか？
実際こうして姫城さんだけでなく、ユキも後ろに待機している…その現状の理解が進むうちに俺の額には冷たい汗が流れ始める。
こう見えても俺は汗っかきではない、まして春陽気の残る月末に発汗してしまうなど周囲の環境によるものならほぼ有り得ない。
有り得るのは長距離走やら球技などの体を動かし発汗作用のあるスポーツ中＆後。
そして、自分の立場が危うく。それでいて逃げ場などなく崖っぷちの窮地に立たされた時。
そのあまりのプレッシャーに体は正直に、額から一滴二滴と冷えた汗が流れる。

これはマズイのではないのだろうか。

そう俺は悟った。さっきのボーイズハイな俺はどこへやら、その質問から逃げるように俺は席を立った。

「あー、鉛筆たりねえや。俺濃度Bの鉛筆じゃないと書けないんだよなー」

「……ユウジ様？」

その姫城さんの鋭く冷たくなっていく言葉に俺は脚を止めざるを得なかった。

「悪い姫城さん、ちょっと俺はそこの購買までショッピングに行かなくてはならなくてだな」

「……購買はまだ開いていませんよ？」

思い出せば購買の営業時間は八時半のこと、早め登校故に今は八時を回ったばかりの生徒もまばらにしかいない空虚な教室と学校。

「ユウジ様」

「はい」

「言いませんでしたか？　正直にお答えください、と」

「ああ、覚えてる」

「ということでお答えください。ユウジ様はあの女の子をどうしたのですか？」

「……」

冷や汗は止まらず、姫城さんから発せられる険悪な空気の濃度は各段に増している。

これは……答えたら殺られる、そう俺は感じざるを得なかった。

そして答えなくても殺られる。

究極の二択でハッピーエンドは存在せず、二つのバッドエンドがこちらにおいでと各自手を振っている。
逃げずに死ぬか、逃げて死ぬか――いや、死にたくない。
誰か助けてほしい、どうすればいい。土下座でもなんでもする。
学食をおごってもいい、頼むよ誰かさん。
見渡してもまばらにいる生徒は交流などなく、肝心の時に役立たずな家の女子勢（桐を大きく含む）なユイはヘッドホンで音楽を聞き始めている。
すると、助け舟を出せるとしたら姫城さんの後ろでこちらを意味深げに見つめるユキだけだった。

「（ユキ……）」

アイコンタクトを試みる。するとユキは答えてくれた。

「ユウジ、あの子はあの後どうしたの？」

頼みの綱が外敵へと回った瞬間だった……まあ、考えれば妥当なことで。その僅かな希望に託していただけなのだが。
……もう終わりだと、バッドエンドでさようなら。皆ありがとう、応援ありがとう、俺は次回作から頑張るよ。
だからせめて俺は逃げずに話して有終の美の飾ることにする。
俺の骨は海でも投げ捨ててくれれば本望かな？

「ええとだな、実は――」

第２１８話　√２－２３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

復帰２？

第218話　√2－23　G．O．D．

「……そうですか」

俺は結局話したのだった。ホニさんを俺の家へと連れ込んで、それでいてこれからも居住と共にすることになったこと。

身寄りがなく、このままではいけないので暫定的に――と、説明した。

聞いている間の姫城さんは先程のドス黒オーラは途絶え、真剣に俺の説明および弁護を聞いていた。

後ろのユキさんも「そっかー、そうなんだー」と言いつつも少し納得のいかない表情でいる。

そして、全てを俺が話したところで姫城さんはこう言い放った。

「それでは、私も住んでいいんですよね？」

「……はい？」

衝撃の発言すぎる。

「それでは、っていう意味が分からないんだが」

「私が家出をして、暫定的に住まわせて貰えば――」

「まてまてまて！　なんで家出をわざわざするんだよ！？」

すごい、ホニさんの境遇というか条件に合わせにくるとか……なんというか予想の斜め上を行くな。

「それは、ユウジ様と一夜を共にしたいからです（キリッ」

「いやいやいや！　なんで一夜まで経過ぶっ飛んでんの！？　俺はそんな邪な気持ちでホニさんを引き取ったんじゃないんだからね！」

「……ユウジ、なんでツンデレ風になってるの。というか姫城さん！　い、いいいいい一夜を共にするなんて簡単に言っちゃ駄目だよ！」

「簡単に決めたことじゃないですよ？　――出会った当初から決めていたことです」

「いくらなんでもはえええよ！　姫城さんは自分を大事にすべきだから！　俺みたいなクソヤロウとか絶対今後黒歴史だから！」

「ユウジはなんでネガティブなの!?　ユウジは自分を大事にすべきだと思う！」

「……学校から直接よろしいですか？」

「よろしくありませんっ！　だからホニさんはほぼ緊急事態なんだって！」

「私も緊急事態ですユウジ様、いつユウジ様が寝取られるか気が気でなく……」

「いつ俺には彼女がいたんだろう……」

『わしじゃな』

「まぎれこむな！」

「えっ、何が!?　ユウジ、まぎれるって何が!?」

「ユウジ様……私を家に上げるのは嫌でしたら、家の塀前でもよろしいですよ？」

「よろしくないって！　じゃあもうあがってよ！」

「ユウジ!?　さりげなくなんで了承しちゃってるの……はっ、姫城さん策士だったんだ！」

『おいユウジ、浮気したら許さぬぞ。そしたらわしは一生口聞いてやんないゾ！』

「結構だよ！　お前は勝手にしろ」

「お前だなん……ユウジ様、ここは学校ですから」

「学校じゃなくてもアウトだから」

「これが本当の奥さまは女子高生だね……」

「ユキもさっきから妄言ばっか吐かないでくれる!?　なんか事態

ががやこしくなってるから」
「え、えっ！　私何か変な事言ってた！？」
「あ、おはようございます高橋さん。ユウジ様の伴侶になりました姫城舞です」
「お、おまままままままっ！　ユウジッ！　この貴様ァッ！」
「まて、まて、落ちつけ。なんだそのコンパス、学校ではそんなもの今は使わないぞ？　な、冷静になれよ。ケイイチ風に言ってクールになれよ……って、おーい誰か助けてくれー」
「呼ばれた気がした」
「おおう、とあるカオスの状況悪化さんことユイさんが乱入してきた！　いや、お前は勝手に音楽でも聴いてろ」
「うおう、修羅場好きこと修ラバーなアタシにとっちゃ今の状況は大好物、ユウジさんごっつあんです」
「ええーい皆黙れ！」

そのカオスな様々な声混じり合う展開は一〇数分にも及び、なんとか俺が叫び続けることで収拾がついた。

「そういうわけだ」
「そうで――」
「ごめん姫城さん、シャラップ」

黙れである、静かにでもなく命令形な黙れであった。
それを言われた姫城さんはシュンとするもそれはまったくもって自業自得なのでスルーだ。

「という経緯でウチで預かることになった」
「えぇー、それはユウジねえぞ……合法的に見せかけて誘拐とかな」
「……眼潰しと耳潰し、さてマサヒロクンはどちらがお好みかな？」

「えぇと、なんでもないっす」
「でもユウジ、そういうのって警察に届けた方がいいんじゃないの？」
ユキの意見は至極まっとうだ。でもホニさんにはそんな意思はなく、俺も出来ればその手段は控えたい。
「それが正しいんだろうけど、本人が望んでないからなあ……一筋縄ではいかないだろうし、警察もどういう対応をするのか」
児童相談所に連れて行かれる可能性がある。そこで預かってもらえれば万事解決――などではない。
ホニさんが普通の子だったらそれは出来たことで、彼女は神様だ。少し力めば頭頂部からは犬耳が、尻尾もあるらしい。それが見つかったら大変な事態になる。
物語で言う獣人が現れたとかで騒ぎにもなるし、それから平穏な生活が送れるとは到底思えない。
それを言えば一般人は皆パニックか好奇な視線を浴びせるだろう……でも、こいつらには話しても大丈夫層に思えた。
ユイもマサヒロもおちゃらけてはいるが分別はあるし、ユキはそういうことは一切口外しないだろうし、姫城さんも納得してもらえると思う。
驚かれてもしょうがないけれども、行動が狭まるよりも。なにより姫城さんが完全に納得するにはそんな決定的な理由が必要だった。
「それにな、ホニさんは――」
俺はホニさんのことを話す。最初は皆信じられていないようだったが「今度機会があったら紹介するから」と言うと。
「まあ保留だな」「うん、ユウジが嘘言っているようには見えな

いけど」「確かめたら私も納得すると思います」と言ってくれた。
そして他の生徒はもちろん、家族にも口外しないことを約束させて。今後紹介することを俺も約束した。

朝のホームルーム前の濃密な時間が終わり、授業が始まる。

「（そういえばホニさんは今日から家に一人だっけ）」

気になる。なるほど小さい子を学校へと送り出した娘を溺愛する父親の気持ちが少し分かる。
今はどうしているだろうか、いやホニさんは家事の覚えも凄まじいほど早かったし、年齢的にはケタ違いに大先輩だから心配する必要は皆無なんだろうけど。

「（あの容姿を見ちゃうとな……）」

どうにも不安に、庇護欲が掻き立てられる。正直ホニさんが今家で何をしているのか気になってしかたなく。
いつもはそれなりに頭に入れながら板書する授業も、手は動かすものの心此処にあらず状態である。

「（この時間帯だから今は洗濯物を干している頃かな……）」

洗濯物を物干し竿に背伸びしてかける姿が目に浮かぶ。なんと微笑ましいことか、是非にまた見たい。

「（気になるなあああああああああ）」

その時の俺は気になるあまり、貧乏ゆすりが秒速四連打並みのスピードになっていた。

周囲からは「下之くんの机のものがカラカラと落ち続けてる……」「あれは貧乏ゆすりなんてものじゃない、あの振動数とその均等性を考えるとあれは伝説の富豪ゆすりだな」「下之くーん、教科書逆だよー」「おいおいユウジの机で消しゴムがダンスパーティしてるぜ」「ユウジ様の振動をこの身で――」「あまりの揺れに次元震が起りそうだぞ、皆伏せろ！」とヒソヒソ聞こえたが俺はホニさんが気になって仕方なく、そんなことに意識が向くことは無かった。

第219話　√2－24　G・O・D・

流石の俺も二時限目、三時限目と時間が経てば「ここで考えてても仕方ねえな」と思い始めていた。

それまでは俺の起こす貧乏ゆすりのせいで「みろよ、黒板が微動してるせいで世界史担任が四苦八苦してるぞ」「おいおい俺のマイスイートベイビー（消しゴム）達が今度はディスコ開いてやがるぜ」「この次元震のパターンは……ヤツが来る前兆ッ」「ガラスがカタカタと武者震いしとるぜよ」「……ほっとけば本のページがめくれてくれるから便利」「ユウジ……それだけお金に困ってるんだね」「ああっ、ユウジさま！」とクラスに迷惑をかけていたらしい。

ユウジ……凄い、貧乏ゆすりで今日の話題かっさらっちゃいました。

というか皆想像力豊か過ぎて色々に困らなそうですね……だんだんこのクラスが全体的におかしいことに気付いてきました。

あ、ちなみにこの出来事は「ゆすりデイ」として語り継がれ――ってセンス無さ過ぎですよ！？

＊　＊

四時限目を終えるとやっとのこと昼時だった。どれだけ待ち望んだことか、待望の時である。

棺桶登校による弊害で朝食を食べ損ねたことにより、授業への集中力の低下、ホニさんが気になり過ぎてストレスが溜まり貧乏ゆすりで解消する――そんな事態へと発展していた。

ちなみに棺桶で栄養チューブうんたらかんたらがあったが、あれ

は良く見れば水だった。後付けでなぜ変えたかは今回の展開のせいでは断じてない。俺の見間違いによる誤解だ。

朝ごはんって大切だなあ、と思わせてくれる。そんな朝ごはんをつくってくれる姉貴……いつもありがとう。

姉貴の居ないところで心から感謝しておこう、そんなこと本人目の前に言ったら自分の気恥かしさよりも姉貴が卒倒&襲撃しかねないので止めておく。

そんな訳でやっとことの昼食だ。いつもなら姉貴お手製プロ顔負け弁当か俺謹製適当弁当、または学食か購買なのだが今日に限っては違う。

というか一応鞄は持って来れてたけど、弁当なんて入ってない訳で。それならばどうするのか、学食でも購買でもなければ――しかし。

「ぬかりはない」

「え、何か言ったユウジ？」

「なんでもないぞー」

そうして俺は鞄をまさぐり例のブツを取りだす。これは俺の愛用品で、何度もお世話になる代物だ。

しかし俺は気付かなかった――棺桶引っ張って来たユイも登校時間を考えれば朝食を食べる時間などなく、ユイも朝食抜きの飢えた状態だったことに。

「そのカレーパンもらったあああああああ」

いきなり獣と化したユイは壁・天井と次々に飛び移ってどういう力が働いて張り付いているんだというレベルなコー○リアさんと同レベルの謎の動きを見せて俺が鞄から取り出したソレを奪い去った。

しかしそんな普通なら空腹にそのユイの行動が重なって憤怒する

ところなのだろうが、俺は極めて冷静だった。

「ユウジっ、このカレーパンが欲しいなら追ってくるが良い！　ハッハッハッハッ！」

「……」

「ん……？　どしたユウジ？」

「おいおい、後で代金払えよー」

若干醒めた目でユイを見ると、それだけ言って鞄に視線を移した。

「え、その反応は考えてなかった。てかここは”俺のカレーパン返せやゴルアアアア、じゃなきゃキスしちゃうぞおおおお”だろ」

「返せやはあり得てもなぜ俺は突然にキス魔になったし」

「これからの統計だと……」

「未来の統計を取れるお前には驚いた」

「なぜにそれほどに冷静なんだぜ……？」

「え、だってカレーパン一個だろ？」

「――ああ、なる。他にもパンか握り飯があるのか、なーる」

「まあな、ただしジャンル一種固定だけどな――」

「え」

そうして俺が鞄から展開するはあるブツがどっさり入ったビニール袋。

その中から一つ取り出してブツをみせる――

「カレーパン……だと！」

「それもこの中身は全部……な？」

ということで昼食用に買い置き、事前購入しおいたカレーパンがしこたま持ってきた。

そして何を予感したか昨日のうちに鞄に詰めていた。

ちなみにその経緯についてはこうで「久しぶりにカレーパン食いてえな」「そうだ、月曜は基本外食の日だから明日にすっか」「姉貴ー、明日は適当に買っていって食べるわー」といった感じ。

その後、商店街のコンビニやらスーパーに行って売っているカレーパンを買い漁った結果、十個ほどビニールに入っている。

十個という数は多くみられがちだが、あの炎髪灼眼の討ち手ことシャ○さんでさえもあの小柄な体で土色紙袋の中にメロンパンさんを十数個忍ばせていることを考えればそれほどでもない。

まあでも実際には一度にその量は食べないが、買ってきたものを適当に入れただけなので食べなかった分は間食用か明日の昼食の足しにするという計画が脳内決定済みだ。

言ってしまえば一つ取られても痛くも痒くも無いので、空腹時にユイを追いかけても体力を浪費するだけ。奪われた分はあとあと徴収すればいい――ということからの冷静な対応だった。

「そうか……いくら？」

「一〇五円だけどメンドイからワンコインで」

「ああ、どうも……」

ということで俺は昼食再開。他の皆は呆気に取られていたが気にしない。

皆が唖然とする理由には”ユイとユウジのコント”や”ユウジの持ってきたカレーパンの数”などもあるだろが、俺は気にせず袋を開けて製法が改善され油のあがりにくくなったパン生地とスパイスのピリリと効きま切り野菜の入ったカレーパンを頬張っていた――

ちょちょちょちょちょちょ待ってください。本来ならば、以前ならばこの後の展開は”カレーパンを奪取したユイを追いかけるユウ

ジ”から”生徒に溢れた廊下を駆け抜けている内に転校生にぶつかって”そして”あのイベント”になるはずなんですが……え？
回避？　生徒会だけならずまたしても、転校生フラグも消滅……！？

もうだいぶ変わってきてますけど、いいんですか？
これじゃ姫城のこれから行動も完全に無くなりますし……数珠繋がりでイベントが崩れてますよ。
どうなるんですか、コレ？

第220話　√2－25　G．O．D．

ところ変わってユウジの家です。
ユウジが気になるあまり語り草を作ってしまった原因であるホニさんはというと――

『ほにさんのいちにち』

こうですか？　わかりません。

＊　＊

我の朝は早い。

「ふぁぁ」

――わけではなかった。ユウジさん達に比べると少し遅い。
近くに置いてある時を刻む機械を見るに太く短い針が「7」補足長い針が「6」を指そうとしているところで我は目覚めた。
我はせーらー服と呼ばれる本でいつか見た学校制服を見に纏い、腰をも超えて床につかんばかりの黒い長髪はベッドで生き物ように複雑に寝ていた布団に投げ出されている。

「……起きないと」

元々眠ることが好きだった我にとっては朝はおっくうだった。それでも、ここに住まわしてもらっている以上は努力しなければばらな

らないと我は思う。

「頑張ろう……ファイトだよ、我」

頬をぺちぺちと軽く叩いて、身を起してふかふかのべっどという高床式寝床から立ち上がる。

「昨日ユウジさんに教えてもらったことをやるんだから」

気を引き締めて、ユウジさんを送り出すぐらいの時間には起きないとね。

我はゆっくりとした足取りで部屋を出ようとして、そのさきほどまで寝ていた部屋を見渡す。

「（本当に、我の知らないものばかりだ）」

二日前にユウジさんとユウジのお姉さんからもらった部屋が目新しくて嬉しくて、ついついでんきと言われる灯りを付けてすっかり深い闇の色に窓から覗く空が変わるまで、我は夜更かししてしまった。

ちなみにそのせいで寝不足なのをユウジさんに言われて、今度からは気をつけよう。と意気込んで今日は頑張って起きた。

夢中になるほどにここに来る、来てからの景色は我にとっては興味があり胸を躍らせていた一昨日と昨日の我を振り返って思い出していた。

部屋に別れを告げて、ゆっくりと階段を下って行く。すると――

ギィッギィッギィッ。

何かを引っ張るような、何かを引きずるような音が我の行く先から聞こえる。
そんな我が見たものは――

「……はこ？」
「！」

そこには黒く長い箱……独特な形をしたそれを引っ張るユイが居た。

「おはようホニさん」
「おはようユイ……聞いていい？」
「うっ……な、何をかな？」
「それは何なのかな！　黒くて大きくて固そうなその箱は何かなっ！」

なんだろなんだろ、我の好奇心は次第に強くなっていく。
一体何を入れているのだろう、一体なにを入れる箱なのだろう、一体なんでそこまで黒いのだろう！
気になって気になって仕方ない。我は欲望に正直だから、興味の惹かれるものには遠慮しない。

「こ、これはだな……棺桶というものだぬ」
「かんおけ！　これって確か我の記憶が正しければ”死者を入れる棺”だったよね！」
「う、うん。良く知ってるなあ、ホニさんはぁ」
「で、で！　何が入ってるの？　死体、死体っ？」
「ホニさんその発想はかなり偏って――って、まあ本来の使い方としてあってるのか」
「それで入っているのは水死体？　焼死体？　爆死体？」

我が本を読んで学んだことを披露してみる。おおユイが驚いた顔してる！

ふっふっふ、我もただ何百年もあの場所で過ごしたわけじゃないんだよ！　これでも地震があるんだ！

「いやいや！　爆死体とか趣味の悪いレベルじゃないから！」

「えー、違う？」

「違うよ。ここに紛れもなく生きた――はっ」

「生きた？」

生きた……そのキーワードだけで我は連想する。そうだ、アレだ。誰かが口ずさんでいた――

「ビフィズス菌だね！」

「なぜにヨーグルトの入れモノにした！　バケツでプリンならぬ、棺桶でヨーグルトとか斬新だな！」

「……もしかして違う？」

「うん、でもちょっと急いでいるから正解は……ウェブでなホニさん！」

「えええええ、ウェブってどこ！？」

ユイは走り去って行く、その棺桶と呼ばれる箱も軽くはないはずなのに。

「……んー」

そういえばユイは片手に鞄を持ちながらも、もう片手で棺桶に付いた鉄製の紐で引っ張っていた。

鞄を持っていったということはユイは学校に行ったってことだよ

ね？

「そういえばユウジさんは？」

ユイは学校に早めに行ったけど、ユウジさんは？

我は再び階段を上がり、ユウジさんの部屋をノックする。

コンコン「ユウジさーん」

返事は無い。

コンコン「ユウジさーん、遅刻するよー？」

やっぱり返事は無かった。

コンコン「ユウジさんってばー、起きないと……っと！」

扉の前の丸い鉄具を回すと扉が開き、我が見たのは――

「……もう行っちゃった？」

そこには空虚なユウジさんの部屋。生活感とユウジさんの匂いも残っているけど、そこにはユウジさんの姿はなかった。

「ああ、ユウジさんの部屋かぁ……」

いけないいけない、興味があっても勝手に踏み込んじゃだめだよね！　うん、ガマンガマン！

我は興味と好奇心を抑えてユウジさんの部屋を後にし、今度は食卓へと向かう。そこにはユウジのお姉さんが居て。

「おはよう、ホにちゃん」

明るい笑顔のユウジのお姉さんが居た。しかしユウジのお姉さん一人で、ユウジさんの姿は見当たらない。

「あれ、ユウジさんは？」

「ユウくんね、ユイちゃんと先に行ったみたい」

「ユイと先に……？」

おかしいな、ユイは一人で登校したはずなのに。

「ああ、もうこんな時間！　ホニちゃん、じゃあ今日からお願いね？」

「あ、うん！　我、頑張りますっ！」

「じゃあ、ホニちゃんよろしくね。いってきますー」

「行ってらっしゃい、お姉さんー」

……食卓を見ると、そこには我の為に作ってくれた食事が並んでいる。

「うれしいなぁ」

こんな風に我の為にしてくれるのは久しぶり――って、あの出会った日を入れたらそんなに経ってないか。

でも、思ってくれるだけで。考えてくれるだけで。

「我は幸せ」

そうして置かれた朝食を食べ始める……やはりユウジのお姉さん

の味噌汁は美味しく、ここにやってきた晩に出された時から我のお気に入りだ。

第２２１話　√２－２６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ユ「ホニさんはいいお嫁さんになるわ」ホ「そう？　ユウジさんに言われると嬉しいなー」ミ「……お姉ちゃんは？　ユウくんのお嫁さんになれるかな？」ユ「……なれるぐらいに家事凄いけど、俺とは法律で無理だから」ミ「法律なんて私の前では（以下自粛）」

２３４３

第221話　√2－26　G．O．D．

「よし、がんばるぞっ！」

ご飯を食べ終わって、自分の食器をまずは台所のシンクに置く。

ユウジさん達の食器は洗い終わって、水分を落とす為の”水きりかご”に立てられおかれている。

きっとユウジさんのお姉さんは少し前まで皿洗いをしていたのだろう。えぷろんという前を守る服を見に付けてから我は取りかかる。

「まずは我の洗って～」

ユウジさんに教えて貰った皿洗い。

すぽんじと呼ばれる穴が無数に空いたどこかで見た乳加工品のちーずというものに外見の似たなんとも魅力的なさわり心地のものを右手で取って、洗剤の入った細長い容器を少し潰すようにしてすぽんじに左手で洗剤を垂らし、染み込ませる為にスポンジをもみもみする――

「これで洗っていいんだよね」

準備は万端、あとはユウジさんの言った通りにやるだけ。

「ごしごしごし～」

ユウジさんが言っていたことを思い出す。

『ホニさん、洗うものはあまり汚れてないものから順にな？　少しヌメヌメしてるのは後回しにあまり汚れていない皿やコップから洗

うんだ』

ということは……茶碗、味噌汁の器に焼き魚の載っていたお皿かな？

『汚れが残らないように丁寧にな』

「っていねいに～、ごしごしごし」

右手ですぽんじを茶碗に当て包み込むように、左手で茶碗を回転させて外側から洗ってゆく。

一〇周ほどしたら底面を洗って、次は内側を丁寧に洗って行く。

「これで茶碗はおわりっと」

そうしてユウジさんの教えてくれた通りに皿洗いを終え、乾かしている皿を拭いて片付ける。

「おわりっ、ふー」

我ながらユウジさんの言うとおりに出来たと思う。

「それじゃ、次は洗濯だねー」

「洗濯終わってるね！」

洗濯機を覗いて、臭う薬っぽさで洗濯が終わっていることを理解する。

この場合は――

『洗い終わった洗濯物を取り出して、代わりに汚れた洗濯物を入れるんだ』

だったよね！　洗い終わった洗濯物を予め近くに置いてある固く薄く軽い水色の網籠に入れてから。

「洗濯物入れてー、洗剤入れてー、スイッチをピッっと！」

ヴゥゥゥゥゥゥンと機械が動き出す。きっとこれでいいはずー

「じゃあ干さなきゃねー」

水色の網籠を持って、居間に向かいそこから庭へと出る。

さんだると呼ばれる履物を履いて空を見上げればそこには見慣れたけれど、非常に見ていて気分のよい澄み切った青空が広がっていた。

さんだるで踏みしめる地面は踏み慣れ聞きなれた音、ユウジさんの家の庭は芝になっていてこんなほんのり暖かい春陽気の日は寝転びたくなる。

「でも誘惑に負けちゃだめだよね、うん仕事仕事！」

仕事仕事と言っているけれど、正直かなり楽しい。

我には新鮮で、今はこんな風に人は生活しているんだなあ……と本た耳で聞いたことでしか知らない知識を目で見て確かめる。

その作業はとにかく楽しく、心地の良いものだった。

湿った洗濯物をぱっぱと広げ、物干しに背伸びして干していく。

物干しは高い棒と低い棒の二段構えになっているもので、それが

仲良く居間方向から見て三つ並んでいる。
我はこの体の都合上、高い棒にはギリギリ届かず低い棒に干していくということ、少しばかりもどかしい感じだった。
それでも我は洗濯物を干していき、はんがーと呼ばれる物に衣服をかけて干し、靴下や下着を干していく。
この洗濯のやり方はなぜかユウジさんでなく「姉貴、頼む」と言ってユウジのお姉さんに教えてもらったのだけど……

「なんでだろう？」

ユウジさんは少し顔を赤くして照れていたし、なんでだろ？
そういえば洗濯物を洗う時も目を逸らしてやっていたような――

「ま、いっかー！　じゃあ太陽、よろしくね」

大体干し終えて、空から柔らかく照らす太陽にあとは頼んで我は庭から出た。
居間に戻っててれび（黒い箱の正体は世を映す機械だと教えてくれた）を見ると１２：００と言う数が左端に映し出されている。
これで日は丁度真上に昇る頃で、少しお腹も減って来た。普通に過ごすとこの体故に食べることを欲するみたいだ。

「じゃあ、ご飯つくろうかな」

ユウジさんに貸して貰ったれしぴと呼ばれるご飯の作り方の書かれた本を手にとって、料理を始める――

第222話　√2－27　G．O．D．（前書き）

ほ　の　ぼ　の　！

2－1の修正と7－1の本文追加行いましたー

第２２２話　√２－２７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「ごちそうさまでした」

はっきりと我に食べ物飲み物を恵んでくれた自然やヒトビトに心から感謝しながら食後の挨拶。

「じゃあ片付け～」

カチャカチャと自分の食べた皿を片づけると、洗い終わった洗濯物をまだ場所の余る物干しへと干す。

それが終わった頃に居間へと戻れば、てれびに映し出される数字は〇と一と一〇が並ぶ。

「……暇だなー」

暇になってしまった。黒色の眼鏡をした「タメリ」さんが色々な人が一緒に繰り広げる喜劇のようなものが終わり「ごきげんＹＯ」などと言う番組（ユウジさんが言うに番組とはこの箱中で映し出されるものの一区切りのこと言うらしい）が始まっている。

りもこんと呼ばれるてれびを動かす機械の使い方も覚えているので早速ちゃんねるを回す。すると――

「？」

映るのは女性と男性がいがみ合っている様子。どうやら二人は我の集めた知識によれば婚姻関係にあるようで、それでいて男が別の女性と――

「はぁー……そうなんだ」

その模様に我は釘付けになっていた。今まで我慢していたのよと言わんばかりに怒鳴りつける女性とそれに、落ちついてくれと言いたげにオロオロと狼狽する男性の姿。

「うんうん」

そして現れるのは別の女性、その女性は唐突にも男性の腕を捕まえると妖艶な笑みを浮かべながら男性の婚姻関係にある女性を焚きつけるかのような言葉と、挑発を繰り出していた。

「――――」

そんな映し出されるものに我は夢中になっていた。画面からは目と鼻の先の距離しかなく、文字通り食いつくように見入っている。

そんな時に婚姻関係のある女性は突然に刃を取り出して叫びと共に――

と、いうところで終わった。

「これがユウジさんの言ってた――」

『こういう人が演技して物語を放送するのが”ドラマ”で、昼にやっているのは昼ドラって言うんだ』

「昼ドラかぁ……」

なんというか次が気になってムズ痒い。その先がどうなるの？と我にとってその昼ドラは目を見張るものがあった。

「……面白いかも、明日もみよう」

タイトルは「茨の床」というタイトルで、もう十三話ほどやっていた。

次からは何か片手に持ちながら見てみたい衝動に駆られる……あれだ。昨日ユウジさんが出してくれたもち米を焼きあげて作ったというーー

「……煎餅が欲しくなるなあ」

醤油の香ばしくあのデコボコした固い表面とバリッといった食感がどうにも後を引く、魅惑の食べ物だ。

ちょこという甘菓子も良かった、でも饅頭というあのモチモチとして風味豊かな甘さも好きだけど、煎餅には劣ってしまう。

気に行った番組を見ながら、好きな食べ物を食べる——それがどれだけ至福の時か、思い浮かべただけで生唾が出てくる。

「……とりあえずは、もうやることないかな？」

誰に問いかける訳でもなく、確かめるように言ってみる。

そうだ、とりあえずは洗濯物が乾くであろう四の時までは何もすることがない。

「ああ……でも、何かすることって、本当に……」

春陽気と昼ドラという面白いものを見れた満足感と先程食べた昼食が見事に相まって、かなりの睡魔が襲ってくる。

「そもそも……我は、寝て……いるこ……とが……多かっ……すぅ」

意識は落ちて行き、春陽気の中太陽降り注ぐ窓の近くで我はこてんと眠りについた。

ユウジさんから……ちゃんとしたところで寝ないと風邪を――すぅ。

「はっ」

気付くと外は薄い未だ青懸かる夕暮れに染まっていて、慌てて我は洗濯ものを取り込んでいく。

春陽気とはいえ暖かく、あとで干した洗濯物もしっかりと乾いていた。それを確認して持ってきた籠に入れて今度は居間へと運んで行く。

「よいしょっと」

籠を下ろして中から取り出していき、ユウジさんとユウジのお姉さんの言われた通りのやり方で洗濯物をたたんでいく。

「寝過ごしちゃったから急がないと」

そろそろ桐が帰って来る時間だと、ユウジさんは教えてくれていた。

「ただいまじゃー！」

玄関から桐の帰宅を知らせる、声が聞こえる。

「おかえりー」

と我は返すと、足音が洗濯物をたたむ我の近くへと近づいてくる。

そして居間じぇの扉が開けられ、小さい容姿の古臭い喋り方な桐がやってくる。

「おおー、家事やっとるのかー。関心関心」

「ありがとー」

関心と褒められたので素直にお礼を返すと、桐は少しきまずいかのような表情を作り。

「う……それにしてもお主もよくやるのう、面倒ではないのかの？」

「我もここに馴染みたいからねー、出来ることはやらないと。それに楽しいからね」

「うっ」

横目に見る桐が途端に申し訳なさそうな表情を形作るけれど、我には意味が分かっていないので反応は何もせずに。

「もう少しで終わるからちょっとまってねー」

「う、うむ」

宣告通り洗濯物を畳み終えると直ぐに置き場所の分かり、許可無しに置ける場所へは片付けて行く。

残ったユウジさんやユウジのお姉さん、ユイの衣服や下着は別けた上でソファに置いておき各それぞれが持っていくのがこの家ではそうらしい。

「桐〜、ゲームしよ〜」
「お、おう！　良かろう、今日何をするのじゃ？」

昨日の夜に初めてげーむというものをした。それは白と黒の駒を真ん中へと各色二個ずつおき、初めと後で別れてから駒を置いて行き、色の駒と同じ駒の間に違う色の駒があるとひっくり返して自分のものに出来る――というげーむを桐と昨日はしたのだった。

「ぬぅ……昨日は何かの間違いだったはずじゃ、そのはずじゃ」
「今日はなにするの？」

ちょっとまっていてな、と言って桐は二階へと駆けて行き直ぐに戻って見せたのは。
木製の板と銅色をした箱を見せて言った。

「この木製で出来た軍舵取りゲームの”将棋”じゃ！」
「おおー、良く分からないけどそれは楽しそう！」
「じゃろう？　それではルールを教えるからの――」

そうして夕暮れの中、電気を付けて桐の持ってきたげーむでユウジさんが帰って来る一時間ほど楽しんだ。

第223話　√2－28　G．O．D．（前書き）

癒し？

第223話　√2－28　G．O．D．

舞台戻って学校、少しばかり日の落ち始めた窓景色をゆったりとみる余裕など一切なし。
ユウジはホニさんがやはり気がかかりだった。なんというか、一種の親バカっぽいですね。

「……ということであって、靴下は――」

国語教師が何故か「矛盾」という教科書内容に始まり「靴下とは靴の下ではなく足に付けるものであって、それでは矛盾を――」というなぜか靴下の名付け親批判が始まり、そこからは春に使い心地の良い靴下語りをし始め、揚句には通販顔負けの生徒向けセールスを始めるという展開に生徒たちが全員揃って飽き始めている頃。
もういいだろ、と流石にチャイムさんも呆れたかキーンコーンカーンとチャイムを鳴らす。

「気を付け、礼」

流石の委員長も呆れていたか、教師が語りを続行しようとしたところで有無を言わさず号令をかけた。

「あ……じゃあ、今日はここまで」

謎のクラスメイトの連係プレーによって拍子抜けした国語教師はまだ話し足りないと言わんばかりな表情しながら教室を出て行った。
そうして担任がホームルームをしに帰って来るのだが……それが二分に満たないのに、いつもより長く感じる。
早くに帰りたいんだよ！　ホニさんが気になるんだよ！　ああ、

早くしてくれよおおおおおおお。

貧乏ゆすりこそしなかったが、今度は机の端をトントンと叩いて行く。

「あの動きは……モールス信号だとッ！」「おお、あの場所でトントン相撲出来そうなくらいの勢いだな」「あのテンポもしかしてメロディーは……3月〇日！？」「リズム天国がやりたくなってキタァッ！」と傍らから聞こえるが案の定ホニさんにのみ気持ちは向いている。

家事できたかな指きってないだろうか変なところで寝て風邪ひいてないだろうかご飯ちゃんと食べただろうかあの頃のままだろうか。

不安による焦燥で俺の指タップはまさにゲームの連打化しており、次第にボタンを擦るように行う「上級プレイヤー式連打」へと変わっていく。

「待たせたー、それじゃ――」

担任がやってきたので連打を止める。その代償に足はうずうずと動き足を底面に付けながらも頻繁に動かすようになる。

というかユウジ落ちつきなさすぎだから。せっかちにもほどがあるから。

「――これでホームルームを終わる、委員長号令」

この時にユウジの腰は浮いていて、その急ぎっぷりにフライング摘発してやりたい。

鞄も担任から死角になる位置で手に鞄を持っている。

「気を付け、礼っ」
「っ――」

スタートダッシュよろしくの猛スピードで駆けながら「先帰るわー」と言って教室を去る。
担任が前扉から教室を出ようとしたのとほぼ同時にユウジは後扉から脱出する。

「（まっててホニさあああああああああああん）」

流石に内心を思い切り吐露することはなかったものの、未だ生徒が少ない廊下を陸上部がスカウトしてきてもおかしくないほどの火事場の猛ダッシュで駆けて行った。
ちなみに置いて行かれたいつものメンバーは「……ユウジ？」と、現状訳がわからなくユウジが颯爽と帰っていたことで唖然としていた。
そんな背中をユイは追って行き「アタシも帰るかあああああああ」とこれもまた走り去っていった。
取り残されるのはユキと姫城とマサヒロというマサヒロの疑似ハーレムが完成するものの、残念なことに二人の気持ちはマサヒロに向いていないのが非常に虚しい。

「ユウジ、どうしたんだろうね？」
「さぁ？」

そんな女子二人にも割り込めないマサヒロは「今日のユウジは変だったな……って、もしやホニさん関係か！？」と呟くと。

「マサヒロ！　それ本当？」
「高橋さん、それは本当ですか？」

ユウジ関係のことになるとアツくなる女子勢に驚きつつも。

「ああ、まあ今朝といい授業中といい……家に来たばかりのホニさんが気になるんだろう」

「「！」」

二人驚愕、なんというかこの三人でも見ていて表情豊かで飽きないですね。

「……姫城さん、明日は」

「ええ、問い詰めましょう」

「え……お嬢さん方、そんな怖い顔して――」

マサヒロの言葉に反応するはずもなく、二人並んでゆっくりと帰路に就きました。

……って数日で大分仲良くなりましたね、この二人。やっぱり攻略対象のヒロインでないと、このように関係も異なるのですねー

＊　＊

我は桐とげーむを一通り遊び終わる……なぜか勝負結果で桐が絡んで来るけど。

少し離れて貰って、時計を見る。もうそろそろユウジさんやユイの帰る時間だ、と思っていた。

桐が帰ってきて、寂しさは和らいだとはいえ。やっぱりユウジさんがいないと寂しかった。

ユウジさんが帰って来るのを、我は心待ちにしていた――

「ただいまっ！」

「ユウジさん、おかえりー……ってどうしたの!?　なんか息切れしてるけど」

「はぁ……いや、なんとなく走りたくなってな」

「そ、そういうものなの？」

「あ、ああ」

ユウジさんは何故か息を荒げながら玄関に滑り込んでくる。

我がそろそろ玄関でユウジさんを待とうかなー、なんて思って玄関に向かった矢先に玄関が鍵が開く音と同時に開いた。

「ホニ……さん、は……今日、どうだった……？」

「え、うん！　一応出来たと思うよ？」

「そう……か、良かった……はぁ」

するとユウジあんは安心したように息をはく。ユウジさんはもしかして我の仕事ぶりが気になったのかな？

玄関をあがって、居間へと二人やってくる。その頃にはユウジさんも落ちついていたみたい。

「洗濯物はソファの上に置いてあるから、ユウジさんのものは自分で持って帰ってもらう……で良かったんだよね？」

「ああ、大正解。さすがホニさんだ、しっかりしてる」

と、言うと我の頭を撫でてきた……え、こ、これ……すごい気持ちいいよ!?

「ああ！　ホニさんつい撫でてしまった。なんかすいませんホニ様、

悪意はないので――」
「あーっ、敬語になってる！」
「あ」
「昨日言ったよね！　我には敬語なしで、我のことは様付けはナシだって！」
「あー……そうだった」

そして我はユウジさんに心の底から感謝しているからユウジ「さん」と呼ぶようにした。
余所余所しい感じがして敬語は好きじゃないし、様付けもなんか我が各を付けているようで……他の誰かが言ってもユウジさんにだけは言ってほしくない。

「それに……撫でるのは、我的には結構……好きかもだから」
「！」

少し照れくさかった、撫でるというのはちょっと子供っぽい印象を何故か我は持っている。
けれど、それが我には心地よかった。

「とにかく！　我の事は呼び捨てか、妥協して”さん付け”まで！　我はユウジ”さん”って呼ぶし同じだよ！」

ユウジさんとユウジさんのお姉さん以外は呼び捨てで呼ばしてもらってる、でもそれはユウジさんが我にとっては特別な人だからだ。
我を救ってくれた、恩人だから。我は何度も言うけれど、ユウジさんに心の奥底から感謝している。
ここに住まわせてもらうのもユウジさんが押し切ってくれたのと、ユウジさんのお姉さんのおかげだから。
だから二人に我は”さん”付けをしている。

「了解した、ホニさん。これでいいんだよな？」
「うん！」

やっぱりこの喋りの方がいいな。

「それでホニさんは……おお、綺麗に畳まれてる。期待以上だ」
「うん、少し頑張ったよ！　ユウジさんの期待通りならいいかな」
「あとはきっと皿洗いとかもやってくれたんだろうし……お疲れさま、ホニさん」
「！」

そう褒められて嬉しかった。胸の奥がゆっくりと暖かくなっていく感じ……撫でてくれていると同じぐらいに心地よい。
そうだ、感謝されることがかつての我の喜びだったんだよね。ずっと忘れてた。

「お役にたてた？」
「もちろん」

そう言って我の頭に手を伸ばして、優しく包み込むように撫でてくれるユウジさん。
幸せだ。こんな会って数日も経ってないのに、こんなに幸せでいいのかな……なんて思ってしまう。
ユウジさんと出会えてよかった、我の今までの空虚だった時間を埋めて行くように――この数日が濃く温かい。

しばらくしてユイやユウジのお姉さんが帰ってきて、我がやってきた家は次第に賑やかさが増していく。

「よかった……」

ユウジのお姉さんのつくった料理を食べながら、ユウジさんとユイが口論している中。

誰にも聞こえないぐらいの声で、我はそっとそう漏らした。

第２２４話　√２－２９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

女子生徒は２－１８参照、謎の会話は３－２参照～

第２２４話　√２－２９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

五月一〇日

なんというか、朝だ。

「……」

で、だ。一つの疑問点、いや要約して一つでだが遠慮をしなければ複数の疑問点がある。

しかしそんな疑問点を提示し、声に出すのが面倒になるほど。”それ”はどうでもいい。

「なんで……お前がまた」

「おはよー、おにいちゃん☆」

桐が使いまわしのごとく”また”俺の体の上へと乗っている。そんな桐のワンパターンな行動に少なからず俺は呆れている。

「なぜ夜這いならぬ朝這いをするのか」「どうやってしめたはずの俺の部屋の扉をこうも簡単にスルーして侵入するのか」「どうして俺の体の上へと乗りたがるのか」

そんな疑問点はとうの前にあり、今回ばかりは声にだすのも憚れる……というのもきっと桐の返信もおそらくは以前と変わらず理不尽な根拠で言いくるめ――られはしないが、俺が抵抗を放棄するだろう。

高校生の青春ロードをひた走る兄の上に少しマセた礼儀正しい妹（周囲見解による）が乗っている。

それは傍からみたら微笑ましいかもしれないし、高校生という俺

の立場と小学生という設定の桐を考えると俺が白い目で見られかねない。

「久しぶりに来てみた」

「嘘つけー、それほど経ってない上に頻度高いだろ」

いやー、ユウジ。それがですね？　結構経ってたりするんですよ。きっと読者方の体感時間的には数カ月ぐらいだと思います。

というか桐がこんな展開を毎回のようにしでかしていたのはもう半年以上前のような。スタッフが飽きたのか、伏線なのか……文章がアレなせいで判断つかないんで止めてください。

「何を言う、わしはお主の……嫁だからな！」

「ケ●コみたいなこと言いやがって、いい加減に諦めろ」

「ふっ、諦める？　冗談を言うでない……しかしわしは寛大じゃから、第三妃までは許してやろう」

「どんだけ俺は節操ないんだよ！？　ってかさりげない本妻宣言をすな。あれか？　子供の冗談だねー、的な温かい笑みで受け流せばいいのか」

「妃とか言うガキとか嫌じゃな！」

「そのガキがおめーだろうが！」

「ガ、ガキじゃと……わしは、わしは――きゃーん、そうだったー★　おはようございまーすきりっちでーす★」

「お前のガキイメージが掴めない」

朝っぱらからこの桐テンションに付き合わされると、一日に消費するエネルギーを無駄に不完全燃焼している気がしてならない。実に非エコロジーだ。

というか猫かぶりが白星で、勘違いガキスタイルが黒星なのか……まあ、後者の胡散臭さは比べて増大してるけども。

「ところで起きんのか？」
「……俺の上に乗るヤツの台詞かそれは？」それならさっさとどけよ、去れよ、失せろよと。
「だから、じゃ。お・は・よ・うの接吻を、早くそれでいて早急に素早く急行でな」
「さ・よ・な・らの足蹴りならしてやりたいけどな」

意味がほぼ全部なのに繰り返し言うのはある種の強調なんだろうけど、なんだろう凄いイライラする。

「仕方ない……この平民の黒髪メイドから貰った媚薬で――」
「お前はその言い方なら貴族以上なんだな？　そうなんだな！」

ったく、いつまでも漫才を続けている場合じゃないな――おい、誰か夫婦漫才自重しろ爆発しろとか言ったヤツ誰だ。全力坂を全力で転がすぞ。

「ということで振り落とし」
「ぬわっ！？」

不意打ちごめんの速効行動故に、桐も対処出来ずにベッドから転げ落ちる。内心「ざまぁ」と思っていたが表情にも行動にも言動にも出さないのが大人な対応だろう。

「な、なにをする！　更に胸が膨らむじゃろうが！」
「斬新な豊胸術だな……」

”転落式豊胸術”ってか……いやまあ失礼だけど地上三千メーターで仰向けのまま落ちたら胸辺りに肉は集まりそうだけども。

それで膨らむ胸ってどうなんだ？

「落ちることによる生じる宇宙なんたら力で」
「なんたらを誤魔化しちゃだめだろう」
「エントロピーがうんたらかんたら」
「それはあのキュ●べえにさえ謝るべきかと思う」

ということでは俺は捨てられた子犬のように――いや、そうだと無垢に見えてしまうな。
捨てられた粗大ごみのような目で見てくる桐を放置して俺は部屋を出ようする。

「ならば、わしを連れていくがよーい」
「……ぶらさがんな」

気付くと俺の首には小さな腕が回され少しの重さが首にかかる。
呼吸できないほどではないが、正直鬱陶しいことこの上ない。

「ほうほう、お主の背中は大きいのうー」
「まあ、何もしないならこのまま行くけど」
「わーい、流石婿殿～」

まあ、桐の発言は安心のスルーですけどもね。
そんなこんなで「俺ってば優しいなあ」と自分で思いつつも居間へと向かった。

なんというか、学校だ。
ついてそうそう、息を合わせたとばっかりにユキと姫城さんが俺とホニさんの関係について問い詰めてくる。

ユキは登校途中少し不機嫌で、通学路での合流そうそうに「ユウジ、昨日のことしっかり説明してね？」と瞳の奥に今までにない闇を溜めこんでそう言った、表情は笑っていたものだから相当に冷や汗だった。

なんとか昨日のことを謝り、暫定で許されるものの。今度はホニさんについてのみ聞いてきて、質問を先導する姫城さんと神妙そうに頷き聞くユキが印象的だった。

そんなこんなで、午前の休み時間は心休まらない状態だった訳で。時折二人が不機嫌オーラを出し始めるので少し大変だ。

ユキも姫城さんも可愛いし、モテモテのはずなのに。俺以外の付き合いはどうなのだろうか、と思う程に俺と話に付き合ってるけど……俺でいいのか？

両手に花で幸せ満開に思われがち……いや幸せには違いないが、流石に休み時間中に何度も俺の机へと訪れてくると気疲れする。

というか、ホニさんが来た頃から二人の様子がどこか変な気がしてならない。なんでだろね？

と、いうことで逃げ出すようにトイレへと向かった。まあ、傍から言わせれば「幸せ疲れ？　暴発しろ」とマサヒロに言われてしまったので流れるような動きで文句が言い終わると同時に殴る。言い終わるまで待つ俺超優しい。

そんな時のことだ――

『――――――』

「！」

一瞬時が止まったかのような錯覚。そう、まただ。
数日前にいつものメンバーで学食に向かおうとしたところですれ違った”あの女子生徒”その人たまたすれ違う。
アニメ・マンガ表現になるが違和感のない深く濃い緑色、新緑というより樹海で聳え立つ木々の色だ。
なんだろうか、やはりこの人は異質だ。綺麗な容姿から隠さずに現れる冷たく強い拒絶の意思。
それは見た者を凍りつかせるような、目を背けさせるかのような人を拒む薄茶色の瞳を誇っている。

また、そうして俺はこの人が気になりながらも関わることなくすれ違って行く――それがごく自然だった。

『――あなたは異(ことなり)の匂いがする』
「!?」

ふいに近くで聞こえる声は、確かに俺へと届くように呟いた。
ことなり？　匂い？　出会い頭に選び言うべき言葉でないだろう。

「……」

嫌な予感がする。この身に災厄が訪れるのを虫の知らせが言うように。
今すれ違った女子生徒は――また今度もすれ違うことになる、そう俺は感じてた。

＊　＊

それは部屋の中。暗闇、意図して証明を消した深い黒。

「ついにアイツが目を覚ました？」

何かに問うように。

「ああ、僕が実際に見てきたからな」

少し呆れたように。

「そうか……ならば我々も動かなければな」

同意を促すように。

「野放しにしておいたら……」

続かせるように。

「早急に確保しようか」

「じゃあ向かうと、しますか」

二人は賛同し、動き出す。ここは町のどこか、深い黒の部屋の中。

第２２５話　√２－３０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

今回からが実質√２、第二節！？

第225話　√2－30　G・O・D・

見慣れた路地、いつもの変わり映えしないそんな景色の中で日常から切り離された、異常な光景が繰り広げられていました。
長い黒髪の女の子を連れた男子高校生と、藍浜高校の制服を着た女子生徒――それだけならば普通な光景でしょう。
しかし女子生徒は地に足はついてはいませんでした。
少し見上げると、そこには空を舞う女子生徒。そして男性高校生の方へと――

「ちょっ！　おまぁ」

なんだよ、どんな展開だよ、おかしいだろよ。
どうしてこんな事態になった、どうして――ホニさんが狙われなければならないんだよ。

「ユウジさんっ」
「俺から離れるなよっ！」
「う、うん」

なんで俺は逃げ回ってんだろうな……予測できるか、こんな展開。

「逃がさない、この世界のイレギュラー要素”異（ことなり）”は排除する」

アスファルトで固められた地を足で蹴って前へ前へとホニ様を連れて走る俺。一方完全反則な空から見下ろしながら飛ぶ彼女。

「んなこと言われても俺は知らねえよ！」
「……おとなしく」

「その言葉そっくり返す！」
「……イレギュラーは異は害、排除すべき」
「スルーかよ！？」

帰宅部チャンピオン候補者こと俺には、この連続猛ダッシュは堪える。しかし止まったら最後ホニさんは――
こいつらのやることだ。傷一つでは済まないし、最悪の場合もありうる。

「ユウジさん」
「ん、なんだ？」

必死に走る中でホニさんと会話をするものの、やはり自分の息は絶え絶えだ。己の体力の無さを改めて自覚する。

「こんなことに巻き込んで、ごめんなさい」
「ホニさんが謝ってどうする。……そんなことよりも、追っかけてくるこいつらに俺は怒りの矛先は向いてるね」
「ユウジさん……」
「――大丈夫だ、なんとかする」

確証が有るわけでもなく、自信のほどもない。
けれど、護らないと。そんな一心でパンパンになりズキズキと痛む足を前へ前へと持っていく――

＊　＊

「おかえりー！　ユウジさん、ユイ」

スーパー癒し系神様ことホニさんがこちらも綻ぶ柔らかな笑顔でお出迎え。

くぅー、下之家に生まれて良かったァァァァァァァッ！

「ただいまー」

「ただすっ」

ユイは恒例なオーバーリアクションで、もはや原型を留めない帰ってきた人が言う挨拶だった。

そのあとホニさんは「後少しで洗濯物まっててねー」と言い残して居間へと戻って行った。

とりあえず、水分を欲す俺はホニさんを追うようにユイが自分の部屋へと向かうのと違いキッチンへと向かおうとしたその矢先。

「ふむ、帰ったか……おかえりじゃ」

居間では見かけだけは微笑ましい妹（古）こと桐がぺたんと畳張りの居間に座っていた。

目をこすりながら変に挨拶だけはキチンとする謎家系故に、桐も従い挨拶を言ってくる。

「ん？　桐は昼寝明けか？」

「うむ……今のうちにユウジの部屋で寝ておかないとな」

「まてーい、さりげない不法侵入行為をさぞ当たり前のように言うんじゃねぇ」

朝這いのみならず、俺のいないアフタヌーンティタイムにも侵入しているとは――もはや怒りも起きない。

「わしとユウジは運命共同体……部屋も共同でよいじゃろう」

「やだよ！　お前みたいにロクな死に方しなさそうな奴と運命を共にしたくねえよ！」

「ヒロインはわし一人」とかホラ吹くし、猫かぶり中途半端だし、喋り方古いし、黙ってれば可愛いし。

「なぬ、失礼な！　わしは神様のご加護が有るからの、あと八七万六千時間は生きる予定じゃ」

「時間だから――って律儀に計算しそうになったじゃねえか！　確か年数に換算すると百年ぐらいだっけか？」

「よく知っておるな、ならばこのオ●ーナを買う権利をやろう」

「ネタの織り交ぜ方雑ぅ！」

「……というか、さりげなくお主はわしを可愛いと思っておるのじゃな」

「久しぶりだなァ、その心詠める設定！」

というか桐はなんか色んな能力あるとか言ってたんだよな……今のところ「不法侵入」と「心詠み」ぐらいだよな？

あー、まだ知らないとは思いますが。桐には他に「涼●さん風空間造成」「物体創造」「ステルス」「針金使い」エトセトラあるんですよね。

なんかチートって言うんですか？　無敵ですよね、もう。

「まあ、とりあえず部屋同じは勘弁な。そんなことしたら姉貴が来

そう――」

デレレーンデレデレデーンデーン（ベートー作曲、交響曲第五番「運命」）

と、いきなり制服ポケットから携帯の着信音が鳴り響く……これはまさか。

『ユウくん、お姉ちゃんのこと呼んだ？』

「エスパーかっ！」

ブチリと電話を切り、電源さえも切る。まだ生徒会のはずだよな……？

怖いよあまり良く知らない父さん、偶然にしては出来杉君もびっくりな具合ですよ。

「む、むう。分かった。わしも妃は許すが、ミナには略奪されかねない」

「それ以前に俺はお前のものにはなるつもりは金輪際無い」

「お前のもの！？　ユウジったら坦々ね」

「せめて最後は間違わずに”大胆”言えや」

はぁ……余計に喉乾いてきた。

「とりあえず喉乾いたから」

「もうぅ、ユウジ？　わしは母乳なんて期待しても出ないよ？」

「期待も何も論外だバカヤロオオオオオオオオオオ」

もう「家の中で走るものじゃないよー」と大昔母に言われていたことが俺の馬鹿脳が引っ張ってきたが、そんなことどうでもいいので右から左へと受け流し、桐からまた絡まれることを全力で遠慮願

いたいのでキッチンへと走った。

　すると、俺たちが意図しない（少なくとも俺は）コントを公演していた傍で黙々と洗濯物を畳むという家事をやっていたホニさんは、気づかぬうちに俺の行く先だったキッチンに居た。

「あ、ユウジさん」

　花がぱっとさいたような笑顔に一コンマ三秒癒されると、そんな俺の名を呼んでくれたホニさんを見る。

「ん？　ホニさん、料理してたのか？」

　コンロに火をかけた状態でおかれている煮物鍋とおたまを持って可愛らしいエプロン姿のホニさんを見て解釈して言う。

「う、うん。ちょっと野菜の煮物つくってみたんだけど……勝手にしてもよかったよね？」

「ああ、もちろん構わないぞ。おお、煮物か――」

　鍋には綺麗に切られた手頃な大きさの野菜が浮かんでいて、ホニさんの料理レベルが普通に高いことを物語っている。

「あのユウジさん」

「ん？」

「あとで……」

「あとで？」

少しもじもじと恥ずかしそうにするホニさんめっちゃ可愛い、なんてここまで癒しを分けてくれるのだろう。ああ、素晴らしきホニさん。

「味見してくれると、嬉しい……な？」
「ん、俺でいいの？」
「うん！　じゃあ、お願いー」
「ああ」

ホニさんと喋っていると喉の渇きも忘れてしまう。癒しも心の潤いみたいなものだし、口もついでに潤ったのだろう（謎理論）
そうして麦茶をゆっくりと飲みながらとにかく長い黒髪にセーラー服の上に付けたエプロン姿が異様に似合うホニさんは楽しそうに料理をするのだった。

第２２６話　√２－３１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

バトル展開頑張ります＞＜

３．１７　「神」設定訂正

３．２１　クソゲヱ４－１（５－１２の次）に「エイプリルフール？」再掲載

第226話　√2－31　G.O.D.

「ホニさん、姉貴。ごちそうさまー」
「美味しかったなら、いいよー」
「おそまつさま、ユウくん」

姉貴とホニさんの料理人二人による共作な今晩の夕食は、かなり美味しいものになった。
和食にかなり強いホニさんと、オールマイティに上手な姉貴……姉貴だけでも凄いのに、ここにホニさんが加わるとは――

「……俺も料理勉強するかなー」

なんというか、一応は俺もつくれるが姉貴やホニさんには惨いぐらいに負けるだろう。
……まあ、自分が食える程度でいいとは思っていたが。料理本片手に勉強するべきかもしれない。
生徒会帰ってからほぼ休む間も無く夕食作り、ホニさんも洗濯はもちろん床をみれば掃除されていたことが分かり家事にかなり精を出しているように感じる。
二人に全ての家事やらせるのも忍びない……と感じた俺は、夕食時が終わりキッチンへ皿を持っていって、その流れで洗おうとする二人を呼びとめるように言う。

「ああ、姉貴にホニさん。皿洗いは俺やるよ」

まあ、屁でもないレベルだけども。少しでも二人が休めるならば、と考えて俺は皿洗いを買って出てみる。

「ええ！？」
「ユウジさん？」

理由を「姉貴やホニさん疲れてるだろ」恩着せがましいで切りだすと、逆に姉貴とかホニさんは変に読みとった揚句に遠慮して拒否しかねない……ならば俺は自分の意思を言えばいい。

「いやー、急に皿洗いしたくなってなー」

嘘じゃないぞ？　実際”二人を気遣って”とか”自分も何かやりたい”とか言う理由から急に俺はやりたいと思った訳で。

「「……」」

すると二人顔を見合わせてしばらく沈黙。いいのか？　反応ないけど、これは承諾ととっていいのだろうか？
そう色々と考えている数十秒後――

「「じゃあ私（我）も手伝うよ！」」
「……へ？」

ほぼ同時に二人は手伝いを申し出てきた……俺は二人の荷を軽減する為だった気がするのに、一人でも手伝わせちゃダメなんだよなあ。

「いや、なんで？　俺が一人で――」
「ううん！　ほら、皿洗いをしたら皿拭きをしなくちゃならないから！」
「ユウくん流石に悪いよ？　だからお姉ちゃんも手伝えることはっ！」

「……」

「「……」」

「ホ、ホニちゃんは今日家事頑張ってくれたし。ゆっくり休んでいいんじゃないかなー？」

「お姉さんは遅くまで学校に行ってたよね？　それに料理もつくって疲れてると思うし、休んだほうが」

「ホニちゃんも野菜の煮物つくってくれたじゃない、美味しかったよ？」

「ううん、お姉さんの料理は凄い美味しかった。我も見習いたいぐらいに……今度教えてくれると嬉しいな」

「いいよ？　だからホニちゃんはもう休んで」

「いや、お姉さんには今度教えてもらうんだから、ここは我が手伝った方が――」

決して文字数を稼ごうという訳ではなく、二人は睨みあいを始めた。一見微笑ましい家族の会話に見えるが、二人表情は微笑んでいても目は笑ってない。

二次元的表現ならば「二人の間で対抗心による電気がバチバチと～」みたいな感じだろうか。あれだ、いきなり二人の間で険悪なムードが立ち込めたというところだろう、うん。

「（いや、なんでだよ）」

どうしてこうなった。俺はただ二人を手伝えれば良かったのに。

「「ん～～～～～～」」

「はぁ、いやじゃあ俺は始めますんで」

俺の後ろでは二人の睨み合う唸り声が聞こえ、なんとなく気が重い皿洗いだった。

……まあオチとしては、二人譲らぬうちに皿洗いが終わって皿拭きを二人に俺の呼びかけで助力してもらった。
皿洗いを傍で（右にホニさん、左に姉貴）始めた途端に二人機嫌も回復していくという、俺には良く分からない二人の夕食後の展開だった。

いやユウジ……分かってよ！　これはもう鈍感ですよ、本当に。
ホニさんは一応好意があって、バカ姉なんて愛フルオープンじゃないですか。
まあバカ姉はここまで愛情表現をしているのが、逆手に出ているという悲劇なんですが。
ホニさんは……どうなんでしょう？　恩義的な意味が強いみたいですし、今回はムキになってしまったところでしょうか？
にしても幸せものですね、ユウジ。　ああ……爆発すればいいのに、ナレーターしてる身としてははいはいそーですかって感じですよ、まったくもう。

＊　＊

……少し言いたいこと言ったのでスッキリしたところで、真面目になります。いいですか？　私、いつも真面目ですけど、今回は大まじめにナレーションですよ？
このナレーション力に聞き入ってくださ……ってもううるさい？
はいはい分かりましたよ。

――ところ変わって丁度その頃同じ町。真夜中の住宅街、屋根に

は不審な人の影がありました。

「今日はどんな人を不幸にしてさしあげようか」

女性の声で、笑みを零しながら呟く。

「――まったく最近は、異(ことなり)が多くて困る」

女性と別に、ふいに響く声。それは青年のような野太い印象のない好青年な声を闇夜に響かせます。

しかし声には合わない、なんとも異質な事をおそらくはそこいる女性へと言う青年。

「誰だ？」

女性はその声に気付き振り返る。違う家の屋根の上、大きな何かを背負った長身の学生服姿の青年が居た。

「僕？　ああ、言うなればこの世に蔓延るイレギュラーな存在”異(ことなり)”を滅ぼす者……かな？」

「面白いことを言う、貴様にとってはこの”神”である私も異(ことなり)か」

神……もしかして、ホニさんの神様設定がここで生きたりします？

表情を一切崩さないポーカーフェイスの青年は平然と、その質問が分かっていたかのように返した。

「神であろうとなんだろうと、この世に異質なものなんてあっちゃいけないんだよね」

「……貴様は本当に面白い、だがこの”厄病神”に触れるのみならず、喧嘩を売るなど――どうなっても保障は出来ないぞ？」

厄病神？　……ああ、四月一日の夢の中で出た。厄病神と同一人物だったりしますか？

「保障なんていらないよ、僕の目的はただ異をここから消すことだから――」

「！」

すると青年は屋根を飛ぶように去ると、気付かぬ間に数十メートルは離れているであろう貧乏神へと近づいていた。

しかし、厄病神も完全には負けてはおらず。青年がかざした足を刹那ですり避ける。

闇夜の中、突然に。それでいて異質な。日常とはかけ離れた戦いが始まる――

第２２７話　√２－３２　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

最初のジャンルの中に「アクション」があったことを覚えているだろうか？　――つまりはそんな感じ。　後半一部にマイ編ラスト並みの猟奇表現あり、各自で飛ばすことを宜しくお願いします。

第227話　√2－32　G．O．D．

その夜は、常より静かで常より深い闇色に染まっている。
灯りは半分の月が照らすだけ、そんな月明かりを背景に二つの影が住宅街の屋根群を飛び移る。

「人にしてはやるな」

一人は女性。その声は大人びているがしかし容姿は比較すれば幼い、少女と言ってもいいでしょう。
もう一人は男性。声はハキハキとしながらも落ちついた好青年で、スラリとした長身ですね。

「君も僕が出会った異の中ではマシな方だよ、三分近くも持つなんてね」

飛びながらも向き合う二人は双方で挑発するように言う。
その戦いの場は狭く、同じ家の屋根を何度も何度も二人は踏みつけ飛ぶ。

「……私を馬鹿にしていると、後悔するぞ」
「どんな風に僕は後悔するのかな？」

青年は片手片腕を何故か真っすぐに体に平行に伸ばしながら、襲いかかる厄病神に対峙する。
青年のの言葉には厄病神は声で答えず、行動でまずは示す。動きを止め、屋根に向かって人差し指を向け。

「例えば、こうだ」

ギギギギギ、ガタァンッ。厄病神の指した屋根に突然大きな力が加わり金属屋根が空き箱を潰すように簡単にひしゃげた。
そこからご丁寧にチェーンソーでカットしたかのような長さ二メートル薄さ数センチの金属製の板を一瞬に加工、手に握る。
犠牲になった家屋は他の部位も悲鳴をあげ、ガラス窓は割れ雨どいは宙へと浮いた。

「……こんなことをするから僕たちは異を消すしかないんだよね」

内なる想いを誰にも悟られない、ポーカーフェイスで厄病神を見据えて呟く。

「喧嘩をふっかけた本人が良く言うものだ」

ひしゃげた屋根をクラウチングスタートのスターティングブロックにするように、勢いを付け青年へと金属板を構えながら飛び向かう。
長さ二メートルでいくら薄いからと言っても、重量はまがりなりにも金属製なように重さを有しそれを体に打ちつければ、普通の人間ならば骨の数本はおろか内臓を破裂させるのも、そこに”金属の板”を軽快に振りまわせるほどの力があれば容易なことだった。
そして彼女はそれだけの力がある。その板を片手で、それでいて重心が取れないであろう端を持って、更にはそれをホースでも振りまわすように。
しなる金属板は真っ先に居る青年を捉える。振り幅の大きいそれはほぼ確実に青年の体を捉える事がほぼ約束されていた、しかし――

「僕をそんな板ごときでどうにか出来ると思ったら大間違いだよ？」
「なっ」

早かった。厄病神が遅い訳ではない、少なくとも五メートルはある屋根間をものの一秒足らずで移動するのだから破格だった。
しかし青年はそれを分かっていて、あえて待っていたかのような余裕を見せながらも後ずさって避ける。青年は常軌を逸すほどの速さがあった。
目標を捉え損ねた金属板は民家の屋根へと衝突し、けたたましいほどの金属音と衝撃を繰り出した本人へと伝えた。

「まだだ」

空いた非利き手を何もない場所で大きく開いてから――ギシギシと手の先にある電柱が嫌な音を立てた、その瞬間。

「お遊びはここまで、で。〝虚界（キョカイ）〟」
「！？」

厄病神が呆気に取られている間に周りの景色が前触れもなく変わって行く。
それは町の姿をしていながらも、ひどく空虚で月は赤く、景色は黒い。
血に染められた月が、暗い大地を照らす――この世のものではない異常に溢れた光景。

「き、きさまは何をした！」
「ちょっと、ね。まあ、いわゆる結界のようなものを張っていた…
…というところかな？」
「結界だと？　そんなもの何時の間に――」

飛び移る屋根がほぼ定まり、伸ばした腕の先から結界を展開する

為の要素を飛ばす。

「ふん、結界を張ってもお前を倒せば消えうせる。今の自分にはさほど影響は無さそうだな」

「果たしてそうと言いきるには早い気がするけども」

青年はすると学生ポケットから何か指でつまめるほどの小さい物体を取り出して、両手指の間に計六つほど挟んでから一気に手を払うような仕草で飛ばす。

飛ばす先には厄病神はいない――かつてまでは。

「先読み!?　ぐあっ」

厄病神の行く先を完全に予想し、百発百中に捉えた。

「くっ、なんだこれは!」

飛ばされたのは見た目は何の変哲もない球だった。しかし体のいずれかに触れた途端に厄病神の動きの自由が失われていく。

ロウで固められたようにガチガチに体は固まり一切の自由を喪失した。

「最後は……後腐れなく、後始末に困らないようにっと」

「き、きさまはっ」

青年は背中へと手を伸ばし、しっかりと利き手である左手に掴んだ。

前へと現れるのは体長を超える長剣で腕三本分ほどの幅広で肉厚な真っ直ぐな両刃の刃、レプリカなどとは口が裂けても言えない程に磨き抜かれた鏡のような金属光沢を誇る。

装飾の少ないその姿は、ひどく淡泊で。それでいて機能性に溢れているが、その強大さが全てを凌駕していて人を寄せ付けることのない圧倒的な風格を持つ。

それを構え始める青年は、剣に気圧されるならまだしも対等かそれ以上の青年の全身の何倍、何十倍もの存在感を解き放っている。

「これで切れば、お仕事終わりっと」

「やめろ！　それ以上刃を近づけるな、やめ――」

言いきる前に刃は疫病神の少女の体を真っ二つに両断した。切れめはあざやかな断面図のようで、その切れ味と綻びの無さを物語っている。

精気が抜け、離れ離れになる体は屋根を滑り落ちてアスファルトの地面へとぶつかって弾けた。

「この”虚界”を解いてっと――」

景色が元へと戻る。そして壊された家も屋根も全てが元へと戻っていく。

外れたパズルをまた見つけて埋めるような、簡単な仕草と僅かな時間で。

先程の肉体は見る影もなく、ここに戦いというものがあったのかさえあやふやになるほどに元へと回帰していた。

そして青年の手にはちりがみを丸めたかのようにくしゃくしゃにされた球体。それを非利き手で握り潰し――

「今度こそ、終わりかな」

非利き手は自由に、利き手は持っていた長剣を背中という元の場所へと戻す。

「……まったく、この町には異が訪れすげて困るねー」

困った様子は微塵もなく、人通りの少ない住宅街を何もなかったかのように青年は再び歩き出す――

＊　＊

ナレーション切り替えっと……ふぅ。なんですか、あの超過激な表現。聞いてませんよ？

私がホラースキーじゃなかったら卒倒確実ですよ。にしても、疲れますね。

なんというか、見るのは好きでも自分がアナウンスするのは勝手が違いますからね。

そして舞台はまたユウジ家へと戻る。

居間のガラス戸から庭を眺めていた桐が、突然に表情を固くしました。

「……！？」

「桐？」

そのずっと見つめる桐に、不審に思ってユウジは聞きます。

「顔、真っ青だぞ？　風邪なら早く寝た方が」

「いや……なんでもないぞ」

そして「じゃあわしは自分の部屋に戻るからの」と言い残して去

って行く。

「お、おう――どうしたんだ？　アイツ」

訝しげに桐が去った居間の扉をユウジは見つめていました。

「もう、来たか」

桐の実は淡泊な様子の部屋で一人呟く。

まるで、これから先の暗い未来を考えるような、何かが訪れることを思いだしたかのような虚ろな表情で。

「ユウジ、頑張るのじゃぞ」

その聞き手がいるはずもなく、夜の静けさに打ち消されていく。

第２２８話　√２－３３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

生徒会編の一部は伏線だったんだよ！　ΩΩ　Ωな（ｒｙ　●さ～ん、ご指名入りましたぁー

第228話　√2－33　G・O・D・

桐の表情にちょっとの疑問を持っていたが、すぐにどうでもよくなり皿洗いが終わって姉貴やホニさんと話しながら居間でしばらく和んでいた。

そろそろパソコンでもやるかな、と腰をあげて自分の部屋を目指す。

部屋に戻ってデスク前に座る。

しばらくじっくりやってないなー、なんて思いながら電源を入れる。

「……」

何をしよう？　全く決めていなかった。ほぼ無計画にパソコンを点けた。

「（てか、何が出来る？）」

既に時間は九時を回っている……今からゲームやると、確実に明日は睡眠不足で授業中はダウンしてるな。

そうなればブラウザ立ち上げてインターネット……少し前まではアニメブログの周回やってたけども。

「（忙しくて出来てないんだよなあ）」

アニメはいつ見てるんだよ、と聞かれれば。「学校下校後に部屋に籠っている時はアニメを見ていると思ってもらえればいいだろう。

適当に設定してあるアニメ予約をＨＤＤプレイヤーがしてくれて、それを話題に遅れるものの次の日に見る。

……以前までならユイが「アニメはリアルタイムと録画を見るのが常識だぬ」とか言う。

ユイのそんな常識を信じるはずもなかったが。好きなアニメを早くに、リアルタイムで見るのが一番良いことには違いないので俺は去年までは夜更かしして視聴していた。

しかし高校に入ってからは普通に忙しく、授業の復習・予習も一応やっておかないといけないので。結局夜更かしするほどの時間がなかった。

それに加えて始まったこの日々である。夜更かしなんてしてしまった翌日の午前中はフネをこきながら授業中はうつらうつら。頭に授業内容が入ることは叶わない。

と、いうことでアニメはギリギリ見れているレベルなのでアニメブログで”評価”を気にする余裕などなく一度見て「ああ、面白いな」と自己完結とたまに振って来るユイ等の会話ネタに対応する為である。

「……ん？」

アニメで思い出す。一年前にかなり面白いアニメがあって、なんとなくその原作コミックを買ったのだ。

「どこに置いたっけか？」

すぐに押し入れに頭を突っ込んで探してみる。ダンボールを開け、最近買ったコミックを確認していくものの――

「ない」

ないな……おかしいな、アニメ終了ぐらいに買ったからそんな古いものではないはずなんだが。

「……！」

そこで閃く、ここにあるコミックで一番古いのは――そう少なくとも今年の発行になていた。

去年のコミックは大掃除に際にダンボールに詰めて物置に放り出していたのを思い出す。

「物置か」

物置と言っても二つはゆうにあり、今のホニさん部屋を含めれば三つ有ったことになる。

ホニさん部屋はこの家の女性陣のモノが多数だったし（アルバムやらワインやら）

そうなると二つの内のどちらか、そして俺はなんとなくどちらか見当がついていた。

「……まあ、探して読むくらいならそんな時間食わないだろ」

事務椅子に座りながらパソコン方面からグルリ回れ右して椅子からおりて目ぼしのついた物置部屋を目指す。

「だったよな？」

一人呟き、鍵のかけられていない扉を開けて直ぐ壁にある照明を点ける。

「……やっぱ多いな」

見渡すほどに、ダンボールダンボール。解体すればダンボール業出来るんじゃね？　ってな具合のダンボール群。

アニメでは崩れ落ちる展開があった場合にＣＧ表現とかをされそうな量である。

「まあ、それでも前の物置よりは少ないか」

前は天井に触れるギリギリまで積み上げられていて、危なっかしくて仕方なかった。

まあ東京タワーと横浜のマリンタワーぐらいの違い。量こそ多いが高さはなく、分散して置かれている。

「さあて探すかー」

労働を始めるが故のやる気を入れる合図のようにせのびすると首をコキコキ鳴らしてからまずは行く手を阻むダンボールの中身をチラ見して傍に寄せていく。

俺も姉貴も片付けには几帳面なので、ダンボール側面には”誰のもの”であるか”どんなジャンルのもの”なのか”どれほど”かが丁寧にも書かれている。

俺のコミックラノベ、その他ちょっと内密にしたい過去のものとかだけでも十数箱はくだらないので、ちびちびと調べて行く――ガァン。

「痛っっっっ!?」

右足を何かすごい固いものに打ちつけた。正直底面にダンボール

以外を想定していなく、そんな高の無いものがあるとは思いもしなかったので普通に足を動かしていた。
それ故にその痛みは悶え転がりたいほどの凄さでだったが、ここで転がったらダンボールに牙をむかれて自分が埋没確定なので必死にこらえた。

「な、なんなんだよぅ！」

涙目になりながら足元を覗くとそこには白い布に包まれた長く先は幅があり先から遠のくほどに狭まる、柄の部分あるであろう何か。しかし良く見れば布の隙間からキラリ銀色の輝きがあった。
なんだろうか、それなりに長くて固くて光ってるものとか……鋭器か鈍器しか思いつかないのだが。

「ちっくしょう、何だ……ろ！？」

持ち上げようとしてその重さに驚く、決して持ちあげられない重さではないが、それを一時間持っていたらかなりキツいものがありそうなほどの重さ。
一メートル半の大きさ的には比例しない重さだが前述の通りそれなりの重さ、そして手で持てるであろう細い部……ここは木なのか。それを持ちあげるとスルリと布がはだけ、その全容が見える。

「これは……鉈？」

こんなもの床におくなや、と叫びたいところだったが。その鉈をみて知る。

「すげえ、磨き抜かれてる」

素人目にも分かる程にキンギラギンにさりげなくない。

「てか俺は刃先に足ぶつけたってことか」

危ねぇな、下手すりゃいつの間にか足無くなってんぞ、冗談抜きで。

……誰だろうなこんなもの持っていそうなのは良く物を拾ってくるのかと言わんばかりに家にもってきては数時間たたずに物置へと追いやる――母さんか。驚くべき直結速度で、母の持ち物だと悟った。

「はぁ……俺と姉貴とあいつは持ってる意味ないしな」

いつまでも家にいない母親に苛立ってもしかたないので、拾い上げた鉈をみる。

狩りで使うというより芝を刈る為に使うようなもので、刃先にトゲがついている。

まあひぐ●しでレ●が使っていたものと思って頂ければいいと思う、おそらくはそれよりも少し長そうだが。

「……」

ここに置いておくのは危ないな。もう少しこの鉈は気になるし持ち帰ってみるか。

そうしてその後はエラく簡単に見つかったコミックを持って物置を後にした――

え？　そのコミックは何かって？　――ニー●レスですけどなにか？

第２２９話　√２－３４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

遅れたですー

第229話　√2－34　G・O・D・

「……ふぅ」

ニー●レスの持ってきた三巻分を一時間ほどで読み終わる。
いや良かった、アニメの声で山●とア●ムとイ●が再生されてかなり心地が良いんだぜ。

「さてと」

横目に見れば、そこには壁に立てかけられた木製の柄と純粋な銀色というより黒みがかった色を持っている全長ほぼ一メートル半のトゲのついた鈍器に分類されるであろう鉈。
物置部屋を弄っていると、母親の持ち物と思われる鉈を見つけたのだった。

「……」

鬼隠しでもあった訳じゃないだろうし、見た目は刃の綻びも見受けられないところ見るに殆ど新品だろう。

「うーむ」

手にとって色々見まわしてみるものの、特に表記は見つからな――ん？

「なんだこれ」

丸木で出来た柄の底面を見ると、そこには乱雑にマジックペンで

ぐりぐりと落書きのように文字が並ぶ。

「”ナタリー”」

……ええと、ここは笑うべき部分があるのだろうか。

単純に考えて「英語圏やフランス語圏で使われる女性の名前」と「鉈」をかけたんだろうなあ――

「っ」

なんだろう、あまりに安直過ぎて涙が。せめてマジックでこんな乱雑に書くことはしないでくれよ、鍛冶屋も報われねえよ……まあ、この文字の乱雑さは流石に今の母ではないだろう。少なくとも昔の母が買った、与えられたものなのかもしれない。

……それはあくまで母親の持ち物として仮定するということなのだが――他の理由で物置にあるとか考えたくは無いな。

「ひぐらし的な発想で行くと」

オヤシロサマ的な？　呪いの鉈？　まあ、鉈にはそんな設定無かったけども。

「……喋るとかしないよな？」

デ●フリンガーじゃあるまいし、鉈に喋られても困りものだな。

というかこの発想に即行く着く時点かなりのラノベ脳という……いやだってさ、この世界ギャルゲ含んでるんだぜ？

喋り方だけが老朽化した妹とか、色々なキチガイ能力が使える古い妹とか、絡んできてはフザケた求愛行動して来る妹とか。狼な神様とか↑すごいかわいい。

まあ、そんな方々が居る世界観なのだから喋っても何の違和感もねぇな。なんて思ったわけだ。

「……おいナタリーさんよ？」

壁にもう一度たてかけた鉈に高校生が喋りかける光景――シュールだろうなあ。

どこの厨二病だ「ナタリーさぁんよぉ？　いや、相棒ぅ！」とか言ってやればなんか喋るのだろうか。

「おーい、相棒」

コツコツと刃をつついて見るも、反応はなし。

いやあ、こんな光景誰にも見られない自分の部屋だからやってるってもんだよ。

ほら、美少女フィギュア持って「ハァハァマ●アさん、ちょっと覗いていいかなグへへ」とか「シャシャシャシャ●たん！　いつもぼぼぼぼくの傍に居てくれてありがとうなデュフフフ」

とかやってる訳ではないから、そこまで心身異常者には見られないだろうけど…これが見られたら俺一週間は恥辱のあまり休んじゃうわー、マジ一週間の故意休暇確定だわー。

「あーいーぼーう」

「……」

「あー……！」

後ろに気配、振り向いたら何かがそこに居て何にも付かぬ形容しがたい表情をしながら立っている気がしてならない。

なんだろうこの動悸は、一番見られて面倒臭そうなヤツにじっと見られている気がする。

少なくともこの謎行動は流石に直ぐに反応することは出来ず、何か哀しみを含んだ優しい目をしながらそこには誰かが――

「す、すまんな」

……桐が居た。かなりきまずいなぁ、謝ったあとはどう話を切り出そうかかなぁ。なんて内心困惑しているであろう微妙な表情をしていた。

「……どこから見てた？」

「ナタリー」

一週間休むわ。

「ぶ、ぶはははははははははははは」

「……」

「な、ナタリー！　ブリタニア家の妹さんみたいな名前じゃのう（笑）」

「……」

「あ、あいぼうぅ！　っく、ふふふっふふふふふふふふふh」

「えーいっ、止めろよ！　鉈で裂くぞ」

「ナタリーじゃろ？　ぷっ、くくくくくく」

……今すぐこの鉈を実用に移したいんだが、どうだろう？

「まあ、面白いユウジ弄りもここまでしておいてな」

「ひどいよ、こんなのあんまりだよ」

「そう嘆くでない、これはわしとお主の二人だけの秘密じゃ」

それは桐にとってのいつかの脅迫材料の間違いではないだろうか。

「……鉈にお主は選ばれたということじゃ」

「いきなりお前も厨二病患者みたいなこと言いだすんだ？　当てつけか！　それは俺への当てつけか！　ちっくしょうめえ、秘密宣言から十秒経たずにネタにするなんて、このド外道が！」

「わしが理不尽にこれほどにも罵られているじゃと……わけがわからないよ（笑）」

「鼻で笑うのを止めろや、某掲示板でもブログでも挑発が主要目的だぞそれは」

まったく、隙を見つけた途端に凄まじい程の活きをみせやがって。

「……しかし先程のはユウジをネタにしたのではなく、ガチじゃ」

「選ばれた云々のことか？」

「うむ。ある種、それが固定武器となったということじゃの」

「固定武器？　まるでこれから俺が――」

武器を使って戦うみたいな言い草だな。

「いやいや、鉈とか戦いに向かないだろう。重いし」

「それはお主の運じゃろう」

すげえぐらいに俺の運って底辺だな。

「まあ、それを言いに来ただけじゃったが……思わぬ収穫があったからわしは満足じゃ！」

「あああああああ、ちくしょうめえええええええええええ」

桐にネタを提供してしまったのが屈辱以外のなにものでもない。
ああ、不覚だった。
桐に常識なんて通じず、プライバイシーのプの字も無いヤツだったから……うかつだったわ。
満足げに部屋を「じゃあの」と言って去って行く桐を睨み終わると、先程の言葉を思い出す

――と、イライラするが。少なくとも”ガチ”と言った桐はしごく真面目な表情をしていた。
だからもしかして、だ。

「……いや、ないよな？」

誰に問いかける訳でも無く、俺は天井に向かって一人呟いた――ってこういう行動がダメだろな。

第２３０話　√２－３５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

※この小説と言うにもオコガマシイものはキャラ犠牲の元で成り立っています（個人的推測より）

なんか必然的にユキのキャラが壊れて行くような……でもユキファンのみんなは諦めないでね！

第２３０話　√２－３５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

鉈を見つけて数日、ホニさんと出会ってほぼ一週間が過ぎた。
下之家にかなりの勢いで馴染んでいった、俺の数少ない清涼剤ことホニさんは俺たちが学校に行っている間に家事を卒なくこなしてくれていた。
たまに共作で作られるホニさんの料理にも毎回発見が有り、何回も驚かされた。
少しの変化と言えば、俺が帰った頃。家事が終わり、桐も先に帰っていることものあるのかゲームで遊んでいることが目に入る。
日によって将棋・オセロ・碁・チェスなどなどで遊んでいて、殆どの部分でホニさんが圧勝して桐を悔しがらせるていたこともあって、そんな場面に出くわす度に癒しと快感を得られるという一粒で二度美味しい素晴らしい光景だ。

そんな感じに平穏な日常は続いていて……まあ桐の襲撃は相変わらずなんだけども、最近は回避方法も身に付けたのも手伝って結構慣れた。
というかここ数日の桐はハッスルし過ぎだろう。どれだけの回数、どれほどの時間を俺の部屋に来ているんだよ、と。

五月一一日

ということで、学校だ。
似たような始め方して、それ気に入ってるの？　と聞かれてもおかしくないぐらいに多用している気がするがそこは触れないでおいてくれると助かる。
なにも起きて早々の「桐の部屋探訪」の展開があまりにテンプレ化していて話す手間も勿体なかったりや、通学路での「マサヒロト

ーク」があまりにマニアックで言う必要のないことだから学校までの過程を省略した訳では――ないとは言えない。
まあ、でも抜き出すとしたら――

『ユウジさん、お姉さん、ユイ。いってらっしゃーい』

という素晴らしきかなホニさんのお見送りぐらいだろう。
当たり前になってきたとはいえ、これはしてくれる度感動する。
どんだけホニさん好きなんだよ、と横からスライディングキックでツッコミを入れられそうだが。

好きで何が悪い！

いやさあ、これはねえ。実際に一緒に住んでみてわかることだな。というか既に出オチレベルの可愛さを誇っているホニさん（褒めてる）
……あんな可愛い子が少し桐とのゲームに勝って、興奮すると頭の上から犬耳がピョンって――ピョンとね！　ぴくぴくって動くんだぜ？
かぁー、可愛さ余って可愛さ百倍だよ。もう可愛い、とにかく可愛い。自分の料理を味見して美味しい時に嬉しそうにしていたり、ドラマとかを見て「おおー」とか感嘆の声をあげてたり。
帰ってくれば律儀にも「おかえりなさーい」ってゲーム途中なのに来てくれる、な、な？

可愛いよね。

これがスタッフのヒロインプッシュだよ、と言われようが可愛い。
あー、皆に伝えられないのが残念だなぁ～（笑）

「ユウジ、そんなニヤニヤしてどうしたの」
「！」
その声に感づくと俺の顔を覗きこんでいたのは、明るく活発でポニーテールが美しいユキさんだった。
ホニさんのことをさっきまで考えていたとはいえ、やっぱりユキも平常運行で可愛いなァ……と思おうとしていると、ユキの表情に気付く。
「ユキさん……？」
「それで、ユウジはなんでニヤニヤしてたのかな？」
不機嫌だった。いつもは「表情じゃ笑顔なのに～」とか言って、それ程表情を表に出さずに怒っている時が多いのだが――今日は明確に不機嫌だった。
「いや、そうだな――」
「ル●ズだけでなくアン●ッタ王女もいいかなあ」と萌えていたんだ……と答える訳にもいかないので「昨日見たバラエティが妙にツボに入ってね！」と軽快に呟く予定だったのだが――
「……あの子のこと？」
「（ギクリ）」
「やっぱりかあ」
俺が露骨に反応すると、ユキさんは残念そうに肩を落としてため息をついた。

「ユウジ、最近朝はずっとそんな感じだよ？」
「え、マジで」
「はい、マジで」

うっそーん、俺とかめっちゃ表情に出さないタイプだぜ？　心のガードが鉄格子のごとく固い俺がだぜ？
まっさかー？

「……ガチで？」
「うん」

そっか……ニヤニヤしてたか。ホニさんのことでニヤニヤか――

「あのー、ユキ。そんな俺みてどう思った？」
「……男の子だもんね」
「誤解だ、それは！」

おい、俺はそんなイヤラシイ目でホニさんを見たことなんて一度もないぞ！？
そりゃ、あの犬耳をもう一回触ってみたいなーとか、凄い撫でたいとかな。ひっじょうに健全で可愛いホニさんを愛でるホニスキーな域を出ていないよ？　ホロニアンまで行くとアウトだけども。

「でも……四六時中あの子のことばかり考えてるよね」
「そんなことないよ！　ユキも姫城さんのことも考えているさ！」

すぐ思うと、この発言は桐に節操ないとか言われても仕方ないかもな。いやホニさんのことで怒っているユキ本人を持ちあげる要素丸見えな上に姫城さんも言うとか。それもおそらく解釈では不純な感じの思考で。

それ故に「え……ユウジってそんな人だったんだ」と蔑まれると思っていて、俺への精神的大ダメージを覚悟していたのだが――

「え、わ、私も？　そっか……考えてくれてたんだ。じゃあ……いっかぁ」

いいんだ！　言った張本人が言うのも何だけど、いいんだ！

「これで姫城さんも安心だね」

「ちょ、あの……」

「でもユウジ、そのニヤニヤ顔もほどほどにねー」

「えー……」

そう言ってユキは駆けて行く――姫城さんが登校してきた扉の近くまで。

ユキさん、俺が言うのも本当に何だが……そんな俺の言葉でで満足出来たんですか――

第231話　√2－36　G.O.D.（前書き）

これはひどい

第２３１話　√２－３６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

四六時中とは言い過ぎでも確かにホニさんのことばかり考えていたのは事実だが、そんな一方でも他に考えていたこともある。

「（コトナリ……ねぇ）」

数日前にすれ違った際に聞こえた女生徒の呟きが気になっていた。その女生徒というのが以前にもすれ違って、何か時が止まったかのような錯覚に陥ったことがあった。

最近も同じような感覚を感じた後に”コトナリ”なんちゃらかんちゃらと呟き、なぜか印象的に俺の脳内ＨＤへとこびりついていた。

しかし誰なんだろうか。学年色のリボンは見る暇なかったし、手がかりは「長く深い緑髪」に「小さく両サイドテール」そして「拒絶の意思を示す瞳」

なんというかこれをスペース入れて検索しても天下のグーグルさんだとしても検索結果を”〇”と表示せざるを得ないだろう。

名前も知らなければ学年も分からない、殆ど彼女を知る術は自主行動に乗り出す以外は詰み状態だった。

さてどうしたものかと考えていると思いだす――

「（アイツはどうだろうか）」

お前も女だろうというツッコミを真っ先に入れたくなる”美少女”キラーことユイ。

まあ、狙っても情報仕入れてくるだけで殆ど害はないんだろうけど。ファンクラブ情報も転校生情報も調べてくるのが早い。

ということは、だ。まあ、流石にこんな手がかりで分かったら驚

きを通り越して引くけれども。ものの試しに――

「雨澄（あますみ）　和（より）さんだな」

答えてくれたのだった。

「……え？」

「だからアマスミ　ヨリさんだ」

「マジで……適当とかでなく？　ランダム再生とかでなく？」

「アタシはミュージックプレイヤーやない……ビューティフルガールプレイヤーだ！」

その返しはどうなんだよ、と内心思いつつも声には出さない。しかしまさかの返答を頂いたよ。

「”さん”ってことは先輩か？　それともタメ？」

「同学年だ、しかしクラスは知らん！」

なんというか、デジャブじゃないのにデジャブった気がする。

「じゃあ主な特徴は」

「無口美人、成績は中の上……ほどよく目立たない彼女だが、その容姿の高さは学年アイドルの姫城さんとユキと張れるものがある――以上ユイペディア終わり」

「おおー」

初めてユイが役に立った気がする。確かにかなりの美人さんだも

んな……姫城さんともユキとも違う、おとなしいとはまた違う大人びた感じと上品さがあったし。

「他に情報は？」

「それが無口すぎてワカランネ、クラスの人とも話さないらしいし。ある種浮いていますな」

お前が言うな。

ユウジも言えませんよ？

「それでいてクラスは――」

「知らん！」

また経験していないのに、まるで既に一度聞いているような感じがするな。

なんでそこまで情報知っててクラスは分からないんだよ。

「なんでユウジはそんなこと気になったのにゃー？　ははーん、気になるあの子だったりするのかにゃー」

「……ちげーよ」

気になるっちゃ気になるが、ユイの言う「気になる」とは別だ。好意は抱いている以前に、素性を知らないのでどうしようもない。

そんな時後ろで――カランッ、とプラ製のシャーペンか何かが落ちる音が聞こえる。

「……ユウジ、詳しく」

振り向いた瞬間に不機嫌オーラを撒き散らしつつも笑顔のとって

も怖いユキさんが居た。そして振り向き際にさっと俺の肩は掴まれる。

最近のユキ怖いよ！　ユキラブなのは揺るがないし、そんな少し不機嫌な表情のおかげで表情パターンが増えてますます彼女も魅力的だけども……少しはこええよ！？

「あの、ユキさん？　何を詳しく言えばよろしいのか分かりかねます」

すげえ言葉遣いになりながらも、肩を掴んできたユキに恐れ戦く俺。

「き、気になるあの子とは誰のことかな？」

「ああ、それはなんでもないことだから――ってなんでユキさんは姫城さんの方に行きますか！？　おして姫城さんもすげえ形相でうわああ」

「……まあ、頑張ってな。ユウジ～」

「あ、こらユイ！　そんな擁護もなしに行くなって！　……あの姫城サン？　その小刀はマズいですって、というか貢物にしたはずなのになんで同じような刀が……ちゃんと話させてください、お願いしますから。とりえあず落ちついてくださいい――」

その後のこと。

ちょろいと言っては悪いけども「ユキと姫城さんが俺にとっては気になる子さ（キリッ」と自分でもキザで頭の悪い吐き気のする台詞を言うも「そ、そっか……なら、うん。いいかな」「ユウジ様に気になっていただけるなんて……嬉しさの極み、思わず昇天しそうです……」とすぐさま上機嫌になり……要するにちょろかった。

こんな台詞でオトしちゃっていいのだろうか。全国の徹夜で決め台詞を考えているキザ野郎どもになんというか申し訳なくて仕方な

い。
　というかこのお二方がアイドルでいいのかと思い始めていた……そりゃあどっちも美人で可愛くて、ユキに至っては俺もラブですけども。
　……ファンクラブの方々はこの実情を知ったら驚く以前に俺を殺しにかかるだろうけども。こんな巧くも痒くも無い台詞で機嫌治せちゃうというのも……ある種それなりに俺が好かれている証と取って良いのだろうか。

　色々あったけども……ということで緑髪の彼女は「雨澄（あますみ）　和（より）」というらしい。それが分かっただけでも収穫だ。

　これはひどいですよユウジ。そしてその以上にユキと姫城がひどい……クソゲーだからって、他の人の√になったら扱いがテキトーになってませんか？
　王道ハーレムも金棒持って襲いかかるぐらいのテキトーさ加減に苛々とさせてくれますね。なんですかコレ、更新頻度上げればいってモンではないでしょうよ。
　それでもまあ、評価するとすれば。深緑色の髪の女性の名前を知れたことですね……まあ、こっちには台詞台本と共にキャラ設定もおおまか届いてますんで知ってましたけどね、雨澄和。
　彼女の言った”コトナリ”の意味とは……ってミスリードじゃなきゃ分かりやす過ぎませんか、スタッフさん？

第２３２話　√２－３７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

唐突ですけどクソゲヱで面白い回ってありました？

第232話　√2－37　G.O.D.

「ユーウくんっ」
「おおう!?　近いっ、近いから!」

居間でくつろいでいると、唐突に姉貴が目の前に現れ顔を覗いてくる。
というかなんという近さだろうか、お互いの吐息を感じるであろう昔懐かし三十センチ定規からカウントダウンを始めるであろう数十センチの距離だった。

「……で、なんだ?」

肩を掴んで引き離すことに成功する。まあ姉貴は少し悲しそうな表情だったがそんなのは関係ねえ。

「ユウくんデートしよ!」
「断る」

姉貴の口からデートという言葉が出た時点で拒否反応が出る。姉が弟にデートはねえだろうよ。
ラブコメマンガの仲の良い姉との対応に慣れた主人公的には「あぁ、買い物ね。はいはい」と流せるのだが、姉貴が言うとワロエナイ。

「……私じゃ不満なんだ」
「いや、それ以前に姉弟関係だから」

姉貴と並べば絵になるだろう……容姿的には確実に俺は釣りあわ

ないだろうが。というか俺と姉貴は容姿は殆ど似ていないので傍目に見れば普通のデートに見られかねない。

俺への溺愛を差し引くとかなりの完璧超人で美人な姉貴だから、決して一応弟とはいえども男として見ると魅力的に映らない訳ではないけども。

溺愛を差し引いちゃいけないのが姉貴で、その溺愛は中学校時代から伝統のようなものになっているせいか「これほど美人なのになぜここまで色恋沙汰がないのか」その要因は俺という存在にある……と、マサヒロに去年ぐらいに聞いた。

だから並んで不満ということはないが――まあ姉と弟ですから、と冷静に指摘しておく。

「……ユウくんの嘘つき」

「はぁ!?」

「……掃除の時にユウくんがデートしてくれるって言った」

「は？　俺がそんなこと言う訳が無いだろ！」

「”……か、買い物なら付きやってやらんこともない”って言ってくれたじゃない！」

「ちげーじゃねぇか！」

どうやったら”デート”イコール”買い物”になるのか――姉貴ならばやっぱり納得できるけども。

というかなんでそこまで一字一句間違っていないのに解釈では間違えられるのか俺には到底理解できない。

「男性と女性が二人で町を歩いて買い物だよ！　これがデート以外のなんだっていうのっ！」

「それ以前に姉弟の前提があるからそれはない！」

ここまで聞いて姉貴は俺を弟として本当に見ていないんじゃない

かと思えてくる。

「買い物なら一緒にいってやる、って言っただけだろ」
「……買い物という大義名分のもと――」
「買い物な？」
「らぶらぶいちゃいちゃユウくんとの――」
「ショッピングな？」
「デート――」
「すまん……あの時の発言取り消すわ」
「っ！？　やったー、ユウくんと買い物だー！」

……まあ、デートというのは流石にナイので。必死こいて訂正させてもらった。ある種の抑制効果もあるんだろうからこの軌道修正は良い判断と言える。

「るんるんるん～」

姉貴は上機嫌でキッチンへと向かった。それはも嬉しそうに鼻歌を歌っている、なんだかんだで幸せそうだなあと思える。

しかし俺はそこまで優しくない。姉貴と二人きりはかなりの悪い予感が……大掃除をした時の時点でヤバかったので外出（姉貴にしてみればデート）したら――

「……ヤバいな」

姉貴が”家族”という一線を事も有ろうにスキップで飛び越えかねない。

「かくなる上は」

俺は居間を出て二階へと上がる。そしてある部屋の扉をノックし――

「はいはいー……あっ、ユウジさん」

「ホニさん、そういえばなんだが――」

”買い物”は二人で行くとは限らない。デートなんかじゃなければ”何人でも”家族や友人を誘うことが出来る。

俺はそうしてホニさんと桐とユキを誘った――

でも、今考えればこの行動は間違いだったのかもしれない。

いや、早くに実態を知れて結局は良かったのかもしれない。

それでも、平和なる日常が唐突に終わる時が。刻一刻と迫っていた――

第２３３話　√２－３８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ＳＨＵＦＦＬＥ！のアニメ版が面白くて仕方ない

2001

第233話　√2－38　G.O.D.

五月一六日

「ユウくん」
「なんでしょうか？」
「なんで？」
「と、言いますと？」
「……はぁ」

「ユウジさんユウジさん！　あれがスーパーという色々なものが揃うお店なんだよね！」

姉貴のため息の理由を俺は知っている。というかもろに当事者だったりするので良く理解している。

「そうそう、食べ物から日常品まで色々売ってるんだぞ」
「ひどいよユウくん……買い物は二人きりだと思ったのに」
「いやー、家族水入らずで出かけるってのもオツなものじゃないかあー」

どこの古臭い親父だよと言わんばかりの発言をしてみるものの、まあ言いたいことは確かだ。
学校で留守番を任せている上に休日までもが俺と姉貴で出かけてホニさんを置いておくのは酷すぎる。
ホニさんはただでさえ好奇心旺盛で、肝試しからの帰宅時に周囲の景色に目を輝かせているのを鮮明に覚えている。
きっとホニさんは我儘を言わないよう、ある程度の気持ちを抑え

て俺たちを見送っているに違いない。
ならば、と声をかけた訳だ。

『……え！　お出かけ？』
『どうだろう？　俺と姉貴は決まってて、一緒に行かないか？』
『でも……いいの？』
『ああ、ホニさんずっと留守番任せちゃったからな。少し外の空気を吸うのはどうかな、と』
『……少しはしゃいじゃうかも』
『休日ぐらいは羽を伸ばすと思って、な？』
『うん！　じゃあ、我も行きたい！』
『了解、ユイとか桐も誘うけど』
『うんっ！　お出かけは皆で行くのがいいよね――』

といった感じに一昨日呼びかけてみた。正直ホニさんが来ることを確定しただけでだいぶ気が楽になった。
その他ユイを誘うと「おおう！　丁度ゲームショップ”キッド”をチェックしたかったから途中までお供させていただくぜい！」以下のように途中までの同行が決定。
残りは桐なのだが……まあ正直面倒という気持ちがあるが「わしを誘わないとは何事じゃあ！」と怒られそうな気がするのもあったが、流石に桐を除け者のように誘わないことはしない。桐のことは決して嫌いじゃないからな。

『スマン、わしは止めておく』
『……え？』
『いやー、お主の熱烈な誘いを断るなんて嫁失格なのじゃが』
『そこまで熱心には誘っていないし、そもそも俺はお前を嫁とは認めていない訳だが』
『――という照れ隠しまでしてわしを誘えなかったのがショックだ

とは思う、思うのじゃが。今回は止めておくとしよう』
『……ああ、そうかいそうかい。というか言いたい放題言ってんじゃねえ、まあでも今度機会があったらまた誘うからな』
『うむ、承知した』

と言った感じに断られた。思えば最近の桐は忙しそうにも見えた。数日前からはホニさんとゲームする時間が終わると同時にやかましいほどに家の中や庭を闊歩していた。
そこまで関心が行かなかったこともあって、桐が一体何をしていたかは分からないが。

「ということで姉貴、そろそろ折れてくれな？」
「あうう……」

相当にショックだったらしいが、そんなことはお構いなしだ。

「でも……ユウくんと久しぶりのショッピングだねー」
「そうだな、食材調達も学校帰りに俺か姉貴かでやってたもんな」

ホニさんや桐、ユイが居なかった頃を思い出す。
ユイが越して来たのが今年の春休みを向かえた直後ということもあって、当時は非常に驚いたものだ。

「ユウジさんユウジさん！　あれは？　あのグルグルと青と赤が回ってる看板がある――」

これほどまでに無邪気という言葉似合う方も居ないだろう、幼少期に親に連れて貰ったデパートでの俺もこんな感じだったのかもしれない。
容姿的には非常に可愛らしいが、その無邪気さと裏腹に永い刻（とき）を

過ごして本でしか知りえなかった光景を目の当たりに出来ている感動もあるのだろうと思う。

「あれは髪を切って整えるところ、理髪店とか床屋とか言うとこだな」

「へぇー、髪を切ったり整えたり……そんなお店が現代にはあるんだねー」

「ホニさん的に、今日はどうだ？」

「うんっ！　何もかもが新鮮で、すっごく楽しい！」

「そっか、なら良かった」

そんな無邪気にはしゃぐホニさんを見て、流石に観念したか姉貴もふぅと息を吐く。

「そうだよね、また今度があるもんね。それにホニちゃんが嬉しそうで、私も良かった」

「ああ、でもさりげなく未来に予定を入れないでくれるか？」

「それに……ユウくんと私の子供みたいだよね、ホニちゃん」

「うーん、これは反応しちゃいけないだろうなー」

まったく、姉貴も町中だから自重してくれよ……露骨に「手、繋ご」みたいな意思を目配せするな。

と、言った感じにウィンドウショッピングを楽しんでいた。本当に懐かしい、前は姉貴と俺含めて四人で街に駆りだしていたこともあったなあ、と思いだす。

状況こそかなり異なるが、こんな日常もかなり幸せなんだよな……と改めて思う。

そしてしばらく歩いていると――まただった。

『――――』

「っ！？」

その人の周りを他人は避けるように、彼女は明確な拒絶を示す。すれ違おうと前に見えるのは、藍浜高校制服姿の女子生徒。

深い緑色の長髪に、ちょこっと出た両サイドテール。上品さと大人っぽさを揃わせながらも、その瞳は冷たく――

『やはりあなたの匂いは間違っていなかった。見つけた――異（ことなり）を』

「！」

彼女……いや。同じ学校、学年生徒こと雨澄和が饒舌に言葉を発したその瞬間に、日常は壊れた。

2006

第２３４話　√２－３９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

バトル展開なのに手抜き回になってしまった……

第２３４話　√２－３９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

世界が壊れた。
それは何の比喩表現でもなく、その言葉通りのこととしか表現できない光景が目の前には広がっていた。
目の前の風景が変わって行く……いや、姿形は変えないで変色していく。
いつもの景色が色を変えるだけでこれほどまでに冷たく不気味なものになるとは想像出来なかった。

俺の見ているものは現実なのだろうか……いや、これは違う。きっと俺は夢をみているんだろう。
現実なら、ここまで色を露骨に塗り間違えたような空や商店群にはならないだろうし――
なによりも、音が消える。そして気付けば周りを歩いていたであろう商店街の人々が姿を消していた。

「おい……なんだよコレ」

当たりを見渡して――すると、聞き覚えのある声が耳に届いた。

「ユウジさんっ！」
「ホニさん！」

ホニさんが状況を把握できていないような表情で駆けよって来る、そして俺も似たような表情をしているだろう。

「ユウジさん、お姉さんは！」
「そうだ、姉貴――」

辺りを見渡しても、そこには人っ子一人いない……背景だけの世界。俺とホニさん以外が故意に除外されたような。

「どうなってんだよ」

「我にも何がなんだか……」

二人回るように商店街の道の中心で辺りに目を向けて行く……しかし、そこには人影はない。

「ユウジさん……なんか嫌いだよ、この風景」

「ああ、俺も見てて気持ち悪い」

途方に暮れるその瞬間に、俺たちの声とは別の音が聞こえる。シュッ――空気を切り裂くような、何かが付き抜けるような音。

ガツンッ。

「な……」

「！」

目の前にはアスファルトを砕いて矢が刺さっていた。上方から、ギリギリで俺たちを避けるようなところへ撃ち付けていたように思える。その矢から続けるように――

『……この世の異（ことなり）は消さねばならない』

上の方から聞こえる女性の声……そうだ、この声には僅かに聞き覚えがある。

廊下ですれ違いざまにコトナリと呟いた時、そして世界が壊れる

瞬間に。
思えばこの不気味な世界も冷たく。そして俺たち以外の人を拒絶した――

『そして……異に憑かれたものも消さねばならない』

冷淡で起伏の無いこの声には饒舌がひどく似合わない。
空を見上げるように上を見れば地上七メーターほどの二階建て商店の屋根から、矢を放ったであろう弓を構えている深緑色の髪を持つ制服姿の女子生徒。

『だから……二人には死んでもらう』

「！」

衝撃の発言がなされた直後に再び放たれるは矢。今度は俺の横ギリギリを通り過ぎる……少しでも動いたら腕を抉られていただろう。

「ホニさんっ！」
「う、うん！」

俺はホニさんの手引いて走り出す……同じところに留まったら、体を貫かれてても不思議でない。おそらく矢を放つ彼女は――

ガキィンッ、そうしてアスファルトが砕け散る。

俺たちを殺す気でいるのだろう、漫画の読み過ぎでもなんでもなく……明確な死を俺は感じている。
そこまで殺しにかかられるほどの事を俺は何かしたのだろうか、至極まっとうな疑問が沸き上がる。

そもそも彼女の言う”コトナリ”とはなんなのか……そう思う後ろで、ホニさんは――

「きっと、我のことだよ」

”コトナリ”は。と呟いた。ホニさんは沈んだ声で、先程までの周囲に広がる景色に瞳を輝かせていた時の元気はなかった。

「……ああ、ちっくしょう！」

「えっ」

俺は逃げる、ホニさんを抱き上げて走って行く。意味も分からず理不尽に、全てが壊れた世界を俺はひた走る。

矢継ぎ早という表現がそのものな程に矢が次々と前を通り過ぎ、それを寸前で避ける。

『逃げないで』

「誰が聞き入れるか！　そもそもお前はなんなんだ！　いきなり弓なんか射ってきやがって」

『……私は異を狩るモノ、普通の人間と存在を違え。調和を崩す異は私たちが打ち消す』

「がぁー！　意味分からねえよっ！」

抱きかかえるホニさんの口から「そっか……我は人から見たら、変わってるもんね。異なるもんね」耳も尻尾も……喋り方も知識も何もかも……そう呟いた。

俺はそれに反応したくなかった。彼女らがホニさんを”コトナリ”とみなして狩るというのならば……俺はホニさんを守る。なにせ家族を守るのは当然の義務だからな。

”コトナリ”とは呼ばせねえ、ホニさんていう可愛らしくもどこ

か立派な名前を持っている……俺はこんな展開認めない、ホニさんを失うことを許さない。
そう胸の奥に確かな決意を潜ませつつも、俺は矢を避けながら走って行く――

＊　＊

「ユウジさん」
「ん、なんだ？」

必死に走る中でホニさんと会話をするものの、やはり自分の息は絶え絶えだ。己の体力の無さを改めて自覚する。

「こんなことに巻き込んで、ごめんなさい」
「ホニさんが謝ってどうする。……そんなことよりも、追っかけてくるこいつらに俺は怒りの矛先は向いてるね」
「ユウジさん……」
「――大丈夫だ、なんとかする」

確証が有るわけでもなく、自信のほどもない。
けれど、護らないと。そんな一心でパンパンになりズキズキと痛む足を前へ前へと持っていく。

脂汗が流れる、流石に軽いホニさんとはいえ人を抱えて走るのは負担が大きい。
どこまで走ればいいのだろう、商店街を今抜けて……壊れたままの世界を必死の思いで駆け抜ける。
そんな時だった――

『ユウジ、聞こえとるかの？』

その声は聞き覚えがあり、憎たらしくも嫌いにはなれない――老婆喋りが特徴の。

『わしじゃ、このまま家の方へと迎え。わしがなんとかする』

桐がいつの設定だよ、と言わんばかりに俺へと”テレパシー”のようなものを通わせて。脳内に桐の声が響いた。

2013

第２３５話　√２－４０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

更新文章量少なくてサーセン

2014

第235話　√2－40　G.O.D.

「桐か！？」

その聴きなれた声に不覚にも感動した、俺とホニさんと矢を殺しにかかる雨澄和と思われる女子生徒。

声に反応する時でさえも、矢は俺の足を狙い射つように目の前、右左にそれなりに頑丈なアスファルトの地面をクッキーを壊すようにあっさりと砕く。

『うむ、今は敵との戦闘中と言ったところじゃな』

そういえば以前に桐は攻略情報を知っている――と、言っていた気がする。

「あ、ああ！」

「桐？　桐とユウジさんは話してるの！？」

どうやらホニさんには伝わっていないようで、おそらくは俺が途端声を張り上げ「桐」と叫び会話したことで読みとったのだろう。

『そのまま家まで走れ、そこからはわしがなんとかしよう。ホニには安心せいと伝えておけ』

「どうやって！？　まさか桐は自分を犠牲にとか言いだすんじゃ――」

『わしを心配している暇など、お主の喋り具合ではなさそうじゃが……とりあえずはそれほどの危険はないから、安心せい』

「そうか、じゃあ桐を信じて俺は走らせてもらうぞ」

『どんとこい』

「……桐から伝言、安心せい。だとよ」
「え――桐は一体何をするつもりなの……？」

わからん、とホニさんには答える間もなく屋根を踏みつける金属や瓦の音が後ろからは響き聞こえる。
ダンスのステップのように、後ろから付き抜けて行くことで変わる風音に反応して寸ほどのところで避ける。
なるほど、帰宅部インドア派な俺でも逃げ足だけと反射神経は早い、良いのか。足に限界が近づいている気がするが……足を止めた途端には何本もの矢でハチの巣だろう。それならばこの足を止めることは出来ない。
……だとしてもご都合な気もするか、というか後ろの音だけで判断するとか何者なんだよ、俺。

『そうじゃ、言い忘れておったがお主に”反射神経増幅”と”超加速”の効果を持ったナノマシンを体内に入れておいたからの』
「なっ……何時の間にお前！」
『数日に及んで何回かお主を襲撃した際にな』
「伏線をもっとしっかり張れよ！　そりゃ誰もわからねえよ！」

こう話していても、後ろの気配には寸前で気付き。相当の腕と先読みもしてあるであろう矢の攻撃を殆ど受けない……本当に桐は俺に何か仕組んだのかもしれない。
そうこう桐との話をしている間に角を曲がった――そう、もう少しで俺の自宅が見えてきた。

「なんで、俺の家だけ？」

ほかの景色が色を大きく変えて不気味な様を晒しているのに対して、俺の家の周りだけはかつての色を持っていたのだ。

『ラストスパートじゃな、そのまま門に入るが良い』
「おい！　後ろから来てっぞ！」
『三十……二十……十五……十、いまじゃあっ！　〝瞬間転送〟』
「今桐何を……って、え？」

矢が急に途絶えた。

『わしの特殊能力施行範囲は十メートルが限度での』
「いやいや！　後ろからもう何も聞こえなくなったんだが！　なにをしたんだお前は」
『ちょっくらテレマップというものをな』
「て、テレ？」
『瞬間移動とも言えるかの――さっさと入れ』
「ああ……それはテレポーテーションと言うんじゃないか？」
『四の五の言うでない、お主も無理するでない』

突然の事態に俺は足を止めてしまったが、桐にどやされて直ぐに門をくぐった。
やはりこの家。庭やら家やら空が……この周辺のみが色を保っていた。
まるでこの場所だけを守るように、壊れることを許さずに崩壊が避けられたかのように。

「おかえりじゃ」

そこには仁王立ちした桐が待っていた。

第２３６話　√２－４１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

修正予定です

2018

第236話　√2－41　G・O・D・

「なるほどのう、まあ想定はしておったが」

居間に座り込み、俺は息を荒げ痛む足を撫でながら俺は話す。

「ユウジさん……ごめんなさい、我が重いせいで」

「いやいや、ホニさんは全然重くないぞ？　俺の日々の運動不足が要因だ」

いや、本当に。軽くウォーキングでも習慣化していればマシだったなあ、と思う程に体力のなさを実感した。

「それで上手くお主に組み込んだナノマシンが作動したということじゃな」

「ナノマシンなあ……そんな超設定いきなり出しても萎えるだけだぞ？」

「しかしユウジ、それが無ければお主は死んでいる」

あの土壇場で足を早く、反射神経を良くできないとここに帰ることはままならなかったと確かに思う。

あんな喋りながら余裕だな、言われそうだがな。三秒に一回のペースでやってくる矢をどう思う？

それを避けることが出来たというのも今冷静にならなくても常人離れしていること間違いない。

「く……否定は出来ないな。ありがとよ、桐」

「うむうむ」

「それで桐、色々聴きたい事があるんだが」

「うむうむ分かっておるぞ、まずはなぜにこの家に引きこんだんだ？　とかじゃろ」

心はこんな時まで読まんでいい。

「数日間かけてこの家には”術無効化”と”神裁（しんさい）”避けの結界を張っていたのじゃ」

「術……？」

「ぞうじゃ、世界の色が変わりお主とホニと……お主らを狙った者以外消え去ったじゃろう？」

あの世界、あの何十人もの人が行き交わる日曜の商店街から三人だけが残されていた。それも商店街は色を変えて俺らの周りに広がっている異様な光景。

「ああ……どうなってんだ？」

「まあ、それがアイツらの”術”じゃな。あの場合は”現（うつつ）”からの孤立”と言ったかの、指定した生命体のみを抜き取って背景だけをまるまる模写したかのような別の世界に迷わせるものじゃった」

生命体ねえ……いきなりＳＦチックな展開になってきたな。

「生命体……人や動物だけをピンポイントで。それも別の世界に？」

「ああしないとアイツらは行動が完全に制限されるからのう。あの空間のみ”神裁（しんさい）”を受け継いだ者、つまりはアイツらは常人を逸した行動をすることが出来るという」

「しんさい？　そもそもアイツらって……」

「まあ、その部分な後ほど知ることになるじゃろう」

すんごい濁されている気がしてならない。おそらくは”アイツら

”といいう奴らにも名称があったりするのだろう。

「まあ焦るでない……これも主人公としての役割じゃ、無暗に筋書きを読み飛ばすでない」

それはアレか「わしの知ってる展開通りにしかならないし、先を急いでも仕方ない」ってことか。

……そうだよな、お前は攻略情報を知っていて隠しているんだもんな。

「……隠すことについては申し訳ないとおもっておる」

俺の心をまた見透かすように……まあ読んだんだろうけど、突然に謝って来た。

「しかし、わしも声を出したくても出せないのじゃ。未来や過去に行っても干渉出来ないように、わしがそれを言うことで動揺を招き結果的には最悪の展開も有りうるのじゃ。だからわしは攻略情報については閉口させてもらう」

……桐は本当に申し訳なさそうに、言えないことでバツが悪いような表情をする。

しかし考えてみれば桐は言動で教えてくれてはいなかったものの「やかましいほどに家の中や庭を闊歩していた」というのは、もしやこの家の結界を張っていたのでは？

買い物の同行を断ったのも結界を張るのに時間がかかったから――と考え始める。桐が動かなかったら逃げる場所は無く、この世界では生き残れなかったのかもしれない。

そう考えてしまうと桐を責めることはできなかった。桐の言う事を信じれば本当に干渉出来ないのを桐はなりにやってくれたんだろ

う、と思うからだ。

「……で、雨澄はどうしたんだ？」

「言ったじゃろうに”瞬間転送”で何処か遠くに飛ばしたと」

あの展開で唐突に雨澄が消失するのと、桐が俺の脳内に送っていた……数字カウントを思えば「十」の時に何かを叫んでいた。きっとそれが「瞬間転送」だったのだろう。

「それでもう襲って来る可能性はないって考えていいのか？」

「違うな、これはあくまで応急措置じゃ。ホニがアイツらに見つかればここも結界は保てないじゃろう」

「……じゃあどうすんだ？　このまま家に籠城しても無駄ってことだろ」

「うむ、一度目を付けられた以上は逃げ続けるか。それともアイツらを倒すことしかないの」

「倒す……！？」

あんな凄い勢いで矢を射って来る雨澄をか……無理だろう。それ以前に屋根には昇れねえって。

「まあ、ナノマシンとわしの能力を多用すれば空を飛ぶことは造作も無い。しかしわしはみての通りの小さき女子じゃ、相応の力しか持ってはおらぬ」

まあ喋り方が腐っていても小さき女子というのは間違っていないだろう、実際に体に付いているのは華奢で繊細な細い腕だ。力を行使するものには限度があるのだろう。

「ホニ」

「え？」
「お前も戦うんじゃぞ？」
「！　おま、桐っ！　ホニさんもいくら神様だとしても、中学生大の体だぞ！　戦いに参加なんか……」
「……我には何も出来ないよ？」
「ホラを言うでない。まあ、出来ないという発言には反論するが、お前は戦うべきではないな」

……さっきから桐は何を言いたいんだ。ホニさんに戦えと促すかと持ったら、やっぱり戦うべきでない。

「どっちなんだお前は。もちろんホニさんが戦うことは許さねえが」
「そう言うならばユウジ、お主が戦うのじゃぞ？」

……はい？

「俺が？　どうして……っていや、確かにホニさんや桐には戦わせられない――俺しかいねえ！」
「うむ、それに武器は手に入れたじゃろ？　ほぼ確定的じゃ」
「まさか……」
「お主が物置で発掘したナタリーが武器じゃ」

事態はとんでもない方へと方へと向かっていた。
彼女らを戦わせることは俺が許せない……すると俺のみが立ち向かう形になる。帰宅部生涯十五年目。重さに驚いたあの鉈を思い出して冷や汗を俺は流した。

第237話　√2－42　G.O.D.（前書き）

手抜きサーセン2

2024

第237話　√2－42　G.O.D.

「……」

戦う、か。喧嘩なんて生涯でも指で数えられる程に少ないし、なによりも運動経験の乏しい万年帰宅部だ。

主人公補正というものが無ければ可愛く美人なヒロイン達に好意を向けられることもないし、今回も桐が俺に組み込み作動した肉体強化ナノマシンというご都合展開そのものも存在すらしなかっただろう。

俺はきっとユイよマサヒロと出会い、ダラダラとした高校生活を全うして大人になっていったに違いない。

ホニさんが狙われる……そして俺も狙われる。

それはもう決まり切ったことで、狙われた俺たちに向かって桐の言うアイツらは殺しにかかった。

引き返すこと道なんてどこにも有りはしない、桐の挙げた二つの選択肢から俺は選ぶことになる――俺とホニさんが生き残る為には。

こうも解釈を早く、ある種冷静に考えられているのはきっとやっぱり存在する”主人公補正”によるものだ。

かつての俺は少なくとも命を狙われていることなんて知ってしまったら、死の恐怖に怯え動揺し錯乱しただろう……でも守るべき人や物があるならば、少しでも俺は弱者なりに足掻けていたかもしれない。

俺は主人公になり、それが原因とは言いきれないが俺はある種の冷静さを保てていた。

矢が飛んできたその時に。俺はホニさんを狙うといった雨澄からホニさんを抱きかかえて必死に逃げ出した。

あまりに唐突で、理不尽で、飛び道具が相手の絶望的な状況の中で走れたのは何故か――それはきっと主人公になったから。

……主人公という理由が大きくあったのは確かだ。それでも俺は心の奥底からホニさんを失いたくなかった。

だから走り続けられたと思う、自分も狙われることになっても意に反さずひたすら逃げた。

これは主人公だからやったことなのだろうか？　それだけじゃない――そう信じたい。

俺はホニさんを大切な家族で、人だと思っている。主人公でなくても、俺はホニさんを守りたいを思ったはずだ。

ここからは決断だ。

こうも主人公として意識して、冷静さを持てている俺はどんな選択をすればいいのか。

「逃げること」逃げても逃げても、その狙われる恐怖から解放されることは桐の言う通りならばないだろう。

「戦うこと」戦っても戦っても、無力さに傷を負って最後には命を落とすかもしれない。

そして桐の言わなかった選択肢「諦める」ホニさんも自分のことも諦めて、ただ死を待つ。

挙げた全てを俺は選択出来ると思う。

でも……何のために狙われて逃げるのか、何で俺たちが諦めなければならないのか。

理不尽に思わないか？　不条理に思わないか？　後悔しないか？

俺はなんで狙われるのか、その理由を知りたい。

訳も分からずに殺されるなんてまっぴらご免だ。それも家族であるホニさんをも。

俺はホニさんを生半可な気持ちで連れてきたのか？　……少なからず理由があったはずだ。

突き放すことも、元の場所に返すことも――非情と思われようが出来ただろう。

俺はなぜそうしなかった？

俺はホニさんに何か繋がりを感じたからだ。

乙女的な言い方ならば運命的な出会いだったとも言える。肝試しの日に神様へと貢物としてお揚げを持っていった――

そこには孤独に過ごしている神様が居た。何年も年百年も――同じ場所ですっと居続けていた、少女の姿をした狼の神様。山から下りればその景色の新鮮さに目を輝かせていた、お茶目な神様。

そんな神様の笑顔が俺は大好きだった。嬉しそうにする姿が俺にはみているだけで幸せになれた。

それを見続けたい、そして俺の家族である彼女を守りたい。そんな理由じゃダメだろうか――

「……桐、俺はどうすればいい」

「だから言うておるじゃろう。お主が戦うか、逃げ――！」

「俺はただの男子高校生だ、運動経験も殆ど無ければ、剣術なんて端くれさえありゃしない。そんな俺はどうすればいい？」

今になってナノマシンとやらの効果が切れてきて、じわりじわりと足の付け根からふくらはぎ、足の裏に至るまで筋肉痛寸前になりつつあった。

でもそんな痛みを感じながらも、俺が出来ることを桐に聞く。

「俺が、守る為に戦うにはどうすればいい」

「……そうか。お主はその選択をしたか」

その答えを期待したかのように、幼女スタイルに似合わない邪悪な笑みを浮かべながら頷いた。

「ならば……特訓じゃな！」

桐は立ち上がり言う。

「少しぐらいならアイツらの眼をごまかすことは可能じゃ、しかしそれも少しじゃ。一週間準備出来るかはほぼ無いに等しいのう」

「……少しぐらいの時間でも今の俺は変われるか？」

「お主の根気次第じゃな。どうするかの？」

俺はこのままじゃ守るなんて口先ばかりのクソ主人公でしかないだろう。

一週間という付け焼刃でさえない短い期間で……俺が劇的に成長するとは到底思えない。

それでも……何もせず、抗うことなく終わるのはご免被るね。だから俺は少しでも、少しだけでも――強くなりたい。

「基礎体力や腕力などを付けるのが先決じゃな……ユウジの体を見る限りは運動経験はなくとも、どうやら使っていないだけで足腰も腕力もありそうじゃな」

「……いやいや、ないだろ」

「まあ、それは実践あるのみじゃ。お主の決意はしかと受け取った、わしも力こそないが能力面では全力でサポートするつもりじゃが」

「そうか……色々頼む」
「ホニ」
「……え？」

ホニさんは俺が考えていた時間も、桐が話す時間も口を閉ざして俯きながら俺たちの話を聞いていた。ふいに桐に振られて、少し動揺しているように見えた。

＊　＊

「お前はどうするつもりじゃ？」

わしは問う、ホニが今の会話を聞いてどんな考えを示すのか。

「どうするって……」
「ここに居たいか？」

ユウジの居るこの家に日常に。なんだかんだ言っても受け入れてくれたミナに可愛いと愛でるユイの居る世界に。
わしから見てもそれは温かな、それでいてきっとどこにでも溢れている世界。

「でも……そうしたらユウジさんや桐に迷惑をかけちゃうよ」

迷惑……か。
どの口が言うか。ついて来たのもほぼお前が勝手に言いだしてそれをユウジが納得しただけじゃろうに……それに家族で迷惑になるから遠慮するなど、わしは認めないぞ。

「ホニ、それはない」

少し軽蔑するようにわしは言い放つ。

「え、ええっ！　我はユウジさんと桐に傷ついてほしくないよ」

軽々しくそのような気遣いの言葉を使わない方が良いというのに、それではまるで――

「……他人事じゃな」

「！」

少し心外じゃな。あれだけげーむをしたというのに……まあ勝敗は別じゃが、うむ。

「少なくともわしは他人とは思ってはおらぬ、ホニもユウジもわしは家族だと思っておる」

まあ、残念なことにユウジもホニを可愛がっておるしな。

……まったくわしというものが有りながら、ユウジが全力で愛でている対象はホニじゃものな。

お前と遊びながらも少なからず嫉妬しておるのじゃぞ？

じゃが、ホニのつくる味噌汁は旨いしな……なにより言い話し相手で、ゲームの盤上では良きライバル――わしにとってもホニは家族の一人じゃな。

「……家族？」

「ああ、俺も少なくとも家族だと思ってる。大切な存在だ。それにホニさんが悪いことした訳じゃないだろ？」

大切な存在という言葉に反応してしまったわし。そんなことを言ってくれるホニが少し羨ましいかもしれん。
いや少しどころではなく、かなりな。にしてもユウジは本当に優しいのう……まあそれはわしにも皆にも言えることじゃが。

「……でも、でも我は！」
「ユウジは決意したぞ。自分の身と共にお前も守ると。お前はもうここに居ることに飽きたかの？」

飽きたなどとほざいた暁にはギャルゲーも真っ青な本気グーパンチをお見舞いすることじゃろう……というのは冗談じゃが。
だとしてもホニもこの温かい家族を感じてくれていると良いのう。

「！　飽きるなんて！　そんなこと有り得ないよ！　ここに居れることで、知ることがなかったことを沢山知ることが出来た。そしてユウジさんに桐にユイにお姉さんに――色んな人と出会えたんだ」
「それならば、どうする？」

聞こうじゃないか、そこまで考えて。どうしたいかを。

「我は……まだまだ知りたい、この温かい場所に居たい」

ホニは目を瞑って、心の奥底からそう望むように言う。

「そうか……それが聞けたからには、わしは全力で助力しよう」
「でも、本当に――」
「……ホニはわしらを家族とは思ってくれんのかの？」

「そう思っていい……の？」
「「もちろんじゃ（だ）」」
「ここに居たいから、ユウジさん達とこれからも過ごしたいから――桐、我も」

そう言おうとするのを遮る。
ホニは神様で、わし以上にも力を発揮できることをわしは口言はしないがわしは知っている。
でも、それがホニにとっては――

「そろそろ結界が解ける頃じゃな、戻り次第ミナを呼び出すことを推奨するぞ、ユウジ」
「……ああ、そうだった！」

ユウジはポケットから携帯を取りだす――それと時を同じくして、アイツらの張った結界が解けていく。
日常が戻る一方で考える。ユウジには申し訳ないが戦って貰わないといけない。

そう筋書きをゆっくりゆっくり進める為にも。

第２３８話　√２－４３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

うつろうつろになりながら書いたせいで自信がない……要修正

第２３８話　√２－４３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

五月一七日

休み明け。週始めである月曜の気だるさを押し殺して、欠伸をしながらも鞄を持っていつもより長く感じる通学路をとぼとぼと歩いて登校する。

時には友人やクラスメイトと合流して、話題をつくって先陣を切り歩きながら会話を繰り広げている光景もある。

しかし、今日は訳が違った。

まばらに歩く藍浜高校の生徒は、ある男がある女の子を連れていることで注目を一点に集めていた。

男はどこにでも居そうな平凡男子高校生、そして女の子は藍浜高校指定ではない紺色のセーラー服と地面に憑かんばかりの長くしなやかで真っ黒の髪。

その男は巷では噂になっている「アイドル独り占め野郎」であり、男子生徒群は「今度は小さい子もかよ」というような恨み妬み憎しみが籠ったどんよりとした視線を男に向かって浴びせている。

その女の子は異性からみても同姓からみてもすこぶる可愛いもので、人形のように整った顔と何か庇護欲を掻き立てられるその容姿のおかげで女子生徒群は好奇の視線を向けている。

その男はこう考えているだろう。

「通学路でこの様子じゃなあ……」

この先に来るであろう展開を想像してため息をつく。

下之ユウジ、彼は女子中学生の容姿をしたなんとも可愛らしい”神様”を連れて学校への道のりを進んでいく――

＊　＊

「ホニさんも学校に？」

そう行うことが決まったのは、襲撃当日、週明け前日、学校前日。つまりは五月六日こと今日のこと。

桐の言うとおり、家にいることが必ずしも安全策とは言えないのは話を聞いていて分かる。

それならばどうすればいいのか。

「うむ、家にはホニしかいないからの。襲われた場合は対処が難しいじゃろう」

「それで学校にか？」

「アイツらが言っていたのをまた思い出せ。狙われているのは何度も言うがホニだけでなくお主もじゃ

「ああ、雨澄は”憑かれたものは消す”みたいなこと言ってたな」

ホニさんが言っていたことを思い出す。土地神になっていたせいで神石に拘束されていたけれど、俺の守護神になることで行動が出来るようになった……と言った感じのことを言っていたはずだ。

「我は一応、ユウジさんの守護霊になってるからね」

「憑かれた俺もホニさんと同様にコトナリと考えられてる……か」

そういう理由で俺も狙われているらしい……が、コトナリの定義

が良く分からない。
今冷静に思えば勘違い――な訳ではないか、二回目にすれ違う際にかけられたのは『異の匂いがする』ということだった。
一回目は肝試し前で、ただただ彼女には違和感を感じた程度だったが。二回目からはホニさんと出会い、合わせるかのようにこれでも大人数いるであろう藍浜高校生徒との一人にすれ違い様にそんなことを言われた。
そして商店街で会った三回目は『匂いは間違っていなかった』と確認が終わったかのように結界を張って世界を壊れさせ……殺しにかかってきた。
つまりは俺をホニさんと出会ったその時から雨澄は目星をつけていたと考えることが出来、俺はホニさんを連れた時点で雨澄の発言を参考にするならばおれはコトナリと呼ばれるようになった。
アイツらにとっては俺もコトナリになり、ホニさんもコトナリと呼ばれた。アイツからすればコトナリを二つ消すのに手間取らないだろう。

「出来るだけ行動を共にした方が良いじゃろう」
「いやでも、こんな時になんだが学校が――」

行けたらいいなと思うのはダメなのだろうか？
命の危機とともに今後の将来を気にしてはいけないのだろうか。

「ううむ、そうなればホニも共に学校に通うのが良さそうじゃの」

家に居ても安全は保障出来ず、現代を知りうることが出来たばかりのホニさんが隠れ蓑に出来る場所は少ない。

「家に結界を張っているというが、それはわしが学校へいかずに維持する必要性が生じるからの非現実的じゃな」

「でも桐、雨澄は学校に――」

登校する女子生徒だ。

「うむ、賭けじゃな。結界を張るのには労力と精神力などが使われ、維持するのにも体力を削るじゃろう。昨日みた結界は少なくとも下級の”広範囲点繋式”じゃから、学校全体に結界を張るというのには時間も労力も異常に要するから無理じゃろう」

「でも学校よりも商店街から俺の家って結構な距離あるはずだぞ」

「うむ、しかし前もって行われていたことのようじゃ。準備に何日も費やしていると見える。そして実質稼働出来るのは十数分にも満たなかった。この結界は一度切りの使い捨てでもある」

そういえば桐が言っていたことを思い出す、アイツらは結界内でのみで力を発揮する、と。

「わしの展開したのは範囲を狭めた上で行った”狭範囲点繋式”に術無効化とアイツらに気付かれないような細工をし、展開期間は一週間ほどじゃ」

範囲を狭めることで必要以上の体力を使わないようにし、大幅に展開時間を増やしってことだよな、更には対雨澄ら用の装備をしている。

「……ん？　維持することで体力が削られるってことは、桐もそうなんだろ？　大丈夫か？」

「心配するでない、それに言ったであろう。わしはお主を全力でサポートすると」

そう言ったこと桐の強がりでないことを俺は望みたい……すまん

な、桐。

「結界を張る意味とかは力の増幅だけなのか？」

「いや。結界を張り、中に対象を閉じ込めることによって現実にさほど影響を及さずにすむのじゃ」

考えてみればあの砕いたアスファルトの地面も、あとあと結界が解けた後も残っていたらニュースになりかねない。

「あとでみてくれれば良いが、道路に目立つ破損個所などないはずじゃ。それがあくまでも結界内で行われたことじゃからの」

雨澄らはコトナリを消したいが、現実ではコトナリを消す為に力を振るって影響を与えることはしない。

ある種の境界というか、ポリシーのようなルールのようなものがアイツらにも存在するのだろう。

「じゃあ結界を張るのに時間がかかるってことで、学校が安全ならそこに立てこもればいいんじゃないか？」

「うむ、しかしわしは賭けと言ったはずじゃ。先程まで張られていた結界から想像したまでで、もっと力を有し学校なんて軽々と包み込めるほどの結界を展開し維持する力を持つアイツらの一部が居ないとも限らない、だからそれは完全な安全策ではないのじゃ」

……雨澄よりも強い奴が居る可能性か。

「行動を共にしつつも、お主は特訓基礎体力を付けて応戦とまでいかなくても身とホニを守れるほどにはなるのじゃ、戦うことを今は求めるのは酷じゃからの。ただ逃げ切れることだけを考えるが良い」

＊　＊

ということで俺はホニさんと登校することになり、いつものメンバーを驚愕させつつ、周囲の歩く生徒達に衝撃を与えつつ……学校へと向かう。

第２３９話　√２－４４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

どうなんだろね

第２３９話　√２－４４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「ホニさん、これに履き替えてくれるか？」
「う、うん」

少しぎこちなくホニさんは答えると、俺が鞄の中に入れていたビニール袋と折り畳みスリッパ（新品を）を専用の袋から取り出して手渡す。
ホニさんは受け取ると簀（す）の子の近くまで歩いて出会った当初から履いているスニーカーをビニールに入れて履き替える。
羽衣のごとくゆらゆら揺れる長い黒髪と、長くもなく短くもないこの学校の制定とは異なるセーラーを舞わせて、次々登校をする生徒たちの注目の的となる。

「じゃあ行くか」
「うん」

手を繋ぐことはさすがにしないが、直ぐ隣でホニさんはひょこひょこという可愛らしい効果音が合うほどに歩いている。
隣を歩く俺の後ろにはいつものメンバーが連ねるのみならず、俺たちの向かう方向へと行かないはずの他クラスの生徒も間を空けてついてくる。
今のところ話しかけられてはいないが、確実に月曜の気だるげに満ちた空気を掻っ攫って好奇に溢れ視線を向ける廊下となっていた。

「ユウジ」
「……ん？」

いつもは隣か、少し前を歩くユキが俺とホニさんの隙間に顔を近

づけるようにして俺の名前を呼ぶ。
その声に不機嫌さは感じられないが、名前の呼び方に少しの疑問とニュアンスを含んでいた。

「なんで急にこの子が？」
「……すまん、とりあえずは教室に着いてからな」

この質問はユキから一回目で、マサヒロを数えれば二回目になる。ちなみに一回目のマサヒロの質問の返しと今の返し派同一だ。
状況が複雑で、歩きながら語るというのは難しすぎる。なにより一応ユキ達は”ホニさんが神様であることを知っている”という前提が有って話すことなので、他の生徒や教師などに聞かれるのは少々困る。

そうしていつもより俺に向けられる圧倒的敵意の視線が増している中、またいつもより長く感じる廊下を歩きながら教室へと向かう——

＊　＊

姉貴に電話をかけて、先に帰ってしまったことを伝えたあと。桐は突然に「お主の部屋に話の場を移そう」と言いだした。
少し痛みこそ引いてきたとは言え、絶賛筋肉痛なので今体を動かすのは非推奨で「なんで？」と聞いてみる。

「お主の部屋は色々と都合がよいのじゃ」

理由があるのだろうが、なんというか誤魔化すかのようにあやふ

やにした。
　問い詰めてもそこまでこだわる事柄でない以上は、これ以上なにも言わずに桐の言うとおりにする。
　そうして三人階段をあがり、俺の部屋へと入って行く。ホニさんが来るのは二回目だろうか？　前回はちょうど一週間前の家事を覚えてくれた日。
　その時から俺のことを「ユウジさん」と呼ぶようになり、俺も「ホニさん」と呼ぶようになったのを思い出す。
　そっか、そんなに前でなかったか……まだ一週間しか経ってないんだなあ、としみじみ思う。
　まさか一週間でここまで状況が一変しうるなんて、想像すらつかなかった。

　カーペット張りの地面にあぐらをかいて座る桐にならって、俺も地べたに座る。ホニさんもそれにならって座るものの。

「ホニさん、正座とか疲れないか？」
「うん、大丈夫だよ」

　さっきから沈んでいた表情ばかりだったので、久しぶりにホニさんの神々しく可愛らしい笑顔を拝むことができて内心ほっとしている。
　あー、言ってはいるものの。少し責任みたいなものを感じて重くなってるんじゃないかと思っていたものの、体勢のことも今の心境も大丈夫のようだった。
　……にしても桐はあぐらか。うん、なんというか女の子座りは似合わないと思っていたけどあぐらは違和感ないな。
　どういうことなんだ、容姿相応ならば正座か女の子座りが丁度良いと言うのに……やはりオーラと性格の違いでこうも変わるのか。

「……お主、今何か失礼なこと考えたじゃろう」
「まあな」
気軽にそう答える。まあ嘘では確実にないし。
「まあな!?　なぜにそこまで軽々と返すのじゃ！　少なくとも話題を逸らすなり白を切るなりすればよいものを……！」
「てかどうせお前は俺の心読めてるんだろうから、後だしで怒るつもりだっただろ」
「う……」
桐の策略はそれほど上手くはイカなかったようで、表情には「読まれてるのは実はわし？」とかいう悔しさときまずさを併せ持った複雑な表情をしていた。
なんとも桐は相変わらず表情が福笑いで出来るであろう顔パターンのように豊かで、からかい甲斐があって面白い。
からかうのが得意な桐でも、カウンターを食らってしまえば一溜まりもないようだった。
……まあ、お遊びもここまでにして。一応部屋まで移動した理由は分からないが先程の続き、本題を再開させる。
「それで、桐。ホニさんが学校に一緒に行って貰える事になったとはいえ、どうすんだ？」
「どうする、とは？」
「公立高校で結構フリーダムな学校だけども、ホニさんを連れていくのは難しいんじゃないか？」
容姿ならば少し幼い、という解釈でも良さそうだが書類上はどうしようも出来ない。
教師にかかれば、一瞬クラスを見渡した途端に気付いてしまうだ

ろう。

「まあの、高校じゃからの」
「……でも離れない方がいいんだよな」
「うむ。じゃがわしがこれを考案したのじゃぞ？」

まさにドヤ顔で、まさに自分だからぬかりなく出来たんだぜ。的な偉そうな表情を向ける桐。

イラつくとは言え、桐の表情は自信に溢れていて。こういう時はそう間違っていない場合が多い

「……何か桐には策があるってことか」
「うむ。では少し待たれよ――」

そう言うと勢いをつけるようにぴょこり飛びあがるように立ち上がると、部屋を出て行く。

少なくとも階段を下りずにこの二階の間を移動し、扉を開く音が聞こえた。

そして突然に聞こえる桐が誰かと話しているかのような声……そうか誰かに電話してるのか、と解釈しておく。

少なくともあの桐が一人芝居を打つほど痛い訳ではないのだろう、きっと電話の受話器の向こう側には桐と話す誰かが居るのだろう。

そう思って桐が来るのを待っていると――

「ユウジさん」
「ん？」

またまただんまりを決め込んでいたホニさんが口を開いた。

きっとホニさんもああいう表情もつくってくれたけどもかなり気負ってるんだろうな、と思う。

「我が神様だって……本当に信じてくれてる？」
「？　なんでだ？
「ユウジさんがそんな風に見えたとこじゃなくてね！　……我って神様には見えないと思うから、ね」

……確かにこんなにも中学生神様ことか●ちゅな可愛らしい神様がよく居たものだなあ、と思ってもいた。
守護霊というせいか、どこかホニさんとは繋がっている気がしていたとはいえ。容姿と声までもがしっかりと普通の女の子だった。
でも聞いていて分かる。こんな幼き姿の中にとにかく膨大な時を過ごして得たものが見え隠れしていることを俺は感じていた。
桐のようにあからさまな老婆喋りはせず「我」という一人称以外は極めて幼さ残る女子中学生のような声。
それでも時折みせる寂しそうな瞳と言葉は、彼女の幼い姿を包み隠してしまうほどに深い。
それがイコール神様とは言えないが、俺には彼女がホニさんが嘘をついている風にはみえなかった。
彼女は本の内容をそのまま信じてしまうぐたにとても純粋で、山を降りて景色や真新しいものを見る度に瞳を輝かすほど殆どを知らない。
……例えそれが違っていたしても、あの時一回だけ触らせてもらった頭頂部から左右にぴょこりと出た確かに脈打ち生きている耳は、俺とホニさんとは何かが決定的に違うことを指していた。

「……ユウジさん、我は神様で良いんだよね？」
「どんな意味だ？」
「我はユウジさんに真実を見せてもいいのかなって」
「……？」

不安に表情を曇らせて俺を見上げるホニさんの顔がある。そしてその声はあまりにも真剣だった。

「ユウジさんは、我を守ってくれると言ってくれて……嬉しかった。今までは頼られるだけだったから」

その幾年を過ごしたホニさんの言葉の示す意味を恐らく何分の一も汲み取れていないであろう、それだけに深く重い言葉。

「でも我も……頼り切ってはいけないから」

「……」

そして立ち上がって。

途端に目をつぶる。何をするのだろうと、身構えていた……その時。

「延々に続き包み込む母なる大地よ――深く蒼の色へと染まるすべての源の海よ――永遠（とわ）に続き遠く広がる遥か空よ――全ての自然よ我に見方せよ――！」

ホニさんは瞬く間に全身を包み込むように輝く光を帯びて、長い髪が風もないのにゆらゆら揺れ宙に浮くかのように舞う。その光景は本当に神々しいという表現しかでないほどまでに美しく、それでいて力強く、全ての人が性別問わず見惚れてしまうような神秘的な光景だった。

信じていないわけではなかった。けれども俺は見誤っていた――ホニさんが俺とはどれほどまでに異なり違う存在であるかを――

第２４０話　√２－４５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

もっと経過を踏んだほうが良かったかなあ、と反省中

第２４０話　√２－４５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「……」

何の変哲もなくデザインを度外視した淡泊で機能性重視のアルミサッシの引き違い窓と、何の模様もなく薄汚れ始めたベージュの天井や壁に、統一性のないデザインの家具をただただ自分が使いやすい位置に置いただけの至って普通の高校生のスペースであるこの部屋。

そんな部屋の中心で、この世とも思えない程に美しい光景が繰り広げられていた。

「――――」

余りにも長い黒髪を有した少女を包むのは蛍光灯やら電球やらハロゲンランプのような人が加工したうえで生み出す光とは完全に異なる、全身から淡く金色の光……言うなれば夏夜に静かに草葉の上で淡く強い主張することなく短い生涯を光り生きるようなホタルをそれは連想させる。

神秘的で、眩しいことはないのにどこか力強さを感じる。”美しい”という言葉がふいに溢れるほどに、この世とは思えないほどの絶世の光景だった。

そして窓が開いてもいないのに彼女を包み祝福するように優しい風が吹き始め、そのしなやかな黒髪が舞いはじめる。

目を瞑って、全てのものを許しているかのようなその彼女の表情には思わず今までとは違う方向性で――人があまりにもな絶景を見た際に絶句してしまうことのように、見惚れ沈黙していた。

自分は本当に生きているのだろうか、というほどに。何かの夢か

幻か、見間違いなんじゃないかと邪推するほどに。
衝撃的で、美しく、神々しかった。

「ユウジさん――隠していてゴメンね」
「！」

その彼女の――ホニさんの言葉で我に返る。

「これでも我は神様だから――望めばこの世界の自然は祝福してくれるんだ――我は恵みの神だからね」

今望んだのは”風”なのだろうか。ホニさんに寄り添うように流れる風は冷たくなく暑くすぎることなく、長い間当たっていたら眠気が襲ってきそうな心地の良い風だった。

「ユウジさんには知ってほしかったの」
「そう……か」

やっと声が出せた。声も出すのが惜しいぐらいにそれは美しかったからで。そして今も変わらず美しい。

「我を受け入れてくれた――嬉しかったよ。でも――今の我はどう思う？」
「……」

素晴らしい、綺麗、美しい。色々な陳腐なかける言葉が頭には浮かぶ。だから出すのには憚れてその目の前のホニさんは――言葉では表現できないほどだから。
そして俺はそんな言葉を出さずに――また違った答えを返してしまった。

「びっくりした」
「……え」

その答えにはホニさんも唖然としたようで、俺もなんでそんなこと言ったんだろうかと思えるほどに残念な受け答えだった。

「うん、びっくりした」
「え……ユウジさんは怖がったりしないの？」
「怖い？」

……そんな感情は全く浮かんでいなかった。
ホニさんを一目見ても何度見ても怖い気持ちは浮かばない、それ以前にあまりの可愛さに果てしなく庇護欲を掻き立てられる。

「だって我は――これで本当にユウジさんとは異なってるから」
「あー……」

根本から違うのだろう。その幼い容姿の何倍も何十倍も何百倍もの力強さに溢れているように見えた。
だからこんなやっとこさ高校生という大人の階段を昇り途中の俺なんかは永い時を生きる中ではひよっこのひよっこを通り越して胎児レベルなのかもしれない。
異なっているのは確かで、でもそれは少なくとも――嫌悪感も恐怖なんて微塵もなければ、むしろ。

「すげえ綺麗だった」
「え……えっ？」
「いやー、ホニさんは可愛いだけでなく綺麗なんだなあ。と再認識させられた」

「えええええええ」

未だ包み込む光の中で驚くホニさんの姿はなかなか面白可愛かった。

本当に素直な感想だった。ここまでホニさんのような容姿の女の子が光に包まれることで神秘的かつ美しく見えるなんて想像すらできなかった。

とにかくそれは純粋に綺麗だったのだ。

「……気持ち悪くないの？」

「とんでもない、ずっと見ていても飽きないほどの素晴らしさだぞ？」

なんともこの綺麗なホニさんに返す言葉としてはカスを通り越してナノウイルス級だとは思う。でも見ていても一生飽きない――そう思えてしまうわけで。

「こんな我でも――いいの？」

「どんなホニさんでも俺はいいぞ？」

「っ！」

それを聞いた途端にホニさんの顔が金色の光の中に居るなかでも分かりやすいほどに赤く茹であがった。

俺は無礼すぎるが思ってしまう――こんな可愛い神様がいるのだろうか、と。

「ユ、ユウジさん？　ほ、本気で言ってるの？」

「ああ」

一瞬その美しさに俺は「こんなすんごい人を守るとか凄まじいほ

どに失礼で無責任なこと俺は言ってしまったんだろう」と自分の小ささ無力さに思ってしまった。

それでも俺は名前をまた呼んでくれた時に「やっぱホニさんだなあ」とも思ってしまったのだ。

俺のことを律儀にさん付けで呼ぶホニさん。自分に自信がないかのように問いかけるホニさん。俺の予想外の反応に驚くホニさん。俺の何かの言葉で赤くなるホニさん。

可愛い。

今回で美しさが大幅にプラスされただけで、ホニさんは相変わらず可愛かった。

そんな可愛いホニさん、色々に表情を変えて見ていて思わず癒されてしまうホニさんだから。

ホニさんをこれからも見てみたいから、だからこそこんな理不尽で残酷で、理由を五千万文字ほど喋られても絶対に納得がいかない展開に俺はふつふつと怒りの募らせて――守ると決めた。

この美しく見惚れてしまうホニさんも、日々の思わず微笑ましくなってしまうホニさんも。

全部俺が守ると決めたホニさんなのだ。

――いや、魅力的な表情だけホニさんを守るのではないのだろう。

例え姿形が変わっても、きっとホニさんを守りたい――そう思い続けるだろうと思う。

俺はこれでもホニさんラバーなのだから。

ホニさんが自分を忘れることがなければ、俺はずっと隣を居続けるだろうと思う。いや自分をいつか忘れても――それでも俺は傍にいたい。

「……ホニさん」

「は、はい」

どこかいつもと違って緊張とした面持ちで身構えるホニさん。

「俺じゃ役不足どころじゃないけどさ、俺がホニさんを守りたい気持ちは誰にも負ける気がしないんだ」

「……」

俺の言葉を真剣なまなざしで聞くホニさん。

「こんな俺でよければ、これからも宜しく頼めますか？」

「……本当に」

上目遣いで世の男ならばほとんどがその一瞬で胸を射とめられそうな、あまりに可愛いホニさん。

「？」

「本当に我なんかを守ってくれていいの？　ユウジさんも我のせいで――」

不安に俯く、光に包まれているのにどこか消えてしまいそうな儚げなホニさん。

「俺はホニさんが隣に近くいてほしい、もちろんホニさんと出会えたことを絶対に後悔してなんかいない」

「っ！」

また顔を赤く染めて、衝撃のことを聞いたかのように表情を変えるホニさん。

「俺は神様にありがとうとお礼を言いたいぐらいだね」
「……わ、我も一応神様だよ？」
訂正を促すように、たじろいで言う自分を主張するホニさん。
「だからホニさん、ありがとう」
「！？　……なんか変だよ」
驚いて、不思議そうな表情をするホニさん。
「ホニさんは神様なんだろ？　信じていいんだろ？」
「うん……うん、そうだけど」
どこか納得のいかないような、眉間にしわを寄せるホニさん。
「ならいいじゃねえか、俺はホニさんに出会えた運命的な奇跡に神様へ感謝する」
「……」
俺の言葉で反論を止めて、何かをこらえるかのように。溢れるなにかを留めるように俯くホニさん。
「だからホニさん、これからも――歩いていこうな？」
「ユウジさんっ！」
何かを吹っ切れたような、俺の方へと飛び向かう――やっぱりに可愛いホニさん。
ホニさんは飛びこむように俺に抱きついてくる。そのあまりに華奢で小さな体を俺は優しく壊さないように胸で抱きしめた。

包んでいた光がゆっくりと終息していく。俺に包む役目を託すかのように――

「……ユウジさん、我こそこれからよろしくね」

「ああ、絶対負けねえ」

言葉だけで終わる……そんなことは自分が許さない。だから俺は桐の言われた基礎体力を付ける特訓をしてみようと思う。

どこまで俺には出来るかは分からないけども――何もしないことだけは避けたかった

「うん……我ももっとここに居たいから、ユウジさんと一緒に過ごしていきたい」

「ああ、ああ！　……俺は強くなるよ、ホニさん」

誓うように俺は呟いた。俺はホニさんを守る為、ホニさんと時を過ごす為に俺は抗っていく。

「ありがとうユウジさん……ありがとねユウジさん……我も抗い続けるから――」

俺の胸の中で小さな女の子の姿をした神様は泣きぐずる寸前なほどに温もりを求めるかのように顔を埋め続けた。

そんなホニさんが可愛くて――俺は時を忘れるかのように、しばらくは抱き合ったままでいた。

第241話　√2－46　G.O.D.

「……ユウジさん」
「ホニさん……」
胸の中のホニさんは温かかく、ホニさんはしばらくして埋めていた顔を見上げて俺の顔を捉える。
こんな時間がすごく心地よい――
「……何時までお主らはイチャイチャする気かのう？」
「「！？」」
俺がホニさんと向き合っていて気がつかなかったが、その目先には桐がどうにも不機嫌ですよという意思表示を足をパタパタとしながら呪い殺すんじゃないかと思えるほどの威圧感で俺をガンを飛ばしていた。
「いや、桐。これはだな……そんなイチャイチャなんてものじゃなくてだな、とにかく健全でだな」
「そ、そうだよ！　我はユウジさんに受け入れて貰えたことが嬉しくて――」
……いやさあ、ホニさんのあの姿を俺は受け入れたよ？　でも、だ――この場面で言うべき発言じゃない！
「受け入れ……て！？」

「ちょ、ホニさん！　それは誤解を招く発言だから！　とにかく不健康なことは一切なくてだな――」

と桐への弁解をしようとすると突然にホニさんが悲しい表情になり――

「……ユウジさん、我はやっぱり受け入れてくれないの？」

幼少期なら「あーユウジが女泣かしてるー！」と茶化されるのだが、これはマズイ。

というかホニさんのそんな表情見る度に心にグサグサを槍が降り注いでくる――んなの耐えられるかっ！

「いやいやそんなことは絶対ないぞ！　……ホニさんとはこれからも一緒だ」

「ユウジさん……」

「ホニさん……」

「あああああああ、爆発するがいい！　今すぐ三秒待たずして爆発してしまえええええええ」

もはや活火山な程に憤怒している桐本人が大爆発を起こしているようにしか見えないという。

「えええ、ユウジさん我たち爆発しちゃうの！？」

「……真摯に受け止めることじゃないから、気にしないでいいぞ」

「うぬぬ……わしは学校と連絡を取って同じ学年同じクラスに捻じ込んだというのに……こんな、こんな――恩を仇どころか針千本で返すなんてな！」

「だから桐それは誤解だって――え、捻じ込んだって？」

突然に始まったコント展開が遮断されて、少しずつ桐の表情が怒りやら嫉妬がまじったものから真剣なものに戻って行く。

「じゃからわしは、ちょっとした事を使ってな。ホニを藍浜高校一年二組に捻じ込んだのじゃ」

……え？

「てことは……実質転校生扱いになるんじゃねえか？」

「うむ、そうじゃ。生徒としてホニはこれからは通うことになる」

「えええええええええええええ」

衝撃の展開だった。

いやまあ離れないようにするには学校には行かなきゃいかないんだろうけど……桐みたく特例で許して貰うってパターンかと思ってたばっかりに驚き桃の木山椒の木状態だ。

「わしはこのロリィだから許して貰えたのじゃぞ？　ホニは……ぬぬう、悔しいが中学生な容姿を持っておるからの。少し成長期を残した女子と考えれば違和感はそれほどない……くううううう！」

桐は自分の言っていることが間違っていないことながら、その事実を信じたくないが為に葛藤しているようだ――まあ、そこまで俺が桐の心境を汲み取る必要があったのか微妙だが。

「ということでホニ！　明日から学校じゃあっ！」

「う、うん！　わかった！」

ちなみに一方のホニさんはズビシと桐に指差され驚く一方で、明

日の遠足の期待に胸を躍らせる小学生のように瞳をこれでもかってほどにキラキラさせていた。

「……ホニさん、楽しみだったりする？」

「うんっ！　今のマナビヤがどうなってるか楽しみっ」

そんなホニさんが可愛いなあと抱きしめたくなる衝動に駆られる一方で「ホニさんは興奮すると耳出ちゃうからなあ」と一抹の不安もあった。

……いやダイスキですよ？　すっげえ可愛いですよ？　でも……それはいつものメンバー以外にはバレると厄介な訳で。

「……ごめんね、ユウジさん」

「え、なぜに謝る？」

「我嬉しくてかなり浮かれてる……でもこれが非常時だから、桐もユウジさんも手伝ってくれるわけなんだよね――だから自制はちゃんとするから」

「あ、ああ」

そうホニさんは微笑んだ。ちゃんとホニさんは分かっている――それは俺も分かっていたから、それをホニさん自身から聞けてもう不安に思う事はないだろう。

「じゃあホニさん、明日からよろしくな」

「うんっ！」

ホニさんが部屋を出たろころで帰ろうとした桐を飛びとめてヒソヒソ内緒話よろしくに聞いいてみる。

「桐、一体どんな裏技使ったんだ？」
「ふふ、それは秘密」
「……桐が学校行ったのは数回だからな。そこまで何かしら行動出来るとは思えないんだが」
もはや学校に行っただけでそこまで出来たらチートどころの話じゃねえな、クソゲーにもほどがある。
「まあ、あちらには協力者が居るでの。アイツに協力要請したというところじゃな」
「アイツって……少なくとも生徒一人を即編入出来るなんて校長、理事長クラスだろうに」
アイツと呼ぶ桐は色々な意味で凄いが、やっぱりそのクラスの人間を動かせる桐って何者だよ。
「うんにゃ、藍浜高校の一生徒に過ぎんぞ？　アイツは」
……一生徒？
「ユウくんっ！」
「あ、姉貴！　本当ごめ――」
「ひどいよユウくん！　置いてけぼりにして、寂しかったんだよ？　不安だったんだよ？　もしユウくんが誘拐されたり他の女の毒牙にかかってメロメロみさせられちゃったかと思うと気が気でなくて、商店街の組合長に頼んで連絡も考えたけどやっぱり町内会長がいいよね、って町内会長の権限を借りて町中にアナウンスするところだったんだよ？　本当ユウくんが無事でよかった、これからはＧＰＳ

を駆使してユウくんの居場所が分からないといけないと思っちゃたよ、というかユウくんがどこかに行っちゃう危険があるからこれからは私が一生一緒にいるね。ユウくんがいなくなったら世界が滅んでも構わないもん、というかユウくんさえいれば生きていけるよ。だからユウくん、買い物途中で抜け出したバツとして今日はご飯もお風呂も寝る時も一緒だからね？　ご飯の時からきっと自制が効かなくなって一線越えちゃうかもしれないけどバツゲームだから仕方ないよね――ってあれユウくん何処行くの？　そんなユウくんが悲しい顔してたらお姉ちゃんも悲しくなっちゃうよ――それって私のせいだって？　もうユウくん素直に甘えたいならいつでも家でも学校でも道端でもどこでもいいのに――ユウくん？　ねえユウくん、聞いてる？」

この人に触れるのはよそう。

＊　＊

「――というわけで、ホニさんが登校することになった」

一連の経緯――を話しては流石にいつものメンバーでも出来ないので、説明としてはこう。

「ホニさんは家出ひとりぼっちで、ずっと留守番させてたんだ……それもまだ学校が決まってなかっただけで、学校が決まりさえすれば登校出来たんだよ。それで（以下略）その優秀さに理事長の目に止まったホニさんは編入が認められた――」

てな具合。まあ勿論でっちあげで理事長なんて居るのか居ないの

かも分からないけども、桐臼く居るらしい。
なんで学校の通ってる俺が知らないで一見部外者な桐が知ってるんだよ――という事に関しては「協力者がいるから」という理由で強引ながらも納得していただきたい。

「ホニちゃん……すごいんだなあ」

ユイが言ったのを筆頭にいつのメンバーが「まさかあの計算式を数秒で暗算で出来るなんて……」「私もそれにはびっくりです。暗算でも一分はかかります」「知的で可愛いとか結婚したい」
それは嘘ではなく、桐がなにかしら問題を教えるとすぐに理解して解けるようになった――もちろんこと俺の立場なんて軽く大海を跨いで投げ飛ばされて若干涙目ではあったり。

「ということで下之ホニです！　よろしくお願いしますー」

名前でもいいんだろうけど、一応ということで名字がついた。
「……こんな形でユウジ様と同じ名字になれるなんて、そんな方法があったんですね」「ちょっと羨ましいかも……下之ユキとか――」「同じ名字なのにユウジはなぶり殺したい」
とまあ、一部イラつく発言があったのですぐに殴りをいれたものの。いつもメンバーはイイヤツ揃いには違いなく、もう溶け込みはじめていたので心から安心する。

そして――

「えー、下之ホニは家庭の事情で急きょ編入が決まった。新しいクラスの一員として頼むー」

と適当な担任の説明を終えて――

「え、えと。下之ホニです！　よろしくお願いしますっ」

その時クラスが沸いた――なぜか他のクラスの教室扉に耳をくっつけていた生徒共や耳を傾けていた生徒も歓喜した。

まあ、色んな意味で始まりな訳で。

＊　＊

「ええ、ええ……編入！？　いきなりにも程があるわよ……出来ないのかって？　ふふ、分かり切ったことは聞かなくて良いんじゃない？　じゃあ、って。だからそれでもいきなりすぎるわよ……って切れてるし」

はぁ……理事長の弱みに漬けこんで即日編入は可能だけども、なんであの子はああも唐突に言うのかしらね。

これであの子から頼まれたのは”二回目”ってことになるのよね。その元凶の本人とは接点が今回は無いって言うのに……

「でも、面白そうだからいいのだけど」

写真を見せてもらった通りなら凄く可愛いし、アスちゃんの対抗馬として申し分ないぐらいだし……一度くらいは触ってもいいわよね？

「あの子の言うとおりなら……はあ、まあ元凶の本人も大変ね」

あの子も酷なことをするものね。

「ユウの記憶を消す……なんてね」

仕方のなかったこととは私は認めるつもりはない。それはどちらにしろ”逃げ”なのだから。

「……辛くなるのは、ユウなんだから」

そこら辺分かっているといいのだけど……まああの子は優しいから、何も言えないのだけど。

「じゃあ、早速電話するとしましょう――」

それが誰かって……聞かなくても分かるわよね？　ナレーターさん。

うわっ、不意打ちはナシですって！

……しかしあの書記が”二回目”ということと”ユウジの記憶を消したことを知っている”ということは――

まあ、なんと言いますか。世界というものは狭いものなんだなあ、と思わざるを得ませんね。

ホニの学校生活が幕を開けて……色々波乱が有りそうですね。

第２４２話　√２－４７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

地味にエグイ描写してるのに薄いという、なんというかユウジに悪い気がしてならない。

ホニさん編入は当初の予定と異なるんだよな……どうなることやら（え

第242話　√2－47　G・O・D・

「ホニちゃん人気だねー」

ユキがそんなホニが生徒たちに囲まれて質問攻めのい会っているところを見て呟く。

俺も頷きながらも「しっかし男女問わずの人気だな」と返してみる。

「ユウジ、そういえばどうしたの……その沢山の絆創膏」

「え？」

ユキが言ったのは頬や指にも貼ってあるある絆創膏のことのようだった。

「これ……ちょっと料理でしくじっちゃってな」

「顔とかも怪我してるみたいだけど？」

「あー、包丁飛んじゃったからな」

「危ないよね！　どういう経緯があったら包丁が顔をかするぐらいに接近するの！？」

「まあ、俺ドジッ子だから？」

「もう……でも気を付けてよ？　絆創膏で済んだから良かったんだから」

「ああ、すまん。まあ、心配かけた」

確かに絆創膏の数があまりにも多いのは確かでユキが心配するのは分かることだ。

……もっとも昨日俺は料理なんてやっていなく、包丁を空中乱舞させるほどの料理オンチを通り越して天然傷害兵器と化してはいな

いのだが。

「……あー」

「ユウジ？」

「いや、ちょっと思い出しただけだ」

昨日の出来事が思い出される……なんだったんだろうな、アレ。

＊　＊

「早速基礎体力を付けるぞ」

「よろしくお願いします」

体育系よろしくの力強さと勢いで頭を下げて一応コーチとなる桐に頭を下げる。

「うむ、それでは始めるぞ」

「おう！　……で、何から？」

「そうじゃな――まずは重傷を負ってみろ」

……こいつは一体何をいいやがったのでしょう。教え子にコーチが絶対には言はない、言ってはならないであろうことを言った。

もしそれが教師なら懲戒免職確実で、ブログやツ●ッターが炎上どころの話じゃなく児童相談所がギリギリで動きだすぐらいのことを――さぞ平然と言われた気がしてならない。

「えーともしもし、桐？　重傷を負えというのは聞き間違いだとい

いのですが――」
「言った通りじゃが」
「……マジで？」
「うむ」
「大けがしろと？」
「そうじゃな」

……ギャルゲーでこんなひどいヒロイン台詞があっていいのだろうか。というかこれが本当に正規かは分からないが、確実に言っていることがおかしいことはこの阿呆な頭でも理解出来る。

「……聞き間違いでないなら理由を聞きたいんだが」
「言うなれば耐性を付けろということじゃな」
「痛覚への！？」
「うむうむ」

正気かコイツ。

「これから踏み入れる世界はそれまでに危険な世界じゃ。言っておったろう？　実際に未遂寸前までになったじゃろう？　――これからはいつ殺されてもおかしくはないのじゃからな」

急激に頭が冷え背筋が凍る。昨日はナノマシンがあったおかげで俺は逃げ切れた――少なくとも今の俺ならば言葉通りに瞬殺間違い無しだろう。

ナノマシンも身を持って感じたが、後々に凄いぐらいの激痛やらが襲いかかって来る訳で、いわゆる諸刃の刃とも言える。

もしそれが無限に使えて、それでいて常時使用するとなれば――断言出来る、確実に体は使い物にならなくなる。

「わしはあくまでサポートじゃ、戦うのはお主一人じゃからな。痛覚に抗えるぐらいでなければいかんのう」
「だとしても、そもそも痛覚は人の体に忍び寄る未然の危機と異常を教える信号のはずだ」
「そうには違いない、じゃが。これからの”殺し”の世界で痛覚を伴うことで体は動きを止め。揚句にはアイツらへの餌食となる」

もっともなのだろう。例えそれが人道的には間違っていたとしても、神へ背いていたとしても――いや、神様さえ狙われるこんな世界だ。そんな正論だけでは通じない、生き残ることは出来ない。

「それともお主はそれで逃げ出す脆い決意じゃったのか？」
「……そんな訳ねえだろ」

俺は少なくともそんなことで抗うことを止めることはしない……そうホニさんの美しい姿をみて、その可愛い笑顔守ると決めたからこそには。

「わしはサポートすると言ったじゃろう？」

実際桐はサポートしていた。
今いるのはいつもの普遍的世界ではなく、かつて引きこまれ、そして逃げ込んだ結界だった。
雨澄が作った結界の世界はどこか温かみのない色遣いで寒気がしたが、桐の形作る世界は優しい色に染められていた。
セピア色に近い印象の懐かしくそれでいて温かい、どこか桐の性格が表れているような――引きこまれた世界とは大違いだった。

「じゃからお主が怪我を負えば傷を癒して助ける。今でこそ自由に出来るが、アイツらの戦闘中では限度がある……その意味がわかる

な？」
「……ああ」
桐がどういうメカニズムでそんなことが出来るのかは分からない。でもチートともいえる高い能力にはきっと代償があるのだろう。
桐は人知れず誰にも悟られずに力を使う度に何かを身に受けているのかもしれない。
そう考えて、俺は頼り切ってはいけない、自分が出来ることをやるべきだと思っての決意をした。

「……お主は優しいのう。まったくお主はわしのように心を詠まなくとも、見透かされてしまうな。しかし気遣いは無用じゃ、わしのことは気にせんでいい。大事なのはお主のこれからじゃ」
「分かってるさ」
「それでは始めるぞ。鉈――ナタリーの準備は出来たか？」
「おい何故そこで間違った部分を訂正しやがったんだこの野郎」
「ふふ、気にするな――それでは行くぞ？」
「かかってこい……って、桐は何をするんだ？」

「まあ再現と言ったところかの。アイツらの内のお主の遭遇したであろう和（より）との戦闘じゃ」

「……え？」
「”物体創造”――形は人形（ひとがた）、付けるは弓矢。狙うはその男、見下ろすは庭――”顕現”っ」
「ちょっ！」

その後……俺は無残にも串刺しにされた。

＊　＊

「なんでこの程度で済んでるのかが疑問だ」

傷のあった絆創膏を指で撫でて思う。今はコンクリートに軽くかすった程度の軽傷中の軽傷までに回復していた。

思い出すだけで寒気がする。激痛と来て途端に傷を癒され、また激痛――その繰り返し。

桐の治癒能力の凄さは十二分に分かったが、その一方で桐（キル）がある種本気で殺しにかかってきたのは間違いない。

……初日からハードルが一メートル半どころか三十メートルを用意された気分だ。あまりにも無残なせいか桐の生み出した矢を射つ幻影を五分の一倍速にするぐらいで、それでも俺は矢を全て弾くことさえ出来ず腕やら足に刺さった。

死にかかり三途リバーがもうすぐそこに見えていることが何度も有ったが、桐の作りだした特殊な世界は時が進むのが遅く。休憩を何度も挟みながらもそのたびに何度も死の淵まで追われた。

それが終われば普通に基礎体力と称して桐の世界でマラソンやら腹筋やら――初めはそれが良かったなんていったら矢を射ってきたので容赦がないどころの話じゃない。

傷は治るも疲労は消えないので何度も休むが、時が果てしなくあることもあって休息を入れながら桐の指導を受けた。

「ユウジ、顔青ざめてるけど大丈夫？」

「ちょっとばかし怖い夢を見たのを今思い出してな」

怖いどころじゃなく、夢なら良かったと思える痛みもいくつかあった気がする。

ちなみに初っ端約四時間の稽古が終わる頃にはまだ実際には一時

間も経っておらず、夕飯を疲れのあまり襲いかかる眠気にうつろうつろになりつつも食べ、風呂で寝落ちしそうなのを冷水で覚ましてようやくベッドイン、即席麺最初期に出た「一分カップ麺」も驚きな一分経たずして寝付いた。

遠ざかる意識の風呂上がりに桐の飲まされた謎ドリンクのおかげで今はこうして平然としているのであろが、普通ならば廃人状態で今度は俺からユイに棺桶登校を頼むこととなりそうだった。

「あ、ホニちゃんが困ってる」

「……ホニさんー、大丈夫かー」

あたふたと焦るホニさんを眺めているのも非常に癒されて良いのだが、ホニさんが結構に困ってるので行ってみる。

散々文句を垂れ流したが、俺は桐の鍛錬というか稽古を受けることは後悔していない。

俺は強くなるとホニさんの目の前でも俺自身でも決意したことなのだから。

どこまで出来るかは分からないが、これからも抗い足掻いてみるつもりだ。

第２４３話　√２－４８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

コメディ回に見せかけたクラスメイトキャラ立て回。
積み重ねって大切だなあ、と執筆していて再認識させられた。説得力のかけらもねェ！

第243話　√2－48　G・O・D・

「ホニさん大丈夫か？」
「ユウジさん！」
囲まれていたせい困った顔をしていたホニさんに助け舟を出してみる。
「う、うん大丈夫！」
「編入初日なんだから無理すんなよ？　ほらお前らも囲みこむな、ホニさん来てばっかなんだから」
「うう……ごめんねホニちゃん」「後でいいから色々聞かせてね？」「下之くん親バカみたいだね」「というか下之くんの家族ってレベル高い気がする」「下之くんは悪くは無いけど、副会長も前きた小さい妹さんと全然似てないよねー」「この胸の高鳴り……これは恋かしら？」
「けっー、保護者気取りかっ！　タラシユウジ！」「ホーニちゃん、また後でなー」「……こんな妹がいるのにユキさんをっ！　神はなんでこんなゲス野郎にいくつもの宝を授けたのでしょうか！」「いつかその長い黒髪梳かさせてねゲヘヘ」「ハァハァハァハァハァハァハァ」
……なんというか意味も無く俺が罵倒された気がするし、一部に危ないが奴がいるがスルーしておこう。
というか毎回思うけどもクラスの面子濃すぎるだろ、なんで皆無名キャラなのか疑問なぐらいなんだが。
少し焦り困り気味だったホニさんを連れ出してみる。ホニさんは「楽しい！」と「戸惑い」の感情を混濁させた苦笑した状態で出て

きた。

「本当に大丈夫か？」

俺が心配してホニさんの顔を覗いていると、観念したかのように。

「だから……ええと、少し疲れちゃったかも」

少しの疲れを滲みさせた笑顔でそう言った。

「やっぱりな」

「で、でもっ！　楽しいよっ？　……だってこんなにいろんな人と一緒にいて喋れるのは初めてだもん」

少し憂げで何かを思い出すように瞳を閉じてそっとホニさんは呟く。

あー、そっか。ホニさんは本当に人との関わりの少ないであろう墓地の神石の近くに居たのだから、それは紛れもない事実なのだろう。

そんな呟きを聞いた少し離れたところにいるクラスメイト達は。

「……良い子だぁ」「そう言ってくれてありがとね、ホニちゃん」「イイハナシンダナー」「ホニちゃんがそう思ってくれるなんて嬉しさ極めりだぜい！」

若干感動していた。このクラスは感情豊かな人が多いんだなー、なんて思えたりする。

まあ、俺のことを貶す男子勢以外は悪いヤツはいないのだろう。

ホニさんは少しまた俺に近づいて、他のクラスメイトには聞こえないような声で。

「……もの珍しさで集まってくれたのもあるかもだけど、我は嬉しいよ」

そうそっと俺に聞かせた。しかし俺はそれだけではないと思っている故に反論する。

「少しの話題性だけで離れていったら物珍しいだけだったかもしれないけどさ、おそらくこのクラスメイトの大半はそれだけじゃないと思うぜ？」

そう俺が言ったことにホニさんは少し驚いていたみたいだが、大丈夫だろう。一週間一緒に居る俺が保障する。

なにせホニさんは可愛く、きっと誰にでも愛されるような優しく温かな存在だからな。

初日で分かるぐらいに、ホニさんを可愛がる女子生徒やまだ揃っていない教材を貸そうとする男子生徒が沢山に居た。

来たばかりのホニさんをそれからは気遣って、委員長が「質問は一人一回三〇秒まで！」。可愛がるのは女子生徒に限って十秒」と指揮を取っていたのもあったが彼らも自重して何十人でいきなり囲むことはなくなった。

ホニさんのキャラもあるのだろうが、クラスの濃いキャラ譲りの若干お祭り好きなノリもホニさんを受け入れられやすい環境にしているのかもしれない。

なんだかんだで、心配していたことは完全になくなり。ホニさんも悪くはない学校生活が送れそうだと、ほっと胸を撫で下ろした。

四時限目が終わり、桐の謎ドリンクさままさまで授業中は寝落ちすることなく板書が出来て思わずのびをする。午前の部終わったーっと思っているとユキがぱたぱたと駆けて来た。

「ユウジー、今日はお弁当？」

「いや、学食のつもりだ」

今日は弁当をを用意することをしなかった。というのも月曜は学食ｏｒ購買が基本なのでいつものことなのだが。

……まあ昨日グッタリのせいでそんな余裕など、実際にはなかったので大助かりだったのだが。

「私も学食ー、ユウジもホニちゃんも行こー」

「おう、ホニさん。学食でいいよな？」

「ガクショク！　それはマナビヤで食べられる三ツ星レストランのことかな！？」

「いやレストランというより大衆食堂だけどな」

確かにまずくはないし高くもないののだが、そんな三ツ星なんて言ったら食堂のおばちゃん達が嬉しさのあまり号泣しかねない。

「わー、楽しみだなー！」

「ホニさん落ちついて」

あまりに瞳をキラキラさせるもんで、クラスの生徒の注目の的になっている。ちなみにクラスの総意思は「なにこれかわいい」といったところ。まあ俺も否定はしないどころか大いに賛同なのだが。

「じゃあ行くぞよー、いざ行かん生徒の聖地へ！」
「ホニちゃんとの学食かぁー、こりゃ腕がなるぜ」
「ホニちゃん、行こっかー」
「うん！」
「ユウジ様、私もご一緒しますー」
「おお、姫城さんも来る？　じゃあ行こうかー」

といつものメンバーにホニさんが加わる形で、学食に向かう。
ちなみに背後では――

「……っと、俺も学食に行こうかな」
「馬鹿言えお前は今日もあんぱんだろ」
「ちがわい、これは高級あんぱんだ！　栗入ってんぞ、栗！」
「じゃあその栗を味わってるがいいさ、俺は行かせてもらうぜ」
「何を抜かす、お前は今日は大好きママンの弁当じゃないか」
「なっ！　ママンは大好きなんかじゃないやい！」

とか。

「購買止めて学食にしようかな」
「そうだねー……なによりホニちゃんを見れるし」
「見ているだけで癒されるよねー」
「だよねー……でも、私は癒しだけじゃなくて――」
「――岬っ！　まさかあんたっ」
「うん、恋しちゃったかも」
「だ、駄目よ！　私というものがありながらっ」
「ヒロちゃん大丈夫……私は何人でも愛せるから」
「そ、それならいいけどねっ！」

や。

「ホ、ホホホホホホニちゃんの可愛さはアニメ化決定だよぅ！」
「違うっ、劇場化ケテーイレベルだよ」
「アニメは四クールでＴ●Ｓで、どどどどうかな？」
「異論はないっ！」
「キャラデザ・総作監を沼●さん」
「いや坂●さんで」
「異論はないっ！」

など……と聞こえてくる。ちなみにこれは描写してなかったりクラスメイトを取り上げていなかったしただけで特には平常と変わらないと言うね。

ここに来てクラスメイトのキャラ立てをする訳じゃないが……濃いだろ？　それでいて悪い奴はいなさそうだろ？

まあそんなところだ――もちろん俺みたいに女子の近くに居るのは男子生徒には歓迎されないけどねっ！　授業中に「リア充爆発、リア充消滅、リア充暗殺」という不穏な言葉が後ろから流れてきていたけど気にしない！　実際ユキや姫城さんと仲良くなってからは日常茶飯事だしね！

いやー、このクラスの男子どころか他クラス他学年の男子生徒は俺には優しくはないんですよ！　本当に……はぁ。

まあ、でもホニさんがすぐに溶け込めたからいいや。

第２４４話　√２－４９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

Ｑ．俺のタンメンまだー？　Ａ．まだですー

第２４４話　√２－４９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

そんな訳で学食へとやってきた。
地上一階に位置し一年二組の教室を出て昇降口との反対方向に直進すれば藍浜高校学生食堂である。
冷暖房完備の上で高速道路のサービスエリアのフードコーナーになる給湯・給水・給茶の三機能を持った機械が四つ用意されコップはエコを考えたか使い捨て紙コップではなく透明のプラスチック製コップが使用されている。
注文方法は食券式で、学食のおばさん達デザインの料理が描かれた食券ボタンが些細なこととはいえ温かみを感じる。
食券で購入した券を「汁物」「丼もの」「その他」の三つにに分けられたコーナーへと向かい、そこで受け付けているおばさんに渡してその場で待てば頼んだものの受け渡しがされる方式だ。
その他にもフライドポテトや唐揚げなどのものを扱うスナックコーナーも設けられていて、更にはパンおにぎり、弁当なども扱って購買とはまた違ったラインナップのものが買える。

まあ、来てみればいつも通りのそれなりの混雑とカレーやらラーメンなどの濃厚な味の空腹を促進し財布を紐を緩めること確実な匂いが漂っている。

「ユウジさんっ！」

もうカメラで撮ったらホニさんのその瞳のキラキラさにフラッシュは夜でも不要なんだろうな、ってなほどに輝いていた。
初めて遊園地に来て、初めて縦横無尽にレールを走り抜けるジェットコースターを見て、期待に胸を躍らせる子供のようにも見えてくる。

ようするに、可愛い。

「こ、これってショッケンキって機械だよね！？」
「ホニさん知ってたんだ？」
「うんっ！　チュウガクセイって人が読んでたマンガに載ってたんだよ！」

なる、中学生の野郎はいつか変な知識を叩きこんだことでいつかシメてやろうかとも思っていたが、今回ばかしは感謝しておこう。
いや、マンガに感謝すべきなのか？　そんな風に知識を入手する手段の一つであるから俺は規制すべきではないと思うね！　……って、話題が逸れまくった気がする。

「ホニさんは何食べたい？」
「えっと……じゃあ、これ！」

ホニさんは食券のあるボタンを数秒悩むことも無く指差して言った。

「きつねうどん？」
「そうだよ！　我はうどんの”きつね”と言われるお揚げが大好きだもん！」

そう言えばそうだ。こうしてホニさんと出会えたのもお揚げのおかげだったことが思い出される。
あの時はお稲荷さんで余ったお揚げを姉貴に頼み込んで貰って持っていったことも覚えている。

「ホニさんはお揚げ、好きだもんな」

更に最近だと、姉貴が「今日はきつねうどんにしようかなー」なんて呟いた途端に「わ、我も手伝っていい！？」と必死さを感じられるほどに食いついていた。

その晩のホニさんはともかくご機嫌で度々「お揚げ美味しかったな～」なんて言っていたことも回想する。

まあ俺が言いたいのは、すっごい可愛い。

「でもいいのか？　もっと他のものでもいいんじゃないか？」

値段は二五〇円と高校生には手頃かつ、思いのほか麺の量が多くお揚げも分厚いので納得の一品だ。

それでも、ホニさんに姉貴が渡した学食費ならばうどんが二つ来てもお釣りがくるほどだ。

「ううん、我はこれがいいの。お揚げもそうだけど、うどんには少し思入れがあるんだ」

その時したホニさんの横顔はなにかを途端に思いだしてじんわりと懐かしむかのようなもので、少し俺は考えてしまう。

「（ホニさんのことを、俺は殆ど知らないんだよな……）」

ホニさんに話された「何百年も生きてる」という途方もないことだけで、あとは殆どを知らない。

ホニさんは何百年もその容姿をしているのか、どういう思いで神石の近くで過ごして来たのか、なんでホニさんはそこまでお揚げが好きなのかも――

何も俺は知らなかった。

「（まあ……）」

でも俺はホニさんから話してくれるまでは聞かないつもりで、それに無理強いしてまでも俺は聞きたいとは思えない。

……だけども、もしそれを話さないことでホニさんが窮地に立たされたり、病んでしまう結果が見えているならば俺は踏み込むつもりでいる。

なによりホニさんは俺は大切な存在だからで、まだ踏み込まないことでホニさんとのこの日々を楽しめるようにしたい。

「ユウジさん、後ろがつかえてるよ？」

「おおっと、すんません！」

急いで俺は小銭を入れてホニさんと同じ麺類の味噌ラーメンを注文する。

ここの味噌ラーメンは地味に美味しいのでラーメンを頼む時は味噌ラーメンか坦々麺の二択だ。

値段も三〇〇円と育ち盛りの高校生のお財布には結構に優しい。

食券を取ってホニさんの後を追って汁物コーナーへと足を向ける――

まあ、そのあとは。お揚げを追加トッピングで三枚へと増強してほくほく顔のホニさんは異常な可愛らしさがあり。

なんとも丁寧でおしとやかな箸遣いで食べている光景はその周辺どころか学食全域で「なにこれかわええ」世界が展開されていた。

異論なんて滅相も無く、俺がホニさんラバー一号だぜと妙な高揚感を感じつつも後ろからは背中を貫かんばかりの鋭い視線があった。

そうしてほかのメンバーと揃って駄弁ったり、ラーメンをずるずるとすすったりしながらなんとも幸せなお昼時は過ぎて行った。

第２４４．５話　√Ｚ－５０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

実に良いものだ

第２４４．５話　√Ｚ－５０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

昼食を終えて教室へと戻る。
ホニさんの満足げな顔を見ているとこちらもおそらくはニヤニヤと気持ちの悪い笑顔を浮かべているのだろう。
またまた駄弁りながら喧騒にまみれた廊下から教室の戸を引く――

「なっ！？」

そこには突然に巻き起こる女子の悲鳴とともに奇妙な光景が広がっていた。

「ユウジどうした？　そんな扉前で固まってたら……うおう！？」
「ユウジ、何か見え――ふわっ！？」
「な、なんですか！？　こんな何時の間にっ」

そう、それはまた奇妙な光景が広がっていた。
……と、一応解説台詞も置いておくものの内心はまた違っていた。

「なんだこの天国」

女子生徒に限って全員が――

「ユウジさん、あれって水着だよね？」

そう、それも――

「旧スクだと……？」

マサヒロの言うとおりの旧型スクール水着を着用した女子生徒達がそこには居た。

「（あー、やべー。プールだから抑えられる欲求やら理性が今にも弾け飛びそうだわー）」

一応説明しておけば俺はスク水フェチだ。

そんないきなりと言われても、いつか前に誰かの手によって暴露された気がするので渇愛しておく。

しっかしクラスの女子も思いのほかレベルが高いおかげでスタイルを際立たせるスクール水着を十二分に着こなせていて俺は見るだけでハッスル状態。

胸が小さい娘はなんともスレンダーでさっぱりとした印象を受け、胸の豊かな娘はなんとも色気を漂わせている。

そこで俺は気付く、クラスだけがスクール水着天国と化しているのだろうか？　そう思って後ろを向く――

「や、だめ！　ユウジっ」

「！？」

そこにはスクール水着姿で羞恥のあまり身を縮こませるユキが居た。

頬は紅潮し、スクール水着の特性と言うべき体のラインがくっきりと出て……ええとその、腕でちょうど豊かに育った胸が形を何度も変えて――なんかヤバい。

少し視線を逸らすも、そこにはなんとも柔らかそうに引き締まった足があり。そこに黒ニーソックスというからもう俺の理性はサタデーナイトフィーバーである。

もうそんなエロマンガのような展開を俺の姉貴の地味に展開する誘惑に抗うことで得た強い理性が揺さぶられてこのまま遠心分離す

るのを抑えて、静かに深呼吸をして――

「見ないでくださいっ、ユウジさん！」

「なんっ！？」

思わず気になるのは男の性。一方の姫城さんは何故か白スクだった。知らなかったのが姫城さんの胸は年を相応ではなく、なんとも突出した大きさを誇る。ユキも決して小さいわけではなく姫城さんが相当に大きいようだ。

思い出せば体育の時間もその胸の揺れ方には視線を固定してしまいかねない魔性の色気があった。

そして白色スクール水着のせいなのか、水着をつくったところが手を抜いているのかは分からないが。

「透け……」

透けていた。なんとも健康的な肌色が僅かに水着越しに覗いているのだからもう俺は死にたい。

そして気付く間もなく誰かの学ランを強奪したのかは分からないが、そのスク水学ランの上にいつもと違う表情……そう基本的に俺にはみせない恥ずかしさに赤くなる姫城さんのギャップも加わったトリプルコンボも俺の性的欲求は技あり状態だった。

「ユウジさんユウジさん、これって水着だよね？」

「うおう！？」

ホニさんまでもスク水の毒牙に……かかってはいるのだが、また他のスタイルとは決定的に違うものがあった。

それはスクール水着の胸辺りに貼られたというより刺繍された白い布生地に「ほに」と書かれている点。

「（お約束っ）」

それでいて中学生な容姿としては背こそ小さいほども体の各部位は結構に成長しており、水着生地を摘まんでくるくる回る度に、しっかりと起伏のある胸とボリュームのあるお尻やらが覗いて俺の脳内は理性抑制の為に割いたエネルギーのせいでパンク寸前とも言えよう。

「やばい、このままでは」

確実にギャルゲ原作なのに、エロゲ原作に逆移植確定で声優変更R指定格上げの事態になりかねない、主に俺の行動で。

そんな訳で――

「逃げるっ！」

とりあえず何も着れていないユキに学ランを手渡してスタートダッシュ。

「えっ、あ！　ユウジっ」

「ユウジ様、どこに行くのですかっ！」

「……スク水もこのような場では興奮するものだ」

「「マサヒロくん最低ぇー！」」

後ろでマサヒロがクラス中の女子に罵倒される声が聞こえるがそんなのお構いなしだった。

道行く女子生徒がスク水、スク水、スク水。

もう女子生徒だけスクール水着という「春なのに、トリピカルフルーツゥ！」ではなく「春なのに、スク水フルーツゥ！（瑞々しい

果実的な意味で）」てな状況になっている。

いやはや素晴らしいから家に帰ってから楽しもう。

なんて最低すぎることを考えていると前から敵が現れた。

「ユウくーん！」

「げ」

容姿端麗成績優秀スタイル抜群みんなの生徒会副会長に家事万能……と完璧超人でありながら常にパズルの一ピースが欠けるがごとくズレている人。

「この水着姿どうかなー……って、何で逃げるの！？」

「逃げるに決まってんだろ！」

姉貴は言わないでいたが魅力的になっていた。それもスク水がかなりの助力をして。

姉貴は分かっていたがモデルも裸足で逃げ出した上に穴に飛び込むほどのスタイルの良さと以前に背負っても分かるほどに実にたわわに実った大きな胸を持っており、まあ、なんだ。

弟であっても、少しばかり理性を揺るがされる訳で。

それがダッシュしながら、そんな男子生徒の理性を滅殺するような動きをみせる体の一部分に流石の俺も直視は出来ない。

「てかなんで追ってくるんだよ！」

「ユウくんにこのスク水見て貰いたいからー！」

見えてるよ！　誠に思い切り見えてるよ！

「それにこういう場でないと見せられないから……ね」
「意味深なこと言うんじゃねえー！」

早速「死に晒せ糞弟」やら「引っこんで氏ねえ！」などの罵声と共に空き缶やらゴミやらが飛んでくる始末。
しかし姉貴は先程並べたもののほかに”運動神経抜群”も有ったことをお知らせしておく。

「つーかーまーえーえーたー」
「ぎゃあああああああああああ」

腕を掴まれ、途端に伝わるあまりにも柔らかいその殺人的な感触。
長袖ワイシャツでも分かる、そのほのかな温かさと魔法でもかけられているばっかりの柔らかさに昇天寸前だった。

「ねえ、ユウくん？　お姉ちゃんの水着姿どう思う？」
「は、はは。冗談だろ？　ドッキリとか言うんだろ？　いや、からかってんだろ！」
「そっか……恥ずかしいよね、じゃあそこのトイレの中なら――」
「速効離脱っ」
「あっ、ユウくん！　なんで逃げるのってば！」

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ」

一応補足しておくがこれは走って息が切れたのであった、決してあられもないとも言える校内を埋め尽くす女子生徒のスクール水着姿に興奮していることではないと……今は言っておく。
逃げ込んだのは外の混乱がじわりじわりと聞こえてくる男子トイレの中。

「な、なんなんだよ……」
『ユウジ、聞こえるか？』
「のわっ！」

途端に頭の中へと聞こえる桐の声。

「なんだ、桐か……」
『今そちらでは大変なことになっておるじゃろ』
「やっぱお前は分かってるか……」

にしても、なぜに突然――

『わしがそこら辺に落ちていた”スク水学園～全授業スク水大作戦～”というえろげをお主のパソコンに入れてしまった』
「なっ！」

そういえば俺が何を思ったかコノザマで注文したエロゲのタイトルだった。開封こそしたが、未だプレイしていないというのに……！

「どうしてくれる！　てかなんでお前は家にいるんだよ！」
『わしは今日は午前授業じゃったからな。悔しいながら役得じゃろう？』
「いや、まあ……って直せよ！　これ以上は耐えられない！」
『理性がか？』
「黙れこのロリ老人！」

「まあ待っておれ、少しばかり時間がかかるがの。ガマンせい」
と言ってテレパシーは一方的に切れた。

そうして諦めて外に出てみると、そこはやはり桃源卿で。

なぜか”脱げない”仕様になっている水着のせいで午後の授業の五時限目はクラスメイトの女子が体操服を着たりして少しはマシにしつつもあはり男として性との激闘を理性内で繰り広げられる中、授業が行われていくのだった――

続かない。

番外17話　番外3－1　√1あふた～と～く（前書き）

四月馬鹿更新二回目、一応前回更新はネタなので本編じゃないです。

番外17話　番外3－1　√1あふた～と～く

「第四回、アイハマ放送局！」

（フリー素材のＢＧＭ）

「この番組は生徒会会長の葉桜アスっ！」
「と、生徒会書記の紅チサ（あかつき）がお送りするわ」

ついでにナレーターですー、さりげない裏方ですー。

「久しぶりのアイハマ放送局、いっくよー！」
「……にしても本当に久しぶりね」

前回の番外編一生徒会編から二一七日振りですね。登場は書記に限り四日ぶりですからね。

「ええ、私たちのスタッフの蔑ろ（ないがし）ぶりには、長期連載マンガにありがちな初期使い捨て登場人物への仕打ちを連想させるわね」
「生徒会にシモノは来ないし、ちょっとひどいよね」

√2に入った直後に生徒会フラグを折り、唯一の可能性だった転校生フラグも謎のスルーを遂行したことで生徒会のフラグが全消滅しましたからね。

「……それでチサ、今頃呼び出したのにはどうせ何か理由があるんでしょ」
「少しアスちゃんがグレ気味になっちゃった！　どうしてくれるの

よ糞虫スタッフ共！」

まあ、今回一応お呼びしたのはスタッフを介して私な訳ですが…
…そういえばお二人方聞こえてます？

「ええ」
「うん……これがナレーターさんの声なんだなー、と」

凄まじいほどのやる気の無さですね。まあ、でも一応この日企画なので仕方ないのでお付き合いください。

「それで？　一体今日はアイハマ放送局のはずなのだけど」

まあ、顔だしする必要はないので――ごほん。

『あー、マイクてす。あーマイクてす』
「いきなりナレーターさんの声が大きくなった！？」

『と、いうことで……√1アフタートゥ～クッ！』

「「え」」

『今回は主要登場人物をお呼びしてもの思いに耽ったりしながら語って貰います』
「いいの！？　一応ループ設定の中に記憶消去があるようだけど、いいの！？」
『まあいいんですよ。まあ瞬間的な記憶復元で、元の世界に戻したら失くさせますから――あ、一応これはユウジと姫城の結ばれた直後の時間軸にしておきます』

「随分にタイミングが遅くないかしら」
『そのままインパクト重視で√2に移動したからしょうがないんですよ、ということで今日のゲストは――下之ユウジ、姫城マイです。どうぞー』
「あ、なにこれ……学校の、放送室辺りか？」
「そうみたいですね、ユウジ様」
『解釈が早いようで助かります』
「誰だお前、いやどこか聞いたことがあるような――」
『それ言ったらユウジはゲームのバグに変わりますよ？』
「うおい、地味に恐ろしいことを！」
「ユウジ様をハグ……っ！」
『姫城、それ違う』
「というかなんで名前も声も見覚えもないお前が何か用か？」
『見覚えはないと思うのですが……私今天の声状態ですし。まあ、ちょっとあの後どうですか？　というような感じです』
「あの後？」
「きっとあのトイレのことでしょうか……」
『そんな描写なかったでしょうが！』
「ああ、マイと付き合ってからのことか？」
『正確には完全に二人の心が打ち解けた時からですね』
「ああー……まだあれから数日しか経ってないんだよなあ」
「そうですね……ユウジ様にああ言っていただけて本当に嬉しかったです」
「マイ……！」
「ユウジ様……！」
『あー、イライラするんで二人とも爆発してください』
「なぜに！？　てか呼ばれて爆発するとか凄まじい程に最悪な扱い

だな！」
「ユウジ様との心中なら私悔いは――ありますので、もっとイチャイチャしましょう」
『あー、はいはい。ということでアフター話してください、アフター』
「えー……どう話せばいいんだ？」
「私はいつでも体を許しています」
『……ビッチ？』
「ユウジ様一筋で他の親族以外に誰にも素肌を見せていない私にそんなことを言うなんて命を失う覚悟があるようですね。ええ構いません、あなたの居場所を五分使わずに探し出してその口から訂正の言葉聞くまで首に＜血塊刀（けっこん）＞を刺すのを止めません」
「マイそれは喋れない以前に即死だから……まあとりあえず俺の彼女を悪く言うなら俺はどんな奴だろうと許さねえ」
『訂正しておきましょう、すみませんでした。じゃあ痴女ですか？』
「否定しません」
「……ノーコメント」
『否定しろよ』
「お前の口調安定しねえなあ」
『誰のせいだと』
「性格だろ？」
『……良いでしょう、そこまで私をバカにするならば。あなたのトップシークレットを明かしてしまいましょう』
「なっ……まさか実は昨日に俺の部屋でマイのスク水プレイしたのがバレていただと！」
『まったくもっての初耳！　なに姫城にさせているんですか！　この変態っ、変態っ、変態っ！』
「否定はしない！」
「ユウジ様の前だけでなら……大丈夫です」
『……もういいですよ、ユウジが姫城と付き合う前まではホニとユ

キラブだったことも知っているでしょうし』
「――ユウジ様？　そうなのであれば、一応聞いておくべきかと思うのですが、本当ですか？　ちなみに私は嘘が嫌いですから」
「うっ……本当です」
「本当のことを言って頂いてありがとうございます……正直なユウジ様が私は大好きです。それに今はこうしてユウジ様の彼女ですから」
「マイ、ありがとう」
『……私の発言で二人のラブラヴ度を上げてしまった気がして気に入らないですね。焦げて下さい』
「爆発からのレベルダウンが見受けられるけど、相当にエグいかと！」
「私はかつてまでユウジ様が他の女性と仲良くする度に胸を焦がしていました」
「マイ……」
「……ユウジ様」
『あああああ、もうっ！　イライラする！』
「乳酸菌足りてます？」
「ぐんぐ●グルトという乳酸菌飲料が美味しいですよ？」
『怒る気が失せました……ああ、はい。参考にします』

「あの、ナレーターさん？　なんというか私たちが忘れらている気がするのだけど」

「あ、チサさんに会長、おはよーございます」
「おはようございます」
「さっきから居たんだけどねえ！」
『まあ、正直アイハマ放送局の枠だけ欲しかったんで引き続き引っこんでいてください』
「ひ、ひどい！」

「ナレーター……あなた鬼畜ね」

『はいはい、まあ企画なんで進めますよ。あの結ばれた後どうなりました？』

「……まあ、二人で仲良くな」

「はい、桜デートに行きました。それにユウジ様の家にお邪魔して料理の食べさせあいっこをする予定ですね」

『こりゃまあ、当初のヤンデレが嘘のようにふっつうなイチャイチャ振りですね』

「止めろよ照れるだろ」

『ユウジに言ったつもりはないのですが……まあ二人は幸せなのですね？』

「「はい（ああ）」」

『じゃあ、これで終わりですね……って何しているんです？』

「せっかく学校に来たんだし、デートでもしようかと」

「ユウジ様、腕を組んでも……ありがとうございます」

「じゃあ俺らは行ってくるわー、じゃな」

「それでは」

と言いうとラブラブこちらイラカップルは放送室を出て行きました――

「……なんというかこの番外編でもこの扱いは泣いていいのかしらね」

『まあ……いいんじゃないですか？』

「ナレーターさんがが言わないでよっ」

『いや、まあまあ』

「……仕方ないからここからアイハマ放送やりましょうか」

「そうだね」

「アイハマ放送局～R（リベンジ）」

（慈愛に満ちたＢＧＭ）

「この番組は以下略。ここで駄便のコーナー」
「じゃあ私読むねー、はい。ペンネーム”偵都ヨコハマ市民”さんより『なんで記憶リセットされたんですか？』とのことです」
「一応は桐の優しさね」
『私は既に台本渡されているので殆ど理解していますけど自粛します』
「ということで要約すると”知らない”ってことだね。はい、次ー」
「ペンネーム”あまりに長くて萎えた”さんよりね『いつ終わるんですか？　いつか”クソゲエリスタート三月開始”とか言ってましたけど、終わる気配がないんですが』」
『……自粛したいところですが言っておきます。今年中には絶対に終わりません』
「某電力の計画停電みたいだね」
「ペンネーム”ザ・クレーマー”『こんな糞小説を連載するなんて不謹慎だ！　一ページも読んでないけど止めろ』とのことよ」
『するー』
「私、私っ！　ペンネーム”これが私のご俊敏様”よりー『いつまでこんな糞企画やるの？』」
『終わりですー』

……はい、終わりです。一応すみませんでした。

第２４５話　√２－５０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

コッチが本物ですヨ

第２４５話　√２－５０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

昼食を終えて教室へと戻る。
ホニさんの満足げな顔を見ていると、もう俺は一日の幸せを一気に享受した気持ちになる。
そうして駄弁りながら喧騒にまみれた廊下から教室の戸を引くと――

「なっ！？」

そこには戸を隔てて小さかった女子生徒の悲鳴というか……嬉しい悲鳴と表現すればいいのだろうか？
一応は一種の興奮状態のように「キャー」やら「かわいいいいい」などとペットショップに行ってガラス越しに見る愛らしい動物たちに感嘆をもらす女性の様子にもどこはかとなく似ていた。

「ユウジどうした？　そんな扉前で固まってたら……うおう！？」
「ユウジ、何か見え――あっ！」
「な、なんですか！？　ええと、あの女の子は――」

そう、それはまた沢山の女子生徒がわいやわいやと囲む中にいる、本来はいるはずのない人物。まあ女の子という表現から性別は特定出来ていたと思う。
俺の反応でそれはいることが異常だと読みとってくれれば幸いだ。

「あっ、お兄ちゃーん！」
「げ……」

その予想外の展開への驚愕と共に悪寒が体中を駆け抜ける。なん

で、なぜに奴がいるのかと。

「お兄ちゃん？　げ、なんてひどいよー」

少し悲しそうに演技するものだから「シモノくん、せっかくこんな可愛い妹ちゃんにそういう反応は無いんじゃない？」「そんなシモノくん、ボク残念だな～」「ねえ、この子お持ち帰りしていい？」などと非難の声が上がる。

そんな地味にも効果覿面（こうかてきめん）で殺傷性の高い展開に怖気つきそうになるも必死でこらえて、キツく言い放つ。

「だめだろ桐。勝手に学校に来ちゃ」

「えへー、ごめんなさい」

……あれ、思いのほかキツくないぞ。ち、畜生このヘタレ野郎の俺がっ！　そんなだから主人公になったはずなのに彼女の一人も出来ないんだよぉっ！

「……で、何でいるんだ？」

「午前授業が終わったから来てみたのー☆」

「いやだからって、家に居ればいいだろうに」

「だって……お兄ちゃんに会いたかったんだもん」

「……」

クラスメイトズな女子生徒はそんな可愛らしい（俺からみれば只のブリッ子）妹こと桐の言動に沸いた。

クラスメイトズな男子生徒はそんな言葉を向けられた俺への敵対心は一の不燃ゴミを集積するゴミ処理場でのゴミの積まれていく勢いで積もってゆく。

塵も積もれば山となると言うが、今回の妹発言は前年度比約三十

倍のペースで俺へと向ける鋭い視線を強めている。
どこからかは何かワラのようなモノに釘を打ちつける音が聞こえたり、信教宗教もびっくりなほどに怨念を籠めたテノールとバスの合唱でネチネチと文句やら罵倒の言葉が言われ続ける。

もう、どうしろと。俺は何もしてないのに敵が増えて行くという微妙どころか大いに理不尽な展開に心の内で誰にも知られることなく涙を飲んで、一応は答えておく。

「だとしてもここは遊び場じゃないからな、勝手に来るな」
「あ……ごめんなさい」

女子の方々は「正しいことだけど言い方ってものがあるんじゃない？」「シモノくん、もっと優しくしなきゃ」「ねぇ、だからこの子持ち帰っていい？　二日で返すから」
男子の方々は「なに悲しませてるんだよ」と全員打ち合わせしたかのように右手中指を立たせて来るという、ギャルゲの選択肢でどれを選んでもバッドエンド直行のトラウマが蘇る。
いやさ、なんで俺は怒られ妬まれ憎まれているのかと……そうか、ホニさんの笑顔の代償がこれってか。でも、それでもホニさん笑顔が見れるってなら俺は後悔なんぞないさ。

というような実は桐が諸悪の根源なのにクラスメイトに気圧されてネガティブオーラを発散するユウジ……傍目から見ても、私も一女子ですけど可哀想に思えてきます。
昨日は特訓攻めで、その特訓をするという抽象的な事だけをホニさんに知らせて、その中身のハードさを桐以外の誰も知らないからで……本当に報われないというか、流石の私もやめたげてよぉ。

若干ネクラモードに入っていると、隣のホニさんが久しぶりに友達と再開した子供のように。

「桐〜っ」
「あー、ホニちゃん」

桐の元へと駆けて行く。その幼い容姿のホニさんが桐の手をぎゅっと掴む光景は「なにこれ悶えたい」というようなあまりにも可愛らしい光景に教室は一気に静まり返り、なんとも生温かい視線が一点へと集まる。

正直俺は怒りの矛先から逃れられたので好都合で、それでいて見ていても飽きない光景にホニさんの桐への行動は一石二鳥の救世主だった。

「んー、桐？　いつもはホニって呼ぶのになんで――」
「ごめんなさいー、ちょっと家族内でお話したいからホニちゃんとお兄ちゃんを借りますねー」
「え、なになに」
「ちぃ、おまっ」

何か化けの皮が剥がれそうだったのを感じ取ったか有無を言わさずホニさんの手を掴んだ上で俺の腕を掴んで、どこからそんな力出るんだよ言わんばかりの力で連行される俺。

極めつけは以前にもされた”金縛り”状態で、完全に桐に連れて行かれるしか行動の選択肢がないというからまたまた理不尽な展開だ。

どこに連れて行かれるかと思えば、お約束かと言わんばかりの半地下こと倉庫手前の薄暗くちょっとしたスペースだ。

「ホニ、わしはアレがデフォルト・通常じゃからな」
「えー、今はこうしてホニって言ってるのに？」
「……それでお主らを呼んだ訳じゃが」
「っ」

すると金縛りが解け、口も開き体の自由も戻る。

「な、なにすんだよてめえ！」
「わしが来たのは他でもない」
「……茶化しに来たのか？　遊びに来たのか？」
「何を言う、ユウジが弄られるのを見に――げふんげふん、現状視察じゃ」
「お い後者に言ったことよりも本命は言いなおした前者のように聞こえるんだが！」
「いかにも」
「あっさり認めたらどう反応すればいいんだよ……」
「死ねばいいと思うぞ」
「なんでやねん」
「いくら面倒だからといってツッコミに手を抜くのはどうかと思うぞ」
「いやいやいや、なんでいきなり俺がキルユーなんて言われなきゃいけないのかと小一時間」
「……お主は学校が同じなったからと、ホニとイチャつきおって」
「なんか言ったか？」
「女のデリカシーの分からない男なんて馬に蹴られて死ねばいい！」
「ひ、ひどい」

先程のクラス生徒全責めも堪えるが、ここまで一方的に罵られると怒りを通りこして泣きたくなる。

「……で、わしが来たのはほかでもない」

「まあ、一応聞くよ」

なんで繰り返してんだよ、というツッコミを入れる気もならず。寛容な俺はそれを流して聞いてみることとする。

「この学校にはアイツらがいるのじゃろ？」

「っ！」

驚くことではない。以前に雨澄に会ってから分かっているはずだ。それでいて今日はホニさんが来ているというのにアクションが来ないことに疑問を覚えるべきだったと今頃になって思う。

「会ってはおらぬじゃろ？」

「それは、まあ……」

「一応は”アイツら避け”の術をお主とホニはかけているおかげじゃな」

「！」

そうか、また桐には助けられているのか。

いくら俺が戦うとは言え、あの過酷であっても絶対に必要な鍛錬も。あの時家に逃げ込む寸前のことも……そして今日も。

「ああ、すまんな桐」

「礼を聞く覚えはないの、わしは言ったはずじゃ。助力すると、サポートすると」

「桐……」

少し感動する、桐は一生懸命にここまでやってくれているのだと。

「そういえば、これは何時の間に術をかけたんだ？」
「お主が寝ている間に」
「なっ！　それはお前っ、何度も止めろと――」
「というのは嘘で、昨日のドリンクじゃ」
「……いや冗談に聞こえないから止めてくれ」
「入ったのは事実じゃがな」
「桐ィ！」

……なんというか素直に感謝しようとするのに、調子を崩すのが天才級だな。

「まあ、わしもお主の部屋には入らないといけないからの」
「なんでだよ！　力使ってまで入るなよ！」
「……悪いな、ユウジ。しかしこれだけは譲れぬのじゃ」

その時の表情を俺は見ていた。いつもながらの茶化すかのような笑顔が消えて、そこには本当に時々に見せる真剣な桐の表情があったことを。

桐は……もしかして。

「お前、何か隠してんだろ」
「んなわけないじゃろ！　――それでじゃな」

返しこそいつものペースだが、俺は桐が何かを見に秘めていることを少なからず予測できた。

あまりに都合のよい能力。いくらなんでも、チートにも限度がある――

「この学校には少なくとも一人、この町には三人。アイツらが居るようじゃな」
「さ、三人っ！？」
桐のことを考えていたことも吹っ飛んで、途端にその「三人」という新情報に驚愕する。
「それもお主の交戦した和とは一味も二味も違う高い力を持っていると思われるの」
「まじか……」
「そして、帰ったらテレビのニュースを見てみるがよい。新聞でも良いがの、最近起り続ける事柄としては異常じゃからな」
「お前、何を……」
「わしは一度家へと戻る。そのアイツらを避けさせる術も数日も保つ訳ではないからの。出来るだけ早くに帰るのじゃ」
「……ああ」
「じゃあの」
そう言って桐は階段を駆けあがって行った。
「ユウジさん……」
「大丈夫だ、大丈夫」
根拠なんてあるわけない、力なんてもあるわけない。
あるのは守ると決めた決意のみ、それでも俺は――
「俺とホニさんはこれからも一緒だ」
「……うん」

そうして昼休みの予鈴のベルが鳴る。こうして、また日常へと戻る。

またいつ非日常へと落ちるのか変わるのかは分からないが――俺は抗うつもりだ。

第２４６話　√２－５１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

あと二十話で終わる自信がねェ……

第246話　√2－51　G・O・D・

学校が終わり家へと帰る。俺とホニさんが一緒に下校し、ユイはバイトへと直行、姉貴は今日も生徒会だ。

話しながらも周囲の視線や気配には気を使ってその何ら変わりない通学路を歩いて行く――幸いアイツらに遭遇することなく家へと辿りついた。

「おかえりじゃ」

「ただいまー」

「おう」

出迎えるのは数時間前まではわざわざ藍浜高校へと訪れ、情報と共に意味深な発言を残していった。

「なあ、桐。さっきのテレビのニュースの件はなんなんだ？　今の状況に何か関わりがあることなのか？」

「聞く以前に確かめてみるがよい、それを見ればお主ならば理解出来るかもしれん」

『〇×県□市藍浜町で約一週間から小児や学生の失踪事件が相次いでいます。これまでに藍浜小学校三年三組堺陽太郎君、同じく五年五組の中島未来さん、藍浜中学校一年一組の折笠友美さん、同じく三年一組の寺西光輝の四人が未だ行方不明となっており、もし見かけられた方が――』

テレビを点けて、すぐにそんなニュースが流れていた。それは偶

然なのか……いや、きっと攻略情報をも知る桐が図ったことなのだろう。
　このニュースが本当ならば――

「なあ、桐。お前の見せたかったのはコレか？」
「愚問じゃな」

　そうして考える。失踪事件、男女問わず、年は関係なく、名字だけ見れば四人の繋がりは皆無。
　更には思い出す、アイツらの言葉を。コトナリを抹消する、関係のある者も消す――そこから考えられる答え。

「……つまりは今失踪してる人は、アイツらの被害者ってことか？」
「うむ。まあ断定出来る要素は無いが、ここまで失踪事件が一週間の内にあるというのは偶然ではないじゃろう」

　ここまでほぼ集団での失踪が日頃にあったらたまったものでない。しかし思う――

「なあ、アイツらは俺たちを消すって言ったな。じゃあ俺らは消されるとどうなるんだ？　失踪した人らはどうなったんだ？」
「……そうじゃな、話しておくべきかの」

　俺が地面へと置いたテレビのリモコンを拾って電源を消すと、テレビを遮るように桐が俺の前へと立つ。

「以前にも結界は使い捨てのようなものと言ったことを覚えておるかの？」
「ああ、準備期間を要する上に使い捨てだって」
「……その使い捨てられる空間に取り残される、という表現が良い

かの」
「っ！　じゃあ、まさか」
嫌な予感がする。これから桐の言う事はきっと事実で、それはもう恐ろしいもんあのだろう――敏感になりつつある俺の第六感はそう悟り、全身が冷えて行くような感覚に陥る。そして桐は言い放った。
「そうじゃ、あの空間だから繰り出される能力で切り刻まれた血肉を抉り取られた揚句。そこに放置したまま空間をその残された抜け殻ごと消滅させる」
「なっ……」
空間ごと消し去られる。それがどんな意味をさすのか、それじゃ失踪した人らの末路は――
「アイツらが行動を制限されるのも、あの空間だけでの能力発動だけが理由ではない――消し去った事実を隠し誰にも知られない為のものでもあるのじゃ」
――言葉がない。それは”コトナリ”という差別から生まれた明確な人殺しじゃないか。
「異なることで調和を崩す」そんな類のことを言っていたのを覚えている――これは思った以上に捻くれて狂気に満ちた連中に反抗しているのかもしれない。
隣にはやっぱりホニさんが居て、なにも言わず。その恐れと怯えに体が震えるのを抑えながら、ずっと沈黙していた。

しばらくしてから鍛錬は始まる。
履きなれたスニーカーを履き、手にはナタリーを持ってから庭へと出る。
そこには既に桐が仁王立ちしていて、その顔には「始めるぞ」という意思を含んでいて、俺は声に出さず頷いた。

「”虚界”」

世界が変色していく。人の声が、町の音が遠のいて行く。
空は薄く水で薄めたベーシュのようなものに、雲は肌色がかかる。
濃い背景は薄い茶色へ――セピア色の世界へ。

「今日は空中戦にも対応してもらう」
「く、空中！？」

聞き間違えでなければ――

「何か俺は飛行機にでも乗るのか？」
「違うぞ。あくまでお主が飛ぶのじゃ」
「それってどういう――」

俺が飛ぶ？　羽が翼が生える訳でもないのに、そんなこと――いや、まさかな。
いくらチートでもそんなことはできないだろう。

「重量制御。人物指定男一人、綿毛のような軽さへと――書き換え（チェンジ）」
「ちょっ――――うわっ！？」

俺の体は空へと飛ばされる、地球の引力が俺を地上に引きとめる

のを完全に諦めたかのように――降下式アトラクションに感じる風圧を上昇することで受けているかのような。
アトラクションが苦手ならば胃の内容物が空へと吐き出されてもおかしくないほどの衝撃が一気に体を襲う。
体をじたばたと動かしていたせいで加速、加速を繰り返しあらぬ方向へと吹っ飛んでいたが、体の動きを止めることで飛ぶことも抑えられることに気付く。

「どーすーりゃーいーいーんーだーよー」
「まずはこの感覚に慣れるのじゃ」
「ってー言ーわーれーてーも」

右足を少しくいと動かしただけで左方向に上昇する。
ファンタジックに空も飛べるはず～、なんていう歌詞が浮かぶものの人間の俺はファンタジックにもなぜか飛んでいるという。
昼間飛行ってか……あー、そんな思考を展開するよりもこの体の操作に慣れないとマズイ。

「……っと、うわっ」

そういえばヘリコプターのラジコンって操作難しかったなー……いやいやそんなこと考える暇なんて――

「あれ？」

少し慣れてきた。つま先を地上へと向けて勢いを地面を蹴飛ばすとの同じ要領でやると前へと進み、かかとを地上へと向ければ減速。
右足を横に出すと左に、左足も以下略……ただし空中で蹴りを入れようとすると遊園地のアトラクションのコーヒーカップならば業務停止命令の出る恐ろしいほどの速さでその場で回転してしまうの

で注意が必要。
　そんなことさえ気をつければなんと軽々と心地の良いものか。羽が生えたというより跳躍力が恐ろしいぐらいに向上した感じだろうか。

「よー慣れたのなら、和を投入するぞ」
「ちょ、待て！　まだナタリー持ってな――ぎゃあああああ」

　いや、あの。ギャグマンガみたいなノリですけど矢とか痛いとかいうレベルじゃねえから。
　そんな「ボール投げるから打ってねー」みたいな草野球感覚で始めるんじゃねえぞ、オイ！

「はぁはぁ……」
「すまんすまん、持っておらんかったな」
「殺す気か！」

　その冗談じゃねえ展開に矢が刺さる前に心臓止まりそうだったわ。

「まあ、まだ空中戦闘は難しそうじゃな」
「ああ……もう開始三秒でハチの巣だからな」

　桐の現代医療を馬鹿にしているとしか思えない高速治癒能力に脱帽と拍子抜けを覚えつつも先程に射られた矢をブチ抜かれた後に庭に寝かされて一分もの治療を終える。

「今日は鉈の使い方じゃな」
「……鉈の使い方って言ったら切りかかるぐらいじゃねえの？」
「お主……それでは死ににいくようなものじゃぞ」

「それ以前になぜに鉈にセレクトされたのかが分からないんだが」
「それは運命じゃな」
「……ひどい運命を背負っちゃったもんだな。代えは効かないのか？」
「無理じゃな。一度選んだ武器は変えられぬ――という呪いがかかっておる」
「とんだクソゲーがなあ、オイ！」

このゲームにアクション要素があるってのにこの有り様だよ。
鉈とか重たいし、そもそもヒロインを守る主人公が使う武器じゃねえよ。大抵は敵の使い捨てのガタイの大きいキャラとがブンブン振りまわすってのに。

「それに、その鉈にはお主は愛されておる」
「……あんまり嬉しくは無いな」
「あとは強化術と鋭利術もかけておるから、そんじょそこらの日本刀も顔負けの鋭さと耐久性を誇るぞ」
「……まあいいや、確かにこの鉈には愛されてるかは知らないが。手に馴染んでるしな」
「それならよいじゃろう、それじゃ鉈の柄をバトンのように振り回して矢を弾く練習じゃ」
「ねえええええええええええよ！」

……数時間後、なぜか俺は鉈回しをマスターした。なんでやねん。
その後は町内マラソンに腹筋数百回、昨日と同じ対雨澄戦の再現――今日だけで何度に死にかけたんだろうなあ、と思いながら体感時間八時間。実質ニ時間弱の練習は終わりを迎える。
果てしない疲労感に居間の畳に寝転び、数時間後の夕食を休息として過ごす。

「……はぁ」
「ユウジさん」
「お、ホニさんか。どした？」
「ユウジさんは、昨日から何をしてるの？　……体中怪我してるみたいだし、疲れてるように見えるよ――」
「ああ、ちょっとな。そこら辺走ってきたんだ、俺ってばドジだから何度も転んでな。心配かけたならスマン」
「そ、そんなことないよ！　でも、その走る意味って――」
「いや、体が鈍ってからちょっとな。だから桐にコーチしてもらってる」
「わかったよ……でも無理はしないでね？」
「ああ、了解」

ホニさんには「強くなる」という初心表明やら決意を漏らしたけで、鍛錬内容は伝えていない。
……ホニさんはきっと知ったら、すごい気にしてくれるだろうけど――なんというか、いざあんな決意をしてしまった手前「実はポケモンで言うレベル一でした」なんて言えるはずがない。
桐に練習を頼んだことは知ってるだろうけど……桐が伝えていなければ、大丈夫のはずだ。

「今週が勝負……ってところか」
「え、ユウジさん？」
「なんでもなーいぜい。ホニさん、どうだ？　ゲームでもするか？」
「っ！　うん、いいの？」
「おうよ、とりあえずオセロでもすっか――桐ー、オセロ貸してくれー」

こんな日常が続くならば、いくら辛く瞬間的でも持続的でもな痛

みを鍛錬で受けていたとしても――俺は頑張れる。
ホニさんがいるならば――

「（あれ？）」

そういえば俺は何度も同じような事を言っている気がする……決意も何度も何度もした。何かを言い聞かせるかのように何度も反復して。

……ホニさんの笑顔を守りたい。そんな一心なのは確かなのだけども、ふとあることも疑問に思えてくる――いや、気のせいか。気のせい、だよな？

「（勘違いだよな）」

そんな少々の考えは放り捨てて、桐の持ってきたオセロでホニさんと遊び始める。確かに言えることは、やっぱりこの時間は幸せだってことだ。

第２４７話　√２－５２　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

あああああああああああ、俺の表現力がないせいで小物臭が半端ねー！

第２４７話　√２－５２　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

どうもナレーションのナレーターです。

この始まり方何度目だよ、ハマってるのか？　と言われそうですが、特に意味はないです。

伏線でも趣味でも主義でも義務でもなんでもありません、言うなれば台詞の使いまわしといったところですね。

冒頭からナレーションが始まっておっかなびっくりかもしれませんが、ええ。私が来た時点で少しイレギュラーな視点で展開される訳です。

例えばユウジが読みとれないヒロインの心情とか、または敵対する組織の――では始めると致しましょう。

＊　＊

ここは藍浜商店街を突っ切って、映画館を横目に、姫城舞の家をも通り過ぎた藍浜町の端。

そこから小道に入れば地主が居なくなり誰も手入れのされないその場所は雑草天国、小さな野生動物やら虫の楽園へとなり果てている場所へと辿りつきます。

更に進めば一部のガラスは抜け落ちて闇夜には不気味にみえるデザインガラスを持つおそらくは教会だと思われる建物が見えてきます、灯りはかろうじて通る電線に備え付けられた今にも消えてしまいそうな街灯少し。

こんなところ誰もいないだろう、と言わんばかりに生活の臭いは殆どありませんが……良く見れば草木を押し倒して人が通ったかのような痕跡が見られます。

その少しずつ姿を現す教会は見た目こそ廃墟同然ですが、良く見ればほんの小さな灯りが漏れていました。
灯りを辿り、教会の中を覗いてみると――

「――タカユキどうだった？」
「まあまあだな、そういうシュウスケお前はどうなんだ？」
「うん、二人」

青年の会話と思わしき声が聞こえてきます。一人の穏やかな方はシュウスケで、少し荒っぽいのがタカユキと読みとればいいのでしょう。
辺りはもうとっくに暗く、既に一日が終わっているであろうそんな時間に。何を好き好んでこのような廃墟に集まっているのか――

「ヨリはどう？」

ヨリ……もしかして、それは雨澄和。その人ですか――！？
その姿が見えてくれれば、それは藍浜高校の女子制定制服を着た。
ユウジが遭遇し、矢を討って来た雨澄和（あますみより）その人でした。
証拠に座っている教会の木製の古びたロングベンチには矢が積まれ、膝の上にもその矢が置かれています。
一方の青年は、一人は――そう、あの時のこと。

「――申し訳ない」
「おいおい、お前ここ数日不調じゃねえか。俺らの力があれば人になりすます異（コトナリ）なんてちょろいもんだろうに」
「そうそう貧乏神だか厄病神だかの神様って言っても、この世界では人を使う以外は実体化できない異の一種類に過ぎないんだから」

厄病神……やはりそうですか。あの晩のこと、屋根上での戦いを

繰り広げ――小さな女の子の形をしたそれを迷うことなく身長大の大きさの剣で半分に切り裂いた。あの人でしょう、やはり手元には大きな剣が立て掛けられ、月明かりに刃がキラリえと光ります。
　ということはここにいる人らは桐の言う”アイツら”ってとこでしょうね。異をコトナリと呼ぶ以上はほぼ確定ですね。

「――協力者がいる」
「ふーん……確かにここのところは妙だねえ」
「ヨリ、お前の通う学校に異はいるんだろ？　そんな小さい空間ならとっとと消せるだろうが」
「――遭遇することが出来ない」

　遭遇することが出来ない……桐の言っていたアイツら避けの術ということならば、この和の言う協力者は桐ということになりますね。

「そういえば言っていたねえ。異とその接続者（コネクター）を追いかけている途中に突然どこかに飛ばされたって」
「俺の知るところだと、そりゃ異の”魔法使い”が使う”カットアンドペースト”って魔法に似ているんだがな」

　魔法使い？　あの魔法使いなんですか、桐。初耳なのですが……確かにそれならばチート使える説明は――ゴリ押しのご都合ですけど付く、のかな？

「うんうん、でもそうなら異は二人いるはずなんだけど……ヨリは一人と接続者って報告だったけど、間違ってない」
「――訂正は無く、一人」

　違うんですか！　……じゃあ桐は一体何ものなんでしょうか、喋り方や性格も当初のキャラ設定とも違うようですし。

「だってよ」
「うーん、これは本当に妙だ」
「だとしてもお前は異を消さなきゃいけないのは分かるよな？」
「――理解している、事態を長引かせることで身を滅ぼすことは周知している」
「ならいいんだが」
「まったく、嫌なものだね。こうして選ばれてしまったせいで、異を消さないといけないだなんて」
「そういうお前はいつも剣を振るえて嬉しそうだがな」
「まあ、消せる瞬間は快感だしね。それに最近は楽しめるようになってきたんだ」
「……お前の人間離れも相当なもんだな」
「いやいや、タカユキも銃なんか人目も気にせず連射出来て楽しいんじゃないかな？　それにもう僕たちは」

その好青年はさぞそれが当たり前のように、どこか楽しそうに続けて言います。

「――異を消し続けなければならない、そんな宿命を持った能力者なのだから」

運命を受け入れ、その楽しみ方えを知っているようにも見える彼は微笑みました。
まだ夜が続く中で、三人は少し灯りを頼りにしてその教会に居続けます。

第２４８話　√２－５３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

更新というには短すぎた……スンマセン

第２４８話　√２－５３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

練習開始をしてから数日が経った。鍛錬に明け暮れる毎日と共に、二日にはテスト二週間前宣言を既にされていたこともあって鍛錬が終わり次第勉強という展開にもなった。

テストで赤点を取る訳にもいかないので、固唾を飲んで鍛錬を遅くにやることでいつものメンバーとのテスト勉強時間を確保。

一日一本桐から渡される謎ドリンクで今までやって来れているが……飲んだ直後に急激に力が沸いてくる辺り副作用とかデカそうだな、と若干そんな想像に顔を青くするが――うん、生きてるから大丈夫。

既に生死で自分が無事であることを確認するようになったのは鍛錬による何度もの三途の川往復旅行の為で……そう思うとどこか悲しくなると同時に寂しさも感じる。

その寂しさというのも、もとの日常には取り繕う事はできても戻ることはできない――狙われるようになったあの日からは、と理解した頃ぐらいからだ。

それでも鍛錬が自分を痛みつけるだけの無駄な結果にはなっていないと自負する。少なくとも鍛錬前と後では覚悟も痛覚も技術も運動能力も向上した。

最近は桐創造による仮想雨澄への対抗は勿論のこと、最終的には仮想雨澄を倒せるところまで向上した。

一週間経たずしてここまで出来るのだから自分を褒めたいところだが、その能力向上も主人公によるご都合設定が占めていると思われるので言う程は誇れない。

そうしてテストが数日前に迫った、その日。

桐は術が解けたことを俺に知らせる――今日からはもう油断どころか心臓を銃弾戦繰り広げる戦地で露出させるぐらいの危険に満ちた日々が始まる。

タイムリミット、それが過ぎていつ殺されるかも分からない。恐怖こそあれど、それを上回る決意がある。

「俺は――守る」

俺自身もホニさんも、友人たちとの続く日常も。

五月十四日

『やっと見つけた――』

「こりゃお早いこって」

一日の始まりに桐とホニさんと家を出て学校近くの公園に着こうとしたその時に彼女は現れる――

そうして火蓋は切って落とされた。

第２４９話　√２－５４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

彼女との遭遇は一週間前のこと、彼女の言う”コトナリ”というものに俺とホニさんが該当したということからの一方的な攻撃。
それは理不尽で、その時俺はあまりにも無力だった。桐のあらかじめの助力が無ければそこで命を絶やしていただろう。

「……」
『大人しく消されて――』

＊　＊

逃げ続ける――というのに、わざわざに家の外に出て待ち構えることになったかと言えば。
桐曰く「わしらの家は最後の砦じゃからな。それに生憎休日だからとミナもおる。いくらわしが結界をを行うとしても、それまでに準備にミナに感付かれるのは厄介じゃ」
俺とホニさんはただでさえ桐を巻きこんでいるのだ。これ以上は家族も友人も巻き込もうとは思わないのは当たり前のことで、それに桐には力があるが姉貴がいくら運動神経抜群成績優秀でも――おそらくはこの非日常での抗う術にはなるように思えない。

それにアイツらの一人こと雨澄和は桐の学校侵入時に調べた際には「和はそれほどの力は無いと見える」と後々言っていた。
張れる結界の大きさ大きくては町一つ分、移動式でなく結界地点固定式（つまりは一度張った結界は動かすことが出来ず、空間に干渉する結界の場所は一切変動しない）

アウトドアでの寝床で例えるとしたらテントの杭を強く打ちつけて簡単には抜けないのと準備に時間のかかる結界地点固定式は同じ。移動式はキャンピングカーというところだろう、牽く車さえあれば移動は自由だが車分の燃料が発生する――下手な例で申し訳ないがそんなところだと解釈しておく。

そして雨澄にはそれほどの力が無いことを読みとれたことから、前回を同じ結界だと桐は予測――いやそうほぼ確信を持って言った。

雨澄の結界は場所が固定され、範囲も限定される――そう、だからその範囲から抜け出してしまえばいいのだ。

ということから家を出る結論に至った。

しかしあくまで俺は逃げる為――桐が俺をサポートしながら、俺は戦い逃げ続ける。

その勝敗は俺が逃げ切り、決界の外へと抜け出せたかによって決まる。一週間分に溜めた決界ならば前述の通り藍浜町ほどの規模。捕まったら全てが終わる……俺にとっては生死を賭けた鬼ごっこという訳だ。

「ユウジ、準備はいいな？」

「……ああ」

右手に持つ白い絹布へと包まれた鉈が姿を現す――フザケた名前だとは思うが、こいつはナタリーで一週間の間は俺の身を守り練習相手に振りかざした武器だ。

手の肉刺（まめ）が何度も潰れて、その度に桐が治癒してきた。少し血で薄汚れた柄も今では手に馴染んでいる。

その磨き抜かれた刃は今も変わらず美しい金属光沢を持ち、とても自分の血糊が度々吹きついたものとは思えない。

そう、これから始まる戦いを共にする――文字通りの相棒になっ

ていた。

「ホニさん、いいか？」

「うん」

その時のホニさんはいつもの笑顔を忘れて、真剣でこれから始まる戦いに少しの恐怖を感じているようだった。

「大丈夫だ、ホニさん。俺たちは絶対に生き残るぞ？」

「……わかってるよ、でも我はやっぱり――」

「言ったであろう、ホニは力を無暗に使ってはならぬ。本当に危ない時だけと約束したじゃろうに」

「でも……それじゃ我は守られてるだけのお荷物」

「俺はいくら本人が言った言葉だとしてもお荷物だなんて許さねーぞ？」

「……ユウジさん、我は神様なんだよ？　ユウジさんは人なんだよ？」

「ああ、でもな。俺はホニさんを神様とも思ったいるがそれ以上に――俺の大切な家族だ」

「っ！　で、でも！　本当に桐やユウジさんが危険になったら――」

「そんな情けないことにならないよう努力するが、桐の言う事も聞いてやってな」

「……分かったよ、ユウジさん。桐」

「うむ、それでは出かけるとするかの――」

＊　＊

世界がまた変わって行く――冷たく不気味なその世界はやはり全

ての者や物を拒絶する空気感を漂わせる。

『――あなたをこの虚界（キョカイ）に入れた覚えはない』

彼女は制服姿に弓を構える前に左手へと持ちながら、俺でもホニさんでもない二人の後ろにいる一人の幼女を目指し言った。

「ふむ、わしのことを指すか。入れられた覚えはないが、入った覚えはあるのう」

『――あなたが協力者ということ？』

「そうじゃな、しかし協力してるのもわしの利益の為じゃな」

『――――』

「なにしろ成功すればユウジからは接吻を貰えるからの」

「おい、こんな時に記憶と事実偽造してんじゃねえ」

「ユウジさん……それ本当？」

「いや、違うから。桐のそこら辺の業界人も大絶賛のほど大妄言だから」

「いいじゃろうに！　減るものでもなかろう」

「減るよ、精神的にじわじわとな！」

というかなんというここに来てこの緊張感の無さはなんなのだろう。

そんな様子を冷たい瞳とは違った不思議なものでも見るような視線で彼女は見つめているものだから、結構にお人よしな気もしてくる。

『――接続者（コネクター）なぜあなたはこの異（コトナリ）と共にする？』

そう思うと彼女は未だ弓を構えることもせず質問を投げかけてきてすこし唖然とする。

「理由は単純明快だ」

本当に二つだけのこと。

「ホニさんは可愛い」

『――――――？』

これまた「何をコイツは言っているのだろう」と言わんばかりに首を傾げる彼女。

「そして、ホニさんは俺たちの家族だからなっ！」

『――家族？　わからない。容姿も何もかもが異なっているというのに』

「一緒に笑いあって、同じ家で生活を共にして、家事を手伝ってゲームで遊んだり――それだけで俺はもう家族でいいんじゃないかと思う、いや家族でいい」

『――理解できない』

「分からないと思うのも無理はないだろな、それは個人それぞれだからな。少なくとも俺は一緒にいるだけで楽しい人なら子なら――俺は誰だとしても他人の振りなんてせずに守ろうする、それが今の俺だ」

『――それが異なる、調和を崩す因子には変わりない。だから私はあなた達を消さざるを得ない、異の本人も接続者も協力者も、全て全て』

「ああ、分かりあおうだなんて今は思っちゃいない。だから今から俺は抗い続ける、お前にも他の奴らにもな」

『――――消えて貰う』

そうして一本の矢が、戦いの始まりを告げるように解き放たれた。

第２５０話　√２－５５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

描写出来てるといいなあ　追記：友人にこれだけ見せたらクドいと言われました。あるぇー？（・３・）

第２５０話　√２－５５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

矢が放たれると同時に鉈を後ろに大きく振りかぶってホームランよろしくにふっ飛ばす。

『――！？』

少し呆気にとられている間に俺は心で「桐っ」と叫んだ。すると答えすぐに返答とは違った形で返って来る。

『重量制御。人物指定男一人、綿毛のような軽さへと――書換（チェンジ）』

「よしきたぁ！」

体をばねのように屈ませて、ばねが元の形に戻る弾性力でぐいと上へと引き寄せられ、遥か空へと目指して一気に飛びあがる。

髪の毛も着ている制服も突然の風圧に大きく揺れ、露出している顔や手に風が叩きつける……そうして突如上から現れ、圧倒的な力差をも感じさせる高さへと俺は舞い上がる。

そこには表情の少ない敵――雨澄和が少しの表情の変化、俺の行動への驚きを示していたことが素人目でも明らかだった。

『重量制御を指定した人物への一任。制限時間二六分三秒』

「おうよっ！」

かつては桐に任せきりだった空を舞う手段も、桐の力を一時的にこちらから操作することで俺の行動範囲を広げられるようになった。

これも鍛錬を重ねるうちに身に付けることができた事で、桐の意思からこの力は切り離されても制限時間付きの条件で同様の力を得る。

桐が最初にそうしなかったのも、この不慣れな行動の制御を完全に一任することは難しかったが為――ただし、今は違う。

「ぐおりゃあああああああああ」

吠えるように空中で次々と射られる矢をくるくると空を舞う羽のように鉈の柄を軸に回して矢を弾いて行く。

俺に届くことなく、木と鋼で形作られた鉈はばきばきと矢をへし折りながらいとも簡単に吹き飛ばす――これも俺は今まで練習してきたことの一つだ。

『――くっ』

焦りを感じさせるかのかのように矢を射るスピードが格段に増してきた。

それを一瞬で見切りつつ払い落し、ぐんぐん雨澄との間を詰めてゆく――順調だ、これならいける。

……とは残念ながら思ってない、あれほど練習で痛い思いをしたというのに、このわずかな優越感に身をゆだねるのはだた身を殺めるのを早めることにしかならないからだ。

あくまで俺が順調そうに見え雨澄と間合いが狭まって行くのは表向き……そう、真の目的は今は遠く離れた地上にある。

「（――桐、大丈夫だな？）」

『（うむ、流れ弾は少なからずあるが上出来じゃ。わしの能力の一つ”安全領域”で全て弾き飛ばしておる）』

「（雨澄は任せろ）」

『（わかっておるぞ、だからわしは――）』

僅かに見た地上では度々何か薄い膜のようなもので包みながら桐

がホニさんの手を引いて走っている光景。
そう、逃げ切れば勝ちなのだ。つまりは俺は囮、逃げる時間を稼ぐのとホニさん達に関心を向かせないのが俺の仕事だ。

「どりゃあああああああああ」

攻撃はひどくワンパターン、彼女にはこの空間を維持するのと別には弓に無限に補填される矢を放つことしか出来ない。
その射られる矢も普通の競技で使われるものとは比べ物にならない強度から来る威力と速度を誇り、桐のチートと同じように無くなることのない矢。
それはあまりにも強い、ここまで一点に力を注いで居れば強くなることも十二分に納得が出来る。
しかし俺もこの一点を信じて、桐の読みとったことを信じて俺は対策をしてきた。桐の作りだすあまりにも上手な幻影、矢を放つ確かに質感を持った幻に俺は何度も射ぬかれていた。
だから俺も一点に力を注いで、それをどう回避するのか。どう対抗するかを――思考し、様々な矢の速度や威力を検証した。
リズムを取るように「ここではぐるり回し」「ここでは弾かず払い落す」分かってきた、そしてテスト単語を真似し暗記する要領で俺は対抗手段を確立させていた

『――っ、っ！』
「お前に意味も無く殺されるなんてごめんだからなっ！」

真正面から腹目がけてやってくる鋭く確実に急所を射とめる矢を少し上へと振り上げ落とし方向を下へと変える。

「（桐、一応注意な）」
『（承知した）』

桐も桐で全力で走っている。ホニさんも一緒に手を繋ぎ走っている――桐曰く『今商店街を抜けたぞ』という位置情報を聞き、ここからはかなりの場所が離れていることを悟る。

いつまで俺の挑発ろ攻撃が分かるだろうかと思っていた頃……そう、限界が訪れた。

『――接続者も調和を乱す危険な存在ですが、異本体（コトナリ）を消すのが先決』

「ほう、だから？」

『――いい加減にしてもらう』

「っ！」

その時状況が変わる。雨澄の持った弓一式と同じものが何もない空中へと現れ、一つ二つ……圧倒間にそれは二ケタの数を超え見上げた先にもそれはあり、そこにはそれぞれ矢が装填されていく。

「（おいおい、これは聞いてないぞ）」

『（どうした……複数で撃つと来たか、少しの維持する力を削ってのことじゃろうな）』

「（くっ……まあ、なんとか生き残るからそっちは頼むぞっ）」

『（お主――）』

それで思考を止め、桐との会話を遮断する。

目の前に広がるのは大量の弓と矢のセット、それが今か今かと射られることを心待ちにしている。

『これで――消えてもらいます”過剰連射”』

ビュビュンと風を切る音が重なって俺の方向へと一つの餌に食い

つく烏のごとく向かいやってくる、その数――数十もの。
絶望しか浮かばぬその予想外で一方的な展開だった。だが俺は一滴たりとも諦めるつもりはない――まだ俺は脚を止めさせることが出来る。

「うおりゃあああああああああああああああああああああ」

叫びに身を任せて鉈をバトン選手も見習いたいほどの高速回転で弾き飛ばしていく――しかし今までのようには行くはずもなく、普通に矢一本でも外傷的には致命的な怪我を負うこと請け合いだ。
そんな矢が足は脹脛（ふくらはぎ）から太股（ふともも）までを肉まで裂くところは裂き、腕は鉈を回す右腕とは反対の左腕の手やら上腕に一本二本は刺さり、体全体ならば脇をもかすめ制服を切り裂く、顔の寸前も頭頂部も平等に矢は皮を切って飛んでいく――その度に慣れているはずなのに、慣れることはない痛みが全身を駆け巡る。
いてえ、ああいてえ。もう死ぬほどいてえ、どんだけ血が流れてんだろうなあ。またこの痛みか、慣れるわけねえよ。
文句を内心で呟き、心が折れそうにもなるが――俺には決意がある。叫ぶだけで比喩表現でなく全身から血が噴き出す重傷の中で俺はありったけの決意をこめて声を張り上げる。

「俺は何も諦めねえええええええええええええええ」

奇跡的にかすり傷程度で済んでいる右腕に大きく力を籠めて、矢を一気に解き放った反動が来て少しの間矢をうつこともままらない程に疲弊する雨澄を狙って俺は振りかざす。

『――かっ……！？』

その時、俺は彼女の制服ごと彼女の顔から下の胸辺りから腰辺り

まで切り付けた――

番外18話　BOTSU　5－12からの～、EX6－1（前書き）

疲れでオチそうだったのでストック更新。
BOTSU　5－12で倒れたユウジの本来ならばナンバリング「6」に入る話。

しかし残念なことにホニさんの看病イベントはこれで予定から消えました……まあ、時間もないからねえ。

番外18話　BOTSU　5－12からの～、EX6－1

「ん……」

俺は何かの眩しさに目を覚まされてしまった。ゆっくりと意識が覚醒し、目に入る眩しい光と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、起きた！　ユウジさん！」

そこには、不安顔で覗きこむホニさんの姿があった。

「ホニさん……？」

疑問系で聞いてみる。

「うん！　我はホニだよ！　よかったぁ……起きてくれて」

よーく目元を見ると赤く腫れぼったくなっている。　それに涙声っぽくも感じる。ホニさんはもしかして泣いていたのだろうか？

「心配したんだよ？　ユウジさん熱で寝込んだってミナさんから聞いて……熱があって苦しそうで、もしかして――」

俺なんかを心配してくれらるなんて……感動するなあ、と思っていたところ。

「急性肝炎だと思ったんだよ！』」

「何故そのセレクト!?　いやホニさん、多分ただの風邪だからさ!」
「ならよかったぁ……治療の最後の手段としてユウジさんの写った写真と藁人形を用意して五寸釘でともども刺さなきゃいけなかったから、これで安心」
「ええとホニさん、それが天然なら仕方ないですが、意図的なら俺にトドメ指す気なんですか!　肝炎の発症による体内からと、呪術で体外からの挟み撃ちで責められるんですよ!?」

「え、違うの？」

「はい」
「これは、マイハマ高校生徒会の……黒髪の……書記って人から聞いたんだけどなぁ」
「チサさんかっ！　なんて恐ろしいことを話してるんだ!」
「他にもまだ青々とした梅の実も病気に聞くってマイハマこ――」
「青酸だからぁぁぁぁ、それぇっ!」
「……うーん、我の知識はところどころ間違ってるみたい」
「ほぼ全域で間違ってますね!」
「それよりも風邪に効くっていうから買ってきたんだよー、えーと」
「え、なに？」

温まる生姜湯とか喉越しのよいゼリー系辺りかな？　そうだとしたら嬉しいなあ、少し喉が痛いし――

「ドクター○ッパー」

「なんの嫌がらせだぁぁぁぁぁぁっ！」
「他にも……リアル○ールドにウコ○の力」
「なんでそんな栄養系ドリンクが多いんだろう……」
「あとこれ面白そうだったから……アズ○ペプシ」
「ギャグとしては至高だけど、病人からすればその組み合わせだけで吐き気を催すね！」
「桐さんやユイさんがお勧めしてくれたから間違いない！」
「見事なまでに大間違えだよっ！」

ええと出来れば買う前に気付いてほしかったです。ドクペは正直最近美味しいかなと思い始めているけども、この体調の悪い時に飲むべきものではないな。

「……ゴメンね、ユウジさん。我は聞いたことをそのまま信じちゃうから……」
「え、いや……リア○ゴールドもウ○ンの力も飲めば元気になるはず、大丈夫だ、きっと。心配してくれて買ってくれたんだから、素直に嬉しいよ。ホニさんありがとう」

ごめん、でも流石アズキペ○シを擁護することは出来ないや。

「ユウジさんっ！　……でも我もしっかり適切なものを見極められるよう努力するから」
「じ、じゃあ頂こうかな……」

まずはリアルゴー○ドを……美味しいには違いないけど、口に甘さが残るなぁ。

「……本当ゴメンね」

「いや！　なんか元気になってきた！　うん！」

流石さりげなく高麗人参を配合してる、炭酸飲料の皮を被った栄養系ドリンクだな。

「でわ、ウコン○力を……」

あれ、以外と飲みやすい……炭酸の抜けたオ○ナミンCみたいな感じだな。でもこれ何に効くんだろ。

ちなみにウコ○の力では有りませんが、ウコンそのものには風邪予防効果があるそうです。意外と的を得ていたのかもしれませんねー……一応ナレーションです。

「美味しかった」

「そ、そう？　じゃあア○キペプシを飲んでみる」

「ちょっ！　それは」

※しばらくお待ちください。

「……独特だった」

「ですよね……」

ホニさんの言うには、可もなく不可もないけど飲むのは一回でい

いそうで。

「それでもしかしてホニさんがずっと看病を？」
「ううん、三時間前ぐらいまでは桐さんとユウジさんのお姉さんが」
「三時間前というと？」

そういえば、今何時なんだ？　大分部屋の外は明るいみたいだけど。

「十時ぐらいかな」
「ええと……それは朝ということでいいのかな」
「うん、もう少しで昼だよ」

そうか、昼か……え？　ちょっとまてよ、ということは――

「俺は昼近くまで寝てた……のか？」
「うん、全然起きなかった」

……ああ皆勤賞が……ってそんなことどうでもいい！　ユキを待たせちゃったのか？　もしかして。

「ああ……」
「どうしたの？　ユウジさん？」
「いや……なんでもない」

ユイが伝えてくれるといいんだけどな……

「そういえば姉貴は何か言ってた？」

多分学校に行ったのだろうけど。

「ユウジさんのお姉さん？　特には……実際に聞いてみた方がいいかも」

「え」

その直後、示し合わせを付けたのごとく。

「ホニさん、ユウくんどう……ってユウくん！」

姉貴が濡れタオルを御盆に載せて、俺の部屋の扉を開いた。

「姉貴！　なんで家に居るんだよ！？」

今日、学校あるよな？　祝日とかじゃなかったはずだ！

「病気のユウくん放って学校なんて行けないでしょっ！」

いや、行ってくださいよ。

「元気になってくれてよかった！　ユウくんが寝付いた頃は、本当に熱があって心配だったんだよ！？」

「そ、そうだったのか？」

「うん、ユウジさんすごい熱があったんだよ」

「そうか……二人とも迷惑かけたな」

「だーかーら、お互い様だからね？　ユウくん」

「我は、何も出来なかった……我の無力さを今、思い知ったの、神様なのにぃ」

「わかってるよ姉貴、それでも感謝の気持ちをこめて言いたかったんだ。　ホニさん、そこまで深刻に考えなくていいからさ」

「わかった、ユウくんのその感謝の気持ち受け取ったよ」
「ユウジさんのお役に立てるよう頑張ります、一人のメイドとして！」
「メイド！？」
メイドって言うと、あのメイドか！？　一体誰がそんなこと……見当が付いたじゃねえかっ！　アイツか！　またしてもアイツか！
「え、この家で過ごすにはメイドをしなければいけないとユイが」
ほれみろやっぱりな。
「どこまでアイツは誤った知識を植え付ければ気が済むんだっ！」
純粋無垢なホニさんになんてことを！
「これも違うんだ……ゴメンね、我は本当にどうしようもなくて」
……プツッ。俺の中で何かがキレたよ。
「……ユイタオス、ハリタオス、タタク、ゼッタイタオス」
「ユウくんが壊れた！？」
「ちょっとユウジさん！」
短気で悪かったな！　しかしアイツは本当に何を言ってんだか……俺のいない学校で好き放題、自由奔放、傍若無人（？）にやってるのだろうか。

一方学校では、です。

「……暇だ」

表情を眼鏡に隠したユイは喋り相手がいない不満を垂らしながら、机に突っ伏していた。

「いや、俺いるんだけど……」

相変わらずマサヒロの存在は薄い。

「ユウジ……大丈夫かな」

いつもとは違って少しばかり不安そうな顔で、呟くユキ。

「ユウジ様が、大病に侵されてるなんて！　授業が終わる前に行きたいところですが……」

姫城に関してはオーバーな解釈が付け加えられていた。というか……姫城が知ったってことは、これってさりげない嵐の予感？

第２５１話　√２－５６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

あとで修正します

第２５１話　√２－５６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

視点を変えて、地上を走る抜ける二人の女の子。
一人はセーラー服と長い長い黒髪と中学生程の身長を持ち、一人は小さく二つにまとめたツインテールの茶髪と少し長めの水色のプリーツスカートと大き目の桃色に何かのキャラクターがプリントされたＴシャツを着た背丈を見る限りならば幼女。
その二人は幼女が妹で、お姉ちゃんである長髪の子の手を引くような構図。聞くだけならば微笑ましい姉妹の光景かもしれない――ただし、その状況下の違いでこうも一転するとは思いもしない。

「ホニっ」
「う、うんっ！」

世界の色が変わっていく光景を目の当たりにして、突然に下之ユウジは飛びあがる――体操選手のようにトランポリンを使うわけでもなく高く、高く。

「ユ、ユウジさんっ！？」
「今はともかく逃げるぞ！」
「え、え！？」

空を僅かに見上げると、そこには日常とかけ離れた光景が繰り広げられている。
空を飛ぶ手には鉈がある男子生徒と、同じく空を飛び弓矢を持つ女子生徒。
それから始まる、明らかな戦い。矢と鉈、一つの飛び道具と一つの鈍器が交錯する――

「桐！　桐っ！　どういうことっ！？　なんでユウジさんは――」
「……今は逃げることだけに集中するのじゃ」
「桐ッ、こんなの聞いてないよっ！」

＊　＊

その戦いを避けられないことを知っていた。
誰かが戦うざるを得ない――想像が出来たはずなのに、なぜ我は考えることをしなかった？
怖かった。我自身が傷つくことが怖いことは確かで、桐もユウジさんも傷つくことが恐ろしかった。
じゃあ、誰が戦うのか。そしてユウジさんはなんと言ってくれた？　我が神様の力を見せてしまった時に。

『ああ、ああ！　……俺は強くなるよ、ホニさん』

強くなる。その言葉を聞いて、最近のユウジさんの様子を見て我は少なからず分かっていたのかもしれない……いやわかっていた。
近頃のユウジさんにどこか疲れの表情が滲んでいて、怪我もしていた。走って転んだだけで、全身にこの時代で使われるバンソウコウという傷を処置する札のようなものを貼る必要なんてないとわかっていた。
……ユウジさんが嘘をついている。我は感じ取っていた――でも聞くのが怖かった、それにユウジさんをきっと困らせてしまうと思ったから。

だから我は、何も言う事をしなかった。本当に臆病で卑怯だと我を思う、どうして桐の話を聞いている時も黙ることしかできなかっ

たのか。
神様だから、力を使えるのに――なぜ我はそれを使うと言わなかったのか。
それを使ってしまうことで、僅かに残った希望と日常が崩れてしまう――だから我はユウジさんを気遣うことも微塵にしかせずに、日常を過ごして来た。

「（なんで……？）」

我は山を降りて世界を見て見たかった。ユウジさん達と出会えて一緒に過ごしたかった。
ただそれだけのことだったのに……我のせいでユウジさんも桐も巻き込まれて、異と言われ狙われるようになった。
理不尽で、許せない。どうしてなのだろう、どうして我なのだろう。どうして――

そして空を見上げると、宙には鉈を持って戦いに挑むユウジさんの姿。

我がどれだけ自己中心的だったかを思い知らされる。なぜユウジさんが戦わなければいけないの――それは我が居るから。
そんな我は桐に手を引かれて逃げるだけ……なんて我は酷いのだろう。
ユウジさんが戦わざるを得ない状況になっている――それは例え理不尽でも我がここに居るから、出会ってしまったから。

「我は……何も出来ないの？」

独り言だった、手に感じる桐の温かさもどこかに消え去ってしまう程に我の中ではぐるぐると後悔が渦巻く。

こんなことになるのなら――

「こんなことになるのなら、なんと思おうとしたのじゃ？」

「っ！」

心を見透かされたように桐がそう言った。

「ホニに今出来ることは、ここに存在することじゃ」

「でも我は！　我のせいでっ」

「お主には分からないのか？　どれだけお主がユウジに愛されているのか、どれだけ想われているのか」

「想われて……？」

我を家族と最初に言って、あの狭く閉ざされた世界から連れ出してくれた恩人であり一緒に居ると幸せを感じる――ユウジさん。

そんなユウジさんは我を愛してくれていた？　想ってくれていた？

「羨ましいぐらいじゃ、まったく」

そんな風に普通に受け答えする中で宙からは矢が降り注ぎ、近づいた度に二人を守るように薄く透けた膜が現れて弾かれる。

「でも我は何もしないで、今でも桐に手を引かれることしかできないんだよ？」

「ああ、そうじゃな、でも少なくともユウジにとってはお主が心の支えになっておる」

「心の支えだなんて……我は何もしないのに」

「何もしないから、良いのじゃ」

「え」

我が何もしないことが良い……？

「我はこれでも神様で！　力だって、自然は見方をしてくれるのに――」

「お主が力を使うことはするな」

「っ！　なんでよっ」

二人走る中で我は桐にそう言われる。一種の否定でもあり、それに我は逆上してしまう。そんな我の言葉に桐はこう返して来る。

「……使うことでわしがユウジが哀しむ結果になるとしてもか？」

あまりに予想外だった、そして”なんで？”という疑問が大きく膨れ上がって行く。

「我のせいで哀しむ？」

「今はわしの口からも言えんし、ユウジは知ってはいない。ただこれだけは言わせてもらう――力を使うのは止めるのじゃ」

神様なのに、力があるのに何もできない。桐の言う事で、散々冗談を言われたけれど今回ばかりは冗談ではなくその言葉には重さがあった。

「それじゃ我は……本当に無力だよ」

「それでいい、納得が出来ないのもわかる。自然を操り、人一人なんて直ぐにこらしめることが出来るのは勿論、それ以上にお主がどれだけ膨大な力を持ち操ることが出来るのかは分かっておる」

確かに我は恵みを、司る神で。ユウジさんには自然を操ることが出来ると言った――でも桐にはそれも言っていないはずで。

「なんで桐はそれを？」
「わしには何もかもお見通しじゃ」
それを踏まえて我に力を使うな、と言うのなら……我は諦めることしかできない。
「ともかく今は逃げるぞ――」
走っていた、ずっとずっと。かつて初めて訪れ短い時の買い物を楽しんだ商店街を抜けて行く――
あの時から何もかも変わってしまった。ユウジさんが誰かと会ったことで、そこから我を連れて走って……それから。
「ユウジさんは大丈夫……なの？」
「お主がチラリでもその戦いを見れたのならば、アレ以上のことをわしは教えてきた」
「それって！」
やっぱりユウジさんは戦う為に、危ないことをしてきた……ということなのだろう。
でも、我はそれなら知っておきたかった。隠れて、ユウジさんはこの戦いに備えていた……我の前ではそんな素振りは一切見せなかったのに。
「なんで我には言ってくれなかったの？」
「少なからずはバレると思ったがの、それでもお主が気張ってしまってはユウジが辛くなってしまう。あやつは人に気負わせることを嫌っておるからな」
「そ、そんな……」

ユウジさんは本当に気遣ってくれた……ユウジさんは優しすぎるよ、なんでそこまでしてくれるの？

家族と言ってくれて、一緒にいてくれて、こうして今は戦ってくれている。なぜなのだろう――

「それだけ何度も言うがお主は愛されているからじゃ」

……いいのかな、この気持ち。我は桐のそれを聞いて、ユウジさんは戦いの真っ只中で桐も我を守ってくれているのに――嬉しかった。

ここまで愛情を向けてくれることが今までは無かった、都合の為に頭を下げてくる人らに我は恵みを与えただけ――

今は違う。ユウジさんも桐も違った。我の今の容姿だからかもしれない、それでも……愛を絆を繋がりを感じることは今までに無かった。

それなら……ユウジさん、我は信じていいんだよね？

我はここにいても、いいんだよね？

ユウジさんに頼っても……いいんだよね？

「わしにはとっくに頼っているくせして、今更何を言う」

「だ、だって！」

「しかしそれを嫌とも否とも言わん。少なくとも下之家に来た時点で、一緒に居る時点で”家族”なのじゃからな」

本当に皆、我に優しくしてくれる。こんな時に幸せを感じる我は……なんと悪い子なのだろう。

でも、少しだけ許してほしい……わがままだけれど、ほんの少しだけ。

「ユウジさん……どうか無事で」

呟いても桐は何も答えなかった……きっと大丈夫なのだろう。

力を使うことを出来ない、無力の我は――今は願う。ユウジさんが無事にまた顔をみせてくれますように、また日常に戻れますように。

ひどく楽観的で、あまりにも自己中心的だけれど――我はそう願った。

第２５２話　√２－５７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

なんか予定からどんどんスレてるような
毎日更新してると修正出来る暇もないね……でもそうでもしないと
終わる気配がしない

第252話　√2－57　G・O・D・

正当防衛。殺されかけたから、俺は殺そうとした。実際に俺は今日だけで何十本もの矢を向けられ、数本は掠り、数本は突き刺さった。

慣れていなければ下手しなくてもショック死するであろう……そんな痛みをこらえて俺は鉈を振りかざした。

誰かを守るためには、誰であろうと傷つけなければならない――それは思えば思うほど理不尽だ。

「くぅっ……」

左腕は痛みで動かすことも苦痛で、脇腹もとにかく痛む。

無傷と言える箇所は丁度目と鼻の先で鉈を振りまわして盾となっていた左腕の肩から手まで――指などは度重なる鉈の回転に柄がいくら木製でも痛々しく腫れあがる様をみせていた。

俺は桐のおかげで戦えて、飛べるだけ……ホニさんともチートの使える桐とも違うベースは一般人なのだ。

そして今の今まで使っていた戦い方も所詮は付け焼刃の一週間の内に身に付けた浅く弱いもの。

桐が分析し、桐の言う事を信じ、一点だけを信じることで戦って来れたのだ。

だから今振りかざせたのも、全て俺の手柄でも力でも何でもなく――桐とホニさんを守るという決意から来るものだった。

『かはっ――』

目の前には同じ高校に通い、少し前まではすれ違うだけの同じ藍

浜高校の生徒同士にしか過ぎなかった女子生徒である雨澄和。
それが今では血で血を洗うようなお互い……いや少なくとも俺は死の淵に立ちながらの闘いを繰り広げていた。
そんな彼女に一閃。俺は鉈を振りかざすことで彼女の体、胸辺りから腰辺りまでを切り裂き――鮮血が溢れる。
その白地の制定品である女子制服が血の色である黒く濁った赤色に染まって行く。その光景はあまりにも残酷であまりにも惨いものだった。
自分も似たような風体を晒しているとは言われればそれまでだが、やはり間近で。それも自分の手で行ったそれを見るのは衝撃が大きかった。

「俺は……」

そんな日常へと、非日常へと足を踏み入れてしまったのだと。改めて――いや、少しの希望も吹き飛んで理解する。

『がっ……くぅっ』
「っ！？」

空を飛ぶように空中に静止する俺と雨澄。かつては走るように自由に動き飛び交った空から雨澄は未だに止まることのない血を抑えて射ることのなかった弓と矢を落としてから両手で腹部を抱えながら――鳥が授かった羽を突然に失くし浮力を失くして真っ逆さまに落ちるように。
目の前から雨澄が一瞬にして消え、おそらくは鼻をつくであろう血の臭いを残しながら地上へと落ちて行く。

「まっ――」

俺は罪悪感か、善人気取りでもしたいのか。その落ちる雨澄を追っていた……痛みに目を瞑り、追いかける度に付着する雨澄の流れ続ける血を自分の血で塗れた顔や体にぶつかりながらも、俺は彼女の落ちる体を追う。

「間に合えっ……」

三階から二階ほどの屋根を伝ってもいた為に、もうすぐそこには地面が迫る。

俺はズキリと痛み動かすことを拒む足を動かして、その虚空に見えない踏み台をつくるかのように勢いをつけて下へ、下へと飛ぶ。

世界は元へと戻って行くその途上にもなり、不気味な色彩は自然な色合いの背景へと返って行く――

『――――』

「っ！」

寸前で廻り込むかのように固い固いアスファルトにしっかりと足を付けて、その鳥の羽のように軽い雨澄を受け止める。

その頃には完全にかつての雨澄の作りだした世界は消滅していた。

『――――何がしたい』

かつての日常に戻ったその世界で、こんなところを見られたら大惨事間違いなしなので人通りの少ない通りの、更に路地を奥へと入り誰も寄り付かない雑草生い茂る廃工場まで抱き抱えて連れてきた。

痛みにやっと思いに口を開く腕の中の雨澄はそんな疑問を漏らす。

しかし俺は。

「知らん」

『――？』

その通りで、嘘もなにも付いていなかった。でもあるとすれば、そうだな。

「後味が悪過ぎる」

『後――味？』

「俺はお前の言い分を認めた訳でもないし、抗うつもりだが。何も聞けないまま消えて貰っても困る」

『何を――聞く』

「なんでお前はこんなことしてんだ？」

『私が――こんなこと？』

「……悪い、とりあえずは喋らせると傷に響くな」

『――なぜ考慮する』

「さあな、その理由をどうしてもあげるってなら――同学年？」

『？？？』

「これでいいか……コイツを適当に塗っておきゃ治るか」

桐から貰った謎ドリンクとは別に謎塗り薬も持っていたので、溢れる傷口をワイシャツを千切って悔し紛れの止血をした上で薬を塗っておく。

すると途端に血は引き始め――まったく、なんてチートな薬だ。

『消そうとして相手に――手当』

「まあ、俺は認めてねえけどな」

鉈を持って交戦する気があったのには違いないが、傷つけるつもりは少ししかなかった。

それもここまで入るとは……それでか鈍器である鉈の恐ろしさを再確認する。

『（お、お主！　今何が起ったのじゃ！　意図してテレパシーを切るなんぞ、教えてもおらぬのにそんなこと――）』
「（ああ、すまんすまん）」
『（お主と話せているということと”虚界”が消えた――もしやお主っ）』
「（一応倒したことに……なるのか？）」
『（なんで曖昧――お主今、怪我しておるな！　伝わる情報にノイズが入るから間違いないな）』
「（そんな判断基準だ……）」
『（薬を使わんか……って、今だれにそれを使っておる！　まさかっ、和にか！？）』
「（まあ）」
『（……お主はとんでもないお人よしじゃな、待っておれ。今ワープするぞ――場所は理解した）』
「（えっ、来んの！？）」

そうテレパシー会話をしながら桐を話していると突然に受話器を下ろされたかのごとくブチリと切れた、ちなみに手は雨澄の体に薬を塗ったくっている。

『――私は今あなたを消すかもしれない』
「お前らは現実では活動しないんだろ？」
『な、なぜそれを――！？』
「それにお前、いや雨澄はもう結界張る力も残ってないだろ？」
『私の名を――！　結界を――！　知っている！？』
「俺の家族にはちょっとしたチートな妹がいるんだ……って、ぐっ」

話していることで紛れていた痛みが戻って来る。
おー、痛え。この薬雨澄の後だけど使っていいよな？　あ、いい

か。

「くぅっ～～～～～かっ～～～～～～～～」

唸るよ、俺は。正直すこぶる痛さだもんなあ……死ぬわ、これ。

桐チートなかったら死ぬわ。

「ここにおったか……！？」

「ユウジさん……っ！」

「おお、二人とも来た……ってはええな、おい」

「ユウジ！　今治療するからの！」

「ユウジさん！　ユウジさん！」

「大丈夫だってー……いや大丈夫じゃなさそうか、イテエ――」

「ユウジィィィィィィィィィ」

「ユウジさぁぁぁぁぁぁぁぁん」

『――――――――』

あ、イテエと言いかけて意識飛んだ。なんというか俺は肝心な時にダメダメだなあと思いつつも。

傷が少しは癒えたらしい雨澄が何か変な生物でもみるような目で俺を見つめる視線を感じながら俺の意識はフィードアウトしていった。

第２５３話　√２－５８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

緊張の糸が切れた結果がこれだよ！

第253話　√2－58　G・O・D・

「はっ……ああ」

現状を一瞬で理解した。俺は雨澄との戦闘の末に倒れてかつてと同じように喧騒の無い教室の夢をみている。

……決して尺から来る駆け足展開とかではなく、前回以外にも以前にも何度もここへ訪れている気がしするのだ。理由はまったくもって分からないのだけども。

「また、いらっしゃいましたか」

そう、前に見た夢と同じように。深緑色の髪と野放しにされて瞳の隠れるほどに伸びた前髪を持った少なくともこの学校の制服を着た女子生徒。

「ああ、いらっしゃいました……そういえばなんでまた同じ夢なんだか」

人間の記憶整理も兼ねて睡眠中に見るのが夢……のはずなのだが、少なくとも記憶にこんな女子生徒はいない。

「それはー、私が意図的に見せているのですから」

「……じゃああなたは夢の精とかなんかなんですかい」

「んー、じゃあそれでいいと思います」

恐ろしくテキトーだな。というか受け流してくれ、なんでそんな

ファンタジックなこと肯定してしまうんだ、この人は。

「最近どうですか？」

「……ぼちぼち？」

「そうでなくてですね、現実はどうですか？　何か大変なことに巻き込まれたりしているんですか？」

「なぜわかったし」

「あのゲームの登場キャラの一部は仕様が変更されてちょっとした力が宿っていますからねー」

「ちょっとまて、お前はゲームの登場キャラって言ったよな？　じゃあお前は――」

「少しばかりは理解しています。私も一種のチートキャラの一つですからね」

「……チートを連発するとゲームはつまらなくなるぞ」

「クソゲーですから」

……なんとも不思議な会話をしているな、と思う。

そしてこうも気兼ねなく話せるのも相手の瞳こそ見えないが、色々と喋るたびに形を変える唇からは表情が実は豊かそうに見えるし。

更に……どうにもこの人、いやコイツとは面識がある気がするのだ。

「そろそろ目覚めの時間みたいですね」

「そうなのか？」

「はい。それではまた、今度は過ちを繰り返さないことを祈っておきます」

「過ち……？」

さりげに意味深なことを言われた気がする……過ち？

「はーい、おやすみ」
「ちょ、また首筋狙い!?　なんかこれも何度もされている気が――」

＊　＊

「……」

夢が覚めて意識が戻っていくと、周囲からは話し声が聞こえる。
桐とホニさん……そしてこの独特でなんとも間の空く喋り方――

「はっ、ここはっ!?」

そこはかつての草むらとは変わってあまりにも見慣れた場所だった。
至って普通の薄汚れた天井と壁、照明、窓にかかるカーテン、デスクに備え付けられたパソコン。
そうだ、ここは俺の部屋だ。

「ユウジさんっ!」
「起きたか」
「――――目覚め」

ベッドを背中に感じ、聞こえる声の方を向くとある三人が座り込んでいた。
一人はなんとも幼女な容姿に老婆喋りの桐と、長い黒髪を持った可愛い神様なホニさん、そして以外だったのが――

「雨澄！？　どうしてここにっ」

確かに俺はお人よし万歳な自分の持ってる薬を塗ったりと申し訳程度の治療はしたが……まさか訪問してくるとは。

「幼女に連れられた――」

「幼女とはなんじゃ！　これでもわしは幼……ん？」

「ユウジさん、ユウジさん！」

そこには俺が起き上がった直後に瞳に大粒の涙を浮かべるホニさんが――

「あああああ、どしたホニさん」

「どしたじゃないよ！　……あんなにまで傷ついて、本当に心配したんだから」

考えてみればホニさんに初めて怒られた気がした。そう思うとなんとも罪悪感というかなんというのか――

「あー、悪い」

謝った。色々気苦労もかけただろうし、自分が勝手に動いたことでかなり悪い事をした気がする。

「ユウジさんは悪くないよ……我が、我がもっとユウジさんのことを考えるべきだったんだよ」

「いやいやここまで気遣ってくれる時点で考えてくれてるぞ？　ありがとな、ホニさん」

ホニさんは本当に優しいな。桐も間に挟むようにホニさんに向か

って言う。

「そうじゃホニ、それにわしがお主に止めろと言ったのじゃからな」

それを聞いて桐には感謝せざるを得ない。神様の力はきっと凄いのだろうけど、どうにもホニさんに使って貰うのには気が進まなかったからだ。

なぜかはまったくもって分からないが……ちょっとした予感？

「ああ、桐は本当にありがとな。日々の鍛錬が少しは実を結べた気がする」

「うむ、もろに付け焼刃じゃったがな。まあよくやった」

大会で良い成績を残してコーチに褒められる部員の気持ちのような感じだろうか、そう少しでも認められると嬉しい。

そんな一方で疑問がふと過(よぎ)る。なぜに平然と桐とホニさんは分かるとして、治療をしてしまったとはいえ、敵である雨澄が何故ここにいるのか。

「それで桐、お前が雨澄を連れて来たって言うが……なぜに？」

「まあそれはの、何も聞かず逃げられる前にわしは拘束術を使って家まで運んだのじゃ」

……まあ、拘束術とかもなんだかんだで使えそうだよなあ。

「はぁ……ようするに情報収集の為ってことか」

「ぞうじゃな。予測の通り、雨澄は力を使い果たした後で傷は少しは癒えておるが疲弊などで動けないので非常に誘拐は容易じゃった」

「誘拐て……」

言い方が物騒にも犯罪的にもほどがある……ってまあ、あの空間内ならある種治外法権なのだろうけど。

「今も手足の拘束術を解かず、力も抑えつけておるから自決も逃げることも許さないつもりじゃ」

抜け目ないっすねー

「でも舌噛んだらどうすんだ？」

「――その手があった」

「いやいや乗らないでいいから！」

「もしそういうことをやると言うのならば、この”ギャグボール”を付けて貰うぞ」

「どっから持って来たし！」

「――――それは遠慮したい」

ですよねー……ってなんでこういきなりにコメディチックな展開に様変わりするんだか。

「でも場所知られていいのか？　いや駄目だろ」

「――そういえばそうだった」

雨澄は見かけによらず抜けているのだろうか。

「気にせんで良い、ここを出るときは記憶操作をするからの」

「またチート乙」

本当になんでもできるな。どうせ空も自由に飛べれば、世界旅行にも行けるんだろう。

「――何を聞きたい」
「……スリーサイズとかどうかの？」
「エロ親父かっ！　いや……エロババアか！」
「失礼な！　喋りだけで判断するとは言語道断じゃ！　エロは好きじゃがババアではない……お姉さんと呼べ」
「あのー、いいすか。もうスルーしても」
「――構わない」
「我が思うになんかこの人も結構ノッてる気がするよ！？」

……あー、シリアスもバトル展開も台無しだあ。
まあ、いいか。ホニさんも桐も、一応雨澄も無事っぽいし。

「まあ冗談はここまでにして……ごほごほん、あー、マイクてす。ユウジ、どの声でやった方がいい？」
「いや冗談続いてるじゃんか、いい加減に本題に入ってくれ」
「……雨澄ズバリ聞こう、お主は何者じゃ」
「――答える義務がない」
「でもどうせお主の記憶消されるのじゃから、変わらないじゃろう」
「――確かに」
「いや理屈おかしいから、説得されちゃだめだろに」
「――――じゃあ話す

……いいのか、それで。

「私は――神から授かりし力で地上の調和を乱す異（コトナリ）を消す為の存在”ＡＬＬＯＮＴＳＵ”の一人」

第２５４話　√２－５９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

情報量少な過ぎなので後に修正・追加更新しますー

第２５４話　√２－５９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「私は――神から授かりし力で地上の調和を乱す異（コトナリ）を消す為の存在”ＡＬＬＯＮＴＳＵ”の一人」

雨澄は相変わらずの無表情と抑揚の無い声で淡々と言った……ってさりげに凄いこと聞けちゃったんじゃないか？

調和うんちゃらは聞いたけど”アイツら”の総称も”あろんつ”で良くなる訳だし、一番に気になるのは――

「雨澄、今神から授かった力って言ったよな」

「――神から授かりし力」

「いや細かいことは今はどうでもよくてだな……あのな、ホニさんも神様だぞ？」

「――理解している」

「力を授かった神様への反逆行為じゃないのかそれは。なんかおかしくねえか？」

神からもらった力を神様に向かって行使する……それじゃあ行く手も無いループだ、てか神様がマゾ化してしまう。

「――私の言う神は空の上の”神”という存在。地上に降りて世界の調和を崩す神とは異なる」

「……お前らは要すれば空の上さんに頼まれてってことか」

「――大体そう」

……？　えーと、まずはホニさんが神様だ。うん、ホニさんが嘘をついているとも思えないし。

じゃあ雨澄が出まかせを言うかと聞かれればなんとも言えないが、

なんというかこいつはそこまで器用ではなさそうだ。
今さっきでも俺の言ったことを馬鹿丁寧にも訂正するところ見ると、だ。
そんで雨澄は空の上の神様に頼まれて……というかそもそも調和を崩すというのはどういうことだろうか。

「調和を崩すって、お前もあんな非常識な戦闘繰り広げれば調和なんて崩れないわけないだろうに」
「――だから私は”虚界”の中でしか戦うことが出来ない」

結界で戦うのをこだわるのはそう言う訳か、桐からも似たようなことは聞いていたがこれで確信出来る。

「言っとくがな、ホニさんは完全に人畜無害だからな？」

無害どころか有益だ。百害あって一利なしならぬ、百利あって一害なし。だってその可愛さは殺人的じゃん？　守ってあげたくなるジャン？　それに時を過ごしたというにはあまりに純粋で無垢でとても優しい人だ。

「――ＡＬＬＯＮＴＳＵには使命がある。異（コトナリ）を消すことで世界の調和を守る――この世界では神であっても人から見れば異質な存在」

そんな判断の仕方も歴史で習った民族差別を思い出す、どうにもそういうのは好かない。
興奮すると耳がはえるのがなんだ？　力を持っていて、自然を味方に付けることができるのがなんだ？

正直俺はそんな細かいことに固執しねえ、馬鹿で筋肉脳なんじゃないかと言われても仕方ないが――一緒に住めば何度も言うが家族

の一人だ。それはもう大切な大切な人だ。

「異質とか俺には何の興味もないね」

俺の言ったことは届いたのか分からぬまま、雨澄は話を続ける。それはまるで言い訳を必死でする子供のような……表情からも言動からも読みとれないが、そう思えてしまう。

「――今までに異（コトナリ）が存在することによって何千人もの人が死んでいる、それは”神の台本（スケジューラー）”とあまりに異なった展開」

死んだ、人がか？　そんな人数が異（コトナリ）のせいで死んだ？　……意味が分からなすぎる。

「――あなたの言うとおりその神様が有害とは認識できない、しかし同じ同種は力を持ったが為に損害・被害・死傷を人に与えている」

まあこのホニさんを見て有害だと言うのならば、俺が三時間に渡ってホニさんの可愛……無害っぷりを力説するところだ。

ホニさんは置いておいても……神様だって色々あるものな。ホニさんは「農作物を司る恵みの神」だったよな？

他にも「厄病神」やら「死神」やらがいるのだろうか。

「――異（コトナリ）というのも複数が存在し”地上の神”に”魔女”や”大きく使い方の誤った力を持つ能力者”など」

「神だからじゃないのか」

「――少なくとも異（コトナリ）の一種にしか過ぎない」

……魔女と能力者ってどうよ、と思いそうだが。考えてみれば神様も既に雨澄という見かけ能力者がいるわけだ。

ここまで聞いて抵抗や反論を見せてもしょうがないのし、実際には魔女も本当に居るのだろう。そこまで聞いたところで、俺は考えた。

「じゃあお前らは神様に力を貰ったことと、正義感みたいなもので異を消してんのか？」

だとしたら雨澄の言うとおり有害な異と出くわすことも十分にあり得て、今日は俺が相手だったとはいえ命の危機に瀕すこともあるだろう、それなのに？

「――――」

今まで「こんなに喋って貰えるとは、なんか悪いなー」とも思うほどにペラペラと喋り教えてくれた雨澄が途端に口を閉ざす。

押し込めるように、それは聞かれたくないかのように微かに口元をぎゅっと結んでいた。

「何か……あんのか？」

「――これは自分個人の問題。これで質問には答えたはず」

言い終わったと同時に俺のみが受け答えをしていたせいで他二人はだんまりを決め込んで聞いていたところを、雨澄は桐の方を向いて言った。

「……ああっ、そうじゃったな。それでは和の記憶を消させてもらうとするかの、あとは少し弄らせてもらうぞ」

「――私は本来なら接続者に攻撃を加えられた段階で死んでいた。何も言わない」

「……いや、すまん」

正直それは言われると、返す言葉もないです。

「――どうして謝る？」

「なんというか、その。仮にも女の子だからな、雨澄も」

仮というのが失礼すぎるほどに、姫城にタメを張れると自分は思う程の美女だ。

「――女の……子？」

「違ったか？　まさか女装で――」

「女の子」

良かったー、一瞬ヒヤっとした。

「……ああー、一応女の子のやわ肌を切りつけるのはショックが大きいもんで」

あー、思い出したくない。

「――――」

「どした？」

「――これまでで、そんな言葉を寄こしたのはあなたが初めて」

「そうか？　少なくともお前は俺から見りゃ十分に美人な女の子だけどな」

「――美人」

「あ、そのまんまの意味な」

「――――」

その時の雨澄の顔はほんの少し違う表情をみせていたような……

気がしなくもないが、良くは分からなかった。

「じゃあじゃあ、さっさとやるかの。わしの行うのも能力の一つじゃが、まあ催眠と考えてもらえば良いじゃろう」

「ふむふむ」

「ユウジ、五円玉貸せ」

「桐、頭を貸せ」

シリアスを一瞬にしてぶち壊しにする素晴らしきかなギャグをありがとう。

「（……なんじゃユウジ、こんなところイチャつきたいんなど不謹慎じゃぞ）」

「（そうじゃねーよ！　なんだよ五円玉って、おいおいあれか？　あれなのか？）」

糸を吊るして「あなたはだんだん～」なあれっすか。

「（ベタに五円玉揺らしての）」

「（催眠術バカにしてんだろ、今時アニメでもそんな表現”昭和”扱いされるってーの）」

昭和は言い過ぎでないと思う……でなくともそんな方法は今ではインチキ丸見えだし、食いつく奴もいないだろうに。

「（ふむならば五十円でどうじゃ）」

「（値上げ交渉なんてしてるつもりねえんだよ）」

「（大丈夫じゃ、穴も空いている上に色もレベルアップじゃ）」

レベルアップ云々は金メッキと純銀を見て「金色だしこっちが高

いっしょ」と金メッキを堂々とっていくような感じに勘違いしているんじゃないだろうか。
　少なくとも重量と色が変わるだけで「意味の無い行動」には変わりないと思うのだがどうだろう？

「（やめろやめろ。ただ醜態さらすだろ――）」
「あなたはだんだん記憶がなくなーる」
「おいーっ」

……ええと、結果的に記憶が本当に消えました。
　その後は意識を落として「記憶を弄って、戦闘中にユウジに逃げ切られた。という設定に変えたからの」と言って最後に俺が治癒の為に運んだ草むらのところまでワープ（桐チートの一つ）して草の上に寝かした。
　周囲には未だに俺のか雨澄のかは分からない血痕が飛び散っていて、確かに戦いが有りここで治療を行っていたことを思いださせられる。
　にしても桐曰く「あやつは”逃げられた”という感想しか抱かないはずじゃ」と言うが……本当に大丈夫なのか？

　こうして、これほどにもあっさりと命を賭けた戦いは終わり。アイツら……いやＡＬＬＯＮＴＳＵの行動理由も、法則性も少しは理解できた。
　雨澄の記憶を消した以上は、今後も襲いかかって来るのだろう―
―だが俺はあきらめはしない、また今度は逃げ切ってやるつもりだ。

第255話　√2－60　G.O.D.（前書き）

※ほぼ続きません

第255話　√2－60　G・O・D・

俺たちに自分の存在を明かした雨澄はそれからも襲撃を続けた。
もちろん未だ存在を知られていないという前提の上であちらは戦っているようで、ただ淡々と戦うだけ。
一週間置きにやってくる雨澄の結界から戦いながらホニさん達を逃がして――戦いは終結する。それが何度も何度も繰り返されていくのだ。
ここだけの話、俺は雨澄の記憶を消して良かったのか数日、否数週間経った今でも未だに考えている。
雨澄には聞けなかっただけで、きっとあのアロンツにいる理由もあるはずで――もしかすると彼女が望んでやっていることではないのかもしれない。
それにホニさんを有害とは思っていないような発言などからも、彼女は感情の変化が乏しいだけで悪いやつではないのだろうと思う。
あの時無理にでも聞いていれば、何かを知れたかもしれない……お節介根性丸出しだがどうにも気になってしまったのだった。
きっとあんな雨澄と戦いの場以外で話せる機会は俺が雨澄にまた致命傷を与えて治癒して家に連行することでしかないだろうし、俺はそれを望まない。一回限りで十分だ。
とんだ甘ちゃんだと、実に薄汚い偽善者とも言われても仕方ない――それでも人を傷つけるのには大きな抵抗がある。それには慣れない自信もある。
ただこの「茶番」のような戦いが慣習化しているのは事実で、いつまでこの状況が続くのだろうか――そう思ってしまう。
予測推測通りに事が運ぶのはこの上ないが、どうすればこの戦いは終わるのだろうか？
雨澄を傷つけたいとは思わない、でもそれが要因でこの戦いが終わることがないというのなら。俺は一体どんな選択をすればいいの

だろう？
俺はどうすることで出口を見つけることが出来るのか……何も分からないまま時が過ぎて行く。
戦いの日々と平穏な日々を渡り歩く俺とホニさんは、そうして季節を歩いて行く――

五月三一日

どうにかテストを乗り切って安堵の息を漏らす今日この頃。
五月は終わっても六月が控えるだけの間夏までは日付だけ見れば程遠いとも思えるこの時期というのに教室は窓を開けなければ低温サウナ状態だった。
汗っかきな方々や暑がりな方々だけでなく簡易団扇の決定版ことプラ製下敷きで悔し紛れの心身冷却を試みる生徒が現れ始まる。
それを見るだけで、今はひどく暑いのでは錯覚してしまう……視覚効果とはまったくもって恐ろしいものだ。

「体育祭の季節です」

金曜のロングホームルームではいつもは担任がやる気なさげにいつも通りの時間でホームルームを終わらせると直ぐに教室を直ぐに出てしまうので実質は他の曜日よりも長い授業前の休憩時間になっている。
担任がログアウトしてからはクラスは完全無法地帯であり、いつも通りのぺちゃくちゃがやがやわいわいなクラスが展開される――
しかし例外としてロングホームルームというクラスメイトが全員揃う場であることを生かした、役決め等を行う場合がある。
入学直後だと席決めやら委員長決めやらをまずは担任主導で行い

委員長が決まった途端に担任はと言うと係決め進行を委員長へと丸投げして教室端のパイプイスに足を組んで座っていたことをなぜか思い出した。

そうして今日に限っては体育祭が数週間前に迫るこの時に種目決めをやることになったらしいのだが――

「体育祭って言うと、マナビヤで行われる体を動かす運動の大会のことだよねっ！」

お決まりの好奇心駄々漏れの夜空に輝く星達とタメを張れるほどにキラッキラに瞳を輝かせるホニさんがいた。

少し高校生平均よりは小さい背と椅子と背もたれに髪を挟みやすいので座るときに除けて背もたれ後ろにたれさせる長く艶やかな黒髪。

薄茶色の瞳は大きく、どこか小動物を連想させる愛くるしいオーラに可愛すぎて生きるのが苦しい。

”ロリ”と言われれば間違いではないが、それともまた違ってその長い長い黒髪と思いのほか出るところの出た、スタイル良しな体で色っぽさと幼さを兼ね備えた罪な容姿をしている（超絶的な褒め言葉）

見てるだけでご飯三杯と水十杯はいけるその可愛らしさに俺はもちろんのことクラスが総じて夢中であり、一年ニ組のマスコットとして定着していた。

正直女子生徒にも嫉妬されそうなほどに頭も良くスタイルもほどよいのに、可愛さで全てを相殺どころか上乗せしてかなり愛されている。

男子生徒は以下略、わかりきったことを聞くんじゃない。

「ユウジさんユウジさん！　借り物競走ってなにかな？　彼は大事

なものを借りていきました……それはあなたの心です――な競技だったりする？」

「いやいや、某泥棒は大変なモノを借りたんじゃなくて盗んだんだから。というかホニさん違うから」

借り物競走の概要を説明すると神妙そうに頷いて。

「そうだったんだー、好きなモノって書かれてたら好きなモノを連れてくるってことだよね？」

「そうそう……って連れてくる？」

まて、物じゃなくてそれは者なのか！？　ホニさんに連れて貰えるなんてウラヤマ……妬ましい、誰だ出てきやがれ。そいつになりすまして俺がでちゃうぞ。

「ホニさんは連れてくるって……誰を？」

「それは……もちろんユウジさんっ」

「「（ギロッ）」」

あー、すんごい嬉しいけど。そう言って貰えただけで天にも昇る心地だけども。涙でるぐらいに感激だけども。

……クラスメイトを敵には回したくないんだよなあ、だって体育祭とか下手すりゃ無法地帯だし。

その俺へと敵意を向けるのは殆どが男子生徒であり、その中に混ざるマサヒロはうろ覚えの読唇術によれば――

「（ば・く・は・つ・し・ろ）」

だが断る――そう言って鍛錬で地味に鍛えられた腕で思い切りシ

ャー芯をブン投げた――五メートルは離れているのにマサヒロの右腕を射止めた上にぶっすりと刺さった場面はスルーしておこう。

「はーい、下之くん殺しは後でいいですから。さっさと決めますよ」

まてやゴルァ、委員長が同調した上に焚きつけたら終わりじゃんかよ！

だからもっと正統派で真面目な委員長だったよ、中学時代だったら。それが今は淡々とワラエナイジョークやらを言う変なノリの良さを身に付けて……あー、地味に強敵すぎるからな？

そんな訳で、喧騒にまみれる中で委員長は黒板に競技を書き出していく――

第２５６話　√２－６１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ダイジェスト風味、√２体育祭はいつか番外編でやるかもしんないです。

ギャグしか見るところないのにそれを削るとか誰得だとか言われそうな悪感、いやギャグも最近アレだけど。

第256話　√2－61　G・O・D・

六月十五日

体育祭が終わって数日が経つ。

色々と思いだしたいこともあり、それにしても考えれば色々あったものだ。

クラス対抗リレーでは鍛錬の影響で足が速くなってしまったのを隠し忘れてほぼ半強制で抜擢されてしまい、他クラスはと言えば運動部のエースクラスを投入するもんでそんな中での帰宅部の俺は冷や汗ものだったのを覚えている――六位中二位という無難な勝利を収められたのでクラスの反感を買うこともなかった……けれど後に続いた陸上部な方々を打ち負かしたせいで他クラスには敵を作ってしまった上にそれをみた運動部が部活勧誘をしてくるもんだから困ったものだ。

主人公特権でここまで運動能力は向上したのはいいが、あまりにも様変わりしすぎだ。ドーピングの噂も囁かれるが体育祭の為だけにそんなことはするわけないだろうに。

……ドーピングなのかは判断に苦しむナノマシンは一度切りで、後は足をぱんぱんに腫らしながらトレーニング三昧だったのでそう言われるのは心外だ。まあ桐チートそのものがかなり不平等なのだが。

ホニさんはパン食い走に出て、その時に釣らされたパンをを口で捕まえようとぴょこぴょことジャンプするホニさんは信じられない愛らしさを誇っていて「手伝ってあげたい」そんな感情が押し寄せてくるがこらえた……他の皆も同じ心境だったようで、その間は謎の温かさに満ちた沈黙が続いていた。

姫城さんは走る度に凶悪な部位が揺れるので目のやり場に困った……大きいよなあ、姫城さん。

ユキもいつもよりもきゅっと絞めたポニーテールを揺らす様はもう見てて幸せだった――健康的な女子っていいなあと内心強く思う。

そういえばユイは五〇メートル走でナ〇ト走りを披露した上に後ろに大差を付けて圧勝してたっけ。

マサヒロは見てさえいない。

ＰＫ戦はなんであんな劇画タッチになったのが良くは分からなかったが、凄い迫力だった。

後半の闘いなんてサッカーボールのはずなのに変化球だったり、炎帯びてたり、分裂したりしてたっけか。

高さ二メートルと幅十メートルのサッカーゴールがボールの勢いが凄過ぎて一メートル文字通り飛んでしまい会場が（混乱的な意味で）沸いたのを覚えている。

まあでも一番は非公式新聞部だったけか？　その杉城とかいう奴が出てきて、無断に改造した校庭から太〇の塔十分の一スケールのものを出現させて空へとビーム砲撃ったのは衝撃的でＮＡ〇Ａから後々役員が来る事態になったんだった。

――いやあ、色々あったなあ。

そんあ体育祭の残り香も数日経っただけで消えうせて、今度はプール開き沸くというからぶっちゃけ節操ないのだが、個人的には非常に楽しみだ。

「いやだってスクール水――」

初日は姫城さんこそ出なかったのが惜しかったが、ホニさんは実にすばらしいものだった。

今でも長々とその感想を語りたいところだが、まあ自重しておこう。

一方の未だに戦いは終わらず、週一でその時はやってくる。

彼女も腕を上げるが俺もそれ相応に向上させるので互角すれすれを行ったり来たりしている。

まあ、どちらにしろ逃げ切ることで戦いは三十分経たずに終結するのだけど。

そうしてプール開きをした理由でもある初夏の訪れを知らせる要素は他にも、数週間前に衣替えを終わらせるなど夏の香りがかなり強くなり始めている。

そう、季節は流れて夏がやってくる。

そして慣習化し過ぎていたその展開が、大きく変貌を遂げる事態が巻き起こることを――ホニさんのスク水に未だ表情に表面化していないだけで殆ど誰にも知られないで狂喜乱舞している俺には知る由もなかったのである。

第257話　√2－62　G・O・D・

六月十七日

「ユウジ、ホニ行くぞ」
「了解っ」
「うん！」

俺たち三人は家を飛び出した。そうして変わり果て大きく色を変え印象を変え雰囲気を変えた世界を走り出す。

「今回の”虚界”範囲はどこぐらいだ？」
「ふむ、このようじゃと一番最初と同じように商店街を抜けた方が良さそうじゃの」
「分かった」
「――重量制御。人物指定男一人、綿毛のような軽さへと――書換（チェンジ）追加申請、重量制御を指定した人物への一任。制限時間二三分五秒」
「よしきたっ！」

整備が数年は行われていないであろう、少し古くなり始めて小さなひび割れが見受けられるアスファルトの地面を大きく蹴って――跳躍。

空へ空へと近づくように、俺は上へと向かい。地上から十メートルの地点で静止してからぐるりと辺りを見渡す。

その刹那に空気を裂いていく軽快な音と共に、自分の顔スレスレを飛んでいく一本の矢。

「――今日こそは」

相変わらずの単調な言い方で、弓を構え矢を射る雨澄。俺は負けじと右手に持つ鉈を構えてその次々と襲いかかる矢を弾いていく。

「今日も逃げ切らさせてもらうからな」

ゲームのような表現はかなり悪いが、大きな傷は負わないことは勿論のことでも全勝中だ。

それだけ逃げ切ることが出来続けている。

雨澄に長髪するように言った途端に、雨澄は体の方向を変えて地上を逃げて行く桐たちを矢の先端は捉える――

「おっと、そうはさせないぞ？」

「――――」

雨澄が既に射っていた矢も静止した世界からの離脱――虚空を踏み台にしてそこまで一気に飛んですべてを弾く事ができた。

「おらぁおらぁおらぁあああああああああああ」

鉈と矢の先端の金属部がぶつかる音が奏でられ、放たれた矢の数はゆうに今だけで百本を超える。

それを弾いた上で地上に流れ弾として当たらないように、それでいて雨澄に返すことがないように鉈の傾け方を工夫することで被害を無しにすることができる。

「――――っ！」

『（もう少しで地点を抜ける、カウント五……三……一。抜けたぞ、お主も離脱せい）』

「おーけい」

これで終わりと言わんばかりに放たれる矢を鉈を振りまわすことで生まれる衝撃で全て撃ち落とすと飛び退くように雨澄から離れて行く。

「――くっ」

なんとも”今回も駄目だった”ような悔しさと諦めが入り混じった表情をしながらも雨澄は職務をせめて全うするように矢を放つ――飛んでいく最中追いつく矢も左に一振り、右に一振りするだけで何もない地上へと軌道を変えて行った。

――そして桐の抜けた地点まで辿りつく。こうして俺は逃げ切ることができたのだ、そうこれは毎週に同じように。

戦いのパターンや動かし方は変われど、根本は何も変わらない――今日も戦いを終えて、見慣れた風景の場所へと帰還した。

六月二一日

「おい……桐、どうなってる」

「わからぬ、周期的にはまだ先のはずなのじゃが」

居るのは自室の部屋の中、俺と桐が鍛錬計画を立てていた放課後夕方のその時。

世界は変わった――しかし何かが違う。

「これはもしかして――」
「ああ、恐れていたことがついに来たか」
窓を見やると、そこには異なる色彩の世界――ただ。
「雨澄の”虚界”じゃ……ない！？」
その色はあまりに明るく、誰もが一度は絶対に見るであろうその色だとしても、それがこの状況ではひどく不気味だ。
赤と朱に染まる世界――夕焼けのようにグラーデションがかかっているわけでもない一色塗、いや二色塗のそれは明らかに今までの世界とは異なっていた。

第２５８話　√２－６３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

お気に入りの登録数が落ちて少し凹んいたり、いなかったり。
まあ……最近はなんとも重苦しい展開が続いていますし、というかそれで切られた可能性もありそうですね。

コメディーじゃねーじゃねーか、と……これはどういうジャンルだったら正解なのだろうか。

第258話　√2－63　G・O・D・

それは今までとは違う色の世界へと変わるその前のこと、その日の朝には緊急集会を一時限目を潰してまでに行われた。

一時限目はあまり得意でない数学だったので少し喜ばしかったが……それは撤回せざるをえないらしい。

キィンと聞きづらい音をあげるマイクはやっとのことで副校長の声を拾って、その声は生徒が急きょ集められたグラウンドに響き渡った。

『えっー……この度、藍浜高校に在籍する生徒が失踪する事件が起きました』

失踪事件。それは皮切りに始まった藍浜中学を始め――小学校にも数人、町内でも数人が失踪した出来事。

その失踪事件は未だに解決の糸口を見せず、捜索は続いているが一向に見つかる気配はない――いや見つかるはずがないのだ。

俺はその事実を知っている、それは日常を生きる人々ならば想像もしければ信じることもままならないであろうこと。

「（この世にもこの世界にも”あの世界”にさえもいない……）」

アイツら、アロンツと呼ぶものの犯行で……ほぼ断定して間違いはないだろう。

そしてその魔の手はこの高校までやってきた――個人的にはいつ来ても不思議でなかったから驚きはしなかった。

ただその理由を知る自分にとって、やはりその理不尽さには不快で心の内にふつふつとその怒りが溢れてくる。

「（そこまでして異（コトナリ）を消すことが必要か、そこまでして……人を殺していいのか）」

いや、いいはずがない。それは誰にも知られずに行われる。絶対に見つかることの無い神隠し。

俺はその失踪事件を食い止めることは出来ない……そもそも俺は狙われる側で余裕など最初からないのだから。

それでも俺はまだまだ抗う、俺の家族と友人を失くしてたまるか——俺は強く拳を握りしめ、その緊急集会が行われる中、何度かも分からない決意をする。

それはまるで俺がそれを忘れないように、その決意を見失わないように何度も何度も繰り返していた。

＊　＊

そして世界の変化は訪れた。

雨澄の作りだす”虚界”と対をなすように冷たい印象と変わって熱さを僅かに感じる暖色系の空や景色——聞こえは良いが陰のない一色塗の赤と朱だけの世界はやはり不気味だ。

そんな世界の我が家の自室を出てホニさんの部屋へと向かうと——

「ユウジさんっ！」

「ああ、虚界（キョカイ）だっ！　外に出るぞ」

「でもユウジさん、なんかいつもと印象が違う気がするよ」

「俺も分かってる。これは雨澄の作りだした世界じゃない——」

ほぼ内心では断定だった。雨澄の世界はこれほどまでに明るくはない、これほどまでに一色塗ではない——どこか粗くそれでいて嫌

みな程に明るい。

「鉈は持ったな！」
「ああ、出るぞっ」
「「うむっ（うんっ）」」

「桐、分かるか？」
「待て……うーむ、わからぬ」
「遠くにまだいるってのか」
「しかし移動速度が極端に速い場合もあるから油断はしてはならぬ」
「分かってる」

俺はホニさんを庇うように立ちながら辺りをその平面上の地上から見渡す。そこには指定された色を塗り間違えられた塗り絵のように、塀は赤く、家は赤く、空は朱。

昔の３Ｄグラフィックの世界をみているような感覚と、そのほぼ原色の世界に目は耐えられなくもないが慣れることは確実に無い。

「ユウジ、来たぞ……速いっ！？　藍浜の海側から屋根伝いにやってくるぞっ」
「よし桐、頼むっ！」
「――重量制御。人物指定男一人、綿毛のような軽さへと――書換（チェンジ）。追加申請、重量制御を指定した人物への一任。制限時間二一分三七秒」
「よしきたぁっ！」

地面へと強い反抗を見せ、大きく空へと飛びあがる。その景色は見渡しても心地の悪いことこの上ない。

そう見渡していると――思考する間もなく、何かとてつもない速さで飛んでくるものを視界が捉え避けようとしても全てを避けることは出来ず――左腕をそれは抉った。

「がああっ……」

溢れるは血、込み上げるは激痛。言ってしまうと矢の速さとはまた違い、殺傷能力もかなりに備わるそれは――

「銃弾……？」

鮮血が漏れ出る左腕を右手で抑えつつも、その銃弾の放たれた先を探し出すようにぐるりぐるりと体を回す。そうしてようやくその銃弾を撃ち放った拳銃を持った人型（ひとがた）を視界に捉えた。

それはガタイの良く、身長は百八十はあるであろう長身と手入れをせずにほったらかしされたボサボサの伸びた髪を持つ――

「てめえがヨリがてこずっている相手ってか、そんじゃさっさと異（コトナリ）もろとも消えてもらうぜ。抗う接続者（コネクター）さんよお」

低い重低音と荒っぽい喋り方をする男が、一丁の拳銃を左手に構えながらそう言い放った。

第２５９話　√２－６４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

超展開？

いえ、まさかの伏線です。

てかホニさんとの序盤での会話を序章で書いたからって√２で省いたのが今になって響いとるー

第259話　√2－64　G.O.D.

「くっ……」
「どうした、受け続けるだけか？」

バァンッという銃弾が発射され、空になった薬莢がもう言うまでも無いほどに劣勢だった。というかあまりに圧倒的な機械式の飛び道具と男そのものも空中戦に長けていて切りかかる頃には後ろに移動していたり――隙がない。

銃には詳しくないが、ちょっと聞いただけで考えるに十発前後でマガジンを取り換えるはずなのだが―ぞんなことはなく雨澄の弓矢と同じようにマガジンを装填することもなく無限に銃弾が充填されるようだ。

矢をうち返すのとは訳が違う、拳銃だからといっても打ち出されるのはＢＢ弾でも空気でもなく――紛れもない真鍮製の実弾で、それが撃ちだされることで場所が悪ければ俺は致命傷を負う。

現に急所が外れているだけで何発かは被弾してしまっていて――痛みを感じる間もなく次の銃弾が向かい来るので、避けるのと中の無限マガジン内での銃弾充填の際の僅かな時間で切りかかることしかできない。

しかし男はまったくの無傷、俺の攻撃は掠ることさえままならないでいた。

「がっ」

左腕に撃ちこまれ、思わず声をあげる。戦場で戦う兵士とはこんな凄まじい引き裂かれるような痛みを感じながらも国の為に戦っているのか、と何故かふと思う。

いくら鍛錬で痛みには耐性が出来て、少なくともショック死はし

ないほどに痛覚が鍛えられてしまったとはいえ……やっぱりは慣れない。
痛いことには痛い。
だが俺はそんな痛みに抗い、こいつに聞かなければならないことがあった――

「雨……澄はどうした？」

そう、雨澄。いままで散々襲いかかり戦い続けた彼女。アロンツのことを聞きだし、それで記憶を消した彼女。

「雨澄……ヨリか？　そんなこと聞いてなんになる」

そんなことに興味を持ってどうするんだ、という顔で俺を見据える男は言った。

「今日はなんでお前がっ……虚界を張れるのに一定時間要すからか？」
「そこまで知ってるのなら理由はそれだ」
「それで雨澄と同じアロンツのお前が……か」
「……そこまで知ってんのか、ヨリのやつバラしたのか？　アイツはそんな口軽い訳じゃないはずだが」

普通に会話をしているように見えるが、相手は銃弾を撃ち飛ばし俺は寸前で避け鉈を回して弾いている戦闘の真っ只中で俺は少なからず息が切れている。

「なんで……お前らはここまで」

表現が違うかもわからないがコトナリとその関係者を消そうと躍

起になってるのか。

「まあ俺はお喋りな方だが言うがな……俺たちがやらなければならないことであり、やらしかないことだ」

「やるしかない……そりゃ強いられてるみたいだな」

ハァハァと痛みと次々に空を飛ぶので肩で呼吸しながら、俺はその疑問のようなものを漏らす。

「ああ、そうだな。それは間違っちゃいない」

「だとしても……人を殺す理由にはなんねえだろ」

雨澄も男も……殺すとは一度も言っていない、だがそれは殺すことに間違いはないのだ。

この世界からこの世からも消し去ることで——それは明確な死の訪れ。

「俺たちはコトナリに強く触れ、繋がりを持った時点でそれは人とは考えない」

「お前らが言うコネクターとか言う奴が、俺か？」

雨澄も言っていた、きっと俺を指すその言葉は。聞き流してはいたが、この男は必要以上に喋るのでついでに聞いてみる。

「知られてんな、まったくヨリはどうしたんだ？　それだけ異は存在することで調和を崩す、居ることだけで害なんだよ」

そう言われて、その男の発言に一気に怒りは膨れ上がる——

「ホニさんはなんにも迷惑なんてかけちゃいねえ！　近くにいる俺

はそう断言するっ」

ホニさんはただ世界を見たかっただけ――力だってあの時だけしか見せなかった。

そんなホニさんが有害な訳がない、俺はずっとそう思っている。

雨澄に言われた時からもずっと。

「……俺たちのことはそれなりに知っている癖して、大事なトコは知らねえんだな」

「なんだよ」

「異がこの世界に存在できるのは何故か、考えたことがあるか？」

「……この国でも八百万の神様はところかしこに居るって言うじゃねえか」

「それはあくまでお話や伝説の中のことだ。まぁ……ここで消えるお前に親切心で教えてやる」

さも消せることが必然のように言う男に苛立ちを覚えながらも、その言う事には関心があり耳を傾ける――そして男は今まで左手で数秒ごとに撃ちづけていた銃を構えたまま撃つのを止めて言った。

「何かをヨリシロにして、この世界に現れてんだよ」

ヨリシロ……ってあれか、マンガとかで聞く表現で間違いないなら。人や物を素体にして何かを呼び出す――だっけか。ご神木をヨリシロとかは聞いたことがある。

更に思いだすのはホニさんは幾年も生きているということ、一時は疑問に思ったホニさんは狼の神様なのに人の姿をしているのか。

あれは……ホニさん自身の体なのか。そうでないならば一体何なのか――かつて俺はそれを考えていたが、ホニさんから話されるのを待とうと聞くことをしていなかった。

「一瞬見ただけだが――少なくともお前と一緒にいる異はヨリシロに人を使ってる、それも少女だ――それが本当に害でないというのか？」
「っ！」
ホニさんが少女をヨリシロ……？
「接続者（コネクター）はその異への疑問を持つことがなくなっていく……お前もそうなのだろう」
ホニさんへの疑問は本当にどこかへ消え去っていた――ホニさんは基本的に好奇心で色々と知りたい性格で、一方で自分のことは出会った時にしか話してはくれなかった。
信頼されていない訳では……ないのだろうが。きっと何百年も生きていると話したくないことも多々あるのだろう、そう思い考え、そしてその疑問は薄れていった。
「そうして異は調和を崩す――この世界のだ」
訳がわからない……一気に浮かぶ疑問と知らされる大量の情報に脳内を侵されていく。
俺は……知らず知らずに操られていた――ホニさんにか？　それはホニさんの意思でか？
「ヨリシロへの負担は少なからずあるだろう、少しずつだがヨリシロは――」
「言うな言うな言うな言うなぁ！」
聞きたくない、聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたく

ない聞きたくない。
ホニさんは隠している……そんなことあるわけない――でもその自信はどこから来る？
――俺は敵である男の言う事を信じたくはなかった。可愛いから、家族だから俺はホニさんを守る……それだけで守っていた俺は偽りだったのか。
ホニさんはそれを意図して、俺にそれを隠して――違う、違ってほしい。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

俺はその一心で話すことで休んでいた男へと斬りかかる、その真実を拒絶するように逃げるように――

そうして困惑と混乱で隙だらけの俺は堕ちた。胸を銃弾で貫かれる痛みと銃声と共に――

第２６０話　√２－６５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

昨日は寝オチして更新ならずｏｒｚ、連続更新は昨日で途絶えたことになりますー。
４５回、回数にすれば４０日前後……一応は頑張れたつもり。
更新もまた連続目指すぞー

第260話　√2－65　G・O・D・

HRS√2－3

我はどうしてここにいるのだろう。
我はどうしてここまで長く存在してしまったのだろう。
仲間に取り残されて――力を見に付けた我に頼って来る者がいるだけで、ずっとずっと孤独でひとりぼっちだった。
小さな世界に閉じ込められて、変わりゆく四季でさえも見飽きてしまうほどに――同じ場所をずっとずっと眺める。
それは退屈で、寂しくて――嫌になった。誰かが我を助けてほしい、どうかここから連れ出してほしい。
そんなことを長い時の中でずっとずっと思い考え願っていた――
そう、我は。

そしてその願いが聞き受け入れられたかのように、我の元にやってくる一人の影。　ユウジさんと出会う前。今は話すことも会うことも出来ない――近くて遠い存在。
そうして僅かすぎる時は過ぎてもう一度、我は一人になった。

＊　＊

我はどうしてユウジさんに守ってもらえているのだろう。
我はどうしてここまでユウジさんに守られっぱなしなのだろう。
あの時のユウジさんの傷ついた姿が目に浮かんで……あまりの惨さと酷さに胸が痛くなる。

我がいるせいで――我がいるからユウジさんは。

桐に神様でもある我の力を封じるように言われている、それが本当にもどかしく悔しい。

今すぐにでもユウジさんがが戦う場で共に居たい――けれど力がないから。ううん、あるけれど使ってはいけないから。

この力を使えばユウジさんに只でさえかけている負担を少しでも軽減できる、一緒に背負う事が可能かもしれない――その一方でそんなことを言ったらユウジさんを困らせてしまう、だから我は言う事を抑えた。

それでも我は、その自身が何もできないことに――失望してしまっていたんだよ。

「ホニ、行くぞっ！」

「う、うん」

今もこうして桐に手を引かれ、空から降りそそぐモノから桐は自身と我を守る。

桐だって役に立てているのに、どうしてどうして――？

「桐、なんで我は……力を使っちゃいけないの？」

「以前にも言ったであろう、使う事で誰も喜ばない――誰も望まない結末が訪れるからじゃ」

誰も喜ばない、それは我自身とユウジさんに桐も含むということ？

誰も望まない結末、まるで終わりが決まっているかのように――

桐はなんで、そんな言い方を。

「桐は前にも言ったよね、今は言う事は出来ないって！　桐は言えないけど知ってるってことだよね！」

「……」

「答えて桐っ！　どうして我が使っちゃいけな――」

その時桐の足がバタりと止まる、繋がる手が緩んでいることに気付く頃には桐の顔はみるみるに蒼くなっていく。

「……どういうことじゃ」

数刻の沈黙の後に、桐は衝撃で掠れた声でこう言った――

「ユウジへ一任した重量制御が切られているじゃと……っ！」

その意味はどんなことをさすのか、我にはまったく分からなかった。

ジュウリョウセイギョなんて言葉も、時折桐が口に出していた言葉なだけで我にはなんなのか分からない。

でもそれがきっと異常なことなのだと、桐の凍てついた表情を見て思い恐る恐る問いかける。

「桐？　突然どうした……のっ」

桐は身を翻して、突然に逆の方向――かつて走ってきた家へと走り出す桐に我も手を引かれて戻っていく。

焦りが垣間見え、何かに意識が行っているような。今までの冷静に我をの質問を受け流すこういう時の桐とは違っていた。

「ねぇ、桐どうしたののってば！」

「……ユウジが」

「ユウジさんが……」

そうは行ってもいくら我でも分かってくる、でも我はそれを桐から聞かないと信じたくはなかった。

桐の行動も挙動も全部考えると――

「……ユウジが倒されたっ」

何かあった。そして桐が言うのなら、倒された。

ユウジさんが倒された？　誰に？　桐やユウジさんが度々口に出す”アイツら”とかいう人たち？

でも今まではユウジさんは傷こそあったけれど、帰って来れていた――でも。

「ユウジさんっ！」

ユウジさんが戦っていたと桐の言う場所に向かって――その時我は、かつてない絶望を見た。

そして我の中で何かが切れる、怒りなのか憎しみなのか哀しみなのかも分からない――

「ユウジさぁんっ！　ユウジさんっ！」

呼んでも応えず、ユウジさんの体からは信じられないほどの血が流れ出す。

腕や足も、一番は心臓があるはずの左胸からどくどくどくどくと流れ続けて――地面を紅く紅く染めていく。

ユウジさんが突然我たちの目の前で意識が無くなったｋとおはあ

った。でも今回は違う、見て分かる程に瀕死だった。

「ユウジ！　しっかりしろっ！　――箇所復元。人物指定男一人、対処箇所……二十八ッ！」

桐の手元がぼんやりと明るくなり、ユウジさんの胸にそれは当てられる。それでも血が止まるには程遠く――

『来たか。しかし接続者（コネクター）が倒されたのが分かったかのような速度だな。まあ探す手間が省けていいが』

空を見上げると、そこには本で読んだ。飛び道具と言われるものの想像よりも小さく華奢な”ジュウ”それでユウジさんを――

『そこの神様。神様だからと俺は容赦しない、この世界では異（コトナリ）の一種にしか過ぎないんだからな、じゃあ消えて貰うぜ』

見上げる先の男はジュウを構えて、我を狙うように向け直す――そんな男の行動を、我は虚ろ虚ろとしか見えていなかった。

今の我にはあるのは果てしない後悔と深く生まれる憎しみとふつふつと溶岩のように熱く膨れ上がる怒り。

「――ごめん桐、ユウジさん。我はもう無理だよ」

「っ！　ホニ、やめるんじゃ！　我がなんとかする！　だからお主は力を使って――」

「ここで使わなきゃ、神様で居る意味なんてないよ……これじゃただのお荷物になっちゃうよ」

「落ちつくんじゃ、わしはユウジを治癒しながらも守れるから、な？」

「……これ以上桐もユウジさんにも迷惑だけかけたくないよ、傷つけたくないよ――」

今、そうしないと。我はもう耐えられないから。

「延々に続き包み込む母なる大地よ――深く蒼の色へと染まるすべての源の海よ――永遠（とわ）に続き遠く広がる遥か空よ――全ての自然よ我に味方せよ――っ！」

地面が砕けて現すのは肥大化した植物が生ける物のように蠢く、空は朱色に染まったはずの雲が薄暗く雷を躍り光らせ、何もかもを吹き飛ばすかのような強く乱暴な風が巻き起こる――神様が怒るその時、この全ての自然が一つへの敵意のみで牙を剥く。

第２６１話　√２－６６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ああ、今度は一日おき更新に落ちついちゃうのか……いやいや！
もっと頑張れよ俺っ！

てか書いてて思ったけど鬱っ！？　どこがコメディじゃ！
４．２３、おもいきし時間帯間違えていたのでラストを訂正。

第261話　√2－66　G・O・D・

その時わしは、あまりにも強大な力を見た。

「ホニ……」

その名を呼んでも強い風の中では聞こえない。怒りに身を任せるようにこの世界に広がる自然を震わせある人が傷つけられた男に向かって牙を剥く。

固く少しの隙間から僅かな雑草しか生えることを許さない、アスファルトで固められた地面を突き破って姿を顕わすはこの変色した景色の中で唯一の真緑色の植物。

植物は”成長”の概念を蹴散らしておとぎの物語の中のように驚くべき速さで太く長く成長していく――それは力強さに満ちている。

空は大嵐が突然に訪れたかのように吹き荒れる風と、轟々と音を響かせる雷が地上に襲いかかる――それは怒りに溢れている。

止めようがない、その圧倒的事前の力に、それを操る神の力は――わしの力を以ってしても敵わない。

ただわしはユウジを治療しながら、現れたばかりの敵である男が捻られていく様を見ることしかできない――

＊　＊

ナレーのナレです。桐は治療に忙しいので急きょ私が現況をお伝えしようかと思います――

「な、なっ……！」
『――――――』
男はその突然の異（コトナリ）の暴走に困惑し、それが大きな隙を作ってしまって結果、ユウジの負傷に怒りを爆発させたホニは周囲にある自然を操って銃使いの男を追いやっていく。
手で何かをもつことさえままならない暴風の中、いくら力を持った男でも抗えず持っていた銃を嵐の中に放り出してしまった――それを狙ったかのように地上から何十メートルをも茎を伸ばし空へと向かったそれは男を蔦（つた）で絡め取るように締めつけた。
その力を行使するホニは瞳を大きく見開いたまま長く艶やかな黒髪を逆立てて、静かなる怒りを表情に籠めて、男に自然を衝突させていく。
「がっ……お前見たいな異（コトナリ）にこんな力があるわけがっ……！」
『――――許さない』
「は……？」
『ユウジさんを傷つけたことを、我は許さない』
「傷つ……けた？　あの接続者は……胸を撃ち抜いて殺した……はずだ……何を言う――」
すると蔦の締め付けが少し弱くなり風が止んだ。だとしてもそれは見動きが出来ない程度には保ち喋ることを許すかのようにそうした。
＊　＊
「がはっ……」

『そうだとしても――我はそんな死さえも打ち消すよ、それが大切な人なら絶対に』
「無茶を言うな、いくらお前が異の中でも”神様”に分類されても……それだけは覆せない」
『っ！』
「それに何故お前はあの接続者（コネクター）に依存する？　ただ鈍器を普通の人より振りまわせるだけの男だろう」
『あなたには分からない――我がここにいれるのは、ユウジさんのおかげだから』
「まあ、そうだろうな。お前は人を寄り代にして、それでいて自分に理解を示す協力者――接続者のおかげで、ここに居れるのだからな！」
『違う！　寄り代は……認めなければいけないけど。ユウジさんを利用してなんかいない！』
「お前が思っているだけで……あの接続者はお前が少女の”なり”をしていることに疑問を抱かなかったのはなぜか分かるか？」
『それはユウジさんが優しいから――優しすぎるから、聞いてこなかっただけで――』
「違う、それは偽りだ――異がこの世界に平然と居座るためには、そこでは協力者が居る。無差別か意図したかは知らないが指定されたモノを接続者と称して、自分が存在出来ることを簡易にする――それが接続者であり、それは異であるお前自身も行ったことだ」
『それはっ……それはっ！』

否定……出来ない。我はユウジさんに救い出された直後に、我はユウジさんと共に居たいと思った――そして我を連れていって。
ユウジさんはなぜ断らなかったのか、ユウジさんにも家族があって友達がいないのに――我が勝手に入り込んで。
それをなぜ我は疑問に思わなかった？　だから我はユウジさんに甘えていただけ？

この男が言う事が本当ならば――我はユウジさんの心を操っていた。

『そんな……そんなのって！』

「そうやって異はここに居座り、危害を与える――お前ならばその寄り代となった少女にだな」

そう、我は少女を――”あの子”を寄り代にしている。その事実には変わりなく、こうして我が戦うだけで傷つくのは”あの子”身体だった。

そして我はユウジさんを、自分がかかわったことで傷つけた。そして心も操って、自分が居れるように――変えてしまった。

『い――いやあああああああああああああああああああああああああ』

我は嘆いた、自分の愚かさに。

知らず知らずに誰もかれも傷つけて、ここに居たいという我儘でユウジさんを大きく傷つけた。

もう、分からない――我はどうすればいい？

ここから消えてしまえればいいの？　そうすればユウジさんがこれから傷つくことがないの？

――じゃあ”あの子”はどうするの？

板挟みで、我はどうしようもなかった。

頼もしくて、眩しくて、憧れて、強くて――優しい言葉をくれるユウジさんが今はいない。

それがとても辛い、とても苦しい――とても寂しい。

『ごめんなさいユウジさんごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいユウジさん――』

それはユウジさんには聞こえない謝罪の言葉、届くことの無い悲痛の言葉。

「だからお前ら異は、この世界に存在するだけで調和を乱す。それを俺たちは消し去っている――意味は分かるな？」

消されればいい、それで皆が元に戻れるなら――そんなことないか。我がかき混ぜた日常を以前のモノに戻そうとしても無理なこと。

そしてそれは悪魔のように甘い誘惑――まだユウジさん過ごしたくないのか、それなら居座って開き直って、今ユウジさんを傷つけた男を倒してしまえばいい。

自分がやっていたことを棚にあげて――何百年も生きて、やっと掴んだ幸せを逃がしてもいいのか？　――ユウジさんも桐も言ってただろう、一緒にいたいと居てほしいと。

少しぐらい甘えても、バチは当たらないよね――？

その誘惑はとろけるように甘く魅力的で、あまりにも自分にとって都合の良過ぎることだった――我はそうして悪魔の手に落ちた。

「なっ……ぐぐぐぐっ」

『我は諦める――迷惑をかけてでも、ここに居させてもらうよ』

「愚かな……っ」

『愚かな選択なのは分かってる、でもそうしてでも我はこの日々を失いたくない――』

それは女神のように心からの笑みで。

『だから、あなたには今倒れてもらうね』

男は締めつけられる蔦が首までやってきて、呼吸が困難に陥ったところでばたりと力尽きる――そうして世界は元へと戻って行く。

男はぐったりとしていながらも息絶えてはいない、気絶させただけにすぎなかった。

我は悪魔にはなれきれなかったよ。でもきっと、これからは……。

『これから騙すことになっても、ユウジさんごめんなさい――今はこの日々を、ユウジさんを失うのは辛すぎるから、少しだけ。少しだけでいいから猶予をください――』

戻った世界には突然に現れた巨大植物が道路には居座っているものの、空はかつての紺色を取り戻し――今は雲ひとつない星空が広がっている。

第２６２話　√２－６７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

盛り下がってまいりました！

第262話　√2－67　G・O・D・

「はっ……」

目覚めるとそこは教室――って、まあ大体予想はつくようになってきた。

「居るんだろ？　な？」

「はい、いますよ」

ここは夢の中の世界、何か自分が意識を落とした時によく見る夢。

そこには一人の女子生徒が居て、それ以外は誰もいない見慣れながらも空虚な教室だけがそこにはある。

「そっかー、俺撃たれたんだっけか」

ホニさんのことで動揺させられたとはいえ、なんとも情けないというか申し訳ない。

撃たれた部分が心臓だったからきっと俺はもう駄目なんだろうな……なぜか俺は自分の死をあっさりと受け入れようとしていた。

それも日々の鍛錬で何度も何度も死ぬ思いをしていたことで、死への恐怖が薄れてしまったからなのかもしれない。

「あなたは死んでませんよ？」

「え、そうなの？」

「はい」

素性を知らないであろう深緑色で前髪で表情の隠れる女子生徒は何を根拠にしては分からないが堂々と言い放った。

「胸撃ち抜かれた気がするんだが……」
「それはもう桐のチートで」
……もはやなんでもありだな。
しかしここに来てから妙に頭が冷えた……さっきの男が言ったことは本当なのだろうか、と思うもののこの教室の景色では考える気力さえ沸かない。
妙に心地よい温かさの教室で喋るのも面倒に思えてくるが、それでも俺は気になり聞きたい事がらがあった。
「てかお前は一体どこまで知ってんだ？　ここに俺が来ては意味深な発言ばっか残すけどよ」
冷静に聞くがコイツは実はゲーム内でのキーキャラなんじゃないかと思えてくる、表情を見せない不思議感といい、その知っている情報といい。
こうして俺が倒されるタイミングも……姫城さんの告白とか棺桶登校の日とか――どうにもアブノーマルな展開の中でこの特定の夢をみてしまうようだ。
それを図ったかのように一見無駄情報に見えて、実はかなりのキーワードを放っていそうな前髪彼女の口にすることが時折気になるわけで。
「うーん、そうですね。少なくとも……あなたのスリーサイズまでなら」
「ボケはいらんから……てか何だその誰得情報」
誰が喜ぶんだそんなもん……いや、一部に需要あるとか耳で囁かなくていいから、誰かは知らないけども。

「とりあえずは”あなたの知らない”ことまでは知っています」
「……えらい抽象的だな」
抽象的以前に俺が知らずに、この女が知る事柄ってなんだよ……
「まあネタバレ禁止ってとこですかね、怒られます」
「誰に？」
「それもネタバレですからノーコメント」
「……お前ってなんだろな、夢見る度に会うけども」
「それもネタバレ……ですが、強いて言うなら”桐と同じポジショニング”ですかね」
桐と位置づけ的には同じ？　そりゃどう捉えればいいのやら、決してコイツはロリキャラではないだろうし、変な喋り方もしないし……たまにワケワカランこと言ってくるけども。
ということは、何か見透かしたかのような事を言ってくることを考えると――
「あれか、チートキャラってヤツか？」
「まあ一種のチートではありますが……というか下之ユウジ、チートが万能だとは思っているんじゃないですか？」
「は？　いやいやお前はどうせ知ってそうな感じだから言うが、桐は万能チートキャラだぞ？　強化に防御、瞬間転移とか多彩な力が有る時点で万能だろうに」
「では聞きましょう、ではなぜ桐はチートであるのに攻撃には参加せずに防御や味方の強化に努めているのですか？　――分かるでしょう、桐も使えるチートは限られていて、得意不得意はあるものです」

……あいつに限ってなあ、出し惜しみとかな気もするけどな。

「それに、それへ頼っていてはだめですよ？」

「分かってるよ、俺は自分の力で彼女――ホニさんを守るつもりだ」

それは一度決めたこと、俺が神様ということでホニさんに惹かれているだけだったとしても――俺は守りきる。

信じないわけじゃない、でもホニさんが俺を騙していたとしても、少なくとも今まで過ごしたホニさんの日々は掛け替えの無いものだ。そんな時を過ごせただけで俺は文句なんて言う訳ない。

ホニさんが思っていなかったとしても、俺はホニさんを家族だと思っている。それは――揺るがない。

「じゃあ、俺はそろそろ戻るには――」

「寝ればいいんです」

「いや、知ってるよ。耳にタコが出来るぐらいに聞いた」

……気がする。って、あれ？　本当に何度も何度も聞かされて、何度も同じ動作を行った気がする。

「眠る前に一つヒントというものを」

「ん……なんだ？」

その女性はどこかクイズのネタばらしを楽しそうにする子供のような無邪気な声でそれを言う。

「これで会ったのは四回目――この世界に限ってのことです」

「……は？」

「それではおやすみー」

「いや、だからなんでこう気になるところで――」

そうして教室に居た俺の意識は途絶えて、少しの沈黙と暗闇。三十秒を待たずして閉じる目の中にも僅かな光が入ってくる――

「おお、ユウジ起きたか」

「ユウジさんっ！」

いつの間にか自室部屋のベッドで寝ている形の俺へ身体をぐいと寄せて顔を覗きこむ、なんとも平然とした貫禄さえある桐の顔と、涙目で今にも崩れそうな哀しみの表情を見せるホニさんの――小さな二人の視線が俺には向けられていた。

第２６３話　√２－６８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

本当に申し訳ないほどにグダってます。本当に申し訳ないです。

第263話　√2－68　G・O・D・

「あー……俺生きてるのか」

布団の被さっていた自分の手のひらを見る――普通に健康的とまでは行かないが血の通っている肌色。

その手で胸をさすると……そこには切れ目のよう傷が有り、さするだけで「つっっ」痛みが走る――しかし流れ出ていたであろう血は完全に止まっていた。

「ユウジさん、大丈夫ですか！」

「ああ、ホニさん。大丈夫……なんかな」

若干あの夢を見たせいか、かなりに冷静になっている。それといった持続する痛みもなく、意識は澄んでいた――とりあえずは大丈夫そうだ。

ここまで冷めた解釈をするのも、倒れる直後がいつになく熱くなっていた反動なのだろうか。

「疑問形で返すでない、これでもわしの治癒はほぼ完ぺきと言えよう」

「ああ、桐がか……ありがとな、そしてスマン」

夢の中の女の言った通りだった。桐が俺を治癒してくれたことに感謝する、飛ぶ力も鍛えることも俺を治すことも……なにもかも桐に頼っているんだなあ、と改めて思わされる。

文字通りに、桐がいなければ俺は何度も死んでいた――それはとっくのとうに。

「桐はユウジさんが寝込んでいる間にずっと看病してくれたんだよ」
「あー……それで今はいつだ――」

時計を見て分かることは、針は「三」の数字を指していること。
辺りを見渡せば薄暗いどころでなく部屋の灯りだけが燦々とついていているだけで周囲は真っ暗であること。

「あー、もしかして深夜？」
「うむ、明るくない方の三時じゃ」

……家から繰り出したのは放課後夕方、倒れたのが色の判別のつかない赤色の世界だったせいで分からないが――何時間も治癒をしてくれたのだろう。

「桐はさっきまでずっと治癒してたんだ」
「ホニっ、皆まで言わんでいいじゃろう！」
「本当にありがとうな、桐」
「……礼は良い、それよりも倒れた状況を聞きたいのじゃが。良いか？」

桐は一瞬照れたような表情をした後に、時折みせる真面目顔になって問いかけてくる。

「あー……そうだな、じゃあまずはな――」

俺は桐とホニさんへと向かって喋りはじめる――しかしある一部の事については、俺の口が喋ることを拒んだ。
それは、ホニさんのこと。ホニさんがどうやってその容姿でここにいるのか、どうして俺はあの頃にあった疑問を抱かなくなったのか――

聞くのが怖かった。何か崩れてしまいそうで。
本当は冷静になっているのもその崩れてしまうことへの怖さを堪え抑える為のものなのかもしれない。
その銃使いの男の言った言葉を俺は受け付けていなかった。それが事実なのか虚偽なのか……それ以前に俺はホニさんを信じたかったからでもある。
だから俺はその話題を避けて、どうやって戦ったか。どうやって俺は負けたのかを、少しの嘘を混ぜて話した――

＊　＊

ユウジさんは話してくれた。ユウジさんがどうやってそのジュウを使う男と出会って、戦って、倒されたかを――
ユウジさんは「男の挑発に乗って襲いかかったら、すぐさま撃たれた」と言っていたけれど――きっと違うのだと思う。
確信がある訳じゃないけれど、ユウジさんは話している途中に何かを考え込むように間があって。それに少しの違和感があった。
それが我や桐に隠している事だったとしても我は何も言えなかった――我はユウジさんに居なくなって欲しくないから。
その疑問を口にするだけでユウジさんを「信じていない」ことになってしまいそうで、それがとてつもなく怖かった。
前に関わりを持てた人とは……我のせいとは言え短い付き合いだった。ユウジさんも我が過ごした幾年の時を考えれば微々たるもの――はずなのに、この時間が愛しくて大切で仕方なかった。
こんな気持ちは初めてで「ユウジさんの隣に一緒に居たい」そんな気持ちが日に日に膨らみ、ユウジさんを傷付けてしまった今でもそう思ってしまった。

ユウジさんを騙すことを決めたけれど……それはやっぱり胸がきりきりと痛む、けれどそれを言った途端に全てが終わってしまいそうで。

だから我は何も言う事ができなかった。我は神様で悪魔にもなるというのに――ユウジさんのことになると、我の大切な人たちのことになるとどうしても弱くなってしまう。

我は本当に卑怯なのだと思う、いくら年を重ねても、これなら我は本当に幼稚……我は誰よりも愚かで傲慢でそしてとてつもなく弱い。

＊　＊

ユウジの話を聞き終わり、わしはユウジの倒れたその後を話す。

その後にはホニと話す機会が十分にあり、あったのだが――ホニはなかなか口を割らなかった。

問い詰めるように聞き出せたのは「我はとっても愚かだから」という言葉ぐらいで、それ以外はだんまりを決めていた。

ホニが何かを隠していて、ユウジも何かを隠している――それは二方の表情を見て理解できたが、何を隠しているのかは分からない。

わしは心を読めるとは言うが、本人がどうしても隠したい事がらなどは”フィルター”がかかったかのようにボヤけた分からないのじゃった。

二人はどちらもボヤけていて、わしの持つ攻略情報もどこか漠然としたものなので、各登場人物の心情までは把握できていない。

「（うむ……二人の思考がいまいちに読めん）」

表現するならば、二人は同時に仮面を被った――というような感じじゃろうか。

今までは直球で話し、喋っていたのに。今では遠回しに”一つの事柄”を露骨に避けるように話している。

そう、それはわしが知ってはいる漠然とした攻略情報の中でも確かに存在する――

「（……ユウジとホニは気付いた、ということかの）」

一人はそれを隠したくて、一人は気づけたことを隠したい。

「（難儀というか、ここまですれ違うとはな）」

……かといってわしが口出しできるわけではないからの。これ以上の介入は無理じゃし。

「（しかしホニは力を使ってしまった……か）」

これから止めるのは無理じゃろう。あいつの性格的に、ユウジをこれ以上一人で戦わせたくない、とか言うじゃろうし。

もうわしが言っても聞かんじゃろうなあ。わしにも責任があるのじゃろう……ユウジが心詠を意図的に切られるとは予想外すぎたとはいえ、な。

「（見守ることしかできないというのも辛いものじゃの）」

わしは出来るだけのサポートをするまでじゃ。しかし……今回も――

第２６４話　√２－６９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

久しぶりの学校回……なのだけれどもシリアス気味は継続中、だめだなー俺

第２６４話　√２－６９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

六月二二日

朝起きるといつもの居間には姉貴の姿があった。
この場に来ているのは俺と姉貴だけで、他の女子勢は寝息をたてているか準備中といったところだろう。

「なあ、姉貴」
「おはようユウくん！　それでなにかな？　ユウくん」
「そういえば姉貴……ごめんな」

それは唐突な謝罪、俺には謝らなければならないことがあった。
数日経っているというのに、どうにも言うタイミングが見つからず。
当の姉貴もそれについて聞いてこなかったこともあり、どうにも言う機会がなかった。

「ユウくんから謝られるなんて……あ、ありがとうございます」
「どこの師匠だ俺は、てか喜ぶな」
「だって！　ユウくんからの言葉は侮蔑や罵りでも……最近は喋る機会も少ないから大切だよ！」

……姉貴の俺への溺愛がかなり深いものだとは知っているが、まさかマゾ方面に進むとは。
なんというか、本当に残念な姉貴だよなあ。見かけも性格も悪くないのに……これだけで難あり判定余裕だからな。

「っ！　ユウくんに心の内で褒められた気がするっ、すごい嬉しい

！　勘だけど歓喜っ！」
「こえーよ、もはや超人級までに研ぎ澄まされたその勘は俺からしたら恐怖の対象だよ」

その勘が大体合っていることが恐ろしくて夜も安心して眠れなくなりそうだ。

「姉貴と話すと本題からだいぶ逸れるな……えーい黙って聞きやがってください」
「は、はいっ」

なんか正座して、告白を受ける女子のように頬を赤らめ……って違うからさ。
悪いけどそんな色びたことでもなければ、それなりに真面目なことだから……いや告白が不真面目ってことじゃないけれどな。
だがしかし、俺は今言おうとしたことは――ある種、姉貴に悪いことをしてしまった訳で。

「あのさー……勝手にホニさんを学校に行くことにして、すまん、というかごめんなさい」

それが言えなかった。登校の前日に「姉貴、これからホニさんが同じ学校に通う事になったからさ。理由はいつか話す」と言って納得したかも聞かないまま、ホニさんが学校に行くことになっていた。
その時姉貴は少しばかりは驚いていたけれども「じゃあ今度話してね、家事は今までと同じようにすればいいよね？」と聞こうとたことまで言われてしまった。

「え、なんでユウくんが謝るの？」
「いやさ殆ど突然でさ、姉貴に何にも知らせない内に……さ」

「ああー……」

ご飯を茶碗へよそう手を止めて、うーんと何か思い出すように姉貴は言った。

「少し驚いたけどね、でもきっと留守番って寂しいから。良かったと私は思うよ？」

姉貴の学校でのキッチリと引き締まった顔でも、俺へ向けるデレデレとした笑顔とも違う――母性のような包み込む優しい笑みを浮かべていた。

「そ、そうか？」

「うん、ホニちゃん家事はすごい良くこなしてくれてビックリしたし、和風料理はホニちゃんにお任せだしで助かってたけどね。でもきっと私たちが学校に行っている間は一人で寂しかったと思うんだ」

自分にそんな経験があるのか、また思い出すようにほんの上の宙をみて語る姉貴。

……まあ俺らの家庭は母が放任主義だからな、仕事上仕方ないし。どうしても母親的立ち位置は姉貴にならざるを得なかった感もある。

だから姉貴は俺が遊びにでかけている間も家事を一人でやって、それほど狭くも無いこの家に一人で居て――そんなことも多々あったのかもしれない。

「……そう、だよな」

「ホニちゃんは良い子だから、きっと学校も上手く行ってると思う。ユウくん、どうかな？」

「ああ、クラスメイトに空前絶後の人気者だな」

大げさでなく、それは本当だ。それが神様であるからだとして、それを抜いてもホニさんは可愛いくかなり魅力的だと俺は思う。

「良かった、ならいいんだよ。ユウくんが私に謝ることなんてもっとないよ、理由はどうあれホニちゃんが学校に行くことになったのは私も嬉しいんだから」

こんな表情を俺にみせるのはいつ以来だろうか、そう昔に見た訳でもないのに、どこか懐かしい感覚。

「姉貴……」

「ホニちゃんは、この下之家での大切な家族の一人でしょ？　ユウくんも桐ちゃんもそして――」

「ああ、ありがとな……姉貴」

「ユウくんにお礼を言われると照れちゃうね……よーしご飯は通常の一五〇％盛りにしたげる！」

「いや気持ちはありがたいけど……朝から重いっす」

俺は苦笑しながらも、やっぱり姉貴は凄い女性だと内心思ってしまっていた――嘘偽りなくそれは本当な。

話し終えたその約二分後には最初にユイが、それから鈴なりに起きて居間に集まってくるのだった。

「ユウくーん、ホニちゃーん支度できたー？」

「ああ、今行く」

「うん、出来たよー」

最近はこの三人で登校することも良くある。ホニさんが学校に通い始めてからはユイがいつも通りに先に出るのはそのままに、俺と姉貴とホニさんで家を出る。
姉貴は生徒会で先に行くことがあることもあって、俺とホニさんとの二人登校も何度もある。

「じゃあ行ってくる」
「おお、いってくるがよいー（一応警戒はしておけ）」

心詠というよりテレパシーと言った方がいいであろう交信をしてくる桐、そしてその警告を忠告を、俺は勿論わかっていた。

「（わかってる、昨日の今日だからな）」

昨日は不意を突かれた感もあるが、俺の実力不足と戦いに慣れたことによる油断もあったと自覚している。
だからこれまで通りかそれ以上に身を引き締めないといけない。

「桐ー、行ってきますー」

そうして三人家を出る、昨日のような異常な世界を歩きはじめた俺にとってはこの通学路でさえ、平和であまりにも普通なその日常を噛みしめる一要素だった。

「そういえばユウジ。また失踪者だってよ」

学校につくなりいつものメンバーで集まって、アニメの話題をあげるのかと身構えているとマサヒロがそんなことを言ってきた。

「あー……本当に多いな」
「そんなんだよなー、今月だけでもう三人だぜ？　数えたら十数人だってよ」
「でもそれが本当なら大事件のはずだよね……テレビでは見るけど、言う程話題になっていない気がするね」

その俺とマサヒロのほかにユキも加わり、そのユキが言ったことを考える。
そういえばテレビの報道では見るが、ここまで頻発していると警戒の意を籠めて例えばなら休校処置が取られそうではある。
藍浜高校はなぜにそんな風にある種冷静なのだろうか、それに失踪事件を学校が知らせたのは「この学校の生徒」が失踪してから。
……ありがちな、学校の隠ぺい体質が影響してのことなのか？

「集団失踪事件……なのでしょうけど、日が分散しすぎているのですよね」

思えばアイツらはどうしてコトナリと呼ばれるホニさんとコネクターとか言われる俺の「一組」を狙うのだろうか、集団でコトナリが居れば――表現は悪いが手っ取り早いはずだ。
何かアイツらは集団で実行を起こすことを拒んでいる理由があるとしたら――あの維持に力が要るとか言う”虚界”なのだろうか。

「うむー。どうにも不可解なりよ、警察も動いてるらしいけども、その証拠も痕跡も見つからないというね」

その理由は俺が知っている、そもそもアイツらは「何かを残す」ことをしないようにわざわざ世界を変えているからだ。
違う世界で消され――いや、あの男の言う通りならば”寄り代”

ごと殺しているならばこっちに何かが残る訳が無い。
あくまであの世界に取り込まれた者のみぞ知り、それを伝える術は狙われ消される者には何もない。
……一種のファンタジーだが、あまりにもこれは完全犯罪すぎる。

「失踪者が出たのは四月の下旬からだったはず、それから一人二人と増えて言ったらしいな」

マサヒロがネットで拾ったかわからない情報を漏らしてくる……ニュースを殆どみていないせいで気付かなかったはそんな頃からか。

「しっかし、四月以前にも失踪事件があるんだよなー。った一人とはいえ、今も見つからない――さあユウジはどう推理する」
「い、いきなり推理言われてもな……最近の事件とは関係ねーんじゃないか？　てか時期を教えてくれないとどう考えようも無い」

マサヒロがその質問に答える前に、ユイが急に身を乗り出して自分の出番だと言わんばかりにしゃしゃり出る。

「三月の上旬だったハズだぬ、それも引っ越して来たばかりの中学生少女……少女っ！」
「少女ポイントを強調してるのは、何か狙っている節でもあんのか？」
「ふふ、言ったでござろう……私は可愛い女の子と美少女が大好きだと！」

あー、そんな設定も有ったねー（なんか薄れてきてたけど）

「ユイ基準での美少女ってどんぐらいなんだ？」
「それを聞くか……お前も罪な男じゃのう」

げへへお代官さまこそ、って乗ればいいのかコレは。

「だってユウジの周りにはアタシを除いて美少女ぞろいじゃーんっ」

「……自分を除くと言うのはツッコミを入れてほしいが故か？　自虐的な」

「もー、こういう時は”ユイも可愛いよ”じゃんかよー」

「俺はこれからもその七色変化なユイの心境は読めそうにないっ！」

無理だろ、たまには直球投げてくれないとファールｏｒストライク連続確定だっての。

「本当ユイには困ったもんだよ……なあホニさん」

「え……あ、うん……えと、なんだっけ？」

突然の振りでオドオドするホニさんが見たかった訳では……ないわけではない。が、少しばかりホニさんは動揺していた。

何か思い当たる節があったのか、たまに見せる沈黙しているホニさんの神妙な表情が……そこにはあった。

「ホニさん？」

「な、なんでもないよっ！」

そうして笑顔で笑う……けれども、それには少しの無理が入っているようにも見える。こう見えてしまったのも俺がホニさんの正体をまた疑問に思い始めたから……なのだろうか。

それでホニさんを可愛く思えなくなるのは、すごい嫌すぎるな。気のせいだろ、ホニさんは通常運行で可愛いわけだし。何の問題もないなっ、うん！

そうは思ってもホニさんの浮かべるそれからの表情が気になって仕方なかったのだった。

……ホニさんが気になることってなんだろうか。思い当たった節って、有ったとしたらなんだろうか。

あー……俺ってば本当にホニさんのことは何も知らないんだなあ。

第２６５話　√２－７０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

学校が終わった……いや「人生オワタ」みたいな方面でなく、普通に今日の授業が終了したってことだぞ？

学校ではやはりアイツら――そろそろちゃんと”アロンツ”って呼んだ方がいいか。

そのアロンツに襲われることはなかった、学校での戦闘は今まで一度もない、というのも周回的に雨澄みと戦うのは学校が確実に存在しない日曜なのもあるが。

俺が倒された銃使いはホニさん曰く「我が力を使って倒しちゃった」と言っていたが……またむくり復活して襲撃してくる可能性も少しは考えていた。

「（にしてもホニさんは力を使ったんだよな……？）

使って良かったのか？

桐は使うなって連呼してたけども……あれだけ言っていたのにも理由があるとは思うんだが、どうにも俺には見当もつかない。

……はずなのだが、何故か「使ってはいけない」という危機意識のようなものが頭の隅は存在するのだ――

おい、俺。もったいぶらずに教えてくれないとお兄さんどうすればいいのか分からないぞ？

「（俺は相変わらず役に立たないな）」

……自虐に聞こえるかもしれないが、ガチで。ここで主人公的直感働かなくてどーするよ、俺。

そんな脳内一人漫才を繰り広げながらもいつものメンバーとの会話を忘れないという聖徳太子に一歩近づかんばかりの無駄な頭の回

転振りを披露しながら帰宅していく。

「さってと」

家に着き、俺は制服を脱ぎ棄て、簡単な部屋着へとモデルチェンジすると一目散にパソコンへと歩み寄った。

電源ボタンを長押しした上で、立ち上がる液晶画面を眺めている内に椅子へと座り画面へと向く。

「グーグルさんの出番――でもないか」

自分のアカウントに入ったところでインターネットブラウザを立ち上げ、空いた左手で机に置かれていたテレビのリモコンを手に取ったと思えば電源を入れ、チャンネルを回す。

「……この時間帯ニュースやってねえなあ」

ミ○ネ屋とかニュースじゃねえし、情報バラエティだし。

「ならばまとめサイトを巡りながら……っと」

俺はテレビでニュースが流れていないことに不満を垂れながら俺はあるキーワードを検索する。

「”藍浜町　失踪者”……検索ＧＯ」

するとやっぱりお世話になったグーグルさんの検索結果画面には「藍浜町へようこそ」という文字列が一番上には並んでいた――

「藍浜町ってホームページ持ってたのかよ……」

海と山しかない正直に何にも無い町だぞ？

伝統行事のようなものがなければ、星の見える展望台のなければ、港の見える丘なんて大層なものないし、枯れない桜なんてあるわけない。

至って、平凡な町だ。あるとしたら――

「ホニさんの神様としての伝説……とか？」

……今度調べてみよう、それを後回しにするほどに俺はある事柄が気になっていた。

それは学校で話しいたことで、どうにもアロンツの犯行だとほぼ断定するならば――いなくなった人の数＝アロンツによって消された。ということになるからだ。

明確な数とマサヒロの言っていたことが本当ならば、失踪が始まったのは四月下旬――それから六月の下旬である今日までにどれほどの人がアロンツに消されたか。

それを知っておいたほうが、今後の襲来ペースを考える上で必要なことだった。

「あったあった」

なんとも「素人が頑張って作りました」感満載の手作り風味の町のホームページには真っ先に”藍浜町失踪者一欄”という項目が目に入った。

そのページの冒頭には「現在でも警察や町内会の方々等が～」といった断りがあった上で、失踪した日付順に消えてしまったであろう人の名前が並んでいる。

そこには六月、五月、四月と並んでいて――そして最後に「三月」という項目があった。

「ユイに言ってたことはガチか」

確かに上の四月の人数を見るに三月は一人のみ。人数数えをする前に詳細ページに飛ぼうと、最初の三月に失踪した人のページへと飛んだ。

「時　陽子……とき、ようこ？」

性別女性、年齢十三歳。中学ニ年生へと進級直前に失踪。更には両親が亡くなっていることや引っ越してきた直後ということが書かれていたが……一応これはプライバシー的にはどうなんだ？確かに特徴や情報を挙げるのは必要だけども……うーん。更には顔写真が載っていて――

「お、おう」

そこには普通に顔の整いながらも童顔な女子の顔が写っていた。栗色の短い髪に、大きく澄んだ瞳。短髪のせいかどこかさっぱりとしたスポーツ系にも見えなくないその少女を眺める。

……いや眺めるって、そんな小さな子を熱のこもった視線で見やる――そんな！　俺はロリコンじゃないよ！

ただ見惚れてただけだって、写真うつりが良いのか。俺にとってはかなりの美少女に見える――が、しかし。

「うーん？　どっかで見たような気がするな」

どこだろ……身近な人に栗色の髪の子は居ない、姉貴は栗色とは

また違った暗みのある茶髪だから違うだろうし――って姉貴が失踪しているわけがない。

「思い出せん、思いつかん」

あー、気になるったらありゃしない……はあ。

それからのことだ。やはり一週間毎に訪れる雨澄から毎回逃げ切っていた。

一度現れた銃使いの男が現れることはなく、全日の放課後と日曜だけ非日常へ飛びこむ生活が続く中――そうして本格的に夏が訪れた。

七月二三日

クーラーがいかれて低温サウナと通常のサウナの半ばほどの蒸し暑さを誇る部屋の中で、どうしたら涼しくなれるだろうかと思考していると。

「ユウジ、海行こう」

「よしきた」

この間一秒あらず即決、そうして夏休み最初のイベントは海へ行くことに決定した。

第２６６話　√２－７１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

深夜アニメの水着回は作画が悪い法則……というのが少し前まではありましたね。

第２６６話　√２－７１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「おおー……」
「海だあああああああああああああああああああああああああああ」
「おお……いきなりのテンションの高さにひいている俺が居ますよっと」
「ふっじさんだあああああああああああああああああああああああああ」
「見えねーよ、てか分かりにくいネタすんなやユイ」

ということで俺イン海岸でさ、なんというか泳いだら涼しくなるかなーってな思いで承諾したってのに……隣の眼鏡女が五月蠅いこと五月蠅いこと。

ちなみに海集合で大体分かる為、今回は現地集合だ。一番乗りは俺とユイで、ホニさんと桐に姉貴は少し遅れてくるらしい。アイドルお二人はもう少しだろう。

女の子が出かける為には支度に時間がかかるらしい、とのことで。

「ぬ、ユウジ。いまアタシをさりげなく除外しなかったか？　なにとは言わないが」
「さ、さあなんだろね？」

なんでこうも俺の周りの変人は、こういうところに鋭敏なのだろう。桐然り姉貴然り。

「わーいわーい、今日もフッィシュをナンパしてキャッチアンドリリースッ！」

釣りに来たのかよお前。
「家から水着だぜい」となぜか水着に薄い上着を羽織っただけという……夏だけ許されそうな光景ではある。
ちなみに眼鏡ではなくゴーグル……のはずなんだが、それまでも渦巻き模様と俺から見ればぼかしが入っていると言う徹底ぶり、いやもうキャラ立ちまくってるんでそういうのまでやんなくていいから。

「家から水着とか子供かっ」
「ほほーうアタシがロリに見えると」

その反応は予想だにしなかった。

「でも、水着で、外に出るなんて、季節のおかげで、違和感はないだろうけど……これはいいかもしれない」

その反応は予想したくなかった。
これが後に変態ゼ〇ナール顔負け……は流石にないにしてもユイが露出癖に目覚めてしまう一歩手前のことだった——まあ嘘だけど、とりあえず今年中は。

「おっしゃあああああああ、青い砂浜とさらさらの海ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」

なんて不気味スポットだそれは。赤土で赤い砂はあり得て、黄砂も名称であるけども……まさか青が加わって”三色戦隊サンドレンジャー”になるとは。
海がさらさらってな——もういいや。

「ったく、はしゃぎすぎだろ」

「……ユウジの腰から上は冷静なのに、下は活発だぬ」

その言い方は誤解を大いに招くと思うぞ……一応弁護とも補足とも言っておくが、足踏みしてるだけな？

真夏の砂浜は太陽の恵みでアッツアツなんで、定位置に居るなんて足焦げるからガチで。だから仕方なしに足踏みしているわけで。

べ、べつに持たされたパラソルやらクーラーボックスをさっさと放り投げて海へダイブしたいなんて思ってるんだからね！

「ユウジ様申し訳ありません。そうとは知らず私は準備を怠っていました……っ！」

「ユウジの下は活発……男の子だもんね」

クーラーボックスを提げたベージュのパーカーを羽織る姫城さんと、真夏の太陽の下でなんとも健康的なデニム柄のハーフパンツと柄Tシャツ姿のユキが気付くとやってきていた。

姫城さんは真夏の空の下でも分かる程に頬を赤くして、もじもじと恥ずかしいかのように身体をくねらし、ユキは俺から露骨にぷいと視線を逸らした。

しっかし、私服姿の二人が並んでもこれまた絵になるなあ……と思う暇は五秒とて与えられないっ！

「いやいやいや！　言葉通り取るなって」

少なくとも俺はあまり下ネタには走らない

「言葉通り……はっ！　まさか更に隠語が含まれていると仰るわけですね！？」

「……夏だもんね」

姫城さんはなんなんだ、何にそんなに悶々としているのかと！
ユキはもう性別でなく季節が理由に……まさか夏休みボケと？

「……この方々は立派な色ボケだな」

そう、ボソッと呟いた。藍浜高校ダブルヒロインはこれでい良いのだろうか……その極端な妄想力は中学生男子ですか貴女達は。

「じゃあユウジ、ちょと着替えてくるねー」
「おおー」

スポーツバッグを方にかけて備え付けられた女子更衣室に駆けて行った……度々「あち、あちっ！」と足をバタつかせるユキさんかわゆす。

「姫城さんは行かないのか？」
「はい、私はこのままで」

……そういえば嬉しはずかしプール授業も姫城さんは休み続けていたような。
べ、べつに姫城さんのナイスバデーなスクール水着姿が見たかったわけ――ですよ、はい。……とても楽しみにしていただけショックでかいんすよ。
姫城さんとか、もうスタイルばっちぐーじゃん？　それに身体のラインを魅せるスクール水着ですよい？　似合わないわけがないってもんですよ、それが――

「ユウジ様はどうするのですか？」
「ん？　下に着てきたからな」
「そ、それでは私が今脱がしても……論理上は問題ないわけですね

？」

「いやさ、姫城さん。そういうのを息を荒げていうのは見かけで論理上問題が起きるからさ」

なんというか、本当に俺の周りには残念美女が多いような。

「来たぞー……ほれほれ、スクール水着じゃ」

「（ごくり）」

「……え、そこまで素直な反応をするとは思わなんだ。な、なあどう反応すればいいのかの？」

「まっさかー、冗談に決まってるだろー？　妹がスクール水着着ただけで欲情するかよ、って」

「……む、その言い方は少々傷つくぞ。い、いいじゃろう！　なら全裸になっちゃる……お主の意思の下に」

「それは止めろ、俺を犯罪者仕立てにする気か！　スク水似合った妹め！」

「……う、うーむ。これこそ反応に困るのじゃが！？」

俺のスク水愛はどんなに凄くても、小学生相手には欲情なんてしない。

いやー、未発達の体にスク水ってのも――――落ちつけ、俺。こういう時は違う事を考えるんだ。

そうだな……競泳水着とかどうだろう？　あれは実に健康的で――

「俺は一体なんなんだよ！？」

「わしが知るか！？」

そんな掛け合いをしていると、下之家の残りの女性陣がやってきた。

「おまたせ、ユウジさんー」
「おまたせー、ユウくーん」

いやー、二人並んで歩いてくる姿は……姉妹のようだ。なんと微笑ましいものか。

「わぁー、ユウジさんユウジさん！？　これが膿というものなのかな！？」

うん、漢字大間違えで凄まじいほどに台無しだね。変換ミスも対外にしとけよォゴルァ！

「そうそう海ね、ホニさん的には？」
「すっごく綺麗！」

確かに真夏の太陽煌めく下で、青々として揺れる大海原はなんとも綺麗なものがある。
それに都会ではコンクリート固めやらをしてこんな風な砂浜が残っていないところも多いらしい、砂浜はサラサラでゴミも定期的に掃除されているので滅多に落ちていない。
昔懐かしい海の家を始め、最近建て直された夏限定で解放される男女別更衣室は常に清掃が行き届いたそんな海である。

「本では知ってたけど……すっごいヒロインだねー！」

うん、変換ミスいい加減にしろよ、な？

「海って我自身は言ってたけど、今日見るのが初めてかな……」

そう言って吹き抜ける潮風で髪に手を当てるホニさんは、どこか容姿以上の大人っぽさがあってすこしドキリとする。
ホニさんってやっぱ可愛くて綺麗だよなー、と見惚れてしまうわけで。

「ん？　ユウジさん、我の顔に何かついてる？」
「あ、ああ。そうだな……例えば目とか？」
「違うよ！　それは付いてなきゃのっぺらぼうだよい！　何かゴミとかついてるって聞いてるの！」
「みたところついてないぞ？　ちょっとばかしホニさん可愛いなーって見てただけだぞ」
「か、可愛いって……！？」

あ、そういえば盛大に口に出したのは今が初めてな気がする。
おお、可愛いすぎてついには口もそれを拒むことをしないとは…
…さすがホニさん、可愛い。

「なっ……なっ……」
「ん？　どした？」

顔を真っ赤にしてうろたえるホニさんがどうしたものかと顔を覗きこむと――

「な、なんでもないよ！　じゃあお姉さんと一緒に着替えてくるねっ！」

なんというか俺から逃げるように姉貴を連れて、ユキに向かった更衣室へとむかった。

「……ユウジ様、それは落とし文句です」

「ん？　俺は心の内を吐露しただけだぞ？」
「……まさかの落とし神ってかあ、罪な男じゃんねえ」
「おれは〇ＦＰなんてやってないぞ」
「まったくこれだからユウジはまったく」
「……どこのナ〇さんだよそれは」
「ユウくーん、あとでどういうことか聞かせてねー！」
「遠くから言うなあああああああああああああ」

ここでナレ＆ナレです。
と、というわけで”ポロリは小説媒体上期待しないでね！　キャッキャウフフな真夏の海水浴”開幕ですー
……どうせ次回の更新で終わるでしょうけど（ボソッ）

第２６７話　√２－７２　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

水着って種類多いのなー、俺ってばビキニとスリングショットぐらいしか知らなかったぞ。

第267話　√2－72　G.O.D.

「ふー、今日は楽しかったな」
「ですねー」
「だねー」
「楽しかったー」
「うむうむ」

いやあ、美少女たちとの海水浴……夢だったんだよ、さりげなく。
在来メンバーのユイとマサヒロは色気の欠片もないし（マサヒロにあったらおかしいんだが）
今年もただ海ではしゃぐだけかと思ったらこれほどまでに海水浴を満喫できるとは！
……それに、戦いを未だ続ける中でのこういう休息はやっぱ大事だなー。羽伸ばさないとストレスやら疲労で倒れてしまいそうだ。
そうして夕暮れを迎えて、少しは涼しくなり始めた海岸を体中に潮の香りを乗せて後にした――

ええええええええええええええええええええええええ、前回「どうせ次回の更新で終わるでしょうけど」って言いましたけど！
冒頭で締めに入った上にガチ終了ですか！　おかしいんじゃないですかっ、スタッフの頭の構造どうなってんの!?
シリアスの中にちょっとしたコメディ要素を入れることで話の起伏の効果促進……なはずなのに、どうしてあからさまにやらかしてくれるかなあ!?

はーい、最近毒されて来ているとはいえ私としては不本意ですが……やり直しを要求します！

ダイジェストで終わらされるなんて、錦○監督と赤○シリーズ構成の某電○文庫アニメじゃあるまいし！

ということでリアリー！

＊　＊

真夏の太陽の下、ジリジリと髪の毛が焼かれていくことに嫌になり屋根付き清潔な男子更衣室に逃げ込み、俺はさっさと水着に着替えた。

おっと、お約束の「いっけねー、男子更衣室と女子更衣室間違えちゃったー」という展開ののち女性陣からこのうえない非難を浴びせられる――そんなわざわざ忍び足で地雷を踏みに行くことなんぞしないね。

俺だってアニメや漫画で学んでいる。だからそんな展開になることはないということっ！

……まあさ、あまりにも色気要素ないなーって思う時はあるよ？だって少年漫画でさえあるパンチラもないしさ、お約束の着替え遭遇イベントもないしさ。

あー……そう考えると、すげえ残念すぎる。

「いっそ、行ってみるか？」

まあ、ないけども。

俺はそんなエロガッパと名づけられそうな行動はしないのだ。

「ユウくんお待たせー」

「おお、姉貴……おお」

姉貴がいつもとは全く異なる肌の露出の多いビキニタイプのなんとも色気に満ち溢れた水着でやってきた。

それは息を飲むぐらいに似合っていて、色が水玉なのも非常にエクセレント……で、弟としては駄目なのだが。

胸がなんとも大きいわけで、水着から溢れんばかりのバスト――とはこのことだろう。てか姉貴の着やせっぷりは半端ないな、毎年思うけども。

「ユウくん、なんで覗きにこないの？」

「え……えー？」

いきなり何故そんなことを言うのかと。それに屈むとね、腕と腕に挟まれた豊満なバストがですね……実に淫靡に形を変えるわけですよ。

いやいやまずは姉貴の発言から正そうか、うん。戻れ、俺の理性。

「だって、ハプニングであるじゃない……期待してたのに」

「いや、そんなハプニングめったにないから。期待すること自体間違えだから」

現実でそんなことあるわけない、少年の成長期を刺激する微エロ展開なんぞ現実で換算したら天文学的確率でしかならないだろう。

というかそんな一瞬の悦びに、人生投げ捨てたくはないわけですよ、はい。

「まったく、ユウジはヘタレじゃのう」

「え、なんで俺責められてるの？」

ガチで分からない、最近残念度が低くなりがちだった桐が今日にきて素晴らしい残念なことに。

「ふふ～ん、アタシのナイスバデエを拝まないとは……じつに勿体ない」
「いやユイ、お前がスタイル良いのは認めるが。別に見たところでなんともない」
「はい傷ついた！　アタシ今傷ついたよ！」
「そんなんで傷つく豆腐メンタルではないと思うんだがな、お前」
「……よ、横ピース」
「あー、分かりにくいネタ使うなって」

ユイはなぜか痴女よろしくのブラジル水着またの名をスリングショットだったが絶対にツッコまない、まあ生地は厚めで太めだし……まあギリギリ大丈夫だろう。
グルグルゴーグル越しとはいえ、ほんの少し俺がユイのことを言った時に少しはムッときていたのかもしれない。
僅かに眉を吊り上げて、頬を膨らましただけなので定かではないが。

「（私も負けてられない！）男の子だもんね……で、でもユウジならいいよ」
「よかないよ！　ユキさんなんか姉貴とかに対抗心燃やしてもしょうがないから！」

ちなみにユキの水着は赤色ホルターネックのツーピースという上半身と下半身で分かれたタイプでストラップを首に吊るしていてビキニよりは露出度は落ちるが十分に胸の豊かさを表せている。
その……いやね、少し見える谷間チラリズムが本当にさあ……ユキさんはスレンダーな割には出るところが出ているというモデルが泣いて悔しがりそうなスタイルの良さだよなあ。
姉貴には負けるけども、この年でそれはかなりに大きい気がする

……恐らくはユキよりも大きいであろう胸を持つ姫城さんの水着姿を一度は拝みたかったものだ。

「ユウジ様……私は泳げませんので、やはりご期待に沿えません――でも私から見に行くことは可能ですね」

「期待とかじゃないから！　というかさりげなく怖い発言自重してください、姫城さん」

姫城さんはやはりパーカーを着ている、言い忘れては居たが麦わら帽子を持ってきていたようで……どちらかといえば大人っぽい部類に入る姫城さんの容姿とのギャップが実に良い。

まあ発言としてのユキと姫城さんは――うん、もうそれ言うのも野暮だよな。ま、まあ美女だからいいですけどね！（謎）

「あ、ユウジさーん」

「！！」

おおう、初めて”！”を二連続で使っちゃったよ。これって本当は使い方として駄目なんだけども、まあそれほどに無言の驚きというかなんというか。

ホニさんは白地に黒いドットと裾などに茶色の線が入る落ちついた色合いのワンピースタイプのＡラインという水着で、言葉通りにワンピースを基本として裾を切り詰めてミニスカートのような長さになっている。

フリルが付くと子供っぽさが表立つがこれにはなく、ユキさんと同じくホルターネックなのでどこかワンピースタイプと総じて肩が露出する健康的な色っぽさが有ってこれも実にいい。

というかホニさんもスタイルいいんだよなあ、中学生容姿にしては各所成長してるし――てか水着姿も可愛いなあ。

「ユウジさん、お姉さんのお古なんだけど……これどうかな？」

何か見覚えがあると思ったら、何年か前に姉貴が来ていた水着だった。

てかこの水着は……もう三年以上は経っていたような気がする、姉貴が今のホニさん並みスタイルだったとすると――止まらない成長期ですね。

「に、似合ってるぞ？　可愛いんじゃないかな、ホニさん」

「か、可愛い！？　ユウジさんさっきも言ってたけど……お世辞言ってもだめだよ？」

「いやいや、ホニさんはすっごい可愛い。これは俺がとにかく断言する、もうホニさんはむっちゃくちゃ可愛い」

「っ！　な、なななななななな」

俺の言葉で動揺してあたふたするホニさんかわええなあ。

「ユウくんは可愛い系のが方がいいんだ……」「あー、ユウジがまた落とし文句言ってるよ」「……私にも言ってほしいです」「アタシにもカマン」「健やかに爆発しろ」

なぜか非難轟々、言われたい放題なのだが……まあスルーで。

ホニさん以外の女性陣からジトッとした視線をいただいているけども、流石にごちそうさまなので……話題というか、海に来た目的を思いだす。

「と、とりあえずは海に来たんだからなにかやろーぜ！」

「ユウジ、ビーチバレーの球持って来たけど、やる？」

「おお、じゃあ俺やろっかな」

「私もやります、ではユウジ様との同じチームに入るのは私でいい

ですね」
「だめだよ姫城さん、こういうときは幼馴染でユウジのことを知っている私が」
「いえいえ篠文さん、いいですって。私とユウジ様は以心伝心ですからお茶の子さいさいです」
「いいえ、ここはユウくんのお姉さんである私が――」
と何故か（よくは分からないが）三つ巴のバトルが繰り広げられていたが「じゃあホニさんは分からないだろうと思うから、俺と同じチームでいいか？」「いいけど、やり方教えてねー」「うむ、じゃあわしも入るかの」
三対三のビーチバレー。チーム別けは”三つ巴戦いチーム”と”ユウジシスターズ”ということに。
「じゃあアタシが審判やるぞー、マサヒロは二組なのでいない」
「……得点ぐらいやらしてください」
そうして夏休みの海でのビーチバレーに始まり、遊泳対決にお決まりの水の掛け合いなどなど――あっという間に楽しい時間は過ぎて行った。
＊　＊
それで冒頭に戻ります……うーん、なんか消化不良なんですが――まあないよりはマシですね。

第２６８話　√２－７３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

地味ですがユウジが足を一歩踏み出しますー、主人公はそうでなくては

第268話　√2－73　G．O．D．

七月三十一日

俺は未だに蒸して、今にも蒸し饅頭が出来上がりそうなほどに熱せられた部屋の中で悔し紛れに団扇で自分を扇ぐ。
ただただ熱い空気をかき混ぜるだけだが、正直やらないよりは気分的にだいぶ違ってくる。
そんな時にふいに携帯の着メロが鳴りだし、バイブレーションで机の上を震わせる。

「はい、もしもし下之ユウジです」
「俺だマサヒロだ！　なあなあ、今日はとびきり熱いなー。ユウジはどうしてるか？　どうせ部屋でインターネットでもしてるんだろ？　だからな俺が何を言いたいと言うとだな――そんなことより肝試しやろうぜ！」

俺は律儀に黙って聞き続けたマサヒロの弾丸喋りをなんとか試しという言葉を最後にして電話を切った。
インターネットをやって何が悪い、それにどうせなんとか試しってのも――

「……」

なんとも無表情に画面をみつめている、また画面の端で着メロと震動を五月蠅くする携帯が――

「オフ」

俺は画面を開いて「マサヒロ」と表示された携帯液晶とスピーカから僅かに聞こえるマサヒロの声を無視して俺は静かに通話切りボタンを長押し――まあ言えば電源を切った。

「こんな暑い中に電話かけてきやがって」

俺は今日に限ってかはわからないが無気力だった。海水浴は楽しい半面疲労も訪れた、それから数日が経った今。

夏休みだからとインターネットをしてみるが、どうにも頭に引っ掛かることがあるせいで楽しめもしない。

その要素はと言えば――

「ホニさん……」

何者なのだろう、海ではしゃぐ姿は本当に神様とは思えないほどに好奇心に満ちた子供らしかった。　可愛い、そんな感想が姿や挙動を見る度に思うが――それは本当のことなのだろうかと、疑うようにもなってしまった。

それもあの戦いから、雨澄との戦いはあれどあれ以降は姿をみせない銃使いとの戦い。

あの時俺は完全に敗北し、ホニさんと桐に命を救われ助けられたのだ。

「……桐は何か他にも知っているのだろうか」

知っているだろう。俺は自問自答した。きっと桐は知っている、あいつは攻略情報を持っているのだから――ただ必要以上にそれは引き出せない。

桐が話したがらないだけかもしれないが、核心に触れる部分は殆どと言っていいほどに聞きだすことは出来なかった。
雨澄を連れ込んで聞きだした情報も桐は知っているのだろう――銃使いの言っていたこともおそらくは。

「俺自身が見つけださないといけない……」

ってか。
ホニさんの本当の姿を俺は知りたかった。ホニさんのことをもっと知りたかった。
ホニさんはどうやって生まれ、どうやって過ごし、どんなモノに出会ったか――これまたホニさんを突き動かす感情の一つである”好奇心”が俺にもあるのだ。
そして俺は――

「俺はどう思われているのか」

俺は言い張っているが、ホニさん自身は俺を俺達を家族と思ってくれているのだろうか。
それさえも俺は知らなかった――聞くことが俺は怖かった、それを確かめることで。以前に俺は気持ちを確かめる言葉が全てを壊してしまったから。

それでもいつまでも立ち止まっていてはいけない。そろそろ足を踏み出す頃合い……いや、遅すぎるぐらいだな。

「俺はホニさんを知りたい、そのためには――」

本人から聞きだす。その方法しか俺にはなかった。
なるほどな……一応これでも俺は主人公だしな。それぐらいしな

いと何のためにいるのか分からないだろう。

「機会があると良いんだが……」

機会と考えて思いだす。俺はホニさんとどこで出会い、どこから始まったか。

始まりの場所、その時俺が訪れなければ出会うことはなかったであろう――

「肝試し……か」

そして見計らったかのように電話のベルが鳴る――しかし電源が切れ沈静化した携帯ではなく、二階に位置する俺の部屋から階段を降りた先にある居間の電話。

俺は自分の部屋を出た、階段を駆け下りた。

一階に居る姉貴が電話の受話器を取ってところで俺は居間へと辿りつき――

「ユウくん、マサヒロくんから電話――」

「姉貴、ありがと」

受話器を手に取りスピーカを耳にマイク部分を口に。

「もしもし、俺だユウジだ――」

第２６９話　√２－７４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ここに来て便利要素の「大規模図書館」追加！　これからもなんだかんだで使い勝手良さそうな気がする。

第269話　√2－74　G・O・D・

「あー……」

思い出すねえ、春のある日に何を思ったかの肝試し。

夏は遠く、夜は昼間の陽の光がないだけで、長袖Tシャツ一枚で事足りるほどにほんのりとした温かさ。

そんな中で「肝を冷やす」ことによって「身も冷やしてしまおう」という誰が考えついたのかがわからない、人の心理やらを利用した夏の名物行事。

夏を快適に過ごす為の冷房が普及した今となっては、涼しさを求めると言うよりエンターテイメントを求め故の通例行事になっていると俺は思う。

エンターテイメントと言えでも、それを何故春に行うのか……当時は企画者発案者であるマサヒロを色々と可哀想な子にも見えた。

だ、としてもだ。結果論で言えば、だ。

「これのおかげなんだよな……」

墓場の入り口で、石畳の道を中心にして様々な形と大きさを誇る墓石が並ぶ光景をみて思う。

この道を真っすぐに進むと僅かだが墓石群が途絶え、木々が生い茂る部分が存在し、それを抜けると今にも屋根が落ちそうな人気の無い神社がある。

その神社の本殿を前に見据えながら右向け右した先には――大きく、綱の巻かれた、一つの石というより岩がそこには鎮座している。

それは神石と呼ばれ、農作物を司る狼の化身が祭られている……というのを実は今日に学校内にある図書館で調べていた。

＊　＊

ケーブル一本と機械仕掛けの箱一つで何でも調べられるこのご時世。各段に進化した情報社会の中でも勝てないものがそれにはある。

「まあ、分かってたけどな」

その地に伝われる御伽話に伝承、少なくともそんな伝説が存在するのは一般どころか世界にパソコンというものが現れインターネットが実現するよりも遥か前のこと。

そんな伝説たちがネット上に存在するのは各個人が調べ、投稿した故だ。

そして、残念なことにインターネット上に「ホニ様」という神様に触れているページは見つからなかった。

現代っ子は打たれ弱い

――と言われがちで、俺も弱い部類には入るが。ことがことだ。

「仕方ない、出かけるか

」

桐にホニさんのことを頼み「もしもの時はアレな？」と言って外へ繰り出す。

手には一冊の新品ノートとボールペンを持ち、俺はもしかしたらとそれを調べるのに適した心当たりのある場所へと向かう。

「（まさかここに来ることになろうとは）」

そこは学校、部活動に躍起になり叫びやら雄叫びをあげる生徒たちをしり目に俺は図書館（通称は図書室）へと歩みを進めた。

この学校の図書館は通常の学業を行う教室とは分離された「文化教室棟」という文館に位置する。

本の取り扱いはあのそれなりに揃う商店街の本屋でさえ打ち負かし、町内一の収蔵量を誇っている。

文化教室棟が三階建てなのに対し、図書館が占めるのは二階分のフロア。

その図書館を中心にして文化系教室が存在するなど、文化教室棟では図書館が主体と言っても過言でない。

それとその収蔵量から土日と長期休暇の間は時間を限定して一般公開されており、土日に訪れれば町内の人が本を読みに来ていることも多々ある（一部書籍は貸出も許可）

情報社会の中での現代媒体と既存媒体の共存とも言うべき、パソコンによる書籍検索も容易で非常に探し出し易い。

例えばこんなキーワードはどうだろう？

『民間伝承』

それだけで何千冊もの本の検索結果が露わになる……ここの図書館はケタ違いの収蔵量があるのだ。

田舎なこともあって土地に余裕のあるこの学校は図書館スペースだけで約七メートル×約九メートルの教室が二十個以上はあるらしい。

そこまで図書館が優遇される理由が。この学校の元が図書館だった、又は初代理事長が本好きだったとも言われているが定かではない（マサヒロ談）

とりあえず俺は本は読んでもライトノベルやコミックで「それは

読書に入らん」と言われがちの娯楽を主としたものしか読む機会がない。

読書に入らなくても、図書館だから本に関するものは揃っていて、この学校のライトノベルやコミックスペースにはいくつもの書架が並び出版社別に分かれているというからこの図書館の本の揃いっぷりには恐れ入る。

だとしても入った最新刊は即刻貸し出されてしまうことや、まとめ借りもしていく輩がいるのであまり読もうとは思えないわけで。

入学して数日はラノベコミック探索に出かけていたが、今では諦めた。シリーズモノな場合、続刊が途切れていたりすると萎える。

……特に一巻の次の二巻だけが欠番していて三巻以降が平然と揃っている場合は非常にイラっとくるね。

大いに話題が逸れてしまったが、俺がここにきたのは他でもない。ホニさんのことを聞けるだけのことでなく、調べられることがあるならば調べておこうと思ったからで。

『民間伝承　神　藍浜』

その三つのあまりにも限定的なキーワードに期待はしていなかったが

『検索結果一件　〝〇〇市民間伝承〟＜内容に〝神〟と〝藍浜〟を含む＞』

「お、おお」

この検索エンジンの優秀さに俺は感嘆の声を漏らした。

てかなにこのチート検索エンジン、内容まで探り入れるとかさ…

…確かに俺も〝細部検索レベル〟なんてあるものだから〟レベル７

（最高）”に設定したとは言え、な。

「細部ってレベルじゃねえ……」

図書館（ここ）の検索エンジンは化け物か。スーパーコンピュータも擦りよってきてもおかしくない。

この学校の本に対する執着心は凄まじいものがあるな、教室にもそういえば本棚がどんと置かれてたし……なるほどな。

いや、でもこの詳細検索に至っては内容まで網羅しているんだよな……？

「……もう電子書籍にした方が早くね？」

それでもこのパソコンには「検索」しかないわけで……なんというか、微妙に残念な感じに思えてくるのはなぜだろう。

「えーと、〇〇市民間伝承はっと……」

『二階Ｆ－３１－５６棚』

すげえな、ここのの所蔵量が棚の数字みただけで凄まじすぎる。

さてと、じゃあ行きますか

＊　＊

そこで本を見つけ、その場で内容をパラパラと見ると”伝説”の章に藍浜町の藍浜神社の傍に祭られた神様――というあまりにもピンポイントなところを見つけ、この本で内容は間違えないことを確

信し借り事が確定する。
少しばかり古い本だが、この学校生徒に限り貸出が許可される類らしく「貴重な本だから」と誓約書のようなものを書かされた。
その紙の記述に「紛失・欠損の場合は――」なんということでしょう、諭吉一枚が飛ぶ結果になるという。これは返さざるを得ない。

地味に通常教室には無い冷暖房完備の涼しいこの環境で読んで内容をノートにまとめようとも思ったが……ここにいると、どうしても帰りつらくなる。
快適さによる気分的に。
もう俺は断腸の思いで本を借りてその素晴らしい空調関係のもとを出て、学校の廊下へ出ると現実に押し戻される。
グッドバイエクセレントスペース、日本語読み英語よろしくのガチガチで使わなかったノートと借りた本を持って家へと帰り、朝に電話がかけられ「今日早速肝試しな」とマサヒロの伝言を思いだしてそれまでは部屋に籠ってこれを読みふけることにした。
そしてその本の記述には――

＊　＊

「おーう、ユウジ。はやいな」
「まあな」

なんだかんだで楽しみにしていた俺がいた。ちなみに俺はホニさんを相手にご指名する予定だ。

「またくじ引きか、でも俺は引かねえぞ」
「ん？　どしたユウジ、まさか誰か一緒に行きたい相手でもいるの

か」

「「それはどういうことですか（かな）」」

マサヒロが

「お、おう！？」

「なっ」

草むらから幽霊よろしくの突然に姿を現した藍浜高校のアイドル二人。

「……ユキに姫城さん、おどかすなよ」

流石の俺も飛び退くからな、それは。

てかマサヒロもビビってるし……おいおい一応肝試し主催者なのに俺はまだしもその反応はいいのか。

「ユウジ様、一緒に行きたい相手というのはどういうことですか！」

「そうだよユウジ！　だ、誰かいるってことなの？」

興奮気味にそのお美しい顔を近づける双方から逃げるように俺は答える。

「あ、まあそうだな……あー」

まあマサヒロや二人の意図することではないとは思うが――話したい、一緒に行きたい相手はいる。

「あ、ユウジさーん」

「おお、ホニさん」

そう、今日の目的は――

「ああ、ホニさん。ちょっと話したいことがあってさ――」

俺とホニさんを何度も見返して何か考える二人の姿があった事を俺は知ることはなかった。

そうして俺とホニさんの初めての肝試しという名の下に――二人の時間を作ったのだった。

第２７０話　√２－７５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

好きな子ほど苛めてたい……そんな経験がありませんでしたか？
自分は少しありますよゲヘヘ

第270話　√2－75　G・O・D・

俺はホニさんとすっかり闇色に染まった墓場を豆電球が頼りない懐中電灯の明かりのみで歩みを進めている。

「ユウジさんユウジさん！」

「ん？」

まだ話す時ではない、だから俺は今はホニさんとの時間を過ごしていた。

「今日は星が綺麗だねー」

「……おおー」

歩きながらもホニさんがなんとも嬉しそうに空を見上げているのにつられて俺も空を仰ぐ。

そこには闇色だけでない燦々とまでは行かないでも確固たる存在を主張する輝く星が有った。

俺は星についてはよく知らない……だとしても今日は空気が澄んでいて午前中は忌々しいほどの晴天だったのも手伝ってか、鮮明にその星は映る。

「……わぁー！」

ホニさんは何百年もここで過ごしていた――何度この空を仰いだのだろうか、何度同じ季節を過ごしたのだろうか。

それでもホニさんは未だに好奇に溢れる視線を興味の対象を空へと向けていた。その姿が俺にはどこか……痛々しくて。

「……ホニさん」
「なにかな？」
「いや……今日はとびきり綺麗な気がしてな」

空を見上げる機会なんて滅多にない、夜空なら尚更。
それだけ俺含めて現代人は前か下を向いて歩き、生きている――
そう思うとホニさんが眩しくも見えてくる。
太陽のように明るく、周囲に幸せを振りまく極上の笑顔、幾度に変わり続ける様々な表情――その全てが、ホニさんが可愛くて隠れがちだけども確かに存在する美しい彼女の要素。

「ユウジさん、あのね……」
「ああ」

二人は顔を合わせずに、空を見上げながら会話をする。空へ語りかけるように、空から語られることを聞くように。

「ユウジさんがね……我と一緒に歩いてくれるのが実は凄い嬉しいんだ」
「俺も凄い嬉しいぞ、ホニさんが一緒に行ってくれて本当に良かった」

あのホニさんがやって来た直後に俺はホニさんに向いて俺は肝試しのペアになってほしいと伝えた。
断られたら色々と心が折られそうだったが――『うんっ、我は大歓迎だよ！』という一つ返事で承諾してくれたのだ。
するとホニさんは俺の方へと向き直ってから首と手を横に振って、

「ううん！　我が本当は誘おうと思ってたから……でもユウジさんが誘ってくれて――本当だよ？　我も誘おうとしたんだからね！」

こういう”信じてほしい”というような意思表示にあたふたとするホニさんは可愛い。

「それなら俺は嬉しいもんだな、ありがとなホニさん」

「えっ、え……う、うん？」

なんでお礼を言われたのだろう、というように不可思議なことを目の当たりにしたように首を傾げるホニさんは。

「ホニさん、もう少しだな」

「うん……」

見つめるように歩いていた二人はまた道の先へと視線へ戻す、墓場を抜けて少しの木々を過ぎれば――

「ついたね」

「ああ」

目の前に見える神社の本殿のことを指さずに、右へと向いた先。

「……もう一つの季節が過ぎたんだね」

それはホニさんと出会った場所。春から夏へと変わりゆく季節の中で様々なことがあった。

ホニさんが住むことになって、家事を教えたりゲームしたり。

戦ったり、学校に通い始めたり、そして戦ったり、体育祭に出たり。

俺はものの見事に打ち負かされてホニさんに助けられたり――少しの真実を知ってしまったり。

「早いもんだな、三か月も経った……」

いや三カ月しか経っていないのか？

それでもこれまでの時間がこれまでの人生の中でも飛びきり濃厚で、驚くほどに変化に満ちていた。

今見える景色も、価値観も普通であることのありがたさも、おそらくは自分自身も。

俺は変わった……いや、今のこの時に変わるのだ。

仮面の外を撫でるようにしか触れることのできなかった余りにも臆病な俺は、これまでで終わり。

俺は知りたい。ホニさんのことを、たくさんのことを——俺は知ってみたい。

無邪気な表情の中に時折見せる憂げでもあり達観しているようでもあり懐かしむようでもあり……寂しそうでも有るような。

その小さい横顔にはどれほどの膨大な世界が詰まっているのか……気になって仕方なかったのだ。

「ホニさん。あのさ」

「……」

俺のどこか真剣な声を聞いて、ホニさんは沈黙しじっと俺を見据えていた。

それがホニさんを傷つけることになったとしても……ホニさんが未知を知りたい欲求と同じように俺にも興味があるのだ。

それもこれもホニさんをもっと知りたいから、その理由はきっと——好きなのかもしれない。

今は家族としてはとにかくに。それからは——分からない。

「俺にホニさんのことを教えてほしい」

あまりに抽象的で、何を指すのかも定かでもない。

聞かれた当人は質問した者に対して疑問符を浮かべることが間違いない発言だった。

のはず、だった。

「……そっか、うん」

そう短く答え、僅かの間を置いて。何かを考えるようにしてから、

「ユウジさんは我のことをなんで知りたいの？」

それは至極真っ当な発言だった、いきなりそんなことを言われても困ることしかできない。

でもホニさんのそれは困るというより、聞き直すようにも聞こえた。

「ホニさんが気になるから……俺にとっての大事な人だから」

俺は今の素直に思う気持ちを絞りだすように続けて、

「ホニさんのことをもっと知りたいんだ」

それはとんでもないほどに恥ずかしく直球な気持ちをぶつける。

「……ユウジさんは、それを聞いて後悔しない？」
「え？」
「ユウジさんには嫌われてほしくない、これからも一緒にいたいから――だから」
「嫌わない」
「なんでそう言い切れるのかな？」

俺の知っている魔法の言葉、どこか言うだけで俺は自身で納得してしまう。

「ホニさんは、可愛い」
「……っ、ユウジさんはもう！　そもそもこの容姿は――」

少女を寄り代にして――銃使いが言うことが誤りでないならば、だ。

「俺はホニさんの可愛さは容姿にあると思う……だがしかし！」

俺は思っていた。その長く床に着かんばかりの艶やかな黒髪も、今にも吸い込まれそうな大きな瞳にどこか幼い顔と女子中学生ほどの発展途上の可愛らしい背丈。
容姿どれもこれもが可愛い要素の一つでもあるが、それは所詮一つなのだ。

「俺はホニさん自身が可愛いと思う」
「え……えっ！？」

目新しいものに目が無い好奇心に溢れるお茶目さと、ころころと百面相のように変わりゆく表情――それとは別にどこかで確かに気遣ってくれるその心。

そんなホニさんが魅力的で、非常に可愛らしい。

「ホニさんの全てひっくるめて俺は――可愛いと思う」

「……ユウジさん、それは褒めてるのかな。聞いててすっごい恥ずかしいよ！」

羞恥のようなもので頬を赤らめ、少し怒るホニさん……本人はやっぱり自覚ないんだろうなあ。

「褒めてるに決まってる。俺にとって、今まで出会ったどんな人の中でも――群を抜いての可愛さを誇るのがホニさんだからな」

「っっっっっ！？」

完全に先程までの凝り固まったような空気をぶち壊して、ホニさんを茹であがらせた。

「ち、調子狂うなあ……ユウジさんは意地悪だ」

「おおう、その発言はちょっとばかりショックだぞ」

可愛い子ほど苛めたくなる……なるほど、その感覚が少しわかってくるものだ。

「はぁ……なんか一人で空回りした気分だよ」

ため息をつくホニさんでさえ絵になるというのだから、もう素晴らしい。

「でも、そうまで言ってくれるなら……そこまで言ってくれるとは思わなかったけど」

よせよ、照れるだろ。

「ユウジさん、我の過去を知っても後悔しない？　きっと嫌われるかも――」

「好きです」

「え、はぁっ！？」

「嫌いになるわけないだろって……そんなことで心変わりするほどに生半可な気持ちじゃない、俺はホニさんのことを知りたいんだ」

何百年にも及ぶその記憶は――あまりに膨大で、あまりに重いものなのかもしれない。

それでも俺は……

「教えてくれ、ホニさんのこと」

しっかりと向き直って、ホニさんの瞳をただ一心に見て言い放った。

「うん……分かったよ、じゃあ話すよ。我の始まりと、それからのこととを……かな？」

そうしてホニさんは語りだす。

どうしてホニさんはここに居たのか、どう過ごして来たのか。

俺とホニさんは神社の階段に腰掛けて、そんな長い長いおとぎ話のようなことを話してくれた――

第271話　√2－76　G．O．D．（前書き）

こういうのを合い間合い間に挟むと効果的だったかもしれん

第271話　√2－76　G.O.D.

HRS√2－4

我は今から何百もの……いや何千ものの季節が過ぎる中をあの場所で過ごして来た。

生まれ、仲間とともに山を駆け抜けていたその時に――

「（っ！？）」

後ろ足を力強く走っていたところで石へとぶつけてしまった。勢いづいた足は固い石へとぶつかると骨の軋む音と激痛が走る。

草むらの地面に倒れ痛さに悶えた。ズキズキと痛む足は地に足をつけることが難しいまでに痛み始めてしまった。

たったそれだけで――走れないだけで、仲間は我一個人を待ってはくれない。仲間が去りゆく中で我は何度も悲痛の叫びをあげる。

それでも彼らは、彼女らは走り去っていく。後ろに目もくれることなく。

そう我たちではついて来れないモノはそこで終わったようなものなのだ。

過ぎゆく後ろ姿をただ眺め声をあげることしかできない我は、絶望の淵に落ちた。

＊　＊

仲間がとっくに去り、静寂を取り戻す頃。辺りは痛みに嗚咽あげながら我は横たわる。

「（このまま我はここで朽ちるのだろうか）

そう思うと虚しくなる、長く長くなにも口に出来ない時はあったが今度はどうだろう。

足を痛め体を動かせない我はいつまで生きることができるのだろうか？

ふいに涙が溢れ、すすり泣く――これで終わったしまうことが悲しくてしかたなかった。

そんな時だった。

「――――――」

仲間ではない、二本立ちの生き物――仲間内ではサルやニンゲンと呼ばれていた気がする。

そんなモノがこちらに近づいてくる。それが余りに突然で得体のしれない存在だったが故に我は横たわりながらも警戒する。

「――……――」

このモノが何を言っているのかは分からない、それがひどく怖い。

動かない我を食糧とするために近づいてきたのだろうか、そうに違いない。

「――――にこっ」

？　その顔はどこか穏やかで、ニンゲンと言うモノを知らない我でも――警戒が緩んでしまった。

そして我の顔のすぐ近くには、肉のようなものが置かれる。

「（！）」

久しぶりの食べ物。いつぶりだろう、倒れてから一つの夜しか過ごしていないが――それは魅力的で誘惑に満ちていた。

罠かもしれない、いやでもここで逃したら。そして我は誘惑に負けるように――それにしゃぶりついた。

「――にこっ」

そのモノの表情は我たちの間でもあるような笑顔だった。

なにか子供をあやすような優しい顔でもあった。

「――――」

するとモノは去っていく。相変わらず何を言っているのかは分からない。

ただ、我の直感のようなもので――また、来る。と言っているように思えた。

＊　＊

二つの夜が明けた。

その朝には以前と同じようにモノが訪れた。そして以前と同じように肉がおかれる。

「――――にこっ」

疑いなく食いついた肉はやはり美味しいものだった。そしてそのモノの笑顔も良いものだった。
我は警戒することを忘れて、そのモノの顔を覗きこんでいた。

そして我は気付く。きっとこのモノに我は助けられたのだと。未だに痛む足に気を付けるように体を起こす。
そのモノは少なくとも若くても鋭い我が歯をみせても驚きも怖がることもなかった。

「――――」

そう思えば我に手を伸ばしてくる、一体何をするのか分からないが。警戒に声を震わすが我の何倍もあるであろうそのモノに抗う気持ちは萎む。
そして――

「（!?）」

そのモノは我の頭の上を、さらさらと優しく撫でた。

「――――にこっ」

突然のことで、それでいてどこかくすぐったく……心地いい。
なんなのだろうか、これは一体なんなのだろうか。

「――――」

そうかと思えばモノは去っていく。そしてまたあのモノが来るような気がした。

＊　＊

足を痛めてから七度の月が昇り夜が明けた。
その頃には痛みも治まり始め、数日でも体を動かさないことでたるんでしまったものを引き締めるように走り回った。
このまま仲間を追いかけても食糧探しに出ても良かったが――またあのモノが来てくれるような気がしたから我はここに居た。

「――――」

そうしてそのモノはやってきた。手には我の食べる肉を持って。
そうして我が歩いて行くとその場におかれた。
ようやく走り回れるようになった我は、肉を食べる前に少し戻る。
モノはどこか不思議そうな表情を浮かべていた。
そして我が口にくわえて持ってきたのは朱色の瑞々しい果実で、食べると甘酸っぱい味がするものだった。
それを見つけ、何かお礼のようなものがしたくて持ってきた。

「！」

驚いたような表情をそのモノは浮かべると、我が甘噛みする果実を手に取った。その反対の手で我の頭をまた撫でる。
それがやはり心地よくて――

そのモノは我を手招いた。こっちてこっちへと。
我は何か恩返しがしたかった。実際のところ命を救ってもらったそのモノに。

連れられた場所は、何かニンゲンの住処だった。
そこには我らは食べないが緑の穂を揺らす「田」というものや土色からひょっこりと小さな緑や葉が生える「畑」が有った。

畑はニンゲンよりも背がひくく、軽快に飛んで廻る「猿」というものがニンゲンに追いかけられながらも手には畑の緑を掴んでいた。

「――――」

それを見たモノはどこか困ったような悲しそうな目をした。それを見ているのが嫌で、そんな顔をさせていｒのが猿に我は思った。
途端に声をあげて走る出す我、猿を追いかけ追いかけ――そうして追い払った。

久しぶりに走ったのもあるだろうが、治りかけの足はやはり痛む。しかしそのモノは我が立ち止まるのを見るとまた頭を嬉しそうに撫でた。

そうだ、きっとこのモノは畑を荒らされるのが嫌なのだろう。
我に出来ることだと――ニンゲンやそのモノ以外が畑に近づくのを拒めばいいのだろう。
そうすれば撫でてもらえる……？

我はそうして、自分の役柄を見つけた。畑を守るという我なりの恩返しを。

それから我はそのモノや他のニンゲンの畑や田を守った。
吠えて近づく獣を追い払い、その度に我の下には食べ物を置いたり撫でてくれたりもした。

そうして我は、このニンゲンの住処で居場所をみつけた。

＊　＊

それから季節を何周もする頃、体も弱り始めていた。
そのモノ達に役立とうと奮起してはいたが、限界も訪れていた。

その日は強い風の日だった。雨の日だった。
獣を追い払うことは出来ても、風や雨に抗うことは出来ない。
いつしか屋根のあるあのモノの住処で我は過ごしていた。

目覚めるとそのモノが居ないことに気付いた我は、住処を出た。
風が吹き荒れ、雨が叩きつけるその中にそのモノの姿はあった。

何か畑に忘れ物をしたのか、そのモノは嵐の中に居たのだ。

「（！）」

そのモノの畑は岩壁の近くにあった、そんな岩壁から大きな岩が崩れ落ちようとしていた。

「（だめ――そこに居ては）」

我は走った、そしてモノに体当たりをして少しでも突き飛ばした。

「（あっ――――）」

思う頃には我は岩に潰され、そうして我の一生は幕を閉じた。

＊　＊

気付けばそこは空だった。様々な呪縛から解かれるようにして我は身軽に気がしてさえいた。
どうしたものかと見下ろすと――

「（ああ……そっか）」

我の亡きがらが岩に潰されそこにはあった。

「――――――」

泣いているそのモノが我の亡きがらを何度も撫でる。

「（ああ、もう撫でてくれるものはいないのか）」

そう思うとなんとも名残惜しい、でも我はそこまで悲観的ではなかった。
あのモノを最後に救えたのが嬉しかったのもある。

「（心残りは……ないかな）」

恩返しできた――はずだ。だから我もここに居る意味はもうないかもしれない。
だとしたら。

「（でも、もっとモノの言葉を知りたかったな）」

ニンゲンの話す言葉な余りにも複雑で、そのモノの言う言葉を理解するのにもかなりかかった。
いや全てを理解することは叶わずに「ありがとう」「だめ」などの本当に少ない言葉だった。

「（知りたい……かな）」

言葉を、ニンゲンであるそのモノの心も。畑で追い払うことをしていて、やってくる人間の持ってくる様々なモノにも興味がある。

「（もう少しだけ……？）」

そうして我は知りたいという欲求に身を任せ、しばらくは居続けることにした。

＊　＊

何十もの季節が回る。
あのモノは既にこの場所にはいない、それでも我は知りたい欲求に駆られていた。

「（モノ……懐かしいなあ）」

あれからいつほど経っただろう、ここも様変わりした。ニンゲン……人も年を取り召されるごとに亡くなり、生まれた。
それが繰り返されていくさまを、我の亡きがらの埋められている岩の間上から見渡す。

いつの間にか「神社」と呼ばれるものも近くには建ち、そこの近くには人の抜け殻が埋められた。

「おお、狼さんだ！」

我が熟し黄金色の実を付けた田を歩いていると、小さい子供がそんなことを言う。

しかしその田には今は我のみしかおらず、他の狼も居ることにはいるがこの田にはいなかった。

どういう訳か我の姿を見えるものが居るようで「霊感が強い」と呼ばれているらしい。

我はとっくに死んで人の言う彷徨える魂になっていることから、我が見えるのは限られるらしい。

「子供……か」

声は通じないことが殆どで、それでも我は人語を喋れるまでに勉強した。

過ぎゆく季節をただ過ごしていたわけではない、我は「知り」続けた。

「おお、狼さん喋った！　すげー」

「……」

その子供はどこか無邪気で、微笑ましい。それをどう言葉にするのかは分からずに黙ってしまう。

「狼さん、ずっと田んぼとか畑にいるよねー」

「……」

我はそう。ここらの田んぼや畑を回っている。
何故か噂のようでは我が「大地を踏めば、土が肥え」「空を見上げれば陽の光が注ぎ」「鳴けば空から雨の恵み」となっているようで。
偶然に違いないのに、そうして我のことは伝わり続けていた。それが言われ続けているのが嬉しくて仕方なかった。
まだ我は空虚な存在でも居続けられているのだろう、と。

「田んぼの穂に、狼さん～」

幼き子供は歌を歌う。

「穂に、穂に、穂に～」

我もどこかその音に合わせるように頭を動かしていた。

「穂に……ホニ……そうだ！　狼さん、狼さんのことホニさんて呼んでいいか？」

ホニ？　田んぼの穂にいるから、ホニ？

「ホ……ニ？」
「ホニさん！　うん、ホニさん！」

そうして一人の子供に名づけられたのが、この名前だった。
それからその名前は広がっていく――この集落にはここに居続ける狼のことを「ホニ様」と呼ぶようになった。

第272話　√2－77　G.O.D.

我はその後も肉体が朽ちて、この空に浮かぶことも出来る身軽な状態で生き続けていた。
我は「ホニ様」と崇められ、その集落やこの地域での農作物を司る神様という扱いになっていた。
少し前までは単なる偶然で、我は何も施しをしない上で農作物に恵みがもたらされていた。

でも少し前からは違っていた。噂などや偶然ではなく、それは我が想い願ったこと。

願えば土は肥え、祈れば空から雨が降り、太陽のさじ加減で農作物は豊かになった。
豊かな土に訪れるケモノも我がそこに降り立つ時にはすぐに去っていく。我は頼られることで、その力を身に付けて行った。

「（……はぁ）」

いつまでこうすれば良いのだろう、我はいつまでここにいれば良いのだろう。
確かに我は「知りたい」が故にこの地に留まった。欲望を突き詰めれば突き詰めるほどに「知りたい」気持ちは大きくなっていく。
我はこの集落という閉鎖的な場所から抜け出して、もっともっと世界を知りたかった。

でも我はここを出ることが出来なくなった。それどころか力が増す度に動ける範囲が狭まって行く。
同じ場所で知れる物事には限度がある、そして我は――

「（いつまで、なのかな）」

その声は切なげで、一種の不満と一抹の寂しさを交えていた。

ただ、その声は誰にも届かない。

＊　＊

何百もの季節が過ぎた。太陽の一番元気な季節、葉を赤く褐色に染める季節、周囲の景色を白へと変貌させる季節、柔らかい日差しと桃色の花を咲かせる季節。

何度も何度も何百度も、その季節の流れをみてきた。その度に自然を操って、作物を豊かにさせた。

……操ると言っても出来ない時もある。自然はどこか頑固できまぐれな部分も有り、素直に言う事を聞くことが毎年とは限らない。

今まで供えものまでしてきた農民は、そんな上手く流れない季節に腹を立て。その矛先は我へと向けられる。

「何がホニ様だ、今年は惨いぐらいの不作だよ」

「まったく、こんなものに供えてる意味ってなんだろうな」

人の心は揺れ動く。そしてどこまでも身勝手だ。

そんな我が操れないのに失望して、我の名を呼ぶことを止める者。

我を厄病神だとあまりにも履き違えたことを言う者も現れ始めた。

我は何か間違ってしまったのだろうか。

恩返しの延長でもあったこれは、いつのまにか義務のように慣習

化し。
それは当たり前のことに成れ果てていた。
それまでは自然に抗って苦労の末に実らしていたというのに。
我は「知る」過程でそんな人の理不尽な一面も知る。
あの時助けたくれたモノのような心の持ち主は一握りなのだろうか。

邪推し始めた我は、その地に恵みをもたらす気力が次第に落ちて行く。
そして季節が過ぎて行くたびに、この集落は寂れ廃れていった。

＊　＊

「（はぁ）」

我はこの地を見て思う、我が願わなかったことで畑には何度も手入れもせずに植え付けられたことで土地はやせ細っていった。
不作が殆ど毎季節になり、ここからも人は離れて行く。そして人の去ったこの場にはただの枯れた土だけが残った。

「（なんでだろうね）」

誰に問いかける訳でもなく、そんなことを呟く。しかし聞くものは今では誰もいない。
岩から見渡すそこには、ただの荒れ地が広がっている。そして我はその岩に縛り付けられた。

＊　＊

どれぐらいの季節が流れただろう。少しの隙間から見える山から降りたその景色は様変わりしていた。

「（なんで出れないの……あう）」

我はその岩から離れようとすると、急に岩は我を行かせまいと引き寄せていまうのだ。

「（ここは退屈だよ……）」

かつての何もない荒れ地よりは良くはなった。このかつての集落の跡は人の亡きがらを葬る墓場になっていた。

岩のすぐ近くには大きな建物……神社というものだろうか、一部を金色で飾り付けられた建物が建てられた。

「（ここだけ時は止まったままみたい）」

岩の上から見渡すかつての集落の景色は単調で、少しの木々の隙間から見える世界、ひどく魅力的にみえた。

「（隣の芝生は青い……？）」

どこかの子供が読んでいた本を読み説いて理解した。

我は何かのモノをに少しでも我の魂を介すことでモノに触れられた。

しかし介しても離れられる範囲は限られ、出ようとすると引き戻

される。

「（ああ、もっと知りたいことは山ほどあるのに）」

そして我は「知る」こと以上に、違う感情が少し前から芽生えていた。

「（……誰か我の話相手になってくれないかな）」

集落が消えた頃から我は誰とも話すことが出来なくなっていた。
そして毎日のように供えられていたものが今では皆無になった。
我の存在は次第に希薄になり、人々の記憶から消えていっていることを自覚し始めていた。

「（寂しいな、寂しい）」

言葉は喋れるようになって、話す相手がいない。声の届く人がいない。
たくさんの知識を取りこんでも、その意味がなくなり始めていたかもしれない。

「（……はぁ）」

我はため息と言う一種の感情表現のようなものをし始めたのは何時以来で何度めだろうか――それをもう我は覚えていない。

＊　＊

季節が流れた。この場所を取り残すように木々の隙間から見える世界は変貌を遂げて行く。

聳え立つ高い高い塔と、灰色と色とりどりの建物の並ぶ世界。

我は直ぐ先にみえるその景色がとても羨ましくてしかたなかった。

「（あ！　今日は何か本が落ちてる！）」

当たりの日だ。チュウガクセイとか呼ばれるモノが本をここに来る度読み終わると落としていくのだ。

その本はどこか色彩豊かで見ているだけで楽しくなる。

「（なになに”熟女の引き立つ魅力”……？）」

最近の人である女性は結構に肌が出ているんだねー、とその本をめくりながら思う。

その中にはチュウガクセイの発言によれば”マンガ”というものも載っており。

「（洗濯機のボタンを押すと……東京がッ！？）」

東京というと、この世界での首都だったはず――それがこの機会仕掛けの箱一つで。

「（我が知らぬ間にすごいことになってきたかも）」

その雑誌をみながらそう思う。本という友達はあっても、その知識を解放する相手がやはりいない。

そう思うと涙がぽろりと落ちた

「（誰か……誰でもいいから）」

我と話がしてほしい。少しだけでもいいから。

「（ぼっちは……寂しいね）」

本に映る女性や、思わず世界を知りたくなるような事柄に我は更にそう思う。

今日も我は孤独に過ごす。これからもきっとは同じ繰り返し――

＊　＊

季節は冬だった。雪が降りそうな程に寒い――と言われているが、体を持たない我には分からない。

そんな中で、来客者がいた。

「あー、寒い。寒い」

こーとと呼ばれる動物の毛皮でつくったような厚い衣類を身に付けながら、白い息をはく。

そのてぶくろで覆われた手元には何かこの寒い中で湯気立つものを持っていた。

「（なんだろう、これ）」

我は見下ろすことを止めて地上へと向かい、そして手近な生き物を探す。

「（あなたでいいかな？　じゃあ少しの間借りるね？）」

体を借りたのはイヌ科イヌ属の……犬という動物のものだった。
一応我は狼だったはずなのだけど、今は小さい小さい犬の容姿。

『ワンワン！』
「おお、犬か……うーん。その大きさを見ると子犬っぽいな」

我の大きさは人の足よりも少し大きいぐらいのもので、覗きこむ人の姿をいつも以上に大きい。

『くぅぅ……』

我は犬の体を借りた直後に空腹の感覚に見舞われた。どこか懐かしいその感じに感動する一方で、空腹によるちょっとした不快感も募る。

「犬、腹が減ってるのか？　ふうむ……しかしこれは私の貴重な夕食だからなー」

夕食、それは何か丼ぶりの形をしたモノに紙製の蓋がついていて”どンベぃ”と書かれていた。

『くぅん、くぅん』

お腹が減って仕方ない。でも喋れない今では最近身に付けた、この体を借りることでしか我は生きるモノに接触できない。
そして例え体を借りたとしても、それが見えるのがすべてでは無かった。

我がいつか猫の体を借りた時は誰にも気づかれず、鼠の時は振り

向くだけで気付くことはなかった。
我の借りた体は一定時間が経つと離れるようになり、そこからは普通の生き物として認識される。
しかし我がそれを借りた途端に、どこか存在が希薄になり。言うなれば半幽霊かしてしまうらしい。
だから今回はかなり運がよかった。

「仕方ないな、じゃあこの”お揚げ”をやろう」

箸と言う人が何かを食べる際に使う食器で、その黄金色のつゆのしたたり湯気の立つそれを丼から取り出す。

『ハッハッハッ……きゃうんっ！？』

熱い！　熱いよ！　とてつもなく熱い！

「おお、大丈夫か。犬なのに猫舌とはこれいかに」

猫じゃなくてもこの熱さは相当なもんだと思うよ！　それほど上手くはないと――

『ハッハッ』

少し外の寒い空気に触れた冷め始めるそれをやっとのこと租借し始める。

『！』

美味しかった。生きていた時代の時に食べた肉の何倍もの美味しさだった。

これは人で言う甘じょっぱい感覚……これは、驚きかも。

「おお、食べてる食べてる。可愛いな、お前」

そうして我は人の言う”オアゲ”というものかぶりついている途中に、ふと頭の上に違和感を感じる。

『ッ！』

「よしよしよーし」

撫でる。その行動は撫でる行為に等しかった。

何百の時ぶりだろうか、この感覚――どこか懐かしく、心地よい。

「おお、伸びちゃうな。ずるるるるー」

そのモノは女性だった……いや、人間では少女と呼ばれる類かもしれない。

背は成人にしては小さく子供にしては大きい、短く切られ、栗色に染められたさらさらそうな髪色。

そうして我は死んでから初めて相手を見つけた。言葉通じなくとも、その子とは度たび会うようになった。

知識を明かしたかった――けれど我はそれ以上に孤独が寂しかったのだと思う。

願うならば、もう少し。もう少しと願った。

しかしそれは直ぐに終わったしまう――それは完全に我のせいで。

嘆いた、泣いた、止めた。それでもそれはやらざるを得なかった。

だから我は……そうしてその子と会うことは永遠に出来なくなっ

た。

＊　＊

「――という感じかな？」

「……」

どうしよう、俺凄いこと聞いちゃったんじゃねえか？

今頃気づくか馬鹿野郎と心の中の俺が叫ぶ……まあ、そうだよなあ。

と、いうことはだ。

ホニさんという名前の由来も。知ることが大好きで性格もあるのだろうが、好奇心に満ちているのも。お揚げが好きなのも。おおよそが理解できた。

名前の由来は農作物の神様で、穂の近くにいるから――好奇心に満ちるのは幾年もかけて人の言葉や心を知りたかったから――お揚げはこの世界に実態をもって現れて初めて口にした美味しいものだったから。

と、俺は勝手に推測を打ち立てる。そういう経緯があるのならば、かなり納得できてくる。

「ユウジさんは我の話し聞いてどう思った？」

「え？　えーとだな……」

ホニさんがここまで……ここまで、一人で過ごして来たなんて。

そしてどれだけ考え、ある種は苦しみ、今居ることのできるこの世界がどれだけ待ち望んでいたのか――

「すっげえなあと……思った」

俺はまったくもって素直な感想を述べた。

するとホニさんはどこか笑いをかみ殺すように、俯き、そして――

「あ、あははははははははははははははははっ！」

「な、なぬっ！？」

こらえきれずに、溢れだす笑いと笑いと笑い。

なぜか笑われた、それもとびっきりの笑顔で。いや困るぞ……その反応は。

「はぁーはぁー……ユウジさんがそんな答えを寄こすとは思わなくて」

「わ、悪かったな！　馬鹿で正直で！」

なんかホニさんいしてやられた気分だ。

「でもね、そんなユウジさんだからいいんだよ」

「……あれ、俺の馬鹿要素の否定はされてない？」

じ、冗談で言ったつもりだったのに……くぅう、なんかホニさんが変わってしまった（泣）

「ば、馬鹿だよユウジさんは！　我と自身を守るからってって言って何度も何度も傷ついて……それは馬鹿だよ……」

途端に悲しげな表情になるホニさんに俺は少し慌てて。

「す、すまん……いや、なんというか。頑張ってしまって」
「頑張り過ぎ」
「すいません……」

俺は謝ることしかできない……まあかなりに心配もかけてるからなあ。

「でもね……そんなユウジさん、好きだよ？」
「ッ！」

はぁはぁっ！　……ちょっとまってよホニさん、そういう幼い表情でそんな急に大人びた顔されるとですね――
少しドキリとしてしまう訳ですよ。

「ん？　ユウジさん、顔赤いけど――」
「なんでもないなんでもない！　太陽が俺を照らしてるだけさ」
「ユウジさん、今が夜だったら月の方がいいと思うんだけど……」
「――太陽が俺を」
「変なトコ頑固だよね、ユウジさん！」

頑固ですとも、男には曲げられないことが一つや二つに……十三個ほどあるんだぜ？

「そろそろ戻ろっか、ユウジさん」
「お、おう」

そうして俺はホニさんに様々なことを教えてもらった。
ホニさんが生まれ、俺と出会うまでの――

「（ん？）」

でも、あれ。教えたられたのは一人の女の子に出会ってからで、正確には俺と出会うまでは聞いてないような。

それにホニさんはああい言ってたけど……なんでホニさんと女の子は永遠に会う事はできなくなったんだ?

「（……）」

ホニさんにとって、それはまだ言えないことなのだろう。

「（矢継ぎ早に聞きだしてもしょうがないしな）」

時間はあるだろうし、まだゆっくりとホニさんから話して貰えるといいんだが。

前を歩くホニさんは、いつも以上に嬉しそうで。どこかつっかえが取れたかのように晴れ晴れとしていた——と思うのだけども。

ほんの少し、僅かに気付く程度の何かを思い出したことによる「寂しそうな」表情が汲み取れてもいた。

その正体はまだ分からないが……今はホニさんとの肝試しデートを楽しもう。

「ホニさん、家に帰るまでが肝試しだぜ?」

「そうなんだ! じゃあ、お化けが民家の傍に隠れているんだね!」

そうして二人歩く道を戻っていく——ちなみに、マサヒロの仕掛けは全スルーでした。

なんか帰り際に草むらからすすり泣くような声が聞こえたけど……

「気にしない気にしない」

「ユウジさん、何を？」

……そういえばコレ、というか――

以前にもこんなことなかったっけ？

いや、春の肝試しじゃなくてこの夏の。誰かと二人で肝試ししたような気がする……それにマサヒロのすすり泣きも一回どころじゃないような――

まあ……いいか。どうせこれも気のせいだろう。最近は色んな事あったし、混濁してるのかもしれんな。

第２７３話　√２－７８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

八月四日

夏休みの最初の数日間は海水浴と肝試しが大きなイベントとして過ぎた。

なんだろうか、最近はどうにも朝は調子が優れない。

「うーん」

少しばかり頭が重く感じる。しかしそれはすぐに調子は回復するので意味が分からない……低血圧になって朝に弱くなったのか？

重く感じるのも、何か悪夢を見てしまったかのような目覚めの悪さから。しかし夢を見た記憶はなく、恐らくは以前の教室の夢以来は見ていない。

かといって睡眠不足かと言えばそうでなく……

「わけがわからないよ？」

目覚めが悪い以外にも俺にとっての異変は存在した。

肝試しの帰りに感じた……いつかこれと同じシュチエーションがあったのではないかと思う程の既視感。

それは肝試しの日だけではなく、夏に入る前。春のいつかにでも感じたようにも思う。

「何か俺は忘れてるのか……？」

そんな覚えはない。このＩＱ千三百の俺としては――って、冗談

は名前だけにしとけよ。ってツッコミがはええよ！
それに顔を馬鹿にしても名前はを馬鹿にするな！　ユウジの由来はな、それはもう凄いものが――あるはず。聞いた事ないけど。
父親がユウトだったから下之家としては二人目だから、って意味でユウジだったら泣けるけども。

じゃないよね、母さん父さん？

若干自分の名前の由来に疑問を抱きながらも俺のそもそもの疑問へと話を戻そう。
忘れていることを自覚……するはずも本当はあるわけがないのだが、少なくとも俺は何を忘れているのかは分からない。
しかし、それがどうにも頭の隅に引っ掛かって仕方ない。

「何か大事なこと……だった気がするんだが」

分からない。そんな本能が悟り俺に知らせるだけで”その大事なこと”が分からないのだ。

「……うーん」

考え事をすると暑さは増すようで、真夏の蒸し風呂と化した部屋の中では頭がしっかりと回転するはずもない。
そして携帯が着信音とバイブレーションを震わせて……ってこの表現は既視感以前に多用しているような気がしてならない。
その着信音は「さようなら絶食先生」のオープニング曲が流れる。
アニソンもどちらかと言えばマニアックなアニメであるそれからは容易にオタクというものが連想出来る。
オタクに関連する友人。そうすると、いつのメンバーの既存組のどちらかに絞られるのだが――

「ユイ……ねえ」

結果はそいつ、携帯ディスプレイを見て呟く。

同じ家で携帯通話とかどこの家庭崩壊と言われそうだが、まあ便利ですし。家族内通話無料ですし、で少しばかり大目に見てほしい。

「はい、もしもし」

『なつまつりに行こうぜい！』

ということで明日、夏祭りに行くことになりました。

先程の疑問も考えれば気になるのだが、違うことに思考が行くと次第に薄れて行くもので。

……バカって言うな！　一つのことしか考えられないのかヴァーカとか言うな！

冗談抜きでそれはないから、うん。

なんというか、俺に思い出させるのを拒む感じではある。その理由は見当もつかないけども。

八月五日

その日は薄い雲掛かった空模様だった。星の光は日中が晴天であった日に比べると少なく小さい。

夏の蒸れ暑い空気が、日が落ちた今でも絶賛継続中であった。

救いと言えば今日はそれなりに風があること、風が吹くだけで体感温度は劇的に下がる気がする。

そんな訳で俺は、なつまつりのメイン会場となる商店街の手前で半ソデ半ズボンの軽装で待ってみる。
夏祭りは商店街を中心に屋台が並び、商店街近くの大きな杉の木の植えられた公園は昔懐かし盆踊りやらのスペースとなっている。
商店街がそれなりに長いので、出店は百前後あるのではないかと思う……勿論のこと全ての出店を制覇しようとするものは誰もいない。
それだけに競合している出店同士では火花が散り、他の地域に比べれば”おまつり価格”が大分良心的だとか。

「ユ、ユウジ様」
「おお姫城……さん」

姫城さんは家の方向が俺らと反対側で、商店街入り口と言っても学校側な為に姫城さんは商店街を抜けなければならない。
それで俺の次に来たとなると、かなり速いわけで。少しばかり息を切らしていた。

「ユウジ様……ど、どうでしょうか？」

姫城さんは両腕を少しばかり上げて、体を動かす。
姫城さんの衣装は見事なまでに浴衣。青や水色を基調としているなんとも爽やかなイメージのあるそれはとても似合っていて、なんとも可愛らしい白い花のヘアピン留められポニーテールとして姫城さんは破壊力抜群だった。

「あ、ああ！　似合ってるぞ」
「本当ですか！　良かった……」

喜ぶ姫城さんはいつもの大人びた、感じと違って無邪気な子供に

も見えた。
　こんな美人さん方々と夏祭りを満喫できるとは。なんというか、ありがとうございます。

「姫城さん、浴衣は一人で？」
「はい。少しだけなら分かったもので……」

　後ろもしっかりと結べているそれは、素人目にもよく着れていた。
　しかし姫城さんは……ある一部のボリュームがかなり抑えられている感じもする。
　やっぱり女性の浴衣って苦しいんだろうな、と思っているとエントリーナンバー2ことユキがやってきた。

「ユウジー」
「よー」

　またユキの浴衣も似合っていて、暖色系を基調とした温かみがあり、これはこれでとても良い。
　そしてこちらもいつも通りのポニーテール。浴衣とポニーテールって最強だと思う。

「ユウジにはどう見える？」
「ユキらしくて良いんじゃないか？」
「そ、そう？」

　二人並んでも遜色ないその夏衣裳は、選べと言われたら完全に迷ってしまうほどのものだった。
　流石学校のアイドル二人は、浴衣をかなりに着こなせている。

「じゃあ、ユウジ行こっか」

「え」

ふいに腕をつかまれた俺は驚きの声を漏らす。ちょっと待って――そう言おうとした時に。

「篠文さん？　どうして自然な流れでユウジ様の手を取って夏祭りの露天広がる人ごみの中に入ろうとしたのですか？」

早口で活舌の良さに驚くのと同時に、俺の今置かれている状況を鑑みて姫城さんの疑問を解く。

……いや解くとかいうことでもないような。

「あー……えーとね、一番乗りで！　先に楽しもうかなと」
「篠文さん、それは駄目です」
「ああ、駄目だよね……」
「いやさ、まだ皆――」

「それなら私も一番乗りです」

「えー、いやだからな。二人とも――」
「それがいいかも、姫城さん、ユウジいこー」
「行きましょう、篠文さん、ユウジ様」
「いやいや聞けよ！」

つい怒鳴るが二人には特に影響ナシ……逆二人は行く気マンマンのままだった。

両腕を実質拘束される、という花から見たら”一人の男を二人の美女が取り合う”後継にも見えなくないが。

今の二人には俺の言葉はあまり届かないので、正直困る一方でしかないっす。

助け舟と言わんばかりにやってきたのは――

「ぬー、修羅場だぬー」

俺とおなじように半ソデ半ズボンの軽装と、隣を歩くなんとも着こなした浴衣姿の姉貴と、後ろをゆっくりと付いてくる―

「ユウジさーん」

俺の名を呼ぶその主は、いつもの長い長い艶やかな黒髪と、中学生ほどの小柄の容姿に、どこか幼いその表情。

そして何年も生きている神様で、それでいて俺が共に戦う仲間であり家族であり――大切な人。

そんなホニさんが浴衣を着てやってきた。

「ユウくんユウくん、どう？　お姉ちゃんのお古なんだけど、ぴったしのものがあってね！」

「お、おう。凄い可愛いな」

なんとも率直な感想で、俺は思ったことをそのまま口にした。

「か、可愛いのかな!?　そ、それなら良かったよ……」

もじもじと恥ずかしそうに俯き両一指し指をつんつんするその様……すんげえ可愛い。

「可愛いということは幼い頃のお姉ちゃんを褒められたも同然……！　ありがとうユウくん！」

「今の浴衣は何も言わなくていいのかよ！」

まさか過去に遡るとは。姉貴はいつも以上に年相応かそれ以上の色気と綺麗さを携えていていいんじゃないかと思ってもいたが……言わないでおこう。

「あー、ユウくん！　どうかな？　お姉ちゃんの浴衣姿はどうかな？」

「……コメントは控えさせていただきます」

「言葉も出ないほどに……そこまで想ってくれるなんて、うう……」

「いやいやいや俺のことになるとポジティブが過ぎるぞ……って何故泣いた！　てかガチ泣きですか！？」

先程のアイドル二人がなんかジト目で見てくるのですがどうしたことでしょう。

「やっぱろユウジ様は……」「そうっぽいね」少し聞こえるその声は姉貴をどうどうしているせいで余り聞こえない、しかし最後のところは聞こえた「「両姉妹に対してもシスコン」」

「なんか俺の株が下がった気がする！？　なんで？」

「ふーんだ、似合ってるだけで可愛くないですよーだ」

「ユウジ様は小さい子の方がいんです、ええきっとそうです」

「……」

最近の二人は良くわからない。

「遅くなったー」

本当に全員が直前五分前にはついていたのに、丁度時刻通りの実質襲い登場のマサヒロが来たところで。

きょうの夏祭りへと、いつものメンバーと俺の家族は繰り出すのだった。

ちなみに桐はなぜか来なかった……なんでだろうね？

第２７４話　√２－７９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

話の遅さには参っちゃうね

第274話　√2－79　G・O・D・

「すげえ混んでるな……」
「ユウくんとお祭りに来るの一年振りだね！　お姉ちゃんは楽しみです」
「……いや夏の季節限定の催しだから一年振りは妥当だと思うぞ」
「ユウくんと二人でお祭りを楽しむ……一年来の夢だったよ」
「二人じゃねーから、もっとメンバーいるから」

商店街入口から見ても圧倒的に理解できる。人、人、人の出血大サービス。
それはもう見ているだけで人酔いしやすい人がみたらば卒倒モノだ、少なからず俺もその光景に後ずさってしまう。

「さ、行きましょうユウジ様」
「行こー、ユウジ」
「レッツゴーだよ、ユウジさん！」
「おう」

相変わらずホニさんはその目の前にあるお祭りの風景を好奇心溢れる瞳で、今にも走り出しそうな勢いでてくてくと歩きだしていた。
なんてーか、ホニさんはこういうのはタフなんですね。人ごみにダイブするようなマネ、俺にはそんな勇気も度胸もありやせんよ。

「ちょっと……凄すぎないか？」
「藍浜町の住民が全員集まったらこうなりました、という風体だぬ」

どこぞの地域で視聴率七〇パーセント超えのテレビ番組が存在したということをどこぞのバラエティで話されていたのを思い出す。

全町民の内のどれほどの割合でここにいるのだろうか。この町も地方なせいで、過疎化がそれなりに進んでいることもあり総住民数はそれほど多くないはずなんだが。

それが今見ているお祭りに群がる住民の数は半端でなく、逆に”祭りに行ってない人ってどんぐらい？”と問えるほどである。

そして町民の方々はハイテンション。八月の上旬は殆どお祭りで商店街に出店が途絶える日は少ない。

町全体でのお祭り気質がるのか、何故か祭りには皆行きたがる。ちなみに俺は年一回は祭りに繰り出すが、それは祭りに行っていないに等しいほどらしい。

「地方の癖して商業店舗が揃う上にお祭り気質とか……末恐ろしいなこの町は」

「でもこの町は賑やかで好きだよ？」

ホニさんは人ごみに中で俺から見える距離に前を歩いて振り向きながらそんなことを言う。

俺も嫌いじゃない……ただここに居ることでの思いでが、まあ良いことだけではないのだけど。

「ホニさんはこの町が気に入った？」

「うんっ！　ユウジさんが居て、お姉さんもユイも桐もユキも姫城もクラスの皆もいる――この町が好きだよ？」

その声は祭りの喧騒のせいで少し後ろを歩くユキや姫城さん達には聞こえていない。

聞こえているのは恐らく俺だけ、そうホニさんが言ってくれたことがどこか嬉しくて。

ホニさんがここに居たい、という気持ちを理由を確かめられたことで俺は安心していた。

「ユウジさん、ユウジさん！　あのふわふわしたものは何かな！？」
「あ、あれはな。綿あめって言ってな――」

アクリル張りされそれが飛び散らぬようにされた綿菓子機に丸く長めの竹串をかざしすことで綿あめが出来て行く工程を見れる――出店がすぐ目と鼻の先に迫る。

「ホニさん食べるか？」
「え、でも……我の知識だと、他にもいろいろあるとか」
「まあな。イカ焼きとか焼きそばとか食べ物じゃなければ色々あるな」

この町のお祭りを全て楽しもうとすれば以下略。

「トリェフ屋にフカヒレスープ屋台、金箔掬いって聞いたんだけど……」
「貴族思考と庶民的お祭りの奇跡の融合！？　なんだその”趣味でお祭りという庶民の行うものをやってみましたの”みたいな超金持ちが開く勘違い甚だしいお祭りは！」

なんだろう、考えたら逆にあざとくてそれはナイ！

「金塊射的は見モノだよね、参加料が多いだけに凄腕のスナイパーが動員されるって」
「そのホニさん知識は一体どこから来るんでしょうねえ！」

まあ言わずとも分かる諸悪の根源ことチュウガクセイは一体どんな漫画や雑誌を読んだり会話してるんだろうか。

「チュウガクセイ……じゃなかった、シロガネーゼとか言ってた人たち」
「自称してる時点でそいつらはシロガゼーネじゃねえ！　エセ金持ちだ！」
痛々しい！　ままごともビックリな程に痛々しい！？
ホニさんはそんな奇抜なお祭り知識を披露すると、綿あめ屋台の前で立ち止まる。
「で、ホニさんは欲しいのか？」
「……そんなことないよ？」
それが少し欲しそうで、お預けされたような子犬のような瞳でその次々生み出される飴製の白い綿を眺めていた。
強がるホニさんも可愛いのなあ、確かに子供っぽい感じもあるし。さっきから子供しか買っていってないけども。
「じゃあおじさん、綿飴一つ」
「あいよ、袋はどれで？」
出来た綿飴はビニール製の袋に入れられる。その袋には印刷がされていて、子供向けアニメのキャラクターやらが描かれている。
ホニさんはどんなものが好きだろか……と考えて、思いつくのが。目の端に映る――
「適当に……じゃなくて、ソレで」
「コ、コレかい？　あ、あいよ（ネタのつもりだったんだが）」
おじさんの心の声が少なからず漏れていたのを俺は聞こえていな

いことにしておこう。
おじさんはその袋に入った、おそらくは冷めてしまっている綿あめを渡さずに新しいその俺が指定した柄の袋を取り出して目の前で作られたばかりの綿あめを入れた。

「まいどありー」
「はい、ホニさん」

立ち止まりその機械に夢中になっていたホニさんい手渡す。

「え、でもいいの……？」
「いいの。それで柄は良く分からないんだが…確か、な」

その柄は少しだけ覚えがあった。あっているのなら――

「ユウジさんユウジさん！　これは我の大好きな昼ドラの”偽りの花園”のタイトルと女優が写ってるよ！　すごいね、ユウジさんこんなものもあるんだね！」
「ああ、あるんだなあ……」

見たときはまさかと思った。その綿飴にはデカデカと昼ドラのタイトルと女優の写真が写っていたというからもう驚いた。
ホニさんが家にいた頃は昼ドラにはまっていて、それもこんなドロドロした内容でこんなタイトルのドラマを見ていた気がしたのだ。

「そういえばホニさんは昼ドラって休みにの日以外はどうしてんの？」
「どうしてるって？」
「昼ドラとか、学校に行っている間はどうしてるかなーと」

学校に行かざるをえなかたとは言え、いつも見ていたドラマが見れなくなるのはどうだろう。
それが少しばかりに気になった。

「大丈夫、お姉さんに許可をとってビデオに録画してるから！」
「あー、そうなのか」

家は未だにテープが現役。時代の流れはＢＤだが、まだＤＶＤレコーダーしかなく。妙に複雑な操作なので機械慣れしていない姉貴とホニさんは使っていなかった。
ちなみにユイの部屋にはＨＤＤとＢＤのダブル装備で、深夜帯でアニメが被っても――ってそんなことは殆どないのだが、無断に装備されている。

「まー、とりあえずコレな」
「あ、ありがとね。ユウジさん」

袋を大事そうにポケットにしまって、舌をそのふわふわに触れさせる。

「甘くて美味しい！」
「そりゃ良かった」

俺がつくった訳ではないけども。
そんな綿飴をなめているホニさんは幼さを感じさせる上に、幸せオーラを振り撒いていて見ていて飽きない。

「ユキー、そういえばついて来てる……か」

立ち止まって綿飴を買い求めたことせいか、後ろにいたであろう

ユキや姫城さんの姿は既になかった
。
近くを歩いていたユイの姿も見当たらない。姉貴とユイが一緒に歩いていたはずなんだが。マサヒロは眼中にない。

「あー、置いてかれたｏｒはぐれたっぽいな」
「ごめんね、ユウジさん……我が浮かれていたせいで」
「いやいやホニさんのせいじゃないぞ……うーむ」

見たところはもう近くには居無さそうだな。

「よし、ホニさん。これから俺とデートだ」
「えっ、デ、デート！？　デザートでも砂漠でも裁くでもなくて！？」
「言葉遊びっぽくなってるけど、デートそのものの意味だから」

後半から言い間違えじゃなくて連想ゲームと化しているような。

「デートというのは我が知っている限りだと……付き合う、交際している男女や男性同士や女性同士が一緒に居て、共に歩くこと……？」
「男女は合ってるけども、その後ろの事柄にはあまり触れなくていいと思う、というかそこまで重く行け止めなくていいぞ」

何か言うと批判に合いそうだが、とりあえず一般的には異性同士のものを指すかと。

「そ、そうかな……それはそれで残念な――」
「ん？」
「なんでもないよ！　じ、じゃあユウジさんと二人で！」

「おーし、じゃあ屋台回ろうかー」

そうして予期せぬ（？）　なつまつりデートが始まったのだった。

第275話　√2－80　G．O．D．（前書き）

ここまで

第275話　√2－80　G・O・D・

「あー、もしもし……え、誰？　ユキ？　で、なんだっけ……あー、了解了解。一緒に誰かいるのかって？　一応ホニさんが――ユキ？　ユキさんどした？　え、なんでもない？　あ、そうか……じゃあ後で」

ピッと通話を切る。

「ユウジさん、ユキに電話してたの？」

「ああ、一応はぐれたようなもんだからな。探してもらってたら悪いだろ？」

もしかしたら近くに居るであろう姉貴に邪推されて大事に発展するのを恐れてもでもある。

「あれ、か。捜査に乗り出されそうだな」

「ソウサ……コントロール？　スーパーマ○オカートのコントローラ操作は難しいよね」

「操作はそっちじゃなくてだな……って地味にわかりにくいネタを！」

言っちゃ悪いけど、スー○ァミは十字ス○ィックが標準装備の時点でレースゲームには向かないって。

そうしたらアド○ンス版とD○版も駄目になると思うけども……まあア○バンス版は操作ダメだったか。

って、なんでそんな一般人にも理解できそうな懐かしネタをしてしまったんだ！

俺は知っている深夜アニメネタを多用するのが平常だというのに

……そうか、緊張してるのか。
ホニさんと二人過ごすってのも結構に少ないからな。桐が付きっきりになってくれたのはいいけども、どうにも桐にはずっと二人で話していると不機嫌に……

「……構ってチャン？」
「カマってちゃん……付け？　うーん、我的には――」
「うん、なんでもないからホニさん」

ホニさんの知識は本当にどうしてここまで携帯の変換ミス張りに間違っているのだろう。
……いや今回はそれほど間違ってはいないけど、さっきもそれほど間違ってはいないけども……それが真っ先に出るってのはどうなんだ。

「そういえばホニさんって授業とかどんなのが好きなんだ？」
「うーん、やっぱり国語かな。色々な文に触れられて面白いよー」

ホニさんは今までの行動挙動通りに知識を求めている……当人曰くは知りたいから神石に居続けたって言ってたっけ。
……何百年も過ごしても分からないことも有る。知りえないことがあって、新たなことを発見する度に驚き喜ぶホニさんは――

「羨ましく素敵な人だ」

人はいつしか知ることを諦める。俺も相手の気持ちを知ろうとして……このことは安易に思い出すべきじゃないか。
だから、いつでも見えるものが新鮮に瞳に映っているであろう……少し羨ましい。

「素敵？　ユウジさんはさっきから――」
「いやー、なんでもないぞ。まぁー、そうだな。ホニさんは可愛いなと」
「な、なななななぁっ！　ユウジさんは思うけどからかってるよね!?」
「そんなことないぞ。ホニさんは可愛さと言う言葉を具現化した…イワユルかわいさ魔人というヤツだ」
「聞いたこと無いよそんなこと！　も、もう……我があまり知らないからって、馬鹿にしちゃ駄目だよ。意味ぐらい分かってるんだから」
「ほう、ホニさん。可愛いの意味とは」
「もうユウジさんの意地悪!」

かわいいなあ。好きな子ほど苛めたくなるってのは分かるかもしれない。
それよりホニさんのウブや新鮮な反応が楽しくて、それでいて言葉通り可愛くて仕方ない。
つーんとそっぽをむいて、横から見えるほどに頬を膨らました膨れっ面も非常にめんこいなあ。

「機嫌直しじゃないけども、金魚すくいやろうぜ?」

目に映った金魚鉢に朱色と白色の混ざった金魚が泳ぐ様が描かれたイラストと「金魚すくい」と柔らかな書体で書かれた屋台を指してホニさんに呼び掛ける。

「金魚すくい……?　金箔すくいの派生――」
「怒られる、それは庶民やお祭り関係者の方々に怒られる。こっちが本流で、そっちは派生……しているのかも定かじゃないけども」

アニメやマンガ的表現にある。日本での豪邸とか「まるで西洋の城のようだ」なんていう土地があるわけないように、そんな祭りも恐らくはガチフィクション。

「金魚を薄い紙の張られたポイていう金魚すくいの道具ですくうのな、紙が破れたら終わり」

「大体ルールは分かったよー」

「じゃあおじちゃん、二人分」

あいよーという元気の良い掛け声とノリの良い笑顔で二つの道具が渡される、一つをホニさんに渡そうとすると。

ホニさんは途端に取ろうとした手を引っこめて、何か申し訳なさそうに言った。

「でもユウジさん、奢ってもらってばっかじゃ悪いよ……一応お姉さんにもお小遣いもらってるのに」

確かにホニさんも俺と同額の小遣いを貰っていて——額のことはどうでもいい、それを使うべきだとホニさんは思っているみたいだけども。

「いやホニさん、これはデートだぜ？　それも俺が誘った上に男側がカッコ付けたがるもんなんだ」

「そ、そうなの？　……でも！　ユウジさんだけにはやっぱり——」

「……そうか、俺はホニさんのデート相手としては釣り合わないか。そうだよな……」

「そんなことない！　というか釣り合ってないのは我の方で……きっと他の皆もユウジさんと行きたかったと思うのに、我は……」

「なら良かった、姫。それでは金魚すくいを共にやりましょう」

「ひ、姫って……うん。じゃあユウジさんに甘えて」

「よーしこれもゲームだ。どっちが金魚をどれほどすくえるか」
「うんっ！　負けないよ！」

俺はそうしてポイを渡して、対戦会場に向き直る。

「行くぜー」
「うん！」

そうして俺たちは金魚すくいを楽しんだ――
こんな平和で、何気ない時間がやはり愛おしくて。ホニさんと居る時間が楽しくて。
俺はこの日々がやはり相に合っているのだと、どうしても慣れることはないのだと思った。

「ま、負けた……だと」
「えっへん！」

俺こと金魚マスター……という称号は以前から存在しなかったが、それなりに器用なはずの俺は大敗北し、ホニさんの圧倒的勝利に終わった。

「ホニさんはゲーム運強いよなー、桐にも毎回勝ってるよな？」
「自慢じゃないけどねー」

そういうホニさんが胸を張って言う姿は、やはり少し背伸びしているようにも見えて可愛らしい。
その浴衣姿が更に華やかにしているのだろうけども……ホニさんはやっぱりいいなあ。

ホニさんが家族だから、大切だから……それもあるし、ホニさんといると幸せだった。
だから俺は今まで頑張れた。ホニさんがいたから頑張れたわけで……

「ありがとな、ホニさん」
「ううん！　ユウジさんこそありがとね、こんな楽しい遊びを教えてくれて」

見せる笑顔が可愛くて、それに俺は魅せられた。

「そうだなー……もうそろそろか、ホニさん少し早歩きしようか」
「うん？　何かあるの？」

先程まで吹いていた風は収まり、空も澄み始めていた。少しばかりは危惧していたが……これならば。
俺は締めつけない程度にホニさんの左腕を掴むと少し小走りになる。

「ユ、ユウジさん！？」
「そこの広場で、ちょっと見たいものがあるんだ」
「見たいもの？」

ホニさんの不思議に思うような声が聞こえる……しかし俺は時間をみて、出来れば開けたその場所で見たかった。

「着いた、ちょうど空(あ)いてるからホニさんは席へどうぞー」

「いいの？　ユウジさんは――」
「この国ではそうでもないけどもレディファーストが基本だからな、お穣さまはここに」
「照れるからその言い方は止めた方が……いいかも」
ははと笑い俺はホニさんの言うのを受け流した。
「もう少し……お」
「……あっ」
その時空を見上げると、そこには花が咲いていた。
闇夜に浮かぶ火で形作られた一輪の花。
「わぁ……」
それは花火。今日は調べた限りだと花火が打ち上がる日で、丁度それが重なった。
思い出した俺はホニさんを連れて、商店街の手狭なところよりも空が見える広場移動したわけだ。
「ホニさんは見たことある？」
「あるよ……石の上から、遠くからね」
見つめるホニさんの顔はいつもの好奇の瞳をは違って、どこか新鮮で。
「二人で、誰かと見上げられたのはこれが初めて……だよ」
「……そっか」
ホニさんは頬を染めながらそんな事を言った。

ギャップじゃないけども、そう真剣にいうホニさんが綺麗で美しくて――繊細で華奢で――儚げにも見えた。
そんなホニさんが俺は見惚れるほどに……

「綺麗だね」
「綺麗だな」

その一度に上がる花火が終わる十数分の間、俺とホニさんは空を見上げ続けた。
俺はその間、連れた時からホニさんの腕を掴んだままで。ホニさんもそれを離さずにいた――

「良かったぁ」

花火を観終わったあとのホニさんはどこか爽やかで幸せそうに微笑んでいた。

「ホニさんが幸せそうでなによりです」
「うん、幸せ」
「それは良かった」
「でも、ね……あと一つお願いしていい？」

どこかもじもじして言うホニさんに、つい俺は見栄を張って答える。

「なんでしょう、俺が出来ることならばなんでも――」
「魔王を倒して」
「それは俺を過大評価し過ぎたと思う！」

いくら鍛錬しても無理ですって。

「冗談だってば……え、っとね。手を……」
「手？　ハンド？」
「う、うん……出来れば、出来れば――」
「出来れば……メイク？」

「手を繋いでほしいかな……って」

「手……ね」
「うん……あっ」
「これでいい……のか？」
「うん、これでいい」

ホニさんと手を繋ぐ。それは沢山の時間を一緒に過ごしたとはいえ気恥かしいものがあった。
その一方でホニさんと手を繋げたことが嬉しくて仕方なかった。

「このまま行こっか！」
「ああー」

二人歩いて商店街を歩いて行く、ユキや姫城さん達と待ち合わせした商店街の入り口まであと数分だ。

第276話　√2－81　G．O．D．

夏以外とはガラリと違う人の海。
暑苦しい掛け声と騒がしい人の喋り声、全てが混ざり合って奏でるのは一つの喧騒。
そんな中を俺はホニさんと二人歩く、手と手を繋いでゆっくりと、それでも確実に目的地へと。
そんな全ての事象が行動が、今の俺には何かを思い出させるのだ。

「（……この光景をどこかで）」

いつだろうか、どこだろうか。曖昧だとしてもその光景には見覚えがあった。
このホニさんの小さく優しく握り返してくれる手も、隣を歩く浴衣姿のホニさんも、頭に響くほどの祭りの音も。
これは既視感。言うなればデジャブ。俺はこれを知っている、俺はこれを経験している。

「（いつものメンバーで祭りに来て、それで二人はぐれて）」

シュチェーションは同じ。ただ隣に居た相手は思い出せない。

「（出掛かっているだけに……な）」

もどかしい。それはあまりにも生殺し。
先程までのホニさんと楽しんだ日常が、薄れるほどまでに訪れるその感覚。

「（なん……なんだよ）」

そんな俺の訝しむ、苦悩に表情を歪める顔をホニさんには見られないで良かったと思う。

ホニさんは俯くようにこれから歩く地面を見つめていた

「おー、もうそろそろかな」

「う、うん……もう少し」

気分を戻す。ホニさんは祭りの熱気か頬は上気しているようにも見える、少しと言った途端に握る手が僅かに強くなる。

それが嬉しいのに、なぜか今は――それが気になってしかたない。

見えるのは商店街のゲート、手を振る浴衣姿のユキに姫城さん。

お祭りを堪能したぜ、というようなりをして仮面やら金魚の入ったビニールやら水風船を持つユイ。マサヒロはどうでもいい。

「見えてきたけど、どうする？」

「離した方がいいかな？」

「ホニさんはどうしたい？」

「……繋いでたい」

「じゃあ、俺も繋いでたいからっと」

俺とホニさんはそうしていつものメンバーと再会する。

その時にユキと姫城さんと姉貴が残念そうな顔をしていたのが印象的で、ユイもなぜか複雑な表情をしていた。

……マサヒロだけは「祭り楽しんだぜー」というように無駄に明るく無駄に元気で無駄で無駄で仕方なく一人平然と笑っていた。

「ユ、ユウジは何で手を繋いでるのかな？　ホ、ホホホホニちゃんと」
「え、はぐれない為だけど？」
「そうだよー」
「……そっかー、そうだよね」
「てっきりお二方が駆け落ちしたものかと思いました」
「いやいや逃げないから、この町から去らないから」
「……ユウくん、ホニちゃんばっかずるい。私もぉ！」
「ちょ、おま！」
「じゃあユウジと私も繋ぐ！　ホニちゃんはもういいよね？」
「うーん……もうちょっとこのままで居たい」
「会長、ここは私がユウジ様と」
「だーめ！　ホニちゃんが譲らないならお姉ちゃんである私が――」
「は、はぁ俺の手は大人気だな」
「……リア充はゲル化すればいいのに」

そんな訳でなつまつりが終わる。楽しい思い出と違和感を残しながら。

八月五日

「日曜か……今日も、か」

俺はある準備に取り掛かる。研ぎ石を取り出して使い慣れた鉈を自室で研ぐ。
矢を弾き切り裂くので刃こぼれが多い。研がないと切れ味が落ちて仕方ないので桐の言われるままに台所包丁用の研ぎ石を買った。

そうして戦いの日には備えてカロリーやらを摂取したあとは他の日と同じように鍛錬をすることはせずに体力を温存して、こうして時を待つ。

「（にしても……桐の奴はどうしたんだ？）」

元気がない、それはあからさまにだ。

夏祭りに来なかったのも危惧していたが、どうにも毎日がダルそうだった。

猫かぶりのやり方を忘れたかのように見たところ食って寝ての自堕落に過ごしている。

俺の鍛錬も続いては居るが、俺が走り込みやら桐の生み出した雨澄と戦うはするも桐の指示は無くなった。

桐の構成した空間の中で縁側に腰掛けて、眠りこけている時が多い。

「（夏バテか……？）」

それに俺は急激な変化にも気付いていた。最初の闘いから俺の”重量制御”の継続時間が減少していること。

七月の間までは十分台で二桁あった時間が、今では一桁を切った。

貰う謎ドリンクの回数も減少して、俺に対する治癒も心なしか遅くなった。

「（あいつ大丈夫なのか……かなり付き合わせて疲労しても仕方ないだろうけども）」

それにしても異常だった。

「おーい桐、大丈夫か？」

傍には桐が寝転がっている、そしてすやすやと寝息までもたてていた。
俺の部屋に来るのが毎日のようになっては、こうして寝落ちしてしまう。

「……う、うむぅ」

つんつんとつつくも寝がえりを打つだけだった。
しかし、今間近に見ていると……

「寝顔だけは可愛いんだがなあ」

その安らかな表情には桐の強張る顔も悪どそうな顔もなく、澄んでいる。
その年の容姿相応の柔らかい寝顔を見せる。

「……わしは……頑張らないと」

桐が寝言を舌足らずに言っていた。その少し間延びした声に笑いがでそうになって口元を抑える、これを見たら十中八苦責められる。

「これ以上は繰り返しては……まずいの……じゃ」

繰り返すってなんだよ……微笑みながらその寝言に答えず見守る。

「本当に……本当に……辛いことをさせて……しまっていると……思う」

どんな夢見てんだろうな、そんな表情で言ってることダークだぞ

っと。

「すまぬ……申し訳ない……ユウ……ジ」

……俺の夢？　俺に謝ることって？

桐が頑張り、繰り返され、辛く、俺は謝られる立場。

「なんなんだよ……桐」

お前は一体なにを背負いこんでるんだ？

「……うむぅ、おお寝てしまっていたか」

「……ああ、そうみたいだ。少しは寝れたか？」

「まあの、ここが一番落ちつくからの……ふぁぁ」

欠伸をする小さな妹を見据えて俺は問いかける。

「なあ、桐」

「……なんじゃ？」

「無理……してないか」

「は？　……ぷ、ぷくくくくっ」

すると桐は何かおかしなこと俺が言ったかのように笑いだす。

「な、なんだよ！」

「ぬかしおるぬかしおる、ぷはははははははははっ。お主に心

配されるほどわしは柔(やわ)ではないわ！」
「そ、そうか……まあそんな俺を馬鹿に出来るぐらい元気があるなら大丈夫か」
「心配するでないぞ、ユウジ。わしは言ったであろう？　全力でサポートすると、わしが精いっぱいに手伝うと……だからお主が戦うのじゃ」
「ああ……分かってるよ」

そう決意の言葉を口にした途端に世界の色は変わっていく。
取り残されれるのは俺とホニさんと桐、そしてその主は雨澄。

「じゃあ行くぞ、ユウジ」
「おお」
「ユウジさーん、ホニちゃん」
「じゃあ行きますか」

俺含めた三人は戦いに繰り出す。
日曜の午後はこれが定例となった……命の戦いに、俺たちは繰り出し逃げ切るのだ。
いつまでもそうであればいい。戦いがないのが一番だけども、回避する術がないのならば――今はこうして。

しかし何故俺は疑問に思わなかったのだろう。
夏の暑さのせいか、夏の訪れによる浮かれか。

あの後からなぜ銃使いは音沙汰がないのかを、雨澄だけが週一の決められた曜日に訪れるのかを。
練習メニューは相変わらず対雨澄だけで、それ以外は手一杯の側面がないわけではない。

それでも何故、ここまで何も対策しなかったか。

俺はそしてその意味を。桐がそれを言いださなかった訳を、やらなかった訳を。言えなかった訳を、やれなかった訳を知ることになる――

それは限界、抗えぬ事象。

第277話　√2－82　G.O.D.

「――重量制御。人物指定男一人、綿毛のような軽さへと――書換（チェンジ）。追加申請、重量制御を指定した人物への一任。制限時間八分五七秒」
「きたっ」

地面で足元を爆発させるように空へと舞い上がる。その空いつも雨澄が弓矢を構えて待っている――

「――――くっ」
「たぁっ！」

矢が放たれては下へは落とさず勢いを抑えた上で軌道を変えて下を走るホニさん達に当たらないようにする。

「（桐っ、今そっちに雨澄が行くけど全力で守る）」
「（心得た、全力で逃げさせてもらうぞ）」

雨澄が身を翻して向かうのはホニさんと桐、流れ弾の矢を避けるべくの薄い透明の膜のようなもので対処していたが、本人狙いでやられたらそうは持たない。
俺は足元の空虚を思い切り蹴り飛ばし、飛び降りる雨澄を抜かしてホニさんの前へと立ちふさがる。

「地上戦ってことか」

「――――今度こそは」

分間に何本の矢が放たれているのか、それを知る術を持たず数える暇もない。

無限に表れる矢を装填しては撃って撃って撃って。

「――――なぜお前は私に傷をつけない」

「特に意味はないっ」

矢を寸前で地面へと叩き起こしバックステップで撃たれる矢を払い落す。

「――それは慈悲か、それとも侮辱か」

「どっちでもねえ、俺はただそれが好かないだけだ」

「――甚だしい偽善」

「お褒めの言葉ありがとう、俺は大切な人を守りたいし、それを脅かすお前も傷つけたくない――偽善者でとんだ我儘野郎だ」

「――理解してまで、なぜそれを止めない」

「生理的に無理だから、俺はそんなことに慣れたくないからだ」

「――お前は戦いを甘くみている、私を侮辱している」

「……」

繰り返される戦いの結末はいつも同じ。ホニさん達が逃げ切り、そして俺が逃げ切り虚界（きょかい）から抜け出すことで終わる。

週一のこの曜日に必ず雨澄は訪れ襲う。それは虚界を張る為には力いり、それを溜めるのには時間がかかる――雨澄とってはちょうど一週間。

それは今までブレることなく、それは行われた。

俺があしらうように逃げ切る様を何度も見せつけられて、相当に屈辱さていると思っているだろう。

分かっていてもそれをどうすることも出来ない。俺が見つけた、血に染まらずに唯一の生き残る方法。
そう俺はひどく、残酷だった。

「とうりゃあっ！」
「――！？」

雨澄の弓を弾き、遥か彼方へと飛んでいく。
無限に装填される矢があれど、それを撃つ為の弓がなければどうすることも出来ない。
雨澄はこのほかに体術を使うが、飛び道具にはどうしても劣る。

「――はぁっ、たぁっ！」
「……」

俺はそれを避け続ける。消化試合のような虚しささえあった。
もうこれは完全に結末は見えてしまったのだ。

そう、そして俺たちは逃げ切った。

八月十二日

あれから一週間が経った。

逃げ切り元の世界に戻る頃には雨澄は消えうせている。それはいつのものことだった。
しかしその日の雨澄は明らかに調子が悪かった。

弓は手放すことは稀しかなく、それでも取り戻しまた撃り始める。
しかしそれをすることはなかった。
体術を知っていたのも、弓を持ちながら試みていたことがあったからで。
体術一つで挑んだのは、おそらくは先週ぐらい。

「……どうしたものか」

机にある桐の作った謎ドリンクを眺める。
桐曰く「とりあえず八月中に作れるのはそれで最後じゃ」と言われ五本ほどの瓶が手渡されていた。
浴びるように飲んでいた時期が有った気がするが、それはとてつもなく苦いもので決して戦いなど無ければ好き好んで飲むモノではない。
戦いと鍛錬の際に飲んで、毎回激しいおう吐感に見舞わながらも飲む。すると疲弊した体は何故かスッキリとして、活力が戻る。
睡眠不足でも過不足なく行動できる――良薬口に苦しとは言うが、これも桐チートの一つで、対価としてその苦味は小さすぎた。

「……今日はいいか」

朝の調子は相変わらず悪いが、それでも日中は元気だった。
まだ温存しておこうと考え、俺は机にそれを置いて一階へと降りて玄関から外へと出る。

「今日も暑いな……」

夏は八月の前半を終えようとしていても十分に暑い。

「（桐も調子悪いみたいだしな）」

あの戦いの後は、一日中に眠りこけた。俺の部屋で。
流石に疲れる原因の大きな一つである俺が拒むこともせずに、桐はまだ俺の部屋で体を横たえている。

その時にまた世界の色が変わる。

「桐、ホニさん！」
「あ、ぁあああっ！　今鉈を持って降りるぞ！」
「ユウジさん！」

そして今日も戦いが始まる。雨澄との一騎打ち、逃げて逃げて逃げ切る。そうするだけで――

「おい……」
「ユウジィ！」
「ユウジさんっ」

世界の色が、かつての青色から変わっていく。
全体が黒々として、それでいて薄い色が濃く染まり、濃い色は薄くへと近づく。
黒が白に、白が黒に。

「反転……！？」

その世界はネガフィルムのように色が反転していく、それは今までの青や赤の一緒くたにされた世界よりも不気味で仕方なかった。

「さっきまでは雨澄の虚界だったはずなのに……？」

先程までは冷たい青の世界だった。それが外に三人揃った途端に色を変えた。
そして隣に居る桐の顔は寝起きのはずなのに硬直し起った事象に恐怖に怯える。

「……これは……ついに」

訪れるものが誰かが分からない、雨澄でも銃使いでもない――少なくともこの町に三人居るアイツらの、残り一人……！

「やぁ、どうも。どうにも仲間が力尽きちゃって、その代役として来た者です」

それは男の声、すらりと伸びた長身と少しばかり高い声は好青年のイメージがある。
ただ空へと浮き、背負った大剣がなければ、あくまで一般人だった。

「それでは消させてもらうよ異に接続者（コトナリ コネクター）？」

戦いを挑まれ、守り抜こうと奮闘したが――俺は。

第２７８話　√２－８３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

エグすぎて描いた本人も少なからず鳥肌がたってます

第278話　√2－83　G．O．D．

「はぁ……はぁっ」

その男は圧倒的な力を行使する。それに風船のように軽くあしらわれて弾き飛ばされるのは俺の身体。

固い地面へとぶつかり、転がり。あちこちにアザを作り打撲し、皮膚を擦り向かれて出血し痛む中でも俺は立ち上がる。

「（俺がやらなければ……）」

消されてしまう。俺もホニさんも……もしかすると桐も。

今出来るのは俺だけ、俺が食い止めて二人には逃げ切ってもらうのだ。

「（負けちゃいけない、いつも通りに守りながら逃げ切って……なあに簡単なことじゃねえか）」

そうだ、単純だ。逃げ切ればいいだけのこと、倒さなくていい傷つけなくていい。

今までの俺の考えた方を通せばいい。

「おるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ！？」

腹の奥から絞り出すように大きな叫び声を張り上げながら鉈で切りかかる。しかし対する男がこれの何倍もある大剣は振りまわすだけで風が巻きおこり、それは俺の肌を切り裂くほどに鋭く強大だった。

「くぁぁああ」

全身が刃に触れたのではいかというように自分は切り裂かれ、皮膚を裂かれた激痛が走り赤色の染みをTシャツに形作っていく。

「俺は……守らなきゃ……」

息切れと続く痛みの中で俺はそうしてまた決意の言葉を口にする。一方逃げているホニさんと桐を見渡す為か、空へと舞い上がる男。

「俺……も」

行かないと、追わないと。床を吹き飛ばし地面を蹴飛ばし、空へと踊る。振りかざされる大剣は空気を裂き、すぐ真下の家もろともぶち壊す。

見せつけられた力はあまりに巨大で、それでもまた全てを曝け出していないようにも感じ取れるその男のポーカーフェイスに俺は少しの絶望を抱く。

止まる訳にはいかない、進まないと、守らないと。

「あー……君は思いのほか頑張るね、以前の厄病神もこれほどまでに手ごたえがあってほしかったよ」

その男の言う事は聞こえない、聞く余裕もない。しかしそこには少し期待はずれによる失望感が含まれているニュアンスではあったようにも思える。

男の心情を汲み取ることは二の次三の次で、俺の視界に映るホニさんを消そうとする男の容姿を捉え、そして襲いかかるだけ。

「でも、未熟だね」

「ぐっはぁ！？」

横滑りに振られた剣先は皮膚を裂くどころか脇骨をも砕く。風を巻き起こすほどの威力が人の体にぶつかれば、それが軽傷で済むはずがなかった。

「接続者はただただ、いいように使われているだけの虚しい存在だね」

「そ……んなこと！」

「あるんだよ、だから僕たちはしなければならない。この世界の為にも自分の為にも」

「がぁっ」

俺は剣の平で撃ち落とされ、抗う力が無いままにコンクリートの地面に身体を衝突させ、いくつかの骨を砕く。

あー、これは……正直に危険だ。死ぬ一歩手前の激痛を何度も感じたことがある、そして今回はそうだった。

意識がぐらつき、目の前にはかろうじて映される、俺に駆けよろうと走り出すホニさんと、それを止めようとする桐の姿。

「ユウジさんっ！　ユウジさん！」

「ホニ！　行くなっ」

桐の言う事も無視して駆けよるホニさんに俺は。身体の一つ動かすことが出来ない苦痛の中で声を捻りだす。

「逃げろ……今すぐここを」

あまりにも情けない、守ることさえできない。それが悔しくて仕方ない。

そしてこれからが俺にとって最悪な展開になりうることを……俺はどこかで知っていた。

ホニさんはきっと俺に傷を負わせた男をに怒りを燃やし、そして――

「……駄目だよユウジさん、我はここまで傷ついたユウジさんを放り出せないよ」

「やめ……ろホニさん」

「今すぐこっちに来るのじゃ！　そうでないとっ……ぁ」

「き、桐！？」

俺の傾いた視界からは倒れる桐の姿が見える。全ての神経が急に途切れて一斉に言う事を聞かなくなったように、身体を立つことさえ維持できないほどに弱った桐の身体が地面へと崩れ落ちる。

地面に伏せられた桐は目を閉じて延々と眠りにつく姫をそれは連想させた――桐は見た目通りに華奢で繊細で、そして今こうして倒れてしまった。

身体を動かせずに思考だけがかろうじて動く今の俺は、その時に前兆はいくらでもあったことをふいに思い出していた。

最近の不調、なつまつりに行く気力さえなく、俺の部屋に入り浸り眠る毎日、重量制御時間の減少。

重量制御の減少は思えば初陣の次からも始まっていた。

「はは」

俺は乾いた笑いが血の味しかしない口から零れる

桐が俺を馬鹿にしてのはなぜだろう――全ては俺に悟らせない為の空元気。

俺の部屋で度々寝ていたのは――疲れがたまりにたまって仕方な

かったから。

桐がなぜここまで力を使えたのか？

桐はそんなあまりにも人間離れしたことを行って、それでいて自分の身に何も影響はなかったのか？

そんな桐に頼り過ぎていたら、結果どうなるかを俺は知っていたか？

気付かない俺は馬鹿だったのだ。俺が問い詰めれば良かった……唇を噛み締める度に後悔という血の味が広がっていく。

桐は俺にはモノ申す癖に自分には厳しく何も言わない、心配させたくないからのことだとしたら――それは優しすぎた。

思い出す度に桐のおかげで今日の今日までやってこれたことを自覚する。鍛錬も戦いも、そのサポートにきっと桐は全力だったのだ。

だから今日、その来るべき限界が来てしまった。

「これ以上はユウジさんを、桐を――傷つけさせない！」

俺と桐の倒れる姿を見て、涙を流し、そして自然が狂い、ホニさんの怒りに合わせて激しさを増していく。

そうしてホニさんは空へと向かう、男の元へと。

「神様は崇拝者がいることで存在できるように、接続者が瀕死の今では……あまりに脆いものだね」

遠くでも聞こえるその声と、身体を裂かれて痛みに喘ぐホニさんの声が聞こえる。

それは耳を塞ぎたいほどに、今俺が感じる痛みの中では飛びきり

の激痛だった。

「やめてくれ……これ以上は、これ以上は……！」

手を必死に伸ばして力を入れようとしても、それは叶わない。空へは俺の手は届かない。見上げることしか俺には出来ない。

そして――

「あぁっ」

風が止み、雷が収まり、植物は枯れゆく。ホニさんが地面へと落ち、そうして戦いを挑まれた全ての者が倒れ、地面に平伏した。

関節が行ってはいけない方向へと曲がり、時々痙攣を起こしては血を身体のあちらこちらから溢れさせる……あまりにひどい惨状を、そのホニさんを俺は目と鼻の先で見てしまった。

「ホニ……さんっ」

倒れたホニさんは少し経つとピクリともせずに地面へと血の溜まりを広げる。

そんな完全に命の灯が消えかけたホニさんの体に、音は大剣を突き刺した。

俺はそれから指一本が届かなかった。近く、傍で、手を少し伸ばせば届いただろう。

しかし痛め付けられた肉体はいい加減にしろと言わんばかり、意識に反して動くのを拒んだ。

俺は無力で、ホニさんが壊されていく様を見せられるという自分が傷つけられることよりも痛く苦しい拷問を受け続けさせられていた。

そして唯一僅かに残った肺の空気を吐き出して声をあげることしか出来ない。

「ホニぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

打ち抜かれ、裂かれ、あちこちから血を吹き出して生き絶えていく様を動かない体はまじまじと俺へ見せつける。
あまりに惨く、残酷で。もうどうすることも出来ない。

「ちくしょうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

それは断末魔だった。街中に響くほどの悲痛の叫びは本人が生き絶えるまで続いた。一人を思い、後悔し、失望し、全て失い、その全てが闇へと誘われていく。

それは、ある一つの物語が最悪で最低で最初から存在した終わりで完結した。
登場人物がどれだけ理不尽に感じても、それは数ある結末の一つだった。

そう、これはいわゆる一つのゲームオーバー。
√2バッドエンド。

＊　＊

「……またいらっしゃいましたか」

人気（ひとけ）の無い教室で、訪れる者を待つように机に腰をかける一人の女性がある人物の訪れを予感してそう呟く。

「おはようございます、下之ユウジ」

前髪で目元を大きく隠す深い緑色の髪をした女子生徒の格好の女性、一組の机で顔をあげる青年に声をかけた。

第279話　√2－84　G．O．D．（前書き）

解き明かし？

第279話　√2－84　G・O・D・

俺はどうなったんだっけか。
確か今日は日曜だからと雨澄との戦いに備えて、だけども雨澄の張ったはずの”虚界”が途中で消えて、そこから反転した色の世界へと突然に変わっていった。
雨澄とも銃使いとも違う大剣使いのアロンツの一人の男が目の前に現れて、それで……

「……っ」

俺は倒され、桐は倒れ、ホニさんが――

「殺されていった」

あの惨状を思い出すだけで吐き気がする。酷かった、もう人を扱うようには見えなかった。
ホニさんの姿が血に塗(まみ)れ歪んでいく様子が、俺が最後の視界に映ったこと。

「……全滅ってことは、俺も死んだのか」

桐は恐らく再起は出来ないし、俺も意識が結局は落ちて。
今は何も見えない暗く黒い闇の中に居るように、何も俺の瞳に映すこともものは何もない。

「これが死後の世界……なんか？」

身体の感じる温度が分からず、かつてまで感じていた痛覚も見つ

からない。
音も色も何もかもが消え失せている。
「俺はこのまま終わるのか……いや、でも」
終わりたくない。子供が駄々をこねるようでも、おれは終わりたくない、諦めたくない。
このまま死んでなんかやらない。
「どうにかしてでも……俺は！」
ホニさんを守り、俺自身を守り、家族も、今までの日常も守る。
これは今まで何度も何度も病気のように繰り返して来た決意。
「ご都合展開どんと来い、さあ俺の眼を覚まさせてみろよ！」
誰かに、談判するように俺は叫ぶ。
その瞬間に殻が割れるように闇が砕け散り、眩いまでの光が差し込んで来る。
そして俺の居た場所は――
「おはようございます、下之ユウジ」
覗きこむは深緑色で目元を隠した藍浜高校制定品の制服を着た女子生徒。
そう、これは夢で出会った世界。ここは見慣れているが人のいない空虚な教室。その世界の主のように毎回話しかけてくる女性。

「ああ……おはよう」

俺は目覚めたように顔を上げて、その女性に挨拶をする。

「久しぶり……ではないですね」

「ああ、前は二ヶ月ぐらい前だっけか。これで五回目か？」

「ええその通りです――この世界でのことですが」

前回に見た夢で最後の最後に言われた余りにも意味深げな言葉に俺は問いかける。

「……なぁ、この世界ってどういう意味だ？　それじゃまるで世界がいくつもあるみたいじゃねえか」

某作品で言う世界線ってか、いやいやそれは――

「正確には”有った”ですね」

「いやーおかしなこと聞いたな、いやそんな訳……はい？」

予想外の返しに俺は驚愕して裏声った声で思わず聞き返す。

「ですから、今までに”違った世界”が有ったってことです」

「違った……世界？」

「はい、ぶっちゃけるとですね」

そうして彼女は衝撃の事実をあくまで淡々と、今までに何度も語り飽きたように話した。

「この”物語軸”の世界をあなたは何周もしてるんですよ？」

……物語軸の世界、何周。何周……！？

「つまりはゲームオーバーですね。バッドエンドを何度も向かえていることに――」

ゲームオーバー？　バッドエンド？　確かに俺はギャルゲーと現実の混じった世界を過ごしているけども。

それじゃあ俺は……！

「おいおいおいおいおい、それじゃ何か！　俺は何度も今回みたいな失敗を――」

「ヒントでも言った通りですよ”過ちを繰り返さないことを祈っておく”と」

「あ――」

……思い出した。それは確か俺が覚えている限りならば三度目の夢、雨澄との初戦の頃はずだ。

コイツの言うとおりなら、ニュアンスならば俺は何度も過ちを繰り返している……ということは、だ。

「……俺は何度も死んでるってことだな」

「いいえ。全ての世界がそうとは限らないんですよ」

「……は？」

全ての世界。

「お前はその全ての世界を知ってるのか？」

「はい、大体こちらからは把握できていますから」

以前と違って機械的に物事を伝える彼女に少しの違和感を覚えながらも会話を続行させる。

「下之ユウジがゲームオーバーになる要因としては”下之ユウジの死亡”と”ヒロインであるホニの消滅”ですね」

「俺が死ぬか、ホニさんが消えるか……それが要因なんだな」

「はい」

……待てよ、俺は反芻してなんと言った？

俺が死ぬか、ホニさんが消える……？

「”死ぬ”と”消える”は意図的に別けてるのか？」

「そうですよ。ホニが消える条件として、戦死するだけではないのですから」

「じゃあ、なんなんだ？」

「それはネタバレなので自粛します」

「いやいや、今まで散々話して来たことも相当にネタバレだと思うぞ？」

「いえいえ、今まで話したのは今までの失敗したあなたに話した内容ですから」

こいつが俺に話したのは、かつてのゲームオーバーを迎えた際に俺が聞いた事がら……ってことか。

「……同じ世界を繰り返してる、そんな解釈でいいんだよな？」

「いいえ”物語”を繰り返しているんです」

俺のかつてのデジャブはもしかしたらこれが主因だったのだろう。

同じ物語で同じ光景と同じ展開を繰り返した——だから俺は度々

ある光景に出くわす度に既視感を感じていた。

「デジャブや物語の最初期に自分の意思がない中で動いていませんでしたか？　物語を繰り返すことで身体がその行動を覚えてしまったと考えるのが妥当ですね」

それはおそらく耐性。生物が毒に強い免疫を死を繰り返すごと生存しようとする力によって作られていくように、俺も展開を繰り返すことで自分が覚えていた……ってことか。

そして余りにも手なれた初期の場面は俺が他の部分よりも何度も繰り返したということなのだろう。

更にはご都合展開とはいえ、アスリートにボコボコにされそうなほどに俺の腕力・脚力ほかもろもろの急激な向上も、俺の体がその鍛錬や動きの内容を覚えていたから……ということで強引ながらも頷ける。

帰宅部だが運動は嫌いじゃない、が好きでも無い。そんな俺が空中でそれなりにも重量のある鉈を常時振りまわした上に身体を動かして空を飛ぶことなんて、常軌を逸した運動量のはず。

それを数週間の内に身に付けて、実戦するなんて普通ならば考えられないことだ。

そしてあの朝の調子の悪さは、ある予感によって身体が動くことを拒絶していた……？　ストレスが原因で仮病が実際に病気に変わることもあるぐらいだ。恐らくは――

「なるほどな……じゃあ俺が今回の闘いで死ぬであろうことを身体が覚えているから、夏の朝は調子が悪かったのか」

「いえ、それは低血圧です」

「そこでギャグにするのか！？」

「私もいつまでもシリアスやってると死にますから」

「いや……そういう不謹慎な発言は死んだ奴の目の前で言う事でな

いと思うぞ」
「いえいえ、あなたはまた繰り返すのですから、実質生きる屍ですね」
「……お前って凄い嫌な表現するよな、それは天然か？」
「養殖で、完全に狙ってます」
「タチ悪ィ！」

……なんでまた急激にコメディ調になるのやら、緊張もクソもねえぜ。

「……はぁ、シリアスは持たないのな」
「下之ユウジは難しく間抜けな顔をしているよりも、間抜けにボケにツッコむ方が良いんですよ」
「そんなに間抜け連呼して……嬉しいか？」
「嬉しく、楽しく、実に。快感です」
「性格悪ィ！」
「でも、人の小難しい顔を眺めていてもいいものではないでしょう？」
「……まあ、そうだな」

俺も桐やホニさんが小難しい表情をしているとどうにも気になって仕方ない。
……なんというか俺は心配性で、ある種の親バカみたいなものなのだろうか。

「で、下之ユウジ。あなたはどうしますか？」
「どうするって？」
「世界をやり直すか、物語を繰り返すか」
「……どっちも同じ――とは応えないぞ」
「ほう、それでは違いを述べよ」

なんという上から見下された感、しかし寛大な俺はそれをスルーしておこう。

「前者は最初からやり直しで、後者は今までと同じようにバッドエンドを繰り返すってことだろ？」

「そんなところです、さあどっちですか？」

「――ここでチェス盤をひっくり返すぜ」

「残念、このチェスはマグネット式なので零れ落ちることはありませんでした」

「安っぽ！　マグネット要素があるせいでちゃちい！」

「しかしそれでもそれなりにするものなんですよね……」

「……まあな」

って、いやいやいや！

「とーにーかーく！　俺はお前の挙げた選択肢からは選ばない」

「……はい？」

「美少女ゲームではセーブ&ロードが出来るだろ？」

俺のやったギャルゲーではポイントごとに任意でセーブ出来て、任意の場所からゲームを再開出来る。

ものによってはクイックセーブという簡易セーブ機能がついているものもある。

「まあ……そうですけど、それが一体何の関係が？　思いつきですか？」

ちげーよと心の中でツッコミを入れて俺はそうして考える。それならば、と。

「だから俺は、この真相を知ったまま戦いのニ週間前に飛ぶぜ！」

第２８０話　√２－８５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ここまできてヒロイン死亡という、あまりにも読者をナメた構成に見切りをつけられる悪寒。
クソゲヱ√終盤にありがちな熱血展開？

第２８０話　√２－８５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「だから俺は、この真相を知ったまま戦いのニ週間前に飛ぶぜ！」

そして俺はそのセーブポイントからロードする。全てを最初ではなく、出来るならば途中から。

俺が知り得た未来を持ち帰って、それを生かして俺たちは生き残る。

「えええええええええええええええええええええ」

「え、出来ないの？」

「え、や、えっとですね……その展開は今までになかったものですから」

「で。出来るんだろ？」

「なんで知ってるんですか！」

「あ、当たった」

「山勘！？」

「いや、そうだったとは。そうかそうか」

聞きだす為にはまず誘導、基本だな。

「……うー、そうですね。確かに出来ます」

「なら、それでさせて貰うぜ」

「……でもですね、なぜこの方法があるのに今までのあなたが選ばなかったのか分かりますか？」

俺が選ばなかった……？　そんな訳があるか、こんな攻略情報を手放してたってのか？　ないない。

「何か、どうせお前が教えなかったんだろ？」
「失礼な！　というかなんであなたは私がそんなことが出来るとそもそも断定してるんですか？」
「え、違うの？」

ここまで話といて、その質問はどうかと。なにせ何度も違う世界の俺を見てきているはずだ。

「いえ……まあ、出来ますよ――はっ、これも山勘！？」
「いや、デジャブを少し思い出してな」
「凄いピンポイントですね！」
「……ああ、あああ。思い出して来たぞ……てか何で俺はそれまでの事を忘れていたんだろうな？」

俺は確かに思い出されていく。今年の夏までの出来事と、殆ど同じこと以前にも経験していた――そして隣にはホニさんが居て。
それが疑問だ、デジャブ程度で深層心理が思っていることぐらいしか何故俺は知れていなかったのか。
そして彼女はまた衝撃的なことを言い放つ。

「それは――あなたが望んだからですよ？」
「……へ？」

これまた素っ頓狂な声をあげてしまう。それは、まさか。というような疑問が大きく含まれていた。

「もう一度言いましょう。あなたが記憶を消してほしい、と訴えてきたからです」
「……」

俺が、か。まあ、確かにホニさんの殺される場面は覚えていたいとは思えない。
ただそれは逃げているだけじゃないのか？　かつての俺は――

「”俺は世界をやり直して、最初から困難を超えて行きたい”って言った時と”俺はこの記憶を持っていたら押しつぶされるかもしれない……だから消してくれ”というようにですね」

なるほどな、俺は。今までの俺は自分の意思でその道を選んだってことか。

「は」
「は？」
「ははははははははははははははははははははははははっ！」
「なっ！？」

俺は爆笑する。

「今は笑いどころじゃないと思いますよ！？」
「ああ、分かってる。これは皮肉だ、自分に向けての嘲笑だ」
「え、それはどういう――」

俺は声を大にして、今度こそ腹から声を出すように深呼吸をして――

「とんだヘタレだな、かつての俺はぁ！　逃げてんじゃねえぞ、このクソヘタレ野郎ぉ！　やり直す？　笑わせるな、それは逃避だ敗北だ！　この知った事実を何で教えずに次の俺に丸投げってか……

反吐が出る」

思ったことを声に出す。それはかつての未来に託す……いや問題を放り投げていったかつての俺への怒り。

聞いただけでふつふつと怒りが募っていく……この世界は気に入らないから、プレッシャーだから止める、と？

「ちょ、下之ユウジ！　キャラが変わっていましてよ」

「ああ、キャラは変わった。いままでのヘタレで終わらせてたまるか！　確かに俺の死ぬ間際の記憶は消し去りたい、だがな。それまでの大切な思い出までも消してることに気付かねえのかな、クソみたいな俺は！　全部投げ出したら楽にはなれる、だがそれで世界を物語を繰り返してどうなるよ。過ちを繰り返してどうすんだよ！」

「……」

一人語りを一旦止めて、俺は俺の突然の発狂ぶりに呆気を取られている女生徒へと向き直る。

「だから、いいか。俺はこの悲劇を惨状を繰り返さないからな。だから俺はさっき言った通りに、二週間前から始めさせて貰うぞ？出来るよな？」

「……はい、あなたが望むなら」

「よし、じゃあ早速行かせてもらう。今度は絶対に死なないし、死なせもしない。違う未来を進んでやる！」

「……分かりました。記憶はそのままでいいんですね？」

「ああ、この楽しく辛いホニさんとの記憶は絶対に消さねえ」

……今まで俺と同じようにはならない、逃げない。

決意を思い出す。俺自身を守り、ホニさんを守り、日常も守る―

―未来をカンニング出来た今では、そんな未来には辿りつけるはず

だ。

「……前回の物語のあなたとはまた違いますね、ここまで熱血だとは」

「ホニさんの可愛さの為なら俺は死ぬ気……いや生きる気で全て守り抜いてやる」

「日本語とキャラ間違ってますよ」

「確かに今までの逃げてた俺からしたら間違ってる――だが、これからが。今の俺が正史になってやる」

「……ビックマワスですね。負けてまたここに来た時は恥ずかしいですね」

「たしかにそれは恥ずかしいな。でも俺は何度繰り返しても、この記憶を消すつもりはない！」

「……あなたが心変わりしなければ、そういう決意をするあなたは私のタイプです」

「いや、いきなりそんなこと告白されても」

「まあ、下之ユウジを私は気に入ってますから。言うでしょう？好きな子ほど苛めたい」

「少し同意しておくが……俺は今まで苛められてたんだな」

「まだ序の口です」

「……過去の俺はお前のせいでヘタレたんじゃないだろうか」

「まさかとんでもない、元が駄目だったからどうしようもないですよ」

「……相変わらずに苛めるなあ」

「えへ」

「褒めてはいない」

「……それでは二週間前ですね？　一応二週間の理由を聞きたいのですが。前日でも一か月前でも戦闘後以外なら私は戻せますよ？」

「ああ、思い当たる節があってな。二週間ぐらいあればなんとか十分だ」

「……そうですか、じゃあそこに寝て下さい」
「ああ、俺の席な……座り慣れてる」
「じゃあ、今度こそは――」
「過ちを繰り返さない、次の俺に託すつもりは滅法ない。俺は未来を目指す」
「……良い顔です。それでは」
「おやすみ――」

意識は遠のいていく、そして闇の中で時は遡っていった。
一日、二日、五日、一週間、そして二週間。

俺はその悲劇の、最悪の結末を知りながら、世界を戻る。

「さあ、これからが本当の闘いだ。がんばれよ、俺」

そして意識は覚醒し、瞳には強い日差しの光が差しこんで来る。
それは朝、いつもは調子の悪かった夏休みの朝。

携帯ディスプレイを開けば、そこには――

七月二九日。

＊　＊

「……ふぅ」

なんというかいきなりに嵐のような人になりましたね、下之ユウジは。

「でも」

今までの”逃げ”の彼よりは何百倍もマシです。

「正直今回も消すんだろうかと」

思ってましたから。ヘタレて全てをやり直し、何も知らない自分への丸投げ。

「でも」

あなたが死ぬ未来だけではないことを、下之ユウジは気付けていたでしょうか？

「少なくとも、あの戦いで生き残っても」

結局はバッドエンドを迎えてしまっていたのですが。

「桐の言ったことを、覚えていると良いのですけど」

『ホニに力を使わせるな』と。桐は念押しのように言っていましたね。

「でも……今回の彼は大丈夫でしょう」

今まで”十回”ほど、この物語を繰り返す下之ユウジを見てきた私が言うのだから間違いないです。

「頑張ってください、下之ユウジ」

その意気で、未来に突き進んでください。次の物語に進む為にも、この世界をやり直すことことがないように。

「……あの子がそろそろ、私に気付く頃ですから」

――その響く声は途端に途絶え、その人影は消え失せる。空虚な教室には誰もいない、ただただ空の机が並ぶのみ。

第２８１話　√２－８６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

すんません、力尽きて予約投稿分を使いきったところで更新が途切れましたー

第281話　√2－86　G・O・D・

「……本当に戻って来れたってことか」

身体にあるであろう切り傷や刺し傷を触って確かめるも、その類は見つからない。至って普通の戦い前の健全な肉体だ。

日付が本当であるならば、これは俺たちが敗北し消された二週間前の雨澄との戦いの日。次の週を最後にして雨澄が戦いに参加することを止める。

「（にしてもあれはなんだったんだ？）」

最後の日も最初は雨澄の虚界というのを空の色、世界の色は示していた。

しかしそれが唐突にも途切れ、剣使いの作りだした虚界――反転した世界へと姿を変えた。

「（剣使いは何か言っていなかったか？）」

仲間が力尽きた――と、現れ様にそんなことを言われた記憶が有る。

「（それは雨澄が力尽きたって解釈でいいのか……？）」

それも虚界を作りだせた直後ということになる。

アロンツの奴らがそれぞれの世界の色を持っていて、しかしそれぞれ持てる色が複数が存在したとしたら――という可能性を除くことが前提だが。

「それよりも考えるべきは……そうだな」

なぜ負けたか、だ。

敗北理由を思えばまず最初に”俺の実力不足”が大いにあるのだろうが、本当にそれだけだろうか。

「桐の疲労は少し前からも有ったはず」

それが蓄積して結果、あの戦いの当日に吹っ切れ倒れた――タイミングを考えればあながち外れてもいないだろう。

桐が戦闘に参加する度、その後も翌日も不調で最近ではそれを引きずっていた印象さえあった。

「それから考えだされる答えは――」

桐の疲労の要因は”チート”俺に与える力と鍛える為に世界を維持し的当てを用意し、ホニさんを戦いの中で流れ弾から、敵の攻撃から守る力。

おそらくは謎ドリンクも、謎薬も、治癒の力も……言ってしまえばファンタジー、一般人が出来るようなことでは一つだとしても有り得ない。

それを全て行っているのが、口調こそ老婆だが外見は幼い子供。

「相当に負荷がかかってたってことだよな……」

その負荷は日に日に増し、戦う度に回復することは殆どなかった。

俺の部屋にふらふらと入ってきては気付かぬ間に寝息をたてている桐の姿を思い出す。

それは心底疲れているように見えて、少なからず寝る回数が増えたことで限界が近づいていたのだろう。

それとすべき雨澄以外の銃使いやアロンツの他メンバーの対策をしたくても出来なかったのもキャパオーバーでこれ以上の的当てを顕現することに力を割り当てられなかった……ということで間違いないだろう。

そして俺の重量制御の時間が減少していたのも、謎ドリンクの支給が減っていたのも。

チートを抑える為。

あからさまでないほどにチートを抑制し、負担を軽減する為。

「（……ごめんな、俺は気付けなくて）」

心底情けない、俺は頼りすぎていたことに気付くことも出来ないなんて。それが当たり前で、ご都合展開と割り切っていたなんて。

なんて調子が良いんだろう、どれほどまでに主人公という自分の立場に陶酔していたのか。

「（それでも……桐の存在は必要不可欠なんだよな）」

俺の無力さを改めて実感するが、桐のチートが無いことでは完全に敗北の道しかない。

俺の数か月程度の付け焼刃の鍛錬だけが実を結び、対抗する手段にはほぼならないだろう。

桐のサポートはあまりにも重要だった。

「（ということはどれだけ負荷を減らすか、か）」

それは非情すぎることだった。それでも俺はこれを乗り切る為には桐を活用しなければならない。

最悪の結末を向かえない為に、桐の疲労が遅れるように。

「（この戦いが終わったら、何か奢ってやらないとな）」

一日コキ使うのも構わない、おそらくはそんなことだけじゃ返せないほどの罪を俺は重ねるのだ。

しかし今のは同じフラグでも完全なる”勝利フラグ”と、言っておこう。これだけは俺が成し遂げるべき事柄だ。

鍛錬でもチート、雨澄との戦闘でもチート。そのチートの回数を抑えることで桐の疲労を抑えることが出来るならば――

「俺が桐のサポート分も頑張ればいい」

って、ことだ。

鍛錬はゆっくりと時間の流れる桐の世界を使わずにリアルタイムで、俺が自主鍛錬をする。

雨澄の戦闘ではあまり飛行を使わずに地上でホニさんと桐を守りながら逃げ切ればいい。

「後者に関しては原点回帰ってところ……か？」

最初に訪れた日常の破壊。その時俺は抗うすべなくホニさんと逃げていた。

「今では少なからずも力は……あるはず」

あのときよりはマシになっている……と、思いたい。

手助けなしに何処まで出来るのか、と。

「自分との戦いだな……こりゃ」

鍛錬は休む時間があったからこそ、あれだけの膨大な鍛錬量をこ

なしてこれた。
あれだけの鍛錬の疲労を謎ドリンクで、体に鞭打つ結果とはいえ抑制してきた。
雨澄との戦いで俺がしくじったことで流れ向かう矢を弾き、俺に翼を預け、戦いの傷を癒させた。

「これだけのことを俺は……やるのか。でも――」

これが最後の弱音だ。
俺は大見栄張って、夢の中のあの人に言ったはずだ。決意を改めてしたはずだ。

『今度は絶対に死なないし、死なせもしない。違う未来を進んでやる』

俺自身を守り、ホニさんを守り、日常も守る。もちろんその中には桐も家族みんなも入る。
あの夢のあとに少しずつ思いだすのは俺のかつての敗北の光景。
俺は剣使いの前にも銃使いに負けることも、雨澄に負けることも――ホニさんが消えることも展開として存在する。
それまでの俺はあの人言うとおりなら”未来に託した”俺が殆どであったこと。
言い方を変えれば今を諦めて、抗う事を止めて、次の俺へと丸投げした責任を放棄した卑怯な自分。

「俺は変われる……変わらないといけないな」

生き抜く為にも、守る為にも。そう、俺は今日から、この瞬間から。

「……俺はどれだけ我儘で偽善者でも、これだけは通してやる」

意地悪く、諦め悪く。俺は――

「俺の戦いはこれからだ」

新たな決意を胸に立ちあがった――その直後にやってくるのは桐。

ドアを壊す勢いで叩き開け、息を切らして俺に矢継ぎ早に言い放つ。

「ユ、ユウジ！？　どういうことじゃっ、時がどうして今に巻き戻っておるのじゃ！　本来ならば、本来ならばっ……！」

……なるほどな、桐は全て知ってるのか。確かに桐は攻略情報を知っているはずだけども……把握できてたのか。

おそらく桐はホニさんが消えゆく未来も考えて、ホニさんには力を使うなと言ったのだろう。

だからきっと、あの敗北の記憶も残っているはず。

「うぬぬ、わしがもっと上手く立ちまわれていれば、今までの世界だと一番良い展開だったと言うのに……」

ははあ、やっぱりに桐もあの人と同じように世界を見れているということか。

しかし俺は桐にいらん心配をかけないように、変に気を使わせないように、勘付かれないように――白を切ることを遂行する。

「桐？　何言ってんだ？」

「そもそもこのような二週間前などという時期ではなくゲーム開始時期の――は？　え、ん？　……分からないのか？」

今まで弾丸のように喋る桐が途端にトーンを落として、その問いを口にする。

「何を言っているのか俺にはさっぱり」

おそらく桐の言っていることは俺の知り得た知識が無ければチンプンカンプンだったこと請け合いだ。

そうなればこの反応は間違っていないはず。

「そ、そうか……ならなんでもない、テレビゲームのやりすぎのようじゃな。う、うむ。疲れているのかもしれないな――」

溜息をつき、安堵したように、それでいて少しばかり残念そうな表情を浮かべる桐は部屋を後にしようと背中を向ける。

……しかし、それを俺は呼びとめた。

「疲れてる……か。そうなら俺は桐に言いたいことがあったんだった」

「なんじゃ？　少し改まってからに――」

こちらを振り返って、怪訝そうに見上げる桐に。俺は言い放った。

「これから二週間、桐はチート……てか能力の使用は禁止な」

その時の桐の顔を俺はよく覚えている。

呆然と、目を見開き口をだらしなく開けて、ただ茫然と。

なにをコイツは言っているのだろうという疑惑と正気の沙汰をじ

ゃないだろうというような表情で。

「お、お主！　それは何故に――」

「それは……気分だ。だとしても絶対な？」

俺はそうしてニヤリ笑みをつくる。

そう、これからが俺の本当の戦いだ。

第２８２話　√２－８７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

グダグダの要因
・雨澄との初戦が長すぎた
・日常パートが少なく、シリアスでバトルシーンがくどい
・ユウジの決意がしつこい

……なんと言いますか、とりあえず√２が終わったら本当にＲＯＭるべきかなあ

第282話　√2－87　G．O．D．

「お主正気で言っておるのか！？」
「ああ、そうだ」
俺は桐にこう要求する「お前は二週間の間空間を作ることも、俺をサポートすることも原則禁止だ」と。
桐の反論は当たり前だった。
「そんなこと無理じゃ！　不可能じゃ！　お主一人でなんとかできることではない！」
「いや、なんとかしてみせる」
「いきなりに何故そんなことを言いだす！　今までユウジはわしのサポートを受けていたというのに」
「そうだな……ケジメって奴だ」
「い、意味がわからぬ」
分からなくていい、でも桐に力を使わせずに疲労を抑えることで二週間後には――
「その代わりに二週間後の戦いでは全力でサポートしてほしい」
「二週間後……！　お、お主っ！　やはり未来を知って――」
「……まあホラ吹いても仕方ないな」
そうして俺が知っていることを話す。その未来さえ知ってはいたが俺の口からそれらが出ることに桐は驚愕を示していた。
「……それでお主は最初からやり直す選択肢を除けて、こうして二

週間前に遡ったということか」
「ああ」

この貴重な記憶を残したまま、世界を戻った。過ちをもう繰り返さないように、誰も消えないように。
しかし桐はふるふると肩を震わせ俯きながら俺を怒鳴りつける。

「駄目じゃ駄目じゃ駄目じゃ！」
「……なんでだよ」
「そんなことをしてしまったら……お主は」
「いつもの何倍の危機に晒され、回復の手段もない。予防線無しの命を賭けた戦いだ」
「そこまで理解してなおそんなことをぬかすのか……っ」
「理解したからこそ、俺は決意できた」

全てを守ると。

「いいや、今度こそわしはヘマはせぬ。わしがお主を全力でサポートするぞ。今回のわしは一味二味も違うでの、そう簡単に倒れは――」
「倒れることでサポートを受けられない。俺が桐の力だけを目当てにしてると……本気で思ってるのか？」
「……」
「心詠めるなら分かるだろ？」
「……わしを思ってのことじゃろ」
「そうだな」

声のトーンが落ちて、少しの間が空いた。そして桐は声をはりあげて苦痛の叫びをあげた。

「……わしは、わしは！　これ以上お主を傷つけたくなどない！　今までも散々お主に酷なことを強いさせた……だからわしが出来ることは最大限に行うのじゃあ！」

駄々をこねるように、自分の我を通そうと俺に思いをぶつける。

「俺は少なくとも桐に酷な事を強いられた覚えはないな」

「……しかしっ！　おそらくお主が知り得ぬところでも――」

「知らない、分からない、記憶にない。だから俺はそんなことどうでもいい。俺は桐が見るからに疲れて今にも緊張が解けた途端に倒れてしまいそうなほどに、衰弱した桐の姿を俺は見たくない」

「わしは努力する！　だから、の？　わしも手伝わせてくれ、そうでないとわしは……」

とり憑かれるほどに俺の助力をすると執着し、知らせれた自分が何もできない事実の拒絶。

桐は病んでいたのだと思う。俺の少し蘇る、何度も繰り返す世界を、物語を過ごして。

俺がもしそれを覚えていたら平静を保てていただろうか、今はこうして一つの記憶を鮮明に残しているだけで思いだしたとはいえそれ以前のことはおぼろげだ。

しかし桐はその全てを経験し知っているのだろう。それ故にここまで執着する――自分が力になると、サポートすると。

「なあ桐、その戦いが終わったらどっか遊びに行こうぜ。家族皆で」

「い、今に何を言うのじゃ！　それに、それは……」

「死亡フラグってか？　そんなフラグは俺が叩き折る、俺たちは生き残ってみせる」

「……その自信はどこから来るのじゃ、どうしてそこまで自分でなんとかしようとするのじゃ」

「自信の元は”守りたいものがあるから”ってところだ。自分でなんとか云々は――桐、お前にも言えたことだろう？」

そうして俺は桐を説得して、二週間の間チートの封印を約束させた。

それでも不安そうで不服そうで悔しそうだったが……こればっかりは仕方ない。

俺はこれでも二週間後に桐に動いて貰うのも躊躇している。でも、桐の力なしに剣使いは倒せない。

「（脚力と腕力が必要か……）」

そうして訪れる戦い。

それは午後の二時のことだった。

「ホニさん、桐っ！」

「うむっ」

「うんっ」

桐は力を行使しない条件として”わしも連れて行け”と言われた。

『……わかった。だが力を使わずに俺はお前とホニさんと守るからな』

それを聞いてもしかして迷惑をかけるだけではと、はっとなる桐だが「お前から言ったことだろ？　安心しろ、俺が守る」と言うと黙った。

だから俺は翼を預けられることはない、地上でふりそそぐ矢を鉈で打ち払うのみ。傷も癒せない、身を守る術もこの鉈のみ。

「――見つけた」

「見つけられた……っと！」

早速に撃ちだされる矢を俺は弾き近くのブロック塀にぶつけて落とす。

俺は地上で桐がホニさんを連れる中で、後ろ向きに進み空を見上げながらその雨澄を見据える。

空で遭遇する雨澄よりも小さく見えるどころか強大にさえ見える……天と地の差とは恐ろしまでに幅があるものだ。

「たあぁっ」

周りこむように桐とホニさんの進行方向へと矢を放った瞬間に俺は、翼を持った時ではないしろ、かつて比べれば格段に増した跳躍で前に躍り出てそれを弾いた。

「――なぜ空へと来ない」

「飛ぶ必要がないと思ったからだっ！」

話してる間だと”手が御留守”なんてことはなく矢継ぎ早に矢が向けられていた。

ペン回しの要領でクルクルと回る何キログラムかは有る鉈を振りまわすことで金属と木製のハイブリッドとは言えあらゆるものを弾く巨大な扇風機の羽のようなものとなる。

それを秒速六回転というもはや常人の域を超えてかくし芸大会でも上位に食い込めそうな能力を自力で身に付けてそれを回し、弾き飛ばす。

鉈の角度を調整して流れ弾が後ろや前や横にいるホニさんたちに当たらないように直前直前で変えながら矢を確実に飛ばしていいった。

「――今日こそは」

そうして空に浮かぶは無数の弓と矢の組。

「桐っ、ホニさん走るぞ！」

「うむ（うんっ）」

正直これを相手にするのはヤバい、桐の助力が無ければ死に向かうことだろう。

今も完全無傷ではなく擦りキズかすり傷、切り傷はある。しかしそれがたまたま大本を逸らしただけであって――命の危機には変わりない。

「桐っ、手を！」

「うむ！」

がしりと俺の手を掴むと俺は鍛錬で身に付けた脚力で走り駆ける。

空からは空気を裂く音が聞こえ始め、もう少しで無数の矢が到達するだろう。

しかし前方には以前桐に教えてもらった”虚界の終わり”見えてくる。

ガラスのケースの外に出るような、その境界の先にはいつも通りの世界が広がっている。

「いっけえええええええええええ」

滑り込むように二人を連れて、俺は地面を蹴り飛ばす――そして俺が越え、桐が越え、ホニさんが越え――

そうして俺は一人でまず一つのことを成し遂げることが出来た。

「はぁはぁはぁはぁ……桐、これでいいだろ？」

「……侮っていたな、すまぬ」

そうして俺たちは元へと戻った世界で、少しの傷が痛みはじめながら家へと戻って行った。

＊　＊

七月三十日

分かったことだが、剣使いと戦うところから今までの未来に”付くはずだった”筋肉や俊敏性は無くなっていた。

おそらくは二週間分の鍛錬で得たことはリセットされている形になる。戦いの際に動けていた部分が少し遅れるので感覚を掴むのには時間を要した。

なんとか体が馴染んだところで――

「じゃあ行ってくるわ」

「気を付けるのじゃぞ……？」

俺が玄関でスニーカーに履き替えていると、送りに来た桐がいつも以上に不安げに顔を沈めて言った。

「なーに、なんで今頃そんな心配してんだよ――」

そうして桐の作りだす時間がゆっくりと進む世界の中で行ってきた”チート”を使うことなく行える鍛錬を一人で行い始める。

通気性のよいTシャツと半ズボンの夏真っ盛りの日差し照る照る空の下を駆ける為のかなりの軽装で首には汗拭き用のタオルを巻き付け体をほぐしていった。

「……よっしゃ、町内十周だな」

筋を伸ばし足をほぐし終えたところで、俺は走り出す。

「……よっしゃ！」

俺はそうして走り出す。その日は三十四度を軽く越える猛暑の日だったという。

第２８３話　√２－８８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

ミナのスポーツ万能設定を起動！

第２８３話　√２－８８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

八月二日

「あっついわっ！」

ぜぇぜぇはぁはぁと息を荒げながら天を仰いで叫ぶ。正直叫んだところで心頭滅却ならぬ心頭冷却になりもせずに余計な虚脱感を生むだけなのだが。

おいおい太陽さんはどうしたことなんだ、この暑さはなんですか。とある猛暑の機械壊し（パソコンキラー）ですか。

流石の俺でも脂汗が出るわ出るわの大出汗サービスだよ。もう少し人類や地上を生きる植物ｙや動物たちに優しくしてもいいんでないですかい？

……こんな事態になってるのも人類が生み出した科学文明の弊害ですが、申し訳ないと思いつつもそれでも暑いっ！

「冬が恋しくなるもんだ」

一方冬であれば寒さの余り夏が恋しくなる。やっぱり季節はその中間を取るような過ごし易い気候が多い春と秋がいいね。

「……よし、休んだな」

自分に言い聞かせ、俺はそうして駆けだす。

今日の気温は三十五度越え、海に町が面していても少なからず涼しくなる要素であろう潮風は殆ど来ない。

八月五日

「……つー」

空は黒、腕についた安物アナログ時計の太い針は七を指す。
未だに即席で蒸しパンを作れるばかりに蒸して、それでまた暑い気が立ち込める空の元。
俺は学校側の商店街の入口で待ち合わせをしていた――そう、今日は夏祭り。

俺にとっては何度も、おそらく忘れているであろうこの世界の町の人が経験したであろう夏祭り。
俺ともう一人を除いて、同じ物語を繰り返す。そんな中の一コマで、今までの夏休みの日々もそれ以前もそうだった。

姫城さん、ユキとやってきてユイと姉貴とホニさんがやってくる。
マサヒロは誰だか忘れた。

「ユウジ様っ」

相変わらずの着こなしをする姫城さんに見惚れながらも話していると、続々とやってくる。
かつてと同じように桐は今日来ていない。

＊　＊

桐の容体……と言うと難だが、正直前回とは比べ物にならないほどに元気で活発だった。

俺の部屋には毎日来ているものの、寝ることなく俺と話したり戯れていた（ほぼ一方的に）

声だけ言葉だけが元気な桐よりも、俺を襲う事を歓迎してはいないが、大分マシだった。

俺が桐のサポートを受けないだけで、桐の体調が大きく変化することがなく――桐のチートがどれだけ桐の体を削っていたのかが分かる事象でもあった。

それでもおそらくは”あの戦い”から二週間前、その以前までの疲労は蓄積されていると思うので安心は出来ない。

……決して望むわけではないが、やはり俺にはどうしても桐が必要で。だから”あの戦い”で出せる力を今は留めて置いてほしい。

俺がどれだけ卑怯で冷酷なことを桐に要求しているのか――分かっているはずなのに桐は「無理はするのじゃないぞ」の一点張り。

だから今の今までも自分が出来ることはしてきた。

温度も時間も管理された桐の世界で行う鍛錬とはまた違って時間を通常通り削り、鍛錬内容も限られる――それでも俺は”あの戦い”での俺に近づけるように毎日鍛錬を積んできた。

「……無駄になんてしてたまるか」

もう一度物語を繰り返すことがないように、消されてしまわないように。俺はその日まで――

＊　＊

桐が外に出てどうということも無いが、桐は自ら遠慮した。
だから俺も無理に誘わずいつものメンバーで祭りへと繰り出した。

「あー。置いてかれたか、はぐれたっぽいな」
「ごめんね、ユウジさん……我が浮かれていたせいで」
「いやいやホニさんのせいじゃないぞ……うーむ」

俺は以前と同じようにホニさんと二人回っていた、まあ前述の通りにはぐれてしまった訳で。

「よし、ホニさん。これから俺とデートしようぜ！」
「えっ、デ、デート！？　アートでも芸術でも爆発でもなくて！？」
「うん。言葉遊びがパワーアップしてるけども、それは少し無理があるな」

そんなホニさんの天然の間違を正すのも、心地よい――って俺が粗を探したいとかではなくて！
ホニさんと一緒に歩いて暮らせて過ごせるのが俺はとても幸せで。
未来を知らないホニさんは隣を笑顔で居てくれて……俺はその努力が少しでも報われる、もっと頑張れる気分にさせてくれる。

「よーし、パパがんばっちゃうぞー」
「ユウジさんがパパ……！　もしかしてユウジさんには隠し子が！？」
「ああ。昼ドラの見すぎは良くないぞ」

そうして楽しい時間は過ぎて、時折デジャブを感じるものの、一応思いだし知っている今では殆ど違和感はもうなかった。

八月八日

あの戦いまで一週間を切り、俺は相変わらず鍛錬に力を入れる。
鍛錬と言っても駆けこむだけではなく。腕力も付ける為に腕立て伏せやら、機動力を上げる為に腹筋やらは屋内の自分の部屋で行い、桐に傍で監修して貰っている。

「更に体を上げるのじゃ！」
「お、おう」

桐はなんだかんだで指導が上手く、屋内運動の教師は桐にまかせっきりだった。
桐の表情は健康的で、その年相応の白い肌に淡い桃色の頬。俺の今まで見てきた健常な桐の姿だった。

八月十日

一週間前からあることを始めて剣道場へと来ていた。
エアコンがあるはずもない剣道場は剣道部員の汗水を濃縮還元したかのような強烈な臭いが立ち込めて、吐き気を催すほどの悪環境だった。
丁度この時期の剣道部員は遠征していて、今はもぬけの殻。じゃあだからといってただ一年生の俺が言って使わせてくれる訳ではない。
そう――

「おまたせユウくん！」

黒い装束に胴と垂れを付けて右手に小手を両手分、左手に面を持って歩いてくる姉貴の姿。

そう、俺は姉貴に手ほどきをして貰っていた。

「ああ、毎日悪い。姉貴」

俺も姉貴と同じ姿、同じ持ち物で礼を言う。

「ううん。ユウくんがやりたいって言うんだから私はいいんだよ、それに……ユウくんのスポーツやってる姿を間近で見れるなんて……もう学校生活が終わってもいいよ」

「いやいや俺の運動姿見ただけで学校を終わらせちゃだめだから！」

「それだけ嬉しいってこと！　だってユウくんとは学年が違うから、そう一緒に運動する機会もないし……本当に嬉しいんだよ？」

「姉貴……」

「でもユウくんだからといって、私は手加減しません！　だってユウくんにも剣道にも失礼だもんね」

「それでいいんだ。ありがとな、姉貴」

「そう言われると照れちゃうな――うんっ、じゃあ面付けて？」

「おう」

姉貴は容姿端麗成績優秀、それでいてスポーツ万能だった。

二年から始まっている剣道では、時折行われる授業内での試合では負けなしだとか。

そんな姉貴に一週間前打診して理由も聞かずに「うん、いいよ」と了承した上で生徒会副会長権限で今は居ない剣道部員に申しつけて、貸して貰ったという。

学校の殆どの設備が開いていない土日を除いて、俺と姉貴は剣道

場へと訪れ、授業で使う胴着を貸して貰った上で行っていた。

「後ろは結べた？」
「ああ、出来た」
「竹刀持って……じゃあ始めるよ――」

姉貴がたぁっと大きく掛け声をあげたことで本格的にそれは始まる。

「――エンッ」
「くぅっ」

一撃一撃が女性である姉貴とは思えないほどに重い、竹でなくアクリルで出来た竹刀の剣先が俺の持つ竹刀の剣先を叩き軽快な音を道場全体に響かせる。

一つの動きが終わると、気づけばもう次の動きを遂行し振りかざされる。そして身なりの軽い姉貴は俊敏に動き回り俺の目を惑わす。

「たぁぁっ」
「がっ」

面の寸前にまで迫った剣をなんとか受け止めて鍔迫り合いの後に弾き飛ばす。姉貴が後ろへと退くも臨戦体制は一向に崩す気配がない。

少しでもこちらが先に出ようモものなら一閃されること間違いない。俺が鍛錬で動きが鮮明に俊敏になっても良くて互角、本当に身を守らなければ一本を容易に取られる。

「っ――！」
「たっ」

アクリルとアクリルがぶつかる音は思いのほか軽いながらも大きく音を震わせる、竹刀がぶつかる度に僅かだが歪むほどでもあった。

そして攻めのパターンも”面”だけでなく腰を突然に落とし俺が面を打とうとしたところで”胴”を打たれる。振り上げ胴をしようものなら一瞬の隙に”小手”を受ける。

姉貴は強い。初日は姉貴はこういう場では誠意を持って戦うので手加減なしに何度も一本を取られたことが思い出される。

姉貴を過小評価していた訳ではない、それでも俺の技術は剣使いと戦う前では皆無だったのだ。剣道という運動の中でそれを思い知らされた。

竹刀が真剣だったらどうなるか――俺はとっくのとうに剣先で切られ胴体が二分割されていてもおかしくない。

それでも俺は全く敵わない訳ではない、最近は。始めの数日と違って姉貴に一本を取れるようにもなっていた。

そして僅かな一瞬――引き面をしようと後ろ退いてやってくるところで、俺は腰を落とし体を半分回転させて。

「ドォッ――――」

姉貴の胴を竹刀が撃ち叩いた。

動きは止まり姉貴は竹刀を帯刀して下ろして、面を脱いだ。

その時に窮屈に押し込められたかのようにされた纏められた茶髪がさらさらと舞う。

汗を額に残して新鮮な空気に触れられたことを喜ぶように顔を振って少し張り付いた前髪を揺らした。

「ユウくん上手くなったねー」
「ああ、それもこれも姉貴の指導の賜物だぜ」
「ユウくん、またまた御上手」

先に面を脱いで予め持ってきていた水に濡れたタオルを手渡すと「ありがとね」と言って受け取って顔から首筋までを拭いた。

「ユウくんも男の子だもん、お姉ちゃんよりも強くなるんだよね」
「いやいや、まだまだだって。姉貴にはかなわないよ」
「ううん、ユウくんはすっごい上手になった！　お姉ちゃんとしてユウくんの成長は嬉しいです！」
「どうもありがとうございます」
「でもユウくんが相手して欲しいって言うからてっきり――〇〇の練習かと」
「……それは規制入るから言わないでくれ」
「え、ユウくん授業だと柔道だよね？　あれ？」
「……うん、合ってた。俺が間違ってた」

ありゃー、俺もなんか青少年的間違えをしてしまったようだ。

「主に寝技とか寝技とか寝技とか〇伽とか」
「最後は絶対におとぎばなしの”御伽”ではないよなあ！？」
「お姉ちゃんに言わせるものじゃないのっ」
「弟に言わせることじゃねえ……」
「ふふっ、やっぱりユウくんと一緒だと楽しいね」
「俺も姉貴と居ると――飽きないよ」

色んな意味で。

「じゃあもう少しやろっか、水分補給する？」

「ああ、じゃあ貰う」
「はい、関節キス」
「……いただきます」

一応これはスルーした、と捉えてほしい。うん、一応はね？

俺が剣道を始めたのは……一応相手が剣使いで風を巻き起こすような強大な力を振るうとはいえ剣捌きでもあるということ。
だから俺は剣道を教えてもらった。体制や撃ち方とかもろもろ、そして実際に試合もやってもいる。

「（気休めでも、少しぐらいなら分かれるはず）」

剣の動きを、人の動きを覚えられることだけでもかなり有用だ。
そうして姉貴との蒸し風呂同然の剣道場で打ち合い、打ち打たれての稽古が再開される――

八月十一日

前日のこと。俺は鉈を研ぐ一方で桐と話していた。

「明日は――それで頼む」
「でもそれだけで良いのか？」
「後は、その時だけ重量制御とホニさんを守ってほしい」
「うむ、了解した」
「じゃあ、また明日」
「……今度は大丈夫じゃ、言っていいのかわからぬが。今回のお主

は今までとは違う」
「変われたように見えるなら成功、そして明日を切り抜けられるなら――」
「大成功じゃな」
「おやすみ、桐」
「おやすみじゃ、ユウジ」
そうして――当日を迎える。

八月十二日

机に置かれた二週間前に作ってあった謎ドリンクをポケットに入れ、桐が予め保管していたという、錠剤タイプの謎ドリンク（この表現だと意味不明だが）を口に忍ばせ、いざという時に弾けて体に浸透するようにした。
磨き抜かれた鉈は今まで山に登ってそこらに落ちている切り倒された木々などを切って裂いて、切れ味も維持しながらもより動きがスムーズになっている。
姉貴の稽古のおかげで身に着いた体の動きと力の入れ方、抜き方。剣の動きと敵の動き。鉈捌きも結構に変わっていた。

「今回は必ずに」

ホニさんとの日常も過ごしながらも、俺はしっかりと努力してきた。
さあ。これが戦いだ。最後に出来るならしてしまえ――甘えの俺は捨てて、本気でかかる。
生き残るために、俺の身をホニさんを日常を守る為に。

「っ――」

そうして三人外へと出る。世界の色は変わり、そのあと二度目の変化を遂げる。

反転した色の世界で剣を背負った青年が空から見下ろしていた。

「行くぞっ！」

「うぬ（うん！）」

第２８４話　√２－８９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

アト１０前後

第２８４話　√２－８９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

右手には鉈、下方へと刃を下ろした状態で箸から手一つ分のところで柄を握る。
ただの木製で、ただの円柱を体（てい）をしていたそれは今では驚くほどに手に馴染んでいる。
鍛錬で走り込み終わるころには足は筋肉痛で、鉈を振るえるようにバットを振り回せば腕が悲鳴をあげる。
それでも俺は今までの、夏休みの時間を、与えられた二週間の猶予を必死の思いで努力を重ねた。
悔し紛れ、付け焼刃。
剣道を姉貴にしごいてもらったからといって本物の剣使いである相手から一本が取れるとは思っていない。
そんなことで倒せるならば、なんて甘い世界なんだろうと。

しかし俺はそんな甘い世界にすがる。
一瞬の隙と僅かなチャンスにかける。
あまりにも一方的で惨く残酷で、そんな惨状を示してしまった前回の戦い。いや戦いではなく一方通行の弄り殴られだったのかもしれない。
だとしても、俺は――

「（全てを守ってみせるっ）」

「――重量制御。人物指定男一人、綿毛のような軽さへと――書換（チェンジ）。追加申請、重量制御を指定した人物への一任。制限時間十一分三七秒」

その時俺には二週間ぶりとも思える翼が生えた。
地球の引力やら重力に成すすべなく平伏していた今までの鍛錬や戦いとは違う――あまりにも身軽な自分。
そうして地面を大きく蹴飛ばし剣使いの居座る空へと俺は飛び向かう。

「来たね、それじゃあ消させてもらうよ」

男は背負う剣を鞘から引き抜き両手で前へと構える姿勢に持っていく、そこに達する過程だけで空気がかき混ぜられ疾風のごとくな風が吹き荒れるのだから、それはもう強い。
でもこれで吹き飛ばされてはいけない、あくまで口内を潰さないように口を締め中の物が破裂しないように堪える。
俺は鉈を右手左手と両手でしっかりと握り畑を耕す要領で振り上げ、振りかざした――もちろん男は速く一瞬にしてその場から消えうせ、そうして風が巻き起こる。

「（やっぱりはええな）」

声に出さずに鼻のみ呼吸をしながら思考する。前回の敗因の一つとして男があまりに身軽ですばやく、それでいて振りかざされる一撃があまりに強いものだったこと。
振り動かすだけで風を動かすそれは、意図的に振るうものならあらゆるものを切り裂くほどに鋭い一撃を見舞われる。
”重量制御”で”翼”を持っていたとしても、俺ははっきり言ってそのまま追いつくのは困難を極める。体そのものは翼のおかげで動いても体そのものが持たない。

相手の振りかざされる一撃を本当に寸ばかりで避け退き、そして

また切りかかりに男目がけて向かい飛ぶ。振り向き際にも空気がシャッフルされた。
その風に体を取られないように力を入れ体を動かさずに堪える。
そう、まだ風は堪えるべきなのだ。
目の端に映るのはホニさんを連れて走る小さな陰、桐の姿。生みだされ起る風に二週間ぶりのバリア。
前回とは比べ物にならないほどに桐の状態は良く、顔色も挙動も行動も良好だ。

そう、以前とは違うのだ。

「あー……君は思いのほか頑張るね、以前の厄病神もこれほどまで――」

以前と同じ言葉を発する言葉はもちろん耳に入らない。聞こえる余裕がないわけではないが、聞く価値がない。
だから俺はそうして右に左に振りかざし、その度に避けられ振られ飛ばされそうになる。

「逃げても無駄だよ？」
「！」

男の視線の先は地上、俺はその瞬間に空気を爆発させて飛び向かい寸前で振られた剣の一撃を食い止める。

「がっ……」

その時には体の皮膚が一瞬であちらこちらが裂けて、出血の痛みが走る。
でもまだだ、まだ動ける。まだこれは使うべきでない。

「喋らないね、無言だと少し寂しいかな」

そんな敵の言葉は真面目に聞くこともなく一心不乱に鉈を振るう。やはり空気を裂くだけで相手に掠ることもままならない。

「……そろそろ終わりにしよっか？」

「（きた）」

渾身の一撃が来る、余りの衝撃に地面へとふるい落とされる。剣を空へと両手で付きあげて、それを一気に振りかざした――少し高い建物が一気に砕け、俺にもその衝撃が向かい来る。

「（桐、瞬間転送頼むっ）」

「（了解した――瞬間転送。人物指定男一人、あらゆる場所へと一時で行ける力を持て――書換（チェンジ）。追加申請、瞬間転送を指定した人物への一任。使用回数制限五十九回――強化防膜。人物指定男一人、身を守る盾となる見透かす膜を構えろ――書換（チェンジ）。追加申請、強化防幕を指定した人物への一任。使用回数制限五十七回）」

「（受け取った――守れ、そして飛べっ）」

「！」

桐とホニさんが居るところまでは飛ばず、その人を切り裂く風が干渉しない位置まで瞬間的に移動し、桐の使うバリアを出来るだけ広く張った。

「……そんなことも出来るんだ」

俺はそれに応えない。そして枷（かせ）を外したかのように縦横無尽に飛び動く。

背後へ、前へ、右へ、左へ、下へ、そして――

一メートルもない真上。

「たぁっ！」

力をこめて、今までとは比べ物にならないほどの勢いをつけて――振りかざす。

「っ！？」

男は上に気付く頃には流石に体全てを移動することはままならない、そうして避けようとする右腕を大きく抉り取る。

「がっ……やってくれたね」

剣を持ち替えず、左手で裂かれ大きく抉られた腕を抑える。

「それなら僕も――手加減なしだ」

「っ！」

止まっていたはずの男が背後へと周り、それに気付いた俺は体を飛ばす。

しかし――

「ここだね」

「なっ……！」

俺の転送地点では剣を構える男が居て、俺は転送待たずして剣の餌食になった。

「がああああああああああああああああ」

左腕に大きくめり込み、それは通り抜けていく。もう少しで腕が自分から落ちてしまいそうなほどに力なくぶら下がり、一瞬にして体を駆け巡る激痛に俺は叫びをあげた。

「（だめだ、痛みで動きそうもねえ……それなら、今が使いどころだ）」

一時の思考、そして俺は口に忍ばせたそれを歯で弾かせる――これは桐に貰った錠剤タイプの謎ドリンクの入った袋。

それによって口内に錠剤が瞬間の内に溶けだすことで体はその効果を受け入れる。

痛みを失くし力を増させる、これは桐謹製のチートアイテム。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

「なっ」

驚く男を気にも留めずに俺は瞬間移動を繰り返した末に――

「っ！」

「がっ……！」

背中を背骨まで通じるまでに差し込み抜けさせる、血糊が溢れ血が返る。

「……君のような接続者（コネクター）はここに居ることで調和を乱す。異（ことなり）とおなじようにね――だから僕は君を全力で消す」

「なっ」

動きが一気に変貌を遂げ、今までは考えられて計算されたのように振りかざしていた剣が無造作に振り回される。

「くっ……うがっ」

俺はその乱暴に振りまわされた剣を移動をすることを敵わずに受け続けた。

胸が裂かれ、腕が裂かれ、額寸前を通り抜け皮膚が切れる。

あまりにもそれは粗雑で、それ故に凶暴だった。

「うわあああああああああああああああああああああ」

俺は錠剤にしたせいで効果の薄くなっていた謎ドリンクの効果が切れて、その響く痛みに移動することを念じることも出来ずに地面へと衝突する。

仰向けに投げだされてコンクリートの固い地面に体を大きく打ち付けた俺は指一本を動かせないほどまでに硬直する。

「ユ、ユウジさん!?」

「ホニ!」

連れられていたはずのホニさんが桐の手をほどいて、傷ついた俺を見つけて顔を真っ青にして駆け向かってくる。

そんなホニさんを桐は守りながらもこちらへと向かう。

「ユウジさんユウジさん!」

「あー……」

痛みで声を出すのもおっくうだ。この体中を抉り取られた感じは慣れない。

「ユウジさんっユウジさんっ！」

「……」

俺は声も出せずに、涙を流して俺を揺さぶるホニさんを見上げる。

ここで声を出さなかったら、きっとホニさんは――

「……これ以上はユウジさんを――傷つけさせない！」

さあ声をだせ、何かを言うんだ俺。

ここで言わなかったら全てがやり直し、また世界をループする。

いいのか？　今まで日々は無駄なのか？　考えろ、声に出せ――

さぁっ！

「ホ……ニ、さんっ」

「ユウジさん！」

「ポケ……ットの」

「ぽけっとの……ポケットだね！」

桐が吹き荒れる風をどうにかして抑えながらホニさんは俺のズボンのポケットをまさぐる。

左を探しては見つからず、右を探すと――そこには一瓶。

「ユウジさん、これかなっ！？」

「それ……を、飲ませ……」

飲ませてくれ、そうすれば、きっと俺は動きだせる。

「え、ええと……どうすれば……っ！」
「ホ……ニさ……んっ」

俺はホニさんがその瓶を開けると自分が飲みそして、一気に口を寄せて――

「んっ――」
「！？」

俺の口を塞ぐのはホニさんのそれは優しい唇、そして口内に流れ込んで来るのは美味しくない謎ドリンクの味。
どうでもいいが、ファーストキスだった。

「……っし」
「ユウジさん！？」

俺はドリンクの効果が表れ、痛みがすっと抜けて――力が溢れてくる。それもいつも以上に。
痛みの意識を取られて動かなかった舌がやっとのこと動き、流れるように。

「ありがとう、ホニさん」
「え、えっ、さっきまで、あんなに、今もあちこちから血が――」
「後少しだから、行ってくるよ。ホニさん」
「ユウジさんっ！？」

俺は痛みこそないが、一部が動かなくなった体を違う部分で補って飛び向かう。
そこには未だに剣を振りまわす男の姿があって――

「これが、最後だあああああああああああああああああああああああ」

一秒も留まることも無く瞬間移動を繰り返した後に、正面から一気に鉈を振りかざした。

未だに刃のような風が吹き荒れて体が裂かれている感覚がある、それでも痛みは無く俺は力をこめた――

俺は容赦なかった。男の頂点部から腰にかけて刃一杯に抉らせた鉈で男を切り裂いた――二分割されるように体が分かれる様を見せつけられた。

握っていた大剣が落ちて行く、がっくりと裂かれた首がうなだれる。

俺はそうして人を殺した。

今までの俺は甘えていただけだった。でも今回は、これからは、だ。生き残るためには、もう遠慮はしない。

そうして世界は消えていく。そして俺は地面へと着く頃には、意識が遠のいていた――

その後俺は目覚めることが出来て、血だらけで体のあちこちが皮一枚で繋がった瀕死で重篤の俺を。ホニさんは目を腫らせて、俺がその流される涙に気付くほどにボロボロと泣いて――そんな風に覗きこむホニさんの姿がそこにはあった。

生き残った――俺はボロボロにしながらも守れたのだ。

第２８５話　√２－９０　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

これでひと段落、ハッピーウエンディングも間近ですねっ！（え

アト９

第285話　√2－90　G・O・D・

我はこの場所に居れるのは、あの子の体を借りているから。そして我が借りることを止めた時には。
きっと、本能が言っている――我は。

HRS2－5

ユウジさんに出会えて、本当に楽しい日々が続いた。
今までの過ごした何百年が幾年が虚しくなるほどに、二つの季節だけで我は色々なことを知った。
遠くから眺めた町の景色も、人が物を買う為に集う商店街も、勉学の為に歩き指定された席へと座って師の教義を受ける学校（まなびや）も。
昼ドラというものの面白さと、人とつながる温かみと嬉しさ、人を失う悲しみと辛さ……そしてこれはおそらく一つの好意。

我はここに居たいと思った。
それは知る為に居座り続けていた理由だけではない、何かが生まれた――

ユウジさんと一緒にいたい。お姉さんや桐やユイやユキに姫城さんの近くに居たい。
ユウジさんの家へと連れて来て貰って、そうして家で一人過ごして昼ドラというものに熱中する――楽しめるものが有っても、やっぱり我は寂しかった。
桐が帰る頃には部屋を飛び出して玄関へと向かって出迎えて、ユウジさんが帰ってくれば我はとにかくユウジさんの顔が見たかった。

さびしがり屋の我はやっぱり誰かと共に居たかった。
そんな気持ちの中でも一際一緒に居たいのが――恩人で、家族で、いつも隣に居てくれるユウジさんだった。
ユウジさんが我を守ると言ってくれた時に、我は涙が出るほどに嬉しかった。それはきっとユウジさんだから。
でもそれはユウジさんに迷惑をかけるのではと考える我が有ったけれど――ユウジさんに守ってもらえるというあまりにも優しい誘惑には抗えなかった。

そのせいで、我がいるせいでユウジさんは命を狙われ。何度も何度も傷ついた。
我はそんなユウジさんの姿を見たくなかった――大事な人が傷つく様をこれ以上に見たくなかった。
だから我は自分を示して、ユウジさんに嫌われようとした。結果を考えるとそれは胸が裂けるほどに辛くてその一歩を踏み出せなかった。
我が神であることを示して――きっと、不気味か異端か、嫌われるモノと思っていた。

でも、ユウジさんは。

『うん、びっくりした』

という拍子抜けした一言、聞き間違えたんじゃないかと疑うほどに。

『すげえ綺麗だった』

その言葉の意味を一瞬で理解出来ずに、考える間もなく。

『いやー、ホニさんは可愛いだけでなく綺麗なんだなあ。と再認識させられた』

我を可愛いと言った事実も驚いたけれど、そのを大きく上回った。我が綺麗？　こんなに不気味な力に嫌悪か恐怖を抱くのが普通だと言うのに……？

『とんでもない、ずっと見ていても飽きないほどの素晴らしさだぞ？』

そして我はそんなユウジさんの言葉に魅入られて、ついそれを問いてしまった。こんな我でも、いいの？　と。

『どんなホニさんでも俺はいいぞ？』

更に続けてユウジさんはこう言った。そんなユウジさんの表情は和らいでいて、つい見つめてしまう。

『俺じゃ役不足どころじゃないけどさ、俺がホニさんを守りたい気持ちは誰にも負ける気がしないんだ。こんな俺でよければ、これからも宜しく頼めますか？』

嬉しかった。ユウジさんがここまで我を思ってくれて、でも。我はそれでも信じられなくて。

嬉しいのに、それがあまりにも我にとって都合が良過ぎて——本当に我なんかを守ってくれていいの？　ユウジさんも我のせいで、言いかけたところを遮られて。

『俺はホニさんが隣に近くいてほしい、もちろんホニさんと出会え

たことを絶対に後悔してなんかいない――だからホニさん、ありがとう』

我を守ると言ってくれて、我と出会えたことを後悔しないと言ってくれて、そしてお礼まで――

そうして我は吹っ切れてしまった。この人に任せたいと、共に歩いて行きたいと。

＊　＊

学校に行くことになって、色んな人を知りあって、色んな事を知って。

タイイクサイという運動のお祭りにユウジさん達と出て、スイエイという遊泳運動をしたり、テスト勉強と言うものもした。

そんな日常の中には戦いも有って……桐に連れられユウジさんが戦う中でただ逃げるだけの我、それはもどかしいけれど、ユウジさんと桐がそれを望まなかった。

そうして日常はあっという間に過ぎて行って――そして夏の季節が訪れた。

その戦いは今までと違った。

色が違い、敵が違い、空気が違い、そしてユウジさんが違う――あらゆるものが今までの戦いと異なっていた。

そしてその時にユウジさんは大けがを負って。

それに怒り、堪えることの出来なかった我はユウジさんと桐の約

束を破って、力を使った。
ユウジさんは桐のおかげで治って行き、ユウジさんはその状況を話してくれた、

でもそれにはどこか違和感があって、何かを我に隠しているようにも聞こえた。
そして我にはもっと隠していることがあった。だから責めることも聞きだすことも――絶対にあり得ない。
もしそれを聞けるとしたら、我自身のことを曝け出せてから。
でも、それでユウジさんとの繋がりが、途切れてしまうことが怖くて――臆病な我は話すことをしなかった。

そして夏祭り、あれから数日が経って、キモダメシというものに行くことになった。
そこはあまりにも見慣れた場所で――我がずっと居た場所で、あの子と出会えた場所で、ユウジに救われた場所。
ユウジさんが我と歩こうを言ってくれて嬉しい半面、我は未だに自身のことを話せずにいて――隠している罪悪感のようなもので十分に楽しむことができなかった。
隣にはこんなに大切で、一緒のいたいユウジさんがいるのに。

『俺にホニさんのことを教えてほしい』

そしてユウジが我のことを聞いてきた。言い出せない我が言えたことじゃないけれど、それは怖かった。
事実を言ったところでユウジさんに嫌われてしまいたくなかった。
離れてほしくなかった。

『ホニさんが気になるから……俺にとっての大事な人だから』

その言葉が嬉しくて、そう言ってくれるユウジさんが嬉しくて。でも我は聞いてしまう。――後悔しない？　というあまりにも調子の良い問い、自分が言えなかったのに最近の言葉の使い方で言う予防線を張るように、ユウジさんにそれを強いてしまう。

更に我は自分の心情を思わず吐露してしまって。嫌われたくないと、一緒にいたいからと――これからも偽って過ごそうという余りにも都合の良い提案。

『嫌わない』

その一言が信じられずに、我は問いただして――返って来た言葉は。

『ホニさんは、可愛い』

どこか間の抜けてしまうような言葉に我は照れながらも、おろさくそれはあの子の容姿のことだと――言おうとした。

『俺はホニさんの可愛さは容姿にあると思う……だがしかし！　俺はホニさん自身が可愛いと思う。ホニさんの全てひっくるめて俺は――可愛いと思う』

聞いていて気恥ずかしかった。石に拘束されていたせいで欠如している知識でも――それはむず痒くなるほどに気恥かしい。

『褒めてるに決まってる。俺にとって、今まで出会ったどんな人の中でも――群を抜いての可愛さを誇るのがホニさんだからな』

畳みかけるように我は言われて、それに参ってしまって。思わず

一人で空回りしてしまったような、感じさえしてくる。
でもやっぱり我は気になって、そのユウジさんの言葉本当か確かめたくて――確かめる方法なんてないのに混乱する我はまた同じように――後悔しない、きっと嫌われる……と聞いてしまった。
すると。

『好きです』

昼ドラを見ていて分かるのは、それは余りにも直球な告白だった。
それには我も変な声をあげてしまって、思い切り気が動転する。
ユウジさんは突然なぜこんなことを言うんだろう、と。どうしてこの時に言うのだろう、と。

『嫌いになるわけないだろって……そんなことで心変わりするほどに生半可な気持ちじゃない、俺はホニさんのことを知りたいんだ』

そのユウジさんは戦う時の決意に満ちたユウジさんで、それを見るだけで我は胸が高鳴った。
この感情は今までに感じてことのない、息苦しいのに心地が悪くない――あまりにも不思議な感覚。
ユウジさんの掛けられた沢山の言葉で、我はやっと話しはじめた。
話すのにいつまでかかっているのか、そう自分を問い詰めたいほどの時間を要してから。

でも今度こそ嫌われる、と思った。我が余りに膨大な時間を過ごしたことにひいてしまう、気持ち悪く思ってしまう――臆病な我はそう思った。それでもユウジさんは予想外で。

『すっげえなあと……思った』

短くて、その感想が来るとは思えなかった、唖然として、何か吹きこぼれてしまうように我は笑いが漏れた。

こんな結果ならもっと早くに話して良かったのに、自分は我はユウジさんを全然信じられていないな、と。

そんな風に重く受け止めずに、短く返してくれたユウジさんの気持ちが、配慮が――今はとても嬉しくて。

その一方で我はユウジさんを責めるように言ってしまう。自分が馬鹿だと言ったユウジさんを否定せずに、今までの無茶を、我はつい勢いに任せて怒ってしまう。

その時のユウジさんは腰が低くて、さっきまでのキリリとしたユウジさんは何処へ……と思う程の変わりっぷりだったけれど。

我はそんなユウジさんが好きだった。

これが昼ドラであるような愛情かは分からない、けれど嫌いじゃない……というか訳がない。

だからきっと好き。

それに照れたのか顔を赤くするユウジさんが……桐をからかう時のように表情豊かで。

もしかしてユウジさんは同じ事を我にして楽しんでいたんじゃないかと思うようにもなった。

ユウジさんが我にはとてつもなく可愛く見えてしまい、ユウジさんの隣を離れたくないと、尚更思ってしまった。

そして今日はユウジさんがまた別の敵と戦った。

何も言う事ができなかったけれど、気付けていた。ユウジさんが二つの週の間の様子の変化があった。

桐の力を使うことなく、戦い。自分を鍛える際も桐に頼らない―

―二週間前から突然にそうなった。
今日久しぶりに桐は力を使い、ユウジさんは空を飛んだ。
まるで今日という日が分かっていて、今日までに備えていたように。
見上げる先には戦うユウジさんが居て、かつてのように桐は我を連れながら我と桐自身を守る膜のようなものを張ることで敵の攻撃を防いでくれていた。

見上げる空ではユウジさんが傷ついていた。あのいつもと違った戦いのようにあちこちから血を流して、それでもユウジさんは抗った。
敵を追い詰めるほどに速い動きと大きな力で抗うユウジさんの姿を見て、我はユウジさんの表情を見つける。
それは真剣で、真っすぐに見据えた敵に的を絞り、そして大きな決意に満ちていた。

それでも敵は強く、ユウジさんは撃ち落とされた。
駆けた先の背後から聞こえる何かがぶつかった音に気付くと、そこにはボロボロのユウジさんが倒れていた。
あまりにも痛々しくて、辛くて、悔しくて――また思ってしまう。

このままユウジさんを失いたくない、だから約束をまた……破ってしまおう。

ユウジさんが居なくなってからでは遅すぎる、失ってからではどうしようもない――命あるもの、ユウジさんもその通りだ。
だから我はユウジさんの名前を呼んで、返ってくるユウジさんの弱弱しい声に耐えられなくなって、我はまたしようとした。

けれど、ユウジさんは言った。

『ポケ……ットの』

途切れ途切れだけれども、それには確かな意味をこめて。きっとユウジさんのポケットをさすのだと理解して、一心不乱に探し、そして一つの小瓶が現れる。

それは少し見たことの有る、ユウジさんが苦い顔で口にしていた飲みものだったように記憶した。

この状況でそれが有って、きっとそれを飲みたいというユウジさんから、おそらくこれは何か意味のあるものだと考える。

でもユウジさんは今は体を動かせないほどに弱っていて、仰向けにやっとのこと声を絞り出していた。

『それ……を、飲ませ……』

やっぱり飲むべき物だ。

それじゃどうすればいい、どうすれば我はユウジさんがこの飲みものを飲めるのか。

そこで我は一瞬思い出す。時に見たドラマでのワンシーンを、昼ドラでは似たようなものが度々あった――

見た目にはある一つの行為、でも実際は大切な事で。

腕を動かして瓶を持つことも、口へ運ぶこともままらないユウジさんにどうしたらよいのか――

「（！）」

我は気付いて、そしてそれを実行に移す。

桐が我とユウジさんを守る中、我は瓶を開けて一気に全部の量を

口に含んだ。
そして――
「んっ――」
ユウジさんに口づけをして、そこから押し込むように含んだ液体をユウジさんに送る。
意味が分かっている。これは口づけで有り接吻であり――ドラマの中の恋人同士や愛し合いものがする”キス”というものであると。
思った上でそれをして、そしてユウジさんの体が少しずつ動きを増やしていき――起き上がった。
『ありがとう、ホニさん……後少しだから、行ってくるよ。ホニさん』
我がユウジさんのあちこちの傷を見て制止するよう声をかけるものの、ユウジさんは空へと向かい――そして。
世界の色は戻った。
それはユウジさんが敵を倒した証で、我は空を見上げてユウジさんがゆっくりと落ちて行く様をみながら、ユウジさんの名前を呼び続ける。
ここへ辿りつく頃には目を瞑っていて、がくりとうなだれた姿に我は驚き、理解し、哀しみ、そして叫んだ。
答えてほしいと、ユウジさんが我の呼ぶ声に答えてほしいと――桐がシュンカンテンソウというものを繰り返してユウジさんの部屋へと運びながら我は呼び続けた。

桐は重々しい表情でユウジさんと我を運び部屋に戻る以前から治癒をしている、そんな桐がユウジさんの胸や傷口に手を当てて治療を始めてから数分の内に「もう大丈夫じゃ」と安心を促す言葉を我にくれて「あとは目を覚ますのを待つのみじゃ」と、言って押し黙り。

少しその聞かされたことに安心して気が抜けそうになる。でもユウジさんが目を覚ますまで我はまた呼び続ける――

「ユウジさん、ユウジさん、ユウジさん、ユウジさん、ユウジさん――」

ユウジさんが目を覚ましたのはそれから二時間経った頃。

起きてなお優しい表情を浮かべ、なぜそんな彼女が表情をしているのだろう、というような不思議な面持ちで見上げる先にで我はボロボロと涙を流してユウジさんの名前を呼んで――

「よ、良かったぁ……」

安堵するように言葉を漏らしそれでも我は涙を流し続ける、その時のユウジさんはずっと我を見つめながら微笑みかけてくれていた。

そんなユウジさんを見て我は勘付いてしまう……ドラマや物語で見た、この女性でも男性でも感じること。

涙を流しながらもユウジさんの顔に見惚れていて気付いてしまう……きっとこれは生まれて、ずっと過ごしてきて初めて芽生えた――

これは恋というものなのかもしれない。

涙が溢れるのに心は温かで、微笑んでくれるユウジさんが嬉しくて、見ているだけで幸せで。守ってくれていたのが嬉しくて、隣にいてくれるのが幸せで。

ずっと一緒に、ずっと隣で。我はユウジさんの変わりゆく心を表情を間近で見ていたいと思ってしまう――そうして我も顔をぐちゃぐちゃにしながらそうして微笑み返していた。

第２８６話　√２－９１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

一つのことが落ちつき、ちょっとしたことを考えられる余裕の出来始める今日この頃。
そして二人の心は変わりゆくわけで。

アト８

第２８６話　√２－９１　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

まあ、なんというか後日談のようなものになるのだろうか。
あのあとホニさんの泣きながらの笑顔を見れたところで俺は緊張の糸がブッツリと切れて意識は陥落した。
というか疲労が半端でなかった。痛みこそあったが桐のおかげでだいぶ軽減されて、寝つけるほどまでには回復していた。

そしてこれは桐から俺が起きてから聞いた話で。
あのあと掃除が間に合わずに血しぶきやら血痕が大量に飛散していた俺の部屋をどういう訳か訪れた姉貴と何か一悶着あったようだ。
「ユウクンにナニカアッタノーッ！？」のように一時はパニック状態でショックのあまり”太くて丈夫な人の重さでも千切れないであろう縄”をどこからともなく持ってきて「ユウくんの前がいいな」と言ってやらかしそうになったので桐とホニさんが全力で止めたという。
桐はそのあとも治療を進めていたらしく、俺が落ちてから二時間ほどは続行していたらしい。骨が何本もぽっきりと逝っていた上に内臓が一部破裂……と通常ならば後遺症が免れない重体だったそうだが、桐のチートの前で治ってしまったという。

そしてこれからはホニさんから聞いた話。
治療を終えた桐もバタンキューで、俺のベッドにもたれるように眠ったという。そんな様をホニさんは眺めていたそうなんだが……どうにも俺への態度がそれから今までと違う。
少しの距離感と時折視線を逸らしてくる、なんというかその反応がもどかしい。
一応のことは聞いてみるものの「ひ、秘密っ」と言って断固として話す気はない様子である。

そして更にはここからがユイの話すところである。

傷だらけの俺を運びこんだと聞きつける（情報入手ルートは不明）ものの、何故か扉は閉ざされていて開かず、二時間ほど経ってようたく入れたという。

「それは幻想じゃ」「気のせいだよ？」と二人に白を切られ、よく状況が分からず、何かのごっこだったんだと解釈しているようだ。

……いやしているはずなんだが、去り際に「無理するなよ」と言われたのでもしや、と思ったがそのまま去られて、そのあとは一切口に出さなかった。

なんというかそう言う訳で、俺は何時間もの睡眠の末で起床して。俺の近くですやすやと寝息をたてる桐と、地面でこれまた優しい表情で眠るホニさんの姿があったことを今では明確に覚えている。

俺が起きたことに気付いた二人は飛び付かん勢い……いや、飛び付いてきた。ホニさんは少し涙目で桐も安堵してついでと言わんばかりに俺にダイブしてきた。

向かって来て俺の胸に収まる二人はとても小さく思えて、こんな二人と今まで戦って来れたのかと、なんとも言えない感慨があった。

その後の戦いはというと、完全に途絶えてしまった。

剣使いは俺が殺して、雨澄も剣使いの言うとおりなら力尽きてそのままで夏休み明けの学校にも来ている様子はなく失踪者に名前をまた連ねていた。

銃使いの男は数日後にテレビで大きな傷を負って藍浜町の海岸で発見されたと報道され、おそらくは異（コトナリ）に返り討ちにあったのだろう。

殺した剣使いは桐が処理したという恐ろしいことを聞いてしまったが、そんな風な反応をする俺が殺した張本人なのだ。

今でも思い出せば手が震える。でも、それでも抗い、生き残るためには必要で――仕方がないことだったのだ。

あちらは無害なホニさんを調和を乱すから消し去ると言い、それに抗えばどちらにしろ消し去ると言い。

雨澄も銃使いも、きっと剣使いも聞く耳など持たない――平行線のことだった。

だからどちらかが終わらせなければならない。そして運や”負けてしまった記憶”が手伝って俺は終わらせた。

それだけのこと。そうとしか言いようのないこと。

罪悪感や負い目を感じるのは偽善者のすること、俺も感じてはいたが、次第にそれは薄れていった――俺は自分が正しいことをしたと確信したからでもある。

だからといってこんなことを繰り返すことは絶対に避けるべきで、機会が無ければ絶対にしない。

俺はもう鉈を使わない、もう桐の力を借りない――またホニさんを消すと言う輩が現れるまでは、永久に。

それまでは俺の心でホニさんを守っていこうと思う。

ホニさんと一緒に、隣で歩いて行こうと思う。

＊　＊

「ホニさん学校行くぞー」

「う、うんっ、あっ待ってー」

姉貴とユイが先に出て行き、俺とホニさんと桐が残されて。玄関

で靴に履き替えて俺はホニさんを家前で待ちながら急かすように促す。

「じゃあ行ってくるな」

「うむ、行ってくるのじゃー」

夏休みが終わった。あれからは警戒しつつも出されていた夏休みの宿題にホニさんやユイたちと奮闘する日々と少しのエンジョイ。

高校生一年の夏休みは宿題以外は気兼ねなく、自由に過ごすことのできる貴重な時間だと誰かが語っていたが、間違いではないのだろう。

宿題の合い間に”いつものメンバー”で映画を見に行ったり、買い物に出かけたりしていた。

ちなみに桐に何か奢ると思っていたことを詠まれてしまい、近くのカフェに特大ジャンボパフェを奢らされたことを思い出す。あれだけの量がどうやってその小さな容姿に見合うお腹に入るのだろうとうちゅうのほうそくがみだれそうにも思いながら、休みが明けた。

ホニさんは相変わらずで、少しよそよそしいようにも思えた。

なんというか、ふいに見つめられている時も有るのだが気付くと目を逸らされる。

距離感を取っているはずなのに俺の隣を殆ど必ずと言っていいほどてくてく歩く。

そして戦い前の五割増しの可愛さと色っぽさ。

そんなホニさんに時折ドキドキさせられてしまう訳で、寸前に押しとどめる。

ホニさんは家族で、妹立ち位置の神様で。俺はホニさんのことを家族の一員として大切に……扱っているはず。

「ユウくんってホニちゃんに甘いよねー」と姉貴にぶーたれられ「お主も罪じゃのう、一度爆発を推奨する」と罵倒され「ユウジっ

て惨いよぬ」とユイに呆れられ「「……」」ヒロインズ二人は沈黙していたりする。

俺はホニさんとどうしたいのだろう、と時々考える。

ホニさんと一緒にいると楽しくて、ホニさんの笑顔が嬉しくて、ホニさんが喜んでいると俺も一緒に喜んで。

どこかホニさんがいると幸せな気持ちになれる。

その理由がわからぬまま、ホニさんが俺に対する態度の理由が分からぬまま時は過ぎていき――

そして今日は始業から一か月程経ち、夏休みを開けて間髪いれずにある定期テストの山を超えて、十月訪れようとしていたそのときのこと。

「ユウジさん、ひどいよ置いて行くなんて！」

「悪い悪い」

やべえ、可愛い。そんなぷんぷん怒りながらもどこかしょんぼりとしたホニさんの顔を見る為に俺は早歩きで家を出ていたりする。

俺には少しSが入っているのかもしれない。でも可愛いのだから仕方ないと、勝手に正当化しておく。

「もー、我はユウジさんと一緒に登校したいんだからぁ！」

「悪かったって」

「……ユウジさんは我の気持ちを知らないから」

「なんだっけ？」

「なんでもない！　学校行こっ、ユウジさん」

「おう」

「今日は国語が沢山あるから私的に楽しみだなー」

「ホニさん国語好きだもんな」

「うんー」

……あれ？　何か違和感があるような。

「私はね、やっぱり知ることが好きだから、特にこの国に文化をもっともっと知りたいからね！」

やっぱり違和感があるんだ。そうこれは、些細で、それでいて特徴的なこと。

「我はだから色々なものを読める国語が好きなんだよー」

……そうか、これか。

ホニさんの一人称が突然「私」になっていた。今までは「我」に統一されてて、確かホニさんも「これは癖みたいについちゃって」ってなようなことを言ってたはず。

それが今になって突然……？　見たり、録ってあったりする昼ドラの影響では見始めてから時間が経ち過ぎているし。

「？」

「ユウジさん、どうしたの？」

「い、いやなんでもない」

俺はすこしの引っかかりを覚えつつも、ホニさんに今度は急かされるように早歩き。そうしていつものメンバーが集まり登校をする。

＊　＊

我はあの子に問われる。ここで居なくなってしまっていいの？
と。
我は仕方の無いことだから、と答える。
そしてあの子はとてつもなく寂しそうな顔をして我を見つめる。
ここは誰も知らない一つの世界。

第287話　√2－92　G．O．D．（前書き）

最後の最後に動き始める日常！？

アト7

第287話　√2－92　G.O.D.

十月四日

文化祭という秋の一大行事が迫りつつある今日この頃。
この学校というか町全体がお祭り気質なこともあって文化祭は大そうに盛り上がる。
盛り上がり過ぎて怪我人が出かかる、それを抑止する為に姉貴が属する生徒会は文化祭前だというのに東奔西走している。

ちなみに俺たち一年二組は「カレー屋」になった。
それもスパイスを厳選し素材にもこだわった本格派らしく、辛い物好きでスパイス好きなユキがかなりに躍起になり企画が進んでいた。
ユキが平然と食べられるものでもクラスメイトは悶絶の末意識を失うほどの激辛だったりするので、ユイと姫城さんがなんとか抑えているという。
なんと、まあ。
俺もたまに参加しては「これ足すといいんじゃね？」というようにアドバイスしたり「いやここはこうするべきだよ」と反論されたりと、地味にその文化祭までの準備の過程を楽しんでもいた。
カレーメニューも一品だけでなくホニさん考案の「醤油ベースの和風カレー」やらユイ考案の「青唐辛子を主体としたグリーンカレー」と総勢五品によるカレーを展開するという。
……ユキはスパイスの調合は上手なのに量のケタが外れてしまうこともあり、サポートは止むなしで本人は不服そうだがしょうがない。

料理が出来ないｏｒしないクラスメイトは教室のリフォーム要員でなかなかに凝った店内になりそうで、かなり期待できる。
このクラスは一度方向性を定めると突っ走れる上に団結出来るらしく作業はスムーズに進んだ。
食中毒防止の検査がしっかりと生徒会と保険団体が入るのでそこのところは抜かりなし、作ったものをは当日中に使いきる、出来るだけ常時温め続けられるようにという条件も追加された。
そんな訳で放課後には家庭科室兼調理室の片隅でなんとも香ばしいカレーの匂いを漂わせながら思考錯誤は続いて行き――

「あ、ウコンとナツメグとチリペッパー切れちゃったみたい。誰か買いに行ってくんないー？」

クラスの一人が空の瓶を振ってアピールするように言った。
他の人員は数班に分かれての作業なので抜けるのがなかなか難しい、有る程度形になり、今日は片付けを始めていた”和風カレーグループ”こと俺とホニさんは。

「「俺（我）行きます」」

合わせたかのように声が重なる。それを考えて少し気恥ずかしくなって目を背け合うものの、少しばかり嬉しくもあった。

「じゃあ下之君にホニちゃん、お願い出来る？」
「おう」
「うん！」

そんな訳で買い物に乗り出そうとするのだが……追加注文が別班からも押し寄せ「調子良いなー」と思いつつも「はいはい、ニンジンとニンニクね」と携帯のメモ機能に入力うすると。

「テキトーに立て替えといてー」と言われたので財布を見てため息をつきながらもメモ内容を考えて余裕が有ることを認識してから。

「じゃあ行ってくるなー」

「「行ってらー」」

なんというか見送られるとは思わなんだ。結構に俺も馴染めてきたのかもしれない。

いつものメンバー以外には意識せずに壁を作っていた感も有り、そう考えるとホニさんが橋渡しになってくれたのかもしれないと、思って俺は心の中で感謝しておいた。

「……」

「ユ、ユキ？　どうしたの？」

「え、ううん！　なんでもないっ」

「出来上がったっぽいね、どれどれ……っ！？」

「ど、どしたの？」

「辛く……ない！？」

何かに意識を取られるようにしてスパイスの量を基準値にしてしまったユキは、ユウジとホニの二人歩く後ろ姿をどこか寂しそうに見つめていた。

「ユウジさんっと買い物～」

「ホニさんっとショッピング～」

俺はホニさんがそう口ずさむので似たようなフレーズで打ち返した。

「そう返されると、なんか照れるよ！？」
「照れるホニさん可愛い」
「だーかーらー、からかわないでってー！」
「からかってなんかないぞ？　俺は心の内に思ったことを惜しげもなくなんのフィルターもかけることなく口から吐いているのだからな」
「最後の表現がおかしい気がするよ！？」

学校から商店街まではさほど無いが、話す時間は十二分にある。
俺は実は結構にデート気分でもあった。

「いやあ、こうまで堂々とホニさんとデート出来るとは。幸せモノだね俺ェ！」
「ユ、ユウジさん。そういうのはツッコミ難(にく)いから止めて……」

頬を赤くしてそっぽを向くホニさん。
ああ、なんて可愛いんだろうなあ。この人は。
そうしてあらかたの買い物を終えて、両手に買い物袋を持ちながら学校へと戻り歩く。

「沢山買ったねー」
「……あいつら本当に人使い荒いよな」

冷蔵庫使用可だからって買い溜めすることないだろに、てかスナック菓子が含まれているのはなんなんだ。

「まあでもホニさんと買い物できたからいいっか」
「だからユウジさん、そういうのはそう聞こえちゃうから駄目だよって言ってるのに！」

意味が分からないがぷんぷんと怒るホニさんは可愛かった。
そう聞こえるってのが分からないのだけども。

「ねえ、ユウジさん？」
「ん？」

優しくさっきまでの動転がなかったかのように静かに俺へと問いかけるホニさん。

「ユウジさんの好きな人って……いるのかな」

……はい？

「え……と、なんだ。それはそのままの意味でか？」
「……うん」

マジかー、俺は今青春の一ページっぽい現場に鉢合わせしてるのか？
顔を紅潮させて少し潤んだ瞳で不安げに俺を見上げるホニさんがそこには居て――つい、俺は口走ってしまう。

「まあ……いるっちゃいるな」
「……そ、っか」

誰とは聞かないのだろうか、と思う前にホニさんの表情が沈んでいく。
俺は気付かぬうちにホニさんを傷つけているのでは……？

「ユウジさんはモテモテだもんね、桐もお姉さんも……ユキもマイもきっと」

最後の方が尻すぼみになり聞こえない。それでも俺は何か誤解させているのではないかという気持ちになっていく。

そんな誤解されることが俺は何故か嫌で、今の俺の気持ちは……どうにも俺の口は止まらなくて。つい、つい言ってしまった。

「ホニさん」

「え？」

「俺が好きなのはきっとホニさん」

ホニさんは、その俺のまさか呼ばれることの無かったであろう名前に衝撃を受けていた。

「え、え……えっ！？」

「”きっと”ってのは予防線でな、まだワカラン。ラブな人は居たけど、どちらかと言えば憧れが近かったのかもだし。今俺が大事に思い、したいのはホニさん一択だな」

俺は戦いで呪文のように全てを守ると言った。しかし戦いが終わった後はその決意もどこか薄れていく一方で、ただ一つ。

ホニさんを守りたいという気持ちは、揺らがず弱らずにいたのだ。

「な、なななななななななな！？　ユウジさんっ、からかうのは止めてって言ってるのに！」

「いやー、今回ばかりはからかってるつもりはなくてだな」

頭を掻きながらも向き直って答える。

「……本当に？」

「まあ、な」

そして訪れる沈黙。あっという間に落ち始める夕日。

買い物袋を提げて、もう少しで学校へと着こうとするところで立ち止まり二つの影が伸びる。

その時間がどこか長く永遠に感じそうで、喉が一気に渇いていく。

俺がある種の気持ちを示してしまったことでホニさんはどう考えているのだろう、と。

話し終わり口に出し終わった今にふと思う。

もしかして俺はとんでもないことを言ってしまったのではないのか――

『やっとかあ』

沈黙していた二人の間に流れる声。それはホニさんの声に違いない。

しかし――

『何ヶ月もそれを言わないなんてね、どれだけ鈍いんだか』

「は……ん、え？」

『鈍い人にはトコトン分からないだろうから、仕方ないか』

「ホニさん、一体何を……？」

『ホニさん？　ああ、私のことだっけ』

違和感。口調も一人称も違う。声も容姿も表情も同じはずなのに

――この人は、彼女は。

「……あんた、誰だ？」

『私は……そうだね』

そしてそのホニさんの姿で彼女は言う。

『私はホニさんが今は居る元の体の持ち主――時陽子（ときようこ）だ』

その時また世界は動き出す。終わりへと、終わりへと。

＊　＊

彼はその気持ちに気付かない。なぜならそれは知らせることをしてもいないから。

きっとその気持ちに正直になれば辛くなる、だから我は抑えた。

この胸が締め付けられるような、それでいて温かで幸せなこの気持ちを。

しかしあの子は言った。

それでいいの？　それであなたは何も言わずに居ていいの、と。

我は何も答えない。

なら手伝ってあげる。臆病な二人に私が出てあげる。

ずっと私はあなた達を見てきたんだから。

そうあの子が言うと我は思う。

止めるべきではなかったのか、このまま過ごすならそれで良かったのではないかと。

しかし意見すべきあの子はもういない、ここは誰にも聞かれることのない一つの世界。

第２８８話　√２－９３　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

正直もっとしっかり書ければよかった

アト６

第288話　√2－93　G・O・D・

「時……陽子？」

そのホニさんの姿をした彼女はそう名乗った。そして自分をホニさんの物の体の持ち主だと紹介した。

急にホニさんの口調や人称が変わり、言葉遣いから性格もおそらくは変わっている。

なぜこのタイミングでそうなったのか、それもどちらかとえば甘酸っぱい展開の時に。

……甘酸っぱいは今関係するところではないか、重要なのは――何故今になってなのか。

「そう、中学二年進級を間近に控えてホニさんに体を預けた――陽子でいいよ」

中学二年への進級？　この町にある中学校と言えば藍浜高校の流れを汲む藍浜中学のみ。

しかし藍浜中の女子はそんな古風なセーラー服を着ていない、もっと色合いは明るくスカート丈も基本的には短めだ。

「それで陽子。制服が違うみたいなんだが、理由でもあんのか？」

「制服が違うってのは藍浜中って意味でいいなら、私はこの町に越して来たばかりだったからかな」

進級直前にこの町に引っ越して来て、制服もその流れで前の物を使っていたってところか？

「下之ユウジ、私は今までアンタをホニさんの眼を通して見てきた。

それでさっきの言葉は本当？」
「……は？　さっきの言葉って？」
「告白だよ、こ・く・は・くっ！　ホニさんにしたっていう”好きな人はお前かもしれない”みたいなヤツの！」
「ああ……ああ、そうだよ」
「……鈍感な癖してそういう答えは率直だね」

なんというか年齢的に俺が年上のはずなのに馬鹿にされている気がしてならない。

「ちなみにホニさんはお前のことが好きみたい」
「へぇ……って、えええええええええええええええええええ」

それって、なに？　え、え？　いやいやいや、俺なんかがモテる訳ないじゃん！
オタクでシスコンでスク水フェチのヘタレ野郎だろ！？　ないわー、俺がモテるとかないわー
それもホニさんにだって？　いや俺が好きで一方通行なだけで、相思相愛な訳がないって！

「道端で騒がないでよ……まあここで話すのもなんだから、公園に行こっか」
「……おう」

俺は衝撃の事実を聞かされた揚句に先導されていった……うーむ。
そうして学校近くの公園へとやってくる。それほど人が居ないのは、こういう混み入った話をするのには最適かもしれない。
おして手頃に空いたベンチに二人座り、拳二つ分しかないであろうように席を詰めてくる彼女に向かって俺は口火を切った。

「……それでそんなことをバラしたお前には何の利点があるんだ？」

正直興奮冷めやらぬ嘘か誠か虚か正か、まったくもって判別できないこともあるが、極めて冷静に問う。

突然に出てきたと思ったら、話すのはホニさん関連のこと。

もしホニさんのヨリシロにされているというならば、何かアクションを起こすとも思っていたのだが。

「利点？　うーん、ちょっとした恩返し？」

「恩返し？」

「ホニさんは奥手だし、下之ユウジは鈍いしで、なんともデコボコカップルというかなんというか……」

「いや俺が一方的に告白っぽいのをしただけで、付き合ってなんか――」

「とりあえず黙ってて」

「……スイマセン」

ホニさんの顔でドスを効かされるとギャップで余計に怖い。思い切り気圧されて俺の立場が紐の無いバンジージャンプ並みに落ちていっている気がしてならない。

「恩返しってのはさ、私はこれでも――」

と、言いかけて止めたので。何かと思い顔を彼女の覗きこむ

「私はずっと見てきたけど、知らないよね？　ホニさんが私の体を……こういう場合ヨリシロって言うんだっけ？　そのヨリシロにした理由」

「……」

知らない、というか聞いてさえいない。俺はいつか話してくれるのを待とうと、過去話をしてくれたホニさんの選択に託してそれ以上は踏み入れなかった。

「亡くなった人や動物って物が食べられない、ってのは分かる？」
「ああ……って俺のことをすごく馬鹿に設定して見てないか！？」

もうこの世に肉体を離れて存在するぐらいしか出来ない……幽霊ということを信じるならばで、俺は勿論信じるのだが。

「分かるっしょ？」
「……はいはい、そうだな」
「ホニさんも同じように食べられなかった――何かに憑くまでは」
「へ？」
「ホニさんから聞かされたよ……というか勝手に知ったんだけどね」
「勝手に知った？」

私はずっとあなた達を見てたから……か？

「私さ、死ぬ手前だったの。飢えて」
「飢え……！？」
「そのまんまの意味でね、何にも食べなかった、飲まなかった。食べる飲む気力が完全に失せちゃったんだ――いきなり身の上話をされてもって顔？」
「いや、そうなのか……と」
「でもちょっとだけ聞いてね。私はあるショックで町中走り回って、その結果によく遊んだ犬と過ごした神社の前にやってきたんだ」

さらに彼女は続けて言う。

「疲れ果てて、神石の神社から見える裏側にへたり込んで。しばらくそこでグッタリした後に、もう意識が薄れて体も動かなくなってきてたんだよね。そんな時にさ、一つの声が聞こえたんだよ」

あの肝試しをした場所は人通りが少ないどころか滅多にない、学生がたまに神社前を溜まり場に擦るだけで――神主も来なければ、その神石の裏に人がいるなんて到底気付けない。

少しずつ、彼女の言いたいことが分かってくる。もしかしてホニさんは――

「死なないでって、幼くて、それで悲しそうな声で」

お揚げを貰って、一緒に過ごした彼女が。

「そしたら私はいつの間にか、意識が無くなって。気付いたら、私の中にホニさんが居たんだ」

そういえばホニさんは言っていた。我がその動物の肉体に憑くと存在が希薄になる――半幽霊と称していたような気がする。

「存在を希薄にした上でホニさんが私の体を動かして、近くにあった果実を食べて、それを数日おきにずっとずっと、誰にも気づかれないで。それも――私を生かす為に」

「！」

そう、か。ホニさんがあの子に永遠に会えなくなったっていうのはこういうことだったのか。

自分がその中に入ってしまう面と面を向かい合うことはもう出来ないから、それも彼女が飢えるのを防ぐために。

「でもお前は見えてたのか？　ホニさんから見える景色を」

「うん、そうだよ。一応私とホニさんは繋がって、会話と言うか意思疎通みたいのは出来たんだけどね――ホニさんは誰かと話すことができたから我はもういい、って言ってたけどね、私は自ら出たくなかったんだ」

「そう……か」

俺はそう一言。俺はホニさんのことを一時誤解していたのを思い出し大きく悔んだ。

ホニさんがそんなことするわけないのに、あれほどに優しい神様がそんなことするはずがないのに。

「どうして、とは聞かないんだね。ホニさんにもそうだった」

「無理して聞きたくないさ、本人が言うまでは俺は基本的に聞きだすことはしたくない」

「……優しいね。でも人にね何か聞いてほしいこともあるだろうから、そういうのは気付いてあげた方がいいよ？」

優しくなんかない、ただ俺は人を傷つけたくない。臆病なだけだ。

「参考にしとく」

「うん、それでいいかも。じゃあ私はあなたに聞いてほしいです」

「じゃあ……話してくれ」

「分かった。つまり私はさ――もう居場所がなかったんだよ。家族も居なくなったし、学校には行くお金がないし、身寄りもなくてさ。だから私も死んでもいいかな、と思ったんだ。でもそれなら有効活用してくれるなら、ホニさんに体をあげちゃおうと」

「……」

中学校二年を前に引っ越し、そして家族が居なくなったという表現。

「な陽子、お前が走り回ったってのは……今年の三月か？」
「そうだけど……なんで？」
「あと、もうひとつ。今みたいに髪は長かったか？」
「ううん、少し前までは栗色の短髪だったよ――？」
「っ！」

……全てが噛み合った。

俺がアロンツに襲われ消されて失踪者と名を連ねる部分を見た際に、一人だけぽつんと三月に。それでいて両親が亡くなり、進級前で、引っ越してきてばかり。

全てが合致する。三月に失踪したはずの栗色の短髪の少女と。

「なるほど、な……」
「私のこと知ってた？」
「まあ、な。サイトにのってた」
「えー、それって出〇い系じゃないよね」
「え、ここでギャグシーン？」
「私もそれほど緊張を保てないのです」
「……似たような奴と夢で会ったよ」

しかし俺は彼女を知っていた。サイトを見てどこかで見覚えも有ったのもそのせいで。

ほんの少しでも頭の片隅にそのアロンツが居なくなった後でも思っていたのはそれもあるのだろう。

「てか何で黒髪に？」
「それはホニさん、神様ですから」
……神様だからな。で、いいのか分からないが。
そこで俺はふと思う。今こうして彼女が表れているが、じゃあさっきまで居たホニさんはどうしているのか。
潜んでいるのか、それとも――最悪の展開を覚えて俺は慌てて問う。
「それで今ホニさんはどうしてるんだ？　まさかもう出てこないってことは――」
「それはない……と思いたい。というか私も自分の意思で出てきたんじゃなくてさ、下之ユウジがホニさんに告白したその後の間に追い出されてきたし」
追い出された？　という妙なフレーズを耳にするも、今はホニさんのことが気がかりだ。
「でも、そう長くは無いかもね――あっ、そろそろっぽい。じゃあね下之ユウジ、きっとまた話す機会があると思うよ――」
すると彼女は突然目を閉じてがくりと首を落とした。
「お、おい」
「……ん、え。えと……ユウジさん？」
「ホニさん、だよな？」
「うん、我はホニだよ？」
彼女からホニさんにいつの間にか戻ってきていた。

彼女が去り際に言った”長くは無い”というフレーズも”追い出された”というのも気になって仕方なかったが――

「ホニさんは覚えてない？」
「え、そういえばなんで……公園に？」
「ああ、そっか。少し休憩しててホニさんがうたた寝こいちゃってさー」
「そ、そうなの！？　ごめんね、ユウジさん！　ああ、じゃあ皆待ってるよね、早く行かないと！」
「おう、そうだな！」

そうして俺は平静を装って俺はホニさん公園を出る。
今引っこんでいるであろう彼女はこの光景をみれているのだろうか、もし見えているとしたら。
なぜホニさんは見れていなく、彼女が現れた時のの記憶がないのだろう？

様々な疑問が渦巻く中で、俺は頼まれた買い物を完遂していることもあって学校へと向かった。

＊　＊

我が今の今まで過ごして来た理由は、願いは知ることだった。
でもユウジさん達と過ごすうちに、もうひとつの願い。

それはユウジさん達と一緒にいたい。

楽しく幸せで温かになれる時間、それは我にとって本当に大切な

ものの、ずっとずっと続いて欲しかった。
でも、それはもう叶わない。我が中へと押し込められた事実が、より強くそう思わせた。

あの子にはお礼を言わないと――ありがとう。我の代わりにあなたが告白をしてくれて。
臆病な我はきっと何も伝えられずに終わってしまうから――

第２８９話　√２－９４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

二日間若干死んでいました。すみませんー
コメディ回？

アト５

第２８９話　√２－９４　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

旅立つその時に、我は別れの言葉を聞きたくない。
あくまでそれは刹那のことなのだから、それが永久（とわ）の別れではないのだから。
悲観的であって同情でもある。そんな言葉を欲してはいない。
だから我はこの言葉が欲しい。

「またな」

また会える確約を約束を、旅立つ我はそれだけが欲しい。
その言葉を糧に、希望に長い刻（とき）を過ごしていけるのだから。

十月二三日

ぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴ――というような睡眠妨害のない休日の日曜のこと。
俺は学業の無い休日だとここぞとばかりにすやすやと寝息を立てていた。
しかしどうにも日曜はそれなりに早くに起きる性質がついてしまったらしく、学校開始に間に合いはしないものの朝という時間帯には起床することが出来るようにもなっていた。

「……ぁあ」

目をゆっくり開くと目の前には変わり映えしない天井の色。
秋に相応なそれほど強くない朝日がカーテンの隙間越しに差し込

んでいて起きて見渡す自分の胴に一閃光が続く。

「あっ……！？」

するとふいに近くから聞こえる声。

それはあまりにも聞き慣れて、あまりにも女子で、あまりにも――可愛い人。

「ホニ……さん？」

「あ、あわわわわわわわわわわわ！？」

寝ぼけ眼の先にはあたふたと俺の起床に気付いてあからさまに動揺するホニさんの姿があった。

そこにはまるで驚いて右往左往する小動物のような……なんとも庇護欲にそそられる物体が居た。

朝っぱらの起床直後、夢ならもう少し続いてもいいよというような、まさに――

「でカワ？」

「押すないでね！　絶対に押さないでね！」

「ホニさんからそのボケが来ることを俺は一体いつどこでどんな状況で想像出来ただろうか、俺は唖然としてだらしなく口を開け、どんな反応をすべきか思考――」

「ユウジさん……心の声駄々漏れだよ」

おっといけない。寝ぼけていたせいで地の文が声に出てしまった。

「ちなみに補足しておくとさっきのは”出オチバリに凄く出てくるだけで可愛い”の略である。ホニさんはやっぱり可愛い」

「ユウジさん！　それは意図的に流してるのかな！？　どっちにし

ろ我はとてつもなく気恥かしくなるから止めて！」
「慌てるホニさんのなんという可愛さ。俺はついついに遊んでしまう。可愛いからいけないのだ、まったく」
「いけないの？　我はいけないの！？」
「うわっ、ホニさん！　ナンデコノヘヤニィ！？」
「わざとらしいよっ」

まあ寝ぼけとホニさん弄りの楽しさのが半々で存在していたので、意図的か意図的じゃないかと聞けれたら前者である。

「それでホニさんはどうして俺のヘヤニィ！？」
「え、えっとね。桐に開けて貰った」
「桐が……まあアイツなら出来るだろうな」

というか以前に何度もされたし、というかもうプライバシー粉々でその鍵付きの扉が有ってないが如しだ。

「呼ばれた気がした」

そう俺は桐というスペルを口にしたのが仇となり、ふいに聞こえる桐の老婆喋りの幼女ヴォイス。
どこかどこかと探していると――

「ここじゃ」
「ギャァー！」

なんということか、まさかのベッド下からの入場だった。

「なんでそんなとこに居るんだよ！　おかげでメ○シャキも出直してくるほどの速さで目が覚めたわっ！」

なんでそんなに心臓を悪くするような場所から出るのかと、というかベッド下って。

「試験のお供にわしなどいかがか？」

「目が覚め過ぎて勉学に励めそうにもないのでいいです」

「それは”肯定”と取ってよいのじゃな？」

「どっかの押し売り業者の謎解釈みたいなことしてんじゃねえ！　結構です、お引き取りください、終わり下さいませ」

「終わり下さいませって何！？」

桐の隣でホニさんがかなり驚愕していたが、この意味を深く問い詰められても仕方ないのでスルー

「で、なぜに桐は不法侵入を試みているのですか。ちなみにホニさんは可愛いので除外」

「うむ、それはな。お主の寝息を映像に収める為じゃ」

「新しいな、それ。”音”を”画”で撮るとは、色々な人が食いつくんじゃないか？　てかそんなくだらないことで入るな、と。ちなみにホニさんは可愛いので問題ない」

「いいではないか、お主の鼻息から風呂の際に歌う鼻歌まで、わしの脳内ＨＤとお主のパソコンに保存し数々取り揃えておる」

「てか俺のパソコンって言ったな！？　ぜってえ、消す。そんな変態的な行動許してたまるか！　ちなみにホニさんはとても可愛い」

「変態で何が悪い！　それにわしは変態という名の淑女じゃ」

「お前ことクマ○って呼ぶぞ。ちなみにホニさんはホニさんってこれからもいいですよね？」

「なにおう！　それならお主はク○吉と呼ばせてもらおうか、これ

でわしとお主でクマ兄妹じゃぁっ」
「とりあえず朝っぱらからハイテンションにさせんな！　一日の気力使い果たしたらどうする！　ちなみにもうホニさん可愛いので結婚してください」
「けっ……結婚！？」
今まで俺の発言に一喜一憂していたホニさんが本日最大の動揺を見せた。
「ホニさん、俺はホニさんのことが大好きです。末長く一緒にいましょう」
「う、うんっ……ユウジさんが良いって言うなら」
「それではいざ行かん、ハッピーウエンディング！」
「あまりにも突然のプロポーズと更に唐突にまえがきネタを出すんじゃないわっ！」
「「えー」」
「え、なぜに息ぴったり？」
「いやだって俺告白しましたし」
「衝撃の事実をさらっと言いおったぁー！」
「我も告白しました……（あの子にしてもらったのだけど）」
「更に追い打ちがキタァーッ！」
「桐、キャラ崩れてるぞ？　熱でもあるのか、知恵熱か？」
「桐、大丈夫？　良かったら我が長い生涯で生み出した”すぐに全快する薬”を持ってきたほうがいい？　苦味のあまり普通の人だと卒倒するけど」
「絶望した！　恋愛シュミレーションゲーのはずなのにその付き合

う過程がおろそかなこのクソゲーっぷりに心奥底から地底深くから糸色望したっ！」

「ホニさん、そんなの言葉じゃなくて薬をオブラートに包めばいいだろー☆」

「そういえばそうだよねー！　ありがとうユウジさんー☆」

「解せぬぅっ！」

　いつの間にかホニさん弄りからユウジ弄り、そして桐弄りへと変わっていたのを当事者は誰も気づいていそうで気付かない。

「にしてもそんなこと聞いておらぬぞ？　変化も殆ど無い様じゃし」

「まあな、今までと特に変わってないしな」

「うんっ」

「……正直言うのを憚（はばか）れるが、普通は変わるものじゃろう。例えば顔を見合わせただけで赤くなるとかのう」

「うーん、我は告白し合う前までは我がそうだったかな」

「俺は気付いてさえいなかったな」

「……そうじゃろうな、お主が振り向くのには相当手間がかかるからの」

「いやいや俺とか落とすの簡単だろ」

「「ないよ（ぞ）！」」

「え、それは双方からの意見？」

「ユウジさんは言わせて貰うと鈍感なんだもん！　だって、我はユウジさんに何度も助けられて、いつも一緒にいてくれて、短いけど沢山の時を過ごして、それでやっと自分にとってユウジさんがどれ

だけ大切でどれだけに好きで一緒に居たいって言う強い気持ちを持っていたかに気づけたのも遅いと思ったのに……ユウジさんはそれよりもずっとずっと遅かったんだよ」

「ユウジは何もかも鈍感じゃ。女をはべらせておいて、気づくのは毎回年の瀬も近づく頃じゃからな。お主は喧嘩を売っているのかと、意図的にそうしてるんではないかと疑うほどにお主は遅いのじゃ！」

「いやー……俺ってそんな好かれる要素ないだろ。多分ホニさんに好かれたのはまぐれで――」

「ユウジさんへの気持ちはそんなあやふやなものじゃないよ！　ユウジさんがどれだけ我にしてくれたか、我のことを思ってくれたのか分かってるんだから！」

「そうじゃそうじゃ！　お主が歩けば女を惚れさす、という言葉あるぐらいじゃからな！」

「いやいやいやないからっ！」

「あるっ（のっ）！」

ちなみにまた一周回ってユウジ弄りになっているのには誰も気づいていない。

……って一応私ナレーションですからね、なんともお久しぶりです。

「まあ良いわ。それで付き合い始めた、と」

「ん（え）？」

俺はその桐の言葉に驚き、ホニさんとハモって声を漏らす。

「ん、え、とはなんじゃ……驚くポイントは今までにいくらでもあったじゃろうに」

「いやー……ねえ、ホニさん」

「うーん、そうだよ……ね？」

二人見合せながら、桐の言っていることを考える。

「な、なんじゃ。彼氏彼女の部外者には分からぬラブアプローチかっ！　爆発じゃ芸術以上に爆発してしまえ！」

「いや、桐。お前は結構に誤解している」

「ゴカイ？　五つの海をまたにかける程の付き合いじゃと！　大気圏で燃えろ！」

「違うって桐、えっとね。そう我たちはね――」

「「付き合ってないんだよ」」

「……はぁ？」

「俺が好きって言って、ホニさんからも好きだよって伝えられただけなんだよな」

「うん。だからどっちも返事は明確にしてるわけじゃないよ。一種の意思表明かな？」

「だから変わらないんだろうな」

「うんっ、我は少し卑怯な方法だけど想いを伝えられて……スッキリしたんだ」

ホニさんが本当に軽やかな顔していた。文字通りさっぱりとしていた。

度々照れりんこするホニさんもいいけども、こんな爽やかなホニさんも良い。

「……と、いうことはじゃな」

「ということは？」

「桐？」

「わしが持っていける可能性は十二分にあるということじゃな！」

「「ない（だめっ）」」

「そこでも言葉は違えどハモるのか！　本当は付き合っておって突き合っておるのじゃろ！？」

「槍？」

「桐がシモネタに頼るとは……今年の冬は雪がアツくなるな」

「あー、もう！　ならば力づくじゃあっ！」

「だめだよっ、桐！　ユウジさんの右側は我の特等席なの！」

「ううぬっ、ならばわしは左を占拠するのみっ！　良かったのう良かったのう、両手に小さな花二つ。幸せモノじゃのう、よっロリコン！」

「いやいやホニさんは要すけど、桐はイラネ」

「がぁーん、今世紀末のショックでございますよ」

「だから桐、なんでそんなに人が変わってるの……？」

そういう訳でいつもの日常。

それはあの戦いが終わって平穏の訪れた日々は、こんな幸せな毎日だった。

でも俺は笑って過ごす内心では、時折現れる”もう一人のホニさん”に苦悩していた――

＊　＊

「みんな寝たっぽいね、下之ユウジ？」

「……ああ、そうっぽいな」

この彼女は夜に訪れる。太陽の元はホニさん、月灯りの元を時陽子のように入れ替わって。

「話しをしよっか」

第２９０話　√２－９５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

またしても死亡につき即スミマセンー

アト４

第２９０話　√２－９５　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「なあ、お前さ」
「ヨーコ」
「……ヨーコの出てくる頻度増えてないか？」

ヨーコと呼ばれる者はいつも通りならばホニさんと呼んでいた容姿そのものだった。
しかし今は、この夜は違う。彼女はホニさんでなく、紛れもない時ヨーコなのだ。

「みたいだね、それにホニさんは早寝とはいえ起きる時間が早くなってる」

俺は手頃な時計を見つめて、その意味を改めて再確認する。

「……日に日に出てくるのが早くなってるな」
「そゆこと。それがどんな意味を持ってるか下之ユウジは分かる？」

隣に居るのはホニさんの声で喋るまったくの別人。
その別人が本来の性格で、そもそもの体の持ち主。

「……何か変化が起こってるんだろうな」
「変化って言っても、今までにはこんなことなかったよね？」

彼女が現れることは今まで無かった。それも俺が告白のようなものをした時までは。
それからこうして彼女がこうして夜中に俺の部屋を訪ねてくるのだ。

もちろんホニさんにはその間の記憶が無いらしく、俺の部屋に夜分来ている自覚は無かった。
そして何をするかと思えば、こうして二人でベッドに腰かけて窓から覗く月灯りを眺める。

「てか、ヨーコはなんで俺の部屋に来るんだ？」
「そりゃさ、色々話したいこともあるんだよ」

そして毎回話をしようと持ちかけ、俺のことを話させるのだ。
ホニさんが知っていることは知ってるから、それ以外で――と言って脳内でシチューエーションを選択しつつも話していく。

「へー、巳原ユイと知り合ったのって最近なんだ」
「まあな、それまではお互い気付かなかった。それが去年突然にな」

こういうことは実は殆ど他の人には話していない。姉貴にも桐には……読まれている気がするが。

「巳原ユイと出会ったからオタク臭くなったんだっけ」
「オタ臭い言うな……まあ否定はしない」

沈んだ俺の心にその新たに見出した娯楽は輝いてみえた。一時逃避先であったことも認めざるをえない。だが、今では――

「後悔はしてない」

それで彼女たちと出会えたのだから。オタクになれたことでゲームショップで何気なく中古のギャルゲーを手にとってレジに運んで、家に帰ってゲームを起動した。

「……ふーんそっか、まあ私は聞いてるだけチンプンカンプンだけど――楽しそうだから別に悪いとは思わないよ」
「どうも」

こんなノリの話しを淡々と俺から一方的に話して相槌を打つのだ。
ホニさんとはまた違く、ユイともユキとも姫城さんともまた違った――なんだろうか。
年下のはずなのに、同級生のような。話していて楽しい友達のような。

「それが勇者紛いに戦ってるんだよね……ギャップ狙ってる？」
「いやいやいや、勇者なんかじゃねえ。ただ一人の人と皆の居る日常を守りたかっただけだ」
「――思ってるか分かんないけど、クサいよ？」
「……残念なことに自覚してますよ、はい」

分かっている。それが傍から聴いていたら嘲笑されるような中学生の妄想のようなものだと。
それでも俺はその決意を持って戦い抗ってきた。

「まあ、結局は守りきったからよしとしよう」
「……お前は一体何なんだ、少し年上を敬えよ」
「一気にジジ臭くなったね」
「俺はどれだけ臭いんだよ!?」

あれか、あらゆる臭いをだしてるのか。凄い、想像しようとするところですげえ気持ち悪い。

「クサいクサい！　クサすぎてさ、傍観者だった私も――」
「……ん、何か言ったか？」

「なんでもないー、まあ少し話しに緊張をプラスしますよっと」
「……おう」

今までどことなく微笑んでいた彼女の顔が引き締まったのを見計らって、俺も構える。

「私はさ、ずっと籠ってたんだよ。現実が嫌いだから居ても何の意味も無いから、だからさ私はのたれ死んでも良かったんだよ――言ったよね？」
「……ああ」
「でも最近になって弾きだされたんだ、この外に。今まで私は傍観者で、ホニさんが見る世界をただ無言で眺めるだけだったのに、ホニさんが下之ユウジの想いを聞けたことで――突然にね」

俺の想い、というところを強調して彼女は言った。

「ホニさんはたまに話かけてくるんだ。面と向かって会う事はできないけど、言葉は交わすことが出来るから――それでホニさんは言ったんだ。どうして我はまだここに居るんだろうって、戦いが終わった直後にさ」
「……」
「私は答えたよ。ホニさんは幽霊で神様なんだよね、と逆に問いかけたんだ。そしたら、そうだよって――じゃあ、きっとそれは」

そして彼女はベッドを立ち上がり俺の目の前に月灯りを遮るように立つようにして、口を開いた。

「未練があるから。色々なことを知ることでも、お揚げ入りうどんを食べることでも、沢山の人と話せることでもない。まず最初にあ

って一番大切な――ある一つの思いのこと、がね？」

十一月三日

「ユウジさんユウジさん、こんな感じでいいかな？」
「ペロ……これは青酸カリッ……！」
「えええええええええええ、それは死んじゃうよ！　ユウジさんだけでなく食べた全員が死んじゃうよ！」
「冗談冗談、実に美味しいですぞ」
「も、もうおどかさないでよ……そっかぁ、良かった」

そうふと胸を撫で下ろす制服にエプロン姿のホニさん可愛いなあ。なんというかその生活感あふれる姿が、なんとも言えない気持ちになる。

「ホニさんの格好って幼な妻みたいだよな」
「ユ、ユウジさん！　つ、妻ってっ！？」

そうして顔を赤くしてむーと唸りながら俯く……悶えていいですか？

「なにおうっ！　ユウくんの妻になるのはこのお姉ちゃんと相場決まってるんだよっ！」
「あ、姉貴っ！？　突然に出てくんな！　心停止するかと思ったぞ」
「妻と言う言葉が生徒会室に居たら聞こえて」

生徒会室ってここからどれだけ離れているだろうか、おそらく直線距離にしても五十メートルはくだらないはずなんだが。

「地獄耳とは到底言えない程に新人類並みに進化した聴覚もった超人間がここに！？」
「むー、失礼だなー。私はユウくん大好きなただのお姉ちゃんだよ☆」
「余計恐ろしいわ！」

……生徒会室まで聞こえるってことはあくまでもギャグとしてもタイミングはバッチリなんだよな。

「まさか桐や他の誰かさんに続く”心詠”の保持者……ッ！？」
「ユウジさん、ココロヨミって何？」
「ホニさん……知って幸せになれないこともあるんだよ」
「え、そう言われると凄く気になる！　でもじゃあユウジさんは今不幸せなの！？」
「まあ、俺はホニさんとカレーを作れたことでプラマイゼロさ」
「ユウジさん……」

「こらこらそこで夫婦漫才しないで、ユウジ」

二人で謎世界に入っていたところでユキの声に我へと返る。

「ユキ、そっちはどうだ？　出来たか？」
「話し逸らさないで……って言いたいとこだけど我慢する。一応出来たよー、中辛カレー」
「ち、中辛？　ユウジさん”あの”辛さで中辛なのかな……本当にそうなのかな？」
「ホニさんの味覚はまったくもって正しいぞ……少なくとも俺は牛乳無しではやっていけなかった」

以前の試食会では少しは耐えられる俺でも小皿に別けられた分だけでも半リットルの紙パック牛乳を全て消費するハメになり、カレーの分量よりも牛乳のせいで腹が膨れてしまった。

ちなみにクラスメイトの大半がダウト。生き残った男子も戦い半ばで牛乳に頼って一部のみが完遂。唯一金沢さんが本を片手間に読みながらなにも助けを乞わずに完食して、ユキはかなり感動していた。

辛さの度合いで言えば深さ二十センチもない鍋にレッドペッパーを一瓶まるごと投入するほど。人振りでも一般基準で中辛から大辛にランクアップするというのに、それをである。

「ユ、ユウジそんな目でみないでよ……これでも抑えたんだから」

「でも売り出しで中辛はナシな、クラス一致団結で激辛カレーだからな」

「……分かったよ、仕方ない。皆食べられなかったもんね」

渋々納得して持ち場へと戻っていった。

ちなみに辛いだけかと言われればそうでなく、脂身のしつこくないがしっかりと肉や野菜のダシが染み出たカレーそのものはかなりに美味しいものであり。

男共は「篠文さんのカレーだと!?」と血相を変えて挑み「うめえ辛い、辛いィ！　ウメエカレエ、うま……かれ」と美味しいのでスプーンが進んでしまう為に厄介だった。

ちなみに辛さ足さなかったら十分に美味しいカレーで通じるんじゃね？　と女子の一人が提案した途端にユキが笑顔のままキレて辛さの良さを力説されたのでしょうがない。

「もう少しで開店だね、ユウジさん」

「そうだなー」

カレー立ち込める、かつての教室こと店内は。装飾部の努力によってエスニックテイストのシックでオシャレな空間へと様変わりしていた。

どこで持ってきたんだろうと思うべきテーブルは机をくっつけてカバーをかけたものだとはおそらくは気付かないことだろう。

生徒会と衛生調査部（仮）の検査も通った（ユキのカレーは一部難色を示したが、品質的な問題は無かった）

『これより”第七十三回藍浜高校祭”を開催します』

そのアナウンスに学校が沸き、そして最後のお祭りが始まった――

＊　＊

我はあの子がどんな想いで我から見える景色を見ていたからを理解した。

「こう見えてたんだね」

ここから覗くユウジさんはやっぱり優しくて、魅力的で。一緒に居たいと思えた。

「あの子もきっと」

その魅力に気付いてくれている。

代わりになってほしいとは思わないけど、傍に居てくれる人が居るなら。

「我は安心出来る」

我の未練は、一つの思いを伝えること。

そしてユウジさんを悲しませないこと。誰かが傍に居てくれること。

だからきっと我はもう大丈夫。

第２９１話　√２－９６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

６７００文字を一時間と四十分で描き切った！　おう、新記録！

アト３

第２９１話　√２－９６　Ｇ．Ｏ．Ｄ．

「私が夜に出張る時間が増えたってことは、ホニさんの時間が削られてるってこと」

陽の元はホニさん、月の元はヨーコ。入れ替わるように、しかしホニさんはその事実に気付いていないという。

そしてヨーコは未練のせいでホニさんはここに居ると言った。

ホニさんの言うとおりなら、ホニさんは知る為に今の今まで居続けた。誰かと話したいという希望もあった――それが叶えられていて。

そして俺が一応の告白をして、ホニさんは自分が俺に好意を持っていると告白した。それからはどこかスッキリとしていて、本当にもう未練が何もないような空気を醸していた――今に思えばそう思う。

「お決まりだけどさ、私は分かったんだよ――未練を解消した後の幽霊は、どうなるか」

そもそも幽霊は何かの未練の為に現実に残り彷徨っている……良く聞く逸話だ。

真偽はどうであれ、それは幽霊という存在を見える見えないに限らず否定せずに認識している人の間では広く伝わっていること。

「居なくなるんだ。私からも、下之ユウジの前からも」

……薄々俺は勘付いていた。

いくらなんでもここまで条件が揃えば、思わざるを得なかった。
でも俺はそれを信じたくなかったから……今の今までそれを否定してきたのだ。

それは事実に違いないことを、隣に居る俺は良く分かっている。

俺の告白でヨーコが出てきたのも未練が解消されたから――その未練は想いを受け取って、想いを伝えること。

そしてそれからは逆に巻かれたゼンマイの廻る速さがゆっくりと落ちて行くように、ホニさんで居られる時間は減って行った。

今でこそ昼夜で分かれているが、これからはどうなってしまうのか。

「でも私はさ……あのさ」
「……」

彼女は突然に俯いて独り言のように喋り出す。

「ちなみに下之ユウジに言ってるんじゃなくて、私は私の中にいるホニさんに言いたいことがあるんだ」

しかし俺への言葉ではなく……それは――

「おい！　ホニさんは今のこと聞けてるのか、だってホニさんは――」

覚えていない。このことを、ヨーコと話している間を覚えていない。

ヨーコはホニさんで居る時のことを覚えているのに……っ。

「ホニさん、まさか」

俺は一瞬で血の気が引いた。

もし未練を引きずらない為に、俺に不安をかけないが為に――

嘘をついていたとしたら。

ホニさんは今までにもそんなことがあった。自分のことを嫌われたくない為の、俺にとっての優しい嘘。

ホニさんは身勝手と言うだろうが、俺のことを考えて意識してついてくれた優しい嘘。

それを今の今もついていたとしたら。

「ホニッ！　お前はいいのか！　私の言葉で想いを伝えて、それで満足か！　どうして私の力なんて借りたんだよ……どうして自分の言葉で言わなかったんだよッ！」

寝静まったその世界に怒鳴るホニさんの姿をしたヨーコは叫ぶ。

「私が言ったのはあくまで意思表明で……まさかあれっきりだとは思わなかった。いくら会話会話の合い間にそんなこと言っても――本当の告白にはなっていないんだよ！　分かるか、ホニッ！」

誰も呼ばない、呼んでいないホニさんを呼び捨てで彼女は吐き捨て怒る。

それは傍観者で、ずっと中から見ていた彼女だからこそ分かる心情を吐露していたのかもしれない。

「答えろっ、ホニ！」

――――訪れるは沈黙。声が掠れるまでの大声で叫んだのにも関わらず誰も起きて俺の部屋のドアを叩くことはなかった。
そして俺の部屋には目の端に少しの涙を浮かべて立ちつくす彼女の姿がそこにある。

「それで消えていって……本当にいいのかよ、ホニさん」

俺は何も言葉を発することはできない。
理解していないが為でも、驚いているが為でもなく――俺にはどうすることもできなかった。
嘘を暴けるのは彼女自身だけ、ただ俺はそんな彼女を月夜を背景に見つめていた。

＊　＊

「始まったね！　ユウジさんっ！」
「おう、ワクワクすんな！」

教室に備え付けられた何台ものカセットコンロでカレー鍋を温めながら、始まった文化祭の客に備える。

「”給食カレー”に”野菜カレー”と”シーフードカレー”。少し色ものの”グリーンカレー”や”激辛カレー”に”和風カレー”の全六種のカレーを提供することになってんだよな」

正直どれだけメニューに気合が入っているんだと思う。それも料理好きな女子勢が前半三品を精をこめて作り、後半三品も癖こそあ

れど美味しくは出来上がった。

「てか俺たちのカレーを色モノに入れるのは違うだろ」
「ぬぬ、そのそば屋さんで食べるような鰹ダシベースのカレーはどちらかといえば異端かと思いますぞ」
「ユイィ、和風なめんなよ！　和風総〇家が殴り込みに来るゴルァ」
「難しい的な意味でだぬ。そば屋ゆえにダシはしっかりと出来てナンボ、それをカレーに上手く合わせるのだから至難かと思うぞい」
「……そこんところはぬかりはねえぜ、なにせホニさんは和風料理を作らせたら右に出るもはいないと断言出来るっ！」
「ユ、ユウジさんそれは買被り過ぎだよ！　ユウジさんの香辛料調合がなかったら、我はそうしようもなかったんだよ！」
「いやいやホニさんのしつこすぎず薄すぎずなあのダシは天下一品だった。まさに飲み干す一杯だね、あれは」
「ううんユウジさんこそ――」
「また始まったー……むう」

俺がホニさんと軽い口論をしていると、気付けばユキがジト目で俺とホニさんを凝視していた。
少し怖さを感じてしまうものの、俺は話題を切り出す。

「ユ、ユキどした？　激辛カレーは午後だろ？」

六種全てを一気に出しにする訳ではないく、午前の部こと一時までを三種。午後の部こと四時までに三種とちょうど二等分している。
ちなみに”和風カレー”は午前中でユキ担当の”激辛カレー”は午後のメニューである。

「そもそもなんで私のカレーは午前中じゃないのかな！」

「いやいや朝っぱらから辛いもの食べちゃまずいって」

確実に午後まで胃が壊れたままになりそうだ。

「失礼だなあ！　ちゃんと手加減したんだから、ハチミツいれたよハチミツ！」

「……いやさ、ハチミツはアクセント程度で辛さが際立つ一方だから」

生徒会審査直前にハチミツを加えて更に深みが増したはいいが、更に辛さがひきたってしまった。

「だいぶ甘くなったはずなのに……」

「あ、あま……っ！？」

流石にヒロインさんでも言っていいことを悪いことがあると思うんですよ。

クラスと生徒会役員と衛星調査部の皆さんをバッタバッタとなぎ倒しておいてよく言えたものだ。

「少し様子見に来たの！　（……午前の部だったら午後はユウジと回れたのに）」

「何か言ったか？　聞こえなかったんだが――」

「なんでもないよっ、じゃあ二人とも頑張ってね」

「「おう（うん）」」

そう言うとユキは去って行った。午後に訪れるここの客でユキには悪いが被害者が出ないことを祈る。

『和風カレー二つオーダー入りましたー』

「「はい」」

温めも兼ねて少し温めると、湯気立つ輝く白飯の上にカレーをのせてホール（インドっぽい手作り衣装を着た女子生徒）の人に手渡すと――

「美味しいといいだけど……」

「大丈夫だ。なにせ俺とホニさんの力作だからな！」

「うん……そうだねっ！」

そうして時間が過ぎて行き。午前の部は終わった。

「ユウジさんはやくはやく！」

「ち、ちょま……」

俺はホニさんに手を引かれながら人の喧騒の中を歩いていた。

午前の部ではナベが空になるほどに大盛況だった和風カレーは、午後の部を待たずして完売した。

店内の方から聞こえる声だと「美味しい」という声が度々聞こえ、ほっと俺とホニさんは二人胸を撫で下ろした。

そんな訳で持ち場が終わると共にフリータイムだ。

カレー係で付きっきりだったご褒美として午後は完全にフリーという決まり。

飾り付け担当はホールや宣伝係を命じられ、奔走しているが俺たちはのんびり文化祭を楽しむのだ。

「ホニさんはりきりすぎ」
「ごめんねー、でも我はすごい楽しみだったんだよ！　このマナビヤのお祭りが！」

ホニさんの言う事はモットモで一か月前から「楽しみだなぁ」と悦に浸っている場面を何度も目撃しては「可愛いなあ」といって癒され眺めていたのは記憶に新しい。

「でもはぐれちゃだめだろっ、っと」
「わわっ」

俺は腕を掴まれていたのを離してホニさんの手を握る。

「これで、よし！」
「……うんっ」

嬉しそうに頬を紅潮させるホニさんはあまりに可愛かった。そしてついに俺は――

「ホニさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん」
「うわわわわわわわわわ、ななにごとなの!?　ユウジさんっ」

ホニさんに抱きついた（抱きよせるという表現の方でも良し）

「ホニさんはほんんんんっとに可愛いなあ」
「だーかーらー！　照れるから止めてって！」

バタバタと俺の腕の中で暴れる……と言っても体裁をとるようにそれほど強くはなく、だが。

「俺はホニさんと一緒に文化祭に参加できて、準備出来て、こうして回れるのが嬉しいんだよ」
「！　わ、我も同じだよ……ユウジさんと」
人ごみの中で立ち止まって空間を作ってんじゃねえと言われようが、俺はこのホニさんとの時間が愛しかった。
「じゃ、行くか！」
「うんっ！」
二人るんるんと歩きだし、色々なクラスの出し物へと入ったり参加したりする。
「ユウジさんユウジさん！　お化け屋敷だって、これはテ〇サとか出てくるのかな」
「……うん、少し危ないからその辺はノーコメントで」
俺たちはそれほど恐怖体質でもないので、ただの暗闇デートだった。
少しホニさんが抱きついてくれたら当社三倍のテンションになりえたが流石にそれは――
「！？」
「だ、だめ……かな？」
ホニさんが俺の腕を抱きよせた。正直ホニさんの容姿以上にはある柔らかい部位が当たっているのだが……ここは男としての部分は少し堪える。
実際そんな青少年的好奇心や行動に出るよりも、俺はもっとそれ以上に純粋なことを考えていた。

「いや！　嬉しい、ホニさんに抱きつかれるなんて嬉しいぞぉ！」
「そ、そう？　じゃあとりあえずこの中だけ……」

教室を迷路に魔改造しただけでそれほどの広さは無い。あっというまにその時間が終わり、名残惜しそうにホニさんは俺の腕を離そうとした――

「この中ってのは学校内ってことで」
「え……うんっ！　ユウジさんがそう言ってくれるなら！」

抱きつかれながら歩くのはどこか恥ずかしくも有ったが、幸せの方が何倍も勝っていたので何も問題はなかった。

「写真屋さんって……グラビア撮影のことかな
「わーい、ホニさんは今日も絶好調だー……とりあえずそれは違うぞ、ホニさん」

その写真屋さんと言っても大そうなもので撮れるはずもなく、無駄に改造された三脚にインスタントカメラをくっつけて撮影――だと時間軸が完全に行方不明になるからそれは嘘として。
三脚付きのデジタル一眼で何種類か用意された衣装と背景で合わせて撮り、自前であろうカラープリントで即印刷という時代と言うのは流れるのがはやいなあと思わせる店だった。

「よし、いっちょ撮るか」
「うん、ユウジさんとツーショットだよっ！」

そこで適当に和装を選択した俺は浴衣に着替えた。女性の着付けは時間がかかるとのことで、十数分の後。

「……おおー」

俺はその姿をみて感嘆の声をあげる。

「やっぱホニさんに浴衣は似合うな」

「そういうユウジさんも似合ってるよ？」

赤のホニさんの浴衣と俺の青の浴衣は鏡で見ればかなりに鮮やかで見栄えが良かった。

『じゃあ行きますよー、はいとろけないチーズ』

……撮る時の掛け声らしきものがの語呂の悪さは気になったが、俺は二人で写真を撮った。

『出来上がりましたよー、はいどぞー』

渡された写真は異様に出来が良く、たいそう驚いた。

「すげえ、なのこのプロ」

「すごいねー、写真って絵の上手い人が描きこんでるんだよね？」

……これは可愛らしい解釈なので訂正はしない！

「いやー、イイ思い出になったわぁ」

「うんー」

二人写真を大切そうに袋にしまってポケットに入れると、もう一日目の文化祭の時間が差し迫っていることに気付く。

「そろそろ戻るか？」

「ユウジさん、ユウジさん」

「ん？」

俺の制服の裾をくいくい掴まれて、俺は振り向いて聞いた。

「今日は楽しかったよ。ありがとね、ユウジさん。我はこの思い出をずっと忘れないよ」

俺にも忘れられないような儚くも輝く笑顔でそう言った。

俺はそれに。

「俺も忘れない」

と笑顔で返す。

「じゃあクラスの皆が待ってるね、行こっか」

「おう」

そうして一日目の文化祭が終わる――二人デートをして時間がきて教室に戻って反省会と途中人気カレーの発表を行った。

優勝は愛坂さん組の「給食カレー」で全体的にまんべんなく人気だった。次点で俺とホニさんの和風カレーで女性に人気だったそうな、そして五位にユキの激辛でマニアな方々にウケたそうで。そして惜しくも癖の強すぎて男子勢グリーンカレーが最下位だった。

それでもクラス皆は楽しめたようであり、俺はこの最後のお祭りを忘れられないように思った。

十一月四日

文化祭終了。人気結果は昨日とほぼ同じで、三位と四位の野菜とシーフードが逆転したりしただけで、特に変わらずと言ったところ。

打ち上げの前の後夜祭がグラウンドで行われ、大掛かりに建てられた櫓の周りを中心に地域参加の屋台が生徒や教師限定で開かれてまた盛大な後夜祭になった。

「ユウジさんー」
「んー」
「終わっちゃったねー」
「だなー」
「今日の的当ても面白かったし、焼きそばも美味しかったねー」
「ああ、ホニさん凄かったよねー、バンバン中心に入れたもんで。焼きそばはあの油っぽさが少なかったのが驚いたなー」
「ユウジさんは楽しめた？」
「ホニさんはどうだった？」
「もちろん！」
「おれも、同じくモチのロンで」

二人備え付けられたベンチに座りながら騒ぐ生徒たちを眺める。

「本当に終わっちゃったんだね……」
「ああ……」

「ユウジさん、楽しかったよ。ありがとうね」
「俺もホニさんと周れて、一緒に出来て楽しかった」
俺とホニさんは向きあうこともないまま、目を合わせずに隣同士に話す。

「ユ、ユウジさんっ」
「ん？」
「少しこっちに顔近づけてくれるかな……？」
「ん、おう……」

俺は視線を前へやったまま、顔を横へ下へと向けた——その時。

フッ——

「!?」

女の子のいい匂いが急に強くなったと思うと、頬に何かとてつもなく柔らかいものが触れた、それはほんの一瞬で。

「えへへ、恥ずかしいからほっぺに」
「な、な……」
「我はね、昼ドラだけでなく。学園ドラマも好きだったからね……やってみたんだ……けど。どう、かな……？」
「あ」
「あ？」
「あああああああああああああああ、可愛なこんちくしょおおおおおおおおおおおおおおお」

俺は有無を言わさずホニさんに抱きついていた。それもがっちりホールドするように、それでいて繊細なホニさんの体を包むように優しく。

「えええええ、なに、なに!?　ええっ、ユユユユユウジさんっ!?」

「ホニさんにキスして貰えるなんてほんっとうに嬉しいぞ！　ありがとー、ホニさん！」

「わわわわわ！　改めて言われると恥ずかしいよう！」

「かぁー、かわえええなあ！　かわえええなあ！」

「ユ、ユウジさんっ！」

俺は心底嬉しかった。あの戦いの時はキスしたとはいえ、戦闘中なのでそれほど余韻を味わうことはままならなかった。

それが今回は頬チューとはいえ……ホニさんからのっ！　嬉しいわあ！　嬉しいわあ！

……でも俺は少し空元気が入っていたのかもしれない。嬉しいことには嬉しいのに、どこか虚しい。

未来を分かっていると、どうにもこの現実がもろく虚しく思えてしまうのだ。

俺は内心では必死だったのかもしれない。ホニさんがこれで満足して居なくなっていまうんじゃないかと、だから俺は抱き締めたのかもしれない。

ホニさんが魅力的で抱きつきたい衝動に駆られつつも、今の今まで我慢していたのを解放したのは――そのせいなのかもしれない。

腕の中のホニさんは恥ずかしそうにしながらもずっと見惚れるほどの笑顔で、変わることはなかった。

そして最後のお祭りが終わった。

＊　＊

ユウジさんにキスをしてしまった。
確かに二度目で、今度は段階が下がっているのだけど。それでも恥ずかしいのだから仕方ない。
でも思えばもっと素直になっても良かったのかもしれない。
いや……

でも我はこうして旅立てるはず。
未練という名の建前のもと。あの子に無理を言うようにしてきた・我は神様で居続ける、あの子の体に居座る為の力を失って。

「もう少しでさよならだね――ユウジさん」

誰も居ない世界で、一人だけに聞こえる世界で。
そう呟いた。

「我はもう後悔はない……と言いたかったけど、もし叶うならば」

雪空をユウジさんと見たい。

それまで我は旅立つこと拒めているだろうか……分からない。
けど、もし。もしに、それが叶うならば――

第２９２話　√２－９７　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

アト２

この一部は一年と九か月前に完成していましたー

第292話　√2－97　G．O．D．

十一月九日

文化祭から数日。
文化祭開催が土・日であり、振替え休日として日曜の次の曜日こと月・火曜と休みが設けられた。
数日が経ち片付けが終わってしまえば見慣れたエスニックテイストの店内は完全に消え失せ、これこそ見慣れた教室の姿へと戻る。
そんなこともありつつも祭りの喧騒はすっかりと息を潜め、また独特な秋の空気感が支配を始める。
肌寒く、木枯らしに時折体を震わせるが。まだ寒さの訪れは本格的にはしておらず、これからがカウントダウンのように気温を下げて行くのだ。

「ユウジさん、授業終わったねー」
「だなー、そろそろ帰るかー」

俺とホニさんは帰路に就いていた。
飽きるほどに往復を繰り返してきた通学路をこうして歩き、次第にメンバーの数が減って行く――それが常のことである。
いつものメンバーでの下校。全員帰宅部の自分たちとしては当然の行動だった。

「”こころ！は深いね！　まさかあそこまで感情が錯綜するなんて」
「ホニさんは相変わらずに好きですなー」
「うん！　私はやっぱりに国語が好きだー」
「……！？」

俺はその異変に真っ先に気付いた、そして「ごめん先行っててと」メンバーに言うと俺はホニさんを連れて、メンバーから離れ人通りの少ないところまでやってくる。

「え、あれ、えと……わっ、下之ユウジさん!?」
「ホニさん……いや、どっちだ?」
「私……我は、ヨー……ホニで……」
「っ、まさか……!」

そう、一気にホニさんの居れる時間が減少し。今の今かとヨーコが顔を出してもおかしくないほどに——人称と自己認識と口調が混濁していた。

「……下之ユウジ」
「”今は”ヨーコだな」
「ああ……これは、危ないな」

ヨーコがそれを更に自覚した。俺はその来るべきであった事実に衝撃を受けつつも受け入れれるべきことだと俺は無理やりに言い聞かせた、それを自分に。

それからホニさんが居れる時間は減って行った。
そのペースは落ちることなく、次第に次第にホニさんがホニさんで居れる時間は減っていった。
まだ下校途中なら誤魔化せるし、家に帰れさえすればなんとか俺がフォローでした。
しかしそれは悪化の一途を辿っていく

「私が出てきちゃ、皆不審がるからさ」

と彼女は言い。出てきてしまった場合は仮病で保健室に行くなどしてクラスメイトや教師を誤魔化した。

俺はフォローしてなんとかすべきだったのかもしれないが、時間的にも限界が有り、そして彼女自身がそれを嫌がった。

朝はホニさんで始まり、五時限目の最初にはヨーコ出てきてしまう。

十二月の初旬には太陽が真上に昇る頃にはヨーコが表れて、保健室に行くことなく早退が増え、十二月も半ばに迫る頃には学校に行く間でも出てきてしまう結果になり、それから冬休みになだれ込む形で不登校になった。

姉貴もユイもユキも姫城さんも、クラスメイトも心配していたが。それほど強く追及しないので少し助かった。

それでも姉貴とユイには事の顛末をホニさんとヨーコに了解を得た上で話した。二人はそれ以上言うことなく「分かった」と一言だけ呟いた。

十二月の二十日を迎える頃には、ほんの少しの時ばかりしかホニさんは居られなくなる。

そしてホニさんと顔を合わせる度に言うのだ「我のせいでごめんねごめんねごめんね」と自分が居られないことで迷惑をかけてると感じて謝るのだ。

「謝らまるなよ、それよりさ――」俺はホニさんと語った。思い出を、自分のことを。ホニさんが居なくなってしまう時までに。

そして二十一日になる頃には。

ホニさんが居なくなった。

十二月二十一日

「ホニさん……もう……」

あまりに突然なことだった。朝に数分でも顔を出していたホニさんはついにいなくなり、目覚めたそばからヨーコが顔を出していた。

「下之ユウジ」

そんな俺の横に座って、彼女は言った。

「まだホニさんは私の中に居る……分かる、下之ユウジも少しは感じてるだろ？」

俺は以前にホニさんを感じることが出来ると話した。

確かにホニさんのことを今は微弱でいまにも途切れてなくなってしまいそうなほどの存在を感じることは出来るのだ。

それでも俺は居なくなってしまった実感に押しつぶされそうになり――

「大丈夫、大丈夫だ。ホニさんはまた出てくれる、でもそれは――」

それはきっと――

十二月二十四日

世間はクリスマスイブで騒がれている頃。俺は自分の部屋に居た。

曇り空の中で、パズルを欠け落としたかのようにぽっかりと月の大きさ分に空いた雲の隙間から眩いほどの月灯りが挿しこんできていた。

「入って、いい？」
「ヨーコか、ん」

俺は振り返らずに了承する。扉が閉められる音が聞こえ、足音がゆっくり近づいてくる。

「ホニさんが最後に、って」
「！　お前、今なんて――」

俺はそのヨーコの言葉に思わず振り返った。しかしそこには――

「え、えと。ユウジさん」
「……ホニさん！」

俺はその儚げな容姿をして、耳を出した愛くるしい彼女を強く抱きしめた。

その胸のなかで「ユウジさん……ユウジさん……ユウジさん」と確かめるように俺の名を呼んでいた。

小さな自室に二人、窓が見える場所にあるベッドへと腰かけていた。

隣にはホニさんが居る。それはあまりにも日常的あはずなのに、数日現れないだけでひどく久しぶりに思えてしまう。

「なあ」
「なにかな、ユウジさん」
「本当に……なんだな」

「うん」
「そうか」

あまりにその受け答えは呆気なかった。でもその理由が痛いほどに分かる。

深く染み言ってしまうと、ホニさんは感情を堪えられない――そう我慢するように結ばれた口をみてそう思った。

俺も、実際はそうだからだ。

「お」
「……あ」

窓の外にははらりはらりと降っていた。

月灯りが差し込むその中で、純白に輝かせる雪がほとりほとりと。

「雪……か」
「……うん」

あまりにこの時期には降ることの少ないこともあって、少し見惚れてしまう。

何時以来だろうか、クリスマスの前夜に雪が降ったのは。

「綺麗だね、ユウジさん」
「ああ」

しばらく沈黙が支配する。しかしホニさんは確かに隣居ることだけは理解出来ていた。

そして、少しの時を経て、ホニさんは話しだす。

「少しの間だけど……楽しかった」

ホニさんはこちらを向いてそんな過去形な台詞を放つ。

「我はユウジさんと共に過ごした日々が、長すぎる人生の中で一番幸せだったんだ」

「……それは良かった」

なんでそんな別れ際みたいな、そんなもう会うことが出来ないような言い方をするんだろうな。

……だが、そんな言葉を俺は封じ込めた。

「ホニさんが幸せだったなら、それは俺にとっての幸せだ」

「それはもう、我は幸せだったよ……ありがとう」

その”ありがとう”という言葉に俺の涙腺が反応する。そんなたった五文字の感謝の言葉でさえ、俺の心を痛めつけて行くのだ。

「本当に……ありがとう、ありがとうありがとう」

繰り返し。

男らしくないこんな言葉で目に涙を溜めるなんて——そう言われても今の俺なら構わないさ。

「なんでこんなにも神様は我に冷たいんだろー？」

低い天井を見上げ彼女は呟く。

「ホニさんも神様の一人じゃないか」

目に浮かぶ涙を右手で拭い、そう優しくツッコミを入れる。

「えへへ、そうだよね。神様ならさ、こんな結末を捻じ曲げられても良いものだと思うのにね」

「だよな……」

自分でも思うほどにその自ら放つ言葉は弱弱しく覇気がない。

「ユウジさん」

「ん？」

「我は幸せだったって断言出来るけど。ユウジさんは幸せだった？」

その一つの問いに悩む時間はなど一切合財必要なかった。

「もちろん」

そうこくりと、首を縦に振ってはっきりと頷いた。

「我は……幸せそうなユウジさんの顔が大好きだよ。実を言うとお揚げの次に好物なんだよ？」

「お揚げの次とは……それは嬉しい限りだな」

大好きで、学食に行くたびにお揚げ入りのうどんを食べる――ホ

ニさんの姿が頭に浮かんだ。

「だからね。我の好物の、幸せいっぱいの笑顔で見送って欲しいな」

そう言ってくれたことが俺は嬉しくて、驚きよりも先に。

「ああ、わかった」

そうして溢れていた涙を拭い去った。そして俺は笑顔を作るのだ。精一杯に、固くならないように、出来るだけ柔らかに、自然に。

「それ……それが我の好きなもの。とても優しくて、温かい……だから好物なんだろうね」

「……」

そして会話はプツリと途切れる。俺は口に出す言葉が見つからず、俺に存在する少ない語彙から必死で探し始めていた。

ホニさんはと言えば、何かを言おうと躊躇していた。そして踏ん切りを付けたのように彼女は口を開いた。

「ユウジさん」

「……なんだ？」

「また……会えるよね？」

「っ！」

堪えるんだ。涙を、悲しみを。俺に今できることは、彼女の好き

な物を見せ続けること。笑顔で居続けることだ。

「笑顔で……なんてワガママ言ってゴメンね」
「いや、俺の意思でやってるんだからさ。気にするなよ」
「……ユウジさんは嘘が下手だね」

ホニさんは少し笑って言った。

「……」
「なんてね、我の希望に答えてくれた本当に嬉しいよ」

それは冗談のように見せかけた、ホニさんの気遣い。
ああ、ホニさんに気を使わせてしまった。そんな自分がひどく悔しい。
すると、更に改まるように声のトーンを落として彼女は言うのだ。

「厚かましいけれど、最後のお願い聞いてくれる？」

最後。本当に最後になってしまうのだろうか。それでいいのか？
その言葉通りに捉えてしまっていいのか？　……いや――

「……訂正を求める」
「え」

「”最後”という言葉は要らない、だろ？」

俺はそれを認めはしない。それが確証のないことでも、俺はそれを訂正する。

「！　……うん、わかった。じゃあ改めて」

すぅと息を吸って。決意を固めるように。

「我のお願い聞いてくれる？」

たった一つの単語を変えただけだ。最後と言わないだけで”次の”可能性が出来る。

しかし、それは言葉による誤魔化し過ぎない。自分の希望であり儚い幻想なのだ。

それでもその”次の”お願いが来る。僅かな可能性にでも俺は願い、信じるしか——無力な俺にはそうすることしか出来ない。

「ああ、なんだ？」

「わ、我のことを好きと言ってほしい」

「なんだ……そんなことか」

「そんなこと！？」

「わ、我はこれでも心臓バクバクだというのに！」

「ああ、ごめん。言葉が足りなかったな」

言いはしないけど、そんな当たり前のことか。そう俺は思っていたからだ。

「じゃあ――」

以前の曖昧な告白とはまた違って、確固たる意思で。ホニさんへと向ける。

「俺こと下之ユウジは、ホニさんが本当に大好きです」

隣の小さいホニさんの瞳から透明の雫が落ちた。その悲しみに満ちた表情を消すために。”ホニさんが幸せだったなら、それは俺にとっての幸せだ”を少し変えて言う。

「ホニさんが幸せなら、俺にとってもそれは幸せだ」

「!?」

「だからさ……ホニさんも笑顔でさ」

自分の出来る精一杯の笑顔をホニさんに向ける。するとホニさんは。

「うぅ……うん」

ごしごしと手の甲で涙を拭き、こちらを向いた彼女は。

「……うん！」

神々しいまでの笑顔だった。それは華奢で優美で綺麗で、あまりにも可愛くて。

俺はそのホニさんの特上の笑顔を見れたことで、心の底から嬉しさがこみあげてきた。

それでも、時が来る。

「……もうお別れみたい」

ホニさんの容姿に変化はない、思えば月明かりがやんわりと強くなりホニさんを包み込むように在る事だろうか。

そのお別れは、言葉だけでもきっとそれは本当のことなのだ。

「そう、か……行くんだな」

分かっていた。結末は、その別れの時は。

「うん。私はこの世界に居過ぎたからね。でももっと多くの時間をユウジさんと過ごせたらと思うと、惜しいと思う……改めて言わせてもらうね」

月明かりと純白の粉雪の降り注ぐ空を背景に。

「本当にありがとう、ユウジさん。この時を過ごせて、我は幸せだったよ。そして我は一つだけ誇れることがあるんだ――」

ホニさんは言う。

「我は本当にユウジさんのことが――心から好きであったよ、と」

「ホニさんからの告白だと、初めてだったか？」

「……うん、ごめんね。ここまで遅くになって」

「いや……やっぱり」

ホニさんの言葉で表情で、言ってくれたことが。俺はなんて幸せ

者なんだろうと思ってしまう。、
月明かりで光を帯びた体は部屋の空気に溶けていく。
そして、

「またね、ユウジさん」

明確に聞こえた言葉はそれが最後で、ホニさんの姿を俺の目が捉えたのもほぼ同時だった。
その後には、体の本来の持ち主であるヨーコが眼を瞑ってそこに座り込む。

今のヨーコは気を失っているのか眠っているのかは分からないが――俺は望んだ表情を維持することは出来ていなかった。
無理な笑顔が崩れ、表情が歪む。そうして俺は泣き崩れてしまった。
月夜の部屋にたった一人、かつて居たであろう彼女はもう居ない。
呟く言葉は暗い部屋に沈んでいき、それを聞くことの出来るであろう彼女は今は瞳を閉じている。

「俺は待ってるからな」

ずっと、ずっと、いつまでも、と付け足した。

外では月が雲の僅かな隙間から顔を出し、やんわりとした雪がしとしとと降り続ける。

その日、世にも珍しい気象が観測されたという。

藍浜町というあまりにも小さな地域でのみ雪が降ったと。

藍浜町を超えてしまうとそこは至って澄み渡る夜の空が広がっていて――

第２９３話　√２－９８　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（前書き）

遅れて申し訳ないです。

アト１

第293話　√2－98　G・O・D・

俺はそうして朝を迎えた。
俺はベッドに座った体勢からそのまま倒れるように眠ってしまっていた。気付けば窓からは冬特有の青く高く澄んだ空が映り込む。
俺は彼女のその可愛い笑顔を見送って、かつてホニさんが居た元の体の主である時ヨーコがそこにはいる。ヨーコは俺に別れを告げたホニさんが居た窓前からそのまま座り込む形で窓下の壁に寄り掛かって寝ていた。

「ああ……」

感じていたのは圧倒的な空虚。
今までの感じていた繋がりが完全に消えうせていた。

「……ううん？」

ヨーコが眼をこすって眼を覚ます。俺は眠る最後に彼女にかけていたらしいタオルケットを一瞥して俺を見つめてから――

「おはよう、下之ユウジ」

そこにホニさんの面影はなかった。姿は瓜二つのはずのに、彼女はホニさんとは全くもっての別人をみているような気分だった。

「ああ、おはよう――ヨーコ」

彼女はそう挨拶し返すと、微笑み返して来た。
その微笑みはホニさんのするものとは違うものだったが――その

年相応の可愛らしさがあった。

＊　＊

あれからどれぐらい経っただろう。
数分かもしれないし、数日かもしれない。もしくは数カ月かもしれない。
それはある昼下がりのこと、俺の部屋には彼女が現れてからそうするように、今日も彼女は俺の部屋へと訪れていた。

「ども、ユウ」
「ああ、来たか。ヨーコ」

それが今の日常になっていたのは確かなことだった。

「あれからは何もないよ、うん。音沙汰なし」
「だろうな」

なぜなら俺は彼女と別れてしまっているからだ。
あの冬の日の恋人たちが町に繰り出すなり家に招待するなりして二人過ごしたり、家族そろってダイニングテーブルにケーキやらの料理を囲って家族過ごすであろうしたクリスマスイブのその日。
俺は自室にやってきたホニさんと僅かな時間を過ごした後、話して告白をして告白をされて。そうしてまた会えることを約束して別れたのだ。

「私はあの時ホニさんが離れていくのが分かった。私の中から消え去って行くのを感じたよ」

「……そうか」

俺もホニさんの存在を見つけることが出来ない。確かにこの世界から、俺や家族の繋がりから抜けてしまった。

その日からは繋がっていたものが崩れるように。新年が明けてみれば、そこにホニさんが居た記憶や記録は完全に失くなっていた。

ホニさんの存在が消えてしまったことを如実に示し、それに俺は憤りを覚えたとしても、それはどうしようもないことだった。

俺がそれを訴えたとしてもホニさんがすぐ戻ってくるわけでもなく、ただ虚しく俺が白い目で見られる――それだけならいいが、おそらくホニさんはそれを望まない。

俺は一度それをクラスメイトの一部に問いただしただけに終わり、それからはホニさんの消えた日常が過ぎて行った。

ホニさんの抜けたヨーコは、ホニさんが持ち得ていた知識を失い、ただの女子中学生という認識へと戻っていたという。

少しの間は姉貴やいつものメンバーもそのことを覚えていたが、少しずつそれは薄れて行き。今は覚えていない。

ただユウジ家には「ヨーコ」という女子中学生が居候している――そういう解釈になっている。

それからヨーコは学校を辞め（記録的には最初から通っていないことになる）俺と姉貴指導のもと家事手伝いとして居候することになった。

「ヨーコ最近どうだ？」

「ぼちぼち。まあ家事はなんとか板に付いてきたかも」

「……それは自分で言うものじゃないな。それに初期はひどかった」

「それを持ち出すのはナシだユウッ！　あれは、あれはだな……塩とソースを間違えただけで」

「色も形状もまったくもって異なると思うんだが……ソルトとソースを間違えるのはどうよ」
「一文字違いだね」
「逆に考えようか”一文字”しか合ってないと」
「気にしない気にしない」
「ったく」

ホニさんとはまったくもって方向性が違く、大雑把で投げやりだった。
それでも家事に才を見出すことはなかったが、一生懸命に覚えていたらしい。

「まあ、俺から言わせてもらうと」
「貰うと？」
「板にはついてきたな」
「よっし！」

ガッツポーズを決めるヨーコを苦笑いしながら見た。

「いや、私も知識こそ無いけれども記憶を見よう見まねで出来ると思ったら……甘かった」
「やり方を感覚的に知ってても、その通りに手が動くとは限らないからな」
「はあ、冷静なご意見で」
「まあな。自分のことは自分でするべきだ」
「……それはそうかもね」

と、俺は言っていたが。

「だが、俺はこれからもお前を守るつもりだ」

「……クサいです、ユウ」
「敬語になるほどに臭うのかっ！？」
「ちなみにその答えには……うーん。私は守られてばっかだなー」
「……答えにはなっていないな」
「でもそうっしょ？　死のうとした私を救う為にホニさんが憑いて、ホニさんが居なくなってからはユウがこうして君の騎士になるよ宣言してるし」
「……クサいな、ヨーコ」
「ええっ！？　君の騎士ってロマンチックじゃない？」
「いやぁー、うーん、そーだなー」
「……それに私はユウと違うんだよ！　そう、私は女の子！」
「女子中学生らしい、か」
「諦めたように言うなぁー」

そう他愛のない会話を繰り返している。内容こそ変われど、ノリは変わりなく。
しかし今日はどこか違う、ヨーコは途端に表情を固くして言った。

「……でも私はこのホニさんが守ってくれた命を大切にするつもりだよ」

ホニさんに感謝するように、はっきりとそう言った。

「そうだな。のたれ死ぬとかもう言わせないからな」
「……言わないよ。でも言わなくなったのは、ホニさんとユウ達のおかげだけどね」

そこで思いだすように少し空を見上げて彼女は続けた。

「ユウ、今だから話させてもらっていい？」
「……何か決心でも付いたのか？」

彼女は、ヨーコはこうして話す中で自分の境遇の片こそ見せるものの。殆ど話すことはなかった。

「ユウの言葉で、これからも守ってもらえる騎士様にお教えしておこうかと」
「……じゃあ、分かった。遠慮なく聞いておくかな」

ヨーコに興味がなかったわけではない。

「引っ越してきて、新学期から学校に行けると思って浮かれてたらさ――両親は交通事故でポックリ逝っちゃうなんてね。笑っちゃうよ、貸家からはすぐに追い出されて、遠くの町の児童相談所なんかに預けられそうになってさ。もう悲しくなって、虚しくなって、逃げ出したんだ。もうどうでもいいや、こんな自分倒れちまえって。走って、走って、走った。このまま力尽きたらいいな、とも思ったけどそれほど柔じゃなかった。だから私も最後にあの場所を選んだ。この町に来てからお気に入りだった、あの場所にね」
「……なるほど、な。それで」
「文字通り、力尽きて。そんな私にホニさんが入ってきて”少しお借りするね”って」

俺はそうして思った。

「ホニさんは相変わらず優しいのな」
「うん、ホニさんは優しい。私にとって最初はお節介だったのだけど――でもホニさんから見える景色は楽しくて魅力的だったんだ。

でもそれはホニさんの世界だから、自分の世界ではないのだからって。私はそのまま引き籠もることにした、それからもずっと、と」

そうして理解する。ヨーコのことを、ホニさんの考えを。

「それでホニさんは自分の思いに気付いて、でもそれを踏みとどまった。変化が怖いからって――人のことも何も言えない私だけど、見ているのは私も一緒だったから。だから私は」

「告白した、と」

「うん」

ヨーコはそう籠っている内にも気持ちは変わっていったのだろう。俺が知る由も無かった彼女が、ホニさんへと助言を激励をするまでに。

「でもホニさんは私を守るだけ守って行っちゃった。自分の想いを伝えて、その想いに答えてくれて、そして自分の想いと同じものを持っている人がすぐ近くにいることで、ホニさんは自分がいなくても大丈夫と未練をなくしたのだと思うよ」

「……未練ねえ」

俺はそうでないことを少し理解している。ホニさんは自分がここに居過ぎてことで、タイムリミットが訪れたのだ。

それは避けようの無いことで、未練は少なからずあったかもしれないが。おそらくは、そう――

「そ、そういえばユウはその想いを持ってる人が誰だと思う?」

「同じ想いを持ってる人ねえ……心当たりがないな」

「えっ、いやいや! 近くにいるでしょうに! ほらすぐ隣にっ」

「……俺は空気に想いを抱かれてしまったというのかっ」

なんというか、ある程度の境地に達すると無機物も愛せるというが……今の俺にはレベルふが高すぎるようだ。

「鈍感と言うよりそれはただのスルーだ！　逃げるなっ、ユウ！　このキス魔！」

「キキキキキキス魔っ！？　そんな魚の魔王な訳ないだろ」

「魚のこと言ってんじゃないよ！　……それは狙ってる？　逸らす為？　逃げる為？　童貞だから？」

「どどどど童貞だうわっ」

「私も中学生の身である以上、純潔だけどね……ただ」

「ただ……じゃないから！」

「誰かさんには結果的にはファーストキス盗まれちゃったんだよなあ」

「……へ？」

「他の誰が居るのかなあ～、ホニさんを使ってキスさせるなんて、やーらーしーいー」

「いやいやいやいや！　なんでそうなるんだ！？　俺からした訳じゃないし、というかあれはもう瀕死の状態で――」

「そう言うならこっちも考えあるよ？　セクハラで訴える」

「おいおいおいおい！　洒落にならないって――」

「じゃあ責任とってね、騎士サマ？」

「……」

「いくら鈍感でもここまで言って気付かないことはないっしょ。というか”心当たり”の部分から眼が泳いでるからね」

「……誤魔化し禁止ねえ」

「誤魔化し禁止、というか誤魔化せてないから」
「はぁ、これじゃあ俺はロリコンみたいだな」
「いくら実年齢幾百歳の神様でも容姿は中学生じゃん。気付かなかったの？」
「……認めたら何か失いそうで」
「失ってるよ、とっくに」

そう言われてショックを思い切り受けて、一気に沈む。ああ俺ってば特殊性癖の持ち主だったんだ……と。
しかし、やはり彼女は笑顔で言うのだ。

「でも手に入れたものはあるっしょ、例えば私とか」
「まあな」
「……それはすんなりと認めるのか。でも覚えてるよ？　ミナ姉に”この子は俺が絶対に面倒みるから、頼む！　これからも置いてくれっ”頭下げて、でも今考えてると私って犬扱い？」
「うっ。そ、そりゃ言うなよ……」

なんてーか、俺って打ち負かされてばっかだな。
でも、俺は後悔なんてしていない。俺はホニさんの”彼女を守る”という意思を継ぐべきだとも思えば——俺自身がしたかったことに違いない。
途中で投げ出すことが嫌でもあるが、それ以上にヨーコはヨーコとして傍に居てほしかった。
ある程度俺のことを知られているともう一周回って諦めた後に本音で会話が出来る。いわゆる桐やユイのような存在で、俺は気兼ねなく話せる相手だった。

「他にも、ホニさんとの記憶もユウにはあるっしょ？」
「——ああ」

俺の記憶にはホニさんとの思い出がしっかりと刻まれている。
あの出会いから、戦いに、学校に、夏の出来事に、クリスマスのあの日まで。
全て全てを鮮明に覚えている。楽しかったことも悲しかったことも、辛かったことも悔しかったことも――
ホニさんのさまざまな俺へと向けてくれた表情を覚えている。

「ホニさんはどう思ってんだろうな」
「ホニさん、ねえ」

これまでを、俺たちと過ごして日々のことを。
するとヨーコは少し考えるようにして、そしてきっぱりと言った。

「素晴らしいものだったんじゃないかな？　ホニさんにとってのこの日常が、ユウとの日々が」

ずっと見ていた彼女がそう笑顔でそう言った。それならばきっとそうなのだろう。

「俺にとっても素晴らしいものだった。ホニさんとの毎日はな」

ヨーコは成仏したと言っているけども、力を失った神様はどうなるのだろう。
本当の幽霊のように成仏して、この世から居なくなってしまうのか。それとも――

「いや、でも俺は――」

待ってる。

どんな形でもホニさんといつか再会出来ることを。

ホニさんが何百年も過ごすことが出来たのだから、きっと俺にも出来るはず。

例え俺がこの世を去っても。俺の最愛の彼女とはいつかまた会えることがあると。

俺はそう信じてる「またね」という言葉を信じてる。

ホニさんとの日々をまた過ごせることを信じてる。

「それまでは俺のここ、空けとくぞ」

「まさかの彼女ナシでいいっすよ宣言!?　いや、ちょっとまて!　じゃあ私は――」

守れた日常は今日も進んでいく。

ホニさんが守った彼女もその中にはいて、共に歩めたこの俺もそこにいる。

変わりない町がそこにはあり、変わらない空がそこにはあり、変わることのない日々が広がっている。

窓を開けると、その続いていく日常を喜び楽しみ踊るように。優しい風がふわりと吹いた。

空は青く、果てまでそれは澄んでいる。

それは教室。人の気配が感じられない、誰もいない教室。
そこには定数の机が並び、主の座っていない椅子が備え付けられている。

「――ここは、ええと……マナビヤ？」

一つの机に一人がいつの間にか存在していた。
それは長い長い艶やかな黒髪をもった女性で、背丈は中学生の平均的とも言えるほど。そして古びたデザインのセーラー服を着ていた。

『おや、珍客ですね』

更にもう一人が現れる。それは女性で彼女は深い緑色の髪を持ち、前髪で表情は隠れている藍浜高校の制定制服を着ていた。

『窓から飛び出ればそこには現実が有り、教室の扉を引けば架空の世界が広がっています。ここは二次元と三次元の境界です――ようこそ、ホニさん』

彼女は何もかも知っているかのように言って、その長い黒髪の女性を見る。

第２９４話　√２－９９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（終）（前書き）

√２「ホニ様編」終了です！

ちなみにこの部分は八カ月前に大まかには出来てはいましたー

第２９４話　√２－９９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（終）

我は誰もいない何も聞こえない何もいない、真っ黒の世界に一人立っていた。

ううん。立っているという確証もなく座っているのかもしれないし、寝ているのかもしれない――何もかもが分からなかった。

またね、ユウジさん。

そうして我は地上から姿を消した。残された肉体は持ち主であるあの子の元へ戻った。

きっと我の思い出も気持ちも彼女には筒抜けだと思うし……ユウジさんと仲良くやってくれるに違いない。

だから私は建前上は未練なく旅立てたのだ。それでも今一人になってしまうと、やっぱり寂しい。

「少し、ううん。凄い寂しい……かな」

仕方のないことだと分かっている。我自身のことは我が一番知っている、例えあの子でも知らないことだって我は知っている。

我が世界に居れる限界が訪れてしまった――それでも我はあの世界に居過ぎた。

「でも……ユウジさんと共に居れた」

我が抗ったのはあの子の為でもあるが、結局は自分があの場所に居たかったからだった。

ユウジさんや桐はそんな我を守ってくれて、家族と言ってくれて。
ユウジさんは我を好いているとも言ってくれた。
だからもう後悔しない。ユウジさんのおかげで、今はこうして記憶を巡らせることも出来るのだから――

「後悔なんか……して――」

後悔なんかしてない。そう言おうとしたのに涙が溢れた。
思いだすのは楽しかった思い出の数々。ユウジさんとの出会いから、買い物に行った日に、体育祭で一緒に楽しんだこと、そして色々なことがあった夏休み。
あの夏に我は自分の気持ちに気付けて、それで――

「我……まだ消えたくない」

あまりにも我儘な願望。我に未練などないはずなのだ、そのはずなのに。

「まだ消えたくないよ」

例えもう振り向いて貰えなくてもいい。ただ我はユウジさんの隣に居たい。とある休日のように、のんびりゆっくりと、ユウジさんとの時を過ごしたい。
一緒に居れるだけで、我はとっても幸せなのだから――

「っ！」

生まれ変われたらいいのに。
思っていた直後に我は白い光に包まれ、そうして眼を瞑る。きっとこれで神様で幽霊でもあった我は成仏して――

「……」

我はそうして目を開ける。我は成仏したのだろう。それで我は何処に居るのだろう？

「――ここは、ええと……マナビヤ？」」

見覚えのある景色。ユウジさんと一緒に学んだマナビヤの教室だった。

でも違うところは、我以外誰もいないこと。

「ど、どうして――」

辺りをぐるぐる見渡しても我一人しかいない……はずだった。

「これは珍客ですね」

「！」

聞こえるのは女性の声。声を追うと、先程までには姿形も無かった深緑色の長い前髪で表情の隠れた女性が机に腰をかけていた。

その女性は何もかもを知り得たような笑顔を我に向けながらそう言うのだ。

「ここは……？」

我は独り言のように呟くも、すぐに答えが返ってきた。

「窓から飛び出ればそこには現実が有り、教室の扉を引けば架空の世界が広がっています。ここは二次元と三次元の境界です――ようこそ、ホニさん」

「境界……？　それになんで我のことを？」

「境目（さかいめ）ですね。そしてあなたのことを知っているのは当たり前です――なにせ私は”その物語”を知っているのですから」

「物語……？　それはお話のこと？」

「そうです。それはこの世界の物語、そして今まで物語」

「……？」

彼女が言っていることが良く分からなかった。

「分かりやすく言えば、そうですね――下之ユウジが主人公の物語と言ったところでしょうか」

我は何かとんでもないことを聞いてしまった気がする。

「……今なんて、ユウジさん！？」

「はい、それであなたがヒロインです」

「ひ、ひろいん？　それは女優みたいなものだよ……ね？」

「そうですね。それに作品の華と言えるような女性をも指しますね。

そしてホニさんがヒロインの物語だったわけです――そう今までが」

この人はつまり。ユウジさんが主人公で、我がそのお話の華……

あれ、なんか普通に恥ずかしいことのような。

「それで……あの、あなたはユウジさんとどんな関係で？」

下之ユウジを知っている女性に我は心当たりがなく、そこに少しの疑問と興味が沸いた。

「近くて遠い関係ですね。そしてきっと下之ユウジは私と数回会った程度の人にしか思ってないでしょうね」

「近くて……遠い？」

何か詩的なように聞こえる。近いのに遠いって……なんだろう。

「そしてこの境界には下之ユウジが何度も訪れて――また戦いに行ったのです」

「戦い……まさかそれって、我を守る為の――？」

体を傷つけて、それでも空で我を守ってくれるが為に戦ってくれたユウジさん。

「そうです。戦いの為に記憶を失くして何度も何度も」

記憶を失くす……？

「え、記憶を失くすって……でもユウジさんは何も忘れているように見えなかったような」

「それはそうですよ。あなたの物語は何度も繰り返されてきたのですから」

我は聞かされた事実に驚くよりも先に、体も心も固まった。そして聞きたいことを少し声を大きくして言った。

「繰り返し、って、じゃあ、我が過ごしてたの日々は一度、じゃない……ってことなの？」

「ええ。主人公が死んでしまう世界、ヒロインが死んでしまう世界、ヒロインが主人公を結ばれずに消えてしまう世界――同じ物語は繰り返されてきたんです」

「ユウジさんが死んでしまう……！？」

そんな世界が繰り返されてきた。それを聞いても自覚など全く無かった。

「でも、下之ユウジはたった一度。記憶を失うことなく世界に舞い戻ったことがあるんです」

失うことなく。忘れることなく世界を繰り返した世界。

我はそうして思いだす。あの戦いの二週間前からユウジさんが何か変わったことを――突然に練習を増やし、桐が力を使わなかったこと。

「その世界は、もしかして今の……我？」

「はい。今回の場合はヒロインの死んだ世界からのやり直し、それも死ぬ二週間前からの。と付け加えておきましょう」

ということはユウジさんは我が死んでしまう世界を経験して、戦ったということになるんじゃ……？

「でもユウジさんはそんなこと一度も――」

「言ってないでしょう。下之ユウジは優しいのですから」

そう、ユウジさんは優しい。そしてその優しさに我は甘えて守られて来ていた。

我と普通に話して遊んでくれている間に、ユウジさんはそんな記憶を何度も巡らせて、それなのに表情には一切出すことなく……ああ。

我はなぜ気付けなかったのだろうか。でも気づけたとしても我は聞けたのだろうか、臆病な我に。ユウジさんが嫌がるようなことが苦手で、出来なくて。

「……」

「そして物語を終えた世界は元へと戻るのです。記憶も力も全て元に戻って。もちろんあなたも戻るのですよ？」

「我は戻れる……の？」

「はい――ただしそのままならば、記憶は残りません。ここでの会話も今までの思い出も」

今までのことを覚えていない我。思い出を知らない我ならばあの世界に戻れる。

それはとてつもなく嬉しいことなのに、それでも寂しいとも感じていた。

我の宝物のような思い出を失くしてしまう。それが心の奥底から嫌だった。でも抗う術がないなら――

「それでホニさんはどうするのですか？」
「え」
「この境界に来れた人への特典です――記憶を失くさないまま世界を元へ戻すことができます」
「で、出来るの！？」
一つの希望を見つけたように我は立ちあがってもう一度聞き直した。
「私は下之ユウジにはそうしてきましたよ？　自動的に消される記憶を維持できるように、今回の世界の下之ユウジにはそうしました」
「じゃあっ」
そうして欲しい、そう言おうとしたところを女性に制された。
「――言っておきましょう、でも同じ物語は繰り返されることはないのです。あなたがヒロインになれることはもうないのです。それでもこの思い出を持ったままでいいのですか？」
「っ！？」
それはもう我に振り返ることはない、ということ。好意をくれることはないということ。
その事実も我にとっては衝撃だった。ドラマでみたことのある、一度告白に失敗してもう振り向いてもらえない女性のいる展開を思い出す。
我は告白に失敗する以前に、告白さえ出来ないことになる。
ユウジさんが振り向いてくれないのが決定事項なのだから。
それでも我は、この思い出を残せるのなら――この宝物を手放さ

ずにすむのなら。

ユウジさんとの日々をこの胸に秘めて、これからも過ごせるのなら。

振り向くことはなくても、一緒にいることは出来る……かもしれないということ。

それなら、我は。

「我は記憶を失くしたくない。だからお願い、我の思い出を残してほしい――」

願うようにその女性に言った。なぜこの女性がそんなことを出来るのか、疑問に思いもせずにそう訴えた。

「……分かりました。あなたの記憶を残しましょう――それでは、またお眠りください。すると目覚める頃には世界は戻っています。あなたならば下之ユウジに出会う少し前の神石と言ったところでしょうか」

「うん、分かった。じゃあお願いします」

「お願いされました――それではおやすみなさい、ホニさん」

我は自分の座っていた椅子に座り眼を瞑って眠りについた。

次目覚める頃には誰もいないあの場所で、それでもユウジさんと出会えるあの場所で。

「ユウジさん――我はまた会いにいくよ」

そうして世界は止まった。
その物語が終わった。

＊　＊

その部屋は暗く、時計は夜の零時零分を指していた。
そこで待っていたかのようにその時計をその部屋の持ち主である桐は持ち上げた。

「それじゃあ……の」

桐は自分の部屋で目覚まし時計を弄って、後ろにある電池ケースの蓋を開けて乾電池を取り出した。すると時間は止まった。
その調節ねじを動かして、巻き戻す。一周逆に戻してまた電池を挿入する。

「分かってくれ、ユウジよ――」

こうするしか術がないのじゃ。
これからも世界を続けていくには、今までのの記憶が大きい壁になる。
だからわしは、残酷な手段を取る――

そうして世界は戻った。
二人の少女は記憶を残したままに。
新しい物語が始まった。

$\sqrt{2}$

END

第２９４話　√２－９９　Ｇ．Ｏ．Ｄ．（終）（後書き）

なんとかホニ様√が完結致しました。

最初から異能力バトルモノとして構想して、本来はホニさんも常時戦うようなシナリオでしたが都合上変更しました。
それを止めたことでホニさんとユウジの絡みが大きく減り、途中はユウジの（悪い意味での）独壇場になってしまいました。
構成の仕方やペース配分に課題が大きく残ってしまったと実感しています。

序盤には僅かに中盤から少しずつ入れた「マイ√を思い出すんじゃないか」というようなものはミスリードで繰り返された世界の伏線（お粗末なものでしたが）でも有りました。
伏線張りとしてはホニさんの中の人ことヨーコのことは√２－７０を最初に出てきていて、もっと早くに出せなかったものかと悔んでいたりします。

長くなりましたが、次からも普通に物語は始まって行きます。
√1と2はある種このクソゲエのプロローグ的立ち位置も含むのでこれからが本番です！

√2までお読み頂きありがとうございました。これからも話は続いて行くのでどうかよろしくお願いします。

第２９５話　√ａ－１　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］（前書き）

休んでました！　今日からじわじわ復活ですー

第２９５話　√α－１　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］

眠ってからどれぐらい経つだろう。
我の幾年と比べれば、些細な刻に過ぎない。それでも一度慣れてしまった”人の温もり”がとても恋しい。
そして広がっていた真っ暗の世界は突然に明るく姿を変えた。

「……あっ」

目の前の光景が一瞬にして変化し、見渡すまでもなくその見える景色はあまりにも見慣れた場所だった。
我が長く過ごし、言い方を変えれば延々に続く間に囚われていた。
その特徴的な場所。

「神石……だよね？」

独りごちに呟くけども、聞く人は誰もいない。

「っ！」

我は改めて記憶を巡らせる。この光景は何時頃のものだったか、そして我はあの深緑色の髪を持つ女性の言うとおりに記憶を持っているのか。

「我はここであの子に会って」

そしてユウジさんと出会って。

「ユウジさん達と過ごして」

戦いが起る中でユウジさんに守られて。

「学校に行って」

楽しい日々を過ごして。

「夏を迎えて」

ユウジさんのことが……。

「好きだと気付いた……ぁ」

あ、あれ……急に恥ずかしくなってきた。

でもこの感情が、気持ちがあるってことは。我は記憶を思い出を残せたってことだよね？

「告白をしてもらって、ユウジさんにされて。最後の日には想いを告げて」

そうして我は女性に教えてもらった真実と、今までのことを覚えて。

「ここに居る」

……石から見える桃色の花が少しずつ芽吹き始めた町の景色を見渡す限りで、かれんだーに書かれた数字だと春の四月辺りかな？

予測していると新聞紙が風に乗って飛んでくる。

「”二〇一〇年三月二十日”」

新聞紙は今飛ばされてきたようにそれほど古びていない。この日付よりは今は後ということになる。

あの子は我と出会ったのが三月の初旬だと言っていた。そして知った。

「じゃあこの体は……」

あの子――時ヨーコのもの。

自分の手のひらを見つめて、制服を撫でまわすように触って、ようやくあの子の体だと確信する。

そういえばあの子はどうしているのだろう？　我が離れたことで本来のあの子に戻ったはずなのだけど、時が繰り返されているとしたら。

「えーと、ヨーコ？」

『……』

確かに我の中にはいるものの、返答はなかった。

半ば強制的に我が割り込んでるいつのもあるのかな？

思い出せばこの時期にはヨーコとの意思疎通は出来なかったようにも思える。

「じゃあ覚えてないと考えていいみたいだね……」

……ユウジさんには殆ど秘密の会話を二人してたりしたんだけどなあ。

「一人……だね」

恋しくはあったけども、それでも我は耐えられていた。
今はとてつもなく寂しくて、すぐにでもユウジさんの顔が見たいという気持ちが溢れてくる。

「ユウジさん……」

顔を見て、きっと一緒に住むことが出来て。それでも隣を歩くことしか出来ないんだよね。

『――言っておきましょう、でも同じ物語は繰り返されることはないのです。あなたがヒロインになれることはもうないのです。それでもこの思い出を持ったままでいいのですか？』

彼女の言っていたことを思い出した。
昼ドラでやってたね”叶わない恋”って、ドラマの恋する女性の気持ちはこんな……こんな。

胸が痛いものなのだろうか。

「……でも後悔してないよ」

叶わない恋だとしても、叶った恋のことを我は覚えてる。
その思い出を残せているだけで、我はとても幸せだった。

「……よしっ！」

いつまでも考えていても仕方ないよね！　ユウジさんとはもうすぐ会えるんだから！

うんっ、それまでは以前と同じように普通に過ごそう！

「ユウジさんなら来てくれる」

そう信じて。我の好物のお揚げを持ってきてくれて、この我に気付いてくれることを。

……でも色々なことを覚えてるせいでユウジさんを見たら取り繕えるか不安になってきたよ。

顔を見た途端に心臓の動きが早くなって普通に喋れるか……どうだろう？

うん……少し演技を上手にしておこう。

＊　＊

あれから数週間、桜が咲き始めたようで見渡せる景色には桃色の花を咲かせる風景が見える。

もう少しでユウジさんと会えるんだ。もう少しで――そう思った時に。

「！？」

何か頭にズシンとした衝撃があった。

痛みではなく抑えつけられるような違和感。そして見渡す景色にも。

「あ……あれ？」

色が変わってしまった違和感。

桜の風がさっきまで吹いてたはずなのに、突然になくなった……？
見渡す景色もまだ満開を迎えていない桃色が急激に減った。

「……」

新聞が飛んでくる。そして日付は――三月二十日。

「え、ええと？」

おかしいな。その日どころかもう数週間は経っているはずなのに。
でも景色は我が表れた直後に――

「まさか」

巻き戻って……？

＊　＊

「また……だ」

これで五度目だった。
時が戻ってしまう。我の過ごした時が巻き戻って、一向に前へと進まない。
日付では数週間しか経っていなくても、我にしてみれば何ヶ月も過ごしていることになる。

「あの女性が言ったのはそういう訳だったんだ……」

我に改めて意思を問いたのはそういうことだったんだね。

『それはそうですよ。あなたの物語は何度も繰り返されてきたのですから』

それは我の物語だけではないのかもしれない、他の人の物語も繰り返されてきた。

記憶が残ることで何度もおなじことを繰り返してしまうから。だから彼女は言ったのだろう。

「……負けないよ」

寂しいけれど、切ないけれど。大丈夫。

これ以上我は臆病にならない、信じ続ける！

＊　＊

七度目を迎えた世界は前へと進んだ。

そして待ち望んだ時が訪れた――

「まぁいいや、早く貢物置いておこう」

「そうだぬ、このウル●ラジャンプも置いておこう」

あ、あ、ああ……ああ……来た。ユウジさん来た！

あああああああああああああああ、えええええええええええええと！　普通に至って普通に！　えーとこの時我はこう言ったは

ずなんだ、うんうん！
　ユウジさんがマサヒロの準備した箱の上にたっぱーに入ったお揚げを置いて、それでそれで――

「あ、好物のお揚げでゃ」

　噛んじゃった！　ああ噛んじゃった！
ど、どうしよう！？　ちゃんと聞こえてるかな、ちゃんと聞こえてるかなあ！？

「……今何か聞こえたような」
「確かになんとも可愛らしいオニャノコの声が聞こえたじゃけえ」
　聞こえた！　聞こえたんだ！

「あ、聞こえてた？　うん、我は我だよっ！　じゃあそっちに行くねー！」

　少し力を抜いて、声が聞こえたならユウジさんは我が見えるはず。

「来るの！？　って、うわ――」

　我が現れようとして足元の石が光を増す。これが石から我が離れられる瞬間なのかもしれない。
　そして体が羽のように軽くなって、そして――

「よっこいしょー……ぁあ」

そこにはユウジさんの少し呆気に取られたような顔があった。
我はその次の言う言葉を覚えていた。それでも、我は思わず声を漏らしてしまった。

「やっと……やっと会えたよ」
「え、えと？」

我の発言に困ったように首を傾げるユウジさん――
いけないいけない。嬉しくて涙が出そうになるよ……でもこらえて、ユウジさんが変に思っちゃ駄目だから。

「あああ！　ええと――なんで我の好物を知ってるの？」

我はそうしてユウジさんとまた出会う事が出来た。
大好きなユウジさんの顔をまた見ることが出来て――心の底から嬉しい。

第２９６話　√ａ－２　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］（前書き）

／一週間待ってこれかよ／　／金返せやオラァ／

第２９６話　√α－２　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］

時計は深夜零時零分を指した。

「”インターセプション”」

その何の変哲もない四角いアナログ目覚まし時計の裏の電池カバーを開け、そこから電池を取り出す――そうして時が止まった。

「次ぐ”ダ・カーポ”」

時計の調節ねじを反時計回りに一回転させる。そして零時零分へと巻き戻る。

「次ぐ”メモリークリア”」

そして世界は変わった。元へと戻った。真っ白（さら）な日常に。

三月二十三日

「うむ、成功じゃな」

未だユウジらが入学前の時間じゃ。春休み真っ盛りで、ユウジ曰く変わり映えしないメンバーでの進学という。

この頃はまだ姫城マイや福島コナツの存在も知らず、生徒会も知るよしも無い。それでホニとも会っていない。

しかし［正史］なのであろうか、ユイが越してくることは無く「

元から住んでいた」ことになるようじゃ。
ユウジからすればわしは妹で、ミナは姉。ユキやユイやマサヒロともクラスメイトといった関係じゃろう。

「……しかし今回はどれほどで進めるのじゃろうか」

前回は［ユキ事故死］のみで五回［ホニ死亡］で二回［ユウジ死亡］で三回［バッドエンド］で三回じゃった。
前々回は［ユキ事故死］が七回［マイによりユウジ死亡］が三回［バッドエンド］が三回じゃったな。

回数が一部被っておるがおそらくは偶然じゃろう、共通点はとくに無いと見える。
じゃが……な。

「前回は一体なんだったのじゃ？」

ユウジの記憶が残留したままに［ホニ死亡］の二週間前に戻るなんぞ……今までにないことじゃぞ。
わしがゲームオーバー時には”ダ・カーポ”と”メモリークリア”が施されるのが常で、そんな例外は有り得ないはずじゃった。
もちろんゲーム開始から数分にも満たない［ユキ事故死］のみで”メモリークリア”に関しては解除しているものの。
それ以降のことでのゲームオーバーからの起動は他の者には効いたというのにユウジに”だけ”効いていなかった。ということになる。

「……何か妨害のようなものが入っているのじゃろうか」

わしの能力ミスの可能性も無いわけではないが……都合が良過ぎ

るな。

「まあ、この残酷な世界をつくった神も都合が良過ぎるとは思うがの」

どうせ掌の上でわしは踊らされているのじゃろう。

ゲームオーバーの度にやり直し、それも元仕様ならば記憶の引き継ぎがあるというからの。

「精神崩壊させる気か」

わしだって相当にキツい。じゃが様々なヒロインと過ごしたユウジがもしそれらの記憶を覚えていたとしたら……

「とてつもなく辛いじゃろうな」

好いたヒロインとの日々がなかったことにされ、そしてまた違うヒロインを好いて、そして過ごす。そしてなかったことにされるの繰り返し。

当事者でないわしじゃからまだいい、主人公であるユウジがそれを覚えていたままだったら——耐えられないかもしれん。

偽善と罵られてもいいが、今は、今だけはその痛みを重みを和らげたいのじゃ。

「すまぬ、ユウジ」

それでもこの”異常”を終わらせる為にはどうしてもゲームをクリアしなければいけない。

ゲームをクリアする為には全てのヒロインを攻略しなければならない、ハッピーエンドに辿りつかないといけないのじゃ。

しかしこれではまるでゲームのモニタープレイのようじゃな。

この世界が誰かのプレイするゲームで、わしらはその中の一キャラクター。

もちろんユウジが主人公なだけでプレイヤーではない、それはあくまで画面内での主人公。

「……わしはそれでもお主をサポートするぞ」

わしだって何の感情の変化も無かったわけではない。

ゲームのシナリオ通りだとしても、ユウジの勇気や根性、熱意に愛と気配り。それには何度も心打たれた。わしも変わったと思う。

いつしかわしの告白が虚実で無くなるほどにはな。

最初ただわしは与えられた仕事をやっていただけだったようにも思える。しかし今ではわしはユウジ、お主を手伝いたいのじゃ。

「これからも頼むぞ、ユウジ」

自分の部屋の廊下へと続く扉に額をコツンと付けて、そう誰にも聞かれない言葉を呟いた。

始まった世界は寝静まった日常。

深夜零時に聴き耳を立てる者は誰ひとりいない。

＊　＊

そして世界は七回繰り返された。
二〇一〇年の三月二十三日から四月二十一日の間を七回。
二回目からわしはユウジの部屋に”妹”としてでなく”ヒントを伝える者”として現れて、わしが言えることを伝えた。
プロテクトがかかるように言えないことがいくつも有る中での合い間をくぐるようにした表現。
そしてユウジは七回目でその意味を理解し、そして世界は進んだのじゃ。

「ふむ、いいじゃろう」

わしの過ごす時間はどれぐらいになったであろう、一年足らずの物語を最初や途中や最後からやり直して来たこの世界。
それまでのことをわしは全て覚えている——辛くも有った、悟られないようにでもノイローゼにもなりかけた。
しかし抗ってやろう。わしの持つ情報が記憶が役に立つことを信じて、誰かが仕向けたこの掌で踊らされる世界を。
精いっぱいに踊り狂ってやろう。

そしていつか。

「ゲームを終わらせてみせよう」

わしがどんなに傷ついても良い。わしのことを考えなくても良い。
それがわしのここに居る意味であり、意義であり、わしが望んだことなのだから。

「共に歩こう、下之ユウジ」

共に進もう未来へと。共に向かおう終わりへと。

第297話　√α－3　［loading error］

「……あれが正解だったのか」

俺は人生で人が過ごす中でもおそらくは奇異なものを経験した。

いや、している途中だ。

「にしても、なあ」

知っていたとはいえ、いつの間にか忘れかけていたことを思い出させてくれるとは。

「ユキ達はゲームのヒロインなんだよな……」

三月のいつ頃か、俺はあることを急激に自覚した。

それは幼馴染に篠文ユキという人がいるということ。それとともに彼女が幼馴染であり”ゲームのヒロインである”ことも理解していた。

何故かはわからない。しかし記憶ではそうなったいるし脳内でもそうしっかりと位置付けられているのだった。

それでいて違和感など漂わせず、彼女もそのことについては全く口に出すことはなくまるで以前からいて、それを俺だけが忘れていただけのような感覚だった。

実際にそれまでのユキの記憶が存在するのだ。俺は中学の頃から少し知り合っていて――ん？

そこだけに大きな違和感というか、コレジャナイ感が表れるがすぐに消える……なんなんだ？

俺はユキとも”アイツ”とも仲は良くて、それで三年を迎えてユイやマサヒロと出会って――？

何かが激しく矛盾するような気持ちの悪さがある。しかしそれもすぐさま消えうせた……本当になんだろうな。

しかし、でも――

「まああんなに可愛いからなあ」

思い出すだけで人には見せられないニヤケ面になってしまう。あんな可愛い子が幼馴染なわけが無い！　しかしそれは事実で、更にはそれなりに仲も良好なのだ。

「桐も、ねえ」

そしてそれとほぼ同時に桐への自覚も出来た。自分の妹で有りゲームのヒロインである、と。それもまったく違和感のないことでそれまでの思い出もしっかり存在した。

思い出を辿るが、そこでまたユキと同じような気持ちの悪さが表れる。何か記憶に紛らわせるものの、浮いてしまうような。水に油は溶けないような……何を言っているのか自分でも分からない。

「他にもヒロインはいるってか」

俺は知りえないヒロインがまだ居るという。それが一体誰で、いつどの状況で会えるのかは分からないが、それは会うことが決定されたことだと――桐は言った。

俺が目の前でユキが事故に会うのを目撃し、その直後にそれが夢オチのように俺がベッドで目覚めた際に桐は色々なことを話された。自分やユキがゲームのヒロインで、このままだとユキの事故に逢ってしまう四月二十一日の同じ時間を繰り返すと。

俺は色々思考錯誤した。時間もずらしたし、道も変えた。

しかし毎回それは結果は変わらないのだ。決定された事項のよう

に”轢かれた記憶を持たない”ユキは車に、タクシーに轢かれてしまう。

何度も、そのユキが宙を舞う姿をみて、それからユキが息絶えていく様も何度もみせつけられた。

しかし桐の言うような答えは見つからず……七回目を迎えた時、俺はユキの手を引いて走り抜けた。

たったそれだけの答えだと呆れた半面安堵もした今日の朝のことを思い出す。そして今はその夜で、こうして時は進んでいる。

「まあ、いいか」

俺はベッドを跳ね起きた。このまま寝落ち寸前だったが急に尿意を催した。

部屋を出て廊下を歩く、そして俺は何故かわからないがある部屋で立ち止まった。

「……ん？」

その部屋は誰も今は使っていない、物置同然の空室だった。

しかし俺は何か、違和感を覚えた。

「（ここって空き部屋だったけ？）」

俺の脳内にそんな疑問が駆け巡った。その”空室”の事実を知っているのにそれを疑問に思ってしまっていた。

それはユキや桐に感じていた感覚とも良く似ていた。そして考え込む前に俺はドアノブを回していた――

「だよな」

そこには限界まで積み上げられているダンボール群が広がっていた。その場所に人が過ごすような気配は何もない。

「気のせいか」

思い過ごしだったと理解して俺は歩を進めようとして、ふいに近くというかこの階で水音を聞いた。

何かがこぼれたわけでも、あふれたわけでもない。水道管を水が通り抜けるような音。

それはたまに聞くことがある。二階にトイレはあるのだが俺は今は使っていない……誰かが使っているかと言えば姉貴も桐も使わない。

「……トイレトイレっと」

トイレを連想することを聞いてしまった為に尿意が増した。よし、急ごう。

「ふぅ……」

決してこれは何も意図を含んでいないことを弁解しておこう。あくまで排泄を終えた解放感からくるものだ。

「（ちょうど降りたことだし、茶でも飲むか）」

面倒臭がりなのかジジ臭いのか分からない理由で茶の間を過ぎてキッチンに向かおうとする。

「ユウくんー」
「ん？　なんだ姉貴？」
「呼んでみただけー」
「……」
「えへー」
「へいへい」

たまにこんなことがある。意味も無く俺の名前を呼んで答えが返ってくると本当に嬉しそうにするのだ、
ちなみにシカトした場合にはションボリされた上に続けざまにした場合には泣きだされたので、今は一応は答える。
それに姉貴は身内ヒイキ無しでも美女なので、微笑まれて不快になるようなことがない。
しかし俺への溺愛が深すぎることは否めなく、若干ひいてはいるけども。

「お茶ぁっと」

麦茶ボトルを傾けてコップに注ぎぐいっと一杯。

「ぷふぁ」

飲みきり口元を腕で拭い、満足した俺は自室へと戻って行く。

「あ、ユウくん」
「なんだ？」
「呼んでー―」
「同じギャグは繰り返さない方がいいよ」
「ギ、ギャグじゃないよ！　そしてそれは冗談で」
「……どこからが冗談？」

「もう、いいの！　伝えたいことがあったから、明日お姉ちゃん早く行くからね」
「あいよ、月曜は弁当でいいんだっけ？」
「うん、腕によりをかけて。過去最大級の美味しさを提供しますっ！」
「ハードル上げるのは自由だけど無理はすんなよ？」
「えへへ、ユウくん優しい」
「どうも優しい弟です」
「ふふ、ありがとね。ユウくん」
「こちらこそ毎度ごちそうになります――」

そんな知ってしまった、思いだした事実があっても変わらないこともそこにはある。
これは姫城舞というヒロインの一人に殺されかけて姉貴の策略による生徒会に入れられて肝試しをした際に出会ったホニさんが家にやってくる数日前の出来事。

第２９８話　√ａ－４　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］（前書き）

ｅｒｒｏｒ　ｍｉｘは全六話

第２９８話　√ａ－４　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］

「ホニの様子がおかしい」

あやつ本来ならばユウジに連れられ帰る際には数百年の内に変わった風景に辺りを盛大に見渡すというのに。

「というのに……」

ホニはユウジと出会ってから、ずっとユウジをみておる。

家に来てからも変な事象があった。部屋掃除が終わって案内もなしに二階に上がろうとしたり。

家事手伝いが変に演技しているようで、結局はちゃんと出来ておるし。

そしてやっぱりにホニはユウジを見ておる。

それもどこか懐かしむように、幸せを噛みしめるように笑顔で。

「……まさかの」

前回のシナリオは確かにホニ√じゃった。しかし姫城舞はホニ√の際ではユウジへみせたルート時のデレデレな態度を見せていなかった。

ホニはというと、

「まるで好きだった頃の記憶を残しているようじゃ――」

何かの偶然か、わしの思い過ぎか？　しかしでも前回シナリオの

［ホニ死亡］の二週間前からコンテニューした上にそれまでの［ホニ死亡］の記憶も持っていた。
そして今回はホニ。

「……何かわしを妨害する者がおるのかの？」

それはわしを踊らす神か、それとも――

＊　＊

ああ、ユウジさんかっこいい。
見惚れてしまうその好きな人の顔をついつい見つめてしまう。
我は覚えているのだけど、明かすことでユウジさんが混乱してしまうのではないか――それを考えて今は演技をしている。
演じることをそれほど得意じゃない我は少し変に見られているのではないかと、不安に思うものの。

「ホニさん、洗濯干すの上手だなー」

と褒められて、かなりに喜んでしまった。こうしてユウジさんの隣に居れるなんて、本当に夢のようで。
自分の部屋が懐かしくてベッドに思い切り飛びこんだり……色々と思い出が蘇ってくる。
自分を好きといってくれたユウジさん。実を呈して守ってくれたユウジさん。

「守ってくれたおかげで、我はここに居るよ」

またこの家に、またこの場所に。ユウジさんが朝起きた時に、学校から帰ってくる時から会える。

「我は幸せだよ……」

でも本当に誰も覚えてないんだね……そう考えると我一人だけで残されたように思えてしまう。

今まで我は一人だった……でも今は皆がいる。

ユウジさん。もし我が手伝えることがあったら何でも言ってね。

ユウジさんが我を守ってくれたように、今度は我が――

もしこれが我に与えられた役目だとしたら。

ユウジさんと過ごした日々も、それまでの日常も、繰り返される日々も。

それを覚えていてほしいから、我に記憶を思い出を残したなら。

いつか役立つといいな――そして我はどこまでユウジさんの隣にいるからね。

＊　＊

「……そうか」

桐はドアの前にきき耳を立てて、そしてユウジに良く使う”心詠”を使った。

「わし以外にも記憶を残す者が現れたということじゃな……」

しかしホニ。その記憶はユウジを惑わすだけじゃ、それは混乱を呼ぶだけじゃ。

「ゲームを終わらせる為には円滑なゲームプレイをする――」

わしがユウジに助言できないのもそんな意味があったからじゃろう。

それならば、

「ホニ、邪魔はさせぬぞ」

ドア前から立ち去り、そう呟いた。

その声は言葉誰にも聞こえない――

＊　＊

はずだった。

「……今の声って、桐？」

それは暗い廊下の先から、偶然に僅かに開いたドアの隙間から覗く。

その声は小さいものだったが少し高く大人への過渡期のような女の子の声。

「ゲーム？」

誰もいないはずの、誰も聞こえないはずの廊下で。
一人その声を聞いた。

第２９９話　√α－５　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］

夕食を終えてミナのやっぱり美味しい料理を御馳走になると家族全員がそれぞれ別々の動きを始める。
ミナが皿を洗い始めるとユウジさんがすすすと手伝いに行き、ユイと桐はすぐさま自分の部屋に戻る。
ミナも遠慮せずに「じゃあお願いね」とユウジさんにお願いして「あいよ」と答える。ユウジさんは優しいなあ。
我はその光景をぼーっと眺めていた。やっぱりにこの場所に戻って来れたんだなあ、と改めて思う。

少しして部屋に戻り自室に備え付けられたビデオデッキの電源を入れて、予め録画しておいた昼ドラを見る。
夜に見たら夜ドラと言われそうだけども、内容は昼ドラなのでいい！　夜ドラとはまた違った刺々しさと真実味を帯びた展開が我は好きだ。
……というのは建前で、どちらかというと奥様方で繰り広げられるシュラバが少し楽しみだったりするのだけど。

しばらくそれを堪能すると我はただなんとなく喉が渇いたので、お茶を飲みに部屋を出た。
未だかつてほど馴染めていない（と思われている）我は一応許しを貰うことにする。

「お茶貰うねー」
「うんー」

一つ返事でキッチンで調理器具の整理をしているミナからの返事

を貰って冷蔵庫の扉を開けた。

「あれ？」

冷蔵庫というのは不思議なもので、電気を通すことで冷えるという現代が生み出したスゴイ箱だ。

知った当初はかなりに驚いて、開けたり閉じたりして中の灯りが点いたり消えたりするのを隙間から眺めたりもした。

今では慣れたもので、食品の”おそらく置かれる場所”をおおかた理解していたりする。

「お姉さん、これって？」

我がそう指したのは今日の夕食だった野菜炒めと焼き銀鮭が載った平皿にご飯などがラップが張られて冷蔵庫に入っていた。

「ああ……これはね、いつも体に悪いもので済ませるからたまには食べなさいってね」

「……？」

「あれ、言ってなかったっけ？」

さも平然とさも当然のように。

「妹の分」

そう言った。

「い、妹？　桐は……さっき食べたよね」

確かに食卓に居てしっかりと平らげていた。まさか桐が夕食を二度食べるほどの大食らいでもないと思うのだけど。

「桐じゃなくてね。そうだよねー……うーん、あの子は殆ど外に出ないから」

「桐じゃなくて、外？　ん？　あれー？」

「一から話した方がいいかも……ちょっとこっちに来て」

「う、うん」

＊　＊

「ふいっーと」

俺は食後、姉貴の皿拭きを手伝って終えたところだ。

姉貴は「ちょっと鍋とか見たいからもう少しここにいるね、ありがとねユウくん」と言って姉貴をキッチンに残し。

トイレに少しばかり籠っていた。とりあえず部屋に戻って少しぐらい勉強しておこうかなと、思った矢先。

『ピンポーン』

インターホンが鳴った。ちなみに夕食を終えたのが七時半ごろ、それから皿拭きを手伝って八時数分前。

それで今は八時を回ったところだろう。

「俺が出るよー」

「あっ、ユウくんおねがーい」

不用心にも思われがちだが印鑑は玄関のすぐ近くの靴箱の上に置かれているのですぐさまそれを手にとって。

「はいはーい」

『こんばんはー、お届けものでーす』

陽気そうな兄さんが届け物であろう底面Ａ２サイズほどのダンボールを持ってそう言った。

「あ、どーも」

『判子をコチラにお願いできますかー？』

ぐいとダンボールの上に張り付いた紙の一部分を指してそう促し、俺は判子ケースを開けて朱肉に印鑑を付けて。

「ここ、ですね……はい」

『ありやとやしたー』

といって早々に去っていった。

「アマ●ンの商品は分かりやすいなー」

見慣れたものだ。注文者の名前欄を見て――

「ああ、アイツのか」

そう呟き俺は階段を上がる。俺の部屋に行く為でなくアイツへの部屋前に持っていくが為に。

俺は廊下を進んで進んで、突き当たった壁を左に曲がり、そして

突き当たった部屋が見えてくる。
人通りなんぞ殆どないはずなのに廊下に少しも埃が積もっていないのは姉貴の掃除の賜物だろう。
そしてその部屋の扉を俺はノックした。

「ミユ、ここに置いておくぞ」

思いのほか軽いそれを床に下ろして立ち去ろうとしたその時。俺の背後でぎぎと音をたてて扉が開く音がした。
俺はそれに何気なく振り向いて、そしてそこに現れた者を見た。

「……おはよう、か？」
「……」
「一年振りだっけか、顔を合わせるのは」
「……」
「まあ、置いておくからな――」

その者は――俺は彼女をアイツと呼び、そして名前を呼ぶときはミユと呼ぶ。

そう、彼女はたった一人の俺の本当の妹だ。

同じ年で、生まれる月が俺の方が少し早いだけの兄で、少し遅かっただけの妹。

長く前髪で顔を隠すほどに伸び切った黒髪はかなりに痛んでいた。
身長も少し伸びたが体格は相変わらずに細い。それでも土色になりかける肌は健康的とは言えないものだった。

――俺はそれをたった一会話しただけで読みとる。そしてその間アイツは髪の隙間からじっと俺を見つめていた。

何も返さないことを理解した俺は立ち去った。もちろんアイツも引きとめることなど一切なく。後ろからは扉が閉まる音が聞こえた。

第３００話　√ａ－６　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］（終）（前書き）

妹登場！

第３００話　√α－６　［ｌｏａｄｉｎｇ　ｅｒｒｏｒ］（終）

それは暗い部屋。朝でも昼でも陽の光が殆ど入らない厚くカーテンで締めくくられた部屋。
頼りになるものと言ってもパソコン液晶やテレビのバックライトか勉強机にお馴染みの電気スタンド。
それは雑多な部屋。無頓着なのかダンボールは無造作に積み上げられ、ゴミこそ纏められているものの全体的に汚い。
寝るスペース、座るスペース、歩くスペースがギリギリで確保された足の踏み場がかなりに少ない。
それは黒髪の少女。その部屋の主は一年ほど切られずに伸びきった黒色の長髪を有している。
洗ってはいるものの髪先は結構に痛みそこにかつてはあったであろう艶やかさはない。
それは毛布にまみれた少女。まるで何かから逃げるように遠ざかるように毛布を肩からかけて体を包みこんでいる。
この部屋に長いこと居る割には太ってもおらず、細身で姉譲り母譲りのスタイルと大き目の瞳のある整った顔を持っている。
それはいつからだろう。おそらくは一年前の時から。
それはいつまでだろう。それを知るのは少女でさえ出来ない。

あることが起きてから、少女はこの部屋に閉じこもっている。

何もかも失った彼女は、失わないように、彼と面と向かうことがないように。
この暗い部屋で一日を十日を百日を過ごしている。
彼女自身が家族全員に迷惑をかけていると知りながら。ここに逃げ続けている。

もう、あの日々には戻れない。

＊　＊

私はインターネットを駆使して入手したあることに一喜一憂していた。

もともとお金を使わないことで貰うお年玉やら小遣いは着々と貯まり銀行口座には七桁の数字が並んでいたという。

しかし中学二年の頃、急激にアニメや漫画にゲームに目覚めた。

元々は身近な人がやっていたのも有るが、それが相に合って、現在に至る。

私は断言しよう、美少女ゲーマーだと。

可愛い女の子が出てくるのが実に良い！　ダウンロード販売でパソコンにインストールしたギャルゲなどなどをプレイしては一人静かに身悶えている。

自分が主人公となって女の子を恋させ惚れさせ――それがなんとも快感だった。

……状況のせいで私はお金こそたんまりある口座からの引き落としで購入をしている、それも主に宅急便や店頭を介さないダウンロード販売で。

こうみえても私は引き籠りだ。

何の告白だと言われそうだが、実際そうであることから表立って

出れなくなってしまった。
いや……”出れなくなってしまった”じゃなく”出たくなくなった”が正しいかな。
周りの変化に激怒し自分の行動に後悔し後ろめたさで顔を出すことも憚られる。
私は一人でに籠に入った鳥なのだと。

そんな綺麗なものでもないのだけど、まあそれで許してほしい。
本来なら今は高校生活を送っていたであろう私は自堕落な生活を営んでいる。

部屋の外には皆が寝静まった深夜のみ、誰もいないことを確認して烏の行水よろしく風呂を浴びる。
洗濯ものは手紙で姉にこっそりとお願いして、食事は基本的に水道も電気もあるので電子ポットでお湯を沸かして通販などでごっそり買ったジャンクフードやらサプリメントやバランス食品。
それでも姉はそれを許さないらしく、風呂を使う前に冷蔵庫に入っている姉のつくった料理を頂いている。たまにお礼の手紙を残すこともあるが基本は何も返さない。
ジャンクフードやらの食品はダウンロード出来ないだろう……そうなんだよね、本当に食べ物もダウンロード出来ればいいのにね、こうピピッと。
なので宅急便はそういう生死に関わるものに関しては使い、姉やらに扉前まで持ってきてもらう。

「（悪いとは思ってるんだけどね……）」

パソコンハードから発するファンの音やらイヤホンから僅かに流れるアニソンのみの部屋で一人ごちに呟いた。

「（……でも今日は）」

私はある美少女ゲームが気になり、調べて行くうちにどんどんに欲しくなり。ダウンロードは無く、そして前評判の高さから予約をポチり。

晴れてアマ○ンの発送予定日（ｋｏｎｏｚａｍａされなかったのが奇跡）に発送状況を調べたところ今日届くことになり全裸待機（という表現で実際は部屋着を兼ねたパジャマ）していた。

すると扉まで近づく音。いつもならば「これおいとくね」と声をかけて姉が持ってきてくれる。

「（あれ）」

細かいと言ったらそこまでだけども、足踏み音が違う。きしりきしりがきっしりきっしりなような。

そしてとすとダンボールが置かれる音、そして――

「（もしかして――）」

『ミユ、ここに置いておくぞ』

その声の主には聞き覚えがあって、それが当たり前で……そして遠ざかる足音。

私は飛びあがるように座った姿勢から立ちあがっていた。その主が誰か、おそらく推測がついたから。

私はそうして扉を開けその顔ほどの隙間から覗いた。

「……おはよう、か？」

そこには推測の主が居た。

「……」

私は声が出せなかった。

「一年振りだっけか、顔を合わせるのは」

言いたいことも、たくさん有ったはずで。

「……」

それでも声も少しなら出るはずなのに。

「まあ、置いておくからな――」

そうして背を向けて去って行く。

……ああ、また。逃がしてしまった。これがもしかしたら最後だったのかな、と遠のく背中を見て思う。

一言でも言えれば良かったのに。

「ご……」

めんね。

「ユウ…兄（にい）」

それは誰にも聞こえない。

＊　＊

何故ユウ兄は来たのだろう。今まではミナ姉が来ていたのが殆どだった――

いや、でも私は寝オチしていた時もあったし。もしかしたらユウ兄も届けてくれていたのかもしれない。

……ああ、私はもう。

気を紛らわす為に私はダンボールを開封した。そこには私が欲しかったゲームのタイトルの踊るパッケージがビニールに包まれている。

そのゲームは『はーとふる☆でいずっ！』という恋愛シュミレーションと呼ばれるジャンルの美少女ゲーム。

レビューを見る限り前評判のハードルを軽く越えた良作になっているという、というか絵が私好みだった。

「（美少女ゲーで思いだしたけど）」

そういえば廊下から桐の声が聞こえたのだった。それほど大きいこともな桐の声を偶然換気に開けていた扉から聞きとった。

そして桐は言っていた。

「（ゲーム――させぬぞ）」

その二単語だけを私は聞きとった。そういえば桐とも一年会って――

「あ……れ？」

思わず声が出てしまうほどに、疑問に思った。

「（桐って一年前はどれぐらい（の背）だっけ？）」

今の背は小学生のそれなのだが……一年でどれほどに成長した？

「（それに……させぬ”ぞ”？）」

桐はそんな喋り方したっけ？　もうちょっと明るくて活発で――おかしいな、覚えているはずなのに。

「（まあ……いいか）」

何故か急にどうでもよくなった。本来ならそれは考えるべきことなのに、私の意識はそこから離れてしまった。

……それよりゲームだ！　ユウ兄と遭遇したのは予想外の展開だったけど……私はゲームをするっ！

ユウ兄も気になるけど、ゲームも気になるのだ。

「（そうにゅー）」

立ちあげているパソコンにゲームのディスクは吸い込まれた。そして

「!?」

突然の事態に私は目を見開いた。ゲームが立ちあがる寸前でウィンドウがダイアログに浸食されていった。

「（もしかしてバグ？）」

そういうの凄い困るって……ヒッキーの私はどうすればよいのかと！

そのダイアログにはというと「環境のスキャン」という謎の言葉が表示されていた。

「（なによ）」

しばらくしてダイアログの言葉が一斉に書き換えられていくのを目の当たりにする。

そして目の前の一番トップに現れたダイアログにはこう書かれていた。

『スキャンが完了しました、このまま作業を続行する場合”ＯＫ”をクリックしてください』

隣にある「キャンセル」を押しても反応しない……というか更にダイアログが１０個ほど増えた。

喧嘩売ってるよね、このゲーム！

結局ＯＫ押すしか選択肢ないじゃないの！　それに電源ボタン長押ししても……強制シャットダウン出来ない！

電源抜いたら私の集めた愛の結晶（＝美少女ゲーム）が消え失せる可能性もないとは否めない

それでもこのままダイアログばかりは嫌だなあ……うん、仕方ないから”ＯＫ”押そう。

「（ほい）」

ＯＫを押した途端にダイアログが消えてゆく。

次第にかつてのデスクトップの壁紙の色が見え始め、ダイアログはといえば最後の一つを残して消えた。

しかしその最後のダイアログは今までとは全く別の言葉が表示されていたのだった。

『世界浸透化の準備が整いました、よろしければ”スタート”をクリックしてください』

そこにはその文面と”スタート”というスイッチの描かれたダイアログが。

「……なんだったんだろ」

世界浸透化？　え、ん？　事態がまったく分からない、ダイアログが一つになったのでそれを除けてしまおうかと思っていたのだけど……戻ってくる。磁石のように中央に戻ってきて邪魔で仕方ない。

……嫌なプログラムだなあ。

スタートを押さない限りは消えないってパターンか！　……仕方ない。これ以上なにかされても困るしなあ。

そうして私は不用心にもそれをクリックした。

「うわっ」

パソコンから突然発せられた白い光、それに私を含む部屋全体が包まれていた。光を見る機会に乏しい私にとっては目が潰れんばかりだった。

眩しすぎて辺りの状況をまったくもって把握できない。しばらくすると光は弱くなっていくものの――

私に見える風景はかつてと違っていた。

＊　＊

ＰＣへのデータインストール――完了。
プログラムの展開３５％――６７％――９８％――１００％完了。

プログラムと環境の解析開始。
プログラムと環境の互換性――あり。
プログラムの環境への適合化準備。

阻害する危険因子――１件。
危険因子を解析中――解析に失敗。
現状プログラム及び環境への大きな影響見られず、危険因子を無視し作業を続行。

ｅｒｒｏｒ.

ｃｏｄｅ２２３プログラムの重複を確認。

”アナザーデータ”、”アナザープレイヤー”、”アナザーキャラクター”、”アナザーサブキャラクター”などが既に存在。

”アナザーデータを検索――該当一作品。

「Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～」”アナザーデータ”への当データ「はーとふる☆でいずっ！」の介入”アナザーデータ”との混入を確定。

”アナザーデータ”により”リミックスプログラム”の発動。

プログラムと環境の誤差――修正開始１２％――８９％――１００％完了。時間誤差、空間誤差、設定誤差の修正が完了。

バックグラウンドデータ――”アナザーデータ”によって適合失敗。”アナザーデータ”準拠に再構成――統合。

タイムテーブルデータ――適合失敗。”アナザーデータ”準拠に再構成――統合。

ナウプレイデータ――情報不足により適合失敗。”アナザーデータ”準拠に再構成――統合。

環境内で別のプログラムを実行中、既プログラムに破損を発見。

既プログラムの修復――失敗。

既プログラムへのプログラムの互換化開始３５％――６６％――８７％――９９％――１００％完了。

環境とプログラムの整備が完了。
環境の時間情報、空間情報、設定情報を更新７８％――１００％完了。

拒絶反応なし、作業続行。
人物の情報更新３７％――８６％――１００％完了。

拒絶反応なし、作業続行。
環境にプログラムの投影を開始６７％――１００％完了

拒絶反応なし、作業続行。
プログラムの環境への浸透８９％――１００完了。

プレイヤーデータ――適合者なし。〝アナザープレイヤー〟に混入することで対処。

メインキャラクターデータ――
適合する人物Ｎｏ．１「神楽坂（かぐらざか）　美咲（みさき）」の検索――該当１件。移植・書き換えの実行。
人物の適合化に失敗。次シナリオにて再実行。
適合する人物Ｎｏ．２「近江（おうみ）　由子（ゆこ）」の検索――該当１件。移植・書き換えの実行。
人物の適合化――実行中２１％――４９％――７８％――１００％完了。
適合する人物Ｎｏ．３「高坂（こうさか）　実沙（みさ）」の検索――該当１件。移植・書き換えの実行。
人物の適合化――実行中１８％――３７％――９３％――１００％完了。
適合する人物Ｎｏ．４「木山（きやま）　麻名（まな）」の検索――該当１件。移植・書き換えの実行。

人物の適合化――実行中２３％――５７％――７１％――１００％完了。

サブキャラクターデータ――適合を一部に限定。

人物Ｎｏ．１に限定した大幅書き換え――準備中につき、開始シナリオは現状維持。シナリオ終了と共に書き換えを実行。

”リミックスプログラム”の発動により”リセット”が実行。

適合・修正作業終了。

プログラムの実行を開始――

第３０１話　√ａ－１　彼女は彼に気付かれない

どうも、ホニだよ。
ええといきなり聞かされて我自身も驚いているのだけども……
ユウジと同い年でミナよりも年下で桐よりは年上の妹がいるようで。
同じ家に居るはずなのに知らなかったということがまず凄いんだけども。
うーん……そっかあ。ということはユウジさんの周りの女の子が兄妹とは言え我の中では増えたことになるね。
「……女系家族？」
それはいいとしても、どうして妹さんは出てこないのだろう？
何か事情があるのかな……？

＊　＊

どうも、ナレーターです。
お久しぶりですね。なんというか都合の良い時だけ駆りだされる緊急要員みたいになってきましたね。
というか私要らないんじゃないですかね？　スタッフさん。
……え、これから必要になるって？　またまた、御冗談をー
ユウジに桐にホニと来て、またイモウトっぽいキャラも主人公各になりそうじゃないですかぁ。

本当に私要らないんですよね？

え？　そんな一話からネガティブ発散させないでって……わかりましたよー

ということで駆りだされた私としては今起ろうとしている世界の異変をナレーションする為にですね。

あ、もうそろそろですね。

えーっとなになに……

『一つの暗い部屋で――』

＊　＊

一つの暗い部屋の中でパソコンは突然に光を発した。そして世界は真っ白へと変貌を遂げて多くの文字列がその空間に映しだされた。

そこには『――適合』などが次々とかなりの速さでキーボードを打つようにして虚空に現れその量は何行にも及んでいく。

その様をなんの術もないまま見つめているのが――このかつて暗かった部屋の持ち主であり、そして下之家の次女こと。

下之美優はそれを何が起ったのか分からんばかりにただ呆然と立ち尽くしている。

「……え」

ようやく声を発した頃には全ての文字が打ち終わったかのごとく文字の海が止まり、そして最後に一行「リセット」と描かれた。
その直後に視界がテレビが寿命を迎えて力尽きる風体でブラックアウトし、

「――――っあぁ」

声に出せないバッドで頭を強打して三秒後のような痛みというか重みが頭を襲い、ミユは頭を抱えてしゃがみこんだ。永遠に続くかのように思われたそれは実際のところは数秒程度で収まり、気付いた頃にはバックライト付き液晶を持つパソコンの光がうっすらと部屋を照らしていた。

「な、なにが……」

痛みも収まり、部屋も代わり映えしない――かは暗くて分からないので思いきって電灯を点けた。

「……っ」

先程の白さに目をやられたのでそれほどでもないが、やはり暗い世界にいるとその突然の証明には驚いてしまう。

「かわって……ない？」

微妙に散らかっているその周りも、モノもおそらくは無くなったものは確認できない。
買ったばかりのゲームソフトのケースも座ってちょうど目の前に来る高さにあるパソコンの前の低い卓袱台に広げられていた――

「あ……れ？」

パソコン画面を覗きこむ、そこには好きなアニメの壁紙が張られていてアイコンが羅列されている。

そんな中で、一つだけ足りないものが有った。

「（インストール出来なかったはずだけど）」

それでもディスクは入っているはずなのに、どうにもその表示がない。

［コンピュータ］を確認してもディスクは入っていない。

「（どういうことなの……？）」

パッケージはここにある。取説も――

「（なにこれ）」

説明書を拾い上げて絶句した。書かれているヒロインの顔がマジックで塗りつぶされたというより背景の色などをの残して消失していた。

名前や設定も一部だけが残って、あとは明らかに日本語ではない文字列が並んでおり文字化けしたようになっている。

「……」

消失したヒロインが気になるもディスクがない事実に気付き、インターネットで調べ公式サイトを探した。

「……な、い？」

いくら探しても『はーとふる☆でいずっ！』というソフトはゲームは存在していなかった。

「なんで……？」

途方に暮れながらも、しばらく彼女はパソコンの検索画面を見つめていた。

＊　＊

「あ、あぁぁぁあああああ」

我は突然に頭に激痛を感じた。それはかつて我が感じた「日がリセット」される際の何か頭にズシンとくる衝撃に良く似ながらも、強さではこちらが圧倒的に上だった。

「いや。いくらなんでもここから戻されるのは――」

八回目はここでされてしまうのか、せっかく出会えたのに。せっかくここまで来れたのに。

……そんな思いが我を巡る。でも――

「あれ？」

収まった頃には辺りを回してもそれは我の部屋だった。特に変わることの無い部屋。

「……でも時は遡ってる」

置かれたでじたる時計の日付を見て理解する。

我が出会う以前に、時はなっているのに――我がこの時に出会い、いることになっている？

「なにが起ったの……？」

＊　＊

その頃桐は。

「うぐ……」

桐やミユと同じくして頭を抱えていた。こらえてこそいるけれども、痛みは相当なものだったらしい。

「はぁはぁはぁ……」

痛みが止まる頃には息が荒くなってしまっていた。

「何が起った」

桐は辺りを見渡すも大きな変化がないことを理解、そしてすぐさまホニと同じ行動を起こす。

「四月一日じゃと……！？」

その瞬間に桐は部屋を飛び出した。そしてある部屋へと廊下を駆け走る。

「入るぞっ」

その扉が開けられた先は――

＊　＊

「き、桐!?」

「どうして今ホニがここにおる!?」

僅かな廊下でも一気に駆け抜けたように息を切らして問う桐の表情は蒼白になっていた。

我はそれに驚いた一方で桐の言ったことを咀嚼する――

「どうして、って?」

「分からぬのか！　いや、わかっておるじゃろう！　前√のホニ！」

「っ！」

気付かれていた事実に我は冷や汗を流した。いつ知られたのだろう、いつに――

そもそも何故桐はそのことを知っているのだろう。記憶を有しているのは我だけ……じゃなかったってこと?

「それは今はいい！　それで何故ここにおる！」

ここにいる理由……？

「わからない……この時はまだ神石にいたはずなのに、何故かユウジさんの家に」

「分からぬのか……そうか――いや、待て！」

桐は何か思いついたのかすぐさま背を向けて。

「前√云々はあとじゃ！　失礼する！」

と、言って駆けていく。我は呼び止めようとして手を伸ばすもその頃には桐は部屋を飛び出していた。

＊　＊

この［環境構成用］に出される電波はユウジのパソコンのものではない！

まさか、まさか他にもおるのか……プレイヤーがっ！

鼻で追うようにその電波の元を辿り、辿りついた先には――

＊　＊

「ここかっ！」

「ひっ……」

毛布を被って画面をみつめていたミユが扉へと振り返った。

「だ、誰じゃ」

「お、お前こそ！」

二人は初めて出会い、そんな言葉を互いに交わす。

――そう確かに何かが変わっていたのだ。この日常はこの世界はこの道化の箱庭は。

様々な要素が躊躇することなく考えることなく混ざり合う――それはリミックス。

第３０２話　√ａ－２　彼女は彼に気付かれない（前書き）

＼大した力もねえのに複雑なもの書けるわけねえだろ／　＼大人しくクソみたいなコメディ書いてろよ／

第３０２話　√ａ－２　彼女は彼に気付かれない

あー、下之ユウジだ。

時は平成、二千と十の年。港こそ無いがそれなりの海水浴の場になる海岸が面し、海から回れ右してを目を向ければ山が壁のようにそびえている。

そんな町の唯一無二の高等学校に通うのが、本業学生遊びは二の次な晴れて藍浜高校の高校生としての春を迎えた俺。

エスカレーター式よろしくに同じくこの町唯一無二の中等学校”藍浜中学”とはまったくもって変わり映えのしない面子のまま進学した上に、クラスメイトもほぼそのまま水平移動だった。

オタク女とオカルト男、学園ヒロインな幼馴染にプラスアルファで俺な”いつものメンバー”は今日も喧騒に塗れるマイクラスこと一年の二組の教室でトークをしている。

「ね、ユウジ」

「ん？」

「そういえばホニちゃんはどうなったの？」

ユキがそんなこと聞いて来て「ふむ気になるぜぇ」「ユウジ、詳しく」と同居しているはずのオタク女と春に肝試しという正気を疑うイベントを企画した当人のマサヒロも血走った目で身を乗り出して俺の答えを待つ。

「ホニさん？　いやー、とりあえず肝試しやった日に来てからは家事を手伝って貰ったりとか、か？」

「そーなんだー」

実際そんなところで、特に変わったことはない。
ホニさんの家事を覚えるスピードが早くて驚いたものだ。姉貴も関心していたように思える。
そうそう、今取り巻く環境を言い忘れていた――
この世界はゲームとリアルのハイブリッドだ。
どういうことかと聞かれると「ゲームのキャラや設定を現実世界に生かし、現実を壊さずにスライドさせた形」と答えるしかない。
そう、両方がある種共存している世界なのだ。
ちなみにゲームは美少女シュミレーションゲームとも言われる、いわゆるギャルゲーの類で、俺は春休みの最中なんとなくに立ちよったゲームショップで吊るされていた中古ソフトを購入した。
その中古ソフトは「Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～」というタイトルがら分かる人が見なくてもカオスで地雷臭が漂っている。
そしてそれは巷では王道を期待したファンからはブーイングの荒らしが巻き起こり、捻くれた方々では「絵だけ」のクソゲーとして騒がしていた。
しかし表紙買いをしがちな俺はそのパッケージに描かれた女の子が可愛くて仕方なく、つい手が伸びレジへと運んでいた。
家に帰って説明書に書かれた要求スペックの高さにげんなりしつつもディスクを入れて起動しようとしたところ――
ゲームは起動することなく、俺のいる世界が変貌をとげた。

画面上にいるはずの可愛らしいヒロインが現実に現れ、現に俺の幼馴染としている光景。

更には妹となっている桐もゲームのヒロインの一人で、他にも大勢ゲームから現れたヒロインが存在するという。

それが春休みの肝試しで出会った――ホニさんもその一人だ。可愛らしい外見と裏腹に幾年も過ごしている「神様」だ。

もちろんその愛くるしさからは想像もつかない時間を過ごして来たのだろう……俺はそれを嘘とは受け取らず真剣に考えて接している。

――彼女はその同じ容姿の女の子と並んでも、全く別の貫禄のようなオーラとようなものを全身に纏っている、とても可愛いのだけど。

そんなホニさんと肝試しの最中出会って、行くあてがないので俺たちの家で預かることにした――はぁ、可愛いなあ。

そしてユキとの双璧をなすほどの人気を誇る学園ヒロインとして「姫城舞」が何故か同じクラスにおり、その洗練されたスタイルの良さと大人びた雰囲気にどうにも現実にはいないであろう華やかさも感じる。

推測の域を出ないが彼女もゲームのヒロインであろう。

今のところは接触する機会はなく、声も聞けずじまいだが……どうにも俺は彼女の視線を感じて仕方ないのだ。

それを嬉しく思ってしまうのは早計で、浮かれたピエロになりかねない。

と、いうことで俺は何もアクションを起こすことはない。今まで通り、ユキこそいるが違和感のないその日常を過ごしている。

＊　＊

どういうことじゃ……！？

「時系列が混在しておるっ」

本来ならばホニとの遭遇は少しのラグさえあれど四月の下旬のはず、それが春休み中。

それも三月の末に肝試しが行われてことになっておる。

他に目立つことはないものの、その一要素だけども大きく変わってしまっておるのじゃ。

それにわしの”ダ・カーポ”にやり直し。確認を取ったが、やはりこちらのヒロインではわしとホニ以外は覚えておらず、ユウジもその件は一切覚えていなかった――［ユキ事故］回避後のシナリオまでのことも、からのことも。

「やはり新しい”プレイヤー”が現れたせいなのじゃろうか」

根拠はないが、あの事象はあまりに異質すぎた。

［この世界］全てに作用しているはずの［人物設定］があの女には作用していなかった。

「わしが妹である設定が消失しておる……」

あの女だけ――いや、下之美優（みゆ）こと下之家次女のみで。

それに警戒心を持ったミユからは不可思議な電波を辿って向かったミユの籠る部屋からは追い出され、締めだされてしまった。

壁を通り抜けることは容易……な、はずじゃが。あの部屋には色

々とそのような能力防止のプロテクトのようなものがかかっておる。
わしの能力が通じない以上は、プレイヤーが何を起動し何が起こっているのかが確認出来ない。

「……様子見じゃな」

四月の二十一日には［ユキ事故死］のイベントが有り、それを抜けると［マイとの遭遇］があるはずじゃ。
もし一つ目のイベントが失敗したら、この変わった世界ではどうなるのか――未知数じゃな。

＊　＊

「ここかっ！」
「ひっ……」

突然に開いた扉に私はつい振り返った。今の驚きの展開後にこんなハートブレイクなことをイタズラでも止めてほしい。
誰なんだろうと、と目を向けると――そこには知らない、女の子が立っている。

「だ、誰じゃ」
「お、お前こそ！」

口ではそう言い、脳内でもそう考えた。しかし私は思いだす――その女の子を、私は妹としていたこと。
下之家の妹で三女だったこと。しかしその”事実”が今では”虚実”へと擦り変わるようになった。

うっすらとした思い出も作られたもの、この女の子は赤の他人。
それらの齟齬がせめぎ合いを始める。

どうなっているの、と。
なぜ私はこの子の正体に気付けなかったの、と。

この子は妹じゃない。

「――何をいってるの？　私は下之桐でユウジおにいちゃんの妹さんだよ？」

記憶のこの子はそれで、でも実際はさっきの喋り方で。

「違う……あなたは私の妹なんかじゃない、それに」

私はその子の言う”ユウ兄の妹”という事実が気になった。そして私は――

「ユウ兄の妹は私一人」

何か抗うように、対するように。私は言った。

「妹……じゃと！？」

その子は表情を似合わなくゆがめる。年不相応な、切羽詰まったような顔。

「そんなこと一度も――」

それを言いかけたその子の前の扉を私は締めた。
……押し寄せる事実に頭がおかしくなりそうで、色々と整理したい。

「（なんなのよ……）」

私は気分を落ちつけるようにして、後ろから聞こえるあの子の声を遮るようにヘッドホンを耳に当てた。
その瞬間に、検索画面の立ちあがったままで動画も音楽も付けてない聞こえるはずのないヘッドホンから――

『こんにちは』

耳元でそんな声が聞こえた。突然のことにヘッドホンを投げて辺りを見渡すも先程までいたあの子もいなくなったか静かで、聞こえたはずの声の主は存在していなかった。
気のせいだと勝手に解釈して、俯いたままヘッドホンを付ける。

『聞こえていますか？』

……ヘッドホンからの声の主だった。しかしそんな機能立ちあげていないはずで――

『下之美優さん』

突然に自分の名前が呼ばれて驚く、何が起こって、なにがどうし

て。

あの子のこととこれらの不可解な事象が混ざり合ってわけがわからなくなってくる。

それでもなぜかヘッドホンを外すことは出来ず、ヘッドホンを通しているにしては透き通る両耳にその声は響き続けてくる。

『あなたのゲームが現実に投影されました――』

私のゲーム？　それってもしかして。

『”はーとふる☆でいずっ！”の世界は無事この現実へと投影されました』

ゲームが現実？

『はい――これよりこの世界は、ゲームとリアルのハイブリッド世界になったのですよ』

わけがわからない。俯いた顔を上げて、画面を覗きこむと。

『申し遅れました……私はあなたを援護するサポートプログラムの”ユミジ”です』

その名前に、目の前にある容姿に私は固まった。

その容姿は――画面の中で踊るようにして存在していて。時折みていた藍浜高校で使っているであろうセーラー制服に表情を隠すほどの前髪を持つ深緑色の長髪。

そして名前は――

第３０３話　√ａ－３　彼女は彼に気付かれない（前書き）

なんか上手くいかないなあ

小説を更新すると評価が下がる。ふしぎ！

第３０３話　√ａ－３　彼女は彼に気付かれない

「笑われればいいと思うよ」

「はい？」

話している最中に突然に立ちあがりそう叫んだのは珍妙な挙動行動でおなじみな他ならむユイだ。

ちなみに今は授業合い間の休み時間。授業が終わると同時にちびちびと俺の机を囲うようにしてメンバーが集まった。

最近メンバー入りを果たした（らしい）姫城さんはどうやらお手洗いなどで来ておらず。ユキとユイと良く分からないオカルト男と俺の四人で集まって話している内のことだった。

「な、なぜに新番組リスペクトなんだよ」

「新番組？　マサヒロ今期のアニメとかなんかか――」

”あけりる”スタッフ――いや”ひがしけ”スタッフの送る渾身のゆる女の子アニメだったかな」

「よつどもえのスタッフでもあったような――」

あー、俺は今期にそのリスペクトしたアニメがあるのか聞いただけなのに。

「アニメ版は下ネタでだいぶ敬遠されちゃったからなあ、下品な方の生徒会ほどふっきれれば良かったぬだけども」

それは原作ファンがブチギレるから止めとけ。てか下品な生徒会アニメとはジャンルがまったくもって違うだろうに。

というか絵が違いすぎ、なんであんな潰れ饅頭みたいな代物に変わらないといけないのかと。

「そういやユイ、生徒会の流れで思い出したけどさ。ユウジとお前生徒会に入ったんだっけ？」

いやいや、その話の流れが強引だろう。なにか未知なる強制力を感じざるを得ないぞ？

「ぬ」

「……頷いたから肯定でいいんだよな？」

「それにしてもユウジとユイが生徒会かあ」

まあということで俺とユイは生徒会に入ったのだった。ちなみに俺にとって、それは。

「不本意だけどな」

「このゴミユウジ、なにが不本意だばかやろう！　あんなに美人に囲まれて不本意とは目が肥え過ぎているようだなあ！」

俺をすげえ見下した名前で呼んだ上に意味不明な程にこめかみを痙攣させてガチギレしているマサヒロ。

「いやいやいや良いもんじゃないって、唯一の男子役員のの俺は弄（いじ）られっぱなしだし」

「弄（もてあそ）ぶ……！？」

「すごいな読み方を変えるだけで意味が大きく変わった気がする」

ザ・日本語マジック。

恍惚の表情を浮かべて妄想世界へダイブし始めたマサヒロは、ど

さくさに紛れて怒りも消えうせたようなので俺は邪魔しない。
するとユキが俺の肩をツンツンとつついて聞いてきた。

「ねーユウジ、生徒会って忙しい？」
「うーん、そうでもないぞ」

ちなみに俺の生徒会に入ったことの経緯はというと――色々と省略すると拉致られた。
姉貴主導による拉致作戦に見事引っかかった俺はロリ会長に謎の質問を受けた後に強制的に入れられた。
その後にユイがその拉致の様子を目撃していて「入れてくださいお姉さま！」といったところ採用されたそうな。
更に生徒会ではある人物との再会を果たしてしまうしさ。
……ユキはなぜそんなことを聞くのか薄々分かっている。生徒会入ることで総合的に見ていつものメンバーでいる時間が少なくなるのだ。
特に生徒会は放課後活動が多く、会長も気まぐれなのでおおよそ毎日有るよう構えておいた方が身のため。
すると必然的にユキと下校できるタイミングを失うの――くっ、やってくれたな生徒会。俺の至福の時をいとも簡単にブレイクしやがって。
そうして妙な悔しさに唇を噛みしめていると。

「……それにしてもユウジも女の子に沢山囲まれるようになったよね」
「不本意だけどな」

ちなみにこの頃からユキが少し俯き気味になったのに、悔しさのあまり気付けていない俺。

「意図してなかったの！？」
「出来ないって！　そもそもそこまで囲まれたいと思わないから」

俺の家は何故か女系家族で、姉一人妹は（義妹と拾った神様とエセロリを含む）四人に母子家庭（だが姉貴がほぼ家事全般）となっており。

日頃から女に囲まれている生活なので正直ウンザリだ。家族の場合は桐はうっさいし、ユイは微妙で、姉貴は荒ぶってるし、ホニさんだけが唯一の良心だ。

そんな個性豊か……悪く言えば濃すぎる面子の中にいるので嫌でこそないが疲労する。

「……ねえ、ユウジ。姫城さんの胸は柔らかかったですか？」
「だーかーらー！　あれは姫城さんに無理やりに……」

俺ははっとなり、ようやくに気付いた。敬語になりつつも遠回りな非難を繰り出すユキの虫の居所は悪いようにして、機嫌がかなりに悪くなっていることに。

学校でも社会的抹殺一秒前の姫城さん執行による逆セクハラや「前向いてなくてごっつんこ、ふいにぶつかった女の子の胸をもんじゃった☆」というマンガ系統にありがちな展開ながらも実際は罪悪感に満ちている。感触を味わうような余裕なんてないわけで、役得を罪悪が上回っている感じだ。

そんな当人と生徒会で鉢合わせされてしまう上に非公式新聞に目を付けられるというのだから悲惨たるものがある。カンベンしてほしい。

確かに事実ではあるのだが、弁解させてほしいところだ。というかユキに嫌われたら俺はショックで数日学校を休む自信がある。

「……男の子だもんね」

じとーっとして見つめるユキさんはきっと立ち絵で見たら卒倒モノの可愛さがあるのだろうけど、いざ顔を合わていると申し訳ない上に変な汗が顔を伝う。

まずいな、これは好感度で言ったらグイグイ下がっている途中だぞ。

「誤解だって……」

「五回も!?」

「なんかその返し前もあった気がするぞっ！」

いつかは覚えていないけども。その後はユキは沈黙してしまった。……ヘコむわあ。そんな最中にマサヒロが質問してくるものだから、どうにもテキトーな返しになる。

「そういえばゴミ虫ユウジ質問だ」

「誰がゾンビだ」

「その返しは殆どの人が分からないんじゃないか？」

「で、なんだよ。はやくしないとお前の頭の中に仕掛けた爆弾が爆発するぞ」

「お許しください！　……まあ、なんだ。生徒会ってどんなことしてんの？　っていう健全な疑問だ」

「け……」

「け？」

「健全な質問をマサヒロがしただと!?　みんな逃げろぉ！　あまりの不自然さにこれは本当に爆発しかねない」

今までマニアック要素だけで通して来たようなキャラのマサヒロがまるで、普通の友人のような質問を繰り出す――まさしくこれは

重要なファクターであり危険因子だ。

「わー（棒）」
「逃げなきゃー」
「ユイもユキも乗るんじゃねえ！　じゃあ”生徒会の女の子スリーサイズって知ってる？”の方が自然ななのか？」
「うぬ」
「かな」
「だろう」
「返しがさっぱりしている上に全て同意見……っ！？」

なんか引き延ばしが過ぎたので、てか面倒になってきたので。まあ答えてやるか。

「まあ再来月辺りの体育祭の計画ね練ったりとか、アンケート集計したりとかさ。そんなところだぞ？」
「やっと疑問の答えが――ちなみにスリーサイズは分かるの？」
「……副会長に限り、な」

ちなみに意図して知っているわけではない、姉貴はなぜか身体測定を終えた当日の家でマジマジと報告してくるのだ。
その報告も一度だけでなく、当日中は何度も駆け寄ったり鼻唄にして俺が近くにいる時”だけ”言ってくるわけで、耳を塞いでもメールで来るので避けようがない。
なぜその自分のスリーサイズを俺に教えることに固執するのかまったくもって理解できないが、覚えてしまっている理由はそんなところである。
と、いうことで二〇一〇年四月現在のスリーサイズを答えることが出来てしまう。

「身内だからか！　やってくれたよこのシスコン野郎」
「うん、なんか否定できない！」

俺は結構に姉貴に甘く、妹軍軍勢にも甘いのだった。桐とか一応数秒はコントに付き合ってやってるし、ホニさんは可愛いから正直その疑問なんて些細なことだけども。

「……ユウジは誰狙い？　ミナ姉、桐ちゃん？」
「なんかすげえ選びたくない」

ちなみに俺の狙いはさりげなくそんな質問をするあなたことユキさんと我が家のお神さま。ことホニさんですよ。

「まさかユウジ……仮想の妹が狙いって言わないよね！？」
「そんなこと――」

言えちゃうんだなあ。事実を知ってると、うん。
俺はつまりゲームのヒロインのことを好いているからなあ。

「――妹は否定する」
「仮想は否定しないんだ！」

ああ、ここで告白したらどうなるだろうか。ユキさん好きです！　って、さあ。
……いやまあ、今の俺にそんな勇気も無ければ、別にこんな風に和気あいあいと話せてればいいんじゃないかとも思えてくる。

「男の子だもんね」
「女の子もいるぜえ！」

ユイがここぞと言わんばかりに手をあげた。

「ユイも一応女だろうに」

「そんなことは些細だぬ。可愛ければアタシはなんでもいい、特に仮想の女の子はカワイイ……」

……ごめん、異を唱えることは出来ないっす。

「「否定はしないな」」

「ユウジとマサヒロがシンクロしてる！？　ああ、皆現実に帰ってきてー」

そんな訳で日々は続く、続く、続く、と。

＊　＊

「久しぶりの出番ね」

「そうだね」

生徒会室に二人、凸凹コンビとも言える身長差が数一〇センチもあるであろう女子生徒が時を同じくして呟いた。

……あれ、今放課後でもなんでもないはずなんですが？

第３０４話　√ａ－４　彼女は彼に気付かれない

俺とユイが今日の学業を終えたと思ったところで放課後には生徒会の活動をするために廊下を歩いていた。

「こんちわーっす」

「アフターヌーゥンっす」

そうしてガラガラと戸を引いて見えるのは既に両肘を机につき組んだ両手の上に顎を乗せて席に着く生徒会役員たちだった。

「……さて、私たちが今度ドラゴンマガジ――」

「いやいや会長、いきなりパクリから始まるのはどうかと」

これじゃ某生徒会作品のコピペになりかねないですって。

「おはよー、シモノにユイ」

「おはよーごじゃいます会長にチサさん」

「こんにちは、二人とも」

待っていたのは会長とチサさんで、何故か生徒会室はブラインドの光だけで暗い様を映していた。

「今日も生徒会あるんですよね？」

無い髭を弄るような素振りをしてから元から高い声を無理して低くするようにしてこほんと咳払いをしてから会長は。

「うむ、今日呼び出したのは他でもないぞよ」
「会長、時折”今日は月曜だから雑談！”とか言って会議がおざなりになることがあるんですけど、今日はそれは！ないですよね？」
「き、君ぃ！　私をなんだと思ってるのかね」
「合法ロリ？」
「今のご時世じゃそれもアウトだよ！　それに……ちっちゃくないよ！」
「会長……（温かな目で）」
「”媚びなくても、そのままでいいんだよ”的な目を止めてよ」

途端にぷんすか怒り始める会長を見て何故か可愛いと思えなかった。
なぜなら会長はホニさんの下位互換だから！　でもチサさんは萌えているようだ。
上位互換のホニさんを見せたらこの人はどんな反応を示すのか気になってきた。

「で、今日の会議はなんですかロリ会長」
「せめて名前を呼んでよ！」
「ロリ」
「そんなＤＱＮネームも真っ青な名前まっぴらごめんだよ」
「はやく会議始めましょうよ、キザクラ会長」
「そんなどこぞの清酒みたいな名字じゃないよ！　葉桜飛鳥だって！」
「ヨザクラ会長」
「カルテット始めちゃうよ！？」

いい加減会長弄りも飽きたので本題を聞きだすことにする。
ちなみにその時に「ちーっす」と福島が「失礼します」とクランナがやってきた。

クランナには”ある出来事”以降、俺は完全に白い目で見られている。まあもちろん一度の謝罪で許して貰おうなんて一切考えてないし、仕方ない。

全員が席に着いた頃に俺は一人欠けていることに気付く。

「今日はあね……副会長は来ないんですか？」

「う、うん。予め言いに来たからね。それでミナは今教師と対談中」

「え、姉貴なんかやらかしたんですか？」

姉貴は基本優等生のはずで先生に呼び出される事がらなど微塵にも浮かばない。

もし姉貴を注意するような輩がいるのなら、それはおそらくイチャモンか理不尽なクレーマーだろう。

「ううん。体育祭の予算上げ交渉に行ってるの……おそらくは十数万円はふんだくってくると思うよ」

姉貴は一体なにをしたらそこまで教師を手玉にとるようなことが出来るのだろうか。少し気になる。

でもおそらくは、そんな姿を俺には姉貴が見せたがらないだろうから俺も無理に見ようとは思わないけども。

「じゃあ俺は帰っていいですか」

「なんでそうなるのよ！　ミナな用事が有るんだから！　せっかく来たんだし参加しなさい」

「ええー、俺も家で引き籠るという大切な――」

「……ごほん、ということで君たちを呼んだのは他――」

「会長ー、議題なんすか」

「尽く話の腰を折るねえ！」

ぷんすかと両腕を上げて怒る会長。会長弄りもいい加減ウンザリしてきたのでこれでストップしておこう。

「今日はね、ふふん――変化こそが人生のスパイスなのよ！」

どっかの本でもそんなどうでもいいこと書かんだろう的な名言風な事を無い胸を張って言い放った。

「で、今日はスパイス談義ですか？　そんなことしたら友人が飛んできますよ」

「ち、違うよ！　って友人――」

『ちゃらっちゃらちゃらーん』

生徒会室に間抜けにも至って普通な着信メロディが響く。俺は携帯の設定が面倒なので一部を除いて着信メロディを別けていない。

「……ああ、俺か」

「シモノ、会議中に携帯が鳴るとは何事か！　世界の方向性を定める人類にとって重大な会議だと言うのに」

「一生徒会はどれほどまでに世界を掌握してるんですか？　……すんません、出ます」

と言って生徒会室を出ようとして呼びとめられ「ここでいいよ」と言われたのでそのまま出る。

「もしもし」

『こんにちはー、ユキだよ』

「おお、ユキか。どした？」

『えーっとね。何か呼ばれた気がし――』

ブツッ。

「……」

「誰からだったの？」

「スパイス好きというか激辛マニアな友人っす」

「ええー……」

飛んでくることはなかったものの、文明の利器を介してその声は届いたという。

ユキさん……なんであなたはそこまで執着しているでせうか。

「ええ、ごほん。ということで今日の議題は――」

溜めるようにして会長は言った。

「体育祭のサプライズイベントを決めよう！」

続くみたいっすね。

第３０５話　√ａ－５　彼女は彼に気付かれない（前書き）

テキトーな感じに

第３０５話　√ａ－５　彼女は彼に気付かれない

聞き間違えでなければ会長は今日の議題に体育祭のサプライズイベントを決めるって……まさか、そんな。
いや、もしかして会長なら有り得ないことも……ない！

「サプライズ……ああ、インド料理に欠かせないご飯と香辛料の融合した――」
「サフランライスじゃないよ。文字数も何もかもが違うよ」
「サプライズ……ああ、授業や職務を放棄して――」
「それはサボタージュだと思うけど……もはや原型ないよね」
「サプライズ……ああ、朝日のことですね」
「それはサンライズだよ。サンセットでもないよ！」
「サプライズ……ああ、いい値段ですね」
「グッドプライスだよね、せめて前に付けるのは止めようよ！」
「サプライズ……ああ、驚きとか不意打ちを――それは違った」
「間違ってないよ！　間違ってないってば！　ねえ間違ってないよ！」
「サランラップ……ああ、料理を包んだりする」
「ものだよねえ！　分かってるよ！　そんなことよりもいつまで程度の低い言葉遊びを続けなくちゃいけないのかな！？」

程度の低いと聞いてムッっとする。

「会長っ！」
「な、なに？」
「この言葉遊びは程度が低いんじゃない……映像化したら凄まじいほどのグダグダ感を生みだす、最低最悪の尺稼ぎだ！」
「余計悪化してるよ！　もはや誰も得しない割に時間だけを無意味

に費やす結果になるよ！」
「っはぁ……会長ぉ、帰って良いですか？」
「散々荒らした上に今は気ダルそうにそんなことを言うんだ！　ひどい、さすがゆとり教育の弊害ね！」

ええと、なぜかユウジがボケに回り始めたのでナレーション代行のナレーターです。
生徒会の長を務める彼女こと葉桜アスカはユウジとコントのような会話を展開していた。
それも通常なら立ち位置が逆の二人が入れ替わっての大乱戦となっているので、なんともカオス。
他の生徒会役員はその公開を呆然と見ていたが、そこですっと福島コナツは手を挙げて言った。

「……いや会長、ゆとり教育以前にユウジは人間性だと思うぜ」
「ふふ、でもシモノは出れないよ……こんなこともあろうかとこの教室のドアにはオートロック機能が仕掛けてあるのだ！　はっはっはっ」

悪役張りの台詞なのに、彼女が言うと何故か可愛らしいのであった。
それを聞いて会長の二十面相を楽しげに傍観していた生徒会書記こと紅チサが顔を上げて。

「アスちゃん、もしかして生徒会予算がゴッソリ減っていたのは――」
「ふえ？　それはお菓子だよ？」

その返答に「さすがアスちゃん、抜け目がないわね！」と意味のわからないところで感心する頭の切れそうな書記。

一方ではユウジとだけは視線を合わせようとせずにしているどこぞの国からやってきた転入生ことオルリス＝クランナはどこにでも売っていそうなメモ帳に流暢な日本語で何かを書き取って行く。

「なるほど、日本の生徒会室にはオートロック機能が常設されているのですね……なるほど」

「クランナもそんなものメモしないでいーから！」

すかさずコナツがツッコミをいれるものの、もはや無法地帯だ。

一時休戦かユウジは席に座りなおしてユイと会話し始め「今期のアニメお勧めはなんかある？」「セイクリとかどう？」「あれか、少し古臭いけど――」

会長と書記はというと「でもアスちゃん、勝手にそんなことしちゃ駄目でしょ？」「で、でも坂本が」「……微妙なネタで返すのね。とにかく、アスちゃん。めっ」

コナツとクランナは「日本は面白い国ですね」「この生徒会が（無意味に）面白いだけだと思うぞ」「そういえばツッコミは”なんでやん”がデフォルトなのですよね？」「いや、それだけじゃあないだろう」

そんな中ではっと気付いた会長は即座に席を立って叫んだ。

「みんな！　議題あげたんだから議論しようよ！」

そのことについてはコナツを筆頭に、

「いやー、アタシは議論よりもヴァ〇ガードの方がやりたいぜ」

「某（それがし）はヴァ〇スやりたいです」

「俺は帰りたい」

「アスちゃんを愛でたい」

「議論と言うのは野次を飛ばすものでよろしいのでしたっけ？」

好き勝手だった。それに業を煮やした会長は某生徒会よりも手際よく議論を開始するべく動いた。

「らちがあかないから、はいシモノ！」

「お、俺ですか？　そうですね」

ユウジは少しの間考えた後に、これは妙案だと言わんばかりドヤ顔で。

「実は体育祭は無かったのだ」

「「サプライズ過ぎるわ！」」

口ぐちに無駄話をしていた生徒会役員が一斉に突っ込んだ。イマイチキャラが立ってないオルリスでさも。

「散々練習した後に当日になって中止……暴動が起きるわね」

書記がこの学校が去年も経験した通りにお祭り気質であることを思い浮かべて冷静に意を述べる。

「それを知っているアタシ達はどんな心境でリハーサルに躍起になる生徒を見るんだろうな……」

「そこまでの意外性はスパイスどころか毒だよ！」

「……流石セクハラ男です」

「セクハラは関係ないだろごめんなさい」

「「流れるような土下座！？」」

ユウジはそれに反応したかと思えば流れるような仕草で無駄に洗練された無駄の無い無駄な動きで正座を決めた後に深々と頭を下げた。

「いえ、あの……そ、そういう過剰反応も嫌いですわっ！」

ちなみに転校生ことオルリスは怒ったり興奮したりすると口癖が「～ですわ」になるようです。

「ユウジかっけーっんすよ、某は感服しました」

「男らしく潔い土下座だな……気に入った！」

「……踏んでいいのかしら」

「会議が進まないじゃないのよ！」

今日もグダグダと続くようです。

＊　＊

少し時間を遡りましょう。そうですね、一か月ほどで良いでしょう。

そこは暗い部屋。パソコンの液晶の灯りだけが燦々と光るだけの暗に満ちた空間。

そんなパソコンを呆然と画面の中の彼女を見つめている者が居た。

「え、えと……あれ？　”アーディ”はパソコンにはデータなんて入ってないはずで、画像だって持ってないはずなのに……あれ？」
『はい、本来なら私はここにいないはずなのです』
そう語るのはおそらくユウジと関わりが有り、助言と助力をした女性。
深い色合いなのに鮮やかな緑色の前髪を隠すほどの長髪と、
「それにその制服……」
『着てみました』
藍浜高校の指定の制服。学年色はユウジと同じ赤色。
『それでお話したいことがあるのです――変わった世界と、あなたのお兄さんである下之ユウジについて』
「ユウ兄（にい）が！？」
その一つの単語に聴き入るようにして画面に顔を近づける。
それはユウジのたった一人の実の妹であり、少し前までは一般人に過ぎなかった少女。
――今では動く世界の中心の一つだ。

第３０６話　√ａ－６　彼女は彼に気付かれない（前書き）

ジャンルを三日間だけ：ファンタジーに変えてみる試験

２－５から２－１２までを修正してみました

第３０６話　√ａ－６　彼女は彼に気付かれない

『下之ユウジはですね……今はプレイヤーになっているのです』
「プ、プレイヤー？　ああ、あのアドバンスソフトの形をした音楽ソフトの」
『プレイやんですか？　えらく懐かしいものを……まあ言うなればゲーム関連では有りますが』
「まさかユウ兄がゲームのプレイヤーなんて言わないよね？」
『なぜ分かったのですか』
「……」

そういえばなんで私画面に話しかけてるんだっけ？
そもそも桐って言う妹だけど妹じゃない子がやってきて帰ったと思ったら、突然にＣＧポリゴンの女性キャラが出てくるんだもん。
あ、ゲームのキャラって言うのは昔ユウ兄と共同で攻略したゲームの主人公のことでそこにユウジの”ユ”と”ジ”私の名前ミユの”ミ”を組み合わせてつくったプレイヤー名の。

「ユミジ……」
『はい、ユミジです』

当時やったゲームは初代プレスタの初期ソフトなだけにポリゴンポリゴンしたゲームキャラクターながらも、様々な種類のキャラから主人公を選べるなかなかに面白いＲＰＧモノのゲームだった気がする。
ユウ兄とコントローラーを取り合いながら攻略していったのが印象深い。

「それでユミジはどうして私のパソコンに？」

『それはですね――ゲームを起動したからですよ？』
「いやいや、プレスタのゲームなんてパソコンに挿入してないから」
挿入したのは私がサイトで見つけて、ダウンロードを諦めてでも買いたかった美少女シュミレーション――
『いえ”はーとふる☆でいずっ”というゲームを起動したからです』
「え」
『それは作られた当初は至って他のディスクと同じものだったのですが、下之ユウジの起動した”Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～”というソフトに入っていた”リミックスプログラム”と同じものが偶然に入っていたのですよ』
「へ？　ユウ兄の起動したソフト？　リミックス？」
『”リミックスプログラム”が発動することで、そのゲーム内容は現実に投影されます』
この画面の中の人はさっきから何を言っているのだろう。
『……分かりにくいですか？』
「はい」
『そうですね……下之ユウジがゲームを動かしたことで、ゲームの中の登場人物が出てきて、今は下之ユウジがハーレムということです』
「？？？」
『……分からないですか。それではこちらの映像を――』
「……え」
パソコンの画面に突然何かのソフトが立ち上がり、少しノイズが入るものの何かの光景が映し出される。
いや、これは――

「私の家だよね」
『はい。そしてこれは桐の部屋です』
「桐……っ！」

そうだ。妹だったはずなのに、妹じゃない。突然桐という女の子を妹と認識できなくなった。
さっきは凄い剣幕でやってきた女の子だった。

「桐って子の他にもいるようだけど……？」
『その方はホニさんです。神様です』
「かみ……？」

神様ってのは比喩表現でなく……いやいやいや。

『ホニさんは下之ユウジの攻略ヒロインの一人です』
「攻略、ヒロイン……もしかしてユウジが起動したのって」
『いわゆるギャルゲーですね』

それを言わないから分からないと思う！

「ユウジがハーレムってのは。お、女の子に囲まれてるってこと？」
『そういうことになります――と言いたいところですが、今の状態では全員揃っていません』
「……何人いるの？」
『Ｒｕｒｉｉｒｏ　Ｄａｙｓ　～キャベツとヤシガニ～だけならば隠しキャラと複数人格を含めて十人でしょうか』
「じゅう！？」

……ユウ兄はそんなに女の子に囲まれてるんだ。

『しかし今度の”は～とふる☆でいずっ”を加えることで、なんと十四人に』
「ええ！？」
『キャラクター指定はすんでいるのですが、今公表することは出来ませんね』
「……それじゃ本当にハーレムじゃないの！」
『はい。それでも同時攻略は基本的には出来ないのですが』
「……」

ユウ兄。女の子に囲まれて嬉しいよね。でもねえ、それでいいの？忘れちゃったの？　あの子のこと、ユウ兄はあんなに――

「ちょっとまって、ユウ兄はゲームを起動したからそんなハーレムになったんだよね？」
『はい、そうですね』
「それなら”は～とふる☆でいずっ”を起動した私が主人公になるべきなんじゃないの」

もしそうなら同性愛になっちゃうけど……だからってユウ兄を好きになる女の子が増えることなんて。

『あなたは女性じゃないですか』
「そうだけど」
『そのゲームの主人公は男性ですから。既にゲームを起動することに成功している下之ユウジは”リミックスプログラム”からしたらリスクが少なく確実性を考えて結果的にプレイヤー経験のある下之ユウジにプレイヤー権が移っただけのことです』
「だけって……」
『そして今までのあなたや下之ユウジの現実と、下之ユウジが起動

したゲームと、あなたの起動したゲームのキャラクターやストーリーが混ざっているのが今の世界なのです。そしてその世界のプレイヤーは下之ユウジ』

本当にユウジがゲームの主人公になったってこと？　現実と二つのゲームが混ざっている？

「ねえ、今私の家族はどうなってるの？」

『下之家に居る方々のことですか？　あなたの居た現実と比べて大きな変化を遂げていますね。父親が巳原隆弘、母親が下之美咲。長男に下之祐二。長女下之美奈、次女下之美優、三女下之桐。義妹巳原柚衣、居候下之ホニ』

「ちょーっとまって」

え、なにこれ。確かにミナ姉から再婚したとは聞いたよ？　それで娘のユイっているのは分かる。でも居候下之ホニって、それに桐が三女に？

『下之家の現在の状況です。ちなみに下之ユウジと交際関係にあるヒロインはいません』

「……そうなんだ」

何故かほっとする私がいた。どうにもユウ兄が女の子に囲まれてるって聞いた途端にむかむかしたから、それがすっと晴れ――は、しないけど。

『下之ユウジの交際関係になる可能性にあるヒロインは――幼馴染に篠文由紀、転校生にオルリス＝クランナ、妹に下之桐ほか数人です』

「えっ」

その事実を聞いて、明確な名前を聞いてしまったことでより衝撃を受ける。そっかギャルゲーのヒロインと付き合えるんだ。なんて羨ましい――ユウ兄が。

『”リセット”発動によって今後の交際対象から外された以前に交際関係を築いたヒロインは――ヤンデレの姫城舞、神様なホニ様です』

「え、交際関係を築いたって、えっ？」

それってユウ兄とその子は付き合ったってこと？　それも二人って……どちらかを捨てたのか、それとも二股――！？

『世界は何度もリセットされていますから。一度の物語で付き合えるのは原則一人です』

「それでも付き合ってたんだ……」

ああ……なんというか、うん。ショックだ。

『おそらくこの世界は約三〇回目になるでしょう』

「え、三〇回目？　何が？」

『あなたも下之ユウジも気づきはしませんが――世界はやり直されてきたのですよ。それもゲームのように』

「……ええー」

ユウ兄が色々女の子を囲っていたのもショックだけど、色々なことを一気に聞かされて意味が分からなくなってきた。

「ユウ兄はゲームの主人公、じゃあ私はなんなの？」

『起動者ではあるのですが……どうなのでしょう。今のところはな

んとも、でも言うなれば現状態では傍観者ですね』
「傍観者？」
『下之ユウジが築く恋物語を何回も眺め続ける、手出しの出来ない第三者』
「こいものがたり……っ」
……それを何度も見せられるって？　何も言えずに。
「なんか……やだな」
『干渉出来ないことはないですが、そうすることで攻略に失敗して繰り返す回数が増える可能性があるだけで無意味です』
私はこれからそれを見続けるって言うの……？
「じゃあ、あなたはなんなのよ。私の好きだったゲームのキャラの顔をしたあなたは――」
『私ですか？　私は主人公をサポートする為のプログラムのようなものです。あなたは主人公ではないですが、これからもサポートさせていただきます――ユミジと申します』
サポート……？
私はさっきからずっと画面と話すようにして独り言を呟いた風に傍からは見えるのだろうか。
それよりもそんなことを聞かされて、私はどうすればいいのだろう。
ユウ兄はこれからどうなるのだろう。私はこれからどうなるのだろう――

第３０７話　√ａ－７　彼女は彼に気付かれない

「サプライズないの？　ねえ！」

必死でそんなことを訴えてくる会長だが、もちろん俺はだんまりを決めた。

というか曲がりなりにも意見は出したのだ。他の生徒会役員はというと「うーん、自分はナイカナー」というようにはぐらかしていたので律儀に答えた自分が馬鹿らしくなった。

「会長は何かないんですか？」

「え、私？　そうねー」

ふっふーんと突然に胸をはる会長を見る限りだと……このフリを待っていたのだろうか。プライド高いというか、なんというか。

「砂城作りなんてどうかしら」

『恐ろしいまでの幼稚ッ！？』

まさかの幼稚園児から小学生低学年まで許されそうな幼すぎる意見が繰り出され生徒会の空気が固まる。

正直それは「どんな反応すれば正解なんだろうか」というような異国迷路の出口に辿りつくことの数倍も難題な突破口だけに困惑の表情を各々（おのの）見せる。

「あの、会長。それは体育祭でやるべきではないのでは？」

「へ？　だって会場はグラウンドじゃない」
「いえ、確かにそうですけど安全対策に軽く撒いて有る程度で幅跳び部の砂場を使わない限りは無理ですよ」
「そこを使うんだよ！」
「片隅じゃないですか！　なんて小規模すぎる競技なんでしょうねえ！」
「うーん、だめかー……じゃあねえ」

生徒会役員達も飽きがき始め、また何か言いだすのかと身構えながらも「げ」と嫌な表情を皆が形作る。

「耐久デスマラソン」

『温度差ッ！？』

さきほどの一見可愛らしい競技とは一転して、さらに転がって三回以上のアクロバティックを迎えた末のそれである。
名前を聞くだけで嫌な予感しかしない。デスとかついているものにロクなものなんてない！

「あのー、会長。それは一体どんな競技なんですか？」
「言葉通りだよ？　――倒れるまで走り続けるんだよ」

まあ予想通りでしたよ。

「秋に体育祭をやらないこの学校の特性から仕方ないですけど初夏真っ盛りに時にそんな競技をやったら死人が出ますって」
「……えっ、言わなかったっけ？　――デスって」

「ガチで殺す気かよ！」
「いやあサプライズだよ、サプライズ」
「そりゃあ驚きはしますよ、会場が沸きはしますよ！」

――もちろんブーイングの嵐で。

「で、誰が出るんですか？　全校生徒が対象ならプロ市民の方々のクレームで学校潰されますよ」
「もちろん男子のみだよ」
「――流石女性優遇社会なだけ有る！　女尊男卑の時代を感じるな」
「いや、それは偏見だと思うよ。ただ単に体力的問題だよ」

この時の発言ではっとして見渡すと女性陣の表情が冷たくなっていた。
チサさんも福島も、そしてクランナの表情を見るに日本語の理解力が凄まじいようで。
なぜかユイの表情も芳しくない。

いやー、女性陣の中って本当にやり辛いですなあ。

「……ユウジ、あとで晒し首な」
「どこに晒す気だよ福島！？」
「ユウ、あなたには失望するしかないわね」
「ええ、と言い過ぎたかもしれません」
「（なぜその問題に食いついてデスマラソンの明確な否定はしないの？）」
「（え、まあ生徒会がその準備に奔走するのは分かりますけどそっちなんですか）」
「（私は自分の手は汚したことはないの。言動でも行動でも、ね）」
「（意味深なこと言わないでください！）」

「ユウジ、アタシは言わせて貰うぞ――女の子は可愛い！」
「それを聞いてどうすりゃいいんだよ！？」
「――そんな時代遅れな思想だからこそ、あのような行動を起こせるのですわね」
「だからセクハラは関係ないだろ誠に申し訳ありませんでした」
そのカオス状態になってきた会長は、面倒になったのか。
「サプライズはなし！　で、うんそこまでこだわって無かったからね。ということで今日の生徒会終了！」
そんなこんなで俺の好感度が落ちただけの生徒会はいつもより短く終わった。
ちなみに俺から姉貴にはメールを打って生徒会が終わった旨を伝えておく。
「じゃあ、ユイ帰るか？」
「うむう」
夕焼けの支配する空の下。俺たちは生徒が完全に消えうせ静まりかえる昇降口を出た。
「ふむ生徒会に入ったもう二週間近くかぬぅ、時が経つのは早いじゃけんのう」
「そうだなー」
俺はユイよりも少し前に入れられてしまったのだけども。それにしてもあの時は驚いた。

――俺が生徒会で強制的に入れられて少しの困惑状態に居たら、その直後にユイがまるで今まで聞いていたと言わんばかりにやってきたからな。

『アタシも入れてくださいー！』

と生徒会室をバンと開けて呆然とする生徒会役員達の中でチさんだけが『許可するわ』と席を立って言ったのは印象的だ。

なぜにチサさんはユイを生徒会に入れたのだろうか。てか席を立ちあがるタイミングが扉を開けるのと同時だったような……って、ああ。

「そういえばユイはなんで生徒会なんか入ったんだ？」

「ん、アタシがか？」

「ああー……」

するとグルグル眼鏡を夕日に反射するようにして少し上を見上げて通学路の途中で立ち止まり、

「面白そうだったからぬ」

「え？」

「ユウジの周りは面白いことばかりが起る。神様連れてきたり、桐やミナ姉との戯れとか、ぬ」

「……」

そんな意図的に起こしたことではないんだがなあ。

「そゆことだよ」

「ふーん」

俺とユイは二人とぼとぼと家へと歩いて帰った。

＊　＊

またまた時を遡ります。なんか時間軸を毎回巻き戻してお送りする辺り、ナレーションの私って時をかけてる少女みたい。

え、そんなことどうでもいい？　はいはい……

舞台はというと、かつてミユの画面で見ていた桐の部屋。

「えと、桐。なにかな？」

「うむ呼んだのは他でもない――お主、前の世界の記憶を残しておるじゃろう」

「え――」

ホニは途端に気まずそうな表情で言葉に詰まる。

「分かっておる。当初はお主のその異常な事態を疑問に思い危険視もしていた。場合によってはー―」

「場合によってって……」

「しかしそれよりも優先すべき異常事態が起こっておる。ホニ、少しは分かるじゃろう？」

そう聞かれて思いつくことと言えば、

「まだ我はユウジさんと出会えてない時期なのに、こうして家にいること？」

「うむ。更には時が遡ったということでもあるのう、わしは勿論”このゲーム”のリセットは作動していない」

「りせっとって言うのはやり直しのことだよね？　というか桐はそ

んなこと出来たの！？」
「……わしはお主の前で色々力を使っておるじゃろうに、それも考えられなかったのか」
「それは無茶だと思うよ」
「ともかく、ただでさえユウジの起動したゲームの混在したこの世界にまた別の要素が紛れこんでおる」
「？？？」
「あ」

するとしまったと言わんばかりに口を抑える桐。ゲームの混在をホニは知らない、何かの暗喩と捉えるなら特に気にすべきことではないが、そのまま取るということは。

「桐、我のいるこの世界はニセモノなの？」

ホニはテレビゲームというものが有り、それは架空の事象をテレビの画面の中で再現する――そのことを知っていた。

「ニセモノではない。あくまでゲームと現実が混ざった世界じゃ――」

そこまで言って止める。

「……桐。何か我に隠してないかな？」

そうして真剣な表情でホニは桐を見つめる。

「ホニよ、後悔はしないか？」
「え」
「それを知ったことで後悔はせぬか？　自分の存在を、自分の正体

を知って」
「我の正体……？」

いきなり何を言い出すのだろうと、普通なら思う。でも桐はいつになく真剣で冗談を言っているようには到底見えなかった。

「……うん、分かった。後悔しないよ、我自身のことを知らないままは気持ちが悪いからね、だから――知りたい」
「うむ――」

そうして桐は口を開いて、明確にはっきりと言った。

「お主はゲームの登場人物なのじゃ」

その時の桐の言った言葉は様々なことをひっくり返し、否定した。
しかしホニさんは。

「もしかして、桐と同じだったりする？」
「……うむ」

そう一言答えた。

第３０８話　√ａ－８　彼女は彼に気付かれない

それはある朝のことだった。過ごし易い、寒くも無く暑すぎもしない春陽気を感じさせるが近づくのは夏の香りで今日の気候は珍しい。

たまにある桐の「突撃☆隣の通い妻」と本人が称して朝っぱらから鍵と言う最後の砦も虚しく侵略しにくこと以外はいたって普通の起床を俺はしている

毎日は流石にしないものの週三は確実に多い時は週五でやってくる桐の寝起きという隙を狙った巧妙で下劣な襲撃を仕掛けてくる。

まず自分の体のどこかの部位に布団では到底ない重さを感じてからその桐の存在の有無を理解する。

手なれた物で、布団を引っぺがすことで現れる桐の首根っこを掴んで部屋の外へと放り出す。日常茶飯事のことだった。

今日もきっとそうだと、思った矢先のことで――

「……ん？」

重さがいつもと違って段違いで、そして布団に入る図体が二倍以上にあった。

増えるワカメでもあるまいし、そのようなマンガ的展開にありがちだけども良く考えたらかなりにキワドイ「薬を飲んだら体が大きくなっちゃった☆」ということではないだろう、まったく某漫画の巨匠は時代を先取りし過ぎだ。

桐でないとしたら誰だろう、と考えてホニさんと思うと笑みがこぼれ、姉貴だと顔面蒼白になる。

ホニさんはここまで大きくない、いやでも姉貴だとしたら少し小

さくないか？

そうして百聞は一見にしかずということで即実行。布団を払い除けると――

『すぅすぅ』

「！？」

……だ、誰だこの人？　少なくとも容姿的には肩幅はなく水色の無地の寝巻きという飾り気のない服装だがどことなく丸みを帯びながらも引き締まった肢体を見るのと胸部に男性にはない膨らみを見つけ女性であることを確信する。

背は高くスラッと、肩口で整えられた黒い髪は思いのほか艶やかでどことなくボーイッシュな印象を受ける。

寝息を立てるその顔は幼くそれでいて非常に整った、美少女の太鼓判を押せるものでもあった。

しかし、だ。

「本当に誰だ？」

見覚えがない。少なくとも知っている限りでこんな美少女は知らん。

新たなヒロインだろうか？　でもどうして俺の家のそれも俺の部屋に？

「……ミユではないよなあ」

妹であるミユのことを思い出す。確かに姉譲りの美少女だがそこまで背が高くは無く、ホニさんより高い程度でここまで長身ではな

い。
それに――いや最近会っていないから分からないが、アイツが短髪にしていたことは無かった気がする。
だから可能性はなくはない。

『ん……』
「お」

寝息が止まり僅かに開く眼の夢の世界半分な表情のままベッドにぺたんと座りこんで起き上がり小法師よろしくに小さな頭を揺らしている。

なにこれ可愛い。

『ふにゃ……？』

あざとい！　だが見惚れてしまう……でも、あれ？　そういえばこんなこと前にも無かったっけ？
あれは確か謎の棺桶登校をしたその日に見た夢の中で――

俺はもしかしてこの子と会っているのか？

『あ、あれ……え、え――』

その子は俺の名前を呼ぶそして、俺はその時にはっとまさかと気づきその名前を呼んだ。

＊　＊

五月十日

体育祭まで一か月ほどまで押し迫ったある日のこと。
正直生徒会なんぞ付き合ってられんわ、と言わんばかりにテストの勉強させたほしい。

入学早々、最初のテストでつまずくなんて幸先が悪すぎる。

ということで休み時間を最大限に使って学校は勉強を進めつつも、ほぼ命令な（一度無断で下校しようとしたらまたしても福島に拉致られた）生徒会活動も自分を褒めたいほどに参加している。
まあ俺は真面目に勉強をしてはいるのだが。クラスの風潮はというとプール開きにワイワイと体育祭にワイワイとテストなんて有って無いようなものに捉えて学校生活を存分に楽しんでいる。
律儀に勉強しているのは”良い”大学に行きたいが為に塾と家庭教師に家庭学習を駆使しつつも成績を上げて入学試験本番に適応すべくと必死に猛勉強をするガリ勉優等生ぐらいで、俺は結構に例外だ。
ユキは十分に良い成績を残し姫城さんは言わずもがな、ユイとマサヒロは嫉妬を通り越して殺意を覚えるほどの普段の行いからは想像しがたい成績の良さなのでへこむとしたらまず考えられるのが俺である。

まあそれでも試験から二週間経たぬ間に体育祭なのでそれほどこの生徒会に余裕はなく、学校側の用意した生徒を考えない行事構成に悪意さえ感じる。
一応不本意とは言え請けてしまった仕事はやらなければと、良く分からない使命感で生徒会室に俺とユイは向かった。

「おーきたきた！　シモノにユイっ」

小さな会長と生徒会のスケジューリングも担う書記のチサさんがパソコンから顔をあげて微笑んで手を振ってお出迎え。

「会長、体操着持ってきてって何かするんですか？」
「シモノ、君は――汚れたくないよね？」
「ええまあ」
「ユウ、あなたは――汚れたくないわよね？」
「……チサさんが言うと何か別の意味に聞こえます」
「なぜ？　誰も間接的な――」
「皆（みな）まで言わないでいいですから」

「ユウくん呼んだ？」

「うわあ！？」
「呼び捨てで呼ぶなんて教育上はあまり良いことではけど……この関係なら仕方ないよね」
「いやいやいや背後から突然現れたと思ったらそんな姉貴の妄想の塊みたいなことをぶつけられても困惑するしないんだが！」
「……困って照れるユウくん可愛い」
「照れてはいないな、うん」

そうして何故か俺が言った皆（ミナ）という言葉がまさかの姉貴レーダーに引っ掛かって生徒会に会長・副会長・書記のスリートップが揃った……まあすげえどうでもいいけど。

「じゃあ、はい」

突然会長が何か掌に握っていた何かを俺に手渡した。それは――

「えっと？」

キラキラと飴部分の光るペロペロキャンディ、いや会長なら似合いそうだけども――

「間違えた、それ”ふし○なアメ”だった」

「現実に有るのかよ！？」

と言って俺の手から奪い返して制服のポケットをまさぐる会長。

「えーと……これはグッ○マのセ○バーでしょ……これはふ○やの明太子で……これがソウ○ジェムで……赤○恋人に……これがＰＦＰで――」

なんですかそのありがちな四時限――四次元ポケットは。というか聞こえる物品が大体規制音が入りそうなものばっかってどうなんだ？

「あった！　これこれ体育祭の鍵」

「体育祭の鍵……体育祭！？」

ちょっとまて俺は一体どれだけ大そうなものを探されて手渡されそうになってるんだ？

体育祭の鍵って……そうか、なるほどな――見えたぞエンディングが！

「じゃないじゃない、体育倉庫の鍵ね」

「ああ、やっぱりそうですか」

見えたエンディングは忘却するとして。

「で、これを？」

「胸で回すと”終わらないアリスのページ”が手に入るわ」

「そんな誰も分からないネタ捻じ込まないでくださいよ……」

「それも冗談で、体育祭の準備の為に色々と催しで使う用具清掃しなきゃいけないから、うん。だからとりあえず着替えて先行ってて？」

「は、はぁ」

と、いうことで体育倉庫に眠る体育祭で使う用具清掃をやることになったわけで――

いやオチとかないよ？　でも続くらしい。

第３０９話　√ａ－９　彼女は彼に気付かれない

と、いうことで学校のグラウンドの端にある倉庫前までやってきた。
服装は制服ではなく半そで短パンの指定体操服で体育で使うスニーカーの運動靴を履いている。
ここに来た理由はと言えば――

『体育祭で使う用具を掃除して欲しいの！　埃っぽくなっているだろうから洗わないとねー』

とまあ、以外にも会長の言う事にしてはもっともなことで。

『とりあえず先に行っててくれる？　後で駆け付けるからさー』

そう言って体育倉庫の鍵を手渡され、何を洗えばいいんですかと聞こうとしたところ。

『大玉とハードルとか障害物関連のものはこの紙に書いておいたからー、あ。ホースと水道の位置はね――』

恐るべき程かゆい所に手の届くような、用意の周到さだ。
それには洗うべきもののリストがやんわりとした会長の字で書かれている。
会長がここまで要約した上にテキパキと話せるだろうか――

『とにかくいってらっしゃーい』

そうして送りだされたのだった。
俺はとりあえず鍵をポケットに入れて、体操着の入った袋を提げながらふと聞いてみる。
「そういやユイは更衣室で着替えるの――」
言いかけて止めた。しかしユイは待ってましたと言わんばかりに、
「ふふ、こんなこともあろうかと！　既に着ているのだー！」
と言ってひざ下まである短パンの生地を指して言った。
「……いつのまに着替えたんだよ。知ってたのか？」
「うんにゃ、なんとなくそんな気がした。諺（ことわざ）で言うだろう？　全知全能は予知など容易」
「初めて聞いたよ、そんな邪気眼の混ざった諺」
「考案、ユイ」
「だろうなー、じゃさ俺は男子トイレでちゃっちゃと着替えるから先行っててくれ」
「アタシも用を足したいところだったんだ、付き合うぞ」
「そうか、なら――とりあえず俺に付いてくるのは止めような？」
「えー……仕方ないから待っててやろう」
すげえ上から目線だけども、頼んでる身だから何も言いようがない。
「じゃあ待たせる」
「おうよ、その間は独り人生ゲームでも――」

何か言っていたことが気になるが俺は着替えることを早急にしたいのでスルーした。

俺には早着替えのスキルがあるので個室に入って僅か十秒足らずで流れるような仕草でベルトを外しながらも上を学ランをキャストオフしワイシャツと学ランがが宙へと浮く、その浮いている間に白い体操服を装着しながら回転してズボンを履き終わる。

落ちてくる制服をシワが付きにくいほどに畳んだ上で袋に押しこんでトイレを出た――この間僅か二十秒。

「待たせた」

「待たされてないぞ！？」

何気ない早さにユイも驚愕を隠せていなかった。

「いや、今日は時間がかかった」

「いやいやいや！　はやいよ？　とりあえず学ラン着てる状態からのそれは早いなんてものじゃないよ？」

「なに興奮してるんだよ。普通だろ、こんなこと」

「ふ、普通なのかあ……？」

ユイが眉を寄せて困惑する様はどこか新鮮だった。いつもの茶化しでなく、これが素だと思うと結構に面白い。

「とりあえず向かうぞー」

「お、おう……」

んー？　と唸るユイをしり目に俺は昇降口へと向かう――

ということで冒頭だ。

目の前には教室の半分ほどの大きさの倉庫がデンと置かれている。外壁をコンクリート固めにして上に波板を載せたあからさまに無機質なものだ。

まあ倉庫に機能性以外を求めても仕方ないので、デザインに頓着する必要はないのだが。目の前にある二メートルはあるところどころ錆びている鉄の扉と一部が欠損した壁を見るにあまり清潔なイメージは起きない。

ギャルゲなどのイベントがここで行われるのが定例だけども……本当にこんな埃っぽいところでイチャつくのはどうなんだろうか。

「閉塞的な場所がいいのだろうか？」

「ん？」

独り言が漏れてしまい。なんでもないなんでもないと手を振った。

「とりあえず開くのかコレ……」

「なんというかクラシックじゃぬう」

クラシックでもモダンでもなく、ボロいと言って差し支えないと思うんだがな。

「……っと鍵は開いたけども、扉は――」

果てしなく固い。アロン〇ルファじゃ強すぎるから木工ボンドで扉間が接着されているような固さで、やっと数ミリ動かせる程度だった。

「アタシもやるぜー」

「おう」

片方の隙間に手をかけて双方逆方向に扉を引いて行く。ぎぎぎという鈍い音と共にその体育倉庫の全容が明らかになった。

「げほっ」

むせかえるほどの埃っぽさが真っ先にやってくる。そして異様な臭さだ、なんというか何十年も汗を染み込ませた体育用具がその異臭を放つのはすこぶる納得がいく。

「えーっと……とりあえず屋外に出すか」

ちなみにこのグラウンドは結構に広いもので、それにもう二つばかりグラウンドも有るのでそれほど倉庫の周りに体育用具を広げても支障がない。

ということで思い切りに倉庫前に引きずり出してくる。

「これがハードルな」

ところどころ土がこびりついたハードルやら、萎んだ風船のような汚れたゴム状の何かが出てきたりする。

陸上で使っているはずのハードルでさえも洗われておらず、がっくりと来る。

すると近くで会長に手渡されたリストを眺めながら仏頂面（目辺りは見えないがおそらくそんな感じ）のユイが居た。

「なあユウジ、アタシも手伝った方が――」

「今はとりあえず使う物を出さなきゃいけないからな、指示係でいいぞ」

「しかしだな――」

どこか申し訳なさそうに言うユイ。なんというかユイはところどころ真面目だからな……

「言わんでいいって、次はなんだっけ？」

「あ、網って書いてあるな」

「よしきた」

「――ありがと、ユウジ」

後ろでにそんな優しい声が聞こえるのだけどもスルーしておく。

俺は大したことはしていないしな。

まああんな成りでも女子だし、力仕事は――棺桶運べるから大丈夫だろうけども、なんとなくな。

「あとは……なんぞこれ」

倉庫のの奥で見つかったのは組みたて式のサッカーゴールだった。

バラバラにされながらもネットを一緒に置いてあるから一応は分かるものの……量が半端なく多い。

「てかＰＫ戦ってなんなんだよ……」

なぜか個人種目に存在していたもので、だとしてもそれ一言を言われても分かるわけがない。

それで使うサッカーゴールが眠っているとのこと。ちなみに他のグラウンドには常設のサッカーゴールがあるものの位置固定でＰＫ戦の時に会場移動をしなければなず、如何せん大きすぎるとのことでこうして倉庫に眠る部サッカーゴールを取り出すことになった。

いかし前述の通りにその部品は多岐に渡り個数もかなりのものだった。そして倉庫の入口から何か近づいてくるのが見えて

「うおっしゃ流石のアタシもやらせてもらうぜい！」

「……まあ、よろしくな」

腕まくりをする仕草をするも半そでなのでめくりようの無いのでまったくもって空振りをユイがしながら俺とサッカーゴールの部品を持ち上げようとしたところで。

「ああ？　なんで扉開いてるんだ？　そんなことしたら冷気が逃げて腐っちまうだろうが」

そんな知らない男子生徒の声が入口辺りから聞こえて、なぜにそんな冷蔵庫みたいなことと思った次の時――

「締めとかないとな、うん」

その時俺はぐいと振りかえり、叫ぶものの。

ガタァン、ガチャ。

扉が閉まり指しこむ明かりが激減し、鍵の締まる音。

あれ、これってまさか――

第３１０話　√ａ－１０　彼女は彼に気付かれない（前書き）

ギャップは大切

第３１０話　√ａ－１０　彼女は彼に気付かれない

それは暗く決して良いとはいえない異臭漂うの空間の中のこと。
それは俗に体育倉庫と呼ばれ、まあ正式名称でもそうなのだろうけども今はどうでもいい。
沢山の体育の授業などで使う器具やら道具やらが無造作に置かれている倉庫だ。

この状況はと言えば、そんな空間に閉じ込められてしまったということ。

更に元々人が入るように作られてはいないので喚起用と僅かに開けられた上部にある数個の小さな四角い穴しか光を取り込む場所がなく、とにかく暗い。
まだ昼間だと言うのに足元は殆ど見えず、眼と鼻の先も極端に視界が悪い。
そんなところに、誰かは知らないクソ野郎が体育倉庫を閉めた上に鍵まで掛けて結果的に俺たちは幽閉された。

そう、俺とユイの二人が閉じ込められてしまったのだった。

「ひっ」

あまり離れていない近くから、そんな声が聞こえる。
それだけ聞けばか弱い女の子が恐怖に声をあげたようなのだが、ユイと考えると思うところはなにもない。
それでもしかし、こんな暗い中だと心配だ。なにせ色々な器具が有るわけで一歩踏み外せば大けがということもないわけではない。

「ユイ、大丈夫か？」

そうどこに居るとも知れないユイへと声をかける。

「う……うぬ」

ユイは俺が居ることに気づけたように、途端に声をいつものトーンに戻して平静を保つようにして言った。

「ユイに俺は見えてるか？」

「ぬ……答えはノウだ」

だろうな。案の定俺にもユイの姿を視認できない。

「閉じ込められたっぽいな」

「そ……そうみたいだぬ」

それで会話は途切れてしまう。いつもならば”まるでパソコンの電源も落とした暗い満喫みたいだおー”とか言ってくるのかとも思ったが、声から気迫を感じず少し震えてるようにも聞こえる。

「ユイ、本当に大丈夫か？」

「だ、だいじょうびゅ……」

尻すぼみの上に噛む。

「もしかしてユイ、こういう暗いとこって――」

「こ、怖くなんかないぞ！　怖くなんて……ひゃっ！？」

「ユ、ユイ？」

すってーんと言うようなサウンドエフェクトが似合いそうな感じに声を出して更には転倒したような音がする。

「ううう……」

まずいな、声だけ聞いてるとまずい。

ユイは声モノマネが上手いこともあるが、地声もそれほど悪いわけじゃない。

活舌も良ければ良く通る。そして今は時折いつもと違って作っている声でなく地声が出ている。

なんというか、あれだ。

声だけ聞いてれば可愛いってヤツだろうか。

「とりあえずユイはそう遠くはないな、今近くに何かあるか分かるか？」

「ぬ……マットみたいなものが」

「よし、そこで待ってろ」

「う、うむ」

手探りで声の方へと這っていく。

「ユイー」

「あ」

ざらざらと埃っぽいマットの感触が手の中にある。

「ユウジ……ここか？」

すると俺の肩にユイの手が触れた。

「ここだ……見えない感動の再会？」
「再会って……はは」
そう冗談を言うとユイはいつもの調子までは行かないけども笑った。
「じゃあ隣を失礼してっと」
「あ、ああ」
そうして俺はマットに座りこんだ。
「……なあユウジ、携帯持ってないか？」
「残念ながら体操着姿だ」
「そりゃアタシもそうで……持ってないけど」
俺とユイは体操服に着替える前に生徒会室へと貴重品一式の入った鞄を置いてきていた。
「それにここには生徒会役員以外来ないだろうしなー」
さっきの野郎はもういないだろうし、このグラウンドは生徒会が用具出しにの為にほぼ使用停止にしている。
声を張り上げてもグラウンドそのものが広く、その端なこともあって聞こえることも誰か通りかかることもない……？
「（いや、それならさっきの野郎はなんだ？）」
そんなグラウンドをなぜ通りかかり、外の物を出した状態でなぜに誰もいないと思って扉を閉めた？

それに鍵も俺が持っているはずで、スペアが有ったとしても使えるのは簡単な申請か事務員の人に許諾を取らなければならない。

「（内側から開けられるんだろうが、暗過ぎて動くのは危ないな）」

ここはあまりにも暗すぎた。いくら人の性質的に眼が慣れて行くとは言うが、あまりにも不確定要素過ぎる。

なにせここは体育倉庫で、転んだ拍子に鋭利な物に刺さらないとも限らない。ボールを踏んで転倒するのも――

「とりあえず会長一味を待つしかないな」

「そ、そうだぬ……」

後で追うと言っている以上はそう時間がかからずに来るだろう。運びだしを初めて三十分近くは経っていることもあるしな。

「……」

「……」

少し沈黙。何か話すべきなのだろうか――その矢先のこと。

ガタッ、ガラガラガラと何かが崩れる音。その音に合わせるかのように、

「やああっ」

ユイが悲鳴をあげた。

「今何かガラガラって、落ちて、もしかして誰か、何か、いるのか……な」

あからさまなまでの怯えをみせるユイ。
そういえばなんだっけか、肝試しの前座と称して怪談やったら口元が引きつって終わらせよう終わらせようという目配せ（眼鏡をしているので推測）をしてきたようなこなかったような。
更に雪崩のようにまた何かが金属音を響かせて倒れる音。

「いやあっ」
「な」

悲鳴と共に俺の腕が何かに巻き付かれ、何が触れてきた――

「ユ、ユイ？」
「ご、ごめんなさい……」

それはもう驚いた。敬語になっている上に思い切りなキャラ崩壊をしているユイは初めてだ。
声もいつもと違ってかなりに”女の子”だった。そして俺の右腕に感じる温もりが、気になって仕方ない。

「とりあえず……離れてはなれた方が」
「だ、だめ！」

もう誰だよコイツ。とは言えない、涙声で更に腕に絡みつくユイの腕と共に押し付けられるのはなんとも柔らかなもの。

「（そういやユイってスタイルいいからな……）」

長身で、出るとこ出て、眼鏡で台無し――を地で行っているユイなこともあって腕に感じるこの感触は。
胸なんでしょうなあ。

「ユイ、マジで大丈夫か？」
「……アタシ、こういうの駄目」
……すーはー。
危ない、声だけならすげえ可愛い。かといって容姿が思い浮かぶのですぐさま冷静にはなるのだが、なんというかギャップもあるんだろうな。
それにしてもこの怖がりようと、まさに怖い物が大の苦手なか弱い女の子のような言動……これがもしかするとユイの素だったりするのだろうか。
「……とりあえず会長達待とうな」
「う、うん」

それにしても遅い。ただでさえ放課後だっていうのにここに幽閉されておごらく体内時計だと一時間ほどが経っている気がする。暗闇の中だと時間の感覚が鈍ってしかたない。
ユイに至っては俺の腕を離さずになんとも形容しがたい柔らかいものが押し付けられてはいるのだが、顔を思い出してセーブしている。
時折「ひっ」「やっ」「ううう」などと声をあげるのだが、そんな似つかわしくない可愛らしい声が脳を刺激するわけで。
それとのこの体育倉庫という空間も……ユイの抱きつきも含めてなんというかモヤモヤした気分になってくる。なるほどな、ギャルゲーの主人公よ。
……それでもあの野郎のせいでこんなことになったんだよな。ユイをこんなにまで怖がらせて、本当に怖い人には死ぬ思いなんだぞ

？　分かってるんだろうか。
なんかイライラしてきた。
いつものユイが崩されて新しい一面が見れて良かったと思う反面、素を引きずり出すほどに怯えさせた野郎が許せない。
少なくとも友人がここまで怖がっているのを面白おかしく見ることなんて俺には出来やしない。

冷静に考えて、会長にはあるまじきあの手際の良過ぎる送り出しと何故か野郎がやってきて扉を閉めた上に鍵まで掛けた。

もしかして、

「……やってくれたな」
「え、何が？」
「会長がさ――」

そう呟いた途端に一瞬にして体育倉庫に光が指しこんだ。

「ドッキリ大成功！」

俺はユイを振りほどいてそう嬉しそうにドッキリ大成功の看板をあげる会長へとやっと見えるよになった体育用具の散らばった地面を踏みしめて、会長へと足早に向かった。

第３１１話　√ａ－１１　彼女は彼に気付かれない

「いやー、ビックリしたぞー」
「……何度言ってんだよ」

俺はそうウンザリしながら答えた。そうコイツは壊れたカセットテープよろしくに何度も何度もそんなことを呟いているのだ。

「それだけユウジの行動に驚き慄（おのの）いたのだよ」
「慄くのかよ……ったく、あたりめーのこと言っただけだろよ」
「そうかもしんないけどさ――アタシは少なくとも嬉しかった」
「突然トーン落とすなよ」
「いやいや、ありがとなユウジ。アタシの為に怒ってくれて」
「自惚れるなよユイ、俺はあの会長の行動で閉じ込められたのに腹立てただけで――」
「……」

少し暗くなった空の下でホースを手に持って親の敵の如くに体育用具に水をぶちまける。
眼鏡越しで分かる程にユイはご機嫌で、俺はと言えばおそらく仏頂面をしていることだろう。
それもこれも、今はばつが悪そうに掃除をしている会長のせいであって――

＊　＊

「いやー、試してみたかったんだよねー”閉鎖的空間に閉じ込めら

れた男女は本当はどうなるのか”って、よくドラマではドラマチックな展開になるけどさ、実際はどうなのか……って」

会長が機嫌よくそんな熱弁をする間に俺は会長の前に経ち憚るように突っ立っている。

そんな俺の表情を見たからだろうか、彼女は喋ることを止めた。

「会長、何個か聞いていいか？」

「な、なに？」

「会長がこの体育倉庫に閉じ込められることを画策したのか？」

「そうだけど……」

「じゃあ男子生徒を寄こして閉めさせたのも、俺とユイを二人先に行かせたのも会長がか？」

「う、うん」

「……」

つまりはそういうことだ。

会長にしては手際の良過ぎる行動指示がまず怪しかった。

更には男子生徒の現れたタイミングを考えてみる——俺がユイは一応女子だからと意地を張って独り作業を続け最後の大物こと組み立て式サッカーゴールのような人手を要すものの時にユイが体育倉庫に入ってきた時だった。それもユイが俺と同じように奥へと入ってからだ。

簡単な申請か事務員の人に許諾を取らないといけない”生徒会が使うと分かっている体育倉庫の鍵”をただの男子生徒が借りることが出来るだろうか、いやないだろう。

ということはそれも含めて会長達が仕組んだことの証明でもあるのだ。

「会長」

「なにかな？」
「体育倉庫の鍵を締めても、内側からは開けられるんですよ――」
「あ」
「――ですが、それはあくまで暗い体育倉庫で辺りを照らすことが出来るようなものがあったらの話ですが」
「っ！　……け、携帯は？　ディスプレイでもカメラのライトでも――」
「そんなもの有りませんよ、俺たちは体育倉庫で……会長達は直ぐに来ると言ったんですよ？」
「――――」
「会長」
「はい」
「そこに座ってください」
「でも洗ったばかりのジャージで、座りこんじゃうと――」
「座れ」
「……はい」

それから俺はというと、イライラをぶつけた。
八つ当たりではなく、しかるべき怒りだと思っている。

「会長、体育倉庫は言う程明るくないんですよ。閉められたら足元さえ何があるかも分からないんですよ」

俺はただ淡々と座り込む会長に向かって、

「そしてそんな暗い空間じゃ下手には動けないんですよ。それに俺たちの居たのは倉庫の奥ですからね」

あくまで平静を装って、

「そんな暗くて閉鎖的なところに閉じ込められることが――本気で怖い人だっているんですよ？」
「っ」
「分かりますよね？　会長だって不安になるでしょう？　それにこの倉庫は生徒会が清掃することで人が来ないグラウンドのその端です。声を出したって来るわけがないんですよ。わかりますよね？」
「……はい」
「皆が笑える冗談やドッキリで、あとで当人が笑えることならいいかもしれませんね――それでも、たった今ユイをあんたのくだらないイタズラで泣かしたんだぞ、会長」
「え」
出てきたユイは眼鏡から少し見えるほどの目元を赤く腫らして、頬には少し涙が伝っていた。
「私、そんなつもりじゃ――」
「そんなつもりじゃなくても、謝れ。会長は冗談半分だとしても――ユイには泣くほどのことなんだ」
「あ、あ……」
ユイはと言えば出てきて、そんな俺が見下ろすように説教を垂れる構図がシュールなのか変なのか立ちつくしていた。
俺は一体どんな表情をしていただろうか。会長が少し怯えている辺り、結構に恐ろしい顔をしていたのかもしれない。
そして会長、
「ご、ごめんなさい……ユイ、シモノ」
立ち上がると深深（ふかぶか）と頭を下げて謝った。

「ユイ」
「え、なに？」
「ユイはいいか？」
「うん、いいけど……」

そう未だに本調子のでないユイの口調のまま答えて、

「こんなこともうしないでくださいね、会長」
「は、はい」

俺は振り返って会長を背にして大きく口を開けた体育倉庫に向かった。

「会長にユイ、ちゃっちゃとやりましょう」
「う、うん」
「うぬ！」

そうして生徒会役員で掃除を始めた。
あとあと会長に聞いたことだが、他の役員は書類整理や体育倉庫以外の用具のしまわれているところに奔走していたらしい。

＊　＊

と、まあそんなことがあった。
この怒りを契機に生徒会役員なんぞ投げ出してしまおうかと思ったが、取り残されるユイと涙目の姉貴の姿が真に浮かんでしまった。
……所詮俺はお人よしで、変なところで責任感を発揮してしまうのかもしれない。

「なあなあ、ユウジ」
「なんだ？」
体育祭で使う小物をブルーシートの上に載せて水をぶっかけていると、後ろからそんな声が聞こえた。
「サウンドオンリー」
「は？」
「声だけのアタシは――」
どうだった？
ちなみに俺はその返答に対し殴った。
ったく、俺の怒りに費やしたエネルギー返せよな……まあでも。
否定はしない。
声だけならな。

各話設定&あらすじ&登場人物について　※ここまで読んでいない方へのネタバレ注意

序章一話以前

悪友ユイとマサヒロによってオタク世界へと連れ込まれてしまった至って平凡な男子高校生下之ユウジ。
女系家族で母親は仕事ながらも姉から溺愛されている、妹もいるが殆ど交流は途絶えてしまっている。
友人にユイとマサヒロがおり、いつもはその三人でオタトークを繰り広げている。

ー下之家ー

「下之ユウジ」単なる一学生で最近オタク趣味に目覚める
「下之ミナ」弟大好きな姉で、長女
「下之ミユ」とある事情により引き籠る次女

ー学校ー

「巳原ユイ」ユウジの悪友、女生徒でオタク気質
「高橋マサヒロ」ユウジの悪友でオタク気質。

「嵩鳥マナカ」委員長

ー生徒会ー

ミナが所属するのみ

序章一話以後

中古のギャルゲーを起動したところ、色々あって主人公になってしまった下之ユウジ。
家族に三女として下之桐が現れ、ユウジとユイ以外の前では「可愛い妹」を演じる黒い妹ポジションで、主人公になったユウジをサポートする。
友人に篠文ユキが幼馴染として存在し、旧ストーカーこと姫城舞、そのほか生徒会の女性陣面々とも交流を持ち、そして神様ことホニ様と出会う。

ー下之家ー

「下之ユウジ」主人公となり姫城舞と時間を共にしていると――
「下之ミナ」序章一話以前に同じ
「下之ミユ」（未登場）

「下之桐」下之家の三女として現れ、ユウジに時折ちょっかいを入れる
「下之ホニ」ユウジの拾われた神様で四月後半から下之家に居候

ー学校ー＜物語の主軸＞

「篠文ユキ」ユウジの幼馴染、学校のアイドル的存在
「姫城マイ」ユウジのクラスメイトでありストーカーかつヤンデレ、学校のアイドル的存在。√1ヒロイン

「巳原ユイ」父親がユウジの母親と再婚しユウジとは友人から義兄

妹の関係になる
「高橋マサヒロ」序章一話以前に同じ

「嵩鳥マナカ」序章一話以前に同じ

ー生徒会ー

「葉桜アスカ」生徒会長代理、実質マスコット会長
「紅チサ」生徒会書記

「福島コナツ」生徒会会計
「オルリス＝クランナ」生徒会雑務
ユウジとユイも在籍

本章二話以後

ホニ様との出会いの後、あることで異（コトナリ）を消し去ることが使命の”アロンツ”と接触してしまう。
そのアロンツに対抗する為に、ユウジはある武器と出会う――
アロンツのメンバーには無口で冷酷な印象が強い雨澄和と接触する。

ー下之家ー＜物語の主軸＞

「下之ユウジ」主人公となり、ホニさんと日常を守るために戦うことになった。
「下之ミナ」序章一話以前に同じ
「下之ミユ」序章一話以前に同じ（未登場）

「下之桐」老婆喋りの妹でユウジの戦闘をサポートする
「下之ホニ」ユウジが拾った神様で特殊な能力を持つも、桐に使うのを止められる。√2ヒロイン

ー学校ー

「篠文ユキ」序章一話以後に同じ
「姫城マイ」序章一話以後に同じ

「巳原ユイ」序章一話以後に同じ
「高橋マサヒロ」序章一話以前に同じ

「嵩鳥マナカ」序章一話以前に同じ（物語に関与しない）

ー生徒会ー（物語には関与しない）

ユウジとユイは在籍しない。

本章α話以後

ホニ様が桐と同じく以前の物語（√）の記憶を有すようになる。
それに気付いた桐は行動を起こそうとするも、あることが起り――
そしてユウジとミユが接触する。
主となるヒロインは存在しない

ー下之家ー＜物語の主軸＞

「下之ユウジ」以前の記憶を失くしたまま
「下之ミナ」序章一話以前に同じ
「下之ミユ」通販の届け物の都合で一年振りに兄と顔を合わせる、そしてミユの購入し起動したゲームが――

「下之桐」今までの物語の記憶を全て有し、ユウジの引き継がれるべき記憶を消している当人。ホニが以前の物語の記憶を持っていることに気付くが――
「下之ホニ」本章二話での記憶を有し、ユウジをサポートすると決めるものの、記憶が消えない為何度もユウジと出会うまでの時を繰り返すことになった。

ー学校ー（物語に関与しない）

ー生徒会ー（物語に関与しない）

本章ａ話以後（ａ－１１現在）

ミユの起動したゲームにより世界がかき混ぜられる。
α話で進んだ日々は巻き戻され四月一日を指す。そしてミユは桐を妹として認識できなくなり、更にホニさんの存在を知る。自分の知っているゲームキャラとも出会って――
本来は四月下旬に拾われるはずのホニ様が四月一日時点で下之家に存在している、そして物語は確実に進んでいる。
ヒロインは今のところ（ａ－１１現在）不明。

ー下之家ー

「下之ユウジ」ミユの起動したゲームの主人公も兼任することにな

るが本人の自覚はない。自分がゲームの主人公になった自覚は存在しユキや姫城の正体も知り得ている。
「下之ミナ」序章一話以前に同じ
「下之ミユ」桐を妹と認識できなくなったユウジの正真正銘の妹。ゲームを起動した途端に世界が変わり、かつて遊んだゲームのキャラクターと対話し今の世界を知ることになる。
「下之桐」ユウジに干渉しようとするホニ様に忠告をしようとするも、それを上回る異常事態が起こりとりあえずはホニとの情報交換をするために同盟らしくものを組む
「下之ホニ」ユウジの拾われた神様で四月後半から下之家に居候

ー学校ー

「篠文ユキ」序章一話以後に同じ
「姫城マイ」序章一話以後に同じ
「巳原ユイ」序章一話以後に同じ
「高橋マサヒロ」序章一話以前に同じ

「嵩鳥マナカ」序章一話以前に同じ

ー生徒会ー＜物語の主軸＞

「葉桜アスカ」序章一話以後に同じ
「紅チサ」序章一話以後に同じ

「福島コナツ」序章一話以後に同じ
「オルリス＝クランナ」序章一話以後に同じ
ユウジとユイも在籍

ネガメ
マサメヒオ
ネアーノ
ミガテ
タシノンエ
レワラト
ナクドコ
トウモイ
ミジナナサオ
ノモルシ

うえからうしろから

第３１２話　√ａ－１２　彼女は彼に気付かれない（前書き）

原作神みぞ面白過ぎて爆死

第３１２話　√ａ－１２　彼女は彼に気付かれない

そういうわけで生徒会だ。
と、いっても生徒会室で議論を交わすわけでも「生徒会役員」とデカデカと書かれた腕章を見せ付けながら校内を闊歩するわけでもなく昨日と同様に体育倉庫を訪れていた。
連日駆りだされてほとほとウンザリしているのだが、それでも俺は今日も体操着に着替えて来てしまっている。

「シモノー、これどこにやればいい？」

反省したのか俺とユイと共に来た会長は「重いー」と眼を＞＜みたいな感じにして律儀に体育用具を運んでいる。
その最中のことだった。

「これはですね――って会長が分からないんですか？」

するとしまったと言わんばかりに口元を引きつらせるものの、平静を装って、

「っ、ふふ、ふ分かっているに決まってるじゃない。ほら試したの、体験版よ」

ちなみに会長は演技ベタなので平静なんて装えているわけがない。
そして案の定訳のわからないことを言い出す始末。困った時の会長の常套句というか、なんというか。

「あの、会長意味が分からないっす」
「私にかかればｚｉｐフォルダも数秒足らずで解凍よ！」

「……それはパソコンの性能のおかげかと、って何の意味があるんですか！？」

といってよくお世話になるパーソナルコンピュータを擁護しておく。

「うう……じゃあｒａｒ．」

「誰も拡張子変えろなんて言ってませんよ……で、分かるんですよね？」

「――ここね」

「あ、そこはハードルが置いてある場所です」

「……と、見せかけてからの」

もしかして会長は面倒のあまり時間稼ぎをしているだけなんじゃないかと思えてくる。

「はぁ」

「ここね！」

「会長、それは屋根ですよ？」

「！？」

ガチで分かっていないようだった。まったく、その自動連結器とジャンパ詮（注※主に鉄道車両の部品で飛ばないものを指す）は屋根から取ってきたものだと言いましたのに。

……とまあ良く分からないノリで行われる体育祭で使用する用具の掃除。

俺がホースを構えてビニールシートに広げられている土のこびりついた用具を洗浄し、会長は洗い終わって渇いた小物を運ぶ。ちなみにユイは渇いたものの中で会長が持てなそうな物を運ぶ。

洗い終わって昨日は外に放置したのもあり、舞いあがった砂がこびりついているものあるが、それはもう仕方ない。まあ以前の状態よりは幾分もマシだろう。

「ありゃ」

「どしたのシモノ」

会長がてくてくと声をあげた俺に駆けよって来る。まあ大したことでは……あるのだけども。

「いや、ホースの水の勢いが突然に落ちまして」

さっきまでと比べると格段に落ちていた。

百円が地面へと落ちる速度と某配管工の地面へのヒップドロップ並みの速度の違いだ。

「シモノ、分かったわ！　その犯人がっ」

「人害なんですかこれは」

もし悪戯だとして、水詮を締めたりしたってことか……しょぼいなあ。

「犯人はこの水よ！　”俺は流されない人間になりたいんだぁ！”と流れる水道水が抵抗した結果なのよ！」

「ファンタジーだけど言ってることが微妙にシビアだな！？　って、会長それはないですって」

「――そしてその水はフェイクよ」

「ああ、そうなんですか……ってええ！？」

「そう、真犯人は――ホースよ！　ホースが”男は黙って水汲みバケツだろうがあ”と――」

「擬人化した癖して自分の存在を全否定してる!?　このホースは何がしたいんだっ」

この水色のホームセンターで数千円で購入可能なゴムホースの内部ではそんなことが……！

「おうい、ユウジに会長遊ぶなら破けたホース取り換えた方がいいんでないかい？」

「「はーい」」

まあ、実際はユイの言った通りなんですけどね。

単なるゴムの劣化で穴空いただけという。少しぐらい楽しんだっていいじゃない、役員（　になっちゃったん）だもの。

「おー。ユウジ、ホース見つけたからこれにしとくか？」

「ああ、ユイ頼めるか？」

俺は一応はちょろちょろと出るホースを構えて垂らすように用具に水をかけていて手が離せない。

「おっけー、取り換えてくるぜー」

そういってホースと何か他の物（どこか掃除機っぽい）も抱えてユイは駆けて行った。

数分後、えらい時間かかるもんだなあと思いながら水流の弱いホースでやっていると水が突然に止まった。

おそらくはユイがホースの取り換えをしてくれたのだろう。

そして後ろからユイの歩いてくるのが分かり、振り返ると――

「ユウジ、ほい」
「え」

持たされたのは太さこそさっきと同じようなものの、妙に固く黒光りしている。ちなみにこれは蛇ではない。
そして先端には掃除機の操作部分のようなノズルが付いていて……
ユイはといえば水道の位置まで戻ってから叫ぶ。

「じゃあ行くぞ」
「おう」

と、答えた瞬間だった。
手元に衝撃が走りブシャアアアアアアというような水音とは言えないようなものが聞こえる。
これって、まさか――

「ぬわっ」

少しでも手を緩めただけでホースが宙を舞う、とっさに掴むことは出来たが辺りに鋭い水を撒き散らす結果になっている。

「にゃああ!?」

すると傍から女の子の声の悲鳴が聞こえた。

「あ、会長サーセン」
「シモノ！　痛いし冷たいし、なんなのよ！」
「いやあ、俺もさっぱりわからんす」
「いやいや！　その持ってるホースから水出てるんだよ!?」

「いやあ」
「その返しはないよ！」

いがみ合っている内でも水はブシャアアアアアアアアと水を吐き出している。
それをなんとか器用にも用具にぶつけると、なんとまあ汚れの落ちること。

これ完全にテレビショッピングで見たことある高圧洗浄機ってヤツだわ。

「ユウジ調子はどうだー」
「大惨事だよ！　なんで普通のホースにしなかったし！」
「いやー、その方が綺麗に落ちると思って」
「少なくとも予告はしてくれー」

心の準備ってのは必要なんだな……

「じゃあ普通のも、渡すわ」

「は」

更にホースを手渡される。
ちなみにさっきまでのホースはトリガーノズル式で、先程渡された高圧洗浄機もトリガーノゾルで特に違和感無く手に取っていた、ストッパーを付けたままだからトリガーノズルのスイッチの意味がないけども。
そして今渡されたのは至って普通なホースで、間抜けにも大きな

口を開けている――

ちなみに高圧洗浄機のストッパーは壊れていて外せない、そしてもう一つのホースには水の来る気配。

辺り一面水浸し。

そしてまさかのサービスシーン。

続きはＣＭの後で。

第３１３話　√ａ－１３　彼女は彼に気付かれない（前書き）

そうえいえば３－１まで修正が終わりましたー、一部追加描写もありますので良かったら読みなおしにどうぞー

第３１３話　√ａ－１３　彼女は彼に気付かれない

二日間のＣＭが明けましたっと。

「うおお」

暴れ馬のように荒れ狂う水勢（大）のホースに未だに止まることを知らない高圧洗浄機。

それぞれの水が用具に当たっては勢いの強大さに汚れを落とすだけでは飽き足らず、そこらかしこに水を飛散させていた。

シャワーと言えば聞こえはいいし、少し暑いから水浴び出来ていいんじゃないかとも思える。

それでもここにいるのが俺以外女だったのが問題だ。

「ユイーっ！」

「なんだよ、ユウジ。そんな叫んで――ぬお」

撒き散らされる水の攻撃を受けての反応だった。

「にゃあああああああ、シモノ！　止めなさいよ」

「元詮締めないと無理っすから！」

「じゃあ早くしめてよ！」

「無茶言わないでくださいよ、これを今放り出したらマズイですって」

てかこんな勢いづいたホース経験したことないぞ。片手で抑えれば普通は制御できるのに今回に至ってはそれでも荒れ狂う。

「ユイィ！　水道止めてこい」
「え、な――うひゃあ」

仕舞いには回転を始めるゴムホースはスプリンクラーのように辺りを水浸しにしていった。
もちろん辺りにいる俺らは水をモロに被り――

「っ！」

ユイの方へとチラと見えたそれは白い地の体操着の下から浮き出る水色の――下着。
体操着は水に濡れたおかげで肌にべったりとくっつき体のラインをこれでもかと言わんばかりに強調する。
まるで土砂降りにやられてグショグショになったかのように、ユイの体操着は下着を透けさせ肌色さえをも見せ付けていた。

「え、え」

ユイは突然にびしょ濡れになった体に気付き、とっさに水色のレースの刺繍がかかった下着を付けている胸辺りを隠した。

「み、みるなぁ！」

その声はいつになく怒っているようにも聞こえるが、少し弱弱しい。
いや、お前の下着なんて興味ねーよ――という言葉が口元まで出るも、顔さえ見なければ学校でも上位に入るスタイルの良さを有しているのだ。
背は高く、胸の膨らみは女子の中では十二分に大きく、体操着で分かるラインではくびれさえあるようにも見える。

そして思いだされるのは体育倉庫での感触と女の子したユイの声。

いかんぞ、これは――

「と、とりあえずは水道止めてきてくれ」

「わ、分かった……ユウジ、今見たのは忘れろよ！」

「分かった分かった！　とにかく行って来いっ」

前を隠して後ろ隠さず、透ける背中も下着のラインがくっきり出ていて……あーもう、言えばいいのか。

そうだよ、エロいよ！　似つかわしくないほどにセクシイで色っぽいよ！

それでも女子でここまで下着姿を見たのってユイが初めてなんだよな……そう考えると、なんかショックだ。

「シモノー！」

眼に映った小さい会長はユイと同じくに水を被って、体操着はもちろんのこと――

「アウトォォォォォォォォォォ！」

「なにが！？　とにかくとーめーてー！」

ちなみに描写しただけでアウトだ。

だって会長、容姿相応なんだもん。それはもちろん平たい胸にはそれを保護するものは必要が――

「ぶえっくしゅん」

ずずずと鼻をすする。まあもちろん水を被っているのは女子勢だ

けではなかった、ということ。
俺も中心だからといって台風の目になることなく水で体中潤いまくっており、連日駆り出しと一年生の序盤なのに濃すぎる展開に疲労もたまっていたことだろう。
ということで翌日俺は風邪をひいた。

五月十二日

昨日からダルくて仕方なく、熱を測ったら三十八度前半もあった。
そう体温を知ってしまうと、どうにも体はその数字に甘えてダルさは三割増となる。
俺はベッドに倒れ込んでしまい――朝に至る。
熱を測っても、下がることはなく少し上がっている気さえする。

「あー、ついてねー」

熱吸収のジェルシートをデコに貼って、布団に入りながらかすれた声で呟く。

「テストも迫ってるってーのに」

そうしてはぁとため息をつく。
全員が既に学校へと向かった朝の十時頃のことだった。

第３１４話　√ａ－１４　彼女は彼に気付かれない（前書き）

ふくせん～

第３１４話　√ａ－１４　彼女は彼に気付かれない

なんとも情けないと渇を××に入れられる夢をみた。
××は気が強くて、毒舌で、それでも俺とミユにはいい話相手になってくれて。
そういえば二人でクラスにいると休み時間を見つけては隣の組のミユが来てたっけ。

懐かしいなあ。

あの頃の俺はそこまで臆病じゃなかった気がする。
でも自分が臆病になって、ミユが引き籠って、××が居なくなったのも――全ては俺のせいなんだ。

＊　＊

「あ……」

懐かしい夢をみていた。
今から数年前のことを懐かしいと思えるほどに俺の周囲の環境は変貌を遂げたのだった。
それまでの俺ならば平穏を望み、とにかく楽しく友人と話せたらいいなと思っていた。
今では平穏は息を潜め、可愛い幼馴染に美人な旧ストーカーに生徒会の面々、家に居座る良く分からない老婆喋りの妹に、見ていると思わずほっこりする神様。

変わってしまったんだなあ。

まったくもってそれは刺激に満ちていて、楽しい日々だ。

それでも少しは平穏に過ぎていた日々を思い出してしまう訳で――

「ユウジさん、起きた？」

ドア越しにそんな声が聞こえ、不意のことに驚いてしまう。

しかしその声は十二分に聴き覚えが有り、そして――

「ホニさんか」

嬉しいものだった。

そういえばこの家にはホニさんがいたのだった――下之家のマスコットかつ可愛い神様だ。

ホニさんが来るまではこの家にいるのは家庭内というのに音信不通の妹ことミユだけだった。

それが今年の三月には母親が再婚しユイが義妹になり、四月にはホニさんを拾った。

桐は以前から下之家の一員ということになっており、下之家の女性比率の向上は留まることは――はどうでもよかった。

言いたいことは一人寂しいはずの家でこうやって人がやってくるのがなんとも感慨深いなあ、と。

「ユウジさん、体調は大丈夫？」

心の底から不安そうに部屋に入り込んで来ると、その小さくて愛らしい顔を近づけて聞いてくる。

「ああ、でも少しまだ熱っぽい」

こうして喋れていることから頭は一応は正常に機能しているようだ。

「ユウジさんが流行り病と聞いて驚いちゃったよ」

ほっと胸を撫で下ろすホニさん。

そうか心配してくれたのか、と嬉しく思う反面。心配させちゃったのか、と申し訳ない気持ちになる。

ホニさんはやっぱり、

「――あのまま屍になるかと」

「ホニさん、一応まだ風邪さ現在進行なんで縁起が――」

優しいけど、天然でグサリと言ってくれる。

病人を追い詰めるようなこと言わんでくださいよ……ホニさんだから許せることだけども。

「じ、じゃあ演技良く――生ける屍？」

「ほんの少しの改善で〝死んでる〟から〝死んだも同然〟にレベルアップ……はあ」

明るくツッコんだ代償に頭が重くなる。ああ、熱がある時点でそれほど喋るべきじゃないなあ。

「ユウジさん！？　ごめんねユウジさん、我はあまり現代のゆとり子じゃないから――」

「同じ視線ては見られないと……」

ホニさんは知らないだけホニさんは知らないだけホニさんは知らないだけ。
知らないことは無知なんじゃない、純粋なんだ！　この間違った知識を植え付けたマスメディアがいけないんだ――！

と、どこぞのモンスターペアレンツさんだよと言わんばかりの強引な責任転嫁を始めるが。全てとは言わないまでも間違ってはいないと思う。
まあ育てる親だったり、傍に居る人たちがそれを制御するものなんだけどもね。でもホニさんは特別だから仕方ない。

……にしても言葉だけで病人を衰弱させるとは。
まあ、そう思考を巡らす余裕が出来るほどには安心してきている訳で。

「いやー、ホニさんが居てくれて良かったよ」
「えええええええええええ！？　な、なんで？」

顔を真っ赤にして後ずさりながらそう驚愕のポーズを見せた。
ええと、何も含みを入れずに言ったのにここまで驚かれるなんて……結構にショックだ。

「……やっぱなんでもない」
「えええええええええええ！？　なんでぇ！」

今度はこっちに凄い勢いで擦りよってきて俺の顔を覗きこむようにしてそう叫ぶ。
ああ、話さないのもダメなのか……とりあえず、話した方がいいのか。

「いやさ、いつも体調崩しても家に一人だったからさ。ホニさんが居てくれるだけで心強いなー、と」

それは本当に思っていたことで、どうにもこんな風邪一つでもベッドに籠るとどうにも不安になる。

そういうのは幼少期の親の育て方や接し方で変わるのだろうが…父親はいないも同然で、母親も仕事仕事に行っては過度に溺愛してくるのでそのギャップに苦しんだ気がする。

姉貴に苦労ばっかかけたなーとも思うが、姉貴の弟の範疇を超えた愛は幼少期からも変わっていない気がする。

なんで俺はそんなに姉貴に好かれてんだろうな。

ミユには「ふ、ふんユウ兄なんて好きでも嫌いでもないんだからね！」とぷいとそっぽを向かれて、言われたことは何度もあったが姉貴は常に「おねーちゃん、ユウくんのこと大好きだよー」と相も変わらず、愛も変わらずだ。

ということもあって偏った愛情しか受けられなかった気もするので、どうにも不安定なのかもしれない。

そんな中でホニさんがいてくれたのが心の底から嬉しかった。

「ユウジさん……」

そしてあんまり二人で居る機会がなかったのと、気恥かしかったのもあって言えなかったこと――今は風邪ひいてるから色んな事が零れちゃうんだと言わんばかりに。

「この家に来てくれてありがとうな、ホニさん」

それを聞いたホニさんはとにかく笑顔で。

「ううん――こちらこそ、我を住まわせてくれてありがとう。我を拾ってくれてありがとう」

そうして俺の起こしている頭をホニさんは優しく抱き締めてくれる。

ホニさんの柔らかさと、いい香りが鼻孔と触角を刺激する。風邪の熱とは違う温かさをホニさんは持っていた。

寂しさも薄れて、少し元気になってきた俺はというと。少し毒づくようになって、

「ったく――こんなに可愛い神様は付き添ってもくれるってのにアイツときたら」

と、今まで口に出してしないことまで言ってしまう。

「アイツ……まいく●そふとの」

「ビル・ゲイツじゃないよ。アイツ……ミユのことな、ミユってのは話してなかっけか、ええとだな――」

俺がそう説明しようとしたところで、ホニさんは、

「ユウジさんの妹さん……だよね？」

「ホニさん知ってたの？」

「うん、ミナさんから聴いたから」

「そっかー、姉貴がねー」

「……それで、あの。妹さんはどんな人だったの？」

少し関心があるのか、そう身を乗り出して聞いてくるホニさん。

俺は興味がないとか思いつつも、時折思い出してしまうことはあ

るわけで。

「そうだな……なんてーか、いつもツンツンしてた」
「ツンツ……ン？」
「俺は兄だってーのに”これだからユウ兄は”ってのが口癖で俺が下手する時には”私がいないと駄目なんだからー”とも言ってたな」

冷たいわけではないんだが、好戦的と言うか挑発的と言うか……小さい頃は可愛かったのになあ。
まあ容姿は姉貴譲りで悪くないどころか、いいんだけどな。

「あー……そうなんだ」
「明るい奴だったよ。いつもクラスで三人で喋ってた」

そう、三人で。

「ユウジさんと妹さんが同じクラス……？」
「ああ、妹だけども産まれたのが十か月違いなだけで学年は同じ。俺が早くに産まれて一応は兄、と。ただまあ同じクラスではなくて隣のクラスからアイツはやってきてたけど」
「それと三人って……ユウジさんに妹さんに、後はユイ？　マサヒロ？」

その二人の中に、もう一人はいるはずがない。
だってそれはまだ二人に出会う前のことなのだから――

「いや、二人とも違うんだ――俺にはさ」

実はこれは誰にも言ってないことで、知っているのはミユと姉貴と母親だけ。

ユイもマサヒロも姫城さんも、桐も心を読まない限りは知らない。
風邪をひいたせいか頭がぼんやりしているからこうも軽々しく口を滑らせてしまったのかしれない。
そう、あまり話すのは憚(はばか)れることで。

「幼馴染がいたんだよ、癖のあるヤツのさ」

本当の幼馴染がいた。
それが俺とミユと××の、旧”いつものメンバー”だったんだ。

第３１５話　√ａ－１５　彼女は彼に気付かれない

どうしてこうなった。

どうもユイだ。榊原でもなく堀江でもなく平沢でも小手川でもなく――巳原ユイだ。

さてさてどこから話そうかなどと悠長に構えている場合は逆に有り過ぎて困るのだが、まあそうだな。

ユウジが風邪で休んだ。

いやまあ心当たりがないわけではない。

おそらくは昨日の――アタシとの裸ニーソプレイの影響だろう。

『ねえよ！』

お、おう。何故か居ないはずのユウジからツッコミが入ったぞ。

どれだけ研ぎ澄ましたらそんな芸当出来るんだ。

なるほどな、裸ニーソは露出度が高すぎる、と。ほうほうそれでは――アタシとのスク水プレイの影響だろう。

『う～ん、声だけなら可！』

あ、ああ。目で見てないのにスク水プレイを認識出来るだと！？

つまりは布擦れ音だけで判断する、と――とんだ変態さんだぜヒャッハー！

『俺の台詞偽造すんじゃねえ！　思ったとしてもそれは言うわけがないだろう』

う、うむ。確かにユウジならば脳内で完結させて独りの時に楽しみそうだな。
つまりはやっぱりヘンタイ様だぜヒャッハー！

『うる――』

もういいから。
まあ昨日の体操着姿で盛大に水を被ってしまったのが直接的原因に他ならないと、思う。
で、つまりはアタシは朝はいつも通りのユウジとミナ姉よりもフラインングしての通学路集合をし、ユウジが来ないことが分かっている。まあアタシは同居してるから分からないわけがない。

更にどうやら会長も休んでいるらしくメル友のチサさん（注、書記）から今日メールが届いていた。
メールによれば「アスちゃんが風邪でｄｆｕｈｎｉ」チサさんのあからさま動揺と会長が風邪で休んだということが理解できる。

つまりは昨日体育用具を清掃していて水を浴びた三人中二人が風邪をひいたことになる。
じゃあワタシは――

「ア、アタシはバカじゃないんだからね！」
「……いきなりツンデレ調に何を告白してんだよユイ」

バカは風邪ひかないってのも風邪にひいていることに気づかないだけで本当はひいてるもん。
そうだ、アタシには免疫力があったんだ。風邪を吹き飛ばすほどの大いなる力っぽいのを持ってたんだよ、うん。

「ユウジは今日休みかぁ」
「巳原さん、ユウジ様は風邪をひいてしまわれたのですか？」
「そーみたい」
「……お見舞いに行ってあげた方がいいかな」
「私もユウジ様が心配です」
「そうだな、きっとユウジも――」

はっ。いやいや良く考えたらダメだろう！
だって一応アタシも住んでるだぞ？　ややこしいことになるからとアタシも理解して過ごしてきていたが――なにせ女のカンは鋭い、見つかるかもしれない。
例えばリビングに備え付けられたテレビに繋いだハードディスクには――沢山の深夜アニメのデータが。
まあそれはユウジも同類みたいなものだから、いいか。
……そう考えるとアタシって見当たる要素無くね？　キャラ濃いようで薄いような、さ。

なんか悔しいな。

「ユイ？」
「巳原さん」
「はーっはっはっは！　実はアタシ、ユウジの家に住んでます（キリッ」

あ。

「……え？」
「……えーと？」

ああ、ノリで暴露しちゃった。ごめんユウジ、一応ごめん。どうにもならないだろうけど。
ああ、何を二人は言うのだろう……ごくり。

「――あはははははは」
「――ふふふふ」
「え」

二人は隠せずに盛大に笑い始めた。

「なんでそんな分かりきった嘘つくのー？」
「そうですよ。ユウジ様のお宅になぜ巳原さんが住む必要があるのですか？」
「そ、それは」
「大丈夫だよ、今日は三人でお見舞い行こ？」
「そうですね、風邪ならば何か喉越しのよいものを――」

……う、うーん。
まあそっか、冗談に聞こえるよね。実際のところ本当なんだけどなあ。

「ユウジはフルーツゼリーとか好きだぞ」
「フルーツゼリー？　ヨーグルトだった気がするけど」
「おかしいですね……公式ユウジ様ガイドブックには喉越し系だとヨーグルトと書かれています」
「そりゃまあ、よく冷蔵庫に入ってるからな”ユウジ”って書いてあるヤツが」
「「……」」
「風呂のあとのゼリーは格別だー、とか言ってホニ様とよくテレビ見て……る」

ここまで話して二人が怪訝そうな顔をしていることに気付く。

「ユイ？　なんでそこまで詳しく知ってるの？」

「巳原さん？　そんなガイドブックに書いていないような最近の出来事をいつ教えてもらったのですか？」

「あ、えーと」

やばいやばいやばいやばいやばい。

これは本当にバレそうなほどにベラベラ言っちゃったぞ。

ああ、ごめんユウジ。

「――ユイ」

「――巳原さん」

「はい」

来るのか？　ってか何が来る？

「盗撮しているなら言って下さいよ、巳原さん」

「本当にアタシは盗撮を……盗撮？」

今とっても変な単語を聞いた気がする。

「そうですよー、私は未だ勇気がないのでユウジ様のお宅を撮影することは出来ませんし……その悪く思っているので学校内で留めているのです。それで巳原さんはどこにそんなカメラを？」

「いや、あのなー、アタシは盗撮じゃなくてだな――」

「もうーユイ、女のカンならそう言ってよー」
「カ、カン？」
「そうだよ、もしかしたらユウジの好きなモノもフルーツゼリーかもしれないね」
「……そ、そうか？」
「じゃあフルーツゼリーとヨーグルト持っててあげようかなー」
「そうですね、それでは放課後参りましょう」

……この人達美人だけど、凄まじいわあ。

ちなみに見舞いに二人の学校ヒロインが訪れ、ユウジは大層喜んだとのこと。
アタシが住んでいるということは終始バレなかった。

……これはこれで傷つくんだが！

＊　＊

一日寝たのとホニさんの癒しと看病で熱もだいぶ下がった。
夜を迎える頃には熱は引き、だいぶ体も楽になった、
夕食も一緒に食べることになり、その光景に姉貴が号泣する反面ユイは眼鏡越しで分かる程に脹れっ面だった。

「なあ桐、なんでユイは機嫌悪いんだ？」
「知らぬわ、どうせギャルゲーの予約に失敗したんじゃろう」
「あー、有り得る」

「にゃあああああああああああああああっ！」

ユイは突然猫っぽく吠えた。
どうしたんだろうか？

番外１９話　番外１－６　ザ・生徒会（前書き）

超絶手抜き回

番外19話　番外1－6　ザ・生徒会

とある日のとある町のとある場所にて。

ねえねえチサ、これでいいの？
ええそうよ、これをこう持って――
ありがとー、チサ。
いいえ、それでは始めましょうか。
うん！　せーのっ、

『アイハマ放送局～』

（テンションアゲアゲなＢＧＭ）

「始まりましたー」
「始まったわね――そう、新たな時代の幕開けよ」
「そんな壮大なものがこのラジオのコールで始まったら世界が震撼するよ、そしてその台詞は生徒会一章一話のオマージュなのか、ただたんに被ったのかわからないよ」
「うん、とっても長いツッコミで読者の大半が途中で飽きること確実ね。まあ冗談はここまでにして――」
「パーソナリティは以下略でいいかな？」
「いいんじゃないかしら」
「このラジオは”神々協会アロンツ”の提供でお送りしまーす」
「ということでサクサク内容が皆無なこれを進めてしまいましょう」

「駄便（だべん）～」

「このコーナーではリスナーから届いた至って普通のお便り、略して”駄便”を紹介するわ」
「なんか私も慣れたもんだと思うよ、その名前」
「愛着が沸いてきたでしょう？　――それでは一通目のお便り、アスちゃん」
「はいはーい、えっとね……これで」

バァンと一枚の葉書を選び出す。

「ペンネーム”匿名あぼん”さんより」
「ペンネームから微妙臭がするわね」

『この小説のアクセス数はなんで爆死したんですかw全盛期の半分しかないオワコンになってますよw』

「えー、このリスナーはスタッフがおいしく頂きました」
「食べたの！？　いや、ないよね。何かの比喩で――」
「いえ、火であぶって」
「カニバリズムだぁー！」
「えーと、このお便りへの答えは――お前がそう思うんならそうなんだろう、お前ん中ではな」
「とりあえずチサ、なんでアスセス数なんて明かさない限り知らないものを知ってるのは問題なんじゃ――」
「え、そんなのパソコンでちょちょいのちょいじゃない」
「ちょちょいのちょいって言うチサが新鮮過ぎる！」
「とりあえず続いて参りましょう。ペンネーム”マイナスの使い魔”さんより」

『√2はなんでコメディ作品だったのにシリアス系バトルに走ったんですか？　上手くも無いのに誰得ですよ。バトルが終わってもつまらないままですし、どうなるんですか？』

「どうなるんですか、って言われてもね……」
「とりあえず締めておきましょう」
「チサ、そんな首ぐらいの太さの何かを締める描写は――」
「いえ、腸を締めてるの」
「さらなる鬼畜！？」
「まあ√2は尺不足も有りましたがスタッフの実力不足が露見してあんな悲惨な出来になったんだと思うわね。伏線も張り方が不十分で、描くべきところをカットしているのもかなりにマイナスだった――ということかもね」
「……う、うん。そうかもしれないね――じゃあ次は私が読むねー、ペンネーム”スパークリング伊藤”さんより」

『この作品で一番胸が大きい人って誰ですか』

「にゃあああああああああああああああああ」
「アスちゃん！？」
「む、胸なんて……胸なんて脂肪の塊なんだよ！　何が夢が詰まってるよ！　重いだけじゃない！」
「……そうよね、実際のところ肩が凝って仕方ないのよ」
「みゃあああああああああああああああああ」
「ちなみにその答えは、私と姫城舞のタイね」
「え、まさかのマイ？　……チサは大きいもんね」
「公式設定によればマイは”高等部一年生というのに豊かな胸を持っている”という説明がある上にバストサイズは９８だそうね」
「……巨乳は垂れるのよ！　ふ、ふん、私のように形の整った胸は美乳なんだよ！」

「……一応私も大きい方だから、心配ね。下着も最近苦しくなってきたし――」
「なあああああああああああああああああああ」
「はい、次のお便り。ペンネーム”アテレコ照れりんこ”さんより」
『マイ編のマイ・ユキがホニ様編と√aだと性格が違わない？』
「だってスタッフだもの――ということで今日の駄便コーナーはここまで」
「……今回も独特な質問ばかりだったね」
「まあここまで付いてくる読者の方が驚きだもの。√2でだいぶ遠心分離させられてしまったから――」
「生クリームの精製法じゃないんだから……」
「最後はゲストの方に登場して頂きましょう。今日のゲストは――え、帰った？」
「え、帰ったって……誰が？」
「急用出来たら帰ってしまったそうよ――ユウジのお父さん」
「まさかの！　生徒会ラジオに呼ぶ意味があったの！？」
「まあそれはスタッフだもの――ということでお別れの時間がやってきました」
「今回もあからさまな更新稼ぎだったね、まだアフターストーリー展開した方が良かったと思うよ」
「だってスタッフ――」
まさかの地の文皆無。

番外２０話　ＢＯＴＳＵ　５－１２からの～、ＥＸ６－２（前書き）

ログ引用～、前回ＢＯＴＳＵも続けて読むといいかもしれません

番外２０話　ＢＯＴＳＵ　５－１２からの～、ＥＸ６－２

今話はユイ視点で進行します。　１日戻って「五月ニ日」

ユイは通学路とは別方向の学校から少し歩いた商店街に存在するゲームショップに立ち寄る為、下校途中にユキやマサヒロと別れていました。
ちなみにユウジのことは完全に忘れていたそうです。なんとも酷い話ですね。
ちなみにゲームショップの名前は「キド」と言って多分これは伏線です。覚えておくと何かと得かもしれません。

「（さてと……何か目ぼしいものは入荷してるかな？）」

ゲームショップ”キド”の自動ドアを通り抜けると、本棚をそのまま使ったかのようなスチール製のラックにビッシリとゲームソフトが並んでいます。
形大きさ厚さハード様々で、ナレーターノワタシニハホトンドツイテイケマセン。このトハート２ってディピリオドーシーピリオド２って何ですか？

そんな中でも新商品のみに関してはガラスケースに入れられ、積極的に販売する方式を採用しており、その中のあるタイトルがユイの目に留まりました。

「（ふむ、”はーとふる☆でいずっ！”か、気になるな……ッ！？）」

そのときユイは驚愕の表情を露わにしていました。
なんだ……とっ！

「見本だけかっ！　人気商品の為現在品切れだとぅ！？」

なんということでしょう、そのタイトルの商品箱には「品切れ」と書かれたポップが張られていたのです。

……ぬかった、私としたことがっ！　予めギャルゲ発売予定表で、幾度新商品をチェックしていたというのに、何故漏れてしまったんだ！

「ぬぅぅ……」

もう密林でも品切れだろうし、あったとしてもボッタクリ詐欺同然な値段に違いない。

「やっちゃったなぁ……アタシ」

そう、また商品棚のタイトルを二度見すると、落ち込んだ様子で店を出ました。

「ショボーン」

なんだよなんだよ！　売ってないなら置いておくなよ！　もう店員はツンデレだなぁ！（？）

……全般的にそうですが、言ってることが良くわかりません、そのうちじっくり調べてみることにします。

「に、しても」

ギャルゲ・マスターのアタシが新商品を逃すとわ。なんでだろな、おかしいな。

「あ……そうか」

最近色々あって……ユウジの家に引っ越してからだっけ、最近はネット巡回する事が少なくなったのは。

「（なんだかんだ慌ただしくなったからか）」

ユウジやマサヒロと話している時間もグッドだったが、今は毎日がエキサイティングだね！

キロリに姫城サーンに神様だからなぁ、良いキャラしてるからのお皆……

それにしてもユウジはけしからん、あんなに女の子に囲まれて本当に羨まし……げふんげふん、けしからん。

これはアタシに五割は分けてもらわないとな！

「……」

ユウジと同じ家に住んでいるというのに、会話が今までより多いどころか少ない傾向にあるのはどういうことなのか！

ユウジ部屋に特攻後タヌキ寝入り作戦に突撃朝の生訪問、カレーパン奪取とスキンシップはしているというのに！

どうも、ユウジと話す機会が減ってしまった気がするぞ？

「……！」

もしかしてアタシ嫌われた？

「っ！」

え、いいや、ななななな、そんなことはナイハズ。スキンシップのつもりなんだ、うん！

……でも最近のユウジは疲れてそうだからな、今日のカレーパン奪取はもしかして堪えた――

「……」

ああ、やっちまった……か？　ああアタシってなんで空気読めないんだろな。というかデフォルトか！

畜生め、アタシのバーカバーカ！　スキンシップし過ぎて嫌われてどうするよ！

ほんとにアタシって奴は――

「謝る……か？」

あ、謝ってもいいけどアタシの柄じゃないなっ！　真面目に言ったはいいものの、ギャグとして捉えられてしまう可能性大だ。

それもこれも日頃の行いの賜物だな……悪い方の。ああ、どうしようか。

「とりあえず……」

しかたなーいから……今日は遅く帰ろう。寄り道で時間潰してさ、その間に謝罪の言葉を考えればいいさ！　うん！

とっくに昼は過ぎたけど、帰ってユウジに会えたらこのカレーパン返すとするか。

ユイ、食べてなかったんですね。それならすぐ返してあげればよかったのに……

「そういえば」

なんでスキンシップにアタシ必死だったんだろうな？　ユウジの気を引きたかったのか？

いくらなんでも、立て続けにこんなことしてなかったさ。それが最近になってユウジが姫城さんやユキに好意をもたれてから急に――

うーん自分自身が謎だ、レイ○ン教授に解いてもらわねば。

……どうやら環境の急激な変化によってユイの内心に変化があったりなかったりするようですね。

＊＊＊

一応これは序章6話に含まれていた一部分です。

なぜ6話が掲載できなかったのかは、ユイを主軸にしたのも要因の一つだったわけです。

第３１６話　√ａ－１６　彼女は彼に気付かれない（前書き）

今日から通常更新再開ですー

第３１６話　√ａ－１６　彼女は彼に気付かれない

それは暗い部屋、唯一の明かりは液晶のディスプレイ。
その画面には変わることなく”あるキャラクター”が映し出されている

「それで、いつまでユミジはいるのよ」

伸びすぎて綺麗ではあるものの痛んだ髪が肩にかかり地面に散っており、着るのは中学校に使っていた赤ジャージで、本来なら高校生を迎えていた女子としてはなんとも色気の欠片がない。
そして今日の昼ご飯はと言えば半年に一回大量に買い込むスティック状のバランス栄養食で、栄養価こそ高いけども味は単調だしパサパサしていて美味しいとは言えない代物だった。
そんなスティックをもさもさと食いながら、自分以外には誰もいない部屋のパソコンの液晶に語りかける――

『私はいつまでもいますよ？』
「いやいや、ギャルゲーやる時に邪魔だから……」

画面の中なら自由奔放に動く３Ｄポリゴンの彼女は、平面だけではなく遠くに歩いて行ったり、端に隠れたりしている。
ギャルゲーなどをやっていればそのウィンドウを覗きこんだりしてもいる。

「……はぁ」
『どうしたのですか？』
「あんたが来てから大変だなって」

おそらくは私の声は人と話すには小さい音量だろう。それでもしっかり聞き取り返答するのだ。
大変――というには、かなりに凄まじいのかもしれない。
なにせ世界は変わってしまったのだから。
私には本来いないはずの妹が現れ、ユウ兄にとっては義妹、私にとっては義姉も出来てしまった。
それにユウ兄は主人公だと言う。
『さきほどの下之ミユと同じような質問をしましょう――それでいつまでミユはいるのですか？』
「っ！　ど、どういう意味？」
『この閉鎖的な空間にいつまで閉じこもるつもりですか？』
「そ、それは……」
分からない。というかもう出なくてもいいんじゃないかと思い始めている。
失った一年は余りにも大きい。
『知っていますよ。あなたがこうして引き籠っているのは――下之ユウジに、あなたと下之ユウジの幼馴染が関連しているのでしょう』
それはあまりにも的確だった。
「……なんで」
『私には人の情報を読みとる力があるのです。桐に”記憶操作”や”透明化”などの力があるように』
「ち、力？　記憶操作……？」

なんだろう、いきなりこの子痛くなった。
それに桐って……あの子がそんな力を持っていると？

『今私が使えるのは人の情報を読みとる”情報読込”とカメラのようなものを飛ばして映像をメディアに映しだす”覗見眼鏡（ノゾキミメガネ）”効果無効”ですね。桐などの使う力を無効化することが出来るのです』
「は、はぁ」
『むっ、信じていないようですね。それでは――知っているのですよ？　あなたが下之ユウジの幼少期のアルバムに使う写真を個人的に提――』
「わぁわぁわぁわぁわぁ――――ッ！」
『それに思っているでしょう？　――本来ならば下之ユウジと話したいと、一緒に過ごしたいと』
「っっっ！」
『でもあなたは会いたくない。なぜなら私は下之ユウジに嫌われてしまっているから』
「……」

ここまで心を見透かされては、恥ずかしさよりも怒りがこみ上げてくる。

「勝手なこと言わないで！　思ってない！　そんなこと全部思ってない！」
『そうですか、それでも私は能力を行使して読みとっただけにすぎませんから――』
「妄想を話されても痛いだけだよっ」
『……カチンと来ました！　それは事実ですっ！　まったく下之ユウジはあんなに飲みこみも早く勇ましかったのに、実の妹がコレだなんて』
「なによ、ユウ兄のこと知った口で」

『知っていますよ？　なにせ何度も下之ユウジとは話してしますから。あと、あの方は面白くて好きです』
「す、好き……！？」
『さきほど侮辱を受けましたがいでしょう。未来あなたがゲームを起動することを理解してましたから調べましたが――下之ユウジはあなたを嫌ってなんかいませんよ』
「え――」
なんで？　だって私はあんな状態のユウ兄にあんなことして追い詰めて――
「嘘言わないで」
『本当です。少なくとも嫌われてはいません』
……本当に？
『無関心では有りますが』
無関心。
「私のことはどうでもいい、と」
『はい。下之ユウジの情報ログを見ると”ゲーム起動まで”の中に検索をかけたところだと、どうやら悩んでいた時期があったようですね』
「ユウ兄……」
『それでもどうすることも出来ずに諦めてしまったようです』
そっかユウ兄はこんな私のことでも少しでも考えてくれてたんだ……
でも、そうだよね。一年は短いようで長いし、私のこともきっと

忘れて――

『――のはずだったのですか、最近の情報ログに面白い発言が残っていますね。お見せしましょう』

すると以前のようにパソコンの画面に映像のウィンドウが現れる。

そこにはユウ兄がいて――

「き、キャプチャしていい？」

『撮ってどうするんですか……』

一年で少し男らしくなってるかも。それに……最後に話した時とは比べ物にならないぐらいに元気だ。

……いや元気じゃなかった。寝込んでる。冷えピタ貼って寝込んでる。そんなユウ兄の部屋に――

「この子は確か……ホニだっけ？」

『そうですそうです。以前下之ユウジと付き合ったことがあるヒロインです』

ガクッと最後の部分を聞いて倒れそうになった。

ユウ兄と、つつつつつつつつ付き合う！？

ユウ兄なんてそんなモテる訳ないし、性格は優柔不断で……誰も好きになる訳ないんだから！

『そして彼女は――過去のことを覚えていて、今も下之ユウジを好きでいます』

「へ」

ちょっとまって、そういえば前に言っていた気がする。

「世界が繰り返されてるんだから記憶はないんじゃないの!?　それなのに、なんでユウ兄を」
『私が力を使ったからです』
「……はぁ？」
『本来ならば封印されるはずの記憶を私が留めたのです』
「よ、余計なことを！」
『と、言われましてもホニが希望したことでしたから――下之ユウジとの日々を忘れないように』

ユウ兄との日々。私は忘れたことはないよ？
その間にも画面の中は動いていて。

『ユウジさん、起きた？』『ホニさんか』『ユウジさん、体調は大丈夫？』『ああ、でも少しまだ熱っぽい――』

画面に映る二人は親しげで、距離が殆どない。
いいなあ。

『――いやー、ホニさんが居てくれて良かったよ』『えええええええええ!?　な、なんで？』
『……やっぱなんでもない』『えええええええええええええ!?　なんでぇ！』

表情豊かに叫ぶこの子は、マンガで見る時々恋する乙女のように顔真っ赤にしている。
ああ。

『いやさ、いつも体調崩しても家に一人だったからさ。ホニさんが居てくれるだけで心強いなー、と』『ユウジさん……』

『この家に来てくれてありがとうな、ホニさん』『ううん――こちらこそ、我を住まわせてくれてありがとう。我を拾ってくれてありがとう』

画面に映るユウ兄に寄り添うホニという子は、可愛らしくてそれでいてユウ兄への好意が滲み出ている。

ああ、本当にこの子はユウ兄のことが――

その事実を知って私は胸を抑える。聞いてはいた、でも信じてはなかった。でも分かってしまう。

『これは一応過去情報ログなので、言うなれば録画です。そしてここからですね』

ここまでは一応何を離しているかが分かる為の前段だったのかもしれない。

『ったく――こんなに可愛い神様は付き添ってもくれるってのにアイツときたら』

アイツ……？　そういえば私のことを誰かに話すとき――

『アイツ……まいく●そふとの』

『ビル・ゲイツじゃないよ。アイツ……ミユのこと』

っ！

私の名前を呼んだ。おかしいな、さっきユミジは諦めたって言ったはずで、こんな私と会った記憶も無くなっているはずなのに。

『……それで、あの。妹さんはどんな方だったの？』

『そうだな……なんてーか、いつもツンツンしてた』

ツンツ……ン？

そっか、そう見られてたんだ。私は不器用で素直になんてなれない。つい照れて思っていないことも口に出してしまう。

きっとそれがユウ兄を困らせていたのだと思う。

『俺は兄だってーのに”これだからユウ兄は”ってのが口癖で俺が下手する時には”私がいないと駄目なんだからー”とも言ってたな』

くす。そんなことも言ってたなあ。

『明るい奴だったよ。いつもクラスで三人で喋ってた』

私は自覚があるほどに明るかった。今の根暗ましっぐらの私ならその差が良く分かる。

『ああ、妹だけども生まれたのが十か月違いなだけで学年は同じ。ただまあ同じクラスではなくて隣のクラスからアイツはやってきてたけど』

私は授業が終わると同時にフライングよろしくに教室を出てユウジと××のいるクラスに向かっていた。

それがいつものことで、二年生の最後までずっとそうだったのに。

『それと三人って……ユウジさんに妹さんに、後はユイ？　マサヒロ』

ホニという子が上げる中には知らない名前がある。ユイは義妹で、マサヒロはユウジの新しい男友達だろう。

それでユウジはもしかして――

『いや、二人とも違うんだ――俺にはさ幼馴染がいたんだよ、癖のあるヤツのさ』
「ユウ兄！」
私は画面に叫んだ。
『録画です。そしてこれで終わりです』
「……」
ユウ兄が××のことを話した……？
どういうことなの？　だってユウ兄は××に――
『……どうやら私も桐も”本当に知られたくないこと”は読みとることが出来ないようです。まったくもって都合がいいですね』
「……」
あれだけ落ち込んで、あれだけ当たり散らした。ユウ兄と私は流石兄妹に私も同じように。
もしミナ姉が居なかったら――
そんな大事な事を、簡単に言うなんて……ユウ兄にとってそれは重い出来事じゃなかったの？
どうして、どうして？
ユウ兄は乗り越えちゃうの……？
「ユウ兄っ！」
『シ、下之ミユ？』

後ろの画面の中でユミジの驚く声が聞こえる。
私は半周して振り返り扉を開けようとする。
――今は昼下がり。今家族どうなっているのか、今ユウ兄やミナ姉が通う学校はどうなってるのか、ネットに依存しない学生たちの間では今どんなものが流行っているのだろうか――世界は今どうなっているのだろうか。

閉ざされた世界に居る私には何も分からない。

たまに点けるテレビの中の風景がもしかしたら嘘なんじゃないか、インターネットで拾う情報が全てガセなんじゃないか。
今聞いたユウ兄と神様の会話が本当かもわからない――信じられない。

でも踏み出せない私は何も分かる権利がない。

「……」

私は廊下の電気の少し弱弱しく射しこむ開けかけた扉を閉める。

『……』

ああ、私には無理だ。
それでユウ兄は遠くに行くんだね。
もしさっきの言葉が本当で、本当に乗り越えられたのなら――もう私は追いつけないよ。

＊　＊

ユウジがいない。
ユウジがいて、マサヒロがいて、ユキがいて。最近なら姫城さんも愛坂もやってきた。
そしてアタシがいる。
その集まる輪の中心にはユウジがいて、アタシが唯一過ごせる輪の中だった。

独りのアタシのやっと見つけた一つの居場所。

授業の間にチタチラと後ろを振り返る。
そこには今日風邪で休んだユウジの机があって、ついつい気になってしまう。
いつもならば板書だけはネチネチとするユウジが必死にシャーペンをノートに走らせている姿がある。

休み時間には皆がわらわらと集まってアニメ的な会話から学校的会話までまでとにかく思い思いに話すのだ。
いつの間にか身に着いたオタク知識をマサヒロと語り合うとユウジが怪訝そうに首を傾げたりしている。
その中で時々話題に付いてくるユキに、ユキとユウジの話題で盛り上がる姫城さん。
そんな休み時間はそれぞれユウジの近くにあるアタシの席に集まるものの、いつものようなテンションはない。

「今日ユウジいねーのか、ツマンネ」
「ユウジ、大丈夫かな？」
「ユウジ様……私に力があればっ！」
「姫城さん、若干中二病っぽくなってますぞ」
「中二……？　私は高校一年生ですよ？」

「いやそうじゃなくてぬ……」
「ユウジ様のお姿が目に入らないだけで……落ちつきません」
「なんか依存症みたいになってるよマイさん……まあ、でも分かるよ私も」

何と言うかぎこちないというのだろうか。
ユウジの存在感は思った以上にあるのだった。ユウジのおかげでこの日々があったのかもしれない。

「じゃ、戻るぜ」
「またねー」
「失礼します」
「おぅー」

休み時間が終わると皆は元の席へと戻る。
見れば皆少し寂しそうだったようにも見える。いつもテキトーそうで影の薄いマサヒロでもあっても少し物足りないと言ったところだろうか。

「（ユウジ、アタシもな）」

いないと……寂しいものだ。うん、これは嘘はつけない。
どうせ明日にはひょっこり出てくるのは分かってる——それでも、な？

「依存症」

ユキが言っていたことを思い出す。
姫城さんがユウジ依存症で、ユキもそうで。もしかしたらアタシも——

「（ユウジ依存症？）」

変な話だ。今までそんなことが殆どなかったからかもしれない。たった一日休んだだけで、なあ。

「うーむ」

アタシはそう唸りながら頭に入らない授業を聞いた。

第３１７話　√ａ－１７　彼女は彼に気付かれない

五月十二日

いつも通りに起床する。鏡に見るアタシは誰にも見せたことのない素顔で、直ぐに渦巻きメガネで隠す。
そのまま服を藍浜高校制定セーラー制服を着込む。鞄に昨日の内にやった自主復習をやるときに使った教科書を押しこんで自分の部屋を出た。
そうしてすっかり元気になったユウジ達と朝食を共にする。

「ユウくんが元気になってくれて良かったぁ」
「皆に心配かけたな、すまん」
「いいんだよユウジさん。風邪が治って良かったね」
「良かった、ユウジ。わしも少々心配していたぞ」
「少々かよ――」

そう言っていつも通りの家族風景が繰り広げられる。
名字も性格も容姿も変えてさえいないが、アタシはこれでもこの家族の一員なのだ。

「（なんだかんだで、治って良かった）」

口に出すのが何故か恥ずかしいアタシは、そう思いつつも白飯をかけこんだ。

先に家を出て、ユキと会う。

「今日はユウジ、来るかな……？」

「来るんじゃないかぬー」

分かりきっていることなのだ、アタシにとっては。

「ユウジと話したいぜ、あのアニメ化決定した――」

マサヒロもユウジが休んでいることで退屈そうだった。

今は二人ともユウジが来るんじゃないかと期待に胸を膨らましていて、その様を見るアタシは。

「（ユウジは本当に中心なんだな）」

と思わざるを得なくて、ユウジと共に暮らすアタシにとっては複雑な思いだった。

少し待っているとユウジが一人やってきた。

ミナ姉は生徒会の都合で先に出ていて、迎えるのはユウジ一人だ。

「復帰したー」

そう通学路で出会うなりユウジはそう言った。

それを聞き、見てた

「ユウジもう熱ないの？」
「あー、すっかり平熱になった」
「本当に……？」
「ちょ」

すると話しかけ心配するユキがユウジの額へと手を伸ばした。
いきなりの行動に呆気に取られるユウジは心なしか頬を赤くしている。

「なななな、ユキ！？　いきなりどうしたっ」
「え、熱を測ろうと……無いみたいだね。良かったー」
「いやいやいやユキ！　あのさ嬉しくないわけじゃないけどさ、道端で――」
「あ――」

その時自分がやったことの行動を改めて考える。
道端でそんな親しい仲かそれ以上の関係でやりそうな行動をした、と。
もちろん理解したユキは一気に顔を赤くして、

「た、他意は無いんだよ！　べ、べつにユウジに触れたい口実とかじゃ――」
「――ユキさん、抜け駆けですか？」
「マ、マイさん！？　違うよ！　そんな意図はなくてっ！」
「だとしても……ずるいです。ユウジ様額をお貸しください」
「いや、なに！？　俺はこうしてピンピンしてるって……え」

次の瞬間には姫城さんが跳びユウジの前へと来ると、流れる仕草でユウジと姫城さん自身の前髪を除けて――額と額をごっつんこ。

「な……」
「ユウジ様、熱はないようです」
少しの間の後、ユウジは飛び退いて顔を更に真っ赤にして額を抑えながら。
「ひ、姫城さん!?　言ったじゃん、熱はないって!」
「いいえ、私自身がユウジ様の熱を感じなければ納得しません!」
その発言は周囲を歩く生徒をにぎわせる。まあ誤解する台詞だよなあ。
それでアタシはというと、
「どしたユイ?　なんか機嫌悪そうだな」
「べっつにー」
マサヒロにそう聞かれ、ぷいとそっぽを向く。
アタシの機嫌が悪くなるわけがない。そんな要因なんてないはずなんだ。
それでも、アタシはどこか虫の居所が悪くて悪くて。
「ア、アタシも――」
「もう止めろって!　ほら、ふざけてないで学校行こ、皆、な?」
「……」
その言い方にアタシはカチンと来るのと少しショックを受ける。
ユキと姫城さんとは対応全然違うし、アタシにいたってはふざけている扱いだし。
……あああああああああああ、なんか良く分からないいいいいいいいいい!

「ユ、ユイ？　なんか頭抱えながら座り込んだけど大丈夫か？」
「なんでマサヒロが心配するんだよ！」
「なぜ怒鳴られたし！？」

つい八当たってしまうアタシは自分で分かる程にどうかしていて、もうなにがなんだが分からない。
ユウジが復帰したのに、気分がよくない。

学校が終わり夕食も終え、風呂も浴びた夜のこと。

「お、おう……」

風呂上がりにしては熱っぽい。
まさかと思うが――

「今頃風邪か……」

ずずずと鼻をすする。風邪をひいても一夜でケロッとしてしまうから、明日は普通に行けるだろうけど。
ユウジと会長まで風邪をひいて、アタシがひかないのも変な話だったが……まさかのタイムラグだとは。

「うー」

だるい。生徒会に駆りだされたのと最近覚えたストレスに疲れが溜まっていたのもあって――もう寝よう。
今日は数学やる日だっけ――ああ、でも睡魔が――

＊　＊

五月十三日

夢を見ていた気がする。

――喧騒に溢れる教室の中、一人で机に座ってつまらなそうに俯いている一人の女子生徒。

誰とも喋らず、思いだした頃に教科書を広げて勉強をする――傍から見ればガリ勉根暗女。

彼女は動かずに放課後が訪れるまで席を動くことさえしない、なぜなら動く必要がないから。

そうして放課後が訪れれば一人で鞄を提げて帰るのだ。その家まで続く道が長く長く感じて――

そこで目が覚めるのだ。

「まだ六時に……もなってな……い」

目覚ましをみて忌々しそうに呟く。なんとも中途半端に起きたものだ。

しかしどうにも寝起きの良くない私はふらりふらりと立ち上がって。

「……トイレ」

眠そうに……てか眠い。いつもなら綺麗さっぱりなのに今日はだ

るい。

まだ風邪の影響でも残ってるのか……んー……？

そうしてアタシは階段を降りて用を足し、二度寝をしようとする。階段の手すりに未だふらふらとして捕まって階段を上がり、自分の部屋を目指す。

「……んー」

その時アタシは気付かなかった。アタシが自分の部屋を通り越していることを。

そして――アタシは扉を開ける。自分の部屋とは少し様子が違うが、眠いからしょうがないと言わんばかりに扉を締めて布団へと入りこんだ。

「（ね……む……い）」

アタシは睡魔に落ちた。

何かが聞こえる。

「本……誰……」

誰かが一人不思議そうに呟くのが聞こえてくる。

「……ミ……ない……あ」

その声には聞き覚えがあって、アタシがよく聞く人物のはずで。

「ん……」
「お」

アタシは目をこする。これは夢の延長線上だろうか、どうにも視界がぼやけている。
目が悪いどころか、結構な視力のあるアタシはただ単に寝起きだから視界が霧がかっている。
それでも目の前には知り得ている人の顔が映る。

「ふにゃ……」

少しずつ意識が覚醒してきて、やっとその人を認識し始める。
アタシは自分の顔をぺたぺたと触る――ない。眼鏡がない、ということは――

以前にもこんなことが有った。
アタシは寝起きが悪いが、前回は違った。アタシが意図的にその人物の布団へと潜り込んでいた。

「あ、あれ……え、え――ユウジ！？」

そしてそのユウジが今、アタシの顔を見たのなら――

「お、おま……まさか！　ユイかっ！？」

アタシの素顔がユウジに知られてしまった。
眼鏡で隠した目元がユウジの目の前に。

「え……いや……本当にユイか？」
「ち、違う！」
「いや！　その声は体育倉庫で出してたユイの声だっ！」
「っ」

そ、そんなこと覚えてて……そんなこと聞いてたのか！

「でも、だって……」
「い」
「い？」
「やあああああああああああああ」

アタシは一心不乱に拳を振り上げた。

「ユイ、まて、おいっ」
「ユイじゃないユイじゃない！　アタシはユイじゃない！　ユイなんかじゃない！」
「だからって殴るなっ」

そ、そうだ。あの時は首を強く殴ったんだっけ！　……そうだ、殴ってまた夢だと言い聞かせればいい。

「え、えーい」
「待てって！」
「あ」

ユウジにアタシの両腕は掴まれた。抜け出そうとするも、思いの

ほかユウジの腕力が強くて叶わない。

「とにかく落ちつけって、ユイ」

「……ダメだよ」

「え？」

「こんな顔見せちゃダメだよぉ！　アタシは眼鏡なんだあああああ」

「意味分かんないこと言ってんじゃねーよ」

ぽかぽかとアタシはユウジの胸を殴る。

そうだ、見せちゃいけない。アタシに見せる顔なんてない、そんなことしたら――

色が無くなっちゃう。

「ううぅ……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん」

「は、あ、え？　いやいや！」

アタシは泣いてしまう。最近でも怖くて怖くて仕方なかった体育倉庫の時以来に泣いた。

失ってしまうのが怖い――アタシは怖いことが大嫌いで、暗闇の怖さも幽霊の怖さも、自分が居なくなってしまうような怖さも大嫌いだ。

「アタシは眼鏡でアタシなんだあああああああああああああ」

個性のない自分が嫌いだ。だからアタシはこの眼鏡をかけてアタシなんだ。

第３１８話　√ａ－１８　彼女は彼に気付かれない

ユイはそのあとすぐさま俺の部屋を抜け出して去って行った。
俺は呆然として、しばらく固まっていたが――

「……ええ？」

色々あり過ぎてわけがわからなくなってきた。
えーと、つまり、なんだ。

「ユイの素顔はアレってことだよな……」

眼鏡をかけない彼女は正直に言って――美女だった。
短めに切った髪と長身のおかげでボーイッシュな印象を受けるスタイル、そこに精悍さと潜む可愛さを兼ね備えたカッコ可愛い系の顔だった。
ユキや姫城さんほどの華やかさはないが、十二分に美人に入るもので、目立ちにくいがしっかりとファンの付きそうな隠れ美人といったところだろうか。

「どうしてあそこまで眼鏡に固執するのか……あ」

そこで思いだしてしまう。その露わになった美女の顔で表情を曇らせあげくには涙を流してまで”俺に見られた”ことを嘆いていた。

「ユイのあんな顔は――」

初めてみるのは……当たり前か。体育倉庫でもあそこまで感情を出していなかったように思える。

本気泣き、だったな。

「……俺のせい？」

いやいやいや、俺はあくまで自室で寝て。普通に明日を迎えると思った矢先、布団には寝ぼけたユイが――っ！

「あの時も――」

四月のあくる日、何故かユイに棺桶登校させられた際。俺はその朝、ユイの素顔を見ていたのだ。

夢だと言われ、そうだと勘違いしたままだった。あの時の記憶はあいまいだが輪郭は――ほぼ一致する。

あの子が、今ユイだと言われれば……確かにそうだと言えるのだ。

「不可思議な行動は俺に夢と思わせる為、か」

棺桶登校というあまりにも奇抜なことを行うことで、ユイを見たという印象を薄れさせた。

それは効果覿面で、まんまと俺は今の今まで信じ込んでいたことになる。

「うーん……」

考え込んで居いたその瞬間に先程出て行ったばかりの俺の部屋の扉が開かれた。

「ユウくん！」

「え」

姉貴は大抵俺の部屋に入る際に、ノックして声をかけるものなのだが……相当に急いでいることが分かる。

「姉貴、どうした？」

「どうしたじゃないでしょ！　今ユウくんのお部屋からユイちゃんの泣き声が聞こえたのっ」

あー……確かに大きかったな。少なくとも俺の部屋周辺からこの階の皆に響くほどの声だった。

だとしてもいつものユイの声でなくて”女の子”したユイの声だったはず……姉貴にはそれをユイだと分かったわけか。

「ユウくん？　ユイちゃんに何かしたの？」

「いや、してないから」

「嘘言っちゃだめだよ？」

「……分からねーんだよ」

「分からない？」

「俺が部屋で寝てて、目を覚ましたらユイが一緒に寝てて――」

「ちょっとまってユウくん……ユイちゃんと添い寝？」

「意図してないからな？」

「とりあえず近いうちにそれはするとして――」

とんでもないことをサラっと予告された気がする。

「そしたらユイは眼鏡をとった姿で寝ぼけてて、俺を見た途端に殴りかかられて、叩かれて、泣かれて、逃げられた」

あ、ありのまま起ったことを話したぜ。

「……ユウくん」

「俺に要因はないと思うん――」

「そういうエッチなことをするなら私も呼びなさい！」

言いかけた俺を遮って言う価値のあるのかと、姉貴はといえばらしくなく顔を真っ赤にしている。

「えええええええええ、いやいやいや！　どこにそんなエッチな要素有ったんだよ！？」

「だって……ユウくん……朝から……したんでしょ？」

この姉貴はいきなり何をいうのやら……正直に答えていいこともないだろうし、白を切っておこう――って考えたら俺は被害者だし。

「いや、何を」

「そ、それは……せ、せ……エッチなのはいいと思います！」

「何いきなりま●ろさんみたいになってんだよ！　てか言ってること逆だし」

ダメだ、姉貴完全に発情状態だ。

「ユウくん、ユイちゃんとセッ――」

「あえて聞かなかったわ！　成人になる前の女性がそんなこと口にするんじゃない！」

「わ、ユウくんお父さんみたい。それでおねえちゃんは妻で――」

そして何故か両手の指を使って何かを数え始めた……それはもう嬉しそうに。

「おいおいおい、何口走ってるか分かるかな？　姉貴？」
「え、ユウくんとの結婚願望からの子作り」
「最後の要素は初めて聞いたわ！　てか全要素を聞きたくなかったわ！　姉貴……てかユイはいいのかよ」
「――それでユウくん、ユイちゃんに何したの？」

突然の切り替えに俺は大混乱だぞ！？　そして、そこまで戻るのかよ！

「なるほど――それは思春期ね」

俺がまた順を言って説明した結果に返された言葉はそんなものだった。

「そんな一言で片づけられても」
「そういえばユイちゃんはあの眼鏡外したことなかったものね……」
「だからって外して悪いこともないんだよな……（実際可愛かったし）」

素直な感想ではあるのだが気恥かしいことも有って誰にも聞きとれないほどの小さな声で呟いた、のだが。

「ユウくんっ、可愛かったの！？」
「地獄耳だなあ、姉貴さん！」

俺に関連することだと高性能集音装置も助走で打ち負かすほどの地獄耳を発揮する姉貴なだけはある。

「茶色ショートの髪に長身なユイちゃん……そっかユウくんはショートが好きなんだね」
「……って言って何故に懐から髪切り鋏（バサミ）を取り出したんだよ！？　いいからっ、姉貴はそれがいいんだから！」

姉貴のショートカットを想像する……に、似合わない訳じゃない！　だが姉貴の、その艶やかな栗色がかった茶髪にはロングヘアーがベストマッチなのだ。

「ユウくん……っ！　嬉しい……私もユイちゃんも平等に愛してくれるんだね」
「愛さねえよ！　……いや、姉弟的な意味では愛すよ？　だからそんなあからさまに落胆するなって……俺だって姉貴はき、嫌いなんかじゃねえよ、って抱きつくなっ！　とにかく、ちょっとユイと話してくるから部屋に戻った方がいいぞ、まだ朝も早いだろ？　な？」

姉貴を俺の部屋から出すことに成功した。さて、と頭をかきながら俺も部屋を出る。

向かう先は勿論のことユイの部屋。十数秒立たぬ間に着いてしまうわけで……いや、俺はどう声をかけるべきだろうか、と悩むこと一時間――じゃ、ダメだから。

「ユイー」

ガタッと部屋の中で物音が聞えたあたり、ユイは寝てはおらず俺が扉前にいることに気付いているようだ。

「あのさー、さっきのことだけどさ」
「……」

返されるのは沈黙で。

「――俺、寝ぼけてて良く分かんないからな？」

ガタ。返事は物音。

「じゃ、まだ早いから寝るわ――」

そう言って背を向けた途端にどたどたどたと部屋を駆ける音。

「ユウジッ！」

「ユイ？」

扉を開けて、いつも通りのグルグル眼鏡に地味な一色の寝間着を着たユイ。

ただ目元が少し赤く腫れていることと、俺の名前を呼んだ声が少し震えていたのが大きく今までは違った。

「ユウジは、あああああ、アタシの素顔を見ただろ！？」

「ん？　見ていいのか？」

「いやいやいや！　さっきアタシは素顔で――」

「だから寝起きで何見たか、何聞いたかも覚えてねえ。なあ？　ユイの素顔ってどんなんだ？」

「え――そうか、そうならいい。素顔は誰にも見せぬ」

「だろうな、今まで俺は一度も見たことないからな」

「っ……そうだぞっ、ならいいっ！　じ、じゃあ寝るぞい」

「って言ってもあと数時間だけどな、おやすみユイ」

「オヤスミだぜいユウジ、あとな――」

突然ユイは俺に近づき耳元で、

「ゴメン、ユウジ」

と、囁いた。ユイは結構に見透かせる奴だから、俺の三文芝居も分かっているのだろう。

――だが俺は見てなどいないのだ。ユイの素顔なんて。

「……はぁ」

さてと……あと二時間ちょっとあるし、寝るかな。

これらの出来事はある朝を迎える少し手前。日がひょっこりと地平線に顔を出す程度には光さす早朝のこと。

そうして俺は目覚ましを確認して再びの眠りについた――ユイの秘密を知りながら。

第３１９話　√ａ－１９　彼女は彼に気付かれない

あの後、至って通常営業になったユイと登校し放課後は訪れる。
風邪で休んだことで穴が空いたのを埋めるように必死で生徒会活動を行ったところ――

「おお……」

お、終わった。

「終わったーっ！」
「終わったぬぅ」

なんとか体育倉庫の体育祭で使用する用具の清掃が終わった。
妙に数が多くメンテナンスが行き届いていないので、途中ネジ止めや金槌（かなづち）で打って矯正もした。

「じゃあ、シモノッ、ユイッ！　生徒会室に戻って作業よっ……ダルいけどかんばる」

少し前まで会長の顔をしていたのに最後の言葉台無し。
用具を片付け終わって、倉庫の鍵を締め、そうしてグラウンドを後にしている最中にふと疑問に思って聞いてみた。

「会長、体育祭に積極的ですね？　会長にとって体育祭って何かあるんですか？」
「ふっふー、それはねぇー」
「それは？」
「――学業に勤（いそ）しむ生徒たちの気持ちの良いガス抜きになるからよ

！」
「お、おう」
「え、今私すごいいいこと言ったのに」
「すいません、あまりにも返答がまともだったもので。いやー誤解していましたよ――チサさんにご褒美がもらえるとかそんなのじゃなくて」
「う」
「会長？」
「さ、さ行こう！」

ちなみに俺は理解した。やっぱり裏があったなあ、と……ある意味安心した。

「ええとねー、用具点検と掃除が終わったから……チサ、パイプイスとテントはどうだった？」
「両方共に問題はなかったわ。パイプイスは来賓用と来客用合わせて百脚用意したのだけど……足りるわよね」
「前回だと九十脚でも余ったんですよね、アスカ会長はどう思います？」
「大は小をかねる！　十数人は揺れ動くから百のままでいいんじゃないかな――」

ちなみに最近の生徒会はこんな感じ。
未だ経験不足な俺たちと違って、一応は経験をしている二年生陣で話が進められている。
会長、チサさん、姉貴がそれぞれ報告・意見などを繰り出して会議が行われていた。

一年の四人は「来年に備えて見ておきなさい」とチサさんに言われて、こうして耳を傾けている。
　すると隣にいるグルグル眼鏡のユイが顔を近づけ小声で囁いた。

「（ユウジ）」
「（っ！　な、なんだ？）」
「（どしたんだよ、あからまさに動揺して）」
「（や、なんでもないっ）」

　いきなり近づかれたもんだから、ユイの素顔を思いだして少しドキリとしてしまったのは言えない。

「（で、どうした？）」
「（いやさ、体育祭の裏側ではこんなことしてんだな、と）」
「（そうだな。こういうのに関わったのは初めてだから新鮮だ）」
「（うぬ、アタシもだ。それでいて結構に楽しいのう）」
「（まー、自堕落に過ごすよりは充実してるわな）」

　そういえば今まではそうだった。小学校でも中学校でも純粋にのめり込むものがなくて、いつも帰宅部だった。
　半強制とはいえ生徒会に入れられたことで……俺も少し変われるといいのだが。

「――じゃあ、シモノが実況ね」
「え？」
「体育祭、のだよ！」
「会長！　そういうの俺には向いてないですって！」
「ユウくんの声……お姉ちゃ――副会長、好きだよ？」
「言いなおしても特に意味ねえからな！？」

「ユウ……期待しているわ」

わー、変なプレッシャーがかけられたー

＊　＊

そうして時は流れ、なんとか勉強会を開く許しを貰い。テストを迎えた。

結果は……なんというか無難に良かった。一年生最初のテストとしたら上出来だろうと勝手に解釈。

それで体育祭が訪れるのだが――それはまたいつか話すとして、こうして時は流れて。

七月二十日

今日は一学期の終業日だ。

五月のある出来事も頭の隅にはあれど、知った直後ほど意識することはなくなった。

それでもあの時みた顔はどうにも忘れられないわけで――

期末テストもなんとか超えて、補習を受けることなく夏休みを迎えられる。

母親には「高校生が学生気分なのは実際一年の時だけだよねー」と言っていたのを思い出す。なんだかんだで受験が迫ったりして二年・三年は忙しくなるのだろう。

こうして終業式で、長ったらしい校長の話を聞きながら歓喜している最中だ。

「（夏だぁー）」

蒸し器のような体育館の外では、けたたましくセミが鳴いている。

夏休みの始まり。

＊　＊

「どういうことなのじゃ……」

わしは今の今までユウジの動向を観察していて大きな疑問が上がる。

「とっくにヒロインの√に入っていなければおかしいはずじゃというのに……そのような噂も情報も一切汲み取れん」

何かしらイベントがあるはずなのじゃ。そうだというのに、今夏を迎えようとしているのに至って誰も相手のいないユウジ。

「……しかしバッドエンドならば、もう終わっているはずじゃな」

そうだというのに物語は続いている。世界はやり直されていない。

「あの稼働したもう一つのソフトも不可解じゃ」

稼働したというゲームとしての個性が全くもって見えない。わし

はそのゲームの攻略情報を持っていない上に、一体どんなイベントがあるかも分からない。
ここまで過ごしてきて、それまでのイベントは決まってルリキャベのもの……

「どうなっておるのじゃ……？」

もう少し様子を見てからホニと話してみるかの。
やはりこの事態は異常過ぎる。

この世界に一体どんなことが起っておるのじゃ？

第３２０話　√ａ－２０　彼女は彼に気付かれない

七月二三日

「海だ……」

わいわいがやがやと騒がしく人々が、夏だからと男女問わず肌の露出を増やして訪れる娯楽の場。

親に連れられた幼児や小学校の友人仲間や高校生グループ、大人までもが炎天下の中走り回っている。

目の前に見えるのは青く太陽の光を反射してきらきらと光る水面ではしゃぐ水着姿の男女。

陽炎立つ砂浜にはパラソルやビーチチェアにビニールシートなどが広げられ各々（おのおの）で海水浴を楽しんでいるようだ。

俺の格好と言えば、家から十数分の近場だけども何故か半ソデ短パンにプールバッグとクーラーバックをそれぞれの肩にかけて立ちつくしている。

「いやっほーいユウジ」

「ユイ……って、おい」

「どうした？　ユウジ、これスキだろ？」

絶賛継続中のグルグル眼鏡をかけたユイは紺色のスクール水着の装いでやってきた――なにも羽織らずに。

「家から着て来たのか？」

「当たり前だろぅ！」
「……恥ずかしくないのか？」
「視線が気持ちいい」

コイツと深く話すのは止めておこう。

「ユウジ、スクール水着好きなのは否定しないんだな」
「ああ」
「そんなこと言っちゃって――って、ええ！？　否定……しないのか？」
「俺はスク水が大好きだ、そしてやっぱり紺色が素晴らしい」
「……ユウジも変わったな」

どこか遠い目をしてこっちを見てくるが……好きなんだからしょうがねえだろう！

「ユイのスク水もいい感じだな！」
「え、あ、そうか……そりゃ、どうも」

俺の返しに拍子抜けしたらしい。まぁ狙ったからな。
テレテレし始めたから……もうひと押ししてみようか。

「特にユイはスタイル良いし、その体の曲線美がエクセレントォ！」
「ひっ……あ」

あれ？　やり過ぎてユイにひかれたぞ？
特に地声で後ずさったのはその証拠……だけどもどこか顔が赤い気がするのはなぜだろうか。
まあ、この暑さだしな。

「ユウージー！」
「お待たせ致しました、ユウジ様」
「待ってないぞー、ユキ、姫城さん」

白い美肌が眩しいユキは腕が全て見え、肩を大きく出し、ジーンズ生地のショートパンツの涼やかな格好はなんとも色っぽい。
フリルの効いた白い生地の上に紫色のパーカーを羽織り膝上までのミニスカートを付けた姫城さんは清楚な感じだ。そしてなぜか大き目のソフトクーラバッグを持っている。

「ユイちゃん来てたんだー」「ユイさんも来てたんですね」「いやー二番乗りだようー」

どうやら知らぬ間に姫城さんとユイも仲良くなっているようで、さん付けながら名前で呼び合う仲にはなっているようだ。
うーむ、こういう時でないとあまり気付かないから、少しその変化にオドロキだ。

「よー」
「やぁやぁー」

とマサヒロが来たがスルー。
一緒に来た愛坂さんはまるで少年が着そうな……てか俺と同じ服構成。

「海だぁー！」
「いい感じに風が吹いているわ」
「おっしゃー泳ぐぜー」
「大きな水たまりですね……」

生徒会の面々も訪れた。

「ユウくーん」

「ユウジさーん」

「お兄ちゃーん☆」

下之家の女性陣が遅れて到着したところで、全員が揃う――

＊　＊

「あっついー」

暗い部屋の中でエアコンを付けながらも、パソコンなどなどが放つ熱気では半相殺状態で、決して涼しいものではなかった。

と、いっても寒いのは苦手でとりあえずは「二十八度設定」守るので暗く閉め切られた部屋は外よりはマシなほどに蒸している。

そんな中で気休め程度に団扇で顔を扇ぐ。

『ミユは行かないんですか？』

「はぁ、なにに？」

暑さのせいかイライラとした口調で画面の中のキャラクターへと返す。

『下之ユウジ達は海水浴に行ったようですよ』

「知ってるよ」

ミナ姉からメール来てたし……勿論行かないって返したけど。

『下之ユウジは沢山の”女性達”と一緒に行ったようですね』
「……ふぅーん」

そっか、ユウ兄がねえ。

『男性二人に対し十一人です』
「流石多いんじゃないかな!?」

そ、そんなに女の子侍(はべ)らせてっ！　ふ、ふざけてる！

『なぜ、行かないんですか?』
「私の今までの状況見てて分からない?」

私は引き籠りだ。これで「わーい海だー」なんて軽々しく外へは出ない。

『でも分かりますよ?　ミユは下之ユウジと遊びたいと』
「っ!?　な、なななななな何言ってるのよ!　このポンコツ電波プログラムっ!」
『素直になればいいじゃないですか、その間に下之ユウジは女の子を攻略するんですよ?』
「……」

ユウ兄は主人公になった――そうこのポンコツプログラムことユミジは言った。
実際これまでにログを見せて貰って、それが本当だとは分かっているし……キ、キスしたり。姫城って人とみ、みみみみ水着であんなことやこんなことしてたりっ！

「ユミジ」
『はい』
「海水浴場中継出来る？」
『出来ますけど……興味がわきましたか？』
「出来るなら、早くして！」
『はいはい……えーっと、そうですね。ここら辺に……そこの右下です』
「あーー」

＊　＊

「ふぅ」

さっきまで海でばしゃばしゃと水掛け合いやらビーチバレーやらを楽しみ、俺は一足先に休憩していた。
二人が悠々に入れそうな大き目のパラソルの下に少し熱せられたビニールシートに座っている。

「……つめたっ」
「ごめんなさいユウジ様……えと、お疲れ様です」

頬に付けられたのはキンキンに冷えたコーラで、それを手渡すのは来た時と同じ格好をする姫城さんだった。

「ありがと」
「いえいえ、コーラでよろしかったですか？」
「貰っていいのか？」
「もちろんです」

そう姫城さんはクラスメイトの男子の半分が一瞬にして恋に落ちるであろう笑みを向けてそう言った。
おそらくは持ってきたクーラーボックスから出したものだろう。自販機をも上回るほどに冷え冷えだ。
プシュと開けて喉を冷たいコーラが潤す。

「ぷふぁ」

缶の口に唇を付けたまま、どこか憂いを帯びた姫城さんの横顔を横目に見る。

「（そういや姫城さんって学校の水泳授業にも出てなかったな）」

姫城さんのスタイルは抜群な為に、出来れば見てみたいとは思ったが……どうにも水泳授業は毎回休んでいた。

「（何か水に対するトラウマでもあるんだろうな）」

そう勝手に解釈し、人の知られたくない部分だろうとも思ってそれは口に出さない。

「あの……ユウジ様」
「ん？」
「少しお手洗いに行ってくるので……その」
「荷物番は任せろ、行ってらっしゃい」
「はいっ！　じゃあお願いしますっ」

そう言って姫城さんは駆けて行った。その後ろ姿を振り向いて少し眺めて、また海の方へと向き直る。

すると紺色のスクール水着を着た人物が近寄ってきた。

「遊んだぅー……お、ユウジか」

まるで居るのが意外だと言わんばかりのニュアンスでそう言った。

「ユウジだ。ユイも休むか？」

「おう……あー、マイさんは？」

きょろきょろと周辺を見渡しながらそんなことを聞いてきた。

「お手洗いで留守」

「そ、そうか……隣、座っていいか？」

少し申し訳なさそうに、遠慮がちにそう言うユイはなんとも不可思議だ。

「ああ」

「じゃ、失礼して」

どっこいしょとオジサンのごとくビニールシートに腰掛けた。

「……」

「……」

しばらく話すこともなく俺はといえば体を倒して仰向けにパラソルの模様を眺めている。

「ユウジ……誰にも言わなかったんだな？」

「というか、俺は知らないしな」

演技と分かってもいいから俺は白を切る。

「……ありがとな」

「なんだよ、改まって」

ここまで真面目っぽくなるのは俺がユイの素顔を知って追いかけて、ユイが部屋に戻る際に囁かれた言葉以来だ。

「いやさ、アタシの素顔みて何も言わないからさ……アタシの秘密を守ってくれてありがとう」

秘密……ねえ。

「そりゃ本人が見せたくないものを俺が見て、それを俺が喋りまくってもしょうがないだろう」

「いやさ……ユウジは本当に優しいなって、思って」

眼鏡で分からない表情だが、感情はよく分かる。

「なんだ？　俺は今までは鬼畜王とでも思ってたのか？」

「卑屈すぐるよ！　いや……体育倉庫の時も、アタシのことも、さ」

そういえばそんなこともあったな……あの後から会長は体育祭終わりまでは終始真面目で、終わってからはダラけているものの人が嫌がるようなことはもうしていない。

まあ、そんなことじゃなくてもな。

「そりゃ、友人が困ってれば助けるもんだろう」

「……流石ユウジだ」

いつものおふざけ口調がどっかに吹っ飛び、地声の透き通った声でそう言われてしまうので、ふいにドキリとしてしまう。
なんなんだよ、調子狂うなあ。

「なあ……あんまり二人になれる機会がなかったから、聞けなかったんだけどさ」
「ん？」
「いや、その、な。冷静になって、さ。少し聞きたいと、思って、な」
「だから、なんだよ」
「アタシの……アタシの素顔は」

どうだった？
――そう不安そうに問いてくる。

「アタシは自信がないしさ、あまりの残念さにもしかしたら更に幻滅したんじゃないかと思って……」
「いやー……そりゃないわ」
「っ」

ないわ、というのは。幻滅するということ自体がないのだ。
そもそもユイを容姿で友人にしたとは微塵に思ってない。あくまで趣味が被り、話始めて友人になっていたのだ。

「じゃあ、ちょっとでいいからそのゴーグル外してみてくれ」

俺はユイの素顔を正直に言えば「メガネ姿とのギャップ」のせいで記憶が変な事になっている。
ただ記憶通りで思い出補正がかかっていないのなら、それは結構

な美女の面持ちだった気がするのだが……そんなに俺の感想が気になるのなら、もう一度見せてほしい、そう思ったのだ。

「え」

「ほんのちょっとでいいからさ」

俺がそう懇願するよう言うと、渋々と言った様子で躊躇しながらも。

「……ほ、本当に少しだけだぞ」

「うんうん」

「じ、じゃあ――」

俺は息を呑んだ。

そこには、スタイルの良さゆえに起伏にとんだ容姿を持ち、水に濡れて肌にぴったりと張り付いた紺色のスクール水着を着て、ショートカットの良く似合う美少女が居た。

ゴーグルを頭に載せて、恥ずかしそうに、不安そうに、頬を染めながら大きな瞳を少しばかり潤ませて俺の方へと顔を向ける。

なんだよ、クソ可愛いじゃねーかよ。

「お、おしまいっ！」

「あ、ああ」

俺はその一瞬が永遠に思えた。ユイにしたら数秒も無かったであろう、その時間。

「……ど、どうだった？」

「え、いや……」

素直に言うべきなのだろうか……いやでも、なんかなあ。そこまで女たらしにはなりたくないし、実際はユイだし。
かといって否定するのは……まるっきり嘘だし……むー。

「やっぱりダメなんだ……」

その瞬間シュンとして俯き始めるユイに俺は心底焦り。

「い、いいんじゃねーかな！」

と、答える。素直じゃないよなあ。

「そう？　本当に？」
「ああ、むしろ――」

可愛かったさ。

「むしろ？」
「何でもないっ！」
「えー、ユウジ殿白状するでござる」
「途中で戻るなっ」
「えへへ」

その笑い声はいつもと違って、照れの入ったものだと付け加えておく。
ここ最近で、ユイの印象が随分変わった。
思い始めている。本当に今までのが芝居で、時折見せるのが――

＊　＊

私はある二人の映像を見せられて震える指でスクール水着の女を指した。

「誰？　あの子」

『義妹です、ミユにとっては義姉です』

「き、きいてない！　あんな、あんな――」

＊　＊

「見えなかったけどユイ、眼鏡外した？」

「そう……みたいですね」

「少し前からユイのユウジへの態度がぎこちない気がするんだよね」

「ええ、ユキさんの仰る通りの感想を私も抱いていました――」

トイレの近くで偶然居合わせた二人の美少女がそう言葉を交わした。

第３２１話　√ａ－２１　彼女は彼に気付かれない（前書き）

青春爆発しろ

第３２１話　√ａ－２１　彼女は彼に気付かれない

七月三一日

『夏休みだけど、何か？』
「いや、何かって電話してきたのお前だろよ」
まったく良く分からないノリの電話がマサヒロから掛かってきた。
不愉快のあまり切ってしまいそうになったが一応ツッコミを入れてから――通話を切った。

『ごめん』
「で、なんだよ。俺は忙しいんだ……手短に頼むよ」
『なにその出世に大きく差の付いた、少ししか話さなかった同級生に同窓会の開催を知らせる電話みたいな返し』
「はいはい、デュフフフフフ」
『キモオタ笑いをした意味が分からん！？』
「で、なんだよ。俺は忙しいんだ……十秒で頼むよ、度数があと一しかない」
『そりゃ手短にするしかねえわ――って俺は公衆電話に掛けてんのか！？』
「もういいよ」
『……そうだな。とりあえず、知らせたかったのは、肝試し――』
俺はその続きを聞くことも無く、携帯電話の通話を流れるような仕草で切った。
『もしもしオレオレ』

「どうも、俺です」
『……斬新な返しだな、とーにーかーく！　肝試しやるから人集めろっ、いいか？』
「とーにーかーく……断る」
俺は不愉快のあまり携帯の今後なぞいざ知らず、携帯の裏側からリチウムイオン電池を抜き取った。
すると俺の部屋の扉がバンと開かれ、
「こんなこともあろうかと、じゃっ！」
「桐通して会話すんなっ！」
桐がタイミングを計り過ぎだろうと言わんばかりに仁王立ちしていた。
と、いうことで第二回肝試しが決定してしまったのだった。

「第二回！　ドカッ、トラップだらけの肝試し大会！」
「「（嵌った際のＳＥ！？）」」
夏の夜空の下、鈴虫とかがこれでもかと言わんばかりに鳴き続けている……まあ山の中だしなあ。
「（そういや……）」
少し見渡して女比率の圧倒的に多さに改めて驚く。
てか俺の男友達で、プライベートで出かけられる仲って……マサヒロだけじゃん。

「あぁ……」
「どしたん、ユウジ氏？」
「いや、俺ってコミュ力ないんだなあ、と思って」
時代はコミュ力媚び力だというのに、俺ときたらっ！
「……そうかぬ？」
「そうだろ」
「コミュ力なかったら、ここまでオニャノコはべらさないだろうに」
女の子を侍らす……だと!?
「そ、そんなこと意図してねえよっ」
「……なるほど。それでは天然モノか」
「は？」
「なんでもないぞいー」
ユイは時々意味不明だが、今回も意味不明だ。なんだよ、天然モノって、養殖を馬鹿にしやがって（※してない）
「で、またユイか」
「ユイぴょんだよぉ、きゃはっ☆」
声は完全に作った高い声、すげえキャピキャピしてる感がウゼエな。
と、いうことで前回と同じくユイとペア。ほかの女子勢が「ぐぬぬ」と言ったような顔で手にくじを握りながらユイの背中を見つめ

ているような気がするが、どうしたことだろう。虫でも付いているのだろうか？

「ユイ、背中見せてみろ」
「ひゃあっ☆　ユウたんにバック取られちゃったにゅう！」
「その喋り方キモいから止めろ……よし、付いてないな」
「なにが付いてるのかなぁ☆　ユウたん？」
「いや、山の中だから虫でも付いているのかと……」
「……見てくれたのか？」

途端に素に戻るユイ。さっきから俺は真面目だってーのに。

「まあな、刺されて痕になっても困るし」
「そうか……あ、ありがと」
「おう」

なんか後ろの女子勢の視線が強くなった気がする……今度は俺の方に。俺のTシャツ穴でも空いてるのか？

「イコー、ユウたん」
「その呼び方やめれ」

「いや……えーとさ……大丈夫か？」
「う、うう……」

墓地入口を後にして数分。暗い空の元、豆電球の赤色の懐中電灯一つが頼りなく前を照らす。
……これは何かでなくとも十分に怖いな。

「ユイ？」
「……はっ！　だ、だいじょうびゅでしゅ！」
「ユイ、それは素で噛んだのか？　演技なのか？」
「え、えりんぎ！」

まさかのキノコかあ。

「本当にダメなら引き返してリタイアした方が良くないか？」
「よ、よよよよくない！」

正直ユイの怖がりっぷりは凄まじい。風が吹いただけで「きゃあっ」とか「いやあ！」とか声をあげてくるもんだから、俺も心配になってくる。
ここまで弱いなんてな……体育倉庫の時も相当怖かったんだろうな。でも、ん？

「前回はここまで怖がってなかったのに、どうしたんだ？」
「こ、怖がってにゃい！」
「無理すんなって……何かあったのか？　こういう暗いところがダメになることとか」
「そ、そんなの」

その時ガサッと何か小さなものが足元で走り草をザワつかせる音がした。

「やぁっ！」
「うお」

一秒経たぬ間に俺の腕にユイが抱きついてきた。そのやはりな感

触には声が出てしまうわけで。
やっぱりユイも女だからな……なんか、こう腕に当たる温かくて柔らかい物体にはドギマギしてしまうものの、その一方で抱かれる腕からユイが震えていることが分かってしまう。
少し立ち止まり、
「……落ちついたか？」
怖さのあまりはぁはぁと粗く息をするユイを宥めるように声をかける。すると、呼吸も落ちつき。
「前回は……我慢した」
「ああ……」
なるほど、な。まあ、顔も引きつってたし、内心では叫びまくってたんだろう。
「前回までは……演技しなきゃいけなかった」
「演技？」
怖さのあまりか若干カタコトっぽくなってるのはいいとして……それは俺に対して、か？
「キャラが……崩れちゃうから」
「あ」
……そういうことか。
我慢は確かに体に悪いし、本人にとっては辛い。出来ればしたくはないわけだ。
それでもそうせざるを得なかった。なにせユイはそんなキャラで

はなかったから。
あくまで天真爛漫元気溌剌（テンシンランマンゲンキハツラツ）とナゾ要素を組み合わせて出来上がったようなユイの通常の性格とはほぼ正反対の気弱なものだった。
だとしても、今回はなぜにここまで崩れてるのかと。

「じゃあ俺の前では崩していいのかよ」

若干冗談めかして言ってみる。実際それは冗談のつもりではなくて、ユイの本心を聞きだしたかったからなのかもしれない。

「ユウジ……なら」
「ん？」
「ユウジの前なら……いい」
「っ」

おいおい、こんな暗い中。姿も見えずなサウンドオンリー、更には素の声と来たもんだ。
……そんなこと言われたら、ドキりとするじゃねーかよ。

「誰にも……アタシのこと言わなかったし、今はユウジしかいないから」
「ああ、そうか」
「……ごめんな。こんなアタシはアタシっぽくないよな……うん、やっぱり――」
「いや、無理しなくていいから」
「え」

俺はそうしっかりとした声で言いきった。その返しにユイも唖然としているようだ（※姿が見えない）

「ユイにとって怖いことなんだろ？　それでもリタイアしたり怖がったりしてキャラを俺の前以外では崩したくないんだよな？」

なんなんだろうな、この台詞。

「う、うん」

答えるユイは未だに本調子でない。

「じゃあ皆に見えないところで怖がるしかないだろ？　怯えるしかないだろ？」

「……」

言い方がかなり悪いとは思っているが、まあ俺だしな。フラグを立てるのには向いてない性格ですし。

……いや、ユイのフラグを立てたいとかそういう訳では金輪際無いけどな。

「……うん、分かった。怖がる」

「その返しはどうなんだ？」

「少し意地張るのも止めようかな。だって怖いものは怖いし、それに」

と、俺は何も言わずにその続きを待ち。

「なんだかんだでユウジがいてくれるし……ね？」

「あ」

だから……せめて声ぐらい通常運行しろや！

「い、行くぞ」
「ま、まってユウジ――」
そのあとユイは盛大に何度も声をあげた。
隣に居ると、どうにも複雑な気分で最後の方には涙目で俺の裾を掴んでいた。
声こそ可愛いが、時折キラリと光る眼鏡が現実へと戻される。
ああ、このシュチエーションがユキとか姫城さんだったらよかったのに。
……とは全てはなぜか思えなかった。
みんなの前では見せない”女の子なユイ”を見れた気がしてほんの少しだけ新鮮だった。
そういえば道中いた黒いワンピースを着た小さな女の子の人形は芸が凝ってるな、と思ったら、途端に話しかけられて「あの、海はどっちですか？」と聞かれたので指指すと「ありがとうございます」とぺこり礼をした時にチラリと金属光沢のある鋭利なモノを手に持ちながらどこかに消えて行ったのだが、どうやらユイから見ると俺は一人で喋っていたらしい。
……なんだったんだろうな、あの女の子。次の瞬間にユイの血の気は引いて倒れたものだから、そっちに気を取られてしまい、戻る頃にはほとんど忘れてしまっていた。
ちなみに戻って帰る直前の、思いだした頃にマサヒロに聞いてみると女の子なんて用意してないとのこと、むしろお前はどんな子でも捕まえるのな！　と怒鳴られたので殴り返しておく。それを聞い

ていたユイはというと器用にも立ったまま数秒気絶していた。
眼鏡のおかげでそれは誰にも気づかれずに澄んだらしいけども。

第３２２話　√ａ－２２　彼女は彼に気付かれない（前書き）

√１や√２と比べてあざとい？

尺がガチでないんだよぉ！

今回のシナリオは重大だけども、これからのプロローグでもあるから長ったらしくは出来ないんだよぉ！

第３２２話　√ａ－２２　彼女は彼に気付かれない

「……一日だけ、一時間だけ」

その長身な女性は鏡の前で体に合わせるように浴衣を広げて呟く。

「少しだけ……ならいいよね？」

そうしてふふ、と笑った。

八月四日

俺考案で夏祭りに行こうということになった。

メンバーは下之家女性陣といつものメンバー揃ってとなる。

ちなみに俺が誘ったところ「え、お祭り！？　ユウジとっ！　……皆で？　やっぱそうだよね……でも行くよ！」とユキからＯＫ「ユウジ様とお祭りですか、お祭りデートですかっ！　あ、皆でですか。少し残念ですがユウジ様との初めてのお祭り楽しみですっ」と行く気はマンマンでＯＫ。

その他姉貴は「ユ、ユユユユユウくんと手を繋いで二人夜店を巡りながら、最後には……お姉ちゃん絶対行く！」と最後の部分だけしか聞いていないことにする。

ホニさんは「ユウジさんとお祭り……懐かしいなあ――じゃなかった！？　楽しみだよっ」と嬉しいＯＫ「わしも行こうぞっ！」と桐も行くことになった。

ユイにも「お祭り？　ぐふふ、金魚すくい名人なアタシを連れて

行くだと？　楽しみだっ！とモロに行くことを喜んでいた。

で、俺は楽しみのあまり一時間と二十分前に来てしまった。

「ユキと姫城さんの浴衣姿楽しみだ……」

二人には何でも似合うけど……浴衣は特別な感じも出て更に良さそうだなあ。

あ、ニヤつてる俺きめえ。

「（いくらなんでも早すぎたか？）」

そう思い始め、お祭りの会場の一つである商店街の入口で短パンにTシャツの軽装で立ちつくしていると、

「あ、あの」

「うお！？」

驚き方が妙に大げさな気がするが、実際のところこんな人と出くわしたら瞬間的には驚くことだろう。

その声をかけてきた人は声からすると女性で、肩口で揃えた茶色の髪にスラリとしたスレンダーな長身に青地に百合の絵が施された柄の浴衣がよく似合う――顔を見なければ、なのだが。

そう、彼女は妙リアルな仮面を付けていた。それも狐の、何故か毛まで付いて剥製なんじゃないかとも思えてしまうほどの。

「あの、下之ユウジ君ですよね」

「えと……どちらさま？」

少なくとも、俺をフルネームかつ君付けで呼ぶ女子は学校のあまり親しくないクラスメイトぐらいだ。
声はあまり聞いたこと……ん？
「あ、あの……下之ユウジ君のファンで」
「俺のファン……？」
俺のファン？　ないない。
「俺の扇風機だと……」
「そっちのファンじゃないです。あ、憧れなんですっ」
ああ……分かってきた。例えモノマネでかぶせても、その人の地声でもある癖が少しでも垣間見えるのだ。
少なくともこの人は俺のファンではないだろう――なぜなら、俺にそんなこと有り得ないから！
「そ、それで……し、下之ユウジ君とお祭りをご一緒したくて！」
「ああー」
改めて時計を確認して未だに集合時間まで大幅に余裕があることを再確認する。
「いいよ」
「本当ですかっ！」
狐のお面を付けたままだが、喜んでいるのが声からよく分かる。
「じゃあ、行くか――ユイ」

「はい――って、ええ！？」

今付いてこようとした瞬間に俺がそんなことを言ったものだから、驚いた上にゲタでコケそうになる彼女。

「ん？　どしたユイ？」
「な、なにを言っているんですか下之ユウジ君っ！　ア、私はユイなんて名前ではなくてです」
「じゃあ、お面の中身見せてくれないか？」
「そ、それはダメです！」
「俺のファンなのに、俺には顔を見せてくれないのか？」
「う、うう……」

凄い俺が意地悪に見えるが、こんな分かってまで演技する必要はないだろう。
するとさっきまでの演技を止めて、肩を下ろしてはぁをため息をついてからいつもの声に戻り。

「……はぁ。モノマネはいつも通りの完成度だと思ったのにぬう」
「残念、クセというものは残ってしまうものなのだよ」
「ユウジに見破られるとは……不覚」
「俺のこと甘く見過ぎ、で。なんでこんなことを？」
「っ！　いや、特に意味はないぞ！　ただアタシは浴衣が着たくなってな！　別にユウジとお祭りを廻りたいからしたんじゃないんだからねっ！」

ツンデレっていいよね。思っていることを簡単に吐露してくれるおかげで扱いが楽で。
まあ、ここまであからさまなツンデレはそうはいないだろうけど、今回ばかりはユイは素のようだ。

「で、仮面は付けたままか？」
「も、もちろん！　だからユウジがいるのだ！　ユ、ユウジの裾を掴んで歩いていれば恥ずかしがり屋の彼女みたいで……か、かかかかか彼女！？」
「自分で言ってどうしたよ」
「とーにーかーく！　アタシはこのままでお祭り廻る！　じゃなきゃ帰って着替えてくる――」
「待てって」
「にゃ！？」

踵を返して帰ろうとするユイの腕を掴んだ……なんて声をあげるんだか。

「せっかく浴衣着てきてそれはないだろよ。それにお前が仮面取っても大丈夫だろ」
「え？　で、でもアタシってバレたら――」
「悪いけど、あの眼鏡かけてなかったらユイって分からん」
「そ、そうだよな……どうせアタシは眼鏡でアタシだもん」
「そんなこと言ってねーだろ、っと」
「わ」

俺はユイの仮面を強引にも外した。

「ううう……なんてことするんだよぉ」
「少しは自信持てって……ああー……言わなきゃダメなのかよ」

正直今のユイは凄まじく可愛らしかった。肩口の茶色ショートに長身でスレンダーな体、そこに大きな瞳があって祭りの喧騒か少しばかり潤んでいるようにも見える。

きゅっと結んだ口も綺麗な線の眉毛も額に少しかかる前髪も、顔全体で見てかなりに整った顔立ちだと分かる。

「い、今のユイは……か、可愛いんだから少しぐらいは自信持てって」

「か、かわ……っ！？」

いつもならば「ユウジが可愛いって……デュフフッフフフフ」などと小馬鹿にされるし、頭が回るのですぐさま冷静になるのだが、ユイ本人は照れ屋だった。

そんなことを言われたユイは茹でタコに負けじとばかりに顔を赤く染めてしまっている……本当になんか可愛いなコイツ。

「そ、そそそんなことユウジが言うとおかしいし！」

「こ、こら叩くな」

と言ってもぽかぽかと力なく拳を握って俺の胸を叩く。

客観的モードにするば、俺が女友達か彼女を怒らせて、出来レースよろしくな夫婦喧嘩を繰り広げているように見えるんじゃないだろうか？

心なしか人の視線も入口なだけあって集まっているわけで。

「えーい、もう行くぞユイ」

「えっ、えっ……どこに？」

「廻るんじゃねーのか？　とりあえず集合時間まで二人で廻るぞ」

「あ……う、うん！」

「ユ、ユウジ！　金魚めっちゃ掬えた」
「うお……そんなに貰って大丈夫なのか？」

俺は金魚すくいのユイの手に持つ桶を見て驚いてしまう。おいおい……軽く数十匹はいるぞ。

「うんにゃ、一匹もいらんぜい。おじさーん、あんがとー」

キャッチアンドリリースらしい。

「一匹も貰わなくて良かったのか？」
「うぬ、可愛いけど飼うとなると大変だからぬ！」
「まあな」

水槽やポンプが家の物置に有った気がしたが……出すのは面倒だし、ユイの言うとおり生きるモノを育てるのは大変だからな。
ユイもどちらかというとゲーム好きが有ってか、金魚すくいそのものを楽しんでいたようなのでヨシとしよう。
傍から見るユイは眼鏡で隠れていた部分が露わになり、こんなぱぁっと太陽のように明るく嬉しそうな顔をするんだな、と少しばかり新鮮だった。

「そ、そういえばユウジ」
「ん？」

片手に綿飴、片手にチョコバナナを構えて隣を歩くユイが話しかけてきた。

「アタシの……アタシの、な」
「アタシの？」

ごめん。俺には心詠とかないんで、その後に続く言葉がわかりません。

「浴衣……どう思う？」
「似合ってるぞ」
「に、似合ってる！？　そんなことをすぐさま返すなんて、やっぱりユウジはタラシだ！」
「ええー、褒めたのにそんなこと俺は言われるのかー？」
「ど、どうせ女の子には脊髄反射のようにそんなこと言ってきたんだろっ」

今のは明らかに好感度を上げるポイントなのに、なぜかユイを怒らせてしまった。
まったく、意味が分からない……が、まあ。弁解はさせてもらうか。

「そうは言うがな、俺はその青い浴衣似合ってると思うぞ？　爽やかで可愛らしいんじゃないか？」
「そ、そんなこと言っても何もでないからなっ！」

湯気は出てますがな。

「少なくとも俺はこうして女の子と二人きりで屋台巡りなんぞ、それほど経験ないからな。大体は何人かで動くからそんなこと言う暇もないし」

実際その通りで、こういう時は団体行動だ。そんな知り合いが何

人もいる中で、気恥かしくて言えるかってんだ。

「ふ、ふーん、じゃあユウジは二人きりのお祭りはアタシが初めてなのかー」
「まあ、そういうことになるな」
「……ごめん、仮面付ける」
「だから付けるなって、言ったろー」
「やだ！　こんな顔見せられるかっ、こんなこんな――」

そんなこんなで時は過ぎるわけで、いつの間にか集合時間が迫っていた。
ユイは着替えの為に家へと帰り、俺は集合場所で待つこととする。
そこには既にユキ達が待っていて、どこか怪訝そうな顔をしていたのに俺は首を傾げた。

＊　＊

とある暗い部屋にて、以下略。

「だ、だれ！？」
『ユウジにとっては義妹――』
「ふ、ふざけるないでよっ！」

＊　＊

「ユ、ユユユユウジが知らない女の子と屋台廻ってる！？」

「誰なんでしょうか、あの女性は……ああ羨ましい。早めに来てみればこんな光景に出くわすなんて！」
「……男の子だもんね。色んな女の子と一緒にいてもおかしくないもんね！」
「その結論はどうかと思いますが、なんでしょう可愛らしい方ですね……思わず嫉妬してしまいます」
「あんな子ユウジの知り合いにいたかなあ？」
「私も知らない方ですね……どなたなのでしょう。そしてユウジ様とは一体どこまでっ！？」
「そ、どこまでって！？　どこ……まで？」

＊　＊

「なんじゃ……と！？」

まさか、そんなハズは……っ！

第３２３話　√ａ－２３　彼女は彼に気付かれない（前書き）

プレビューアクセス一〇〇万とユニークアクセス八万人になりました。ありがとうございますー

第３２３話　√ａ－２３　彼女は彼に気付かれない

九月一日

「夏なんてすぐに去ってしまうのよ！」

そんなどんな本でも使わないような格言風なことを無い胸を張って叫んだ。

夏休み明け初めての生徒会はというと少々のカオスを孕んでいた。

未だに夏休みの空気を引きずった生徒会メンバーはといえば、

「会長、なんで浮輪……？」

「ふっふーそれはだねシモノ。これは私の信望が厚いから周り常に人常に囲まれている、ということを暗喩しているのだよっ！」

浮輪のように浮ついた会長に、荒く息を吐くロリコン共に囲まれる会長の図――うわあああああ、規制されるううううううう！？

「今年もアツかったぜ……ふっ」

「福島は夏休み――ああ、その格好の通りか」

砂埃や土で汚れた野球部のユニフォームを着ていた。

何故か背中にはバットやテニスラケット、腰にはバレーボールとサッカーボールがネットに入ってぶら下がり、野球帽の上には水泳ゴーグルが重ねられている。

……物語るのは分かるとしても、お前その格好で学校に来たんじゃないだろうな？

「そうだっ！　見事に少年野球のウィン●ルドンに行って来たぜ！」
「なぜテニスと結びつけたのかが分からないっ」
「ついでにヨ●校潰して来た」
「それは正当かつスポーツマンシップに乗っ取った手順であることを願っておく……」

それでチサさんはといえば、いつもは妖艶な笑みを浮かべているのだが、今は邪悪が入りつつある。

「ユウ――私、やっちゃった」
「え、えと。一応お聞きしますが何を？」
「性的な意味ではなくてね、もちろん歯向かってきたから、それはもう人思いにやっちゃったわ――」

その時、声に出さなかったが。チサさんはこう続けたのだと思う――ヒ・ト・ヲ。

「……」

オルリスは横っ面に仮面が提げられている……特に何も言わないが、お祭り楽しんだんだな。

「ユウくんの水着姿二〇一〇、ユウくんの浴衣姿二〇一〇、ユウくんの私服姿二〇一〇、ユウくんのうまれたままの姿に・せ・ん・じゅ・う……はぁあああああああああああ」

姉貴はテーブルの上にでかでかとアルバムを置いて、ページをめくりながらそんな風なことを呟いていたが俺は五秒で忘れた。鶏の気持ちでね。

そしてユイはといえば、

「テンリたんかわええ……」

携帯を覗いては、時折ニヤッと笑みを浮かべている……うわあ。

「はぁ」

そんな中で、いたって平然を決め込む俺は。そんな光景を傍観しながら頬杖をついていた。

始業日は普通早く帰れるってーのに、この生徒会のせいで――と不満を募らせてもいる。

「今日の議題は、ふゆき服装の意見について……だよっ」

格好こそアレだが会長が一番マトモなのかもしれない。

ふゆきってそんな某宇宙人カエルマンガのオカルトマニアみたいなことになってるけども……冬季って言おうとしたんだろうなあ。

「生徒からこんな意見が出てるのよねー”マフラー付けたいって”」

「会長、それは最初から許可されているじゃないですか」

生徒手帳を見るに、特に禁止はされていない。中学生の時に見た藍浜高校の生徒もマフラーを平然と付けていた。

なぜに今頃、というかなぜにそんな要望を？　イタズラなのか？

「あっ、マフラーってあのアミアミのものじゃなくて――ほらバイクとかの」

「それを冬季服装に付けてどうするんですか！？」

「こう、ブルルルンっとね」

これは寒さに震える……ってのに掛けているのだろうか。

「えー……と例えば学ランだったらどこに付けるんです？」

「違うよ？　女子生徒の要望だよ」

走り屋は女性の方でしたかー

「なんかお尻に付けて”まふらー”みたいな感じじゃないかな」

「ネコの尻尾風に付けても絶対に萌えれねえよ！」

スカートを持ち上げて、バイクに使われるような金属光沢を放つ銀色のパイプが覗いている……シュ、シュールだ。

「却下に決まってます。大体風紀が乱れるじゃないですか」

「うーん、少しマニアックすぎたかもね。じゃあ却下」

マニアックというレベルを軽く越えてるぞ、それは。

「あとはねー……”ストーカー”を許可してください」

「はい、アウトォッ！」

もう有無を言わせないからな、それは。ストーカーが生徒会で認められるってどういうことだ？

というかもう服装関係無しにただの要望っぽいものに……果てしなく歪んでるけども。

「シモノ、頭ごなしに批判はだめだよ？　だからマスコミは腐っちゃったんだよ」

「会長、マスコミについては同意ですが。その結び付け方は雑すぎるかと」
「とにかくね、ストーカーって言っても画期的なものなんだよ？」
「いや、それは学校公認でストーカー出来たら画期的どころか狂気的ですから」
「シモノ、もしかして勘違いしてるでしょ？　尾行とかするストーカーだと思ってない？」
「え……いや、違うんですか？」

「自動給炭装置だよ」

「分かるかっ、そんな専門用語っ！」
「要望によると”ストーカーを木炭ストーブに付けてほしい”って」
「いやいやいや！　木炭ストーブに木炭を自動で給炭する装置を付けて下さいって言えばいいだろうに！」
「要望だとね”ストーカーっていうのは蒸気機関車で使われた自動給炭装置で、作業の効率化と簡略化を図れた凄い装置なんだよ”とのこと」
「完全にテツな方じゃねえか！」

てかこの学校って石油ストーブじゃなかったのか！？
このご時世でも未だに木炭とかすげえな……いいのか？　雪国でもなければ、平成のこの世にだぞ？

「まあ、渡された設計図は簡単そうだから話してみるねっ……と、承認」
「はぁ、いいですけど」
「それでは次のお題」

お題って言ったよね？　この会長。

「”学ランもふもふもふもふもふもふもふ”」
「え、あ、はい？」
「”もーふもーふもふもーふもー♪　ふーもふもふもふもふー♪”」
「で、電波な要望だ……」
「天才会長の私なりに解釈すると”学ランをもっと柔らかくしてください”」
「うん、今については会長凄いと思ったわ」

どっかの粒子バラマキ水色の髪をした引き籠りが布団を被って歌った結果のようなものを翻訳するとは。
もし本当ならば、ね。

「ゆ、湯煎すればいいんじゃないかな？」
「そんなチョコみたいにしたら繊維壊れるだけでしょう……構造変えてくれってことですかね」

学ランってそれなりに整っていていいんだけども、どうにも動きには向かないんだよなあ。
まあ一学生が不良に囲まれたり、能力者とバトルを繰り広げることなんてなく、勉学に勤しむだけだからそこまでの機動性は必要かほんの少し疑問ですけど。

「スカートって寒いし動きづらいんだよねー、男子が羨ましいよ」
「俺から見ても寒そうですよ」
「下着見えちゃうし、なんでスカート……いっそドレスにした方がいいと思うよ」
「それだと、更に動きづらくなるんじゃないですか？」
「大丈夫大丈夫、クジラ骨ドレスだから形は崩れないね」

「スカートを踏むことはないけど、機動性ダウン、機能性皆無！？」
「えー、だってあんな感じにふわっとしたドレスはいてみたいなあ」
「学校ではく必要はあるんですか……？」
「……ないかも、却下――ふぅー、仕事したぁー」

ああ、これで終わりなんだ。
てか議論に参加してたの、俺と会長の二人ってどういうことだ！？

「これにて今日の、生徒会終了」
「「つかれしたー」」

何もしてないのにやる気なさすぎだろう！？
……もう、思えてくるわ。俺って真面目なんだなあって、会長もそれなり――

「アスちゃん、ありがとね。じゃあ今日の会議進行のお礼」
「わーいっ、うたマロだ～」
「今日は話題を振らないでくれて、ありがとうね」
「うんっ、面倒だったけどシモノに主に方向性決めさせて終わらせた」

俺のツッコミが利用されたぁぁぁぁぁぁぁっ！
不本意ながらもいつもより早く終わった生徒会は、いつもよりけん怠さに満ちていた。

……なんか俺ってば虚しくなってきたよ。

第３２４話　√ａ－２４　彼女は彼に気付かれない（前書き）

遅れて申し訳ないですー

もしかしてこの小説って面白いんじゃないかと思い始めてきた（ツッコミ待ち）

第３２４話　√ａ－２４　彼女は彼に気付かれない

九月二一日

三学期制のおかげで夏休みが明けてしまえば、定期テストが舌なめずりをしていて、まあなんとか食われることなくテストを終えることを無事に出来てからの数週間後のこと。

まったくもって平凡な授業を終えてのいつものメンバーでのトーキングタイム。わらわらと後ろのロッカー辺りに集まり始め、ユキがまず切りだした。

「ユウジー……最近どう？」

「どうって？」

ここは、ぼちぼちと答えるべきだったのだろうか？

しかしユキはというと、ふざけているような空気ではなく。表情からは緊張と真剣さが伝わって来る。

……な、なんだ？

「その、ね……気になってることがあって」

「ああ」

何かに躊躇するように言ってくるものだから、俺もなんだと思ってしまう。

「ユウジって付き合ってる人いる？」

「は？」

ユキからそんなことを突然に言われたものだから俺も驚いてしまう。

俺の反応こそ薄かったが、それ以外のいつものメンバーことギャラリーが一斉に沸いた。

「ユ、ユユユユユユユユユユユユウジ様の彼女！？」

「ユウジに彼女っ！？　ユウジ、詳しく話せい！」

「……おい、ユウジ。裏切りなのか？」

姫城さんは顔を真っ赤にして驚き、ユイまでもが大げさな程に驚いている。

まあ親友にいきなり付き合ってるヤツがいるとか言われたら、驚くもんなあ。

「いや、いねーぞ？」

俺は否定する。画面の中にも嫁を作れずに「〇〇の嫁！」その作品の主人公の嫁にするぐらいだ。

そしてもちろん現実に彼女なんているわけがない。

しかし、なおも食い下がるようにユキは続けて、

「だ、だって……マイさんも見たでしょ？」

「え……あ」

そう思いだすようにユキは促し、姫城さんは思い当たることがあったように言葉を詰まらせた。

二人のサインっぽいのは俺には分からんとです。とにかく事実なのは、

「いやいや、俺はずっとフリーだって」
「でも……ごめんね。見ちゃったんだよ――ユウジがお祭りの時に私たちの知らない女の子とデートしてるとこ」
「「っ」」

ちなみに時を同じくしてユイもビクリと反応をする。
お祭りは集合時間からは皆でブラブラと屋台を廻っただけで、それが終われればすぐさま解散だった。
俺もご多分にもれず、そのまま家へと直行した。

ということは、もしあるとすれば。集合時間より前のことだ。

素顔のユイが浴衣姿に俺と歩いていた……きっとユキの言うのはこのことだろう。まあ第三者からみたらそう見えなくもない。
おそらくはユイもそれに気付いているようで、完全に固まっている。

……本当のことを言ってしまえばユイの隠していることがバレてしまう。
俺も口を滑らさないように、気を付けてきたのに……このままではマズイ。なんとか誤魔化さなければ――

「アレはな……親戚の子に案内してって言われて、集合時間まで時間があるから付き合ってたんだ」

親戚というか、一応家族っすけどね。
俺は親戚の話題を殆ど出してないから、特に違和感なく受け入れられることも狙ったのだ。

「……ユウジ、その親戚の子とは仲がいいの？」
「あ、まあな」
「ユウジ様……本当に付き合っている方はいらっしゃらないのですか？」
「ああ……てか何度も言わんでくれ、俺だって好きで独り身やってるんじゃないって……ああ、彼女欲しいなあ」

もう彼女がいないことを何度も聞かれたせいで心の声が思い切り漏れちまったよ。
彼女は欲しいけど……どうにも俺には勇気がないんだよなあ。そういうとこが、ヘタレだと自覚はしている。
それでも俺は――自信がないから、どうにも保身的でアタックはできないんだ。

「ふ、ふーん……じゃあ、ユウジって好きな子いるの？」
「え」

なんというか、今日のユキが怖いです。
こんな俺の心の中を抉るような質問を矢継ぎ早にされても……ああ。

「ユウジ様、私だと嬉しいです」
「……」

素直に言ってくれてありがたいけど、残念ながら――とは言えない。
そりゃまあ、姫城さんと付き合えたら凄いことだけども……俺は到底釣り合わないからな。もっと良い男はわんさかいるだろうに。
一度フラれた……し、ああ。

そう考えるとユキラブだとしても、俺がユキと釣り合わない自信がある。ユキには俺なんかもったいない。付き合う人が出来たらそれはそれでショックだけども、俺がそれを止める権利は一切ないしな。

「とりあえずは……いないな」

「じ、じゃあ！　好きなタイプは？」

だからユキさん。俺のライフガシガシ削るの止めてくださいって。そういう質問って、こういう場でやるのが一番きまずいって。仮にも学校のヒロイン二人の目の前だぞ？　……でもって二人は真剣な眼差しで見つめてくるし。

スク水の似合う……は趣味に走り過ぎ。ポニーテール……ロングヘアーの方々全対象になり得る。かわいい……ただの面食いじゃねえか。

まあ、そうなると当たり障りなく。そして俺がかつての理由でもあった――

「気軽に話せる子だなあ」

「「（！）」」

その返しに反応する女子三人……いや、なんでユイまで。

「って、そこまで俺のこと聞いてどうすんの？」

「え、な、なんでもないよ！？」

それを聞いた途端に頬を染めてうろたえるユキ……こういう表情もユキはかわええなあ。

「なんでもあります」
「……あるのかよ！」

すごい、恐ろしいまでのフェイントが姫城さんから炸裂したわ。
一方の姫城さんはどこかスッキリとした表情をしていてユキと対照的だ。

「なぜなら私はユウジ様が大――むぎゅ」
「マイさん、このタイミングはダメだって……なんでもないよっ、ユウジ！」
「はぁ」

何か言おうとした姫城さんの口を必死で抑えるユキ、最初の頃と比べると仲良くなったなあ。

「……そうか、ユウジは気軽に話せる子か。もふふ」

眼鏡越しに笑みを零すユイ。
……今日は何か女子勢の雰囲気が変だな？　一体何があったんだ？
と、思っていると休み時間が終わった。

番外２１話　@　クソゲエリスタート！　@＜体験版１＞（前書き）

時間がないので以前にＧＡＹＭ投稿したネタを一つ。
ちなみに次回作での追加ヒロインの一部となりますー

番外21話　@　クソゲエリスタート！　@＜体験版1＞

お試しってヤツです。
時間がないのでこれで許してください。
あからさまな更新稼ぎで申し訳ないですー

△咲夜（サクヤ）

立ち位置［藍浜高等学校一年一組］
一人称［？］
髪［銀ロング］体［普通］特徴［美術部、おとなしめ、絵が崩壊的に下手］

■特徴B
物静かだが信頼した相手に対しては積極的に接する。
腰まで伸びる銀色の髪。髪型はストレートヘアー。スタイルは一般的。
絵が崩壊的に下手。
特記［マーボー豆腐星人さん考案・クソゲエリスタート！追加予定ヒロイン］

＊　＊

何を思ったのか俺は美術部にやってきた……一応理由はあるのだけども。

美術部の活動は通常授業でも使われる美術室で行われている。

美術部員は１０数名ながら半分以上が今年卒業する３年で、実質半分が現美術部員。

そうして「シモノ、部員の人数確認して来て」という会長ご達しでやってきたのだ。

コンコンと扉をノックして。

「生徒会です、人数確認をしたいのですがー」

「……」

返事ナシ。もしかして居ないのか？

「あのー」

「……どうぞ」

部屋から聞こえるのは弱く小さな声。

「失礼しますー」

ガラガラ戸を引くと、そこにはイーゼルに載った板で張った画用紙に鉛筆を走らせる美術部員が１人いた。

「……」

女子美術部員だ。

しかし美術部は少なくとも４、５人は居ると聞いたのだけども……

「少し、お時間いいですか？」
「……はい」
「ええと、美術部員は今何人在籍していますか」
「……」
はーい、無視。
「……二年生一人と三年生五人です」
ではなくただ単に応答が遅かっただけか。
「二年生一人は……あなたですか？」
「……はい」
「ええと、最近部活を止めた人とか――」
「……二年生が四人辞めました」
「あ、そうなんですか」
そんな一気に辞めるもんかねぇ……
「それじゃ時間を取らせて、すみませんでした」
「……」
「失礼しましたー」
うーむ……不思議な娘だなぁ。
2年ってーことは同学年か、クラスはどこだろうか？
まぁいっか。次の仕事もあるし。　ああ忙しい忙しい。

［※お試しにつき］

＝　数ヵ月後　＝

文化祭直前、何故か俺は駆り出された。

「これ、どう思う？　シモさん」

「ってかなんだよ、その呼び方は」

俺は文化祭で使用するアーチ制作を手伝っている。

まぁ以前話した通りだが、絵はそれなりに描けたので会長に「シモノ、美術部手伝ってきてー」

と、まるでスーパーの買い出しを頼むがごとくに長期間の時間的拘束が決定した。

なんでやねん。

そう思いながらも真面目な俺は、夏が僅かに残る九月に美術部へ訪れている訳だ。

文化祭は十一月。　まだ二ヵ月もあるなんて甘っちょろいことを抜かしやがったら全力で殴る。

二ヵ月しかない上に先輩は殆ど来れず、実質サクヤ一人が為に俺が派遣された訳だ。

「相変わらず、独特の画風だね」

「む、それは褒めているの？」

「二割ぐらい？」

「八割は嘘ってこと！？」
「いや、皮肉」
「ひどい！」

正直言って素人同然の俺から見てもサクヤの絵は上手いとは言えない。
俺は殆ど模写専門だからどうのこうの言えないが、美術部員にしては……だ。
しかし構成能力や創造力は目を見張るものが有って、彼女には度々驚かされる。

そんな訳で、仮美術部員化した俺は今日も口と手を動かしながらアーチ制作に勤しんでいる。

△零（レィ）

立ち位置［藍浜高等学校一年三組］
一人称［？］
髪［茶ショート黒混じり］体［スレンダー］特徴［ソフトボール部、ピッチャー］

■特徴Ｂ
勉強はさっぱり。成績簿にはあひるが並んでいることだろう。喧嘩はほとんどしないが、握力と腕ずもうはクラスの女子一。
女子とは普通に会話をするが、小学校四年生の頃から男子と話していない為男子との会話はしどろもどろ。ほとんど喋ることはない。

筋力はもしかしたらクラス一かも……。
特記［ＪＡＭさん考案・クソゲヱリスタート！追加予定ヒロイン］

＊　＊

なんとか意識が戻った。するとそこは、保健室だった。

「あ、あの……」

側から声を聞こえたので向いてみると――

「……」

茶髪と僅かに黒髪の混じったショートヘアーのソフトボール部のユニフォームを着た女子が座っていた。

「ほ、本当すいやせんでしたぁっ！」

謝られた。

「え？」
「い、いや……あの、ボールを……」
「あー」
「本当にすみませんした……」
「……」

どう返せばいいのだろうか？　なんというかあまりにも謝られるので怒りが沸きもしない。

「保険医は……別状が無いとか言ってたけど」
「そーなんだ、ならいっか」
「え」
「そういえば誰がここまで……？」

女子ソフトボール部員数人動員か？　悪いことさせちゃったかねぇ。

「いえ、アタシが」
「え、一人？」
「はい」

人ってすげえ重いんだぞ？　俺でも男子の平均体重はあって決して軽いわけでもないのに……すげぇ！　めっちゃ力持ちだな！

「ほんとすみません……」

まぁ、しょっちゅうだし。去年はあんなことやこんなことで何回も命落としかけてるんだからまだ良い方だ。

「まぁ、これからは気を付けるよ」
「気を付ける……よ？　え！　いや、なんで！　悪いのはアタシで」
「俺も気付かなかった訳だし、そっちも意識的じゃないんだろ？」
「っ！　そりゃそうだけど……」
「ってーことでお互い様」

……本当は何か違う気がするけど、色々経験しきった身としては謝られただけで十分だ。

「部活途中だよな？」
「ああ、うん……」
「まだ部活あるんなら行ってきなよ、俺は大丈夫だ」
「で、でも」
「ほら、気にしない気にしない」
「……そんじゃ、お言葉に甘えて行かせてもらいます」
「じゃあな、行ってらー」

彼女は保健室を出ると走って行った。遠のく足音がそう物語っている。
そんな訳で彼女と出会ったのはこの時、この瞬間だった。

▲愛坂（アイサカ）ひだまり

立ち位置［藍浜高等学校二年二組・保健委員］
一［自分、私］
髪［］体［スレンダーで作中で珍しくツルペタ］特徴［エロ委員］

■特徴Ｂ
保健委員で手当が得意……というか傷や怪我の手当てをさせたら学校の保健医をも凌ぐとか凌がないとか。
しかし、成長期で興味津津なお年頃。最近男の体に興味を持っており、事あるごとにユウジを脱がせようとする。
√１の中盤からレギュラーに、ちなみにひだまりのルートはありません（キリッ）
√２は話の都合上今後出てくる機会はほぼ無いと言っていいでしょうね（キリッ）

＊　＊

俺は朝っぱらから桐と一戦を交え、負傷しながら学校に辿りつき保健室へと滑り込んだ。

そこには朝早いからと保険医はおらず、保険委員こと愛坂ひだまりが、何故かいるのだった。

「――先生はいないよ……って下之君!?」

「やぁ」

”やぁ”じゃなくて！　なにその深い傷っ」

「まあ」

”まぁ”で返されても分からないから！　はい、そこに座るっ」

言われるままに丸椅子に腰かける。そして消毒液を含んだ綿が傷口に触れ、激痛が走る。

「いてぇっ！」

「下之君ってよく怪我するよね……ドジなの？」

なんともグサりと来る言葉を平然と寄こしてきやがって。

「ふっ、違うな。これは俺の運の悪さの賜物だ」

「いるよね……」

「なにが”いる”んだよ!?　最後まで言えっ」

「いうよね……」

「古いぞ!?　そしてそこまでテンションの低いモノは初めて聞いた」

「みせて……」
「テンション低くしながらも荒く息を吐いて目をギラつかせながらズボンを脱がしにかかるなっ！　やめろって、いやマジでそれは――な、なんでユイがいるんだよ！　見舞い？　でもお取り込み中……って違う誤解だっ！　うわあユキもマイもいるぅ……いやこれはかくかく――言わせて！　少しは言わせて、ぎゃあ」

俺が正座させられ、言葉責めを受けている間。愛坂は異様に嬉しそうだった。

なんだ、俺が尻に敷かれているのが見れてそんなに楽しいのかあ！　ちくしょうめえ、覚えてやがれっ！

▲葉桜飛鳥（ハザクラ　アスカ）

立ち位置［藍浜高等学校三年？組・生徒会生徒会長代行］
一人称［私］
髪［赤ショート］体［少女体型］特徴［ロリ会長］

■特徴Ｂ
ロリな会長、しかし序盤は空気。
完全にラジオ以外出番無し、もう生徒会とはなんだったのか状態だよね。
ラジオも完全になし、√2ではフラグ完全終了でもはやなんで出てきたの？

＊　＊

「シモノキビキビ働くっ！」
「へいへい……会長、三年なったからって威張りすぎじゃないですか？　張る胸はないですけど」
「先輩への態度として不適格な上に、私の身体的特徴をやり玉にあげるなんてぇっ！」
「いや、なんですか。去年から一寸たりとも変わっているようにも見えませんよ。まさか”固定化”の魔法でも――」
「ゼロ〇使い魔の世界観で語らないで！　それに……い、一ミリは変わったもん」
「そうですよね――髪や爪が伸びなかったら吸血鬼みたいですもんね……宣教師を長く長く待たないと――」
「吸〇村の村人でもないわよ！」
「会長はそのままがいいんです」
「え……で、でも早くおっきくなりたいんだよ」
「牛乳飲んで、ドリブルでもしとけばいいんじゃないですか？」
「ロウ……ラノベ攻めみたいだけど、大体が分かる私ってなんなの！？」

生徒会の〇存の登場人物に類似しちゃった合法ロリなキャラですよ、会長。

第３２５話　√ａ－２５　彼女は彼に気付かれない（前書き）

まさかの新キャラ

第３２５話　√ａ－２５　彼女は彼に気付かれない

九月二二日

文化祭まで一カ月とちょっとの今日この頃。
九月の初旬から準備に入っていた生徒会もこの時期を迎えると更に忙しさが増していた。

美術部に依頼することとなった文化祭宣伝ポスターの上りが遅く辟易することもあれば、例年使用していた屋台の老朽化で急きょ発注するハメになったり。
体育館使用団体の申請も受け付け始め、タイムスケジュールの割り当ては早い者勝ちの側面もあって各文化部の部長・副部長すぐさま生徒会へと駆けこんでも来る。
物品を販売するクラス参加の第一次審査（基本的にそれが販売に値する商品かなど）を行い、食品に至っては使用する食材の一覧を制作させ、提出させる。

それを生徒会と文化祭実行委員の二つ機関で動いていく――というにが文化祭裏舞台とも言える。

一年だからとダラけることは出来ず。文化祭実行委員との連絡や書類伝達などは一年の仕事とばかりに放課後は走り回っている。

生徒会にはそれなりの権限があることで、物品の発注は生徒会が行う。各クラスから必要だと言われた物品を文化祭実行委員が許可

し、そうして生徒会を通して業者へと発注する形となる。
　ここまで面倒臭くしなくていいんじゃないか？　とも思えるが、時折クラスからは不必要とも思えるものを希望してくるのでそれを実行委員にふるいに掛けてもらうので、必要な過程ではあるのだ。

「失礼します。生徒会でーす」

　そうドアをノックして開けられたのは。放課後に主に活動をする文化祭実行委員本部（使用していない空き教室を利用）で、俺は資料の受け取りへと来ていた。

「はい……ちょっと待って……くださ い……ね」
「おー、井口だけか」

　机がくっつけられ、どこからか持ってきた収納ケースなどが置かれるも、どこか殺風景なその部屋には一人しかいなかった。同学年の女子生徒で、文化祭関連で最近は行動を共にすることが多くなった人でも有る。
　名字だけしかしらないが――井口という。

「急がなくていいぞ？　井口」
「は、はい……ああっ」

　焦ってか書類が床へと散らばる。それを見た俺はすっと部屋の中に入って、同じく書類を拾いまとめて井口へと手渡す。

「はい」
「あ、ありがとう……」

どこか伏見がちな彼女は、長い黒髪で表情を隠しながらお礼を言ってくる。

「あとは、そのダンボール？」
「は、はい……でも、あ」

俺はダンボールを手に持つと、実行委員本部の

「じゃ、いこうぜ」
「……そっちは重いから私が持つよ」
「いや井口はそっち持っててろって、それじゃ生徒会から男手駆りだされた意味がないぞ」
「……ご、ごめんね」
「いいって」
「……」
「……」

それ以外の会話はと言えば、ない。
彼女は文化祭実行委員で、同学年で、女子生徒で、井口という名字――それしか俺は知らないのだ。
どんな話題を出せばいいのかイマイチに分からず、いつもはこのような沈黙が支配する。

「あ、あの」

今までなら生徒会室や教務員室に付くまで会話などないことが殆どで、切りだすのも俺ばかりだったので、井口の突然の問いに少しばかり驚いてしまう。
それでも驚いていても仕方ないので、すぐさま顔を引き締めて返

す。

「なんだ？」

「あの……下之君は、なんで……生徒会に入ったの？」

意外だ。事務的なこと以外では話さなかったのに、まさかの俺のことと来た。

「そうだな――入ったというより、入れられたってところかな」

「い、入れられた？」

「ほら、姉貴が――いや、副会長が俺の姉だからさ」

「……あっ、下之生徒会副会長。え、下之君って……えっ」

どうやら井口は俺と姉貴が名字が同じだけで、関係ないのだと思っていたようだ。

まあ、似てないからな。

「ああ、俺の姉貴。それで拉致られた」

「ら、らららら拉致！？」

彼女は今までにない大きな感情を露わにした。

「特に気にしなくていいことだと思うから、それは置いておいて」

「え、置いておいていいの……？」

深入りは良くないからな、うん。

「まあ、それでも何にも活動に入って来なかった自分としては新鮮だった……って語りまくって、悪いな」

「ううん」

そう書類の束を持ちながらも首を彼女は振る。

「井口はどうして実行委員に？」

「私……いつの間にかクラスで決められてた」

「ああ、そうか……」

なんか、聞いちゃいけなかったパターン？

「でも……少し楽しいから……結果的にはいいの」

「……そっか、そりゃ良かった」

そうしていつの間にか生徒会室は近づくのだ。

この日辺りから彼女とよく話すようにはなって――クラスと生徒会外では初めて話せる生徒が出来て、少しばかり嬉しかったりもする。

文化祭の準備はまだまだ続いて行く。

第３２６話　√ａ－２６　彼女は彼に気付かれない（前書き）

まさかの

第３２６話　√ａ－２６　彼女は彼に気付かれない

九月二十七日放課後

「ぬぅ……ずっしりだぬ」
「結構腕に来るな」

俺とユイは階段下の倉庫から、何やら小道具の入った段ボールを持ち上げた。
手で持てるほどの大きさのダンボールなのだが、妙に重い。ダンベルでも入っているんじゃないだろうか。

「これを第二準備室じゃろう？」
「ああ、だな」

準備室と言うのは空き教室を利用して使っている倉庫代わりの部屋だ。
使う用具はそこに搬入してあとあとクラスなどに受け渡しをする。

「どっしょ」

ユイが持ちあげ、俺が持ちあげたところで階段を昇り始める。

「そういやこの階段感慨深いわあ」
「ん？　ユウジはこの倉庫に何か用でもあったのか？」
「言ってなかったっけ？　入学して数週間経ってから、姫城さんに告白されたんだよ」

思い出すなあ、俺のことを好きだって言ったのにはドキドキしたぜ……まあその前までの出来事でもドキドキでしたがね、主に死との隣合わせ的な意味だけども。

「マ、マイさんに告白された!?　え、誰が？」

突然に立ち止まり、声のトーンが一気に上がり、眼鏡が反動で揺れる。

……そこまで驚くことか？　まあ姫城さんモテるし、告白されるなんてないだろうけど。

「俺だけど？」

言葉の流れで分からなかったのか？　ユイは変なところ鈍感だなあ。

「えええええええええええええええええええええええ」

「ちょ、あぶねえな！」

驚きでユイは手元からダンボールが離れ、俺がなんとか自分のもつダンボールの上に載せるようにキャッチする。

「え、でも、え？　マイさんはそんなこと一度も……ユキもそんなこと口にしないし」

そりゃそうだ。なにせ、

「フラれたからな」

「フっただと……ユ、ユウジ！　なんてことをっ！」

なんか俺が姫城さん振ったみたいになってるぞ。それはまったくの誤解だって、なんてーかさ。俺が被害者だよ。

「いやいやいや、フラれたの俺。告白された直後にフラれた」

「告白して、フった……？　な、なんでだよ！」

俺が聞きたいって。まあおそらくは殺人未遂・自殺未遂で熱くなって心にもないこと言ったのだろう。

「俺にもよくわからないんだがな……まだふさわしくない、とか言ってた気がする」

「……ふ、ふーん。そういうことか、マイさんはもう一度――」

さっきから傍でみてるユイの動揺が凄まじい。

「てか、さっきから何を焦ってんだ？」

「あ、あせってないっすよ。あせらせたらアセロラロリータ」

動揺しすぎだろう……

「ちゃっちゃと運ぼうぜ、いいかげん疲れる」

「お、おう。分かったぬ」

眼鏡で隠れていて分からないが隣を歩くユイはどこか複雑そうな表情をしていた。

＊　＊

俺が文化祭実行委員の先輩に捕まり、荷物運び要請がでたのでユイとは別れ準備室からは近い実行委員本部へと向かった。

「生徒会でーす……って、また井口だけか」

「こんにちは、下之君」

そう微かな声で、俺に向かって綺麗なお辞儀をする井口。

「ちわ、井口。それで皆はもう駆りだされてるってパターンか？」

「うん……色んな場所に向かってったよ」

生徒会のメンバーこそ少ないが、実行委員はクラス内で二人選出されるので自然と数十名は集まる。

ちなみに我が一年二組は委員長とマサヒロというよくわからない組み合わせだ。

「持ってくのはこれか？」

指したのは紙束二つ、片方が言ってもラノベ十冊分はありそうで（※ちなみに終〇クロではない）それなりに重そうだ。ちなみに、もう片方は七冊分ぐらい。

自然と十冊分の方を持ちあげて。

「それが……第四準備室」

「オーケー、よしっと」

井口がもう片方を持ちあげて、本部を出る。

「手伝ってくれて……ありがとね」

「なに言ってんだ。散々手伝ってもらってすし、お互い様だ」

「うん……」

少しだけ嬉しそうに彼女は頷き、そうして沈黙がおとずれる。
話すようになったせいか、それほどこの沈黙が心地悪いわけではなく。これが普通にさえなっていた。

「あ、あの……あのね」

彼女はといえば話題を作ろうと、自分から切り出すようになった。
大体の質問は「下之君ってどんな食べ物が好き？」とか「下之君ってどんな教科が得意なの？」とか俺のことばかりなんだが……なぜなんだろうね。そこまで俺は面白い人間ではないだろうに。
じゃあ俺が井口のことを知っているかと言えば、少し前に至って現実の女子高生らしい女子生徒と談笑（井口はもともとあまり表情をださないのであくまで微笑）していたり、そのリアル女子高生と集団で食堂に向かうところも目撃している。ちなみに井口はその時俺にほんの少し笑みを浮かべながら手を振ってきてもいた。
そんな内側まで踏み込んだことは知らず、交友関係を知っている程度だ。

「下之君って……覚えてる？　中学校のこと」
「あー……」

何か言いかけて止めた。俺の中学校といえば、二年までそれまでが終わり。三年からこれからが始まった。

「私も……同じクラスの時があって、それで」
「悪い、あんまり中学校のことは覚えてないんだ」

二年までイイ思い出も、印象的な出来事もあったはず――なの

に、二年最後の出来事で全て吹っ飛んでしまった。
俺がやさぐれて、ミユが引き籠る要因になるぐらいのことが。

「そう……そうだよね」

井口はどこか寂しそうに答えた。なーにか有った気がするんだが、どうにも思い出せない。

「じゃあ……そ、そのね」
「ん？」
「下之君って――」

付き合っている人っているのかな？

＊　＊

その数日後、あまりにも突然に文化祭でなにかと便利だからとアドレス交換していたメールで井口に呼び出された。
そして、俺は告白されたのだった。

第３２７話　√ａ－２７　彼女は彼に気付かれない（前書き）

あれ、ユウジクソ主人公化し始めてね？

第327話　√a－27　彼女は彼に気付かれない

どうもナレーターです。お久しぶりですね、え、お前なんかどうでもいいって？
ナレーター術でサウンドオフにしてやりますよ（訳、声帯もぎ取るぞゴルァ）

さてさて前回気になる引きで終わった――え、気にならない？
ナレーター術でアフレコしますよ（訳、お前の人生（アフター）をレコーディングしてやるぞウラァ）

もういい加減進めさせてくださいって。え、もうさすがにいいですよ。
でなきゃナレーター術で殺しますよ（訳、相模湾の鳥の餌にすんぞフワァ）

前々回から現れた井口とかいうモブっぽい女生徒がまさかのユウジに告白。
その経緯には――過去ログ担当ユミジ協力の元、説明させて頂きます。

＊　＊

ここはとある学校……というか藍浜高校の教室です。そこにいる学年色を見るに一年生のようですね。
そんな中、前髪を大きく伸ばした小柄な女子生徒こと井口が、数

名の女子生徒に囲まれるように座っていました。
　周りを囲むのは気の強そうな女子達で、おとなしめの性格の井口が囲まれていると、何か勘違いしてしまいそうですが――この子たちは友人同士です。

「いーちゃん、どうだった？」
「……な、なにが？」

　井口の”井”から来たであろう愛称が気の強そうな一人の女子生徒の口から出ました。
　私も台本を見るだけでは半信半疑でしたが、どうやら本当に友人同士のようです。

「愛しの王子様との文化祭準備はどうかなって」
「お、おうじさま！？　下之君はそんなんじゃっ！」

　いつもはとぎれとぎれの話し方も。今の否定ではとにかく饒舌に喋ります。

「下之ねえ……顔も悪くないし、あの生徒会に入れるぐらいだから結構なヤツだよね」

　この学校の生徒会は完全に組織が出来上がっていて、内部の推薦なしでは役員になれることはない――らしいんでよね。
　半分独裁っぽくなってません？　どこぞの国……あ、とっても身近な国みたいですよ。
　するとその女生徒の隣にいる、平凡そうな顔立ちの女生徒も口を開き、

「アイツ結構モテてるよね……篠文と姫城に愛坂とか」

「うっわあ、そのうち二人は学校の一年組みツートップじゃん……あまりに凄過ぎて嫉妬すら出来ないもんね」
「あ……そうなんだ」
「知らなかったの？　篠文はもう、どっかでモデルやってろよっていうぐらい美人で、姫城は一年であそこまでクールっぽくなれるかってぐらいの美女だね」
「……そっか」
「あとは長身の女友達もいた気がするわー」
「てか下之って副会長の弟らしいよ」
「マジで？　もうなんてーか、すげえなアイツ」
「……」
あれ、ユウジってこんなに株高かったでしたっけ？
ユウジはこう傍観してると鈍感ヘタレ野郎で……ま、まあでもマイファンクラブとの喧嘩とかマイを追いかけた時とかホニさんの時の戦いのときは、すこーしだけカッコ良かったかもしれません。
う、嘘です。やっぱ、違います。
「だ、ダイジョブだっていーちゃん！　いーちゃんだってすっげえ可愛いもん」
「そうだよ、いーちゃん最近下之と話せる機会増えてるみたいだし、チャンスはあるよ」
「……でも……同じ役員の眼鏡の女の子と……仲がいいみたいだし」
「それって巳原？」
おや、ここでユイの話題が出るんですね？
「……うん、たしか」
「そりゃ女友達だよ、あの眼鏡じゃそんな関係にはなれないって」
「てかあの眼鏡、誰も言わないけど、いいのか？」

もう教師の暗黙の了解なんでしょうかね、謎すぎます。

「……女……友達。私はまだ友達にも……」

「いやいや、話せてる時点で友達だって！　下之もそう思ってるって」

「……だと、いいけど」

「そういや下之って彼女いんの？」

「学校のツートップとは話してるの見かけるぐらいで、そんな関係じゃないっぽい」

「……いない、って」

「え、いーちゃん下之に聞いたの！？」

「う、うん」

「脈ありジャン！　告白しちゃいなよ！」

「で、でも……」

「大丈夫だって、いーちゃん可愛いから」

「……本当に、大丈夫なのかな」

「大丈夫だってば、ね、ほらいってみよ」

「え、え……今から！？」

「勝ちが決まってる試合なんだから、さっさと言っちゃお、な？」

「……うん、わかった」

そうして告白する為にユウジの教室へと向かうわけです。

＊　＊

掌に人の字を書きながら、昼休み時間中学校のゆっくりと廊下と歩き。

一年二組の札を見たところで、井口は息をのむ。

「あ、あの……下之君いますか？」

「下之？　……おーい、下之呼んでるぞ？」

「あ、俺？　……おー、井口じゃん。どしたの？　文化祭関係？」

ユウジはといえば、変に律儀なのでそんなことに結び付ける。

……まあ、鈍感だから分からないんでしょうね。

「ううん……ちょっと話したいことがあるの」

「俺にか？」

「うん」

「……分かった。じゃ、ちょっと俺抜けるわー」

といって昼食を終えて談笑していたいつものメンバーに向かって手を振る。

いつものメンバーはといえば、どこか怪訝そうな表情で「あの子誰だろう」といった視線を向けていました。

教室から離れて、またここです。

確かに人気はないですが、ここは何かのポイントなんですかね？

――そう、以前ユウジがマイに告白された地下倉庫前です。

「え……えと、下之君」

「ん？」

この男は……表情で汲みなさいよ！

「私と付き合ってくださいっ」

今まで出したことの無いような大きな声で、そうユウジへと告白をした。
それを受けたユウジというと。
「え……え、それって――」
聞くなんて野暮ですね。ナレーター術ではたき落としますよ（訳、特大のハエ叩きの網目でトコロテンにしてやりますよ）
「好きです……下之君が、好き……です」
それを聞いたユウジは固まります。
なんで、井口からそんなことを？　いやいや、俺はそんな好かれるようなことなんてしてないって。
同姓同名の誰かじゃなくて、俺？　いやいや、俺が女にモテるはずがないじゃん。超平凡――ああ、心詠を試してみましたが思った以上にイライラしますね！
でもあと少しだけ――でも、俺は井口のこと知らないんだよな。好意は嬉しいけど……あまりにも突然過ぎる。
なるほどですね……そしてユウジは顔を引き締めて、思い切りに辞儀した。
「っ」
「ごめんっ！　井口とは……付き合えないっ」
フッた……？

「そ、そうですか……」

先程までの紅潮していた井口の顔が青ざめて行くのが分かります。

「いやっ、嬉しい！　嬉しいけど……俺は井口のこと何にも知らないんだよ、だから分からないんだ」

「……そうですよね」

「だから……さ、出来れば友達から……頼む」

「……はい……ええと、私と友達になってくれますか」

「もちろん。よろしく」

「……ありがとうございますっ」

その時みせた井口の顔は涙に濡れていながらも笑っています。

その表情をみたユウジは悪いことをしてしまった、というような顔で井口を見ていました。

しかし、翌日から井口は学校に来なくなってしまったのです。

第３２８話　√ａ－２８　彼女は彼に気付かれない（前書き）

軌道修正に失敗……なんというか、本当に申し訳ないです

第３２８話　√ａ－２８　彼女は彼に気付かれない

俺は井口に告白された。
しかし俺は彼女のこと知らなさすぎた。もっと時間が経って、もう少し親しくなっていれば――そう思ってしまう。
俺が付き合って彼氏でいれる自信がない。

井口は性格はも良くて、良い子だけど……俺にはどうすることもできないのだ。
この告白を断る行為が彼女を傷つける行動なのは理解している。
それでもこの一回だけで済むように、何も知らない俺が付き合ってから何度も傷つけてしまうぐらいなら――

＊　＊

九月二十八日朝

昨日井口に呼ばれたように、学校へ来ると気の強そうなつり目の女子と三白眼ながらもどことなく普通ない印象の女子生徒が一年二組の教室の前では待っていた。
その女子達には僅かに見覚えがあった。

「おい、下之」
「なんだ？」
「鞄下ろしたら、ついてこい」

この二人は井口とよく一緒にいる女生徒二人だ。井口の性格からして正反対の彼女たちだが、仲は悪くなさそうだ。
おそらく友人な彼女たちに呼ばれた意味を理解し、俺は頷いて。

「……わかった」

いつのメンバーに少し待っててと、昨日と同じように言うと女子と共に廊下を歩いて行く。
人目のつかない空き教室の多い廊下辺りまでやってきて、立ち止まったかと思うとつり目の女子が口を開いた。

「下之、呼ばれた意味が分かるか？」
「……井口か？」
「そーだ、わかってるじゃん。で、なんで私たちが呼び出したかは分かるか？」

上から目線で、そしてどこか怒っているようにも見える。
それならば俺だって低い姿勢の必要はないだろう。

「俺が彼女の告白を断ったからだろ？」
「なにサラッと言ってんだよ！　なんでだよ！　いーちゃ……井口はそんなに悪い女だったか！？」

俺の返答が気に入らないのか、大きな声で彼女は怒鳴る。

「悪い子じゃないのはわかるけど……俺は彼女のことを知らないんだよ」
「はぁ！？　付き合ってから知ればいいじゃん！」

まあ、そういう考え方もあるんだろうな。だがな、

「俺はなりふり構わず付き合うつもりはないからな」
「その言い方はないと思うんだけど！」

俺は臆病なんだ。
きっと井口と付き合ったとしたら……井口は絶対に不幸になる。

「悪い、俺は何も知らない彼女と付き合って、傷つけないでいる自信がないんだよ」
「……傷つくって、自分が傷つきたくないからなんじゃないか」

その返しにはズキリと来るものがある。
まあ、そうだな。俺のせいで傷ついた人を見たくない――そういうことなんだよな。

「こんなヘタレな男よりも、もっといい人はいるだろうから――」

そう、こんな男に固執する意味なんてないだろう。

「そんなんで……そんなんで納得するわけないじゃん！」
「どうせそれも、傷つけたくないから――ってな、要らない気遣いなんだろ！」

否定は出来なかった。

「じゃあ、お前たちはなんでそんなこと俺に言うんだ？　井口がそうしてくれって言ったのか？」
「そ、それは……私たちの意思だよ！」

こいつらは本当に井口のこと気にかけてるんだな。

「少し話した程度だからうるさくは言えないけどよ、井口はそんなことされて喜ぶか？」
「……」
「俺はクラス外での話相手がいなくてさ。だから井口と放課後時々に話せて嬉しかった」
「それなら！」
「だから……いい話相手でいてほしかった」
「……あんたの考えだけじゃん。井口のことは考えないのかよ」
「悪い、もう話しは終わりだ。とにかく俺は井口とは付き合えない――」
「ちょ、ま――」

＊　＊

ユウジのあの返しは……どうなんでしょうねえ。
ユウジは鈍感ですから、気配り出来ずに傷つけるってことは有り得そうですね。

見切り発車のように、よりにもよって文化祭準備に途中に告白させたのが、タイミングが悪かったんじゃないですか？
あとは……そうですね。口には出さないけども、ユウジに気になる女子が居た――とか？

「下之のヤツ！」
「あんなヤツだったとはね」
「……たしかに私たちがけしかけたけどよ、付き合っている人いないし、大丈夫だと思ったのに」

「知らないからって……まあ急かし過ぎたのはあるかも」

二人冷静になりつつも、自分を省みる。

しかしそんな時、釣り目の方が気付く。

「知らないからの一点張りだったけど……もしかして好きな人がいるんじゃないか？」

「っ！　あるかもね、じゃあ誰？」

「一年ツートップは……あれだけ近くにいるのに何にもないし」

まあ、アプローチはかけてないですが。据え膳ですよねえ。

「そういえばいーちゃんが言ってた。下之の教室で話してる聞いたって……確か」

「好きなタイプは気軽に話せる子だって」

「それに最近は同じ役員の眼鏡の女の子と仲がいいって言ってた」

あ、それってまさか――

「……まさか巳原か？」

やっぱりユイでしたか。

「いやいやいやあの眼鏡だぞ？」

「いやでも、もしそうだとしたら……」

「あんな奴のせいでいーちゃんフラれるとか……意味わかんねえ」

「腹たってきた……むしょうにな」

「私もだ」

「行くか？」

「だね……アイツらも黙ってないだろうし」

二人はそう言って教室を出ます。なにか嫌な予感がします。
友人の為にとはいえ、お節介の過ぎる彼女たちは――

そして翌日、ユイの机にはマジックで大きく落書きがされていました。

第３２９話　√ａ－２９　彼女は彼に気付かれない（前書き）

シリアスかと思った？　残念っ！

第３２９話　√ａ－２９　彼女は彼に気付かれない

「えと……はい？」
「だから、お前のせいでいーちゃん傷ついたんだからな？」
どうもユイだ。なぜか見知らぬ女子勢に囲まれて、アタシのせいでいーちゃんが傷ついたんだと言ってきた。
その中のつり目の女子生徒が続ける。
「あなたの存在のおかげで……いーちゃんは心の傷を！」
「あの、いーちゃんって誰？」
次にはモロお穣さまですよ的なキャラが出てきた。
「いーちゃんさんを知らないとは……本当にこの学校の生徒ですの？」
さん付けしてるけど、いーちゃんって名前なの？　イーチャン？　外国の方？
「いぐっちゃんはですわね……」
「あのー、呼び方変わってますよ」
「お黙りなさい！　ともかくあなたがいぐっちさんの片思いの相手である下之ユウジの近くにいるせいで！」
「ちょっとまって……ユウジ？」
「ええ、そうですわ。ちなみに下之ユウジ様の隠れファンも兼ねてますわ」
「ユウジの……ファン？」

それと少し前までただのフルネームだったのに……今は様付け？

「殆どの生徒が成れないという生徒会役員な上に、顔立ちも悪くなく、それでいてお姉さんはあの下之副会長！」

「あー……そうなんだ」

「当初こそストーカー行為をゼロナンバーと行っていましたが、今は遠目に見守っていますのよ！　しかしゼロナンバーは今では下之ユウジ様の近くにポジションを確保出来るとは……流石一年ツートップの片方とも言えますわね。しかしゼロナンバーも一度好き過ぎて殺しに――」

ユウジってモテるんだ……本人は全く自覚ないようだけども。

アタシが知り合ったのは去年だけども、なんというか複雑だ。こうもやもやーっとした気持ちになるのはなんでなんだろうな？

てかさっきからゼロナンバーってなに!?

「それに下之ユウジ様は中学校時代にいぐっちゃんを救っておられるのですよ」

「ユウジがいぐっちゃんを救う……？」

少なくとも、ユウジとの一年間はただただ過ごして来ただけなんだがなあ。

「しかし下之ユウジ様はあの事件のショックで――おっとこれは隠れファンでもシングルナンバーしか知らないことですね」

何桁あるんだよ！

「……しかし今は、いーちゃんファンクラブメンバーとしての働きですわ。巳原ユイ！　あなたのせいでいーちゃんは下之ユウジに振

られてしまったのです」

いーちゃんの話題に移ったからユウジの様付けは止めるのね、なんというか律儀というか――って、えええええええええええ。

ユウジにいーちゃんとやらが告白!?　それもユウジはフッただって!

「ど、どゆことだ……ユウジがだなんて」

「ええ、そしてその要因はあなたなのですわ!」

「え、え?　アタシ?」

「下之ユウジは最近、長身の眼鏡女子生徒と仲が良いといーちゃん情報が、いーちゃんの友人兼ファンクラブメンバーのシングルナンバーの釣子さん（釣り目の女生徒）からメールマガジンで配信されましたの」

なんだその芸能人も真っ青な本格的ファンクラブは!

マイさんとユキが有るのは知ってたが……いーちゃんとも有るなんて。

……って、長身の眼鏡女子生徒。アタシの知る限りなら――

「アタシ?」

「そうなのですわ!　一体下之ユウジ様……下之ユウジとは一体どんな関係なのですの?」

一瞬ユウジファンクラブに戻ったな。

「いや、友人かと」

「それではあなたは下之ユウジをどう思ってますの?」

「ア、アタシ?」

ユウジは……いい友人だと思うぞ？
オタ会話も十分話せるし、面白いし、困った時は助けてくれるし、それなりに頭も切れるし、まあまあカッコいいし。
……いいヤツだよなあ、ユウジ。ただただ鈍感とヘタレっぽくなるとこが無ければ最高なんだがなあ。

「友人だよ？」
「嘘おっしゃい！　顔にかいてありますわよ……あなた恋してますね」
「嘘らっしゃい！」
「その返しの意味は分かりませんわ！」
「それで、いーちゃんとやらがフラれたのがアタシが原因だとして……どうなるんだ？」
「それは――明日を楽しみにすることですわ」

九月二十九日朝

アタシはいつのメンバーで学校へとつく。

「……うお、本当に」

机を見ると「しね！」「殺す！」とかでなく――よく分からないアートが書かれていた。
しかしその見え方が凝っていて、ある一定の方向からしか見えないというこだわりよう。

「どしたー、ユイ」

「な、なんでもないずー」

ユウジの位置からは見えていないらしい。

「作……サクヤ？」（※藍浜中学校より出張お絵かき、ただ絵をかいただけです）

なに、この”あの画伯”一歩手前のアート溢れた絵は。

黒と赤の線が交わったり、ぶつかったり、弾けたり、スパークリングしてる（？）

更に水性だから持ってきたお茶をぶっかけてティッシュで拭いたら普通に落ちた。

「机の中は……と」

そこにはパンが――腐っていない至って小奇麗に袋詰めされたパン。

「（賞味期限が昨日か）」

もしかして、そこがポイントなのか？

「あとは……」

吊るしてある教科書が入ってるビニール袋が反対側に掛け直されている。

「しょ」

しょっべえ！

なにここまでのソフト演出。何かに規制されたの？　もしかしてスタッフの琴線に触れたとかそういう系！？

「（うーん……お）」

机の中を探ると、見慣れないノートが現れる。

「（えーと……）」

”これは自前で用意したノートに書かせて貰っただけですわ”

なんてーか、とことん良心的なイジメだなあオイ。

”ここから先は罵詈雑言に溢れていますわ、それでもよろしいですの？”

だからそのR指定のサイトの入場の年齢確認バリの良心的設計はなんでなのかと！

ちなみにアタシはエムっ気があるので、何を言われても大抵は快（自粛）

「（まずは……と）」

ノッポオタク。

「（お、おう）」

ノッポグルグル。

「（う、うん）」

ノッポスタイル。

「（なんかジャンル別けされてんの？）」

仮面オタク。

「仮面ねえ……」

これは、字面よりもグサっとくるもんだな。

確かに……アタシがオタクを始めたのだって、それほど自然なものでなく――狙ってやったものだからな。

「はぁ」

「（……なんかユイの奴元気ないな、どうしたんだ？）」

遠目に見ながら、ユウジはそんなことを思います。

「（井口はあの後学校に来てないみたいだし……やっぱ俺は不幸にしかさせないんじゃねえかなあ）」

なんかユウジがネガティブだと気持ち悪いですね。

しかしユウジは、体育倉庫事件辺りからずっと気にかけてるんですよね――え、誰をですって？

分からないなら、読み返してみるといいかもしれませんね。

まあこれが推理モノだったら、書くの止めちまった方がいいと思う程に稚拙ですけど。

第３３０話　√ａ－３０　彼女は彼に気付かれない

アタシは、つまらない人間だったんだよ。
何にも好きな事がなくて、コミュニケーション能力も皆無で。
小学校でも、話す友人なんていなくて。中学校でも二年生までは、友人と呼べるものがいたとは思えない。
そんな時にさ、いつまでも根暗女じゃ良くないって思って決心をしたんだよ。だからアタシは偽るんだ――

＊　＊

九月三十日朝

「……またか」

自分の机に描かれたよくわからないアートをみて、溜息をつく。
今度は黒一色で、これまた線と線が交差していて何百年後にも残っていたら、なぜか評価されそうな独創性に溢れている。

「（鉛筆描きかよ）」

な、なんだか地味にレベルアップしてるぞ？

「で、机は……」

おにぎり。そして、それは今日賞味期限を迎える物だった。

「（ん……ツ、ツナ高菜（梅）？）」

ツナのコクと高菜のピリ辛、そこに日本では長いこと親しまれている梅干し（種入り）。

……こんなゲテモノ系売ってたんだ。包装は湿気にくくする機構のついたもので、見た目は普通に売っていそうだ。

「ノートは……」

大学ノートからルーズリーフになってる。

昨日移動した机の横に吊るしてるものは、元の位置に戻ってるし。

さらっとウル◯ラクリーンでこすると日が浅いので鉛筆はすぐさま落ちた。

「マタセタァー」

そうしてアタシはいつものメンバーの元へと向かった。

＊　＊

「ユイ、最近どうしたんだ？」

「ユウジなんぞ？」

「いやさ、なんとなく浮かない顔してるところ良く見るからさ」

「ぬ……そんなことないぞ？　アタシはいつも笑顔だ、見よ！　このキラキラと輝く瞳を！」

「みえねーから、そのグルグル眼鏡で残念な事に」

「にぱー」
「口と顔の筋肉を見るに……笑っているだとっ」
「その解説のしかたどうなんだ！？」

ユイとそんな感じにコント風会話を繰り広げている。
今でこそ元気というかテンションは高いのだが……さっきの机から取り出したノートを眺めているときの憂いを帯びた……目？　ではないな、表情というか……うーん？
それでも何故かユイが、それをみて喜んでいるようには見えなかった。

「（それに机にちらっと何か見えたような）」

気がするんだが……今見ても何もないし。

「（後で……聞いてみるか）」

＊　＊

アタシは授業中、机に入っていた昨日よりもレベルアップを果たしたＧＵＣＨＩＮＯＴＥを読むことにした。
なんで読むんだろうな……開かなきゃ、別に何の害もないのに。
それでも、なんだろうな。なんか……ユウジといーちゃんのファンとやらに悪いというか。
八つ当たりなのかもしれないが、アタシだって思い当たってしまうところはある。

「（考え過ぎなのかもしれないけどぬ）」

それぶ今までよりも、ユウジと話す機会も。一緒にいる機会も増えているのだ。

そんな時間がアタシは嫌いじゃない――いや、楽しい。

いつものメンバーで話す時もいいけど、ユウジと二人話す方が楽しいのかもしれない。

「（少ししたら飽きてくれるだろうし、それまでは）」

まずは、と。

『あなた下之様にベタベタと生意気だわ、オタク女の癖に……でも下之様もオタクですわね――とにかく馴れ慣れしくしないで頂けますこと？』

まあ、間違ってない。

『あなたのせいでいーちゃんがフラれてしまったんですよ、どうしてくれるんですか。そのせいで私体重が二キロも増えてしまってんですよ！？』

いや、後半のそれはアタシのせいなのか？

『久しぶりにキレちまったよ……屋上に行こうぜ』

場所指定したというのに、時間指定は書いてないという。それにこの達筆なのか漢（オトコ）らしいだけなのか分からない、ダイナミックな字運びで描かれている。

『その眼鏡取りなさいよ。もっと良い眼鏡があるじゃない、ほら眼

鏡市〇――』

宣伝……？　声に出さずに苦笑しながらも次のページをめくる。

「っ！」

そこには綺麗な字で、罫線に気持ちいいほどに整って書き綴られている文字があった。

しかしそれはどうでもいいことで、内容が――アタシにとっては、グサりと来るものだった。

『元根暗女がテンション高めのオタク女を演じるのはどういう気分？　教室の隅でつまらないほどに勉強だけしていたのは誰だった？　その眼鏡を取ったらどうなるのでしょうね……またあなたは何もなくなるんじゃない？　でもいい加減にその仮面外したらどう？　知っている私からしたら見苦しい。素顔を晒す気もない者が下之の近くにいて、井口さんが振られる要因になったなんて……本当になんなんだろうね？』

そんなことが書かれている。

アタシの昔を覚えてる……？　いやでも、存在感が皆無だだったアタシがこんな風になったことに気付いた人なんて今までに誰にもいないはずなのに。

アタシが眼鏡を取ったら……それはもう、個性がなくなるに決まってる。素顔なんて明かせる訳ないじゃん。ユウジだって言わないだけで本当は――

「……」

そう思ってくると、悲しくなってきた。虚しくなってきた。

ユウジは優しいからな……そう簡単には口に出さないか。
でもアタシは、いつまでもこの仮面を被り続けることになるのだろうな。

「（はは）」

今のアタシはどんな顔してるんだろうな。いつも以上につまらない顔してるんだろうな。
沈んだ心で、読み進め。そのページの最後にはこう書かれていた――

『今日三十日の昼休み、体育倉庫前に来い。さもないと、あなたの過去を明かす』

……拒否権はないんだろうなあ。
今までのは本当にちゃちいものばかりだっけど、今回は本格的なアレなのかもしれない。

「（仮面を被ったとしても……まだ、まだ被らなきゃいけない！）」

＊　＊

アタシは体育倉庫の前までやってきた。以前ユウジやロリ会長と用具清掃をしたところの前だ。
そこの周辺には昼休みだけども、校舎から遠いので生徒はあまり使わないグラウンドが面している。

「（なんか後ろから視線を感じるな……）」

双方のファンクラブメンバーの視線だろう。
そうしてアタシは辿りつく。

「来ましたわね」

そこには複数の女子生徒が待ちかまえていた。
まず話しかけるのは、以前一番喋ったであろうお嬢さま系の女子生徒だった。

「本当に気に入りませんわね……あそこまでやられてなんとも思いませんの？　正直におっしゃいなさい！」
「いやごめん、正直に言うとしょぼかった」
「な……机に描かれた絵も授業の邪魔にならなかったの？　机に入っているパンのせいで昼御飯が増え得えてしまったんじゃなくて？　吊るされている袋の位置が移動していて、調子も崩れたでしょう！」
「ごめん」
「謝るんじゃないですわぁー！」

この人絶対に素でいい人だな。

「あのノートは堀内さんに任せましたが……どうです？　効果はありましたか？」
「ああ……」

序盤こそ苦笑レベルだが、時折あるものにはな。

「ここに来てもらった理由も、まずはその眼鏡が気に入らないのですわ！　そんな縁日の屋台で叩き売りされているような渦巻き眼鏡

を付けていて……恥ずかしくないのですの！？」
「慣れちゃった」
「そういうのは慣れちゃいけませんわぁ！」

いい人で面白いとか……この人嫌いじゃない。

「さぁ、それではその眼鏡を外して醜態を晒すのですわ！」
「ごめんなさい」
「謝られてばっかりですわぁ！？」
「これは、アタシの個性だから外せない」
「……そうなのですか、それではなおさら外してしまいましょう」
「許して下さい」
「淡々と謝罪の言葉を述べるんじゃないですわぁっ！　この者から早くに眼鏡を取りあげなさい！」

するとお嬢さま系の後ろで黙って待っていた女子生徒が一斉にやってきた。

「や、やめろ――」
「はやくその素顔を見せるのですわぁ――」
「本当に、それは……ぁ」
「今ですわ！　――取りましたわぁ！」

カシャッという写真のシャッター音と共にアタシの素顔が皆へと見られて、周囲の空気と動きが固まった。
アタシは見られてしまったことで、顔を隠してしゃがみこんだ。

「な、なんですって……」

お嬢さま系が、何か信じられないような声をだした直後――

「おい、そこまでだお前らぁっ！」

ここにいないはずの男子の声が響き渡る。

それはアタシのよく知ってる、一人の友人で、馬が合って、時々頭がキレて、優しくて、アタシが最近気になってしまってる――

「……ユウ……ジ？」

第３３１話　√ａ－３１　彼女は彼に気付かれない（前書き）

エンド近し！

第３３１話　√ａ－３１　彼女は彼に気付かれない

「おい、そこまでだお前らぁっ！」

俺は物陰から飛び出て、声を張り上げてそう叫んだ。

「……ユウ……ジ？」

しゃがみこんだ涙目のユイがこちらを見ている。

ああ……もう、いいよな？　正直にストレートに言うぞ！

「ユイ、可愛いだろ！」

どや顔でそんなことを叫んだものだから、周囲がざわつきはじめる。

「下之君……え」「か、可愛い？　……たしかにそうだけど」「計算外ですわ」

それを聞いたユイは「えええええええええええ」と素の声で驚いている。

「ということで、これ以上ユイを弄るのは止めてくれないか？」

「ということよりもどういうことなんですの！？　そもそも下之ユウジ様はなぜここにいるのです！」

お嬢さまを具現化したかのような女生徒が現れる。

さりげなく様付けされてるけど……姫城に言われてるとあんま違

和感ないわあ。
　本当はおかしいんだろうけど。
「尾けていたのさ！」
「え、じゃあまさか……」
　俺が言った直後にユイが反応していた。そう、俺はユイの背後にいたのだよ！
「なぜこの者を庇うのですっ？　このような……結構に可愛い……卑怯ですわ」
　ユイの可愛さは俺が太鼓判だからな。俺も素直になることにしたんだ――可愛いものは可愛いってな！
「そ、それでもっ！　それではいーちゃんはどうなるのです！？」
「あ、メールで学校に来た方がいいよって言ったら明日来るって」
「……メール？　いーちゃんのアドレスを知ってますの？」
「ああ、文化祭準備でなんだかんだで連絡手段は必要だからな。で、風邪ひいてたらしい」
「……え？　風邪？　でも、いーちゃんは下之ユウジ様に交際を断られて――」
「俺も気にしてたんだけどな。ショックで休んだってのは誤解らしい」
「……は、話しが違いますわっ！　メールマガジンを配信した釣子はどこですの！？」
　釣子ってもしかして釣り目の井口の友人のことか？　なんて……なんでもない。

「で、これ以上ユイに手出しするってなら俺が黙ってないからな？
なあ――委員長」
「！？」

ユイが驚きの表情を見せて、後ろを振り返ると我が一年二組の学級委員長こと嵩鳥（タカトリ）が歩いてやってきた。

「知ってたんだね」
「ああ。すまん、ユイが出て行った後に机に広げられていたノート見ちまった」
「え、え？」

ユイは未だに状況を理解出来ていない様子だ。
俺はノートを見て、信じられないが俺のファンクラブが冗談半分でもあることが分かり。井口のファンクラブらしきものもあることを理解した。
そして見開かれていたページには、

「委員長の字はクラスでの決めごとのときに良く見るしな、それに――俺と委員長はずっとクラスが一緒だし、言ってなかったが二年生の俺のクラス名簿にユイの名前もあった……気付かなかったがな、ということは委員長がユイの以前を知っている可能性は十二分にあるわけだ、そうだろ？」

委員長も文字が躍っていた訳だ。

「その通りですよ、ではなぜ私はそんなことをしたのでしょう？」
「いーちゃんファンクラブのメンバーなんだろ？」
「いいえ――下之君ファンクラブの方だよ」
「……俺？」

「はい、私下之君好きですから」
「……はいぃ？」

あっさり、そんな告白しないでくれ。それじゃ――
完全に俺は茶化されてることが分かっちまうだろ！
気付かなかったが、こいつぁ悪女だぜえ。

「おっと、バレてしまったからにはここにいても仕方ありません」
「なんだその雑魚敵の去り際の台詞みたいな――」

そう言いかけて、通り過ぎる委員長の口が俺の耳元へと近づき。

「――じゃあ下之君、このシナリオ中はお幸せにね」

そんなことを言ったのだ。シナリオ？　なんじゃそれは、何か暗喩してるのだろうか？
気付くと委員長はどこにもいなくなっていた。そして俺も後を追うように、

「じゃあ、ユイ戻るぞ」
「あ……」

俺は手を指しのべて、ユイの手首をしっかりと掴んだ――
今まで色々聞かされていたユイは顔を真っ赤にして焦っていた。
ユイは察しもいいんだが、不意打ちとかは苦手そうだからなあ。

「じゃあ、失礼しやしたー」

俺はユイを連れて体育倉庫の前を去った。
後ろでは唖然としている女子勢がいたが、気にしないことにする。

＊　＊

休み時間も終わりに近づき、辺りには誰もいないグラウンドを歩いて行く。
すると手首を掴んでいたユイはそれを振り払って、眼鏡越しに抗議の声をあげる。

「ユ、ユウジっ！」
「どした、ユイ」
「いきなり……か、可愛いなんて嘘でも言うなっ！」
「……いや、嘘じゃねえよ」

そう言ってキザったらしく、俺はユイの眼鏡を取った。

「あ、返してっ」
「お前は自信持って無さ過ぎ。この顔を眼鏡で隠すとか、勿体なさ過ぎて全身から血が噴き出して死にそうだわ」
「こっちは恥ずかしくて死にそうだ！　……あんなに衆目の前で、あんなあんな――」
「眼鏡のお前はユニークだけどな、素顔のユイもいいと思うぞ？」
「そ、そんな……眼鏡取ったら、アタシなんて個性が無くなって――」

気にしてるなあ。そういやバレた時も似たようなこと言ってたっけ。

「なあ、俺が後から出てきたのはな――見せ付ける為な？」
「え」
「ユイの顔見て皆どんな反応したか？　驚いたり、あのお嬢に至っては可愛いとか言ってただろ？」
「そ、それは――」
「十分個性あるじゃんか、そりゃ……眼鏡ユイのインパクトは凄まじいけどな。でも二つの顔でユイだと俺は、ユイの素顔を見てから思ったんだよ」
「……ユウジ」

利用してしまった、ユイをそのせいで少し傷つけてしまったかもしれない。
それでもあのサウンドオンリーな体育倉庫に、目覚めの素のユイ、お祭りのはしゃぐい素顔のユイ――それも俺から見れば可愛かった。
これで個性がないとかいうものなら、贅沢って話だ。

「それなら俺の方が個性がないだろ？　ただの平凡な男子高校生だぜ？」
「そんなことないっ！　ユウジは面白くて、時々頭がキレて、かっこよくて、優しくて……気、気になってる――」
「……そっか」

眼鏡を取ったまま赤面するユイは間近で見ると破壊力が凄まじかった。
もう勢いに任せてしまおう、ここまでするのは友人だから――いや違うだろう。俺は気になってしまったいたのだ。
着実に、ユイの素を見てしまう度に。もっと知りたいと思ってしまった――だから。

「ということで、好きだユイ」

人生でも数度ないであろう告白はそんなあっさりとしたものだった。

「うん……って言うわけないよ！　な、なんでそんなことといきなり！」

「ユイだって”〇〇はアタシの嫁”って良く言ってるじゃん」

「それとこれとは違う！　そんな……そんな気分で言っちゃいけないことだよ、それは」

「……気分じゃないぞ？　ユイは可愛いって連発しちまったからな、吹っ切れた」

「吹っ切れすぎだよ！？」

「じゃあ、まあ答えは諦めてるけどな。これで俺も失敗したし――」

ただ伝えたかった。その場任せでも、プライドが人並には有ってしまう俺は言う機会なんてなかったから――これでいい。

「……好きだよ」

ぼそり、零れるように言葉を口に出すユイを俺は聞いていた。

「アタシも……ユウジが好きだよ」

「やたー、成就」

「喜び方、雑っ」

「まあ、付き合ってもなんだかんだ変わらない――」

「でも、アタシは――ユウジとは付き合ってはいけないよ。今までアタシは嘘をついて、それに他の皆も――」

他の皆〜は聞きとれなかったが、ユイは嘘をついていると言った。
「嘘？　……も、もしかして男でしたとか？」
「女だよ！　こんな成りでも女ですよ、悪かったよーだ！」
「いや、こんな可愛い子が男の子がわけがない」
「……ユウジは平気で恥ずかしいこと言うから嫌い」
「嫌われた！？　素直に言っただけなのに……あとあと思い出したら頭を壁に打ち付けそうだけど」
「半分は冷静なんだな……いや、アタシはさ」

ユイは話した。
自分がオタクになったのは誰かと話したいから、もともとそんな趣味なんてなかった。
アニメを見ることは時々あって、テレビをつけてやっていれば見るけれど、趣味程ではなかったと。
だから違う自分を作った。ハイテンションで空気が読めなくて——オタクな自分を。

そのためには口調も変えて、声も出せるように練習して。
某巨大掲示板も入り浸って、アニメも見る本数を増やして。今まで貯めに貯めていたお金でアニメのＤＶＤもコミックも買い漁って勉強した。
もの覚えだけはいいアタシは、すぐに覚えられて——三年生の新学期に試してみた。

オタクな会話をするユウジとマサヒロの輪に無理やり入るように。
でも、それから二人は話し相手に、いい友人になってくれて——毎日が楽しかった。

「嘘……ねぇ」
「偽った自分を見せ続けてたんだ、それは嘘だよ」
沈むユイに俺はふと疑問に思って聞いてみる。
「なあ、ユイは今アニメとか好きか？」
「え……そりゃ、大好きだよ？　アニメもギャルゲーもコミックもラノベもぜーんぶ好きだ」
それなら……全然問題でもなんでもないじゃねえか。
「じゃあ、それはもう真実だ」
俺はそう考える。
「でも、だって！」
「嘘が真実に変わることだって――有るに決まってる。演技がいつの間にか自分になってることもあるだろ。少なくとも今までのユイも素のユイも、ユイには違いないんだから」
「……」
「自信持てよ、ユイはすげえんだから。アニメも大量の本数見れるし、それも覚えてるし、スタッフまで言えるし――勉強も出来て、頭もキレて、可愛いじゃねえか」
「……」
俺がそんなことを言っていてもユイは黙りこくったままだった。
すこしの間が有ってから、ユイは顔をあげて、

「本当に……アタシでいいのか？」

これは付き合ってＯＫということなのだろうか？

「もちろん言いに決まってる。だから告白したんだ、だからあの時に友人になれたんだ――俺だって人を見る目はある」

「……甘えちゃうぞ？　アタシはこれでも乙女なんだ」

「ぶっ、乙女って」

「わ、笑うな！」

「まあ、否定はしないな。正真正銘のオタク乙女だ」

「オタク乙女って……まあいいや」

ユイの素が、俺の隣にはある。

「じゃあ、こんなアタシをよろしくな。ユウジ」

今までのユイも、俺の隣にはいる――今まで見た中でもとびきりの笑顔を浮かべながら。

と、いうことで俺たちは付き合いはじめたのだった。

第３３２話　√ａ－３２　彼女は彼に気付かれない

十月一日朝

「ということで、俺とユイは結婚しました」

あの後は平然と過ごし、気取られないように気を使いつつ一日を終え。

示しを合わすようにして、翌日いつものメンバーにユイを隣に据えてそんなことを言った。

「「えええええええええええええええええええ」」

むふふ、驚いてくれてる。

そして俺の狙い通り、いつのメンバーはそれぞれ笑い始めた。

「いやいやユイ、それはないって」

「冗談過ぎますよー」

「ねえって」

三人とも大ウケだ。

「結婚って……ユウジは出来ないでしょー」

「そうですよ。実際ユウジ様と子作りするのは私ですから」

「いや、姫城その返しはどうなんだ？」

……本当にどうなんだ？

「「ないよねー」」

シンクロを見せる三人は、この後の展開を考えるとニヤニヤしてしまう。

と、いうことで――

「ということで、俺とユイは付き合い始めました」

「「ないよねー」」

またもやのシンクロ。

「いや、それはガチで……な？　ユイ」

「……うん」

隣のユイはさっきから顔を赤くして俯いてしまっている。

俺もさっきとは違って至って真面目な顔を形作っているはずで――その変化に気付いたメンバーは冷や汗を流し始める。

「……え、本当に？」

「冗談ですよね？」

「嘘だろ……？」

そうして俺はそれを無言の返答で返した。

「「えええええええええええええええええええええ」」

教室中に響く驚きの声はやはり重なり。

「いつ!?　いつのことなの!?」

それに答えるのはユイで。

「昨日の昼休み……だぬ」

「そ、そんな……素振り見せてなかったのに」

「ドッキリ狙いだったのう」

まあ、いきなり明かすのも変だしな。

ユキも「このまま何もないと思ってたのに……そんな」

「告白はどちらが先なのですか!?」

「……ユウジから、な」

「っ!?　あ、ああぁ」

姫城がガチでショック受けてる……

「その後にエッチな――」

「マサヒロは質問不可」

「なんでやねん!」

マサヒロは少しばかり憤慨しているが、放置。

「でもアタシもさ、突然にユウジかっさらうってのも忍びないから――出来るものなら寝とってくりゃれ!」

……寝取り?

「いやいやいや!　ユイ、それは聞いてねえ。なに寝取りってユイ

をか？」
「ううん、ユウジがだ」
「おかしいだろ！　せっかく付き合い始めたってのに――」
「アタシは手放すつもりはないが、ユウジ次第だっ！」

いつものテンションに戻ってそんなことを言うものだから、俺は呆気に取られてしまうわけだ。
それは予想だにしないわ。

その言葉でいつのメンバーは回復し始めるわけで、なんでだよと思いながらも構えていると。

「そ、そっか……チャンスはあるんだね！　ユウジ覚悟しててっ」
「いや、何を！？」

ユキがなんかズビシと俺に指差してそう言った。人に指を指すのはよくない――って何を覚悟すればいいのかと！？

「既成事実さえ作れば、こちらのものです」
「！？」

き、聞こえなかったことに――姫城のキワドイ発言に冷や汗をかいていると、

『チャラチャラーン』

ポケットの中で携帯が鳴り始めた。この着信音は……？
メールで、それも井口からだった。

『私、諦めてないですから』

とだけ一文書かれていた。
更には教室の外の扉辺りにどこか見慣れた、先程メールが来たばかりの人物の人影が――

「はは……」

な、なんなんだ。この状況は。
これじゃまるでギャルゲーの主人公みたいじゃないか。俺は至って普通に高校生で――
怒涛の展開に困惑していると、

「でもアタシだって寝取り対策を講じないわけではない――ユウジ、本当にアタシの素顔は悪くないんだよな？」

ほんの少しの不安こそ見せるが、この話題に触れることもなかったユイがそういうことを言うのだから変わったものだ。

「ああ、もちろんだ。みせてやれ」
「よっしゃ、これがアタシだぁー！」

そうしてバシッと眼鏡の柄を掴んで顔から眼鏡と取ると――

「「えええええええええええええええええええええ」」

今度は教室中が驚きに沸いた。
そこには憎たらしいような、可愛らしいようなドヤ顔なのだろうが、清々しい笑顔を浮かべるユイがそこにはいる。

第３３３話　√ａ－３３　彼女は彼に気付かれない（終）

「フフフ、冬が来たぞぉー！」

相変わらずのハイテンションでクルクル廻る女生徒が俺の前には一人。

「いぇーいっヤホージャパァァン」

「とりあえず近所迷惑だから、黙った末に落ち着け」

「わかったでら！」

謎の語尾とともにビシっと右腕をくの字に曲げ敬礼する女生徒が俺の近くには一人。

その女生徒はグルグル模様の蚊取り線香よろしくな伊達眼鏡を掛けている。

通学路を進んでいると今は葉を散らした並木が並ぶ、そしてコートを羽織るのに体が時折ブルッと増え得るほどの冷たい風は冬の訪れを確信させる。

「いんやぁ、桜は今日も寒いですなぁ」

「そーだな」

今日も冬風と歩く。

「……コガラシって、辛さ控え目な辛子みたいだな」

「否定はしないけども、すげえどうでもいいな……その発言はユキホイホイなので自重してくれな」

あまくち暴君ハ○ネロとかって、もう暴君でもなんでもないじゃないか。

ユキは根っからの辛党で、その話を聞きつけると飛んでくる……なんというかね、ユキのあまりにも浮いた要素だよなあ。

二人の影はギリギリならば軽自動車も通れるであろう広めの歩道を進んでいく。

それはいつもの光景で??すれば前を歩く女子学生は突然に立ち止まり、こちらへと踵を返した。

「むー、流石女たらしのユウジさんなのだぁ」

声こそ作られて、陽気そうだが。眼鏡越しに見える表情はあまり芳しくない。

「どした？　ユイ」

「ユウジはさぁー、こうやって二人歩いても他の女の子の名前出すんだー」

まるで幼馴染ヒロインが拗ねたように言うユイ。

「二人歩いて……ねぇ」

「そうだよー、これでもアタシは??」

ユウジの彼女なんだから。と、素の声で恥ずかしそうに呟いた。

なんというか、弄りがいのあるヤツだよな……ユイって。するとユイはこちらに向かい、俺の隣を陣取るようにして歩き始めて、横目にユイに似合わない指と指をくっつけてくにくにしていた、その直後のこと。

「……手をつないでみるか？」
「ぶふっ！？」

俺は驚きやふいに噴き出したと、いうより笑いによるものだった。

「なんだ！　その反応はぁ！」
「いや、不意打ちだろよ……ユイが手を繋ぐ……ぷくく」

ダメだ、なんかツボだ。いつも「びゃっははーい」とかいうテンションからの落差を考えると……くくく。

「そ、それでは！　手を繋ぐのか手を捻るのか手を縛るのかのどれかからセレクトしてね☆」
「手を繋ぐ以外はお断りしたい」

痛いのは避けたい。

「じゃあ繋ぐかー！」

すっ、と思いのほか小さいその手を、俺は捉えて包み込むように指を絡ませた。

「……」
「……」

手を繋いだらさっきまでのコメディが吹っ飛んだ。なんというか、まるで恋人どうしのような甘酸っぱさ！

「いて」

「何か失礼なこと考えただろ」
「いや、ユイとは付き合ってる気がしないんだよな……」
「な……も、もっといい女がいるから！？」
「いや言ってねえから！」

怒り方も完全に素である。最近はハイテンションユイとこの素のユイの二つを微妙にバランスよく聞いている気がする。

「そりゃ……付き合ってからも、大きく空気が変わらないのは……やりやすいからな」
「あ……そ、そういうことね」

俺が少し照れるように繋いだ手と別の手で頬をかくと、ユイも察したように俯いた。

バカップル〇ねー！　と罵声を浴びせてきても仕方あるまいと納得してしまいそうな、謎の沈黙。そして彼女はらしくなく頬を赤く染めている

「ユ、ユウジ顔が赤いぞ！　おたふく風邪かー？」
「ユイこそ頬真赤だな！　どうしたリンゴっぺだぜ、超健康体か？　どした？」
「くぅ、そう返してきたか」
「そう返してきたぞ」

バカップル消え〇せろー！　と怒りの猛抗議を上げられてももはや反論しようもない、謎の揚げ足取り会話。
俺はしてやったりという表情をしていて、ユイもなぜかしてやったりという表情をしていて、なんてコイツら色んな意味で幸せなんだろうと思われること必須だ。

「まぁ……でも手を繋ぐってのもいいものだぬ」
「ああ、悪くない」

二人を見守るように、青く澄み渡った冬空が繰り広げられている。
春とも夏とも秋とも違う??遠くまで、永久に続くような広い広い空。

「更に眼鏡を取ると、なおよしだ」
「あっ」

ユイの眼鏡を俺は取りあげる。
それに気付いたユイが見上げるように俺の手に持つ眼鏡を凝視し、

「か、返せ！」
「いい加減慣れろって……学校でもちょくちょく外してるだろ？」

あれから、ユイが何の変化も無かったわけではない。
時折眼鏡を外すようになった。体育の時間やら固執して付けていたのを止めた。

「しかし……眼鏡がないと調子が狂う」

耳の上辺り、つまりフレームがかかっていたところをユイは指で触っている。
その上でこちらの方をちらちらと見て何かを伺っていたが、何のことか分からない俺に痺れを切らしたか、

「ほれ気の利いたコメントカモン！」

と、また拗ねたように言った。弄りがいもあるけど??可愛いよなあ。

「眼鏡無い方がいいぞ、俺には眼鏡属性ないし」
「……眼鏡属性ってなに？」
「いや……なんでもない、俺の妄言だ」
「……そう」

はい終了。元ネタ分かった人多いよね。ううん、口に出さないでいいぞー

「出来てきたなっ！」
「そーかい」
「どうせユウジのことだから”眼鏡が無い方が可愛いぞ”とか想像してしまったさぁっ（笑）」
「む」

若干貶された気がするので、俺も一応反撃に出ることにする??
ユイは不意打ちに弱く照れ屋なのだ。
少し間を空けてから、

「お前は眼鏡無い方が可愛いと……本当に思うけどな」

半ば本気の口調で、それでいてそっぽを向きながら言ってみる。

「へ」

今のユイはさぞ呆然としてます！　というような表情しているこだろう。

「なにより素顔が見えるってのが俺は好きだな。イイ顔してるんだから自信もてよ？　な？　？？お前はその素顔こそが可愛いんだから」

そう言い放つと俺はユイより前を歩き始め？？後ろを振り返る。

「え、ええ……ズルイ！　猛烈抗議だ……期待してなんかなかったのに……こんなこんな？？不意打ちなんてさ！」

俺はこいつが真面目な言葉に弱いことを知っている。
俺のみ唯一だろうか？　違ったとしてもそれを知っている人は本当に少ないだろう。

そして俺は後ろを振り返らぬまま歩を進めている
その後ろではユイが顔をゆでダコのごとく顔を赤色に染めて俯いてることは俺は知らない。

知らないったら知らない。

こ、こっそりだなんて振り向いてないんだからね！　本当だもんね！　絶対だかんね！

「ふぇぇユウくぅうんっ」

電柱の後ろという変態極まりない立ち位置から本気で号泣しながら叫んでいる女生徒が一人。
それはコートを着込みながらも涙目で前方のユイ達のいる位置を見つめている。

「イチャイチャばっかしてぇ……ひっくひっく……許さないんだから許さないんだからぁ～」

ユウジが進む度に電柱を替えて隠れる。そして周りの視線はかなり冷たく寒い……肌寒いのはこの人のせいではないだろうか。

以下抜擢です。

「あれは……見てない見てない、号泣しながら叫んでいる副生徒会長なんて一寸たりとも見てない視界に入ってない！」
「うわぁぁぁん俺副生徒会長のファンだったのに」
「どうどう、どうどう」
「あんな副生徒会長もイイィ」
「おい」
「まぁ最近のコったらぁ」
「あんたもそのコに入るでしょ」
「流石です副生徒会長！　尊敬します！」
「尊敬する要素がどこに……」

以上通学路を歩く生徒コメントより、ということでユウジの姉兼生徒会副会長のミナでした。

「身近な人だったから怒り倍増乾燥わかめのごとくぅ！？」

なーにいってるんだろね、この人。まあユイは義妹ですけど。

「絶対奪い取ってみせるんだから？？多少傷つけてでも、絶対奪い取ってやるんだからぁっ！」

朝の空にその叫びは響く、その時のこと。

「ユウジ様のお姉様？」

”様”被ってんじゃんという使い古されたツッコミは当店ではいたしません。

現れたのはクールビューティ？　ユウジ大好きなヤンデレヒロインこと姫城マイ。

そうやらマイにもつけられてたんですね。

「うぐっ……姫城ちゃん」

「絶対に……ユウジ様奪い取りましょう！　ユイから！」

「うん……そうだね、そうね！」

「絶対に」

そして二人の病んだ美女は、

「「多少傷つけても奪い取るっ！」」

今この瞬間”ユウジ奪還ヤンデレ同盟”が生まれ、それが全校否や全国にその同盟会員が増えて行ったのは言うまでもない。

いや、ないって。

トゥビィコンテニュー……？

＊　＊

某生徒会室

「さて、今回のヒロインはユイでした……いかがだったかな？」
「アスちゃん、そんな世に〇奇妙な物語風のＢＧＭ流してもそれほど恐ろしくはならないのよ……」
「納得いーかーなーい！」
「……そうね、それは同意だわ」
「ねえ、文化祭ってどうなったの！？　秋終わって冬になってるけど！」
「なかったことに？？」
「えええええええええええ、まさかシモノの提案通りのサプライズ……！？」
「？？ならなかったけれど、カットね」
「なんか私たちの絡んだイベント全て本番が切り取られてるよね」
「……本番よりも準備の過程の方がイベントが起りやすいものよ」
「う、微妙にこの展開の核心付いている気がするよ……」
「さーて、次回のヒロインは……やったわ！　アスちゃん、今度も生徒会主軸よ」
「えー、読者が飽きるよう」
「……とっても客観的意見ね、アスちゃん、でもどうするのかしら……シナリオ殆ど出来てないって」
「どうするのよ！　もうこれ終わっちゃうわよ！」
「まあ√ａＯＶＡみたいな感じで、引き延ばすんじゃないかしら」
「……なんかスタッフがビクっとしたけど、本当に？」
「まあ、いいわ。とりあえずこの作品の核心に近づいてきたわね？？盛り上がってないけれど！」
「出オチみたいな作品だし、そのあとはつまらないし、仕方ないんじゃないかな？」
「……また冷静な意見ね」
「とーいうことで、次回の生徒会でお会いしましょうー」
「え、ええ」

√a終了

第３３３話　√ａ－３３　彼女は彼に気付かれない（終）　（後書き）

√ａ完結です！　なんか他のシナリオと比べてえらい薄っぺらいですが許して下さい！　ユイに至ってはまだエピソードが残っているので番外編の形でちょくちょく出すかもしれません。お読み頂きありがとうございましたー、そしてこれからも続くのでよければお付き合いくださいー

第３３４話　√１／２／ａ－ＯＶＡ１　ミツドモエなラブバトル！（前書き）

息抜きカオス

第３３４話　√１／２／ａ－ＯＶＡ１　ミツドモエなラブバトル！

どうもナレーターです。
√ａが終わりましたが、早速にちょっと今までとは違ったお話となります。

［設定］√１及び√２及び√ａ終了後にシナリオが統合されちゃった世界。
［登場ヒロイン］√１より姫城舞、√２より時陽子、√ａより巳原柚衣
［時間軸］２０１１年４月

なうろーでぃんぐ……ロード完了、シナリオ稼働。

＊　＊

「……うおっ」

な、なんかすげえ夢見てた気がするぞ。
マイの驚愕の事実を知った上で付き合い、ホニさんが居なくなった後に残されたヨーコとも仲良くなり、ユイとは恋仲に！？

「ど、どんだけ俺は女に飢えてるんだ……」

大体俺が女の子と付き合えるはずがない！　……まあ、でも夢か。
惜しいことしたな、ああ。
少しばかり名残惜しく思いながら布団から出ようとした直後のこ

と――

「起きろー、ユウ朝だぞ」

「起きるのだぁ、ユウジ！　ゴッドモーニング」

惜しいことした……な。

「ユウ起きないと、ホニさんに変わってキスで起こす！」

「あ、ヨーコ抜け駆けはノーだ！　ア、アタシがモーニングキスをっ！」

惜しいことを……。

「ユイは下がってて、私が今日は起こすことになってる！」

「いやいや、キスとか言われたら黙ってられるかぁ」

惜しい……はぁぁぁぁぁぁぁ！？

「え、なに、どゆこと？」

「どゆこと、って何？　そりゃ私はさ、ホニさんがいた時とはいえ……は、初めてのキス奪った癖に！」

「ならアタシもファーストだし！」

……まさかな。

いやいやいや、それは……でも本当に。

「夢……じゃない！？」

＊　＊

「いってらっしゃーい、ユウにミナ姉」

なんとか沈静化したヨーコに見送られながら、謎のキス猛攻を回避した俺は学校へと向かっていた。

「ユウくん、不純異性交遊は禁止だよ」
「いや、俺が意図してねえから……」
「でも、不純異性交家族はいいんだよ」
「都合よく変えるな！」

更に語呂の悪さが半端じゃねえ！

「……お姉ちゃん我慢出来なくなってきた。朝からユウくんにキスキスキスするって――ユウくぅぅぅぅぅぅん！」
「おわぁっ！？」

息を荒げながら猛ダッシュしてくる姉貴は、恐怖映画も泣いて逃げ出しそうな恐ろしさに迫力があった。

「（なんか、体が軽い？）」

夢の通りなら、夏に死ぬほど特訓したおかげで（√2より）少しは走力がついている。

「それでも平行線か！」

姉貴は追いつきさえしないが、スピードは保ったまま。恐るべき容姿端麗成績優秀で、運動神経も抜群の三タイトルを持っている姉

貴なだけはある。

「ユウジおは……よ？」

「すまん、ユキ先行ってる！」

「あ、うん……え？」

周りからは姉と弟が追いかけっこでもしているようにも見えるのだろうか。しかし俺は脂汗ダラダラである。

夢の中のことが本当だとしたら、俺は三股マガイのことをしているわけで、更に姉貴も入って来るとなれば――

「最悪の結末しか思い浮かばない！」

とりあえず姉貴が入れないであろう、学校の男子トイレまで逃げ込むしかない！　フルパワーだぜ、信じらんねぇ！

対岸（学校）は見える、でもこれじゃだめなんだろ！？

そうだ、それまでに――俺は風になる！　俺の人生は晴れ時々大荒れ　いいね、いい人生だよ！　風を……風邪を拾うんだ……！

「はぁはぁはぁはぁ」

姉貴すげえわ、うん。尊敬する――だが逃げ切ってやるぜ！

＊　＊

「ぜーはぜーはぜーは」

逃げ切った。

辿りついたのは最寄りの男子トイレ。

『もうユウくん……流石にお姉ちゃんも入れないよ』

少し恥ずかしそうに言う姉貴に、俺は震える手でガッツポーズ。

『でも、待ってるから』

待ちかまえ宣言で俺への死亡宣告と同じだった。

「（出れねえ！？）」

とりあえず個室に入って息を――

「おはようございます、ユウジ様」

「え」

と、驚いた直後に個室へと触手に引きずられる取りこまれ、

「――ん」

朝からいきなりのモーニングキスがそれは学校内でも一、二位を争う美女のマイに食らわせられたのだった。

続きますねえ。

第335話　√1／2／a－OVA2　ミツドモエなラブバトル！

「ちょ……マイっ」

先ほどふっと触れた程度では済まされない、唇と唇がしっかりとくっつきあうという朝にしては濃厚すぎなモーニングキスを食らい、狭いトイレの個室の中で閉められたドアの方へと後ずさる。

「ユウジ様かわいいです……」

法悦の表情を浮かべるマイは色っぽい、ストレートに言えばエロイ。

「てかマイはなんでこんなところに！　男子トイレだぞ！？」

そう、女子が寄り付くことは金輪際ないであろう男子トイレに学園の花がいるものだから俺は大困惑だ。

「――ユウジ様が来ることを感じましたから」

うわあ、俺の周辺チートキャラしかいねえ。

ええと、なにか？　俺が家で二股（※っぽいのを）かけてた二人に襲われる寸前なのを、姉貴に目撃されたことで逃走するハメになり、姉貴でも入ることは無理であろう昇降口から近い男子トイレへと俺が逃げ込み、この数個ある個室に入ってくることを予測していた――だと？

「うん……なんか、すごいな」

「ユウジ様……追われていますね？」

やっぱ知ってるパターンだわあ。

「相手はユイさんとヨーコさんですね」

もはやチートとも呼んでいいのかわからなくなってきた。

て、ことは二股（※らしきこと）がバレてる……！？　ヤバくないか、旧来のマイだったら――

「ユウジ様」

「はい」

「いいんですよ――ユウジ様はいろいろな方に人気がありますから――」

現在のマイはむしろ、

「だって私がユウジ様の一番なのは変わりませんから」

本妻の余裕。やべ、結構にドキっとさせられたぞ。

「あ、ああ」

そうふと答えてしまうほどに彼女の言葉や表情は魅力的だった。

「ユウジ様、教室に向かいましょうか？」

「そうだな」

そうして俺はマイとトイレを出た。

……って、これって何気にすさまじいシュチエーションじゃないか？

周囲の目を気にせずに俺の手をつかんで隣を歩くマイを見ていると、どうでもよく――

＊　＊

ならなかった。

「おのれえ、彼女とはいえ朝っぱらからトイレに連れ込むなど言語道断！」

「温厚な我々でも黙ってはいられないものよのう」

「下之ユウジ！　前前から妬んでいたが――今は殺意だけだよ」

と、いうことで血走った眼の男子生徒に俺は囲まれている。

どこぞのアイドル応援着かと言わんばかりに、ピンク色の地に写真がデカヂカとプリントされている――マイのが、だ。

「私たちこそ！　姫城舞さんファンクラブである！」

やっぱりか。

「マイファンクラブはつぶれたはずじゃ？」

「ふふ、先輩たちは解散させられたが――今度は俺たちが！　姫城マイファンクラブ二世だ！」

解散してるよなあ、やっぱ。

「なんで前回はつぶれたか知ってる？」

「ふ、どうせ教師の介入という些細なことだろう」

些細ではないな、それ。ちなみにそれよりもファンクラブにとってはショッキングなことだけどな。

「――今から下之ユウジに天罰を下す、皆のものかかれぇ！」

……俺が何の対策もしてないかと思ったか？　大成果だよ！

まあ、あれは呼べば飛んできてくれるけどな。

「いでよ相棒！　”ナタリー”」

そうして俺の戦いはこれからだ！

ええと、続くようですよ。

第３３６話　√ａ－ＯＶＡ１　だぶるらぶれたー（前書き）

ユイアフタァァァァァァ！　の、前は前回の続き

第３３６話　√ａ－ＯＶＡ１　だぶるらぶれたー

「はぁ……」

俺は教室に着いた途端机にうな垂れ、天まで届くかのような盛大なため息をついた。

「死ぬかと思った」

阿鼻叫喚の地獄海図。トラップ満載当たれば即バッドエンド行き、その中を潜り抜けてきたのだが――

どうやらすべてカットされたようだ（描写的に）

低予算アニメはそうやってバトルシーンを避けて動きを減らすのがデフォだが、それまで真似するな！

やってくれたよ低脳スタッフ！　力量が無いからってそんなところまで手を抜くなんて！

……今なら俺がその戦闘シーンを躍動感溢れる文章で原稿用紙三十枚は書ける自信がある。

そう、俺はナタリーを振り上げ現れる猛獣のような男子生徒に――

「よー、ユウジくぅん」

聞きなれた”あの”声が耳元で聞こえてくる。

「あー、ユイおはよ」

「グッドモーニング」

なんで”ニ”のところで下げたんだよ……

「てかさ、ユイは今日も先出たけどよ……もう分かれて行く必要無くね？」
「のんの、一応建前は同級生止まりじゃけんねえ。知らない生徒まで知る必要はないでございやしょう」
ユイの言う事はもっともだ。ユイが可愛いって分かった途端に俺との同居の事実が一部に知れ渡って大変なことになったことがあった。
まあ、ああいうのは出来れば避けたいわな。
「そういやそうだな」
「ユウジ、覚えてるか？　アタシが眼鏡取った直後のこと」
「覚えてるぞ……色々あったな」
「ぬ」

√ａ－ＯＶＡ　「だぶるらぶれたー」

十月四日

文化祭の迫る残り一カ月前の日。
ユイと付き合い始めたのは一日で、土曜日と休日を挟んでの月曜日。
俺はいつも通りに、ベッドですやすやと寝息をたてていた……そ

んな時のこと。

「ユ……ジ……ろ」

何か声が聞こえる。

それもどこか聞きなれ――てはいないが、知っている声ではある。

「ユウ……」

俺の名前を呼んでいるようだ。

「ん……」

「おっ、起きた？　起きてー」

俺の意識がゆっくりと再起動し始める、体には言い知れない重さ。

まるでいたずらにミユに布団を幾重にも重ねられたときを思い起こす圧迫感――それでもあくまで体の一部のみにGがかかっていて、それは紛れもない俺の腹部だった。

起きろと言っているのに、まるで起きさせる気が無いのはなんでなんだろうな。この重さに慣れればまた眠りの世界へと旅立てそうだ――

「……」

「起きないと、姉貴呼んじゃうぞ」

「起きました」

お目眼ぱっちり。姉貴と言う言葉がアレルギーとまでは行かないがNGワードまでも行かないが、トラウマリードに引っ掛かるぐらいの効果を発揮した。

この重さの正体が分からないが、今姉貴に来られると非常にマズ

い気がしたのだ。

「なんだただのユイか……ぐー……ええっユイ!?」
「寝ぼけなのか分からないけどツッコミ遅いよ?」

な、なんでユイが俺の布団の上に!?

「よ、夜這い?」
「朝ですよ」
「朝ばい」
「方言ですよ……って、アタシが気を利かせて起こしにきてあげたのに! ユウジのばかっ!」

おおう、さっきまでユイが素の声だったのに突然キャラ声になった上に罵られた。
するとユイは俺の上から降りて、目を吊り上げながら――

「ふーんだ、お寝坊さんなんて私は知らないもん」

凄いな、眼鏡がないせいでイライラが軽減される、すごい!
視覚効果って本当に大事なんだなあ。オレンジ味のグミがオレンジ色をしていなかったら食べる気が失せるのと似ているような、似ていないような。

「いや、あのな……」
「じゃあ私先に学校行っちゃうよ? ずっと寝てればいいよっ」

でも、これはユイのオフザケなんだよなあ……このまま言われるままなのもシャクだな。よし、仕掛けるか――

「ご、ごめんよユイ……お詫びにおはようのキスを――」
「え、いや、なに、キス!?　えっと、いや、まって、まってて
ば！　いやあっ！」

……あれ、逆に傷口が広がった。
なんてーかさ、そこまで拒否されるとね……もう悲しくなるよね。

「ち、違うんだユウジ！　こ、これはだな……か、過程が大切なんだよ！　うん、そゆこと、いくらアタシでも……うん。で、でも嫌ではなくてね！　心の準備というか――」

もし俺が拒否された後に聞いていなかったら、このユイの動揺する様にニヤニヤ出来たと思う。
でもさ……一応告白して女子にこんな形で拒絶されると……なあ、色々とショックだわ。ズカンとダイダメージだわ。
それで俺は、起こす寸前だった体をごろりと転がしてユイを背にした。

「はぁ……俺、今日学校休む」
「ちょ！　ガチへこみ!?　あ……ギャグじゃなかったんだ。少し……嬉しいかな」

何か言っているようだけど、俺はスーパーネガティブモード突入につき聴覚をほぼ遮断中。

「いいや、どうせ俺はモブで終わる人生さ」
「うわあ、ユウジの周りがドス黒く！」
「いいさ、どうせこんな落胆する男面倒だなあとか思ってるんだよ、読者は」
「読者!?」

「いいよ、どうせキャラの位置づけが微妙すぎて嫌われるタイプのキャラだもん……しくしく」
「え、っと……あぁぁ、もう！」

寝転がる俺の頬に何か柔らかいものが触れた。

「え」
「……お、落ち込み過ぎ。学校行きたいから早く起きて」

唇を指で抑えながら、素の声で素の表情で呟くように言うユイ。

「か」
「か？」
「かわえええええええええええええ」
「えええええええええ、なに！？　あぁ、なんで抱きつくの！」
「ユイのデレはやっぱかわええ……」
「ひっつくな！　はやく着替えて降りてって、ねえ聞いてる！？」

そうして少し変わった俺とユイの朝は始まって行く。

続くんですって。

第３３７話　√ａ－ＯＶＡ２　だぶるらぶれたー（前書き）

短くて申し訳ないです

第337話　√a－OVA2　だぶるらぶれたー

「むー……」

ええと、ユキだよ。突然なんだけどね――

友人が付き合い始めました。

うん、至って普通の出来事なんだけどね？
でも……うーん、その組み合わせがね。

「（ユウジとユイだなんて……）」

友人と友人が付き合い始めるって、友人な自分の身からしたら複雑……なのも確かなんだけど。

「はぁ……」

逃がしちゃった、告白の機会。
ユイじゃないよ！　……ユウジにだよ。最近生徒会でユウジは忙しくなって、話す機会も減って……そっか、そうなんだよね。
それでも、私はきっと告白なんて出来なかったのかも。

「（だって気まずくなるのは嫌だもんね）」

でも、あまりにも変わった気がしないんだよね。
話すユウジとユイの様子は本当に変わらないんだよなあ……私もそんな言う程には変わらない関係を望んでいたのかも。

「（だから……少し羨ましい）」

……ユイは寝取っていいって言ってたっけ？

いや、だめだって私。大切な友人が付き合い始めたんだから祝福しなきゃね。

「（でも……なんか腑に落ちない）」

マイさんはどう思ってるのかな？

マイさんもきっとユウジが……す、好きなはずで。あのあと聞いてどう思ってるのかなって、思うわけで。

それに……何か、引っかかる。突然見せられたユイの素顔は可愛くて、そしてあのユイの素顔に――

「はぁ」

まだユウジ達との合流を待つ登校前の時のこと。

＊　＊

「……」

マイです。突然なんですが――

ユウジ様とユイさんが付き合い始めました。

なんというのでしょうか……あまりにも突然な出来事に昨日からずっと考えていました。

……確かに私からみてもユウジ様とユイさんは、かなり仲が良くて、でもそれはきっと友達止まりだと――思っていて。
それが、数日前に突然に……付き合い始めるだなんて。

「（告白の機会を逃してしまいました）」

え、えと。一応告白をしたのは確かですけど……あれは自分から無しにして――！

「（私はなんて惜しいことを……）」

あああああ、凄い後悔です。

「（それでも」

私は決意したはず。振り向いてくれるまで、待つと。

「（……）」

そういえばユイさん可愛かったですね……羨ましいぐらいです。
……？　そういえばあの顔は、どこかで――

ユウジやユキ達を待つ登校前の時のこと。

＊　＊

起床の後に朝食を終えて、身支度を整えた後に家を出る。

「（なんか姉貴と桐とホニさんの様子が変だったな……）」

なんというか、皆落ちつかないというか。俺とユイを何度も凝視しているというか。

姉貴と桐は不機嫌で、ホニさんはなんというか複雑な表情をしていた気がする。

「？」

女性ってのは相も変わらず分からないもんだ。

「ユイ、準備できたかー？」

「ぬい！」

「じゃあ、行ってきます」

「行ってきまっ」

ホニさん「行ってらっしゃいユウジさん、ユイ」と見送られて学校へと向かった。

そして――この数分後にはユキや姫城と合流する。

＊　＊

「ユキさん」

「なに？」

登校してから席に座っているとマイさんがやってきて聞いた。

「……ユキさんは見覚えがありませんか？」

「見覚えって？」
「あのユイさんの顔です」
「ユイ……」

私の疑問の一つでもあった。そのことをマイさんは聞いてきた。
そして、ある一つのことを思い出す――

「っ！」
「ユキさん？」

そうだ。やっぱりに、あの時の――夏祭りのときの。

「マイさん……夏祭りを覚えてる？」
「……！　もしかして、あの時にユウジ様と歩いていた……似ています」
「そうだよね！　ということは」

もう、あの時から……？

「それに覚えていませんか？　ユイさんが言った、あることを」
「それって冗談じゃ――」

え、え、えと。

「「……」」

えええええええええええええええ。

「聞きにいこう！」
「聞きにいきましょう」

続くようですよ。

第３３８話　√ａ－ＯＶＡ３　だぶるらぶれたー（前書き）

ユイアフター終わり！　まだ書き足りてないけど自重。

第３３８話　√ａ－ＯＶＡ３　だぶるらぶれたー

どうも、ユイだ！
最近絶好調で、人気急上昇の各アニメのヒロインの同名にあやかって……なんのアニメをさすかって？
それは人それぞれのだと思うよ、うん。そういえばさ――

ユウジと付き合い始めた。

いや突き合いって、フェンシングじゃなくてね……剣道でも、画鋲でもなくて、交際ね。
アタシもビックリした。まさかユウジから告白されるだなんて……てっきり露骨なユキさんラブだったからそっちかと。
それでも、まさか……ねえ。こんな悪友ベスト百にも入らなそうなオタク女が、だよ？

……なんかネガティブになってるな。うん、矯正。
でも実はさ、アタシだってユウジに向けられる好意に気付いてないわけじゃなかったんだよ。
ユキさんもマイさんも、ミナ姉もホニちゃんもキロリも。みーんなユウジ大好きだもんね。
だから、少し罪悪感というか……申し訳ないというか。

ま、まあそれでも私がユウジを手放したいとは思ってないからね！
あくまで、アタシから奪いとって見せよ！　的な感じで、ね？
それで、なんだけどな――

「……ラブレターだよなあ」

登校してきて靴箱を開けたらびっくらこいた。そこには大量の手紙が、ユウジのファンクラブなんてあるもんだから呪いの手紙かと思ったら――うん、そういうわけだ。

ちなみに開いて、しっかりと「好きです」なんて書かれているもんだからドッキリでもなければラブレターに間違いない。

「十通はあるよ……？」

そういや、今アタシ眼鏡外してます。ユウジが外した方がいいって言うし、ちょっと頑張ってみる。

それで数日経たぬ間にラブレター。

「（入れるところ間違ったんじゃないだろうか？）」

ほら、好きなあの子の靴箱に入れようとしてたら、緊張して別の子の靴箱に入れちゃった☆

が、以下無限のループ。お、手紙が入ってるってことはこの子が！　と、ね。

「……ないな」

どんな偶然だ！　それに今時ラブレターとか前時代的だなあ！

「（まさか一周してきたとか……？）」

ほら、最近ベー○レードとか再燃してるしさ。

「（そういやユウジも手紙持ってたな……）」

まさか……アタシと同じラブレター――っ！

……え、ええとだな。一応彼女であるわけだし、ごほん。ユウジのことも知っておくべきだよな。

うん、よし――

＊　＊

「あれ、ユイが席立った」

「……なにかユイさんの机に散らばってますね」

「それよりも聞かなきゃ……って、ユウジの机？」

「ユウジ様の机の上にも何か……」

「行こう」

「行きましょう」

＊　＊

ユウジだ。

そういえば、な。

ユイと付き合い――

え、もういい？　てか今いいって言ったの誰？

まあ、いいか。そんで俺の机の上には沢山の手紙が積まれている。

それも靴箱から持ってきたものだ。

「（なんというか……慣れてきたな）」

この手のものは大抵”呪いの手紙”だ。
大体がユキファンクラブやマイファンクラブの邪念怨念が籠った手紙である。
まあ、ユキや姫城と近くにいるわけで妬まれるのは仕方ない――
二人は学園もで一、二位（以下略）
そういうわけで、少々の罪悪感もあって手紙を一枚一枚読ませてもらっているのだが……今日はなにか別の空気を放つ手紙がいくつか混じっている。
よくわからない企業の勧誘や、猫探してますとか、ポストと勘違い甚だしい手紙も入っているのだが――

「ラブ……レター？」

なんか、下之ユウジ様へって書いてあるし――

「ユウジ！」
「うおっ」

怒鳴りつけるかのようにユイが俺の名前を呼ぶもんだから驚いちまったよ。

「どうした？　いきなり」
「ユウジ、一応聞くがアタシはユウジの彼女だよな？」

……え。

「い、いきなりなんだ！？」
「彼女だよな！？」

なんか、迫力が段違いだぞ。

怒ってるユイ怖い、素顔だと感情モロ見えで怖い……素直に答えてしまおう。

「あ、当たり前じゃねーか」
「そ、そうだよな……よかった」

安堵し胸を撫で下ろすユイ。

「そんなこと聞いてどうしたんだ？」
「いや、な。ユウジがラブレター開いているように見えて……」
「ああ、そうっぽい」
「そうっぽ……ええ！　本当に？」
「らしいな」
「そう、なのか」
「……にわかに信じがたいが」
「え？」
「いや、俺がモテるわけないじゃん」
「いやいやいや！　ユウジファンクラブって有ったじゃないの！」
「いやあ……どうせ俺のことからかってるだけだろ？」
「（中学校からユウジの行動把握してる連中がからかってる程度で済むわけねーだろ）」
「ん？」
「な、なんでもないー」

なんかユイが眼鏡取って表情増えたのに、なぜか逆に読めなくなったぞ。

ユイは何を思ってそんなこと――

「「ユイ（さん）っ！」」
「うおぅ！？」

今度は学校の華二人が一斉にやってきた。俺の近くにいるユイ目がけて。

「ねえ、ユイ？　そういえば前に言ってたよね」
「ユウジ様の家に住んでいる、と」

げ。ユイはまたそんなこと――

「いや、ユキ、姫城あのな――」
「「今はユイ（さん）に聞いてるの（んです）！」」
「あ、はい」

どうしよう、とーちゃん。今日は女の子が怖いです。

「ええとだな……」

ユイが躊躇ってる――

「（い・う・な）」
「（……）」

こっち見てねえええええええええええええええ！

「す、住んでるぞ」

素のユイで、恥ずかしがるように頬を染めて。

「……あぁ」

俺は頭を抱える。その直前に見えたユキと姫城の顔はとにかくに固まっていて――

「「えええええええええええええええええええええ」」

教室が沸いた。このクラスの聴覚性能って並みはずれてるよなあ。

「え、本当に？　ユウジの家に？」
「うん。ユウジの母とアタシの父が再婚した」

「「えええええええええええええええええええええ」」

廊下が沸いた。

「え、あの、でも名字が変わってないですよ？」
「変えてないだけで、一緒に住んでる」

学校が沸いた。
すると駆け込むように愛坂がやってきて。それでユキは聞く。

「愛ちゃんどうだった？」
「担任曰く――同じ住所に登録されてるって」

「「えええええええええええええええええええええ」」

町内が沸いた。
クラスメイトの女子も興味津々に問う。

「お、同じ部屋ではないよね」
「お、同じ部屋なわけない！　……で、でもユウジを起こしに行く

ことはあるけど」

「「えええええええええええええええええええええ」」

教室に集まる男子の熱気で、
お湯が沸いた。男子も詰めよって聞いてくる。

「ねえ、えっちなハプニングとかは！」
「……な、ない！」
「でも、でも家族で交際ってダメじゃない？」
「とーさんは良いって」

「「いしはらあああああああああああああああああ」」

ヨスガった。

「義妹だし、アタシ」

「「男のゆめえええええええええええええええええ」」

男子の声が重なった。
愛坂も、興味はしっかりとあるようで――

「付き合ってるってことは……キスは？」
「ま、まままままだだよ！　あ」

「「思い当たる節がある時点でアウウウウウウウウチ」」

息ぴったりだった。
もう完全に傍観者だ、俺。そして現れる――忍者！？

「――下之の過去を読んだでざる。暗闇の中でユイたんに胸を押しつけられて――」

「「アグ〇エエエエエエエエエエエエエエエエエエス」」

ちゃんちゃん。

そんな二つの、二人のラブレターが引き金で。まあ、そんな一騒動があったとさ。

第３３９話　√１－ＯＶＡ１　バカップルクッキング！（前書き）

マイアフターです。ダイジェスト√１－９９辺りの試食会が番外編ですー

第３３９話　√１－ＯＶＡ１　バカップルクッキング！

ラブレター事件。前時代的でも手書きに勝るものはないんだよ、とユキにも熱弁された気がする。

あの後も呪いの手紙とラブレターは続いて……何故か今でもたまに下駄箱に入っているものだから関心してしまう。

「色々あったもんだ」

「そうだな、もう五カ月になる。ア、アタシ的には……その後にあった出来事の方が――」

何かユイが言いだそうとしたところでチャイムが鳴り、

「も、戻るぬ！」

と、言い残して去って行った。まあ授業だしな。

放課後を迎え、いつも通りに生徒会に出向し、辺りが暗くなった辺りでお開き。

そうして帰る道すがら。

「（少し商店街寄ってくか）」

欲しいコミックが入荷しているかも、と家への足取りとは反対に、校門を出ると商店街方面へと向かった。

「（相変わらず活気あるのなあ）」

商店街の様子は俺が来た時と変わらない。地方というのにこのシャッターを下ろした店舗の少なさはテレビで見るシャッター街の現状を見せられてもピンと来ないほどだ。

この町唯一の商業区画で、それなりの人口とそれなりに若者もいるという、少子化とは無縁とも思える光景である。

そして商店街を抜けた、すぐ近くにこの町唯一で品揃えは太鼓判の本屋へと向かう。

「（そういやマイとのデートも商店街廻ったっけ）」

色々な所縁のある場所を廻って、二人過ごしたあの日を思い出す。

そんな風に思い出に耽りながら道を歩いていると、

「ユウジ様？」

目の前には買い物袋を提げて、俺の名前を呼ぶマイの姿があった

――

「ユウジ様もお買い物ですか？」

「ん？　そーだな」

コミック物色も立派なショッピングだ。

「マイのそれは夕食か？」

「はい。今日は食事当番ですから」

そうやって、買い物袋を持ち上げてアピールする。

「マイ、覚えてるか？　新レシピ試食会のこと」

「勿論です。楽しかったですね……また今度しませんか？」

「いいねえ、マイの肉じゃが美味しかったし」

「それでは新レシピではないですよ」

クスリと笑う彼女は、可愛らしくつい見惚れてしまう。

「ユウジ様……？」

「な、なんでもないぞ。でも、俺はマイの肉じゃが美味しくてさ……それでも俺が作るとなんか違うんだよなあ」

「新レシピ試食会とは別に、肉じゃが御馳走会開きましょう」

「なんだそれ」

談笑しながら少しの道のりを歩いて行く。

そういや、あのときは――

＊　＊

「ユウジ様、あーんです」

「え、ああ……あーん」

ちなみに学校のお昼時の光景である。

清々しいデレモードに突入したマイとは、こんな風に人目もはばからずバカップルだった。

「あのさユウジ……そういうの見せ付けるならここは止めてくれる？」

ショートカットにした髪も少し伸びてセミショートまでになったユキが、不機嫌そうにそう言った。

「ユキさん、見せ付けてなんかないですって……あ、ユウジ様口元に」

「おお、さんきゅ」

「……」

ユキがこめかみをピクピクとさせる様子が傍からも分かる。

怒ったユキは怖い。だからといって止めてというと「お嫌いになったのですか」と半分からかいに行ってくるので八方塞がりだ。

まあ、これも恥ずかしいがまったくもって嫌ではないので。続行したいのはやまやまだが――

「あ、マイ。じゃあ移動しようぜ」

「え、移動ですか？　ユウジ様がおっしゃるなら良いのですけど……」

そうして弁当を一度片付け、席を立つ。

「（すまん）」

とユキに心の中で謝りつつも、俺たちは教室を後にした。

まあ、それからが大変なわけで。

食べるスペースがあんまりないという。

屋上に行けば、

「な、なんだよ！　ここは私の場所だカップルでくんな！」

と何故か屋上に一人いた福島が怒りながら追い出し、学食に行けば、

「……混み過ぎだな、他にしよう」

「はい」

生徒会室でこっそり食べようとすれば、

「カップルはだめ！」

と会長が何故か昼時なのに居て怒られ、外に出てもベンチは埋まっている。

陰謀さえ感じさせる程にだ。

「……ユウジ様、どうしましょうか？」

「時間は……まだあるし――」

そこで思い出す。そういえば学校の隣には公園があって、本当に間近な距離だったはず。

「マイが良ければ隣の公園に行こう」

「公園ですか……懐かしいですね。ユウジ様との初めてのデート場所ですよね？」

「ああ、だな」

まあ、それも狙ったんだけどな。

「行きましょう、ユウジ様っ」

そうして俺たちは上履きのまま校門を出て、公園へと向かった。

その公園は、相も変わらず人気（ひとけ）がない。
なんの遊具もない殺風景な公園は、この春先ではほんのり暖かい。

「ここにしましょう」

と言ってベンチを陣取り、そして再開。

「あーんです」

「ごちそーさんでした」
「おそまつさまです」

弁当の風呂敷を包みなおしながら嬉しそうにマイは言ってくる。

「今日も弁当ありがとうな」
「いえいえ。ユウジ様のことを想ってつくるお弁当も楽しいですし、こうして一緒に食べられるのがなによりも嬉しいですから」
「じゃあ、明日は俺が作るな」
「期待してます」

「いや……プレッシャーっすよマイさん」
「いいじゃないですか、ユウジ様お料理上手なんですから」
「そうでもないだろ……」

マイの毎回手の込んだ色とりどりのお弁当を見せられたは、こっちのレパートリーの少なさが惨いことになる。
すると風呂敷包みの弁当箱を自分の横に置いてから、改まるように

「あ、あのユウジ様」
「ん？」

ほんの少し、緊張しているようにも思える。

「ユウジ様のお宅にお邪魔しても……よろしいでしょうか？」
「え」

まさかマイの方から来るとは。いやあ、やっぱり嬉しいね。彼女が家に来てくれるってのは。

「……そうだ」
「？」
「一緒に新レシピ試食会てのはどう？　マイの料理勉強したいし、俺も教えられるレシピあったら勿論教えられるし」
「一石二鳥ですね。もちろんですっ！　ということは……お邪魔しても？」
「もちろんだ、じゃあ……次の休日ってのはどうだ？」
「は、はいっ！」

隣にみるマイはご機嫌で、見ているこっちも笑顔になってしまうのだった。

そうして今度の休日にマイが俺の家へと訪れる。

第３４０話　√１－ＯＶＡ２　バカップルクッキング！（前書き）

まさかの

第３４０話　√１－ＯＶＡ２　バカップルクッキング！

桐じゃ。このような独白はえらい久しぶりな気がするのう。
わしが出てきたのはほかでもない。

ユウジが女を連れ込みおった。

それも散々に警告したストーカー女ときておる。まったくもって不愉快じゃ！
それに登場当初よりもオーラが明るくなってるの、何か不服じゃ！　この世はなんと不条理なものなのかのう！

……見ているだけでふつふつと怒りが沸き上がるのが分かってしまうのう。
しかしわしは一応妹キャラで通しておるからの……非常に不機嫌じゃが演技はせねばならぬからな。

「お、お兄ちゃんのお友達？」

いつもの笑顔じゃ。スマァーイルッ！

「ああ、俺の彼女」

淡々と言う事ではないであろう！？
「ああ、これ？　スーパーで安かったから」みたいなノリで彼女を見せ付けられる幼女の身にもなってみるがいい！

「へ、へぇ……ユウジお兄ちゃんの彼女さんなんだぁ」

だ、だめじゃ桐。笑顔じゃ、笑顔じゃぞ。コビコビスマァーイルッ！

「ユウジ様からお話は聞いてます……よろしくね、桐ちゃん。ユウジ様とお付き合いさせて頂いている姫城舞です」

こんな幼女相手にそんなどこに出しても恥ずかしくないような礼儀を見せるんじゃない！

「ここが……ユウジ様のお家」

「これで数回目だろ？」

「そうですが来る度、私は新鮮な気持ちなんですよ？」

かぁー、微妙にバカップルっぽくなってきやが……きて！　ムカつくんじゃわ。

「じゃあ、上がってくれ」

「お邪魔します」

衝動的に腕を広げてマイを制止した上で生死をさまよわせ……イカンイカン。笑顔じゃ笑顔じゃ、営業スマァーイル零円っ！

「ご、ごゆっくり」

わしは二人が居間の扉を開き入って行ったところを確認すると。

「はぁ～～～～～～～～」

この可愛いわしから幸せが数年分は逃げて行きそうなほどに、長く盛大な溜息をついた。

この溜息の長さは幼女とは思えない肺活量に違いないじゃろう。

「あれ、桐？　どうしたの」

壁に手をついて人生の苦味を噛みしめていると、まさにウケの良さそうな明るく利口で可愛く、ちょっと天然なキャラのホニが現れる。

その明るさは、わしには時折眩しく見えてしまうのう。

「あー……ユウジが彼女を連れて来てのう」

「ユウジさんに女が！？」

「……その言い方はどうなんじゃろうか。間違ってないがの、ホニは一体どこで覚えたのじゃ？」

「昼ドラ！　最近やってる”極楽温泉若女将”で知ったんだよー」

「ホニは昼ドラが好きじゃな」

「うん！　我は昼に誰が見ているのかも分からないドロドロした昼ドラが大好きなんだ」

「……ホニよ、キャラ変わってないかの？」

「うん？　でもそっかー、ユウジさんに彼女さんかー」

「そうなんじゃよ……それで今は、台所で料理してるようじゃな」

「そっかー……桐、見に行かない？　我も色々料理のレパートリー増やしたいんだよ！」

う……なんという正当すぎる理由じゃ。ホニはすっかりこの一年で家事マスターしたからの。

わしもやるべきなのじゃろうが……やらないことも一種のステータスなのじゃ！

「……わしも考えとったぞ。行くかの」

「うん！」

しかしホニも溶け込んだものじゃ。わしのげーむの良き相手にもなってくれる……こら、桐は連戦連敗などと横やりを入れるな！
と、いうことで台所へと向かったのじゃが――

爆発すればいいんじゃないかの？

二人台所に立つじゃとっ！　聞いておらん、人の家に土足で……靴は脱いでおるな。靴下で入りこんで、ここまでイチャイチャするなどと！
見せつけおって、何の恨みがあってこんな惨いことをわしにするのじゃ！　わしが何かしたか？
ユウジの部屋に毎日侵入したり、ユウジの入浴中に侵入したり、ユウジのパソコンに監視用ウイルスを侵入させたり――

「（忍び込んでばかりじゃ！？）」

ユウジの寝込みに侵入して頬に接吻したり、ユウジの腹の上でごろごろしたり、ユウジと同じ布団に入ってユウジの寝顔を凝視したのも――

「（変態ちっくじゃ！？）」

まて、わしは変態ではない。もし変態だとしても変態と言うなの淑――

「（桐っ！　桐！）」

せめて言わせてくれんかの！？

「（なんじゃ、ホニ）」

「（幸せそうだね……）」

「（う、うむ）」

テンプレートも真っ青な幸福オーラに愕然じゃのう。

じゃがわしは嫉妬の炎で即席麺一食分のお湯が沸かせそうな気分じゃ。

「（我はユウジさんの笑顔を見てるのが一番好きだな……）」

……否定氏はしない。

あやつは妙に嬉しそうな顔をするかの、時折優しいしの。スパイスのかけ加減が絶妙なのが憎いのう……

「！」

「（どうしたの、桐？）」

今、スパイスと発言した時に何か人の顔が浮かんだのじゃが……気のせいじゃな。

いくらライターが付けた余計な設定で”辛い物好き”とあったヒロインでも、ここまで来ないじゃろう。

「（くんくん……これは肉じゃがかな？　美味しそうな匂いだねー）」

「（ホニは和食全般上手いじゃろうに……むう、確かにいいにおいじゃ）」

食欲をそそられるのう。

目の前にはエプロン姿で小皿に少量の肉じゃがの具が載せられ、それ箸でつまんでマイは口へと運ぶ。

『……うん、美味しい』

『マイ出来たのか？　……味見していい？』

『もちろんですよ』

「「（！）」」

その時わしとホニは見逃さなかった。マイの使った箸をそのまま持ち、

『あーんです』

『あーん』

ユウジの口へと。

「（桐！　あーん、だよ！　すごい、新婚さんさながらだね！）」

「（……ユ、ユウジ）」

「（ユウジさん？）」

あやつ、何の躊躇もなく受け入れおった！

ま、まさか慣れておるのか！？　わしの攻略データは、重要なイベント以外は無いせいで、こんなこんな――こちらの方が重要であろうが！？

い、意味がわからぬ！　取捨選択で、これは重要なシーンじゃろうに！

「（ま、まさか）」

恒常的過ぎて、もはやイベントでもなんでもないと！

「（……目眩がしそうじゃ）」
「（この新婚さんっぷりは、目眩がしそうなぐらいに微笑ましいねー）」

あー……ここまでいちゃいちゃ振りを見せられると、わしの猛アタックがひどく虚しく思えてくるの。
そして募る怒り。なんでわしは、アレ以上にアピールしたのにここまで差があるのかのう？
なにか、歳か？　わしがこんなに可愛らしいロリっ子じゃからいけないと申すのかの？
それとも何か、やっぱり胸か！　マイはヒロインでも最大級の巨乳じゃからのう！
性的変態ユウジ！　わしだって……脱いだら凄いんじゃぞ！

「（……規制がっ）」
「（さっきから桐はどうしたの？　気分でも悪いの？）」
「（な、なんでもないのじゃ。ただ今はこうして黙っていられるわしの辛抱強さに感動しておるところじゃ）」
「黙って……？　辛抱？」

？マークを浮かべるホニはどうでもいい！

『ユウジ様、口元についてますよ』
『お』
『……ここです』

……説明するのにもブチ切れそうじゃ。
つまりは、ユウジの口元についていた肉じゃがのカスを自分の口へと運んだのじゃ――マイは！

「（わぁ……ベタだね。でも、なんかいいなあ）」
「（よ……よくない……よくないのじゃあ！）」
「（き、桐？）」

わしの怒りで今年は暖房要らずじゃな！　……怒ったのじゃ！
ブチ切れじゃ！
見せつけおって――わしの二十ぐらいの能力の一つ”サイコキネシス”じゃ！

『きゃっ！』
『うおっ！？』

近くにあったオレンジジュースをマイにかけてやろうと思ったら……手が滑ってユウジに。
透けユウジ、なんかエロ……くはないぞ！　け、結果オーライじゃ！　どちらにも怒りを感じておったからの。

『ごめんなさい、肘が当たったかもしれません』

くっー！　お主の肘は掠りもしておらぬわ！　この今すぐ嫁に言っても文句のつけどころの無い嫁さんが！

『別にいいぞ……でも、結構染みたな。悪いマイ、ちょっとシャワー浴びてくるわ』
『は、はい』

……まぁ、こうなるがの。
するとマイはガスを止め、辺りを見渡すと、台所から動く――

「（隠れるぞ）」
「（う、うん）」

わしとホニはマイから見えない位置に移動する。

『……』

すると持ってきた鞄を取り出し、そこから出てくるのは――

「（ス……！？）」

いや、なんでアレを持っておるのじゃ！？
それはこの時期にそぐわないばかりか、持ち運びなど殆どしないものじゃぞ！

『……♪』

ユウジを、追ったじゃと！？
マイが”それ”を持っては居間から退室し――

「まさか……のう」
「彼女さん何処行ったんだろうね？　……桐？」

それは、色々と――おかしいじゃろう！

「っ！」

更によく見れば残された鞄からは――よく汚れが落ちると巷で話題の洗剤や、漂白剤が覗いていた。
もしや、もしや！　もともとマイはこのような状況を画策してい

た……じゃと！？

「あ、あやつは黒いぞ！　何がどこに出ても、嫁に出してもじゃ！」

真っ黒じゃ！　とんだヤンデレさんじゃっ！

「……あぅ、なんか今日の桐は変だ」

続いちゃうそうな。

第３４１話　√１－ＯＶＡ３　バカップルクッキング！（前書き）

またコレ

第３４１話　√１－ＯＶＡ３　バカップルクッキング！

「さてっと」

脱衣所の扉を閉めて、洗面台に汚れた服を投げ込む。
見事に腹部まで染みたオレンジジュースは柑橘特有の香りこそするものの、放置していいわけがない。
と、いうことでシャワーを浴びようと思っていたのだが――

「（はっ）」

な、なんで俺は入浴してるんだ？
シャワーだけ浴びるはずだったのに、流れるような仕草で蓋をしていた風呂を追い焚きしてシャワーが終わると同時に入浴していた。
な、何をいっているかわからねーと思うが、事実そうだった。

「慣れってヤツか……」

もはやその一面の動作が慣れ過ぎて、その行動をしたという記憶もないという。

「マイが来てるってのに俺は何をのんびりと……」

……あーでも風呂気持ちいいわ。長風呂っぽい俺はぬるめのお湯にまったりと浸かる。いつの間にか半時間過ぎてることも常だ。

「……ふぅ」

落ちつくなあ。

少し声の籠る浴室の中で一人呟いていると、ふに扉越しにある声が聞こえ、擦りガラスの浴室の扉に人のシルエットが映る。
時折桐が来るからな……またか？　アイツは凝りな――

『ユウジ様』

マイだった。よく見ればシルエットの大きさからして桐とは思えない。
いやだからといって、マイはスラリとしていてモデルも逆立ちしても勝てないようなスタイルをしているのは分かっているし、胸部がとっても豊かなのも――いや、そんなことはどうでもいいだろう！

「マ、マイ！？　なんで、ここに？」
『来ちゃいました』
「来ちゃいましたって……あ、長くなってスマン。もう少しで上がるからさ」
『いいんですよ、ゆっくりでいいんですよ』
「そう？　じゃあお言葉に――」

甘えて、あとほんの少しと言おうとしたところだった。

『私も失礼しますね』

まさか過ぎる展開だった。

「え」

おいおい失礼する？　この状況でそれは現在絶賛入浴中の浴室に入って来るという解釈しか出来ないよな？
いやいやいや！　なぜに！？　それに俺が現在一糸纏わない姿（

全裸）なのに対して入って来るマイの格好は？
そういえば見えるシルエットが妙に体のラインが現れている――
まさかな。流石に裸なわけないよな、おめでたい俺の頭でもそれぐらい分かるさ。
それでも替えの服はないだろうし……
「（下着か……？）」
おい、まて。それ以前になぜにマイが浴室に入って来――
ガチャリ、浴室のドアノブを回す音が聞こえた。
いや、俺は心の準備が――
「……ユウジ様」
そこには女神がいた。
「……え、マイ。それって……」
ひた隠しにしているけども、どうにも好き過ぎる――
「学生水着です……似合ってないでしょうか？」
もう俺は首がネジ切れるんじゃないかと言う程に首を横に振る。
そりゃもう、マイの学生水着……もといスクール水着姿は素晴らしいに他ならないものだった。
もともと体のラインが露骨に出てしまうスクール水着は、機能的

であるものの野暮ったい印象になりがちだ。
着こなせるのは相当に体がスレンダーである必要がある……と、俺は思っている。

マイの場合は制服や体操服からは読みとれないウエストの細さと、ヒップは引き締まっているもののほど良い大きさで、胸はスクール水着は上半身全体を覆いがちながらも谷間が見えるほどの豊かさだ。
足のつけ根から伸びる、抱き枕にしたら至高なんじゃないかというほどの絶妙な大きさの腿（もも）といい全体的にスラリと伸びる肢体といい――

「（神様、ありがとう）」

＊　＊

「へくち」
「ホニ、風邪か？」
「ううん、違うとおもう」
「……それでホニは見えるかの？」
「ううん……入っちゃってからは全然見えないや」
「わしの能力は一枚の壁を透かすことしか出来ないからの……くそぉ！」
「き、桐？　今日は何か変だよ？」

＊　＊

「それで、マイはなんで入ってきたんだ？」
「ユウジ様のお体を汚してしましましたから……体をお洗いしようかと」
あー……責任感じさせちゃったか。
「いいよ、もう汚れは落ちちゃったし」
「落ちてしまったのですか……」
え、なんか凄い落胆されてる。
「あ、あー……さっき言い忘れたけど、マイのスクール水着姿。すっごく似合ってるぞ」
「ほ、本当ですか！？　良かったです……以前ユウジ様がお好きだと聞いていたので」
あ、覚えててくれたのか。いや、覚えてしまってたか。
「でも、変じゃないか？　こんな地味な水着が好きな俺って」
「逆に私からお聞きしたいのです。本当に私にこの水着が似合っているのですか？」
「それは勿論！　というかすっごい嬉しい！　あ、いや！　きっとマイならどんな服も水着も似合うと思うぞ、うん！」
「……ユウジ様に喜んで頂けるなら、私はどんな格好でも出来まるから、なんなりと言ってください」
「お、おう」
もう俺はマイのスク水姿見れただけで成仏しそうだけどな。
「……それで、もう上がってしまうのですか？」

「ああ、マイとの料理も途中だしな……だから、悪いけどさ、その」

これじゃ出れないんすよ。俺は今浴槽にいるから隠せているわけで。

「だから、浴室を出てくれな――」

「……すみません。ユウジ様、私はこれだけじゃダメなんです」

「え？」

「ユウジ様と同じくお風呂を共にするまでは……！」

「あの、マイさん？　何を言っているか分かってます」

「分かってます、ユウジ様との混浴です」

「いや、そうだけど！　この風呂はそこまで広くないぞ！」

「体と体を密着させれば大丈夫なはすです！」

「それがマズいって」

「……失礼します！」

「失礼しないでえ！　……のわっ」

俺は緊急事態だと悟り、近くにかかっている綺麗なタオルをブン取りお湯へと沈め、俺の見せられない部位を隠した。

その次の瞬間にはスクール水着姿のマイが入ってきて……一メートルないであろう目の前にマイの顔が近づく。

「……すみません」

「あ、ああ」

水を浴びたことで肌にぺったりと水着がくっつき、各所にシワが出来、色が濃くなることでマイのスクール水着姿はよりいっそう艶やかさを増す。

よく色気マンガの主人公が鼻血を出す場面を見るが、これに至っては感動のあまり俺は吐血しそうだ。

「ユウジ様と今までで一番近くにいます」
「そう……だな」

近すぎ。
てかさ、こういうのって相当に恥ずかしいと思うんだが。

「マイは……そのさ、こんなことして恥ずかしくないのか？」

言い方がかなり失礼な気がする。溺れろ、俺。

「……恥ずかしくないわけないですよ」
「っ」

すると俺の手をマイは取り、自分の左胸へと押し寄せた。

「ちょ！」
「……分かりますか？」

その手には、八百万の神に感謝したいほどの絶妙な柔らかさと弾力と温かさをもつ手の平から溢れる豊かな胸があった。
以前にもマイの胸に手を埋める（埋められた）ことがあったが、あくまで制服越しで、ここまで殆ど直の感触とは全く異なる。

しかしその感触と別に、何かが伝わってくる。

それは鼓動。

「……想い切りましたが、緊張してるんですよ？　本当にドキドキです」

「……ああ」

マイだけじゃないぞ。

「恥ずかしいですけど、ユウジ様には見て貰いたかったんです――この私の体を」

「……」

以前にマイは自分の背中の傷がトラウマで、そのことで俺とマイは離れてしまった。

でも俺はそれを、醜いとも思わない。汚らしいとも思わない。たとえどんな姿でも、どんな傷があっても――俺が好きになったマイだ。

今はこうして、俺の手を胸へと押しつけながらもほんの少し赤みがかった顔を俯けている。大胆な行動も挙動もするけれど、マイは結局は至って純情で普通の女の子なのだ。

「綺麗だよ」

「……これじゃだめ、です。全部見せますから」

俺の手を抑えつける左手とは別の手を動かし、水着の肩紐部分に指を滑り込ませて摘まむ。

そしてそれを肩から腕に落としていく。

「――――」

俺はその様にくぎ付けで、するすると右腕を滑って行く。

これは、スクール水着の脱げる動作の初歩で。それをマイは自覚があってやっていることだ。

そうか、マイは本当に俺に見てほしいんだ――

「そこまでぇっ！」

その時、浴室の扉がばぁんと開かれ、怒り心頭とも言えるべき姉貴が息を荒げながら顔を出す。

姉貴は友人と買い物に行っていたはずで――

「ユウくん、マイちゃん――上がりなさい」

マイが水着を着直し、姉貴の方へとぐいと体を向けた。

いままでにない気迫で、史上最大の怒りで。俺とマイは浴室を出らざるを得なかった。

そのあとこっぴどく叱られたのは言うまでも無い。

俺のことを溺愛する一方で姉でもある、姉貴はその不純な行動を説教した。

俺もマイもただ身を縮めこめて聞くことしか出来ないわけで。

「――ということだから、ユウくんがお姉ちゃんと入ってくれるなら許してあげる」

「ふざけんな」

やってること同じじゃねーか！

と俺は反撃ののろしを挙げる。大体姉貴は、いつもいつも――

「でも、昔は一緒に」
「今は違います」
「お姉ちゃんは変わってないよ！」
「ああ、悪い意味でな！」

説教返しが終わる頃には俺と姉貴双方疲れてしまっていた。

「ごめんなさい、ユウジ様」
「いやマイのせいじゃ……」

ない、か？

「ユウジ様にどうしても見て貰いたかったんです」

俺が好きな水着の姿と自分の体を、と続けた。

「また、今度ですね」

舌を出して悪戯っ子っぽく言うマイに呆然とする。
え、その意味って――

「ユウジ様、試食会再開しましょう？」
「あ、ああ」

これからもそんな感じでマイと俺の日々は続いて行く。
そしてこれは幸せな春の手前のある日こと。

第３４２話　√２－ＯＶＡ１　ユウジ×ヨーコ（前書き）

ヨーコアフターです。キャラ薄いのがなんともなあ。

第３４２話　√２－ＯＶＡ１　ユウジ×ヨーコ

「そんなこともあったなー」
「楽しかったです」

そうして二人歩いていると、俺はいつの間にか本屋を通り過ぎていた。
思い出話に花を咲かせすぎたようだ。

「すまん、じゃ俺はここで」
「そうですか？　それではユウジ様、また明日学校で」
「ああ」

と引き返そうとしたところで、呼び止めるように、

「あ、そういえばですね」
「ん？」

「私はその後日の出来事も楽しかったですよ？」

……ああ。あれかぁ、うん。楽しかったな、うんうん。
口外出来ないような出来事だからな、なんと言うべきか――プレイ第二弾？

「それではユウジ様――」
「っ」

そしてキス。マイが振り向き際に近寄ってからマイの唇と俺の唇

が触れ合った。
不意の出来事に驚いてしまうが、笑顔で買い物袋を提げ、落ち始める夕日を背にするマイは、素晴らしく綺麗だった。

「ああ」

俺はしばらくマイの後ろ姿を見送っていた。

本屋を漁り、適当にラノベを摘まんで帰宅する。

「（一日で二回もキスしてしまうとは）」

ちゅっちゅしてんじゃねーぞ、と言われそうだ……申し開きもできない。
買ったラノベの入った小さいビニール袋を提げながら家の門をくぐった。

「おかえりー、ユウ」
「おかえりじゃー」

小さい家族の一員二人に出迎えられる。サ○エさん言うな……まあ二人は何故か毎回出迎えにいるのだが、教えてないんだけどな。

「そういや、ヨーコも桐もなんで俺の帰るタイミングにいるんだ？」
「私は桐に聞いてるよ」

ヨーコは首を横に振る。まあ、二人セットだもんな。

「じゃあ、桐はあれか？　わしの二十の能力が～とかか？」
「いや、お主の行動は大体推測できるからの。使う必要もないのう」
「まてや、俺を遠まわしに思考が単純な奴って言ってないか！？」
「単に生徒会や寄り道の日程から考えてるだけじゃ……それで今日は、マイと接触したな？」
「う」

ここまで言い当てられると怖いものがある。

「ふーん、ユウは女の子と一緒にいたんだ」

ジト目のヨーコに睨まれた。

「いやいや、学校行けば必然的にそうなるって」
「……唇が通常より二割七分湿っておるな」

もはや気持ちの悪いレベルだ、それは。正確性は知らないがお前は湿度計か。

「まさかユウ……」
「ユウジ、まさかのう？」
「……」

この二人にマイとのキスの事実を悟られると色々と面倒臭い。
桐は「なら、わしにもする義務があるじゃろう？」とせがんで来るし。ヨーコには、

「……三股許したわけじゃないんだからぁー！」

涙目で怒られた。凄まじい罪悪感が……うおう。

そうだよなー、俺は一応三股してるようなもん、じゃなくて事実してるんだよなあ。

「いや、わしも入れれば四股」
「桐はどっかすっこんでろ……いやな、これはだな――」
「罰として、今日一日はユウ独占！」

そんなこと？　休日は大体似たようなものな気がするんだけども。
まあ、ヨーコがいいならいいか。

「えー、わしは」
「……わかった、了解しましたよオジョウサマ」

ヨーコの機嫌が少しばかり回復する。

「うん、うん」
「……わしは不遇な気がするのじゃが、どうじゃろう」
「日頃の行いじゃないかな？　……ヨーコ、じゃあ最初は――」
「一緒にテレビみよう！」

家に上がると「ちょ」と言った顔で固まる桐を置いて居間へと向かった。

俺が今のテレビの前に座ると、

「ヨーコ、ここが定位置なのな」
「当たり前じゃん、ユウは今は背もたれ」
「……人の扱いじゃねえ」

あぐらをかく俺の足の上へといつも座るのだ。
桐よりだいぶ背も高いので、ヨーコの頭頂部で視界が遮られるのだが体は細いので少し逸らせば画面は普通に見える……が、首が疲れる。

「……ヨーコ、斜めにしていい？」
「だめ」
「……さようですか」

テレビを見ることを諦め、ヨーコに話しかけることにする。

「ヨーコは一日どうだった？」
「昼ドラ堪能してた」

……ホニさんの影響受けてるなあ。
ホニさんの中から昼ドラはしっかり見ていて、知らぬ間にハマっていたと本人談。

「じゃあユウは？」
「俺？　ああ、朝に姉貴に追いかけられてな」
「……そういえばそうだったね」
「あとはフツーに授業受けて、生徒会活動して、商店街に寄り道してきた」
「その帰りに、マイさんだっけ？　女の子に会ったと」
「……まあ、そうっすね」

ヨーコの勘も鋭さ増してるなあ。また不機嫌になる、ヨーコにとって他の女の子はダメらしい。

「ユウ、覚えてる？　私と春にデートしたよね」
「商店街とか廻ったんだっけ？」
「うん、楽しかったなー」
「だなー」

そう、あれは春先の春休みの日のこと。
ホニさんが居なくなって三か月が経ったその頃だった。

√2ＯＶＡ　ユウジとヨーコ

「デートしよっか」
「は？」

俺がぼんやりとテレビを鑑賞していた矢先の出来事。
俺が自室にいると決まってヨーコは俺の隣に陣取り、並んでそこにいるのだ。
時折テレビに食い付き話題を吹っかけて独り時間は終了を迎えるのだが、それほど嫌でもないのでヨーコのおももくままとなっている。

この発言の背景には少々今までとの差異があることを知っていた。
まずは俺の部屋にはいつも、いつの間にかいるパターンや、無了承入室を決め込むパターンの二種なのだが――

『お、お邪魔します』

礼儀知らずまでは行かないが、ここまで礼儀正しい印象のヨーコは史上初めてだ。　更に、

『……』

時々座り直したり、こちらを伺ってきたり、なんというか落ち着きがない。

はた目の顔は良く見れば紅潮し緊張しているようにも見受けられる。

ホニさんならまだしも、ヨーコがこのような仕草を繰り出すのには違和感こそあれば、なかなかのギャップ萌えがある。

というような経緯を経ての発言であると俺は認識せざるを得ないわけで、先ほどまでらしくない沈黙に支配されていたこともあって、返答第一声はそんな驚きになってしまった。

「で……どうかな？」

「いいんじゃないか？　ようするに買い物だろ」

「デ・ー・ト！　ユウは相変わらず乙女心に疎いんだか」

「……そりゃ認めざるを得ないわ」

「認めないでよ！　……私が近くにいるんだから、少しは強くなってよね」

……たまにヨーコは恥ずかしいこと言うのな。

「デートね、いつにすんの？」

「こ、今度の休日に！」

「了解ー、で何処に？　町出るか？」

「ううん、私にお任せでね」

「はいよ、じゃあお願いしますよヨーコお嬢様」

「楽しみにしててよね！」

そう言って立ち上がると俺の部屋を出て行った。

ということでヨーコとデートすることになった。

ただ、言えることは――俺が「いつにすんの？」と聞いてからのヨーコの嬉しがりようと言ったら。

可愛いなあ、と。

第３４３話　√２－ＯＶＡ２　ユウジ×ヨーコ（前書き）

ヨーコアフターでもあるけれども、この√ではもういなくなってしまったホニさんのことも時折

第３４３話　√２－ＯＶＡ２　ユウジ×ヨーコ

「お待たせユウ、待った？」

ヨーコらしくしおらしい感じで覗きこむように聞いてきたが、俺はそんなのお構いなしだ。

「待った」

「もー、そういう時は、嘘でも違うっていうもんだよ」

「てー、言われてもな……」

家の前で三十分待たされるってどうなんだ？　俺が自主的でもなんでもなく、ヨーコに家の前でと指定されたのだ。

それで半時間待たされたとあっては、家の中でもう少しゆっくりできたじゃないかと思ってしまう。

「それで……その格好と」

「ま、迷ったんだから仕方ないじゃん」

……迷った挙句のセーラー服。恐ろしく似合ってくることには違いないが、本人自称のデートに着て行くものなのかと。

「じゃあ、行くか？」

「うんっ、私にオマカセっ！」

「で、商店街なあ」

「まず一つのポイントだよ」

「一つって、目的地がいくつかあるのか？」
「まあね、とりあえずデートデート♪」

そう言って二人歩いて行く、そういえば二人で出掛ける機会ってのはなかったな。
姉貴や桐が一緒にいることは有れど、ヨーコと二人きりというのは初めてだろう。
俺は至って地味な私服で、隣には女子中学生――変な勘違いとかされないといいけども。
何か話題を切りだすとするか……

「そういやヨーコ、髪伸びてきたな」
「そう？　あー、そうかも。でも、当分はいいかな、今は切りたくない。どこまで伸ばせるかもやってみたいし」

もともと床につきそうだったのが、今では括りあげてやっと。
だから今は持ち前の髪も束ねても凄まじく長いポニーテールになっている。

「髪洗うの大変だろうに」
「まーそうだけどね……って、今想像したでしょ。私の髪洗うとこ」

すると適度に距離を取って威嚇するように言ってくる。
大丈夫だ、ヨーコの入浴シーンなんぞ想像したら――引っかかるからな。

「ぢゅらぁんって貞子状態にはなりそうだな、と」
「ぢゅらぁん？　い、言いにくいし……本当にそれだけ？」
「ああ」
「そ、そう……」

そう答えると距離こそ戻すものの、元気がなくなった。
正直どうやっても怒るか落胆の二択しかなくないか？

「でも、切らなくてもいいと俺も思うぞ？　ポニーテール好きだし」
「ええっ、そうなの!?　ああ、そうなんだ……ふーん」

今度は微笑みやがる。なんという百面相というか、表情に飽きないな。
ホニさんも笑顔とか驚愕とかのバリエーションが多かったけども、ヨーコとはだいぶ違う気がする。
そうだな……ヨーコはミユっぽいかもしれん。

「……今他の女の子を考えてた？」
「まあ否定はしない」
「だ、誰？」
「妹のミユ」
「ああ、妹ね……って誰!?」
「話してなかったけか？　ああ、ミユはな――」

何故かこの家に居るのに、教えるのを忘れている。
俺の家のもう一人の同居人で、俺の妹ことミユだ。
ここ一年顔見てないし、どうしてるんだろうなあ……と同じ屋根の下とは言え思う。
それ程に、交流は断絶してると言っていい。

「そう……なんだ」
「まあ、そういうこって。まだ学校に行ってた頃のミユに似ててさ」
「ふぅん……」

台詞こそ興味なさげにも聞こえてしまいそうだが、ヨーコの聞く際の目は真剣だった。

妹の話題はここで止め、今度はヨーコから話を切りだす。

「たまに買い物に来てるけど、毎日何か違うよね」
「この商店街はとにかく活気に満ち溢れてるからな、日によって人の種類も違うんだろ」
「ミナ姉にもユウにも買い物する日を指定されたりするけど、あれって特売日とか？」
「そそ、その折にヨーコに頼んでるわけだ」
「なるほどねー」

ヨーコは居候させて貰っているという自覚はしっかりあるらしく、家事に熱心だった。
ホニさんのように直ぐ覚えてちゃちゃとは出来ないが、着実に出来るようになってきているのも事実だ。

「……てか本当にいいのか？　商店街歩いてるだけだぞ？」
「いいの、私が来たかったんだから文句言わない」
「文句じゃねえって、もっと遊べるとこの方が良かったんじゃないかって」
「ううん、こうしていつも歩いているところや、歩いていたところを再確認したいんだよ」
「……んー？」

言っている意味がイマイチ分からないな。

「そうだ、じゃあこれでよくないっ！」
「ええっ、ここにきて！？」
「歩く場所はここでいいけど、問題は……これじゃただの兄妹のお出かけっぽくなっちゃうこと」
逆に兄妹のお出かけっぽくない風にするにはどうすればいいのかと。
「それで？」
「て、手を繋ごう」
……それも変わらなくないか？　兄妹でも小さい頃は普通に手を繋ぐぞ。
まあ、ミユには小学校の高学年ぐらいには拒否られたけど。じゃあ、繋ぐか。
「はい」
「っ……い、いきなり繋がないでよっ！」
はたかれるように手が離された。なんか理不尽じゃないか？
「どうすりゃ、いいんだよ……」
「私から繋ぐから……うん、ちょっとまって、呼吸整えるから」
ヨーコ落ちつきないのなあ……でも桐ほどはイラってこないんだよな。桐は口調も大分影響してるんだろう。
「……じゃあ、はい」
「ああ」

またもや小さな手が俺の手の中に収まる。

「……どした？　（歩き方が）ぎこちないぞ」

「な、なんでもないよ」

声も震えていれば顔も赤くなっている。

「恥ずかしいのなら止めればいいのに」

「だ、だめ！　これは譲れないんだから」

顔真っ赤にしてジト目で見られても怖くもなんともない、逆に。

「可愛いなお前」

「なっ……いきなり何言うのさ！？」

「いやー、いつもと以上に表情豊かで見てて楽しいし、可愛いな、と」

「す、ストレートに言うよね、ユウって……」

まあ、その照れ表情見たさに狙ったんだけどな。今回ばかりは。

第３４４話　√２－ＯＶＡ３　ユウジ×ヨーコ（前書き）

どうなんでしょうね？　このアフターストーリーは蛇足なのか、それとも新たに始まる日々の一ページなのか。

第３４４話　√２－ＯＶＡ３　ユウジ×ヨーコ

「そんなんで良かったのか？」
「うん、これでいいよ」

商店街で立ち寄り、ヨーコが「買おう！」と言いだしたのは決して高くないヘアピンだった。
一応デートなわけで「俺が買うよ」と言うと「じゃ、お願い」とヨーコは一つ返事で俺はレジへと運んだ。
桜の花びらが模（かたど）られたファンシーなそれを、ヨーコは早速髪に付ける。

「似合ってる？」
「ああ、いい感じ」
「良かったー」

ヨーコはえへへとヘアピンを指でちょくちょく弄りながらも、傍から見ても分かる程にニヤニヤとする。
ヨーコは見ていて飽きることがないなあ。

「そうだそうだ」

思いだし、そう言うと俺は自分の携帯を見せる。基本的に装飾の一切無い携帯なのだが、そこにはヨーコにプレゼントした桜の花びらのヘアピンと同じデザインのストラップが付けられていた。

「お、お揃い？」
「そういうことになるかな？　ヨーコとのデート記念だ」

ヨーコに見えないようにこっそりと、購入して携帯に付けた。
「で、デート……確かにそうだけど……うん。ユウとのお揃いは嬉しいかも」
ニヤニヤを超えて、もう完全に零れる笑顔。
「次は何処に行くんだ？」
「あ、えっとね――」
「ギリで肌寒くないか？」
「うん……まあ、ね」
俺たちが来ていたのは、春でもまだまだに潮風が冷える海だった。
「砂浜を歩くって、なんかいいと思わない？」
「靴が砂っぽくなるけどな」
「ロマンがないなー」
「まあ、誰もいないからのんびり歩けていいな」
「そうだよー」
そうして二人手を繋いで海岸の砂浜をただ歩く。宛てがあるわけでもなく、波の音だけがそこにはある。
しばらく歩いただろうか。時折見かける流木を見つけて話題が咲いたりして、あっという間に半時間。
「次、行こっか」

「ああ」

「見慣れてますなあ」
「ユウはね」

訪れるのは学校、藍浜高校。
今は春休みなだけあって、一部の熱心な運動部以外は生徒が殆どいなかった。

「こっそりな？」
「うんっ」

キョロキョロと見渡して、開いている校門から校内へと入って行く。
そういえばホニさんがまだいた頃。ヨーコが表に出てくる度に早退や保健室に入ったりを繰り返していたのだ。
だから授業の思い出と言うのは本当に少ないのかもしれない。
あくまで、あの教室にはホニさんがいて。ヨーコがいることにはなっていなかったのだ。
ホニさんが消えてしまうと、教室の生徒たちはホニさんのことを次第に忘れていった。

だからヨーコを知るのは、今ヨーコをして認識している友人達だけだ。

「ここが、ユウの教室？」
「いや、もう学年も上がるからここじゃないぞ」

「そういえばそうだったね……私も覚えてるよ、ここにいたこと…
…まあ、すぐに出ていっちゃったけどね」
「……」
「はいはい次々」

教室を扉の窓越しに見ると、ヨーコは歩きだす。
そして向かった先は、保健室。

「お世話になってた」
「まあ、そうだろうな」

更に移動して、学食。

「閉まってるな」
「……うん、学校は終わりっ」

その時俺はもしやと、気付き始めていた。
ヨーコがどうしてこんなデートコースを選んだのかを――

「ラストの場所は、少し遠いけど我慢してね」
「心配されなくても大丈夫じゃわい」
「爺臭くなってるよ」
「はいはい、れっつらごー」

――ヨーコが前を行くように、手を繋いで向かった場所は。

「ここな」
「旧・肝試し会場でーす」

肝試しをやった、神社のある墓地。
春と夏に一回ずつ、肝試しをしたのだ。春にはホニさんと出会い、夏はホニさんとのデートだった。

「なあ、ヨーコ」
「なに？」

肝試し。そのことはヨーコの頃では知らないはずで、もし知っていたとしてもホニさんの中から見ていたこと。

「今までの道のりは、ホニさんの思い出の場所を逆に行ってたんだろ？」

商店街は、夏祭りに戦い。海は夏に皆で訪れた海水浴。学校はホニさんが転入し、過ごしたところ。肝試しのこの会場は、全ての始まり。

「ありゃ……ネタばらしする前に分かっちゃってたんだ」
「そりゃな。で、ヨーコはなんでこのコースにしたんだ？」

ホニさんの思い出の場所を逆流したのは分かった。でもそれをなぜホニさんがいなくなったヨーコがするのか。
ヨーコはそのことを覚えているとも言っていたはずで。

「自分の目で、見たかったんだ」

手を繋いだまま、背を向けてヨーコは言った。

「ホニさんの過ごした記憶を私は覚えてる、でもそれはホニさんから見たものだけだったんだよ」

ヨーコは隠れていた、というようなことも言ってたっけか。

「私から見たものでは全然なくて、私も見れてはいたけど――それだけ。自分の体だけど、自分の目じゃない」

ホニさんがいなくなってから、ヨーコは変わった。

自分が必要ないんだと、自虐的になっていた。でも、下之家にはゆっくりと馴染んで。今では立派な下之家の一員だ。

「過去との決別……かな？」

ヨーコはホニさんの記憶を持っていて、それが自分のものだというのに負い目のようなものを感じていたのかもしれない。

「だから……今日は、俺と？」

「ユウとデートしたかったのもあるけどね。ホニさんのことは忘れないけど……いつまでも、思いだすことがホニさんの記憶じゃ悔しいからさ」

……そういうことか。

「……ユウ、これはただのホニさんの真似なのかな？　結局はホニ

さんにすがってるだけなのかな？」

悪い、俺にはよくわからない。

真似かもしれない、すがってるかもしれない。それでもな――

「これから自分を見せつければいいさ、ホニさんとヨーコは違うからな。容姿が同じなだけで、心は全然違う――全くの別人だと俺は思ってる」

容姿は瓜二つ。それはそうだ、もともとヨーコの体だったのだから。

「それに言ったろ？　俺はこれからもお前を守るって」

「っ！」

俺もなかなか恥ずかしいことを言ったものだ、当時クサイと言われても仕方ない。

「……でもユウはホニさんのことはいいの？」

「よくない、諦めたつもりは一切ない。でもな、今となりにいるヨーコを厳(おごそ)かにする理由にはならないからな」

「……」

「ヨーコはヨーコらしく、これから時間はたっぷりあるだろ？」

俺に、家族に、皆に個性を見せ付けてやればいい。これが私だって。

「私も……諦めてないよ。でもさ」

繋いだ手を一瞬解いて――

「ホニさんにユウを独占させるつもりもないから――」

そうして大きく背伸びをして、数ミリも無いほどにヨーコの顔が近づく。

そして――

「……ホニさんからだけじゃ、ダメだから。私からもね」

頬を赤く染めながらも、とびっきりの笑顔で。

「責任とってね、騎士サマ？」

自分からしたじゃねえか……なんて言葉を続けることは無く。

「まあ……責任取るぞ、お嬢様」

俺もヨーコも忘れてはいない、ホニさんがいた日々も事実も。いつか帰って来ることも諦めていない。

それでも俺とヨーコとの日々は続いていく、変わっていく――そしてこれが俺とヨーコのはじまりの話。

第３４５話　√１／２／ａ－ＯＶＡ３　ミツドモエなラブバトル！（終）（前書

オチ

第３４５話　√１／２／ａ－ＯＶＡ３　ミツドモエなラブバトル！（終）

以上回想。

「……だったな」

「そーそー」

思い起こして、ポケットをまさぐり携帯を取り出して手の平に載せる。

「あのときのっ」

「当分は付けるかな」

ヨーコが気付き、俺が意図したのはヨーコのヘアピンとお揃いの桜の花びらを模したストラップ。

俺の携帯にはそれがぶら下がり、桜も散り始めた四月の中旬の今でもこうして付けていた。

「でも私は付けなーい」

嬉しそうにそっぽを向くヨーコ、これは何かのフリなのだろう。

「……一応聞くけど、なんで？」

「あれはユウとのデート用だからっ！　期待してます」

あぁ……そういうことか。

「前向きにな」

「断言してくれてもいーじゃん！」

「（しかし……）」

思い出してみれば、三者三様と言わんばかりに三股してる上にイチャイチャしてんだな……あの頃の俺は、どうかしてんじゃねえかな？

……でも不思議だ。三人への好意はあれど、今はかなり冷静だ。あそこまでのバカップルはプレイバックするだけで赤面ものなのだが――普通に彼女らに接っすることが出来すぎている。

「（ん……？）」

感じたそれは、違和感。急激に頭の中で過ごした日々が重なってゆく、そして俺は気付いた。

「（タイミングが揃って……！？）」

記憶通りに解釈してしまうなら、俺は交互にマイやユイにヨーコと二人で過ごす日々が――

「（無茶が過ぎるっ）」

マイやユイやヨーコと思いだしたこと以外にも、色々な出来事がある。

しかしそうなると、明らかに重複してしまう時間が出来てしまうのだ。

「（その頃俺はどうしていた？　俺が何人もいない限りでは）」

ドッペルゲンガー？　でもこうして三人との記憶もある。

しかし矛盾する行動と時間――

「悪い、ヨーコ電話掛ける」
「え、うん？」
俺は携帯を開くと電話帳を覗いた。そこには登録された友人達の連絡先が載っている。
「（誰にする……？）」
ユキには……聞く内容が悪過ぎる。委員長は接点がない、愛坂や生徒会メンバーにはただ遊ばれる。
じゃあ――怒りは買うだろうが。
「……出てくれっ」
『もしもし』
「マサヒロか？　俺だ、ユウジだ」
『あっ、ユウジ！　お前に言いたかったことがあんだよ！　女の子を侍（はべ）らせてるのは冗談のつもりだったが、股かけてるとか冗談じゃねーぞ！』
なんてイイ奴だ。俺が聞こうとしたことをここまでベラベラと。
「悪い、俺って今どんな印象だ？」
『学園の華ことマイさんにも手を出し！　悪友関係とおも思われたユイにも手を出し、終いには妹もとか噂されてんぞ！　一言で言えば最悪だっ！』
……まあ、そうなるわな。
『てか聞いて初めてしったけどよ！　ユイとは十月、マイさんとは

十一月に付き合い始めてんだって!?　二人はいいのかよ、そんなこと……して?』

急に言葉を詰まらせるマサヒロ。

「どうした?」

『いや……ん?　でも、そんな素振りは見てないしな……いや、それでもお前とマイさんが仲良くなって、ユイが仲良くなって……んんん?』

動揺しているような、思い返して何かの矛盾点を見つけたかのような――リアクション。

「マサヒロ、一つ聞く。俺は文化祭の時に何してた?」

『痴ほう症の前触れか?　そんなの――生徒会?　いや、カレー当番?　んん……確か怪我で――待て、ちょっと待て!　意味が分からん!　てか、有り得ないだろうよ!』

「わかった、すまん、ありがとな」

俺は混乱し始めたマサヒロの電話を切った。

「（俺が何人もいたことには違いないみたいだ）」

夢でも何でもない。俺がそれぞれしたことは、確かに存在する出来事だったのだ。

生徒会のせいで文化祭はユイと走りまわされた。とカレー当番は、ホニさんといっしょにしていた。怪我したのは旧マイファンクラブとの闘争の結果だ

「（ただ、今こうして俺は一人）」

もしかして俺は、それぞれ別の世界でマイとユイと……ヨーコとも付き合っていた？
　ＡとＢとＣのの世界が有って、Ａの世界ではマイと過ごし、Ｂの世界では戦い、そしてヨーコを残してホニさんがいなくなった。Ｃの世界ではユイと生徒会に奔走し、付き合い始めた。

「（待てよ……？）」

　ホニさんが消えてしまうのはＢの世界だけ。ＡとＣの世界ではホニさんは居続けていた。ということは――

「ヨーコ、ホニさん知らないかっ？」
「ユウ、ホニさんはまだだよ。でもきっと――あれ？　私がまだ引きこもって……そこにはホニさんは居て――」
「ヨーコの中に、ホニさんはいないか？」
「……いないよ。でも、私は、本当は！」

　ホニさんがヨーコの中にいない。記憶が統合されたのも分かるが、ホニさんが消えた世界と消えない世界が混じったらどうなる？

「（数ならばホニさんがいなくならない世界が勝っているはず）」

　それで、どうしてヨーコの中にホニさんがいない？
　考えてみろ――パソコンで「新しいフォルダ」を保存しようとして、重複したらどうなる？
　保存を諦めるか、上書きか、それとも名前を変えて保存のどちらかだ。

「（考えられる可能性としたら――）」

それは重複。つまりはヨーコと別にホニさんがいる可能性。
俺はその時に瞬時に立ちあがって駆け出していた――それで俺は目指した。今ではヨーコの部屋で、かつてはホニさんが使っていた部屋を。

「ホニさんっ！」

扉をばたぁんと開けると――

「っ……あ、ユウジさん？」

ホニさんが居た。

「ユウ、どうして急に駆けだしたり……え、私？　いや……もしかしてホニさんか？」
「うん、我だよ」

にっこりとそう微笑むのだ。ヨーコと同じ容姿なのに、その笑い方は――ホニさんのものだ。

「あのね、ユウジさん」
「ああ、ホニさんもしかして――」

言いかけた。でもホニさんの方が速かった。

「我は覚えてるよ？」

その時何かが壊れる音がした。
――世界の色が失われていく、色づく世界がモノクロの写真のように変わって行く。そうして時は進むのを止める。

「ヨーコ!?　どうした、なんで止まってるんだ!?」

更にはヨーコが石像になったかのように固まり色を失った。
しかし見渡すと俺とホニさんだけが動けて、色も元のままだった。

「我は覚えてるんだ、知ってるんだ……ユウジさんが戦った日々も、ユイと付き合い始めたことも」

どこか悲しそうに、呟くように。

「ホニさんは一体どの世界の……」

言い終えて、何を言っているのか分からないことに気付く。それは俺の推測の中のイメージで、通じないはずで。

「我は、ユウジさんと付き合っていた世界。我が消えちゃって、ヨーコちゃんとユウジさんがいる世界――それから我は全部覚えてるんだよ」

ホニさんはマサヒロと何か違った、今挙げたことは俺の言うBとCの世界だけなのだ。

「ユウジさん、もう目を覚ましてよ」

何かが突き刺さったかのような頭に、強い痛みを覚える。

「この我がユウジさんと会えるのはこの妄想の箱庭だけ、前になんか進ませない、偽りの季節、もしもの世界なんだよ」

これが……妄想？

「でも、今までのことはっ！」

「全部本当にあったことだよ。でもね、今こうして三人と付き合っている世界は偽物なんだよ？」

思い当たることがある。整合性の取れない記憶や、俺のような人間が三股なんてする勇気がないことも。

「ユウジさんも疲れたよね？　同じお話をぐるぐるぐる。でも――進ませないとだめなんだよ」

包みこむような柔らかいもの言いに懐かしさを覚える一方で、頭の痛みは増していく。

「ねえ、ユウジさん。我のとのことは忘れちゃっていい、恋人同士になんかなれなくてもいい――でも言わせてね、ただユウジさんの傍に我がいることを許してほしい。そして進んで、ユウジさんは主人公なんだから」

主人公という単語が衝撃だった。そうだ、俺は主人公だったのだ。最初の頃こそ覚えているが、次第に時が進むうちにその自覚がなくなっていって――

「ユウジさんが主人公で、我たちがヒロインで。今までの物語は、きっと誰かの掌の上なんだと思う。それでもユウジさんは思うままにやり直して！　ここで立ち止まらないで、進んでっ！」
「っ！？」

ホニさん言葉を聞いた途端に痛みが引き、視界が黒く染まってゆく。

ホニさんの必死に訴えかけてくれた顔を最後に、俺は闇の中へと落ちて行く。

主……人公。
掌の……上で。
やり直す？
俺は、立ち止まっていたのか？　こうして”もしも”の夢をみて、進んだ季節の妄想をして。

わかったよ、ホニさん。ありがとう、ホニさん。優しいホニさんは、厳しくも優しい言葉で俺の背中を押してくれたんだね。
ああ、俺はこれからも主人公で居続けるよ――

全てを進ませる為に。

第３４５話　√１／２／ａ－ＯＶＡ３　ミツドモエなラブバトル！（終）（後書

ＯＶＡ編。ただの番外編かと思ったら大間違いですよ？　都合のよいことばかりではないものです。次回からは√ａの続きですが√３の始まりです。この世界の本当の異変とは？　乞うご期待ですー

第３４６話　√３－０ａ（前書き）

普通に√３が始まるかと思った？　俺だよ！

……一応予告もしていましたけど、平和すぎる√ａの異常性についての解説っぽいもの

第３４６話　√３－０ａ

以下時間設定。√ａシナリオ、十月の中旬。

＊　＊

「集まって貰ったのは他でもないのじゃ」
「って、我とホニだけだけどね……」
桐のどことなく質素な部屋に集まるのはロリっ子担当こと桐とホニ。
桐はというと、いつものテンションとは違った。以前にホニに真実を話したときのような真剣味がある。
「……この世界に大変なことが起きておる」
「えーっと……何が起っているの？」
ホニは分からない様子で首を傾げる。
「ユウジとユイが交際を始めたじゃろう？」
「っ……！　そ、そうだったよね」
表情が硬直して、明らかな動揺をしながらホニは答えた。
「それがかなりわしにとって不愉快なのは確かじゃ――しかし、今はそれを抑えておくとしようかの」
「！」

ホニは桐がユウジを好きなのを知っていて、その嫉妬を抑えてまで離す事柄が――どれだけ重大なことなのか容易に想像できる。

「この……世界のこと？」

「うむ」

一言でそう答えるが、桐は顔を渋くする。

「ユイとユウジの付き合うまでの過程がそっくりなのじゃ……ルリキャベの一部シナリオと」

付き合うまでの過程。春の肝試しに生徒会も、夏の肝試しに――

「え、ルリキャベってのは我達の元になったゲームで……ということは、ユイはヒロイン！？」

以前に自分の存在を正体を知ったホニさんは直ぐに理解した。

桐の言う事が本当ならば、同じシナリオを進めたということは、ヒロインの可能性があるのだと。

「しかしそれは間違いじゃ。少なくとも、ユイはヒロインでない。ヒロインは既に一人を覗いてユウジと接触が有り、決定しておる。ユイは間違いなくユウジと友人関係にあった人物じゃ」

「それじゃ……なんで」

「ホニ、覚えておるか？　四月に刻（とき）が戻ったことを」

強制リセット。四月のある日、ユウジの妹ことミユが「はーとふ

る☆でいずっ！」のゲームを起動したことで「はーとふる☆でいずっ！」が現実に展開された上で、時間の四月一日へのリセットが実行された。

「覚えてるよ。我は本来なら神石で過ごしている時期なのに、我はユウジさんの家に居て」

「そうじゃ――あの時に、ユウジ達の現実とルリキャベというギャルゲーが混ざった世界観に、違うゲームが更に混ざったということじゃ。そしてそれもおそらくギャルゲーじゃろう」

「ぎゃるげーって……我達みたいに女の子の出るゲームだよな」

「そうじゃ。そしてわしらが出ていたゲームの”ルリキャベ”のヒロインに、わしらに直接関係はない”違うゲーム”のヒロインが入ってきたことになるが――現状、ユウジの周りに新たに増えた人物は殆どない。考えられるとしたら……ユイが違うゲームのヒロインに書き換えられた、ということじゃ」

つまりはユイに「はーとふる☆でいずっ！」のヒロインの誰かの設定に書き換えられたということ。

「で、でも！　ユイは何も変わってないよ！　そんな、他のヒロインになったようには見えないよ……？」

ユイは本当に変わっていない。性格もそれまでのものを踏襲していれば、違和感がそれほどはなかった。

「ヒロインになったことには変わりない――しかし、その”違うゲーム”のヒロインがユイに類似していたら、どうなる？」

「違和感がないように、合わせたってことなの？」

「それにな……わしは、色々と口外するには規制が働いたのじゃが。ホニの前では例外のようじゃ、それでルリキャベのヒロインはの―

―」

桐はホニの耳元で、あることを耳打ちする。聞いているホニさんの顔が青ざめて行く。

「……それじゃ、まるで……我たちは」

「掌の上なんじゃろうな」

「それで、ユイは書きかえられたとして……ユイだけなのかな？」

「そうなのじゃ。ユイだけとは限らぬ、ユウジの周りにいる”女子（おなご）”という共通項がある以上はのう」

「……どう、なっちゃうの？」

「予測不可能じゃな……ルリキャベと違うゲームが混ざったことで、また何かが起ることも考えられるからの」

「……」

要約すれば。

ユウジ達のいた現実に「ルリキャベ」のシナリオやキャラクター設定がスライドしたいたのが√2までとすると、√aには、更に「はーとふる☆でいずっ！」が混ざったことになる。

端々としたことしか聞こえなかったけども、この世界でヒロインになれるのは”ユウジの周りにいること”で、そうしてまずはユイが「はーとふる☆でいずっ！」のヒロインに書き換えられた

しかしユイに変わりは無く、ヒロインにユイのキャラが合わせた訳ではなく……ヒロインがユイのキャラに合わせたということも考えられる。

更に「ルリキャベ」のシナリオがユイの√では踏襲されていて、それじゃ「はーとふる☆でいずっ！」のシナリオは？　ということにもなる。

「はーとふる☆でいずっ！」混ざり合ったことで”現実”と”ゲーム”のバランスが崩れた、と考えられるのが妥当かと。

――ユイが「ルリキャベ」の流れでユウジと付き合うのは異常ということでもある。

そして先程までが十月の中旬のこと。
時は流れ、年度が変わる直前の春のこと。

＊　＊

二〇一一年
三月三十一日
十一時五十九分

以前と同じように桐の部屋にホニさんが来ていた。

「ホニ……マズいことになった」
「何が起ったの？」

それは深夜のことで、もうすぐ零時に近づいていてもいてホニさんには睡魔が迫る。

「バグが生まれて、世界がリセット出来ないのじゃ」

＊月＃％日？時

零時を迎え世界は――止まり、やり直される。
零時引く三十分。

二〇一一年

三月三十一日

十一時三〇分

何かの異変を感じ取ったホニは辺りを見渡し、目覚まし時計を持った桐に話しかける。

「えっ、えっ……何が？」

桐はというと、時計を持って震える。

「何かが……ユウジの中で起っておる！」

第３４７話　√３－０ｂ（前書き）

ＯＶＡ編の異常の平和な裏では。このような出来事が――

後日修正予定

第347話　√3－0b

「桐！　ユウジさんの中で何かが起ってるってどういうこと！？」

二〇一一年三月三十一日を最後に二〇一〇年の春へと巻き戻される世界。

しかし今回ばかりは、巻き戻ることはなく、かといって進むこともない――最後の三〇分をループする世界。

「……ユウジの部屋に行ってみれば分かるじゃろう」

そう言って桐は自室をホニを引きつれて出て行くと、ユウジの部屋へとやって来る。

そして桐は扉を開ける――

「え……色が」

ユウジの部屋は色を失くしていた。それはモノクロの世界。

時計の針は零時を指したまま静止しているのが見える。ユウジはベッドの上に完全に硬直して横たわっている。

「ユウジさんっ」

「ダメじゃ、見ておれ！」

桐が部屋に入ろうとすると、何か電流のようなものが桐を走り抜ける。

「くっ」

「桐っ」

「ダメなのじゃ――この部屋そのモノがフリーズしておる！」

扉越しに見えるモノクロの世界は、時が止まっていて、それは見ているだけで冷たさを感じる。

まるで、本当に凍らされているように。

「ともかく、ホニはまだ早まるな……わしではこの惨状じゃ、まずは状況を整理するのじゃ」

「……うん」

ホニさんは瞳を閉じるユウジを振り返ると、ゆっくりと扉を閉めた。

「……今の状況になってしまったのは、おそらくは以前に話した違うゲームが混ざり込んだことに起因するじゃろうな」

そういえば桐は言っていましたね、「はーとふる☆でいずっ！」が混ざったことで世界がごちゃ混ぜになり、何かが起きてしまうかもしれない、と。

桐の推測は当たってしまったわけですね。

「今のはバグの一種とも考えられるじゃろうな――ホニが分かるように言えば、ユウジはゲームの中の病気に発症したことになるのかの？」

「病気……それもゲームの」

ホニの表情が絶望に沈んでいき。桐は小さな唇を強く噛みしめる。

『――本当にそれだけなんでしょうか？　桐』

　すると、どこからともなく桐の部屋の中に、桐でもホニでもない声が響く。

「だ、誰じゃ！？」
「あっ――ユミジ！？」
「ホニ、お主！　今の声が誰か知っておるのかっ！」
『すみません、今はラジカセのスピーカー越しなんで声しか出ないんです。何か液晶画面のある電子機器ありませんか？』
「……あまりわしにはハイカラなものはないでの、古いモノになるが――」
『あの、ごめんなさい。ゲー〇&ウォッチは勘弁してください』
「注文が多いのう……最新型じゃから壊すんじゃないぞ」
『……初代ゲー〇ボーイアドバンス。バックライトが無いので暗いですが……お借りします』

　すると電源も入れていないのに、桐の手に持つゲー〇ボーイアドバンスが起動する。
　ロゴが表示されると――

「ぬぉっ！？」
『ユミジです、どうも』
「というか、お主は何者なのじゃあ！」

　桐はそうさけぶと、ホニはその声をフォローするように。

「桐、この人が我の記憶を残してくれたんだよ」
「なんじゃと！　やはり何かの手によるものだったのじゃな！　一体どういうつもりじゃっ」
『……いつかお答えしますが、今は急ぐことがあるでしょう？　”プレイヤースペース”の原因不明の凍結についてです』
「ユウジの部屋の凍結と言いたいのじゃろう？　それで、お主はどこまで知っておる。そしてお主は、今までに何をした」
『……知っているか、という質問はあまりにも抽象的過ぎてお答えできませんが。何をしたと言うと――私は”サブプレイヤー”の”アドバイザー”をしていた、と言ったところでしょうか？』
「お主は小難しい単語を並べて、自分が高尚だと思えておるのか？　そうじゃとしたら、わしは軽蔑するぞ」
『ごめんなさい、悪気はないんです……えーと、ちょっと苦手なんです――以前に現実に展開したゲームで、主人公のサポートをしているキャラを”アドバイザー”と考えています。つまりは、桐、あなたのことです』
「……まぁ、一応そういうことにはなるな」
『そして私も、主人公になれなかった方をサポートしているのです。その方は主人公下之ユウジと同じように現実にゲームを展開させはしましたが、主人公になれなかったのです』
「……その主人公になれなかったのは、誰じゃ？」
「桐、きっとそれはミユだと思う」
「ミユ！？　だ、誰じゃ！　新キャラか、ここで投入されても困る一方じゃ！」
「違うよ桐。ミユはユウジさんの――今は引き籠っちゃってるけど、本当の妹さんだよ」
「ユウジに妹……！？　引き籠り……あ、あの時の前髪女かっ！」
『きっと、あなたの考える方です。あの方が、ゲームを起動したことで世界は混ざってしまったのでしょう』
「それでお主は、さっき言っておったな？　ゲームが混ざっただけ

が原因なのかと」

『ええ――桐、あなたは主人公下之ユウジに”メモリープロテクト”……記憶を封じているでしょう？』

「……っ！　そうじゃな、わしはユウジの記憶をシナリオが変わるごとに封じておる！　それが何の――」

『記憶というものは、大きな情報の集合体です。消したならまだしも、封じているだけだと下之ユウジは”今までに失敗した世界の記憶・今までのシナリオを完走した記憶”を持っているわけです。この意味がわからないわけではないでしょう？』

「じゃが、しかし！　ユウジもヒロインも過ごす時間は変わらないはずじゃ！　ユウジと例え接触しなくても、別にシナリオは進行しているはずで、ユウジだけが記憶を持つことで……」

『キャラクターデータ……現実に展開されたヒロインのデータは、あの箱に記憶されているのですよ？　元々がゲームなのですから。しかし下之ユウジは現実の人間です。キャラクターデータとは勝手が違います』

「……つまりは、わしがユウジの記憶を封じることで負荷がかかっていると」

『はい。このゲームの展開された、この世界に、です』

……黙って聞いていると、凄まじい規模ですね。ユウジの存在はかなり大きいようですね。

――勿論、分かっていますけれど、改めて確認しただけですよ。

「……わしが記憶を封じるのが原因の一つでもいい、じゃが！　それでどうなるのじゃ、わしには到底思うつかぬのじゃ！　……今まで頑張ってきたが、わしの力も二〇こそあるが限られておる。痒いところに手が届くとは限らないのじゃ……少なくともわしには、どうすることも出来ないのじゃ」

『そこで、私はお邪魔させていただきました。失礼な物言いですが、

ご容赦を――私は桐の心詠の上位互換とも取れる、人の情報を読みとる”情報読込”という能力を持っています。それで下之ユウジの夢の中を映しだします』

「液晶の中のお主にそんな力があると？」

『信じられないかもしれませんが……今映し出しますので――私は声だけで、呼ばれた時のみお答えします――』

そして小さな携帯ゲーム機に映し出されるのは――妄想の世界。

二〇一一年四月を迎えた、偽りの季節。

「……ありえないことじゃな」

桐は言っていた、ゲームを攻略しない限りは二〇一一年四月に季節が進むことは無いと。

『下之ユウジはその中で、私たちのいる世界と同じように過ごしていることになります』

「ユウジさんは夢の中で……？」

ユウジは夢に閉じ込められた、と言ったところでしょうか。

「見て分かるほどのチグハグじゃ！　なぜに三人と交際していることになっておるのじゃ！」

「わぁ……マイとユウジさんが付き合ってた頃の我って……」

「緊急時とはいえ、ここまで三人とのイチャイチャしているのを見せられるとは……」

「……うん、ちょっと我も蚊帳の外みたいで寂しい……かな？」

『桐の言った通りに、チグハグなんです。設定も、後日描写も、関係もですね』
「……おかしい点ばかりじゃな」
「それでユミジにはこれを見せてもらったけど……どうすればいいのかな？」
『お気づきでないでしょうか？　時折出る場面は実際にあったことですよね？　桐もホニも知っているでしょう？』
「……まぁそうじゃな」
「そう……だよね」
『それ以外の要素がちぐはぐで、この世界の設定は三つの世界が統合してしまった、という”イフ”な世界なわけです。キャラクターの情報も統合されているはずですが……何かおかしくありませんか？』

それを聞いて桐は考える。少し経ち、目を見開いた。

「……ヨーコとホニが同時に存在しておらぬ！」
『そういうことです。ホニの消えてしまった世界もあれば、ホニが消えない世界もある。それが合わさったことで、ある隙間が出来ました。あの世界には今までの記憶や情報を統合して完成されたキャラクターで構成されています。桐も試したことでしょうが、下之ユウジの世界では重複してしまいます』
「……相も変わらずに遠まわしじゃな。ようするに――」
「我が行けば、ユウジさんは助かるの？」

桐が憤りに身を任せて、画面へと怒鳴りつける寸前でホニは立ち上がって言った。

『そういうことになります……それでも、危険は伴うものです。基

本的には下之ユウジの見ている夢に変わり無いのですから――下手すれば下之ユウジは壊れます』

「そ、そんな淡々と言う事か！」

『本当に申し訳ないんです。もともとこういうもの言いんですので……もちろん下之ユウジの世界に跳びこんだホニにも危険が伴いわけではないのです。最悪の場合、下之ユウジのフリーズを解けずに取り残されてホニも同じようにフリーズしてしまう可能性もあるのです』

ユウジにもホニにも、それは危険なこと。それでも、フリーズを解かなければ世界は繰り返すのみ。

「……我に何か出来ることがあるなら、なんでもするよ。我は――ユウジさんに何度も救われたんだから！」

『出来ます。そして私からもお願いします』

「ユミジとやら、なぜお主もユウジに固執する？　この世界が繰り返されることから脱却していからか？」

『それもないわけではないです……でも、個人的に下之ユウジには目を覚ましてほしいのです。ミユさんはもちろん私個人でも』

「本当か？」

『本当です』

「……わしには何も出来ぬ。もし出来るとすれば”回復能力”を応用して、フリーズを解くワクチンのようなものが出来るぐらいじゃ……ホニが入れなければ、何の意味ない」

「――桐は十分だよ。桐も我を何度も助けてくれたの知ってるよ……我にしか出来ないなら、やらせて」

『……それでは、今の下之ユウジの部屋から入るのは、フリーズしたところにそのまま入ることですから、リスクが伴います。そこで

――』

「――うん、わかったよ」

「すまんな、ホニ。わしは直ぐにワクチンを精製する――」

ホニさんの部屋の前に、携帯ゲーム機を持った桐とホニが並ぶ。

ゲームをホニの扉へと向けて、

『座標を固定。ホニの部屋と下之ユウジの部屋をリンクさせます』

「……これもユウジが気づいていれば成功することじゃな」

「大丈夫だよ、きっとユウジさんは気付いてくれる――我を覚えててくれるよ」

『――リンク継続は最長六十秒、最短は三十秒。制限時間以内にワクチンを発動してください』

「わかった」

「ホニ、ユウジを頼む！」

『……よろしくお願いします』

「行ってくるよ――ユウジさん、待っててね」

そうしてホニは跳ぶ。ユウジの夢の中の”イフ”世界へと。

ユウジを取り戻す為に、世界をまた動き出させる為に。

第３４８話　√３－０ｃ（前書き）

次回から本編再開予定ですー

第３４８話　√３－０ｃ

それはきっと本当で、それはきっと嘘で。
きっとそれは境界線さえ曖昧なのだと思う。

きっとそれは現実で、きっとそれは夢で。
それはきっと境界線すら不定なのだと思う。

ここは誰かがプレイするゲームの世界で、きっと彼らはゲームのキャラクターに過ぎない。

今までのことが全て現実で、全て事実なんて言える？
今見ている液晶を眺める自分も、もしかしたらキャラクターの一人に過ぎないかもしれない。

思い通りにやり直せるこの世界は、きっと誰かの掌の上。

＊　＊

どうもナレーションのナレーターです。
そういえばですね、実は最近ナレーションの私、アドリブなんですよー
なんか台本と違うんですよね、本来ユイがユウジと付き合うシナリオなんてなかったみたいで。
だからもう三つ目の台本貰ってるんですけど……そういえば”私”そのものの出番まだですか？

え、まだ？　それ、あの発言はまずかったって？　少し口が滑っちゃったんですよ、どうせユウジも次のシナリオでは覚えてないでしょう？　もう少し……分かりましたよ。

＊　＊

十月のある日のこと。
それは暗い部屋、液晶の明かりだけが頼りの闇の中には、一人の女性の姿がある。
その女性は、何かが映し出される画面を凝視している。その表情は――

『――――以上がログです』

画面の中の絵が喋った。見かけがＣＧグラフィックなポリゴンな彼女は、ユミジという。

「……そっか、本当にユウ兄は」

一人呟くようにして言う彼女は、ミユという。
それを聞いて「わかっていたけど」というような雰囲気で、いざやはり聞くと……というような心境でしょうか？
言葉こそ途切れてしまいましたが、何か脱力しているような印象を受けます。

『とりあえずは、適合する人物Ｎｏ．２「近江由子（おうみゆこ）のシナリオが展開された訳ですか……むー、このようなイレギュラーな展開になるとは』

「……イレギュラーって？」
『ミユ”はーとふる☆でいずっ！”のパッケージは有りますか？』
「え……有ると思うけど……あった」
『その中の説明書を見てみて下さい。その中の近江　由子が本来のヒロインとなります』

本来のヒロイン？　と疑問符を浮かべながら説明書を眺める。
そこにはノンフレームの眼鏡を掛けて、オタク趣味を隠している設定のヒロインのイラストが写しだされていた。

「これって……」
『どこかで複雑に混ざってしまったようなんです。近江　由子とユウジの義妹となった巳原ユイは』
「え……え？」
『つまりは、ゲームが展開されなければ巳原ユイはヒロインにはならなかったでしょう』
「それじゃ……ユウ兄が巳原とか言う突然知らされた義妹と付き合うことになったのは私のせいってこと！？」
『故意では確実に有りませんが、そういうことですね』
「……」

はぁー、やはりユイはゲームのヒロインとリンクしてたんですね。

「……で」
『で？』
「なんで妹はダメで、義妹はいいのよ！　た、確かに同い年の妹って微妙な立ち位置ではあるけどさ……義妹も同い年なのに！」
『ミ、ミユ？』
「そりゃ私は感情表現ヘタだから、ユウ兄にツンとした態度取ってた気はするよ？　でもさ、なんか腑に落ちない！」『そんなに下之

ユウジが好きなら会いに行けばいいじゃないですか』
「す、好きなわけないじゃん！　何言ってるんだ、この生意気プログラムは！」
『む……素直じゃないですね、今時ツンデレは流行りませんよ』
「ツンデレじゃない！　ただのツンだって！」
『ただウザいだけじゃないですか』
「うっ」

布団を被るミユの背中に矢が刺さったようなイメージ。正論に的を射抜かれたようです。

「……それでも、昔は上手くやれてたんだよ。三人の頃は、この私のキャラで」

何かを思い出すように、どこか悲哀の表情を浮かべるミユ。
ところどころ出てくる、ユウジとミユとあともう一人は誰なんでしょうね？

『……』

ユミジは見守るように無言で返しました。

＊　＊

二〇一一年

三月三十一日

十一時二九分

「今日でリセットになるの？」

『はい。でも良くも今の今までよく見れましたね、下之ユウジのラブイチャっぷりを』

「ま、まあね……散々壁を殴りつけたけど、今では悟りが開けそうだよ」

『……初期の荒れっぷりは冷や汗モノでした、画面が貫通されるかと』

「そこまで力はないよ！」

『リセットすれば、ミユや一部以外の記憶はリセットされて”下之ユウジが付き合った事実”も完全に消滅します』

「ユウ兄の記憶も……消えるんだよね」

『そういうことになります。本来ならば、そういうことにはならないのですが』

「……本来なら？」

『本来ならば、下之ユウジの記憶は”プレイヤーデータ”が凍結されずに継承……下之ユウジが、ヒロインを攻略した記憶は引き継がれるのです』

「もしそうなら、今まで付き合った女の子のことを思い出しながら、他の女の子と付き合うってこと？　……今までの付き合ったことのある女の子とはどうなるの？」

『どうにもなりません。ただ、以後の攻略対象からは強制的に外されるのです』

「……ふーん」

そうして一日が終わり、世界が繰り返される直前のこと。

『っ！』
「ええっ！」

急にミユのパソコンの画面にエラーメッセージのログが大量に現れ、ユミジの音声が途切れた。

「え、えっ、ブラクラ！？」
『ちょっと待って下さい――直りました』

ログがすぐさま消されていき、ユミジの音声も回復する。しかしミユは怪訝な表情を浮かべながら、

「ほ、本当に何も影響はない？」
『大丈夫です。ミユの”あの”フォルダは――』
「言うなっ！　電源切るっ」
『嘘です嘘です！　ごめんなさい』
「……で、何があったの？」

ミユがそう聞くものの、ユミジは答えない。しばらくしてから――

「……なんとか言いなさいよ」
『――大変なことになりました』
「え、やっぱり私のパソコン壊したのかあ！」
『違います、というかそれよりも重大なことです』
「は、私のパソコンは命の次に――」

『この世界にバグが発生しました』

「バグ？　私のパソコン出なく……この世界？」
『はい、正確には……』
「歯切れ悪いなあ、どういうこと？」
『下之ユウジが目覚めません』
余りにも突飛押しもない展開だった。どんなマンガでもここまで唐突なことはない。
勿論、ミユは疑う――こともなく、そのユウ兄の目覚めない事実に、食いつきました。
「ユウ兄が……どういうこと」
『下之ユウジはこの世界の主人公で、この世界の中心です。そして下之ユウジの時は制止してしまいました』
世界を止めてしまう要因がユウジでしたから……世界の中心というのも間違ってはいないのかもしれません。
「……ユミジ、いつもの廻りくどい言い方なのよね？　どうせただ風邪で倒れたとか、そういうの……」
『このままでは世界は』
二〇一一年
三月三十一日
十一時五九分

＊月＃％日
？時＊＞分

「あ――なに？　これが――リセット？」
『見ていて下さい』

二〇一一年
三月三十一日
十一時三〇分

「え、戻った？　それも三十分前！？」
『……すいません、少しばかりいなくなります』
「え、ユミジ！？　どこいくのよ！」
『下之ユウジを目覚めさせなければいけないのです……少し、ある方に協力を仰ぎます』

これが桐ですね。

「……ユウ兄はどうなっちゃうの？」
『……大丈夫です、きっと――』
「ユミジ！」

液晶に散々写しだされていたポリゴンキャラクターは姿を消し、壁紙とアイコンだけが残る。

「……わかんないよ」

久しぶりの一人。話相手はずっとユミジだったミユは、癖で呟きます。

「何が起ってるの……私が知らないところで――」

箱庭の中の、更に小さい箱庭に居続けるミユには分からない。この世界で何が起り、ユウジがどんなことに巻き込まれたのか――

「でも……もう私は取り返しがつかないんだよ」

知ることはあまりにも少なかった。

＊　＊

『ただいま、帰りました』
「ユミジっ！？」

いつもならばギャルゲーのソフトを立ち上げてプレイしていたミユは今は沈み切っていました。

『なんとかなりました……もう少しで、リセットが実行されます』
「どうなったの!?　ユウ兄は！」
『大丈夫です、ある方に救って貰いました』
「そう……なんだ」

ある方、というのはホニのことでしょう。

「ねえ、ユミジ……この世界は今どうなってるの？　なんであなたが現れて、ユウ兄が主人公にならなきゃいけなかったの？」
『……』
「……答えられない、と」
『ごめんなさい、でも、きっと近いうちには……』
「……これからは長いからね、わかった」
『はい……』

そうして世界は戻される。
始まりの季節から、始まりの季節へ。

二〇一〇年
四月一日

第３４９話　√３－１　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

少し総集編風味で、次回からが実質の本編に……なるといいなあ

第３４９話　√３－１　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

突然だが、俺は今かなりのピンチだったりする。
幼馴染が目の前で事故死寸前だったり、病み気味の女の子に殺されそうになったり、拉致られて生徒会に強制的に入れられそうになったり――
は、今までにあったことで。

今回はそれに見劣りもしないであろう、大事件だ。

「……」
『……』

俺の手は、柔らかい何かに埋まっている。
そしてその”何かに”薄々気づいてもいて、俺が何をやらかしてしまったのかも知っている。
色々言い訳をしたい、あまりにも理不尽経緯こそあれど――

したって意味がないことは分かっている。
だって、俺は衆目の中で女子生徒にセクシャルハラスメントをしているのだから。

鼓膜がお亡くなりになるんじゃないかと言う程の、女子生徒の絶叫を聞くのは、それほど後のことでもなかった。

今日のあの事件以来は罪悪感盛りだくさんで、俺は心が折れてし

まいそうだった。
まぁ、いわゆる俺は、女性の胸を思い切りに触ってしまったことになる。
……言い訳をしたい、それが不慮の事故であると、それは――
結局は前方不注意の俺は、完全にクロだ。
そして、人生というのの世知辛さと、入学してからの連続ハードモードのあまりに感動で、砕け散りたい気分だった。
そうして俺は、その女子生徒と願ってもいない奇跡の対面を果たす。
運が悪い日はトコトン、ツキがない。
せめて別のタイミングで出会えて、土下座してもいいから謝れればいいと思う。
更に言い訳をするならば、俺も彼女に謝ろうと校内を探したが、雀の涙ほどの休み時間は終わりを迎え、彼女とまた出会うことが出来なかった。
『さ、さっきのセクハラ男！』
なんというか、あれだ。
これが最初のファーストインプレ……なんだっけ？　事実顔を見合わせての出会いは、これが初めてで。
俺の印象は、とにかくストップ安。
今までのどんな破天荒な出来事の中でも、このコンボはかなりにダメージが大きいものだ。
……うん、ちょっと今は引き籠りたい気分だ。数年ぐらい。

生徒会で、ズビシと被害者の女子生徒が顔を真っ赤にしながら俺を指差した。
もう、それを見た途端に俺の行動は決まっていた。

「本当に悪かったっ」

俺はもう頭を下げた。会長が唖然とし、チサさんは何か声を殺しながら微笑をし、福島はジト目、姉貴はあたふた、ついでに付いて来ていたユイも首を傾げている。
状況があまりに最悪で、俺の行動の下劣さもここに極まれり。

「こ、こっちにきてくださいっ」

この状況がマズいことに一瞬で気付く彼女は、俺を連れて生徒会室を出た。

「ど、どこまで私に恥をかかせますのっ！」

正直俺はパニくっていた。なぜ、あそこまで唐突に謝ったのだろうか、と今考える。

「……かさねがさね悪い」
「悪いですわっ！　私のむ、胸を揉んだ挙句に……生徒会室まで乗り込んで来るなんて！」
「……いや、それはな」
「言い訳は結構！　ともかく、私に今後関わらないで頂けますこと？」
「……それがな――」

そのあと、俺が生徒会役員だと知って。この世の終わりとも思える表情を彼女は浮かべた。

起ること起ることが負の連鎖を繰り広げている、現在連続ボーナス中だろうか。

それでも、彼女が無視するということを言い残して去って言ったが、やはり俺はツイてない。

その時近くで聞こえた、カメラのシャッター音がその起りうる未来を如実に語っていたのかもしれない。

そう、これは彼女――オルリス・クランナとの出来事。

第３５０話　√３－２　気になる彼女は○○○で×××で。

はっきり言うと、スキャンダル。

スキャンダルじゃなくてキャンドルだったらどんなに良かったか。

だとしても俺の高校生命はロウソクの僅かな炎のごとく風前の灯（ともしび）なのかもしれないが。

この藍浜高校はメディア戦争よろしくに新聞部が乱立している。

その中で通が選ぶとか言われているのが「非公式新聞部」が発行する「アイパマ新聞」だ。

実に正確な情報だが、その危険度は高い。取材の難易度などにおいて群を抜いてトップクラスの記事を掲載し、少数発行ということで裏では高値で取引が噂されており、なかなかにブラックな代物ともいえる。

で、見出し一面にだ。

『生徒会役員Ｙ氏が、同学年女子にセクハラ行為!?』

Ｙ氏と濁してはいるが、俺に至っては棒線すら入っておらず特定してくださいと、言わんばかりだった。

言う程には出回らなかったらしいが、やはり一部には俺がしでかしたことが伝わり、露骨に避けられもした。

そして、姫城さんの手に渡ったのが致命傷で……もう説明するのも嫌だ。更には、

「最悪の展開ですわ……」

生徒会室からまたまた離脱し、怒りと恥辱に肩を震わせる彼女。

「何か言う事はありませんの」

「……」
「あなたが軽率な行動をしたが為に、このようなことになったのですよ」
「……」

その情報が届かない訳はないもので。
俺は何も言う事は出来なかった。不貞腐れた訳ではなく、とにかく申し訳ない気持ちで、俺は深く頭を下げ続けていた。
きっと俺の薄っぺらい謝罪の言葉なんて、怒りを増幅させる結果にしかならないことも理解している。

「……今後、一切私に関わらないでください」

もしこれがゲームならば……てかゲームか。
既にバッドエンド確定で、俺の印象は地を突き抜けて地球の裏側に辿りついているのかもしれない。
あまりにも悪いことが重なり過ぎた。
どこからかやり直せたらと、思う。最初の出会いが大失敗だった。せめて、そこからでもリセット出来るのなら――

思ってしまっても、それは所詮叶わない。
この現実とゲームの混ざった世界は、ゲームでも有り現実でも有る。リセットボタンなんて俺は持ち合わせていないのだ――

「へ？」
「どういうことです……か？」

俺は昼休みに生徒会に呼び出され、生徒会室を訪れると彼女、ク

ランナも呼び出されたようで、俺の顔を見るなり背けてしまった。
そんな中で生徒会室で待っていたのは、粉うことなき身長や風格に似合わない合法ロリこと生徒会長だった。

「だーかーらー、これからの生徒会活動はシモノとクランナはコンビってこと！」

指をグッとして言う会長に、クランナは早速反論をする。

「か、生徒会長！　なんで、こんな男などと！」

まあ、間違ってないよなあ。

「同じ一年組だからね！　クラスも違うらしいし、ここで仲良くなった方が生徒会活動が円滑に出来るかなあ、って」「……それは会長がですか？」

あまりにもマトモ過ぎる理由に、俺はつい疑いをこめて聞いてみる。

「うんっ、チサはユイと組みたいって言ってたし、これでいいんじゃないかな？」
「いやいや、この流れだとユイと福島が組むべきなんじゃないですか？」
「書記権限だから仕方ないのよー、でミナはシモノと組みたがってたけど、我慢してもらったの」

……あの姉貴なら、そう言うだろうな。姉貴がしかし俺絡みで我慢とは、

「副会長と姉の間で葛藤しながら、血の涙を流さんばかりにお願いされたよ……怖かった。お願いされちゃったし、副会長権限も発動してるし」

こええってレベルじゃない。それごときを我慢するだけで葛藤された時点で、弟こと俺は相当に恐い。

「あの……出来れば、この男と組みたくはありません。変えていただけませんか？」

クランナは副会長権限発動のそれを聞いてもなお、食い下がる。正直俺も離してくれた方がいい、俺はいいとしてもクランナとしては最大限の不快の塊と行動を共にする訳だからな。

……俺も、気が重いのもある。それならもともと不本意で入れられた生徒会を抜けるべきなのだが、今度は副会長兼姉貴がどんな反応するのかを想像できない、したくない。

それと、ゴミカスのような責任感で今までやってきてもいる。これからも生徒会活動を行うというならば、俺とクランナは真っ先に離すべきで――

「承認――却下！」

「「！？」」

フェイントもいいところだった。

「シモノはもともとパシリみたいのだから、意見は無し。クランナも雑務で入ったんだから、だーめ」

「ぐ……」

クランナもそれには意見出来ない。この生徒会構造が全く不明だ

が、本人が「雑務でも！」と言って入って生徒会なだけに、それは言い返せない。
俺は、以下略。
「とにかく、よろしくね二人とも」
まさに子供のような笑顔を向ける会長なのだが、それは悪魔の笑みにしか見えなかった。

「……仕方ありません。会長がああ、仰る以上は」
「……ああ、そうだな」
俺はどちらかと言えば、チサさんや姉貴の方が怖い。

「あくまで、生徒会活動だけですわ――許したつもりは微塵にもありませんから」
「分かってる」
「分かってるって……ふざけていますの！？」
「俺が、どれだけクランナに酷いことをしたのを理解してるから……不快かもしれないが、これからはよろしく頼む」
「……っ、わ、分かりましたわ」

そうして、会長主導の行動組が決定した。
まずは体育祭、一部三年生の修学旅行の打ち合わせも有るらしい、文化祭やら――
仕事は盛りだくさんで、俺の最低評価からのクランナとの生徒会活動が始まった。

第３５１話　√３－３　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

原点回帰狙いの、桐ＶＳユウジ再び。この兄妹は本当に仲がいい。

プロローグのプロローグから進む日常、始まりの時。までの「１から７のダイジェスト。」第１００部に追加しました。

√１に飛びたい方や、どんな話だったか思いだしたい時にオススメですー

第３５１話　√３－３　気になる彼女は○○○で×××で。

「ユウジ！　お主が転校生にセクハラしたというのは本当なのかぁ！」

家に帰って、パソコンに向き直ってネットサーフィンの真っ最中に俺の部屋の扉が開け放たれ、キレ気味に桐が仁王立ちをしていた。

「世界狭すぎだろう！」

なんなんだこの町は。学校の新聞でさえ出回る地域密着型新聞部だと言うのか（？）

「これはわしが裏ルートで手に入れた！」

「お前は学校とも繋がりがあるんかよ！？」

こんな見た目だけはロリっ子な桐が藍浜高校との接点があるとしたら……いや想像できないって。

「正直に話して貰おうか！　胸の揉み心地は良かったかっ！」

「そんなもん新聞に書いてねえよ！　……てか、お前の攻略情報だろうよ。知ってたんだろ？　一部を除けば不可避なんだろ？　そうなんだろ？」

「操縦不可能じゃったんじゃろ？　だとしても揉んだことには変わりないんじゃからな、それで自分が逃げられる可能性の一つにするのは止めるのじゃな！」

「ぐ……」

まあ、桐が予め知っていても、俺がしでかした事実には違いない。

「し、知らねえ。あんなパニック状態で揉んでも記憶に残ってないからな」

ピッ……ピッ？　なんだこの機械音というかボタンが押されたかのような音は。

「――録音した。そしてこれを生徒会に送るとするかの」
「いやいやいや！　確かに間違っちゃいねーけど、それは卑怯なんじゃないか！？」
「わしの√にお主を入れるまでは……諦めぬ」
「まだ粘ってるのかよ。日の経った納豆は粘りがなくなるように、お前も飽きると思ったんだがな」
「例えが、何か腑に落ちぬ！？」
「ともかく、ＮＯロリてーことだから」
「ぐぬぬ……わしは何度も何度も誘惑してるというのに――ま、まさか本当に二次元にしか興味がない！？」
「お前も元は二次元だから、いくらか良い容姿してるじゃねーか。三次元にも興味だってあるさ……でもな」
「でも？」

「世界は……いや――都は桐を許してくれない」

「おのれ石〇！　個人の嗜好まで踏み込むとは……貴様の描いた若気の至りをＴＯＫＹ●ＭＸほかＵＨＦ局でアニメ化してやろうか！」
「……なんか俺も色々とイライラさせられてるから、それは同意だ。アニメはフラッシュアニメでいいだろ」
「低予算で切り詰めて……ふふふふ――は、今は置いておいてじゃ！」

ち、と俺は舌打ちをする。話を逸らすことに成功したとばかり思っていたのに。

「てか、桐はなんで俺にそこまで固執してんだよ。どうせ弄り甲斐のある男なら誰でも言いロリ●ッチだろ？」

「訳のわからぬ侮辱を受けたのじゃ！？」

「いやいや、俺と桐は一応妹では通ってるけどよ。実質は今年の四月に会ったばっかりなんだからな？　それで、求愛っぽいことされても困惑するしかねえよ」

ぽい、と言っていいのか分からない。襲撃具合だかが、まあそれは目を瞑る。

すると桐は、どこか今までの怒りながらも、どこか楽しそうな表情を変えた。

「会ったばかり……そうじゃな」

何かを含みを入れるように、桐は呟いた。

もしかしたら桐は、過去に俺に会っている……いや、ゲームのヒロインとどうやって出会うのやら。

元々俺の家族には、姉貴とミユと俺と母親しかいなかった。ホニさんも桐もユイも後からやってきた。

ホニさんとユイは今年の春に。桐は前からいたことにはなっている。

「……？」

俺は桐のした表情の意味が分からずに首を傾げる。まったく身に

覚えが無い。

「べ、別に良いじゃろう！　一目ぼれと、言っておけば十分じゃろう！」

「……桐も成長したら分かるさ、俺を選んだ愚かさを」

「ひどいぐらいに自虐！？　……少なくとも、お主と過ごしてきて後悔などしておらぬ。お主、ユウジは――主人公よりも面白い」

主人公より面白い？　主人公ってのは、ゲームのか？

「面白いって……言う程褒めてねーだろ」

「今の時点ならば十二分に褒めたつもりじゃ。それに”まだ”あるがの――今言っても仕方ないからな」

……？　桐の言っていることはイマイチ分からないことが多い。今の時点とかまだとか、お前は未来予知者か。

「……世界を繰り返したら、それは予知とは言えぬがな」

「ん？」

「なんでもない――だとしても、わしはお主を相当に気に入っておる。婿に来い」

「ストレートで男らしい告白だこと……だが、お断りだ。理由は以下略」

「よ、嫁に」

「性別変えてもしょうがねえだろよ、一応俺の妹だろうに……家族で恋愛感情とか勘弁して欲しいぞ」

そう言うと、ガッと俺に顔を近づけて。

「あ！　今お主は色々と敵に回したっ！」

「いやさ、この日本って国は近親で結ばれることが御法度みたいになってるだろよ。いくら画面上でそれが出来ても、現実では無理だからと、背徳と現実へのアンチテーゼを兼ねてる空想の産物だろうに」

と、俺は思っている。

「ぐ……マジレスかっこ悪いのじゃ。それにこの世界は現実でもゲームでもない――ぞ！」

「なぜ、最後を別けた……て、言われてもなあ。妹は生意気というか、姉貴は弟としての愛し方を間違っている気がするし、母親はアレだし。少なくとも、この現実で家族恋愛が出来たとしても何の感情も湧かないなあｔ

ミユはなあ、今は嫌われてるし。姉貴は煙たいほどの溺愛ぶりに晴れ時々ウンザリだし。母親は以下略。

「ぐ……さりげなく、わしを除いたじゃと。ホ、ホニはどうなのじゃ！」

「ホニさんは、ギリギリアウトだろう」

中学生の容姿な上で神様だからな。

「聞いたらあやつ泣くぞ」

「ええ！？　いや……ホニさんは可愛くて大好きだけどさ、なんてーかさ。俺と恋愛感情に発展することはないと思うんだよな――なぜか知らないけども」

ホニさんは俺に懐いてはくれてるのでいいのだけども。

「……ふうむ。それじゃあ、他の女子はどうなのじゃ？　ユキにマイにユイもおるじゃろう？　生徒会メンバーも」

……俺の周りにいる女子手あたり次第だなあ、オイ。

「俺はそこまで女に飢えてねえ。ユキと姫城さんは、やっぱり遠い気がするんだよ。友達でいれるのが、逆に奇跡なんじゃないかと思えるぐらいだ。ユイとは普通に無い。生徒会はなあ……転校生は自分が発端とはいえ露骨に嫌われてるし、福島も同級生だって知ったのに会う機会さえ生徒会以外でないし、生徒会長もチサさんも何か違うんだよ」

ユキや姫城さん、生徒会メンバーとも知り得たのもあくまで俺が”主人公”になったから。

俺単体ではユイと話せていたのが関の山だろう。

「……ふむ、そうか。ならばわしじゃな！」

「完全に話聞いてねえな！　お前とは、無理！」

「ぐぬ……わしとお主は肝試しで一緒になった仲ではないか」

「くじ引きの結果だろうに……てか、もう出てけ」

「い、妹に対する態度としては不適切じゃ！　首根っこを掴むな！　そして外へと――」

俺は桐を扉の外へと放り投げた。

「恋愛ねえ……」

桐が俺に固執する理由は、やはりイマイチ理解できない。

そして、

「俺には無理だろ」

俺は恋愛向きじゃないだろう。自分でも自覚があるほどのヘタレっぷりと、女心は一切読めないし。

「だから、か……」

失敗した理由はそんなところだろう。だから、俺はもう諦めているのかもしれない。仕方なしに二次元に逃避していたのかもしれない。

「あんな、フラれ方されちゃあなあ」

……もう、十二時か。今日はアニメは予約して寝よう。なんだか、今日は疲れた。

第３５２話　√３－４　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

完全にネタ尽きた。どうしようどうしよう

第352話　√3－4　気になる彼女は○○○で×××で。

「ねえ、ユウジ。生徒会ってどんなことやってるの？」
「え？」
教室でテキトーにトークをしていると、ユキが突然にそんなことを聞いてきた。
生徒会ってどんなこと？　思い出してみると、まず真っ先に浮かんだのは――
「雑談……だな」
一応仕事で、今週の目標やら月間予定を決めたり、週番で一部備品の確認とかもしてるけども。
生徒会室では、と言うと大体そんな感じ。
「雑談!?　え、それだけ!?」
「いやいや、他にも色々してるぞ？　学校もろもろとか行事の準備とか進行とか人生スゴロクゲームとか」
「あれ、最後の要素がすごい浮いてる気がするよ」
「って、言ってもありのままのこと話してるだけだからな。あとは弄ばれる」
「抽象的過ぎて、なんのことか分からないからユウジ！」
「俺が」
「ユウジが!?」
おっかしいな。ユキが傍目に見えるほど混乱してるぞ？　分かりやすく説明したはずだったんだがな。
何も間違ったことは言ってないし。

「えと……なんでユウジが弄ばれるの？」

考えたことなかったな。もはや入った直後というより、最初の拉致の時点で俺は弄ばれてるし。

そう、これはきっと、

「自然の摂理……？」

「もはやユウジが流れを作ってる！？」

「なんでだろうねえ？」

「疑問形にしたいのは私の方だと思うよ……えー、うーん、どういうことなの……」

ユキの疑問符は増えるばかりだった。流れるような展開で生徒会のおもちゃにされてたしな。

「ごめん、ユウジなにがなんだかわからない……」

「マジで？」

「マジで」

ユキは神妙そうにそう頷いた。あ、ありのままのことを話しただけというのに。

「あの、ユイ？　生徒会ってどんなことやってるの？」

「ユウジの言った通りだぬ」

「言った通りなの！？　雑談したり、人生スゴロクゲームしたり、ユウジが弄ばれてるの！？」

なんというピックアップ。

それじゃまるで――俺たちが仕事もせずに遊んでいるカオスな組織じゃないか。

「いや、それもないとは言えないぞい。しかしだ、他にも生徒の学校生活をサポート出来るように仕事もしているのだー、例えば今度の体育祭の前準備にアタシ達は奔走していたりー」

「そうなんだー。あ、体育祭も生徒会が管轄してるんだ」

「うぬ、体育祭実行委員なども一年二組のクラスから体育委員も兼ねた生徒が共に準備をしているけども、生徒会も結構に忙しいのだぁ」

「そっかー、なる。そういえば体育祭までは一か月切ってるけど、これから忙しくなったり？」

「だろう。一年組のアタシやユウジとかは、会長や副会長指示で準備の真っ只中ー。個別競技とかは月末ぐらいにアンケートとると思うからよろしくぬ」

「了解っ。競技って例えば――」

おお、ユイ説明上手なのなあ。文章にしたら語尾とか読むの面倒そうだけど。

しかし、体育祭のアンケートって遅いよなあ。即日決めるらしいが、月末って。

てかテストとかあるのに……休ませてくれないだろうか。

そういえば、あれから本当にクランナとは組んで行動している。

まあ、隣にいれば彼女のことだって少し分かって来る訳で――

第３５３話　√３－５　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

イイハナシカナー？

第353話　√3－5　気になる彼女は○○○で×××で。

「行きますよ、下（した）」
「……ああ」

俺はクランナからそんな呼び方であった。
名字の下之から来たであろうが、なぜ”之”を失くした上で読み方を変えたのか。
……容易に想像は出来た。

『あなたにはそのような呼び方で十分です』

と、言われた。
そりゃ、クランナ目線だとセクハラをされた男だからなあ、俺ってヤツは。
”下僕”やら”カス”やら”ゴミ”やら言われなかったことが幸いなぐらいだ。

「とりあずは印刷室に行って、プリントのコピーだな」
「……そうですか」

会話終了。すぐさま途切れてしまった。
それで俺はと言うとクランナと隣を歩くのは気まずいレベルではないので、　俺が前を進むように先を歩いている。
　するとと、後ろから声が聞こえた。

「あの……私はこの学校に来て経っていないのです。印刷室までの案内はよろしくお願いします」
「ああ、分かった」

彼女はともかく律儀で丁寧で真面目だ。
仕事と私情の割り切りが出来ているのかもしれないが、こうして頼むときは、普通に頼んでくるのだ。

俺も入学してばかりとはいえ、一応チサさんに主要場所は叩きこまれた。
一応クランナも聞いていたが、どうにも覚えられてはいなさそうだった。
仕事の事柄はすぐさま覚えるのだが、もしかすると道程を覚えるのが苦手なのかもしれない。

「……」
「……」

無言が続く。しばらくは俺は彼女の様子が全く見えないまま、先を歩き、そうして目的地へとついた。

「ここが、印刷室な」
「……はい」

教室の半分ほどの大きさの部屋で、そこには業務用のカラーコピー機と白黒コピー機がそれぞれ一台ずつ並んでいる。
他には数多（あまた）の種類の紙質の違いから大きさ、色に至るまでを揃えている棚が並び、巨大なインクカートリッジが入っているであろう引き出しのあるだけの、カーテンで斜光されて蛍光灯だけが明かりの、コンクリート地がむき出しの部屋だ。

「……この印刷機をどうするのですか？」
「ああ、これをな」

ポケットからプラスチックケースに入った情報記録メディアを取り出す。
そこにコピー、印刷するプリントのデータが入っている。
その記録メディアをカラーで印刷する必要はないプリントなので、白黒専用のコピー機に入れる。

「印刷機の電源を入れて”コピー”を選択してから、印刷機のカード挿入口に入れて、ここにある液晶で印刷したいものを選択する――」
「はい」
「選択したら枚数指定をして、それで印刷する紙をセットして、後は待つだけ」
「……なるほど」

今ではそんなことしないであろう、と言わんばかりに手の平サイズのメモ帳とボールペンを構えて俺の話す事柄のメモを取っていた。

今までの生徒会の覚えることも、そうやってメモ帳に取っていた。

「なんてーか、真面目だな」
「……私のことですか？　当たり前ですわ。生徒会なんて真面目な人しか務まりません」

もしかしてセクハラもするような不真面目で不潔な俺は生徒会に向かない、と遠まわしに言っているのだろうか。
……考え過ぎか。

「ま、まあな。あんな人らだけど、仕事はしっかりやる時はやるもんなあ」

雑談して過ごす時間もあれば、こうして下級生へと指示を出して印刷を頼んで来る。
その間に書記のチサさんは体育祭の備品の調査を、ユイとしているし。会長と福島も色々としているらしい。
副会長の姉貴も、実質生徒会を統率しているだけあって忙しそうだ。

「当たり前です。あなた以外は真面目です」
「……まあ、俺はそうかもな」

こうして仕事をやるのは、俺がただ流されているだけで。自分の意思でやりたいと言ってもいないし、かといってやりたくないとも言っていない。
ただ課せられた仕事を機械的にやっているだけだ。
……そう意味では、俺はセクハラの事柄を抜きにしても不真面目なのかもしれない。

「……肯定しても、印象が悪くなるだけですわよ」
「もともと、ここに入ったのも姉貴の為だ。俺の印象がどうなろうと、構わないさ」
「乱雑過ぎますわ。そもそも入ったのが……アネキ？　えと、お姉さんのことですの？」

なんで姉の為にそんなことを？　というような顔をしている。

「いや知ってるだろうに。俺、副会長の弟だし」
「へえ、弟さん……へ？　あの、副会長というのは下之美奈会長……下之！？　えええええええええええ」

今気付いたようだった。ええー、遅すぎないか。

「嘘を言うのはおよしなさい！　あなたと副会長は、まっっっったく似ていませんわ！」

容姿で兄妹と分かるのは少ないよなあ。

「それでも、一応俺の姉貴だ。まあ、姉貴はスゴイしな。成績優秀で容姿端麗で運動神経抜群で、生徒会で副会長もやっていれば、家では母親代わりに家事……凄い人だと俺は思うよ」

それを踏まえても、俺を溺愛し過ぎなのだと思わざるを得ないが。こうして生徒会に無理やり入らされても、こうしているのは姉貴のことがあってだ。

「副会長は……凄い人なんですね」

「俺だって、姉貴にばっか背負わせちゃマズイしな。あの生徒会の入れられ方は抜きにしても、姉貴の負担を少しでも軽減出来ればいいと思って……俺はこうして生徒会やってるんだ」

「……そう、なんですか」

家事も手伝ってはいるが、それでも姉貴の負担は大きい。朝早く起きて朝食と弁当をつくり、日の暮れる放課後まで生徒会の仕事をして、帰ったら夕食づくり。

そのほかの家事もホニさんに手伝ってもらったり、俺もやっていたりはするが、膨大なのは違いない。

「姉貴には色々迷惑をかけてたしな、それに姉貴が俺を推薦した時点で、俺に入ってほしいって言ったようなもんだしな」

「自意識過剰でなくて？」

「それでも、姉貴は嬉しそうだから俺はいい。裏方でもサポート出来ればいいさ」

「……」

印刷室で、印刷機がウィンウィンと音をたてて印刷される中。俺はクランナにそんな話をしていたのだった。

「……ふぅん、そうですか」

小声でクランナが何か呟いた気がしたが、それはよく聞きとれなかった。

番外２２話　番外１－７　ザ・生徒会の既存（前書き）

※キラワケは力尽きたようです

番外２２話　番外１－７　ザ・生徒会の既存

「会長のアスカと！」
「書記のチサが送る」

『アイハマ放送局～』

（ナウいＢＧＭ）

「やぁー、七回目だねえ」
「もうそんなにしたのかしら？　スタッフのネタ不足も深刻ね」
「……まあ、大抵は本編が進まない時に駆りだされるよね、私たち」
「本編”外”でも出番を貰えてるんだからいいんじゃないかしら？　まあ私たちをこんな扱い方するスタッフは良い度胸だとは思うけれど」
「……ぽ、ぽじてぃぶにね！　えーとこの番組の提供は”デイ・クリエイト”の提供でお送りします？」
「デイ・クリエイト？　……そんな会社私の裏情報網にはないわね、裏の裏辺り？」
「いや知らないから、というかチサは裏は知ってるんだ！」
「裏と五分ぐらいまではね」
「五分！？」
「まぁ、とりあえずこの会社はなんなのかしら。まさか税金逃れの――」
「わぁわぁ！　とりあえずチサ番組進行しよ」
「そうね……じゃあ恒例の」

「駄便（だびん）～」
「――晒し上げ」

「えっ、恒例なのは駄便だよね！？　というかそのタイトルはこのコーナーの本質を示してるんじゃないかな！？」
「気にしないでいいのよ、ということで。ペンネーム”ラクロスF（フロンティア）”さんより」

『気になっている男の子がいます。どうしたらいいですか？』

「（殺したいほどに）気になっている男の子がいます。（効率良く殺傷するには）どうしたらいいですか？」
「チサの歪曲っぷりが凄まじい！？　いやいや、ラクロスFさんはそんな怒りに燃え狂うような感じではないと思うよ！？」
「そう？　じゃあ、傍から観察してみればいいんじゃないかしら――三年間ぐらい」
「藍浜高校の生徒会に来るお便り読みあげてるから、学年問わずそれだと卒業しちゃうよね！？」
「え？　卒業したら終わりと思っているの？」
「社会人になっても観察される運命――！？　もういっそ告白しちゃいなよ！」
「お断りだわ」
「なんでチサが断ったし！」
「な、なんか……負けた気がするじゃない」
「恥ずかしそうに言ってるけど、プライドの塊だよそれー」
「ということで答えは”ＹＨＨＯＯ知恵袋にでも相談すればいいんじゃない”ということで」
「丸投げ！？　……いいよ、じゃあ私も読む。ペンネーム”スパイラル女神さまの祝福を”さんより」

『ヴァ〇スをやるのかカ〇スＴＣＧをやるのか迷ってます』

「好きなアニメで選べよ！」
「あ、アスちゃんのキャラが」
「だってここで質問することじゃないと思うよ！　ちなみにオマージュ元の生徒会の〇存はカオスＴＣＧだよ！」
「よくわからない宣伝が入ったわね……」
「とーいうことで”出来るなら生徒会の〇存のにしてね”で終わりっと」
「……私ね。ペンネーム”ダークネスエンペラー＝ミレニアム＝”さんより」

『俺の右手が疼いて』

「しらねーよ！」
「だから、アスちゃんってば」
「ペンネームからほとばしるほどに厨ニ病をこじらせてるよ！」
「……そうね。一応高校生のはずだものね。結論は”神経内科にでも”」
「じゃあ、私の番。ペンネーム”僕たちの妹がこんなに友達が少ないわけがないと思いきやのミドルシュート”さんより」

『クソゲエの内容被りまくりなんすけど。生〇会の一存とかシュ〇ゲとかギャル〇エとか神〇ぞとか』

「……久しぶりな感じがするわ。このお便り」
「本来はあっちなんだけどね。えーとスタッフの技量と想像力がないからの、一言で」
「最後のお便り行くわね。ペンネーム”ストロベリー、ぶちまけて、

パニック！”さんより」

『この学校に百合はあるんですか？』

「……（ポッ）」

「え、なんで私をみてチサは顔を赤らめるの」

「い、いるんじゃないかしら。たとえばミコトとかアユミとか」

「誰！？　ここにきて新キャラなの！」

「答えとしては”ある”ね。詳しくは”親友以上のアブノーマル”を読みなさい」

「え、え！？　謎宣伝！？」

オチ無し。てーことで、一応知らない人はＲ１５指定の百合描写覚悟でよろしくです。

「と、終わるのが今までの生徒会だったのよ！」

「そうね。続いている時点で時間が有り余ってるんじゃないかしら」

「う……と、とにかく！　チサ、一応呼んだんだよね？」

「もちろんよ。ということで久しぶりのゲストコーナーね」

「たしかに、というか不定期過ぎてどうでもよくなっていた気がする」

「ということでゲストは――」

「ん？　ここは？　ユウとテレビ見てたはずなんだけどな」

「ここどこ？　我は眠ってたはずなんだけど」

次回の番外編へと続く。

第３５４話　√３－６　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

やったあ、ネタおもいついた～

第３５４話　√３－６　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

五月三十一日。

テスト期間などの関係で、体育祭の通常生徒が関わりだすのは主にこの頃、体育祭まで十日ほどの時期である。

水面下では俺ら生徒会や、クラス選出の体育委員兼体育祭委員が動いていたわけで、なんとか折り合いを合わせる訳だ。

……そのせいで、勉強会こそ開いたものの頭に叩き込む形になって結構に危うかった。

そんな中でもクラスでも高い順位をさりげなくかっさらうユイが何なのか分からない、何か秘訣でもあるのだろうか？

「とりあえず、ちゃっちゃとやろう！」

会長が言うまでも無く、生徒会はシンと静まり返って沈黙のもと、プリントをパラパラとめくり、鉛筆がチェック帳を走る音しか聞こえなかった。

今生徒会が何をやっているかと言えば、体育祭での参加競技がクラスごとに振り分けされたものを体育祭委員が作り、人員の過不足などの何かの間違いが無いかチェックを入れる。

書記のチサさんはノートパソコンのキーボードを叩いて、体育祭委員との共同で”しおり”を作っている最中で、今は体育祭委員に頼んだものの調整をしていた。

そういうわけで、いつにも静かさが増す生徒会だった。

一応真面目だ、うん。

てかクラスでの競技決めはカオスだった。
なんだよ、委員長のヤツ唐突に競りっぽく演出しやがって。そこから熱血野郎、と熱血女（福島）のデットヒートに唖然とさせられるばかりだ。
俺はユイと二人三脚に……ああ、ユキか姫城さんが良かった。

「シモノ、手が止まってるよ！」
「すいませ――って会長は何やってるんです！？」

なぜか会長は漫画片手に、イチゴ牛乳を飲み、書類でただでさえ溢れかえるテーブルの上にマシュマロの袋が置いてあった。

「え、生徒会を勉強してるんだよ？」
「それはなんですか、類似キャラを見ていて悲しくなりませんかね」

なんという高度な自虐ネタなんだ。おそらく本人に自覚がないのが一番に痛々しい。

「ちがうちがう。生徒会でも――役員共の方だよ」

自虐とか言ってる場合じゃねェ！

「誰だよ！　いくらマガヅン連載だからって単行本渡したヤツは！」
「アタシだ（キリッ）」
「どや顔で言うんじゃねえ、この変態グルグル眼鏡が！」
「ねーねーチサ”君なりの露出プレイ”ってなにー？」
「え……そう……ね」

流石のチサさんも冷や汗だった。なんだろうか突然”子供のつくり方を教えてー”と子供に言われた親の心境なのだろうか。

「ろ……ロシアに家出するという高度なプレイのことかしら」

それは高度だ！　不法入国だったらシベリア送り確実だぞ、それは。

「そうなんだー、ナーランダー」

「「（何故に世界最古の大学遺跡が！？）」」

なんとかスルーを決め込んでいた、俺とチサ以外の生徒会役員も内心ツッコんでいることだろう。

「……よく分かんないから、他の読も」

「「（仕事しろ）」」

ちなみに会長には、体育祭での宣誓の言葉を考えて貰っている（ようするにあんまり役に立たない）

それでもこんな多忙時に我が道を行かれては、他役員にとっては面白い光景ではない。

「アスちゃん、出来たの？」

「ま、まだ！　あと少しなんだよ……あとはキリンの首ぐらいなんだけどなあ」

「「（長い、先は長いぞ！）」」

いつまでもオフサウンドツッコミをしていても仕方ないので作業に集中する。

「なるほど……第一生徒会が白科学で、第二生徒会が黒魔法、第三生徒会が中立の商業組合かあ」

「「アス〇クラインの生徒会から学べるものってなんだ！？」」

ちなみに、元ネタを知っている俺とユイのツッコミだけだと思う。

「なんか最終巻丸投げだから、後で読もう」

「「（分かる！）」」

ちなみに、元ネタを知っている以下略。

「えーと……まほろ〇てぃっくは――」

「「もはや生徒会関係ねえな！」」

ちなみに、略。

まあ会長にペースを崩されながらも作業は続くのだった。

第355話　√3－7　気になる彼女は○○○で×××で。

「……案内お願いしますわよ」
「お、おう」

そう言って歩きだすのは放課後のこと。
体育祭委員と生徒会の共同で制作した体育祭のシオリをホチキス止めする作業をすることになった。
そのためのホチキスを持ってくるのだが……文具のような掌に収まるサイズではなく、結構に大き目だ。
それを生徒会と体育祭委員の両方へと届けるのが、今回の雑務的任務。
ホチキスの所在というと、生徒会室からは数分は要すほどの遠さがある空き教室を有効活用した倉庫に置かれているという。
持ってくるホチキスは一か所にまとめられていて、それでいて大きさが大きさなだけあって重さも結構あるという。

ということで、今回もクランナと二人で運び出さないといけないのだ。

「あの……その倉庫は何処にあるのでしたっけ？」
「ここ真っすぐ歩いたところで階段を三階上がってすぐにある、生徒会室のある一号館から渡り通路を使ってニ号館をまた真っすぐ歩いた”補習教室七”ってとこ」

言ったもののクランナの反応は分かっていた。
？マークをグルグルと頭の上で回しているのが、俺の見てとれる彼女の答えだ。

「……ごめんなさい、こういうことは得意ではないのです」
「ま、まあ来たばっかだからな」
「そ、そうですわ！　ハンデが有りますもの！　（……決して俗に方向オンチなど言われるものではないのです）」
ボソっと言った内容が、何故か全部丸聞こえだったのだが、聞かなかったことに。
「……」
「……」
もはや毛嫌いの余り、こちらを一見することもなく軽蔑されていた初期と違い、だいぶ改善された。
まあ、それについては申し開きが出来ないどころか、寛大な対応に平伏すしかないのだけども。
もともとクランナは仕事に真面目で、事務的なことならば今までも普通に耳を貸してくれた。
おそらくは仕事だから、と割り切ってもらっているのだろう。なんとありがたいことか。
そして今ではというと――
「そういうえば、倉庫はあまり使ってないらしいから埃に気を付けた方がいいらしい」
「……覚えておきます」
まあ、言う程には変わらないのかもしれない。が、時折だ。
「下（した）」
「ん？」

それが直る気配はなかった。それでも俺も諦めている、というかこれが普通になってしまった。

時折ユキが「マサヒロ、消しゴム”下”に落ちたよ」というと、声に出すことさえこらえるがビクっとしていまうほどだ。慣れってのは恐ろしい。

「下と巳原さんは同じクラスなのですよね？」

「ああ、そうだけど？」

ユイも同じ生徒会にいるのだが、組が違う上に、仕事には集中するのでいつもの安定しないキャラ（ある部分はブレそうにないが）や口調が出づらくなる。

それでも俺と話す時や、福島と話す時には”あの口調”で、確かクランナに対してもそうだったはず。

「……巳原さんって、どんな方ですの？」

「いや、見たとおりだと思うけども……」

「そうではなくて、あれは演技じゃないのですか？」

あー、やっぱりそう見えるか。

「仕事ぶりは私から見ている通りに、速くて正確だというのに、何故あのような演技をしているのか気になりまして……下は巳原さんと仲が良いみたいですから」

クランナも仕事仲間のことは出来る限り知りたいのだろう。

「いや、あれ素」

「素！？　失礼かもしれませんが”ぬ”とか”某（それがし）”とかが普通なんですの！？」

「うん、少なくとも俺が知り合ってからは、あれだ」

上級生や年上の礼儀もわきまえているのだけども、同学年ならお構いなし、といったのがユイの信条のようだ。

「それと……あのパーティグッズのような眼鏡は」

「あれは普通」

「普通!?　日本という国では、パーティグッズを恒常的に使うのが普通なことなのですか!?」

「いやいや、ユイを日本基準にしないでくれ。まあユイや俺の周りにとっては、って意味だ」

某国民的作品のベンゾーさんみたいのが日本人のデフォルト装備であってたまるか。

「教師の方々はなにも言いませんの？　あれでは素顔が分からないのですが……」

同じ家に住んでても、眼鏡装備を徹底してるから俺も見たことないけどな。

「教師は……なんでだろうな？　ユイが優等生だから？」

「こちらが聞いておりますのに!?　……そうなのですか、色々分かりました」

と喋りつつも俺が先導するように歩いていると、お目当てのところへと辿りついていた。

ポケットからカギを取り出して”補習教室七”と書かれたのクラス札のかかる教室の扉を開けた――

こんな感じで、俺の印象が少しだけは改善したようだ。
……それでもマイナスからプラマイゼロに戻すには相当に時間がかかるとは思うのだが。こればっかりはどうしようもない。

番外23話　番外3－2　√2あふた～と～く

と、いうことで本来ならば顔を合わせることのない二人を会わせてみた。
ヨーコが残され、ホニさんがヨーコの中から消えた後のこと。

あっ、生徒会メンバーはすっこんでていいですから。
「ひどっ」「鬼ね……」などと聞こえたけど私は全く気にしない。
まあ、二人の世界を邪魔するのはイイ事ではないでしょうから。

「ヨーコ、ユウジさんとは上手くいってる？」
「い、いきなり聞くなよ！」
「どう？」
「……いいんじゃないかな、ユウの隣をいつも占拠してるし」
「ユウジさんの隣！　いいなあ」
「ホニさんだって、ユウの近くにいたじゃんか」
「ううん、羨ましいよ。出来ればもっと一緒に居たかった」
「……なあ、ホニさん。もう戻って来れないのか？」
「うん、ごめんね。もうヨーコの体はヨーコのものだから、これ以上使っちゃいけないよ」
「私は……全然いいんだよ。ホニさんと顔さえ見えないけど今まで一緒に話せて――楽しかった」
「ありがとね……ヨーコ」

何か感慨深いものが有るのでしょう。二人はしばらく見つめ合い

ます。
　同じ容姿の小さな女の子同士で見つめ合い、まるで双子のようにも見えます。

「……てか、ホニさんの体ちっちゃいなー」
「いやいや、ヨーコと同じ体だよ？　でも改めて見ると、ちっちゃいかも」
「ちっちゃくて悪かったよっ！」
「それは我も同じだよ！？　……あっ、そういえばヨーコ髪切ってないんだね」

　ヨーコの髪を見ると、ホニさん以上にかなり伸びていた。ホニさんが居なくなってから、ホニさんの体は最後のまま。だからその後も成長し、髪も伸びるヨーコとは違いが出てくるのでしょう。

「うん、切らない……これでもいつでもホニさんが戻ってくれるように待ってるんだぞ？」
「え、そうだったの」
「……私は諦めてない。ユウも諦めてないからな」
「でも……」
「ユウ言ってたぞ”俺のここは空けておく”って」
「ええっ！　すっごい収まりたいっ」
「だろ！　だからさ、ホニさん――」
「……ごめん」

　ホニさんはそうして謝るのだった。それが無理な事だと、自分が良く知っているから。
　ヘタに希望を抱かせてもいけないと思っているのかもしれない。

「ホニさんは……ホニさんはいいのかよ！　もっとユウといちゃい

ちゃしたかったんじゃないのかよ！」
「い、いちゃいちゃって！　……良くないけど、ダメなんだよ。それは我が長く生き過ぎたこともあるけどね――ヨーコやユウジさんに前に進んでほしいんだよ」
「私とユウが前に……？　進んでるって、そりゃあもう全速力で！」
そう強がるようにヨーコは言うものの、ホニさんは首を振り、
「我のことをいつまでも気にしてたら、幸せになれないよ」
何かをこらえるような、微笑で。
「そんなこと……！　私はホニさんと私とユウの三人で、幸せなんだから！」
「我はもう外れちゃったんだよ。もう戻ることも出来ない、きっと今話せているのも奇跡みたいなことなんだと思う」
「……どうすりゃいいんだよ」
「することは、一つだよ。ヨーコはユウジさんの隣にいること！それだけっ」
「でも……」
「でもじゃなーい、じゃあヨーコはユウジさん嫌い？」
「な、なんでそんなこと！」
「我が緩衝材になってほしい、とか？」
「ホニさんが少しひねくれた！？　……いやさ、うーん。嫌い、なわけない」
「うんっ。なら、ユウジさんと一緒に過ごせばいいよ」
「……」
「我が途中で抜けて、変になっちゃったよね。ごめん。でもね、き

っとユウジさんはヨーコを大切にしてくれるから。それは保障出来るよっ」

「……ユウは”これからも私を守る”とか言ってたしな」

「ええっ、そんなカッコイイこと言ってたの！　羨ましいなあ」

「ホニさんも散々愛でられてたじゃん、中の私が恥ずかしくなるぐらいに」

「あ、あれは……ユウジさんが優しいからいけないんだよ」

「まさかの責任転嫁だけども、ユウは優しすぎは同意だ」

「そうだよね！　そういえばあの時なんか――」

二人は思い出話や、あの離れたあとのことを話した。

時間は経ち、退散済みの生徒会役員の二人の生徒会室で。

「――ユウジさんがないとさん……」

「たまに私も知らないエピソードもあるのな、私が眠っている間はホニｓなんがなにしてるか分からないけども」

「それにユウジさんはね――」

言いかけてホニさんは止めた。

「時間……みたい」

「もうなのかよ！？」

「ヨーコと面と向き合って話す機会なかったから、きっとその時間を最後にくれたんだと思う」

「最後とか言うなよ……ホニさんはああ言っても、私たちは――」

悲しそうな顔で、今にも泣き出しそうな顔で。思いだすようにヨーコは言った。

「ごめんね、ヨーコ。我のせいで色々と巻きこんじゃって」

「巻き込まれたからユウとも会えたんだ……感謝したいぐらいだよ」
「じゃあ、そのユウジさんとの時間を大切にね」

ホニさんの体が透けていく、空気に溶けていくようにホニさんは色を失っていく。

「ホニさんっ！」
「――ごめんね、ヨーコ――嘘付いてた――最後って言ったけど――ユウジさんもヨーコも覚えてなくても――」

我はユウジさんとヨーコと出会えるから。

そう言い残してホニさんは消えた。

「ホニさん……あ」

後を追うようにヨーコの体も透け始める。ヨーコのあの世界ではこれからも居続けるのだ――だから、この生徒会室からいなくなるだけ。

「誰かわからないけど――ホニさんに会わせてくれて――ありがとう」

ヨーコも空気に溶けた。
そして生徒会室には誰もいなくなる。

生徒会役員の会長とチサが来るのは、それから十数分後のこと。
この生徒会室で、ある巡りあいと、ある言葉たちが交わされたことを――二人は知る由も無い。

第356話　√3－8　気になる彼女は○○○で×××で。

六月一日

それは生徒会室を訪れた放課後のこと。いつものように「こんにちわー」と戸を開け入っていった。

「ああ、シモノ」

正面で生徒会室の入口を見据えるように座っている会長が、俺の名前を呼び。

なんですか、と返答する前に――

「体育祭でシモノが実況やって」

……と、とかいいやがったのだ。このロリ会長は。

「はい？　実況？　”体育祭”なんてゲームありましたっけ？」

「ないよ！　まるっきし現実のお話だよ！　今度の体育祭でのアナウンサーをやってほしいんだよ」

「アナウンサーね……って、ええ！？　無理ですよ、そんな無茶ぶりは！」

「シモノはツッコミの今までのキレといい、それなりに通る声と適任だと思うんだけどなー」

「いや、そんなこと言われましても。一年に任せる仕事じゃないですって」

「――って、いってももう決定済みだけどね！」
「このロリ会長はなんてことを！」
「なんでロリ付けたし！　いいじゃんいいじゃん、イイ思い出になるよ」
「黒歴史化が予定枠ですよ……てか、会長はそういうの好きなんじゃないですか？　なんで一年に譲るようなことを」
「……去年やったら、チサと先生に叱られた」
「……」

すると、イマジネーションを働かせる。
グダグダ過ぎるアナウンスに、観覧に来たお客や生徒の苦笑する姿が目に浮かぶ。
そして途中で、なぜかフィードアウトして、急きょ代役が立てられるもグダグダには違いない――というような光景が。

「あぁ……」
「悟られた！？　なにをシモノは思ったのよ！」
「……わかりました。でもＮ○Ｋバリは無理なんでｔｖ○クオリティならいいですよ」
「公営放送からＵＨＦ地方局への変わりようって凄まじいと思うんだけど！？　そして関東ネタだっ」
「噛みます、滑ります、逃げます（予定）」
「二つはともかく、最後はダメっ！」
「……わかりました。でも後悔しないでくださいね……ふふふふ」
「なんか今日のシモノのキャラが変過ぎて、気付いたらツッコミが私になってる！」

ということでアナウンサーを任されました。
なんてーか、無茶ぶりが過ぎるけども会長がやるよりはマシだろう。

ちなみに他の一年を巻き込んでもしょうがないので、俺が体育祭のノリを背負うとしよう。

「あっ、解説にユイを付けるよ」
「い、いらねえ」

完全にユイの独壇場になりそうに思えて仕方ない。さ、さすがに自重してくれるとは思うけども。

＊　＊

書類作業をしていると、バタバタと誰かが駆けてきた。

「失礼しますの会長大変です！」
「繋げすぎだろ！？」

もはや急ぎ過ぎて、句読点も接続詞もほぼ省略された物言いに思わず俺はツッコミを入れた。
ちなみにやってきたのは男子生徒で上履きの学年色を見るに、同学年だろう。

「えーと、体育祭委員の一年三組の〇〇君ね。何かあった？」

会長は普通に、体育祭委員の生徒の名前を覚えていた。
元になったキャラはどことなく抜けてるし、こっちも抜けてると思ったら、有る程度はしっかりしてるっぽい。

「校庭に爆弾が！」

「「えええええええええええ」」

驚くしかない。そして、みんな「ねえええええええええええええよ」と思っているに違いない。

とりあえずこの学校はいつから物騒になったんだ。ちょっとヤバ目な空気のファンクラブがあるぐらいで、至って普通だったはず。

「本当なんです！　地ならしをしていたら、何か埋まっていて、少し掘り出してみたら――」

「爆弾があったの？」

「はい！　爆弾というより、なぜあるのかわかりません！」

「というより……？」

「マリオ○ラザーズのジャンプ台っぽいものが」

「「著作権的意味での爆弾だ！」」

お、おう。確かに爆弾であるな。ダイナマイトとかＴＮＴとかプラスチック爆弾とかが思いついたけど、それはあくまで表現の範疇だったかー。

「ジャンプ台……えーと、空も飛べるはずね！」

「夢を濡らした涙が海原へ流れても、危険です」

「（この委員出来るっ！）」

俺はこの体育祭委員の会長への切り返しに素質を感じた。

「でもジャンプ台って言っても、あれでしょ？　飛び箱の前のバイーンバイーンぐらいじゃない？」
「……アスちゃん、踏切板だと思うわ」

今まで出来てたのに、分からないからと言ってなぜ表現をそれにしたし。
俺や他の役員と共にツッコミを入れる以外は沈黙を決め込んでいたチサさんがフォローをした。

「そーそー、踏切板ね。で、どれぐらい飛ぶの？」、

それは試した人がいるのを踏まえての聞き方じゃ？　まあ危ないのは確かだな、突然足の動きが変わるから危な――

「三メートルぐらい飛びます」

「「ガチで危ない！」」

なんでマリ○の世界観完全再現してるんだよ。
そしてマリ○が超人的なだけで、あんな風に飛んだら足の骨とか色々殺すわ。

「そしてこだわりのドット絵仕様です」

こだわり過ぎだ！
観覧する客向けなのか、なんというオッサンホイホイ！

「その他にも、ブロックの付いた旗が」

確実にその旗に乗ったら花火が空へとあがる気がする！

「と、とにかく向かおう！　うん、みんな、いこ！」

「「はい」」

謎展開すぎてイミフなのだが、何か異常事態が起きているらしい。

そしてこれが始まりを告げる、ある一要素だったことに気付くのは――そう遠くない話だった。

第３５７話　√３－９　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

これを書いて数日経ったあとに、俺は後悔するだろう。
やだ、この話寒過ぎ……

第357話　√3－9　気になる彼女は○○○で×××で。

「ジャンプ台ですね……」
「うん……」

俺と会長がグラウンドに半分埋まった緑色の物体を見て改めて確認する。

「それで○○君は、これが三メートルなんで飛ぶってわかったの？」

会長がそう聞くが、そういえばそうだ。なぜにそんなことを知っているのかと、疑問に思ったからです。

「それはですね、同じクラスの××君が”実際にやってみた”」
「懐かしいなあ、トリ○アっ！」
「――記録三メートルと十一センチ”飛んだ。”――この世に以下略――七分咲きです！」
「そこまで再現しなくてもいいから！」

やっぱこの委員タダモノじゃねえ。

「ちょっとシモ吉くん、飛んでみなさいよ」
「や、やだよ……ってシモ吉くんって誰ですか！　ク○吉みたいに言わないでくださいよ！」
「私探偵よりも通報するのが趣味なの」
「俺が何をしたんだぁぁぁぁぁ！」

ウサ○っぽいヤツ、会長。ク○吉っぽいの、俺でお送りしました――って、いやいやいや！

「あ、会長さん。丁度ク○ボー持ってきてたぞ」
「コナツ気が効くね～」
「丁度持ってきた！？」

なんで、そんなものを持ち歩いているんだ福島は！？　そんな意味不明にキャラ立てようとしても……うん。
てか、ク○ボーはク○ボーでも遊○王の方かよ！？

「ウチが放り投げるぜい、てやぁっ！」
「”飛んだ”」

委員がすかさずナレーション。だからコイツ以下略。

「目視だと……二メートルと八十センチですね」

なぜ見えたし！　さりげないハイスペックぶりを垣間見せるコイツマジでなんなんだ！

「残念ね、これだとダーツ一本分だわ」

チサさんが何故かフレン○パークっぽいこと言い始めた。

「じーはんき、じーはんき、じーはんき！」

パ○ェロじゃねえのかよ！　てかユイは自販機を景品に頼むな！　てか微妙なパロディを混ぜ過ぎてイミフすぎるぞ！？　すると会長はポケットをゴソゴソといじくって、何かを取りだした。

「残念賞は廃棄された自販機を再利用してつくった、ペットボトル

キャップでーす」

じはんきいいいいいいいいいいいいいっ！

「って、ここまでの流れはいいとしても！　なんでこんなふざけた外見なのに確かな性能な、アブナイ代物がグラウンドに埋まっているのかが、問題なんじゃないですかっ！」

俺はとりあえずその問題を訴える。この人たちは何故か死に物狂いでパロディに持って行きそうになるからな。

クランナが元ネタ分からず困惑してるから、そろそろやめれ。そして姉貴様は俺をみつめながら「ユウくんのツッコミ鋭い……」と何故か悦の表情に浸っているのは何故なんだぜ！

「その発想はなかったよ……」「そういえばそうね……」「えーと、とりあえず現状は危ないのですね」「目の付けどころがディープだぜ」「己はドクペを所望しておる」

最初の二人は絶対気付いているとして、最後から二人こと福島とユイはなんなんだ。色々とテキトーすぎるだろう。

「とりあえず○○君撤去よ！」

「”実際にやってみた”」

なぜに地雷撤去の時みたいな、シールドとマジックハンドっぽいものを持って万全を期した格好をしているのだろうか、この委員は。

「”取れた”」

「解体して資源ごみよ！」

「了解しました、会長！」

なんでも出来るな、この委員。

さらに探してみると、グラウンドには同じものが三つ埋まり、花火の打ちだし砲のついた旗も撤去した。

本当にイタズラにしては無駄に凝ってるんだよな。その後にもどっかの木に”食べたら体が大きくなりそうな茸”が生えていたので回収した。てか何故にマ〇オ縛りなのかと。

そしてこれが始まりを告げる、ある一要素だったことに以下続く。

まあ、それで本番はあっさりと訪れるわけで。

六月十二日

土曜日に設定されたことで、親から町民までわんさかと人が集まる。

『えー、総合アナウンサーの一年二組下之ユウジです。体育祭開始です――』

”始まった”

第３５８話　√３－１０　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

コンナヘンナノリにナッテモ、ナニモイワレナイカラコンナアリサマニ

追記
こんな駄文が百万文字越え。長けりゃいいってもんじゃねーぞ！
それでも続けられたのは読者の方々のおかげ、感謝ですー

第３５８話　√３－１０　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

体育祭当日の六月十二日。土曜日だけあって、以下略。
約十日間しか無かった種目練習に精を出したものの、これまた省略。

ということで、アナウンサー又は実況を任された俺ことユウジは、既に太陽が奮い立つそれなりの温度と陽光の下。
俺は生徒会や体育祭委員の常駐する本部テントのパイプ椅子に腰を掛けながら、目の前の折り畳み式のテーブルの上に置かれたスタンドマイクに、口を近づける。

『選手宣誓、前』

すると、一応顔は知っている生徒を代表して宣誓する上級生が常では校長が上がってる朝礼用の壇上へと上がって。
宣誓以下略。
そして、俺は目の前にズラリと整列する生徒群を見ながら、深呼吸をして。

『えー、総合アナウンサーの生徒会役員の一年二組下之ユウジです。それでは体育祭開始をします――』

ということで、体育祭が始まる。観覧してる来客者の集まる観覧席からは拍手が沸いた。

＊　＊

『体育祭種目一回目は、男女別百メートル走です。皆さん、ここで気合いを入れすぎてブッ倒れないでくださいねー、それでは参加する一年男子は集まってください』

初っ端からジョークを飛ばしてみる。会場が少し沸いた、まあいっか。

『黄色い線……じゃなかった。スタートラインの前に準備してくださーい』

一年の生徒がズラリと並んだ。一組から六組まで構成されているので六列。百メートルよりも陸上部などの運動部は中距離・長距離に参加するので、面子はそれほど運動が得意そうな人たちではなさそうだ。

スタート地点に立つ体育祭委員がスタート合図のピストルを構えて「よーい、ドン！」そしてパァンという空砲が響いた。

『一年百メートル走、スタートしました！　おっと、六組リードに見せかけての三組！　はフェイクで一組だぁ！』

わかりにけーよ！　と待機する生徒達がツッコミを入れてきた、一応はなりに出来ているようだ。

『そしてまさかのダークホース四組がダントツゴール！　他の組は犠牲になったのだ――だけどもめげずに頑張ってくださいねー』

やかましいわあほー！　と三着の三組と四着の五組がツッコみ会

場が沸く、まあこの調子で行くか。

『勝ち組は一番の旗へ、その他は下剋上狙ってクラスメイトに託しましょう！　それでは二走目、行きますよ――』

音楽のＢＧＭが流れる中で、観客の歓声に包まれながらも種目は進行していく。

＊　＊

「いい、調子ね。ユウ」
「本当ですか？　ギャグ寒くないですかね？」
「夏には丁度いいものよ」
「それじゃ滑りまくってるじゃないですかぁ！」
「ウソよウソ。笑いのレベルが低くても笑う人は必ずいるもの」
「もうウソじゃないですよね！？」
「この調子で頑張ってね」

と散々言い散らかしてチサさんは去っていった。まあ任せて貰っている以上は、マシなのだろう。
この調子で頑張るか、と手元にある水を飲む。口を潤したところで――

『それでは女子百メートル開始です――』

適度にギャグを挟んで、場を温めるとしよう。
そんな時のことだった。

「――下之君、大変です」
『ぬわっ！』
マイクを切らずに叫んだので、思い切り声が響いた。
『すいませんー、集合速度の速さのあまり驚きすぎましたー。ちょっとスタートまでお待ちくださいー』
ははははははと会場から笑いが漏れた。ちなみに叫び声をあげたのは、あの体育祭委員こと○○が音もあげずに現れたからだった。
マイク音量をオフにして
「何かあったんか？」
「はい、大変です――グラウンドにまたトラップが」
トラップだと……！？
「いやいや、前に撤去したじゃねえか」
「それが、昨日までは無かったことを確認していますが――今日チラりと見えました」
「マジでか……で、そのトラップってのは危ないのか？」
前回もかなりネタっぽかったが、引っかかり次第では危ないシロモノだったな。
「はい――ダッシュボードです」
アレか、マ○オカートでそこを通ることで加速するアレか。

「だからなんでマ○オ縛りなんだよ！」
「それと蹴ることで何かアイテムがでるブロックが――」
「徹底しすぎだろう！」

はっ、そういえばあの四組の急加速は！
すると観客やスタートで構える女子から、なんで始まらないのー！　とやらの不満が続出している。

「……今のところは大丈夫そうだから、とりあえず始めるぞ」

○○は頷いた。
加速もそれほど危ないものではないように見え、あくまで助力しただけのこと。
本当は止めなきゃダメなんだろうけども、これはどう説明すべきか分からないし、進行を止めるよりは良いのだろう。

『お待たせしましたー、ちょっとＢＧＭ変えたかったんですよー。はい、それじゃピストル係さんよろしくお願いしまーす』

ヨーイドンと走り始める女子達。

『おっと、三組リード！　五組も負けていない！』
「あ、今女子が何かを蹴ったことで現れた液体を被って光ってます」

謎の光る液体……？
なんか体操着透けてて、ちょっとエロいし……でも光ってるから色々とアレだな。
で、その人は気にせずに速く走って一番という。

「ス〇ーのつもりなのか……？」
「そのようです。蹴ったと言っても、土を蹴ったようなものなのであまり感触はないのでしょう」
軽く二十メートルは離れたそれをなぜ、この〇〇は見えるのだろう。ああ……もういいや。
「特に危ない薬品ではなさそうです。速乾性で直ぐに渇きましたし」
なんだそのご都合液体。一瞬の紳士タイムを狙っているのか知らないが、被害者からしたらたまったもんじゃねえ。
「どうやら、接触の仕方でトラップは発動するみたいだな」
「みたいですね」
『それでは、まだまだいってみよー！』
どうでもいいけども俺のキャラってこんなだっけか？　そして体育祭編はあと二回ぐらい続く。

第３５９話　√３－１１　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

体育祭とか中学以来だわ。高校は……なんだよバレーと綱引き大会って。

第３５９話　√３－１１　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

俺はユイに実況を変わって貰い、百メートル走に出場。結果六人中ニ位で無難なところに収まった。それでも二組男子は平均的にあまり良くなく、一位を取れたのはごく一部だった。

『おお！　二組がダントツだぁー！　このまま走り抜けてのゴール！』

百メートル女子に出場したユイは、何故かキ〇ちゃん走りをしつつも後ろを大きく離してのゴール。

あの走り方でダントツかよ、と他のクラスの走者は釈然としていなさそうだ。クラスメイトにも囲まれて「おまえ、すげーな」「てかなんであの走りなんだよ（笑）」などと、盛り上がる。

しかし俺は実況なので、その場所には行けない。少し悔しいところだ。

『うおおおお！　またもや二組がダントツだぁー！　そして、ゴール！』

連続で二組が一位だった。走者は姫城さん、ユイと双璧を成すほどの長身とスラリとしつつも、デルところのデタ実にモデル顔負けのスタイルの持ち主だった。

制服でも着やせするタイプだったのか、体操着姿だとある一部分が大きく盛り上がっていた――なんと豊かな胸だろうか。

実際に走ると姫城さんの揺れる揺れること。一応実況は普通に行ったが、内心モヤモヤである。

今まで続いていた男子の歓声が止んでいたのと妙に目が血走って

いたのは、なぜなんだろうね？

「ユウジ様！　勝ちましたっ！」

遠くなので聞こえないと思ったら大間違いで、十二分にこちらまで聞こえてきた。

遠目でも無邪気に言う姿は新鮮で、いつもの大人っぽい姫城さんとはまた違った可愛らしい魅力を振り撒いていた。

……一方で、俺に敵が（主に男子）増える結果となる。こんな実況やっている時にぃっ！

百メートル走が終わり、女子中距離走に移る。

ニ百メートルのグランドを四周分の八百メートルを駆け抜ける女子専用競技だ。

男子で言う長距離走と同様の立ち位置なので、足に自信のある女子勢が集まっている印象だ。

陸上部から女子テニスやら、なんで知っているのかと言えば、まあユイの受け売りなので正しいのだろう。

確かに全体的に引き締まった女子が多いようにも思える。

クラスの高坂が、一位を取ったことを筆頭に、福島も堂々の一位――

『おーっと！　またもや二組リードはやいはやい！　このまま――抜けでゴォオオルッ！　二組男子とはなんだったのかぁ！』

うるせー、とクラスの男子から怒られた。まあ、実際そうだからしょうがないだろうに。

そして俺が興奮気味に実況するというのは、なんとユキがダント

ツでゴールしたからだ。
ポニーテールを揺らしつつも、しなやかな足を運ばせて走る様は、素晴らしいの一言だった。

「ぶいっ！」

と、なんと実況席の俺の方へとユキは笑顔でピース！　俺がグッと返す。圧倒的な一位に、クラスメイトでも男女問わず歓声が沸く。
俺もあの中に混ざりたいなあ……と、思うものの。まあ続けなければならなかったので、血涙を流さんばかりに諦める。

走競技の結果は散々だった男子に対して女子がかなりの結果を残した。
一位を取ったのは女子短距離で、ユイに姫城さんに金沢さん他数名。なんてーか、金沢さんに至っては本を片手に持って走ってのゴールだからなんという、すげえ。
中距離に至ってはユキ、福島、高坂さん、笹川さんが一位を取った（高坂ミコトと笹川はキャラ紹介参照）ユキに至っては安定して速く、福島は他クラスよりも一周早くのゴールでチートとしかいいようがない。

男子はただただ地味だったが、女子では委員長が思いのほか体力がなかったのかビリ。愛坂さんも途中で転びつつもビリを取るも、健気さが観客の心を刺激して一位より目立った。
初っ端から「男子はオワコン」状態で先が思いやられる一方で女子のハイスペックぶりに驚かされたのだった。

ちなみにあのダッシュボードやブロックは走競技で百メートル終了後に〇〇やその他委員が総出で撤去した。実際制御不良なのか一

回きりなのか、最初の女子以外では何も起こらなかった。
そして現物はと言うと砂を被ってこそいるものの、謎の完成度だった。てかのこのダッシュボードこんなに薄いのに波打つように光ってすげーな。

＊　＊

ＰＫ戦。体育祭競技でなぜか紛れこんでいる競技の一つ。
フィールドサッカーをしない、ゴール練習のようなものだろうか？
ゴールにゴールを阻止するディフェンスと、ゴールをする側のオフェンスがクラスチームごとに行い、攻守入れ換わって争う。
グラウンドのトラックの中心に設けられたサッカーゴールに、三点先取でどちらかのチームが勝利することで競技点が入るというもの。

『次の種目は今年から始まるＰＫ戦！　ルールは云々！』

一応説明はしたが、ここでは割愛。

『まずは三年生からです！　該当生徒は集まってください』

――と、まあ色々アナウンスしてきたのだけども。その後のことが強烈なので話しても仕方ない。
いわゆる、やられた。
先程のトラップと似た要領の出来事があったのだ。まあ、落ちついて聞いてほしい。

蹴るとボールが分身して、全て離散したり。
蹴った途端にボールが不規則な動きをして、絶対に入らない軌道でのゴール。
蹴ったボールが火を拭くも、すぐさま消沈してゴール。
蹴られたボールが突然黒く、形が変化して――

「ボ○兵っぽくなりましたね」

と○○。その通りで、この展開はマズイと悟ったものの、ただ変化しただけで爆発はしなかった。
一応トラップを仕掛ける側にも分別はあるらしい。

『おお、生徒会謹製の特殊ボールです！　お楽しみいただけましたか！』

と、俺はサプライズとして誤魔化した。
観客には「面白い！」とウケたものの、もちろん「なんだよー」「もっかいさせろー」などと当事者に不満は起るもので。

『少しお遊びなので、今のはノーカン！　入ってしまったチームの方々ゴメンナサイ！　今から再スタートでよろしくお願いしまーす！』

ちー、仕方ねえ。などと不満をもらしつつも再開。時間に余裕のあるプログラムが幸いした。
ちなみに二組は熱血野郎の男島がボールを「俺は真っすぐに撃つううううう」と言ってディフェンスの腹を抉り、点数ゼロ。ひどい有様だった。

＊　＊

まあ、お昼。

『お昼休憩でーす！　各自休んで英気を養いつつも、午後の部に備えましょうー！　家族と過ごすもいいですねー。付き合ってる彼や彼女と休むのもいいですが――くれぐれもご注意ください』

「「なににだよ！」」

と色々とツッコミが入るも俺はスルー

『午後の部は一時十分から！　午後の部も頑張っていきましょうー』

拍手が沸いて、午前の部終了。

＊　＊

この学校は妙なところで気が効く。

例えば、いちいち待機席に持ち物など置いておけば埃っぽくなること確実で、だからとうって教室は遠い。

そこでよくプールとかにある鍵式のロッカーを生徒何百名分も用意、おそらくは大半の生徒が入るであろう。

もちろん来客用のロッカーや貴重品ロッカーも備えており、こういうセキュリティ的なところはしっかりしているのかもしれない。

それに生徒会お疲れ様、と唐揚げとおにぎりと冷えたお茶が配布

された。唐揚げとおにぎりは、自分がつくった弁当があるので断ったが冷えたお茶はありがたい。

「ユウ、お疲れさま」

「いえ、チサさんもお疲れ様です」

お茶に口を付けていると、チサさんが近くにきた。

俺が実況している間は、来客の対応や体育祭委員への指示などで暇なわけではとんでもなかった。

「いい、実況っぷりだったわ……まさかボケ方面とは予想外だったのだけど」

「え」

”いい実況っぷり”までは聞こえた物の、後半は聞こえなかった。

「後半もよろしくお願いするわね」

「あのチサさん！」

俺は聞きたいことが――

「トラップなら、今調べているところよ……ユウは実況をしていて？」

「あ、はい……」

見透かされた……というより、また心を読まれたんだろうなあ。

とりあえチサさんも動いて、そのトラップ主を探しているのだろう。

「むー」

この調子でやれ、ということか……

「ユウージ！」
「お、ユキ」

俺が未だにテントで唸っていると、ユキがやってきていた。

「お昼食べよう！　皆待ってるよー」
「おう、今行くぞ」

ということでお昼からについては次回に続く。

第３６０話　√３－１２　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

料理のメニュー考えるって大変だなあ。ベタだし、どこかおかしいかもしれないけども許してチョ

第３６０話　√３－１２　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

ということで昼食。
ユキに昼食を誘われると、いうのも最初から決まっていることだった。
ユキや姫城さんにマサヒロなどの家族で大きなレジャーシートを何枚か引いての昼食となる。
そしてまず待っていたのは一応妹となる、桐だった。

「おお、お疲れじゃのうユウジ」
「ああ、どーも……」

ずっと声を張り上げているもんだから疲れないわけがない。カラオケでぶっ通し三時間歌うほどの消耗具合だ。

「ところで昼食はまだかの？」
「……お前って食い意地張ったキャラだったっけ？」
「食い意地……！　育ち盛りと訂正するのじゃあ！」

どうでもいいよ、そんなもん。
マサヒロは親が「面倒臭いから来ない」らしいので俺らのシートにいる。
そしてユキ家と姫城さん家は隣接したところにレジャーシートを引いて、実質境界ナシの状態だ。

「こんにちは、ユウジ君」
「あ、はい。ユキのお母さん」

未だ立っている俺のところまだやってきて、気さくそうに手を振って言ってくるのはユキの母だった。
なんというか、ユキを大人っぽくしたらこんな風になるであろうの美人で、少し活発なユキと比べると穏やかな印象もある。

「ウチのユキがお世話になってるわ」
「いえいえ」

物腰柔らかで、なんとも話し易い方だ。

「これからもユキをお願いね」
「はい、任せてください！」

そうしてユキのお母さんは去って、ユキの居るシートへと戻るのだけども「ユキ、脈ありね」「お、お母さん！」と良くは聞こえなかったけども会話をしていて、なぜかユキが赤面していた。

「マイの祖母です、ユウジ様ですね？」

やってきたのは、綺麗に歳を取った……というのだろうか。柔らかな空気を持つ姫城さんのおばあちゃんだった。

「はい、下之ユウジです。というか様付けは……」

てか姫城さんそのまんま伝達しすぎ。

「ふふ、ごめんなさい。マイがお世話になっていると聞いて、一度お礼が言いたくて」
「お世話だなんてとんでもないです。姫城舞さんとは親しくさせて頂いています」

いつものメンバーに溶け込んで、今はユキともユイとも仲が良い。
俺は何故か委縮してさん付けのままなのだけど。

「マイはよくユウジさんのお話をしてくれるのですよ？　とても魅力的な方だと」
「ええと、恐縮です」
「マイは少し前までは、どこか私たちとも一線があったみたいだったの。でもユウジさんのおかげなんです……あの子に笑顔が戻ったのは」

そう言ってもらえて、ムズ痒いけども純粋に嬉しかった。

「……そうですか」
「これからもマイちゃんをよろしくお願いしますね？」
「こちらこそ」

そう言って姫城さんの祖母は戻っていいった。
なんとも体育祭という場は、親御さんと交流出来る場でもあるのかもしれない。
ユキと姫城さんの親族に会えたのは、かなりに良かった。

「桐、お待ちかねー」
「おお、待っておったぞ」
「アタシもナイフとフォークを両手に構えてグルメッ子風に待機中だぬ」
「ユウジさんのお弁当、楽しみだよー」

今回は姉貴との合作弁当で、少し気合いが入っている。

「「おお」」

三段重ねの重箱の蓋を取るなり、声が揃いに揃った。

一段目は野菜を中心として、自作のイタリアンドレッシングをキャベツとトマトとカイワレ大根に和えたサラダと、鳥のササミを蒸して料理酒や塩で味を付けた蒸鳥に、タルタルと塩を付けて食べる新鮮な野菜を使ったニンジンときゅうりの野菜スティック。

二段目は切れ目を入れて焼いたウインナーに、お手製の白醤油ベースの鳥の唐揚げ、ソースをかけてある一口ヒレカツに、骨を抜いてある鮭（これが実は結構に大変だった）と、ダシ巻き卵。

三段目には稲荷ずしと、梅とおかかと昆布の入ったおにぎりと、口直しもかねたキュウリの漬物（たくあんと醤油漬け）とカリカリ梅を詰めた。

姉貴と共同戦線とはいえ、手間はそれなりにかかっている。

「いっただきまーす」

「ごっつ！」

「頂きますー」

各々に摘まみ始め。

「たくあんうまいのう」

桐は何故にそれからだよ。

「おうふ、この卵焼きうまふ」

俺が担当したヤツか、焼き加減にこだわってみた。

「お稲荷様おしいですー」

ほっぺたが落ちないようにか、頬を抑えて心の底から嬉しそうに食べるホニさんはかわいいなあ。

マサヒロはコメント総カット。

「私たちも食べよ？　ユウくん」

「そだな……でも、姉貴先に食べててー」

「あ……分かった」

察してくれたようでなにより。皆が美味しいとは限らないものの、せっかく近くにあるのだから、と。

俺は入りきらなかったおかずの入った同じ中身のタッパーを二つ持つ。

「あの、良かったらどうぞ」

「え、頂いていいの？　悪いんじゃない？」

「いえいえ、余分につくってきましたので」

「じゃあいただくわ、ありがとう」

色々とドキっとさせられる魅力的な笑顔を見せる。

まずはユキのところへと持っていき、ユキのお母さんへと渡した。

ちなみにユキのお母さんが卵焼きを口に運んだ途端に「ユキ、ユウジ君と結婚しなさい」「だから何をいうの！」何かユキとユキのお母さんが話しているように聞こえたが、俺はすぐに姫城さんのシートへ向かったのでよくは聞こえなかった。

「どうぞ」

「ユウジさん、これはもらってよろしいのかしら？」
「もちろんですよ。お弁当で入りきらなかったものを詰めたもので、大したものではないですので、お気になさらず」
「それじゃあ、いただきますね。ユウジさん、ありがとうございます」

後ろでは祖母や祖父と一緒に食べる姫城さんが居たのだが、俺がタッパーを渡した直後から姫城さんの視線がこっちに向かっているような……気のせいか。

そんな訳で、お昼時はそんな感じだった。
そうして午後の部が始まる――

第３６１話　√３－１３　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

『体育祭午後の部開始です！』

俺のアナウンスを皮切りに拍手が沸き上がる。観客や生徒のノリが良いだけ助かるな。

見ているだけにお祭り好きな生徒アンドその親アンド町民だけはある。

『お昼ごはんを食べ過ぎていませんか？　少しだけ競技はお休みしての、初っ端は応援団となります！　それでは各組応援団どぞー』

この応援団はクラスの有志が行うもので、参加しなくてはならない決まりは無い。

ただ、盛り上がる。応援団の方々はキツいかもしれないけども、これから始まる体を動かす走競技までの休憩延長分と思ってもらえればいい。

『一組応援団お疲れさんー、それでは二組応援団ドウゾ！』

二組は福島と男島の熱血系スポーツ組ツートップ。福島が学ランを、男島がチアリーダーという後者に至っては誰得なのだが、それなりにウケた。

もともとさっぱりとした性格と、髪もポニーテールにしての学ラン姿の福島は髪の長い美少年さながらだ。男島はもともとガタイが大きいのにチアリ――もう、いいや。

『お疲れさまでしたぁー、それでは飛んでの六組――』

こうして応援団合戦が終わり、第一競技の二人三脚が始まる。

＊　＊

『下之ユウジ君の競技出場の為、アナウンス変わりまして下之ミナです』

ユイが今までは代替していたのだが、今回ばかりはユイと俺のペアなだけあって忙しいであろう姉貴に頼んだ。

やはり姉貴はこのような場ではキリリとして透き通る声で副会長になってくれる。

『――ちなみに下之ユウジ君は私の弟です。大好きです！』

……なってくれなかった。やっぱり姉貴のままだった。

生徒待機席の方からは「名字同じだからまさかとは思ったが」「似てないな、あの姉弟」「仲がいいのなあ」「ユウジコロス」などと聞こえてくる。

まあ、姉貴もモテるしなあ。最後のセリフはそれからなのだろう、ものすっごく理不尽だけども。

『それでは二人三脚の出場者は集合場所に移動してください。ユウくん頑張って！』

いや、さ。このスタート地点から声を張り上げてもしょうがないけどよ。

……色々と止めてほしいわ。恥ずかしい以上に敵が増えるんだよな、その一言一言で。

「はぁ……」
「ユウジはお姉ちゃんッ子だからぬ」
「いや、姉貴が俺を溺愛してるだけだから」
「おおう……自覚があるのに驚きだ、まさか溺愛されていると自白するとわ」

さりげなく言ってしまったが、ユイが少し引いていた。

「……てかなんでお前がペアなんだろうな」
「厳選なるくじ引きの結果なのだの！　アタシじゃ不服か？」
「いやー、ユキか姫城さんが良かったイテッ」

そう言った途端に、二人三脚の基本姿勢的な肩を組んでいるユイに肩をつねられた。

「なにすんだよ」
「……ばか」

そっぽを向いて何か呟いたが、聞こえないのはデフォ……じゃなかった。小さい声でいいやがるからいけない。

「ユウジ、とりあえず勝つぞ」
「俺も負けるのは好きじゃないからな」

負けず嫌いな方だとは思う。

「そういやユイって結構胸あるのな」
「ここで言うなよ！？」

素直な感想を述べてみた。実際練習の時も傍で見てると分かるし。

「てかユイって眼鏡外すと――」

「うるさい！　とにかく勝つぞ！」

赤面がちのユイに押し切られると、言うのを諦める。

眼鏡を外すと――３３みたいな感じになってるんじゃないかと思ったが、どうなんだろうな。

ちなみに、一位を取れた。

ユイとはなぜかペースが合うので、順調にゴール出来た。なんだろうな、ユイとは色々と波長が合うようだ。

まあ、

『ユウくん頑張ってえええええええええええ』

というアナウンスからの偏り過ぎた応援のおかげ（主に恥辱を理由に指す）で速足になりがちだった。

そしてユキと姫城さんペアも一位。なかなかに好成績を叩きだす二組、で二人三脚終了のお知らせ。

＊　＊

『お疲れ様ユウくん！　頑張ったね、流石だよユウ――』

『……いや、副会長マイク入ってるから』

『意図してた！』

『タチ悪いよ！　とにかく、姉貴……副会長は戻って戻って』

『うん、わかったー』

姉貴が離脱すると同時に「はい、お茶」と手渡して来た。なんというか、過剰でさえなければ良い姉なのにと何度も思う。

『さあさ、三年生からの綱引き決勝戦！　予選は授業や事前練習で終了していて、その頂上をこの体育祭で決定されます！　そして勝ち残ったのは――』

体育祭委員がぞろぞろと整えて、勝ち残ったクラスの生徒が集まる。

ちなみに俺たち一年二組は予選敗退済み。まあ、総じて体力はあまりないのかもしれん。

＊　＊

『次は部活対抗リレー！　各それぞれの　部活の代表が運動部文化部問わず争います！　ちなみにクラス点には入りませんが、良い成績を残すと生徒会からの予算追加のチャンス！』

「「おおお！」」

今回のサプライズで、会長や姉貴やチサには了解済み。およそ一割を向上する予定で、なにげに大きいことだ。

『運動部からは、陸上にサッカー、バスケや野球。卓球やテニスにバトミントン、ゲートボール――』

それぞれ部活動のユニフォームで行う為、ジャージこそ羽織るものの競泳水着装備の女子水泳部はそそられる。

もちろん、言いはしないが。

『文化部からは、美術部、合唱部、合奏部、文芸部、隣人部に料理研究部改めゲーム研究部に第一新聞部に第二新聞部とＳＯＳ――』

ということで、

『位置に付いて――！』

ちなみに皆ガチ走り。優勝は陸上部――ではなくまさかの茶道部だった。

＊　＊

「ユウ、分かったわ」

「え、いきなり……」

いきなり現れてはそんなことを言うチサさんに驚きを隠せない。

「あのトラップ群の犯人よ。まさか奴らだったとは驚きだわ、妙にこだわっている上にお金もかかっているの」

確かに、謎クオリティに謎のこだわり。工学部も確かに有るにはあるが……何かが違う気もする。

それと誰にも気づかれずにトラップを設置する、という身のこなし。

「奴らって――」

するとマイクがオンにもなっていないのに、スピーカーに軽いノイズが走る――

『非公式新聞部プレゼンツ！　エンターテイメント障害物リレェェェェェェ！』

マジか。

第３６２話　√３－１４　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

「非公式新聞部！？」

あれ、なんだっけ。

――って、忘れる訳があるか！　俺がクランナへセクハラをしてしまったのを新聞に載せたマスゴミ野郎！

そういや非公式新聞の一部は高値で取引……なるほど、トラップを作れる資金源はそれか。

それで工学部に金を払って、制作してもらったのか。又は非公式新聞部そのものに制作する分野があるのか――

それでも、なぜ非公式新部という部活がここまでの妨害をするか分からない。

「チサさん！　なぜ非公式新聞部が！」

「非公式新聞部は……私たち生徒会と対立しているのよ」

「なんで、そんな」

「伝統みたいなものらしいわ。毎年何かしらアクションを起こして生徒会を挑発するの」

セクハラ事件のゴシップで強調されていたのは”生徒会”なるほどな、少しだけ分かってきた。

「非公式新聞部って限り無くブラックなのに、どうして教師たちの眼をかいくぐって存続しているんですか？」

とりあえずテストネタバレとかグレーどころの騒ぎじゃない。ブラックだ。低糖でも微糖でもなく――ブラック。

「学校とも取引しているのよ」

もしそれが本当なら……この学校のブラックさも素晴らしいレベルだな。

「それでも後始末はしっかりとするし、もはや行事のようなものだから、今までは問題視もされなかったの」

確かに、ユニークかつ凝ったものでも露骨に危険なトラップは少ない。逆に体育祭を盛り上げているとも言える。

だけども、それは今まで何もないだけで。なにか運が悪かったら、何か間違ってしまったら――あらゆる状況は、安全を危険へと変えてしまう。

「そうですか……チサさんはこれから、どうするんです？」

「決まっているわ――非公式新聞部を叩きに行くのよ」

アナウンスを奪取してまでの大掛かりな行動は、逆にこちらへと行動を認識させやすい。

恐らくは伝統ということだから、あちらも自信があるのだろう。

「今、とりあえずは”ある助っ人”にアナウンスを奪還してもらっているから、ユウは戻り次第続行して」

「わかりました」

「じゃあ、よろしくお願いね――」

チサさんは駆けて学校の公舎の方へと、向かって行った。

『このエンターテイメント障害物リレーは――』

言いかけたところでノイズが入り、こちらにマイクが戻る。

『ええ、っと以上！　それでは、一体どのような障害物リレーになるのでしょうかっ！』

アドリブ、アドリブ。

『じゃあ一年女子生徒の皆さーん、お集まりを！』

今生徒会で出払っているのは……チサさんと福島か。姉貴は来客の対応とかやってるみたいだし、会長は何故かへばった。クランナとユイが障害物の設置を体育祭委員と共にしていると、いったところ。

『集まりましたね？　それではっ――』

第一陣開始。障害物リレーは一年生のクラスから男女で合わせて六人が選出され、生徒会お手製の障害物をかいくぐりながら――以下略！

体育祭委員がその障害物の整備などをこまめに行うので、微妙に人手がかかる。

とりあえずはクランナが本部に帰ってきた。

「下！　非公式新聞部とは本当ですの！？」

クランナはあの非公式新聞部のアナウンスの途中も設置を続行していた。

「そうみたいだ……今までのトラップは全て、アイツらが原因らし

い」
「私も調べて参りましたが、非公式新聞部は見つかりませんでしたわ……ようやく尻尾を出しましたわね」
「とりあえずチサさんと福島が向かっているらしい、とりあえずクランナは休んだ方がいい」
「心配は御無用ですわ。いくら下が原因とはいえ、それを記事にしてしまうなど……タチが悪いですわ」

しっかし、あまりにもタイミングが悪過ぎたてことか。
俺が生徒会に拉致ａｎｄ入れられ、クランナも入る。加害者側がが生徒会役員だったらどうしようもないが、被害者が生徒会役員ならば記事にすることもないだろう。
なぜなら――非公式新聞部は聞くところだと、生徒会に対立しているのだから。ポイントを下げるような記事を書くはずだ。

「今は、チサさん達に任せるしかない。クランナはこの太陽の下で動き過ぎだ、意地張らずに休め」
「な……あなたに心配される言われは有りませんわ」
「あるだろ、同じ生徒会役員だからな。倒れてもらったら、なにより生徒会運営に支障が出る」

淡々として言葉を並べるも、もっと掛けようがあったようにも思える。それでもクランナは真面目だから、こうでもしないと聞き入れてくれない。

「う……」
「とりあえず水な――じゃあアナウンスに戻るから」
「あ」

『おっと！　今網を女生徒達がくぐったぁ！　男子共、凝視してん

じゃねーぞ！』

緑色のサッカーゴールネットの余りを使ったそれは、全長が十メートル幅が六メートルほどある網だ。

それを杭で止めて、下地にはビニールシートをしいてくぐって行ってもらう。

しかし気付かなかった――その杭に何か仕掛けがしてあることに。

中間部に女生徒が辿りつくころ、異変が起こる。

「きゃあぁっ！」

網をくぐる女生徒が声をあげた。

『おお、なんだなんだっ！？』

網が収縮した。正確には巻きとったようにも思える。

すると余裕の多少はあった高さがなくなり、女生徒は途端に窮屈となる。

――まあ、なんというか色々と食い込んでいるよな。

締まった縄が、体の各部位に食い込んでなかなかエロティックな光景に。

なんということだろう、男子歓喜だ。

『なぜ縮まった！？　セーターを選択したわけでもないのに！』

コメディっぽく誤魔化す……よし、まだ大丈夫そうだ。

『お次は――』

ヌルヌル地帯（＋ダッシュボード）やら、ぶら下がる奴やら、縄跳び移動やら、なぜかパンがスティックパンなパン食い競争、があったが割愛。てかサービスシーンっぽくなってるのはなんなんだろうな。なんか後半は変わりようがなかったし。

ええと、今までのトラップの方が凄まじかったような。

『最後の障害物は――借り物です！』

机に置かれた紙に書かれた、指定物を持ってくる、あれ。

人もあれば、モノもある。

「ええっ、ポニーテールの子十人！？」「み、水着……？」「ブルマってなんなのよ！」「チャイナ服！？」

なんか無茶ぶりばかりのようだ。なぜにここまで時間を浪費するようなことを……浪費？

時間稼ぎのようなマネをして、非公式新聞部は何を考えている？

借り物競技はあったが、全て無難なものだったはず。アイツらの仕業なのだろう。

しかし、そうも言っていられない。プログラムというものがあるからな――

『ええと一部は時間切れです！　一番最初にゴールをした三組と、次いで二組に、そして三位の六組には得点が入ります！』

もともと点数加算があるのが三位までなので、ギリセーフ。

『次は一年男子です――』

いやあ、騙された……完全にやられたね。
女子のはフェイクだったよ。

『おっと、足を滑らせ筒の中に――えええええええ、飛んだ!?』

突然床の砂が姿を消すと、突然に厚めのマットが校庭を埋め尽くす。謎の技術力だ。
更には床には落とし穴っぽいものも現れ（後の大砲である）
一応見かけだけ（だといいのだが）花火があがる道を全速力で駆け走らされたり、今度はマットが姿を消して腰下までの水たまりが出現。
びしょ濡れにされた上に、進みにくく。最後には巨大なファンが地面から登場して、男子生徒が強風のあまり何人も吹き飛ばされる。
クルクルと廻る丸太（サ●ケか）を走らされ、地雷原の（らしきものでってほしい）中を走らされるという。

もはや滅茶苦茶だった。女子生徒の時の障害物リレーが可愛いものだったようにも思える。

見ている方にはダイナミックこの上ないのだが、当事者としたらたまったものではないだろう。
ギャグにもほどがある。ちなみに万全を期しているのか怪我人はゼロ、実は当事者たちこと楽しんだ生徒も多く、不満は言う程ぶつけられなかったから結果オーライ……だが、ダメだ。

「まんまと生徒会をハメやがって……」

俺はハラハラさせられ、してやられたことでイライラは充填中だ

った。

『それではお疲れ様でーす』

二年・三年と専用競技もあるが、ロボットを操縦したりヒーローに変身させられたりということがあったが割愛。

もう、非公式新聞部にやられっぱなしという事実には変わりなかった。

第３６３話　√３－１５　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

これで連続５１更新～

第３６３話　√３－１５　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

打ち上げ会場はまさに葬式の雰囲気。

副会長と書記は乾杯の後まもなく姿を消し、まばらな体育祭委員の間ではひそひそと密談が展開される。

憮然とした表情で痛飲した体育祭委員の一人がついに机をひっくり返すと、

体育祭委員の女子がヒステリックに号泣。

生徒会役員のユウジはトイレ個室でメ●シャキを飲みつつこの悪夢が早く終わることを天に祈る。

挙句、会長が半べそをかきながら壇上で土下座をするという最高のエンディング。

これが藍浜高校体育祭の顛末である。

――というのはいくらなんでも嘘だ。

これも非公式新聞部が発行予定の新聞を没収の後、その記事を抜粋。

いやいや、そこまで悲惨じゃねーから！　元ネタが残念なことにあるから！

チサさんと福島が必死で新聞部の拠点を付きとめるも、既にもぬけの殻で記事データの入っていたメディアしか残されていなかった。

メディアには音声ファイルも残されていて――

『見つけられたことは褒めてやろう。だがツメが甘かったな！　貴様らがこれを見つけることも出来なければ、このメディアに入った

新聞を刷るところだったが、それは止めておいてあげよう。それではは我が敵藍浜高校生徒会、また会おう！』

……以上。

それをプルプルと震える手でパソコンを操作して、チサさんは音声ファイルを閉じた。

「ふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふうふふふふうふふふふふふふふふふふふふふふうふふっふふふ」

口からそんな恐ろしい声を漏らすチサさん。ああ……これはガチキレだ。

「やってくれるわね……杉谷。上等じゃない、次の行事まで叩きつぶしてあげるから、覚悟しなさい……ふふふふふ（以下略）」

おそらく杉谷と、いうのは非公式新聞部に関係のある名前なのだろう。

ちなみに怒りに燃えるチサさん以外は、してやられたことよりも疲労が勝っている。

「走り回って、あのオチはねーぜ……」

スポーツ少女な福島も、どうやら学校の校舎中を探しまわったらしく疲弊してぐったりとしている。

とりあえず「お、お疲れな……」「おう……」と言うなりテーブルに突っ伏。

「クランナは大丈夫か？　ずっと外でやってくれてたけど」

「……大丈夫ですわ。心配してくれてありがとうとお礼は言わせて

いただきますわ（おかげで休めましたし）」
「そっか、なら良かった」

元気こそ無くなっているが、顔色も悪くないし大丈夫そうだった。
実際あの炎天下で午前の部の諸々の設置はクランナが動いていたのは確かなことで、だから午後の部の途中で休むよう言ったのだ。

「……ユイは？」
「アタシ……は、大丈夫です」

疲れのあまり口調変わってる。

「あまり体力仕事は得意じゃないので疲れました……ユウジはいいですね、実況で」

口調は丁寧なのに皮肉が混じり始めた！？　もはや誰だ。

「いや、悪い……俺も手伝えれば良かったんだが」
「……問い詰めたくて言ったんじゃぬえ」

口調こそ戻るも不機嫌そうだった。

「（そんなにアタシ以外がペアの方が良かったのかよ）」

ブツブツと言っているのだが、正直まーったく聞こえない。

「まあ、お疲れな」

返しも力なく「……うん」と一言。なんてーかユイらしくないことこの上ない。

「お疲れ様ー、ユウくん」

姉貴は休まず来客対応から、委員への指示などや自らもクランナやユイと一緒に行動していたので疲れているはず。

今トイレに行って来たのだが、もしかすると今日始めてなのかもしれない。

「おつかれ姉貴……って、買ってきたのか？」

「ううん、購買のおばちゃんに貰ったの」

両手にはファミリーボトルのドリンクやらお菓子などが入っていた。

「生徒会室に紙コップは……あったっけ」

「姉貴、俺も手伝うぞ」

立ち上がって、とりあえずは姉貴の元へと向かう。

「ユウくんは休んでて？」

「ダメ。姉貴も疲れてるに違いは無いんだから手伝う、異論は認めない」

「……ありがとね。じゃあ、お手伝いお願いします」

「はいよ」

生徒会室の備品入れから紙コップと紙皿を取り出し、テーブルに並べる。

それで、俺はというと冷蔵庫に入れたままだったおしぼりを取りに行った。

「だれかチロビタ飲む人いる？」

福島とユイとチサさんが手を挙げたので、冷蔵庫で冷えたそれらを俺の分を含めて持っていく。

「あれ、そういや会長は……」

寝ていた。すやすやと寝息をたててテーブルに顔をついて眠っていた。

会長も何もしなかたわけでなく、宣誓の文章も考えた（結構普通）り、来客対応の為の椅子並べなどもした上で、競技にも参加していた。

「お疲れ様でした、会長」

俺はそう呟くと、なにか会長の体にかけるものはないかと探し。ちょうど着ることなく放置していた俺の学ランがあったので肩にかけておく。

「それじゃ、乾杯するか？」

小声で言うと、それぞれ「おー……」「はい」「……だぬ」などと答え。

音戸を取るのは……会長ダウン、チサさんは未だにパソコンを見つめてるし、まあ姉貴だよな。

「副会長、頼みます」

「いやいや、今日はアナウンス頑張ったユウくんで」

「いいのか？　じゃあ――生徒会役員、お疲れ様な打ち上げ、開始からの――」

乾杯。

少し飲んで、少し摘まんで、少し話して。いつも以上に元気のない生徒会は、それから約一時間でお開き。

まあ、なんというか色々疲れた。今日はぐっすり寝るか――

「……」

そういえば打ち上げの時に、時折クランナから視線を感じた気がしたんだが……また俺は何かしでかしたのだろうか？

第３６４話　√３－１６　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

生徒会打ち上げ終了後のこと。
約一時間でお開きになったというのも、役員の疲れがピークに達していたからだ。
会長すやすや、ユイは俯いているかと思ったら睡眠。チサさんもぼんやりとパソコンの画面を見つめて、福島は突っ伏。クランナもこっくりと船をこいでいて、何故か元気……まあ一応起きてるからそうとも言えるけども、俺と姉貴だけが生き残っていた。

「みんなお疲れだね」
「だな」

この会話はお開き五分前のこと。

「じゃあな、クランナ」
「……はい」

……え？　今までシカトだったのに……返して来た？　そう思って俺がクランナを見ているのに気づいたか、

「こ、これは特に意味はないですわ！　……一応下もそれなりに頑張っていましたし、ごくわずかですが態度を軟化させようと思っただけで、意図などありません！」

手を胸の前で振って否定のジェスチャー。まあ分かってるさ。

「ああ、そう？　まあ、明日は休みだからゆっくり休んでな」

「……分かっていますわ」

会長やチサさんが帰り、福島も帰り、クランナを見送ると。副会長こと姉貴が生徒会室に戸締りをする。

職員室までついて行き、既に寝歩きしているユイと肩を組んで移動させる。なんてーか、二人三脚で慣れたからユイと肩を組むのもすっげえ自然な気がするな。

「お疲れ、姉貴」

それは昇降口を出て、少し暗くなり始めた空の下で俺はユイに肩を貸しながら、隣を歩く姉貴にそんな言葉をかける。

「ユウくんこそお疲れさま。アナウンス大変だったでしょ？」

「声が枯れた」

「ちょっと掠れ気味かもね……家に帰ったらのど飴なめましょ？」

「そうすっかなー」

皆疲れていたり、生徒も気遣って指摘しなかったがアナウンスの終盤は声がかすれ始めていた。

今はもっとひどいものの、生徒会役員全滅でツッコム気力もなかったと解釈しておく。

「ユウくんの雄姿はしっかり録音してあるから、楽しみだよー」

「げ、録ってあるのかよ」

「もちろん！　大事な弟のユウくんの晴れ舞台だもんね！」

姉貴って、放任主義で仕事一直線の母のせいで、やっぱり俺たちの母さんみたいな役割も持たざるを得ない。
こうして柔らかに言う姉貴は、母性に満ちていると言ってもいい。
「大好きなユウくんの生声でもあるんだけどね……ハァハァ」
……本当になあ。
「まあらしいし、いっか」
「ん？　何が？」
しっかりとした副会長としても、優等生としても、少し弟の俺に甘い姉貴としても――それが姉貴なのだろう。
そんなこと何年も前から知ってるけどな。
「ユウくん、どーゆーこと？」
「教えない」
「ユウくんお姉ちゃんに冷たいなあ……小さい頃は〝ミナお姉ちゃんと結婚するー！　って言ってたのに〟」
「ば、ばか！　言ってたの姉貴じゃねえか！」
「もちろん言ってたよー」
そんな風に二人話すというのもなかなかに新鮮だった。
「もう……食べられないと見せかけて食べられるよぉ……」
一方のユイは一体何の夢を見てるんだろうな？

「ただいまー」
「ただいま！」
「……すー」

三人での帰宅。そして玄関では、

「お帰りじゃ」
「お帰りなさい！」

桐とホニさんが出迎えてくれるのだった。

＊　＊

『ミユさん、残念でしたね』
「な、何が……？」

私がパソコン画面に映るムービーを見終えたところで、画面内のポリゴンキャラクターにそう話しかけられる。

『もしミユさんが学校に行っていれば、下之ユウジと二人三脚で肌と肌が――』
「黙れぇ、変態プログラム！」
『それにしても下之ユウジはまたまた……さて今回はどんな女の子と付き合うのでしょうか』
「知らない！　ユウ兄がどうなろうと、妹の私には関係ないもん」
『義妹や、年下容姿の神様とは付き合ってますけどね』
「うるさい！　音声ミュートにしてやる」
『え、それは――ぁ――』

「ったく……」

でも、やっぱり羨ましいのは確かで。ユウ兄も本当に元気に、変わったんだな、と思ってしまう。

分かってるけど、置いてかれてく……

第３６５話　√３－１７　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

√１／２／ａ－ＯＶＡ３と√３－０ｂのホニさん視点

第３６５話　√３－１７　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

「お帰りなさい！」

ええと、ホニです。こうしてユウジさんとミナさんとユイを出迎えています。

見るユウジさんは疲れているけれど、どこかすっきりとした表情をしていました。

「（ユウジさん頑張ってたもんね）」

ユウジさんが走る姿は……どうしても思い出してしまうもので。

体育祭、我も参加したことを覚えてる。パン食い競争に二人三脚――

「（――少し前まではユウジさんの隣には私がいたんだよね）」

ユウジさんの隣には今回はユイがいて、少し羨ましく思ってしまった。

そう、我はもうユウジさんの隣にいることは出来ない。それは分かっていたことで――

「（我がそう望んだんだから）」

＊　＊

我にとっては、ここにきてから三回目の季節。ううん、本当はもっと有ったけれど”進むことが無かった”んだよね。

我がユウジさんの隣にいた冬までの季節、ユイがユウジさんの隣にいた春までの季節、そして今はこうして三回目の季節を迎えることになった――はずだったのに。

二〇十一年三月三十一日

桐から話された”巻き戻るはずの世界”が巻き戻らなかった。

桐が言うには、小さな時の中で時間が繰り返されているという。

そしてその要因が我が生まれたゲームであるとも聞いた。

何かのせいでユウジさんが病気にかかり、時が止まってしまった――桐はそう言った。

そんな時に、我の記憶を忘れないようにしてくれた。ユミジが現れて、それからユミジはユウジさんにも原因があると言った。

そしてユウジさんは今、夢をみていて。夢の中では”進むはずの無い世界”の続きが描かれていると言い、その夢をみせてくれた。

そこには我がいなくなったあとのヨーコの姿もあって、ヨーコが元気そうでよかった……きっとこれはもしもだから、本当に続いているならこうなるんだろうな、と我は思う。

そんな過去を見た時で引っかかることがあった。我が”色々な”事実を知ったのは我が経験した一回目の季節の時で、その前の我……マイとユウジさんが付き合う世界での我と、二回目の季節の我は消えることがなかった。

それなのに”進むはずの無い世界の続き”に我はいなかった。ヨーコがその前の我と二回目の季節では出てこないのにヨーコはいて、

そして我はヨーコの中にはいなかった。

『……ヨーコとホニが同時に存在しておらぬ！』

そしてユミジが話したことと、それまでのことを考えて。

桐はいけない、何故かと言えばユウジさんの夢の中に既に桐がいるから。それでさっきの引っ掛かりとユミジと桐の言っていることで――

「我が行けば、ユウジさんは助かるの？」

ユウジさんの夢の中も我がいないということは、我が入ることが出来るのかもしれない。

それでユミジは、それは危険な事だと。我もユウジさんも取り返しのつかない事態になるかもしれない。

でも、我は決まってる。

「……我に何か出来ることがあるなら、なんでもするよ。我は――ユウジさんに何度も救われたんだから！」

心に決めていた。どれだけたくさんユウジさんに助けられ、色々な大切なモノを貰った……感謝では返しきれないほどに。

だから、もし。ユウジさんを助けられる時がきたら、我は迷わない。

それからユミジと桐が準備をしてくれて――そして我の心はなぜか静かだった。

怖くなんてなくて、躊躇もなくて、我が出来るならそれでいい。

そう思っていた。

『……これもユウジが気づいていれば成功することじゃな』

この条件のことも話してくれた。ユウジさんが我がいないことに気付いてくれることが必要だと、

「大丈夫だよ、きっとユウジさんは気付いてくれる――我を覚えてくれるよ」

だって、我の大好きなユウジさんだから。

根拠も説得力もなにもなくて、それでも我は自信に満ちていた。

あのユウジさんが、何度も道を切り開いたユウジさんが……ここで蹲(つまず)くわけがない。

そしてユミジに色々を説明を受けて、

「わかった」

我は答える。何が起るのか全く分からない、でもユウジさんの夢の中だから――大丈夫。

「ホニ、ユウジを頼む！」

桐とホニさんに頼まれるけど、これは我の意思でもあるのだから。

ここでユウジさんは立ち止まってちゃいけない。

「行ってくるよ――ユウジさん、待っててね」

我は飛んだ。ユウジさんの夢の中へと。

＊　＊

「ここは……」

自分の部屋だった。けれど少し様子が変わって、どこか可愛い装飾が増えている気がする。

「（そっか、ヨーコの部屋になってるんだ）」

ここの世界に我はいないはずだから、きっとそうなのだろう。来てくれるのかな？　そんな不安は微塵にもなくて、そして足音は近付いて、扉が開けられる。

「ホニさんっ！」

扉を開けたユウジさんは、我と過ごしたことを知っているユウジさんだった。

顔つきで、纏う空気で、そして直感で。

「っ……あ、ユウジさん？」

驚いて、その事実に涙が出そうになって、必死でこらえて。平静を装うにようにそう名前を呼んだ。

その後ろにはヨーコがいて、驚いているのが見ていて分かる。

「あのね、ユウジさん」
「ああ、ホニさんもしかして――」
桐に渡されたワクチンの使い方。それは言葉。
我がここにいて、我が知っていることを現す言葉――
「我は覚えてるよ？」
そして何かが壊れていって、色がなくなってヨーコも動きがなくなって。色と動きを持つのがユウジさんと我だけになって――
「我は覚えてるんだ、知ってるんだ……ユウジさんが戦った日々も、ユイと付き合い始めたことも――ユウジさん、もう目を覚ましてよ」
思いだして、思い出にふけって閉じこもっちゃダメだから。我のことを覚えているのは嬉しいけれど、これは嘘だから。
ユウジさんはここで立ち止まるべきじゃない。
ユウジさんには本当なら休んでほしかった。
我が望んだことだけど、時を繰り返すことは思った以上に辛かった。
かつてあったことがなくなって、我だけが逆に取り残されるような。
だからきっとユウジさんも気づかぬうちに、無理してた。
「ねえ、ユウジさん。我のとのことは忘れちゃっていい、恋人同士になんかなれなくてもいい――でも言わせてね、ただユウジさんの傍に我がいることを許してほしい。そして進んで、ユウジさんは主

人公なんだから」

でもユウジさんは――我たちの主人公だから。

「ユウジさんが主人公で、我たちがヒロインで」

そんなユウジさんと一緒に過ごす我たちはきっと幸せ。

「今までの物語は、きっと誰かの掌の上なんだと思う」

でも繰り返されて、なかったことにされて、決まった時間しか幸せを掴めない主人公とヒロイン。

理不尽なこの世界はきっと、誰かの思うとおりなのかもしれない。

「それでもユウジさんは思うままにやり直して！　ここで立ち止まらないで、進んでっ！」

進まなくちゃいけないんだよ、ユウジさんは――我たちヒロインの主人公なのだから。

番外２４話　番外４－１　クソゲエショート！（前書き）

ホニさんの続きだと思った？

ごめんね！

……ということで番外編シリーズ第四弾。ショートエピソードものです。

番外２４話　番外４－１　クソゲエショート！

話の一。

☆生徒会の雑談

「ということで集まってもらったのは他でも無いわ！」

生徒会室に集められた私……あ、どうもナレーターです。

『なんでわしも？』

「とりあえず楽屋ネタ要員でしょうね」

集まれられたのは生徒会会長と書記、そして電子パネル二枚でそれぞれナレーターの私と桐。

それで、一体何の話なんですか？　と私は質問する。

「スタッフが”僕は友達が●ない”にハマってしまったので、今日の本編はお休みです」

「「！？」」

す、すごく――

「「どうでもいい！」」

なんというか溜められた割にすごいどうでもよかった！　ギャラが無ければ通信を切ってた！

「ええ！？　だって更新稼ぎに短編集とかするんだよ？　駄文書きあげても一応の小説書き（笑）の風上にもおけないと思わない！？」

会長がそんなことを言うけれども……今に始まったことじゃないし。

「あっちは残念系ラブコメで読んでて面白いけれど、こっちは出来そこないファンタジーラブコメで層が掴みにくい上に、この小説あんまり面白くないのよね」

「核心に触れすぎだよ！」

まあ、実際露骨な右肩下がりですし（色々な意味で）

「正直マイ編がピークだったし」

「よりにもよっての√1！？　そこから下落は始まってたってこと！」

『……否定できぬ』

「否定してよ！」

否定できませんね……その癖長いときたものだから、もう√1だけ見て満腹ですよね。

「ちょっと待って、まだまだ勝機はあるのよ！　ほ、ほら生徒会編からがこれは本番だから」

「（笑）」

「チサに鼻で笑われた！？」

『ぬかしおる』

「そんなに間違ってないよ！？」
『というかそもそもじゃな――』

『このようにキャラクターに自虐させるのが一番つまらないと思うのう』

「それは……うん」

奮闘する会長でしたが、ここでダウン。もうスタッフは親友以上とかヤンデレとかお茶の間とか書いてればいいんじゃないかな？

「……爆笑必須の生徒会編がダメとなると、生徒会を解体せざるを得ないよ」

「「！？」」

す、すごく――

「「深刻っ！」」
「え、だって面白くないんだよね？　じゃあ消すしかないよ」

そんなあっさりと……

「というか藍浜高校生徒会は解体しちゃダメでしょう……」
『いくらスタッフがテキトーに設けた設定とは言え、今削減すると大変なことになるのう』

主にスタッフの修正と、生徒会メンバーの扱いとか。

「名前がつまらないのよ！　もっとリフレッシュで斬新でパッショナブルな！　そうね――」

嫌な予感しかしない。

「隣●部で」

「「パクリにパクリ！？」」

友達がいない人による友達をつくるための部活――隣人部。詳しくは”は●ない”を読めば良いかと（またはｗｉｋｉれ）

「あらアスちゃん、私たち友達じゃない」

「うん」

友達がいたので終了。

『わしもマナビヤにおるしな』

わ、私もいますよ！　これでもピチピチで新鮮な女子高校生なんですから！

「それじゃあ、ね……」

まだ、あるんだ。と集められた私と桐は嘆息し、書記も少しあき

れ顔で会長を眺め――

「ごらく部ってのーー」

☆生徒会の雑談　終了。

＊　＊

話のニ。

☆ユイ、密着二十四時＜上＞

ＡＭ０６：３０

「どうもアタシだ」

あ、声に出さなくて良かったんだた。

――イラスト職人の朝は早い。

「（さて、今日はアッカ●ーンでも描くか）」

まあ、たまに早く起きれた時に暇を持て余すのもなんだからね。

「（さってと、ＨＤＤのなっかみわぁ～）」

昨日に録画しておいたアニメをハードディスクから探す。

「（あったあったヨスガ●ソラ）」

朝からヨスガとは……むふふ。色々と過激だぬう。

そんでもってヘッドホンを付けてアニメを観ながら、絵を描くことにする。

「（あと三十分くらいか……うぬ）」

ほぼ丁度だー、よーし観るぞ！

ＡＭ７：１０

で、飯。

「おはようユイちゃん」

「おはようございまふ」

あくまで寝起きの演出……まあ、今日が珍しいだけでいつもは寝起きなのだけど。

「もう少しで出来るからまってててねー」

「ありがとうございまふ」

そうして居間へと向かうと、

「ユイ、おは」

「おはよ！　ユイ」

ユウジとなんともかぁいいホニさんが座っていた。
ユウジへと近づいて耳打ち。

「（今日もホニさんかわいいお）」
「（だろ）」

ユウジとはうまい鮭が飲めそうだ（誤変換ではない）

「キロリおっはう！」
「耳に響くぞ、ユイ……おはよう」

キロリは相も変わらすロリロリしていた、可愛いなあ。

ＡＭ７：３５

で、登校。

「行ってきまぁっす！」
「いってらっしゃいー」

と言い残し、ホニさんに見送られながらのダッシュ登校。
アタシは父親が再婚した関係上、ユウジの家に住むこととになった。ちなみにユウジにとってアタシは妹。
つまりは義妹。

「おうふ……義妹とはなんと魅惑的な響き」

なんかロマンがあるよね！

もちろん二次元なら実妹もおｋ！　可愛いは正義なのさあ！

「もう少しだぬ」

そうして待ち合わせ地点へと降り立つ

「さあ……宴の始まりだ」

まあ、ただの登校だけどねー

☆ユイ、密着二十四時＜上＞　終了。

☆ユイ、密着二十四時＜下＞　に続く！

番外25話　番外4－2　クソゲエショート！（前書き）

時間がないので、続き。

番外25話　番外4－2　クソゲエショート！

話の三。

☆ユイ、密着二十四時＜下＞

ＡＭ０７：４０

「おはっよう！　ユイ」
「おはよ、ユイ」

そうしてアタシが五分ほど待っていると、ユウジとユキが姿を現す。
……最初のころはユキに出迎えて貰っていたらしいけども、アタシが住むことで合流場所を変えたらしい。
悪いことしたのかもしれないけども……アタシからは何も言わん！

「おはってゅ、ユキアンドユウジ」
「いやー、朝から太陽元気だねー」
「ああ……今日はもう沈んでくれねえかな」
「ユウジ、いくらなんでも早すぎだよ！？」

ユキが空を見上げてそんな風に笑顔で言う。
うん、美少女だよなあ……アイドルと言われても納得できるし、実際学校のヒロインだ。

「（幼馴染ってのはでけえなあ、おい）」

アタシが知り合ったころには、既にユウジとユキがいた（ついでにマサヒロも）

ユウジがマサヒロと話し始める前のユウジって言うと――

「（そうだ）」

ユキが構っているのに、ユウジはそれをシカトしていたような気がする。

なにぶん、その頃のアタシは自分が大嫌いだったから周りも見ていなかったのだが……うっすらとそんなことを覚えている。

その頃のユウジは俯きがちで――アタシと似ていた。

うっすらと覚えていたそのこと以外は、覚えていない。もしかするとユウジと中学校時代に同じクラスだったのかもしれないが、やはり覚えていなかった。

「（ユキはずっと傍にいたのか……）」

あれ、なんだろね？　少し胸がくいっと来たような気がするぞ。

至って健康体なはずなんだが。

でもこの感情は……羨望？

「ユイ、どうしたの？」

「なんでもないじょい！」

そうやってアタシは誤魔化す。なんてーか、誤魔化すことになれちまったなー、と思う。

自分を誤魔化して、他人の言葉を誤魔化して――もしかしたら気持ちも誤魔化して。

「（いけねえいけねえ、ポジティブだ）」

陰気なアタシはあの頃で十分。

「ぬおお、太陽強すぎて焼かれるぅ」

「ほら、日焼け止め」

「なんでユウジが日焼け止め持ってるの！？」

少し経ってマサヒロと合流したが、会話は割愛。

ＡＭ０８：００

教室到着。

いつも通りの談笑。

「蜜柑泥棒が逃げた先がね――」

「おかしいですね」

「ないわー」

「ぬ」

ユキが見たと言うニュースの話題で盛り上がっている。ちなみにいつでもオタトークをしているわけではないのだ！

ちなみに上から姫城さん、ユウジ、アタシだ。

「タイムマシンって一応不可能ではないらしいぬ」

「そーなんだ」

「そうなのですか」

「へー」

アタシもテキトーにネットを巡回して知ったネタを上げる。マサヒロの台詞は総カット。

「そういやユキはタイムマシンがあったらどうする？」

「私？　そうだなー……未来に行って、未来の私をみてくる！」

ユキらしい前向きな答えだなあ。

「きっと調味料研究をしているに違いない！」

あれ、急に女の子らしくなくなったぞ。なんで？　と聞いてみる。

「どのスパイスを合わせれば、どうなるか試してみたい……じゅるり」

そ、そういやユキって辛いもの好きだったっけ。てかよだれよだれ……ユキ、なんかイメージと違って来てるなあ。

「――じゃなくてパティシエがいいなあ（棒）」

色々とあからさまだ！

ああ、可愛いのにそのギャップが――

「（ユキかわええ）」

ボソっとユウジがかわええって言った！？　もうこのギャップに慣れてると！

「姫城さんはどう？」

ユキは隣の姫城さんへと質問を促す。

「私ですか？　そうですね……過去のユウジ様をみたいです」

「あ！　私もまた見たいかも」

「いやいや見ても大したことない、ただのガキだから」

ぬ……興味がないわけではない。

そんなことを話しているうちに、朝の時間は終了。

ＡＭ０９：３０

「……」

絶賛勉強中。教師の話を聞きつつも板書し、そしてノートの端には絵を描く。

これがアタシのスタディスタイルだぬう。

ＰＭ００：４０

「お昼にしよう！」

ユキが巾着袋を持ちあげてそう呼びかけると、ユキの席の周りにユウジや姫城さんが集まって来る。

その中に混じって行く形で、弁当片手に椅子を持って移動。

「皆揃ったし、食べるか？」
「だねー」

とそれぞれ弁当を広げはじめる。ちなみに今日はユウジ作弁当だ。

「おー、うめえ」

で、ユウジが食べるのがミナ姉作弁当。弁当の配置とおかずの種類もそれなりに違っている。

それもアタシがユウジの家に住んでいることがバレないようにすることの一つなのだけども。

「ユウジのお弁当、いつも凝ってるよねー」

小さくてかわいらしい弁当を広げるユキが向かいに座るユウジの弁当を眺めて言った。

「姉貴特製だからなー、何か食べるか？」
「いいの？　じゃあ私のからあげと――」

睦まじいのう。でも、そのせいでクラスの男子が目を光らせてるんだが、大丈夫か？

「（もう、諦めた）」

まさかのテレパシー受信。ああ、ユウジ悟ってやがる。

「……あ、あのユウジ様！」

ユキの隣に座る姫城さんが少し身を乗り出して。モテモテすなあ、

羨ましいすなあ。
――二人が。
「（ん？）」
ここはユウジって言うべきところだっけか。

ＰＭ０３：１０
生徒会。
「今日は”人生なんてスゴロクで決めちまえゲーム”をしよう！」
ロリで可愛い上級生な会長と、
「アスちゃん、会議が終わってから、ね？」
「うん！」
クールビューティ、大人の魅力な書記のチサさん。
「そんなことより野球しようぜ！」
「いやいや会議だからな？　一応俺たちは生徒会役員だからな？」
ユウジがツッコミ入れるのがスポーツ系女子の福島。クラスメイトだけども休み時間はいつもどこかに行ってしまう。
「ユウくん……」

ねっとりとした眼でユウジを見つめるのが、ミナ姉こと副会長。

「……なるほど」

何か読書をしているのがクランナ、金髪碧眼の転校生さんだ。

「ちゃっちゃと会議終わらせよう！」

ＰＭ０６：００

「いえーい全日帯アニメ！」

子供向けなアニメ（だがしっかりと見ると面白い）を見ながら明日の復習。

ＰＭ０７：３０

夕飯、ハンバーグうます。

ＰＭ０８：３０

風呂。ちなみにドッキリイベントはない

ＰＭ１１：００

勉強と録画していたアニメ終了。ネット巡回開始。

ＡＭ００：３０

明日の教材を準備して、アニメの録画予約をチェックして、ネット巡回に戻る。

ＡＭ０１：００

「そろそろ寝るか……」

今日はリアルタイムで見なくていいアニメだし、早めに寝るとするかな。

で、三十分経たずに睡眠開始。

というようなのがアタシの一日だったとさ。

☆　ユイ、密着二十四時＜下＞　終了。

第３６６話　√３－１８　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

せつねえ……

第３６６話　√３－１８　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

ユウジさんが何かに気付いたと同時に我の目の前は何も見えなくなった。白黒の世界は凍てつくような闇色に染まっていく。
きっと、ユウジさんはこれで目覚めてくれるはず。やっぱりユウジさんは、我にとって――かっこよくて、凄くて、本当に我が大好きな人なんだ。
ユウジさんは周りの異常に気付いて、我に気付いてくれた。その事実が嬉しくて、ユウジさんを我はもっと好きになってしまう。

「辛いと思うけど……頑張ってね」

ユウジさんがいなくなった真っ黒の世界でそう呟いた。
我の声は聞こえるはずもなくて、我はそっと眼を瞑った。

＊　＊

「お帰り、ホニ」

最初に聞こえたのは桐の声だった。
そこには確信のようなものもあるけれど、どこか安堵を含んでいるようにも聞こえた。

「ただいま、桐」

我は帰ってきていた。本当の色の付いた世界に。
桐に持つゲームの機械からも、ユミジがお礼をいってくる。

『お疲れ様でした。ホニ、ありがとう』
「ううん、我がしたかったことだから。ユミジも桐もありがとう」
そんな、と我はそうしてお礼を返す。我がユウジさんの夢に向かう為には桐とユミジが絶対に必要で、我一人ではどうしようもなった。
「いや……ホニが決断してくれたおかげじゃ」
『世界がループする現象が永続的に続くことで、どのようなことに発展するか予想も出来ないので……ホニの行動の早さで助かりました』
二人とも謙虚だなあ。
「あ、そういえば――」
我は時計の針を見る。
かちかちかちと小さく細い針が時を刻んでいることを確認して、
「成功したんだよね……？」
「もちろんじゃ」
『はい』
ということは時は巻き戻るはずで。
「じゃあもう、戻ったの？」
「うむ。今はの」

二〇一〇年
四月一日
〇時ニ分

「良かった……」

これがきっと我にとっての本当の三回目の季節。
ユウジさんは我のことをこう認識しているのだと思う――
『ホニさんとは三月の終わりぐらいにだったっけ？　あの墓地を訪れてみたらさ、ホニさんがいてそれで――』

神石にいた我がついてきた。そういうことになっているらしい。
本来は神石にいて、ユウジさんを待っていたのだけど……二回目の季節から変わってしまった。
……も、もちろん！　ユウジさんの家に最初から居れるのはいいことだけど！

なんでかな、って思う時もあるんだよね。

＊　＊

それから時間は経って、夏が訪れようとしている。
ユウジさんはせいとかい？　というもので忙しくて、帰りが遅くて、遊ぶ時間も減って……ちょっと寂しい。

でもユウジさんがマナビヤの生活を満喫できてるってことだと、我自身に言い聞かせてみる。

「（我が望んだことだから）」

我はユウジさんが近くにいるだけでいい。

ユウジさんと付き合っていた、いつでも一緒にいたあの頃をもう望まない。我がいることだけを覚えていて、知っていてくれればいい。

この道を選んだことで。分かっていたこと、決意したことなのだから。

振り向いて貰えることのない事実と、ユウジさんが……他の女の子と付き合うのを見続ける覚悟。

それはやっぱり悲しくて、切なくて、苦しいけれど……だけど！

ユウジさんの力になりたい。ユウジさんを我の少ししかない力で支えてあげたい。

我がユウジさんにたくさんもらった、全てを返せるわけがないけれど。

我があげられるものも、我が出来ることを全部。

「ずっと傍にいるからね――ユウジさん」

我は寝静まった夜に扉の隙間から、ユウジさんのすやすやと眠る寝顔を覗きながら、そう呟いた。

我の声は聞こえるはずもなくて、そっと扉を閉めた。

第３６７話　√３－１９　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

とある舞台。
明らかに日本のような和風建築とはかけ離れた、まるでおとぎ話のお城のような場所。
そこで二人の男女が口論をしていた。

「いい加減にしてください！　何度言えば良いのですか！」

その女性は敬語こそ使っているものの、怒気を孕んで喋るのは腰ほどまでに長く美麗に伸びる金髪と大きな瞳は藍色の染まる碧眼。
ふんわりとして、多くの装飾が付けられたロングドレスを纏う姿はまるで、お姫様。

「私こそ何度も言わせるんじゃない、お前はこの国の――」

男性は重低音とも言えるほどに渋く低い声で喋り、その女性よりも巨身でガタイの良い体つきで、何かの生き物の毛皮で作られたであろうコートを羽織っている。

「知りませんわ！　あなたに私の人生全てを決めつける権利はないのですよ！」

忌々しげに見上げ、睨みつける。

「時代遅れなんて言葉が甘すぎるほどに、その考えは古いですわ！」

男性に感情を大きく露わにして怒鳴りつける女性。

「決まっていることなのだ、分かれ」

男性は淡々としたもの言いで、吐き捨てるように女性から去っていく。

「勝手に言い捨てて逃げるんじゃないですわ――父様！」

これはおとぎ話のような世界で、おとぎ話のような容姿の二人の会話の一シーン。

＊　＊

六月十四日。

疲労に塗れたまま休みが明けた。この学校はどうかしてる、土曜の振り替えが原則ないせいで疲れた体を癒せるのが日曜のたった一日だなんて。

え？　まだ奇数週だけ土曜休みがあるだけいいじゃないかって？

うるせえな、慣れちまってるんだから仕方ないだろ！　中学校まで無かったわ！　エスカレーター式なのにまさかの高等部にはソレだよ！

ゆとりでごめんなさーいねえ！

……てか体育祭開催日は偶数週なのに、振り替えがないことに俺

は憤りを覚えている。確かに学校行事って生徒の勉強休みの一つかもしれないけどな、理不尽だよ！

と、思いつつも学校はサボらない。散々脳内で愚痴を言ったから、なんだかスッキリした……さて今日も頑張るか。

「おしかった気がするんだけどなあ」

「まあ、なんていうか面目ない」

体育祭の結果というのは学年単位での優勝、学校単位での優勝の二つがある。

それぞれ規定された得点数で優勝を決定するのだが、まあ二組は残念なことにニ位だった。

六クラス中ニ位なので無難といえば無難だが、上級学年を含めてしまえばトップテンにギリギリ入るか入らないぐらいだった。

主な戦犯は俺たち男子。スーパーもやしっ子の割合が多く、忍者や熱血野郎だけではどうすることも出来なかった。

女子がかなりいい成績を残しただけに勿体ない。

「なんでユウジが謝るの？　ユウジは頑張ったからいいじゃん！」

ユキに笑顔でそう言われてしまう。まあ無難だったからな……流石凡を地で行く俺だぜ。

「ユウジ様のご活躍はかっこよかったですよ、自信を持って下さい」

「ああ、ありがとな二人とも」

姫城さんともなんというか、気軽に喋れるようになったなあ。と

関係ないことを思った。まあ嬉しいことにはまったく違いないけども。

「あのあと大変だったじぇ……後片付けでアタシのライフはゼロだったのだぁ」

ぐったりとしたユイもやはり疲れが抜けていない様子だ。

「あ、ユウジあんがとぬ。アタシを家まで運んでくれて」

そういや日曜もコイツぐったりしてたっけ。短距離走は速かったけども、もしかすると持久力というかスタミナはそれほどないのかもしれない。

いや、気にすんなと返しておくと。なぜか姫城さんが、首を傾げて言った。

「ユウジ様がユイさんを家まで運んだのですか？」

「まあな、コイツ相当疲れてたから」

途中からは完全に力尽きてて、歩き寝してたからな……

「うぬ、ユウジが運んでくれたのですう」

寝ぼけているのか舌足らずな気もする。ユイは基本頭も回れば、気が効くのだが……何か口走らないとよいのだけども――あ、フラグ。

「あのままベッドに運び込んでくれたおかげでぐっすり眠れたぞぃ……」

滑らすのはええな。ユキと姫城さんが驚いていた。

「ええと、なんでユウジがユイの部屋まで運んだの？」

「あ、いや。ユイがガチで疲れててな、家まで運んだついでに、な？」

「そ、そうなんだ」

……誤魔化せたか？

「その日はユウジ疲れてるのに夕飯まで作らせてすまなかったぬ……」

「「夕飯まで！？」」

お前はいつも手伝わないだろうが、とツッコミを入れるも。

それ以上に……こんな時にユイは口を滑らせまくるのな。おいおい、それじゃあ……少なくとも俺がユイ家と交流が深いことを言っているようなものだ。

「……夕飯をつくって差し上げるほどということは、ユウジ様とユイさんは家族ぐるみで深く付き合ってらっしゃったのですね

よかった、その解釈で。

「「！？」」

「……だけどユイの家ってユウジと離れたとこにあった気がするんだよね。だって学校来るときも合流するのは後だし、帰りもユウジとは別の道に行ってたし」
「まあな。ユイの家は少し離れ――」
そこまで言ってはっと気付いた。
「ユウジは疲れてるのに、離れたユイの家までご飯作りに行ったってこと？」
「あ、ああそうだな。少し足を伸ばして、少し頑張ってな」
雲行きが怪しくなり始める。ユキと姫城さんの疑問を抱いて怪訝な表情をしたまま詰問は続く。
「そういえばユウジ様のお弁当とユイさんのお弁当の具が……一日違いで似たような時がいくつかあったのですが、ユウジ様が作りに行っているからでしょうか？」
「夕飯つくって、そのノリでな。夕飯再利用した方が楽だし」
平然と話しているはずだけど、冷や汗が止まらない。
そして二人は笑顔なのに目が笑ってない。
「そういえば思いだしちゃった――ユウジの家に勉強会に行った時だったかな？　靴箱にユイの靴が平然と入ってたなー」
あ、詰んだ。勉強会というのは体育祭前に行ったもので、俺の家にも来たのだった。
「「どういうことか説明させてもらえる（いただけますか？）」」

「……はい」

そうして話そうとしたその時だった――

「……ぬう……あ、眼鏡外してなかった」

あれか。ユイは一応寝るときは眼鏡外すってことか、まあ危ないしな。その癖が今寝ぼけている状態で出たってことだろう。

ユイが寝ぼけて眼鏡のフレームに手を掛けて、眼鏡を取り去った。

「「!?」」

そこには以前に寝起きを襲ってきた女の子の顔があった。それは夢だと思っていたのだけども、そのあと俺は謎の掃除ロッカー登校を果たしたんだっけ？

「……はぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

俺はユイのその寝ぼけた顔を眺めて、疑問符を大量に生み出した。

「「えええええええええええええええええ」」

それは今までの眼鏡でブチ壊しにしてきていたスタイルと露わになった顔を合わせると――ユキや姫城さんほどの派手さはないが、断定出来る美少女だった。

茶色の短髪で小さく綺麗にまとまった顔の、美少女だった。

「……ん？」

状況の分からないユイは寝ぼけた表情のまま首を傾げた。

正直な感想、可愛かった。

以前のことや今のことをを踏まえて、考えてみればユイは寝起きや疲れにかなり弱いらしい。

――だがしかし、そんな発見を忘却できるほどに、ユイの素顔はインパクトがあったのだった。

第３６８話　√３－２０　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

ユイとか誰得だよ！

……少なくとも俺にとっては俺得なんだよ、ゴメンネ。

第３６８話　√３－２０　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

「「えー……」」

ユイが未だぽやぽやと眼を半開きにしながらうとうとしている最中、いつものメンバー揃っての静かな驚きの声だった。

「えっと、その……どういうことなの」とユキが明らかな動揺を隠せずに。

「何が起ったのか分かりません……ユイさんが眼鏡を外したら」姫城さんも外見上はそれほど変化はないけども、混乱していることには違いないようだ。

「めっちゃ美少女」と、俺は続ける。

「「……えー」」

いつものメンバーの総意はやはり驚きだった。

今度は先ほどとは違って大きめの声だったか、ユイも眼を覚まし始めたようで。

「どしたユウ……ジ……っぁ！？」

今までのユイの声とは違う裏返った高く透き通る声……うん？

ユイの通常の声は作っていて、もしかしてこっちが素だったりするのか？

耳に眼鏡が掛かっていないことで違和感があったのか、何かに気付いたかのようにはっと表情を変えると、顔を真っ赤にするのが俺の目にも見えながらも、ユイは机に突っ伏した。

「すーすー（棒）」

……切ないぐらいの棒演技だった。

「ユイ、バレバレだ」

「うぅ……」

そうして起きあがってユイは、あたふたと無意味に手を動かしながら。

「め、眼鏡は！」

「ユイさんすみません、少し待って下さいね」

何故か姫城さんがユイの眼鏡を取りあげていた。色々聞きたいこととか、言いたいことがあったから果てしないグッジョブ！

「か、返して」

まだ寝ぼけが治らないのか、いつもと違う声で舌足らずなこともあって――な、なんかかわいいな。

「なんかかわいいな」

「えぇっ！？」

「「！？」」

ユイが真っ先に驚き、他の皆も驚いた。

「ん？　なんか変なこと言ったか？」

「へ、変に決まってる……アタシが眼鏡取ったら！」
「眼鏡かけてる方が変だろ」
「変だったの！？」

「「えぇっ！？」」

総じての驚きは三回目にして更に音量が向上である。いや、それが変じゃないとか一体どこの大道芸世界だよ。

「いや……そのグルグルはどうよ」
「で、でも注意されたことないっ！？」
「……なんでなんだろうなあ」
「えええ！？」

素の声で、素の表情で驚いていた……なんだかなあ。

「で、ユ、ユウジさっき可愛いって……」
「違いないが？」

「「あっさり！？」」

ユイも同調して驚かれた。
……まあ狙ってるんだけどな。ユイ弄る機会なんてあんまり無いから、あまり嫌な感じにならないようなモノで。

「てかユイもったいねーな、可愛いじゃねーかよ」
「か、かわいいかわいい言うな！」

おもしれー……まあ、実際ギャップ凄まじすぎて可愛いことには違いないのだけども。

「確かに……かわいいよね」
「かわいいです……」
「」
「えぇえ!?」

マサヒロは以下略。女性陣二人の意見も同じだった。
そう言われる度に顔を赤くして、俯きがちになるんだが……あ、やべ。ガチでかわええ。
いかんいかん、ここで止めておくか。

「――まあ、ユイは嫌みたいだし無理強いはしないからな」

姫城さん、ユイに眼鏡返してあげて。と言ってユイに眼鏡が戻る。
どこか自信なさげだった先程までのユイとは違って、少し口元が引き締まった気がする。少し顔の赤みが残っているのは御愛嬌。

「ええとだな……フェイクだ！」

「「ええー」」

恐らくは今までのアタシはフェイクだ、引っかかったなはーっはーっは。と言ったところなのかもしれないが。

「無理あるぞ、ユイ」
「はーはっはは……忘れて下さい」

せっかく戻った（残念なことに）ユイは更に素に戻って敬語を使

用してのお願い。
ここまで誠心誠意を見せらると、参っちゃうなあ――

「お断りします」
「ごめん、無理」
「すみません」
「」
「ＥＥ！」

と、まあユイの弄り方を見つけた俺たちだったが。これ以上は流石に可哀想になってくるので止めた。

「（……でも、少し嬉しかった……かも）」

そんな言葉が聞こえた気がするが、ユイの為を思って聞かなかったことにしよう。
とりあえず、ユイかわいいよユイ。

割とガチで。

＊　＊

その頃――じゃないですよ。
ユウジの冗談のつもりがタラシが発動してるじゃないですか！
どこまであなたは……
まあ、あとあと一人で愚痴りましょう。

「（〝ルリキャベ〟シナリオとはほぼ無関係とはいえ……ここまで

大きな変化があるというのか……！）」

ちなみに桐が小学校での授業中に何かを感じ取って思います。

「（ユイの眼鏡解放は前回のイレギュラーな√時、しかし時期はもっと先のはずじゃ……）」

深刻そうな面持ちで、

「（また、何かが起こっておることなのじゃな）」

そう心の中で呟く。

「きりちゃん、さんすうおわったよー」

「あ、ほんとだー☆」

……初めて聞きましたが、この桐キモ！

「（キモイいうな！）」

この返しがキモイです！

番外２６話　√５／ｃ／６／７－Ｐ　パイロット版　そして祝４００投稿！

※あくまで内容は予定となります。急きょ変更される恐れがウンタラカンタラ

小説家になろうに連載を開始してから晴れて三年目に突入します！
そして合わせるように４００投稿目を迎えました！　今後の予定のようなものをドゾー！

番外26話　√5／c／6／7－P　パイロット版　そして祝400投稿！

√5－P

俺はユウジ、しがない鉈使いさ！

主人公ポジだってのに鉈みたいな機動性の悪い鈍器使いと来たからアメリカンジョークも抱腹絶倒並みのおかしさだぜえ！

「ユウジさん……」

まさに隣を彩るのは皆の癒し系神様、ホニさん！

かわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいその大きな瞳がくりくりしててかわいい興奮するとぴょこんと出る耳がすごいかわいいひょこひょこというサウンドエフェクトが合いそうな歩き方がかわいい俺をさん付けで呼んでくれてかわいい昼ドラが楽しみでしかたないホニさんがかわいい地面につくほどの長さの黒髪がかわいい成長途中の少し未熟な体がかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい赤面するホニさんかわいい驚くホニさんかわいい涙目のホニさんかわい……そうだけどかわいい怒るホニさんもかわいいお揚げを頬張るホニさんかわいいかわいいかわいいかわいいかわいいかわいい——

「ユウジ、行くぞ」

……はぁ。桐ね、うん。かわいいんだけどナー……うーん、ちょっと老婆喋りで背伸びしているのもかわいいっちゃかわいいんだけど……なんかなあ。

「なぜわしをみてため息をつく！？　それよりもそろそろじゃぞ」
「……ああ」
なにがそろそろかと言えば、そうだ。俺が銃使いの意味でもある。
俺とホニさんは狙われている。
俺はまだしもホニさんを狙うとかぜったいにブッ転がすふざけんな万死でも足りないぐらいだわこんな世界の宝のような可愛さを誇るホニさんを狙うとかマジふざけんなだしその狙う理由が神様だからとかぶっ飛ばすぞグルァ本当に愚かだと思うね何がコトナリだよバカバカしいオイナリで十分ナリまったく最近の若者は――
「行くぞ、ナタリー」
『はい、行きましょう！　ユウさんの右手は私が守ります！』
この銃はナタリー。最近喋るようになった。喋りは始めた時は、冷たい風呂に服のままダイブしてしまうほどに驚きだった。
使い続けた物には魂が宿ると言うが……なんと奇妙なことだろう。
ちなみに可愛い声で、どっかで聞いたことがあるかもしれない声が聞こえる。
スピーカーもないのに、すごいよね。
「いや……俺の全身も出来れば、ソシテホニサンハゼッタイ」
『わ、わかってますよ……ホニさんも絶対なら、ユウさんも絶対です！』
「頼むぜ、相棒」
『私にかかれば相手を呪ってあやつることも容易で――』
……何回目だっけな。こうした会話を繰り広げるのも何度目かだ。

――さあ、行こうか。

＊　＊

√ｃ－Ｐ

どもナレーターです。時折ある出番以外陰薄い私ですね、はいそーですね。

今日は藍浜町を離れたところへと来ています。

「で、なんでお前とこんなところに来てるんだろうな？」

いやいやデートに決まってるじゃないですか。

「デートって……違うだろう」

照れなくていいですよ。

「照れてねえよ……だってな」

まったくユウジは素直じゃないですねー

「いきなり道端で眠らされたと思ったらこのありさまだよ！」

あらあらうふふ。ユウジってばそんなことばっかりですね。

ちなみに私とユウジは遊園地に来ていまーす。ちなみにサボリでーす。ユウジ初学校サボリでーす。

（ざまあみやがれ女たらし）

「やかましいわ」

でも嬉しいでしょう？

「……」

怒りますよ？

「はいはい」

十点ですが及第点ですね。

「俺の基準点低いな」

まあユウジですからね。

「うっせ」

……で、どこから周ります？

「お前が決めればいいだろ、俺はどこでもいい」

……他の女の子だったら率先して決める癖に。

「まあな」

今小さな声で言ったのになんで聞きとるんですか！？

「地獄耳だし」

……じゃあ今までの聞き返しは……？

「じゃあブラックドラグーンな」

ちょちょ！　ちょっとまってください。
そんなもの最初から乗ったらしんでしまいます。

「他にあるなら出してくれ、ないならコレで」

わ、わかりましたよ！　えーとですね。

数時間後。

楽しかったですねー

「否定はしない」

なんかこの√のユウジはツンデレですね、かわいー

「帰るぞ」

だめですよー

「……帰るつもりはねえよ、俺だって聞きたいことはあるんだから

な」

ですよねー

「ここに連れて来たのも理由があるんだろ？」

そうですね……はい。

藍浜町というゲームのフィールドから出たかったんですよね。

「……そうか」

で、お話しましょうか。

私のアルバイトの経緯。

「……ああ」

＊　＊

√6－P

「何もねえんだよ、アタシには」

（※ガチで決まってません）

＊　＊

√7 ―P

「ユーウジ」
「おう」

声を掛けられると、そこには笑顔のユキがいた。朝のユキも相変わらずに明るくて可愛らしい。
そうして俺の隣をユキが歩いている。時折前髪を気にして、ちょくちょく弄ったりしている仕草が実に女の子らしい。

「でも珍しいこともあるんだねー」
「まさかな」

ユイとマサヒロが一緒に休む日になるとは。
ユイは俺の家に住んでいるのだが、風邪と腹痛で休んだ。マサヒロも風邪らしい。

「だからユウジとの二人きりの登校！　久しぶりだね」
「……まあな」

それは設定では中学二年までの事。それまで俺とユキは二人登校していた。
三年からユイとマサヒロが加わったといった具合。

「あ、ユウジちょっとまって」
「ん？」

するとユキが立ち止まって俺の前へと歩いてい来ると、

「第一ボタン苦しそー」

「……いや、普通は止めるんじゃねえのか？」

確かに第一ボタンをすると妙な圧迫感はあるが……普通なら直す側だろうに。

「ユウジにピシっとした格好似合わないよ」

「地味に痛いこというねこの子」

「ユウジがタキシードとか……あはは！」

「笑うな！　悪かったな中途半端な容姿で！」

どうせ凡ですからね。

「……（ユウジは時々カッコいいのがいいんだよ）」

「ユキ？」

「なーんでもなーい、ささ！　学校いこー」

「そっか……そうだよね。うん知ってたよ」

「何言ってるんだよ、ユキ」

ユキは悲しげな目で俺を見つめる。

「手に入れては失って、手に入れては失っての繰り返し」

余りにも辛く悲しそううな表情をつくる彼女を俺は見ていられない。

「時は何度も繰り返されて、でもその度にみんなは忘れちゃう。過ごした思い出も、好きだったことも――」

ユキは何をいっているのだろう。いったいそんな電波的なことをいうのだろうか。

忘れるって――

「私は覚えているから」

っ。

「私の記憶のあるユウジとの思い出は、ユウジは覚えてないってことも知ってるよ」

それは。

「全て話して、ユウジ……これ以上背負ったら壊れちゃうよ」

第３６９話　√３－２１　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

＼散々待たしてこれかよ！／

第３６９話　√３－２１　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

体育祭が終わり、プール開きや期末テストなどのイベントがありつつも少しで夏休み。
それでも生徒会は好評活動中だ。

「掃除をしましょう！」

と机をバンと叩く会長が頃は、夏を露骨に感じ始める六月末の生徒会室。
この部屋こそ冷房をガンガンに効かせているものの、この部屋が楽園で廊下は熱帯地獄。学校全体が蒸し器のように水分を含んだジメジメとした暑さだ。
服装は夏服へと変わり、俺たち男子は半そでのワイシャツやポロシャツ装いを変え。彼女ら女子は半そでのセーラー服に身を包みつつも心なしかスカートも短くなっているようにもみえる。
そして会長の掃除宣言に俺は答える。

「掃除ですか？　確かに乱雑になってきましたね」
「でしょでしょ？」
「でもこの時期にやるってのは何か意図があるんですか？」
「う……」

前にも言った通りで、期末テストが迫っている。それも一週間ほどまでにもだ。

「会長、あれですよね。テスト勉強から気を逸らしたいが為に――」
「ちちちち違うよ！　私は全知全能故にテスト余裕よ！　だから

テストのことなんか考えなくてもいいのよ！」
「……はぁ」
「今のは頷きじゃなくて溜息だよねえ！？」
ちなみにいつもは擁護に回るチサさんでさえも生温かい目で会長を見ていた。
まあ、そんなこんなで片付け。

「あ、クランナちゃん。これをあそこにお願い出来る？」
「はい、いいですよ」
「ごめんね、私届かないか――ちっちゃくないよ！」
「？」

俺が雑多に持ってきた会長の私物を整理していると、クランナがダンボールを身長以上の高さにあるラックの上に載せようと奮闘していた。
福島とユイはゴミの分別、姉貴とチサさんは書類整理（かなり真面目に）などなどしていて、手を離すことが出来そうなのは俺だけで。
俺はクランナが背伸びしながらも懸命にダンボールを押し上げるところへと歩み寄って、少し背伸びしてダンボールを少し指で押した。

「大丈夫か？」
「し、下！　頼んでなどいませんっ」

そーすよね。
じゃあ俺はそそくさと会長の会長の私物整理を再開するとします

か。

「じゃあ俺は戻るわ」
「ちょ、ちょっと！」
「ん？」

あろうことか呼び止められたので、振り返る。

「……一応、お礼をいっておきます。ありがとう」
「あ、ああ。どうも」

クランナは俯きがちだがしっかりとした声量でそう言った。真面目すなあ。

戻ろうとしたところで姉貴が数枚のプリントを床に落としたのが見えたので、すかさずに。

「お、姉貴。ほい」
「あ、ありがとユウくん」

でお、俺は戻ろう――

「ユウジ、このカップ麺ってどっちだ？」
「ああ。中に入ってるスープの袋はプラスチックゴミで、蓋と容器は燃えるゴミ」
「さんくすー」

俺はそうして戻ろうと――

「チサさん、お茶おかわり要ります？」
「そうね、じゃあお願い」

チサさんの湯呑みが空になっていたのに気付いて言ってみる。
雑務っぽい仕事はお茶くみの含んでいたりするのだ。お茶をくんで、湯呑みに淹れる。

「熱いので気を付けてくださいね」
「ありがとう、ユウ」

笑顔でチサさんは受け取り、書類をひと段落させてお茶を飲むついでに休憩。

「会長、手が止まってますよ」
「いや、これは必要で……うんすっごい必要だから……ぐぬぬ」
「必要なのは分かりましたから、持ち帰る分だけ仕分けて下さいよ。今の一割まで減らしてください」
「い、一割!?　それは死刑宣告に等しいと思う！」
「どれだけ重要なんですか！　このスー○ーボールとかが！」

荷物やらの整理が終わったところで掃き掃除やら雑巾で窓を拭いたりした。

「……」

たまにクランナが見ている気がしたが、何か俺はしでかしたのだろうか？　と疑問に思いつつも俺はスルーして仕事を続行していた。
そうして今日の生徒会は何事もなく終わりを迎える。

第３７０話　√３－２２　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

これまた久しぶりです

変更前「サトウ家具」→変更後「カトウ家具」

第３７０話　√３－２２　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

七月四日

それは完全なる夏な昼のこと。じりじりと衣服に覆われていない皮膚や髪が熱せられていく感覚で、まさに焼けるよう。

七月も始まったばっかりというのにこの暑さは、そろそろ地球の空調のリモコン操作が真面目に必要になってくることだろう。

額をつうと流れる汗を感じつつも、俺は目的の場所へと目指す。

「（今日は特売日……だな）」

野菜果物と飲料系がお得な日。姉貴に渡されるまでもないスーパーのポイントカードを握りしめて歩み向かう。

「（……適当なジュースよりもお茶が飲みたい）」

井エモン辺りの茶系飲料をぐいっと口に流し込んで、喉を潤わせたいこの頃。

「（確かファミリーボトルで一五八だったら――）」

箱買いしたいぐらいだ。

そう色々と皮算用をしていると、前方に見覚えのある姿に顔が見える。

「ん？」

あの長い金髪と碧眼といい、歳を考えなくとも長身で適度に引き締まったスタイルの良さといい、この暑さでもどこか気品の残すその姿。

「（クランナ……だよな？）」

間違うはずがない。金色の整えられた長髪や日本人とはまた違った瑠璃色のような碧眼を持つ彼女だ。そうそういるわけではない。

そんな彼女は純白のフリルの付いた日傘を差しつつも、藍浜高校制定服であるセーラー服を着ているのだから、少しながらも違和感を感じざるを得ない。

「？」

そんな彼女の傘はあっちに向いたり、そっちに向いたり。クランナ自身の挙動がどことなく変だった。

「（学校以外でも俺の顔を見るとか、嫌だろうしな……見なかったことに）」

しようとしたのがその瞬間からショッピングまで。

「♪」

スーパーを出て、すっかりクランナのことを忘れてお得に手に入った買い物袋の中の野菜をほくほく顔で覗きこむ。

「（キャベツが安いのはいいな。夏だから味のはっきりした染み込んだ料理が良さそうだ）」

それには味の馴染みがいいキャベツがなかなかの適任であろう。

「（もやしも賞味期限近いけど、まあすぐ使いきっちゃうだろうし。最近味噌汁飲んでないから買ったニンジンも入れとくか）」

今日の夕飯をインスピレーション。姉貴ほどではないが家事が板についてきたような気がする。

「♪～」

買い物袋を提げて商店街からの帰り道を歩いて行く。

いや、歩いて行こうかと思ったのだが。

「おおう……」

振り向けば彼女。どこからどうみても金髪碧眼な以下省略。

なぜここにまだいるのだろう？　買い物は時間を忘れちゃうからざっと一時間は経っているはずなんだが。

「なぜに？」

首をかしげつつも遠目に彼女を眺める。やはりキョロキョロと挙動が不安定だ。

いくら日傘差してるからって、この夏日真っ盛りの空の下で一時間も立ちつくしていたらどうだろう？

……本当は避けたいけどなあ、嫌われてるし。抉られる覚悟で――

「クランナだよな――」

そう言って近寄った時に、ふっと。

「お、おい！」

彼女がフラフラと前方へと目を閉じて倒れかかってくる。

その顔は赤いようで、熱中症なのだろうか？　脱水症状なのだろうか？

「……せーふ」

今回は胸でなく肩……いやでもこれは不可抗力で。

と、言ってる場合じゃないな。とりあえずクランナをどっか涼める場所に……そうだ、あそこでいいな。

「……誰……ですの？」

「悪いが下之だ」

「下……ですか……ああ、少し目眩がして」

「とりあえずそこの喫茶店に入ろうか、な？」

「私を喫茶店に連れ込んで……」

「はいはい連れ込んで涼ませますよっと」

「……すみません」

ということで数十メートル離れた喫茶店へと彼女の腕を掴みつつも向かった。

喫茶店はガラスウィンドウで、ドアをくぐるとこれでもかと言わんばかりに冷気が身体を包み込む。

「とりあえず座ってろよ？」

「……指図を」
「座っててください」
「……」

二人分のアイスコーヒーと、セルフの氷水を持ってきて。

「大丈夫か？」
「大丈夫ですわ」

その頃には喫茶店の環境の良さか、クランナの顔色ももとに戻っていた。
そこにはどこか無愛想な表情があり、俺へのデフォルトなのでそこまで気にせずに向かい席へと座る。

「その……ご迷惑をかけましたわ」
「いやむしろ勝手に連れ込んで悪いな。でもな、あそこまでふらふらになる具合だから、身体のこと考えて強制した」
「……少し外に居過ぎましたの」

そういえば体育祭の時も危なかったっけ？　クランナは真面目だから生徒会の活動を太陽の下でずっとやってたもんな、もし俺が本部に戻さなかったらどうなっていたことやら。
この暑さで一時時間以上というのは”少し”に入るのか少し微妙だが。

「てかなんでそんなに外にいたんだ？　一時間ぐらい前から動いてないようだったけどよ」
「う、動いてはいましたわ」

おかしいな、目視する限りだと半径ニメートルぐらいの誤差しか

ないんだが。

「でも、戻ってきてしまいましたの……六度目ですわ」

「はぁ」

……あー。

「なんですの、その顔は？」

「いやー、まあなー、うん」

「歯切れが悪いですわね、何か私に隠すのですか？」

そういやクランナって方向オンチっぽいんだよな、口には出さないけども。

てか動いた上で一時間とか余計に体力削られるだろうに。

「なんでもないことだからな……で、クランナは何かお探しで？」

「……なぜ、そのようなことを聞きますの？」

そりゃあねえ。せっかく回復したのにまた迷われちゃ敵わないし。

「転校生な女子生徒だと、やはりこの町には不慣れなんじゃないかと。思っただけだな」

「っ！　そうですの、確かにここに来てから時は経ちますが、分かりにくいのです……仕方ないですわね。他の生徒や住民の方々とは経験が違いますもの、ええ」

誘導はしたけど、意地はるのなあ。

「それで不慣れなクランナさんは倒れる寸前まで、何を探してたんだ？」

クランナが探すもの……想像がつかないな。そういや彼女は日本は興味深いとか言ってったような言っていないような。

「……家具屋です」

「家具屋？」

「この商店街に古家具屋があると聞いたのですが……見つからないのです」

「古家具屋……あー、カトウか」

「カ、カトウ？　私は決してシュガーを足しているわけではないのですが」

お、おう。なんてテンプレートな……ん？　よく考えたらこれテンプレート……？

「店名だよ。そういや奥まったところにあったっけな」

「そ、そうなのですか……」

「チラ見しただけだけど、結構年季に入った日本家具扱ってたような」

「日本家具……！」

クランナの眼の色が変わった。

「あ、あの……」

「ん？」

実はまあ、クランナの言おうとしたところは分かる訳で。

「無理強いはしませんが、もし下にそれほどな急用がないのであれば――」

どこかモジモジとして俯きがちに呟くそれ。まあ俺に頼むのは屈辱も入るんだろうな。

「じゃあ少し涼んだら行こうか、カトウ家具に」

「……よ、よろしくお願いしますわ」

ほんと礼儀はどんな相手だろうと重んじるのなあ。クランナは。ということで、クランナを案内することにした。まあ、野菜が心配だから案内したら帰るかもだけど。

第３７１話　√３－２３　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

久しぶりですー
変更前「サトウ家具」→変更後「カトウ家具」

第３７１話　√３－２３　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

やってきたのは喫茶店から歩いて数分も経たないところに位置する商店街の裏通り。

商店街のメインストリート……そんなハイカラな俗称が合っているのかはさておき、路地に入って行くと車一台半ほどの道が商店街に平行するように設けられている。

その道には商店街とはまた違った、どことなく”懐かしさ”を思い起こさせるような佇まいで商店と民家が並んでいるのだ。

「このような場所が……」

先程の商店街が地方の背伸びした結果とすれば、こちらが地方相応の商店街に見えなくもない。

それでも背伸びが功を奏してそれなりに繁盛しているし、こちらの裏通りも客層が異なるのか、常連客が多いのか、俺が覚えている限りでは店を閉めたところは十数分の一ぐらいだろう。

「少し分かりづらいかもな」

「はぁ……」

隣を歩く日傘の彼女はキョロキョロと商店街の面立ちとは異なった景色の裏通りを眺めている。

”デザイン”という言葉とは無縁な古びた面構えの店ばかりで、その店主達もなかなかに歳をとってもいたりして少しばかり、古臭いイメージが先行するが、

「あの駄菓子屋にはよくお世話になった……」

「だ、駄菓子屋ですか！？　……現代に教科書で見たとおりの駄菓

子屋が残っているなんて」

俺が昔にお世話になった店もある。

驚きと高揚が感じられる彼女は、俺の眼の先にある木箱に数十円で買える駄菓子が陳列され、店先に並ぶそのさまをまじまじと見ていた。

「……悪いが、とりあえず古家具屋行こうか」

「わ、悪くなどないですわ。頼んだのは私ですから、お願いしますわ（また来ましょう）」

少し未練があるのかチラチラと駄菓子屋を振り向くのが傍からみて……

「（クランナはこういうのが好きなのな）」

クランナが目を向けるとすると、それは現代のものというより、時代を重ねたレトロというかモダンなものが多いような気がする。

駄菓子屋しかり、水色の半透明ガラスの美容室に、ガラスをはめ込んだ木戸を使っている酒屋などなど。

「ここだな」

「こ、ここが……！」

隣から息を呑むように、彼女は真っすぐ前を見つめていた。

そこには商店と民家の複合した、ありがちな店構えの古家具屋がある。反転したかのように「具家ウトカ」

逆読みというか、現代の読み方に直して「カトウ家具」

俺も実際に来たのは初めてで、姉貴が「良い家具が揃ってるんだー」と嬉しそうに話していたり、いつか買い物に出かけたホニさん

が「懐かしい家具のお店があったよー！」と話されていたのを覚えていた。
その後商店街入り口に掲げられている周辺地図にその名を見つけ、なんとなくに場所を覚えていた。

「はぁ～～～～」

クランナはというと感嘆の声をあげていた。
店先に並ぶのは、端が鉄で装飾された小豆色ともこげ茶とも捉えづらい絶妙な色合いの戸棚や、漆が塗られて時折照りをみせるほどに丁寧に扱われたことが分かる和ダンスなど。
ほかには小物として木製の茶箱、編み込まれたこおり、黒々としつつもその流線的なデザインはそれな黒電話、縦模様の入ったガラスで出来た容器とスイッチ周辺部分が緑色のミキサーなど。
と、いうようななんとも昔懐かしいもの達が鎮座していた。

それだけではなく事務で使うような収納などもあるのだが、クランナの眼はその”昔懐かしい”ものの方へと集約されていた。
彼女はその場から一歩から動かくなったまま、それらを瞳を輝かせて凝視するので、とりあえずに。

「すいませーん」

俺は店へと入って行き、声をかける。

「はいはーい」

すると店の奥から愛想のよい少し老いた女性が現れた。しかし容姿と比べてその声は若く感じ、ハキハキと喋る。

「学生さんですね？　いらっしゃいませ、古臭いものばかりしかないけど良かったら見ていってね」

と微笑みかけてくる。古臭いとは言うがチラチラと見ただけで、その手入れが徹底されていることが良く分かる。

よく汚れなどを残して希少価値としているのものあるが、そんなことがどうでもよくなるほどにそれらの家具は美しかった。

そうまずは言おうとしたところで――

「素晴らしいですわ！　このような家具が見れるなどっ」

後ろにいつの間にか迫っていたクランナが声をあげるようにして言った。

「お客様、興味が御有りですか？」

「はいっ！　この階段ダンスの、控え目な鉄装飾といい抑えられた色合いといい、階段状に並ぶ六つの引き出しが……素晴らしいと思います」

「お目が高いですね。家具市場で見つけたところ、一目ぼれしまして。出来はどうあれ修繕させていただきました」

「修繕です……か？　見ているとそうには」

「元々引き出しが消失していたり、枠組みが腐っていたり、底が抜けてもいましたが……違和感はないでしょうか？」

「ないどころか……まるで作られた直後のようにも」

「ありがとうございます。そういえばですね、この和ダンスは――」

「はいっ――」

置いてけぼりを食らう俺だが、クランナとカトウの店主の女性は意気投合していた。

こんなに活き活きした彼女を見ることになろうとは。

「（なるほど、クランナは生粋の日本マニアってことか）」

それもレトロ中心の。

なんというか見ていて微笑ましかった。

「今日はありがとうございました」

「いや、いいって」

一時間ほど談笑していたクランナと店から出た。

俺は最初案内したら帰ろうとも思っていたのだが、クランナの表情を見ているのもつまらなくなかったし、それに家具をじっくりと見ると言うのもなかなかに面白かった。

「加藤さんと知り合えたのはあなたのおかげですわ」

店名の通り、古家具屋の店主は加藤さんだった。クランナに説明していく姿は傍から見ても楽しんでいるように見えた。

それを上回るような楽しみ方をしていたのがクランナでもあるのだが。

「買い物終わりと言うのに付き合わせてしまいましたし」

「だから気にすんなよ」

実は店を出る頃には太陽も陰りを見せて、気温もさがっていた。

ビニールの中身を覗いてみるが、特に大きな変化はないようで一安心。

「クランナは楽しかったか？」
「え……はい。楽しかったですわ」
「ならいい、俺も楽しかったしな」
「え」

楽しかったのは前述の通りだ。
きょとんとした顔を向けてくるので、少し茶化してみよう。

「もしまた迷って、俺が近くにいたら案内するぞ」
「ま、迷ってなど！」
「はいはい、じゃあまた生徒会でな」
「な……もう（本当にこの人は、あの出来事が無ければ――）」

何か聞こえた気がしたが、いつも通りに。

「じゃあな、クランナ」
「さようなら……下」

デフォルトデフォルトっと。
と、いうことで俺とクランナの日曜は終わりとなる。
なんというか、高校生なのに色気の欠片もないとか本当でも言うなよ？

第３７２話　√３－２４　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

またまたお久です

第３７２話　√３－２４　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

それはどこにでもあるような古びた二階建てのアパート。
そこに似つかわしくない一人の女性が階段を上がると「２０３」と書かれたプレートのある扉の鍵を開けました。
ちなみにその表札には「オルリス　クランナ」長く美麗な金髪の髪が部屋の中へと吸い込まれていきました。

「ただいま帰りました」

私はそうして自分の家へと戻ってきた。と、いっても――

「この狭さも慣れると丁度よいものですね」

この国こと日本での”仮住まい”としての家なのですが。

「……はぁ」

思い起こすのは今日の昼辺りに覗いた古家具屋「カトウ家具」のこと。
魅力的な手入れの行き届いた古家具はもちろん、加藤さんとの話しはかなりに盛り上がった。

「階段だんすが実に……」

部屋を借りているだけに階段というものは必要はありませんが、とても欲しいですわ。
お値段も手ごろではあるのですが……

「考えどころですわね」

自分の１Ｋの部屋を見渡すと、狭いキッチンと冷蔵庫に、電子ケトル、電子レンジ、炊飯ジャーに木製の食器棚。部屋は五畳半の広さに安く買った組み立て式の木製の引き出しに載ったブラウン管のテレビ、丸く直径が一メートルもない小さい卓袱台が置かれているだけ。

「あまり無駄遣いは出来ませんし……」

財布の中身を思い出してがっくりとうなだれる。この国に居る間は、お金を無意味に使わないと決めていたことでごく少量の資金しか持ってきてありません。

引き出すことはできなくはないのですが、自分で宣言したこと故にそれは出来るだけ避けたいところで。

「シワがついてしまいますわね」

……とりあえずは着替えをしましょう。

質素にするつもりはないのですが、どうにもこの国で言う”貧乏性”というものなのでしょうか？

洒落た格好も、自分の国で着飽きたのか分かりませんが、家では常にジャージです。

お母様などが見たら卒倒しそうですが、生憎私一人ですから気にも留めません。

「……」

畳に座り込んでぼうっとする。ここに引っ越してきてからそんな時間が多い気がします。

自分の国では常に付き人がいて落ちつく時間さえありませんでしたから、まったく一人で居たい時はあるというのに。
だから日本にきて、何もしない、何も考えない時間に私は幸せを感じてしまいます。窓越しに聞こえる生活の音だけで、私一人。

「はぁ」

無意味に吐息が漏れてしまう、それほどに落ちつく時間。
先程までの今日の出来事を回想しようとして、そういえば。

「（下に今日は案内してもらったのですよね）」

商店街の似たような景色をぐるぐると回っていた私は――

「（暑さで倒れて、それで）」

助けて……くれたのですわね。
今でこそ少しは涼しくなっていますが、日中は暑かったですからね。

「（体育祭の時も）」

口には出しませんでしたが、少し限界を感じていたその時に下に休めと言われたのでしたっけ。

「まったく……」

生徒会役員への気遣いや、お姉さまである副会長のこともしっかり考えてますのに。

「本当に”あの”ことが無ければ」

下の印象も大きく違うといいますのに、本当に――

＊　＊

五月六日

私はこの藍浜町に引っ越してきました。それも、この日本という国に留学する為です。

私がなぜ留学することになったかと言えば、日本の文化を学ぶのが理由ではあるのですが、私の強い意志も存在していました。

私の国は言うところの西洋系の国なのですが、国の開拓に日本が関わっていたこともあり、国の一部には日本の色が要所要所に残っていました。

教科書でも日本の事を扱う「日本史」があるほどで「世界史」とは別に存在していることから、日本という存在が私の国で重要な存在であることは分かっていました。

私も日本と言う国に大きな興味を抱き、留学を希望したのです。

色々な手続きなどで、入学の時期に会わせられずこのような中途半端な時期に転入することになってしまいました。

「全てで自分でやります」と大手を振ってやってきたこともあり、全ての生活は自分自身でやることにしています。

付き人ももちろんのことといません……まぁ、どこかに紛れている可能性も十分にはあるのですが。

それで私は今日、留学先の高等学校こと。藍浜高等学校へと登校することになりました。

学校の場所は何度か下見に来ていたので覚えていました。ただ、なぜか早くに家を出たはずなのに着く頃には一時間ほど経っていたのが解せないのですけれど。

日本の方々の容姿は、私とは大きく違った茶色の瞳に黒髪や茶髪で、教科書や授業なので習った通りで感動します。

そんな藍浜の学生方は、私に視線を集めているようで。金髪で青い瞳というはやはり目立ってしまうことを再認識します。

ここであいさつするべきなのでしょうけど……今はとりあえず職員室というものに向かわなければ。

場所が……分かりません。

学校までの道のりは理解していたのですが、職員室の場所がどうにも。

「（聞いてみるべきでしょう）」

このまま授業が始まってしまっては……私の日本語は通じるでしょうか？　ふ、不安ですわ。

「あ、あの」

「は、はい！」

声を掛けたのは、少し小柄な黒髪の女学生。
学年色を見る限りでは同じ学年の方のようです。

「職員室というのは……」
「あ、職員室はですね――」

懇切丁寧な説明を受け、場所を理解し。

「丁寧にありがとうございます」
「え、いえ」

そう手を振る彼女は、同姓からみても可愛らしいものですね。
遠くで「いーちゃんいくよー」と呼ぶ声に彼女は反応して、

「それでは失礼しますっ」
「本当にありがとうございました」

お礼を言うと、彼女は呼ばれた声の方へと駆けて行きました。

「（職員室は――）」

そうして私は彼女の説明通りの道順で職員室に向かいました。

第３７３話　√３－２５　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

実は更新しない方が評価が上がるよ！　ということは……√１以降は蛇足と仰りたいのですね（泣）学園ファンタジーラブコメに４００部も読んでられねーよ、って気持ち分かりますから！　でも可愛い女の子書きたい一心でやってるのでどうしても長くなっちゃうんです！　それは言い訳だって？　単に力不足なだけです、ごめんなさい！

第373話　√3－25　気になる彼女は○○○で×××で。

職員室を私のクラス担任である田波教師に連れられ出て、予め来るべき自己紹介の内容を反芻する。

「（名前を言って……それだけでいいはず）」

唐突にジョークを入れても引かれてしまうかもしれない。仏頂面ではファーストコンタクトが台無しですね。

出来るだけ感じのよさそうな顔で、そう紹介出来ればいいのですわ。

私は誰もいない廊下を、教師の後ろを歩きながら、掌に「入」の字を何度も何度も書いた。

書いている内に、

「ここが一年四組ですよ。ちょっと待っててくださいね」

田波教師はそう顔をあげてクラス札へと視線を促すと、扉を開き入って行く。

それで私は扉の外に残される形になり、すると教室の中から田波教師の呼ぶ声が聞こえ「はい」と僅かに緊張に震える声をだすと。

「オルリス＝クランナです！　よろしくお願いしますっ」

ブラックボードなのに何故に緑色なのだろう、と現物を見て改めて疑問が沸き上がるのを抑えて、黒板を背にして立って、出来る限

りの笑顔で声を出し頭を下げた。
緊張で黒板に立つまでは気付かなかったけれど、教室のあちらこちらで話す声が聞こえる「何か私はミスを……？」と思ったものの。田波教師が「静かにー」と注意する。

「じゃあオルリスさんは後ろの席に座ってください」

いちばんうしろの席を田波教師は差して言った。日本の学校の机とはこのようなものなのですね……と沸き上がる興味を抑えながら着席する。

「じゃあホームルームを終わります。オルリスさんは申し訳ないですが、教材が届くまでの間クラスメイトに教材を見せてもらってくださいね」

は、はいと答えて田波教師が退室。
その瞬間にクラスに居る生徒たちがゆっくりと立ちあがったかと思うと、こちらへと視線を向ける。
そのうちの一人、女子生徒が向かって。

「あ、あの……クランナさんって、ええと日本語お上手なんですね」
「あ、ありがとう。上手に喋れているかは分からないですけれど」

そう返した途端のことでした。

「クランナさんっ！」

一挙にして後ろの席へと押しかけてくる生徒たち、その目的が私であることに気付くのはすぐのことで。何が起ったのか困惑の表情を浮かべながら「え、ええと」と私はたじろいでしまいます。

「どこから来たの！？」
「好きなモノは！」
「彼氏とかっているの？」
「どんな人が――」

ちなみに私、オルリスはというと「×××国△△△地方出身の十五歳の五人家族の次女で、日本の文化を身をもって体験するために三年間留学する」ということになっています。
この説明の中には”嘘”も混ざっているのですが、それは今は…
…はい。
ね、年齢は偽っていません！　失礼ですねっ、今年で十六を迎える日本でいうところの女子高生です！

「そーなんだー、ごめんね聞いたことない国だけど、西洋なのかな？」
「そうですね。あと私の国は新しい方ですし、小さい国ですからお気になさらないで」
「綺麗な髪だよねー、クランナさんってシャンプーって何使ってるの？」
「シャンプーはですね――を使っています」
「納豆にはネギを入れるタイプ？」
「あ、生卵も入れると更に美味しいですよね」

おそらくですけれど、悪い印象には今の時点ではなっていないようです。
……え、演技しているわけではないのですが！　遠く離れたこの国では私を受け入れてくれるかどうかが不安で仕方なかったのですわ。
このクラスは明るくて過ごしやすそうなクラスですね――

「はぁ……」

それでも編入初めなだけあって、疲れ……ていませんわ！　それにしてもこの学校というのは人が多いのですね。

ある都合で私は学校には通わず家庭教師が私の元にはいましたから、このような多くの生徒が集まる学校と言うのは珍しいものです。

それでも一クラスに三十人以上もいるなんて。この町の唯一の高校といいいますから仕方がないのかもしれませんけれど――

「！」

そう考えている途中で私は気付いてしまう。

「（教科書がないですわね）」

科目は、世界史ですか。日本からみた世界と言うのが気になります、今にも教科書を読みふけりたい気分ですわ！

……でもないのですよね、田波教師は借りてと仰っていましたが。

「（共同で読む形になるでしょうし、近い席の方に――）」

右隣に座るのは、短めの黒髪におさげと、黒縁で楕円の眼鏡が特徴的などことなく「文学少女」を思い起こさせる佇まいの女生徒。

本を読書する姿がとても様になっていますわ。

ま、まさしく私の思い描いた日本人の一人です！

「あの……」

「はい」
「教科書がまだ届いてなくて……見せて頂けますか？」
「ええもちろん、いいですよ」

よ、よかったですわ。断られたら少しショックを受けるところでした。

「ありがとうございます」

ガタガタギギィ、彼女は自分の机を私の机へに寄せてきます。

「この方が二人で読みやすいでしょう？」
「あ、はい……そうですね。ありがとうございます」
「いえ、クランナさん……？」
「はい、クランナで大丈夫ですよ。ええと、あなたは……」
「岡小百合（おかこゆり）です。よろしくねクランナさん」
「岡さん、こちらこそよろしくお願いします」

初めて名前を交換したクラスメイトは、彼女こと岡さんでした。
それから岡さんには色々と教えて貰い、案内していただいたのですが――

第３７４話　√３－２６　気になる彼女は○○○で×××で。

私は岡さんに連れられて、昼食を食べに行こうとしたのです。
弁当を持ってきていない私としては、前々から気にとめていたことで、誘ってくださって都合が本当によかったのです。
それでも誘われる前までは忘れていて、いざ昼時になってどうしようと思っていたところでもあしました。
それで学生食堂、学食へ向かうその途中のことで。

私は気付くと地面に尻もちをつく形になっていました。
そして何かとてつもない違和感を感じて胸元を見下ろすと、そこには人の手が覆いかぶさっていました。
それは俗に言う破廉恥な行為で、その手の主は他ならぬ男子生徒。

これは言うところによるセクハ――

「きゃあああ」

私自身でも、ここまで出てしまうのか。というほどの声量とカン高さで悲鳴をあげていました。
それが……セクハラ男の「下」との出会いでした。

恥辱のあまり怒るのも忘れて、私は立ちあがると走り去りました。
後ろでセクハラ男の呼びとめるような声が聞こえましたが、とにかく動揺してしまって脱兎の子ごとくにその場から逃げ出してしまいました。
……って、この言い方では私に非があるようですわね。怒れば、殴ればよかったのでしょうか。その時には本当に恥ずかしくて、悔

しくてたまらなかったのです。
岡さんに宥めて貰いながら学食に付くと、私は”きつねうどん”というものを注文しました。
それが今までに食べたことの無い味と食感で感動するのですが、少し前の出来事を時折思い出すせいで自然と感動が薄れてしまいました。
でも美味しかったので、時折行くことにしてしまいます。お揚げおいしいです。

「クランナって何処か部活には入るのか？」
「部活ですか？」

そう問いかけてきたのは岡さんとは反対の左隣にいる滝川さん。
特に特徴の無い彼ですが、私が最初の授業の時教科書が無い際に戸惑っていた際に声もかけてくれた人です。

「って、俺は帰宅部だけどな」
「帰宅部……？　そのような部活があるのですか」

帰宅する為の部活……速さを競うのでしょうか？　ということは陸上部のようなものでも――

「いやいや冗談でそう言うんだよ。ようするに俺は無所属ってこった」
「そうなのですか。あの、岡さんは何処かに入っているのですか？」
「私？　うーん、私も帰宅部だなあ」

そういえば先程のクラスの生徒たちがやってきた際にも勧誘され

た気がします。
耳に残ったのは「茶道部」でしょうか。実に「和」テイストそうで興味があります！
ただ、ただですね。
「私は部活に入る予定はないですね。ただ」
「ただ？」
二人が声を揃えるように聞いてきます。少し……言うのが緊張しますね――
そうして私が訪れたのは一つの表札のかかった扉の前。
……ここまで着くのに時間を要してしまいましたが、結果オーライというものです。
「し、失礼します！　一年四組のオルリス＝クランナです」
ドアを開けた先には――
「子供……？」
「子供じゃないよ！　立派な高校二年生だからっ」
首を傾げながら見る先には茶髪のセミロングヘアーの小さな、本当に高校にいていいのか、もしかしたら意地をはっているだけなのかと言わんばかりに、容姿の小さな女性がいらっしゃるのです。
「これでも会長なんだから！」
「それはあの……こども会長のようなな」

「こど〇店長じゃないよ!?　で、えーとあなたはね……知ってるよ、そーそー、首筋までは出かかってるのよ」

……どこが出発点なのでしょうか。

「アスちゃん言ったじゃない、オルリスちゃんだって」

「あ！　そうだそうだっ、オルリスだ！」

すると、隣にはどこか大人というかアダルティな魅力振りまくかのような長い黒髪の女生徒が、会長と称する女性に助言するように呟きました。

「え……私のことをご存じだったのですか？」

「まあねー、台本にむぎゅっ」

「容姿端麗な金髪碧眼の転校生と有名なオルリスさんよね」

「ええと……そうなのですか？」

「凄い美人だって聞いて……本当その通りね」

「あ、あの……」

「ごめんなさいね、ついつい綺麗なものは見惚れてしまうの。オルちゃん」

「オ、オルちゃん？」

「気安すぎたかしら？」

「そんなことないです！」

「よかったわ……それで、オルちゃんは生徒会室にご用があったのかしら」

「あ、はい！　実は私を――」

私は、ここに来る時に決めていました。

日本のことを知るには、多くを学ぶ学校をまずは知る。

学校をより多く、確実に知る為には、生徒を統括する組織こと―

―生徒会に入るべきだと。

しかし岡さんと滝川さんは、

『え、生徒会か？　……あれは入れるものなのか？』

『一部の推薦した生徒以外ハネ返したって聞いたことがあるね』

そ、そうなのですか？　問い返すと。

『生徒会に多くの人はいらぬ！　……らしくてよ、今は二年生しかいないらしい』

私たち一年生や、先輩である三年生はどうなっているのですか？

『一年生は門前払いらしいな』

『集会で出てくるのは二年生だけだよね』

その二年生も「紅知沙」「葉桜飛鳥」「下之美奈」の三人だけだと言う。少数精鋭のようですね、と感想を述べてみると。

『らしいな。特に紅先輩と下之先輩は超有能で生徒会の職務は実質二人で行っているだとか』

そ、それはなんと凄いお方……え？　もう一人はどうしたのでしょうか。

『あー、マスコットらしい』

マスコット!?　少数精鋭なのにマスコットで一人の枠組みを消費してしまうのですか！

『うん、可愛らしい先輩だよね。髪がツンツンしてて茶髪でちっちゃい――』

三人で切り盛り、実質は二人で学校を統括するなんて……一体どのような方なのでしょうか。

『だからさ、なんか知らないけクランナもダメかもな』

『そうですね……難しいかもしれません』

――と二人に諭されたものの、私はそれを無視して生徒会へとやってきたのです。

「色々生徒会の方々の噂は聞いています、人を入れない少数精鋭であることも」

「情報がはやいね」

「それでも私は留学生という立場として日本を知る為には学校を知って、それには生徒を統括する生徒会役員の立場として知りたかったのです！」

「……」

「よろしくお願いします！　なんでもしますっ、雑務でもなんでも！」

私は知ることの為な遠慮するつもりはなかった。そして憧れの日本という国への探求を抑えることもしなかった。

「ん、今なんでもするって言ったよね？」

……へ？

会長がどこか、何かを企むかのような表情をしてそう言い放った。
私は、もしかして。何か失態を――

「じゃあ、オルリスは雑務お願いね！」
「ええ、はいっ！」

……反射的に答えてしまいましたが、本当に雑務なのですね。

「そうだ、オルリスに紹介紹介！　えっとね、オルリルと同じ学年から新たに二人の生徒会役員が誕生しましたっ！　あ、来たみたい。ん？　シモノ？　連れてるのは友人？　許嫁――とりあえずちゃっちゃと入っちゃってー、会わせたい新メンバーも居るしね！」

シモノ？　男性の声で、どこか聞き覚えのある――

「あ」
「え？」

その男性は、見覚えがありました。去り際にも無残にも焼きついた――セクハラ行ってきた男子生徒。

「あ、あっあなたは！？　な、ななんで、あなたがここにっ！」

これが「下」との再会でした……本当に、なぜこんなところで。
それから色々あって、スキャンダルな記事が書かれたり、下とペアを組まされたりと散々でしたが。
少しずつです、許しては絶対いないのです。それでも「下」のことが少しずつ見えてきたのです――

第375話　√3－27　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

Q．今度の更新はいつまで続けられそうですか？　A．今日までかもね

第375話　√3－27　気になる彼女は○○○で×××で。

下という人物は何故セクハラという行動に及んだのか、それから観察していても分かりませんでした。

時折不真面目ではあるのですが、基本的は誠実で気遣いも出来ている（ように見える）のですよね。

体育祭準備では嫌な顔一つせず、何度も私への場所案内もしてもらいましたし。体育祭でも私のことに気付いて、休むよう声をかけてくれたこともありまして。

「（本当によくわからない人ですわ）」

そしてこれはある教室でのこと。

授業が終わり、休み時間が訪れます。

授業は日本語で時折ムズカシイ漢字や表現などが出てきますが、一応ついていくことは出来ました。

このように大衆で勉強するというのは思いのほか胸が躍るものですね。授業内容を聞きながらも、教室を見渡すと授業に向かう姿勢は三者三様で見ていて飽きません。

いつも通りに近い席同士の岡さんや、滝川さんと話したり。岡さんや滝川さんの友人がやってきて色々とお話しさせてもらったりと、本当にこのクラスにはよくして貰っています。

少し質問が多いので……ほんの少し疲れてしまいますが。

休み時間が終わった直後に、岡さんがこちらへと顔を向けて、何か思いついたかのようにあっと声をあげて、

「そういえばクランナさんってどんな家に住んでいるの？」
「え？」
岡さんがそのようなことを聞いてきました。なぜ、そのようなことを？
「留学生なクランナさんて住む処どうしているのかな、っていう疑問かな」
留学生というものは珍しいものなのでしょうか？　と聞くと、そうらしいです。
やはり気になるのでしょうね、そういうことは。
「単なる小さなアパートを間借りしてるだけですよ。あまりお金も使えませんし」
自分で自由にするお金は思いのほか少なく、月に使えるお金と言えば生活できる最低限――というほどではありませんが、多いわけではないのです。
「アパートなのか？　なんか日本に留学する為に家買ってそうなイメージがあったわ」
「そんなことはないですよ」
と笑って返す。一応ホームステイが基本らしいのですが、三年間となると厳しいでしょうし。
それに、ある事情で難しくもありました。
「私って皆さん方からどんなイメージあるのでしょうか？」

本来ならば、変な時期に入ってきた半端者のような……ですが皆さんは優しいのですよね。一体どんなイメージで私は捉えられているのでしょうか、少し怖いですが気になります。

「クランナのイメージ？」
「はい」
「そりゃあ、なあ？」
「ですね」
「？」

息を合わせるように岡さんと滝川さんは頷きます。なんなのでしょう、共通認識ということなのでしょうか――
そして滝川さんが、とにかく簡潔に仰るのです。

「最初はお姫様だったな」

え、と声が漏れそうになるのを抑えます。

「すっごい美人がきました！　というような感じでしたね。地味な私からすると高嶺の花というか、なんというかですね」
「でもさ、話してみたら日本語上手だし話し易いし、そのギャップがいいかもなって」
「……」

そ、そういう認識だったのですか。

「今でも美人なことには変わりありませんが、おそらくクラスの皆もクランナさんとはやく仲良くなりたいと思っていると思いますよ」

「まあ、俺らは席が近かったからなー」

……いいクラスですね。

「色々岡さんも滝川さんもありがとうございます。おかげで少し安心できました。途中から入ってきた私がどのように思われているか不安だったもので」

「クランナさんは全然大丈夫ですよ。というか分からないことがあったら遠慮せずに聞いてくださいね」

「もちろん俺もな？」

岡さん……滝川さん。本当に優しい方々です。日本にきて好奇心に溢れている一方で、受け入れてくれるか不安で……本当に良かったです。

それで私は、出来れば相談したいことが頭に浮かぶ。

「突然相談で申し訳ないのですが――」

そしてお聞きしたのが、ある店のこと。

お二方には貴重な休みの日ですから、あと一度一人で周ってみたかったのです。と、少し惜しいですがお二方のある店への案内をお断りしました。

どこにその店があるのかお聞きしてから、私は――

そうして七月四日のこと。

私は家から地図では近くに見える商店街、いわゆるショッピングモールまで一時間ほどかけてやってきました。

「（今日は暑いですわね）」

日傘を少し除けて、見る空には燦々と輝く太陽の姿があります。
今日は全体的に蒸していながらも、気温が高く……じめっとした暑さがありました。
着て行く服がどうにも選択できないので、替えが数本ある制服を着て、日傘をさしながら私はある店のある商店街までやってきました。
その店とは――

「（いくつかはあるのですが……）」

家具屋。そのままです。
家の家具を必要最低限で済ませているのですが、いくらなんでも組み立て式のタンスは使い勝手良くなく。いっそ買ってしまおうと思っている次第でした。
この町にはいくつか家具屋があり、それも商店街に集中しているとのことで、商店街散策もかねて一人やってきました。

「（時折買う食事は学校に近くにあるコンビニで済ませていましたから）」

商店街はまったくもって遠くはありませんが、行きづらかったのです。
それも、

「（どうして私から目的地は逃げてしまうのでしょうね）」

商店街も地図無しで行ってみようと試みましたが、いつの間にか自分のアパートの前に戻ってきたり。
アパートの大家さんに頂いた町内の地図をもらって、いざ商店街

に臨もうとしたというわけです。

「（それにしても暑いです）」

頬を流れる汗は心地の良いものではありません。とりあえず商店街をまわって家具屋を見てまわるのですが、あまりピンとくるものがないのです。

「（古家具屋があるとは聞いたのですが……）」

地図にはそれが載っていないせいで、探し回ることになりました（後に”サトウ”という記述が地図から見つかるのですが、やはり家具屋の文字はありませんでした）

人に聞いても良いのですが。

「（それでは道に迷っている風に見えてしまいますから）

……い、意地などではないのです。お手間を取らせては悪いと思ってのことで！

「（とりあえず探してみましょう）」

あれから一時間ほどたって、ぐるぐると同じ場所を廻っている錯覚に陥りました。

「（見つかりません……商店街にはあると聞いていたのですのに）」

大家さんは確かにそう言ったのです！

「（ああ……また、スーパーの前）」

傘をさしていても、暑さが全てしのげるはすがなく。

気付かない内に数時間が外に出て経過して、日傘越しでも太陽を浴び続けていた私は――

「（もともと暑いのは苦手で）」

ふっと意識が遠のいて、私は前に倒れ込んだように感じます。しかし力は入らずなすがままに。

「（あ――）」

次の瞬間には、何かに抱きとめられたような感触がして。薄い意識の中、私は気付くと喫茶店の椅子に座っていたのでした。その向かいには――

「……誰……ですの？」

「悪いが下之だ」

第376話　√3－28　気になる彼女は○○○で×××で。

「それからあっさりと古家具屋を見つけて、それで……」

実に好ましい階段だんすが！

「（そういえば……）」

下は買い物途中でしたっけ。それなのに一時間近く付き合ってくださったのですわよね。

もし話通りなら、それもお姉さんである下之副会長の負担を減らす為で――

う、うまく描かれ過ぎですわ。どうせセクハラのような破廉恥な要素がどこかで入って来るのです。決まっていますわ！

「（でも、もしかしてあれは……）」

……ないですわ。ただ今は猫を被っているだけに違いないのです（？）

「……あ、夕飯の時間ですわね」

私はジャージ姿のまま立ちあがると、冷蔵庫の上扉にある冷凍室を見て凍らされた惣菜やご飯を取り出して、電子レンジで解凍する。

盛りつけてから、卓袱台までもって行きニュースを見ながら今日の夕食を終える。

「（少し休んだらお風呂に入りましょうか）」

このアパートは見かけは古いものの、設備はほどほどに揃っているのです。

部屋は一つだけですが、トイレもお風呂別々に有り、どちらも近年改装されたばかりのようですね。

「（元の国と比べるとナノサイズですけれど、一人では十分過ぎるほどですわ）」

お風呂に入って、勉強の復習・予習を二時間ほどして十一時。私は布団を広げて思いのほか早くに眠りに就きました。

歩きまわったことや、倒れかかったことなどがあるのでしょう。それはもうすぐに眠気が襲って来て――

＊　＊

七月五日

「そういやクランナってコンビニ弁当ばっかだよな」

「え」

一学期を締めくくる期末テストを寸前に控えるこの頃、いつものように買って来ていたコンビニ弁当を食べていると滝川さんがそんなことを呟きました。

「そ、そうですか？」

「それか学食」

「う……そうですね」

その通りで、編入してからずっとコンビニで買った弁当や学食で昼食を済ませていました。

「私も気になっていました」というような表情で岡さんも箸を止めてこちらを見ているのがなんともいえませんわ。

「自炊できないんです」

お米だけは炊けるように頑張ったのです！　それでも他の料理は難しくて……さんまを炭にしたのがもうトラウマのようになってしまってたりします。

「そっかー。まあ俺も料理しないしな」

「実は私も……あまり得意では」

「そうなんですか」

ということはお二人が食べているお弁当は、お母様やお父様が作ってくれているということでしょうか。

「特に意味はねーけどさ、聞いてみた。あ、そーいやさ――」

確かに栄養バランスは偏るのですよね……なんとかしませんと。

その日の放課後。

生徒会が終わって、下よりも早くに学校を出た制服姿で商店街へと向かっていました。

「（今日はお弁当ですわね）」

買い置きしていた惣菜も有限ですし、時折夕食はスーパーの弁当に。

……それにしてもコンビニやスーパーのお弁当というものは、想像よりも美味しくて驚きましたわ。種類もありますし、飽きがきませんね。

オリジナルブランドと思われますそれぞれのパンも美味しいですし、もうそこで事足りてしまうのですよね。

気分を買える為に近くにあるコンビニではなく商店街のスーパーでも買う事があり、今日はスーパーで買おうと思っていました。

それでも油モノがどうしても多くなってしまいますから。そう考えながら、サラダも一緒に買おうと歩いていると――

＊　＊

「（ん？　クランナか？）」

学校帰りにユイに「ゲームショップよろうぜ！」と提案してきたので姉貴を先に帰して寄り道をすることに。

向かう途中でクランナとすれ違った……といっても、間は離れていたし、クランナは俺に気付かなかったみたいだけども。

「（提げてるのはスーパーの弁当か？）」

なんというか、合わないな。留学生で、豪邸構えて専用のコックがいる――かもしれない容姿なのに半透明の袋をさげているのだから違和感が凄まじい。

「（まあ、たまたまってことかもしれんし）」

そう思いながら何かのアニメの鼻唄を歌いながら先をぐいぐいと進むユイの背中を負った。

七月七日

織姫と彦星がうんたらかんたらかもしれないがテスト週間を気にする高校生の今ではまったくどーでもいい。

試験勉強をしていたのだが、かんでいたガムが切れ、牛乳や食パンが切れた。ということで俺が買い物に名乗りをあげた夕暮れの頃。

「（あ、クランナか……）」

またしても手に提げるのはスーパーの袋。中身は平たい弁当らしきもの。

「（偶然だよな）」

七月十一日

テストが終わり迎えるは日曜日、テスト終了記念で色々と打ち上げっぽいことをしたのは昨日のこと。

今日は普通に食材調達に商店街に姉貴とやってきた。一人で行こ

うとしたら「私もユウくんと！　じゃなきゃ私だけで行く！」とゴネ始めたので、仕方なしで二人買い物に。

「ふんふ～ん♪」

隣の姉貴は上機嫌で言ったら極上機嫌といったところの、嬉しさを滲み出るどころか溢れだして氾濫するほどに喜びをあらわしていた。

実際にそこまで喜べる理由が、俺と一緒という事なのだから俺は苦笑せざるを得ない。

「（それだけで喜んでもらえるのは嬉しくも有り、安上がりでもあるけど）」

（姉弟）愛が重い。周囲から似てないからカップルによく間違われる、しかし俺はどう足掻いても釣り合わない身内びいきを抜きにしてでも姉貴は美女なので……なんというか、ね？

「（……あ）」

そうまたふと気付くと目の端を歩く金髪碧眼の美女。

「（また……だよな）」

見飽きたようなニュアンスに聞こえがちだが、クランナを見飽きたわけではない。

そう、また手に提げるのは弁当だ。

「（栄養バランスとかどうなんだ？）」

良く見れば栄養剤のボトルのようなものも袋の中に見える。
そして相も変わらず彼女は気付いていないようだ。

「（ううむ……）」

少し節介焼きな俺はそんなところが気になってしまう訳で。
後で一応の生徒会副会長である姉貴にある相談をしようと心に決めて――

＊　＊

気付いていないようだ、ユウジは思っていたようですが。

「（副会長と下……果てしなく似てないですわね）」

そうユウジが姉貴へ意識へ戻す頃に、クランナはそれをみて思いましたとさ。

第377話　√3－29　気になる彼女は○○○で×××で。

「え、私に――に――て欲しい？　なんで？　……あー、そうなんだ。少し心配、と。うーん。少しお節介かもしれないー……うん、偶然かもしれないし。でもユウくんはやっぱり優しいね……だから少し聞いてみてから考えてみよっか？」

＊　＊

七月十二日

生徒会でも暗躍しがちな姉貴はあまり表だって発言をしない。それでも実質会長を務める姉貴が発言したらでかなりの説得力を生ませる。

まあ、会長は発言し過ぎなのもあるが。

「”生徒の昼食調査”の前段階として、生徒会役員のお昼を抜き打ち検査します！」

姉貴がホワイトボードの前に立って、いつもの会長ポジを乗っ取るがごとくそう言い放つ。

ちなみに”生徒の昼食調査”ありそうでなかった試みで、学食なのか購買なのか弁当持参なのか買い食いなのか……あまり把握できていなかったらしい。

ちなみにテスト返しの日で時間も早く終わりだから、本来生徒は帰宅しているのだが、生徒会は構わず活動だ。

せっかくはやく終わるのにいつも夕暮だからと帰ってしまう二時

間ほどの活動時間しかないに比べれば、今日は十一時には全員が集合するので活動時間はたっぷりだ。
そしてそれ故に昼を跨ぐ時間にもなる。

「私は弁当持参ね」

鞄から取り出すのは楕円形の小さな二段重ねのお弁当箱。

「ちなみに中身はこれね」

取り出すと、所狭しと色鮮やかなおかずやご飯が並んでいた。

「チサさんってこういうお弁当だったんだね」
「ミナは見たことなかった？　半手作りで、半分はお父さんに作って貰ってるの」

なんか意外だ。半手作りということはチサさんが半分作ってるのか……思いのほか家庭的なんだなあ。

「私も同じ感じっ！」

会長が取り出すのは楕円形の小さいまでは合っているが、平弁当。

「ただし全部おとーさん謹製」

ドヤ顔で、である。
お次は福島で、

「おう。アタシも似たようなもんだ」

と、言いつつも福島のは男子学生が使いそうなアルミ製の長方形の二段重ね。結構容量あるんだよな。

「自分はコレですわぁ」

ユイは持参弁当。それも俺製――ではなく姉貴製。

夏だからと、スタミナが付きそうな生姜焼きや、梅肉と酢を使ったワカメやモヤシを和えた三杯酢。塩の効いたダシ巻き卵などなどな夏メニュー。

このユイにつくるパターンは変わらないのだが、それじゃ俺とユイの同居がうんたらかんたら。

そこで俺は――

「俺はカレーパンで」

持ってきたのは好物のカレーパン。金座カリー（中辛）とヤマゼキの二種類だ。

なんというか複雑なのだが、姉貴は俺製のものを、ユイのを姉貴がつくって、俺はカレーパンで済ませる。

そうすることで、ユイ同居もバレないし。第一俺はカレーパンが食いてえからだ！

「あ、私は持参だよ」

姉貴はやはり自前お弁当――でこちらは俺製。姉貴のどこはかとなく味で誤魔化さない、素材の生かし方色々含めて勝てる気がしないので味付けにこだわった。

「あれ、シモノとミナはなんで違うの？」

この質問も想定済みだッ！

「カレーパンが食いたい気分だったんで、作ってもらうのやめました」

「ユウくんがそういうから仕方ないよね」

で、ここまで色々と前談。

「クランナさんはどう？」

姉貴がそう、促し。

「……コ、コンビニ弁当ですね」

取り出すのはやはりコンビニかスーパーで売られている弁当。

「今日のおひるごはんは分かったけど、今日以外はどうしてる？」

姉貴がそう言うと、クランナがビクと反応するのが目に見えた。

「学食のおうどんとのローテ！」会長やチサさん「忙し時はウィダーもあるけど、最近は暇だからお弁当」や福島「たまにお握りもあるな！」は今はどうでもいい……ちなみにクランナは真面目だ。

「買ったコンビニ弁当と学食とかが殆ど……ですね」

言わせてしまえばこっちのもの。

「クランナさん、女子高生のこの時期は大切な時期だよ？　あまり偏ったものはダメだと思うな」

「そ、そうですよね……」

そして姉貴が考え込むように目を瞑って、少し見開いて俺の方へとウィンクを飛ばす。

「……よし分かった！　クランナちゃんここ一週間は私がお弁当を作るからっ」

「え……え」

衝撃の展開？　あまりに唐突に決まったことにクランナ以外も固まる。

「大丈夫だよ、ちゃんと私のお弁当は栄養バランス考えてるから！」

「そうではなくてですね！　なぜ、下之副会長が私のお弁当を……？」

「決まってるじゃない、生徒の模範の生徒会役員が不規則なお弁当ばかり食べてちゃダメだよ！」

「じゃあ、自炊してみます！」

「クランナさん来たばかりだから大変でしょ？　だから、夏休みまでは私が作ります！」

「へ、いや、あの……」

「お昼時だね。じゃあちょっと私のお弁当食べてみて！　それから答えは聞くからっ」

姉貴は基本優しいが、優しい口調でも畳かけることが出来る。

俺の考えた作戦だけに色々とおかしいのだけども反撃の隙を与えないのが、姉貴スタイルでもある。

「い、いただきます……っ！」

驚きの表情をみせるクランナ。冷めても美味しいよう考えた煮物

に手を出したのが運のツキ。
ホニさんから色々と教えて貰って俺も大分上達したのだ。

こうして姉貴製の弁当（となっている俺製のもの）を、これから夏休みまでの間クランナに渡すこととなった。
姉貴に作らせるのは仕事増やすだけで、俺が考えたことで、今回は、これからも姉貴は協力してもらうだけ。

『え、私にクランナちゃんに演技して欲しい？』

姉貴はさっきまでの台詞らしきものも俺が相談した直度に構築して、俺と姉貴が色々と考えた結果こうなった。
倒れたのも一概に夏のせいだけではない気がした。食生活も関係あるのかも、と思わせたのが偶然にしては続くコンビニ弁当。
決め手は購買に行く際にちらり覗いたクランナの食事風景。コンビニ弁当かパンの二択だったことだろう。

こうしてお節介な俺は廻りくどいやり方でクランナの昼食をつくることになったのだった。

第３７８話　√３－３０　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

七月十三日

テスト返しは二日間で行われる。期末テストの教科数がどうであれ、二日間をテスト返却に要す。

大げさに言えば教科がニ教科だったとしても、二日間に一教科ずつ別けそれで当日の学業は終了ということだ。

ちなみに我が一年二組は六教科で、各日三教科ずつとなる。ほかの皆が帰る中で俺とユイと福島派生徒会へと向かうのだった。

――というのは前日の説明だけども、今日も特には変わらない。ただ今場面が始まるのが俺ことユウジの起床直後ということで、そしていつもよりも少し早目の朝起きだ。

六時を指す時計の針を一分眺め終わると、ぼんやりとしながらもキッチンへと向かう。

「おはようっ、ユウくん！」

「おはよう、姉貴」

何が為、早くに起きたかと言えば。お節介ユウジ発動による、弁当作り。

一応姉貴が作っていることにして、俺がクランナ向けに弁当をつくるということ。

それもまあ独断と偏見だが、クランナはマトモな食事をしていないように見えたのだ。

外国人な彼女も、もしかすると料理の勝手が分かっていないのか、俺が今までに見たクランナの食事はコンビニ弁当かパン。

それに栄養剤なんてものも買っているのを見かけてしまったわけだから、それはもう気になるわけで。

「（それに最近暑くなり始めたしな）」

色々とスタミナが要すこの夏を、ジャンクフードとは行かないまでも、自炊料理と比べれば格段に栄養バランスが落ちがちな食事でクランナは乗り切ろうとしているのかもしれない。

「（見えないフリをするのはあんまり好きくないしな）」

倒られたらたまったものじゃない。しかし知り得たのは俺ぐらい、さて嫌われて好感度底辺の俺はどうやってクランナにマトモな食事をさせるのか？

そこで姉貴の副会長権限の発動。まあゴリ押しだよなあ。

姉貴の説得と一応俺作、姉貴の弁当を食べたクランナのリアクションからして、大丈夫だろう。

「ユウくん、本当にいいの？　私が作らなくて」

「当たり前だろ。俺が勝手に決めたことだ……と言いつつも姉貴には色々迷惑かけてるよな、すまん」

「そんなことないよ！　ユウくんのそんな優しいところや気付くところがお姉ちゃん大好きだし、クランナさんも聞いた限りだと気になるしね」

こうして、俺が二食と姉貴がホニさん分含めて二食作ることになるので、キッチンは混雑する。それも早起きの大きな理由とも言えよう。

偶然が重なって、俺がクランナを目撃したのがコンビニ弁当ｏｒパンという可能性もないわけではないが――なんとなく、そう思っ

たのだ。
実際真面目な彼女は、本当を喋ったわけで。確かに『買ったコンビニ弁当と学食とかが殆ど……ですね』言わしめたわけだ。
姉貴には予め、クランナが食べられるもの、好物なものを聞きだしてあり、野菜庫にストックしてある野菜や冷凍庫にある肉などで十分作れるメニューだったから問題ない。

それで俺は姉貴とクランナの弁当を、姉貴は俺の弁当を作ることになった。
そして割を食うのが今日に限ってはユイなわけだが、

『食わせて貰ってる身だ、そんなの全然オーケーェよォ』

と、理由も聞いてこずに購買のパンですませてもらうことになった。色々スマン。

「ユウくんのお弁当食べられるなんて幸せだよ～、私のお弁当をユウくんに食べて貰うものし・あ・わ・せ！」

相談した頃から姉貴の機嫌はウナギ登り。お姉ちゃんとして頼ってくれたのが嬉しかったのかもしれない。

「さて作りますかっ！」

学校終業までの数日間はとりあえずクランナの弁当作りが確定。
それからは考えてないが……なんとかしよう！

それは放課後のこと。

と言ってもテスト返却以下略。じゃあ明日からどうするのかと言えば……まあぶっちゃけると。

夏休みまでのテスト終了からは教師の授業も半分消化試合のようなもので、オール午前授業となる。

そして生徒会はとりあえず夏休み終了まで活動を行う事になっている。つまりは、副会長の指導として自然にクランナに弁当を渡すことが出来るのだ。

……まあごり押しの時点で自然とか、ふざけているのかって話だけども。

それで俺はクランナと一緒に書類を運んでいた。まあこれも来るべき十一月初めの文化祭のもので、早すぎないか？　と思われがちだがそうでもない。

なにより九月こそ丸々と時間を使えるのだが、十月は二学期中間テストや文化祭以外の行事も重なるのであまり時間が無いとも言える。

だから時間のあまりある今のうちに出来ることはやっちまえというのが方針らしい。

「そういやさ、弁当どうだった？」

「お弁当……？　なぜあなたがそれを聞くのですか、作っているのは副会長でしょう」

こいつは何を言っているのだろうというような目で見てくる。うん、言い方がダメだったな。

「いや姉貴に聞いいてと言われたんだよ」

「……そうでしたか」

副会長の姉貴は、チサさんではどうしてもカバーできない書記の

仕事も兼務する時がある。
どこぞのロリ会長と違って忙しく、忙しいのだ。

「（本当に姉貴が生徒会からいなくなったら、どうなることやら）」

苦笑が漏れる。チサさんは確かに天才だけども、いくらなんでも限度があるし、会長の御守もあるし。

「とても美味しかったとお伝えください」

いやまあ、嬉しいけども。

「具体的になんかないか？」

参考にせねばならん。

「そうですね……秋刀魚の焼き加減が丁度良かったですし、骨抜きも小骨の一本も残っていなくて驚きましたわね」

ホニさんのご指導の賜物だなあ。どちらかといえば味作りが得意な方で、素材の味は濃い味で誤魔化してしまうのが通例だった。

ホニさんは魚焼き機の使い方も一発で分かり、絶妙に焦げ過ぎないポイントで取り出し、塩加減も素材の味を引き出す丁度よいもので、焼く前の魚の下ごしらえも完璧で、まるで最初から骨なんかなかったかのように形を崩さずにやるものだから凄まじい。

まあ、俺も付け焼刃みたいなもので真似してみれば上手くいくわけがない。いくつかの休日を使って教えてもらっていたのだった。

「それにアスパラのベーコン焼きは、アスパラの生臭さも適度に抑えて、それでいてベーコンも香ばしくて美味しかったですわね。本

当に私なんかに作って貰うなんてもったいないほどですわ」
「そっか……あ、了解。副会長にはそう伝えておくよ」
「よろしくお願いします」

なんとか褒められた喜びを抑えこむが、やっぱ褒めもらうと嬉しいもんだな。
そうして、この複雑な弁当交錯の日々は続くのだった。

第379話　√3－31　気になる彼女は○○○で×××で。

俺とユイが変わり変わりに購買や学食やコンビニ弁当で片方が姉貴製弁当、姉貴とクランナが俺製弁当の体制が続いていたのだが――

十月十四日

その出来事は突然だった。

「下、ちょっとよろしいですか」

相も変わらずその呼び方で、放課後に学食へとクランナは連れて行き、席へと向かいに座った。

……？　なんだろうか、と思う前に思いつき――

「あー、今日も副会長は弁当作ってきてるからな」

「分かっています。だから副会長には内緒で呼んだのです」

「姉貴の弁当に不満でもあったのか？」

「あるわけありませんわ！　あのような美味しいものは今までのコンビニ弁当とは比べ物になりませんわ！」

まあ、俺作の弁当だけどな。

「というかそんな副会長の料理を毎食食べているのでしょう？　羨ましいですわ……っ！」

「睨むな睨むな」

俺の作る弁当でここまで絶賛されると、真実を明かした時が怖いな。

「副会長だから褒めてるとか、なしか？」

「当たり前です！　あのような弁当を作れる方は副会長でなくとも素晴らしいのです！　それでも副会長の心遣いは身にしみるのですが……」

ふーん。なるほどねえ。

「それで、俺を呼んだ訳ってのは？」

「それは……その」

「？」

クランナは少し気まずそうに俯くも、すぐさまキッと決意の表情を形作り。

そして鞄からある物を取り出した――

「……タッパーだよな」

「卵焼きですわ」

まあ、タッパーの透明越しに数個見えるっちゃ見えるんだけどな。

「これを？」

「試食してもらいたいのですわ」

やっぱそういうパターンすよね。

「何で俺？」

「あ、あなたしか頼める人がいませんわ……こんな見た目の悪い料

理を試食してほしいなど他の人には頼めませんわ！」

まあ、そうだよねー。

「クランナは食べたのか？　それで美味しいなら――」

「い、一応客観的意見を求めたいのです」

……すぐさま目を背けたのはなんでなんだろうな？　クランナさんよ。

「まあいいや、食って感想言えばいいんだな」

「……はい」

タッパーを開ける。形はあまりよろしくない、少し焦げてる。うん、大丈夫そう。

「いただきます」

「……」

両手手を合わせて学食のテーブルに備え付けられた割り箸に手を伸ばして、卵焼きを口へと運んだ――

「っ！？」

「ど、どうですの」

このジャリジャリは……ああ、卵の殻も入ってるのか。更にジャリジャリ……うわしょっぺえ塩の塊かっ！

そして予想以上に焦げ臭い。てかしょっぱいじゃりじゃり悪意味で香ばしい――

「が、がんばれ。カルシウムは摂取できそうだ」
「率直な意見を求めているのですっ！」

怒っていそうだが、それは俺の励ましよりも濁されたことにあるらしかった。

「しょっぱい、卵の殻入ってて不快、焦げくさい」
「……気遣いの落差が凄まじいですわ」
「まあご希望通りにね」
「ありがとうございます……そうですわよね。このジャリジャリもきっとアクセントに、焦げもわびさびを演出する一要素で、塩分を濃い目にすることで夏対策――」
「それはいくらなんでもこじつけ過ぎだから！」

食べてその感想が浮かんだということは、ポジティブ過ぎるだろう。

「ううう……やはり私には料理の才がありませんのね」
「いやー、大丈夫だって。俺だって最初は――」
「し、下は料理が出来るのですかっ」

やべ、口が滑った。

「ダメで、今もダメ」
「……そうですか」

姉貴には敵いっこないけども、最初のゲロマズに比べたら俺も進化はしてるなあと思う。
油をしかずにみりんを敷いて目玉焼きに挑戦したのはイイ思い出……はぁ。

「まあ、とりあえず残りも食べるぞ」
「え」

作ってきたんだしな。俺の為ではまったくもってないけれども。
勿体ないし、真面目なクランナも味見を何度もしたのだろうし。
じゃりじゃりという食感と奪われていく水分、本当に美味しくない。でも努力して、何か出来るように奮闘するクランナの姿を思い浮かぶ。

「ごっそさん」
「え、あの……マズイんじゃ」
「マズイ」
「ですわよね、どうして？」
「なんとなく」
「なんとなく！？」
「学食も混み始めたし、そろそろ生徒会行こうぜ」

午前授業で終わって、昼食だけ学食で済ませる生徒も結構に居る。
タッパーを広げていつまでもウダウダやっていては悪い。

「は、はい」

どこか呆然としているような、驚愕しているようなクランナを連れて俺は生徒会室へと向かった。
……ああ、口の中にジャリジャリの食感がまだ――

そして、それは夏休み前最後の授業の前日となる木曜日のこと。

七月十五日

「あの、副会長」
「なに、クランナさん」
「私に……」
「？」

「お料理の仕方を教えて頂きたいのですっ」

生徒会の昼食時にクランナがそんなことを言った。
そういやそうだった。彼女は真面目なのだ、いくら副会長命令とは言えこのまま弁当を作ってくれてばかりはマズイと思ったのだろう。
その一方で彼女は意固地になりがちというか頑固だから、頑張ってたたんだよなあ。俺も付き合わされたからよーく分かる。
しかし良く考えてみると……あれ、やばくね？

俺が弁当を作ってたのに、姉貴の料理指南じゃ――
姉貴が俺の元に駆け寄ってきた、半ば涙目で。

「（ユウくんっ、どうしよ！？）」
「（だ、大丈夫なはず。俺が料理出来るとは思うまい、だから姉貴は頼む、生徒会は出来ることは俺がやっとくから）」
「（ごめんね、ユウくん……じゃあ、家庭科室に行ってくるね）」
「（すまん、姉貴）」
「いえ、あの出来ればお願いしたいので……優先順位は後々で、都

合が合わないのであれば――」
「大丈夫だよ、クランナさん。じゃあ家庭科室行こっか！」
「は、はい！　よろしくお願いしますっ」

そうクランナは頭を下げて「生徒会の皆さまも、仕事を抜け出して申し訳ありません。少しだけ副会長を――」姉貴と一緒に出て行った。

「はぁ……」

どうなるんだろうな……と想像して、悪い予感しかしない。

「ふふ、ユウも色々と大変ね」
「そ、そうでしょうか」
「まだバレないといいわね――」

本当にチサさんは真相を知ってそうだから困るってレベルじゃない。

「副生徒会長代理補佐のシモノ！　さー仕事やろー」

会長が意気込むのを見ながら、また一つ溜息をついた。

番外27話　番外4－3　クソゲエショート！（前書き）

☆それぞれのティータイム！　時間軸は√3の夏です！　オルリスが家具屋を探している内に倒れてユウジが喫茶店に連れて行った頃のこと。ほかの皆も種類や場所は違えどティータイムを迎えていた

――

番外27話　番外4－3　クソゲエショート！

話の四。

☆それぞれのティータイム。

クランナが倒れて喫茶店に入っていたころ、もし同時に皆がお茶していたら？
ということでユウジ不在での、ヒロインサイドのお話です。

●ユキの場合。

「ユキこっちこっち」
「はーやーく」
「待って待ってー」

私とユキは休日、夏音（ナツネ）と春海（ハルミ）という女子の友人二人とカフェに来ていた。
この商店街には数店の喫茶店があって、スーパーに近い方が少し古びた印象の喫茶店で、こちらは都会のチェーン店がこの町に出店してきただけあってオシャレな喫茶店というよりカフェだった。
……ユウジ達と話してることも多いけど、こうして休日はユウジと関係のない女友達とショッピングすることもある。
お、幼馴染で。仲が未だに良いだけで……他にも友人はいるんだ

からね！　本当だからね！

「私カプチーノ！」
「私はー、エスプレッソでー」
「私チリド……じゃなくて、アイスコーヒーで」

危ない危ない、チリドッグなんてメニューに書いてあるからつい注文しそうに。

お金を払い飲み物の入ったカップを手渡されると、四人席をとりあえずは陣取った。休日でそれなりに人もいるんだけど、ラッキー！

「じゃあトーキングタイムと参りましょうか！」
「参りましょ！」「おー」

夏音が音戸を取るようにして、会話が始まる。口火を切るのは大体夏音だったりする。

ハキハキ喋るのが夏音で、少し間延びした喋り方なのが春海かな？

「ねーねーユキ、あの――のコーデ見た？」
「見た見た、可愛いよねー」
「フリルがいーよねー」

ユウジ達とは話す感じが大分違う。うーん、なんて言うんだろうなー……とにかくこっちはガールズトークになっちゃうのかなー

「そういえば春海は彼とはどうなってんの？」
「タケル君？　うーん……現状維持？」

どこかほんわかとした雰囲気を放つ春海には彼氏がいるらしい。

一度写真で見せて貰ったのだけど、二人縁側に腰掛けたらいい絵に

なりそうな彼……うーんどうなんだろこの表現。
とにかく優しそうな人に見えたかな。

「夏音はー、今はフリー？」
「うんそだねー……どーも長続きしないんだよねー」

言いたいことをきっぱりと言う夏音は、そうやれやれといった動作で言い放った。

「なんというかさ、刺激がね」

刺激→辛い→スパイス――ああ、またなんかそっちの方に想像がシフトを！？
抑えた、抑えたよ。それにしても二人とも大人だなー、私はそういう経験一切ないから良く分からないんだよね。

「ユキはどう？　下之とは付き合ってんの」
「ぶっ」

ストローで吸っていたアイスコーヒーをむせそうになった。

「え、なんで、ユウジの名前が今、出るの！？」
「「えー……」」

性格が下手すると正反対の二人が同時にそう声をあげた。え、何かおかしいこと言ったかな？

「それはー？」
「あんだけのろけ話みたいに下之のこと話されちゃね」
「の、のろけ！？　え、そんなことないよ！」

「でも話す時に一回は下之君の話題があるよねー」
「そ、そうだった？」
「そうそう、耳にタコが出来るぐらいにはねっ」

そんな意識してないのにユウジの話題出してたんだ……ああぁ、なんかそう考えるとすっごい恥ずかしい！？

「で、お二人さん付き合ってるんかい？」
「ラブラブー？」
「付き合ってない、付き合ってなんかないから！」
「「えー」」

またしても！

「あー……じゃあユキ、ヤバイ」
「えっと抽象的過ぎて分かんないよ！？」
「いや春海が言いたいのはさ、ずっと幼馴染やってるのに進展なしってことでしょ？」
「そ、そうだけど」
「……永遠の幼馴染」
「はうあっ！？」

春海はこうして時折爆弾発言を残していくのだった……うう、直撃（涙）

永遠の幼馴染って……そりゃユウジとそんなこと考えて――ないわけじゃないけど！

でも、でもね。

「というか、ユキは下之が好きなんだよね」
「っ！」

言いたいことをばしっと言うので夏音の言葉はそりゃあもう響いてくる。
ユウジが好き……私はユウジのことが――
「……わかんない」
「え？」
「わかんないの！」
「「えー」」
もういいって！
「学校でも髄一の美人になり得たユキさんの要素の一つに、とにかく純粋なのもあるんだろうね」
「出会ってからかわってないー」
「じゃあ下之のこと嫌いなの？」
「そんなことない！　嫌いなわけがないけど……ううん、好きだよ。でもこれが――」
ライクなのか、ラブなのか。
ユウジの隣にいると楽しいし、ユウジが笑っていると私も嬉しい。
ユウジが他の女の子と仲良くしてるとモヤモヤするし、最近一緒に帰れないのが寂しいし――
「風の噂だと転校生さんと仲良くなったらしいし、生徒会は女の子ばっかだし」
「ユ、ユキ」
「ユキー」
マイさんはどうなんだろう。マイさんすっごい美人だし、ユウジ

ももしかして――

「ユキ、やばいやばい！」
「ストップー、視線を下ろして」
「え」

気付くとパスタも取り扱うカフェなだけに置かれているタバスコを手に持ち、アイスコーヒーに注いでいた。
タバスコを振る癖がついていたこともあり、いつも通りのノリでやっていて黒々としたアイスコーヒー表面には数ミリの赤い液体がたまっている。

「だ、大丈夫だよ。ほら飲める」
「飲んじゃうの！？」
「筋がね入りー」

あー、もう！　ユウジのことになると最近モヤモヤするなあ！

「本当に大丈夫……？」
「……いいかも」
「えー」

……少し前までは、いつもいつものようにユウジがいたから。最近になってユウジが遠くに行っちゃったような気がするのはなぜなんだろう。
登校も一緒だし、話すし、昼食も一緒なのに……どうして、どうして物足りないんだろう。

この気持ちの本当の正体を知らないから。私はどうすればいいんだろう？

ユウジにも好きな人がいて、彼女さんが出来る時が来るのかな？

「（もう少し待って、ええと……一年ぐらい）」

私はそうしてタバスコ入りのスパイシーなアイスコーヒーをちびちびと飲み続けた。

続きますー

番外２８話　番外４－４　クソゲエショート！

話の四。

☆それぞれのティータイム。

●桐・ホニの場合。

「桐、麦茶いれたよー」
「おお、ホニすまぬな」

我は二人分の氷の入った麦茶のガラスコップを持ってきて、桐へと手渡すと縁側っぽいところに我が桐に並ぶように腰掛けて。

「「ぷはぁ」」

暑い日はギンギンに冷えた麦茶がおいしいね！　我と桐はほぼ同時に口を付け、喉を潤した。

「そういえばユウジはどうしたのかの？」
「ユウジさんはお出かけだよー、食品のお買い物だって」
「一人でか？」
「そうだよ？　……あ」

そっか、ユウジさんの荷物持ちでも付いていった方がよかったかな。

ううん、でも……我は。

「ホニよ、外に出るのが怖いか？」

「……怖いよ。きっとあんな危ないことがあるのは我のモノガタリだけだよね。でもね、やっぱり怖いんだ」

「……確かにな、今の時点なら危ないことがホニに起ることはまずないじゃろう」

「え……我。え、我だけ？」

「……」

これからも、もしかすると我以外、ユウジさん達が危ないことに巻き込まれることもあるってことなのかな？

我が勝手に桐から汲み取っただけだから、きっとこれ以上聞いても教えてもらえない――そう我は理解する。

「ね、桐」

「ん？」

「辛く……ない？」

繰り返されるこの世界は。

言わなくとも桐は我の意図がわかったようで、悲しそうな表情を浮かべながらお茶をすすり。

「辛くないわけではないな……じゃがな」

「だけど？」

決意を固めるように、顔を引き締めて。

「……ユウジが居ればわしは良い」

……いっしょだ。やっぱり皆ユウジさんなんだね。
我がここにいるのも、ユウジさんの傍に居たいから。

「それなら我と同じだね」
「そうじゃな」

これからのこと、そして今までのこと。全てを知って、全てを記憶に残す我と桐。
……ううん、きっと桐は我の何倍も”今までのこと”を記憶に残しているのだと思う。
我は何度かの繰り返しでも混乱してるのに、桐はそれ以上に繰り返される世界を見てきた、それでも同じようにユウジさんに接する。

「桐は凄いな……」
「うん？」
「桐、お茶のお代わりいる？」
「おお、頼もう」

決意した時から、分かっていたはずなんだよ？　何度も繰り返す世界を我は生きて行くって――そう。

「我は――負けないから」

どんなことがあったとしても、ユウジさんの傍に我がいれることが一番だから。
我がここにいる理由は、そのたったひとつ。

●ミユ・ユミジの場合。

それは暗い部屋、液晶の明かりだけが頼りの闇の中には、一人の女性の姿がある。
その女性は外では夏の暑さが支配始めるも、自分の部屋という小さな国の中は冷房がほどよく効いている。

「あった」

私専用の冷蔵庫を開くと、そこには五百ミリリットルペットボトルが数本入っている。
その中の黄色のラベルのペットボトルを取り出して、キャップを回す。

「ぷはぁ」

やっぱり市販のレモンティーはリモウネに限る！

『レモンティーですか、それもミプトンですね』
「そそ、ミプトンは後味がいいからね」

この夏には柔らかなレモンの酸味が身体に染み渡る。

「ユウ兄はミルクティーが好きだっけ……」

ミプトンのミルクティーは甘さがほんのりで、茶葉のいい香りが強いんだよね。
で、ユウ兄は紙パックのミルクティーとカレーパンを昼食にする——何度もその風景を見た。

『やぱり未練あるんですね、下之ユウジに』
「そ、そんなの！　……ないわけじゃないよ」

ユウ兄が今普通に過ごしているのをユミジに見せられると、胸がちくちくとするようなんというのだろう？
嫉妬……なのかな？　私は立ち直ることが出来なかったのに、ユウ兄はこうして女の子といちゃいちゃいちゃいちゃいちゃいちゃ。そもそもユウ兄はなんでこんなに女の子にモテまくってるのかが分からない、ぱっとしないし、すっごい普通なのに。それで本人は悪い気持ちでもなさそうだしさぁ――
あれ、論点すれてる。

「ユミジ、そういえば」
『はい？』
「この世界は繰り返されてるんだよね？」
『そうです。季節も周るのですが時はある日を境に進むことはありません』

少しだけ覚えている確かそれは二〇一一年三月三一日だったはず……そして二〇一〇年四月に戻る。
ユウ兄はその以前からも、友人が何人かいて。今年の四月に一気に周りに増えた。
私たちがいなくなってもユウ兄はやっていける事実にショックを受けた。居なくなった――分からないけれど、ユウジは私の何倍も強かった。

「それでユウ兄は」

色々な女の子といっしょに、幸せに浸っている。私なんかと比べ

物にならない、綺麗で可愛い女の子と。

「（……やっぱり私には無理だ）」

食品や飲料は通販で補って、籠城するようにこの一つの部屋から出ることのない私がいくら言ってもしょうがない。

時間が――経ち過ぎてしまった。きっと私は戻れないところまで来ている。

厳しい現実から目をそらす為に、ゲームやマンガををみて。三人の頃のことも時折思い出している。

それらを繰り返しながらきっと私はずっとこの暗い部屋に居続けるのだ。

そういえばユウ兄と一緒にいるときも、買うのはレモンティーだった気がする。

思い出に耽るようしにしながらも私はそのレモンティーを飲みほした。

第３８０話　√３－３２　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

サボってましたスンマセン

第３８０話　√３－３２　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

えとミナです。こ、こんな感じでいいのかな？　あんまり一人語りはやったことないから……あ、でもユウくんとの仮想会話は何度もしｔ

昼食時に私は家庭科室の一角を貸して貰えることになりました。
唐突だったけれど幸運にも料理研究部は今日休みで、それに友人の料理研究部員にも一応連絡を入れて許可を貰っておきました。
家庭科室使用許諾を家庭科担当の宣誓と副校長先生から取ってから、私とクランナさんは家庭科室に向かいます。
その時私ははっとあることに気付き――

「食材は――」
「副会長、準備はしてあります」

そうクランナさんは言うと半透明のビニール袋の中から見慣れたものが出してきました。

「卵？」
「はい、もし教えてもらうなら”卵焼き”がいいと思っていまして」
「卵焼きね……うん、わかった！」
「は、はい！　よろしくお願いしますっ」

うーんユウくんとは私のは少し味付けが違うはずだけど……というか今日のお弁当には卵焼きがあったような。
少し心配かなぁ。いっそ言っちゃえばいいのにと思うけど、ユウくん照れ屋だから言いたがらないだろうし……うーん。

「副会長？」
「あ、じゃ始めよっか」

――調理過程は省略しようかな。

クランナさんは真面目な子で私が卵焼きを作っている間は無言で私の手元をみながらメモ帳に何か書き込んでいたみたい。生徒会も入ってからすごい良く働いてくれるもんね、それに一人暮らしってのも……偉いなあ。

ということで、できあがり……うん、いつも通りに作ったし美味しいはず！

「どうかな？」
「いただきます――――っ」

クランナさんが卵焼きを一摘みにして口へと運んだ箸を止めて、表情が固まる。

あ、あれ？　もしかして失敗……？

「お、おいしいですっ！」
「よかったぁ」
「焼き加減も塩加減も……すごいです。卵や塩以外にも何か使っているのですか！？」
「ありがとう、えーとね卵と塩とサラダ油だけだよ？」
「そんなにシンプルなのに……！」

そこまで驚かれて、褒められると照れるなあ。

そういえばユウくんも毎回褒めてくれる……だからつい力が入っちゃうんだよね。

「……？」
「クランナさん、どうかした？」
「少し気付いたことが……いえ、やっぱりなんでもないんです、ごめんなさい」
「そう？」

クランナさんが少し怪訝な表情をしていたのはなんでかな。
とりあえず作り方の工程は披露したから、あとはクランナさんの作り方かな。

「じゃあクランナさんはどう作るの？」
「え、えと私はですね――」

スーパーの袋から取り出したのは、

「あ、あのクランナさん？　なんで”ウズラ”を取り出したの？」
「あ、えと自信がないので小さい卵の方がいいかと思いまして」

さ、さっき普通の卵焼きで作ったのに？
というかウズラで普通の卵焼きを作ろうとしたらどれだけ使うの!?

「ミニチュアな卵焼き……というか難しいと思うから！　普通の卵で作りましょ、ね？」
「は、はい」

それでクランナさんは家庭科室の備品のボウルを軽くすすいで、卵を割り始める。
カンカンカン、パリッ。すこし割るの失敗しちゃったみたい、透明な白身と黄身には浮く白い欠片があって。

「卵の殻が入りましたけど――些細ですね。」
「些細じゃないよ！？　クランナさん、ええと殻は食感を大きく崩すから入れない方がいいと思うんだ」
「――考えようによってはカルシウムが摂れますよ？」
「単純にとりあえずは作ろうよ！」

卵焼きでカルシウムを摂取する必要はないと思うよ……うん。
卵をといて、大体混ざり合ったところで――

「香り付けの為に生姜を――」
「クランナさん！　そういうのはとりあえずおいておいて！」
「油は……香り付けならごま油ですね」
「美味しいかもだけど、今はノーマルな卵焼きをつくろうって！」
「フライパンを操って空中で筒上に巻ければ、箸を使わずに――」
「はい菜箸！　これでやろう！」

……クランナさん、なかなかに曲者なのかもしれません。というか少し頑固なのかも。

「……やはり焦げてしまいますね」

それでも真面目で、何かを考えてそれぞれやっているようには見えるなあ。
……最後のフライパン云々は、少し奇をてらっただけのように思えるけどね。

「この調子でやってみよ！」
「はい！」

それからといた卵を消費して、さらに卵を割ってといてを繰り返して何度も何度も卵焼きを作った。

「……おいしくなってきました！」

「クランナさん覚えがよくて嬉しいな」

「いえ、副会長の教え方がとても上手なんですよ！」

教え方かあ……そういえばユウくんにも結構前に料理を教えたっけ。

「ふふ」

「どうかしました、副会長？」

「ちょっとユウくん……あ、ユウジくんのことを思いだしてね、ごめんなさい」

「し……副会長の弟さんですか？」

「結構前にユウジくんにお料理教えてって言われて、それで教えたことがあるの」

ここでユウくんのことを出しても、ユウくんがクランナさんのお弁当を作ってることはバレないよね……？

きっと大丈夫なはず。というかクランナさんの意志は分からないけど……ユウくんのこと話したい！

「そうなのですか……（このように教えてもらっても、下は下手と言っていましたね……なぜなのでしょうか、あの男は）」

「今は教えることはないぐらいに上達しちゃって……嬉しい半面、寂しいかな」

「え（以前下は料理が下手だと言っていたはずですが……？）」

ここでもクランナさんはどこか訝しむような表情をするのだけど

……はぁ、ユウくんとお料理したいなぁ。
最近ユウくんはホニさんに料理教えて貰ってるんだよね……ホニさんの日本料理は美味しいから、教える人としては適正なんだけど……うーん。

「ホニさんいいなぁ……」
「ホニさん……？」
「あ、ホニさんはね。私たち下之家の居候さんなの」
「い、居候？」
「うん、ちょっとした事情で今下之家で預かっている子なんだよ。それでホニさんと最近ユウくんが仲良くてね……ちょっと寂しいかなって」
「そ、そうなのですか（ホニさん……女の子なのでしょうか？　いや男の子？　というか歳は……？）」

そ、そうだ！　ユウくんに料理を教えて貰えばいいんだ！
ユウくんは味付けが得意だし、色々な調味料の調合を教えて貰おう！　うん！
これは探究心なんだからね！　決してユウくんと近くにいれる機会ためなだけじゃないよ！

それから少し経って、チサや会長からのメールでまだお昼ごはんを食べていないと言うことで家庭科室でみんなで食べることになりました。
そしてユウくんきたあああ！

「おー、やってるやってる」
「いらっしゃいユウくん！」
「邪魔します……お料理の痕跡が」
ユウくんのワイシャツ姿はいつみてもカッコいい……はぁ。
……いけないいけない”学校”では副会長だもんね、お姉ちゃん我慢我慢！
と、考えたけどユウくん接近！　き、きたあ！　告白？　告白なの！　そしてユウくんは耳打ちを――
「副会長」
「ユウくん？」
姉貴って呼ばなかったことで、うん。理解した告白じゃないよねそうだよね分かってたもんショボン。
「（クランナどーよ？）」
「（クランナさん？　うん、上達してるよ！　あ、ちなみに卵焼きだからね）」
「（げ、卵焼きか……やっぱりそうか。まさかクランナが今日料理指南を希望するとは予想しなかったからな）」
「（やっぱり？）」
「（いやさ、前に卵焼き味見してって言われてさ。味見したら殻がごっそり入っててさ、しょっぱいし焦げくさいしで……うん）」
「（今日はそんなことなかったよ？　……スコシアレンジヲクワエヨウトシテタケドネ）」
「（少し……？）」

というかそうなんだ……クランナさん、ユウくんに味見させてたんだ。

た、たしかに会長指示で行動を共にしてるみたいだけど……まさかだよね。

だって、こっちに来たばっかり……と言ってもニカ月近くは経ってる……ないって、ないよね、ないでしょ？

そ、それになんか理由は分からないけどユウくんクランナさんに嫌われてるみたいだったし……うーん？

「あ、クランナさん。お弁当ね」

「ありがとうございます」

「でも食べれる？　結構卵焼き食べたけど……」

「大丈夫ですよ！　副会長のお弁当を食べないなんてもったいないですから！」

お弁当つくってる人冥利に尽きる言葉なんだけど、ユウくん作だからどう反応すればいいのかな。

複雑になっちゃってる気がするんだよね……ユウくん、これからどうするつもりなんだろう？

「ごめんね、卵焼き被っちゃった」

「いえ！　いただきます――――っ」

クランナさんは上品に食べるのだけど、美味しそうで見ていて喜ばしい。

……うう、やっぱり騙してる感じがして仕方ない。

「……？」

「ど、どう？」
「美味しいですっ」
そう笑顔でクランナさんは言うのだけど、卵焼きを食べた時の表情がさっきの怪訝な表情と似ていたような……まさか。
まさかだよね？
「（美味しいには違いないのですけれど……どこか違うような気がしますわね。少し風味があるというか、卵や塩とは違うコク……？）」
その後、皆でのご飯を終えて後片付けをして家庭科室を後にしました。
ユウくん、もう少しで夏休みになって生徒会の活動も少なくなるんだよ？　それからは――どうするの？

第３８１話　√３－３３　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

スンマセン　１５８７

第３８１話　√３－３３　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

俺は姉貴とクランナの調理器具の片付けを少しばかり手伝って、その後は生徒会仕事。
主に文化祭の為の購入すべきものやらの確認作業で終わった。

「それでは失礼します」

クランナはそうして頭を下げると生徒会室を後にして帰っていった。
ちなみにこの時には俺と姉貴とユイが残るのみでもある。会長並びにチサさんも姉貴に戸締りを頼んで帰っていき、福島も「スンマセンっ」と言って駆けていっている。
俺とユキが人気の少ない職員室前の廊下で壁にもたれて一分と少し、

「お待たせ、ユウくんユイちゃん」
「おう、帰るか」
「はーい」

そうして俺たちは夏休み直前の学校を後にしたのだった。

「ぬ、そういえばユウジはクランナサーンに弁当作ってるんだけか」
「悪いな、そのせいで昼食が安定しなくて」
「いやいや、それは全然に構わないんだけも……なんでクランナに作ってるのかナ？」

おう、その質問が来るか。

「俺のお節――」

「ナルホドォ！」

「はええよ！」

早押しよろしくに言い終わる前に納得された。

「いやいやとりあえず聞いてくれよ、そもそもな――」

「とりあえず彼女とかそういうのではないだろうな……じゃなければミナ姉が協力するはずがない！」

まあな、姉貴と結託してるのは見てとれるしな。

「え、ユウくんっ？　か、彼女！？」

「ちげーから、俺フリーだから……いや、ユイ。姉貴としての姉貴じゃなくて副会長としての姉貴だとしたら」

「例えそれが出来たとしても表情に出ること確実！　あ、フリーならアタシとかどうだい？」

「いらん」

「ユウくんフリー……！　じ、じゃあお姉ちゃん予約っ」

「はーい予約は行っておりませーん、当日販売のみでーす」

……まあ、クランナとのタッグが決まった直後はチラチラとこっちを窺ってたし。てか血涙云々も言ってた気がする。

「それとクランナの転入直後から最近に比べての肌の荒れ具合と、ミナ姉が聞いたあの昼食質問もポイント、そして転入直後な上に偏見だけどもお穣さまであるがゆえに彼女は料理が不得手という可能性、それで基本的に見る限り生徒会活動を積極的かつ律儀に行う真

面目な性格のクランナからして料理を覚えたいが為に今日ミナ姉に教えを乞いた、それでなぜに教えを乞いたのがミナ姉なのか……つまりは良い食生活を遅れていなかったクランナの為と見える」

おいおい当て過ぎてチビりそうになった――って、おい。

「ちょっとまて。何故にクランナの肌状況捉えてるんだよ」

「言っただろう？　アタシは可愛い女の子のことならなんでも知ってると――いう設定があったはず」

ここで生きるかー……って半分忘れかけてたわ、ガチで。

「タッグになったことでほぼ必然的に会話するようになり、ユウジもクランナのことを気にかける。それで食生活辺りに気付いたってところだぬ」

「まあ否定はしない」

「要約して、食生活のよくない彼女へのお節介……そんなところだぬ？」

「はいはい、大当たり」

「ぬー、なるほど」

本当にユイは鋭いな。見透かされてたか。もしかすると途中からある程度は気付いていたけども、万一のことを考慮して何も言わなかったのかもしれない。

それで今日で、ある程度の証拠が出揃ったと。

「じゃあユイはそれを知ってどうする？」

「ぬ？　何かした方がいいか？」

「いや、しないならその方がいいな」

「それよりもだねえ……なんでミナ姉名義にしてんの？　いいじゃ

んユウジで、ユウジ作のお弁当って言ったら購買で売り切れ続出確定の弁当だぞ」
「褒めても何も出ないぞ……姉貴名義にしてる理由か。いや単純だって」
褒めてもなにも出ないかー、残念。と舌を出してウィンク（しているであろう）ユイうぜえす。
「シンプルなこと？」
「いや、俺クランナに嫌われてるだろ？」
その時ユイは口をポカンと開けて目を見開いて（いると推測できる）こちらをみていた。
「……え」
「その間はなんだよ？」
「そりゃま当初は、セクハラもあったし嫌われてるようにみえたけども」
「今は少し改善したぐらいだぜ？　ほんの少し話すようになった」
そう話すとユイは大げさに、深呼吸張りの溜息をついた。
「……なあユウジよ、アタシの耳にはこんな情報が入ってきたんだが」
「ん？」
情報ねえ、何がどうあっても俺とクランナは仲が良くは見えんだ

ろうに。

「商店街裏通りでデー」
「それは誤報だ、ガセだ、一切合財大間違いだ」
「ユウくん？　何かクランナさんと――」

ユイを連れて姉貴に聞こえない場所までやってきて、俺はユイを道路の壁に押し付けるようにして迫った。

「み、道端でなんて恥ずかしいよぉ」
「お前のギャルゲ声なんぞどうでもいい――それ、どこで聞いた？」
「クラスのオニャノコ？」

なんてこった。まさかそんな近い立ち位置の人間ソースだなんて！

「クラスの女子は俺が知ってるヤツ？」
「うーん、黙秘～」

ユイはといえばすごい面白がっているかのようにニヤけ顔している……傍観者はいいよなあ！

「とりあえずそれはガセだ。デートなんぞではない」
「で、本当は？」
「いや……混み入ってるし、いつかな」
「それで勘弁してやろうかぬ。ミナ姉が反対して弁当作戦打ち切りにしたらクランナが可哀想だしのう」
「助かる」

その後姉貴が近くにいて「デートって聞こえたけど誰と？　お姉ちゃんか姉貴のどっちかな」と言ってきたので「桐」と答えたとこ

ろ。

「き、桐ちゃん？　あ、お買い物の約束なんだっ」と言って納得してくれて――いるといいんだけど。

そういや明日で夏休み前の授業は終わりか……この先どうしよっかな。

まあそれを考える必要がなくなるのは明日のことである。

七月十六日

朝のことだった。いつも手作りでは時間がいくらあっても足りないので、一部には出来上がりの冷凍食品などを使う。

今日はスーパーで買っておいた冷凍のミニオムレツを入れようと画作していたのだが、

「ありゃー、前に使いきってたか」

冷凍庫にはそのミニオムレツの姿はなかった。どうやら以前にお弁当か昼食の足しに使っていたらしい。

卵系は入れたいけども目玉焼きも違うし、卵焼きは昨日と被るからな……

「そうだ」

醤油卵にすっか。塩分を丁度良くすればご飯のおかずにもなるし、そうとなれば――

そうして俺はいつもの味などを付けたがる癖が出て、鰹節を隠し

味に入れたのだった。昨日の卵焼きと同じように。

生徒会のお昼時に姉貴からクランナに弁当が渡され、クランナが何かを口に含んだ途端に表情を変えた物の弁当を食べ終わった頃に、立ちあがったことから始まる。

「下、食事中ですがいいですか？」

「ん？　別にいいけど。てか食べ終わってるし」

俺はユキが美味しいと言って買っていた、カレーパン（ハバネロ）の辛さに水を欲してようやく水分摂取を完了して落ちつき完食した頃のことだった。

そして俺はクランナに連れられて生徒会室を出て少し離れた廊下の行きどまりまでやってきた。

「聞きますが下、あのお弁当はあなたが作ったのではないですか？」

どこでバレたんだろうなあ、と思っていると目の前のクランナは怒りとも笑顔ともなんとも言えない顔で凝視していた。

まあイワユル無表情ってヤツだろう。

第３８２話　√３－３４　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

またもやすんません

すれ違いも久しぶりに

第３８２話　√３－３４　気になる彼女は○○○で×××で。

「そうだけど、何か」
「嘘おっしゃいっ、私の舌を馬鹿に……！？」

白を切っても仕方ないので開き直ることにした。
クランナはといえばこめかみを抑えながら、こちらに掌を突き出して「待って」のポーズ。

「少しお待ちになって……私の舌を馬鹿にしておりますの！」
「やり直しても俺の返答は変わらんぞ、メイドイン俺だけど」
「私のここからの会話の脳内シミュレーションをどうしてくれますの！？」
「ゴメンね」
「……謝られるのも腑に落ちないですわぁっ」

クランナのテンション高いな、書き手の聞いてる作業用ＢＧＭに影響受けてるんじゃないだろうか。

「……なぜ、そのような嘘をついたのですの？」
「嘘？　はてさてなんのことやら……ああ、思い当たる節が」
「惚けた直後に我に帰るのはどのような状況なのですの！？」
「いや、じゃあ俺が実はユイと住んでることか？」
「そんな嘘つかれたことはないのですけど……というかそもそも嘘以外のなにものでも」
「――――」
「目を背ける仕草は一体何を示しておりますのっ！　今のことが気にはなりますが、とりあえず聞いていいですか。なぜ私に副会長と偽ってお弁当をつくったのかを」

……開き直りとぼけてやり過ごそうと思ったけど、ダメっぽいな。

「それには浅い理由があるんだよ」

「……なぜ最初からイメージダウン要素を入れるのですか」

「理由はそう、なんとなく」

「底が見えましたわ！」

「ということだから、これでこの件はお開き」

「勝手に締めないでください！　なんとなくであなたは行動しているのですかっ、私はあなたを過大評……なんでもありません」

殆ど喋らなかった彼女とここまで話すとはなあ、と少し怒り気味のクランナを眺めながら穏やかに考える。

それで俺はと言えば真面目な表情をつくってから、

「言ったろ？　俺は生徒会の仕事への姿勢は真面目じゃないって。不真面目で何も考えてない、ただなんとなくクランナに弁当を作ってみただけだ」

「意味が分かりません、不真面目ならばなぜこのように面倒を増やすようなことをするのですか！」

正直に言えばいいのだろうかね。クランナのことを案じたからって……いや、そんな余計なこと言わない方がいいな。

「じゃあ分かった、こうしよう。クランナに弁当をつくって食べてほしかった」

簡潔にしてみた。で、茶化す。

「っ！　ど、どういうことですの」

「俺から申し出たら断るだろう？」
「当たり前です！」
「だろ？　俺はクランナにどう思われているかわかってるつもりだからな」
「私が下を……？　違います、そうではなくて――」
「ごめんな、姉貴のはもっと美味しかっただろ？　それに俺みたいなヤツの弁当食ってたなんて嫌な気分だよな」
「私が申したいのはそこではなく……」
「……悪かった。もう止めるからさ。今まで弁当食べてくれてありがとな」
「下……」

「それでもさ、少しは自分のことも心配しろよ？」

「っ」

俺は話は終わったとばかりに、クランナの元を去った。
これでもっと嫌われたに決まっている、それが分かっているから俺は彼女の目の前から消えるのだ。
真面目な彼女は、取り組む全てに全力投球しているのかもしれない。それでぽっかりと欠けてしまうのは自分へのこと。
だから姉貴を経由しても炊きつけて、少しだけでも料理をつくること、結果的に自分のことに意識を持って行って欲しかった。

最後の言葉だけでも受け取ってくれればいいんだけども……逆効果だっただろうなあ。

「……」

クランナの足音が背後から聞こえることは無かった。

生徒会室に戻り、俺は仕事に戻る。姉貴に「クランナさんは？」と聞かれたけども「用事があるから先に行っててほしい」と言われたことにして答えた。

その数分後にクランナはやってくるわけで、覚悟はしていたもののクランナは俺と目を合わせようとはしなかった。

「（これじゃ、あの時直後に逆戻りかな）」

もしかするとそれよりもずっと悪いかもしれない。これ以上は俺にどうすることも出来ないからな……仕方ない。

生徒会が終わって、クランナが姉貴を呼びとめると「ユウくん、悪いけど先に帰っててくれる？」と言って姉貴とクランナは生徒会室に残り、俺はユイと帰宅した。

＊　＊

「あの、副会長。聞きたいことが――」

その夕暮れに浮かび上がるのは、生徒会女子役員二人のシルエット。

一人が質問し、一人が穏やかな表情で語るように答えていたのでした。

第３８３話　√３－３５　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

一人でも不幸なまま終わるヒロインのいる作品はもうこりごりだ！
（いやぶっちゃけ好物だけど）
だからぼかぁ皆を幸せにするぜ！

第３８３話　√３－３５　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

まあ、そんな訳で姉貴とクランナ二人が生徒会室に残るのだけども俺とユイは帰路に就く訳で。
やっぱり、言葉選びは大切なのな。

「なんだユウジその微妙な顔は、本を何冊も一緒に買ったのに輪ゴム留めただけで店員が渡して来た本屋のレジ前に立つサラリーマンのような顔をしてるぞ」
「ビニール頂けますか？」
「その返しが出来るならばユウジの傷は浅いな」
「昨日揉んだ浅漬けぐらいだな」
「ご飯が恋しいぬ……と無理やり繋げてみたがぬ、弁当関連だろう？」
「ああ、月〇冠は取られちまったよ」
「べ〇・トーじゃねえよ、タイムリーなアニメネタ出すとにわか扱いされるから止めた方が良いぞい。なにか『あなたのお弁当美味しいけど、好みじゃないの』と弁当でフラれたのか」
「べ、別に告白してねーし。好きでもねーし、嫌いでもねーし、そんな葛藤がエヴリシング」
「……まあ、どうせ弁当作ってるのがユウジってバレたんだろ」
「早押しバリの察し力に俺は動揺を隠せない、このユイという生物は常に人の心を覗ける力があるというのだろうか、否神なのかもしれない」
「うん、ラノベ口調になってるあたり動揺してるのね。そして崇めよ」
「飯食ってる場合じゃねえ！　ははぁー、ユイ様ありがたやー」
「くるしゅうない」
「ははぁー、素顔のユイ思いだすだけで可愛すぎるわ。まさに野に

咲く名の知らない花のようにダークホースのキュートさ」
「こ、今度可愛いとか言ったら殴るぞ」
「キミかわいいねェー」
「……別の意味で殴るぞい」
「はいはい、コント小休止小休止」

どうもお付き合いいただきあざーす。やっぱ照れユイかわいいな。

「まあね、ちょっとばかし言葉のセレクト誤ったかなあって」
「ほほお、再現キボンヌ」
「いやさ、俺が作ったのがクランナの身を案じてとは言えないじゃん」
「ふむふむ、言ったら嫌らしいな。私てきにはぁー、下心が見えるっていうかぁー」
「だから俺はこう言った訳だよ」
「ほうほう」
「クランナに弁当をつくって食べてほしかった、と」

アメリカンジョークを言ったかのように、ＨＡＨＡＨＡと笑いながらユイを見る。

「……」

でユイはというとガチ沈黙。これは焦る……はぐらかすか、うん。

「あちゃー。渾身のギャグ滑ったかー」
「いやギャグとかじゃなくてな、なあユウジ……それがギャグだって本気で言ってる？」
「ん？　まあな、茶化したのはマズかった。クランナ相手だし」

そう言うのだがユイはというと、

「はぁ～～～～～～～～」

波線八個分ぐらいの溜息を盛大についたのだった。

「それ、姫城さんに言ってみたら？　それだけで彼女決定するよ」

「ねーよ、ギャルゲーか！」

「ああ、お前の周りはギャルゲーだ！　ユウジの周りに女の子が多いのも、アタシなんかが眼鏡取っただけで可愛いと言われる世界なんぞギャルゲーじゃなきゃなんだ！」

「いや、ユイはガチで可愛いだろう。なんで眼鏡してるんだよ、勿体ねーな」

「ユ、ユウジの眼は腐ってるに違いない！」

「ひでえ言われよう……でもそれなら俺のさっきの言葉なんて逆効果甚だしいじゃん」

「ぬ？」

「いやだから、俺クランナに滅茶苦茶嫌われてるだろ？」

「その前提がおかしい」

「おかしくないだろ、俺はクランナにセクハラしたんだぞ」

「おおう……エラく堂々とストレートに言い放ちましたね。でもユウジの周りの女の子でセクハラしてもらいたい女の子って結構居るんじゃない？」

「痴女か」

「ち、痴女ならアタシも入ってしまう……な、なあアタシはユウジにセクハラされたいのか？」

「落ちつこうな、茶でも飲むかい？」

「ありがと……ずず、冷えた麦茶うめえ」

「朝に氷突っ込んだとはいえ、未だに冷えてるとは……末恐ろしいぜ、マジックボトル（魔〇瓶）」

放課後帰路ティータイム。帰路長くね？　なんて思った方、無粋。

「まあ、でもアタシから見るとクランナはもうそのことをそこまで考えてるようには見えんのだよう」

「そうか？　俺の呼び方”下”なんだけど」

「下僕とか下等生物のほうがよかった――私は」

「喧嘩か、買うぞ」

「いや私が呼ばれる側で」

「変態か、引くぞ」

「そしてアタシは押すのであった。これが恋の駆け引き」

「鯉の粗引き？」

「その間違え方は予想だにしなかった」

クソコントなげーよと思った方、正論。

「まあアタシから言えることはそこまで自分の立ち位置を下に見る必要はないぞ」

「すると俺は”上”になるというのか……いや”上”だなんておこがましい”中”だな、うん」

「……うん、まあいいや。なるようになるってことさね」

「まあ、そりゃそうだな」

もしも”ああ”言っていたらなんて出来る訳がないのだから。

未来への道も、過去への道も分岐しているように見えてそれは一本なのだろう。

これからどうなろうと、回避することはおそらくは出来ないのだろうしな。

「姉貴お帰りー」
「ただいまユウくん」

帰宅してから三十分。俺が居間でくつろいでいると、姉貴が帰ってきた。

「姉貴さ、クランナと何か話してたのか？」
「あ……うん。えーとね、ユウくん」
「ん？　何かあったのか？」
「とりあえずごめんね」
「え、ん、はい？　何が？」
「えっとね……今は言えないの、ごめんね」
「良く分からないけども……お粗末様？」
「それは違うと思うよ、ユウくん」

てか俺よ、大事な事言わないとダメだろうに。

「あのさ、俺姉貴に謝らないといけないことがあるんだよ」
「なに？　……ま、まさか子供が！？」
「何言ってるのかね、この姉は。いやさ、クランナにバレちゃったんだよ……弁当さ」
「あー……」
「色々協力してもらったのに、悪いっ」

本当に色々手伝ってもらったのに申し訳ない。

「きっと大丈夫だよ？」
「え」

「だってユウくんだもん」

ああ……全然根拠になってないっすよ、姉貴さん。

それにしても明日が学校だったら色々ときまずかっただろうに……本当によかったよかった。

終業式の日は生徒会無かったんだっけ、よっしゃユキ達と帰るぞおー

……ああ、でも夏休み期間中の生徒会どうしよ。

第３８４話　√３－３６　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

七月二十日

何故か土曜日に日曜日と祝日の三日の休日を挟んでの終業日。
クラスメイトも「いっそ金曜で終わらせてくれりゃ良かったのに」と嘆いていた。俺も今までならば同感なのだけども、生徒会は夏休みの初めは普通に活動があるのでむしろ休日を三日挟んだ方が、今に至ってはいい。
いやだって気が重いって、あんな別れ方した手前なあ……いや本当に気まずいっす。
終業日生徒一斉下校が基本らしいので、今日は生徒会活動もなし。実質明日が顔合わせになるのだけども。

「はぁ……」

俺は朝起きてまずそんな鬱になるところから一日は始まるのだった。

「（そういや）」

時計を見て気付く、いつもの弁当を作る為に早起きしていた時間に起きてしまっていた。

「はぁ～」

朝から二回も溜息とは、縁起の悪いことなんだろうな。

「おはようっ、ユウくん！」
「おはよ、姉貴」

早起き組の俺と姉貴は必然と居間で顔を合わせる。姉貴が生徒会で早く出る時でも　顔を合わせない日は殆どない。

「きょうも暑いな」
「そうだねー、水分補給しっかりだよ」

そう言って姉貴は、俺の座る卓袱台に水を置いた。

「ありがと」
「いえいえ」

そう言って姉貴はキッチンへと戻って行った。姉貴はと言えば朝食を作っているのだ。

「手伝わなくていいか？」
「大丈夫だよー」

弁当作り作業の必要のなくなった、夏休み手前のこの頃こと。
そして未だに七時にもならないテレビをしばらく眺めていると、

「おはよーユウジさん、ミナさん」

とホニさんが起床し、次いでユイと桐が同タイミングで居間へと集まるのであった。

「おはよー！　ユウジ」

手を振って待っていたのは今日も明るく可愛さ全開のユキだった。

「おはー、ユキ」
「ねーねー、ユウジ。昨日のニュース見た？」
「おー、アレな。笑っちゃうよな――」

ユイは姉貴と話し、俺とユキとマサヒロっぽいもので話す。
すると前を歩く姉貴が俺たちの方へと振り返って、

「もう夏休みだねー」
「そうですねー、いっぱい遊び倒しますっ！」
「」
「ユキちゃんもマサヒロ君もほどほどにねー」
「はーい」
「」

夏休みかー……去年ならユイやマサヒロっぽい何かと遊んだりしたな。

一昨年まではミユにサクラに姉貴の四人で遊んでたっけ。一回四人で旅行したこともあったことを覚えている。

サクラは乗り物に弱くて、ミユははしゃいでて、姉貴と俺はいつも通りに話してた気がする。

そう、回想に耽っていたとき。直後携帯の着信音が鳴り響いていた。

携帯を目覚まし代わりに使う人もいるだろうし、マナーモード設定にし忘れていたのだろうか？

「あ、ごめんね」

着信音の主はまさかの姉貴。てか姉貴が携帯弄っているのと意外と新鮮だな。

「……うん。ユウくんに通達です！」

「え、俺？」

ユウジ、何かしたの？　とユキが。ぬふふユウジ殿やらかしたのかいとユイがそれぞれに言うのはスルーして。

「ユウくんは終業式終了後に生徒会室に集合！」

「あれ？　ミナ姉、アタシはどうなるの？」

「生徒会の事柄じゃないからユイちゃんはいいのー、あくまで生徒会室の場所が分かりやすいからなの」

「うーん……そうなぬか（でも何故に生徒会室？）」

訝しむ目をこちらに向けてくるユイ。ユキも俺が同じ生徒会疑問に思っている様子だ。

「いや何にもしてねーぞ。生徒会活動じゃないってことだよな？」

「うん！　だから副会長命令じゃなくてお姉ちゃん命令！」

「ああ、分かったよ……どんぐらい時間ってかかる？」

「うーん、どうだろ」

「どうだろて……」

……？　俺だけが呼ばれる用事って心当たりが……ないことしておこう。

その心当たりが的中してたとしても、すっぽかす訳にはいかない

しな。

ということで放課後、俺は生徒会室を訪れた。

「失礼します」

扉を開けるとそこには――

「呼び出して……申し訳ありません」

そこに心当たり通りの、

「話したいことがありますの、下」

……クランナさんでしたっと。

第３８５話　√３－３７　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

夢中になって書き続けた結果がコレだよ！　８００ｐｔ超えたらジャンル変えてみようかな

第３８５話　√３－３７　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

そう私が、副会長の手を煩わせてまで”あの男”を呼ぶ必要がありました。
気付いてしまったのです。あの男がどうしてあのようなことをしたのか。
それは――

「最初以外、ですわ」

最初の出会いがあんなでなければ。切に思います……もっとあの男と普通に話せたんじゃないかと。
一方的にあの男が悪くて、私は被害者で。それでもあの男は――

「来てくれますわよね……？」

なんだか気まずくて昨日はあの後話せませんでしたけど……来てくれるでしょうか。

「いえ、きっとあの男は」

来てくれます。
あの男……いや下之ユウジは自称するほどに不真面目でも何も考えていないわけでもないのですから。
そして目の前の、生徒会室の扉が開く、

＊　＊

どうもナレーションです。時間軸は戻りますねー
そうですね……ユウジを授業のある日の生徒会、クランナがユウジを呼びだしたところからですね。

七月十六日

私は考えてしました。疑っていました。
私のお弁当は副会長の作ったものではないのじゃないかと。

確かにお作ってくださるお弁当は美味しいのですけれど、どこか味付けと言うか……何かが違うように感じていました。
副会長が目の前で作ってくださった卵焼きと、頂いているお弁当の卵焼き。
焼き方はどちからといえば副会長が直で作った方で、純粋かつ生かされた卵のみ味でした。もう一つも美味しいのですけれど、微量に感じる……鰹節でしょうか。
それらを思いだすと、どうしても違和感を拭えなかったのです。
そして今日の昼時、

「っ！」

醤油卵を口にして、これはそうだとほぼ確信が持てました。すっと後にほんのりとだけ続く鰹節の香り。
それでは副会長でなければどなたが作ってくれているのか、手作りには違いなく市販品では恐らくないのです。

そして副会長と関係が強く、そして時々感想などを求めてきた――

「（下ですの……？）」

料理ベタと本人は自称する一方で、お姉さんの副会長は下の料理の腕を評価していた。

……以前お見かけした時も副会長と下が仲良く買い物しているところから姉弟間の仲も良いでしょうし、十分に手を組んでいる可能性はあります。

「（なぜなのですか）」

なぜ副会長と偽ってまで、下は私に作ったのですか。いつも変わる中身は、凝っていてどれも美味しく時間がかかっていそうなものいくつか。

そのお弁当を食べ終わって、下が食べているカレーパン。

「（……あれもフェイクの一環ということですの）」

思い出してみれば、下はお弁当の日とカレーパンなどというような市販品の昼食の日がほぼ一日ごとでした。

自分が作った弁当なのに、自分は食べないと言うこと……ですか。

「（でも副会長のお弁当は……）」

私と同じで、その一方で下のお弁当は違うものでした。

つまりは……仮ですが、下は私と副会長のもをつくり。自分の分は……？

「下、食事中ですがいいですか？」

「ん？　別にいいけど。てか食べ終わってるし」

そう下からの返答を貰うと私は、連れて外へと出ました。

聞かなければなりません。なぜあなたが私にそのようなことがするのか――

聞いて返って来たのは拍子抜けすることでした。

開き直るように、私がこのお弁当を作ったのはあなたでしょうと指摘すると「そうだけど、何か」と。

その後はどこか弄ばれるように、茶化し冗談を交えて誤魔化すように下は話しました。

なぜこの男は不真面目なのに、いくら彼自身に非があるであってもトゲのある態度を取る私に、

すると下は「じゃあ分かった、こうしよう。クランナに弁当をつくって食べてほしかった」と言ったのです。

「っ！　ど、どういうことですの」

下は自分から申し出たら断るであろうと、だから副会長を通したということですね。

確かに断ります、だってそれは下が私に作る必要なんてないのですから。

『だろ？　俺はクランナにどう思われているかわかってるつもりだからな』

私が下を……？　そうではないのです。だってあなたは生徒会で

時折一緒に行動するだけの、クラスも違う同学年の男子生徒。
私を気遣う必要なんてないはずです。だから私はあくまでも、自分の時間を削ってまで、下の時間を削ってまで作ってほしくないというか……なんと言えばいいのでしょう！
少なくとも下は……今はこのような酷い呼び方も、一度始めてしまうと変えるのが難しいのもありますし。最初の出会いと比べればあなたの評価はあがっていて。
だから決して、私は下を最初の出会いのように毛嫌いしているわけではなくて。

『ごめんな、姉貴のはもっと美味しかっただろ？　それに俺みたいなヤツの弁当食ってたなんて嫌な気分だよな』
「私が申したいのはそこではなく……」

だからそこではないのです。副会長も美味しいですkれど、私には作ってくれるお弁当も美味しかったのです。
それに下が作ったからといって、嫌な気分には……ならないのです、今では不思議と。

『……悪かった。もう止めるからさ。今まで弁当食べてくれてありがとな』

話を……話を聞いて！　そう思って何かを言おうとしても、何も出てこない。そして、

『それでもさ、少しは自分のことも心配しろよ？』

そこで気付いてしまいました。私にお弁当を手間をかけ、副会長

のと偽ってまで。
　以前のことでしたね、体育祭で自分は言いだせないけれどそこまで暑さに強くない私は炎天下の下で働いていました。すると下が休めと、言ってくれたのです。
　その時下は、正直に言えば嫌いでした。でも助かったことには違いなかったのです。もしかすると倒れていたかもしれません。日差しを遮るテントの中で思いました。
　少し前のことですと、また私は真面目といか頑固と言うか。人に聞けばいいのに、自分で探すと決めて夏の空の下を数時間古家屋を探す為に彷徨い、そして目眩がして倒れる感覚がありました。
　でも地面につくことはなく、通りすがりの下が抱きとめ、空調の効いた喫茶店まで連れていってくれたのです。私のことを気遣って、水も用意してくれていました。その後も買い物で自分の用事があったのに夢中になった私に付き合って古家具屋まで。

　そして私は料理が出来ませんでした。勝手が分からず、作っても失敗ばかりで。だから市販品でいいと思ってコンビニやスーパーまで歩いて弁当やおにぎり、パンなどで食を補っていたのです。
　それでもどうしても栄養の偏りは出てしまって、祖国にいたころと比べると肌の荒れも目立つようになり……体重も少しだけ、少しだけ増えてしまいました。
　でも、今は勉強に付いて行く為に学校から帰った夜も、起きた朝も勉強しなければならなくて。だから自分で料理を覚えるということをしませんでした。
　栄養剤というものを知って、やり過ごそうとした時に。副会長の抜き打ち食事チェックを――

「（もしかすると、あの時から……）」

　あの時から下は副会長と手を組んでいた……？

「どれだけ下は私を気遣ってくれていたのですか」

きっと私が副会長と下が買い物をしている時も、下は私が提げていた市販品の弁当が入ったビニール袋を見ていたということですか。体育祭も、古家具屋の時も……そしてお弁当も。全部下は私を気遣って――自信過剰でなくても、ここまで揃ってしまっては分かります。

「……そうなのですか。そうだったのですか」

そして気遣うのに、気を使わせないために。嘘までついて、茶化してまで。

「……」

私は人の少ない廊下でそう想い、少し経ってから生徒会室へと戻りました。

そこには下の姿があって、いつもと変わらない表情で。

私はきまずさと、気恥かしさで直視できませんでした。

でも……もしかすると、いくつかは私の勘違いなのかもしれません。

放課後に、副会長にそのことを聞く為に残って。そして全てが真実であることを聞きました。副会長に騙していたことも謝られました。

下は毎日早く起きて、献立を考えて。時折見かける私の食生活の偏りを心配してくれていた、と。

お節介……としか言いようがないことでした。

でも、おかげで私は「いつまでも副会長にお弁当をつくってもらうだけではダメです」と自分でも料理本を片手に練習するようになったのです。

今では……ご、ご飯と卵焼きとサラダは作れます。

「ユウくんはね、本当に優しいの。みんなのことをしっかりと考えて、でもそれを問われると冗談みたく受け流しちゃう人なんだ」

副会長はあの男のことを話す時は、いつも優しい表情をしているのですが……それよりももっと、包み込むような笑みで。

「きっとね、私の為に生徒会もやってくれてるの。入れ方も乱雑で、それでも少しの間でも居てくれたら……なんて思ってたら、今日まで働いてくれて」

いつか言っていました。下は副会長……お姉さんの為に、お姉さんの負担を減らす為に生徒会をやっている不真面目な人だと。

「（どこが……不真面目なのですか）」

私もお姉さんも、生徒会役員のことも気にして。

「自慢の弟なんだよっ、ユウくんは！」

副会長は本当に満面の笑みで、夕焼けのなかでは……とても綺麗な笑顔でそう胸を張っていいました。

ここまで聞いて、最初の出会いだけが浮いているのです。あの男

が、あそこまで気を付ける男が……何故、なぜあんなことをと。

「それにね、きっとクランナさんとの事件も……何か理由があるんだよ？　ユウくんはね、そういうことはきっちり分かってるから、きっと本当に悪気はなかったと思うの――でも不快な想いにはさせちゃったんだよね、姉の私からもごめんなさい」

「い、いえ！　副会長が謝ることでは……っ」

そう……かもしれませんのね。事故だと、不可抗力だと。

七月二十日

朝に起きて私は、あの副会長と話した際に交換したメールアドレスが写しだされる携帯画面を眺めていました。

「……副会長、色々と迷惑をかけてしまいました」

でも、これで最後です。あとは自分で言いますから。

メールの文面に「下を生徒会室に呼び出してほしい」ということを入力して――

＊　＊

「えーと……あの、クランナ？　俺が呼ばれてたんで良かったよな」

「……ええ」

「それで、俺に何か……ある？」

「……ええ」
「な、なんかさ！　昨日は話の途中で帰って――」
私は、ある言葉を。
「ありがとうございます、下之ユウジ君」
出来るだけ笑顔に……決して無理やりではなく、自然なように。
「……は？」
「それが伝えたかったのです」
「いやいやいや！　意味が分からないからさ、俺がお礼を言われることなんて――」
「たくさんありますよ？」
「思い当たることなんてないから……てか謝りたいことし」
「いえ、謝るのは私の方です。ごめんなさい、そして最初の出会いは勘違いもあったのですね」
「え……いや、あれはあくまでもセクハラで」
「ええ、それは変わりません。でも、何か事情があるのではないのですか？」
「……」
「ともかく、私はお礼が言いたかったのです」
「いやだから！　俺がお礼されることなんて何一つもないんだって！」
「今までのこと全部です」
「……セクハラも？」

「なぜ引き気味にそれを持ち出すのですか、そして引きたいのはこちらの方ですわっ！」
「そーだよな、スマンスマン。ついな？」
「……それで、どこまでが茶化しですか？」
「……」
「じゃあ言わせていただきます」

体育祭の時も、古家具屋の時も、お弁当の時も……全部、ぜんぶ。

「……あちゃー、気付かれちゃったか。クランナの好感度上げたいばっかりにー」

目を泳がしながら、下之ユウジは言うのです。それが……どこかおかしくなって。

「ふふっ、そういうことにしておきます」
「いやまて！　誤解だって、全て偶然が重なった結果だって！」
「それでは失礼しますね」
「だから――」

「また明日、生徒会室で。下之ユウジ君」

私はもうこの頃には下のことが嫌いではなくなりました。
……そうですね、嫌い以上好き未満です。あくまで同じ生徒会の役柄をこなす仲間として、ですけどね。

「ふふ」

第３８６話　√３－３８　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

それは暗い部屋、液晶の明かりだけが頼りの闇の中には、一人の女性の姿がある。
その女性は、何かが映し出される画面を凝視している。その表情は――

『――というまでのが、夏休み手前の下之ユウジでした』
「……」

とても複雑な、悲しいような怒っているような顔をミユはしていました。

『よく出来た主人公すなあ』
「ユ、ユウ兄はこんなに要領よくない！　よって偽物、偽物、偽物おっ！」
『気遣いの対象が自分に向けられないからって、何寝ぼけたこと言ってるんですか』
「う……で、電源落とすよ？」
『今液晶消したら、以後二時間起動しないよう設定しますけど？』
「さ、最低ー！　ヒッキーからパソコンとゲームを奪ったらどうなると思ってるのよ！」
『寝なさい』
「……分かったよ、はいはい！　八つ当たりですぅぅ！　ユウ兄に優しくされているその子が羨ましいんですぅっ！」
『羨ましいなら出ればいいじゃないですか』
「だから言ったよね？　私はもう……無理なんだって」
『その癖して、私に下之ユウジの映像を見せてほしいというのはどういうことなんですか？　……下之ユウジはあなたを嫌っているよ

うに見えましたか？　彼が懐かしむ時にはあなたとサ――』
「止めて……サクラはダメだから」

サクラ……？　そういえば作者の誤字なんじゃないかと言わんばかりに時折出てくる名前ですね。
私が推測するにユウジの言うミユと三人でいた頃のもう一人ということでしょうか？

『……聞きたくない名前なのですか？』
「そんなことない、でも。でも、それを聞くと悲しくなっちゃうから。この世から居なくなったわかでも、違う世界去っていったわけでもない……はずなのにね」
『その人はミユとどのような関係だったのですか？』
「……私とユウ兄にとっては大切な友達で――」

そしてミユは、悲しそうに。

「幼稚園からの幼馴染なんだよ」

お、幼馴染！？　現実枠にもユウジには幼馴染が存在していたのですか！
ゲーム枠からはユキとして……サクラという子が、ユウジとミユの幼馴染。
でも、なぜ今サクラはいないのですか？　それとミユが引きもってしまったのは何故……？

＊　＊

えー、教えてくれないんですか！　ひどいです、引き延ばしがひどいです！
どうせ一部の人は分かっているのに！　……イヤデモワタシハワカリマセンヨ？

で、場面転換です。
場面がコロコロ変わる文章は読みづらく作者の執筆力が皆無なのを物語っているんですよ、ね分かってます？

とある舞台。
明らかに日本のような和風建築とはかけ離れた、まるでおとぎ話のお城のような場所。
二人の男女が口論したあとのこと、一方の女性は自分の部屋に閉じこもることにしたようで天井は高く、豪華絢爛な装飾の施された室内は高貴さに満ちています。
しかし室内には似つかわしくないものがいくつか有り、

「まったく……私の気持ちを考えなどしないのですね」

延長電源ケーブルを引いて湯沸かし電気ケトルを、卓袱台の上に置いて。
緑茶の葉を入れた急須にお湯を注いで、少し歪ながらも風情のある湯呑みに煎れる。

「……やはり、落ちつく時にはこれですわね」

お茶をすすりながら眺める場所には、大きい室内ではどうしてもこじんまりとして、古臭さだけが伺える――階段だんすがそこにはありました。

「無理をしてでも持って来れたよかったですわ」

その使いこまれた趣への感動とは別に、違う懐かしさを覚えたかのようなニュアンスで彼女は言います。

「あの男は元気でしょうか？　三年間過ごしてそれっきり」

あ、言い忘れてました。この女性の特徴と言えばですね、部屋に入るなり長く手入れのされた金髪とは相性の悪そうな――ジャーシ姿。

碧眼の持ち主で、それはもう私の眼ても即理解できるほどの美女。二十歳台で大人の色気を醸し出しながらもどこか茶目っ気のあるように、湯呑みの髪留めから読みとれます。

そして住んでいる場所も暮らしている部屋も除けば、まるでお姫様の住むお城の一室のよう。

「こんなことになるのなら、あの男と――」

一人でなく、付き人がいあたら卒倒しそうなほどにだらしなく頬杖をついて階段だんすを眺める。

すると何かを思いついたのか目を見開いてすっくと立ち上がって、

「……そうですわ。その手がありましたわ！」

目を輝かして、そう言い放ちました。

すると彼女は、部屋に隣接したもう一つの部屋へと向かい、

「これです！」

そこにはあまりにもアホらしい、あまりにもバカらしい。
どんな御伽話だよと、どれだけ子供なんだよと。
言われてしまうような、
意識投影型”タイムマシン”
え、ええー？
「今から十年前の日本の〇〇県××市藍浜町の――」
いやあの、舞台は突飛押しもなくファンタジー世界だなあと思ってたんですよ。どうせ作者のことですし、何も考えていないかと。
今の彼女から察するに、え……十年も立ってるですか？　というかどこから十年……階段だんすということから考えると。
いや待って下さい、本当に意味が分かりませんって！　というか作者！　ガチで何も考えてないでしょう！
「思い出補正じゃないことを祈りますわよ――」
えええええええええええええええええ！？

第３８７話　√３－３９　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

ジャンル変えてみました、よろです。
ユキ……（´・ω・、）

第３８７話　√３－３９　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

七月三十日

「終わったぁ……」

七月も末の頃、ようやく生徒会役員は夏休み中に終わらせるべき用件が終了した。

ちなみに夏休み中は夏期講座も任意で受けることが出来、俺は受けても受ける気も無かったのだがチサさんや姉貴はそれを受講しているが為にちょくちょく抜けていた。

結局姉貴やチサさんからやるべきことを伝えられ、作業進行を行うという俺が疲弊する事態になったけども……まあ仕方あるまい。

会長も承認判子を押し過ぎてふくらはぎに湿布貼られてるし、終盤に至っては生徒会室は全体的お通やムードだった。

クランナも俺と職員室を何十往復もしたし、ユイや福島も姉貴とチサさんのサポートに奔走していた。

最後の書類詰めが終わり片付けが完了したところで、生徒会役員が一斉に息を吐き出して放心した。

その一方で姉貴が席を立ちあがってポットのほうへと向かったので、俺も席を立ちあがって後を追う。

まあ、お茶煎れってことで。

「お疲れ様です、会長」

「ありがとーシモノ……ごくごく、ぷはぁ！　冷えた麦茶に限るね！」

チサさんと福島と姉貴は確か熱いお茶が好きだったはず。俺とユ

イ、クランナに会長辺りは夏はやっぱりと冷えたお茶を好んでいた。

「クランナ、麦茶でいいよな？」

「ええ、ありがとう下之ユウジ君」

そういえばだが、俺の呼び方がランクアップした。下からフルネームへ。

そこまで俺は好感度を上げる行為をしたかと思い出してみるが、あれだろうなあ。

そういやクランナに呼び出された時、俺は株がストップ安かと思ったのに、クランナは上機嫌で「ありがとう」やら「ごめんなさい」やら言ってきたんだよな。

……でも呼び慣れた名前を変えるほどのことだろうか？　もう俺が慣れ始めていたばっかりに驚きだ。

全員に飲み物が行き渡った頃、持ってきていたチョコを食べていた会長が、お茶をもう一度ぐびっと飲むと。

「ねえねえ、お疲れさんこめて今度の夏祭りに行かない！」

そんな提案をしたのだった。

「藪から棒にどうしたんですか、会長？」

「いやねー、色々苦難を乗り越えてきた生徒会役員で一度は出かけてみたいなあと」

「本音は？」

「あわよくば一緒に来て何か奢ってほしい！」

「素直っすね……」

「皆、何か不都合とかある？」

役員それぞれ、特に「もちろんアスちゃん祭には私も行くわ」「うん、特にないよ」「四日ですよね、ないです」「夏祭りですか……非常に興味がありますっ」「アタシもネェー」
まあ、俺も同意見だ。

「じゃあ、行こ！　夜七時に商店街前に集合っ！」

ということで、生徒会役員フルメンバーによる夏祭りが決定した。

八月三日

エアコンの効いた自室で、溜まっていたアニメを連続視聴しているとふいに携帯の着信音が鳴った。

「ユキ……？」

メールこそすれど、しばらく会っていないユキからの電話だった。

「もしもし」
『あ、ユウジ？　おはよー』
「おはよー……って昼だぜ？」

太陽は間上に登っている頃だろう、少なくともカーテンを開けて確認は、冷気の流失の危機を招くのでしたくない。

『だねー、でもなんとなく習慣みたいなものだよ！　会ったらおはよう！　そして、こんにちはユウジっ』
「元気すなあ、こんちはユキ」

『それでさ……ええと、あのねユウジ。もしよかったら八月四日の夏祭り行かない？』
「え」
え、なにこれは。言い淀んだ物言いからして、え。え？
『あ、皆でだよっ』
「ですよねー、残念」
『……残念に思ったの？』
「え、いやまあ。デートのお誘いかと」
『そ、そんなわけないよ！　ふふ、そっかあ』
なんか電話越しのユキがすっごい嬉しそう。てか……ああ、そうだった。
「いやさ、嬉しさに満ちたユキに悪いんだけど。わりい、その日は先約があるんだ」
『誰かとデートなの！？』
「ちがうちがう、生徒会役員で夏祭りに行くことになってるんだよ」
『あ、そうなんだ……部外者の私はちょっと混ざりにくいかな』
「いや、俺から頼んでみるぞ？」
『ありがと、でもまたの機会にするね。マサヒロと行っても仕方ないから、家でゆっくりする』
マサヒロェ……て、あれ？
「不貞腐れてません？」
『……ません。ただ、女の子ばかりの生徒会にユウジはご執心なんだなぁと思って』

……怖いっすよユキさん。

『ユウジのばか』

ツーツーツー……色々と怖いんですけどお！　え、そんなにダメだった？

確かにあんな可愛い幼馴染に誘われて夏祭りに行けない自分が憎いけど、優先事項ってものがあるからなあ。

先に約束したのに破棄は出来ないだろう、て。

「……メールしておこ」

謝罪のメールを送った。すると、数日中の空いた日にパフェ一杯で許して貰えるそうな。

……あれ、実は結構な俺得じゃね？　パフェの出費なんて些細な事だ、ユキとカフェに行くのが少し楽しみになる俺だった。

第３８８話　√３－４０　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

クリスマス、ああん？　なめこ投げんぞグルァ

第３８８話　√３－４０　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

八月四日

藍浜商店街を中心とした七・八月の「四」の付く日に行われる夏祭り。こぞって子連れから学生までもが訪れ夏の一時を満喫する行事でもある。

地方の町として考えると謎の集客率を誇り、この町の住人が全体的にお祭り気質であることを身をもって体験している――商店街の入り口に立つ俺は。

「人、多っ」

人が絶え間なく、商店街に入り出るを繰り返している。手にリンゴ飴を持つ人もいれば、戦利品の賞品の入った紙袋を提げる人もいた。

時は六時の手前、夕暮れの支配する空が見えながら聴覚を大きく支配するお祭りの喧騒も耳に慣れ始めた。

そんな俺はあまりにも平凡な服装で、Ｔシャツに短パンというオシャレ度で言えば最低ランクであろうザ・サマースタイルである。

「多いね～」

隣にいるのは浴衣姿の姉貴。

いつもは放らせている長い茶髪をお団子のように結ってあり、いつもと違った新鮮さがある。

スタイルが良いと浴衣が似合わないというが、姉貴はそのジンクスを吹っ飛ばして似合っていた。

「どう、ユウくん？　おかしくない？」
「おかしくないおかしくない、すげー似合ってる」
「そ、そう？　よかったー」

おそらくこうして俺に向ける安堵を含めながらも満面の笑みは、学校の男ならイチコロだろう。
まあ、残念なことに？　俺にしか見せない顔だから仕方ないんだけど？
……ゴメンナサイ、ただ姉が誇らしいだけなんです本当です。調子乗ってマジスンマセン。

「ユイも浴衣なのな」
「ぬう、このグルグル眼鏡とのギャップが――おかしいだろ」
「なら眼鏡取って、その綺麗な顔を衆目に晒しな」
「き、綺麗って……ばかユウジのバカっ！」

くふふふふ、ユイ弄り面白れ。
ユイはいつものグルグル眼鏡に茶髪のショートなのだが、オレンジ色の浴衣を着ていた。
以前見た素顔に当てはめると非常にばっちぐーなのだが、コレだからなあ……つくづく惜しいヤツめ。
で、ユイの反応あざとい言うな。

「我も来ちゃって良かったのかな……？」
「大丈夫大丈夫、だってホニさん可愛いし」
「もう、ユウジさん……お世辞がうまいんだから」

掛け値なしっすけどね。ホニさんも誘ったところ、来てくれることになった。
姉貴のお下がりの青地に金魚柄の浴衣だが、やはり黒髪美人には

浴衣が良く似合う。
　てかツインテールのホニさんなんだこれ可愛すぎだろう。ツインテールふりふりふりふりふりふりふりふりふりふりふりふりふふふふふふふふ。

「わ、わしは？」
「いやワンピースですやん」

　桐のサイズまでになるとお下がりは……あることにはあるのだが、ミユのだからあったことは言わないでおいた。
　まあ、ミユに了承取った方がいいしな……いつ取れるのかまったくもって分からないけども。

「こんばんは、会長」

　クランナが待っていた俺たちのもとへとやってきた。

「クランナは制服なのな」
「はい、面倒ですから」

　花も恥じらう女子高生が、服装選び面倒なんて言っちゃ駄目。

「てかクランナって制服しか見てないような」
「外出時は制服で、室内はジャージです」

　おお……あまりの効率化っぷりに感動さえ覚えるわ。

「そっか……少しクランナの浴衣にも期待してたんだが、残念」
「残念……？」
「いや、クランナって浴衣似合いそうだなって」

金髪と浴衣の組み合わせは、ちぐはぐな感じが逆に素の良さを引き出してくれそうな気がする。

「（……普通にそんな言葉投げかけないでください）浴衣というものはシンプルかつ趣もあっていつか着てみたいとは思っていましたから。下之ユウジ君の言葉は素直に受け取っておきますね」

「お、おう……」

なんか本当に俺への態度が軟化したよなー

「あの、下之ユウジ君？　こちらにいる黒髪の方は」

どうやらクランナはホニさんのことが気になるようだ。

「ホニさん、居候であり可愛くあり、俺の料理の和風料理の師匠」

「居候で……可愛く、師匠？　そ、そうなのですか」

「ホニです、えーとクランナさんだよね？　ユウジさんから聞いてるよ金髪の綺麗な人だって」

「（そういう印象なのですか、内面はないのですね）オルリス＝クランナです。ホニさんで、よろしいのですか？」「うんっ、クランナさんよろしくお願いしますっ」

礼儀正しいホニさん可愛いなあ。

「それで更に隣にいらっしゃるのは妹さんですか？」

「だな、妹の桐」

妹は妹でも老婆喋りの変人だけども。

「キリって言います！　よろしくお願いします☆」

なんというか、猫かぶり絶好調だな。

「ご丁寧にありがとう、クランナよ」

「クランナおねーちゃん！」

……いつもより演技年齢下がってねーか？

「シモノー、ミナーこんばっぱー！」「こんばんは」「来たぜー」

最初から会長、小学生と錯覚する体格にピンクの浴衣……すっげえロリ加減。

チサさんは無地の青い浴衣を緑色の帯で締めるという、どこか大人びている印象が強い。

福島は少し黒く肌を焼きながら、Tシャツにハーフパンツ……俺とほぼ同じじゃねーかっ！

そうこうしている間に全員が集まった。生徒会役員打ち上げ兼、会長への貢ぎイベントが始まった――

そして二分後、終わった。

ほとんど全員が散った。

「おいおい……」

なにこの解散力。

いや本当に二分ぐらいしか経ってないんだって、進んだのも入口

から二十メートルだぞ？　それでいて、なぜにこうなった。

「とりあえずは……お」

誰か探すかと、思っていたところに金髪の頭頂部がチラリ見えた。
まあここら辺で金髪の人っつったら、少ないからな。

「お、やっぱクランナか」
「し、下君？」

クランナは俺の突然の出現に驚いているのがよく分かる。
最近矯正されがちな俺への呼び名が一部復活して、謎の呼び方が登場。

「下君って……」

上・右・左が欲しくなるところ。

「い、いえ下之ユウジ君……皆はぐれてしまいましたわね」

そういやクランナ方向オンチだっけ、この近くにいたのが幸いというべきか。
このまま放っておいたら海とかで発見されるんじゃないだろうか……？
うん、なんか心配だ、不安だ。ならば、お誘いといこう。

「だなー……せっかく来たんだし、他の人たち探しながらも一緒に回るか？」
「ええ！？　アンダー君とですかっ」
「新しい名前生みださないでくれると嬉しいんだが……まあ、俺は

クランナと回りたい。クランナの意見次第ってことで」

実際クランナとの会話はそれなりに楽しい、ボケると乗ってくれるのでこっちとしては反応が嬉しい。

ホニさんにツッコミ要素を入れた感じだろうか？　だからこう言う時でも一緒に何か食べながら歩いても良さそうだ。

「そ、そうですか。じゃあそうしましょうか……ただ、何もしないでくださいね」

「絶対しない、紙に誓って」

「……誤字なのかその通り薄っぺらい決心なのか判断が付きませんよ？　でもいいでしょう、回りましょうか」

「じゃあ行くかー」

こうしてクランナ（が迷わないか心配なので）デートっぽいことをすることになったのだった。

第３８９話　√３－４１　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

多くの屋台が立ち並び、それぞれの屋台に人が群がっている。
小学校低学年ほどの男児がお面を横顔に付けて走り回っていたり、大学生ほどの男女が手を繋いで……クソッ。
まあ、俺も隣に美女はいるんだけども。単なる仕事仲間ですから、はい。

「日本のお祭りはこうでなくてはですね」

どこか達観した物言いだけども、瞳は無邪気にも輝きを放っている。
なんというか、売られているものよりもその風景と言うか情景に見惚れているように見える。

「クランナは日本の祭りがこんなだって知ってたんだ」
「ええ、私の国では一般知識ですから！」

他国の、それも西洋系の国でこの日本のお祭りが一般知識……？

「日本は良い国ですね、人も温かさに満ちていますし、伝統を重んじるところも素晴らしいです」

そういやクランナとは出会いが最悪なせいで、こんな世間話は一切しなかったんだよな。
もう俺に非しかないから、仕方ないのだけども。

「クランナの国はどんな感じなんだ？」
「私の国……ですか？　自然に囲まれていて、民の空気も明るく素

晴らしい国だと思っています」
「そっか」
クランナは自分の国を誇りに思っていて、強い自信に満ちた表情をしていた。
なるほど、クランナの生まれ育った国は良い場所なんだな。
「あなたにとってこの町はどうですか？」
「藍浜町のことだよな？　……色んな思い出が詰まった場所だな、あとやっぱり過ごし易い」
「この町は確かに居心地が良いですわね……やはり勉強しただけでは、実際に暮らしてみないと分からないものですね」
そうして優しげな笑みを俺へと彼女は向けた。
……考えてみれば、というか思えばクランナってすっごい美人なんだよな。
ユキにはアイドル顔負けな可愛さなのに取っ付きやすく明るい活発な魅力があって、姫城さんはクールビューティという言葉が似合う美女で、もの静かな落ちついた魅力があって。
クランナは、西洋系の綺麗な女性の特徴の良いとこ取りした感じだろうか？　青色のサファイアのような透き通った細いながらもしっかりと自己主張する瞳と、高めの鼻と日本人の数倍も白い肌に、キラキラと光が当たる度に輝く金髪で。
そんな美人の隣を歩けるというのは、なんて役得なんだろう……と言われそうだが、それ関係無しに俺はクランナのことが気になるのであった。
「（真面目過ぎて自分のことは二の次で、負けず嫌いで、方向音痴で。全てを兼ね備えそうな彼女なのに……な）」

ユキは半端じゃない辛いもの好き、姫城さんは周囲のことを省みないトンデモ発言をしたりするし、少し天然気味でもある。

「（俺の周りにいる女の子って、皆魅力的なんだよな……）」

完璧すぎない、僅かだけども抜けているところがあるのも魅力の一つなんだと思う。

友人であったり、幼馴染であったり、仕事仲間でなかったら俺なんかと話すこともなかっただろうけどな。

「（そういや）」

アイツも魅力的だったな……本当に小さい頃からミユと姉貴と四人一緒にいて、姉貴が学校関係に中学校の頃から入り始めたころは、帰宅部の俺・ミユ・アイツは三人いつも一緒だった。

澄ました顔をして、クラスの中じゃ地味なのに俺に向かっては毒舌ばかり。それでも優しいところも可愛いところもあって……それに俺やミユとの掛け合いが面白かった。

「（そんなアイツが俺は好きだったんだよな……）」

まあ、それも今や過去の話で。三人がもう一緒にいることはもう出来ないことなのも分かってる。

いつまでも引きずっていても仕方ないのだろうけど、やっぱり今とも違ったあの楽しい日々を思い出してしまうわけで――

そう、その三人でお祭りに来たことも記憶に残っている。

「えーと、下之君？　どうかしましたか？」

「いや、ちょっと思い出したことがあってさ……まあ、なんでもないってことで」

その後はこの町のことについて話したり、マサヒロの春の肝試しの愚行や、俺の棺桶登校など話題にあげた。

「な、なぜ……棺桶なのか……く、ふふふふふふふ」

ツボに入られた。

その直後に唐突な人の波が俺とクランナを襲った。

「し、下之君！」

「クランナ、ここだ」

波にのまれ始めていたクランナの腕を掴んで引き寄せた、あぶねえ……クランナと俺までも分かれてしまうところだった。

「あ、あの下之君……」

「わ、悪い」

クランナの腕をずっと掴んでいた。硬直するクランナ手を俺は慌てて離して、

「いやスマン、なんというかスマン」

「いえ……あの、助けていただきありがとうございます」

「これ以上分かれたら大変だからな、まあ力強かったかもしれん」

「あまり男性に触れられることはなかったもので、少し驚いてしまっただけです。心配かけてごめんなさいね？」

まあ、そういうのは縁が遠そうだよな……偏見だけども。

それからは普通に歩いて行き、するとクランナがある出店を見て呟いた。

「そういえば……たこ焼きというものはなんなのでしょう？　とても食欲をそそられるソースの香りが漂うのですけれど」
「あー、食べてみれば分かるぞ？　なんなら俺が買って味見してみるか？」
「よろしいのですか？　では、お言葉に甘えて――」

「美味しいものなのですね！　タコを小麦粉で包んで焼くとは……その発想はなかなか出ませんねっ」

俺の買ったたこやきをつまんだところ、彼女には大好評だった。

「濃い味付けですのに、たこの風味が生きて――」

クランナは「に、二箱」と流石に血迷ったことを言い始めたので俺のを半分ずつということに。

女の子を連れているのに、たった少しの奢りも出来ないのではマズイしな「お祭り巡りに付き合ってくれたお礼ってことで」と言っておく。

後にも出店に見惚れるようにして回って行くのだけども、クランナは財布のヒモを緩めることはほぼなかった。

まあ、緩めたのがかき氷「これだけは一度！」と言ってまさかの抹茶あんみつという渋い組み合わせを注文し「おいしいです……」と透明のスプーンで口に運んで、それはもう蕩けるような顔で呟いたのだった。

少し歩き、商店街の途中から伸びる路地を進むと小さな広間へと辿りつく。

ちょうど座れる場所があったのでクランナと二人座ることにする。

「お祭りとは賑やかで楽しいものですね」

「だろ？　と、言っても藍浜町は賑やかすぎるかもしれないけどな」

と俺は苦笑する。

「今日はありがとうございました、楽しかったです」

「な、クランナ」

「なんでしょう？」

「締めに入ってるとこ悪いんだけども……生徒会のこと忘れてたわ」

「……！」

クランナも今お気づきになったようで。

「ど、どうしましょう！？」

「……あ、電話するか」

「……あ、そうでしたわね」

俺はすぐ見つかるだろうとタカをくくっていたら、見つからず普通にお祭りをエンジョイしていた。

そして携帯には、

「さんじゅうななっ……！？」

三十七件の着信、それも全部姉貴。

「クランナ、ちょっと副会長に電話するから――もしもし？　俺だよ」

その後、俺達が場所を動かずに広間で待っていると涙目の姉貴が駆けてきて俺に抱きついた。
それはもう運命の再会みたいな空気を醸し出して「ユウくんがいなくなって……私……私」と涙目で言うので、とりあえず頭を撫でたところ落ちついた。
ちなみに俺とクランナで行動していたのは「近くにいたから」と説明するも、ユイとチサさんの表情はどこかニヤニヤと含んだ笑みを浮かべていて……嫌な予感しかしなかった。

第３８９．５話　√３－４１．５　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き

番外編と言うか、ユキ回です。だけども展開は……アレです、ニクールギャルゲアニメの中盤回みたいな、うん。

第３８９．５話　√３－４１．５　気になる彼女は○○○で×××で。

八月五日

家でまたまた溜まっていたアニメを視聴していると、携帯着信がなった。
携帯表面に付いた小ディスプレイには「メールを受信　ユキ」との表示。

「ユキからか」

そういや、ユキと夏祭りに行けなかったことの埋め合わせだっけ。
メールを開くと「明日はどう？」と書かれていた、明日は特に何もないので大丈夫と返信すると「明日を楽しみにしてるねっ」と帰ってきた。

あれ、これ雰囲気的にパフェだけじゃすまなくね？
でもユキと疑似デートが出来るのなら、これぐらい屁でもない…
…財布を覗いて唾を呑んだ。

まあするとだ「メールを受信　ユイ」と表示されやがった。
同じ家の中なのにメールとか家庭崩壊の序曲のような気がしないでもない。

『修羅場の予感！』

「なんでだよ！」

携帯を投げ捨てる寸前で思いとどまった。いや、なんだその意味

深な発言は！

「……てか修羅場になるヤツっていないだろう」

ただでさえ俺はモテないんだから。

おめえ女はべらしてるじゃねえか、というツッコミがきそうだが。

残念だったな、全部お友達止まりなのだよ！　はっはっは！

……ユキもそんな意図はないだろうし、うん悲しいね。

「でも明日が楽しみだー」

八月六日

何故に勝負モード？

俺が待ち合わせ場所に、学校へ登校する際の合流場所としていた。

家から少し歩いて、ひざ下までの長さのジーンズに、茶色に良く分からない柄のTシャツ、灰色の薄手のジャケットで出かけたところだ。

なんか可愛い人が待っているんですが。

すっごい見覚えのある子なんですが。

てかユキなんですが！

え、なんでそんな勝負服みたいなというかそうとしか見えない、

てか待って腕時計をチラチラみながら落ちつかないユキかわええな、

惚れてまうやろぉー！

「あ、ユウジっ」
「お、おう」

薄めのピンク色のカーディガンに、胸辺りが覗く黒色のキャミソールに、灰色のフレアスカート……みたいな感じだろうか、ふぁっしょんは良く分からないので渇愛。
まさに今からデートですよ的な空気を漂わしているばっかりに俺も困惑。

「あのねユウジ……ど、どうかな変じゃないかな？」

そうくるり回るのだが、その度にいつもとは違ってポニーテールはポニーテールでも大きいレモン色のリボンで結われている髪が揺れて可愛い。

「い、いいんじゃないかな？」
「そう、よかったっ」

指の先を合わせて喜ぶのだが、その仕草一つが色々とドキリとさせてくる。

「てかユキどうしたんだ？　なんか気合い入ってないか」
「ユウジは分からない？」
「おう」
「じゃあ秘密」

口元を制すように人差し指を唇に置いた。

「じゃあ、パフェよろしくー！」

「あ、ああ」

なんか今日のユキはいつもと違うぞ！？

喫茶店へと着いた、古びた佇まいで以前クランナの緊急退避を行わせてもらった喫茶店だ。

メニュー見れば、そこには「ジャンボパフェ」なるものがあり、野口秀雄一歩手前なお値段だった。

まあ量的には妥当なのだけども、やっぱ注文するのは――

「じゃあ、ユウジこれでっ」

「……はいはい、すみませーん」

店員さんを呼んでジャンボパフェと俺用にアイスコーヒーを注文した。

「ごちそうになります」

「どうもどうも」

パフェが来るなり、目を輝かせてパフェを食べ始めるユキ（光景的には取り掛かる）はやっぱり女の子は甘いもの好きなんだなあと嬉しそうに食べる様を眺めて思うのだった。

「せっかく商店街にきたんだから、お買い物に付き合ってもらうね？」

とユキに言われた。もちろん断る理由は一つもない。
商店街をユキの歩幅に合わせてゆっくりと歩きながら、

「ユウジ、今日は無理言ってごめんね」
「いやいや、暇だったし構わないぞ」
「でもユウジだっていけないんだからね？」
「本当に夏祭り一緒に行けないのは悪かった、でも本当に先約があったからさ」
「そうだけど……」

仕事場の関係も悪くしてはいけないしな、クランナとの二人での行動後も生徒会で回ったし。

「でも私が言いたいにはそこじゃなくてね、生徒会にうつつを抜かして幼馴染を放っておくなんてひどいなーって」

そこかぁー、ってそれじゃ積み重ねまくってるじゃないか！
生徒会に入ったせいでユキとの下校も出来なくなったしなあ。

「分かってるよ、ミナさんの為だって。ミナさんって生徒会でも家でも頑張ってるから、ユウジは手伝わなきゃって思ったんでしょ？」
「なんという図星」
「だよねっ、だからワガママなことも分かってるけど……ユウジがいつの間にか離れていっちゃいそうな気がして、嫌なんだ」

そうしてユキは俺の服の後ろ裾を掴んで、

「どこにも行かない……よね？」

振り向くとそこには不安そうなユキがいて、俺はこんなにも彼女を傷つけてしまったいたのかと自覚する。
姉貴の負担を減らしたい、その一方ではユキが不安を募らせて…
…ダメだな、俺。

「ごめんな、ユキ。気付いてやれなくて……俺はどこにも行かないからさ――」

繋ぎとめる言葉としては、俺とユキの可能性を否定してしまう。
俺なんかよりもきっと魅力的な男は沢山にいるのだ。それでも「ずっと幼馴染」その言葉出てこない。
さきほどで言葉は留まってしまう。
もしかすると、本当に勘違いかもしれない。でも時々思ってしまうのだ――ユキも姫城さんも俺に好意があるんじゃないかって。
本当に自信過剰甚だしい、でももしそうならば彼女達はどんな気持ちで俺に接しているのだろうか？　それで今の言葉の続きを僅かでも期待したのではないか？

……出来ない。俺にはさ、そんな踏み出す勇気はもうないんだ。

「うん……わかった。ユウジが離れないなら、良かった」

そうして彼女は笑顔で微笑んだ。
変わりない笑顔で、いつもの太陽のような明るい笑顔だった。
でもそんな笑顔が、とても傷ついたものに一瞬でも俺には見えてしまった。

その後、スーパーに入り何故かユキは流れるように調味料のコー

ナーへと向かっていった。
……辛いもの好きはもはやガチだなあと思いつつも「ハバネロ七味とハバネロ一味、どっちがいいかな？」と真剣な表情で聞いてきた、分からないって。

本屋に寄ったり、雑貨屋に寄ったりしているといつの間にか昼過ぎから集まったというの時計は六時を指していた。

「そんでさー、ありゃないね」
「だねー、あれはないと思うよ」

二人話しながら歩いていると、もとの待ち合わせ場所へと辿りついていた。

「着いちゃったね」
「だな」
「短かったね」
「時間が短く感じたな」

本当に、ユキと話していると時間を忘れる。気が張らないし、話題も通じるし、変わる変わる表情は見ていて飽きないし。

「今日は……付き合ってくれてありがとね」
「ああ、てかパフェだけで良かったのか？」
「うんっ、今日はユウジと一緒にいるのが目的だったし！」
「それって……」
「秘密だよ」

また彼女は唇に指をおく。

「鈍感気味なユウジには一生気付いて貰えないかも」
「いやいや俺鋭過ぎるから、紙に穴開くほどだから」
「じゃあ、いつか私の心にも穴を開けて覗いてくれるといいな」
そう言って彼女はいつもの笑顔を向ける。

「でも、いつまでもそうだったら……私から行くからね？」
そう言って彼女は……いつもとは違った、なんだこれ。小悪魔的な笑みというのか？
あるはずのない、見たことのない犬歯が覗いた気がした。
「お、おう……なんのことか分からんが、お手柔らかに」
「とぼけちゃって……あはは！　じゃあ、またねっ」
そう言って彼女は駆けて行った……ユキから来るのか？
いつも明るいユキの中に、ちょっとした黒さを見つけた日だった。

第３９０話　√３－４２　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

うおお、凹むわあ

第３９０話　√３－４２　気になる彼女は○○○で×××で。

八月六日

それはどこにでもあるような古びた二階建てのアパート。
そこに似つかわしくない一人の女性が階段を上がると「２０３」と書かれたプレートのある扉の鍵を開けました。
ちなみにその表札には「オルリス　クランナ」長く美麗な金髪の髪が部屋の中へと吸い込まれていきました。

「ただいま帰りました」

私はそうして自分の家へと戻ってきました。と、いっても――

「（迎える人はいないのですが）」

い、いえ！　夏のこの頃に私がホームシックになるわけがありませんわ！
ただ、なんと言うのでしょうか……話し相手が欲しいのです。

「例えば、気兼ねなく……時間の合い間合い間に話せるような」

そこでふと浮かびあがるのは――彼、下之ユウジ。

「な、なぜなのですかっ」

私は確かに最初の最低の最低の印象からは、彼の印象はグンと上がりましたわ。

確かに、何度も助けて頂いたのは確かですし。私のことを気遣ってくれているのも分かるのです。

流石にあの呼び方ではいけないと思って変えましたが……ちょっと呼び捨てとは違いますし、だから一応「君」付けをすることにしたのです。

それでも、なぜクラスで中の良い岡さん達ではなく……なぜ、なぜ。

「（確かに下之ユウジとの会話は……つまらないものではないですけれど）」

以前話して貰った棺桶登校もありましたね……ふふ、今でも思い出したら可笑しく……っ！

「（生徒会のおかげで七月中はいつも顔を合わせていましたし）」

会長の横暴みたいなものですが、下之ユウジと二人ペアになった時は……それはもう絶望しましたわ。

生徒を統べる会に、なぜあのような彼が。私にセクハラを働く様なあの男がいて、ましてや私と組ませられるなんて。

それでも、下之ユウジが副会長の弟であることを知ってから。それから彼がどんな人間か分かってきました。

――家族である姉を想いやり、そして生徒会役員にもほどほどに気が回せる。彼が言うようには不真面目ですが、ふざけているわけでも手を抜いているわけでもなくて……本当に口だけ、そう言っているだけ。

謙遜なのか、それとも自虐的になっているだけなのか分かりません……ですがそんな下之ユウジの気回しに何度も助けられていることには違いないのです。

今日の夏祭りも二人歩きましたが……楽しかったです。ええ、楽

しかったですわ！
　少し驚いてしまいましたが、祭の際に腕を取ったのも、私がはぐれないようにする為だったのでしょう。
　思い出す度、考える度に彼のことが分かってゆきますわね。
「……？」
　でも会話の中には時折私の知らない女性の名前も出てきて、実は下之ユウジとは女性に好かれやすかったりするのでしょうか？
　副会長は勿論見ていてわかるほどに好かれていますし、妹である桐ちゃんでしたね。ホニさんも下之ユウジに懐いている様子を受けました。
「（それに巳原さんとも仲がよいですし、噂にも聞く篠文さんや姫城さんとも仲が良いと聞きますし）」
　……多くありませんか？
　生徒会役員にも特に下之ユウジを嫌っている者など見当たりませんし。
「……」
　なんなんでしょうか、このモヤモヤは。
　私が大切にしているものを誰かに取られてしまったかのような……？
　いえ、断じて下之ユウジを大切だと思ってはいませんし、言い話し相手であると思っているだけです
　それだけですわ、絶対に！

「次にお会い出来るのは……始業日の翌日ですか」

長いです……って決して待ち望んでいるわけでは――

＊　＋

夏終了のお知らせ。

まあ、ということで高校一年の夏が終わった。

夏祭りは生徒会やユキ達と含めて二回行ったし、海にも行き、肝試しも結局もう一回やった。

去年の一日中部屋に籠ってアニメ見たりギャルゲやったりして終わった夏と比べれば、圧倒的に充実した夏だったと言える。

夏が終われば生徒会役員はある出来事に奔走することになる。

そう、それは文化祭。十一月の一日前後に催されることでまだ二ヶ月もあると思って油断しているアナタ、甘い！　甘いよっ、例えるならばＵ○Ｃオリジナルコーヒーぐらいに甘いよ！

学校行事に適した出し物の判断も生徒会。出店する飲食関係の食品衛生上の審査を行うのも生徒会。美術部に依頼したアーチの補佐や完成後の運搬も生徒会。

そう、生徒会はとにかくこの時期は今までになく大忙しといっても過言ではない。

第３９１話　√３－４３　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

ここで井口召喚っ！

第３９１話　√３－４３　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

九月七日

二学期中間試験が一か月に控える中での文化祭準備、実際その多忙ぶりに頭から抜け落ちて、直前になって焦ることになるのだが……うん。

「クランナ、書類出来た？」
「はい、あと少しで……大丈夫です！」
「よし、職員室ゴー！」

二人行動が様になるというのも、当事者が言うのも難なのだが。初期に比べれば息が合っていると思う……まあ俺視点での話だけども。

俺とクランナは小走りに廊下を駆けながら

「下之君、これを学年主任にでしたよね？」
「だな、で次は生徒会室に戻って――」
「文化祭委員会の方に資料ですね」
「おう、急ぐぞ」

まあ、そんな感じで結構に関係は良くなっているんじゃないかと考察。

俺のことも一応名字かフルネームで呼んでくれるようになったしな、これは凄い進歩だと言える。

「やべ、資料止まってねえのあんのかよ――」
「ホチキスどうぞ」
「お、スマンスマン……あ、クランナ直ぐ先の床汚れてるから注意な」
「わかりました、ありがとうございます」
阿吽の呼吸とまでは行かないが、息は合っていると思う。
うん、結構嬉しいな。

「クランナは先に戻っててくれ、委員の方ちょっと手伝ってって会長に言われてるからさ」
「先に戻らせていただきますね」
とクランナを先に生徒会室へと戻すと、俺には文化祭委員の方で仕事があった。
俺が文化祭委員ではないものの、文化祭委員の補助も生徒会は行うのだ。

＊　＊

「（最近はあまり事務的なこと以外話せませんけど、これでも悪くないですわ）」
ただ一緒にいるだけでも、気分が良いというのでしょうか？

相変わらず色々と気付いてくれますし……

「（文化祭時期なので一緒に行動することも増えましたし）」

悪く……ないですね。

「ふふっ」

ほんのり幸せな気分で私は生徒会室に戻りました

＊　＊

「失礼します。生徒会でーす」

そうドアをノックして開けられたのは。放課後に主に活動をする文化祭実行委員本部（使用していない空き教室を利用）で、俺は資料の受け取りへと来ていた。

「はい……ちょっと待って……ください……ね」

「おー、井口だけか」

「！」

彼女はなにか少し驚いたような……表情が僅かだけ驚愕に変わったような気がするだけだか、おそらく驚いたのだろう。

「あ、こんにちは……下之君」

「ちは、井口」

名字だけしかしらないが――井口という、どこか伏見がちな彼女は、長い黒髪で表情を隠しながらあいさつ。

委員の際には何故か行動を共にすることが多い……どちらか言えばパシリ要員の俺と共にするというのは井口もパシられ要員なのだと邪推してしまうことがある。

大人しく、少しただたどしい喋り方で話す彼女だが、彼女は良い子であることはよく分かる。移動中にクラスの話題などで彼女とは話すことがたまにある。

それで、今は二人で書類を運んでいる最中。

井口が俺がどうして生徒会に入ったのかを、聞いてきたので経緯を少し話して。

「ほら、姉貴が――いや、副会長が俺の姉だからさ」

「……あっ、下之生徒会副会長。え、下之君って……えっ」

「ああ、俺の姉貴。それで拉致られた」

「ら、らららら拉致!?」

最初こそ事務的なことだけで、いつも俯きがちに前髪で表情を隠しながら喋っていたのだが、こんなことも最近は話すようになったのだった。

「そういや井口はどうして実行委員になったんだ?」

「私……いつの間にかクラスで決められてた」

「ああ、そうなのか……」

なんか、聞いちゃいけなかったパターン?　気になっていたとはいえ、少し考えるべきだった。

しかし彼女の返答は、

「でも……少し楽しいから……結果的にはいいの」

頬をほんのりと赤くして、ほんの少し嬉しそうなニュアンスで。

更に井口はこちらをチラチラと見ているように感じた。

「……そっか、そりゃ良かったな」

俺も笑みで返すと、少し彼女の頬の赤みが増した気がした。

……なんというか、井口は素朴だけど可愛らしいな。

なんて書類を抱えながら話す俺たちなのだった。

第３９２話　√３－４４　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

巷で空気のタイトルセンスのない小説！　絶賛連載中！

第３９２話　√３－４４　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

「え、俺に彼女がいるかって？」

俺が井口と荷物運びをしているとそんな質問が、相変わらずなたどたどしい声で飛んできた。

「なんでまた？」

「えっと……ね。下之君、女子に人気ありそうだから」

「え、なんで？　あー、まあ親じゃなくて姉の七光みたいな感じか」

「そうじゃなくて……下之君、かっこいいから」

「ありがとな、でもカッコイイ奴ならこの学年でも五万と……いやそれじゃキャパオーバーだな、三十人ぐらいいるんじゃないか？」

「そうかな……私は……し、下之君が一番だよ」

「お、おう。そうなのか……？」

井口はそんな事を隣で見れば丸分かりに頬を染めて言うのだった。世辞でも言ってくれるのは嬉しいけども、少しむず痒いねえ。

「それで……答え」

「ああ、俺に彼女ね。いないいない、フリーすぎて寂しさと今年の冬も越すこと確実だろうな……はぁ」

「……そうなんだ」

彼女はそれを聞くとほんのり、小さな笑みを浮かべたように俺は見えた。

「じゃあ……好きな人はいるの……かな？」

「好きな人……そう言える人はいないな。ただ」

「ただ……？」
「気になってるヤツはいるな」

真面目すぎて自分のことを二の次で、頑固で方向オンチで……遠くはるばるやってきて、一人奮闘する彼女。
なんというか、つい心配になってしまうというか。娘を心配する親のような……まあ、俺が深く考え過ぎなんだろうけども。
それでも気になる彼女には違いない。
井口はそれを聞くと押し黙り、三十秒ほど経ってから口を開いた。

「……ねえ、下之君」
「なんだ？」
「中学一年の夏休み……の少し前。覚えてる……かな？」
「中一の夏……」

中一というと俺もミユもアイツもいた頃か。あの頃は家に籠りたい俺をミユとアイツに引っ張り出されて、商店街巡りはまだいいとしても、遠出して散在することがいくつか有った。

「覚えてるよ……下之君のこと」
「俺……？　あれ、井口と俺って同じクラスの時あったっけ」
「……うん」

今度はあからさまじゃなくとも、僅かに機嫌を悪くしたような。

「本当に悪い……なんというかさ、中学の時のこと殆ど覚えてないんだよ」
「何か……あったの？」
「ああ、ちょっとショックな出来事がさ。中二の終わりにあったせ

いかもな……」

何故か学校での思い出はおぼろげにしか覚えていない、隣町に出かけたこととかは結構に覚えているのに。

学校という場所が、悪い思い出の舞台となってしまったからかもしれない。

「そういえば……下之君には妹さん……に、上野さんと親しかったよね」

「ああ、ミユにサクラだな……っと、もう着いたか」

「うん、お手伝いありがとね……下之君」

「あいよ、いつでも来るぞー」

目的地である文化祭委員委員の集う部屋まで到着し、書類の束を置いて井口にそう言うと俺はその場を後にした。

「……懐かしい名前だ、まさか井口が知ってるとは」

上野サクラ。

彼女は俺にとっての幼稚園からの幼馴染であり、毒舌でいつも近くにいると手厳しいお言葉を俺に浴びせられた。

それでも彼女には魅力があって、容姿は地味だけども確かな……優しさもあって。

そして俺の初恋の相手であり、俺が玉砕された告白相手でもある。

その彼女はもうこの町にはいない。

関係の修復が出来ないまま、彼女は俺とミユの前を去ったのだ。

＊　＊

下之ユウジが知らない女と親しげですの。

言い方がいけません、女だなんて……女性の方です。女性です、はい。

いえ、ちょっと最近気になることがあるのですわ。

生徒会のおかげで下之ユウジと一緒にいる機会は一気に増えました。

その一方で……文化祭実行委員の女生徒の方と、どこか親しげに思えててしまうのですわ。

実際何度も見てしまうのです、あの女生徒と下之ユウジが荷物運びをしながら会話している光景を。

一応顔は知っています篠文さんや姫城さんでもなく別の方なのです。

「（私が以前挙げた他にも女性の方がいますの……！）」

生徒会委員という役柄を共有している以上、生徒会以外の女生徒との交流も少ないと考え。

立ち位置は安泰かと――

「そうじゃないですわあ！」

な、なぜ私はあの男の為に自分のポジションを意識しなければなりませんの！？

というか私はあの男といても、悪い気分にならないだけです。それ以上でもそれ以下でもないのですわ！

いいじゃありませんか、どんな女生徒あの男が仲良くしようが私にはなんら関係のないこと。

もはやこの思考した時間こそ無駄に違いないのです。私は下之ユウジとはただの……仕事仲間なのですから。

「（それでもなぜ、こんなに腑に落ちないというのでしょうか……決してなんでもないことだというのですのに）」

この、モヤモヤとした心地の悪い感じはなんなのでしょうか。

「あーもう！　全部下之ユウジ君のせいですわっ」

もう知りません！　あの男のことも私の今の気持ちも！

第３９３話　√３－４５　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

たまには修羅場もいいよね！

第３９３話　√３－４５　気になる彼女は○○○で×××で。

「じゃあ、生徒会行くからさ」
「うん、生徒に貢献してこいっ」
「行ってらっしゃいませユウジ様、そしてまた明日ユウジ様」
「お、おう。また明日なー」

そうしてユイと二人教室を出た。
固まった体をほぐすように、肩に鞄をかけたまま両腕をぐっと上へ突き出しながら嘆息するようにユイは呟いた。

「ぬ～、最近忙しいぬ」
「まー、この時期は忙しいからな」
「確かに。でもユキとかと帰れなくて残念だぬう」
「ユキには同意」

ここでも平然とマサヒロがディスられるのはお約束ということで。

「そういやおまいさん、なかなかスミにおけないねえ」
「……いきなりなんだよ」

おそらく眼鏡を外したらニヤケ面が浮かんでいるであろうユイに少しイラ指数を上げつつも、聞いた。

「ホラホラ、クランナさんとも最近仲が良いようで」
「あー、まあな。最初の頃よか良くなった」

呼ばれ方進化は、嬉しいね。

「どうせユウジはフラグ建てを熱心に行ったのでしょう、うんうん」
「建ててない建ててない。建ったとしても……ウザがられフラグ？　お節介が過ぎることは自覚してるし」
「クランナさんの場合、どうかぬぇ～？　自分の住んでいる国を離れて留学してて、知り合いがいない中での過ぎた節介は結構に嬉しいものじゃないかなと、アタシは思うぜよ」
「そんなもんか？」
「で、その節介が急に消えると受けていた側は色々と考えちゃうもんだよ。飽きられたんじゃないかってねぇ」
「飽きるて……お節介を玩具みたいに言うなよ。ただ、まあ夏みたくぶっ倒れることはないだろうとの、推測だ」
「ふ、ほぉーん。体調管理までするとは、キテますなあ」

なんか今日のユイはいつにも増してイライラする物言いだな、なんか思うところでもあんのか？

「気にしちゃいけないのか？」
「べっつにいいんだけどもー、ユウジは下心の一つもねーのかねと」

ここで少し空気が変わった、ユイは何か探りを入れるような目つき（をしていると思う）で俺を（グルグル眼鏡で）見た。

「下心ねえ……ないこともない」
「ユウジはそういうのとは無縁と思ったけど、意外だ」

口調にふざけが入って無い辺り、ユイは俺の返答に結構驚いているのかもしれない。

「いや、友人にはなりたいなと」
「なるなる、ほほ～あわよくばと……って、え？　友人？　何

言ってんのアンタ」
「友達作っちゃってイェイ☆」
「いやいや濁すなユウジ、下心て……ソレが？」
「あわよくばクランナと友人になりたい！」
「……なんというか、ユウジって時々物凄く残念だぬう」

心の奥底からガッカリしましたよ、あたしゃ。というような雰囲気のユイ。

「おおう、ユイにガチで呆れられるとクルものがあるな……」

微妙にそんな反応に俺はショックを受けてしまうのだった。
え、何。俺は確かに残念なことは知ってたけど、それ以上の残念なのか？
まじか。まじかぁ……

廊下を二人歩くのですが、微妙に猫背になり両方に落胆が見える微妙なオーラを振り撒く姿はシュールですね。

「おし、今日も生徒会頑張るかなっと」
「ヒャッハー！　マイワークスタイムイェーイ」

景気づけの如くそう二人呟いて、俺とユイは生徒会室の扉を開いた。

「会長、このデータを文化祭実行委員にでいいんですよね？」
「だよー」

何故か会長が「あれ、最近の私の出番少ないよね？　それで台詞これだけー！」とか言っていたが、よくわからないのでスルー

「あ、ユウ。アンケートも返してもらってきて」
「あ、はい了解しました」

アンケートか……一学年分だから結構量あるな、今回ばかりは一人で頼まれた仕事だ。
ニ往復すればなんとかなるが、そうなると今やってる集計作業の再開に時間がかかるしなあ。
まあ、二人いれば一気に出来るだろうけども……うん、ダメ元で頼んでみるか

「クランナ、あのさ――」
「手伝いますわ、行きましょ」
「おう、助かる」

クランナは自分の作業を切りあげて、席を立ってそう言うと先に生徒会室を出た。
俺は文化祭実行委員に渡すデータの入ったＳＤカードをケースにしまってポケットに突っ込む、とクランナの後を追った。
……と、言ってもすぐ歩いたところで待っててくれてるんだけどな。

「待たせた」
「文化祭実行委員からアンケート用紙を返却してもらえればいいんですよね？」
「ああ、量が多いから助かったわ」
「いえ、私たちタッグでしょう？　お互い様です」

どこか冷淡さも併せ持つ物言いは、彼女が仕事モードであるからだ。
事務的な事柄はこのように、スッパリと簡潔言いきるのが特徴だ。
で、
「……ところで下之君」
先程と比べれば感情が籠った物言いは、彼女が私的モードに入ったからで。
「なんだ？」
「……あのですね」
クランナはこのモードにはいると歯切れが悪い時がある。まあ、俺はこっちの方が温かみがあって好きだな。
でも今日のクランナは不安なことがあるような、そんな表情に思えた。
「私といるのは……退屈ですか」
「……どうしたんだ、いきなり。風邪とかひいてないか？」
「それが純粋な気遣いか、からかいなのかはさて置いて……どうでしょうか、私はあまり自分のことを話しませんし……いつも聞き手で」
「いやいや、そういうのは日本では聞き上手って言うんだぜ？　俺は結構楽しいぞ」
「そうですか……」
彼女はその答えを聞くと満足したかのように、いつも通りの自信あり気な表情に戻り。

「さ、行きますわよ！　下之君」
「どうでもいいけど、その口調で君付けって――」
「悪いですの？　それでは、レッツビギンでございます！」
「古い古い、そしてアンタ本当に外国人か？」
「生粋の西洋辺りの人ですわっ」
「すげえ、アバウト……」

たまにこんなコントっぽい会話を繰り広げるのは、なかなかに楽しい。

「あ、シモノパシってきて」
「うわ、凄い使いのさせられかた……いいですけど、体育祭委員宛てですか？」
「うんうん、この資料渡してきた上に、委員から印刷室開けてほしいからって」
「本当に使いパシリっすね、じゃあ行ってきます」

文化祭委員もクラスから二人が選出されるとはいえ、一学年分よりは量が少なくて済む。
ちなみにこの資料はさっき印刷室で擦ってきたばかりで、生温かいそれと印刷室の鍵を持ちながら生徒会室を出た。

「ごめんね……下之君」
「いやいや、井口が気にすんなって」

俺は印刷室まで井口と歩いていた。さっきのデータを印刷して、とのことらしい。
重くなること確実なので俺も付いてきたのだった。

「でも、下之君も……忙しいんじゃ」
「めっちゃ暇だから、暇のあまり一料理完成させられるレベルだから」
「ふふ……ありがとう」

井口の柔らかな笑みって、やっぱり可愛いんだよな……感情は決して少ないわけでもないんだけど、自分に自信がないのか怯えているような不安な表情をいつもしている気がする。

「あの……ね、下之君」
「ん、なんだ？」
「前に……聞いたと思うんだけどね」
「おう」
「下之君に……彼女がいないって」
「おおう、痛いところついてくるぜぇ……フリーのフリー。彼女が欲しいです」

話題のタネに井口が取りあげて、俺は冗談めかせて答え言っただけだった。
そのつもりだった。

「私じゃ……ダメか……な」

「へ？」

俺がおそらくポカンとした表情のまま立ち止まると、井口は俺の前の前に先回りして。
そして、いつものたどたどしさが皆無になって。
緊張で顔を真っ赤にして、

「下之ユウジ君っ、私はあなたのことが好きです！　つ、付き合ってください」

俺は井口に告白された。
初めて受けた告白だった。おそらく今後もないであろう、女子からの告白。
俺はあまりにも突然の出来事に、硬直していた。
答えを出さなきゃいけない、俺は。微塵でも振られる気持ちを理解している俺は、その答えを待たされることの辛さを理解する俺は――

「俺は――」

その時、たまたま職員室へと倉庫の鍵を借りようとしていて。
彼女はその告白の現場を見てしまった――

「……っ」

ユウジ側からは見えないように、告白の現場から十メートルほど離れた曲がり角から。
金髪と碧眼と、動揺の表情が覗いている。

第３９４－Ｂ話　√３－４６Ｂ　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

完結しました。Ｎｏ　３ａ

第３９４－Ｂ話　√３－４６Ｂ　気になる彼女は○○○で×××で。

俺の答えは――

「ああ」

「……え」

肯定。

俺は井口と付き合うことを決めた。

振られた記憶はあれど、実際二年も経てば吹っ切れてるし……俺のモテ期も今ぐらいしかないだろう。

青春の内に女の子とも付き合って……みたかったし。

「あー……なんというか、こちらこそよろしく？」

「え、本当に……え？　下之君が……！？」

「てか、ホントに俺でいいのか？　実際俺よりも――」

「ううん、下之君がいいの。私は中学校の頃のあの時から――ずっと見てたよ」

あの時、指す場面が分からない……本当に俺ってヤツは残念だな。

井口は覚えててくれるのに、この己の脳みそは。

「よ、よろしくお願いします……下之ユウジ君」

そうして俺は井口と付き合う事を決めた。

その後、何故かクランナが俺と距離を置き始めた（ように思える）のだけども、一週間もすればいつもの状態に戻った。
聞こうとしたところ「別になんでもないんです……本当に」そう日知するのだが、少し悲しげというか複雑な表情をしていたのが気になったが……本人から無理に聴きだすことも出来ないので、追求はしなかった。

＊　＊

十月十四日

俺と井口は付き合い始めたのだけども、クラスも違うのであまり放課後以外に会う事が難しかった。
だから昼食時だけは、数少ないチャンスでもある。

「悪い、今日も俺用事あるからさ」
「ユウジ、最近ずっとそうだよね？　生徒会の仕事なの？」

まあ、言ってないしなあ。ユキが訝しむように俺を見つめてくる。

「でもユイさんはいるのですよね……何か隠していることがあるのではないですか、ユウジ様？」
「う……」

そろそろ言うべきか……？
するとクラスの男子が、近づいてきて、

「おーい、下之。なんか井口って女の子が呼んでるぞ？」
「あ」

見れば教室の扉前に弁当の入った巾着袋を持って、緊張かなにかで頬を赤らめた井口が待っていた。

「いけね！　じゃ、後で」
「え、ユウジっ！　どういうこ――」

ユキと姫城さんが固まっているように思えたが、これ以上井口は待たせられない。

「スマン、待たせた」
「……別にいいよ」

じわりじわり伝わる不機嫌な感じ。おおう……なんか井口の機嫌を損ねてしまったらしい。

「遅れて本当に悪かっ――」
「ごめんね……下之君はやっぱり女の子に好かれる……だなあって」
「いやいやないって、俺なんかと付き合ってくれた井口ぐらいだ」
「俺なんか……じゃないよ。私が……はやく下之君と会いたいから、急かしちゃったみたいで……それなのに」
「俺も井口と会いたかったからいいんだよ。じゃあ昼食と行こうぜ」
「……うん」

そう前髪で瞳を少し隠しながらも、柔らかな笑みを俺へと向けてくれるのだった。

昼食出は、何故か俺に井口は料理を食べさせてくれる。
俺も弁当を作ってきたりするのだが「これだけは譲れない……よ」と言って聞かないのだった。
彼女もなかなかの頑固者なのかもしれない。

「どう……かな？」
「おいし――」
「下之君……嘘はダメだよ」
「え、っとじゃあ……塩分濃すぎ、ダシの味が強すぎて本来の旨味を消してる、生焼け」
「ううう……やっぱりだめだよね……一番出来がいいの選んだのに」
「でも愛情は満点だな、それで全て相殺！　いただきますっ」
「……も、もっと頑張るからね」

小さな拳を握って「頑張る」と意気込む彼女はどこか可愛らしかった。

「お、美味しいな」
「今日はチョコバナナ風……で」

井口は料理の出来はイマイチなのだけども、こういうお菓子作りはかなり上手い。

「なんか縁日を思い出す味だなあ」
「……よかった」

彼女は素朴で地味で、俯きがちだし自信はなさげだけども。
つっくりと包み込まれるような温かさを……彼女は持っているこ

とを俺は知っている。

十月三一日

「下之君……抜けれた？」
「ああ、なんとかな」

生徒会の仕事を終わらせて、合い間を縫って彼女と行動することになった。
そう、文化祭での……まあなんというか、デートだ。

「初デート……だよね」
「だな」

俺の甲斐性が無いばっかり……言い訳をさせてほしいが、うん。
生徒会が思いのほか忙しかったし、井口とは帰る方向も逆で……なんという神様の悪戯。

「デートじゃない文化祭の仕事とかでも……下之君といれる時間は幸せだったよ」

俺の心を読んだかのように、そう井口は言った。

「じゃあ、このデートはそれ以上に幸せにならないとな」

俺が彼女の顔を覗き込むようにすると、動揺で顔を真っ赤に茹であがらせながらも。

「……うんっ」

いつも通りの柔らかい笑みを俺へと向けてくれるのだった。

第３９４－Ｂ話　√３－４６Ｂ　気になる彼女は○○○で×××で。（後書き）

祝√３完結！　いやあ、長かったですねえ。それにしても井口は本当に可愛いなあ！　なんか、気を張らなくて済む物静かな女の子ッ！　って感じがしていいですねー　料理ベタなのにお菓子作りが得意なのも女の子して可愛いです。あああああああああかわええ！　もっと描写したいところが多々ありましたが、井口の可愛さが伝わればいいと思います！　それでは次は√ｂですね、乞うご期待！

第３９４－Ｃ話　√３－４６Ｃ　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

答えはひとつ、じゃない！

第３９４－Ｃ話　√３－４６Ｃ　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

俺の答えは――

「気持ちに答えられなくて……悪い」

謝罪、否定。

「そう……だよね」

「本当に、勇気出してくれたのにな……悪かった」

俺は臆病だ。かつてのことを未だに吹っ切れずにいる。いや、サクラのことは諦めているのだけども……やはり怖い。

たとえ今、井口と付き合っても……俺のダメさが露呈してフラれでもしたら。

恐らく立ち直れない、それに……俺は彼女のことを殆ど知らないのだ。

同じ学年で、文化祭実行委員で、伏せ見がちな大人しい女の子。

ただそれだけ。何も知らない俺が彼女とうまくやっていけるのだろうか……メッキが剥がれること確実だ。

それに俺がそれを了承する動機が「高校生の間に一回ぐらい女の子と付き合ってみたい」ということでもある。

それは井口にとって、俺の動機は不誠実すぎる。

……これまでの内に考えたことを、俺は声に出せば何か変わったのだろうか。

いや、余計に気を使わせるだけだ。

「ごめんね……下之君……いきなり、こんな……こんなことして」
「……」
もしも俺が、ここまで固く考えなかったらどうだろう？
フラれても大丈夫と胸を張って言えるとしたら。彼女のことをこれから知って行けばいいと考えられたら。
彼女の気持ちに答えられたのかもしれない。
「っ！」
「ごめ……んね……こんな顔みせちゃいけ……ないのに」
井口はその瞳からボロボロと雫を零した。
俺はそこから逃げ出したかった……でも、ここで彼女を涙を見ることの辛さから逃げてしまったら——最低最悪の人間になるんじゃないかと思った。
彼女が目元を赤くして「また……明日ね」と言うその時まで俺は、立ちつくしていた。
女の子を泣かした時点で、俺は最低な人間なのにな。どこまで卑怯なんだろうな？
＊　＊
それから数年が経った。
井口とはその後メール友になり、時折話すようになった……まあ顔を会わせて話す機会は殆どなかったけども。
思えばその後、クランナとも距離を置かれるも一週間もすると元

に戻った。
彼女はなんでもないの一点張りで真意は見えず、卒業を迎える数か月前頃には生徒会仕事も終わり。
クランナとはその後は話すことが殆どなく、国に帰る際に「それでは、お世話になりましたわ下之君」と俺へと言うと去っていった。
女の子と誰とも付き合えない青春を過ごし、社会人になった。
ユキや姫城さんが大学に進学する中、俺は就職した。とある会社の事務仕事だ。
色々あった中学校から高校までの様々な思い出は、今も書類を手に取りながら思いだすこともある。
「こういうのも生徒会でしたっけな」
「下之ー、次はこれも頼む」
「はいー」
もしも、あの時告白を受けていたらどうなっていただろう？
断ったとしても、他の女の子と付き合えた可能性はあったのだろうか？
不誠実だからと逃げた俺には、そんなこと知る由もない。
ただ考えがえてしまうのだ、もしもと――
ＢＡＤ　ＥＮＤ

＊　＊

これが「もしも」物語なんですよ。
ギャルゲーというのはもしもいえ「イフ」の連続だと思っています。
あの時、あの選択をしていれば。あの時、あの子にあの声をかけていたら。
もしもあの子と幼馴染だったら、クラスメイトだったら、知り合いだったら。
それだけでお話はそれはもう変わってしまうものだと思うんですよ。

あ、もちろんナレーター個人の意見ですから。それほど強く受け止める必要はないですよ？
でも思ってしまうんですよね。もしかするとこの世界は、この出来上がっている世界は「もしも」がかき集められた世界なんじゃないかって。

ユウジが気付かないだけ、鈍感なあの男が気付かないだけで向けられる好意は数多とありました。
それは本当にギャルゲーだけの効果なのですか？
「もしも」ギャルゲーを投影していたのが嘘だとしたら？
嘘じゃないとしても「キャラクター」は現実に存在して、少しそのキャラクターに足を一歩踏み出させたとしたら？

そうこのＢＡＤＥＮＤだってもしもの一つ。
ユウジが自分の気持ちに、ユイの言う言葉に、クランナの好意に。

気付いていなかったらの「もしも」

前回で終わると思いましたか？　それはあり得ませんよ？

それぞれの√は三の倍数なのに４６なんかで終わるはずがないじゃないですか。

さあ、次からが本当の……いえ全てが本当ですが、ある「もしも」の話です。

第３９４話　√３－４６　気になる彼女は〇〇〇で×××で。（前書き）

クランナ√に戻ります！　あのあとがきは嘘でした。一日更新二回目！

第３９４話　√３－４６　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

井口の”好き”という告白を聞いて、なぜかある人の事が思い浮かんだのだ。
傍からみていると危なっかしくて、ついついその人のことを考えてしまう。
俺にとっては気になる彼女は……紛れもなく。

俺の答えは――

「悪い」

そう俺は頭を下げた。途端に井口は真っ赤にしていた顔を白くしていき俯いて、今にも消えてしまいそうな声で、

「そ、そうだよね……」
「井口さ、前言ったと思うんだけど……気になるヤツがいるんだよ。真面目すぎて自分のことを二の次にして、方向オンチなのに頑固でさ」
「……そう、なんだ」
「だから、ごめん。井口の気持ちには答えられない」

キッパリと、全ての希望を断ち切るように。
すると、彼女は顔をあげて

「下之君は……その人が？」

「うーん、どうなんだろうな？　でも、俺はその人が気になって仕方ないんだ……わけわかんないよな」
「ううん……きっと下之君は……」
彼女は涙をボロボロと零しながら、そう呟いた。
その姿は俺からはとても痛々しくて、それがあまりにも見ていて辛いもので。

井口の言いたいことが少し分かった。
ああ、ユイの言うとおりだなあ。もしかすると友達以上を俺は望んでいたのかもしれないな。
俺の作った弁当をクランナに食べてほしい、俺と一緒に祭りを歩いて欲しい。
なんだよ。下心、しっかりあるじゃねえかよ、俺。

「これからも……俺の良い話相手になってくれるか？　って、ワガママだよな。でも井口と話すのが――」
「私こそ……これからも下之君と話したいから……よろしくね」

目元を腫らして、彼女は俺へ時折みせた笑みをみせるのだ。
この傷ついた彼女を見るだけでも心が痛いのに、井口はその何倍も心を痛めているのだろう。
だから、ここから逃げちゃいけない。進むなら……一歩踏み出せよ、俺。

＊　＊

「これは……これはなんなんですの」

本当に偶然でした。私は文化祭で使用する用具を確認する為に、倉庫に行くことになって。

倉庫の鍵を借りる為に職員室に向かっていたのです。

すると向かいから下之ユウジと文化祭実行委員の女生徒が一緒に歩いてくるのが見えました。

何故か私は曲がり角に入って、隠れてしまいました……なぜ、私はこのようなことを!?

「（ですが……またあの人ですわ）」

いつもいつもいつもいつも、あの文化祭実行居んの女生徒の方と歩いているのを見ているのですわ！

仲良く話もして！　羨ま……いえ、そんなことないですわ！

でも下之ユウジも親しげ過ぎませんか!?　……そう見えるだけなのでしょうか、ですが彼女は幸せそうですし。

すると、女生徒が何かを言うと突然に下之ユウジが立ち止まって。

女生徒が下之ユウジの前に回り込むようにして、

『下之ユウジ君っ、私はあなたのことが好きです！　つ、付き合ってください』

それは、結構大きめな声でした。

放課後で、それから数時間が経とうとしていた頃でなければ周囲に生徒が居て、振り返るであろう声で。

おとなしそうな彼女が絞り出すようにした、決死の声をあげて。

「（え、え……？）」

今のは告白……ですよね？　え、それは下之ユウジに向けた言葉ですわよね？

なぜですか？　確かに親しそうではありました。私は下之ユウジのことを知らないのは確かですが……なぜなのです。

一番驚いているのは、なぜ私はここまで動揺していますの？

下之ユウジがどんな方とお付き合いしようが関係ないはずで、むしろ少し前までは大嫌いだった男のことなどどうでもいいはずなのです。

それ、なのに。

そうしてこんなに胸が苦しいのでしょう。

縄で締めつけられるような、強く胸を圧迫されるような……痛み。

「わ、私は……なぜ……なぜ」

声が尻すぼみに、小さくなっていくのが分かりました。

どうしてしまったのでしょうか、私はどうかしてしまったのでしょうか。

私は立場上、ここで……殿方に恋することなど出来ませんのに。

あの男はどうしてここまで私の気持ちを揺るがすのですか。

第３９５話　√３－４７　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

一日更新三回目！

第３９５話　√３－４７　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

とある舞台。

明らかに日本のような和風建築とはかけ離れた、まるでおとぎ話のお城のような場所。

二人の男女が口論したあとのこと、一方の女性は自分の部屋に閉じこもることにしたようで天井は高く、豪華絢爛な装飾の施された室内は高貴さに満ちています。

そんな家具の一部には古風な日本家具が点在しており和洋折衷そのままな、どこか統一感のない空気を醸し出しています。

「あの時……素直になって、好きだと言っていれば変わっていたのでしょうね」

卓袱台の前にジャージ姿で正座をして、彼女は緑茶を啜りながら呟きます。

「少なくともあの頃の私は、あなたに惹かれていたのですから」

十年前の井口さんがあなたに告白したその時から、私は動揺してしまって。

その気持ちを抑えれば、これまでと同じように過ごせると分かってしまったから。

……思い出補正もあるのでしょうか、でもあの三年間は私にとっては忘れられない時間でした。

「もしも、あの時に戻れるのでしたら」

本当なら悔むことしか出来ないはずです、しかし私の手には――

タイムマシンというものがあります。
日本で開発された”セカンドデイズ”という意識をデータに変換して液晶画面の向こうに投影出来る、そんなゲームであり機構が数年前に完成して、それを使った”意識だけを飛ばすタイムマシン”が今年出来上がったのです。
こっそり付き人に頼んで購入して、いつか使えることを夢見ていました。

そしてお父様と喧嘩をした今日。お父様は一週間の間、遠出することを知りました。
基本的にここにいるお父様が一年でも数少なく、留守にする期間。それをずっと狙っていたのです。
自分の力で生命維持装置は手に入れて……一週間。私は体をこの時に残したまま、意識を十年前の自分へと飛ばすのです。

「待っていてください、ユー」

蕩けるような視線で、ある写真が映し出されるフォトフレームを眺めながらそう彼女は決意を固めました。

＊　＊

「……」

下之ユウジはどう答えたのでしょうか、
あの後、直ぐに回り道をして職員室に向かってしまったので……

告白してからが分からないのです。
　用具をシートと照らし合わせる作業を倉庫でしているのですが、あまり集中できていません。
　自ら生徒会役員を志望しておきながら……こんなんじゃダメですわ。

「気を引き締めて……今は下之ユウジのことは忘れるのですわ」
「え、俺忘却させられんの？」
「なっ！？」

　え、え、はい？　な、なぜ下之ユウジがここにいるのですか？
　先程告白を受けてどうなったかは分かりませんが……ここに来る訳が。

「おー、驚かせて悪い。ついでに会長に取ってきてほしいものがあるって言われてさ」
「そ、そうなのですか……ついで？」
「ああ、物品多いし倉庫は微妙に広いからな、クランナ手伝おうと思って」

　またこの男はこうして気付いてくれるのですか……今回ばかりは、

「余計なお世話です」
「いや、一人倉庫の湿気で倒れらたら」
「どれだけ病弱体質ですか！　そ、そこまで気遣われると気持ちが悪いですわ」
「……」

　……え、この男はどこまでも私のことを気に掛けそうですから。
って、これじゃ何故か私が自意識過剰みたいですわ！

体育祭や商店街案内はまだしも、弁当を作るなんて行きすぎなのですから！

ええ、それだけは断言できますわ。

でも……おかげで自炊するよう心がけましたし、あの男の料理が今では少し……恋しいですが。

いえいえいえいえ！　甘えていてはダメですわ。そうです、でももう一度頂いて研究をしてみたい気持ちはありますが――

それで、今もしかして下之ユウジはショックを受けているのでしょうか……少しきつく言い過ぎたかもしれません。

「いえ、あの……少し強く言いすぎでしたわ、でもあなたは――」

「自覚してるよ、ここまでやられちゃ気色悪い、気持ち悪いぐらいだろ」

「だから、その……」

この男は思いこみも激しいですから……以前、お弁当のことで決めつけてしまって。

そこで自分が損してしまうことも知らずに、残念な部分ですわね。

「それでも俺は……クランナのことが気になっちゃうんだよ」

「……はい？」

下之ユウジは私のことが気になる？　確かにここまで気遣いしてくれるのは立場上限度のある付き人以上とも言えます。

でも、その言い方では、その……？

「クランナに弁当食べてほしかったし、クランナが倒れるのはみたくないし……クランナと回った夏祭りも楽しかった」

「っ」

な、なんですの？
私はどうすればいいんですの……確かに、嬉しいことではあるのです。そう言ってもらえて、嫌な気分には絶対にならないのです。
以前にされたことのある口説きで聞いたことがありますわ……でも私はどう、答えれば。
……こんな口説きのようなマネをしておきながら、あの女生徒はどうなりましたの？　そう思うと……何故か怒りが。

「下之君は……あの方とはどうなったんですの」
「あの方？」
「申し訳ありません、覗く気持ちは無かったのですが……見てしまったのです、あなたが文化祭実行委員の女生徒に」
「あー……井口か」

井口……さんと言う方なのですか。

「……断ってきた」

な、な……なななななな！

「なんてことをするのです！　少なくとも私が見る限りでは……あなたにお似合いですのに」
「いやさ、なんというかダメ気がしたんだよ。俺の意識が向いている相手はちゃんといるのにさ、付き合うなんて」
「意識の向いている……相手？」
「まーな、そいつ方向オンチで真面目すぎて頑固者だ」

真面目と頑固者は分かりますが……方向オンチ？
少なくとも、その方向オンチであることを知れるほどに下之ユウジにとって親しい相手ということですか。

「そんな方がおりますのね、それほどに堅苦しい方にあなたの意識は向いているのですか？」
「ああ、気になってる。いつ無理してぶっ倒れないかなーと」
「危なっかしいですわね」
「遠く離れたところに来たってのに、溶け込もうとしている内に自分がニの次になってるし」
「まったく下之ユウジをそこまで心配させる相手などいるの……ん？」

方向オンチで真面目で頑固者で、自分のことを二の次……？

「さぁーて、ちゃっちゃと確認作業終わらせるぞ」
「え、え……もしかして？　私の知っている方ですか？」
「ああ、よく知ってるだろうなあ。お、俺はそっち見るから、クランナはそっちな」
「え、はい」

これでは本当に下之ユウジの気持ちは私に向いているんじゃないかと……思ってしまうではないですか。

第３９６話　√３－４８　気になる彼女は○○○で×××で。（前書き）

一日更新四回目！

第３９６話　√３－４８　気になる彼女は〇〇〇で×××で。

「一週間……予備を考えて六日間でも大丈夫のはずです」

彼女は生命維持装置と意識を飛ばす為のヘルメット状のの機械を頭に取り付けました。

「二〇一〇年十月三十一日……午後六時半ほどですね」

液晶をタッチして、詳細を記入して。

「場所を……ここで、人を……私にして」

－Ｓｏｕｌ　Ｔｉｍｅ　ｔｒａｖｅｌ．－

「今参ります……でもしばらくの間、確かめさせてくださいね――」

その時彼女の瞳は瞑られ、眠りに就いた。

そして彼女の意識はタイムマシンを通して――十年前に送られました。

＊　＊

まあ、なんというか文化祭終了。

色々準備に東奔西走したことや非公式新聞部に色々と妨害をしくまれながらも終わらせることが出来たことを思いだし考えながら、

生徒会の打ち上げが行われた。
自販機で売られている、ドリンクなどを買い込み生徒会室のテーブルにはお菓子や飲み物の空き容器が散乱していた。
あれだけあった飲み物が無くなりつつあった。チサさんは栄養ドリンク、姉貴は

「あ、じゃあ俺追加で適当に買ってきます」
「私も、手伝いますわ」

俺はそう立ち上がると、すぐにクランナがそう言った。
それを聞いた姉貴が我も我よと。

「じゃあ、私も――」
「姉貴は、疲れてるんだから休んでてって」
「そうですよ、副会長、私が下之君は手伝いますから」
「でも……うん、じゃあお願いしようかな」

俺とクランナは一緒に生徒会室を出て、並んですっかり暗くなった祭りの後の喧騒の消えうせた学校の廊下を歩いて行く。

「おう、悪いな。結構な量があるから助かる」
「それもありますが……二人になれる時間が欲しかったですから」
「お、二人お疲れさま回か。いいねえ」

自販機の置かれているところまでやってくる、電気が消され自販機の明かりだけが煌々と空間を照らす中。
自販機の眼と鼻の先にある、ベンチに二人腰かけた。俺はマッ●スコーヒー缶を開けて、

「乾杯」

「乾杯です」

クランナは緑茶で、上部分を少し触れさせる程度に乾杯する。

「色々ありましたわね」

「ああ、二人放送室に走ったのは良い思い出……なのか？」

「確かに、非公式新聞部は空気を壊すような行動でしたが……決してつまらないものではなかったですよ？」

「まー、チサさんと福島が熱くなってるから仕方なかったな」

すごいな、あのコンビ。福島は学校何十周したんだろうな、チサさんはどれだけキーボードを叩いたんだろうな。

てか姉貴とユイのタッグってかなり様になってたな……眼鏡キャストオフを勧めて、渋々やってくれたらそりゃあもう来客にも何も言われないコンビになってなー

そう考えると……会長。

「こうして二人で、座って話すのは初めてかもしれませんね」

「そういやそうか、大体歩いてたり他の人がいたりするからな……学食のアレは沢山人がいたしなあ」

「よく覚えていますね……あの卵焼きは黒歴史です、今は全然違うんですからね？」

「独り暮らしで自炊してるのにマズい料理は厳しいだろう」

「……なぜか下之君は料理のことになると手厳しくないですか？」

「姉貴の料理上手さに、色々と悔しかったし……まあ勝てそうにないけどな」

「私はあなたの料理好きですよ、副会長と比べては……」

「いや、分かってるって……」

「でも……その。またいつかあなたの料理が食べたいのですが……ダメでしょうか？」

「全然構わないぞー、やっぱ嬉しいもんだな。俺の料理を食べたいって言ってくれるって」
「じゃあ、機会があればよろしくお願いします」
本当に嬉しいもんだな……これは精進せねば。
「あのですね……下之君」
「ん？」
「いえ……やっぱりなんでもないで――」
隣の彼女がぐらりと揺れた。
え、おい……まさか。
気になる気になる言っておいて、俺は気付けなかったのか？
確かに走り回って疲れているのは分かるし、もしかたら睡魔が襲ってきたのかもしれない。
いや、これはそれとは違う……！
「クランナ、大丈夫か？　な、おいっ」
クランナは俺にもたれかかるように倒れ、肩でこれ以上倒れないようにし、手で力が籠らないようにそっと受け止めた。
意識が一瞬にして遠のいたような、そんな感じだ。
「クランナ！　……とりあえず保健室に――」
そう俺はクランナを一度ベンチに寝かしてから、両手で抱え上げようとしたところだった。

『私は大丈夫ですわ』

抱えてみて、見下ろすと彼女の瞳は開いていた。

「よ、よかった……心配したんだぞ、大丈夫か？」

『ふふ、相変わらずですね。あなたは』

そこでふと違和感に気付く、少し喋り方が急に大人びてないか？

『今は何時ですか……？』

「……まあ、六時半ぐらいだけど」

『いえ……今は何年何月ですか？』

「本当に大丈夫か？　そりゃ――」

意識がなくなったことで混乱しているのか、そんな素っ頓狂な事を言うもののそのままを質問に答える。

『成功のようですね』

「ちょ、クランナ！？」

するとクランナは俺の首に両腕を巻きつけて、俺の顔を必然的にクランナの顔へと近づける。

『私は――未来から来たクランナ＝オルリスなんです』

彼女が言う事には、未来人とのこと……なんのこっちゃ。

第３９７話　√３－４９　気になる彼女は〇〇〇で未来人で。（前書き）

一日更新五回目！

第397話　√3－49　気になる彼女は○○○で未来人で。

「ちょーっとまって……もしや手の施しようのない？」
『私はおかしくなどありませんわ、分かるでしょう？　この喋りから伝わる色気が』
「いや……声そのものは変わらないぞ？」
『ちょっといつものクランナとは違うなー……とも思っていませんか？』
「いや、そりゃ疲れてるんだよな……救急車呼んだ方が――」
俺は彼女の様子が変な事に焦って、携帯を取り出していた。しかしその開いた携帯を彼女はすっと閉じてくる。
『そんなことをしていては……時間がなくなってしまいます』
「時間……？」
クランナの顔を見れば、焦燥に満ちてすがるような表情をしていた。
『私は、この六日間で……理想の方を見つけなければなりませんの』
「いやだから、そもそも未来から来たってのがそもそも――」
『――あの、最初の出会いであるセクハラ。巳原さんとの追いかけっこの末のことだったのでしょう？』
「っ！」
この事柄は、俺しか知らないはず。
ユイはのことを覚えていないだろう。そもそも俺が嫌われる要因であることなどユイは知らないのだ。
もちろんセクハラのじ事実を知る者は、いくつかいる……それが

ユイを追った上での不可効力と知る者はいないはずなのだ。

「なんで……それを？」

『今から少し未来の私が聞いたことですから』

それでも未来から来たってのは……それとも桐とかチサさんみたく心が読めるとか？

いや、まさかな。そんなにチートキャラがいられたら、ゲームバランス崩壊必須だろうに。

……一応信じておく。

「じゃあ、なんで倒れかかったんだ？　今が未来のクランナなら、さっきまでのクランナは？」

『一気に聞き過ぎですわ……彼女が倒れたのは、意識が入れ替わっショックのようなものです。そしてその彼女はちゃんといますわ……少し体を使わせてもらっているだけで』

「さっきまでのクランナは、大丈夫なんだな？」

『戻してみますか？　でも、その前に聞いてほしいのです。私が未来から来た理由を』

一気にファンタジー化したけども……ここは合わせる方がスムーズに事が進みそうだな。

「で、未来のクランナさんのご用件は？」

『まぁ、他所他所しいですね。この時の私はオルリスとお呼び下さい』

「いや……いいのか？　名前じゃないか？」

『いいのですわ、さあさ』

「あー、えー……オルリス？」

『はい、オルリスです』

そう言って、からかうような大人びた笑みを彼女は作った……本当にさあきのオルリスとは印象が違ってくるな。

『それでですね、私は――』

彼女曰くだ、

『六日間の内に、契りを結ぶ殿方を見つけたいのです』

……それは。

「結婚相手探しってことか？」

『そうですね』

「そりゃま六日間とは結構に無茶な……」

『なので、ユーには手伝ってほしいのです』

「そういやその呼び方は……未来のクランナがやってたことなんか？」

『そうですよ、気に入りませんか？』

「いや、いいんだけども……なんてーか慣れないからさ」

クランナにそう呼ばれるのは、なんか新鮮で気恥かしいな。

と、照れていると。さりげなく彼女は衝撃的なことを抜かした。

『慣れて下さいね……生憎私は、ある国の姫なばっかりに政略結婚迫られているのです』

「は？」

ねえねえ、改行二つ分で挟めば衝撃発言だと分かるように演出してるんだけど、こんなに短期間に二つっすか！

「え、姫？　プリンセス？」

『フィール国の姫……正確にはオルリス＝フィールでもあります』

「名字に当たる部分は偽名を使ってると」

『そういうことになります。でも彼女はこれまで通りクランナとお呼び下さい』

「ああ、了解した」

『それでユーには手伝ってほしいのです。私が六日間で素敵な殿方を見つけ出せるように』

「俺が手伝えることってなんだよ？　少なくとも俺の交友関係は――」

『ユーの周りは女性ばかりですからね』

あれ、オルリスの機嫌が突然に悪くなった気がする。笑顔なのに、ちょっと内に秘めている気がするんだが！

『それでも、あなたと行動すれば何かあるかもしれません……私は迷いやすい体質ですから』

「お、方向オンチなの認めたのか」

『方向オンチなどではありません！　す、少し他の方と比べる迷いやすいだけなのです』

「はいはい」

『むっ、信じていませんね。これでも城の中では迷う事はなくなったのですよ』

「城っていうと、オルリスの国の暮らしてるとこか？　広いだろう

し、そりゃ凄いな」
『当然です、これでも二十数年間も過ごしているわけですから……あ、今のは忘れて下さい！　これは大きなヒントになってしまうではないですかっ』
「ははあ、オルリスはまだその頃独身ってことか」
そう、俺はニヤリ笑いながらオルリスを眺めると。
『っっっ！　忘れて下さいっ、忘れることを要求しますわっ！』
「はいはい、もう話題には出さないから」
『わ、忘れるつもりはないんですのね』
がっくりとうなだれるオルリスは、ちょっとばかし面白かった。
「まあ……姫だから、そう簡単にも出来なかったんだろ？」
『そうですわ、それにこう結婚相手を過去に来て探すことには理由もあるのです』
「確かにな、まあそのオルリスの頃でも正体を隠せば出来ないこともないからな……でも、政略結婚させられるか」
正直姫様だってのに、この学校で一学生やってるのが凄まじいからな。
いくら知名度の低い国だからって、なあ？
『それを回避するには……一応あるのですわ。それが成人する前に生涯の相手を見つけることなのです』
「なるほどな、それでわざわざと。いいぞ、手伝っても？　それでオルリスの道案内をすればいいと」
『そういうことです、時間は争いますから。明日からよろしくお願いします』

「明日は振り替え休日だからいいとしても、それ以降は放課後か？」
『いえ、サボりましょう』
「……ぜってー、クランナは提案しないな」
『少しは柔らかくなったのです、ついでにこの胸も』
「……ああ、悪かったって。いつまでもあのセクハラを言われ続けるんじゃねえかな……仕方ないけども」

まあ、衝撃的なことには違いないだろうし。するとオルリスといえば衝撃的なことを――

『今の私なら……いいんですよ？』

少し、あんなことを考えてしまった俺が悲しい。

「なあ、オルリス。そういうことは軽く言うと、あまり良い印象ではないぞ？」
『ふふ、軽いことは確かですが……あなただけですから』
「へ？」
『では戻しますね、また明日……そうですね、商店街の入り口で』

そう手を振ると、また意識が途絶えるように倒れかかってきた。
俺の腕におさまっているオルリス……いやクランナは十秒経たない内に目を覚まし。

「私は……っど、どうして！？」
「寝てた、疲れてたし動かすのもなんだったしな」
「それは……ありがとうございました」

さっきまでのクランナの表情に戻っていた。しかしどこか腑に落ちない表情をしていた。

「クランナ、どした？」

「いえ……不思議な夢を見たのです。何故か私が未来から来たとか……なんでもないですわ、忘れて下さい」

もしかすると、クランナはさっきのことが記憶としてある？　まあ夢扱いだけども。

これから始まる六日間に……色々と騒動を感じざるを得ない。

「（オルリスねえ……）」

第３９７．５話　√３－４９．５　気になる彼女はお姫様で未来人で。（前書き

一日更新六回目！　今回で流石に休ませてｏｒｚ　今回は総集編みたいなものです。タイトルはこれで完成ー

第３９７．５話　√３－４９．５　気になる彼女はお姫様で未来人で。

それは暗い部屋、液晶の明かりだけが頼りの闇の中には、一人の女性の姿がある。

その女性は、何かが映し出される画面を凝視している。その表情は――

『――ということで、クランナに未来のクランナが憑依しました』

「……はい？」

ポカンと口を開けて、唖然としていました。

「え、どういうこと？　なに未来のこの人が、この人に……？」

『そういうことですね』

「というか何なの！　全く積み重ねとない女とユウ兄が付き合ってたのも見たし、誰ともくっつかないバッドエンドみたいなもののも見せられたんだけど！」

『それらは”イフ”の物語です。下之ユウジがクランナと付き合うことなく、井口と付き合う可能性も誰とも付き合わない可能性もあったということです。ただ、今回の正史ではクランナの物語ですので――二つはなかったことになりました』

「それは……ユウ兄は知ってるの？」

『いいえ、知っているのは私たちと一部だけでしょう。そうですね、ついでに現在の状況をまとめてみましょうか』

この世界は、下之ユウジが起動したゲームによって二〇一〇年四月一日から二〇一一年三月三一日までが延々と繰り返す世界になってしまいました。

それを元に世界に戻す為には、起動したゲームことギャルゲー「ルリキャベ」の、現実に現れたヒロイン達と付き合う。いわゆる攻略を進め、全員と付き合うことで解消されます。

ヒロインはパッケージでは一〇人ということになっていて、現在分かっている方たちで出会い順から「ユキ」「桐」「マイ」「ホニ」「オルリス」となっています。

「マイ」「ホニ」が攻略完了していて、現在は「オルリス」を攻略中。残り五人は候補こそありますが断定することは出来ません。

「マイ√」ではマイの家庭事情を主軸の置いて、憧れから恋に変わり、恋は大きな愛に変わった物語でした。

「ホニ√」ではホニが神様であることから、ある組織に消されそうになるのを守っていき、次第に双方に恋心が芽生え、ホニが体を借りている相手の「ヨーコ」が現れ、そしてホニが消えてしまう物語でした。

しかし、このまま「オルリス√」続くことはなく。私が憑いているゲーム「はーとふる☆でいずっ」をミユが起動したが為に、ユウジのゲーム起動と同じ現象が起るのですが、それが「ルリキャベ」と「はーとふる☆でいずｘｔｙ」が混在してしまう事態が発生して、始まったのが「ユイ√」です。

「ユイ√」はオルリスの√こそ辿りませんが、従うイベントの類似が見られ、今行われている「オルリス√」とも話が似ていることが分かります。

「ユイ√」は元もと「はーとふる☆でいず」のシナリオを一部参照することになるはずだというのに、実際に展開されたのは「ルリキャベ」のシナリオ。これが混ざり合ったことで起った異常事態なのです。

その後下之ユウジは、桐によって封印されている「それまでの記

憶」が深層心理で拒否反応のようなものを起こし「これ以上自分は女の子と涙を見て、付き合いたくない」罪悪感から来る、拒絶を見せて世界が凍りついてしまいます。

その間下之ユウジは今までに攻略したヒロイン達のその後を描くような妄想をして、その世界感に閉じ込められつつあったところで、自分だけは下之ユウジの妄想の中に入れるホニは、なんとか下之ユウジを覚ますことに成功。

そして訪れたのが現在の「オルリス√」ということになります。

現在それぞれのキャラクターの状況ですが。

桐、ホニ、ミユ、私とユミジの恐らく四人は今までのことを忘れないようになっています。

桐と私は「ルリキャベ」が起動してからずっと全てを覚えています。

桐が現実で行動出来る体を持っているのに対して、私はもともとレトロゲームのキャラクターとして登場したが為に平面にしかならなず画面内にしかいれません。パソコンやゲームなどにいるのはどういうわけなのです。

ホニは本来は記憶を失くすようになっているヒロインの一人なのですが、私がちょっと細工をしてホニが攻略された物語からはなにもかもを覚えているようになりました。

ミユは本来は記憶をなくすようになっている現実世界の1人なのですが、彼女がゲームを起動したことで「プレイヤー」となり本来なら下之ユウジと同じように記憶を固持するようになりました。

その他のヒロイン勢だと、会長と書記が謎のポジションですね。

覚えている描写がある時もあれば、ないときもある。もしかすると、一定の条件下で記憶が復活する方達なのかも。

一度だけ桐と連絡らしいことを取っていたの見かけましたし……一体どのような関係なのでしょう。

会長・書記はヒロインに指定されていないと自虐していましたので除いたとして。

「福島」はどうなるのでしょうか？　それに、ホニさんを消す為に現れた、同じ学校同じ学年に通う「ヨリ」もどうなのでしょうかね？

一番下之ユウジと距離が近い「ユキ」とは未だに、時折ユキ側からアプローチがあるだけで何もありませんし……うーん。

あと気になるのが「はーとふる☆でいず」のヒロイン勢ですね。

一人が下之ユウジの友人である「ユイ」が選ばれた訳ですが、あと……三人いるはずなのです。

もし下之ユウジに近くにいる人物にそれが適応され、もしかすると「ルリキャベ」シナリオを交互に展開されるというなら……「オルリス√」終了後はこちらに来るはずなのです。

ネタのように思える最近登場した「タイムマシン」と「意識を投影すするウンタラカンタラ」ですが、実は結構な鍵なんじゃないかと考えています。

「ルリキャベ」のシナリオは桐しか知らず、桐も喋れないようなのでどうしようもありませんが……少し思うのです。

それに気になるのは下之ユウジそのものですね。

ゲームのシナリオを妨げる、現実における過去に何か深手を負っているようで。

そのせいでこのミユも引き籠り「サクラ」という下之ユウジとミユにとって人物も去ってしまったと。

というか今更ですが振られたんですね、下之ユウジ。

『――という状況ですね』
「……ゲームのヒロインが現実に、かあ。でも……ん？」
『どうかしましたか？』
「いや思うんだけどね……」
『はい』

「ヒロインが現れる前にいた人たちはどうなったのかな」

『……』

今四〇〇話を目前として、その当ったり前な疑問を頂きました。
容姿に性格に、家族構成などの設定含むプロフィールはどう変化したのでしょうか？
それとも、そこにいた人はなかったことに……？

「でもユイって人がヒロインになったって考えると……もしかして”人は変わって無い”とか？」
『どういうことですか？』
「つまりはゲームの設定を、元からいた人に植え付けただけとか」
『それではユキやマイは突然アイドルと呼ばれるようになったことになりますし』
「ほらダイヤの原石？　とか、魅力を出し切れてなかったとか」
『それはあまりにも調子が良過ぎます、そもそも素体の良過ぎる女子が下之ユウジのクラスに集中しすぎでは――』
「あ、ごめん。カップ麺できたから食べるね」
『え、ちょっと――』

……当たり前のことなのに、なぜ抜け落ちていたんでしょうか。

もしかすると、そう気付かないようにする陰謀が……！？　ないですね。

第３９８話　√３－５０　気になる彼女はお姫様で未来人で。（前書き）

お待たせしましたー

第３９８話　√３－５０　気になる彼女はお姫様で未来人で。

あの後、一時間ほど打ち上げは続きそれでお開きとなった。

「お疲れさまでした……し、下之君」

そう、クランナが打ち上げ終わりの片付けが終わり、生徒会室からは会長もチサさんも福島も姿を消した生徒会室で言ってきた。

「ああ、クランナも今日はしっかり休むんだぞ？」

「分かっていますわ、起き遣いどうもありがとう」

そうふふっと笑いながらお礼を言ってくるのがひどく印象的だった。

俺へのお礼も、その態度も、微笑みかけてくることなんて考えたこともなかった。そしてその笑みに俺は少しだけドキリとされられる。

だけども――クランナにはオルリスが居るのだ。

一番今怖いのが、焦った末の急かした上での気持ちの暴発。俺はそれで過去に間違を犯したのだ。

だから、ドキリとした気持ちは心にしまっておく。クランナにもオルリス伝えることはない、この気持ちを。

家に帰ってきた。ユイと姉貴と一緒に、玄関扉を開くとホニさん

がわざわざ待ってくれていた。

「お帰りなさい、ユウジさんっ！」

「ただいまー」

「あれ、ユウジさん？」

「ん、なに？」

「もしかして疲れてる？」

「そう見える？　まあ自慢じゃないけど生徒会役員として文化祭を東奔西走してたからなあ」

「ううん、きっとそれも有ると思うんだけどね……やっぱり、なんでもない。ごめんね、変なこと言って」

ホニさんには少なからずお見通しなのかもしれないな、と俺は何も言わず苦笑した。

「六日間ねえ……」

オルリスが只の二重人格か何かで俺が騙されているわけでなければ。オルリスは明日から六日間で、生涯の伴侶、いわゆる結婚相手を見つけるのだという。

未来の政略結婚を回避する為に成人する前にその相手を見つけなければならない、そして彼女がやってきた文化祭終了直後。

つまりは条件は絞られ、六日間で理想の相手となるとこの国も出れないし、俺に道案内を頼んだ時点でこの町周辺であることは間違いない。

そして俺はその協力を求められてしまったのだ。

体調も考えてしまう程に気になってしまう彼女に、俺は特別な感

情を持っているのではないかと思った。
井口の告白を断った理由の一つにして、それも断り文句でもなんでもなく――純粋な気持ちで、気になる彼女だった。
ユイには良い友人みたいなことは言った、だけども下心の有無を聞かれ、オルリスが出てきたことで――俺はクランナが好きなんじゃないか、と。
だからここまで世話を焼いてしまう、彼女のことが気になってしまう。

だけども、それらは胸に秘めることしか出来ない。皮肉にも同じようにオルリスが出てきたことで。

まあ、それはさ。オルリスが俺に探すのを頼む辺り、俺と言う選択肢は皆無ってわけで。
いやね、期待してたとかそういうわけじゃない。ただ、俺の言葉は伝えられそうもないなと。

「そう思うと、ちと……な」

複雑というか。胸が少し痛むというか。
俺以上にに彼女を気遣ってくれる、大切にしてくれる、好きになってくれる。というなら構わないけど……って何故俺は上から目線なのか。
どこぞの馬の骨にわしの可愛い娘はやれぬ！　みたいなノリになってんぞ。

「まあ……そうだな」

オルリスが選ぶ相手ならいいかな、とも思ったりする。
オルリスはクランナとは同じだけど違う。だけどもきっと根本は

同じはずなのだ。
……自分のことは二の次にしがちだけども、真面目に自分と共に行ける人を決めるはずだ。

「……さて、と。じゃあ適当に地図でもプリントしておきますかね」

地図があってもオルリスは迷うだろうし、俺はまず迷わないけど……まあ保険で。

＊　＊

「……つ、疲れましたわ」

流石にあそこまで疲弊するとは思いませんでしたわ。

「また、下之ユウジに心配をかけてしまいましたし」

飲み物を買いに行ったというのに、疲れで寝てしまうなんて。

「……そういえば」

あの時みた夢はなんだったのでしょうか。
私が、私らしくないことばかり言う私が下之ユウジと話している夢。
確か、その内容は――

『婚約者探し』

そうそう……って、

「誰ですのっ」

私とは別の声の主を探し部屋を見渡しますが、誰もいる気配はありません。

それにこのアパート地味に防音仕様という見かけには騙されて行けないオプションハイグレードになっていますんどえ、隣室の声や音が聞こえてくるはずもないのです。

では、誰……？

『わたし』

わたし……？　確かに、私の声に似ているような？　それも何か頭に響くような……

「疲れているのでしょうね……」

『だと思うけど、ちょっと協力してね？』

「ま、また！？」

『また、です。はじめまして、女子高生の私』

女子高生の……私？

『私は未来の私。ちなみにネタバレすると今から十年間、結婚しません』

「ひどいネタバレですわ！？」

というより、十十年間ですって？

「私、あまりおとぎ話は信じない性質（たち）ですわ。本当のことをおっし

やりなさい！　一体あなたは誰なのですっ」
『私ここではオルリス＝クランナ、本当はオルリス＝フィール。またユーのお弁当食べたいなあ』
「わ、私以外知らないことですわ……っ」

真名こそ、この国に来てから誰にも言っていませんから祖国の一部の人物しか知っていませんが。
ユーというのは下之ユウジであれば……！

「し、信じていいのですか？　というか、未来の私はなぜ来たのですか」

未来から来たのなら理由があるはず……十年後にタイムマシンというものは実用化されていることになってしまうのですけどね。
ここまで私のことを知られている以上は、信じる他ありません。
そして来た理由と言うのもあるのでしょう。

『それじゃ聞いてくれる？　私の気になる彼ゲット大作戦っ』
「私は変わってしまったのですね……」

少なくともそのように軽い物言いなどしませんのに……

「聞きます聞きます、それでなんなのです？」
『それはね――』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3349i/

@　クソゲエリミックス！　@

2012年1月8日19時49分発行